# 夜天の守護者

混沌の魔法使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜天の守護者

【Ｎコード】
Ｎ９４０３Ｋ

【作者名】
混沌の魔法使い

【あらすじ】
雪の日に起きた事件、少年は強大な敵に破れ消える、そしてそれから８年後、少年は青年となり再び世界にその姿を現す。
主人公最強系です、この小説は初投稿および初二次創作作品です、おかしい所表現が変な所多々有ると思いますがやる気は有るのでよろしくお願いします。

現在は本作の主人公　八神龍也の技のアイデアも募集しています。

基本不採用になる事は無く、仮に不採用になったとしても、他のキャラに採用するので沢山の募集が来る事を期待しています（正し作者の文才は低いので番外編まで登場しない可能性もありますが・・）どなたも気軽にご参加ください

# プロローグ

プロローグ

「おや・・珍しいですね・・ここにお客人が来るなど・・随分久しぶりの事ですね」

本を整理しながら黒尽くめの男が柔和な笑みを浮かべる・・

「お初にお目に掛かります、私この書庫の管理人などをやっている、混沌の魔法使い（カオスマジシャン）と言います」

混沌の魔法使いは被っていた帽子を取りながら、とても丁寧な礼をした

「ここは正史とは違う歴史を記録する図書館・・世界とは数多の姿を持ち、同じ世界でも決して同じ道は辿らないのです」

混沌の魔法使いは沢山ある本棚を見ながら

「私は本来語ってはいけない物語を語る者・・今回私が語るのは・・」

無数の本棚の中から一冊の本が飛び出してくる、その本には厳重に鎖が巻かれていたが、混沌の魔法使いの手に収まると同時にその鎖は弾け飛んだ・・混沌の魔法使いはその本を捲りながら

「これは正史と最も異なる道を歩んだ歴史の記録・・数多あるＩＦ

の世界の中でも、これほど正史を外れた世界は私でも見た事がないのですよ」

混沌の魔法使いはその本のページを捲りながら

「数多ある魔法使いの世界・・その中の1つ・・貴方は知っていますか？「夜天の王　八神はやて」と言う魔法使いの名を」

本には白い鎧と黒い翼を持った美しい女性が描かれていた

「彼女は本来、孤独な幼年期を過ごす運命を背負っていました・・しかし、この世界の歴史では彼女には絶対の守護者が常に傍に居ました・・」

再び捲られたページには車椅子に乗る幼い少女とその車椅子を押す少年の姿が描かれていた

「彼の存在はこの世界の歴史を大きく変えました・・本来ならば大怪我を負う筈だった「不屈のエースオブエース　高町なのは」そして犯罪者として裁かれるはずだった「金色の戦乙女　フェイトテスタロッサ」・・この世界の中心となる者達は彼と関わる事で大きく変わりました・・」

その呟きと共に本のページが捲られる・・開かれたページには白い服を纏った美しい女性と黒い服を着た女性が描かれていた・・

「それは・・この世界で悪と呼ばれる筈だった「狂気の天才科学者　ジェイルスカリエッティ」も例外ではありません・・」

今度開かれたページには穏やかな笑みを浮かべた白衣の男の姿が描

かれていた・・

「彼は全てを変えうる可能性を持っているのです・・さて・・話が長くなりましたが、今回私が語るのは「夜天の守護者　八神龍也」の物語・・そして・・物語は・・ここから始まります」

その本のページには雪が降る中、黒い光に呑まれていく少年の姿が描かれていた・・

「それでは・・ごゆるりとお楽しみください・・「夜天の守護者」の物語を・・ではまたいずれ会いましょう」

混沌の魔法使いは深く頭を下げると同時に姿を消した・・

# 第1話

## 第1話

黒く垂れ下がる曇り空から白い雪が落ちてくる。
その雪は地面に落ち、地面を白くしていく。
かなり降ったのだろう、地面はかなり白の割合が多くなっている。
赤く可愛らしい服、ゴスロリチックな服を着た少女と白い服を着た少女が目の前に広がるクレーターを信じられないといった表情で見ていた。それはまるで爆弾でも爆発したような跡だった、そしてその中心にある砕けたデバイスの欠片と大量の血痕・・
それは赤い少女の兄の様な男が持っていたデバイス。どんな時も家族を守り導いた男の相棒の姿。
それを見つけた二人は大声で泣きながら

「兄貴!!居るんだろ、出てきてくれよ」

「龍也さん!!居るんでしょ、早く出てきて」

それは余りに悲痛な叫びだった、信じられない・・いや信じたくないのだ。
赤い少女「ヴィータ」には兄でありまた好きな男、そして白い少女「高町なのは」にとっても好きな男だった「八神龍也」の死を

楽な仕事の筈だった最近出現するようになった。アンノウン未確認体の出現を聞いて。なのはとヴィータそして龍也はそれを破壊する為に三人で出撃した。確かにアンノウンはいただが三人の敵では無かった・・いや正確には龍也の敵では無かった

アンノウン未確認体は三人に気付き襲ってきた、なのはとヴィータが戦闘態勢に入る前に龍也が前に出て。二人の前に立った

龍也はどんな時も家族を守るために力を使った。
襲ってくるアンノウンを左手の盾で受け止め、まるで意に介さないと言った表情で右手の剣に魔力を込め

「蒼龍一閃！！」

電撃が込められた、恐ろしい速さの一撃でアンノウンを破壊し、スクラップにした

「さすが兄貴だぜ。あのアンノウンを一撃かよ」

ヴィータがまるで自分で撃破した様に嬉しそうに話しかける。このアンノウンはどういう訳か魔法がまるで効かないのだ、だから接近戦で戦うしかないが、接近戦にも非常に強く並みの魔導師では手も足も出ないのだ

「確かにあれの相手をするのはミッド式では難しいな、やはりベルカ式がいい様だ」

冷静に敵の情報を分析している、この男が八神龍也だ。全身を覆う青い鎧にその手に持った巨大な盾と剣。これが彼のデバイス「ガーディアンズハート」だ、これは龍也の死んだ父親が持っていた、お守りだったらしいのだがＰＴ事件の際に、家の近くでジュエルシードが発動した際に目覚めたデバイスで種類としてはインテリジェンスデバイスに分類されるが非常に無口で喋っている所をマスターである、龍也自身見たことが無い

「ねぇ、龍也さん本当にミッド式じゃ、あのアンノウンは撃墜できないの？」

二人のベルカ式での戦闘展開についての話し合いに着いて行けず。というかヴィータと楽しそうに話していることに、訳がわからずイライラしてしまい思わず大きな声でなのはが言う。その声に驚いた顔をしていた龍也だが

「いや、遣り様によっては、ミッド式でも破壊できる、だがそれには条件がつく。信頼できるベルカの騎士に前衛を頼み。その間に魔力をチャージして、あいつのバリアを破壊するくらい強力な砲撃を放てる魔導師ならな。だからお前やフェイトならシグナム達と協力すれば破壊できるはずだ・・・おい話聞いてるか？」

諭すようになのはの頭を撫でながら、ミッド式でアンノウンの対処を話したが、なのははその話をまったく聞いておらず龍也に頭を撫でられまるで猫のように目を細め笑っていた、おそらく龍也の言葉など何一つ頭に入っていないだろう。

まったくとため息を吐きながら肩を落とす。
なのはにしてもなのはの友達のフェイトに従兄弟のはやてにしても何故俺が頭を撫でるとこうなるんだろうな？

「お～い、兄貴そろそろ帰ろうぜ。さすがに冷えてきたからな」

「それもそうだな。なのはそろそろ帰るぞ」

撫でていた手を退けるとどこか残念そうだったが「は～い」と返事をし。飛行魔法で飛び上がろうとしたとき。

「っ！！」

首筋に静電気に似た痛みが走る。これは殺気だ、何処だ何処に居る！！辺りを見回すが殺気を放っている者が見つけられない

「龍也さん、如何したんですか？」

「兄貴、そんなに辺りを見回して如何した？」

二人が俺の突然の行動に驚いていた、つまり殺気を放っている奴の狙いは俺か！！二人を早くここから遠ざけなければ

「何、どうやら携帯を落としてしまったようだ。探してから帰るから先に帰っててくれないか」

苦しいい訳だが、二人を此処から逃がすことが最優先だが

「じゃあ、私も一緒に探すよ」

「あたしもな」

なのはとヴィータは魔法を解除して降りてきてしまう。

「いや、俺一人でだ・・・・」

見てしまった。なのは達が居た、遥か上空にいる漆黒の鎧に身を包んだ騎士の姿を。騎士と目が合うそして騎士はニヤリと笑い腰から下げていた剣を抜き。俺に向かって何かを呟き姿を消した「間に合うか？」だと・・・まさか！！。慌てて後ろを見るなのはとヴィータの背後にいた。漆黒の騎士の存在に二人はまだ気付いていない

「なのは！ヴィータ！！そこを退けえ！！」

「えっ！！」

突然の怒声に驚き体が硬直した、二人を突き飛ばし、左手の盾を構えた

ザシュ！！！

肉を切り裂く嫌な音が響く、あいつの攻撃は防いだはずだ、左腕を見る在る筈の左腕は存在してなかった。その事を認識すると凄まじい痛みが走った

「ぐあああああ！！」

此処で初めて襲撃者の存在に気付いたなのはとヴィータが俺のそばに来ようとするが、それより早く騎士が放ったバインドで拘束されてしまう

「クク、間に合った事は褒めてやろう」

此処で初めて黒騎士の声を聞いた、それは馬鹿にするような人を蔑む様な声だった

「てめぇ！！何者だ！！」

ヴィータがバインドで拘束されたままで叫ぶ。いやよく見るとバインドを破壊しようとなのはと一緒に力を込めているが、一向に壊れる気配が無い。

二人ががりでも破壊できないということは。こいつの魔導師ランクはＳＳＳ・・いやもしかするとそれ以上だ。痛みで意識が飛びそうになるが必死でそれを繋ぎ止め。右手で剣を構えながらなのはとヴィータの前に立つ

「兄貴・・腕が！！」

ここでヴィータとなのはが俺の左腕が無いことに気付く。ヴィータでさえ声が震えている、なのは声も出ないようだ

「大丈夫だ、右手があれば戦える」

二人を安心させる為に強がりを言うが正直限界に近い。ガーディアンズハートが治癒は発動させているが一向に血の止まる気配が無い。つまりあいつの攻撃には治癒を妨げる呪式が刻まれていることになる。

「強がりは止めたらどうだ？俺の剣には切りつけた相手の魔力と体力を奪う呪式が刻まれている、正直立っているのが限界だろう」

目の前に居る騎士が言う。やはり俺の予想は当たっていたか。さっきから眩暈がする血の流しすぎとから起きる症状だ、このままでは出血多量で死に至るだろう。なにか言い返してやろうと口を開くが声が出ない相当体力が減っているようだ

「返事をする気力も無いか。こんな奴が俺を倒す可能性を待っているというのか。どうやらこの時代の騎士は相当弱いようだな」

「この時代ってどういう意味だ！」

ヴィータが騎士に向かって叫ぶ、その様子をみて詰まらなそうに騎士が鼻を鳴らす

「いまから。死ぬ奴に教えるほど俺は暇じゃないんでな。」

その言葉で薄れていた意識がハッキリとしてくる。こいつはなのは達を殺すつもりだ。そんな事はさせない俺の存在意義に掛けて

「ぅおおお!!」

力が抜けていた右手に無理やり魔力を込めて。騎士に切りかかる

「ぬぅ!!まだ動けるのか」

反撃の暇など与えない。一気に仕留める。体に無理やり魔力を通し、騎士に攻撃を仕掛ける、袈裟切り、逆袈裟、我武者羅に騎士に攻撃を仕掛けるが、どれも当たらない

「調子に乗るな!!この死に損ないが!!」

騎士の放った一撃が逆に俺を吹き飛ばす。それと同時に目に走る激痛どうやら右目が潰れたみたいだ。それと無理をして体に通していた魔力が消えるそれと同時に痛みが戻ってくるが剣を杖代わりに立ち上がろうとする。

「兄貴・・あたしは良いから早く逃げろ!!」

「龍也さん、早く逃げて」

なのは達がバインドで拘束されたまま言うが。俺に二人を置いて逃げるという選択肢は無い。俺はいつだって誰かを守るために居るのだから。震える足に力を込めて立ち上がる

「まだ立つか、それほどこいつ等を守りたいと言うのか・・いいだろう。こいつ等を見逃してやろうか？」

「な・・・に？」

騎士の意図が判らず聞き返すと

「だからこいつ達を見逃しやろうかと言っているんだ。俺の目的は貴様を殺すだけだからな」

「俺を殺せばお前は此処から消えるのか？」

「ああ。そのとおりだ。如何する？お前が決めろ3人とも死にたいならそのまま立ってろ。2人を見逃して欲しいなら其処に座れ」

俺はその言葉を聞き。剣を手放しその場に座り込んだ

「兄貴！？」

「龍也さん！？」

「いい覚悟だ。仲間を救うためその命を差し出すか。いいだろう二人の事は見逃してやろう」

騎士はそう言うと剣を腰の鞘に収め浮かび上がると、左手に魔力を収束し始めた

「兄貴。なにやってるんだよ、早く逃げろよ！！」

「龍也さん、逃げてお願い！！」

二人が泣きながら言うが俺にはもう立ち上がる気力も無い、いや仮に立ち上がったとしても今の俺には二人を護る力は無い、これが最善なのだ自身の命を差し出すことが・・

「消えろ！！カオスブレイカー！！！！！」

騎士から放たれた。黒い光が俺に向かってくる

「ヴィータ、なのは。はやてにすまないと・・・」

俺は最後まで言うことなく光に包まれた

『緊急転送システム起動』

俺は薄れ行く意識の中でガーディアンズハートの声を聞いた気がした

『未確認との戦闘で時空管理局所属。Ｂランク魔導師「八神龍也」のデバイスの残骸と大量の血痕などの状況証拠から死亡の確認がされたが聖王教会に所属する従兄弟の八神はやてより。行方不明にしてほしいとの要請があり、それを承諾し行方不明とする』

何処かわからない場所で青の服を着た左腕の無い少年が倒れていた、そしてそれを見ている１人の女性

「どうして此処に?此処には私の主たる資格も持つものしか来れぬ筈だが?」

疑問を感じながら女性は少年の頭に手を置く

「何ということだ、あいつが蘇ったのか・・」

驚愕を含む声で呟くが、少年の頭に手を置きながら

「この少年なら、あいつを倒せるかもしれない」

女性は何かを考え込む素振りを見せたが

「少年恨むなら恨んでくれて構わん、だが今はこうするしかない」

女性は少年にそう呟くと抱え上げ、遺跡の奥に消えたそしてこれから8年後、異世界ミッドチルダで物語が幕を開ける

八神龍也　１５歳

事故で両親を失い。そのまま孤児院を転々とし、最終的に父親の弟の元に預けれた。

そして新しい家族を得たがそれから2年後交通事故ではやての両親が亡くなってしまう、それからははやての兄として過ごしており。

足の動かないはやての為に車椅子を押しながら散歩に行ったりなど、常に彼女のそばに居た、だがＰＴ事件の時に形見のガーディアンズハートが起動し魔導師となり事件の解決に貢献した。そしてそこではやてと同い年なのはとフェイトと知り合いになる。そして管理局

に身柄を拘束されそうになった、フェイトの弁護を勤め無事に無罪を勝ち取った。ちなみに弁護した理由ははやての友達を作ってやりたかったの事また後に発生した。闇の書事件も自身が大怪我をするものの無事解決に導いている。またシグナム達の魔導師を襲ったという事を無罪にして貰う為、司法取引をして管理局に仮入隊する。そして魔導師ランクはＢ＋だが冷静に戦況を見極める観察眼と様々な武術に精通しておりその能力は非常に高く、バリアジャッケットの色から蒼天の守護者と言う二つ名を取るほどにその能力は評価されている。そして基本的になのはやシグナム達とチームを組んで行動をしていたが基本彼はオールラウンダーで単独行動もできるが、彼は守る事を得意としており守るべきものがあるときその力を最大に発揮する。また学校ではトップクラスの成績を誇り、運動もあるひとつを除けば完璧で料理も非常に得意である

弟２話に続く

# 第2話

第2話

ミッド郊外の森の中に、二人の男が居た。一人は全身を黒の服でサングラスを掛けた男。もう一人はこの場には似合わない白衣を着た男だ

「本当に行くのかい？もう少しここに居てもいいのだよ」

白衣の男が黒衣の男に言うが、男は首を横に振る

「いや、これ以上私がここに居てはお前達にも迷惑になるだろう・・」
「そんな事は無い！！私は君が迷惑だなんて言っていない！！！」

黒衣の男が自嘲気味に言うと白衣の男がその言葉を遮った

「君はどうしてそうなんだい？私は君のことを迷惑だなんて思ってないし、娘達だって君の事は好いているはずだ」

「だからこそだ私がここに居れば近いうちに狙われる。だから私は此処を去るそれにお前の娘達は強くなった、次はあいつ等の番だ」

黒衣の男が今はまだ会えない家族のことを想っているのか、少しだけやさしい声色で呟く

「そうか・・其処まで言うなら私はもう止めない。だがこれだけは言わせて貰おう、君の第二の家は此処だいつでも帰ってきてくれ」

黒衣の男が驚いた顔をするが、すぐに笑顔になり拳を白衣の男に突き出し

「ああ。全てが終わったらもう一度此処にくるよ、ジェイル」

「ああ。そうなったら一緒に酒でも酌み交わそう。龍「今はダークネスだ」・・判ったダークネスまた会おう」

ジェイルもまた拳を突き出しお互いに拳を軽くぶつけ合いながら

「「友よ、必ずまた生きて会おう!!」」

ダークネスが首から提げていた獣の頭を模したペンダントに

「ベヒーモス、セットアップ!!」

次の瞬間ペンダントから光が溢れ次の瞬間、ダークネスの隣に黒い大型バイクが現れていた

「私はもう行く、なにか事件だったらすぐ呼んでくれ。直ぐに来るからな」

「ああ。判っているよ。でもそんな事にはなってほしくないな」

違いないとお互いに笑いあいダークネスはバイクに乗り走り出そうとすると

「ダーク様~、お気をつけて~」

此処には居ないはずのジェイルの娘の声がする、いや一人だけでは

ない

「ダーク兄必ず帰ってくるっすよ～」

「ダーク、絶対帰って来い！じゃないとぶっ飛ばすからな！！」

「ダーク兄様。絶対帰ってきてください」

「僕はまだ兄様に言ってないことがあるから絶対帰ってきてよ～」

上からセッテ、ウェンディ、ノーヴェ、ディード、オットー、だ

「やれやれ、見送りはいらないと言ったのにな」

溜め息を吐いているが其の顔は嬉しそうだった

「やっぱり君は私の娘に好かれているようだ、どうだい？私の娘と結婚する気は無いか？」

その発言が聞こえていたのか恐らく二人に見つからないように、ウェンディ達が隠れてたと思われる茂みが大きく揺れたが、ダークネスの立っている位置から其の茂みが見えておらず彼は茂みが揺れたことに気付いていない。

「そうだな・・悪くないと言いたいところだが、お前のことを父さんと呼ぶ気は無いな」

「むっ、そうだな私も君のことを息子と呼ぶ気は無いな」

二人は気付いてないがウェンディ達が隠れている茂みでは大きな溜

め息の音がしていた

「では、戦いが終わったら私の娘を君の元へお手伝いに行かせるのはどうだろう？」

ガサッ！！と再び茂みが揺れる。どうやらダークネスは気付いてないがスカリエッティは彼女達が何処に隠れているのか気付いたようだ

「うん？何故手伝いが要る？」

さっきまでバイクに跨っていたが。いつの間にか降りているダークネスが首を傾げる

「ほら、君はここ数年ずっと私達に食事を作ってくれたり、服とかの修繕もしてくれたからさ。戦いが終わったら少しくらいのんびりしてもいいじゃないかな～って思ったんだけど」

「そうだな。それも悪くないかもしれないな・・」

ジェイルの提案によく考えず返事を返してしまった。これが後に悲劇の引き金になることに私は気付いていなかった

「ふふ、言質は取ったよ。戦いが終わった後が楽しみだね」

そう笑うとジェイルは白衣のポケットから何かを取り出しボタンを押した

ほら、君はここ数年ずっと私達に食事を作ってくれたり、服とかの修繕もしてくれたからさ。戦いが終わったら少しくらいのんびりしてもいいじゃないかな～って思ったんだけど」

「そうだな。それも悪くないかもしれないな・・
それにはさっきの会話が記録されていた
「ジェイル？何のつもりだ？」
何故録音する必要があったのかと問いただすと
「なに。娘の幸せを思う。馬鹿な親心さ」
「意味がわからんが、何のことだ？」
判らず首を傾げると、ジェイルは声を押し殺して笑いながら
「君は相変わらずの鈍感のようだね。でもまぁそれが君のいいとこかな」
ジェイルは振り返り歩き始め、後ろを向きながら話しかけてきた
「これ以上、話すと別れが辛くなる。だからもう行くといい」
其の声は珍しく鼻声だった
「そうだな、私もそう思っていたところだ」
私も後ろを向きベヒーモスに近づく
「ベヒーモス、ずいぶん待たせたな。行くとしよう」

『イエス、マイマスター』

ベヒーモスに跨り俺はその場を後にした。それは機動六課が発足する半月前の事だった

ダークネスと別れ自分の隠れ家に向かっていたスカリエッティ一行の会話

「ドクターは、勘違いをしています」

「？」

突然そう切り出したセッテに首を傾げると

「あたし達は確かに、ダーク様が好きですですが・・私ではあの方の傍にいることは出来ないんです」

「どういうことかな？」

傍にいることは出来ない、その言葉に疑問を覚え尋ねると

「私達じゃ無理だった、ダーク様の悲しみを取り除くことは出来なかった」

ダークネスのは黒い服を脱がない、それは悲しみの証だといっていた

「だから、ダーク様の悲しみを取れる者がダーク様の傍に居る資格があると思うんです」

セッテが俯きながら言うと

「じゃあ、聞くけどセッテはそれで兄様の事を諦められるの？」

「当然です、私はダーク様の悲しみを取り除くことは出来なかった、だから共に居ることはできないんです」

無表情でセッテが言うが

「そんなこと無い、僕は兄様が好き、あの暗い場所から救い出してくれた兄様が・・それはセッテも同じじゃないの？」

「！？」

何時もの無表情を僅かに変化させるセッテに

「それでも諦めるっていうなら構わないよ僕は、でもそれで良いの？自分の気持ちに嘘付いて我慢できるの？僕はこの際だからはっきり言うよ僕は兄様が好きだよ、勿論男として」

顔を赤くしながら言うオットーに

「その通りだぜ、私はダークが好きでこれは何を言われても変わらねぇ」

ノーヴェがオットーの言葉に賛同し言うと

「その通りです、私もダーク兄様が好きですよ。それにあと一人いる筈ですよ？ダーク兄様を好きなものが」

その言葉に肩を揺らし顔を背けるウェンディ

「素直になったら如何ですか?ウェンディ」

「な・・何を言ってるすっか?わ・・私には判らねえっす」

どもりながら返事を返すウェンディに

「判らないって本当に言うのか?お前が一番最初にダークの微妙な違和感に気づいたのに?」

さすような目線でノーヴェが言うと

「あああ。もう正直に言うすっよ、私はダーク兄が好き、それで良いっすか!!」

息を荒げ、叫んだウェンディを見て。セッテは表情を大きく崩しながら

「ずるいですよ、わたしだってダーク様が好きなんですよ」

縛りだすように自分の気持ちを言ったセッテに

「素直になれば良いんですよ。だってダーク兄様が言ってたじゃないですか。生きるもの全てに幸せになる権利が有るってなら私達がダーク兄様を好きになっても何も問題がありませんよ」

「良い事言うな、ディード、そのとおりだダークが好きで何が悪い、ライバルが居る?関係ないなライバルが居ようが居まいが最終的にダークを振り向かせればこっちの勝ちなんだよ」

好戦的な色を瞳に写し力強く言うノーヴェに

「そうっすよね・・素直に自分の気持ちに向かい合えば良いんっすよね。戦闘機人でも・・」

ノーヴェ達は元は身寄りの無い孤児たちだ、それをジェイルが保護し家族として暮らしていた、だがジェイルの高い科学力に目を付けた魔王により１２人全てを人質に取られ、娘達の命が惜しければ協力しろと脅され嫌々協力していた。その間に犯罪者として指名手配された、その間も誰かが娘達を助けてくれる者は居ないかとずっと思っていた、指名手配され２年後ダークネスがノーヴェ達救助した。だが帰ってきた娘達は最早人間ではなかったネクロによって戦闘機人に改造されていた。彼女達は人間ではない体に苦悩し最初は自身らの死を望んだだが、ダークネスによって止められ今を生きている

（なんだか嬉しいね、娘達はこんなに強く生きているよ）

娘達の言葉に笑みを浮かべながらアジトに向かって行った、その頃アジトでは

「くっしゅん・・風邪か？・・ダークネスは今頃は街に向かってるだろうな・・私も皆と見送りに行けばよかった・・・」

銀髪の少女・・チンクが見送りに行かなかった事を後悔しながら本を読んでいた

第３話に続く

# 第3話

第三話

「う～ん」

機動六課の部隊長である。八神はやてはデスクで頭を抱えていた、最近発見された新たなロストギア「レリック」とそれの発見と同時にこのミッドチルダに現れるようになった。2体の未確認事でだ。

「これはあの時の奴やよな・・」

その手に待った写真には8年前に達也が行方不明になる。切っ掛けとも言える、機械「ガジェット」が写っていた

「でも問題は。これよりこっちやな」

実際、はやてうを悩ませているのは。その写真に同じく写っている黒い影のような謎の生き物だ

「通称「ネクロ」魔法もあんま効かんし、かといって接近戦もできない、厄介なやつやな」

いままで5回目撃されているが撃破したという報告は一度も無い。それほど厄介な奴なのだ。ガジェットのＡＭＦも厄介だがネクロはそれ以上なのだ、魔法は収束されたものしか通用しないし。かといって接近戦もある程度より上言うレベルだがこなす、だがそれより厄介なのが

「組み付かれると、魔力を吸い取られるって事やよな」

確かに戦うのが難しいが何人かで協力すれば倒せる相手だが。倒せたという報告が少ないのはそのもうひとつの特徴の為だ。ネクロに組み付かれると、凄まじい速さで魔力を吸い取り、魔導師を無力化してしまう。更に

「しかも、進化するってどんな反則やねん」

いままで、その進化体の報告は一度しか受けていないがどうやら進化体が居るらしい。それを目撃した隊員の話ではまるで蛹が脱皮するように体から出てきたそうだ。しかもネクロＬＶ１より人型に近いということしか判っていない

「まぁ、ＬＶ１はなのはちゃん達が倒せるけど。それよりも問題なのがこの魔導師や」

最後の写真に写っていたのは。ネクロを切り捨てている魔導師の姿だ。全身を漆黒の鎧で包み、顔も仮面で隠しており素顔も目的が何なのかさえわかっていない謎の魔導師だ、最初なのはとヴィータがその話を聞いたとき兄ちゃんを殺そうとした魔道士かも知れないと言っていたが、結果的には違っていた

「今までの報告では。三つのデバイスを所持してるって事しかわかってへんな」

その魔導師はベルカ式を使う、しかも近代式ではなく古代式であり。剣と槍さら二丁拳銃を使い分けるという事しかわかってないが、逃げ遅れた民間人や魔力を吸い取られた隊員を救助したりなど、味方のようだが機動六課の隊員は一度も遭遇したことが無い

「今のところ。管理局には敵対してないみたいやけど・・目的は何やろな？」

いままで、何度か管理局の隊員が接触を取ることはできたが。一度も返事を返さないどころか完全無視で直ぐに居なくなる、神出鬼没で目撃情報などがまったく無い。唯一判っているのがネクロ達から黒騎士と呼ばれて居る事だけだ

「でも、なんかどっかで会った気がするんよな」

はやてが写真と睨めっこをしていると。部隊長室の扉が勢いよく開けられ人・・いや妖精が飛び込んできた

「はやてちゃん、大変です、またネクロが出現したです」

入ってきたのはリィンだった、彼女ははやてが始めて作ったデバイスの一種で消えてしまった初代リィンフォースをベースに作られたユニゾンデバイスで機動六課の隊員でもある

「それで誰か出撃したんか？」

慌てて、モニターを入れながらはやてが尋ねる

「はい、新人のスバルとティアナとなのはちゃんとヴィータちゃんが出撃したです」

「新人じゃ、ちょっと荷が重いやろ」

まだ配属されたばかりの隊員を連れていったと言う言葉に不安が過

ぎるがその不安を感じ取ったのかリィンが

「大丈夫です、二人は救助活動を手伝わせる為に連れっていったです」

「それなら。大丈夫やと思うけど。ライトニング分隊は？」

「ライトニング分隊は先に現れたガジェットの方に向かってるです」

この報告でひとつの仮説が証明された、ネクロはガジェットの製作者と協力関係にあるということだ。今まで何度かガジェットとネクロは同じ場所に出現しているが、お互いに戦闘をしたという報告は無い。だから協力関係にあるのではないかとう仮説が立てられていた

「じゃあ、ライトニング分隊はガジェットの討伐が終わったら、スターズ分隊の援護に向かうように言っといて」

返事をしてリィンが部屋から出て行くその後姿を見ていると、モニターにスターズ分隊が向かった場所が映る

「お願いやから、怪我だけはせんといてな」

そのモニターを見ながら、はやてはなのは達の無事を祈っていた

「くそっ！！ワラワラと沸いてきやがって」

悪態を付きながらハンマーを持ったゴスロリ服を着た少女「ヴィータ」はその手に待ったハンマーで飛び掛ってくるネクロを叩き飛ばしていた。なのははもう一箇所のネクロが出現した場所にいる。つまり一人でネクロの相手をしなければいけないのだ。さらに今ヴ

ィータが居る場所の背後では逃げ遅れた。親子が居るつまりこの場所から動くことができない

「守る戦いがこんなに難しいなんてな。やっぱり兄貴はすげーぜ」

再び飛び掛ってくるネクロ達を吹き飛ばす。後ろに人が居るせいで大技が使えないのでグラーフアイゼンで直接攻撃を仕掛けるしかないだがかつてこれと似た状況でありながら。最後まで守り続けていた龍也の姿が目に浮かぶ

「兄貴が出来てんだ、このあたしに出来ねーなんてことは無い！！なのはが来るまで持ち堪えてやるぜ！！」

そう言って汗で滑り始めていたグラーフアイゼンを構えなおすが、突然後ろからの衝撃でグラーフアイゼンを落としてしまう

「な・に？」

驚きながら振り返ると親子が隠れている場所の上から姿を隠すようにネクロが居た、どうやらネクロの放った光弾が直撃したらしい。右手に力が入らない。その間にもネクロ達はこっちに向かってきている

「これはかなりやべーかもな」

「このままやヴィータたがっ！！リィン、なのはちゃんは何しとる！！」

モニターを見ていたはやてが慌ててリィンに尋ねる

「なのはちゃんの方もネクロが大量に押し寄せていて、身動きが取れないです！！」

「どうしたら、ええんや。このままやったらヴィータが」

その時。ヴィータが居る方向に向かう魔力反応があった

「誰か、ヴィータの所に向かっとるんか？」

「いえ、シグナムもなのはちゃんも以前交戦中です」

「じゃあ、誰が行ったんや？」

はやてはモニターにもう一度目を向けた

「流石に不味いかもな・・」

右手は依然痺れており力が入らない、左手でグラーフアイゼンを構えネクロ達を撃退しているが、その動きにさっきまでの切れは無く徐々にだがダメージが蓄積していた

「まだ、なのははこっちに来れ無いのか」

段々焦って来る、いくら一騎当千実力を持った、ヴィータでも片手が使えなければその戦力は半減してしまう

「くっ！！」

飛び掛ってきた3体のネクロを吹き飛ばすがさっきまで見たいに消

滅しない。ダメージを余り与えれていないのだ

「このままじゃ、ジリ貧だ」

後ろの親子はまだ無事だがこのままもし自分が倒れてしまったら守るものが居なくなってしまう。それだけは駄目だ。ダメージでさっきから視界が揺れる、一瞬だが平衡感覚を失いバランスを崩す。それをチャンスと言いたげにネクロ達が飛び掛ってくる

「くそっ！！」

応戦しようとグラーフアイゼンを振ろうとした瞬間。

ゴウッ！！

目の前を凄まじい魔力光が過ぎり、飛び掛ってきたネクロを消滅させた。一瞬なのはが来たのかと思うがその魔力光は赤、なのはではないじゃあ誰がと魔力光が放たれた方向を見る

「っ！！」

そこには黒いバイクに跨った漆黒の鎧を身に纏った騎士がいた

間に合ったか、ダークネスは仮面の下でそう呟いた。ネクロの反応を感じたダークネスは直ぐにその反応を頼りに走り出した、近づくに連れてその場にヴィータの反応があることに気付く、そして最初は手助けが入らないと思っていたが。一瞬ヴィータの反応が下がりそれから段々弱くなっていくことに何か起きたのだと思い。慌てて反応があった場所に来たのだ。こうして近くで見ると変わっていない、あの時のままだ、一瞬仮面を取りたいという衝動に駆られるがそれを必死で押さえヴィータの前に立った

「キキっ！！クロキシキタ。キキバカナヤツ」

ネクロが耳障りな声を上げる

「オマエ、コロセバ。マオウサマヨロコブ」

「ほう、お前ら如きが私を倒せるとでも」

腰から下げた、グラムを抜き放つ

「オマエ、ツヨイデモコレダケノカズタオセルワケナイ」

大量のネクロが同時に飛び掛ってくるのが戦闘の始まりの合図だった

信じられない。あたしは目の前で起きる事を見てそう思った。飛び掛ってくるネクロ達は綺麗に一撃で切り捨て近づいてきたネクロを蹴り飛ばす。唯の蹴りなのにネクロは苦しみながら消滅している

「なんて、威力の蹴りなんだよ」

ネクロはその攻撃性を持った魔力をぶつけるか、耐久力以上のダメージを与えるしか倒せない、だが黒騎士は唯の蹴りで消滅させているのだ。

「キキ！！オマエヤッパリツヨイ、デモコレハドウダ」

ネクロ達が左右から飛び掛ってくるが

「邪龍一閃！！」

凄まじい速さの四連撃がネクロを消滅させるが。あたしにはそれよりも黒騎士の技に驚いた。アレは兄貴の技にそっくりだ
あたしが驚いている間も黒騎士はネクロ達を消滅させている、飛び掛ってくるネクロを紙一重で交わし、剣で無造作に貫き消滅させる。その剣がネクロを貫いている隙にと他のネクロが攻撃を仕掛けるが当たったと思った瞬間姿が消える

「！！ドコダドコイッタ」

ネクロが突然消えた黒騎士に驚き辺りを見回す

「こっちだ、間抜け」

いつの間にか背後に居た黒騎士がその手に持った槍を向ける

「バルムンク。カートリッジロード」

『カートリッジロード』

槍の持ち手から薬莢が飛び出すそしてそれと同時に凄まじい魔力が巻き起こる

「デモンズディザスター！！！」

槍が分裂したように見えた、唯の一突きの筈なのにネクロにはまるでマシンガンで撃たれたような無数の穴が開き次々と消滅させていくわずか五分、五分でアレほど大量に居たネクロは全て消滅していた

「この程度か・・バルムンクモードリリース、」

『イエス』

その手に持っていた槍が剣に戻る、その剣を腰に収めこっちに歩いてくる、その手には銃が握られていた

チャキ！！

「！！」

その銃がこちらに向けられるそして

ガン！ガン！！

二発の銃声が鳴るそして、何かが倒れる音がした
後ろを見ると其処には体を打ち抜かれたネクロが居た

「ネクロは影に潜り込める。影には気をつけるんだな」

銃を仕舞い、今度こそゆっくりと目の前に立つ

「手を見せろ」

乱暴だが気遣う素振りを見せる黒騎士

「えっ！」

驚いた怪我をしていることに一瞬で気付いた、その洞察力に

「怪我をしてるんだろ、手を見せろ」

もう一度手を見せろと言われ、まだ痛む右手を黒騎士に向けると

「癒しの風よ、この者を蝕む邪気を祓いたまえ」

その詠唱とともに右手の痛みが消える、いやそれだけじゃない全身に走っていた痛みも消えていた

「すげー。ぜんぜん痛くないぜ」

痛みが消えて腕を回すまったく痛みがない。それを確認してその場から歩き去ろうとする黒騎士に

「機動六課所属、高町なのはです。黒騎士ですね。話を聞かせてください」

あたしの前になのがが降りて来た、あちらも激戦だったのかあちらこちらに攻撃を受けたと思う後が見える

「なのは！」

「ヴィータちゃん、大丈夫だった？」

黒騎士を警戒しながらだが声を笑顔で返事を返してくる。なのがの登場に驚いていた黒騎士から信じられない単語が飛び出した

「なのは・・か大きくなったな」

「！！？私のことを知ってる。あなたは何者ですか？」

その口ぶりからするとなのはのことをだいぶ知っていることになる、

より一層警戒しながら尋ねる

「もう一度聞きます。貴方は何者ですか？」

「・・・・・・」

返事を返す気がないのか。さっきから口を開かない

「もう一度だけ、聞きます貴方は何者ですか？」

「・・・・・・」

さっきの大きくなったなから、一言も発しない黒騎士だったが突然腰から剣を抜き放つ

「！！？」

なのはが一歩下がる、だが黒騎士は剣をそのまま地面に付きたて

「炎龍召還、ファフニール！！」

剣を中心に魔法陣が描かれその中心に赤い鱗を持った飛龍をが現れる

「主、何用か？」

ファフニールが黒騎士の方を向く

「すまん、ミスを犯した。この場から直ぐに離れたい力を貸してくれ」

ファフニールと黒騎士の足元にミッドでもベルカ式の魔法陣が現れ、一つになる。その現象から二人が何をしようとして居るのか気付いたなのはが止めようとするがそれより早く

「「ユニゾンイン」」

黒騎士とファフニールが融合しさっきまで黒かった鎧が赤く染まりその背にファフニールの翼が生えるそしてそのまま飛び上がる黒騎士を止めようとするがそれを無視する、黒騎士に痺れを切らしたのか

「待ってください、止まらないなら力ずくで止めます。バインド！！」

一応静止するように言ってからなのはバインドが黒騎士の体を縛るが

「フン！！」

軽く力を込めただけで引きちぎり、凄まじい速さで飛び去った

「待って！！」

なのはが追って行こうと飛び上がるが

「待て！！」

なのはを呼び止める

「待ってください！！」

「ヴィータちゃん、早く追わないと見逃しちゃうよ」

「なのは、無理だよ。あたし達はだいぶ消耗してる。それに比べて黒騎士はまだ余裕がある、今から追っても追いつけない」

「でも」

「それに判った事があるし。それをはやてに報告したほうがいい」

「判ったこと？」

飛び上がっていたなのはが着地して首を傾げる

「ああ、ネクロが言ってたんだ「お前を殺せば魔王様が喜ぶ」って」

「じゃあ」

「ああ、多分ネクロの親玉の事だと思う、だから今は帰ろう。それにもしかすると黒騎士の正体は・・」

「黒騎士の正体？」

何かを言おうとして口を摘むんだヴィータになのはが尋ねようとするが

「いやこれはまだいいか。確証もないしな。それよりはやく帰ろうぜ」

「・・・それもそうだね」

一瞬考え込んだなのはだが頷き、二人はそのままスバルとティアナが待つ場所に向かった。

第４話に続く

## 第４話（前書き）

え～と此処まで呼んでくれた方なら判ると思いますが、作者は原作を知りません。なのでシナリオがおかしい点などが有ると思いますが。よろしくお願いします

それでは本文始まります

# 第４話

合流地点に向かうと管理局の制服を着た。鉢巻を巻いたスバル・ナカジマとツインテールのティアナ・ランスターが心配そうな顔をしながら待っていた

「二人とも、御免ねちょっと遅くなっちゃった」

心配そうにしている二人を安心させるために笑顔で話しかけるなのはだが

「ちょっとどころじゃないですよ!!通信は出来ないし、場所も判らないからすごく心配したんですから」

ティアナが本当に心配そうに言うが、なのは達にはその前に言われた言葉のほうが気になった

「通信が通じなかった?どういう意味だ?」

「えっと、そのままの意味です。ヴィータ副隊長」

スバルからの報告によると逃げ送れた民間人の誘導を終え、なのは達に報告をしようとしたが強力なジャミングで場所も通信も出来なかったらしいのだ

「じゃあ、お前達はあいつが来たのを知らないのか?」

てっきりモニターか何かでこちらの状況を知っていると思っていたヴィータが呟く

「「あいつって誰ですか？」」

その様子を見ると本当にこっちの状況を知らなかった様で声をそろえて尋ねる二人に

「黒騎士だよ。わたしがヴィータちゃんを助けに行ったとき。もうネクロは黒騎士に殲滅されてた」

「「！！？」」

スバルもティアナも驚いている。ネクロはなのは達でさせ苦戦する相手だ。それをたった一人で殲滅した黒騎士に驚いているのだ

「とりあえず、戻ってはやてちゃんに報告しよう。もしかするとネクロの正体が判るかも」

「！！？何か判ったんですか？」

目的が何か判らないネクロの正体が判るかもと発言に食い付くスバルに

「それも含めて報告するんだ、だから今は帰るぞ」

詰め寄ってきたスバルを嗜め、ヴィータ達はヘリに乗って機動六課に向かっていった、その様子を見ている黒い服にサングラスつけた男・・・ダークネスだ。飛び去ったと思わして幻術を使い近くに隠れていたのだ。

「良かったのか？正体を現さなくて？」

ダークネスの背後に一人の男と少女が現れる。一人は死んだ筈のゼスト・グライガンツと希少魔法の召還が使える、ルーテシア・アルピーノに融合騎のアギトだ。恐らく自分と同じでネクロの反応を感知してこの場に来ていたのだろう。

「ああ、まだな・・私は彼女達の前に出る勇気がない。それにヴィータだってあの不意打ちが無ければ一人で勝っていただろう・・やはり私は不必要な人間なんだろうな「「違う!!」」・・ルーテシア?アギト?」

自嘲気味に笑うダークネスの言葉を遮ってルーテシアとアギトが叫ぶ其の目にはうっすらと涙が浮かんでいる。

「ドクターが言ってた。ダークネスの怪我は家族を守ったときに出来た物だって。それにダークネスが居たからゼストも居るし私のお母さんだって生きてる。だからダークネスは不必要なんかじゃない!!」

「あたしは、兄に助けてもらった!兄が居なかったあたしはネクロに殺されてた、だから不必要なんて言うんじゃねぇ!!」

「ルーテシア・・アギト・・すまんな。少し弱気になってしまったようだ、心配掛けてすまない」

泣き出してしまいそうなルーテシアとアギトの頭を撫でながらダークネスが謝る、

「もう言わない?」

泣きそうな顔で尋ねるルーテシアに

「ああ。もう言わんよ。本当に心配掛けてすまない、お詫びと言っては何だが、何か好きなものでも作ってやろう何がいい？」

頭を撫でながらしゃがみ込み、ルーテシアの目線に会わして尋ねると

「ケーキが食べたい・・」

顔を赤くしながら呟くルーテシアに

「ケーキだな。それじゃあ帰ったら直ぐに作り始めよう」

そう言ってポケットから何かを取り出し投げる、なにもない空間も扉が現れた。これはダークネスが居る空間に直接いく為のゲートである

「すまなかったなゼスト、フォローに来てくれたんだろ？」

「何のことだ？俺には判らんな」

そう言いながら笑っているゼストに内心感謝していると

「早く、早く行こう。ダークネス！！」

「そうだぜ、兄早くケーキ作ってくれよ！！」

私の手を握り早く行こうと催促するルーテシアとその周りを飛ぶアギトに苦笑しながら私達はゲートの中に入っていった。

なのは達が戻ってくるとリィンが待っていた、降りて来た隊員の中にヴィータの姿を見つけると心配そうに駆け寄ってきた

「ヴィータちゃん大丈夫だったですか？モニターは途中で見えなくなるし、すごく心配したですよ」

「ああ、大丈夫だよ。途中で助けが来たから」

心配そうに話すリィンを安心させるために頭を撫でながら話す

「助けですか？なのはちゃんの事ですか？」

「いや、違う奴だ。黒騎士が来たんだ」

驚いた顔をしている、リィンそれはそうだろう今まで何度も黒騎士は出現しているが、六課の中で黒騎士に遭遇した者はいないのだ

「それに。ネクロの親玉の事も判った。それを含めて報告に行こうと思ってたんだ」

「そうですか、フェイトちゃん達も待ってるです、早く行きましょう」

リィンに先導されながら部隊長室に向かって行った

コンコン

「失礼します」

部隊長室に入ると、なのは達の幼馴染のフェイト・T・ハラオウンとヴィータと同じ守護騎士のシグナム。それと彼女達が率いるライトニング分隊のキャロ・ル・ルシエ　とエリオ・モンディアル　が心配そうな顔をして待っていた

「ヴィータさん、大丈夫ですか？」

一番近くにいたエリオが心配そうに尋ねる

「ああ、大丈夫だぞ。そっちのほうはどうだったんだ？」

ガジェットが出現したエリオ達の尋ねると

「レリックが在ったんですが持ち去られてしまいました」

若干気落ちしながら言うエリオに

「大丈夫だ、この次は渡さない様にすればいい、そうだろエリオ」

「はいっ！！有り難うございます」

エリオが元気を取り戻すと

「そろそろ、そっちのほうも報告も聞きたいやけど。ええか？」

はやてが微笑みながら尋ねてくる

「はい。こちらの方にレリックは在りませんでした。おそらくネクロの陽動だったと思います。私のほうにネクロが２０体。ヴィータちゃんの方には３０体出現しました」

なのはの報告が終わったところではやてが口を開く

「こっちの方でもモニターしてたから、なのはちゃんの方は判っとるけど、私が聞きたいのはヴィータの方やグラーフアイゼンを落とす所まではモニター出来てたけど途中から酷いノイズが走ってな。何も映らんかったんよ」

新人達が息を呑むヴィータは達隊長陣は百戦錬磨言ってもいい。ヴィータの方がピンチに成っていたとは聞いていたが其処までとは思って無かったのだ。

「あたしがグラーフアイゼンを落とした後、黒騎士が来たんだ。あたしは黒騎士に助けられた」

「黒騎士が出たんか。見た感じどうやった？」

「報告どおりだな。全身真っ黒の騎士甲冑と仮面それと剣型と槍型のデバイスに銃型のデバイスを使ってた」

「ふんふん。他には新しく判ったことは？」

「ネクロの親玉と黒騎士が敵対関係にあることと其の親玉の名前が魔王って事だけど。これは映像見てもらった方が判るな。グラーフアイゼン映せるよな」

『イエス。マイマスター』

そしてグラーフアイゼンから映像が映し出される。それは黒騎士が現れた所からが記録されていた。黒騎士とネクロの会話そして戦い

が始まり。黒騎士が使った技と所ではやて達も驚いていた。黒騎士が使った邪龍一閃は兄貴の技の蒼龍一閃にそっくりなのだ。そしてなのはが現れた所が映し出される

『機動六課所属、高町なのはです。黒騎士ですね。話を聞かせてください』

そして映像が流れるそして問題のシーンが映し出される

『なのは・・か大きくなったな』

「「「!!?」」」

はやて達が驚いている。その間にも映像は流れ、竜を召還し飛び去ったところで映像は途切れていた、見ていた隊員たちは驚いていたが一番最初に口を開いたのはスバルだった

「あの・・なのはさん、黒騎士が大きくなったって言ってたけど知り合いですか?」

其の言葉に首を横に振る

「ううん。知らないんだでもどこかで会った事があるような気がするんだけど」

黒騎士の口調は親しい者に話すような穏やかな口調だった。だがなのはには心当たりが無い。いや確かにこの条件に当てはまる人物はいるがその人物は現在行方不明だ。

「取りあえず、ネクロの親玉と黒騎士の戦闘力の事が判っただけで

ええんやん。悪いんやけどちょっと隊長陣だけで話し合いたい事があるんや、だからスバルたちは出てってくれるかな」

「あ、はい判りました」

スバル達が出て行き、部隊長室には隊長陣だけなった所ではやてが切り出す

「・・本当は黒騎士が誰か心辺りがあるんやろ」

その言葉に頷きヴィータが話し始まる

「あの戦闘技能に技、黒騎士は兄貴だと思うんだけど・・・」

確かにその通りだあの戦闘スタイルは龍也の物とまったく同じだ

「でも、仮に龍也だとすると何で私達の前に出てきてくれないの？」

フェイトの言う通りだ、仮に龍也とするとなんで前に出てきてくれないのかという問題が出てくる。

「・・・これは仮説だが、いいか？」

黙っていたシグナムが口を開く

「兄上が何故我々の前に出てこないかと考えると３つ仮説が出来る。一つは兄上が記憶喪失になっている、次に黒騎士が兄上の人造魔導師である可能性。そして最後に自らの意思で姿を隠しているの３つだ」

シグナムの言う通りだ考えられるのこの3点だけだ。あの襲撃事件のショックで記憶喪失になっている可能性も判る。また人造魔導師の線も判る。だが最後の自ら意志というのが判らない

「自らの意思で姿を隠しているとすれば、何が原因だ?」

仮に自らの意思でと言えば考えられる可能性は一つ

「ネクロと魔王が関係してるとしか考えられねーよな」

ヴィータが自分の考えを言う、その通りだその可能性しか考えられない、龍也は昔から自分の抱えていることは誰にも言わないで一人で解決しようとする癖がある、

「次に会う事が有ったら、尋ねてみようとする方向でいいやろ、皆も疲れるとるから今は休んでえな」

「判った、少し休んでから、報告書を出すから」

そういってなのは達が出て行く、そして部隊長室ははやて一人だけになった

「兄ちゃんやよな、何で出てきてくれへんのやろか。」

部隊長室のデスクの横にある写真立てには8年前のはやて達の写真が収められており、それには龍也の誕生日に贈ったお揃いのペンダントが掛けられていた

「会いたいなぁ、兄ちゃんに・・・」

自分の椅子に座りながらはやては呟いた、そしてその眼からは涙が流れていた。それは八年間一度も泣く事が無かったはやての涙だった

ガチャンっ！！
ダークネスの手からマグカップが滑り落ち割れる

「ダークネス？如何したの？」

笑顔でケーキを食べていたルーテシアが心配そうに顔を覗き込んでくる、アギトも同様に覗き込んでくるが

「大丈夫だ、少し手が滑っただけだ。心配するな」

心配そうなルーテシアの頭を撫で、割れたマグカップを片付けていると

「大丈夫か？何か割れる音がしたか・・・」

隣の部屋に居たゼストが何事かと此方の部屋に来るが

「ああ、大丈夫だ。少し手が滑っただけだ」

「そうか、それなら良いが・・」

再び隣の部屋に戻っていくゼストを見送ると

「ダークネス？大丈夫」

再び心配そうに話しかける、ルーテシアの頭を撫で安心させ。

「大丈夫だ。それよりケーキのお代わりは？」

頷くルーテシアにケーキのお代わりを取りに行く為にダークネスが部屋から出ようとすると、一瞬部屋の片隅にダークネスの目が行き。動きが止まる、そこには黒い布に隠された写真立てと黒い箱が合った、動きが止まったダークネスを心配したアギトが

「兄？如何したのか？」

「んっ、何でもないさ」

そう行って部屋から出て行った。ダークネスの背が見えなくなると。ルーテシアとアギトダークネスの動きが止まった場所に行き、黒い布を外し写真立てを見る、其処には幼い時のダークネスの困ったようだが、それでも幸せそうな笑顔を浮かべたダークネスとそれに寄り添うに笑う幼い３人少女達の姿があった。そして隣の黒い箱には鎖が切れていたと思われる、ペンダントが入っていたがそれの鎖はダークネスの手によって直された後があり、鎖の長さも調整されていた、ダークネスは身に着けていないがどれだけこのペンダントを大切にしているかが判る

「これがダークネスの本当の笑顔・・・何時か見てみたいな」

「そうだな・・・今みたいな作り物の笑顔は見たくねぇな。はやくあたしも兄の本当の笑顔が見てえな」

二人でそう言うと再び写真立てに黒い布を掛け、箱の中にペンダントを戻し、椅子に座りダークネスが来るのを待っていた

第5話に続く

## 第5話（前書き）

五回目の投稿となりました。駄文だとは思いますが、これからもよろしくお願いします、出来れば感想やレビューが来ることを心待ちにしています、

それでは本文始まります

# 第5話

第5話

その日私は懐かしい夢を見ていたそれは、初めてあの人に会ったことのある日のことだった。
あの火事の時に私を助けてくれたあの人は黒いライダースーツに漆黒の翼を持った悪魔の様な姿だったが、私には光り輝く天使に見えた

少女は孤独の不安に震えていた。
　少女は力の不足を悔やんでいた。少女は助けを待つしかできない自分と決別したかった。優しい母を亡くして数年間。父と姉、2人の家族と支えあいこれまで幸せに過ごしてきた。今日はその姉とともに第8空港まで遊びにきていたのだ。それなのに。

「お姉……ちゃん……」

突如起こった爆発、そして火災。
阿鼻叫喚。恐慌と混乱の中、少女は姉とはぐれ、人気の無い施設に取り残されてしまっていた。
始めは己を奮い立たせ、懸命に姉の名を呼び続けていた。　だがいつまでも姉と合流することは叶わず、ただ立ち尽くしていた。時折瞳に移る哀れな屍に、少女の心は完全に折られていたのだ。いつの間にか双眸には溢れんばかりの涙が溜まり、ただ、消え入るようにか細く助けを求めるのみ。

「あう！」

そしてついには躓き、転んでしまった。膝は擦り剥け、血が滲み出

す。もう、限界だった。涙の防波堤は決壊し、鼻水、涎がとめどなく溢れだした。
出口は崩落、外に出ようともそれは高い、高い塀の向こう。少女はもはや己の身体を掻き抱くように震えることしかできなくなっていた。
そして無常にも、ガラ、と更なる倒壊を予知させる音が少女の耳に届く。見上げる少女。一瞬泣くことも止め、ただ乾いた声をポツリと洩らすに留る。そこには。

「ゃ、いやあ……」

十数メートルはあろうかという、ゆっくりと自分に向かって倒れる巨大な天使の像があった。普段慈愛に満ちた笑みを浮かべる天使の姿が少女には、この時ばかりは少女の薄幸を嘲笑う悪魔のように思えた。

「お父さん……」

答えるものはいない。天使像の倒壊に伴い、それを支えていた地盤が盛り上がる。

「お姉ちゃん……」

答えるものはいない。天使像が壁を砕きながら少女を叩き潰そうと迫った。

「誰か……助けてよぉぉぉ！！」

答えるものは、いた。

「獣王拳！！！」

後ろから声が聞こえたと思ったと同時に顔の横を通り過ぎる鮮やかなオレンジ色の光は、今まさに少女を押しつぶそうとしていた天使を粉々に砕き、現れた漆黒の翼を持つ悪魔の様な姿の男だが少女には光り輝く天使に見えた

「大丈夫か？」

その声は優しく心に響いていった。そして胸に広がるのは安心感、まだ火の中にいるのに少女は助かったという気持ちに満たされた

「名前は？」

「あっ！スバル、スバルナカジマです」

「ナカジマ・・そうかあの人の・・」

自分の名前に聞き覚えがあるよな素振りを一瞬だけ見せたが、それは直ぐに消えた

「スバル、いいか今から脱出するからな。しっかり捕まっていろ」

そう言って抱き上げる人に

「待って！！お姉ちゃんが居るの、お姉ちゃんも助けて！」

辺りは火に包まれており、このままでは自分達が危険なのは判っていたがお姉ちゃんを見捨てて逃げることは出来ず、必死にお姉ちゃんを助けてくるように頼む

「・・判った、少し苦しいと思うが我慢できるか？」

黒い男は一瞬考える素振りを見せたが頷き、助けてくれると言った。
それがすごく嬉しかった

「うん！！」

「ではしっかり捕まっていろ」

胸の中に確りと抱きしめられ少し苦しかったが、それとは別に胸が高鳴るのを感じていた

（何だろう？胸がドキドキする）

その背に生えた翼で崩れた空港の中を飛んでいると

『旦那！！そっから３０Ｍ先に人の反応があるぜ。でも少し弱ってきてる急いだ方がいいぜ』

「判った、少し急ぐぞスバル」

そう言うと男は飛ぶ速度を上げた、さっきの声の通りの場所にお姉ちゃんが倒れていた

「お姉ちゃん！！」

男の腕から降り、駆け寄るが煙を吸ったのかぐったりしていた

「お姉ちゃん、しっかり」

揺さぶろうとするが男に止められる

「大丈夫だ、煙は吸っているが大事はない。此処から出れば意識を取り戻すだろう」

私とお姉ちゃんを抱き上げ空港から出る為に来た方向に引き返していると。

ガラガラッ！！

瓦礫が崩れてきて道を塞ぐ

「そんな、あと少しなのに」

出口はあと少しなのに道が塞がれてしまった

「大丈夫だ、絶対私がお前達を助ける」

その男の声は力強く安心できた

「少し離れていてくれ。下手をすると巻き込みかねん」

少し離れたところに私とお姉ちゃんを降ろして、崩れていた瓦礫の前に立つ

「ベレン、フルドライブいけるな？」

『当たり前だ。俺を誰だと思ってるんだ」

ベレンの頼もしい言葉に笑みを零す。この状態で居るのはベレンに取って辛いはず、それなのに力を貸してくれる相棒が頼もしく見える

「行くぞ！！カートリッジロード」

『カートリッジロード！！』

右手に魔力が集中していく。腰を落とし構えを取る。余分な魔力が体から放出されて辺りを金色の光が満たす、そして右手がまるで太陽のような光を帯び始める。そして凄まじい速さで前に踏み込むと同時に右腕に溜まっていた魔力を一気に放出する

「ヘブンズ・・・
ナックルッ！！！！」

ゴウッ！！

突き出された右腕から金色の光が放たれ。瓦礫を木っ端微塵に吹き飛ばした

「凄い！！」

私はその光景に驚いた、あれ程あった瓦礫を一撃で吹き飛ばした、この男に

「此処までくれば、大丈夫だ。後は管理局が上手くやってくれるだろう・・」

そう呟くと私とお姉ちゃんの前に立ち

「良いか、スバルここで待っていれば管理局の者が助けてくれるだろう。だから動かずここに居るんだ。判ったか」

「お兄ちゃんは如何するの？」

「私は此処から消える。私は見つかる訳には行かないからな」

歩き去ろうとする男の腕を掴む

「嫌だ・・行っちゃ嫌だ！！」

腕を掴まれた男は困った顔をしていたがしゃがみ込み、そのとき初めて気付いたがこの男の右目は何かに斬られた後と共に固く閉じられていた

「今は離してくれないか？私には行かねばならん理由があるんだ」

諭すように言う男に妥協案として

「・・判った。じゃあ名前を教えて。」

「私の名はダークネスだ。スバル」

名前を教えてくれた事で納得して手を離す。そして歩き去ろうとしたダークネスだが何かを思い出したように振り返り何かを投げて寄越した。それは鍵が付いた小さなアクセサリーだった

「それは私の家に通じる鍵だ。大きくなったら来るといい。少しくらいだったら魔法を教えてやるからな」

そういうとダークネスがポケットから同じものを取り出し、投げると扉が現れダークネスが潜るとそれは消えた。

「助けてくれて有難う。ダークネス」

そう呟いてダークネスが風穴を開けた場所から外を見ると、白い服の魔導師が飛んでくるのが見えた。そして其処で私は目を覚ました

その日私は懐かしい夢を見ていた。これは兄さんが死んで少し自暴自棄になっていた時に出会った男の人との夢だった

「はあっ！！はあっ！！」

荒れた息を整える。兄さんが死んでから我武者羅に魔法の練習をしていた

「私は証明するんだ・・ランスターの弾丸に打ち抜けない物がないって事を」

兄さんが死んでからもう二月経った。家の中は伽藍としてとても寂しくなってしまった。それからは余り家に帰らず此処でこうして一人で魔法の特訓をしていた

「もう一度、やろう・・ッ！！」

デバイスを構えて魔法を使おうとした時、胸に激痛が走り私は意識を失った

夢を見ていた兄さんと一緒に居る夢をだが、兄さんが私を置いて歩き去ってしまう私は兄さんを止めようと手を伸ばした

「兄さんッ！！」

慌てて飛び起きるとそこには黒い服を着た隻眼の男が居た。飛び起きた私に一瞬驚いた顔をしていたが直ぐに元に戻り

「目が覚めたかね。驚いたぞ、ここに来たら君が倒れていたからな」

男の声は穏やかでとても優しい物だった。そこで気付いたが私はベンチに横になっており、額には塗れたハンカチが載せられていたこの男が看病してくれていたのが判る

「貴方は？」

目の前に居る男に尋ねると

「私かね？私はただの通りすがりだよ」

そういって笑う男だったが、直ぐに鋭い目付きになり

「君は何故あんな無茶をしたんだ、かなりリンカーコアが弱っていたが・・」

「・・・・・」

私はそれに答えることが出来なかった

「答えることが出来ないか・・まぁそれはそれで良いが。良かったら話くらいは聞こう何を悩んでいるのか、話せば楽になるかも知れないよ」

そういって笑う男の笑顔に安心したのか私は全てを話し始めた、兄さんが死んだこと、兄さんを侮辱した男の事、そして兄さんが無能じゃない事を証明する為に執行官になるんだと言う事を話した。そして気が付けば私は涙を流していた。それは兄さんが死んでから始めて流す涙だった。男はその話を黙って聞いてくれたそして話し終わると

「辛かったね、でも一つだけ聞きたいことがあるんだ。君は執行官になって如何するんだい？」

「えっ？どういう意味ですか」

私が涙を拭いながら聞き返すと

「君が兄さんの意思を継いで執行官に成りたいというのは判る、ではその後は？」

判らない、私は執行官になって如何したい？兄さんを侮辱したヤツを見返したい？

「判りません」

私は判らなかった、執行官なって如何したいのか私にはなった後が判らなかった

「そうか・・・判らないか。ではこれは私の勝手な想像だが聞いてくれるかね？」

私は頷いた

「そうか、では聞いてくれるかな、君の兄さんは自分の意思を継いで執行官なって欲しいんじゃなく。君に幸せになって欲しいじゃないのかな？」

それは考えたことが無い事だった。私は兄さんが自分の無念を晴らして欲しいと思っていると思っていたからだ

「それは・・」

男は話を続ける

「君は若い、そんな内からあんな無茶をしていれば何時か体を壊す。そんな事になったら君の兄さんは悲しむと思うよ」

「・・・・・」

私は何も答えられない、この人の言っている通りだ、最近胸が痛いとずっと思っていた

「そして、君には才能がある、焦らずじっくり地力を付ければきっと素晴らしい魔導師になれる」

そう言って立ち上がった、男の手には銃型のデバイスが握られていた

「モード。シューター、スタンバイ」

『オウ、モードシューター起動』

「込める弾丸は・・」

『願いの欠片』

ガチャン

シリンダーが回る

「レインボーブラスト！！」

ズガンッ！！

銃口から放たれたのは七色の光そしてそれは巨大な虹になった

「綺麗」

私はそれを見て呟いた、魔法にこんな使い方が在るなんて知らなかった

「魔法とは戦うだけの物ではない、人を救うものだそれを忘れるなよ？。私が言いたい事はそれだけだ、ではなまた会おう」

歩き去ろうとする男に

「私はティアナ・ランスターって言います。話を聞いてくれて有難うございます」

男は振り返ると人のいい笑顔を浮かべ

「私はダークネスだ。では無茶をせずにゆっくり地力を付けると良い。君は良い魔導師になれるさ」

歩き去っていった男を見送るとベンチの上に

「あれ？これは」

ベンチに乗せられていたハンカチには鍵の飾りが付いたペンダントと手紙が置かれていた

『これは私の家に通じる鍵のようなものだ。もしまた何か悩んだら来るといい、話し相手くらいには成ろう』

「ダークネスさん、有難うございます」

置いてあったペンダントを掴んだ所で目を覚ました

「良い夢。見たな。そうだ今日は休みの日だから。行ってみようかな～」

その日お互いに同じ夢を見ていた事を二人は知らない

第６話に続く

# 第6話

第6話

「さてと・・何着て行こうかな？」

クローゼットの中を見ながら服の組み合わせを考える、少女ティアナだ。

「う～ん、これもいいけどこっちも捨てがたいわね」

彼女のベッドには所狭しと服が並べられていた

「良し、これに決めた！！」

彼女が選んだのは白のワンピースだった

「これなら髪は下ろしたほうが良いわね」

着替えてから普段はツインテールの髪を今回は下ろし、準備は完了した

「さてと、そろそろ行こうかな。」

枕元においてあった鍵のモチーフが付いてアクセサリーを持って部屋から出た。

「あれ、ティア出掛けるの？」

部屋から出るとまったく同じタイミングで向かい側の扉が開く。ここでだが彼女達の部屋は本来三人用の部屋であり。共同スペースのリビングとキッチンに個々の部屋が用意されている

「うん、ちょっと昔相談に乗ってくれた人に会いに行こうかなって思ったんだけど、そっちは？」

スバルは普段見たことのないお洒落な服を着ていた。その姿にまさかと思いたずねる

「私は昔助けてくれた人に会いに行こうかなって思ったんだけど」

「「・・・・・・・・」」

お互いの思考が一つの可能性に辿り着く

「ねぇ、スバルあんたこれ持ってない？」

ワンピースのポケットから鍵のアクセサリーを取り出す

「あっ！それティアも持ってるの？」

同じようにポケットからアクササリーを取り出す。真ん中に付いている石の色は違うがそれは同じものだった

「それ、持ってるって事はあの人の事知ってるわよね？」

その言葉に頷きながら

「黒いバリアジャッケットの人だよね」

バリアジャッケットの姿は見たことないがあの人は黒の服を着ていた

「で？その人の名前は知ってる？」

頷くスバルの口が開き

「ダークネスさん」

やっぱりと頭を抱える、その様子にスバルが

「って事、ティアもダークネスさんに会いに行くの？」

頷く、まさか二人とも同じ人物に会いに行こうと思っていたは思っても見なかったことだ、しばらくお互いに無言の時が過ぎたが

「ねぇ、ティア一緒に行かない？」

スバルが一緒に行こうと誘う、確かに一人で行くのは緊張する。では二人ならどうだ確かにそれなら多少は緊張は緩むが面白くはない。だが一人で行って、緊張して何も話せなくなるよりかはマシだ

「判ったわ、一緒に行きましょう」

「じゃあ、一緒に行こう」

スバルと共にダークネスに渡されていた鍵を投げる、それと同時に二人の部屋に扉が現れる

「じゃあ、行こうか？」

そうして二人で扉を開いてその中に進んでいった、その扉の中はまるでトンネルの様に暗かったがしばらく歩くと光が見えてきたそして暗い場所から出ると其処は森林の中だった、少し離れた所には湖とログハウスが見えておりそれは一枚の絵の様に美しかった

「此処にダークネスさんが居るんだ・・」

胸が高鳴る、此処に命の恩人が居ると思う私の胸は高鳴った

「早く行こう」

ティアと共にログハウスの方に歩いていくとログハウスの方から少女が歩いてきた。それは幼い少女だった年は恐らくだがキャロとエリオと同じくらいだろう。しばらくすると少女は私達に気付いたのか此方の方に歩いてきた

「貴方達は誰？此処にはダークネスの知り合いしか来れない筈だけど？」

少女の言葉には驚きが含まれていた。彼女の言うとおりなら此処にはダークネスの知り合いしか来ない筈なのに。見た事のない私達が居るのに驚くのは当然だ、だから私達は少女に自己紹介をすることにした

「私はスバル、スバル・ナカジマでこっちは・・」

ティアの方を向くと

「私はティアナ、ティアナ・ランスターよ。貴方の名前は？」

少女の名を尋ねると少女は笑いながら

「私は。ルーテシア・アルピーノ。此処に居るって事はダークネスに何か用が合って来たのね。ダークネスは湖の所で本を読んでるわ」

親切に何処に居るのか教えてくれ。ルーテシアは歩き去った

「あの子、ダークネスさんの妹さんかな？」

「どうだろう？私達ってダークネスって名前しか聞いて無いから何ともいえないわね」

あの子が何者なのか考えながら私達は湖の方に向かっていった

そこには昔から憧れていた男の姿があった。折り畳みの机の横に置かれた椅子に腰掛け。ルーテシアの言うとおり本を読んでいた

「うん？ルーテシアか？」

此方の近づく足音の気付いたのか読んでいた本から視線をずらし私達の方を見ると、一瞬驚いた顔をしたが次に穏やかな笑みを浮かべ

「これは珍しいお客人だ、スバルとティアナで良かったかな？まぁ立ち話も何だ座ったらどうだい？」

読んでいた本を閉じ。椅子に座るように進めるダークネスの言葉に甘え置いてあった椅子に座った

「久しぶりだね、元気そうで何よりだよ」

「「お久しぶりでふっ・・・・」」

憧れの人に会ったという極度の緊張から噛んでしまい。顔が真っ赤になる

「ふふ、まぁお茶でも飲んで落ちつくといい。紅茶？コーヒー？どっちがいいかね？」

笑われた事でまた真っ赤になるが

「コーヒーで」

「紅茶でお願いします」

返事をすると了解といい、ログハウスに歩いて行くダークネスの姿が完全に見えなくなった所で

「ああ～どうしよう、折角来たのに笑われてばっかだよ」

お互いに大きく溜め息を付く、

「どうしようか？何の話をすればいいのかな？」

「う～ん、取り合えず今の事話して、なにか相談に乗ってもらおうか？」

戻ってきてからの段取りが終わる頃にダークネスが。ポットとクッキーの盛られた皿を持って来た

「クッキーかビスケット、どちらにするのか迷ったので結局両方持って来たよ」

そう言って笑うダークネスだが、さっきまで緊張の所為で気付かなかったが何かその笑顔に違和感を感じる。まるで作ったような顔だ

（ねぇ、ティアなんかダークネスさんの笑い方に違和感感じるんだけど。そっちは？）

念話で話しかける

（そうね、私も何か違和感を感じるわ、まるで悲しいのを全部我慢して無理に笑ってるって感じがするわ）

まだ実戦経験が少ないスバル達だが、前線に立つ者は例外なく感受性が強化される。さっきまで緊張で乱れていた感覚が元に戻り、ダークネスの笑顔の違和感に気付いたのだ。

「とりあえず話はお茶でも飲みながらにしようか？」

置かれた紅茶とコーヒーを口に運ぶ

「「美味しい」」

その紅茶はとコーヒーは今まで飲んだどの紅茶やコーヒーより美味しかった。私達の言葉に嬉しそうな顔をしながら

「このクッキーとビスケットは自信作なんだが・・味はどうかね？」

進められたクッキーとビスケットを口に運ぶ、甘さといいサクサク

感といいこれもとても美味しかった。しばらく紅茶とクッキーを口に運んでいるうちに緊張も完全に解れ普通に話をしていた

「所で今二人は何処に部隊に配属されているだ？」

「機動六課ですよ」

クッキーを口に運びながら答えるスバル

「機動六課・・確かあの「不屈のエース・オブ・エース」高町なのはが居る部隊だったかな」

「そうですよ。所でさっきから私達の話し聞いてばっかじゃないですか。ダークネスさんの話もしてくださいよ」

さっきから話を聞いてばっかのダークネスさんに話をする様に言えたのはスバルだからだろう

「私の話しかね？そんなものが面白いとは思えないのだが・・」

「いえ、さっきから私達の事しか言ってないじゃないですか。だからダークネスさんの話も聞きたいんですよ、ねっ！スバル」

うんうんと頷くスバルと私の顔を見て

「判った、だが私は自分の話をするのが苦手なんだ、できれば質問してくれると有りがたいのだが」

交互に質問をしていくという流れになり、最初はスバルからだった

「じゃあ。いまダークネスさんは何してるんですか？」

「フリーの魔導師だな、今は休業中だがね」

「じゃあ、魔導師ランクは？」

「８年前から更新をしてないが確か空戦のＢ＋だったかな？」

そんな感じで質問が続いたが、スバルが何かを思い出したように

「じゃあ、さっきのルーテシアっていう子は妹さんですか？」

「ルーテシアに会ったのか。だがルーテシアは私の妹ではないよ。ルーテシアは私の友の娘だよ」

「じゃあ。ダークネスさんに妹さんは居ますか？」

その質問でダークネスの顔に影が入る。聞いては活けないことだったかもしれない

「・・・妹か確かに私には妹が居るよ、４つ年下だがら今は１９かな」

暗い空気が漂う、どうやら余り聞いて欲しくない内容だったみたいだ、空気を変えるためにスバルが

「そうだ！！魔法を教えてくれるって言ってましたよね。今日デバイス持ってきてるんですよ。良かったら教えても貰えませんか？」

持っていたバッグからリボルバーナックルとマッハキャリバー　を取り出しながらスバルが言うと

「そういえば、そんな事をいった記憶があるな。ティアナもデバイスを持ってきているのか？」

さっきまでの暗い雰囲気が消えた事に笑みを浮かべながら

「ええ、私も持ってきてますよ」

ポケットから待機状態のクロスミラージュを取り出すと

「そうか、それならいい。教えられる事など殆ど無いと思うが少し訓練に付き合おう、デバイスを取ってくるから少し待っていてくれ」

「王よ、あの者達が言っていた妹君か？」」

ログハウスの奥から、銀髪の女性が現れる。見るものが見れば気付くだろう、この女性は消えた筈の初代リィンフォースにそっくりだ

「セレス。違うさあの二人は昔助けただけだ。それに私は妹に会うだけの勇気が無い」

「そうですか・・私がこんな事を言えた義理が有りませんが。私は妹君に会うべきだと思いますが」

「私もそう思うだが、怖いんだ・・会うのがな」

自嘲気味に呟くダークネス

「王よ・・」

声を掛けようとするが

「あった・・すまないがお前は隠れていろ。見つかると厄介だからな?」

探していたデバイスを持ち、ログハウスを出て行ってしまったダークネスに

「王よ、貴方はどうして一人になろうとするのですか?」

セレスと呼ばれた女性は悲しげにそう呟くと溶けるように消えた。

いや姿があった所には一冊の本があった

それは剣十字が施された一冊の本、闇の書事件に関わった者なら気付くだろう、これは夜天の書にそっくりだ。そしてその表紙には天雷の書と書かれていた

第7話に続く

# 第7話

第7話

私が湖の所に戻ると其処には既にバリアジャケット姿のスバルとティアナが居た。そのバリアジャケットは何処と無くなのは達の物に似ていると思った

「さて。だいぶ待たせてしまった様だな」

「そんなこと無いですよ」

笑顔でスバルが言うが私がログハウスに向かってから２０分は経っている。

「じゃあ。訓練の前に一つだけ聞きたいことがある」

「聞きたいことですか？」

首を傾げるスバルに問いかける

「スバル、お前は何が欲しい？護り通す盾か？それともどんなときに絶望しない光？どんな者にも屈しない勇気か？答えろ」

これはナンバーズにも聞いたことだ、信念なき正義は容易く崩れる、正義だと言っていても悪になる可能性がある、だから聞くのだ。確固たる信念があるのか、その問いにしばらく考える素振りを見せたが

「私はあの時の助けてくれたダークネスさんに憧れました。私もダ

ークネスさんのように誰かを守れる様になりたいと、だから私は護り通す盾が欲しいです！！」

その力強い返答に頷き続いて、ティアナに問いかける

「では、ティアナは何が欲しい？貫く槍か？闇を祓う光？それとも明日を切り開く翼？」

ティアナは直ぐに返答を返した

「私は一度道を踏み外しかけました、でも貴方に道を教えて貰った。お兄ちゃんが死んで闇の中に居た私に光をくれた貴方に憧れた、私は明日を切り開く翼が欲しい。どんな時も後悔せずに進めるように」

その返答に笑みが零れる。ディードも同じようなことを言っていた、だがディードが望んだのは闇を祓う光だった

「いい返事だ、それだけ確固たる信念が在るなら大丈夫だ。教えられる事は殆ど無いと思うが訓練に付き合おう」

「「はい！！お願いします」」

最初はスバルからだった、私は同時に二人に訓練を付けるなんて器用な真似が出来ないからだ。なのでティアナは離れた所で訓練を見る事になったスバルと向かい合いながら尋ねる、私も既にバリアジャケットを展開している、黒いライダースーツに左腕に巻かれた赤いバンダナ。これがベレンの基本形の姿だ、ベレンには三つのモードがある

「スバルはシューティングアーツをやっているのか」

「はい。私は余り砲撃系が得意ではないので」

右手のリバルバーナックルをこっちに向けながら答えるスバル

「なら私も近接型の方がいいな、ベレン、モードインファイト」

『了解。了解モード、インファイト』

両手に持っていたショットガンが消え、代わりに両手に鉤爪が付いた手甲が現れる

「さぁ、掛かって来い」

右手をスバルの方に向け挑発してから構えを取った、構えと言っても動きやすいように右足を前に出しただけで後はまったくの自然体だ

（隙が全然無い）

向かい合ってるだけなのに冷や汗が出てくる、ダークネスはそれだけの威圧感を放っていた

（これでBランク？絶対嘘だSランクいやもっと上かも）

軽く構え此方を見据えているが、その視線は鋭く鷹の様な印象を受ける

（前にリミッターを解除したヴィータさんの前に立ったときより怖いかも）

握りこんだ拳が汗で滑る

「どうした？掛かって来ないならこっちから行くぞ？」

（はっ！いけない完全に呑み込まれてた。落ち着けこれは訓練だ）

「すいません、ちょっと待ってもらって良いですか？」

「構わんよ」

大きく深呼吸をしながら体を動かす。ダークネスの雰囲気に呑まれだいぶ体が硬くなっていたが。確りと準備体操をしてから

「行きます」

構えを取りダークネスに向かって行った

「はあああっ！！」

突きを繰り出すが

「踏み込みが甘い」

軽く片手で払われる

「まだまだ」

蹴りを繰り出すがこれもまた軽く払われる

（一撃の威力なら自信が合ったんだけどなぁ）

さっきから一度も掠りもしていない、それどころか軽く払われ此方がバランスを崩している

「攻撃はもっと速くそして正確に」

パパパン、返しの三連続の拳が両肩と鳩尾に当たる。だがだいぶ加減してくれているのだろう余りダメージは無い

「はい」

アドバイスを聞きながら少しづつだが動きを調整していく

「まだだ、それでは猪と変わらんもっと連携を考えろ」

突き出した拳を片手で往なし此方に踏み込みながら

「いいか?攻撃とはこうやるんだ!!羅刹刃!!」

右脚から無数に撓る蹴りが迫る・その全てが速く回避することが出来ない

「ぐっ!!」

カウンター気味だったので、ダメージは結構大きい。だがまだ行ける体の疲労とは別の何か充実感を感じる。それは幼い頃から憧れていた人に稽古をつけて貰えているという嬉しさだった

（まだ。まだ行ける）

ダメージは少しづつだが蓄積しているだがそれと半比例するように気持ちが高ぶっていく

（今なら出来るかもしれない）

あの火事のとき瓦礫を吹き飛ばしたあの技。

（今なら届く。きっと出来る）

「はあああああっ！！」

右手に魔力を貯める。ダークネスがなにをやろうとしているのか気付き笑みを浮かべる

「アレをやるつもりか・・では此方も」

同じように右手に魔力を溜め。お互いに同時に技を放つ

「「ヘブンズ・・・
ナックル！！」」

放たれた水色の光と金色の光は一瞬ぶつかり合ったと思ったが、次の瞬間呆気なく水色の光は砕かれ此方に向かってくる金色の光に弾き飛ばされながら

（まだ・・届かなかったか）

悔しさはあるがそれよりも充実感の方が大きかった

「惜しかったな。もう少し魔力を溜められれば良かったんだがな」

倒れている私の前に立ち手を差し伸べてくるダークネスの手を掴み立ち上がる

「う～ん、出来ると思ったんですけど、なにがいけなかったですか」

一度見ただけの技の見よう見まねでやってもやはり足りない点があるそれを尋ねると

「スバル、おまえ余った魔力どうしてる？」

収束しきれなかった魔力を垂れ流しにしていると答えると

「ああ。それじゃあ駄目だ。あれは右手に溜めた魔力の他に背中に魔力を溜めて爆発させて放つんだ」

簡単に説明するとこうだ。まず拳に魔力を溜める次に背中に魔力を溜めそれをブースターとして加速。更に放つと同時に背中の魔力が指向性を持ち威力を増加させるという原理の物らしい

「じゃあ、その魔力コントロールが出来れば使えるんですね」

「ああ、今のスバルのレベルなら十分に出来るだろう。後はコツさえ掴めば良い」

未完成だった技の完成が近づいた事に笑顔になる

「じゃあ、私ちょっと休憩したらそのコントロール練習をしてみます」

ティアナと訓練を交代するためにティアナの元に駆けて行くスバルの後姿に、思わず妹の姿を重ね笑みが零れてしまった

「次は私の番ですね？」

笑顔でデバイスを構えるティアナにかなり申し訳ない気持ちで一杯になる

「あのな。私は余り射撃の魔法が得意じゃなくてな、余りというか何も言えないと思うんだが」

「えっ！」

さっきからの笑顔とは逆にかなり落ち込んだ様子を見せるティアナに

「ああ、そんなに落ち込まないでくれ。得意じゃないとは言ったが使えないわけじゃないんだ」

「・・・本当ですか？」

少し元気を取り戻した様子に内心良かったと思いながら

「ああ、私は特殊なカートリッジを使う。射撃タイプなんだ」

「特殊なカートリッジ？」

聞きなれない言葉に聞き返すティアナに実物を見せながら説明する

「いいか。この六種類のカートリッジにはそれぞれ込められた魔力に別々の方向性を与えるという能力がある。まずはこれ」

ベレンにセットされていたカートリッジを取り手渡す

「それはバースト（炸裂）と言ってな対象に当たると魔力を放出する特性がある、次にショット（散弾）まぁこれはそのまま、撃った魔力弾に散弾の特性を付加するもの。次にボム（爆発）まあこれは他のと違って撃った所に敵が乗ると爆発するトラップだな。アクセル（加速）撃った魔力弾を急激に加速させる特性がある、次にブラスト（連撃）これはまぁマシンガンとかと考えてくれれば良いな。そして最後に・・・」

渡されたのは他の違い空の薬莢だった

「これも特殊な能力があるんですか？」

「ああ。とういうよりそれが全ての始まりだ、バーストもアクセルもそれを解析して作ったものだ」

「えっ！そうなんですか」

見た目、空の薬莢にそこまでの力があるとは思えない。

「ああ、これは聞くより見たほうが良いな。ベレン、ホープ（希望）をやるぞ」

『了解、でもあれ疲れるんだよなぁ』

デバイスに空の薬莢を込める

「込める弾丸は・・」

『願いの欠片」

これ・・確かあの時の

ガチャン、音を立ててシリンダーが回る

「放つ弾丸は希望の光・・響け!!シューティングソニック!!!」

ゴウッ!!放たれた弾丸はまるで流星のように光り輝きとても美しかった

「綺麗」

それはあの時の虹とは違うがそれでも心に残る輝きを持っていた

「これがホープだ、これはイメージで形作られるものでイメージが弱いと発動しない。・・話聞いてるか?」

「はっ!!聞いてますイメージなんですね」

思わずさっきの光に魅了されていたが、なんとか話は聞いていたので返事を返すことが出来た

「聞いてたのなら良いが、じゃあそのカートリッジは全部ティアナにプレゼントしよう。特に何も教えられないせめてものお詫びだ」

手渡されたカートリッジ思わず慌てる。こういう特注品はとても高

価な物なのだ

「そんな。こんなの貰えませんよ!!」

「んっ?私が使っていたのが気に入らんのか?それなら新品を持ってくるが?」

言いたい事を何も理解してない様子のダークネスだがそれよりも気になったのは

「えっ?これダークネスさんが使ってた物なんですか?」

「ああ、それは私が5年ほど使ってるものだが・・・やはり私が使っていたのが気に入らんかね?」

「いえ、これで良いです。有難うございます」

直ぐにカートリッジをポケットにしまう、このとき私の思考の中に高価だとか貴重だとかと言う言葉は無く、ダークネスが使っていたと言う言葉だけが繰り返し流れていた

「本当にそれで良いのか?なんなら新品を持ってくるぞ」

確認を取ってくるダークネスに

「いえ、これで良いです。大切にします」

「そうか・・それで良いなら良いが。私が教えられるのはそれの使い方ぐらいだが。今から実際に使ってみるか?」

「はい！！」

それから、一時間ほど渡されたカートリッジの使い方を教えて貰った

「さてと最後に言っておくがホープは一度きりだ、今のティアナでは負担が大きすぎる。いいかここぞという時かピンチの時しか使うなよ取り合えず、クロスミラージュ。ティアナが一発以上使いそうになったら止めてくれ、判ったな」

『お任せください。ダークネス様』

「よしと、これで訓練は終わりだな、時間もそろそろ昼だし昼食にするか。悪いがティアナ、スバルを連れてログハウスに来てくれ」

バリアジャケットを解除してログハウスに歩いて行くダークネスとは逆にスバルのいる方向に歩き始めたところで

「はっ！！こういう時って断るべきだったかな」

訓練に付き合って貰った上に昼食まで貰っては悪いような気がするが

「まぁ、ここで断るのも悪いわね」

考え事をしながらスバルと合流し。ログハウスに入ると

「ん？思ったより速かったな。もう少しで出来るから待っていてくれ」

フライパンを振るいながら、待ってるように言うダークネスに頷き、

席に座った

「ねぇ、ティアナ何か凄く緊張するんだけど」

同じく頷く、机の上にはかなり効果だと思われるお皿やフォークが並べられていた

「もしかして、ダークネスさんってお金持ちなのかな?」

なんだか落ち着かなくって辺りを見回すと黒い布が掛けられた写真立てがあった

「あれ?なんであの写真立て布が掛けられてるのかな?」

立ち上がり写真立ての方に行こうとするスバルに

「馬鹿、そういうのはかってに触ったら怒られるわよ。良いから座ってなさい!!」

「は〜い」

席に座りなおした所で

「待たせて悪いな、だが待ったぶんの価値はあると思うぞ」

料理を持ってダークネスが現れた。そして机の上並べられたのはパスタにサラダにスープに魚のフライだ

「「・・・・・・」」

一人でこれだけの料理を作った、ダークネスが何者なのか気になったが

「さてと、お腹が空いただろう?遠慮なく食べるといい」

ダークネスに食べるように進められ

「「頂きます」」

パスタを取り口に運ぶ

「「美味しい!!」」

それは今まで食べたどのパスタより美味しかった

「口に合い何よりだお代わりも在るからな。沢山食べてくれ」

食事はとても楽しかった、ただ普段と違うのはいつもはガツガツと食べるスバルが珍しくテーブルマナーを守りながら食べていた点だ

(やっぱり、スバルもダークネスさんの事が好きなのね)

いかに男勝りとは言えど好きな男の前で普段の様に食べることは出来ないようだ。食事が終わった所で

「お嬢さん方。まだお腹の方に余裕があるのならデザートを持ってきますが。どう致しますか?」

食べると言うのが判っていて尋ねているダークネスに食べると返事を返し、コーヒーを飲んでいると

「アイスクリームとケーキ?どちらが良いかな?」

キッチンの方から尋ねてくるダークネスに

「「アイスクリームでお願いします」」

二人分のアイスクリームを持って戻ってきたダークネスに

「あれ?ダークネスさんは食べないですか?」

渡されたアイスクリームを口に運びながら尋ねるスバルに

「私は甘いものが余り好きではなくてね、どちらかと言えば作る専門だな」

しばらく世間話をしていたがふと気付く。コーヒーを口に運ぶダークネスの右手にブレスレットが見える、それは良いがそのブレスレットは明らかに女物だ

「ダークネスさん、気を悪くしたら謝りますけど、そのブレスレットは女物ですよ」

スバルが気になってしまったのだろうダークネスに言うと

「知ってるよこれは私が妹の為に買ってきた物だ。だが気に入って貰えなかったみたいでね、要らないと付き返されてしまったんだよ」

その笑顔はとても悲しげな物だった

「そうなんですか・・あのすみませんがそのブレスレット見せてもらっても良いですか？」

かなり高価そうなブレスレット付き返されたという事を信じられなくて見せてくれるように頼むが

「悪いな、これは外すつもりが無いんだ。こうしていれば会えない妹が近くに居てくれるような気がしてな」

ブレスレットを上着の袖で隠してしまった、ダークネスはそれ以降口を開こうとしなかった。どうやらスバルはまた地雷を踏んでしまったらしい、しばらく無言の時が流れるが

「むっ！もうこんな時間か」

時計は午後の四時を指している

「そろそろ、帰ったほうがいいな、ちょっと待っててくれ。いまお土産を持ってくるから」

「そんな、悪いですよ」

お土産を用意しだすダークネスに

「何ケーキをだいぶ作りすぎてしまってね。もって行ってくれると助かるのだよ。私は甘いものを食べないからな」

そういって持って来たケーキはショート、チョコと二種類あった。しかし問題なのはその量だどう見てもホールケーキ３つ分位はある

「どうしてこんなに作ったんです？」

その量に圧倒されながら尋ねると

「私の親友の娘が１２人居るんだが。その娘達なら全部食べると思ったんだがやはり８ホールはきつかったらしい」

この人は８ホールもケーキを作ったのか、とういうか作りすぎではないのかとかは考えなかったのだろうか

「でも私達だけじゃこんなにもって帰れませんよ」

「ああ、それは大丈夫だ。私が二人を送っていくからな」

さらりと送っていくと言うダークネスに

「えっ！でもあの扉なら直ぐに帰れるんじゃ」

来た扉の事を話すが

「あれは出る場所が決まってるんだ。今の時間だと町外れの森の中か？」

なんでそんな中途半端な物をと思う

「試作中の転送装置だから仕方ないな、じゃあ行くとするか」

大量のケーキを持ってログハウスを出て、来た扉を潜るとそこはダークネスの言うとおりで森の中でした

「うむ、成功だな。ちゃんと森の中に出た」

成功と言うダークネスに

「これで成功なんですか？」

「うむ、まえは何も無い空の上に出てな。慌ててバリアジャッケットを身に纏った記憶がある」

「「・・・・・・」」

この人は意外と天然なのかも知れない。そう思った瞬間だった

「まぁ、バイクだし直ぐに着くだろう。ベヒーモスセットアップ」

直ぐ横にサイドカー付きのバイクが現れる

「えと、これもデバイスですか」

バイクを見ながら尋ねると

「ああ、これなら直ぐに着くぞ。だが一人はタンデムシートになる。嫌だと思うが其処は我慢してくれ

これはチャンスなのでは？危険だからという理由でダークネスに抱きつく事が出来る

「「じゃあ、私が・・・スバル？「ティア？」」

恐らく同じ事を考えていたのだろう

「私が後ろに乗るから、スバルがサイドカーに乗ったら？」

「いやいや、私が乗るからティアこそサイドカーに乗ったら？」

「「ウフフフフ」」

かなりのプレッシャーが発生しているが、ダークネスはそれに気付いていない。結局ジャンケンで決め、勝ったのはティアナでニコニコでダークネスの後ろに乗ったが。サイドカーにはダークネスが使っている毛布があり、寒いからという理由でスバルがその毛布にすっぽりと包まっていた、そっちの方が良かったかもと思ったティアナだった

ちなみに持って帰ったケーキ六課の女性陣で食べたが

「このケーキ何処かで食べた気がする・・・」

「なのはも？私も何だよ何処かで食べた気が・・・」

「なんや、二人共か？私もな。どっかで食べた気がするんよなぁ・・・」

六課の隊長陣がそのケーキを食べ何処で食べたんだろう？と考えている間にスバル達もそのケーキを食べ舌鼓を打っていた

第８話に続く

# 第8話

第8話

「ああ～また逃げられたぁ～」

飛び去る黒騎士を見ながらスバルが嘆く。彼女達は現在黒騎士のバインドで拘束されており動くことが出来ない

「また、駄目だったか・・・」

シグナムがスバル達の方に歩いてくるが彼女の騎士甲冑も破損しており、黒騎士と対峙した事がわかる、最初に黒騎士と遭遇してからこれで7回目の捕獲失敗である、ヴィータが降りてきた所で黒騎士のバインドが砕ける

「悪いな、計画通りこっちに来たと思ったんだけどな、幻術だった」

ヴィータが申し訳なさそうに言う、だがこれでもう一つ判ったことがる

「これで黒騎士の手は全部出させることが出来たんでしょうか?」

今回いや今までの捕獲作戦は黒騎士に手を出させることが目的だった、黒騎士はネクロには容赦の無い攻撃を繰り出すが何故か六課の面々には凍結魔法により動きの束縛やバインド、幻術を用いた行動ばかり取っている、どうやら黒騎士はネクロ以外は興味が無いようだ

「それにしても何で本気で攻撃してこないんでしょう?」

スバルと同じくフロントアタッカーのエリオが疑問を言う、今回は彼がもっとも黒騎士に攻撃をしたが防ぐか受け流すと言う防御行動しかとって居ない。黒騎士に疑問を感じたのだ、今まで何度か黒騎士とネクロの戦いは見ているが黒騎士のランクは軽く見積もってもＳＳ＋エリオ達なら行動不能にすること事など容易い筈なのに、それをやらない黒騎士には疑問が募るばかりだ

「考えることは、後でも出来る今は体を休めるようにしよう」

ヘリに乗り込み、この場から離れながらシグナムは

（あの時の技・・あれは龍刃衝だった・・やはり黒騎士は兄上なのか？）

黒騎士と対峙しそれでも飛び去ろうとする黒騎士に痺れ切らし、シュツルムファルケンを放ったが黒騎士もまた鞘と剣を一体化させ矢を放ってきた。それは間違いなく兄の技・・龍刃衝だった。威力はあちらが上だったのだろう、自分の矢はあっけなく砕かれ、逆に黒騎士の矢が直撃すると言う所で黒騎士は自分の矢を砕いた。まるで自分に怪我をさせないようにするための行動だった。

（もう少しだな・・）

その手にある箱には黒騎士の魔力を発散させるプログラムが組み込まれている。

（今回ので全ての黒騎士の情報が集まった、今度こそ正体を・・・・）

シグナムは内に闘志を燃やしながら六課へ向かって行った、次の日

「大変です！！またネクロの反応が出たです」

「またか・・」

最近連続してネクロが出現している、その度に黒騎士もまた姿を見せる為、遭遇する回数は多い

「よっしゃ！！機動六課出撃や！！」

空元気で主はやてが言う、黒騎士が現れるたびに自分から交渉しようとしているが。口を開かず姿を消す黒騎士の事でだいぶ参っているのだ

「よし、では行くぞ」

シグナムを先頭にヘリに乗り込んでいく、今回はなのはとフェイトも参加している

「いいか？いつも通り逃げ遅れた民間人の保護を最優先だ。ネクロに遭遇しても出来るだけ戦闘は避けろ。いいな」

現場上空でシグナムに念を押されてから降下する。確かに実力は上がってきているがネクロと戦うにはまだ力不足なのだ

「「「「了解」」」」

元気よく返事をして降下していく新人達を見ながら、なのは達も現

場に向かった

「今回はネクロはあっちかな？」

逃げ遅れた民間人の誘導をしながらスバルが呟く

「どうでしょう？ガジェットとネクロは協力体制にありますからね。よく判りませんね」

「きゅく！！」

頭の上に小さな竜をのせたキャロがスバルに答える、ネクロが出ればガジェットがガジェットが出ればネクロが出る。つまりなのは達の方にネクロが出ればこちらは必然的にガジェットと戦うことになるが

「残念みたいね、どうやらこっちがネクロ見たいね」

辺りを見回していたティアナから連絡が入る、そしてそれと同時にコンクリートから染み出るようにネクロが現れるその数およそ２０

「ちょっと、これはきついかもね・・・」

クロスミラージュを構えながらそう呟いた

「いい？これだけの数じゃ戦闘回避は無理だわ、私とキャロは援護するからスバルとエリオは前衛良いわね？」

指揮を出しながらなのは達に連絡を取ろうとするが

「やっぱり、通信は無理ね」

ノイズが走り連絡が取れない

「あんまり接近しないように気をつけて。じゃあ戦況開始！！」

この言葉と共にスバルとエリオが駆け出す。

「行くよ。相棒」

『了解しました相棒、ウィングロード展開します』

完成した道を駆けながらスバルがネクロに接近し攻撃を繰り出す。

それに続きエリオも

「ストラーダ、行くよ」

『了解』

槍型のデバイスを携えネクロに攻撃を当てていく

「キャロ！援護射撃行くわよ」

攻撃して隙が出来た所に飛び掛ってくるネクロを射撃魔法で飛ばしていく。なかなかに連携が取れているが

「くっ！また増えたわ。」

倒しても倒してもそれを上回る量で再び姿を現すネクロに舌打ちをしながら再び援護を続けるティアナとキャロを見ている。一つの影・・黒騎士だ、姿を隠しながら戦況を見ている

「このままでは不利だな・・なのは達は何をしている?」

目を閉じ一瞬エリアサーチを行う

「成る程、成長具合を見極めるつもりか・・」

自分とは逆方向に姿を隠しているなのは達の魔力の波長を感じ取る

「それとも、私が姿を見せるのを待っているのかうん?成る程あれをやるつもりか・・いいだろう見せてもらうとするかお前の答えを」

そう呟いた黒騎士が再び下を見ると其処には一度離れて魔力を収束しているスバルの姿があった

「このままじゃ不味いわ」

最初のほうこそ、その数を減らしたがいまは倒した量を遥かに上回る速さで増えており、スバルとエリオも下がって来ている

「ねぇ、まだ連絡取れないの?」

スバルが近づくネクロに蹴りを放ちながら確認を取るが

「まだ、無理みたい。・・・スバル危ない!!」

横からネクロが鋭い爪で襲ってくるが

「それには当たらない！！」

一瞬溜めの呼吸をして、ネクロの懐に飛び込み三連続で拳を放つ、
直撃を受けたネクロは苦しみながら消滅していく

「凄いですね、スバルさん、僕から見ても動きが鋭いですよ」

ストラーダでネクロに攻撃しながらエリオが賞賛の言葉を送る

「そんな事ないよ。ちょっと知り合いに教えて貰っただけだから」

拳を再び構えながら言う、

「でもちょっと・・・いやかなりヤバイよね」

ネクロは今もその数を増やしており、今は４０近い数になっている。
後ろから援護していたティアナが遂に痺れを切らしたのか

「スバル！！このままじゃ不味いわ、あれ出来る？」

「えっ！あれってあれだよね。出来るけど時間掛かるよ？」

訓練で何とか本来の威力まで上げることが出来たが。その代わり溜
めの時間が増えてしまったのだ

「大丈夫！少しくらいなら私達が時間を稼ぐわ。エリオ。キャロ。
今からスバルがこの状況を打破できる大技を使うわ。でもこれには

チャージの時間が要るの。今から一分スバル無しで持ち堪えるわよ！！！」

「「了解！！」」

ティアナ達から離れ意識を集中させる、カートリッジ無しでは何回か出来たが今回は全力で遣らなければならない

「ふっ！！行くよマッハキャリバー！！カートリッジロード！！」

『カートリッジロード』

三発の薬莢が飛び出し魔力を増加させる。それを何とか纏めようとするが

（ぐっ！！やっぱカートリッジ有りじゃまだ早かったか・・）

暴走するだけで全く纏まらない

（このままじゃ、ティア達が・・・）

自分を信じて時間稼ぎをしているティア達だが今の状況ではまだ溜めの時間が掛かる

（やっぱり・・私じゃダークネスさんみたいに成れないのか？）

一瞬気持ちが揺らいだとき

（何を言っている！！お前が私に護る盾が欲しいと言ったのはその程度の気持ちだったのか！！）

（!?ダークネスさん?」

此処に居る筈のない男の声が聞こえた気がした

（そうだ・・私は決めたんだ、ダークネスさんの様に護れるようになるって決めたんだ!!）

消えかけた闘志に再び火がつく、

「はあああああっ!!」

無理やり魔力を纏め上げ術式を完成させる

「皆退いて!!」

腰を深く落とす。そして背中に溜めた魔力を一気に開放し、ネクロ目掛けて加速し、右手に溜めた魔力を開放する

「ヘブンズ・・・
ナックル!!!!」

ゴウッ!!!!

限界まで溜めた魔力は凄まじい轟音を立てながら。ネクロを呑み込み消滅させた

「スバル、何時の間にあんな技を?」

ビルの上からスバル達を見ていたなのはが呟く、さっきの技はどう見てもＳＳいやＳＳＳランクは合っただろう

「なのは、お前あいつにあんな技教えたか？どう見てもあれは砲撃系だぞ」

同じく姿を隠していたヴィータが確認を取る、

「ううん、私は特に何も教えてないよ、ヴィータちゃんじゃないの？」

「馬鹿いうな、あたしは砲撃系と言うかミッド式は使えねえよ」

呆れ半分と言った様子でヴィータが言う

「まぁ、それは帰ってから。聞けばいいよ。取り合えずスバル達の合流しよう

「そうだね」

スバル達の方に行こうと飛行魔法を構築しようとしていると、スバルの背後からネクロが飛び出しその爪で引き裂こうとする

「危ない！！」

飛行魔法の構築を止め、即座に速射魔法を放とうとした時

ザンッ！！

「キィ・・・」

スバルを救ったのはなのは達ではなく全身黒の鎧を身に纏った騎士・
・黒騎士だった

私が気付いたときは既にネクロはスバルに襲いかかる直前だった。
私が警告をだそうとする前に黒騎士が現れた

「助けてくれた？」

スバルも信じられないといった様子で自分の前に立つ黒騎士を見て
いる

「気をつけろ、勝ったと思い気を抜いたその瞬間が一番危険だ」

それだけ言い残し去ろうとする黒騎士に

「待ってください、私達は時空管理局の者です。少しでいいので話
を聞かせてもらえませんか？」

「私はお前たちに話すことなど・・」

ジャラララララ！！！

音を立ててバインドが四方から襲い掛かり黒騎士を拘束した

「えっ！？」

目の目で起きた事に驚くと同時に私の前に４人の人影が降りてきた。

六課の隊長陣の登場だ

「外れん」

バインドを破壊しようとするが逆に力が抜けていく

（グラム、一体これはどういう事だ？）

（主、これは私の魔力の波長を分解する物質で出来ています。申し訳ありませんが私では振りほどくことが出来ません」

グラムと念話で話しているとと

「ようやく捕まえました。いい加減、話を聞いてくれたらどうですか？」

フェイトが話しかけてくるが

「・・・・・・」

無言で返事を返し、バインドを振り解こうとするがビクともしない

「無理だぜ、それはあんたの魔力を分解するように出来てる。いくら黒騎士といえどそれは破壊できねえよ」

グラーフアイゼンを担ぎながら近づいてくるヴィータ

「それとも仮面を外さないと話すつもりは無いっていうつもりですか？黒騎士・・・いえ龍也さん」

「・・・・！？」

内心同様する、だがここで仮面を外されたら終わりだ。横目でスバル達を見るこの展開に付いていけないのかぼんやりしている

（バレルかもしれんが、ここは此処から離れるのが先だな・・ベレンセットアップの準備だ）

（了解。でもすこし時間掛かるぜ、その間どうするつもりだ）

（何とか、時間を稼いで見る。お前は甲冑の再構築を頼む）

ベレンに指示を出し私は賭けに出た

「龍也？それは一体何方の方かな？私は黒騎士だが？」

「冗談は止めて置くといい、今までお前の技を解析してきたがどれも兄上の物だ。それでも白を切るつもりですか？兄上」

「ちょっと待ってください。隊長達は黒騎士の正体に見当が付いてるって言うんですか？」

さっきまでフリーズしていた、ティアナが再起動してなのはに詰め寄る

「うん、言ってなかったけど、最初に遭遇してからもしかしたらって思ってたんだけど。黒騎士は八神龍也。はやてちゃんのお兄さんの可能性がある」

「えっ？どういう意味ですか？部隊長にお兄さんが居るなんて聞いてないですよ」

スバルが聞いたことの無い事の確認をしようとなのはに近寄り、私から視線が外れる。今だ！！

「ベレン、セットアップ！！」

騎士甲冑が一瞬で解除され、変わりに黒のライダースーツと爬虫類を思わす仮面が現れる、だがこれではバインドから脱することは出来ない更に

「ベレン、モードフォールダウン」

背中に一対の翼と巨大な銃が現れる。これがベレンの持つ最強形態で魔力を大幅に増加させ更にSランク以下の魔法は無効化する能力を持つが体に掛かる負担が大きく約１０分ほどしかこの形態を維持できないという欠点を持つ。現れた翼でバインドを引きちぎり飛び上がるが

「えっ？今ベレンって？」

スバルとティアナの顔が驚愕に染まる。どうやら正体に気付いてしまったようだ。だがここは逃げるのが先決だ

呆然としている内に逃げるとしよう、背中に生えた翼で飛び去ろうとするが

「！？」

見てしまう。呆然としている、フェイトの影からネクロが飛び出すのを私は考えるより先にフラッシュムーブを使い

「じゃまだぁ。そこを退けフェイト！！」

「えっ！？」

まだ呆然としていたフェイトを突き飛ばし変わりに自分がネクロの攻撃を受ける

ピキ！！

静かだが確かに仮面に皹が入った音がするがそれを無視し、ネクロに銃口を向け

「ヘルズブリンガー！！！」

連続で魔力弾を打ち込む。そして声を挙げる間もなくネクロは消滅しただが

ピキピキッ！！ガチャン！！！

仮面が砕け素顔が明かされてしまう

「兄貴・・」

運悪く私の正面にはヴィータが居た。ヴィータの顔は驚きと驚愕に染まっていた

「クッ！！」

右手で顔を隠し飛び去ろうとする

「待てよ！！待ってくれよ！！！」

ヴィータが追ってくるが速さでは此方が上だ追いつくことは出来ない

「兄貴、兄貴なんだろ？何で！何で！！逃げるんだよ！！！」

悲痛な声だ。思わず立ち止まりそうになるがそれを押さえ飛び去る

「何で逃げるんだよ。兄貴ィィィッ！！！！」

ヴィータの嗚咽交じりの叫びを聞きながら私はこの場から消えた。

「ううっ、兄貴何で？何で逃げるんだよ」

膝から崩れ落ち涙を流す。さっきのは間違いないあれは兄貴だ。右目の傷はにあの優しい瞳は間違いない

「ヴィータちゃん。顔を見たの？」

なのはがハンカチを此方に向けながら尋ねる

「ああ。間違いねぇ黒騎士は兄貴だ。８年前の傷が合った」

あの傷は間違い無いあの時の物だ

「ヴィータ、間違いないのだな？」

シグナムも確認に来る

「あたしが兄貴を見違えるわけはねぇ。間違いねぇ１００％断言できる。黒騎士はあたし達の兄貴八神龍也だ」

「えっと。状況が今一掴めないんですが」

スバルが遠慮がちに尋ねてくる。もうこれ以上隠すことは出来ないと判断して

「帰ったら全てを話す、帰還したらブリーフィングルームに集まってくれ」

今までに無い暗い雰囲気で六課に向かう、空からは雨が降り始めていた

第９話に続く

## 第9話（前書き）

今回この小説の主人公のプロフィールが出ます、もしも他の作家さんでこのキャラを使いたいという方が居ましたら。ぜひ一声お願いします。他の作家さんに使って貰う事で更なる飛躍が有ると思いますので。よろしくお願いします

# 第9話

第9話

「よう集まってくれたな。出撃の後で疲れとる思うけど少し我慢したてや」

ブリーフィングルームのにはフォワード陣と隊長陣の姿がある

「今まで隠しとったのは謝るけど。私達は黒騎士の正体に大体見当がついとったんや」

「どうして、その事を隠してたんですか?もし正体が判ってるなら探せば見つかったかもしれないのに」

エリオが尋ねると

「それがな、見当はついとってもなその肝心の姿が判らへんかったんや」

「どういう意味ですか?」

見当は付いてるのに姿がわからないという謎賭けのような言葉に聞き返すと

「今から8年前に起きた魔導師襲撃事件の最後の被害者・・八神龍也。私のな。兄ちゃんや、でな黒騎士の技や戦い方を分析するとな一つの結果に辿りつくんや。それは98%の確立で黒騎士と八神龍也が同一人物ちゅうことや」

「でも被害者という事は既に亡くなっているんじゃ？」

その言葉に首を横に振る

「兄ちゃんは確かに襲撃を受けたでもな死体がないんや。あったのは砕けたデバイスの破片と血痕だけ。つまり死亡が確認されてない行方不明扱いなんや。で今日ヴィータが素顔を見たらそれは間違いなく兄ちゃんの顔やった。そうやろヴィータ？」

頷くヴィータは帰ってきたから一言も口にしていない。目の前で居なくなった兄かも知れない人物を逃してしまったことを気にしているのだ。

「でも、もし部隊長のお兄さんならどうして姿を隠すんですか？」

キャロがそう尋ねると、表情が歪むはやて、何か後悔しているようなそんな顔だ

「それはな多分私の所為なんや・・いまから8年前な兄ちゃんが行方不明なる前の日や。兄ちゃんがな私にプレゼントを買ってきてくれたんや、それはな綺麗なブレスレットやった。でもな私はそれが無性に気にいらへんかったんや。私は折角買ってきてくれたブレスレットを兄ちゃんに投げつけて。こんなもん要らん兄ちゃんなんか大嫌いやって言ったんや」

はやての声は徐々に鼻声になっていた

「でな。兄ちゃんが行方不明なった日、私はな仕事に出る兄ちゃんに帰ってくんなって言った。その日から本当に兄ちゃんは帰ってこ

なくなった。きっと・・私があんな事・・・言ったからや・・私は酷いことを言った・・・いつも私のために近くにおってくれた兄ちゃんに・・足が動かなかった私を連れて遊びに行ってくれた・・兄ちゃんに。私に友達を作ってくれた兄ちゃんに酷いことを言った・・兄ちゃんが出て来てくれんのはきっと私の所為や私が大嫌いなんて言ったからや」

遂には泣き出してしまったはやてはシャマルに連れられてブリーフィングルームから出て行った

「すまんな、主はやては兄上に言ってしまった事を今でも気にしておられる。もしでいい街に出たとき右目に切り傷を持つ黒髪の男が居たら、連絡をくれ兄上は襲撃を受けたとき右目を失っておられるのだ」

今の特徴を聞き解散になったがスバルとティアナだけはブリーフィングルームに残っていた

「ねぇ、ティア、ダークネスさんは右目が無かったよね？」

「ええ。確か妹がいるとも言ってたわね」

今日新たに知った八神龍也に関する情報と自分達が知るダークネスは共通点が多すぎる

「私はダークネスさんが八神龍也だと思う、スバルは？」

「私もだよ、これは確かめないといけないよね？」

「明日。訓練が終わったらダークネスさんの所に行って見よう。そ

れで話を聞きましょう」

二人がダークネスの所に行くと決めた次の日

「ダークネスさん居ますか？」

「馬鹿！声かけてどうすんのよ！」

ダークネスの家に忍び込むスバルとティアナ、家の明かりは消されており今は居ないのかもしれない、それなら好都合と忍び込んだが

「それより、あの写真よ。確かあれは家族と撮ったって言ってたよね」

気配を殺しながら家の中に入っていく。そして目的の写真を見つける

「ダークネスさん、御免なさい」

謝ってから布を外す、そこには幼い頃のはやて達に囲まれて困ったような笑い顔を浮かべているダークネスの姿があった

「誰だ！！」

隣の部屋からデバイスを構えてダークネスが現れた、だがスバル達が写真を見ているのに気付くと

「見たのか？」

「悪いとは思いましたが見せてもらいました。ダークネスさん・・・

いえ八神龍也さんですね」

もう隠す気が無いのか

「ああ、私が八神龍也だ。で此処に来たのは何が目的だ？」

疲れた様子で問いかける龍也に

「私達が聞きたいのは一つだけです。どうして姿を見せないですか？部隊長達が凄く心配していましたよ」

「私は戻ることは出来んよ。砕けた剣では共に居ることはできん。だから護せめて護るくらいはしてやろうとに黒騎士として姿を現したんだ」

「それで本当に護れてるって言えるんですか？」

さっきまで無言だったスバルが口を開く

「なんだと？」

「部隊長は泣いてましたよ。自分が酷いことを言ったから姿を見せてくれないって昨日泣いてました」

「はやてが泣いていただと？」

はやては泣かなかった、そのはやてが泣いているという事実は龍也に衝撃を与えた

「確かに体は護れているかもしれません。しかしそれでは肝心の心

が護れてないんじゃないですか？」

「！？」

スバルの言うとおりだ、悲しませて何が護っているだ

「私は間違っていたのか？」

「それは違います、貴方が護ろうという気持ちは間違いでは無いと思います。ですが本当に護るなら姿を見せて上げて下さい」

その言葉に私は迷った

（私ははやての前に行ってもいいのだろうか。悲しませて心配させた私が）

キラッ！！左手の指につけた指輪が光る、これはもう砕けコアだけになったガーディアンズハートを残しておきたいと思いジェイルに頼み製作したものだ、砕けたコアから柔らかい光が放たれる。それはまるで行けと背中を押してくれているような気がした。

（そうだ、何を私は迷ってる。答えはもう出てるじゃないか）

「「龍也さん？」」

黙り込んだ私を心配して此方を見るスバルとティアナを思いっきり抱きしめる

「「龍也さん！？」」

いきなり抱きしめられた二人は驚きの声を挙げるが、抱きしめる力を緩めない

「有難う。本当に有難う。私の本当の気持ちに気付いた。この借りは必ず返す。ではなまた合おう」

言うだけ行って家から出て行った龍也の家に残されたのは、脳の処理を完全にオーバーして真っ赤になって気絶したスバルとティアナだったちなみに彼女らが再起動したのは二時間後の事だった

「はやて、大丈夫か？」

隣を歩くヴィータが心配そうに尋ねる。はやてには酷い隈が出来ており足取りも少々心許ない

「大丈夫やで、確り休めば明日からは元通りやで」

笑うがその笑顔には力が無い、無理に笑っているようにしか見えない

今はやて達は久しぶりにベルカ自治区の家に向かっていた、はやての様子を心配したグリフィスが無理に予定を明け家に帰る様にしたのだ

「はやてちゃん、本当に大丈夫ですか？」

「大丈夫、大丈夫、有難なリィン」

笑うがその様子はとても大丈夫には見えない。はやてはここ三日殆ど寝ていない、いや眠っても直ぐに飛び起きそして泣くのだ

自分の所為だ、自分の所為で兄ちゃんが居なくなったと繰り返し呟き、眠りに落ちては飛び起きるそんな日の繰り返しだ

（このままでは体を壊してしまう・・・兄上どうして姿を見せてくれないのですか？」

もう少しで家だと言う所で気付く

「ヴィータ、シャマル主の前へ」

頷きはやての前に立つヴィータとシャマル。二人も気付いたのだ、家の前に誰か居る

「どないしたん？」

主はやては気付いていない、いや普段なら気付いていただろうが今の不安定な状態では気付けないだろう

「お気をつけください、誰か居ます。それも凄腕の魔導師」

可也離れているが判る。修羅場を潜り抜けている我等でも冷や汗が出るような威圧感を放っている

ガチャン！！ガチャン！！！

闇の中を音を立てて此方に歩いてくる、緊迫感が辺りを包む。そしてようやく確認できたその姿は

「黒騎士・・・」

漆黒の鎧に身を包んだ黒騎士の姿だった

（酷い顔だな・・・）

龍也に罪悪感が広がる。はやてには酷い隈が出来ている禄に睡眠を取れていない証拠だ

（こんなになるまで私は・・何よりも護りたかった者なのに）

シグナム達も完全に停止している、

「「・・・・・・・・」」

お互いに沈黙の時が流れるが意を決して口を開く

「私は間違っていたのだろうな。砕けた剣では共に居ることはできないと決めつけ。一人でいた、だがそれは違っていたある人達が教えてくれた、本当に大切に思っているなら共に居るべきだと・・・今更どんな顔を下げて現れたと思うかもしれんが・・・」

騎士甲冑が解除される、そこに居たのは黒の服に身を包んだ隻眼の長髪の男

「ただいま。はやて」

「ほんまに兄ちゃんか？」

頷く兄ちゃん、だいぶ背が伸びているが変わっていないあの優しい

瞳は。気がついたら私は兄ちゃんに抱きついていた

「ほんまもんや、本当に兄ちゃん何やな？」

「ああ、今まで本当すまなかった、私は悪い兄さんだな」

自嘲気味に言う兄ちゃんに

「違う、悪かったのは私や、いつも私の事心配してくれたのに、嫌いなんていった私が悪いんや。御免なさい・・ずっと謝りたかった。嫌いなんて嘘や私は兄ちゃんが大好きやで」

本格的に泣き出してしまったはやての背を撫で、宥める

「兄上」

「兄貴」

「お兄さん

「お兄様」

シグナム達もこっちに来る

「お前たちにも心配かけて悪かったな・・おい」

シグナム達も抱きついてくる。ヴィータとリィンは泣き顔で抱きついているがシグナムとシャマルは顔が真っ赤になっている

「やれやれ・・これが私への罰かな・・・」

暫くあのままだったが今は家の中に居るが

「いい加減離れてくれないか？」

「嫌だ」

「嫌や」

「嫌です」

シグナムとシャマルは離れてくれたがリィン、ヴィータ、はやては依然抱きついたままだ。いくらソファーでもこの人数ではきついと思う

「なぁ、いい加減離れてくれんか。流石に腕が痺れてきた」

いやいやと言った様子だが離れてくれたが、両隣に座りそれ以上は離れる気が無いようだ。

「さてと・・此処からは真剣な話だ。はやて私はまだ管理局に席はあるか？」

「あるで、行方不明扱いやけど。一応管理局に席があるで」

その事実に笑みが零れる、最悪試験からやり直さないといけないかと思っていたからだ

「それは好都合、はやてリンディさんに連絡を取って置いてくれ。

明日から八神龍也は機動六課に入るとな」

「兄貴!!また一緒に戦えるのか?」

ヴィータが嬉しそうに言うが近いため流石に耳が痛い

「ああ、その為に戻ってきたんだ。所で気になっていたのだがザフィーラは?」

何かを思い出したように手を叩くはやて達

「確か私達を家に帰すために残って仕事してるはずや」

今の今まで存在が忘れられていたザフィーラが哀れに思えた

「はやてちゃ~ん、お風呂入りましたよ~」

風呂場のほうからシャマルの声が聞こえる

「じゃあ。風呂に行って来い。私は夕食の準備でもしていよう」

立ち上がりキッチンの歩いて行くと

「リィンが手伝うですよ~」

ニコニコと笑いながら着いて来る、リィンと共に夕食を作っている

間にはやて達が風呂全員入り終わる頃には全ての料理が出来ていた

「兄ちゃん・・やり過ぎって思わへんかった?」

「そうか？これ位なら全員で食べれないか？」

机の上には魚のムニエル、パスタ、シチュー、サラダ、と明らかに作りすぎな位料理が並べらていた

「まぁ、ええわ。久しぶりの兄ちゃんの料理や、お腹一杯食べさせてもらうわ。ほな皆で」

「「「「「頂きます」」」」」

「旨い！！兄貴また料理が上手になったんじゃないのか？」

ヴィータが凄まじい速さで料理を食べながら言う

「そりゃな。８年だぞ８年それだけあれば腕も上がるさ・・リィン口が汚れてるぞ」

ナプキンでリィンの口を拭いてやる

「えへへ～有難うです～」

嬉しそうに微笑み食事を続ける、リィンを見ていると自然に笑みが零れる

「所で気になってたんですけど。お兄さん腕は大丈夫だったんですか？」

「うん？これかこれは義手だぞ。ほら」

左腕を外してシャマルに見せる

「兄ちゃん流石に食事中にそれは無しや・・」

心なしか顔色の悪いはやてに促され腕を戻し食事を続けた。それはとても和やかで楽しいものだった

「兄上、あの後どうやって助かったのですか？」

食事が終わり食後のデザートのアイスを食べているとシグナムが尋ねてきた

「あの後か・・ガーディアンズハートがな転移であの場所から逃がしてくれてな。辿り着いたのは何処かの遺跡だった、どうやら其処はアルハザードの技術の一部があったんだろう。そこでまだ動いていた機械兵士に傷の治癒を受けて、目を覚ましたのはあの襲撃から一週間後か。そこで私はグラムとベレンを見つけ、リハビリをしていた」

待機状態の指輪とカードを机の上に置く

『始めまして、はやて様私がグラムです」

丁寧な口調のグラムと

『宜しくな、綺麗な譲ちゃん。俺様がベレンだぜ」

乱暴な口調のベレンに自己紹介を受ける

「まぁ、ベレンは口は悪いが能力は確かだぞ。さてとそろそろ寝た

ほうが良いだろう。はやて私の部屋はあのままかね」

「大丈夫やで、兄ちゃんの部屋はちゃんと掃除もしてあるで」

胸を張って言うはやての頭に手を置き

「すまんな、わざわざ掃除までしてもらってな。本当にはやては私には勿体無い位いい妹だよ」

「そんなこと無いで？兄ちゃんは最高に兄ちゃんやよな」

シグナム達が頷くが私はそれの苦笑しながら

「買いかぶりだよ、８年も家を空けていて、いい兄なんて柄じゃないさ」

「むう、そんな事言ったらあかんで・・あれ？そのブレスレット」

はやてが右手のブレスレットに気付く

「これか？これはあの時のやつだよ」

ブレスレットを外しはやての目の前に持っていく

「なぁ、兄ちゃんこれ貰ってもいい？」

「これをか？だがこれは気に入らなかったんじゃ」

「そんなことないで、それとも渡したくない？」

「いや、これはもともとお前に買ってきたものだ。欲しいならあげるよ」

ブレスレットを手渡し、私は部屋に戻って行き眠りに落ちた、寝ている間に誰かが入ってきた様な気がしたが、疲れていたのでそのまま起きる事眠っていた

第１０話に続く

オリキャラ紹介

八神龍也２３歳

身長１９０ｃｍ

体重６５Ｋｇ

襲撃の後行方不明になっていたはやての従兄弟、襲撃の際に左腕と右目を失っている。
腕のほうはジェイル作の義手を装備しているが目はそのままである。
髪を腰元まで伸ばし常に黒のコートを愛用しており。魔力量は８年前から大幅に増加しＳＳＳ＋になっている
また料理の腕は更に上達しておりそこいらコックには負けない腕を持つ、
また謎特技を色々習得しており、何故こんな事が出来る？といった特技が多い（例垂直壁上がりや投げナイフなど）本人は便利だと思っている、戦闘では隻眼というハンデを感じさせない程強く、無敵といわれるほど高い能力を有し最強の魔道師と言われている。
隻眼の所為で目付きが悪く見えるが性格は温厚で基本人に優しく、

困っている人を見捨てたりはしない。
恋愛に対しては素通り（ザル）であり人の好意に気付かない（本人は隻眼隻腕の男を好きになる物好きは居ないと考えている）　またはやてのブラコンを如何にか出来ないかと考えているが具体的な解決策は今だ見つかっていない、はやて曰く「兄離れ？ええよ別にしても。その代わりそうなったら女として兄ちゃんに迫るけどな！！！」と黒い笑みで言われたので現状維持である、本人は真剣にはやての将来を心配している、更に8年の間にヴィータにはやてのブラコンが伝染しており本気で如何しようか考えている。士郎に嵌められ過去に何故かお見合いさせられたことがある、相手は勿論なのはである。その際ははやて乱入でお流れに成った（後にリンディに士郎同様嵌められフェイトとお見合いをした事が有る、この時はヴィータが乱入した）この時からシスコンコンビに狙われ始めていた（後に二人が結託していることを知り、絶望した）また全く関係ないがジェイルがナンバーズの誰かと結婚させようとしており、その度ボコボコにされた所為か人外の回復力を取得している。良いも悪いも人を惹き付ける魅力を持っている本作の主人公である

# 第１０話

第１０話

「むぅ、どうしたものか・・・」

今私は身動きが取れない状態だった

「昨日部屋に入ってきた気配の正体はこれか・・・」

布団を捲る

「「すぅーすぅー」」

気持ち良さそうに寝息を立てる、はやて、ヴィータ。リィン、はやてとヴィータには両サイドから抱きしめられおり動くことは愚か、腕を上げることさえ出来ない、リィンはその小柄の体型を生かしてはやてと私の間で眠っている

「起こすのも、可哀想だしな・・・このまま起きるのを待つしかないか・・」

動くことも出来ないので、もう一寝入りしようかと思っていると

「兄上、失礼します」

ノックと共にシグナムが入ってきた

「どうした？なにか起きたのか？」

「はい、街中にネクロが出現しました、いまテスタロッサと高町が現場に向かってますが、二人では危険かと」

どうした物かと考える、なのは達でもネクロを倒すことは可能だ、だが二人でも倒さない量となると

「私が出るのが一番いいだろうな」

グラムとベレンにはアンチネクロのプログラムがある、私が楽に倒すことが出来ていたのはこれの力が大きい

「兄ちゃん、はよ助けに行ったって」

今まで眠っていたはやてが眼を擦りながら言う、どうやらシグナムが入ってきたときに起きたようだ

「主、居ないと思ったらどうして兄上の部屋に居られるのですか？」

どうやらはやての事を探していたのだろう、多少疲れた様子のシグナム

「いやな、夜起きてもうてな、また兄ちゃんが居なくなるんじゃないかと思うと怖くてな。ついつい来てもうたんや」

はやての言うことは最もだ、８年も行方不明の男が突然帰ってきたのだ。また居なくなるかもしれないという不安を持つのは当然だ

「いや・・まぁこれは私が悪いか、すまんが手を離してくれ。速く行かないと危険なんだろう。」

ようやく手を離してくれたはやて、ちなみにヴィータは起きなかったので手の力が緩んだ一瞬で腕を引き抜いた、ベッドの横に掛けてあるコートを掴み体に巻きつける、次の瞬間にはパジャマから普段の黒の服に代わっていた、パジャマは綺麗に畳まれベッドの横の机の上に置かれている。目の前で起きた事に目が点になるはやてとシグナムだが、これは龍也にとっては普通のことなのだ

「良し、では行って来る」

何事も無いように部屋から出て行こうとする龍也に

「ちょ、ちょい待ち。兄ちゃん今何したんや？」

「何って何だ？」

部屋から出ようとしていたのに呼び止められ振り向くと

「ほら、一瞬で着替えたやん。今のは？」

「ああ、あれかあれはマジックの応用だ、見たことあるだろ。マジックで人を着替えさせるやつ。であれを使えるようになったんだが」

一体何を考えてあれを使おうと思ったのか、というより何故あんな事が出来るように成っているのか。いろいろ聞きたいことはあったが

「では、今度こそ行って来る」

いまはそんな事を聞いてる時間は無いと思い。部屋から出て行く龍也に

「行ってらっしゃい、怪我せんでね」

見送りの言葉を送り、はやて達も六課に向かって行った

「ねぇ、まだ味方はまだ来ないの？」

迫ってくるネクロにアクセルシューターを打ちながら尋ねる

「いま、はやてから連絡が合ったよ。最高に頼りに成る味方が行ったて、でもなんか手を出すなって言ってたけど？」

はやてからの連絡に合った手を出すなと言う所に疑問を感じながらもバルディッシュのハーケンフォームを振るって応戦している

魔法を放ちながら違和感を感じる、ネクロは普通闇雲の暴れるだけだが、今回ネクロはいつもと違い統制が取れた動きを取っている

「ねぇ、フェイトちゃん。もしかしたらＬＶ２が居るとかは無いよね？」

ネクロはレベルで呼称される。いま戦ってるのは影のようなＬＶ１だが。報告ではより人型に近いＬＶ２が居るという事は聞いている。またＬＶ２は思考も人に近いらしく、指揮官としての役割を持っているらしい

「その可能性はあるね。今日のネクロの動きには統制がある。何処かでＬＶ２が居るかも」

ＬＶ２の戦闘の記録は無いがＬＶ１より弱い事は無いだろう

「大技でネクロを倒してから、サーチを掛けてみよう。レイジングハート行くよ」

『イエス、マイマスター』

レイジングハートの杖先に魔力が溜まり必殺の砲撃を放つところで

「！？」

殺気を感じ体を反転させる、それと同時に此方目掛けて振り下ろされる剣、後数秒気付くのが遅かったら斬り付けられていただろう。
そして剣を持っていたのは・・・」

「ＬＶ２・・・」

驚愕と共に呟く、趣味の悪い赤黒い鎧に髑髏のような兜

「驚きダヨ、今のは完全に捕らえたと思ったノニ」

耳障りな声

「まぁ、それでないと詰まらなイ、折角出てきたんダカラ。」

ボロボロのマントを羽織った騎士の姿

「僕は、ＬＶ２．消滅のイレイサー。さあ始めようカ？」

レイジングハートを構えるが

「ああ、それでは駄目だヨ、魔導師」

姿が消えるそして

「ほら、隙だらけダ」

「なのは、危ない！！」

フェイトの声で振り返るそして、強烈な上からの攻撃を受け。私は落下して行った

ああ。前にもこんな事があった

落ちながら思う、あの時はあの人が助けてくれたでも、今は違うあの人は居なくなってしまった。フェイトちゃんがこっちに向かうのが見えるが間に合わないだろう。私は来るべき衝撃に備えて目を閉じた

ドサ！！

余りに軽い衝撃だ、恐る恐る目を開ける。誰かに空中で抱きとめられているのが判る。そしてその人の顔を見る。そしてその顔に驚ろきながら呟いた

「・・・龍・・・也さん？」

「すまんな。遅れたが助けに来た」

それは行方不明になっていた、想い人の八神龍也だった

「これは、これはまさか人間が態々、殺されにくるとは面白いものも居ましたネ」

イレイサーが嘲る様に言うが

「それはこっちの台詞だよ、臆病者のイレイサー。確かお前は他のＬＶ２を盾に逃げ出したよな」

此方も馬鹿にするように言う、なのはは既に下ろされフェイトと共に私とイレイサーの会話を聞いている

「僕の事を知ってル、お前何者ダ」

イレイサーが苛つきを持って言う

「さぁな。グラムセットアップ！！！」

光が集まり、弾けるそして其処に立っていたのは黒騎士だった

「「！？！？！？」」

驚いているなのはとフェイトが見える、此処に居るということは黒騎士と私は別人かとでも思っていたのだろう

「ば、ばかな、何故貴様が此処にイル。黒騎士」

「黒騎士？違うな、私は」

ピキピキと音を立てて鎧に皹が入る

「私は間違いを犯した、だが今は違う」

力強い言葉と共に鎧の皹が大きくなっていく

「私はもう迷わん、前を見ると誓った。私は・・私は・・夜天の守護者。八神龍也だぁぁぁ！！！」

重厚だった黒い鎧は砕け、体を蒼の服が包み込む。それと同時に砕けた鎧が再構築され胸部と両肩、そして篭手と脚を覆う僅かな物になる。そして右手に持った蒼い刀身を持つ剣と美しい装飾が施された蒼い盾・・ここに真なる意味で夜天の守護者・・八神龍也は目覚めた

「生きてた、生きたよ、なのは」

涙を流しながらフェイトが言う

「うん。生きてたやっぱり生きてたんだよ。龍也さんは」

私の頬を伝う物がある、私も泣いてる事に気付いた、目は確かに失っているだがあの力強い瞳の光は失われていない。そして何よりあの神々しいまでの蒼い魔力光、懐かしくて嬉しくて涙が出る

「さぁ、始めようかイレイサー？貴様が生きて帰りたいなら私を倒すしかないな。まぁ私が負けるなどありえんがな」

馬鹿にするように言う龍也に怒り心頭と行った様子で

「舐めるなヨ、僕は強いんダ」

向かってく来ると思ったら

「行け！！！やつを捕らえろ」

後方に下がりＬＶ１のネクロに指示を出し。それと同時にネクロが飛び掛ってくるが

「蒼龍一閃、二の型」

剣に手を翳すと剣が蛇腹状になりそれを大きく円を描くように振り回す

「蒼雷！！！」

ズガンズガンと凄まじい音を立てて稲妻と共に剣が伸びる。そして稲妻が消えると同時にあれ程大量に居たネクロは全て跡形も無く消えていた

「ば、馬鹿ナ、５０居たんだゾ、それを一撃でだト」

驚愕と言った様子のイレイサーに

「次は貴様の番だ、覚悟しろ」

元の形に戻した剣を構え向かって行った

キン！

お互いの剣が音を立ててぶつかり合うが龍也の一撃の方が思いのだろう、イレイサーの剣は押され義気だ

「クッ、在り得なイ、お前の剣はこんなに重くなかっタ」

剣を弾き、体制を立て直すイレイサーに再び突撃を掛ける龍也

「可笑しいなどと、よく言うな、私は守護者護るべきものがあればいくらでも強くなれる」

袈裟、突きと連激で剣を振るうその一撃は徐々にイレイサーに傷を負わしていく

「クッ、これでも食らえ」

目からネクロ特有の光線を放つが、首を傾げ回避する

「遅いな、遅すぎる。そんなものが私に当たると思っているのか？」

挑発をしながら、返しの一撃で深い傷を与える

「僕が死ぬなんテ、在り得なイ、頼む誰か誰か助けに来てくレ」

恐らく仲間に連絡を取ろうとしているのだろうか

「無駄だな、クラナガンの貴様らの基地は全て潰した。助けに来れるものなど存在しない」

「いくラ、お前でモ。そんな事が「出来るわけ無いと言いたいか、だがこれが事実だ消えろイレイサー」あッ・・・」

頭から真っ二つにされ消滅していくイレイサーが完全に消えて行くのを確認してから、なのは達の下に歩いて行った

「久しぶりになるのか？何回か黒騎士の姿で会っているからなんとも言えんが・・」

騎士甲冑を解除してから、二人の前に立つ。二人もバリアジャケットを解除している。

「いろいろ聞きたいことはありますが、まずはこれだけ言わしてもらいます」

「「お帰りなさい！！」」

二人揃って言われ驚くが

「あ、ああ。ただいまで良いのか？なんて言えばいいんだ？」

なんと言えば良いのか判らず慌てていると二人はクスクスと笑い始めた

「なんで笑う？」

尋ねると二人はなお、笑いながら

「いえ、龍也は変わってないな～って思っただけですよ」

「フェイトちゃんの言うとおりです、変わってないですね」

二人に笑われ何とも言えず困っていると、通信が入る

「高町教導員、ハラオウン執行官。聞こえますか？いまから迎えに

行きますんで悪いんですけど、そのまま待って貰えますか？」

通信機から若い男の声が聞こえる

「そうか・・迎えが来るなら私は先に戻っていよう、ベヒーモスセットアップ！！」

ベヒーモスが横に現れそれに乗ろうとすると

「ああ、ヴァイスさん。悪いんですけど戻る手が合ったので、迎えは良いですよ」

「んあ、そうですか？なんせ部隊長に叩き起こされたモンで、まだ眠かったんですわ。すいませんがお言葉に甘えさせてもらいます」

通信が切れると同時にこっちを見る二人、なんだ、何が言いたい？

チラリチラリとバイクを横目で見ておりそれで気付く

「ああ。バイクに乗りたいのか？ちょっと待てよ。ベヒーモスモード？に移行してくれ」

『了解しました、マスター』

一瞬姿が消えサイドカーが現れる

「良し、これで良いだろ、見ての通りで悪いが一人はタンデムシートになる。どっちが乗るか決めてくれ」

「なのは「フェイトちゃん」私が乗るよ」

二人同時に言う、可笑しいなこれと同じようなものを何処かで見たような?ちなみにその頃スバルとティアナは同時にくしゃみをしていた

「ジャンケンポン」

「あいこでしょ」

「あいこでしょ」

「あいこでしょ」

「やったー!!」

「負けた・・・」

見るからに負けて落ち込んでいるフェイト、可笑しいな普通タンデムシートに乗るのは嫌じゃないのか?見当違いの事を考えている龍也を尻目に渋々タンデムシートに乗るフェイトに

「ああ、さすがに朝早いからな。私ので悪いがサイドカー後ろに毛布が在るから。それを着るといい」

今までの暗い表情から一転して嬉しそうな顔をして、サイドカーの後ろから毛布を取り出し包まるフェイト。なのははこっちのほうが良かったかな?と呟いていた

「ほら、なのははこれ被れよ」

ヘルメットを渡し、私がバイクに乗ると同時にしがみついて来る。

なのは喜色満面と言った様子で凄く嬉しそうだった。だがなんでこんなに笑顔なのか私にはわからなかった。

敵意には敏感だが自分に向けられる好意にはとことん鈍感な龍也だった。

第１１話に続く

## 第１１話（前書き）

間の前書きでも書きましたが、キャラを使っていただけると言う作家さんが居たらぜひお願いします、小説の参考となるのでよろしくお願いします、あと感想などがありましたらそれもお願いします。

それでは本編始まります、これからもよろしくお願いします

# 第１１話

第１１話

六課に到着したのは、現場を離れてから２０分後のことだった。後に気付くがあそこから此処までなら１０分程で着くらしいのだが。道がわからない為、フェイトに道案内を頼んだのだ。がどうやら長くバイクの横で乗って居たかったらしく態々遠回りをしたらしい

「さてと、到着したな。早く降りてくれ。待機状態に戻すからな」

二人が降りてから、待機状態のペンダントに戻す。だがこの時に気付くべきだったのだ、なのはとフェイトの目の色が可笑しい事を

「遅いなぁ～兄ちゃん」

入り口の所で待っている、帰るからと連絡があってから２０分は経っている。あそこなら１０分程で帰って来れるはずなのだが

「何か、トラブルでもあったんか？」

何かあったのかと考えていると、龍也が入ってくるのが見えた

「あっ！兄ちゃん、おそかっ・なぁ兄ちゃん、なんで背中になのはちゃんとフェイトちゃんがしがみついとるのか説明してくれへん？」

疲れた様子の龍也と半比例して、嬉しそうな顔で背中にしがみついているなのはとフェイトに怒りを覚える

「はやて。助けてくれ。離れてくれないんだ・・・」

その余りに消耗した言い方に、何度か離れるように言ったらしい

「なのはちゃん、フェイトちゃん、知っとるか?人の物に手を出したらあかんのやで」

「はやて・・?」

助けてくれず、なにか違うことに怒っているはやてに疑問を持つ

「はやてちゃん、龍也さんは物じゃないだよ」

「その通りだよ、龍也は物じゃないよ」

三人を中心に凄まじいプレッシャーが発生する

「何だ?如何してこうなった?」

龍也に呟きに返事を返してくれる者は居なかった

「どうして、こうなってるんだ?」

現在背中になのは、フェイト、はやてがぶら下っており、背中から指示を出され部隊長室に向かっている龍也。まだ朝が早いからか人影は偶にしか見ないが、背中にぶら下っている三人と私の顔を見比べながら擦れ違っていく。

(なんだ異様な気配を感じる・・)

擦れ違う男性職員から嫉妬の視線が放たれている、はやて達は言うまでも無く美人だ。それが三人とも抱きついている龍也に嫉妬の視線を向けるのは当然だが・・

（やはり、まだ正式配属前の私が居るのが不味いのだろうか・・？）

やはりここでも見当違いの事を考えながら部隊長室へ歩いていった

「やっと・・着いたか」

数々の嫉妬の眼差しを擦り抜け、到着した頃に酷く消耗していた。ちなみに龍也はその視線が嫉妬のよるものだと気付いていない

「いや～おんぶして貰うなんて、久しぶりやったから。なんか嬉しいわ～」

ほのぼの言うがその為に龍也の精神は可也磨り減っている

「でも、いつ帰ってきたんですか？」

なのはが向かい側に座りながら言う、部隊長のソファーで、龍也の隣に誰が座るかでまた一悶着が合ったが。結局妹だからという理由ではやてが隣に座っている

「昨日の夜だな、所でリンディさんに連絡取れたか？」

「うん、でも正式に兄ちゃんが六課に入れるのは明日かな」

前に座っていたなのはとフェイトがソファーから身を乗り出しながら

「龍也「さん」六課に入るんですか？「入るの？」

「ああ、何だったか？特別遊撃隊だったかの隊長になるらしい」

それは龍也の誰とでも即座にコンビを組める、順応性からリンディが考えた部隊である、聞き覚えの無い部隊に首を傾げる二人に説明する

「誰でも部下として行動させることが出来る権限らしい。だから有事の時にはシグナムやなのはを隊員として扱えるらしい」

頷いているなのはとフェイトの座るソファーの影に隠されている書類の山を見つける

「はやて？私の見間違いなら良いのだが。やってない書類がある様に見えるんだが」

ピシリとはやてが固まる

「嫌やな、それは今からやる分やで？」

冷や汗を流しながら答えるはやて、

「そうか・・それなら良いがちゃんとやらないと活けない事はやれよ。勿論二人もな」

なのはとフェイトを見るが二人も目を逸らす。どうやら書類が溜まっているようだ、溜め息を吐きながら立ち上がる

「どうしたん？」

書類をやり始めたはやてが尋ねると

「まだ、朝食も食べてないだろ？今から仕事を頑張る。はやて達に朝食でも作ってやろうかとな」

目の色が変わる、なのはとフェイト

「本当ですか？」

凄い形相で迫るなのはに押されながら

「ああ」

返事を返すと凄まじい速さで部屋から、二人は飛び出していった

「何だったんだ？」

「さぁ？」

はやても首を傾げている、日常的に龍也の料理を食べれるはやては気付いてないが、龍也の料理の腕はレストランのコックと比べても負けないくらいの腕なのだ。

「まぁ。良いが、はやてリィンを呼んでくれないか？」

「うん？なんでリィンを呼ぶんや？」

書類と格闘しながらはやてが尋ねる

「いや、案内が無いと道が判らんからな。道案内を頼もうと思ったんだが・・」

「ああ、そうやな。じゃあリィンを呼んで、ここの厨房を使える様に連絡しとくわ」

暫く待って、リィンが来てからはやての部屋から出て行った

「所で何故、リィンは私の背中にぶら下ってるのか聞きたいのだが？」

態々ズボンを履いてからアウトフレームになって、背中にぶら下っているリィンに尋ねると

「お兄様の背中はリィンの指定席なんですよ～」

ニコニコと笑う末妹に苦笑しながら、食堂に向かって行った

「さてと、何を作るかね？」

食堂に入るとはやての話が通っていたのか直ぐに厨房に立つことが出来た。

「ふーむ。やはり書類を遣りながらだからな。サンドイッチが良いかな」

「お兄様、頑張るですよ」

厨房に隣接している、席に座っているリィンに苦笑しながら調理を始める。パンを軽く焼き、ベーコンを取り出し炒める。更に両面を焼いた目玉焼きとベーコン、更にレタスを挟みサンドイッチを作る。更にこれだけではなくチーズとトマトのサンドイッチに。ザフィーラの朝食用に持ってきていた、昨日の残りの魚のムニエルと卵のサンドイッチを作っていく。ザフィーラは既に朝食を摂っていた為食べなかった

「美味しそうです～」

サンドイッチを見ながら目を輝かせているリィンに

「味見してみるか？」

一つサンドイッチを手渡し

「良いんですか？有難うです～」

満面の笑みでサンドイッチを食べ始めたリィンを見ていると、幼い頃のはやてを思い出し。知らずと笑顔になりながら調理を進める

「さてと・・後は紅茶だな」

ポットに紅茶を入れる

「さて、リィン手伝ってくれるか？流石に一人で運ぶのは大変だからな」

作り終えたサンドイッチは7人分はある、更に紅茶入りのポットい

くら龍也でも、一人で運ぶのは無理だろう

「わかったです～。リィンがポットを運ぶですよ」

作ったサンドイッチを皿に盛り、ラップを掛けてから運びやすい様に袋に入れる。

両手にサンドイッチを入れた袋を持って、リィンと共に食堂を後にした

「リィン、此処からだと何処が一番近い？」

「う～んとですね、スターズの隊長室が近いですよ」

スターズ。なのはとヴィータか・・・あの二人は不安だな。龍也に記憶ではなのはは国語が苦手で、ヴィータは騎士の知識は豊富だが日常常識が欠けている所がある。

「大丈夫なのか？」

不安と共にスターズの隊長室に向かって行った

「う～、こんな事ならもっと早くやって置けば良かった」

あたしは大量の書類に囲まれながらぼやいた。黒騎士と言っても兄貴だが。それの事を調べるのに書類仕事を怠けていたので、大分書類が溜まっている、チラリとなのはの方を見る

「どうしよう・・・」

なのはの方もあたしと同じ状況だ、手伝いは頼めない

（兄貴が来たら、怒るよな・・）

兄貴は基本優しいが。やらないといけない事をやってないと怒るのだ。しかも感情を荒げて怒るのではなく静かに怒るためなお怖い

思い出したら体が震える。昔兄貴に怒られたことを思い出したのだ、なのはの方も顔が青い、なのはも怒られたことを思い出したのだ

「なんとしても兄貴が来るまでに少しは減さねぇと」

気合を入れて書類に取り掛かろうとした所で

プシュッ！！

扉が開き兄貴とリィンが入ってくるが、机の上の書類を見て驚きと言った様子で

「やはり、隊長ともなると仕事が多いんだな」

（！？兄貴、これが普通の量だと思ってるのか？）

なんとか誤魔化せるかと言う考えが過ぎる

「そうですよ～特にネクロが出たときは書類が増えるんですよ～」

リィンが兄貴に見えない角度で目を閉じる

（リ、リィン）

末の妹の心遣いに感動していると兄貴が机の上に皿を置く

「朝食を持って来た、これを食べて頑張ってくれ」

目の前に置かれたのはサンドイッチだ。色取りも鮮やかで見た目で食欲をそそる

「兄貴有難う、食べてもっと頑張るよ」

兄貴を騙している様で気が引けるが目の前のサンドイッチの誘惑に勝てず、口に運ぶ

「「美味しい！！」」

なのはと同時に呟く。兄貴はその様子に嬉しそうに目を細め

「飲み物は紅茶だが、ストレートかミルクか？どっちだ」

紅茶が入っているだろう、ポットを掲げる

「「ミルクで」」

これもまた同時だ。兄貴はその様子が面白かったのか笑っている。笑われていることで顔が赤くなる

「クスクス、ミルクだな。了解」

カップに入れた、紅茶に手際よく砂糖とミルクを加え、サンドイッ

チの皿の横に置く

「お代わりは、其処のポットに入ってるからな。じゃあ仕事頑張れよ」

頭に手を置きぐりぐりと撫でる、昔はこれが嫌だったが何故か今はこれが嬉しく思う。兄貴が此処に居るって実感できるからだ

「さて。次はシグナム達だな」

兄貴が部屋から出て行き、持って来てくれた朝食を食べる。やる気がどんどん沸いてくる。

この日なのはとヴィータの書類整理は今までで最高の速さを記録したらしい

第12話に続く

## 第１２話（前書き）

感想レビュー常時お待ちしています。作者の励みになりますのでどうかよろしくお願いします

# 第１２話

第１２話

「次はフェイトとシグナムか・・」

スターズの隊長室を後に次の目的地である、ライトニングの隊長室に向かう。徐々にだが隊員の数が増えてきており、見たことのない私に首を傾げる隊員が居ると

「明日から、六課に配属されるひとですよ～」

リィンが説明してくれている為、徐々に好奇の目で見られることは減っていた

「さぁ早く行って、リィン達もご飯にするですよ」

自分とリィンの分も作り、一緒に袋に入れてある。はやてが一番最後になる為。一緒に食べようと考え入れてあるのだ

「そうだな、早く行くとするか」

少しだけ歩幅を大きくした

「うー、此処がこうで。えっとこうだよね？」

大量の書類に埋もれながら私は頭を抱えた。久しぶりに会えた龍也に合えたのはプラスだが。こんなに書類を溜めていると知られたら・

・怒られるのは必須だ。龍也の怒り方は静かだがその分怖い。前に怒られた事を思い出し身を震わせる

「大丈夫か?テスタロッサ。少し手伝うか?」

シグナムも書類があるが普段どおりの量だ。私よりかは少ないがそれでも多い

「ううん、いいよ、これは私の分だから。それに龍也が朝食持ってきてくれる前に、少しは減らさないと」

「兄上が朝食を持ってきてくれるのか・・それは楽しみだな」

シグナムも普段は余り見ない、穏やかな表情で書類を片付けている。前に聞いた事があったけどシグナムは龍也のことは好きだが、其処に恋愛感情は無いと言っていたから、ライバルじゃないよね?私の知ってる限りではなのはとはやてそれにヴィータが龍也の事が好きらしい、なのはもはやてもヴィータも友達だけど、龍也は渡したくない。でもはやてとヴィータは協力して龍也を落とそうとしている、自分もなのはと協力したほうが良いのだろうか?とグルグルと龍也の事で考え込み仕事の手が休まっていると

プシュ!!

音を立てて扉が開き、机の上にある書類を見て

「やはり隊長は書類が多いんだな・・だがシグナムは少し少ないようだが?」

書類の量の違いに首を傾げている龍也に

「フェイトちゃんは執行官ですから、六課の分と執行官の分で量が多いんですよ」

リィンが上手く誤魔化してくれている。その分を見るとなのは達の方でもフォローしてくれた様だ

「そうなのか・・やはり執行官というのは大変なんだな」

しみじみと呟いている龍也。どうやらリィンの言うことを信じたようだ。それに胸を撫で下ろす。執行官の仕事と被ってもこれほどの量には成らない。リィンのフォローに感謝していると

「ほら、これ食べて。仕事頑張れよ」

目の前に置かれるサンドイッチのお皿。見た目もさることながら盛り付け色取りも鮮やかだ

（リンディ義理母に教えてもらったけど、龍也の料理の腕に勝つのは難しいみたいだね・・）

昔料理の出来る子はもてると言われて、リンディ義理母に龍也を唆らせる料理を作れるように成りたいと、言った事があったが。それは可也、難しいと言われた龍也は6歳の頃から料理を作っており、その腕は可也高く簡単に追いつくことは出来ないって言われたな再び思考の海に浸っていると

「どうした？もしかしたら嫌いなものでもあったか？」

食べようとしない私を見て、何か嫌いなものでも入れてしまったか

と尋ねてくる。シグナムは既に食べていた

「いえ、そんな事無いです、頂きます」

持って来てくれたサンドイッチを食べる

「美味しい」

自然と零れてしまった声、８年前に食べた料理も美味しかったがこれはそれ以上だ。

「そうか、美味しいか。良かった口に合わないと、どうしようかと思っていた」

そういって笑う龍也は隻眼になってはいるが、記憶の中の龍也と同じように笑っている。

「所で飲み物に紅茶があるが、フェイトはどうする？シグナムはストレートだがミルクもあるぞ」

シグナムは余り甘いものは好きではないため、龍也と同じくストレートで紅茶を飲む。昔ストレートで飲んだことがあるが飲めず砂糖を入れたのを覚えている、

「すいませんが、ミルクでお願いします」

ストレートも飲めるかもと思ったが、また飲めず笑われるのが嫌だったので。素直にミルクで頼む。手馴れた手付きで紅茶にミルクと砂糖を加え手渡された紅茶を飲む。それはミルクのバランスと砂糖の加減が丁度良くとても美味しかった

「お代わりは置いておくからな、仕事頑張れよ」

ポットを置いて出て行く龍也に

「朝食、有難うございます。凄く美味しいです」

声を掛けると後ろを向いたまま手を振る。昔から龍也は照れたりすると此方を見ない癖がある。その様子にくすりと笑い仕事を続ける、今日は少しくらい量が多くても全部出来そうな気がする。気合を入れて書類に立ち向かう。

「お兄様。顔が赤いですよ～」

リィンに指摘される

「むぅ、あんな風に素直に礼を言われると弱いな」

苦笑しながら、リィンと共にはやての部屋に戻っていく

「遅いで～兄ちゃん。私はもう仕事終わったで」

部屋に戻るとはやてがソファーに座り待っていた。可也の量があった書類はもう部屋から運び出されていた

「もう終わったのか？」

信じられなくて尋ねると

「兄ちゃん、私を甘く見たらいかんで、兄ちゃんが居るって判ってるやで?それは普段の三倍の速さで仕事できるで」

胸を張って言うはやて、昔からだな、私が居るか居ないでか宿題をやる速さが変わっていた事を思い出した

「そうか・・じゃあ大分待たしてしまったのか?」

もし可也待っていたら悪かったと思い尋ねると

「うんや、今丁度終わった所でな。持って言った貰ったばかりやから。大丈夫やで。それよりお腹減ったわ、はよ食べよ」

お腹を抱えて、お腹が減ったとアピールする、はやてにサンドイッチを渡し、自分とリィンの分も机に置く

「なんや、兄ちゃんも此処で食べるんか?」

「ああ、リィンがな正式配属は明日からだから。あまりウロチョロしない方が良いって。言ってたからな此処で食べようと思ってな」

グッ!!とリィンに親指を立てるはやて、その顔は笑顔だ

「まぁ、食べるとしようか?」

ソファーに座り朝食を食べ始める。途中で交換してとかそれ欲しいですとか言う、妹達との食事はやはりとても楽しかった

「はやて、所で私は何処で寝泊りすれば良いんだ、家から通うのか?」

リィンは仕事があると言って出て行ってしまった為、今部隊長室はわたしとはやての二人だけだ。

朝食を終え本を読んでいると不意に思い出す、仮に配属が決まったとしても寝るところが無ければ家から通う事になる。

「それは大丈夫や。もう部屋の準備は出来とるで。心配ないわ」

どこか含みのある笑顔のはやてに

「何か企んでるだろ?正直に言え何を企んでいる」

この笑顔の時は碌な事が無い。昔だが突然キスしようとして来たり。風呂に入っている時に突撃してくるときの顔に似ている。いやな予感がしながら尋ねると

「女子寮の管理人おらへんのよ。なに兄ちゃんに管理人やれとは言わんよ。でもそこしか部屋が空いてへんで我慢したってや」

ちなみに寮母さんが居るが、それとは別に管理人のポジションがある。いままでの管理人の候補は下心が丸出しだった為不採用に成り続けている

「・・言いたい事はあるがそれは我慢しよう、寝る床があるだけそれでいい。それと管理人の部屋で寝るんだ。簡単な雑用くらいなら引き受けようか」

当たり前の対価として提案を出すが

「うんや、そんな事はさせられへんで、仮に兄ちゃんは中将扱いやで?そんな事させられへんわ」

「・・・ちょっと待て今中将って言ったか?なんでぽっと出の私が何故そんな地位だ?」

可也の高い地位からの開始に疑問を感じ尋ねると

「リンディさんと伝説の三提督にレジアス・ゲイズ中将からの指示や」

皆知り合いだが、何故そんな地位に私を置きたがるのか聞きたかった。

龍也は興味が無いので知らないが、蒼天の守護者と呼ばれていた龍也は。当時Bランクでありながら2つのロストギア事件を解決に導いているだけではなく、Bランクでありながら嘱託の時に数々の事件を解決している事から、ランクの低い若い魔導師の憧れであり目標でもあるのだ兵学校でも教材に取り上げられるなど、その知名度は非常に高い

「それにレジアス・ゲイズ中将が言うてたで、兄ちゃんの御蔭で目が覚めたって」

ダークネスの時にゼストと共に赴いたことが合ったが、それが原因だろうか?

ちなみにこの時にダークネスとゼストと話したことにより、以前までの高慢な態度は消えはやて達や聖王教会とも今は仲がいい。また自分とジェイルの関係も知っており、ジェイルが最高評議会によって生み出された人造魔導師という事も知っており、ジェイルの極秘裏での協力者でもある

「そうか・・今度会いに行った方が良いな」

今のレジアスは好人物であり、かなり評判もいい

「そうやな、レジアス中将の御陰でデバイスの強化も出来たし、お礼言いにいかんと」

二人でレジアスの話をしていると、

「うんで、今日は悪いけどこの部屋で寝て貰うけど。ええ?」

「まぁ、一晩くらいなら問題ないさ。・・どうした?」

部屋を見る為に一瞬はやてが視線から消える。その隙を突いて隣に座っていたはやてが。こっちに寄ってきて抱きついてくる

「うん・・兄ちゃんが居ってくれて。すごい嬉しいんや。でもなこれが夢やったらと思うとな怖くなるんよ」

「はやて・・・」

はやては今にも泣きそうな声だ

「でな、一つ聞きたいんや。お父さんとお母さんが死んで兄ちゃんと二人だけになった時の約束はまだ生きとる?」

私にとっては第2の両親が死んだとき、墓の前で泣くはやてに私は誓ったことがあった

「あの時の約束か？」

こくりと頷くはやての頭を撫でながら尋ねる

「なんだったら、もう一回言ってやろうか？」

「ほんま？良いの」

「ああ、だがそれなら今は離れてくれないか？あの時の様にやるから」

抱きついていたはやてが離れてから、はやての前に肩膝を着いて座り。あの時の言葉を言う

「此処に誓おう、はやてが望む限り。はやてを傷つける者から護ることを、はやてに害悪をもたらす物の盾になろう。はやてが望む限り共に居ることを誓う。私はこの命が続く限りお前の守護者になる」

はやての手を取りその手の甲に口付けをする、これは騎士の忠誠を誓うものだ

「有難うな、兄ちゃん。態々やってくれて」

やはり恥ずかしいのか顔が赤いながらも礼を言うはやてを見てから立ち上がる

「これくらい、お安い御用だ。これではやての不安が消えるならな・・」

「でもな。これ恥ずかしいわ、昔は何言われとるか判らへんかった

けど、今なら判るでな～これやっぱプロポーズみたいやで？」

赤くなりながら笑うはやては私から見ても美しいと思った

「なにを冗談を、これは誓いであって。プロポーズじゃないぞ」

「へへ、プロポーズやったら良いやけどな～」

再び抱きついてくるはやてに

「いい加減。兄離れしないと嫁の貰い手がなくなるぞ？」

「いいも～ん、そうなったら兄ちゃんに貰ってもらうから」

抱きつたまま笑うはやてに

「知ってるか？兄弟は結婚できないんだぞ」

「知ってるも～ん、兄弟は結婚できんけど従兄弟なら出来るんやで」

抱きつく腕の力を強め離れまいとするはやてに

「やれやれ、そうならない事を願うよ」

「なんや？兄ちゃんは私と結婚したくないって？」

怒ったようなはやてに

「仮に結婚したい思ったら駄目だろうよ。妹に欲情するなら人間失格だ。それに私とはやてでは吊り合わんよ」

「自分とは吊りあわないって言うんか」

「違うさ、はやてでは美しくなりすぎて、私では役不足と言いたいのさ」

自分は隻眼隻腕だ。そんなハンデを持つ私と吊り合うような者は居ないだろう

「むう。自分を過小評価しすぎや、兄ちゃんは最高の男やで」

「有難う、はやてだが矢張り、私としては別の男を好きになって貰ったほうが良いな」

「嫌や～私は兄ちゃんが好きなんやから」

抱きついて離れないはやてに苦笑しながらこの日は終わった。さぁ明日からは機動六課の隊員としての自分が始まる、

立ち止まらず前に進む、私は夜天の守護者・・八神龍也なのだから

第１３話に続く

# 第１３話（前書き）

今回スポロボの技が出ます、本来は全て自分のオリジナルにしたかったのですが、そういう才能が無いのでスバロボの技を使用します

# 第１３話

第１３話

「朝か・・・」

まだ日が昇りきる前に、起き出す長髪の男・・龍也。まだ部屋に入ることが出来なかったので昨夜は、ロングアーチの部隊長室で眠りに付いたのだが

「またか・・」

一人寝転ぶのがやっと言う、ソファーに器用に潜り込み穏やかな寝息を立てている、はやてに頭を抱える。

「はぁ・・こんなんじゃ。本当に嫁の貰い手が無くなるぞ・・」

まだ眠むっている、はやてを起こさぬように立ち上がる。その際にはやてにしっかり毛布を掛けなおす

「これにまた袖を通す事になるなんて・・」

畳んでおいてある。制服を見て呟く、本来なら二度とはやて達の前に姿を見せるつもりさえ無かったのだ。それがスバルとティアナと話したことによって、またはやての傍に居られるのだ。その点では二人には感謝している

「まぁ、今日にでも会うことになるだろう」

制服に着替え、いつもの黒のコートをその上から羽織る。ダークネスとして黒の服ばかり着ていたから。黒の服を着ないと落ち着かないのだ。このコートには別の役割も有るが・・・ポケットからはやてに貰ったペンダントを取り出し。今まで首に下げていたベヒーモスを外す。

「私の勝手で悪いと思うが、お前はブレスレットにする事にした」

『御気になさらず。本来その位置はマスターの妹君に贈られた。そのペンダントのものですから』

はやてに貰ったペンダントを首に下げ。変わりにベヒーモスを右手に付ける

「さてと、はやてが起きるまで本でも読んでいるか・・」

コートのポケットから本を取り出し読む

「ううーん」

モゾモゾと向かい側ではやてが起き出す

「う～、お早う、兄ちゃん」

まだ目を擦っているはやて、寝癖で髪がぼさぼさになっており、服

は制服のままの様だ

「おはよう、はやて。目覚めでいきなりこんな事を言うのは嫌だが、いい加減私の布団に潜り込んでくるのは止めないか？」

眠そうにしていたはやてだが、カッ！！と目を見開き

「嫌や！！」

即答だった、いっそ清々しいまでの即答だった。涙目で答えるはやてに苦笑しながら

「判った、ではもう暫くは我慢するとしよう。こっちに来い髪を梳いてやる」

笑顔で跳ね起きこっちに寄って来る、はやてが犬に見え再び苦笑いを浮かべながら。髪を梳いていると

コンコン！！

ノックと共に扉が開き、なのはが入ってくるが髪を梳かれ目を細めている、はやてに驚いた顔をしている

「おはようさん、なのはちゃん。こんな早よから何の用や？」

笑ってはいるが全く、目が笑っていないはやてに

「今日は、ライトニングとスターズの合同訓練の日だから、龍也さんにも参加してもらおうかと」

こちらも笑ってはいるが目が笑っていない、なのは

「・・・そうか。兄ちゃんの紹介もせなかんしな。兄ちゃん訓練見に行ったて」

考え込む素振りを一瞬見せたが行くように言うはやてに頷き、

「訓練が終わるまで待っていると良い、私が朝食を作るからな」

「了解。少し書類整理やって。お腹空かしとくわ」

笑顔で言うがその裏で

（なのはちゃん、言っとくけど兄ちゃんに手出したら。許さへんで）

（はやてちゃん、いい加減。兄離れしたら？）

念話で会話していると、

「なのは、訓練の時間なんだろ。早く案内してくれないか、私はまだ道に慣れてないんだ。案内が無いと道が判らん」

なのはを呼び、二人で演習場に向かって行った

「やっぱ、なのはちゃんは敵やな・・」

二人が出て行った、隊長室ではやてはそう呟いた

「さてと、訓練といっていたが。何人だ？」

演習場に向かいながら尋ねると

「４人だよ。」

「ふむ・・４人か・・所で誰が配属されたというのは。その４人は知っているのか？」

此処が気になっていたところだが

「ううん、知らないよ、ただ新しい人が来るってだけだよ」

「それなら、好都合」

ニヤっと笑いなのはに耳打ちする

「えっと・・そんなことして大丈夫ですか？」

不安げに聞き返すが

「問題無い、それより手筈どおりに頼むぞ」

先になのはを演習場に入れ、準備する。道化に似た仮面を被り白のコートを身に付け。両手に白の手袋を嵌める、そして中からなのはが呼ぶのを待つ

「おはよう、皆」

演習場に入ると既に新人の４人が待っていた。私が入ってきたのに気付くと

「「「「おはようございます！！」」」」

元気よく返事を返す、４人に笑みを零しながら

「今日はいつもの訓練と違って。新人の人と模擬戦してもらうよ」

新人と言う言葉に反応し、ティアナが

「すいません、新人の人って。何人ですか？」

「一人だよ、今回は１対４でやって貰うから」

龍也の指示通りに話を進めていく

「１対４という事は相手は戦闘経験のある、魔導師の方ですか？」

エリオが尋ねてくる、これも龍也の計算のうちだ

「うん、結構戦場を渡り歩いた人だから。可也強いと思うよ。じゃあ呼ぶよ」

外で待っている。龍也を呼ぶ、入ってきたのは白のコートに道化を思わす仮面を付けた。龍也の姿だった

（これは無いと思うな・・）

その姿を見て私はそう思った。知り合いが入るので驚かしたいと言

う。龍也の言うとおりにしたが無いと思う。そんな事を考えているなのはを尻目に龍也が

「始めまして、私はクラウンと言います。今日から配属になったので以後お見知りおきを」

恭しく礼をする、クラウンに驚いた顔をしている、フォワード陣だが礼をし返す。それを確認してから

「それじゃあ、クラウンとフォワード陣の模擬戦を始めます」

その合図と共にシュミレーターが起動した

「如何しようか？」

だらりと手を垂らしたままのクラウンから。距離を取りながら尋ねてくるスバルに

「相手の実力が判らないから、とりあえず何時も通り。スバルとエリオがセンター。私とキャロが援護するわ」

作戦が決まりもう一度、クラウンを見る、顔の上半分が隠れる仮面に穏やかな笑みを浮かべており。その手には何も無い。

（どういうタイプの魔導師かしら・・）

クロスミラージュからショットを放ち。クラウンの足元を撃ち土煙を上げ一瞬クラウンの姿を隠す

「「はあああああっ！！」」

土煙が上がりっている内に奇襲でスバルとエリオが攻撃を繰り出すが

「いや、発想はいいですが、５０点ですね」

その呟きと共に土煙から飛び出し、虚を突かれ正拳を繰り出そうとした姿のまま止まっているスバルに近づき

「破ッ！！」

肩から体当たりを食らわし体制を崩したところで

「神槍裂脚！！」

「キャアッ！！」

凄まじい速さの二段回し蹴りを放ち。スバルが悲鳴と共に吹きとばされる。その光景に硬直していたエリオに

「羅刹刃！！」

鞭のように撓る連続の蹴りを放つ

「くっ！！」

辛うじて反応して回避するが素早く着地高速で接近し

「白虎咬！！」

「ガッ！」

魔力で蒼く光る拳を連続で放ち、エリオを宙に挙げる

「閃剣斬！！」

宙に上げたエリオにまるで、叩き斬る様な鋭い蹴りを放ち、脳が揺すられ目を回すエリオ。　エリオ脱落

「やあああああっ！！」

吹き飛ばされたスバルが復帰し。クラウンに蹴りを繰り出すが

「甘いですよ！！」

肘で受け止められ、両手に蒼の魔力光が集まる

「青龍鱗！！」

「うわぁ！」

左右の拳から、魔力が込められた一撃が放たれ体制を崩した。スバルに

「舞朱雀！！」

踏み込みと同時にクラウンの姿がぶれる。それと同時に上下左右からクラウンが現れ、スバルを上空へと蹴り飛ばしていく

「グッ！」

痛みで苦悶の声を上げるスバル

「堕ちなさい！！」

いつの間にか上空に居たクラウンが体を回転させながら、鋭い踵落としを放つ

地面に叩き付けられる寸前でクラウンに抱き止められるが。その腕の中で目を回すスバルを優しく地面に下ろす、クラウン　スバル脱落

「なんて、規格外」

スバルとエリオを戦闘不能にするまで僅か2分弱、援護する間もなく撃破された二人に驚いていると

「硬直していていいのですか？」

後ろから声を掛けられたと思い振り返る。そこには両手に魔力光を溜めたクラウンの姿があった

そんな馬鹿な、クラウンはまだあそこに先ほどまで、クラウンが居た位置をみる、まだそこにはクラウンの姿があったが溶ける様に消える

「幻術魔法・・」

呟きと共に首筋に手刀を叩き込まれ、意識が刈り取られる、　キャロも同じように首筋に手刀をくらい気絶していた

４人が戦闘不能になるまでの時間は3分だった

４人が意識を取り戻すまで１０分ほど必要だった。その間なのはは龍也と話すことが出来ご満悦だった

「完敗です・・」

可也落ち込んだ様子のティアナの肩に手を置く

「しょうがないよ、クラウンさんは私達でも勝てない魔導師だから」

「えっ！なのはさん達でも勝てないんですか？」

スバルが驚きと共に問いかける

「うん。私とフェイトちゃんにヴィータちゃんとシグナムが加わっても勝てないよ」

横目でクラウンを見る。何を大げさなと身振りで言っている。

「あの・・クラウンさんのランクは？」

「確か・・Ｂ＋でしたか？」

クラウンが口を開く

「いつの話を・・と言うかいつまでその口調なんですか？」

ジト目でクラウンを見ると

「ははははは。なのはは此れが気に入らんか？私は中々気に入ってたんだが」

仮面を外すと流れるような黒髪が姿を現す

「本日より、時空管理局機動六課に配属される事になった。八神龍也中将だ。宜しく頼む」

「「たたた、龍也さん。こんな所で何を・・ていうか中将て何ですか？」」

スバルとティアナが驚きの余り噛みながら。龍也に詰め寄るがそれを手で制し

「いやな、お前たちが言ったんだが。本当に護るなら姿を見せろと・・だから此処に居るんだが？」

何を驚くことがあると言いたげに肩を竦める龍也に

「龍也さん？ちょっと聞きたいんですが？」

笑ってはいるが目が全くというか、目に殺意の色が篭っている

「何かね？」

その様子に全く気付いていない龍也

「どうして二人と知り合いなんですか？其処のところを詳しく聞きたいんですが？」

「ああ・・それかね。それならはやて達も絡めて話した方が良いだろう。同じ話を何度もするのは好きじゃないしな」

話を後回しにしようという龍也に詰め寄ろうとすると

「すまん、寝過ごした！！」

まだ寝癖が残る髪でヴィータが入ってきたが。なのはが龍也に近づいているの気付くと即座に龍也の前に立ち

「おい！なのは、兄貴に近づくじゃねーよ！！」

いつの間にかグラーフアイゼンを構え、なのはに向ける

「はやてちゃんにも言ったけど、ヴィータちゃんもいい加減兄離れしたら？」

目が単色になり。レイジングハートをヴィータに向けるなのは、二人を中心に凄まじいプレッシャーが発生している、フォワード陣はそのプレッシャーの押され顔色が青くなっている。そのプレッシャーの気付いていない龍也はヴィータの髪を見て眉を顰める

「ヴィータ、寝癖がまだ付いたままだ。梳いてやるから来い」

手招きする龍也の下に即座に移動し。帽子を取り後ろを向いたヴィ

ータの髪にコートから取り出した櫛で梳いていく。その様子を見て唖然としているなのはに勝ち誇ったような顔で笑い顔を向けているヴィータ。

「よし、此れで良いだろう。ヴィータ、髪は女の命と言うもう少し気をつけるといい」

「へへ、有難う。兄貴！！」

嬉しそうに笑うヴィータを見て。唖然としているフォワード陣。ヴィータのこんな笑顔を見たのが始めてだからだ

「さてと・・ヴィータも来たんだし、私はそろそろ行くよ」

櫛をポケットに戻しながら龍也が言うと

「ええ～」

ヴィータが不満そうな声を挙げるが

「なに、はやての約束でな。いまから朝食を作りに行くんだ。勿論ティアナ達を含めた人数分のな」

ティアナ達を含めてと言うと１２人分だ。いまから準備をしないと間に合わないだろう

「う。判った、じゃあしょうがねえな」

渋々といった様子で龍也から離れるヴィータに

「そうだ。ヴィータ、朝は何が良い？リクエストが有るなら聞くが？」

「本当か？じゃあ。あの玉子焼きが良い・・あの甘いやつ」

顔を赤くしながら言うヴィータの頭を撫でてから

「玉子焼きか・・じゃあ後は味噌汁と魚だな」

献立を呟きながら龍也は出て行った

「朝飯が楽しみだな～」

年相応と言うか姿と妙に一致した様子で、今にもスキップを始めそうなヴィータを驚きの目で見ていると。その視線に気付いたのか

「ゴホン！！じゃあ今から訓練を始めるぞ」

業とらしく咳をして、グラーフアイゼンを構えたヴィータに

「ねぇ、ヴィータちゃん。ちょっと話が有るんだけど？いいかな」

灰色を通り越してもう黒い笑顔を浮かべるなのはに

「なんだよ。兄離れしろとかだったら。聞かねぇぞ」

不機嫌そうに答えるヴィータ

「うん、大丈夫。そんな話じゃないから。なんかスバルとティアナが龍也さんと知り合いみたいなんだ」

一瞬でヴィータの顔がなのはと同じ黒い笑顔に染まる

「へ～。それは詳しく聞かなぇとな」

余りのプレッシャーに「ヒィ！」と悲鳴を上げる最年少コンビに

「大丈夫、エリオとキャロはもう上がりで良いよ。唯少しスバルとティアナにはお話が有るだけだから・・ね」

笑っているつもりだろうが恐怖しか感じない。笑顔のなのはに

「「判りました！！有難うございました」」

ソニックムーブかと思う速さでエリオとキャロは演習場から消えた

「さてと。きびきび吐いてもらおうか」

首をゴキゴキと鳴らしながら歩み寄るヴィータ

「大丈夫、一応非殺傷でやるから」

スターライトブレイカーの発射準備に入るなのは

「じゃあ、逝ってみようか？（逝くか？）」

「「嫌ゃあああああ」」

演習場にスバルとティアナの悲鳴が木霊した

第１４話に続く

首をゴキゴキと鳴らしながら歩み寄るヴィータ

「大丈夫、一応非殺傷でやるから」

スターライトブレイカーの発射準備に入るなのは

「じゃあ、逝ってみようか？（逝くか？）」

「「嫌ゃあああああ」」

訓練所にスバルとティアナの悲鳴が木霊した

第１４話に続く

# 第１４話

第１４話

「はぁ～、エリオ君、さっきのなのはさんとヴィータさん。怖かったね」

演習場から逃げ出してきた。キャロが呟く

「うん、なんか凄く殺気立ってた・・」

うんうんと頷くエリオ

「で。さっきの人、八神中将だっけ。凄く強かったね」

話題を切り替えるエリオ、

「うん、デバイスも無しで、あんな風に戦えるんだね」

先ほどの模擬戦の事を話しながら歩いていると

「そうだ！朝ごはん作ってるっ言ってから見に入ってみよ」

こうして、最年少コンビは食堂に向かって行った

「あれ？エリオ君にキャロどうしたですか？」

ニコニコと厨房の見える席に座り、マグカップから何かを飲んでい

る。リィンに声を掛けられる

「あのさっき八神中将が「呼んだか？」うわぁ」

突然話しかけてきた、龍也に驚きの声を挙げる

「何も、そんなに驚かなくても」

ちょっと落ち込んだ様子で鍋をかき混ぜている、龍也、鍋からは良いにおいが漂ってきている

「お兄様～、リィンはお腹がすきました」

マグカップの中身を飲み干したのだろうリィンがお腹空いたと言うが

「もう少し待て、どうせなら皆で食べたほうが美味しいからな。良し完成っと」

それを嗜め鍋に蓋をする

「そんな所で立ってないで座ったどうだ？」

促されリィンの座っている。隣に腰を下ろす

「なにか飲み物は？ココアと紅茶なら用意できるが？」

片手鍋にお湯を入れながら尋ねてくる龍也に

「いえ。悪いですよ。態々八神中将に「ああ、それかそれはお飾りみたいなもんだ。龍也で良い」でも・・」

龍也で良いと言う、龍也にそんな風に言えないと言おうとすると

「駄目ですよ、お兄様はそういう呼ばれ方をされるのが好きじゃないんです

リィンにも言われ

「じゃあ。その龍也さんココアで」

了解と人のいい笑顔を浮かべ手際よく。カップにココアを入れて持ってくる

「熱いから、気を付けろよ」

渡されたココアを飲みながら談笑していると

「兄ちゃ～ん。お腹空いたわ」

突然はやてが現れ龍也に抱きつく。その様子をみて又かと言う様子のシグナムとシャマルが入ってくる

「おはよう、シグナム、シャマル。悪いがはやてに離れるように言ってくれんか？」

「すいません、私では無理です、兄上」

「お兄さん。私でも・・いえ多分誰でも無理だと思います」

申し訳なさそうに言うシグナムとシャマルにそうかと呟く龍也、ど

うやらこれが龍也にとっての普通らしい

「うん？お～エリオにキャロもおはようさん」

ご満悦という表情でふと横を見てエリオとキャロに気付き。おはようと言って来る

「「おはようございます。はやて部隊長」」

元気良く返事をすると、うんうんと頷き笑顔のはやてだったが、

「あっ！おはよう。龍也」

フェイトが現れ龍也に挨拶するが

「ああ・おはよ「なぁ、フェイトちゃん、人の兄ちゃんを呼びすてするのはどうかな～と思うで」はやて・・？」

辺りを先程のヴィータとなのはが纏っていた空気が包む

「何を言ってるのかな？龍也が好きに呼んで良いっていからこう呼んでるんだよ？それにはやての方こそ早く兄離れしたら？」

近づき龍也の隣の席に座るフェイト、どさくさで龍也の腕を抱え込んでいる

「フェイトさん？」

自身の身元引受人の変貌に驚いていると

「ああ～はやてちゃん、何してるの！！」

ズルズルとティアナを引き摺りながら、なのはが現れる。ちなみに引き摺られているティアナは完全に気絶していた

「どうしたんだよ、なのは大きい声だして・・フェイト、てめ～兄貴から離れろ！！」

同じく、気絶したスバルを引き摺りながら、ヴィータが来るが。龍也の腕を抱えているフェイトに気付き怒声を上げる。

周りで食事を摂っていた職員は既に誰もいない。この４人が放つ暗黒の空気に耐え切れず逃げたのだ

「やっと全員揃ったか。では朝食にしよう」

何事も無いように朝食の準備をし始めた、龍也だが

「「「「ウフフフフ」」」」

辺りをどんよりとした空気が包み込んでいる、この空気では食事も美味しくは無いだろう

「はやて達も早く座っとけよ、今順番に持っていくからな」

「「「「は～い」」」」

なんと龍也の一声でその空気は消え、席に着いたはやて達に驚いていると

「エリオ、あれはいつもの事だ、気にしていたら負けだぞ」
肩に手を置き其れだけ言って、席に着くシグナム
「あれが普通なんですか？」
この呟きに答えるもの無かった

「さてと、私は何処に座ればいいのかね？」
自分の分の朝食を持っていくと、席が二箇所空いている、はやてとヴィータの間となのはとフェイトの間だ
スバルとティアナは意識を取り戻したが可也消耗していた。よほどきつい訓練だったのだろうか？

「兄ちゃん、こっちやで」
「龍也さん、ここ空いてますよ」
二箇所から同時に声が掛けられるが
「ふむ、でははやての隣で頂くとするか」
距離的に言えばはやての隣が近いので、はやての隣に座るが
「むぅ、じゃあお昼はこっちですよ」
不機嫌に呟くなのは、私が何をしたんだ？

「では、頂きます」

「「「「「「「「「「「「「「頂きます」」」」」」」」」」」」」」

全員で手を合わしてから、食べる、メニューはヴィータのリクエストの玉子焼きに鮭の塩焼きと味噌汁だ。これぞ日本の朝ご飯という感じだ、といっても此処は日本ではないが・・

「美味しい！！」

私の食事を食べたことの無い。エリオとキャロが美味しいと言って食べていてくれるのは。作ったほうとしてはとても嬉しい

「う、負けた、何時になったら、追いつけるかな？」

なのはが一口食べる度に、落ち込んでいるがそれでも箸は一度も休んでいない

「お代わりは在りますか？」

食べ終わった、エリオがお代わりは有るかと尋ねてくる

「ああ、あるぞ」

食べ終わった茶碗と味噌汁のお椀を持って、エリオとスバルがお代わりを取りに行く、姿に笑みを浮かべながら私は食事を再開した

「所でよ、なのはから聞いたんだけど、兄貴はスバルとティアナの知り合いらしいな」

食事を終え、休憩しているとヴィータが尋ねてくる

「へ～それは初耳や、兄ちゃん何処であったか教えてくれる？」

そこから私は話し始めた、空港火災のときにスバルを助けたこと、つぎに無茶な訓練をして倒れていたティアナを介抱した事、そして最後にスバルとティアナに諭されもう一度はやての前に姿を見せたことを

「へ～。スバルたちが。居ったから兄ちゃんは姿を見せてくれたんやね」

「ああ。私は姿を見せるつもりは一切無かったからな・・」

「でも、何でですか。どうして姿を隠してたんですか？」

なのがが尋ねてくる

「それは・・多分怖かったんだ」

「怖かった？」

フェイトが聞き返す。私は其れに頷きながら

「ああ。私はあの謎の魔導師に襲われ、辛うじて生きながらえることは出来た、だが知っての通り私は隻眼になってしまった。それから数年は毎日の様に夢を見たんだ。どうして護ってくれなかったと言うはやて達が出てくるんだ」

はやて達が静かになる、

「それで、私はリハビリを終え、腕のいい義手職人に義手を頼んだ。そして直ぐにはやて達の元に行こうと思った、だが出来なかったはやて達の近くに行ったら脚が動かなくなった、怖かったんだもし夢のようにどうして護ってくれなかったと言われるのが・・それで私は姿を隠しながら見守っていたわけだが。ある日スバルとティアナが尋ねて・・・いやこの場合寝ている間に家を家捜しされたと言うべきか」

非難の視線が集まりサッと目を逸らすスバルとティアナ

「その時私はヴィータに素顔を見られた時だった」

「あの時か・・」

ヴィータが納得といった表情で頷く

「じゃあ、やっぱり龍也さんが黒騎士だったんですか」

エリオがやっぱりという表情で頷く

「ああ、その時はダークネスと名乗っていたがな。それでなスバルとティアナに言われたんだ、本当に護るつもりなら姿を見せるべきだとそれで私は決心しはやての前に姿を現した。もしスバル達に背を押して貰ってなかったら私はここに居ないな。そういう面では二人に感謝しているよ、此れで話は終わりだが判ったかね」

自分の前の紅茶を口に含む

「でも兄ちゃん酷いな。私がそんな事言うわけないで？」

黙って聞いていたはやてが怒った様にいうが

「判ってるさ、だが私には勇気が無かっただけだ、今思えば、どうしてもっと早く姿を見せなかったのかと思う私が居るよ」

苦笑を浮かべ再び紅茶を口に含む

「所でスバルさんとティアナさんは、どうして家捜ししたんですか？」

エリオが聞くと

「ほら。えっと、なんていえば良いのかかな」

明らかに動揺した様子のスバルの反応に

「まさか・・龍也さんが好きとか違うよね。二人とも」

「あっ！ははははそんな事無いですよ」

目を逸らし冷や汗を流しているスバルの様子を見れば、モロばれだろう

「ああ～なるほど、スバルとティアナは兄ちゃんが好きと。そういうことか？」

はやてが暗黒のオーラを纏う

「そんなち「ええ、そうですよ、私達は龍也さんが好きですよ」ティアー！！」

日に油を注ぐティアナに悲鳴を上げるスバル、ちなみに龍也は聞き違いか呟きと多少現実逃避をしていた

「ほほ～二人は身の程を知らん見たいやな」

笑っている。笑っているが目が全く笑っていないはやてを真っ向から見返し

「何言ってるんですか？恋愛は自由ですよ。そこに身の程とか無いですよ」

はやての暗黒のオーラを真っ向から受け止め反論するティアナ

「でも付き合いは短いよね」

同じくオーラを纏い始めたなのはが言うが

「好きになるのに時間は関係ないですよ」

「でも年の差があるよね」

黒い笑みを浮かべるフェイトに

「たかが8歳ですよ。其れくらいどうって事ないですよ」

少しも臆せず真っ向から立ち向かうティアナ

「O～K。スバルとティアナは私から兄ちゃんを取ろうとしとる、これは宣戦布告ととるで」

私にどうしろと言うんだと言う表情で遠くを見ている龍也、ちなみにシグナムとシャマルとリィンは既に食堂から退避しており、最年少コンビはその黒いオーラに耐え切れず気絶している

「「「「「アハハハハハハ」」」」」

笑いあっている、はやて、ヴィータ、フェイト、なのは、ティアナ

「どうして？」

スバルは遠い目をしながらその円の中に居た。彼女は確かに龍也の事が好きだが、はやて達ほどでは無い

龍也の女難はまだ始まったばかりだった

第１５話に続く

# 第１５話（前書き）

戦闘シーンは難しいですね、誰かアドバイスください

# 第１５話

第１５話

龍也が配属されてから。２日たったが前の食堂での黒化現象は起きていない。どうやら基本的には黒くはならないようだ

「さてと、今日もいい日になるか」

伸びをしてから、いつもの黒コートを着込み。間早自分の部屋になった。管理人の部屋をあとにする。最初のほうこそ女子寮に男が居るなんてと文句を言っていた者が居たが、今ではそれも無く馴染まれている。基本龍也は寝る時と休みの日しか此処に居ないのが信用を取るに至った理由だろう、

「今日は訓練を見に行く約束をしていたな」

昨夜寝る前になのはから明日訓練を見に来てくれ。と言われていたのを思い出し、演習場に向かって行った

朝練とは思えないハードな訓練をしている、フォワード陣となのは達

「朝から頑張るな」

６人に見つからぬ様に気配を殺しながら訓練を見学していると

「兄上、こんな所に居たのですか」

シグナムが隠れるように訓練を見ていた、龍也に気付き歩いてきながら尋ねてくる

「ああ、前にな、私が見に来たからといって。必要以上に張り切って訓練をしたヴィータが居たからな」

苦笑しながら言う、そのときの訓練はフォワード陣の足腰が立たなくなるほどきつい物だった

「それも・・そうですね」

その時の様子を思い出したのか、同じく苦笑するシグナム

「しかし、まだ若いな」

手に何かの本を持ちながら呟く龍也に

「兄上?それはなんの本ですか?」

「うん?これか。まぁ聞くより見たほうがいいな」

その本を手渡され見ると、そこにはフォワード陣の姿と魔力効率と描かれグラフが変動していた

「これは一体何なのですか?」

一回も安定せずに変化し続ける、グラフに疑問を感じ尋ねると

「それは、ベレンの力でな。個々のステータスを見れるんだ」

『ケケ、本来ならスリーサイズとかも判るんだけどな、旦那が切れてその能力を封印しっちまった』

とんでもない事を言うベレン

「兄上。まさかその様な事見てないですよね」

ジト目で龍也を見ると

「シグナムが私をどんな目で見てるか判ったよ」

悲しげに呟く兄上に

「冗談ですから、気にしないでください。」

フォローしてから、本を返すと

「冗談なら良いが。まぁ此れを見てる理由は飛行魔法の効率を見るためだ」

本来陸戦魔導師は飛行魔法は余り得意ではない、シグナム達やはやて達なら問題ないが元から陸戦のフォワード陣は魔力に偏りがあるのだ飛行魔法を発動する時は全身に魔力を張り巡らせ。全身でバランスを取る。それのバランスが悪いと飛行魔法を構築するのに必要以上に魔力を消費する事になる。ならばそれの最適化は必要項目だ。

「何回かそのことを指摘したが・・やはり、そう簡単には行かんな」

そのグラフは殆ど安定していない、エリオは中々安定して来ているが、スバルは酷い殆ど同じ位置で止まっていない、まぁスバルには

ウィングロードが有るからと言えばそれまでだが、矢張り飛行魔法は上手いほうがいい

「ティアナは素晴らしいな、グラフが一番安定している」

本のティアナのグラフは中と言ったレベルだが、グラフのブレは殆ど無い。キャロはグラフは安定しているが、飛行魔法の構築に意識が行き過ぎて、他の魔法の構築が可也甘い

「なに、まだ4人は若い、伸びしろはあるから大丈夫だろう」

解説をうけ渋い。顔をしているシグナムにフォローを入れる

「うん?どうやら一息つくようだな。私は行くが、シグナムは?」

「私の分の訓練はもう終わってますから、書類整理でもして来ます」

そうかと頷き龍也はシグナムとは逆に歩き出した

「ああ~疲れたぁ~」

疲れ果てて倒れこむスバル

「スバルは特に鍛えるように言われてるからね」

なのはが微笑むがその笑顔は少し黒い。龍也の指摘によって飛行魔法の構築が甘いスバルは、特に厳しい訓練を受けている

「でも、なのはさん、スバルは本当に飛行魔法上手く出来るように

成りますか？」

スバルとコンビを組んでいた。ティアナはスバルの飛行魔法が下手なのは良く知っている。何度か指摘したがウィングロードが有るからと言って練習をしなかったツケが今出てきている。なのはが口を開こうとする前に

「確実に上手くなると思うが？」

突然聞こえた龍也の声に驚き、振り返るとそこにはいつの間にか現れた龍也の姿があった。寝転んでいたスバルはパッと飛び起きている流石に龍也が居るのに、だらしなく寝転んでいるは嫌だったのだろう

「おはよう皆、朝から訓練ご苦労様」

穏やかな笑みを浮かべている龍也その手には本が納められている

「「「「「「おはようございます」」」」」」

返事を返し、整列すようとするが

「いや、そのままで良い、見ていたが大分きつい訓練だったみたいだからな」

苦笑を浮かべながら、本を開く

「龍也さん、その本は一体なんですか？龍也さんが訓練のときにいつも持ってますけど」

本が気になると言う表情を浮かべるなのはに

「これは、単純に言えば能力を分析するものだな。ベレンの能力の一つだ」

本を開きなのはのページを見せる、そこには事細かく能力が描かれていた。使える魔法、戦闘スタイル、魔力の最大保持などだ

「へ～凄いですね」

次々とページが捲られる中でスバルとティアナのページを見た瞬間、なのははその目を見開いた

使える魔法の欄にあった一文、ヘブンズナックルとストライクバレットは龍也の欄にも描かれていた

「龍也さん、スバルとティアナの欄にある。ヘブンズナックルとストライクバレットって言う魔法龍也さんの欄にもあるんですが？」

えっ！！とヴィータが覗き込みその欄を見て驚く

「ん？ああそれか。それは私が二人に教えたものだからな。あって当然だろう」

何事も無い様に言うが

「へ～、二人は龍也さんの技が使えるんだ、なんか羨ましいな」

辺りを黒い空気が包む、２日ぶりの黒化現象だ、その様子に息を呑む最年少コンビとスバル。ティアナはケロッとしている。どうやら耐性を身に着けたらしい

「何が羨ましいんだ？なのははにはスターライトブレイカーがあるだろう。私はそれの代用として教えたのだが・・」

威力としてはスターライト・ブレイカーの方が上だが、ヘブンズ・ナックルとストライク・バレットも又高威力の技には違いは無い

「いえ、ただどんな技なのかと言うのが気になるんですよ」

嘘だ、絶対嘘だ、龍也の技が使えると言うのが気に入らないんだ、ヴィータ達はそう思った

「そうなのか？なら見せるだけなら見せるが？」

その言葉に驚く、フォワード陣龍也は今まで一度もデバイスを使ってないからだ

「そうですね、じゃあ見せて貰ってもいいですか？」

なのはもどんな技なのか気になっていたので、見せてくれる様に頼む

「了解。ベレンセットアップだ」

『久しぶりだねぇ～。バリアジャケット展開するの』

楽しげに呟き。バリアジャケットを展開する。黒のライダースーツは変わってないが、背中には満月に交差するように黒と白の翼が描かれており、腕に巻いてあったバンダナの色が蒼くなっている

「余り変わってないな」

確認しながら呟くと

『当たり前だ、黒は俺のトレンドそう簡単に変えれるか』

ベレンと話していると、なのは達の顔が赤い

「どうした?顔が赤いが」

龍也は何の気なしに言うが、龍也の風貌とその黒いライダースーツは実に合っており、モデルのような印象を受ける

「・・いえ。何でもないです。それよりその龍也さんの魔法をお願いします」

「そうか・・それじゃあ。やるとするか・・」

拳を作り、魔力を溜めていく。するとほんの数秒ほどで辺りを金色の魔力が包み込む。スバルとは比べ可也早い。

「はあああああっ!!」

徐々に金色の魔力が強くなり、眩いばかりに輝いている。後ろから見ると金色の魔力が翼の形を模っているように見える

「天使みたい・・・」

キャロがぼそりと呟く、その光は闇を切り開く天使に見える

「ヘブンズ・・・

ナックル！！！」

右手から眩い光と共に金色の魔力波が放たれる。それはシュミレーションのビルのほぼ全てなぎ払い消滅させていた

「・・・・・・・」

言葉も無い、３０近くあったビルを立った一撃で全て消し飛ばしたその威力に、だが龍也の言葉に凍りつく

「おかしいな。全て消し飛ばすつもりだったが・・加減を間違えたか？」

『旦那、次はカートリッジ有りでやろうぜ。その方が面白い』

「良し、ではカート・・・「ストーップ！！龍也さんカートリッジ有りでやられたら。この部屋が崩壊します」・・そうかでは止めて置こう」

カートリッジを使おうとした龍也を止める、あれで手加減しているらしいが、其れでもこの部屋がギシギシと悲鳴を上げている。これでカートリッジを使われれば冗談抜きでこの部屋は崩壊するだろう

「では、次だな。ベレン。シュータモード」

『見ていろ、俺の大活躍ってか』

相変わらず軽口を叩いてから。両手に二丁のショットガンが現れる

「すまんが標的か何か頼む、流石に銃だからな、的が無いとな・・」

なのは達が端末を操作し、龍也の周りにガジェットが現れるが

「なのは、これでは少ない後６０は出してくれ」

まだ動き出さないガジェットを見て少ないと呟く、それでも数は軽く３０はあるのだが。

「判りました、後６０ですね、でも見ていて危険だと思ったら止めますよ」

その言葉の後から追加でガジェットが現れる。龍也は拳を握りながら

「それでは、始めるとするか」

呟き駆け出した

「嘘でしょ・・」

見ながらティアナが呟く、その気持ちにはあたしも賛成だった。兄貴は縦横無尽に駆け回りターゲットを粉砕している

「ダーククロー！！」

両手が黒い光を帯びたと思うと両手から、三日月の衝撃波が飛び出し。ガジェットを切り裂く

「ベレン、ショット。行くぞ」

『了解』

ショットガンからは様々な弾丸が次々放たれる。散弾、マシンガン、撃ったと思ったら既に命中しているもの。その弾丸は実に様々だ

「危ねぇぞ」

後ろからガジェットが迫るが。攻撃範囲に入るといった所で爆散した。兄貴はニヤリと笑い

「ｊａｃｋｐｏ（大当たり）」

『気をつけな、そっからは地雷原だぜ』

後ろから近づいたガジェットが次々爆発して、兄貴の姿を一瞬隠すが、次の瞬間、黒い翼をその背に生やした兄貴が爆炎から飛び出す

「込める弾丸は」

『願いの欠片』

ガチャン！！シリンダーが回り。蒼い魔力が兄貴を包み込む

「響け！！シューティグソニック！！」

蒼い彗星がガジェットを飲み込み、爆発させる

「綺麗・・」

キャロが呟く、それは流星の様にとても美しかった

「まだ・・大分残ってるな」

かなり消し飛ばしたがまだ大分残っている。ギブアップをするのかと思ったら

「此れだけ残ってるんだ。ベレン。カートリッジロード」

『おっ！アレやるんだな。へへ行くぜ、カートリッジロード！！』

ショットガンから薬莢が飛び出し、龍也の足元にミッドの魔法陣が浮かぶ

「虚空の扉よ、我が前にその姿を見せよ」

龍也の前に漆黒の穴が出現する

「次元を超え、破壊の嵐を巻き起こさん、ワームスマッシャー！！！」

漆黒の穴に次々弾丸を撃ち込む。

「何してるんだろう？」

打ち込まれた弾丸は何処かに消えている。その間もガジェットは龍也に迫っていたが

ズガン！！

「えっ！？」

突然ガジェットが弾丸に貫かれ、爆発する、一体だけではない次々
ガジェットの前に黒い穴が広がり、そこから弾丸が飛び出す

ズガン！！ズガガガン！！！

凄まじい速さで打ち込まれる弾丸、その全てがなのはのディバイン・
バスターと同等かそれ以上だ

「さて、チェックメイトだ」

パチン！！

指を鳴らす、全てのガジェットを包み込むように黒い穴が展開される

「この技の前に逃げ道など無い、早々に消えろ」

呟きと共に全ての穴から弾丸が飛び出し。全てのガジェットを貫いた

「・・・・・・・」

見ていた者全てが押し黙る、

「なのはさん。龍也さんって本当にＢランクですか？」

信じられなくてスバルが尋ねると

「シャマルがね、簡易魔力測定したら、機械の方が壊れたって」

「「・・・・・・・」」

なのは達は本当に龍也が何者なのか気になった

「龍也さん、最後に使った。ワームスマッシャーって何ですか？」

訓練を終え、食事を取っているなのはが尋ねる

「あれかね。あれはシャマルの旅の鏡の術式を解読して、独自に組上げたら何故かああなった」

パンを齧りながら答える

「・・あのよ。兄貴、シャマルの旅の鏡はあんな事出来ないぞ」

「そうなんだ、どうしてああなったのか。私にも判らん」

本当に判らない様子で食事を続けていたが

「なのは、何故か殺気に似た感覚があるのだが？」

スープを飲んでいた手を休め、なのはの方を向く。龍也の殺気に似た感覚は言うまでも無く嫉妬なのだが

「そうですか？私は特に感じませんよ」

笑顔で食事を続けるが、一瞬だけ殺気を飛ばし。龍也を睨んでいた局員に恐怖を与えているなのは、龍也はそれに気付いていない

「・・・それより、龍也さん。何か僕にも技を教えてくれませんか

？」

なのはの殺気を耐え切り、エリオが言う。徐々にだがエリオにも耐性が付いて来た様だ

「技・・かね」

コーヒーを啜りながら考え込む

（スバルは接近戦だったから、ヘブンズナックルを教えた。ティアナにはストライクバレットをプレゼントしたしな・・・）

エリオのスタイルは槍を使う、自身が使える槍の技は少ない。グラムには槍の形態があるが、龍也は剣の方が得意で槍はそれ程でもない

「そうだな、デモンズディザスターかロイヤルセイバーくらいだな」

他のではエリオには扱いきれないだろうと推測し、二つの技を提案する

「どんな技なんですか」

目を輝かせるエリオ、龍也の技はどれも必殺だ。その威力に憧れるのも判る

「まあ、聞くより見ろだな。グラム映像を出してやれ」

『了解しました、主』

グラムのコアから映像が映し出される

「昔の映像で悪いがこれを見てくれ」

どこかの森の中だろう、騎士甲冑を身に着けていない龍也が佇んでいる。すると木の間からネクロが現れるが、その手に持った槍を構えて

「デモンズディザスター！！」

黒い閃光が走り次々とネクロを貫く、その映像を信じられないという表情で見るエリオ

「これは、魔力で斬撃を飛ばすと言う物なのだが。兎に角素早く連続で繰り出し続ける。と簡単な理屈だな」

口で簡単等言うが、言うよりも此れは難しいだろう

「あの・・これ本当にエリオ君が出来ますか？」

映像を見ていたキャロが尋ねると

「槍というのは連続で攻撃を繰り出すように出来ている。だから問題ないと思うが？」

「龍也さんはどれくらい出来る様になりました？」

「私は一ヶ月だな、結構大変だったと思う」

たった一ヶ月でこれだけの事が出来るようになった、龍也のことを規格外じゃないかと思ったのは、スバルだけではないだろう

「取り合えず連続で槍を振り回せるようになってからだな」

エリオは映像から一度も目を離さず、モニターを見ている

「次いくぞ。これは直ぐに出来る様になるな。そこはエリオの魔力変換素質に感謝だな」

逃げたネクロに槍を向けると、槍が淡い光を帯び

「ロイヤルセイバー！！」

槍から魔力弾が放たれた

「これは槍を媒介にした射撃魔法と思えばいい。此れの利点は魔力変換素質の力をプラスできる点とゼロ距離で突き刺した後に魔力弾を放てる所だな」

電気を帯びた魔力弾、氷。炎、と次々映像が変わり、中には直接槍を突き刺しネクロを消滅させているものもある

「龍也さんも魔力変換素質持ちなんですか？」

映像を見ていた、ティアナが尋ねると

「いや、８年前は使えなかったんだが、襲われて死に掛けて。次に起きたときは使えるようになってたな・・」

昔を思い出した様に呟くが、

「・・・・・・・」

死に掛けたときに何があったんだ?となのは達はそう思った

「まぁ、長い人生なにがどうなるか、判らないから面白いな」

笑っているが、龍也ほど濃厚な人生を送っているものも居ないだろう

「八神中将。高町一等空尉。八神二等陸佐がお呼びです。至急部隊長室までお願いします」

呼び出しのアナウンスが入り、飲んでいたコーヒーを置く龍也

「どうやら、はやてがお呼びらしい。なのは行くぞ」

立ち上がる龍也に返事を返し同じく立ち上がるなのは

「その映像はエリオにあげよう、偶に見て参考にすると良い。それと無茶な訓練は止めて置けよ、後に痛い思いをするからな」

それだけ言い残し食堂を後にする、龍也となのは

「なんか、龍也さんって、お父さんって感じがしますね」

エリオが呟く、優しくて、強くて、相談にも乗ってくれる。龍也は言われてみればお父さんという感じがするだろう

「うん、そうだね、私もそう思う」

キャロは同意するが

「そうかな？私は頼れるお兄ちゃんって感じかな」

スバルが先程の映像をコピーしながら呟く、既にティアナはコピーを終えている。

「私もかな？龍也さんはお兄さんって感じがするかな」

暫くの間、龍也がお父さんかお兄さんかと言う話題で盛り上がっていた、ティアナ達だった

第１６話に続く

# 第16話

第16話

はやての部屋に向かい歩いているが

「・・・一つ聞こう」

「何ですか？」

疲れた様子の龍也とは逆に嬉しそうなのは

「何故。腕を組む必要が？こういうのは普通。恋人同士でやるものでは無いのか？」

龍也が疲れている理由それは、食堂を出て直ぐなのはに腕を掴まれそのまま腕を組んでいる

「別に良いじゃないですか？それくらい減るものじゃないんですし」

喜色満面のなのは、確かに減るものでは無いだが

（また、殺気を感じる。何が原因だ？）

今まで浮いた話が無かった、なのは、はやて、フェイトの三人が何かと付けて龍也の傍に居ようとする。しかも聞けば龍也は蒼天の守護者で3人の想い人となれば、龍也に嫉妬する者も居るだろう

（早く、はやての所に行こう）

龍也はその歩幅を早めた

「兄ちゃん?どうしたんや。なんか疲れとる見たいやけど?」

部隊長室に入る前になのはは龍也の腕を放している、

「何、気にするな。大した問題じゃない」

心底疲れた様子で言う龍也、それと半比例して楽しそうな、なのはの笑顔に

「ああ~判った、また兄ちゃんなのはちゃんに何かやられたんやね」

はやての纏う空気が黒くなる。龍也は又か・・と呟いた

「なのはちゃんな、兄ちゃんは私のやって言うとるやろ」

「はやてちゃん、いい加減兄離れしたら?」

「「アハハハハ」」

フェイトとヴィータが居ないのがせめてもの救いだ

「はやて、何か用が合って、呼んだんだろう?」

纏っていた空気が消え。笑みを浮かべるはやて

「いやな、レジアス中将と聖王教会から、依頼があってな、派遣任

務が来たんや」

ニコニコのはやて

「それなら、何故フェイトたちが居ない？その話は通ってないのか？」

「それなら、大丈夫やで、いまフェイトちゃん達はフォワード陣に連絡をしに行ったから」

「それで？何処に派遣されるんだ？」

笑みを浮かべながら

「何と、派遣先は・・・第９７管理外世界「地球」日本地区海鳴市でーす！」

「本当か！」

「え！？本当に地球の海鳴市なの！？」

「そうやで～、んでその任務やけどロストギアの回収や！！」

「ロストギア・・レリックか？」

「そのロストロギアはレリックの可能性もあるらしいから、一概に管轄外とは言えんねそう、今回の任務は管理外世界へ出張し、正体不明のロストロギアを保護するという内容だ。どこも人手不足で人員を割けんらしいねん。で、そのお鉢が回ってきたっちゅうわけや」

「そうか・・では準備をして来るか・・」

部屋から出ようとすると

「ちょい待ち、んーと、ああやっぱりや、兄ちゃんなのはちゃんに無理やり腕組まされとるね」

机のディスプレイにはなのはが無理やり私の腕を掴んでるシーンが写されている。

「ん、なのはちゃん、ちょーと私とお話しするか。今すぐ部屋から出て行くか好きなほう選び」

凄まじい威圧感を放ち始めたはやてに

「じゃあ、私準備してくるね」

なのはは顔を青ざめ凄まじい速さで消えた

「兄ちゃんにはそうやな・・これでもやってもらおうかな～」

立ち上がり龍也の耳に耳打ちし、にこやかに笑いながら離れるはやて

「・・・了解」

私ははやての要求を呑んだ

「龍也さん、如何したんですか?」

「エリオ、気にするな」

背中にはやてを背負い、集合場所に現れた龍也は非常に消耗していた。

「良いなぁ、はやて兄貴におんぶして貰えて」

ヴィータがおんぶされている、はやてを見て羨ましそうに言うと

「ヴィータは兄ちゃんと手繋げばいいやん」

「・・・それもそうだな」

嬉しそうに龍也の手を握る、ヴィータの後ろで

「龍也、なんでそうなったの？」

若干黒い笑みで話しかけてくるフェイトに

「なのはにでも聞いてくれ」

疲れた声で言うしかなかった

機動六課の前線メンバー達とシャマルは転送ポートへ行くために、ヘリに乗って移動している。移動中、ティアナ達四人は地球について調べていた。

「第９７管理外世界文化レベルＢ・・・」

キャロはモニタを見ながら呟く。

「魔法文化無し、次元移動手段無し・・・って、魔法文化無いの！？」

ティアナは魔法文化が無いことに驚いている。

「無いよ。うちのお父さんも魔力ゼロだし」

スバルは当然のように答える。

スバルの御先祖は地球人だったらしい。

「スバルさん、お母さん似なんですよね？」

「うん！」

「いや・・・なんでそんな世界から、なのはさんや八神部隊長みたいなオーバーSランク魔導士が・・・」

「突然変異というか、たまたま・・・な感じかな？」

ティアナは突然の声に振り向くと、そこにははやてがいた。

「へ、あ、すみません！」

「ええよ、別に」

はやてに続き、なのはも話の輪に入ってきて、

「私も、はやて隊長も魔法と出会ったのも偶然だしね」

「な？」

「へ？」

楽しげに話す、はやて達を見ていると自然と笑みになる

「龍也さんも、地球生まれなんですよね」

突然スバルに話を振られる

「ああ、私も地球生まれだな」

「へ～、龍也さんも地球生まれなんですか・・まぁはやて部隊長のお兄さんなら当然ですよね。それにとても仲が良いですね。地球ではそんな感じなんですか」

ティアナの言葉には、何か含みがある

「ん？そうかティアナ達は知らないのか・・私とはやては兄弟ではないよ」

「えっ？」

驚きの声を上げるフォワード陣。てっきり龍也とはやてが本当の兄弟だと。思っていたのだ

「どういう意味ですか？」

スバルが尋ねてくる

「私の両親は既に他界していてな。孤児院を転々として私の父の弟である。はやての両親に引き取られたんだ」

「その時の兄ちゃんは酷かったで、まるで生きとる人形みたいやった。何も話さない笑わない、涙も流さない、感情一つ見たことが無かったで」

龍也の話に割り込む形ではやてが話す、はやての言うとおりだ、あの時の私は世界の全てに絶望していた、何故両親が死なねば活けなかったのか答えの出ない問答を永遠と繰り返していた

「それで、そんな兄ちゃんを見るのが嫌で。私は毎日話し掛けた」

あの頃を思い出しながら話しているのだろう。懐かしい目をしながらはやてが話す。なのは達も静かに話を聞いていた。龍也は余り過去のことを話さないので、こういう話は貴重なのだ

「そんで。一ヶ月位、話しかけとったら、ようやく兄ちゃんから反応があったんや」

「確か・・どうして僕は生きている・・だったか？」

龍也は覚えていた、母が自分を庇った事を、しかしそれの所為で父と母が死んだのも理解していた

「そうそう、んで初めて兄ちゃんが泣いてるのを見た。丸一日泣いっとたな、自分の所為でって繰り返し呟いて、ずっと泣いてた。でも次ぎの日から今みたいな、兄ちゃんになってたで」

そうだ、泣いて泣いて答えが出た、私は生かされている。ならば父さんと母さんの分まで生きないといけないと

一気に空気が重くなった。

皆がしまったという顔をしている。

「あ、あの、すいません・・・」

ティアナが謝罪をしてくるが

「何を謝る事がある、私が話すと決めそれを話した。もし謝るなら私の方だな。折角の楽しい雰囲気を台無しにしてしまった」

「龍也さんは寂しくないのですか？」

キャロがおずおずと話しかけてくるが

「寂しい？私が？クックッハハハハハッ！！面白い冗談だ。私は確かに一人になったさ、でもな新しい家族が出来たならそれで良いじゃないか。ほら何処に悲しむ必要がある？」

この時真に龍也のことを理解出来ただろう。龍也は悲しみも苦しみを全部乗り越えて今ここに居るのだ。龍也は強い。体が強いじゃない心が、信念が強いのだ、だから人を惹きつける不思議な魅力があるのだ、ヘリの中をさっきまでと違い暖かい空気が包む

（そうか・・だから私は龍也さんが好きになったんだ）

ティアナはどうして、自分が龍也のことが好きなったのか。判った最初は助けてもらったからだと思った。でもそれは違った龍也もまた悲しみの中に落ち。それを乗り越え此処に居る、それは同じく悲しみの中にいたティアナには光っているように見えた。だから好きになったのだ。

（そうか・・そうだったんだ）

どうして、龍也の事を好きになったのか判った。ティアナは微笑んでいた

穏やかな空気の中ヘリは転送ポートに着き、機動六課フォワード陣は第９７管理外世界へと向かうのだった。

第１７話に続く

## 第17話（前書き）

前にはじまりの魔法と同じという意見があり、とても気になってので改定しました、今回は父親としての龍也を強く出してみたので、改めて感想をもらえると嬉しいです！！それでは本編始まります

# 第17話

第17話

現在、地球に出張任務中の機動六課の面々はそれぞれの分隊に分かれ、ロストロギアの探査活動を行う為の役割分担をしていた

なのは達スターズ分隊はなのは、ティアナ、スバル、リインの四人で中距離探査を、

フェイト達ライトニング分隊はフェイト、エリオ、キャロの四人でサーチャーやセンサーの設置を、

はやては空からの広域探査のため、はやて、シャマルの他にシグナム、ヴィータが加わり四人の分担でいざ捜査開始と言う所

「私はどうすれば。良いんだ?」

問題が一つあったそれは龍也だ。龍也はしょうがないのでベヒーモスで、スターズの捜査に協力しようとしたが、はやてがストップを掛けた。なんでスターズで自分達じゃないのかと、何を言っていると思っていたらフェイトもずるいと言い始め。今は龍也が何処に協力するかを話し合っているのだが

「二人は引いてくれへん?兄ちゃんは私達に協力してくれるんやから」

「何を言ってるのかな?最初龍也さんはスターズに協力する、予定の筈だけど?」

「違うよ、龍也はサーチャーの設置を手伝ってくれるんだよ?」

「「アハハハハ」」

黒い空気が充満している

「龍也さん、アレ何とかなりません?」

スバルが冷や汗を流しながら言うが

「無理だ、昔からああなったら。ほっとくしかない」

私でもあの状態の三人は怖いのだ

「でもよ、兄貴このままじゃ、拉致があかねぇぞ」

今回は傍観者の立場のヴィータが言うが

「だが、どうしろと?残念ながら私の体は一つしかない」

正論だ、三人は自分達と行動して欲しいと言っているのだ

「そうだ!お兄さん。こうしたらどうですか?」

黙り込んでいたシャマルが。龍也に耳打ちする

「・・それしかないか」

私はシャマルの意見の意見を採用した

「「アハハハハ」」」

黒い・・辺りの空気の黒さに一歩さがるが

（兄上、頑張ってください）

（大丈夫です。龍也さんなら出来ますから）

シグナムとエリオから念話で励まされる。私は意を決しはやて達に声を掛けた

「ちょっと、三人とも良いか」

「何ですか？」

「なんや、兄ちゃん」

「龍也何？」

凄まじいプレッシャーだ、これなら一人で敵の真ん中に切り込んで行った時の方が楽だったな

「いやな・・そのままでは何時までたっても。決まらん。だからジャンケンで決めたらどうだ？」

シャマルの提案・・それはジャンケンだった。龍也の提案に考え込むはやて。どうだ成功かと思っていると

「そうやね、おっしゃ！！二人ともジャンケンで勝負やで」

頷くなのはとフェイト。

「「ジャンケン、ポン！！」」

そして勝者は決まった

「では行くが、準備は良いか？」

ベヒーモスに跨り、尋ねる

「ＯＫです」

タンデムシートのフェイトが答え

「こっちも大丈夫です」

サイドカーに乗った、エリオも返事を返す、龍也のサイドカーは大きめに設計された特注品のため、エリオとキャロが乗っても余裕がある。ジャンケンの勝者はフェイトだった、ちなみに負けたなのはとはやてはがっくりとうなだれながら捜査に向かった

「では行くとするか」

そうして４人を乗せたバイクは走り出した

「龍也、運転上手いね」

サーチャーを二個設置して三箇目に向かっているとフェイトが言うが

「何、様は慣れだ、それにベヒーモスのサポートも有るからな」

『ご謙遜を、マスターの運転技術は相当上ですよ』

バイクのスピードメータの横のモニターから、穏やかな男の声が聞こえる、彼がベヒーモスのＡＩなのだ

「でも、この発想は無いですよ。インテリジェンスの移動用のデバイスを作るなんて」

「普通は考えないな」

穏やかな雰囲気で走っていき、次のサーチャーの設置場所に向かいサーチャーを設置する

「ふぅ・・龍也・・そろそろ一回休憩しようか？」

サーチャーの設置の追えた所でフェイトが言う・・確かにそろそろ１回休んだ方が良いな・・私も１回休んだ方が良いと感じ

「そうだな・・ちょうどここは公園だし・・ここで少し休むとしよう・・」

フェイトに休むとしようと言うとフェイトは

「それじゃあ、私はジュースでも買ってくるよ、龍也達はベンチで待ってて」

フェイトと別れ、エリオ達を連れ公園の奥に向かっていると・・子供を肩車した親子らしき男性と女性とすれちがう・・

「「・・・・」」

エリオとキャロが肩車して貰っている子供の顔をじっと見ている・・私はその2人の姿を見て

（ちょうど甘えたい頃だからな・・）

私はそんな事を考えながらエリオとキャロを抱き上げ肩の上に座らせると、2人は

「「龍也さん!?」」

驚き肩から降りようとする2人に

「ほらほら暴れると危ないからな、大人しくしてろよ?」

そう笑い公園の奥に向かって歩き出した・・

・・凄く良い気分です・・私は龍也さんの肩に腰掛けながらそんな事を考えていた・・

さっき肩車をして貰っている子供が羨ましいと思った・・私もお父さんに肩車をして欲しいなと思ってしまった・・でも今は違う・・龍也さんの肩に腰掛けていると・・龍也さんが本当のお父さんの様に見えてくる・・確かに目付きは鋭くて怖いでも・・それ以上に優しい人だと私は思う・・そんな事を考えていると思わず・・・

「「あの・・お父さん・・！！」」

エリオ君と同時に龍也さんの事をお父さんと呼んでしまう・・しまったと思い龍也さんの顔を見ると

「ん？どうした？何か用か？」

気にした素振りを見せず笑いかけてくる龍也さんにエリオ君が

「怒らないんですか？・・お父さんなんて呼んだのに・・」

エリオ君がおずおずと尋ねると

「なんで怒るんだ？別に構わないぞ、なんと呼ぼうが私は気にしないからな・・それに2人の様な良い子にお父さんと呼ばれるのは悪い気はしないぞ？」

からからと笑う龍也さんに

「それじゃあ・・・その・・お父さんって呼んでも良いんですか？」

龍也さんに尋ねると

「構わないよ・・好きに呼べば良いさ・・」

笑う龍也さん・・いやお父さんに嬉しくなり

「えへへ・・お父さん・・」

笑いながらお父さんと言うと

「ん？何だ？エリオ、キャロ」

同じく笑いながら返事を返してくれるお父さんに

「何でもないです～」

そう笑いかけると

「？」

首を傾げるお父さんに確り抱き付きながら、私達は公園の奥に向かった・・

「お待たせしました・・龍也・・何か合ったの？２人と仲良くなってるみたいだけど？」

首を傾げるフェイトさんにお父さんは

「何でもないさ・・なっ２人とも」

笑いかけてくるお父さんに頷き

「「そうですよ～何も無かったですよ、フェイトさん」」

笑いながらフェイトさんに言うと

「何でもないなら良いけど・・はい、ジュース」

フェイトさんからジュースを受け取り、それを飲みながら休憩し、しばらくしてから、ベヒーモスに戻る龍也の両手はエリオとキャロと繋がれていた。その様子に自分が居ないうちに何があっただろうと首を傾げる、フェイトを乗せ龍也達は次のサーチャーの設置場所に向かって行った・・

デバイス紹介
ベヒーモス
ジェイル作のバイク型インテリジェンスのデバイス。ＡＩは男で柔らかい口調と丁寧な言葉使いが特徴、作成目的は隻腕の龍也の移動をサポートしバイクに乗ったままでも戦えるである、だがバイクに乗ったまま戦うには高度なバランス制御が必要になるためインテリジェンスで製作された。待機状態はブレスレットでダークネスのときはペンダントにしていた。通常形態にサイドカーモードと二つのモードが有る

第１８話に続く

# 第１８話

第１８話

サーチャーとセンサーの設置を完了した頃に各隊長達が念話で報告を行い、ライトニングはなのは達スターズと合流す少し休んでから、現地の民間協力者から借り受けているコテージへ戻ることになっている為スターズ達と合流する為「翠屋」という店に移動する。

「翠屋・・か。何か行きづらいな」

龍也はなのはの兄の恭也が苦手なのだ

「ふふ、大丈夫ですよ。恭也さんは居ないそうですから」

その言葉に胸を撫で下ろす

「あの・・フェイトさん。恭也さんって誰ですか？」

エリオが誰のことを話しているのか判らず、尋ねると

「恭也はなのはの兄で、何を勘違いしてるのか私をなのはの彼氏と間違えて、殺されかけたことがある」

「そんな・・まさか」

信じられないとキャロが言うが

「なのはの父親は古武術をやっていてな、その流れで恭也もその武

術をやってるんだが・・騎士甲冑を何事も無い様に切り裂いてくる」

その時は本気で死を覚悟したがなのはによって助けられた、このときなのはは天使に見えたが、にっこりと黒い笑みを浮かべ、スターライトブレイカーを放った時私は悪魔と思ってしまった。

「・・・・・その人は、本当に魔導師じゃないのですか？お父さん」

「お父さん！？」

うっかりエリオがお父さんと呼んでしまい、フェイトが動揺する

「え・・何で、龍也がお父さんって。呼ばれてるんですか？」

かなり動揺した様子でフェイトが言うが

「なに、私とフェイトが夫婦に見えたそうだ。それでお父さんって呼んで良いと言っただけだよ」

フェイトはブツブツと「じゃあ私はお母さん？龍也の妻？良いかも・・」と呟きトリップしてしまった

「おい、正気に戻れ」

軽く頭にチョップを入れる

「はうっ！」

痛みで頭を抑えるフェイトにヘルメットを渡す

「それでは翠屋に行くとするかね」

和やかな雰囲気で翠屋に向かい、ベヒーモスを走らせた

「いや、変わってないな」

翠屋を見上げ呟く、８年前と何も変わってない、自然と笑みが零れる

「あっ！ティア、龍也さん達が来たよ」

「言われなくても見れば、判るわよ」

店の外に居た、スバルとティアナが歩いてくる

「「お疲れ様でした」」

二人同時に言うのでその様子に笑っていると

「いや。私は大丈夫だよ、だが二人はな・・・」

後ろを見ると、疲れた様子のエリオとキャロがフェイトに連れられ歩いてくる。途中でフェイトがもう少し速く出来ませんかと言ったので、少し加速したのが原因らしい

「あ～、景色が飛んでいく～」

「なんか・・気持ち悪いです」

「二人共。大丈夫？」

フェイトが申し訳なさそうに言う、まぁ自分が原因なのでそれも当然だが

「「・・・・龍也さん、どれくらい加速したんです？」」

若干顔を青褪めせさ、スバルとティアナが尋ねる

「何。たかだか。８０キロ程だ」

バイクのサイドカーで８０キロはかなり怖いだろう、ちなみにベヒーモスの最高速度は３００キロだ

「大丈夫か？」

頼りない足取りで歩いてくる、エリオとキャロに声を掛けると

「だ・・大丈夫ですが・・それより店の中に入ってもいいですか？」

「ああ、店の中で少し休ませて貰おう」

フラフラのエリオとキャロを連れ、翠屋に入る

カランコロン

入り口のベルが鳴る

「いらっしゃい・・おやもしかして龍也君かい。なのはが懐かしい人が来ると言っていたが、まさか君とは・・」

入ると同時に士郎が話しかけてくる、エリオとキャロはフェイトと共に私の席の隣に座っており。並び順は私。フェイト、エリオ。キャロ、スバルとティアナとなっている。

「お久しぶりですね、士郎さんも元気そうで何よりですよ」

懐かしく、自然と笑みになる

「本当だよ、君が行方不明になって、もしかしたら死んでしまったと聞いた時は焦ったよ」

コーヒーを置きながら士郎が笑う

「はは、まぁ五体満足とは言いませんが取り合えず、生きてますよ・・所でなのはは如何したんです?此処で合流する予定何ですが?」

「ああ、何やら、桃子に連れられて何か作ってるよ。所で君もどうだい?特製シュークリームは?」

シュークリームをスバル達の前に置き、尋ねてくるが

「人が悪いですね、私は甘いものが苦手なんですよ?」

「知ってるさ、ただ大事な娘に心配を掛けさせた君に、少し意地悪がしたくなっただけだよ」

笑い始めた士郎に連れられ笑い、店の中が穏やかな空気に包まれるが

「お父さんは・・食べないですか?」

復活し、シュークリームを食べていたキャロが爆弾を投下する

「「!?!?!?」」

スバルとティアナがシュークリームを喉に詰まらせ、咳き込む

「ゴホゴホ、なんで龍也さんが。キャロにお父さんって。呼ばれてるんですか」

咳き込みながらスバルが詰め寄るが

「うん?何エリオとキャロが呼んで良いかと言うので、良いと言ったまでだが」

ほ〜。と胸を撫で下ろす、スバルとティアナ

「良かった〜」

「何が良いんだ?」

二人が何故そんなに喜んでいるか判らず、首を傾げていると

「君は相変わらずだな」

肩に手を置かれ、溜め息を吐かれる、何か自分が悪いんではないが責められている気がし、肩身が狭い思いをしていると

「久しぶりねぇ〜龍也君元気そうで何よりだわ」

にこやかに笑いながら、桃子となのがが厨房から出てくる。なのはの手には何かが入ったカップがある

「ええ、お久しぶりですね、桃子さん貴方は相変わらずお綺麗ですね」

「あらあら、こんなおばさん捕まえて・・そういうのはなのはに言って欲しいわ」

と和やかな雰囲気になるが

「フェイトちゃん、裏で聞いてたけど勝ったと思わないで」

「ふふ、これはもう私の勝ちだよ、このままはやてにも兄離れさせるんだから」

「「ウフフフフ」」

黒い空気が発生しており、最年少コンビは青くなり、スバルとティアナは平然としている。どうやらこの二人は耐性を身に着けたらしい

「アレ、如何にか出来ない？」

黒い二人を見て、唖然としながら桃子が言うが

「残念ですが無理です。何故ああなっているのか判らないので、止め様がありません」

言い切るがその様子に溜め息を吐く、桃子、スバル、ティアナ。何だ？私が悪いのか

「貴方達も苦労するわ、彼は凄く鈍感だから・・はぁ～なのはの恋は実るのかしら？」

溜め息を吐きながらなのは後ろの立ち

「えい！」

可愛らしい掛け声と共にチョップを繰り出すが

ゴス！！

命中した音は凄まじく重いものだった

「う～お母さん何するの？」

涙目でなのはが文句を言うが

「貴方ね、料理を教えてって言うから、教えたのに友達と喧嘩して如何するの？」

「！？」

「判ったなら、早くしなさい。折角冷やしたのに温くなったら意味無いわよ」

フェイトとの睨みあいを止め、私の隣に座り

「あの・・これ・・作ってみたの、龍也さん食べてくれますか？」

置かれたのは赤いゼリーだった、上に置かれたミントと生クリームが良いアクセントになっているが

「いや・・な折角作ってくれたのは嬉しいが。私は甘い物は苦手なのだが・・」

「大丈夫です・・これならきっと龍也さんでも食べれますから」

握り拳を作り、赤くなりながら力説する。なのはの姿は普段の鬼教官の姿と余りにかけ離れ、六課の局員が見たら恐らく別人と勘違いするほど雰囲気が違う

「むぅ・・判った、では頂こう」

苦い顔をしながら目の前のゼリーを1掬い取り、口に運ぶ、口に広がったのは甘さではなく、苦味それも自分の好きな紅茶の苦味だ

「これは・・ダージリンか・・」

口に広がる苦味と風味は間違いなく、自分の好きなダージリンの物だ。驚きなのはの顔を見ると

「へへ、龍也さんが甘いものが苦手なのは知ってたから。甘くない紅茶のゼリーを作ってみたんだ。どうかな?」

「これは美味い、私の好みにピッタリだ、甘さも苦味も丁度良い」

夢中で口に運ぶ。私をみて信じられないと言う顔をしている、フェイト達

「何かね。私がゼリーを食べるのがおかしいか？」

「いえ、違います。ただ龍也さんは甘いものが嫌いと聞いていたので」

「まぁ、甘いのは嫌いだが、ゼリーとかは好きなんだ、昔母さんが作ってくれたからな・・」

昔を思い出しながら呟く、昔は良く母さんがゼリーを作ってくれた、それはとても美味しくてとても好きだった。でも母さんが死んでからは甘いものを食べると、その時を思い出すから極力甘いものは食べないようにしていた。

「あの・・すいません。余り話したい事じゃないですよね・・」

スバルが俯きながら言う、

「何気にするな・・もう割り切っていることだ。それに私は決めたんだ前を見るとな」

「あの・・本当すいません」

良いと言っているのにしつこいな・・

「良いと言ってるだろ。気にするなスバル。すいません桃子さん。スバル達にシュークリームお願い出来ますか？」

空気を変えるために、皆にシュークリームを頼む

「あの・・悪いですよ」

「ここには任務に来ているが今は休憩中だ。ならこんな重い空気は相応しくない。なら美味しいものでも食べて笑うとしよう」

さっきまでの空気は消え、和やかな空気が包んだ頃

「そう言えば、どうやってコテージまで帰るんだ？ベヒーモスには４人までしか乗れんぞ？」

「大丈夫ですよ、此処に来たのは休憩と此処に置いてある。私の車を取りに来たんです」

話を聞くと、此処にはハラオウン家で使っている。ライトバンがあるらしい

「そうか・・それではコテージに戻るとするか。休憩も充分だろう。・・・」

シュークリームの代金を払っていると

「そうだ・・士郎さん。ここは持ち帰りが出来ましたね」

「うん、出来るよ。何か妹さんに持って帰るのかい？」

「はい、シュークリームを１１個お願いします」

了解と頷き、箱にシュークリームを詰めていき、それを受け取り。

フェイトの車に乗るが

「龍也は助手席だよ」

とフェイトが言い出し、一悶着有るかと思ったが

「フェイトちゃん、ちょーといいかな」

なのはに連れられ翠屋の陰に行き、二言ほど話すと

「うん、良いよ」

「じゃあ、これね・・」

何かの写真らしきものを渡していた

「なのは?今何を渡したんだ?」

その写真が気になり尋ねると

「気にしない、気にしない。」

と笑い誤魔化す、後に知るがそれは私の写真らしいが・・しかも隠し撮りの物だ。この事実を知った後、自分の部屋を探したがそのカメラを発見することは出来なかった事を記していく

「じゃあ、行こうか?」

そのポケットに入れた、手に何を持っていると問い正しくなった

「・・・・・何だろうな何か嫌な予感がするよ」

「アハハ・・」

乾いた笑い声を挙げる、エリオに連れられ車に乗り込んだ

「お～、お帰り皆。お疲れ様」

戻るとコテージから折り畳みの机などを出し昼食の準備をしている
はやて達が居た。だがそれを見て動揺する

「八神部隊長！？」

「部隊長自ら鉄板焼きを！？」

「そんなの、私たちがやります！」

フォワード陣はおもいっきり焦った、食事の用意を部隊長自ら行っ
ているのだ。本来そのような雑事は部下の仕事である。

「ん？あぁ、でもな、待ち時間あったし、お料理は元々趣味なんよ
？」

確かに、すごく慣れた手つきで料理をしている。はやての料理姿を
見て、

「ふむ、では私も久しぶりにはやてと料理をするとするかね」

「いいんやで？兄ちゃん疲れとるやろ。」

置いてあった包丁を手に取り野菜を切りながら

「この程度で疲れるほど柔じゃないさ」

ストトトと軽やかな音を立てて刻まれて行く野菜たち

「さて、お前たちは休んでいるといい。直ぐに出来るからな」

「でも・・」

すまなそうな顔をする、フォワード陣だが

「気にするな・・・いろいろと疲れているだろう。お前たちは休め。休むのもまた仕事の一つだ」

「それは兄ちゃんにも言えるで？」

ジト目で此方を見るはやてから、目を逸らしながら

「まぁ・・此処は私とはやてに任せて、休んでいるといいさ」

何度も言われ、遂にはあきらめたのか席に着いた、なのは達を見ながら私は調理を再開した

第１９話に続く

# 第１９話

第１９話

「んん～ええ具合や～」

バーベキューセットで調理をしながら、はやてが味見をして頷く。
作っているのは焼きそばだが

「兄ちゃんは、何を考えてお好み焼き？」

龍也は何を考えてかお好み焼きを焼いている

「ふむ、やはり鉄板といえば、お好み焼きだと思うが？」

お好み焼きをひっくり返そうとするが

「む、袖が邪魔だな・・」

コートが邪魔で腕が動かしにくいので、コートを脱ぎ机の上に置くが

ミシミシ

と嫌な音が机から響き次の瞬間

ドズン！！

机を砕きながら凄まじい音を立ててコートが地面にめり込んだ

「・・・・・・」

目の前で起きた現象に驚き硬直するなのは達

「むっ！しまった。重さをそのままにしたままだった」

地面にめり込んだコートを片手で掴み挙げ。襟のところのボタンを押し、机に置くと今度は普通に置けた

「兄ちゃん・・そのコート何や？」

焼きそばを炒めながら、尋ねてくるはやてに

「これかね？これは私の魔力を重さに換算して重くなるというものだ」

説明しながら。お好み焼きをひっくり返す。うんいい焼き加減だ。

一人納得していると

「兄上。それで重さはどれくらいなんですか」

「たがだか２５０キロだ」

「・・・すいません、お兄さんは本当に人間ですか？」

シャマルの言葉に同意した者が何人居ただろうか

「兄ちゃん、それ没収や。シグナムそれ隠してきて」

コートを持っていってしまうが

「襟に気をつけろ、ボタンを押すと重くなるからな」
声を一応掛けておく、また一つ龍也の謎が増えながらも調理は終了した

シグナムが戻ってきてから、全員でコテージの横に備え付けの机に座り

「では、頂きます」

「「「頂きます」」」

あれから３０分ほどで調理は終わり、皆の前には分けられた焼きそばがある。お好み焼きは大皿に乗せてある

復活した皆で和やかな食事は進むが

「これ凄く、美味しいですお父さん・・・・あっ！」

食事に感動したエリオがうっかり爆弾を投下する、和やかな妙にピリピリした空気が机を包む

（エリオーーー。何故口が滑った）

スバルが動揺しながらも、念話を使う

（すすすす、すいませんついうっかり）

スバルとエリオが動揺していると

「兄ちゃん、一つ質問があります」

はやてが挙手する

「どうぞ」

自然体で焼きそばを口に運ぶ龍也

「はい、何故兄ちゃんは、エリオに・・この場合キャロもやね。お父さんって呼ばれてるん？」

笑っているが気配は黒い、なのは達は震え、ヴィータ達も顔が青い

「至極簡単だよ、私の事をお父さんと呼びたいのと言うので良いよと言っただけだよ」

「ああ～そうか、うんうん判る判る。私も一時期兄ちゃんのお父さん言うたな～」

黒化には至らず、にこやかに笑うはやてだが

（フェイトちゃん別にエリオとキャロは兄ちゃんのこと。お父さん呼ぶのはいいでもそれを武器に兄ちゃんに迫ったら・・判ってるよな）

（はい、そんなことはしませんです、はい）

（そう、そんなら良いわ、ちゃんと正々堂々やで？）

念話でかなり物騒な話をしていた、が和やかなに食事は進んで行き、皆で話をしていると、敷地に一台のバンが入ってくる

「?はやて誰か来たが、お前が呼んだのか?」

食後の紅茶を飲んでいた龍也が尋ねると

「うん、そうやで、ほら此処お風呂ないから、スーパー銭湯行こうって思って。けどフェイトちゃんの車じゃ全員乗れないから、ちょっと応援を頼のんだんや」

そんな会話をしていると中から3人の女性が降りてくる

「はぁーい!」

落ち着いたお姉さんというかんじのエイミィ。

「みんなー、お仕事してるかー?」

元気な女の子といった感じのフェイトの使い魔のアルフ。

耳としっぽがとてもラブリーである。

「お姉ちゃんズ参上!」

眼鏡をかけたなのはの姉の美由紀。

「はは、相変わらず元気そうだ」

私は紅茶を一口含み。笑った

「いや～龍也良かった、良かった生きてたんだな」

背中をバンバンと叩くアルフに

「流石に痛いから止めてくれないか？」

痛みで顔を顰めるが、お構い無しでバンバンと叩いていると

「はいはい、積もる話は後にして、さぁ皆でお風呂へ行こ～」

皆で車に乗り込むが

「私はバイクで行く。流石にこれだけの女性に囲まれるのは御免だ」

龍也だけはベヒーモスで移動した、この時残念そうな顔をしていた者が６人居たが気にしてはいけない

スーパー銭湯に到着し皆で店に入っていくと

大人数で入店してきたはやて達に一瞬驚きつつ、店員は来店客に接客をする。はやては人数を店員に告げようと、指で頭数を数える。

「えーと・・・大人１３人と・・・」

フェイトが自分の隣にいるエリオ達を見て、はやてに続けて店員に人数を言う。

「子供４人です」

ティアナは確認のために子供のメンツの顔を見ていく。

「エリオと、キャロと・・・」

「私と、アルフです！」

リインがティアナに続けて手を挙げて自分達をアピールする。

「うん！」

アルフは嬉しそうに返事をする。しっぽをブンブン振って、獣耳がピクピク動いているが一目に晒していいのだろうか？

スバルはヴィータの方を向き、

「えっと、ヴィータ副隊長は？」

と、確認を取ると、ヴィータは不機嫌そうにスバルを睨みつけ、

「あたしは大人だ！」

言ったあとぷいとソッポを向いたはヴィータの頭を龍也がを撫でた。店員は若い団体のパワーに若干圧倒されつつも自分の仕事を遂行するためにはやて達団体客を案内する。

「あ・・・はい！では、こちらへどうぞー！」

はやてはレジへ向かい財布を取り出す。

「お会計しとくから、さき行っててな」

「はーい！」

一同は声を揃えて返事をする。まるで引率者と生徒のようである。

エリオと龍也は店の中へ進んで、

「男」

「女」と分かれて吊されている暖簾を確認し、

「・・・ホッ。よかった、ちゃんと男女別だ」

と、エリオは心底安心した。

「こういう公共の場所は当然だと思うがな・・・あぁ、そういえばエリオは寮内の風呂も女性用に入ってるんだったな？」

龍也もまた女子寮に居るが部屋に備え付けの風呂に入っている、エリオが龍也の部屋に行こうとする度フェイトとキャロによって妨害されている

「は、はい。僕はまだ子供だからって、キャロと二人で女子寮で生活してますから・・・」

エリオは困ったような顔をして、寮内の生活を思い出したのか顔を赤くする。

「まぁ、それを言えば私も女子寮に居るがな」

「お父さんは一人じゃないですか！？僕は普通に女子寮で暮らしてるんですよ」

龍也の立場を羨ましそうに言うが

「いや、これでも私は気をつけているのだよ？なにせ部屋に鍵を掛けなければ、気がつけば隣にはやてが居るなど良くあることだ」

カラカラと笑うが。笑い事でない鍵をしていようがお構いなしでいる、はやてに肝を冷やしたことが何度あるかと話していると

「はやてちゃん、それは卑怯だよ」

「卑怯？違うで妹の特権や」

睨みあうはやてとなのはがいた

「広いお風呂だって。楽しみだね、エリオ君！」

エリオはキャロの嬉しそうな顔を見て少し笑い、自分も楽しもうと思った。

「あ・・・うん、そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて」

キャロはエリオの言葉に顔を曇らせる。

「え・・・エリオ君は？」

エリオはキャロの悲しそうな表情に躊躇いつつも、防衛ラインを展開する。

「ぼ、僕は・・・ほら一応、男の子だし」

キャロはエリオの言葉に少し考え込み、入浴する際の注意書きに目を向け、書いてあることに笑顔を見せ、それを指差す。

「んー・・・でも、ほら、あれ！」

エリオはその指差す方の注意書きに目をやる。

「注意書き？えっと・・・女湯への男児入浴は１１歳以下のお子様のみでお願いします」

キャロはその注意書きを読んだエリオに笑いかけ、エリオの防衛ラインを崩していく。

「フフッ、エリオ君１０歳！」

キャロに指差され、エリオは慌て逃げ場を探す。

「え！？あ・・・」

何か、何か言って断らないと！そんな事を必死に考えているとキャロに援護射撃をしてくる人が現れた。母親代わりのフェイトである。

「うん、せっかくだし、一緒に入ろうよ」

キャロはフェイトの援護射撃に喜ぶ。

「フェイトさん！」

エリオはまさかフェイトがキャロに援護射撃をするとは思ってもみ

なかった。

いくら子供とはいえ、エリオは１０歳の男の子。フェイト達１９歳の思考では、もうそんな歳の男と一緒に風呂入るという選択肢が無いと思っていたからだ。

「い・・・あ・・・い、いや、あ、あのですね・・・それはやっぱり、スバルさんとか、隊長達とかエイミィさん達もいますし！」

エリオは必死にＮＯと言う。あまりキツく言えないので、断っているように聞こえないが。

「別に私は構わないけど？」

えらくアッサリと言うティアナは、エリオに見られても何とも思わないようだ。

「てゆーか、前から、頭洗ってあげようかとか言ってるじゃない」

スバルもエリオを男として見ていないようだ。いや、スバルの場合、バリアジャケットの露出具合を考えると、男の目を気にしないようにも思えるが、龍也が居るようになってからはデザインが多少変更され、露出が少なくなっている

「う・・・」

エリオは段々逃げ場が無くなっていく焦りから、口数が少なくなってきた。

「私等もいいわよ。ね？」

「うん」

「いいんじゃない？仲良く入れば？」

エイミィ、美由紀、なのはと、次々とエリオ女湯入浴許可がおりてくる。そしてフェイトは、「男が言ってほしい言葉」を甘えた風な声を出し、とどめをさした。

「そうだよ。エリオと一緒にお風呂は久しぶりだし・・・入りたいなぁ・・・」

エリオは固まった。

「あ・・・あの・・・お気持ちは、非常に・・・なんですが、スミマセン！遠慮させていただきます！」

いままで面白いそうだからと黙っていた龍也だったが、流石にエリオがかわいそうになり、助け舟を出してやることにした。

「そう無理強いをするな、やはりエリオも男の子と言う訳だ、たまには男と入りたいこともあるだろう。それに偶には私も男同士の話をしたい時もある。例えば・・タイプの女性とかな」

「！？！？！？」

顔色が変わる女性陣いままでそういうことを話したことが無い龍也が、好みの女性のことを話す。これはチャンスだと
ニヤリと此処で笑う、龍也は自分を餌にエリオを解放した、龍也の助け舟にエリオはものすごく喜んだ。それはもう死地への援軍のよ

うに。

「え？・・本当ですか？」

ティアナが確認を取る

「何かね、偶にはそういう話をしたい時もあるさ。偶にな。それでは行くか？エリオ」

「はい！」

「先に上がったとしたら。ロビーで待っているからな」

龍也はそう言うとエリオを連れ男湯へ入っていった。

「これはチャンスや、兄ちゃんの好きなタイプを知るとても貴重なチャンスや」

はやて達が握り拳を作っていると

「人数分、ロッカー確保できたわよー。入りましょ」

シャマルが一同にそう言うと、

「ハーイ」

声を揃えて返事をし、ゾロゾロと女湯へと入っていった。

しかし、ただ一人、

「・・・えーっと・・・」

キャロとリィンは先程の注意書きを見ながら、何かを企んでいた。

龍也とエリオは脱衣所で並んで服を脱いでいる。エリオは龍也の細身ながらも鍛えられた。龍也の体を見て、ほーと驚きの声をあげる。無駄な脂肪の無い龍也の筋肉を見て、自分の体と見比べてみる。

「スゴイですね、お父さん。やっぱり僕って貧弱かな？」

自分の腕で力こぶをつくって見せて、龍也の細いながらも鍛えられ無駄な脂肪の無いの腕と比べる。

そんなエリオを見て龍也は笑い、

「お前はまだ成長途中だ、無理せず焦らず地力を付ければ、これ位にはなるさ」

周りの視線が龍也に集まる。鍛え上げられた体や、顔に目がいく人もいたが、一番目を引いたのは胸部に有る何かに貫かれたような傷だエリオもそのあまりにも大きく深い傷に思わず目が行ってしまう。龍也はエリオの視線に気が付き、傷を指差し

「ああコレは、エリオも知ってるだろ。私が二つのロストギア事件を解決したのは。でもな二つ目の事件でな胸を貫かれたんだ」

「そうなんですか？」

「でもこれは護った証みたいなものだからな。勲章とでも言っておこうか」

笑いながら一番近くの一番近い風呂を指差し浸かった。

しばらく湯舟に浸かったところで体を洗うことにした二人は、並んで洗い場へ座る。

「ああ、すまんが、背中を洗ってくれるかね？」

そう言って龍也はエリオに背中を向ける。エリオは嬉しそうな顔をして、

「は・・・う、うん、・・・お、お父さん」

エリオは恥ずかしそうに言いながらも、タオルにボディソープをのせて龍也の背中を洗いだす。エリオは初めて見る大人の男の人の広い背中を一生懸命洗う。

「すごく、背中が大きい・・・ホントにお父さんみたい・・・」

しばらく洗っていると、

「よし、では次はお前だな！」

そう言って龍也はエリオに振り向きつつ、エリオの体をグルンと回転させた。

「え！？あ、そ、そんな、悪いですよ！」

エリオは背中越しに恐縮するが、龍也はわざと気落ちした声で。

「なんだ？そんなことを言うなんて寂しいじゃないか。それと何かね？エリオはやはり私が父親代わりが嫌かね」

「いえ、そうじゃないんです・・「じゃあ、良いじゃないかお前が私の背を洗ってくれたんだ、お返しだよ。様は洗いっこだな」

そう言いうと龍也はエリオの小さい背中を洗いはじめる。少し力が強いのか、痛い痛いと言っていたが、男ならこれくらいの強さで洗うんだ、我慢しろ。などと言われてしまい、エリオは痛みに耐えながらも、どこか嬉しそうだった。そんなとき

「エリオくーん！」

男湯には似つかわしくない可愛らしい声が聞こえた。声のした方を向くと、そこにはバスタオルで体を隠したキャロが立っていた。

「キ、キャロ！？どうしてココに！？ココ男湯だよ！？」

「ふむ・・やはり来たな」

動揺するエリオと予想通りと言った龍也

「えへへ、１１歳未満なら、「エリオ、此処は１１歳以下なら女の子も入れるんだ。つまり」

「お兄様～」

「こういう訳だ」

龍也途中で割り込みキャロの説明をカットすると、キャロが来たほうから同じようにリィンが来た

「あれ？エリオ君、背中洗ってもらってたの？」

キャロは龍也がエリオの背中を洗っていたのを見て、いいなーと言い出した。

「リィンも洗いっこしたいですー」

リィンは指をくわえて龍也達を見る。龍也はそんなキャロとリィンを見てクスリと笑い、

「じゃあ、４人で洗いっことするかね？」

そう言うと、キャロ、龍也、リィン、エリオの順に並び、背中の流し合いをしたのだ

その後、エリオとキャロは子供風呂へ行き、二人で風呂に入っているところをフェイトとアルフが乱入、そのままエリオは女湯へと連行されたがリィンはそのまま残っている

「どうしたんだ？お前も女風呂に戻ったらどうだ？」

隣で笑いながら湯船に浸かっているリィンに言うと

「リィンは久しぶりにお兄様と一緒に入りたいですよ～本当ならはやてちゃんも居て欲しいですが」

そう笑うリィンに笑いかける

「そうかね。だが昔ならいいが今は駄目だな、はやても大きくなったからな」

暫く無言で湯船に浸かっていると

「お兄様、一つ聞いて良いですか？」

「うん？何かね」

突然真剣な顔をしたリィンに首を傾げると

「はいです。先程お兄様はエリオと好きな女性について話すと言ってたです。それはもう話したですか？」

「そういえば・・話してないな」

話そうと思ったところで女風呂に拉致されたから、話せずじまいだ

「まぁ・・次の機会にだな」

「お兄様、リィンに話してくれませんか？」

「うん？聞きたいのかね」

「はい！」

「それは・・・」

「それは・・」

リィンが続いて言うが

「それは・・秘密だ」

口に手を置き笑う

「ええ～教えて欲しいですよ～」

「リィンは女の子だからな、私は男同士の話と言ったろ、だから秘密だよ」

「でも～」

リィンが聞きたそうな顔をするが

「次の機会を楽しみにしているといい。私はもう出るがお前は?」

話を中断して風呂から上がるという龍也に

「そうですね～。リィンも出るです」

元気良く返事を返すリィンに

「そうか・・では合流したらフルーツ牛乳を買ってやろう。そうだエリオとキャロも誘っておくといい」

風呂から上がり、リィン達にフルーツ牛乳を買い、他の面々を待っていると

「皆も上がったか・・どうしたんだ?なにかとても不機嫌そうだが?」

龍也でも判るくらい、はやて達は不機嫌オーラを撒き散らしていた。
エリオを女風呂に戻した時に龍也の好みを、もう聞いているだろうと思っていたのだがどうやら早すぎたようでエリオはその事を知らなかった。そのことで一気に不機嫌になったのだが

「いや、なんでもないで、気にしんといて・・」

はやてが俯きながら言うと

「そういうなら深くは聞かんが・・なんだその髪はぼさぼさじゃないか。ほらこっち来い、梳いてやるから」

その言葉を待ってましたという感じで龍也の元に行くはやて。はやては髪を梳かずに行けば龍也が髪を梳いてくれる事を計算に入れていたのだ。

「やれやれ、何度も言うが髪は女の命と言う、もう少し気を使ったらどうだ?」

髪を梳いてやりながら言うが目を細め笑ってるだけで、何の反応も無い、やれやれと肩を竦め髪を梳き続け終わった頃には不機嫌さは消え笑顔になっていた。

「ほな、帰ろうか」

龍也に髪を梳いてもらいご機嫌のはやての一声でコテージへ帰ろうとしたとき、

キィーン・・・

皆が持っているデバイスが反応した。ロストロギア反応である。

第２０話に続く

## 第２０話（前書き）

今回は読者の方にお願いがあります、前に書いたと思いますが作者は原作を知りません、ナンバーズも出したいと考えていますが、肝心のナンバーズの各々の呼び方が判りません。なので教えてくださると有り難いです

# 第２０話

第２０話

スターズ、ライトニングの面々はそれぞれのバリアジャケットに身を包み、戦闘態勢をとる。シャマルはロストロギア反応のあった河川敷付近に結界を張った。フォワード四人はロストロギアのいる河川敷へ向かっている。

「お父さん？バリアジャケットは？」

私服のままの龍也に疑問を感じエリオが尋ねるが

「私が出てもいいのか？たぶん一瞬で終わるが」

「・・・それもそうですね」

龍也の言葉に納得するエリオ、龍也の全てに対応できる戦闘スタイルは一種の完成系である。エリオたちから見れば完璧らしいが龍也は収束、砲撃が苦手と言う欠点が有る（本人が言うだけで実際はＳＳ＋である）

「ですが、そのままでは危険ですよ」

騎士甲冑を展開したシグナムに言われ

「大丈夫だ、身体強化は掛けておく、それだけで十分だろう」

龍也を蒼い魔力が包む、これだけでも相当なポテンシャルがある、

以前この状態でシグナムと模擬戦をしたが結果はシグナムの惨敗、これによりシグナムのプライドが粉々にされたのは割と最近の事だ

「龍也さんは如何するんです？」

クロスミラージュにストライクバレットをセットしながら、ティアナが尋ねる

「とりあえず見ているだけだ」

龍也が出れば恐らく一瞬で終わる、グラムにベレン二種類のロストギア級のデバイスを所持する龍也の戦力は恐らく今管理局で最強としか言いようが無いだろう。

「それもそうやな、兄ちゃん入れてそれぞれ四方に散開、ロストロギアのダミーを駆逐してや！」

「了解！」

はやての号令になのは達はそれぞれ散らばった。

シャマルの展開した結界内には、ロストロギアのダミーがあふれている。このロストロギアは見た目がスライムのようにプルプルしており、自律移動が可能。さらに、自己防衛機能があり、危険を察知するとダミーを作り、本体を特定させないという厄介な代物。しかも、クライアントからの要望で大変貴重な物なので無傷で回収せよとのこと。自分達の失態対して、無茶な要求をするとはなんとも勝手なものだ。

隊長達はそれぞれ散らばったダミーを駆逐するために四方へ飛び、フォワードの四人は河川敷でロストロギアの本体特定に奮闘している。龍也はそれぞれの位置、状況を確認する。隊長達は速やかな対応で次々とダミーの数を減らしていく。フォワードの四人も苦戦しながらも、なんとかなりそうだが

「何故私によってくる？」

龍也の周りには大量のスライムが居る。どうやら龍也の魔力に反応して一番危険と判断したのだろう

「やれやれ、私は今回動くつもりは無かったんだが・・・」

腰のグラムを抜き放つ

「では仕事をするか・・・」

グラムを構えるそれと同時に凄まじい魔力と風がグラムと龍也を包む込む

「奥義、風刃閃」

龍也の姿が掻き消え次の瞬間、スライムの後ろに現れた

「消えるといい、風と共に・・」

キン！！

グラムを鞘に戻し歩き去る。スライムが後を追おとした時

バシュ！！

全てのスライムは切り裂かれ消えた

『主、お疲れ様です』

グラムが労いの言葉を言うが

「大袈裟だ、あの程度肩慣らしにもならんよ」

龍也が河川敷へ向かうと、もう戦闘は終わっており、キャロがロストロギア本体の封印を行っていた。

「ほう、もう一人で封印できるのか」

龍也は感心したように言い、キャロの封印作業を見ている。他の隊長達も今回のフォワード四人の動きは満足いく内容だったようで、皆ニコニコしていた。

「・・・封印、完了しました」

キャロは無事ロストロギアを一人で封印出来たようだ。それをシャマルが受け取り、キャロの所にフェイトが駆け寄る。

「キャロ、よく頑張ったね」

キャロはフェイトに褒められて頬を赤くしている。とても嬉しそうだ。龍也もキャロへ近付き、キャロの頭を優しく撫でてやる。

「よくやったな。えらいぞ、キャロ」

龍也がそう言うと、キャロは一層顔を赤くし、両手で顔を隠すようにし、

「あ、ありがとう、お父さん」

その様子がおかしくて皆で笑い穏やかな空気の中で機動六課の出張任務はロストロギアはレリックではなかったが無事に終わり、六課の面々はミッドチルダの機動六課隊舎へと帰還するのだった、次の日

演習場に居る一つの影、龍也だ。最近体を動かしてなかったので鈍っているような気がしてこうして体を動かしている

「烈火刃！！」

炎熱の変換素質によって構成されたクナイを投げる、ターゲットに命中と共に爆発する

「感覚は狂ってないな・・、次は・・・」

居合い抜きの構えを取り、意識を集中する

「奥義、光刃閃！！！」

姿が消え並んでいた、ターゲットがほんの時間差も無く、同時に爆発した

「体が鈍っているというのは気のせいだったか・・・」

グラムを待機状態に戻すと

「あれ？龍也さんこんな朝早くから如何したんです？」

「スバルか？お前こそ如何したんだ？」

「私ですか？私は自主練ですよ。まだ上手く使えませんからね。ヘブンズナックル」

リボルバーナックルを翳しながら言うスバルに

「そうか・・良かったら私と訓練するか？」

ベレンをセットアップしスバルを誘う。フロントアタッカーのスバルとエリオに訓練を付けようと思っていたのだ

「良いんですか？」

目を輝かせるスバルに

「まぁ基本的な体裁きだがな・・・」

３０分後

「ゼハー、ゼハー」

かなり消耗して今にも倒れそうなスバルと対照的に

「大丈夫か？」

まだ余裕といった感じの龍也、その額には汗一つ無い

「た・・龍也さん・・は化け物ですか？・・あんなに動いて・・どうしてそんな平気な感じなんですか？」

「そうか？私にはこれが普通だが？」

龍也の訓練は非常に厳しい。礼を挙げれば魔力を全開で放出したまま腕立てや腹筋、更には龍也のコートの劣化版のリストバンドを付ける様に言われ付けてみたが

「重過ぎます、これ」

魔力に反応して重くなるのだが、スバルの場合重さが１０キロだったが魔力を出した途端重くなり地に臥した、その様子に

「調整を間違えたか？」

リストバンドを取り再調整をすると、重さは丁度良くなったが

「魔力がぐんぐん減るんですけど・・」

このリストバンドには魔力を吸い取る機能もある、業とそうして有るのだ

「それはそうだ。それは魔力の最大保持を上げるための機能だ、我慢しろ」

龍也のコートも常に魔力を吸収している、龍也の場合の量が桁違い

だが・・。魔力の最大保持が上がるとの言葉に反応するスバル、理論は単純だ限界まで体を動かせば体力が増える、それを魔力に当てはめたのがこのコートとリストバンドだ

「えっ・・ちなみにどれくらい増えますか?」

「どうだろうな・・1．8倍から2，4倍くらいかと思うが」

それだけ増加すると聞き笑顔になる

「龍也さんも同じ方法で魔力を増やしたんですか?」

B＋から今では計測不能と言った魔力を保持する龍也も同じ方法で魔力を増やしたのなら、それくらいまで増やせるのではないこと考え尋ねるが

「いや。私の場合は違う。ベレンで気絶するまで魔力弾を打つという方法で増やした」

「・・・・・。龍也さんが規格外なのは知ってました、でも其処までとは思いませんでした」

そうか?と呟く龍也、何処の世界に、気絶するまで魔力弾を撃つという方向で魔力を増やした魔導師が居るだろう

「まぁ、魔力が増えるのはお墨付きだ、問題ない・・ああそれとこれなティアナに渡しといてくれ」

手渡されたのは自分のとは違い緋色のリストバンド、まさかと思い尋ねる

「これ・・このリストバンドと同じものですか?」

「勿論そうだが?エリオの分もある。キャロにはまだきついだろうから無いがいずれは渡すつもりだ」

コートから黄色のリストバンドを取り出す、ちなみにスバルのは水色だ。これを見ると判る皆の魔力光に合わしているのだろう、だが此処で一つの疑問が浮かび上がる

「龍也さん一つ良いですか?どうして急にそんな物を渡すんですか?」

龍也の目が細くなる、その目は鋭く何時もの龍也とは余りにもかけ離れている

「迫り来る脅威に向けての準備だ・・」

ネクロは最近現れないしガジェットもそうだ、では龍也の言う迫り来る脅威とは何だ?

「それは・・「ああ~お兄様やっと見付けたです~、はやてちゃんが呼んでますよ、何か任務の話が有るって」

迫り来る脅威が何なのか尋ねようとした時、リィンによって言葉は遮られた

「この話は終わりだ、だが覚えておけ何が起きるか判らないからな」

それだけ言い残しリィンの元に歩いて行く龍也の後姿に何か嫌な予

感がした

「迫り来る脅威・・・」

龍也のその言葉を胸に刻み、自分とティアナの部屋に戻る際も嫌な予感は消えなかった、これは自分の母が死んだときの感覚に似ていた

そしてその予想は当たることになる。

第２１話に続く

# 第２１話

第２１話

リィンと共にはやての部屋に向かっていると、頭の中に直接女性の声がする。

（何の様だ？セレス）

自身の相棒でもある、セレスだけだ

（いえ、唯一つお聞きしたいことが、何故あのスバルと言う少女にあのような事を？）

（判らん、だが何かいやな予感がする、最近動かないネクロ達が動くような気がする）

こういういやな予感はほぼ１００％で当たる

（考えすぎでは？基地は確かに潰しました。そう簡単に立て直せるとは）

（判らんが警戒することに越したことは無いさ。唯の気の所為ですめば良い）

「お兄様如何したんです？怖い顔をしてますが」

「ん？すまない、少し考え事をな」

セレスとの会話に夢中になっていたようだ

「何か悩みが有るなら、リィンが聞きますよ？」

心配そうに此方を覗き込むリィンの頭を撫でながら

「大丈夫だそんなに深刻な問題ではないからな（セレス、すまないが念話を切るぞ）

（御気になさらず、それでは）

セレスの気配は消え、暫くするとはやての部屋が見えてきた

コンコン

「はやてちゃん、お兄様を連れて来たですよ～、お兄様悪いですがリィンは仕事が有るです。それでは失礼するです」

飛び去るリィンを見送ってから、部屋の中に入る。するとそこには机に座り何かの書類を見ているはやてが居た

「兄ちゃん、早速で悪いけどこれ見てくれる？」

ホテル・アグスタで行われるオークションの護衛について、書類に目を通す

「なるほど、貴重なロストギアを狙ってネクロが来る可能性を懸念しているのか」

「そうや。んで早速で悪いけど、皆準備しとるで兄ちゃんも準備し

てヘリポートに来てな」

書類を置き、部屋を後にするが、いやな予感は消えない

（唯の思い過ごしで有ればいいが・・）

龍也の願いは叶わず、大事件が起きる事となる

「最近現れてないけど、ネクロが出現する可能性を考えての任務になるで。」

はやてがネクロが現れる可能性について説明する。

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、皆も一応、覚えておいてね？」

「「「はい！」」」

話を引き継いだフェイトの問いかけに、フォワードメンバーが返事をする。すると、今度はリインが画面の前に飛び、画面が切り替わった。

「で、今日向かう先はここ！ホテル・アグスタ！」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが、今日のお仕事ね。」

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、そ

の反応をレリックと誤認したガシェットが出てきちゃう可能性が高い、とのことで、私たちが警備に呼ばれたです！」

「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、油断は禁物だよ。」

現場には昨日から、シグナム、ヴィータ他、数名の隊員が張ってくれてる、リインの後にフェイト、なのは、はやても補足を入れ説明が終わるとキャロが手を上げる

「あの、シャマル先生。さっきから気になってたんですけど後ろの４つの箱は一体？」

キャロが説明を聞いている時から気になっている事を質問する

「これ？　隊長達とお兄さんの仕事着よ♪」

シャマルはウインクする

「まてまて、何で私まで？」

「もちろん、兄ちゃんには私達をエスコートして貰うためや！」

「ちゃんと理由はあるから怒らないでね？　龍也」

フェイトがはやてに詰め寄る俺を宥め、なのはが説明する

「私達だけじゃ怪しまれる可能性があるから、龍也さんには私達が

中に入るまでエスコートして欲しいんだ」

説明を受け、頷くがシャマルの足元箱の私の仕事着が気になる

「シャマルすまないが。その服とやらを見せてくれ」

「良いですよ、凄く似合うと思いますよ」

渡された箱の中身を見る、中には黒を貴重としたスーツが入っていた

「ふむ、悪くなさそうだが、サイズは大丈夫なのか？」

「勿論ですよ」

胸を張るシャマルを見てから、箱から服を取り出す、はやては私が何をやろうとしたか気付いたようだ

「兄ちゃん、まさか此処で着替える気？」

ヘリの中は急に静かになる、なのはとフェイトは目を見開いていた

「まぁそうだな、何直ぐ終わる」

コートを掴み体に巻きつける。そして次の瞬間には管理局の制服から用意されたスーツの姿になっていた

「悪くない」

手を握ったり閉じたりして感覚を確かめる、サイズはピッタリで何処にも違和感が無い

「どうかね？・・・如何したんだ目が点になっているが」

なのは達は目を擦ったり、何度か瞬きをしている

「龍也さん？今何をしたんです？」

フェイト達も頷いている、そんなに驚くことだろうか

「マジックの応用なんだが。見たことないか人に布を掛けて一瞬で着替えされるやつ、それを出来るようになっただけだ」

「何で使えるようになったんです？」

「なんとなく使えたら便利じゃないかなと思って練習した。割と直ぐに出来るようになった」

「・・・・・」

なのは達は全員こう思った、何故使おうと思ったである、それから暫くしてヘリはオークション会場である、ホテルアグスタに着いた

その後しばらくして、ホテル・アグスタに到着した。ミッドチルダの有名な富豪達が揃う中、４人の人物が受付に姿を現した。そして、受付の男性はそれを見て、驚く。

「こんにちは、機動六課です。」

はやて、なのは、フェイトのドレス姿。そして後ろには私がスーツを着て立っている。少し離れた所から見るつもりで居る

「龍也さん、私のドレス、どうかな？」

「龍也、私もどう？」

「兄ちゃん、私は？」

3人が寄って来る。

「似合ってると思うが？むしろ似合わないという者が居るなら、その者は眼科に行くべきだ」

「えへへ♪」

「あはは♪」

「ふふふ♪」

嬉しそうに笑う三人を会場内までエスコートする

「はやて、私は会場の外を見て来る、中は頼むぞ」

「了解、なんかあったら連絡頂戴」

はやて達と別れ会場の外を見て回っていると

「龍也！！」

「ん？」

名を呼ばれ振り返ると、そこには眼鏡を掛けたユーノ・スクライアとそれに寄り添うように一人の女性がいた

「ユーノ、元気そうだな、所で隣の女性は？」

「ああ。龍也は知らないんだね、僕結婚したんだ」

「そうか、おめでとうと言っておこう」

「ユーノ、積もり話も有るだろうから。私は向こうに行ってるわ」

そういい残し、女性は会場に入っていった

「生きてたんだね、はやての言うとおりだ」

自販機の前の椅子に座り話す

「ああ、五体満足ではないが取りあえずな、所でこんな事を聞くのは気が引けるが、お前はなのはが好きじゃ無かったか？」

「うん、僕はなのはが好きだった、でもどんな時もなのはを救ったのは龍也で僕じゃない。それに僕は最低なことをしたしね」

自嘲気味に呟くユーノに

「最低なこと？」

「うん、僕は君が行方不明になったって、聞いたとき喜んでしまった、これでなのはが僕を見てくれるって、でもねそれは違ったなのはも君のことを生きてるって信じて居たんだ、その時思ったよ勝てないて。それから無限書庫で働いてた時に彼女に会って去年結婚したんだ。なのは達も祝福してくれたよ、出来れば君にも居て欲しかったかな」

「すまんな、あの時の私ははやて達に会うのが怖くて逃げてたからな・・・」

「うん、そう聞いてるよクロノから、僕がこんなこと言えた義理じゃないよ、でも聞いて欲しい、なのはは君のことが好きだと思う、だから出来れば受け入れてあげて欲しいな。さてと僕はもう行くよ、オークションの司会だから」

「おい・・「じゃあね。なのはを幸せにしてね」

言うだけ言って去っていったユーノに溜め息を吐きながら

「私に如何しろと?」

その呟きに答えるものは居なかった、

「何事も無いか?」

ユーノと話し暫くしてから会場に戻る

「うん、今の・・・ズガーン!!訂正する何かあったみたい」

なのはが何も無いと言おうとした途端、外から爆発音がした

「その様だ、はやて、私はスバル達の所に行く。何かいやな予感がする、はやて達は中を頼む」

「了解や、兄ちゃん怪我だけしんでね」

「私を誰だと思っている？夜天の守護者、八神龍也だぞ。そう簡単に遅れは取らん」

そう言ってから外に向かって走っていく龍也を見送り

「なのはちゃん、フェイトちゃん、私達も行くで！！」

「「了解！！」」

三人も警護対象ロストギアの保管所に向かった

「何で、こんなに沢山ネクロが出てくるの～」

悲鳴に似た声を挙げながら、スバルがネクロを殴り倒す

「知らないわよ、こっちが聞きたいわよ」

スバルとエリオを援護するように後方から、ショットを放ちながらネクロの動きを牽制する

「あの・・本当に私とフリードは何もしなくて良いんですか？」

待機と指示を出し私の後ろに居るキャロが呟く

「何もしてないわけじゃないわ。私達にブースト掛けてくれてるでしょ、3人にブースト掛けてるからね、これで攻撃までしたら魔力が底を付くわ、そうなったらこっちの勝ち目なし、だからキャロは後方で待機いいわね」

アクセルを連続で放ちながら。作戦を話す、敵の数が多いのでスバルとエリオが前衛私が二人の援護をして、キャロが私達にブーストを掛ける。これならば数が多い相手にも有る程度対応できるが、

「早く、応援が来ないかしら」

バーストでネクロを吹っ飛ばす。この作戦の欠点はブーストを掛ける者だ、此処でキャロの魔力が尽きれば此方の負けは決定している

「でぇぇいっ!!」

気合の入った声でネクロを蹴り飛ばすスバル。その動きは見ている此方が安心できるほど切れが良い。

（これも龍也さんとの訓練のおかげね）

今までの無鉄砲さが消えているのは龍也の訓練の結果だ。その動きに安心するが

「・・っ!スバル危ない」

木の陰からネクロが飛び出しスバルを切り裂こうとする、私のミスだ、動きに目を取られて辺りを見てなかった即座にアクセルを放とうとするが

「烈火刃！！」

上空から燃えるクナイが飛びネクロを貫く、それと同時に

「皆、無事か！！」

蒼い騎士甲冑の龍也が現れた。それと同時に安心感が広がる、龍也の存在はそれほどまでに大きいのだ

「スバル、エリオ下がれ！！」

「「はい！！」」

二人に指示を出し下がらせる、それと同時に

「奥義、光刃閃！！」

龍也さんの姿が消え、次々とネクロに蒼い剣の後が見えそして、一瞬だけ見える凄まじい速さで動く蒼い影が。縦横無尽に駆け回る

「消えろ、光の斬撃の前に」

キン！！

グラムを鞘に戻すと同時にネクロが全て消える、

「大丈夫か？すまないな。遅くなった」

「大丈夫でしたよ」

全員で龍也の元に行こうとした時、微笑んでいた龍也の顔が驚愕染まり

「・・・退け！！」

龍也に突き飛ばされる

「えっ！！」

突き飛ばされ、一瞬視界から龍也の姿消える、

「痛たた、龍也さん何する・・・龍也さん！！」

「お父さん！！」

スバルとエリオの悲鳴に似た声が聞こえる、スバルとエリオの視線の先を見ると

「嘘・・」

龍也さんの腹から黒い剣が飛び出ていた

「貴様！！」

「クク、相変わらず馬鹿なやつだ、私は其処の餓鬼どもを狙ったのに」

龍也の後ろに、ＬＶ２より人型に近いネクロの姿がある

「楽に貴様が始末できるよ、八神龍也」

勢い良く龍也を貫いていた剣が引き抜かれる

「グッ・・」

その場に膝を着く龍也を

「貴様は此処で死ぬ、ククク」

パチン！！

指を鳴らすと同時に大量のネクロが姿を現す

「貴様にはそれがお似合いだ」

笑うネクロに

「お前ー！！」

「よくもお父さんを！！」

スバルとエリオが攻撃を仕掛けるが

「失せろ、塵が！！」

「うわぁ！！」

「グっ！！」

攻撃を簡単に交わされ逆に反撃を喰らい私の足元まで転がって来る、二人に回復魔法を掛けようとするが消える

「何で・・魔法が」

驚いている私にネクロが笑い声を上げる

「ククク。ハハハ、愚かだな。私達と違いお前たちはこうも簡単に魔法が使えなくなる」

キラ!!

私達の周りを紫色の結界が覆っている、まさか!!

「其処の餓鬼は頭が切れるな、そうだよ、私が魔法封じの結界をはった、つまり今のお前たちは唯の子供さ」

馬鹿にするように笑うネクロ。

「ククク、さあ死ねよ「貴様がな!!」馬鹿・・なその怪・・・我で何故・・・動ける?」

ネクロを貫く蒼い剣、傷口を押さえながら龍也が立ち上がった

「忘れたか・・私は守護者、守るもの・・が有れば、何度でも立ち上がる!!」

ザシュ!!

ネクロを真一文字に切り裂き消滅させるが、あいつが呼び出したネ

クロはまだいる、その黒い目は徐々に光りを帯びてきている、動き出す直前だ、その前に龍也の怪我の治療を行おうとするが又魔法が消える

「そんな！あいつは倒したのに」

結界を張っているネクロは倒したのに魔法が消える

「あいつの・・結界は・・暫く消えない・・だから無駄だ」

苦しそうに声を出す、額からは凄まじい汗を流している

「龍也さん、ここは私が」

殆ど機能の停止したリボルバーナックルを構え駆けていこうとするスバルだが

「大いな・・る結界よ、この者を・・護りたまえ・・ガーディアンズ・フォース！！」

目の前に現れた蒼い結界に邪魔される、龍也は結界の外にいる。

「お前・・達は其処に・・居ろ・後は私が・・やる！！」

剣を構える龍也だがその姿は今にも倒れそうだ

「龍也さん！！なんで」

結界の中でスバルがリボルバーナックルを叩き付けるが、ビクとも

しない

「そんな・・物だが・・私・・の魔力で出来てる。・・簡単に・・は砕けんぞ」

「お父さん!!どうしてこんな事を」

結界を殴りながらエリオが言うと

「魔法が使えない・・今のお前たちは・・無力だ・・だから此処は・・私に任せろ・・良いな」

剣を構えると頭の中に

（王よ!無茶です、その怪我では）

（セレスか・・大丈夫だ。これくらいでは私は死なん）

龍也とセレスは直接リンクを繋いでいる為、妨害結界の中でも念話が出来る

（私が出ます。王も結界の中へ!!）

（駄目だ。お前はまだ出るべきじゃない）

セレスの存在を知られるわけには行かない。セレスは切り札なのだ

（しかし、その出血では）

（セレス、お前の力で痛覚を切ってくれ、さっきから目が霞む）

霞む目を擦りながら頼む

（・・判りました、王は私の話など聞いてくれませんからね）

その呟きと共に痛みが消え、剣に濃紺の光が灯る、これはセレスの魔力光だ

（私ではこれが限界です、どうか死なないでください）

気遣うセレスの声がする

（当然だ！！こんな所で私は死なん！）

「行くぞ、夜天の守護者、八神龍也！！圧して参る！！！」

そう叫ぶと龍也は血を流しながら駆け出した

第２２話に続く

## 第２１話（後書き）

自分の中ではユーノ×なのはは無いと思っています、なのでユーノは別の人物と既に結婚している設定にしてみました

## 第２２話（前書き）

バトル描写は本当に難しいです。だれかアドバイスを下さると嬉しい限りです。
それと感想、レビューは随時お待ちしています。

ナンバーズの各々の呼び方を教えてくださる方が居ましたら、是非お願いします

それでは本編始まります

# 第２２話

第２２話

「ウオオオオ！！！」

飛び掛るネクロを次々と切り裂いていく龍也、だが辺りは龍也から流れ出た血で赤く染まっている

「いい加減に消えろぉ！！、ヘルテンペスト！！」

剣から赤い竜巻を放つ、それがネクロを次々飲み込み消滅させる

「グッ！！」

攻撃を回避した、ネクロが傷口を狙い突撃してくるがギリギリで回避して切り捨てるが徐々に動きが鈍くなってきている

「このままじゃ龍也さんが！！ティアまだ連絡は取れないの！！！」

結界の中でスバルが怒鳴るが

「判ってるわよ！！それくらいでもまだ通じないの！！」

怒鳴り返すティア、エリオとキャロは大粒の涙を流し名がながら龍也の名を呼んでいる。無理も無い自身らが父と呼び、慕う人物が血を流しながら戦う姿は１０歳の二人にはきつすぎる、かという自分達も泣きそうに成っている

「はぁっ・・はぁ」

肩で息を整える、もう既に手の感覚は無いだが、まだ剣は握れる

（王よ、これ以上は危険です！！）

（駄目だ！もう少しなんだ、もう少しで終わる！！）

剣にもう残り少ない魔力を込める

（・・まさか！！危険です今の王ではその衝撃に耐えることは）

何をやろうしているか気付いた。セレスが止めようとするが

「・・・奥義、蒼龍・・月牙斬！！！」

剣から巨大な蒼い三日月状の衝撃波が放たれネクロを消滅させる、

私は剣を振り切ると同時にその意識を失った

「！？」

嫌な予感がする、この感じは兄ちゃんが行方不明になったときの物

に似ている

「ヴィータ！！スバル達とはまだ連絡とれへんのか！！」

突然大声を出した私に驚きながらも

「駄目なんだ、ジャミングか何かで兄貴にも通じねぇ」

胸の中に不安が広がり続ける

「はやてちゃん？如何したの」

心配そうになのはが尋ねてくる

「何か、嫌な予感がするんや。この感じはあの時の兄ちゃんが行方不明の時の感じに似てる」

なのはに話をしているその時

「ザザ・・・ヴィー・・ザザ・・隊長・・聞こえますか」

ノイズが走りながらもティアナの声が聞こえる

「ティアナ。私や皆無事か？」

ヴィータから通信機を奪い、話しかける

「部隊長・・早く・・早く・・シャマル先生を・・此処へ・・龍也さんが重症です・・手当てをしたくても龍也さんに近づけません」

嫌な予感は的中していた、唇を噛み締めながら

「直ぐ行く・・ポイントは何処や」

「■■■です。急いでください。このままだと龍也さんが危険です」

通信が切れた、どうやらまだジャミングが残っているようだ

「シャマル・・聞いとったな。急いで行くで！なのはちゃん達は警戒しとって。」

指示を出し騎士甲冑を展開し、シャマルと共にポイントへ向かった

急いでポイントへ向かうそして到着した瞬間息を呑む、辺りは血で染まり真っ赤になり。その中心で血を流しながら最愛の兄が剣を振りにいた姿勢のまま立っていた

「部隊長早く！！」

後ろからスバルの声が聞こえる。スバル達は蒼い結界に閉じ込められおり、出ることが出来ないようだったが、今は構ってる暇は無い

「兄ちゃん！！」

駆け寄る、足が血で汚れるが関係ない

「・・はやてか？・・すまん・・後は・・・頼む」

何度か声を掛け僅かに意識を取り戻した兄ちゃんはそれだけ呟き、倒れそれと同時に結界が砕ける

「龍也さん！！」

スバル達が駆け寄ってくる

「シャマル・・治癒を早く・・このままや。危ない」

「はい」

シャマルが治癒を開始する、だが傷が深くかなり苦戦している

「お父さんは大丈夫ですか?」

キャロが涙を流しながら尋ねてくる

「判らへん。でも兄ちゃんが死ぬわけ無い」

苦しげにそう言うのがやっとだった、スバルとティアナが膝を着く

「私の所為だ、私が油断してから、龍也さんが私を庇って・・・私なんか居なければ」

静かに涙を流すティアナに腹が立ち

パン!!

頬に平手を入れる

「何馬鹿な事言う取るんや!!兄ちゃんが何でこないな事したか判らんのか!!」

「!」

「守る為やろ。大切な仲間を守る為やろ!!そんな下らん事言うとる暇合ったら、エリオとキャロを見習わんかい!!!」

エリオとキャロ必死に龍也の名を呼んでいる

「エリオ・・キャロ・・」

「判るやろ?今やる事が何か?何があったか教えてくれるか?」

「はい」

スバルとティアナが説明を始める、ＬＶ３が出たこと、それの急襲から皆を守る為に龍也が盾になったこと。そして結界に閉じ込められた事

「なるほど。判った・・それでシャマル・・兄ちゃんの怪我は」

龍也の怪我から一度手を退かし、汗を拭いながら

「有る程度は大丈夫です。ですがこのままじゃ危険です。早く隊舎に運ばないと」

「判った、スバル!!ティアナ!!私らは兄ちゃんを運ぶ、二人はスバルとティアナは私らより、早く戻ってヘリの準備さして来て。ええか二人の速さを信頼しとるからな」

「「了解!!」」

スバルとティアナに指示を出し、シャマルと兄ちゃんを肩に担ぐ

「エリオ。キャロ最短ルートで戻るで」

エリオとキャロを連れ、飛び上がる、二人は既に駆け出していた。

私達は兄ちゃんを揺すらない様に運び始めた

「龍也さん！！」

戻るとなのはが心配そうに寄って来る

「酷い・・・」

その怪我を見て絶句するフェイト

「はやて。兄貴は兄貴は・・大丈夫なのか？」

真っ青の顔で尋ねてくるヴィータ。恐らく8年前の事件を思い出したのだろう

「大丈夫や、大分安定しとる。でも急がないと危ない」

ヘリの中で兄ちゃんを横にする、汗が酷く呼吸も荒いが、先程までと比べればまだいい

「お父さん・・死んだりしませんよね」

涙目でキャロが言うが

「大丈夫や・兄ちゃんが死ぬ訳ない。だから安心せい」

スバルとティアナは無言で兄ちゃんを見ている

「二人は兄ちゃんが起きたら、お礼を言うこと良えな？」

「「・・・はい」」

暗く返事を返した二人から視線を外し

「ヴァイス君、急いでな」

「判ってます、旦那を死なせる訳には行きませんからね」

六課の面々は急いで隊舎へ戻った、龍也は一命を取り留めたが大分危険だったらしい、今は絶対安静である為龍也の居る部屋には入れない。皆はもう部屋に戻り休んでいるがなのははは違った

「龍也さんが・・」

かなり落ち込んだ様子で龍也の眠る部屋の前の椅子に腰掛けている

「あの時みたいにならないように力を付けたのに・・」

なのが言うあの時とは龍也が魔王に襲われたときの事だ。

「あの時・・私は何も出来なかった」

あの時私は魔王のバインドで龍也に近寄る事さえ出来なかった。それの所為で龍也は行方不明になり、目と腕を失った

「私の・・私の所為何だ・・」

龍也が気にするなと言っていたが、やはり無理だ。私がもっとあの時強ければと。同じ考えが頭の中を過ぎる

『マスター・・そろそろお休みになられたほうが』

レイジングハートが心配そうに言ってくる

「そうだね・・でも最後にもう一回だけ」

そういうと龍也の眠る部屋を覗き込む。その痛々しい姿に思わず

「龍也さん・・」

龍也の眠る部屋の中を心配そうに覗き込んだ時、部屋の中から視線を外したその時、風の様なものが吹き尻餅をついた

「痛たた・・今の何？」

辺りを見回すが窓などは空いてないので風が吹くことは無い。考えてもわからないので

「龍也さん・・おやすみなさい」

そう呟き部屋に戻っていくが、この時に気付くべきだった。レイジングハートのコアの一部が漆黒に染まっていることに

（クク、この者の心利用させてもらう）

その声は確かに龍也が消滅させた、ネクロの物だった

デバイス設定

グラム

剣型と槍型二つの形態を持つデバイスである。肩や足を覆うように騎士甲冑が展開され、体は蒼い服に包まれ両手に盾と剣を持つ
射撃や砲撃は殆ど出来ないが事近接戦闘では無類の強さを発揮する、龍也の魔力変換素質と相まって性能以上の強さを発揮することも有る、主に剣技に重点を置き五大剣と呼ばれる技と龍也自身剣技を使用する

烈火刃
炎の炎熱素質を使用し手の篭手に仕込まれた投げナイフを投げ命中と同時に爆発させる

水流爪牙
篭手のナイフに氷に纏わせ高速で接近し氷と共に相手を切りつけ、蹴り上げる

地斬疾空刀
グラムを一度鞘に仕舞い抜刀同時に魔力刃を飛ばす

風刃閃
全身とグラムに魔力を纏い超高速の連続抜刀で切りつける

光刃閃
居合いの構えをし鞘に雷の変換素質で抜刀速度を上昇させ、目視出来ない速さの高速移動で複数の敵を同時に切りつける

バルムンク

高い性能を持つが龍也自身槍は余り得意では無い為余り使用されることは無い

デモンズディザスター
連続槍撃と共に魔力を連続で繰り出す、それはマシンガンのように敵を貫き消滅させる

ロイヤルセイバー
変換素質を伴う射撃と近接両方の特徴を持つ一撃を放つ

紅の龍　ファフニール
グラムに登録されている召還獣、途方も無い時間を生きてきたため深い知性を持ち、その名の通り炎を自在に使いこなす

クリムゾンモード
ファフニールとのユニゾンにより形態変化、真紅の鎧に背中のファフニールの翼が最大の特徴で、能力は強制消滅全ての防御を貫き強制敵に敵を消滅させるがこの力は非殺傷に出来ない為基本手使われることは無い

ヘルテンペスト
剣を媒介に高密度に圧縮した魔力の竜巻を放つ

蒼龍月牙斬
剣や槍に魔力を収束し、蒼い三日月状の衝撃波を放つ。広範囲かつ高威力の技だが消費魔力と体に掛かる負荷が多いため基本使わない

第２３話に続く

## 第２２話（後書き）

ホテル・アグスタでのミスショット事件は無しです。ティアナは幼い頃の龍也の言葉を信じているので、原作ほど力を求めていないのが理由です

## 第２３話（前書き）

改定版です、よろしければ感想をくださいお願い致します

# 第２３話

第２３話

龍也が昏睡状態から2日経った、スバルとティアナは自主的に訓練を積み、確実にレベルアップしている

「兄ちゃんは・・まだ起きんか・・」

眠りに付いている龍也のベッドの横の椅子に座り顔を覗き込むはやて

「峠は越したって、聞いとるけど・・何で起きないんや？」

シャマルが言うには消費しすぎた魔力を回復する為に深い眠りに付いているらしい

「はぁ、こんなに私は弱かったんやな・・やっぱり私には兄ちゃんが必要やで」

暫くそのまま居たが

「今日はスバルとティアナがなのはちゃんと勝負する日やから。見に行かんと。じゃあね兄ちゃん又来るわ」

「うっ・・ここは・・医務室か？」

はやてが医務室を出ていってから、数分後・・龍也は頭を振りなが

ら目を覚ました

「王よ・・目を覚ましましたか？」

ベッドの横に立つセレスに

「セレス？・・私はあの後どうなったんだ？」

記憶が途切れているので、どうなったのかと尋ねると

「王はあの後・・血の流しすぎで意識を失い・・二日間眠っていたのです・・」

二日・・どうりで体が硬いはずだ・・と思い立ち上がり体をほぐしながら

「はやて達は？」

はやての事なら居ると思った居たが姿が見えないので尋ねると

「はやて様達は演習場です」

演習場？どうしてと思っていると

「王が倒れた事で皆訓練をしておりました、それで今日は試験の新人達と隊長陣との模擬戦だそうです」

模擬戦か・・見に行ってみるか・・そう思い歩き出した

「・・・模擬戦か・・スバル達はどれ程成長したかな」

新人達の成長具合を考えながら、演習場に向かって歩いていたが、
演習場から

「ティアアアアッ!!!」

スバルの悲鳴が聞こえてきた、何か起きたのかと思い

「くそ!何が起きているんだ!!」

慌てて走り出し、演習場に飛び込むとなのはが狂ったように笑いながら、倒れているティアナ目掛け砲撃を放とうとしていた

「くそ・・フラッシュムーブ!!」

即座にフラッシュムーブを発動させ、スバルとティアナの前に立ち魔力で具現化させた盾で、その砲撃を防いだ

ズドーンッ!!!

凄まじい衝撃が私を襲う・・病み上がりの体には少々辛い・・と思いながら盾を振るい煙をふっ飛ばし

「どういうつもりだ!!なのは!!」

怒鳴りながらなのはに言うが、反応がまるで無いどういう事だと思っていると、

「龍也さん!?」

目を瞑っていたスバルが目を開き、居ないはずの私が居る事驚くスバルに

「スバル。今直ぐティアナを担いで下がれ、はやて達に言って結界を張るんだいいな?」

嫌な予感がしそう言うと

「何を言ってるんです?」

訳が判らないと言う顔をして、スバルが一歩前に踏み出した瞬間、スバルの前に魔力弾が打ち込まれる。それは浅いがスバルの足を傷つけていた

「殺傷設定!?」

驚きながらそういうスバルに再び魔力弾が放たれる

「ちっ!!」

舌打ちをしながら二人を担ぎ離れる、その様子を見て苦しそうに顔を歪めるなのは

「どうして!!邪魔するんです!!龍也さん、龍也さんは二人が居たから怪我をした、だから二人はもう要らないんです!!」

「「「!?」」」

突然のなのはに豹変に声を失うはやて達

「違うんですよ!!スバルじゃない!!ティアナじゃない!!フェイトちゃんでもヴィータちゃんでも無い。私が・・・私が龍也さんの隣に立てるんです!!!」

叫ぶと辺りにでたらめに殺傷設定の魔法を放ち始めたなのは

「なのは・・？」

その狂気を秘めた姿に声をなくすフェイト、他の面々を同様だ、私達の知るなのはと言う人物はあんな風だったかと

「スバル・・急げはやくはやての所へ行け!!!」

防御結界でその破壊の嵐を防ぐ私に。正気を無くした黒い瞳のなのはが

「どうして邪魔するんです？皆邪魔なんです。皆が居るから龍也さんが怪我をする、だから皆消えればいい!!!」

再び魔法を放とうとするなのはに、私は確信した

「猿芝居は止めろ!!貴様!!!何時なのはの体に入り込んだ!!!」

盾を構えながら怒声を飛ばすと

「!?ははは、やはり気付いたか」

レンジングハートの声から耳障りネクロの声が聞こえ次の瞬間、レイジングハートからネクロが姿を見せる

「!?!?!?」

驚き声を無くすはやて達

「貴様がなのはを操っていたな?」

殺気を放ちながら問いかけると

「操る?違うよさっきのは間違いなくこいつの言葉さ、自分だけを見て欲しい。他の女と話して欲しくない、そういう感情がこいつにはあった」

レイジングハートからネクロが姿を現し、それと同時になのはが意識を失い落下する

「くそ!!」

即座に短距離転移を行いなのはを抱きとめ更に

「戒めの鎖よ、化の者を捕らえよ、ヘルズ・チェーン!!!」

バインドを発動する、それと同時に複数の鎖がネクロの動きを封じる

「クソ!!こんなもの直ぐに」

鎖を外そうと、もがくネクロにもう一度バインドを発現させ、動きを完全に止める

「今だ。スバル一度下がるぞ」

「はい！！」

「兄ちゃん！！どういうこっちゃ。何でレイジングハートからネクロがというか何時起きたんや！！」」

詰め寄るはやてに

「起きたのはついさっきだ。それより今はあいつを何とかするほうが先だ」

腕の中のなのはをシャマルの足元に横にする

「シャマル！！なのはを頼む！！はやては全力で結界を張れ、いいか全力でだぞ。じゃないと巻き込まれるからな」

はやても指示を出していると

「兄上！！高町に何があったのですか？」

シグナムが混乱しながらも尋ねて来る。

「詳しくは判らんが恐らくネクロに寄生されていた、それで正気を失ったんだろう。フェイト、なのはの言ったことは本心じゃない・・だから嫌わないでくれ」

「判ってます、なのはがそんな事、言うわけ無いのは良く判ってますから」

なのはの手を握りながら返事を返すフェイトに頷いてから

「はやて、結界を全力で張れ、今リミッターを解除したから、甲冑が展開出来る・・筈だ」

一瞬眩暈がしバランスを崩す

「兄貴！」

ヴィータが直ぐに駆け寄ってくるがそれを手で制す

「大丈夫だ。傷は直っている、少し立ち眩みがしただけだ」

「お父さんは如何するんです？」

エリオが尋ねてくる

「簡単だ、あいつを倒す！！」

「なっ！無茶ですよ一人じゃ」

心配そうに言うエリオの頭を撫でながら説明する

「本気でやる、だから下手に近づくとお前たちも巻き込みかねん」

「兄ちゃん、大丈夫なんやな？」

甲冑を展開したはやてが尋ねて来る

「ああ、大丈夫だ。私の全力を良く見ておくといい」

私はそう言うと地を蹴り再びネクロの元に向かった。

「クク、貴様を殺す為にあの女に取り付いたが、なかなか良い感情だったよ」

鎖を引きちぎり上機嫌に話すネクロ

「だって馬鹿みたいじゃないか！お前を好きで、でも自分の所為で腕を無くしたお前に近づくのが怖い、はは何て愚かなんだ」

なのはを馬鹿にするように笑い続けるネクロに顔をしかめるはやて達、かなりの嫌悪感がある。そして私も嘲るような態度が頭にきた

（セレス、悪いが全力でいく、サポートを頼む）

（・・判っています、あいつの存在はかなり頭に来ます）

懐から剣十字のペンダントを取り出し

「最強の盾よ！今こそ目覚めよ！！封印されし究極なる守護者の力よ！！今こそ目覚めよラストガーディアン。セットアップ！！！」

私の体を光が包むそして光が晴れた瞬間

「なっ！あれは」

はやての驚愕の声が聞こえる、それも当然だ。今私の体を覆っているのははやての騎士甲冑と瓜二つで違いは色が銀で有る事とはやての騎士甲冑の位置と逆に装着されている鎧。そしてその手に有るのが美しい銀の装飾が施されたの幅の広いバスターソードの様な剣、

そしてベルカの象徴である。剣十字が刻まれた銀の盾・・これが私の天雷の書と二つに別れ安置されていた、古代のデバイス・・ラストガーディアン

「貴様の穢れた魂この私が浄化する!!!」

背中の翼を羽ばたかせ私はネクロに向かって行った

第２４話に続く

## 第２４話（前書き）

主人公が持つデバイスのグラムとベレンは仮初の物で、今回その能力が登場します少し強すぎると思います

# 第２４話

第２４話

キン！！キン！！！

交互に入れ替わりながら剣をぶつけ合う、龍也とネクロその速さは凄まじく辛うじて姿が見える。っといったレベルである

「凄い・・」

エリオが呟く他の面々も同様だが

（おかしい・・兄上の本気はあの程度ではないはず・・動きがどこかおかしくないか？）

私が違和感を感じている中も龍也とネクロの戦闘は激しさは増していった

（くっ！！やはり傷が開いたか）

シグナムが感じた違和感は気のせいではない。怪我は治って来ていたが完治はしていない。そんな状態で戦闘などを行えば傷が開くのは当然だ。気付かなければいいと思っていたが

「貴様！怪我が治ってないな！！」

笑いながらネクロが的確に傷口を抉る

「グウッ！！」

自身の意思と反して苦しげに息を吐く、その間も連続でネクロの剣は容赦なく繰り出される

「そんな！！体で！！私に勝てると思っているのか！！！」

「グアッ！！」

盾で受け止めるが、弾き飛ばされはやての張った結界の背中から追突する

「ガフッ！！」

追突と同時に体が軋む、思っていたより傷は治っていない様だ

「兄ちゃん！！！」

はやてが結界越しに寄ってくるが

「大丈夫だ問題ない。直ぐにすむ」

心配するはやてに問題無いと言い結界から離れるが、状態はかなり不味い、この状況を打破できるとすれば・・あれしかない

（セレス、サポートをあれを使う）

（了解しました、王よ。構築は此方にお任せください）

そういうと手から剣と盾が消える、さぁ此処からが本当のラストガーデイアンの力だ

「クク、デバイスなしで勝てるとでも？」

馬鹿にする、ネクロだがその通りだ。今のままでは勝ち目はまず無いだが

「デバイスが無い？何処に目を付けている？私のデバイスはここに有る。クラールヴィント！！セットアップ！！」

いつの間にか手に握られていた指輪を弾く、それは間違いなくシャマルのデバイスのクラールヴィントだ

「えっ？」

シャマルが驚きの声を挙げると同時に、私の鎧が変化するそれは間違いなく、シャマルの騎士甲冑だがそれは男物のデザインに変化している、そして現れた指輪を掴み魔力を通す

「静かなる風よ、癒しの恵みを運び、我が傷を癒せ」

詠唱と共にクラールヴィントが輝きだす。足元からベルカ式の魔法陣が浮かび上がり、そこから緑の粒子が溢れ出し私の体を包み込む。即座に傷は完治し減っていた魔力も全回復する。だが此れで終わりではない、即座に回復した魔力で自身にブーストを掛けるネクロに肉薄する

「はあああ！！」

連続で拳を叩き込むそれは確実にダメージを与えていくが

（やはりクラールヴィントでは力不足だな）

「グッ！！舐めるなよ」

横なぎに剣を振るうがそれを回避し、クラールヴィントを解除し

「デバイス復元！！」

コアから形作られていく、それは徐々に剣の形を成していく

「馬鹿な！！あれは私の・・」

シグナムが驚愕の声を上げる、そう形作られたのは

「レヴァンティン！セットアップ！！」

体を炎が包み鎧が変化する、今度はシグナムの騎士甲冑だ

「オオオオッ！！」

レヴァンティンを横薙ぎに振るい、その勢いを生かし回し蹴りをネクロの顔目掛け放つ

「クっ」

ギリギリで回避するネクロだが私の狙いは此れだ。一瞬でレヴァンティンを解除し、

「バルディッシュ！サイスモード！！」

左手で復元させていたバルディッシュ起動させる。鎧の黒の軽鎧に変化し、背に白のマント、この手に握るのはサイスモードのバルディッシュそれを、全力で振るう回避して、動きが硬直していたネクロの鎧を深く傷つける

「グっ、貴様何故そのデバイスを使える。それはお前のデバイスではない筈だ！！」

その通りだ、アベレージワンのバルディッシュ更に古代のデバイス、クラールヴィントとレヴァンティンそれが二つ存在する訳が無いのだ

「ラストガーディアンの本当の力！それはデバイスの支配・復元だ！！！」

「！？！？」

驚くはやて達の目の前にデバイスが次々浮かび上がる。レイジングハート、ストラーダ、デュランダル　、グラーフアイゼン等自分達が所持するデバイスが次々浮かび上がる、

パチン！！

指を鳴らすと様々な色のバインドがネクロを拘束し、騎士甲冑が元の物に戻る

「消えるがいい魂さえも！！そして悔いろ！！貴様が何をしたのかをな！！！」

レンジングハート、バルディッシュ、シュベルトクロイツの先端に
魔力が収束する

「ひぃぃぃ！！」

私の本気の殺気をくらい、哀れな声を上げるネクロが背を向け

「消えろ、目障りだ、ジェノサイドブレイカー！！」

桃色と金色そして白の魔力光がネクロを呑み込み消滅させた、

「はやて、もう良いぞ結界を解いてもな」

結界の前に中空する龍也の声で正気に戻る

「ああ・・・御免兄ちゃん、今解除するわ」

結界を解除すると同時に着地し騎士甲冑を解除すると同時に髪を見
ながら

「・・やはりラストガーデイアンを使うとこうなるか」

長い黒の髪は銀に染まりその目は赤くなっている

「兄ちゃん？どうしたんそれ」

指差しながら言うはやてに

「ラストガーデイアンを使うとな、一定期間髪と目の色が変わるんだ」

ペンダントを仕舞い、なのはの所に行きながら説明する

「お兄さん・・なのはちゃん立て直しましたよ」

安定した呼吸のなのはを見て一安心する

「そうか・・だが大事をとって休ませた方が良い、何かの後遺症が出るかもしれん」

なのはを背中に背負うと同時に黒い空気が漂う

「・・はやて？何を怒っている？」

はやてがその元凶だが

「いや・・兄ちゃん怪我治ってないの無茶をしたから、腹が立っただけや」

「すまん、だが嫌な予感がしたんだ。それは理解してくれ」

「判っとるよ、でもこんな無茶はもうせんでね」

心配そうなはやての頭を撫でながら

「ああ。もうしないさ。シャマル悪いが医務室を使わせてもらう、なのはを休ませないとな」

「判りました、それとお兄さんも休んでくださいね、体力はまだ回復してないんですから

心配そうに言うシャマルに了解と返事を返し、なのはを背中に背負い医務室に向かった

「やれやれ、これで一息だな」

ベッドに横にしたなのはの様子を見る為、ベッドの横に椅子を置き、腰掛けていると胸に激痛が走る

「ぐうっ！！やはりユニゾン無しの支配・復元はリバウンドが来るな」

支配・復元はラストガーディアンの切り札だが、それはあくまでユニゾン中のみの使用が可能な物だ、それをユニゾン無しで使用すればセレスのサポートがあっても。反動まで取り除くことが出来ないセレス」

「はぁっ・・・はぁ・・少し休む、なのはが起きたら教えてくれ。

（判りました、ではお休みください）

「ああ、後は頼むぞ」

返事を返すと私の意識は闇に沈んだ

「此処は・・・」

茜色の光りが差し込む頃に私は目を覚ました、暫くすると私が何を言ったのか思い出す

「レイジングハート・・私皆に酷いことしちゃった」

『あれはネクロの所為でマスターの所為では在りません』

レンジングハートが言うが

「ううん、違うよ私は本当にそう思ったんだ。皆居なくなれば龍也さんが私だけ見てくれるって・・」

『マスター・・・』

レイジングハートが何か慰めの言葉を言おうとした時

「ぐぅぅ・・」

苦しげな龍也の声が聞こえた、驚き初めて龍也が横に居ることに気付く、龍也は額から大粒の汗を流し、苦しそうに胸を押さえていた

「龍也さん!?如何したんです」

その余りの苦しみように驚き声を掛けるが反応が無い

「そ・・そうだ。シャマルに『お待ちください』・・誰?」

シャマルを呼ぼうとすると男性の声で止められた

『グラムですよ。なのは様。申し訳ありませんが連絡はしないで欲しい』

「どうしてですか?龍也さんこんなに苦しそうなのに・・」

龍也を自分が寝ていたベッドに横にし。額の汗を拭いてやりながら尋ねると

『これは治癒魔法でも完治できません、これはリバウンドなのです。ラストガーディアンをユニゾン無しで使用した代償なのです』

「代償・・?」

聞き覚えの無い言葉に首を傾げると

『はい。主は貴方の心を傷つけたネクロに激怒し、ラストガーディアンを使いました。ラストガーディアンの能力はデバイスの支配・復元。主が見た事の有るデバイスなら全て復元し使うことが出来ます』

「なっ・・」

その余りの性能の高さに声を失う、グラムの言うとおりなら龍也は現存する全てのデバイスを使用できるという事だが

『しかし・・その力はユニゾン無しで使用することは出来ません。何故なら強大な力には何らかのリスクが付き纏います。それはラストガーディアンも例外ではなく、ユニゾンなしで使用すればリンカーコアに深刻なダメージを与えます』

グラムの話によると通常使用には問題ないが、復元を使用することはユニゾン無しでは反動が起きるのだ

「なん・・で。私・・なんかの為に・・」

判らなかった、何故自分なんかの為に、反動が起きるのを覚悟でその力を使った、龍也が判らなかった

『主はこう仰って居りました。なのはもはやてもフェイトも大切な家族だと』

「!?」

龍也がそんな事を言っていたとは知らず、目を見開く

『私からこんな事を言うのはおかしいと思います。ですがお願いがあります。主を支えてくれませんか?主は頼ることを知りません、主は常に頼られる存在で自身の弱さを見せません。はやて様達も今の代償の事はご存知ありません。だからその事を知るなのは様に支えて欲しいのです』

グラムが頼み込んでくるが

「私・・如何すればいいか判らないよ?誰かを支えるなんて判らないよ」

『簡単ですよ、主の手を握ってください。それだけで良いのです。共に歩くというのはそういうことなのです』

グラムに促され手を握る、その手は冷たく小刻みに震えていた

「龍也さんの手、震えてる。なんでですか?」

『主は悪夢を見ております。貴方達を護れなかった夢を・・過去の悪夢を見ているのです」

「でも・・最近は見てないって」

龍也が悪夢を見ることは知っていた、だが最近は見ないと言っていたが

『その通りですが・・なのは様がネクロに取り付かれていた事で。何らかの影響があったと思います』

龍也の手はなのはの手を痛いほどの力で握り締めている

「っ・・痛くない・・痛くないです。これくらい龍也さんの心に痛みに比べれば、大丈夫ですよ、私が付いてますから」

痛いほどの力で手を握り締める龍也の手を握り返しながら、言うと徐々にだが龍也の苦しそうな呼吸は穏やかなものになっていった

どれほどの時間そのままだったかは判らなかった。でもそれはとても穏やかで和やかな空気だったが

ヴィー。ヴィー

ブザーが鳴る

「ガジェットがこちらに向かってます。隊長陣は至急ヘリポートまでお願いします」

「・・私も行かないと・・龍也さん行って来ますね」

穏やかな呼吸で眠りに付いている龍也を見ていると

「・・少しくらい良いよね？」

そっと屈み込み、龍也の頬に唇を当てる

「・行って来ますね。龍也さん」

顔が赤いまま医務室を後にし、ヘリポートに向かって行った。医務室で

『まさか・・なのは様があれほど積極的になるとは・・・予想外でした』

『おめぇの所為じゃねぇか？譲ちゃんが積極的になったのは』

グラムとベレンがそんな会話をしていると

「む・・此処は何処だ？」

ベッドから上半身を起こしながら呟く龍也

『お、起きたか旦那、体の調子はどうだい？』

「悪くないだが、魔力は空だな・・そうだなのはは何処だ？」

拳を作ったり開いたりして感覚を確かめる、痛みは殆ど無い、どうやらセレスが治療を行っているらしい。そこでふと気付く。自身が寝ているベッドはなのはが寝ていたもの、どうして其処に寝ている

のかと思い尋ねると

『ネクロ側のガジェットが出た、それで譲ちゃんは出て行ったよ』

「なっ！くそ、何処だ何処に集まっている？」

『ヘリポートです、主』

グラムが言うと

「ヘリポートだな。グラム、ベレン行くぞ」

グラムとベレンを掴み、私はヘリポートに向かって行った

デバイス設定

ラストガーディアン

はやての騎士甲冑とほぼ同じ性能を持つデバイスだがはやての物と違いは高い近接戦闘能力と防御能力。更にデバイスの支配・復元がラストガーディアンの切り札であるが、その力は余りに強大の為にセレスとのユニゾン無しでは龍也の体に深刻なダメージを与える。支配はデバイスの所有者の権限を強制的に奪い、自己のものにする能力だが、復元の方が使い勝手良い為基本支配は使用されることが無い。　また復元でコピーしたデバイスのバリアジャケット及び騎士甲冑までの完全コピーが可能である、また天雷の書と複合使用で最終封印の解除が初めて可能になり、秘めたる力の全てを解放する初めて可能になり現在はスペックの半分ほどの性能しか持たないが

それでも非常に高い戦闘能力を有する

第２５話に続く

## 第２５話（前書き）

こちらも改定版です、宜しければ感想を下さい

# 第２５話

第２５話

「ほなら、フェイトちゃん、ヴィータ頼むで。本当ならなのはちゃんにも頼みたいやけど・・まだ寝とるでな」

「おう、任せとけ」

「大丈夫だよ、なのはの分まで頑張るから」

ヘリに乗り込もうとすると

「待って!!私も行く」

肩で息を整えながらなのはが居た

「なのはさん!?もう大丈夫なんですか」

スバルが此処に居るはずのない、なのはの登場に驚きながら尋ねると

「スバル、ティアナ、御免、操られたとは言え二人に酷いことしちゃった。本当に御免ね」

何度も頭を下げ謝るなのはに

「気にしないでください、あれはネクロの所為なんですから」

「ティアナ・・御免ね、怪我してない?」

「大丈夫です・これが護ってくれましたから」

ポケットから鍵のアクセサリーを取り出す、これはゲートを開くだけでなく、簡単な結界を張る能力を持っていたようで。ダメージは其処まで大きくは無い。スバルも同様だ

「そう。でも本当に御免ね」

最後にもう一度二人に謝ってからはやての元に行く

「なのはちゃん・・もう大丈夫なんか？」

心配そうな声に

「うん、もう大丈夫、それより私も現場に行く、はやてちゃんお願い私にも許可を頂戴」

「・・失態は行動で取り返すって事？」

「うん、お願い私の失態は自分で取り返す。だから・・「ええよ、でも無茶はいかんで？」・・はやてちゃん。うん判ってる」

はやての許可を貰いヘリに乗り込もうとすると

「待て。何処へ行くつもりだ？」

銀髪と赤い瞳になった、龍也によって止められた

「兄ちゃん。どうしたんや？そんな慌てて？」

ついさっきまでヘリの横に居たはやてだが、今は私の目の前に居る

「如何したも何も無い、レイジングハート。お前自分の状態が判ってるのか？」

『判ってますよ。ですが私はマスターの願いを叶えるだけです』

「ふう、お前も馬鹿だ、下手に魔法を使えばお前壊れるぞ」

何を言っているのか判らず首をかしげるはやてに

「今のレイジングハートはそこいらのデバイスより脆い。下手をすればコアが砕けて二度と直せない」

息を呑むなのは、其処まで損傷が酷いとは思っていなかったからだ

「本当なの？レイジングハート」

『はい、今の私ではマスターの魔力を耐えることは出来ないでしょう。ですがマスターの為に耐えて見せます』

力強く返事を返すレイジングハートに

「馬鹿を言うな、お前が壊れればなのはが悲しむだろう」

龍也が諭すように言うが

『龍也様、私はマスターの役に・・』

「お前も頑固だな、だが話しは最後まで聞け、私は止めんよだがこのままだと確実に壊れる。お前は使わせるわけにいかん。だから」

ポケットから黒いカードを投げる

「これは・・ベレン？」

渡されたカードは間違いなく待機状態のベレンだ

「持って行け。なのはなら問題なく使えるだろ」

「有難うございます」

ベレンをしまいながら礼を言っていると、

「そろそろ、敵の進行状態が危ないんで行きますよ？」

ヴァイスがそう声を掛けると徐々にヘリが浮かび、直ぐに見えなくなる

「やれやれ、あいつは相変わらず頑固だよ」

飛んでいったヘリを見ながら呟くと

「兄ちゃん、まだ休まんと」

はやてが心配そうに寄ってくる

「ああ、もう少し眠らせてもらうさ・・」

バランスを崩す、血が足りなくて少々貧血気味だ、ふらついた私をはやてが慌てて支える

「兄ちゃん、やっぱ調子悪いんやな？シグナム悪いけど兄ちゃんを部屋まで連れてって」

「判りました、兄上失礼しますよ」

断りを入れてからシグナムが私の体を支え部屋に戻っていくが

（セレス、頼みが有る）

念話でセレスに話しかける

（判ってます、あの者たちに協力しろですね）

何を頼むのか判っていたのか直ぐに返答を返すセレスに

（頼むぞ、セレスお前なら、直ぐに殲滅できるだろ？なのは達も休ませないといけないからな）

（判りました、では直ぐにあの者達の所へ向かいます）

（ああ頼む）

体の中から何が抜けていく感じがする、どうやらセレスはなのは達の元に向かったらしい

「兄上、部屋に着きましたよ」

気が付けばもう部屋の前に居た

「手間を掛けさした。少し部屋で休ませてもらうよ。シグナムは待機だろう。何かあったら私の代わりに頼むぞ」

「お任せください」

力強く返事を返し来た道を引き返していくシグナムを見送ってから、部屋に入り再び眠りに落ちた

「ちょっと数が多いかな？」

ドンッ！！ドンッ！！！

両手に持ったショットガンでガジェットを打ち抜きながらそう呟いた、３人で破壊して回っているが中々数が減らないので、そう呟くと

「確かにな、数が多いが・・どうって事は無いぜッ！！オラァッ！！」

アイゼンを振り回し纏めて5体のガジェットを破壊しながらヴィータちゃんが私の隣に移動しながら言う、するとフェイトちゃんバルディッシュをサイスモードに切り替えながら

「だね・・ネクロと比べれば・・こんなのどうって事ないね」

バルディッシュでガジェットで両断しながら、フェイトちゃんも私の隣で言う・・大分破壊したから今私達の周りにガジェットの姿が

ないのでこうやって話が出来ているが・・もう少しでその余裕も無くなるだろう

「本当だよね・・でも一気に行こうかな・・ちょっと・・むしゃくしゃしてるし・・ベレン・・カートリッジロードお願いできる?」

体を乗っ取られたとは言え、教え子に殺傷設定で魔法を使わせたネクロに対する怒りは全く消えておらず、八つ当たりに近いがガジェットでそのむしゃくしゃを晴らそうと思い、両手に持ったベレンに話しかけると

『ああ?カートリッジ?出来るけどよ・・あんた体大丈夫か?俺のカートリッジは旦那用の強力な奴だから負担大きいぜ?』

龍也さん専用・・なんだろう?凄く嬉しいような・・

「大丈夫!だからロードお願い」

『オーライ・・カートリッジロード!!』

ズガン!!

音を立てて二発の薬莢が飛び出し、私を濃厚な魔力が包み込む、その中で私は普段と違う感覚を感じていた

(なんだろう?くすっぐたい感じだ・・抱きしめられてる様な・・言いにくいけど・・暖かい?)

まるで抱きしめられてる様な感覚に妙な違和感を感じていると、

『ほら・・行くぜ?狙い定めろよ・・行くぜ・・俺の最大魔法!!』

その言葉と共に私の前に巨大な魔法陣が展開された・・それには見覚えがあった・・

「これ・・もしかしてワームスマッシャーですか?」

思わず敬語で尋ねると

『違うぜ・・俺の最大最強魔法!!全力でガラクタどもを消し飛ばそうぜ!!』

ベレンって・・かなり好戦的なんだなと思いながら

「うん!ベレン行くよ?」

笑いながら言うとベレンは詠唱に入った・・

『おうよ!!全ての者に暗黒の断罪を!!大いなる悪意の炎で燃え尽きろ!!』

とんでもない詠唱な気がする・・これを龍也さんが言ったら怖いなと私は思った

『おらぁッ!!!行くぜ!!カオス・・・フレアッ!!』

ショットガンから砲撃が放たれた

ゴウッ!!!

とんでもない轟音と共に赤黒い砲撃が１００近いガジェットを全て消し飛ばした

「・・これとんでもない魔法なんですけど・・」

そう言うとヴィータちゃんとフェイトちゃんもそう言いたそうに頷いていた

『そうか？旦那のお気に入り何だけどな・・あっ・・黒騎士の時な？』

・・黒騎士の時か・・私達その時の龍也さん知らないもんな・・と思っていると

「なのはさん！聞こえますか！！そこから少し離れた所にネクロの反応があるんですが・・いえ！！待ってください！！数がどんどん減ってる！？どういう事？」

困惑するアルトに

「とりあえず見に行ってみるから、ポイントを教えて！！」

フェイトちゃんが言うと

「はっ・・はい！■■■■です！！」

私達はアルトの報告のあったポイントに移動を始めた

なのはがカオスフレアを放つ少し前

「キキ・・見つけタ・・天雷の騎士・・守護者は居ないのカ・・キキ一人で我ら全てを倒すつもりカ？」

嘲笑うネクロ達、私の前には５０近いネクロの姿がある、その内ＬＶ２は１０体前後という所だ・・流石に私一人では少々つらいかもしれんな・・そう思っていると

（セレス！！私を・・私を戦わせてくれ！！頼む！！）

頭の中で女の声が響く、直ぐに誰か気付き

（馬鹿を言うな！！今お前は戦える状況じゃ無いだろう！）

と怒鳴ると

（判っている！だが・・お前一人では無理だろう！だから戦わせてくれ！！王の為に！！）

王の為・・それを言われれば・・仕方ない・・

（判った・・だが強制アクセスで苦しいぞ？）

強制アクセスは負担が大きいと言うと

（判っている！だがその程度同という事は無い！！）

その言葉に頷き、私は魔力を集中させ・・

「アクセス・・天雷の炎・・今ここにその姿を現せ・・」

私の前に炎で出来た魔法陣が展開され、徐々に人の姿を形作り・・

やがてそれは一人の女の姿になる

「我が名はアイギナ・・天雷の王に集いし騎士が一人・・炎のアイギナ・・我が剣の前に消え失せるが良い・・」

腰の鞘から剣を抜き放ちながら、鋭い眼光でネクロを睨む

「馬鹿ナ！天雷の騎士はお前一人のハズ！どうしテ」

困惑するネクロ達に

「何処の世界に敵に教える馬鹿が居る、さぁ・・あるべき世界に帰るが良い・・」

フォン！音を立てて私の手に杖が具現化し、魔法の詠唱に入ろうとした瞬間

「セレス・・私がやる・・お前は下がっていろ・・」

全身から凄まじい闘気を放ちながらアイギナが前に踏み込む・・私は理解したアイギナの気持ちを

「判った・・だが・・私にも王の命がある・・だから少しはやらせてもらうぞ・・」

スフィアを幾つか展開しながら言うと

「ああ・・好きにすれば良い」

「感謝する・・」

ドンッ!!

空気が爆発する音と共にアイギナはネクロに向かって行った

ザンッ!ザンッ!!

次々と両断しネクロを消滅させるアイギナの後姿を見ながら

（不甲斐ない自分に対する怒りか・・判らなくは無い・・）

回りのＬＶ１にスフィアを打ち込みながら私はそう感じていた・・私以外の天雷の騎士はかつての戦いの傷の所為か、今は具現化も出来ず・・書の中で眠りについている・・それが悔しいのだろう・・私達は王に仕え・・王の為に闘うそれが私達の存在意義・・だが戦う事が出来ないという事はよほど腹ただしいのだろう・・

「どうした!!掛かってこないのか!!ならば早々に消えろ!!目障りだ!!」

両手を上げるアイギナ、それと同時に大量の剣が浮かび上がる

「消え失せろ!!!」

指を鳴らすと同時に剣がネクロ達に降り注ぎ、爆発していく・・これがアイギナの固有スキル・・炎の断罪(フレイムエクスキューソナー)これを使った以上・・あい

つらはもう存在していないな・・煙が消えるそこにはネクロの姿は無かった

「はぁ・・はぁ・・くそっ!この程度で息切れとは情けない!!」

肩で大きく息を整えるアイギナに近寄ると

「セレス・・礼を言う・・少なからず王の為に戦えた・・」

今ここに居るアイギナは簡単に言えば亡霊・・私の魔力で一時的に具現化してるに過ぎないもう直ぐ消えてしまうのだ

「気にするな・・むっ・・この気配は・・」

近付いてくる魔力反応・・これはヴィータ様達の・・思ったより時間を掛けてしまったようだ・・ガラクタを破壊し終る前に戻るつもりだったのだが・・そんな事を考えているとヴィータ様達が私とアイギナの前に現れる・・3人とも私を見て信じられないと言う顔をしている

「なっ!どうしてお前がここに居る!!リィンフォース!!」

リィンフォース・・王にも昔同じ事を言われたな・・

「残念だが・・私はリィンフォースではない」

肩で息をするアイギナの肩に手を置きながら返事を返す

「じゃあ貴方は何者ですか!!」

デバイスを向けながら言うフェイトに

「私は・・いや・・止めて置こう・・今は名乗るべきではない・・ではなまた会おう王に近い者よ」

「待て！」

ヴィータ様が私達を止め様とするが、私はそれより早く転移魔法を発動させ王の元へ戻った・・二人の姿の消えた空域でなのは達は

「リィンフォースじゃない・・じゃああの人たちは一体何者なの？」

驚きという感じで呟くなのは

「・・ちっ！・・考えても判らねぇ・・とりあえず六課に帰ろうぜ」

イライラとした声で言うヴィータに先導され、なのは達は六課へ戻って行った・・この日の出来事ははやてに報告されずに終り・・この出会いから数日後・・再びセレスになのは達は出合う事になる

自室で本を読んでいると目の前に魔方陣が展開される

「セレスか・・流石仕事が早い・・」

と思い本を閉じると同時に、魔方陣が消え二人の女性が姿を見せる、一人はセレスだ・・ではもう一人は・・

「アイギナ！？どうして具現化してるんだ？」

今は具現化出来ない筈の騎士である、アイギナが居る事に驚きながら尋ねると

「数が多く・・私一人では対処出来ず・・強制アクセスで召還しました・・」

強制アクセス!?そんな事をすればアイギナに負担が・・

「王よ・お久しぶりです・・この様な情けない姿を見せる事をお許しください・・」

心配しアイギナに近寄ると、私に気付いたのか頭を下げるアイギナに

「そんな事はどうでも良い!!大丈夫なのか?」

肩で息をするアイギナは、苦しいはずなのに笑みを浮かべ

「大丈夫です、王よ・・御気になさらず・・もう戻りますので、私なんかの為にその様な顔をしないで下さい」

私なんかというアイギナに

「馬鹿を言うな!!お前だって私の大切な仲間で家族だ、だからそんな事を言わないでくれ・・頼む」

苦しそうなアイギナの両手を握りながら言うと

「もったいないお言葉・・次に会えるときは・・もう少し共に居させてください・・」

もう一度微笑みアイギナの姿は消えた

「・・セレス・・どうしてこんな事を?」

セレスを見ながら尋ねると

「アイギナが望んだのです・・王の貴方の為に戦いたいと・・」

アイギナ・・苦しい筈なのに・・なんという無茶を・・

「セレス・・次はそんな事をしないでくれ・・私の為なんかに苦しむアイギナ達は・・見たくない・・」

アイギナもシグナム達同様私の家族だ・・だから苦しむ姿は見たくないと言うと

「判っております・・この様な事は二度としません・・」

セレスは神妙な顔で頷き

「王よ・・申し訳ありませんが・・騎士プログラムに悪影響があるかもしれないので・・確認をしたいので失礼致します・・」

深々と頭を下げ、セレスの姿は消えた

「アイギナにセレス・・もう少し自分の事を考えてくれても良いだろうに・・」

私の為に無茶をする、セレス達の事を考えながらもう一度本を開い

たが・・

「駄目だ・・集中できない・・もう寝よう・・」

アイギナの事が心配で本の内容に集中できないので、本を閉じアイギナの事を心配しながら今日４回目の眠りに落ちた・・

デバイス設定

ベレン

二丁拳銃型のデバイス。ミッド式の魔導師なら使用が可能だが魔力がＳ以上ないと起動出来ない。龍也が使用する際はストライクバレットを用いる特殊的なスタイルが特徴である。三つのスタイルを保持しそれぞれが特別な性能を有している

通常フォーム

ライダースーツに両手に銃を装備した基本形態、射撃が中心になると思いがちだが近接にも高い力を持つ、ストライクバレットにより射撃と主に足を使った接近戦が得意

インファイトモード

両手に鉤爪を装備している形態、高い近接能力と瞬間的な魔力の増幅が武器、爪や足から収束した魔力を放つ、この形態でも銃を使用することは可能だが通常フォームと比べれば威力の低下が見られる

フォールダウンモード

堕天を意味する最終形態で背中に生えた一対の翼と背中に背負ったカオスブラスターが武器、凄まじいまでの対魔力を所持しＳランク

以下の魔法は完全無効であるが、その能力上に5分以上の形態維持は不可能であるが、この形態ならば5分あれば殲滅できない物はない空間支配と重力制御をサポートし、ワームスマッシャーの始まり広域殲滅が得意。背中のカオスブラスターから一発一発がなのはディバインバスターと同威力の弾丸を乱射する、ラストジャッジメントと全てを飲み込み消滅させるブラックホールクラスターが切り札である

なのは使用時
フォールダウンモードの翼を標準装備しているが、対魔力はなくただの飾りの様に見えるが飾りではなく飛行魔法の構築のサポート及び砲撃時の体制維持などが翼の意味である

第２６話に続く

## 第２６話（前書き）

前も書きましたが、ナンバーズ同士の呼び方と、私のオリ主を使いたいという作家の方、常時募集中です是非ともよろしくお願いします。

ですが原作を知らないで書くのは難しいですね、でもそれも楽しいと作者は思います

# 第２６話

第２６話

「ん・・・ふう。良く寝たな」

布団から抜け出し大きく伸びをする

「やはり・・ユニゾン無しでは反動が残るな」

なのはがネクロに取り付かれて数日が経ったが、自身の髪はまだ元に戻ってない上に、魔力は全開時の四分の一程しかなく、回復にも恐らく今日一日掛かるだろう。

「これでは緑に戦えんな・・」

そう呟き、着替えようとすると

「お～い、兄ちゃん起きとるか？」

ノックもせずに部屋に入ってくるはやてを横目で見る

「はやて、せめてノックをして欲しいのだが？」

冷静に言うと、少しバツが悪そうに

「ああ、御免でも今日は新人のデバイスの第二段階の開放の試験やから。兄ちゃんにも見て貰おうと思ってな」

「第二段階？あいつらのデバイスはあれで完成じゃないのか？」
何時もの早着替えで着替え終え、尋ねると
「そうやで、皆のレベルが上がったら、リミッターを外そうと思ってたんや、んで皆に内緒で試験をやるんや」
「そうか・・では見せて貰うとするか。どれ程強くなったのか」
二人でシュミレーションルームに向かって行った
「ふむ・・大分動きがいいな。特にスバルとエリオが良いな」
最近は魔力がほぼ無いと言っても過言ではないので、訓練には参加して無かったので知らなかったが。二人の動きは最後に見たときより遥かに良い物になっている事に感心していると
「ふふ、兄ちゃんの影響やな」
ラストガーディアンを用いた戦闘はどうやら。皆にいい刺激を与えたらしい
「そうか・・自信を無くさないかと不安に思っていたが。いらん心配だった様だ」
スバルとエリオだけでなく、ティアナとキャロの動きも良い。その上達振りは目を見張るものが有る
「どうやら終わりのようだな・・やれやれもう少し早く来ていれば。良かったな」

訓練が終わったようで、皆が集合する所を見ながらそう呟くと

「ん。やっぱ、兄ちゃんは成長しとるところが見たかったんか？」

「まぁ・・・そうだな。後ろから追ってくる若者の存在は嬉しく思うな・・」

「ふ～ん、そんなもんなんか」

はやては、私の言っていることが今一理解できていないようだ

「そのうち判るさ・・さてと皆の所に行くか」

「うん、行こうか」

笑顔で隣に立つはやてと共になのは達の所へ向かった

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了。お疲れ様！」

ＦＷ４人はドロドロのボロボロだ。返事も絶え絶えだ。

「でね？実はなにげに今日の模擬戦が第２段階クリアの見極めテストだったんだけど・・・」

なのはがサラっとテストであったと言い、四人は「え！？」と声を揃えた。

「で・・結果なんだけど・・「待て、それは私が判断する」

後ろからの龍也の声で遮られる、慌てて振り返ると龍也とはやてが並んで歩いてきていた

「龍也さん（お父さん）部隊長、おはようございます！！」

「おはようさん、皆元気そうやな」

穏やかに挨拶を返すはやてに続き

「ああ、おはよう、さて早速で悪いが。テストの結果を発表するとしよう」

その言葉に表情を固くするスバル達を見てから

「まず、スバルだが攻撃力は今までの通り素晴らしいものが有るが・・相変わらず猪突猛進過ぎるな。もう少し一つ一つの行動を考えろこれはエリオにも言えるからな」

スバルとエリオに対する。辛口の評価に不安そうな顔をしている、ティアナとキャロに

「次にティアナとキャロだが・・ティアナの状況判断は素晴らしいものが有るだが・・柔軟性が足りない、キャロはもう少しパートナーのエリオを信じろ、フルバックなんだからパートナーとの信頼関係も大切だ、お前にはフリードとエリオという信じるに値するパートナーが居るはずだ」

「・・はい」

俯きながら返事を返す、キャロ。エリオたちも表情が固く、雰囲気は暗い

「さて・・テストの結果を言うが、改善点は有るが、十分に合格ラインは超えている。よって全員合格だ！」

さっきまでの暗い感じから一気に明るくなり

「本当ですか・・いろいろ駄目だしが在りましたけど」

「当たり前だろう？まだまだ改善の余地が有るのは当然。若いんだからな。だがその分伸びしろもある。だが私が断言する、お前たちは将来的に最高の魔導師になると」

龍也の言葉に笑顔になる。スバル達を見てから

「それでは、皆食堂に後で来るように。今日の朝食は私が腕を振るうからな」

「「本当ですか！」」

スバルとエリオが食いついてくる、目は期待に輝いている

「勿論本当だ、楽しみにしているといい。なのは、フェイト私は準備をしてくる。何か言うことが有るなら言って置けよ。・・・はやて一緒に来るか？」

「勿論。私も行くで」

来たときと同じようで並んで、歩き去って行った

「ああ～。まだかな～、私お腹減ったよ」

スバルがお腹を擦りながら、言うと

「スバル、あんたそれ何回目？恥ずかしいから少し黙ってて」

私が本を読みながら睨むと

「ええ～でも。お腹空いたよね～エリオ」

話を突然振られ驚いた表情を見せたが

「ええ、僕もお腹空きましたよ」

スバルと同様にお腹が空いたというエリオ、それは仕方ないと思うが、此処まで何度もお腹が空いたと言われると此方が恥ずかしくなる

「ふふ、しょうがないんじゃないかな？私も楽しみだし」

コーヒーを飲みながらなのはさんが言う、以前なら黒くなることがあったが最近はそれが無い。終始にこやかだそんな事を考えていると

「すまない、大分待たせてしまったな。だが待った分の価値は有るぞ」

大きめのトレイを両手に持って。龍也さんと部隊長が私達が座る席の前に来た

「いや、何を作るか迷ってな・・結局洋食で固めてみた」

そう言って並べられたのは、スクランブルエッグ、サラダ、コーンスープ、それとカリカリに焼かれたベーコンだ

「このベーコンは私の自家製でね。見てくれは悪いが味はいいぞ」

龍也さんの言うとおりで形は多少悪いがとても美味しそうだ

「では、食べるとしよう、頂きます」

「「「「頂きます」」」」

手を合わせ、最近習慣となっている、挨拶をしてから置かれた料理を口に運ぶ

「美味しい・・」

思わすそう言ってしまう。何度か龍也さんの料理は食べたことが有るが。やはり美味しい女としては男性に料理負けているのは嫌だが、龍也さんの腕は間違いなく一級品だ。

「うっ！やっぱり龍也の料理は美味しい・・何時になったら追いつけるかな？」

料理を口に運び難しい顔をしながら呟く、フェイトさんと

「うう。私お兄さんの料理のレシピ持ってるのに、この味が出せません」

コーンスープを口に運び、泣きそうな声でシャマル先生が嘆いてい

るのが見えるが

「むっ・・失敗だ。塩が濃い」

龍也さんがスープを一口飲み、次の一言でシャマル先生とフェイトさんが凍りつく。これだけ美味しいのに失敗と言う龍也さんが信じられなかった。こんなに美味しいのにな・・そう思いながらスープを再び口に入れた

「それで・・何の話をしてたんだ?」

食後の紅茶を飲みながら龍也さんが尋ねてきた。どうやら自分たちが居なくなった後の会話が気になったらしい

「特に何も無いですよ。唯今日は新人達に休暇にするよって話しただけですよ」

コーヒーを呑みながら、フェイトさんが返事を返す

「休暇か・・そうだなスバル達も休みが無ければ辛いだろうな」

紅茶を飲みながらそう返事を返しているがふと気になった

「龍也さんて、黒騎士の時から休んでますか?」

ビクっ!肩が大きく動き目を逸らす、まさか

「兄ちゃん、まさかとは思うやけど、休んでないとか無いよな」

「・・そんな事は無い、ちゃんと休んでいた・・・」

目を逸らしながら言う龍也さんの顔を掴み無理やり目を合わす

「兄ちゃん、正直に言うてくれない？休んでるのか休んでないのか」

この位置からは見えないが、部隊長の目は恐らく黒くにごっているだろう

「・・一日丸々休んだことは無い・・」

遂に観念したのか搾り出すように返事を返した。龍也さんだがその額から汗が流れている

「はぁ～兄ちゃんは相変わらず無茶をするんやな、よし決定や兄ちゃんも今日は休み、街にでも出掛けて来たらええ」

呆れ半分といった口調で部隊長が頭を抱えながら言う

「いや・・しかしはやて達が仕事しているのに、私だけが休むわけにはいかないのだが」

固いと言うか律儀と言うのかそんな事を言う龍也さんに

「気にしんでええよ、偶には羽を伸ばすのも大事やで。な！なのはちゃん達もそう思うやろ？」

うんうんと頷いているなのはさんとフェイトさん。何だろうこういう時の連帯感は

「・・わかった、今日は休ませてもらう。私は一度部屋に戻るから

な」

何時もの黒いコートを翻し歩いて行くその姿は銀の髪と一致してとても美しいと思った

「街に出掛けるなど、久しぶりだな」

制服から私服の黒の上下に変え。コートを羽織る

「確か・・ノーヴェ達と街に出掛けたのが最後だな」

何だかんだ言ってくるが、やたら私の手伝いをすると言って来た。ノーヴェ達の事を思い出す。やる気は有るのだが残念ながら経験が少なかったのがマイナスになっていたなと思う、苦笑しながら首からはやてから貰ったペンダントを下げ

「さて、出掛けるとするか」

コンコン、

ノック音がする

「うん?誰だ」

扉を開くと。其処には私服を着たヴィータが居た。ヴィータが今来ているのは、以前私がヴィータに贈ったもので、ヴィータの騎士甲冑をモチーフに私が縫った服で赤を基調とし金の刺繍が施された服だ、ちなみフェイトとなのはも作って欲しいと言っているが。その度にはやてに却下されている

「あのよ・・兄貴あたしも今日休みなんだ。良かったら一緒に遊びに行かないか？」

服に負けないくらい赤くなっているヴィータが俯きつつ服を握り締めながら言う

「私とか？別に構わんよ」

「本当か？」

バッと顔を上げるヴィータ

「ああ、一人では詰まらないからな。ヴィータさえ良ければ一緒に行くか？」

「うん。行く、一緒に出掛けるぜ、早く早く行こうぜ」

笑顔のヴィータに手を引かれながら街に出掛けていった

第２７話に続く

## 第２６話（後書き）

次回はヴィータと龍也のデート編になります、と言っても途中で切り上げになってしまいますが、読者の方が納得してくだされば幸いです

それでは失礼いたします

## 第２７話（前書き）

２６話の後書きにもかきましたが、今回はヴィータメインのお話です、成長の無い。守護騎士としての悩むヴィータを上手く書けて入れれば良いのですが

それでは本編始まります

# 第27話

第27話

「こうして、ヴィータと出掛けるのも久しぶりだな」

二人で街を歩きながら買い物をしていると、昔を思い出し自然とそう呟いた

「そうだな。兄貴が行方不明になる前が最後だから、8年ぶりか・・」

隣を歩きニコニコのヴィータが返事を返す、二人でクラナガンの街に来て見たが、やはり偶に外に出掛けるのは良い事だと思う、そんな事を考えていると

「兄貴！次はあっち行こうぜ！！」

元気な声を上げるヴィータに苦笑しつつ、ヴィータが指差す方に歩き出した

兄貴の背は高い。あたしと比べたらそれは一目瞭然だ。こうして隣通しで歩いていても仲の良い兄弟にしか見えない、これがはやてやなのはだったら違う、少なくとも妹ではない恋人として見えるだろう、でもあたしじゃ無理だ。どんなに兄貴が好きでも、夜天の書のプログラムであるあたしは成長が無い、どれほど月日が流れてもあたしはこのままだ、決してあたしじゃ兄貴の恋人に為れない。その事実が胸に圧しかかる、偶に思う、もしあたしが人間だったら・・

プログラムじゃなかったら兄貴の恋人に成れたのかと思う

「よぉ、そこの兄ちゃん、良かったら見ていかないか?」

そんな事を考えていると横手から声を掛けられる、驚きその声の方を見ると人の良い笑顔を浮かべた露天商が居た

「アクセサリー、安く売るよ?どうだい妹さんに一つ」

あたしの方を見ながら、笑いかけてくる。露天商

「ふむ・・そうだな。では一つ貰おうか?ヴィータどれが良い、好きなものを選ぶといい」

並べられた。アクセサリーを見るどれも銀で感じが良い、余りこういう物には興味は無いあたしでも綺麗だと思った

「えっと・・兄貴これがいい」

目に留まったのは二つの三日月が重なった髪留めだった

「これか?すまないがこれを頂こう」

「毎度!へへこれは中々の一品だよ、兄さん」

商品のことを説明しながら丁寧に、紙に包みあたしに向け

「良かったな、譲ちゃん、ほれお前さんの兄さんからのプレゼントだ」

再び人の良い笑顔で手渡しくれた髪留めを握り締める

「また来てくれよ、俺はここら辺で商売してるからよ」

手を振り見送る露天商から離れ、再び歩き出すが

（やっぱり・・あたしじゃ兄貴の恋人に見えない・・あたしはこんなに兄貴が好きなのに）

露天商の妹と言う言葉が頭を過ぎる。それが頭の中を過ぎる度に不快感が募る

（嫌だ、妹じゃ嫌だ・・あたしは妹じゃなくて・・）

「ヴィータ？どうした気分でも悪いのか？」

心配そうな兄貴の声で正気に戻る

「んん。なんでもねえよ」

出来るだけ普通の声で言うが

「そんな顔で何を言ってる、顔が真っ青だぞ」

そういわれ、喫茶店の窓を見る、其処には今にも倒れそうな顔色をしたあたしの顔があった

「人込みで疲れたのだろう、此処の公園で少し休むか」

兄貴に連れられ公園の中に入っていった。

「大丈夫か？顔色が真っ青だが気分でも悪いのか？」

公園のベンチに座わると、心配そうな顔でこっちの顔を覗き込む兄貴

「大丈夫だよ、兄貴は大袈裟なんだよ」

心配してくれているのにこんな風に返事を返す自分が嫌だ。はやてみたいにもっと上手く甘えられたらいいのに

「少し待ってろよ、今何か飲み物を買ってくるからな」

そう言い公園を後にした兄貴を見送り、ベンチに腰掛け空を見上げていた、どれくらいそうしていたかは判らなかった、でも胸にあった、もやもやとした感じは無くなっていた。気分が軽くなり空を再び見上げていると

「すまん、少し遅くなった」

コンビニの袋を持って兄貴が歩いてくる

「大分顔色が良いな、気分はどうだ？」

袋からジュースを取り出しながら尋ねてくる、そのジュースはあたしが大好きな奴だ

「へへ、もう大丈夫だぜ」

そのジュースを受け取りながら返事を返すと

「そうか」

笑顔で横に座り、自分の分の飲み物を取り出しているが、それを見て顔を顰める

「兄貴はまたそれか？それ余り美味くないぞ？」

兄貴が飲むのは紅茶で、甘くない奴を好んでいる。あたしはとてもじゃないがそれは飲めない、苦すぎるからだ

「そうか？私とシグナムはこれが好きだが？」

シグナムと兄貴の味覚は良く似ている、二人とも甘いものは好きじゃないし、どちらかといえばこういう香りや風味を楽しむ物が好きだ

「まぁ、好みは人それぞれだからな」

穏やかに笑い紅茶を飲み二人で暫く話していると

「そうだ・・いい機会だ、これを渡しておこう」

兄貴はポケットからお揃いのブレスレットを取り出し、手渡してくる

「えっ、これ如何したんだ？」

そのブレスレットは見た目からかなり高価な物だと判る

「はやてとはお揃いのペンダントが有るからな、ヴィータにも何かお揃いでアクセサリーを付けようかと思ってな。作ってたんだ」

兄貴は手先が器用だから、こういうのを作るのは簡単だろう、でも見た目からは。とても手作りには見えないほど綺麗に細工が施されている

「本当に貰うけど、良いのか後で返せとか言っても返さないぞ?」

渡されたブレスレットを握り締めながら言うと

「私はそんな風に見えるのか?心外だ。一度渡したものを返せとは言わんよ。それにこれは元々ヴィータの為に作ったものだしな」

あたしの為と言う言葉がとても嬉しかった

「へへ、じゃあ貰っておくよ兄貴、大切にするからな」

渡されたブレスレットを手首につける、それはピッタリと手首に収まった

「ああ、そうしてくれると嬉しいよ」

そういうとあたしと同じデザインのブレスレットを左手に付ける

「さて・・次は何処へ行く?ヴィータの好きな所に行こうか?」

手を差し出して、微笑んでいる兄貴の手を掴む

「いや。次は兄貴の好きな場所に行こうぜ。図書館とかさ」

そう言うと難しい顔をする兄貴

「いや・・それだとお前が暇にならないか?」

「馬鹿にするなよ、あたしだって本くらい読むさ」

「漫画か?」

本を読むと言うと漫画かと尋ねる兄貴に

「兄貴よ。あたしだって女だぜ、料理位するさ、んで兄貴に食べさせるんだ」

「そうか・・それは楽しみだな」

「おうよ、ビックリするくらい美味い料理を作ってやるさ」

あたしじゃどんなに頑張っても兄貴より美味い料理は作れない、でも込める愛情なら負けない。はやてが言ってた料理は愛情だと、ならあたしだって愛情なら負けるつもりは無い

「そうかでは、図書館に行くか?」

「おう、行こうぜ」

二人で手を繋ぎ図書館に向け歩き出した、それはとても軽やかなものだった。

「所でよ、兄貴は何か嫌いな物は有るか?」

図書館で料理の本を読みながら尋ねると

「基本嫌いなものは無いな」

兄貴は神話の本を読んでいる、兄貴は神話とかの本が好きでよく読んでいる

「じゃあ好きな食べ物は？」

「私が好きな物と言われてもな・・そうだはやてに聞けば教えてくれるぞ。私が何が好きなのか」

「う～ん、やっぱそうだよな、はやてが一番兄貴のこと知ってるもんな」

これがなのはやフェイトならはやては絶対に教えてくれないなと思い本を捲る

「さて・・とそろそろ図書館を出るか、折角良い天気なのに図書館に篭りっきりと言うのも勿体無い話だ」

本を片付け立ち上がり兄貴に

「そうだな。じゃあ次はゲームセンターでも行こうぜ？」

「それも良いな、ではゲームセンターに行こうか」

もう一度手を繋ぎ歩き出そうとした時、キャロからの全体通信が入った

「こちらライトニング４！緊急事態につき現場報告をします！路地裏にてレリックと思しきケースを発見！更にケースを持っていたらしい小さな女の子が一人です！」

通信を聞き終わると、目を閉じ息を吐く兄貴、そして次に目を開くと

「どうやら・・休みは此処までのようだ。ヴィータ行くぞ」

先程までの優しい瞳では無く、戦う魔導師としての目になった兄貴、何度も見ているがやはり顔が赤くなる

「おう、判ってる、続きはまた今度だな」

赤くなった顔を隠しながら言い、二人でキャロ達が待つ場所に向かって行った

第２８話に続く

## 第２８話（前書き）

ナンバーズ同士の呼び方と、私のオリ主を使いたいという作家の方、常時募集中です是非ともよろしくお願いします。それと感想とレビューもお待ちしています。作者の励みとなるので、よろしくお願いします

それでは本編始まります

# 第２８話

第２８話

「居たぞ、あそこだ」

報告を元にエリオとキャロが居る所に向う、そこには既にスバル達が合流していた

「龍也さん」

真っ先に気付いたスバルが声を掛けてくる

「すまん、少々遅くなったようだ。

「そんな事ないですよ、連絡してしてそんなに時間がたってませんよ」

言うとおりだ連絡があってから、五分ほどで現場に到着した。今の魔力が減っている状態でも身体強化は問題なく行うことが出来る

「あの龍也さん、ヴィータさんは如何したんです？一緒に居ると聞いていたのですが・・・」

同じ休暇のはずのヴィータの姿が見えない事を尋ねると

「兄貴いい加減降ろしてくれ」

背中からヴィータの声がする

「すまん、今降ろす」

背中から真っ赤なしかし騎士甲冑とは違うゴスロリ服姿のヴィータが現れる、その服は間違いなく似合っていたが、一つの疑問が浮かび上がった

「・・・ヴィータさん・・もしかしてゴスロリ好きなんですか？」

「違う！！これは・・その・・あの兄貴が作ってくれたんだ！！！」

顔を赤くしながら言うヴィータに驚きの表情で

「じゃあ・・これは龍也さんの趣味なんですか？」

驚きながら尋ねると

「ん？いや違うはやての趣味だな、ヴィータにはこれが似合うと言っていたので。はやてのデザインを元に作った」

倒れてる少女の様子を見ながら冷静に言う私に

「これお父さんが作ったんですか？」

ヴィータの服を見ていたキャロが目を輝かせながら尋ねてくる

「そうだよ、あとシグナムとシャマルにも作ったことが有る、勿論はやてにもな」

返事を返しながら、少女の脈を図る、詳しくは判らんがバイタルは

安定しているな

「あの・・お父さん・・私にも服を作ってくれませんか？」

赤くなりながらキャロが言う

「別に構わないが・・はやてに許可を貰ってくれ。なんせ服を作るには正確なサイズが必要になるからな。男の私が女性のサイズを図る訳にも行かないからな」

前になのはに頼まれ作ろうとしたことがあったがはやてとヴィータがこれに激怒。フェイトを巻き込みかなり危険なレベルの模擬戦が行われた。ちなみサイズを図ったのは私ではなくフェイトだった

「じゃあ。部隊長が良いって言ったら「ああ。好きなデザインで作ってあげるよ」

嬉しそうに笑うキャロを見ていると

ババババババ

上空からヘリの音がする

「どうやら、シャマルが来たようだな」

その呟きと共にシャマルが降りて来るのが見えた

「お兄さんもう来てたんですか？」

大分離れた所に居たのでまさか既に現場に居るとは思っていなかっ

た様子でシャマルが尋ねてくる

「ああ、連絡の後ヴィータを背負って走ってきた、所でこの子は様子は如何だ?余り詳しくないが応急処置はしてある」

「ばっちりですよ、的確な処置が施されてますよ・・・所でヴィータちゃんの服お兄さんが作った奴ですね。懐かしいですね」

少し離れたところに居るヴィータを見て、懐かしそうに目を細めるシャマル

「そうなのか?昔は良く着てただろ?」

出会って割と直ぐに作ったため良く着ていたと記憶していたが

「着るとお兄さんを思い出すからって余り着なかったんですよ、ヴィータちゃんそれにその服を見るとはやてちゃんも悲しそうな顔をしてましたから」

「そうか・・やれやれだな、あの時の私はどうしようもなく愚かだったようだ」

今のはやては私からあまり離れようとしないそれは全て私の所為なんだろう。悲しませ心配させた私への罰なんだろうな。

「お兄さん?どうかしましたか」

「いや、何でもないとりあえずこの子をヘリに運ぼう、ヴィータ後は頼むぞ」

「任せとけよ、兄貴」

笑顔で答えるヴィータに笑みを零す、私とシャマルはヘリに乗り込んでいった、その様子を見ている一人の少女・・チンクだ

「聖王の器は無事にダークネスが回収した。後は私がここから離れるだけだな」

そう呟きチンクはまるで最初からそこに居なかったように消えていた

機動六課官制室ではやて達は黙々と周辺調査を行っていた。すると、地下水路に反応を感知、画像を映すとそこにはガジェットがいた。

「・・・！ネクロそれにガジェット来ました！」

瞬間、管制室に緊張が走る。

「地下水路に数機ずつのグループで総数１６・・・２０！」

「海上方面１２機単位が４グループ！」

管制官のシャーリー達の報告にはやては顎に手を当て考える。

「・・・多いな」

「どうします？」

「・・・そうやなあ・・・」

なのはやフェイトを向かわせればいいのだが、そうするとヘリのレリックが手薄になる。ネクロが増援しないとも限らない。こちらも余裕を持って対応しなければならない。グリフィスの質問にはやてはどうするか考えあぐねていると、通信が入る

「こちら１０８部隊、ギンガ・ナカジマです！」

はやてとグリフィスはその名前を聞くと驚く。

「別件捜査の途中だったんですが、そちらの事例とも関係ありそうなんです。参加してもよろしいでしょうか？」

ギンガのような優秀な捜査官が参加してくれるなど願ってもないことだ。今は一人でも手がいる状況で、この申し出は渡りに船だ。

「うん！お願いや！」

はやては新たにフェイトを呼び出し、モニターに映す。フェイトの肩にはリインが乗っている。

「ほんなら、リインはヴィータ達と合流。強力してネクロの制圧！」

「了解です！」

はやての命令にリインは元気良く返事をする。

「なのは隊長とフェイト隊長は、北西部から！」

「了解！」

なのはとフェイトが同時に返事をする。

「ヘリのほうはヴァイス君とシャマルに任せてええか？」

「お任せあれ！」

「しっかり守ります！」

ヴァイスとシャマルも頼りになる返事をする。なかモニターの申し訳無さそうな兄ちゃんの顔が映る

「すまない、今の私では足した戦力にはならんな」

シャマルに聞いていたが今の兄ちゃんの魔力は良くてCプラス、下手をすればEランク現状では自身のデバイスのグラムとベレンの起動さえ出来ない状態だ

「気にせんといて、兄ちゃんお願いやから今の状態で無茶せんとてな？」

「了解だ」

兄ちゃんが返事を返すと同時に一度通信が切れる

「皆。怪我せんといてな」

祈るように呟きモニターに写るネクロを見ていた

地下水路を調査しながらギンガが何故近くに居たのかの説明が行われていた当然、龍也達にも。

「私が呼ばれた事故現場には、ガジェットの残骸と壊れた生体ポッドだったんです。ちょうど、5～6歳の子供が入るくらいの。近くに何か・・・重いものを引きずって歩いたようなような跡があって、それを辿って歩いていこうとした最中に連絡を受けた次第です」

生体ポッドの中には「聖王」が入っていて、レリックボックスを引きずって行ったということだろう。

「それにこの生体ポッド少し前の事件で良く似たものを見た覚えがあるんです」

ギンガが暗い顔をする。

「私も・・・な」

はやても同じく言葉を重くし、顔を暗くする。

「人造魔導士計画の・・・素体培養器」

その言葉を聞いた皆が驚く。

「これは、あくまで推測ですが、あの子は人造魔導士の素材として造り出された子供ではないかと」

地下水路を調査中のフォワード陣もギンガの通信を聞いていた。人造魔導士という単語にキャロを除く3人が苦い顔をした。

「人造魔導士って・・・」

キャロがわからない単語を質問した。

「優秀な遺伝子を使って人工的に生み出した子供。投薬とか、機械部品の埋め込みで後天的に強力な魔力や能力を持たせる。それが人造魔導士」

普段のスバルからは考えられないような難しい単語をスラスラ口にする。しかし皆そんなことを気にすることもなく、地下水路は重苦しい空気が流れる。スバルの言葉にティアナが続く

「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうしたっていろんな部分に無理が生じる、コストも合わない。だから、よっぽどどうかしてる連中じゃない限り、手を出したりしない技術のはずなんだけど」

ティアナの説明が終わりかけたとき、キャロのデバイス「ケリュケイオン」が光り、警告する。

≪　動体反応確認。ガジェットドローンとネクロです。）≫

「来ます！小型ガジェット、３機それとＬＶ１が２体です！」

キャロの声と共にフォワード陣は周囲を警戒した。

報告で戦闘を開始した聞いたとき嫌な予感が頭を過ぎった

（不味いな・・戦力を分散奴らの狙いは恐らくこの子と私だな）

モニター見る、この波状作戦、最低でもＬＶ３が二体はいる、恐らく指揮官タイプと流れからして砲撃タイプ狙いはヘリこれに間違いはないだろう

（四の五の言ってられん・・・セレス聞こえるか？）

セレスに呼びかける

（聞こえてます、王）

即座に返事を返すセレスに

（念のため姿を消してヘリの近くに居てくれ、この流れブレイザー（砲撃）とミラージュ（幻影）がいる可能性が有る）

黒騎士の時に何度か対峙したことが有るネクロの事を思い出す、何度か対峙したが倒せずにいる厄介なネクロがブレイザーとミラージュだ、二人一組で動きネクロやガジェットに幻術で数を増えたように錯覚させ、ブレイザーの砲撃で仕留める作戦を得意としてるネクロで厄介なのがブレイザーは近接をこなす砲撃なのだ、近接戦闘をしながら魔力を溜め不意打ちで砲撃を放つそれが奴のスタイルだ。

（判りました、待機しておきます）

（すまないが頼む、頼りにしているからな）

（お任せください、王よ）

念話が切れ、近くにセレスの気配を感じる。どうやら既にヘリの近くに居るらしい、行動の早さに驚ろいたが、直ぐに冷静な思考に戻る

（備えは出来た、出来ればこのまま終われば良いのだがな）

そう呟やき、自身の髪を見る。それは徐々にだが元の色に戻りつつあった

第２９話に続く

## 第２９話（前書き）

第６話の最後の方に登場した、天雷の書が今回登場します。

読者の皆様に聞きたい事があります。公開意見陳述会の事なんですが、作者は原作を知らないと何度か書いたと思います、作者は公開意見陳述会の話を全く知らないので流れだけでも教えて頂きたいと思っています。ですので教えてくださる方は感想の方にぜひお願いします。

前書きが少々長くなりましたが、本編始まります

# 第２９話

第２９話

「航空反応、増大！」

機動六課管制室、通信士のアルトがレーダー反応を報告する。

「これ・・・うそでしょ！？」

レーダー反応はありえないほどの数が映し出されていた。

「なんだ・・・これは！？」

グリフィスも困惑する。

「波形チェック！誤認じゃないの！？」

「問題・・・出ません！どのチェックも実機としか」

「なのはさん達も目視で確認できるって・・・」

官制室内は混乱状態だ。いきなりありえない数の反応、しかも全て本物。そんな時、はやてが立ち上がった。

「グリフィス君」

グリフィスははやてが何を言わんとしているのかを理解し、

「・・・はい！」

ただ一つ、頷いた。

現在、北西部海上ではなのはとフェイトがガジェットと交戦している。急に数が増えたガジェットを次々と落としていくが、中には魔法が当たると爆発せずに消滅するものが現れた。

「幻影と実機の構成編隊！？」

フェイトは現状を冷静に分析するが、急なことに少々戸惑っている。

「防衛ラインを割られない自身はあるけど、ちょっとキリがないね」

なのはも現状に対して煩わしさを口にする。二人は合流し、防御魔法のオーバルプロテクションでガジェットからの全方位攻撃をしのいでいた。

「ここまで派手な引き付けをするってことは・・・」

「地下か、ヘリの方に主力が向かってる」

「なのは、私が残ってここを抑えるからヴィータと一緒に！」

「フェイトちゃん！？」

なのははフェイトの英断に驚きの声をあげる。

「コンビでも普通に空戦してたんじゃ時間がかかりすぎる」

依然、ガジェットからの攻撃が止むことはなく、なのはの防御魔法をお構い無しに攻撃してくる。

「限定解除すれば、広域殲滅でまとめて落とせる」

「・・・それは、そうだけど・・・」

「なんだか、嫌な予感がするんだ」

「でも、フェイトちゃん・・・」

なのはが言葉を続けようとした時、突如モニタが展開された。

「割り込み失礼！」

はやてだ。

「ロングアーチからライトニング１へ。その案も、限定解除も部隊長権限で却下します」

「はやて！」

「はやてちゃん！？なんで騎士甲冑！？」

現在はやては隊舎の外に出て騎士甲冑を纏っていた。

「嫌な予感は私も同じでな。クロノ君から、私の限定解除許可をもらうことにした。空の掃除は私がやるよ。ちゅうことで・・・」

「待て」

なのは達の通信にまた割り込んでくる人物がいた。モニタに映る人物は黒髪の男・・龍也だ

「あ！龍也さん！」

「兄ちゃん！？」

「龍也？」

3人共それぞれの驚き露にする。朝は銀髪であった龍也の髪が黒に戻っていることに驚いたが

「はやて、それより、先程の限定解除申請だが、私の中将権限で却下する」

「な、なんでや？」

「まだ、お前たち達の力を見せる時ではないからだ、とりあえず、現在の北西部海上はなのはとフェイトが引き続き担当、ヴィータは目標撃破を終了しているようだからギンガ達と合流。ヘリは私が守る。はやてはその後の処理を任せる」

「後の処理・・・？」

はやては怪訝な表情をする。

「街の被害状況の確認を頼む、後は任せるぞ」

言うだけ言って通信が切れる

「なぁ。兄ちゃんの方が指揮官に向いてないか？」

はやての呟きは空に消えていった

機動六課管制室に突如アラートが鳴り響く。

「ヴィータ副隊長達が居る地点ににエネルギー反応！！・・・大きい！！」

「そんな・・・まさか！？」

管制室の通信士たちは驚愕する。その巨大なエネルギー反応に。

「砲撃のチャージ確認！」

「物理破壊型！推定Ｓランク！！」

その報告にはやては驚き、ガジェットを掃討中のなのはとフェイトも驚いて居たその頃

「なんだ、ＬＶ３っても対したこと無いな」

グラーフアイゼンを肩に背負い、目の前のネクロを睨みつける

「はは、油断したよ。そんな小さな体からここまで破壊力が出るとはね」

所々輝の入った体でネクロが言う、こいつが引き連れていたガジェットと下位のネクロは既に殲滅し、残るはこいつだけだ

「甘く見んじゃねーぜ。まぁ良いとりあえず消えろ！！」

グラーフアイゼンを振り下ろそうとすると、押し殺した笑みを浮かべながら

「くく、待ちたまえよ。私は非戦闘タイプ、それがどうして此処に居るかわかるか？」

「何だと？」

その問いかけに動きが止まる

「くく、だから私は非戦闘タイプ。それが此処にいる。つまり・・・」

そこでニヤリと笑い

「私は囮、本命は・・・」

ヘリの方を見ながら笑い

「ま・・まさか」

最悪の予想が頭を過ぎる、それを見て更に笑みを深め

「お前はまた失う。大切な大切な物を・・」

その言葉を聞いた途端体に震えが走る。ネクロの言葉が意味することとそれは

「くく何よりも大切で。誰より愛している男が死ぬ、お前はそれを耐えれるか？」

ズドン！！

「か・・は・・」

突然何も無い空間から拳が飛び出し。あたしを殴り飛ばす

「ヴィータさん！！」

スバル達が寄って来る、全身に輝の入ったネクロが笑い声を上げる

「クハハハ、馬鹿が私達の狙いは最初からこれだ・・相棒・・・後は任せるぞ」

笑いながら輝の入っていたネクロが消滅し。何も無い空間から新たなネクロが姿を現す

「相棒・・後は任せろ。王の悲願は私が叶える」

その言葉と同時に大量の鎖が現れ、あたしとスバル達を捕らえる

「其処で見ていろ、夜天の守護者の最後をな・・・」

背中から巨大な砲塔が現れる

「ターゲットロック・・カオスエンドブラスター・・・発射！！！」

凄まじい音を立て、ネクロから魔力弾が放たれたその射線上の先には龍也や「聖王」が乗っているヘリがいた。

はやてが、なのはが、フェイトがその砲撃を、その先のヘリを眺めるしかできなかった。高スピードで進む砲撃は皆が何もする事もできず、ヘリに到達瞬間に爆発した。管制室の巨大スクリーンは砲撃のショックで映像を映せなくる。

「砲撃・・・ヘリに直撃・・・」

あらゆるウィンドウを出すが全てにノイズが走り、映像を映し出せない。

「・・・そんなはずない！状況確認！」

シャーリーが激を飛ばし、呆ける他の通信士に喝をいれる。

「ジャミングがひどい・・・データが来ません！」

管制室からの報告に、ヴィータたち地上組は驚愕の表情をする。皆言葉も無い。

「・・・そんな・・・お父さん・・・！」

エリオが何とか声を出すが顔は真っ青だった。

「ヴァイス陸曹と・・・シャマル先生も・・・」

ティアナまでもが顔を青ざめさせている。すると、ヴィータがバインドで一瞬で引きちぎり、ネクロに突撃する

「てんめえぇぇ!!」

グラーフアイゼンを思いきっり振りかぶり、叩き付けるが

「当たらん」

完全に冷静さを欠いた一撃は掠りもせずにハイウェイに突き刺さり、反撃の蹴りで元の場所まで蹴り飛ばされる

「クク、自分らで見るが良い、打ち下ろされたヘリをな。それくらい待ってやる」

笑いヘリの方を見るネクロ、やがて煙が晴れ、実体が露わになっていく。そしてそこには・・・

「・・・まだ飛んでるだと?」

ネクロが苛付を含んだ声で呟く、そして煙が消えてよく見え始める、そこにはヘリを包み込むように蒼の魔力の壁が発生している
それがネクロの砲撃を受け止めていた、そしてそれは龍也のブレスレットから発生していた

「守護者の加護・・ガーディアンズシェル」

静かに術式を呟きながら

「シャマル！！ヴァイス！！後は任せる！！私はヴィータ達の所に行く」

それだけ言いヘリから飛び出そうとすると

「待ってくださいよ！！旦那は今デバイスを持ってないでしょう？如何するつもりです」

ヴァイスが慌てて言うが

「切り札とは最後まで取って置く物だ。大丈夫だ直ぐに終わる」

私はそう言い残しヘリから飛び出し、転移した

「ク、ヘリは落とせなかったがせめて貴様らは！！」

怒りを伴った声でネクロが斬り掛かってくるが

「はあああああっ！！」

予想通りネクロの上空に転移し、そのまま体を反転させながら鋭い踵落としを放つ

「クッ」

突然の襲撃に驚きながらも防ぐが

「甘い！！」

即座に着地し回し蹴りを叩き込みネクロを吹っ飛ばし、ヴィータ達の元に駆け寄る

「大丈夫か？怪我は無いか？」

「兄貴？どうして此処に兄貴はヘリに居たんじゃ？」

驚きながらヴィータが言う、他の面々も同じように驚いた顔をしている

「それより。怪我は無いのかと聞いてるんだ」

「大丈夫です、何処も怪我はありません」

返事を返すスバル達を見ていると、

ジャラララッ！！

音を立てて鎖が飛んできて左手に巻きつく

「ぬっ！！」

「クク、貴様から出てきてくれるとは有り難い。此処で貴様を殺してくれる！！」

吹っ飛ばされたネクロが鎖を引っ張りながら言うが

「ふん！」

片手で掴み引きちぎる

「ぬう・・」

鎖が切れバランスを崩す倒れるネクロの隙を突き、懐から一冊の本を取り出す

「それは・・・」

ヴィータの顔が驚愕に染まる、それは当然のことだ、一冊しかないはずの夜天の書が此処にもう一つ有る。それだけで驚くには当然だがそれを無視して起動パスワードを唱える

「天雷の光よ！我が手に集え！！我が誓うは不屈の正義！今此処にその大いなる力を解放せよ！！！天雷の書セットアップ！！！」

起動パスワードと共に巨大な雷が降り注ぐ、それが私の体を完全に包み込む

「兄貴！！」

「お兄様！！」

「「龍也さん！！」」

「「お父さん！！」」

目の前で雷に包まれた私を見てヴィータ達が驚きの声を上げる、だ

がこれはこういう方法でしか起動できないのだ。雷の中で徐々に騎士甲冑が生成されていく。黒騎士の騎士甲冑はこれを元にイメージした、つまりこの身を覆うのは黒の鎧だが所々金の細工が施されているそして手に握られるは剣十字をモチーフにした大型の杖。そして最後に金のマントが背中に構築される

「はあああッ!!」

体勢を立て直したネクロが突撃してくるが

「ふんッ!!」

片手で体を包み込んでいた雷を吹き飛ばし、左手の杖でネクロの腹に横薙ぎの一撃を叩き込む

「がっ!!」

予想もしてなかった反撃を喰らい動きが硬直するネクロに、杖を反転させ更に殴り飛ばす

「ガフっ!」

飛んでいったネクロ目掛け

「打ち砕け!!サンダーブレイク!!」

追撃の砲撃を打ち込むが

「・・・舐めるな!!」

一瞬で体勢を立て直し砲撃を吹き飛ばすネクロだが、その前に銀髪の女性が突然現れ杖で殴り飛ばす

「なっあいつは！！」

ヴィータがその女の顔を見て驚くと

「ふふ、久しいな王に近いものよ」

美しい笑みを浮かべながら此方に歩いてくるセレス

「遅いと言いたいがタイミングは良かったぞ、セレス」

「お褒めに預かり光栄です、王よ」

私の前で片膝を着き、頭を下げるセリスの姿は間違いなく騎士だ

「兄貴！！どういうことだ王って・・」

ヴィータが動揺しながら言うが

「少し待て、後で全て話す。今はあいつを倒すことが先だ」

私の視線の先には吹っ飛ばされて居たが大してダメージが無いネクロの姿があった

「やはり、ダメージは無いか・・セレス全力でいくぞ」

「王の御心のままに」

恭しく礼をしてから目を閉じる

「「ユニゾンイン！！」」

セレスと私が光に包まれ、融合する

「ユニゾンデバイス！？」

ティアナが驚きの声が聞こえるがその間も融合は続き、光が晴れると私の髪は白銀に染まりその目は蒼銀になっていた

「貴様の穢れた魂この私が浄化する！！」

背中に現れた翼を羽ばたかせネクロに向かって行った

「なんやあの雷は！？」

突然起きた現象に驚きの声を上げる私に

「あそこって確かヴィータちゃんたちが居る所筈・・」

最悪の予想が頭を過ぎるが

「見て！！あそこ」

突然フェイトちゃんが大声を上げる、そしてその指の指すほうを見る

「あれは・・・兄ちゃん！？」

高速で動いているから良く見えないが、ネクロと戦っているのが見える

「嘘・・私より速い」

自信喪失と言った様子で呟くフェイトちゃん、確かにその通りで辛うじて動きを追うことが出来る速さだ、どうみてもフェイトちゃんより速いが、それより気になるのは

「兄ちゃんはまだデバイスを持ってるんか?」

見たことのない騎士甲冑だ、それに髪と目の色も違う

「多分・・ユニゾンデバイスだよね」

恐ろしい速さで動き続ける兄ちゃんとネクロ、だが明らかに兄ちゃんが押してる

「とりあえず合流してみよか?」

なのはちゃん達と兄ちゃんの居る方に向かって行った

「くそ、どうして此処まで差が有る」

怒声を放ちながら斬りかかって来るが

「遅い」

余裕を持って回避し杖による連撃を叩き込む

「ぐう」

直撃を喰らい動きが止まるネクロ、意地で高速移動を続けているがダメージはかなりの物だろう。体には所々輝が入っている

「まだ動くのか？いい加減に諦めたら如何だ？」

挑発しながら言うが

「私は諦める訳にはいかん。王の・・魔王様の願いを叶える為に！！」

ボロボロで向かってくるネクロにバインドを使い動きを縛る

「お前の忠誠心は認める、だがあいつの願いを叶えさせる訳にはいかない、せめてこの一撃で消えるが良い」

杖の先端が開き魔法陣が展開される

「全ての咎人に終焉と言う名の安らぎを・・」

魔方陣に魔力が溜まっていく

「今こそ断罪の時。ラグラロク・・・」

白い魔力光が杖の先端に溜まる

「ブレイカー！！！！」

巨大な魔力の本流がネクロを飲み込む

「ウオオオオオオオオッ・・・・・」

魔力の本流の中で徐々に鎧が融解して行く、そしてそれが顔の仮面に来た時

（あり・・がと・・う）

先程までの耳障りな声でなく、柔らかい声色が聞こえると同時にネクロは完全に消滅した。

「哀れな魂に魂の救済を・・・」

片手で十字を切る

「はやて達か・・」

後ろから接近してくる魔力を感じその場で待つことにする

「兄ちゃ～ん」

笑顔で近づいてくるはやてに手を振ると急に加速して、笑顔で笑うはやてが背中におぶさる

「はやて、如何したんだずいぶんご機嫌だな？」

なんでもない～と笑い背中から離れようとしないはやてに苦笑していると

「龍也、そのデバイスは何？」

フェイトが騎士甲冑を指差しながら尋ねてくる

「説明をしたいが今はヴィータ達と合流するのが先だ、六課に帰ったら説明する」

頷いたフェイトとなのはを見ながら

「動くなよ？今から転移するから」

私達の足元に魔法陣が展開され次の瞬間にはヴィータ達の待つ所へ転移していた。そして任務は無事に成功した。

第３０話に続く

オリジナルデバイス紹介

天雷の書

夜天の書の同型機であるが、夜天の書と違い収集するのは優れた武術やデバイスの情報である。基本的に全身を覆う騎士甲冑だがモードチェンジで様々なスタイルに変化する。グラムとベレンは天雷の書に登録されていたデバイスで、セレスが天雷の書に成れる為用意仮のデバイスだったが、龍也が気に入った為そのまま使用していた。夜天の書同様守護騎士がいるが現在は破損しており呼び出すことは

出来ない

通常モード
全身を覆う黒と金の鎧に手に持った杖が最大の特徴、高い索敵能力と防御能力更に空間把握を所有する。完全な後方タイプのデバイスだが杖でそのまま殴りつける近接戦闘も可能である。なのは。はやて、フェイトの魔法が使用出来る為、現存する魔導師では破格の強さを誇る

ブレイドモード
全身を覆う甲冑からグラムと同様の物に変化する（グラムの騎士甲冑はこれをモチーフにされているので本家はこっち）、所々金の装飾が施されている。武器は美しい金の装飾が施された鍔を持つバスターソードを自在に扱う

ブレイカーモード
黒の民族衣装の様な物に、両肩に狼の紋章が施された肩当を装備し胸部と足に展開された黒の鎧、武器は両手は大型の黒いガントレットで戦闘スタイルは高速機動からの近接戦闘で拳と足技が得意

?????モード
全ての封印を解除し秘たる力の全てを解放したモード。武装は剣のみと偏っているがそれを感じさせない戦闘力を誇り、全てにおいて完璧な性能を誇る、究極形態

## 第３０話（前書き）

読者の皆様に聞きたい事があります。公開意見陳述会の事なんですが、作者は原作を知らないと何度か書いたと思います、作者は公開意見陳述会の話を全く知らないので流れだけでも教えて頂きたいと思っています。ですので教えてくださる方は感想の方にぜひお願いします。

# 第３０話

第３０話

機動六課部隊長室、ここに現在スターズ、ライトニング、ロングアーチの面々とヴァイス陸曹が集まっている。なのはも先程保護した少女を聖王医療院に面会し終わり、帰ってきていた。

みんなの視線は龍也とセレスに集中している。何故なら、セレスの服装に現実味がないからだ。蒼い神官のような服に、銀のマントを羽織って目をつむり静かに佇んでいるその姿は銀髪と白い肌も相まってある種幻想的な雰囲気を漂わせていた。
みんなそんなセレスに見惚れていたのだ。龍也はそんなセレスの横で無表情で立っていた。

「さて・・では何から話せば良いのかな？」

セレスの横で呟く、全てを話すといったが何処まで話せば良い物なのか。ジェイルの話はもう少し後だ、いまレジアスが指名手配を取り消そうと動いている。

「兄ちゃん。その隣のいる人の事を話してくれんか？」

はやての目は先程からセレスから一瞬も離れていない。

「セレスか・・それじゃあ、よく聞けよ？」

前振りをしてから話し始めた

「まず事の始めは8年前だ、私が魔王の襲撃を受けた時だ」
その言葉にヴィータとなのはの顔蒼くなるが。それを無視して話を続ける
「ガーディアンズハートが転移してくれた場所それは・・・古代ベルカの遺跡だ」
「!?!?!?」
はやて達の顔が驚愕に染まる
「後で知ったんだが・・ガーディアンズハートは聖王時代のデバイス。何故それが私の家に合ったのかは判らないが、間違いなく古代のそれもシグナムたちのデバイスより更に古い時代に製造された物に間違いが無いらしい」
言葉も無い様子のはやて達を見ながら話を続ける
「其処で私はセレスによって怪我を治して貰い、2年そこでリハビリをしていた」
私はその遺跡で必死でリハビリをしていた、自分が居ない間にはやて達が傷つくんじゃ無いかと、襲われるんじゃないかと言う不安に駆られながら必死でリハビリをしていた、その時に事を思い出していると
「王は素晴らしい速さで隻眼と隻腕のハンデを乗り越えました。僅か二ヶ月で元の動きになりました」

先程まで口を開かなかったセレスが口を開き言葉を発した

「二ヶ月で・・信じられない」

「何を言う?男よ。判らぬか?王は家族を護る為に、それこそ血を吐くような思いでリハビリをしていたのだぞ?」

鋭い冷めた目線でグリフィスを睨む、その目には確かな殺意の色が浮かんでいる

「セレス・・余計なことを言うな、話が脱線する」

「出すぎた真似をお許しください。王よ」

頭を下げ再び黙り込んだセレスを見て唖然とするはやて達に

「さて話しが脱線したが紹介しよう。ユニゾンデバイス、天雷の書の統制人格のセレスだ」

其処まで言い、セレスを見る、何を言いたいのか理解したセレスは、嫌々といった様子だが頭を下げ

「ここでは初めまして、と言ったほうが良いな。私は古代ベルカが生み出したデバイス『天雷の書』の官制人格セレスだ、我が王の手により名を得、私は王の為に存在している」

そう言うと再び黙り込んだセレスを見ながら

「もう少し、愛想良く出来ないか?」

そう言うと薄く目を開き

「王以外に愛想良くする意味などありません、私は王そしてその家族のみに仕えるのです。他の者など如何でも良いのです」

そう言い目を閉じようとするセレスに

「あの・・セレスさん？一つ聞いても良いですか？」

おっかなびっくりと感じではやてが声を掛けると

「質問とは何ですか？はやて様私に答えられる範囲でしたらお答えしますよ」

先程と違う柔らかい声色で微笑む掛けるセレスに驚いた、表情を浮かべたが直ぐに

「あのセレスさん、夜天の書と天雷の書は同違うん？」

「そうですね。簡単に言えばほぼ同じなんですよ。唯収集するものが違うんです。夜天が魔法を記録するように。私は武術やデバイスの情報を記録するのです」

穏やかに答えると

「じゃあよ、騎士プログラムは？」

ヴィータが声を掛けると

「騎士プログラムも存在しますが、今は修復中でして。修復が終わ

れば天雷の騎士達も現れますよ」

へ～と頷いたヴィータの次に

「それではその騎士達の強さは？」

バトルマニアの血が騒いだのか好戦的な色を瞳に浮かべながら問いかけるシグナムに

「貴方よりかは強いでしょう。私達は固有技能を所持しています、その全てがレアスキルに認定されるほど強力なものです、私は二重魔法ミッドとベルカ両方の魔法を使うことが出来ます」

説明に頷いたシグナムを見てから

「他に質問は無いか？もう無いなら解散にしよう、流石に皆疲れてるしな？」

そう言い見ると、エリオとキャロは眠そうに眼を擦っているし、スバルも欠伸をしている、かという私も多少だるい、回復して直に戦闘に出たから多少疲れたようだ

「ん～そうみたいやな、ほなら解散。皆ゆっくり休んでや」

はやての一声で皆解散していき、私も部屋から出て、自身の部屋に戻っていった

「腹が減ったな・・」

部屋に戻って一番最初に感じたのは空腹だった。

「燃費が悪いのが原因か・・」

天雷の書は兎に角燃費が悪い、消費する魔力も体力かなりの量だ。
それも本来一つのデバイスを二つに分けているのが原因なのだが

「仕方無い何か作るか・・」

サンドイッチを作り口に運ぶ

「やれやれ、間食は体に悪いんだがな・・」

口ではそう言うが手は止まっていない、ゆっくりだが確実に食べ続け。１０分程で作ったサンドイッチを全て食べ終え、寝るかと思い立ち上がるとコンコン、とノック音がする

「ん、誰だ」

時刻はもう１１時を過ぎている、そんな時間に来る客人は誰かと思い扉を開く、そこには赤いパジャマを着たヴィータが居た

「如何したんだ？こんな時間に？」

「あ～うん、その～」

目をキョロキョロと動かし落ち着かない様子のヴィータに

「まぁ、とりあえず入れ」

パジャマのままでは寒いだろうと思い、部屋に招き入れる事にした

「で、何か様か？」

椅子に向かい合って座り問いかけると

「その～偶に兄貴と一緒に寝たいと思ったんだけど・・・」

パジャマに負けず劣らず赤くなりながら言うヴィータに

「私と？別に構わないが、如何したんだ急に？」

「何かそういう気分なんだよ」

返事を返したヴィータにそうかと頷き、寝ることにした。ベッドの横になりながら天井を見上げる

「兄貴如何したんだ？」

隣のヴィータが不信に思ったのか、顔を覗き込んでくる

「いや・・な。特に何も無いさ、唯少し昔を思い出しただけだ」

思い出していたのは始めてヴィータ達と会った時だ。出会った頃のヴィータは警戒心丸出しだったし、シャマルは笑っていたがどこか冷たい感じだった。シグナムは殺気立っていた、唯一馴染んでいたのはザフィーラだけだった

「昔・・・私とはやては二人だけだった、それが今は家族が増え友達も出来た。それが何か嬉しくてな」

天井を見上げながらそう呟くと

「兄貴は今が楽しいか？」

「当たり前だ、楽しくて楽しくてしょうがないよ」

そうか・・と呟いたヴィータの頭を撫で

「そろそろ寝るか。おやすみ。ヴィータ」

「うん、おやすみ、兄貴」

「此処は何処だ？」

気が付いたらあたしは何も無い空間に立っていた、辺りを見回すが何も無い何処まで続く白い空間だった、

「始めまして、鉄槌の騎士」

突然背後から声を掛けられ驚きながら振り返る、そこには金の髪に空色の瞳持ち金の甲冑を身に纏った女が居た

「お前はなんだ？」

気配は人の物じゃない、どちらかといえばあたしたちに近い感じがする、そう思いながら問いかけると

「私は王に仕える騎士が一人、嵐の騎士、クレアと言います」

穏やかに微笑みかけるクレアだが、

「それで、その騎士が何の様だ？」

若干警戒しながら睨むと

「そう警戒しないでください、私は唯貴方と話がしたかっただけなんです、同じ役割を与えられた騎士として」

「同じ役割？」

「はい。私は貴方と同じ、強いて言うならコインの裏と表の関係です」

穏やかに笑うクレアに警戒を解かれ、ついつい笑うと

「今日貴方を此処にお呼びしたのはお願いが有るからです」

「お願い？」

「はい、これは貴方にしか頼めず断られれば終わりです。話だけでも良いので聞いて貰えませんか？」

「まぁ、話だけなら聞くよ」

返事を返すと穏やかな笑みを浮かべ

「立ち話も何ですから、座りましょうか？」

指を鳴らすと何も無い空間に突然机と椅子が現れた、それに驚いていると

「そんなに驚かなくても、ここは私の世界私が望めばそれが出来るんですよ」

笑いながら座り

「どうぞ、貴方も」

座るように促されあたしも椅子に座った

「まずは私について話しますね。知っての通り私は守護騎士です、王を守護するのが役目なのですが・・・」

そこで悲しそうに言葉を切り

「今の私にはその力はありません、今こうして貴方と話すことが限界ですね」

置かれていた紅茶を飲む。

「どういう意味だ？」

「そのままですよ、今の私は具現することは愚か本来なら、話すことも出来ません。ですが貴方なら話せるのです。それは私と貴方が同じ存在だから。まぁ夢の中の住人と話していると思えばしっくり来るでしょう」

確かにその通りだクレアには何というか現実味が無い、幽霊の様な

感じがする

「このままもう少し話をして居たいですが、そうも行かないので単刀直入に言いますよ。王を護って欲しいのです貴方に、王の近く居る誰でもない貴方に頼みたいのです。貴方は今迷っていますね。自身に成長が無いことに・・」

「ッ・・・・」

図星だ、今日の戦闘でも思った。スバル達は着実に強くなっている、その反面あたしはそのままだ。どれ程時間が経とうが、強くなることは無い

「ですが私ならその壁を取り払うことが出来る。貴方が望むなら貴方の枷を取り除きましょう。如何しますか?決めるのは貴方です、私の願いを聞き枷を取り除くか、それとも今のまま時を過ごすか。今此処で決めてください」

どうする?嘘は言っていないだろう。でも枷を取り外すとはどういう意味だ?

「枷とは・・貴方がプログラムとして完結していると思っている部分です、ですが私達は王と共に成長し強くなる様に出来ています。私のプログラムを貴方にインストールし、私の成長のプログラムを貴方にコピーする、それが枷を取り外すという意味です」

あたしの考えていたことが判るのか。丁寧に説明してくれたクレアに

「それに副作用は有るのか?」

不安に思ったことを尋ねると

「副作用と言いますか、何と言えば良いのでしょう?私の忠誠心と言いますかそれも貴方の方に行くので、簡単に言えば今よりもっと王を好きになるくらいでしょうか?まぁ良いじゃないですか貴方は王が好きなんでしょう?」

「ッ・・・・」

面と向かって言われ赤面になるが

「良いじゃないですか、好きで人を愛するということは良い事だと思いますよ」

からかう様に笑うクレアだったが、次の瞬間真剣な目になり

「さて・・答えを・・今のままかそれとも前に進むか答えてください」

騎士の名に相応しい鋭い眼光のクレアに

「引き受けるよ・・今のままじゃ兄貴を護れねぇ、だからその頼みを引き受ける」

引き受けると決めた、今のままじゃ駄目だ、兄貴の傍に居られない、あたしは護られるだけじゃない!あたしは兄貴を護るんだあの時の様にならない様に強く成りたいんだ。

「有難う御座います、それでは行きますよ?」

手のひらに丸い球体を作りそれを此方目掛け飛ばしてくる。それはあたしの胸に吸い込まれるように消えた、見た感じ変化は無いが

「明日になれば判りますよ。貴方に起きた変化が、クスクスきっと王が慌てるでしょうがそれも良いでしょう」

楽しげに笑っているだろうクレアの顔を見ようとするが、ぼんやりとしていて良く見えない

「それでは頼みましたよ、鉄槌・・いえヴィータ、私の代わりに王を龍也様を護ってください。それではまたあう日を楽しみにしていますよ」

声を掛けようとするがそれは叶わずあたしはその白い世界から消えた、

ヴィータが消えた、後しばらくその場所で佇んでいたが。

「見ていたのですね。アイギナ・・シャルナ」

呟くと何も無い空間から二人の女性が現れた。一人は燃えるような赤い髪に金の瞳の美女にもう一人は緑の髪に翡翠色の瞳を持った女性だ

「何のつもりだ?夜天の騎士に接触するとは、事としだいによっては・・斬るぞ・・」

アイギナは刀を持ち睨み付けているし

「裏切りですか?それでも私は構いません。王に害なすなら同じ騎士といえど排除するまでです」

冷えた目線で睨むシャルナに

「裏切るつもりはありませんよ。私は王のために存在し王の為に死ぬ、それが私の望みです。それは貴方達も同じでしょう?」

「では何のつもりだ、答えろ!!クレア!!!」

アイギナが苛々とした感じで刀を突きつけて来る、が冷静に私は口を開いた

「このまま時が流れれば、王は死にます、全てを護ると同時に自身の命を失います、私はその未来を変えたいだけです」

「・・まさか予言か・・」

アイギナが驚きながら言うと

「はい、不確かでまだ判りません。ですが私は見ました王が爆炎に呑まれ一人で果てる最後を」

私は騎士の中で唯一予言という能力を有している。王に関わることしか判らないがその的中率は高い

「また何ですか?今までの王全てが魔王と相打ちか、その傷が元で死んでいます。今回もそうだというのですか」

シャルナが俯きながら言うが

「決まった訳ではありません。王の周りに見える光、きっと変わるはずです。いえ絶対に変わります。王はもうこれ以上苦しまなくて良いはずなんです」

力強く言うと

「変な勘ぐりをしてすまなかった、そうだな、お前が裏切るはずが無いんだ。許せ」

刀を鞘に戻しながら頭を下げるアイギナに

「御気になさらず、それより早く眠りにつきましょう。早く目覚められるように」

今こうして話しているだけでも修復が遅れる、遅れれば戦いに間に合わないかもしれない。そうなったら意味が無い、私達は王の為に存在しているのだ

「そうですね、早く目覚め王の為に戦う、それのなんと素晴らしいことでしょうか！」

シャルナが両手を広げ大声で言う、シャルナは最も王に忠誠を誓っている。その為少し変な所が有るがそれも良いだろう、皆似たような物だ、我等全てが王のために存在し、王に害なす全てを排除するそれが私達の存在意義だ

「そうだな、早く時が来れば良い、我等が目覚め王の下に馳せ参ずるその時が・・」

アイギナも目を細め笑っている

「その為に早く休みましょう、王に会うその日を夢見て」

二人とも頷き溶けるように消えていった

「私も眠りますか、王に再び合うその日を夢見て」

一度だけ会ったことの有る現在の王、気高く、強く、何処までも慈悲に溢れたその姿。その全てに目を奪われた。私にとって王こそが唯一にして絶対の存在。それに害なすものが有るならば

「覚悟しなさい、王に害なす者よ。我が存在意義に掛けその全てを滅ぼしましょう」

私はそう呟き、溶ける様に消えた。王に再び会うその日を夢見て

キャラ紹介

セレス

銀の髪に蒼の瞳を持ち、幻想的な美しさを持った女性、正体は天雷の書の統制人格でユニゾンデバイスである（外見年齢は２３歳である）、物腰は柔らかいが王（龍也）に害なす者には一切の容赦をしない性格（基本天雷の騎士は同じ思考の持ち主である）、またはやて達にも穏やかな態度で接する、ランクはＳＳＳ＋でミッドとベルカの両方を使いこなす、バリアジャケットは蒼の神官服の様な物に銀のマント、通常は青と銀色の服を好む、デバイスではないが杖を用いた戦闘が得意である。

アイギナ
天雷の騎士であり司るのは炎である、燃えるような赤い髪に金の瞳を持つ絶世の美女である（外見年齢は１９歳くらい）。龍也に絶対的な忠誠を誓っており、敵対者には一切の容赦をしない、デバイスは桜花と呼ばれる剣型のデバイスを所持する、炎熱の変換素質と優れた接近戦能力を誇る、騎士甲冑は赤を基調に所々に黒と金が施されとても美しい物である。特殊能力として天雷の書に記録された武器を召還することが出来。また召還した武器を弾丸の様に打ち出すことも可能である

クレア
金の髪に空色の瞳持つ少女のような姿をしている（外見的年齢は１５歳である）司るのは風と雷であり二つ名は嵐、騎士の中で唯一二つの変換素質を持つ、予知能力を持つ参謀的な役割もこなすが基本はアタッカーで敵陣に切り込むのが役割である。柔らかい物腰だが基本的にはアイギナと同じで敵対者には一切の容赦をしない。デバイスはユニティと呼ばれる槍で、同時に二つの変換素質を使用する事が出来る唯一のデバイス、騎士甲冑は金を基調とした動きやすい物だが防御力は高い。特殊能力は予言の書でカリムと同等の物だが映像として見る事が出来る（本人のみだが）予言は龍也に関することしか判らず、ほかの事を見ることは出来ない

シャルナ
緑の髪に翡翠色の瞳を持った女性で（外見年齢は２０歳である）氷を司る騎士。騎士の中で最も忠誠心が厚い、丁寧な口調で常に微笑を絶やさないが、敵対者には絶対零度の対応をする、デバイスはケルキオンと呼ばれる杖で高い防御能力と治癒の力を持つ、更に見かけによらず近接戦闘が得意で蹴りや打撃技が得意、騎士甲冑は水色で肩や急所を覆うように展開される、氷系の魔法が得意で冷気を用いた幻術や結界に閉じ込め氷付けにする、魔法を最も愛用する。特

殊能力は凍れる世界、全てを包み込む絶対零度の防御幕だが中は柔らかい光に包まれており、役割は傷ついた王や仲間を回復させる時間を稼ぐ為の結界である、外から触れようとすると忽ち強力な冷気の嵐を巻き起こす、完全防御の結界である

第３１話に続く

## 第３０話（後書き）

次回、ヴィータの体の起きる変化、それにより起きる龍也の女難とは？
次の話を楽しみにしていてくださると作者はとても嬉しいです

それでは失礼いたします

## 第３１話（前書き）

感想、アドバイス常時お待ちしています。作者は本作品が初めての作品なので。アドバイス等は頂けると嬉しいです

今回はちょっとギャグ路線に挑戦してみました。面白いと感じていただければ嬉しいです

# 第３１話

第３１話

「う・・うん、良く寝たな」

布団から上半身を起こし大きく伸ばす、基本的に私の朝は早くまだ日が上がり切らない時間に起きる

「昨日・・そうだ・・ヴィータが居たな」

布団を頭で被り眠っているヴィータを起こさぬようにベッドから出る、だがこの時気付くべきだったのだ、布団の膨らみが大きい事に

本を読みながら時間を過ごす、朝起きて本を読むのは私の日課になっている。暫くそのまま呼んでいたが

「そろそろ。６時か・・起こすとするかな？」

ヴィータは朝が弱い、外見相応というか起こしてもらうか、目覚ましじゃないと起きる事が出来ない。

「紅茶とココアにしておくか・・」

起きて直ぐ飲めるように紅茶とココアを淹れ、ヴィータを起こしに行く

「おい、そろそろ起き・・れる・・か・・」

起こしに行き驚愕に目を開く、振り返り一度寝室を出て右手のベヒーモスに話しかける

「ベヒーモス、昨日ヴィータが来たよな」

『イエスマスター、昨晩ヴィータ様が尋ねて来られましたよ』

返事を返すベヒーモスを寝室に入れる

『!?!?!?』

驚いているだろうベヒーモスを戻す

「私の幻覚か?それともまだ寝ぼけているのか?答えてくれベヒーモス」

『私の視覚センサーが壊れている可能性もあります、マスターあの方は本当にヴィータ様ですか?」

「私が聞きたいのだが」

もう一度寝室に入る、布団からヴィータの顔が出ているが・・何と言うか成長している?１０歳前後だと思われるヴィータだが今は１５~１８と言う所だろうか?

「判らない。どうしてだ?・・・・成長期か?」

混乱し訳の判らない事を言うが

『落ち着いてください、クールにＫＯＯＬに・・いやＣＯＯＬにな

ってください』

ベヒーモスも可也混乱している

「うう～ん、うるせぇな・・・もう朝か？」

不機嫌そうに起き出すヴィータ、着ていた真紅のパジャマは明らかにサイズが合っていないと判る

「ヴィータだよな？」

恐る恐る声を掛ける

「あ、何言ってんだよ兄貴、あたし以外に何が居るって言うんだ？」

完全に起きたのかハッキリとした声で返事を返すヴィータに

「良いか？絶対大声を出すな、動揺するなよ。ゆっくり後ろの鏡を見てみろ」

「なに・・言って・・んだよ・・・」

振り返り鏡を見るヴィータが驚きに目を開く、眼を擦る、下を見る。むにむにとほっぺを引っ張りたっぷり2分硬直した後

「えええええええええっ！！！！！！！」

ヴィータの絶叫が木霊した

「騒ぐなと言っただろう？」

目の前に座るヴィータ？に言うと

「すまねえ、つい動揺した」

目の前のヴィータは明らかにサイズが合っていない、パジャマを着ている所為か。はっきり言って目の毒だ。若干目を逸らしながら

「この部屋が完全防音だから良い物を普通だったら大変だ」

紅茶を口に含むそれは完全に冷めていた

「どうして急に大きくなった？成長期なのか？」

「いや・・そんな訳無いだろう。何か夢を見ていたのは覚えてるんだけどよ、思い出せねぇんだ」

頭を抱えるヴィータだがそれがいけなかった、サイズの合っていないパジャマは良く頑張ったと思うだが、それは頭を抱えたヴィータに耐えることは出来ず、ボタンが弾け飛び、そして成長した胸が露になる

「「・・・・・・・」」

重い沈黙包み込みが冷静になると。顔が赤くなり慌てて目を逸らす

「事故だ・・これは事故だ、お互いに忘れよう、良いな」

「あーうん、大丈夫気にしない。兄貴以外だったら殴るけど、兄貴

だから大丈夫」

何が大丈夫なのか聞きたかったがとりあえず、予備の制服を取り出し、後ろを向いたまま投げる

「とりあえずそれを着ろ、着替え終わったらはやての所に行くぞ」

「判った、直ぐ着替えるよ」

暫くそのまま後ろを向いていたが、良いぞと言う声で振り返る

「兄貴のだから少し大きいけど問題ないな」

裾等は折っているが取りあえず着る事は出来ていた、だが私にその言葉は私の耳に届いていなかった。

ヴィータの緋色の髪に強気な光を宿した瞳に目を奪われた、美しかった。ただそう思った、長く伸びた手足に女性らしい体つきに整った顔その全てに不覚にも目を奪われてしまった

「兄貴？どうした」

無言の私を心配して此方を覗き込んでくるが

「大丈夫だ、それより早く、はやての所に行こう」

話題を切り替える、やばいなヴィータと判っていても赤面してしまう。早く慣れないとな、昔ははやてやなのはが抱きついて来るだけでも赤面していた、だがそれは自身の精神力で抑えていたが流石にこれは無理だ、ヴィータと判っていても顔が赤くなってしまう、それを抑えるのが精一杯だ

「兄貴何処行くんだ？はやての部屋は此処だぞ」

考え事に集中する余りはやての部屋を通り越した事に気付かなかった

「すまん、少し考え事をしていた、ヴィータ私が説明してから呼ぶから、それまで待ってろよ」

「うん、待ってるから大丈夫だぜ」

にこやかに笑うそれでまた赤面しかけるが、それを必死で押さえ、はやての部屋に入っていった

「兄ちゃん大事な話って何や？はっ・・まさかプロポーズとか？」

朝からテンション全開のはやてに

「そんな訳無いよ、もしされるなら私だよ」

フェイトがばっさりと切り捨てる、どさくさでとんでもない事を口にしているが気にしない、部屋の中には主要メンバーが全員集合している居ないのセレスとヴィータとザフィーラだが

（そういえば戻ってきてから一度しかザフィーラに会ってないな？あいつ何処に居るんだ？）

そう思っていた頃六課の影で

「風邪か・・盾の守護中とあろうものが情けない」

くしゃみをした狼状態のザフィーラが居た、完全な余談だがザフィーラが人になった回数は非常に少なく。人の姿になれると知っているのはごく僅かな者だけだ

「朝から悪いと思うが大変な事件がおきた、私でも動揺しうろたえた、それだけ言っておく」

「お父さんが其処まで言うんですか？一体何があったんです？」

エリオが驚きながら問いかけてくる

「今まで類を見ない緊急事態だ、どうしてこうなってしまったのか判らないんだが」

「あの・・ヴィータさんが居ないんですが、良いんですか？」

スバルが挙手してから言うが

「良い所に目を付けた、今回のトラブルはヴィータに起きた。ヴィータ本人も非常に驚いている。とりあえず聞くより見ろだ。ヴィータ入って来い」

扉が開きヴィータが入ってくる

「「「「「・・・・誰？」」」」」

皆首を傾げていると、ヴィータが少し寂しそうに

「兄貴そんなに判らないか？」

「「「「「!?!?!?!?」」」」」

その言葉に全員まさかという顔になる。六課の中で私のことを兄貴と呼ぶ人物は一人しか居ない

「・・・今兄貴って言ったよね?」

ティアナがスバルに確認を取る

「うん・・確かに兄貴って」

「お父さんまさか・・・」

キャロが一番最初に気付いた、キャロの洞察力には驚くなと思いながら

「その通りだ、何故かヴィータが大きくなった」

隣のヴィータを指差すと、全員眼を擦る、次の瞬間大きく息を吸い込んだ、やばいと思い私とヴィータは耳を塞いだ。塞いだ次の瞬間

「「「えええええええええええっ!!!!!」」」

私とヴィータを除く全員の絶叫が六課に響き渡った

「よく見ればヴィータさんだけど、信じられないな」

皆ヴィータの顔を覗き込み信じられないと思いながらも納得していた、強気な目の色に髪その全てがヴィータ本人という証明の様な物

だがどこか信じられないという表情を浮かべている

「けど・・なんで大きくなったんや、何か心当たりは？」

はやてが首を傾げながら尋ねると

「夢を見たんだ、白い世界で騎士に会った、その騎士に兄貴を護れって言われたのは覚えてる、でもそれしか思い出せない」

「白い世界？まさか・・ヴィータその騎士は空色の目をしてなかったか？」

白い世界で思い浮かぶ騎士は一人だけだ、だが何故か判らないが恐らく間違いない

「何で判るんだ？」

ヴィータが頷くそれで確信した

「間違いないヴィータが夢であったのは、天雷の騎士のクレアだ、でも何故だ、あいつらは今眠っているはず何だが？」

訳がわからず首を傾げると

「なぁ、クレアって兄ちゃんの守護騎士やろ、なんで夢に出て来たんや」

「判らないがセレスに聞けば判る筈だ」

そう呟きセレスを呼ぼうとすると

「何様ですか？王よ」

驚きながら振り返ると其処には柔らかい笑みを浮かべたセレスが居た、皆驚き目を開いている

「今呼ぼうとしたんだが相変わらずだな」

呼ぼうと思うと既に居るセレスに毎回驚かされるが、今回はそんな事を言ってる場合じゃないので直ぐに本題を切り出す

「ヴィータが夢でクレアに会ったと言うんだ、何故か判らないか？」

「クレアですか・・すいませんが此方に来てもらえますか？」

ヴィータを自分の傍に呼び寄せると頭に手を置き、目を閉じて意識を集中している

「クレアのプログラムの一部がインストールされてますね。恐らくそれが原因でしょう」

閉じていた目を開き言うセレスに

「あの・・セレスさん。どういう意味なんですか？」

スバルが尋ねると

「守護騎士プログラムについては知っていますね？」

「大体聞いていますが」

ティアナが返事を返すと

「それなら好都合、簡単に言うと夜天の騎士は変化が起きず、そのままの姿で王を守護します、しかし天雷は王と共に成長し王と共に強くなります、そのプログラムがインストールされていますが・・これには副作用がありまして。恐らくもう直ぐ出始めるでしょう」

副作用と言葉にキャロの顔が青くなる

「あの・・もしかしてヴィータさんが消えるとかじゃないですよね」

キャロの頭に手を置き微笑みながら

「そんなことは起きないが。恐らく王が困ることになるとは間違いないと言える」

その言葉を聞いた途端背中が重くなった、恐る恐る振り向くとヴィータが背中に背中に確りと抱きついている

「ヴィータ?如何したんだ?」

その余りに突然な行動に驚きながら言うと

「なんでもねぇ」

真っ赤な顔で背中に確りとしがみつく、全然振りほどけそうに無い

「セレス・・如何いう事だ」

尋ねると

「クレアの忠誠心がコピーされたので。それが回り回って抱きつくという行動に出たのでしょう、大丈夫です、半日もすれば元に戻りますから」

そういい残し出て行こうとするセレスに

「おい、何処へ行く、私に如何しろと言うんだ」

「単純に言いましょう、ヴィータが納得するまでそのまま我慢してください。大丈夫です、きっと昼すぎには安定しますから」

振り返るそう言い残し今度こそ部屋から出て行ったセレスを見ていると、黒い気配を感じる振り返ると

「フフフフフ」

怪しい笑みを浮かべたフェイトとティアナが居た、なのはは苦笑しているが目が単色だ、はやては

「此れでええ、二人掛りなら鈍感の兄ちゃんも落ちるやろ」

怪しすぎる笑みを浮かべるはやて、嫌な予感がする、もう自身のアイデンティティが完全崩壊しそうだ。スバル、エリオ、キャロたちは既に逃亡している

「龍也、ヴィータを降ろそうか？何時までも女の子を背負ってちゃいけないよ」

黒い兎に角黒い、こんなのは久しぶりだ

「龍也さん、ヴィータさん、降ろしましょうか？」

クロスミラージュを構えている、何時セットアップしたんだ！？

「龍也さん、妹だよね？ヴィータは妹だよね？判ってるよね？」

ベレンとレイジングハートを構えるなのは、修理が終わってるならベレンを返してくれ、それは一応相棒なんだ

「大丈夫だ、今降ろすから。ヴィータそろそろ降りてくれないか？」

背中のヴィータに言うが

「嫌だ、嫌だ、嫌だ、絶対嫌だ！！」

背中に抱きつく力を強め嫌だと連呼する、なのは達の空気が悪化する、ヤバイこのままでは死ぬかもしれない、幾ら私でもこの距離でなのは達の攻撃を回避する自信は無い

「頼む、降りてくれ、このままだとお前も危ないぞ」

「・・・兄貴は私が嫌いなのか？」」

涙声で言う、普段なら絶対に出さない声に硬直する。それと同時に空気3倍黒くなる何故だ、私が悪いのか助けてくれとはやてを見ようとするが居ない、何処だと思っていると

「兄ちゃん、此処や」

背中からはやての声がする

「何時の間に・・」

背中には笑顔のはやてとヴィータが居る、目の前には黒い気配を身に纏った、なのは、フェイト、ティアナ。ああこの温度差が痛い

「龍也・・・」

「「龍也さん・・・」」

とんでもないプレッシャーだ。

「逃げるか・・・」

私はそう呟き背中にヴィータとはやてを乗せたまま逃亡を開始した

「「「待て～！！」」」

背後から3人の声がするが全力で逃げる、結局この追走劇は早朝から昼過ぎまで行われ、私は瀕死寸前になったが辛うじて逃げ切る事が出来た。正気に戻ったヴィータは赤くなりながら謝り部屋に戻り、はやては

「覚悟してや、私とヴィータはもう止まらへんで？」

と微笑み部隊長室に帰り、なのはとフェイトは

「「聖王病院に行くんだった！！」」

と慌てて聖王病院に向かって行った

「龍也さん、今度ケーキをお願いします、それで今日のことは無かったことに」

ティアナはそういい残し部屋に戻って行った。一人残された私は

「私が悪かったのか？誰か教えてくれ」

そう呟きながら食堂で遅めの昼食を摂り、書類整理を始めた、この時スバル達が大変でしたねと、紅茶を持って来てくれた事がとても嬉しかった

第３２話に続く

## 第３２話（前書き）

今回の話はスバルに重点を置いています。

それと僅かしか登場していませんが、ゼスト、ルーテシアが登場した第４話で、ルーテシアの「私のお母さんだって生きてる」がキーワードになっています。

今回の話も楽しんで読んでいただけると作者は嬉しいです。

それでは本編始まります

# 第３２話

第３２話

ヴィータが突然大きくなって一日経った、最初こそ皆動揺していたが大して問題が有るわけではなかった為、皆気にしていない

「ふ～ん、ふんふん」

ヴィータは上機嫌で書類整理を行っている、私はその隣に居た理由は

「兄貴、此処如何すれば良いと思う？」

ティアナ達の訓練マニュアルを作成するのを手伝っていた。なのは達は二日前の少女の面倒を見るのに苦戦しており、今此処に居ない話によればパパを探してると言っているらしい。なのは達はねねと呼ばれ満更でもない様だ。

「ふーむ、基礎に重点を置いてるからな、少し厳しい物を入れておくか？」

此処で言って置くが龍也の訓練はスパルタで有名だ、僅か数日で鬼教官の渾名を拝命した（本人の知らない所でだが）しかし此れは自分基準の所為である、スバル達が辛いと思う物は龍也本人には日常的な訓練なので本人に悪意は無い、

「うん。そうするか、で何を入れる？」

「私の攻撃を3分回避か防御ほどうだ？」

3分という基準はシグナムやフェイトたちの合計時間の四分の一だ
（二人は約12分間出来た、かなり消耗していたが・・）

「死ぬぞ、あいつ等、兄貴の訓練はどれも効果的だけど厳しいからな。もうちょい優しいのにしようぜ」

「それなら・・このリストバンドを付けての基礎にするか・・」

「おっ！良いなそれ、良しそれで決定！！」

最終的に私のコートの劣化版リストバンド付き基礎と3分間で私に一撃入れると言うもの（入れることが出来なくても可）が採用された

「ふう～なんか疲れたなぁ」

肩を揉みながら呟くヴィータに

「大丈夫か？肩でも揉んでやろうか？」

「・・何言ってんだよ兄貴、肩こってんなら。あたしがやってんやんよ」

立ち上がろうとするがそれを手で制す

「いや気にするな、この程度では私は疲れんよ。それなら紅茶でも飲むか？」

「う～ん、甘いのなら飲むよ」

「了解、少し待ってろ、直ぐ淹れて来るから」

スターズの部屋を後にし、自室からクッキーとビスケットを取り出し、ポットに紅茶を入れてスターズの部屋に戻る

「待たせたな、クッキーとビスケットも持って来たぞ」

「何か悪いな、兄貴にばっかそんなことさせて」

申し訳無さそうに言うヴィータの頭を撫でながら

「妹がそんな事を気にするな。私が好きでやってるんだからな」

「妹・・うん、今はそれで良いか」

何かうんうんと頷くヴィータの前にカップとクッキーが盛られた皿を置く

「まあ、スバル達に悪いが休憩にしよう」

二人で暫くそのまま紅茶を飲みながら話をしているとふと思い出す

「はやて達は今頃聖王教会か・・何の話に行ったんだ?」

朝手伝い始めた頃、なのはが黒い影を背負いながら皆で聖王教会に行くと言っていたのを思い出し呟くと

「気になるなら今から行けば良いじゃねぇか?」

クッキーを齧りながらヴィータが言うが

「いや。それは遠慮したい、カリムやシャッハはどうも苦手でな・・」

あの二人は天敵と言っても良い、会うたびに教会に所属しろだ。騎士なら教会の騎士へと熱烈なアプローチを掛けてくるから苦手だ

「はは、兄貴はベルカ式だからな。教会としては自分らの騎士にしたいんじゃないか？」

蒼天の守護者のネームバリューは凄まじい物が有る。知らない所でブロマイドや写真集などが発売されている、ちなみに販売元はミッドでは有名な出版社で写真集やブロマイドで更に売り上げを伸ばしたらしい（その写真の元はヴァイスが隠し撮りし売りに行っている。その事に気付いたはやては激怒し止め様としたが。渡された写真で呆気なく没落した。その写真は少し際どい物で風呂上りの物だったらしい）その事に気付くのはもう少し後のことになる、気付かれればヴァイスの命は呆気なく刈り取られるだろう

「私は騎士じゃない、守護者だ、はやてを・・家族を護る守護者なんだ。だから私は騎士の称号等要らん」

紅茶を飲みながら言うと

「兄貴忘れるなよ・・兄貴があたしを護ってくれるなら、あたしが兄貴を護る、あたしは護られるだけじゃない、あたしが兄貴を絶対に護るんだ」

「頼もしいな、だが無茶をしてくれるなよ」

ヴィータの頭を掴みぐりぐりと撫でる、嬉しそうに目を細めるヴィータに

「私を護ってくれるというのは嬉しい、だが覚えて置けよ？私が居る限りお前たちを傷つける者たち全てから私が護る。それが私の変わらない誓いだ」

撫でていた手を退ける

「兄貴・・」

「仕事の邪魔をしたら悪いから。失礼するよ、それじゃあ仕事頑張れよ」

スターズの部屋を後にする。部屋に残されたヴィータは

「兄貴・・はやても言ってたけど、あたしは止まらない、絶対に兄貴を振り向かしてやるからな・・・」

誰にも気付かれず、ヴィータは力強くそう宣言した

ロビーの前の人だかりが出来ている

「うん？どうしたんだ」

はやて達がしゃがみ込み何かをやっているようだが。人が邪魔でよく見えない。

そう声をかけると、一斉にこちらを向いた。フォワード四人は私の

顔を見た途端あせりだした。

「うわ！龍也さん！？」

「せっかく泣き止んだのに！？」

スバルとティアナの言葉に、私は少し傷ついた、目付きが悪いのは理解している、だがそれは仕方ないじゃ無いか。自分の所為ではないのだしフェイトに隠れて見えなかった少女がひょこりと体を傾け、私を見た。私と少女の視線が交差する。大きくクリッとしたオッドアイが私をじっと見つめる。そうかこの子はオッドアイなのか。前は眠っていたからわからなかった。そして無言で見つめ合う私と少女。１０秒か１分か、じっと見つめ合っていた。泣くか？泣くのか！？私もそう思っていた。皆も思っていただろう。だが現実は予想の斜め上をいくものだった。可愛らしい足取りで私の前に立つ少女は満面の笑みを浮かべ

「パパ～」

そう笑い抱きついてきた

・・・・・・・・辺りが沈黙に包まれる。皆少女と私の顔を交互に見る。はやては目が単色に染まる、なのは、フェイトから凄まじい暗黒の空気が充満している、だが私はそれに気付いていなかった。私はその視線の中少女と目線を合わせる

「私がパパなのかな？」

「うん、パパなの～」

見ているものが笑顔になるくらいの笑顔で笑う少女を抱き上げる

「君の名前はなにかな？」

「ヴィヴィオ。ヴィヴィオだよ」

笑顔で名乗る少女に

「高いところは好きかな？」

「うん。好き～」

「そうか、そうか、では此れは如何かな？」

ヴィヴィオを肩車する

「わ～高い高い。パパ～凄く高いよ」

肩から笑い声が聞こえる中

「はやて。そろそろ行かないとカリムが怒るぞ？ヴィヴィオは私が見ているから。早く行ったら如何だ？ほら行ってらっしゃいは？」

「ねね～行ってらっしゃい～」

「では、ヴィヴィオ私と遊ぼうか？」

「うん、そうする～」

二人だけのほのぼの空間で歩き出すが

「ちょいまち、兄ちゃん」
はやてに呼び止められる
「うん？何だ」
「兄ちゃんの子供じゃないよな？もしそうやったら・・・・」
とんでもない暗黒空気が発生している、どうやらこの少女が人造魔導師と言う情報は完全に抜け落ちたらしい
「何処の世界に隻眼、隻腕の男を好きになる物好きが居る？馬鹿なことを言うのは止めて、早く聖王教会に行ったら如何だ？」
辺りからはぁ～と大きな溜め息が聞こえる。なんだ私が悪いのか？
あれ？前にもこんな事があったような？
「それもそうやな。うん、兄ちゃんはこういう人やから、うん私馬鹿なこと言うたな～。ほな行こうか？カリム達が待ってるしな」
うんうんと納得したように頷き、出て行ったはやて達を見送ると
「さて・・・フォワード陣、命令・・・いや頼みが有る」
「はっ？」
突然声を掛けられ驚くティアナ達に
「いまから全員自室に戻り、何か遊べる物を持って来てくれ、正直

に言おう、遊ぶと言ったが正直何をすれば良いか判らん。皆協力してくれ、部屋の鍵は開けておく。みな遊べそうなものを持って私の部屋に来てくれ、ではな」

肩車したまま歩き出した、急がなくちゃと慌てて自室に戻るスバル達の足音が聞こえる中。私はヴィヴィオを肩車したまま思う、

（人造魔導師・・いや聖王ヴィヴィオ。恐らくネクロは彼女を狙う。パンデモニウムを蘇らす為に・・だがそんな事はさせん。私が居る限りお前たちの思い通りに行くと思うなよ）

密かに闘志を燃やしながら、それでも外は穏やかな表情を浮かべながらゆっくりと歩を進めた

「エリオ何かあった？」

寮の管理人室前で私はそう声を掛けた

「トランプとゲームが２つです・・・」

カードが入っているだろうケースと子供がやる冒険の物ゲームを二つ見せながら呟く

「私は特に無いです・・御免なさい」

謝るキャロに

「良い気にしないで。皆似たようなものだから」

六課は仕事場なのだ、おもちゃ等の娯楽を持つ物は少ない

「それで、ティアナさんとスバルさんは何がありました？」

「格闘ゲーム・・・だけ」

戦いの参考になると考え買ったらしいが、余り意味が無かったらしい

「私もシュミレーションのゲームだけ、しかも絶対子供が出来そうに無い奴」

戦術を学ぶ為の教材のようなものでゲームと言うか、兵学校のプログラムに近いものだ

「・・・・私達色々と駄目な気がするよ」

スバルが何処までも暗い声色で言う、皆同じ感じで俯いている

「取り合えず、龍也さんに言おう、これしか無かったって」

恐る恐る龍也の部屋の扉を開いた

「これ美味しい！」

「そうか、一杯食べろよ」

笑顔でクッキーを食べるヴィヴィオとそれを見て穏やかな笑みを浮かべている龍也さん、物凄くほのぼのとした空間が出来ている

「うん？思ったより早かったな。何かあったか？」

入り口で硬直している私達に気付いたのか微笑みながら問いかけてくる龍也さんに

「すいません、特に無かったんです」

キャロが謝ると

「ふむ・・そうかでは仕方ない。良いか今からちょっと・・いや禁止事項だな。それをやるが見てない振りで頼む」

そう呟くと魔方陣を展開し何かを詠唱していく、そして暫くすると

「完成だ」

宙に浮いていたのは可愛らしくデフォルメされたガジェット。それがゆっくりと左右に動いている

「お～」

目を輝かせるヴィヴィオに銃型簡易デバイスを手渡している

「これで、あれを撃つんだ。こうやってな」

見本と言いたげにトリガーを引く、ピコンと可愛らしい音を立てて消滅するガジェット。どうやらシューティングゲームのようだ。それを見て唯でさえ大きな目を更に大きくし、笑顔でゲームを始めたヴィヴィオを見ながら

「エリオとキャロの分もある。すまないが二人でヴィヴィオを頼む」

二人に同じような銃を手渡す、エリオとキャロも満更ではない様子で受け取り3人で遊び始める。その様子を見てから

「取り合えず、お茶でも飲むか？」

先程まで二人で座っていた場所を指差し腰掛ける龍也さん、

「二人も座ったら如何だ？立っていては疲れるだろう？」

穏やかに微笑みかける龍也さんに促され椅子に腰掛けた

「ああしてみると、年相応の子供だな」

穏やかな目をして、遊ぶ三人を見る。段々動きが複雑になり。苦戦しながらも笑いながら遊んでいる

「そうですね・・・」

スバルの声に元気が無い、いや・・違う恐れてるんだ。龍也さんは色々と知っている事も多い。もしかしたら自分の事を知ってるんじゃないかと不安に感じているんだろう

「ふむ・・どうした。口に合わないか？」

先程から紅茶も飲まずクッキーも口に運ばないスバルを見る龍也さんは、は何かを待っているような気がした。だから私はスバルには悪いと思ったが

「龍也さんは人造魔導師の事をどう思いますか？」

と問いかけた

「龍也さんは人造魔導師の事をどう思いますか?」

ティアが突然切り出した、前から聞きたかったでも怖かった、拒絶されるのが嫌だから・・人じゃ無いから。私は・・・

「どういう意味かな?」

鋭い鷹の様な目で真っ直ぐ、ティアを見据える

「そのままの意味ですよ。人造魔導師・・戦闘機人・いずれも間違っていると言われています。ではそれは生きてることさえ許されないと思いますか?」

やめて欲しい、聞きたくない・・・耳を塞ぎたい衝動に駆られるが膝の上に起き、手を押さえる

「ふむ・・私はそうは思わないな。生きてるなら皆幸せになる権利が有ると私は考える。これは私の持論だがね」

バチン!!指を鳴らすそれと同時に微弱な魔力の結界が構築される

「何のつもりですか?」

突然結界を構築した龍也さんを睨むティア

「聞かれたくないことも有るだろう?大丈夫だこの結界に害は無い

よ。外からは穏やかに話しているようにしか見えないからな・・私は回りくどいことが嫌いだ、だから正直に言って欲しいのだが?」

何処までも真っ直ぐで何処までも鋭い視線にティアが動揺する、今は優しい龍也さんの眼でなく、戦う者の蒼天の守護者としての鋭い何処までも真っ直ぐで嘘を見透かすようなそんな眼だ

「何のことです?これは唯の例え話で・・・・「誤魔化せると思っているのか?常人離れした体力、そして女の子とは思えない怪力、スバルお前は戦闘機人だな?」

私は硬直し目を見開いた、知られている怖い・・どうして知っているという考えが頭を過ぎる

「・・・どうして?判ったんです?スバルはその事を隠していた筈です」

ティアが鋭い視線で睨むが何時もと同じ様子で紅茶を飲みながら

「答えは簡単だ。スバルの母親、クイントナカジマを見取ったのは私だ。その時に聞いたスバルとギンガの事を・・・な」

紅茶を啜り俯きながら言う龍也さん・・後悔してると言うのは判る

「・・・お母さんが・・言ったんですか?・・・私は人じゃないって「違うな、スバルお前は人だ。誰が何と言おうが、お前は人だ」

震える声の私の言葉を遮って言う

「私はそんな事でお前を拒絶しない、お前はゲンヤさんとクイント

さんの娘でそれ以上でもそれ以下でもない。良いか一度しか言わないお前は機動六課スターズの隊員、スバルナカジマだ。誰が何と言おうと。お前は人で良いんだスバル・・・」

いつの間にか目の前に居た龍也さんは優しく抱きしめてくれる

「ううううっ・・・」

嬉しいのにボロボロと涙が出てくる

「ティアナ。悪いな私とスバルだけにしてくれないか?すこし大事な話が有るんだ」

ティアに泣き顔を見せないように角度を調整してくれている、それが嬉しかった

「良いですけど、襲っちゃ駄目ですよ?」

からかう様に言うティアの言葉に顔が真っ赤になる

「大丈夫だ。そんなことは決して無いから」

徹底的に否定され、少し悲しい気もする、でも今はそんな事を口にしない。こうやって抱きしめてくれている。龍也さんが居るから

「そうですか、じゃあ私も少し遊んできますね」

そういって微笑みティアは結界から消えた、しばらくそのまま泣き続けていたが１０分ほど立ちようやく落ち着いてきた

「落ち着いたか？」

「あ、はい。すいません制服汚しちゃいましたね」

目の前の龍也さんの制服を見る、私の涙で濡れてしまっている

「何気にするな、この程度洗えば落ちる。それで整理は出来たな。お前はなんだ？機械か？違うだろう、そうやって泣いて悲しむ事が出来るお前は人なんだよ、判るか？」

何処までも優しい包む込み声に

「はい。判ります・・・」

返事を返すと微笑みながら再び向かい側の席に座る龍也さん。すこし寂しいもう少し抱きしめていて・・・違う違う私は何を考えてるんだ、頭をぶんぶんと振りその考えを飛ばす

「スバル・・お前に聞きたい事がある」

優しい眼でなく鋭い視線で問いかけてくる龍也さんに

「何をですか？」

「闇に隠された真実・・これは管理局では僅か5人しか知らない秘密・・だがお前はそれを知る権利が有る・・だが此れを聞くか聞かないかはお前の自由、どうする？闇の中の真実を知るか。それとも時が来て私が全てを話す時を待つか・・・選べ」

これはとても重大な事なんだろう。でもそれを何故隊長達じゃなく

て私なのかと言う考えが頭を過ぎる。

「お前は覚えているか?始めて私の家に来たとき、ルーテシアに会ったろう?フルネームを言えるか?

「えっと・・・確かルーテシアアルピーノ・・あれ?アルピーノ・・?どこかで聞いた覚えが・・?」

昔・・何処かで聞いたような・・・昔そうかなり昔、まだ幼い時だが、確かに聞いた覚えが・・・!?

「メガーヌおばさん!?そうだ・・・メガーヌおばさんの名前がアルピーノ・・まさか・・」

唐突に思い出す、母さんの部隊の確かゼスト隊のメンバーだった筈・・・。母さんと一緒に死んでいる筈・・

「ま・・さか・お母さんは生き・・てるんですか?」

何度思ったことか・・お母さんが生きていたらと思ったことか。だがこの予想が当たってるなら

「正解だ・・中々頭が回るな、その通りお前の予想は当たってる。お前の母クイントそしてゼスト。メガーヌは生きている、だがこれ以上は答えを聞いてからだ。どうする闇の中の真実に踏む込むか今のままかをな・・」

何処までも鋭く刺すよう視線の龍也さんの目を確り見据え

「聞きます・・・教えてください、その真実を・・・」

私はそう返事を返した、これでもし聞かなかったら・・・私は一生後悔すると思ったから

「判った・・だが今日は駄目だ。この話はゲンヤさんとギンガにも同席してもらう。だから明日の朝私の部屋に来い。朝からゲンヤさんの所に行く。だがこれは暗く深いものだ。それでも聞くか？」

最後の確認と言いたげに念を押してくる龍也さんに

「私の心は決まりました。何を言われようが変わりません。私は・・人として、お父さんとお母さんの娘としてその話を聞きます」

私は決めた、立ち止まらない為に前に進む為に・・・そしてこの時は気付かなかった、昔渡された鍵のアクセサリーの中心の石が淡い光を帯び始めていた事に

第３３話に続く

大人ヴィータ

クレアの頼みを引き受け、成長プログラムのコピーにより成長した姿。はやてより少し幼い点から恐らく１５～１８歳だと思われるが実際は不明。女性らしく成長しており美女の名が相応しいが性格や態度はそのままなので、少し子供っぽい部分がある。クレアの身体能力と魔力の一部がコピーされており戦闘力が上昇しており、現在のランクはＳ＋になっている。まだ完全に同調が終わった訳でなく時に発作的に泣き出したり。龍也に抱きついたりする事がある（本人はその行動を覚えており。その状態になると暫く部屋に閉じ篭ってしまう）セレスが言うには近い内に完全に同調するらしいが時

期は完全には分かっていない。また可能性としてはクレアの変換素質もコピーされているが相性なのかそれとも同調が完全ではない所為か目覚めてはいない。

## 第３３話（前書き）

感想、アドバイス常時お待ちしています。
作者の励みになるのでよろしくお願いします

今回は聖王教会でのお話です、楽しんで読んでいただければ作者は嬉しいです
それでは本編始まります

# 第３３話

第３３話

龍也達がヴィヴィオと遊んでいる同時刻、なのは、フェイト、はやて各隊長はベルカ自治領聖王教会本部にいた。

コンコン

「どうぞ」

ドアをノックする音に返事をする女性の声は聖王教会騎士カリム・グラシアである。返事を聞くと、ドアが開きノックをした人物達が部屋に入る。

「失礼します。高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です」

二人はいつもより凛々しい表情で敬礼をする。
はやてはそんな二人の横でニコニコしながら見ていた。

３人が部屋に入室するとカリムはゆっくり歩き近づき、微笑みながら労をねぎらう。

「いらっしゃい。はじめまして、聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアと申します。どうぞ、こちらへ」

挨拶もそこそこにカリムは3人を席へ案内する。白い丸テーブルに

イスは6つ、そのうちのひとつの席にはすでに時空管理局本局次元航行部隊クロノ・ハラオウン提督が座って待っていた。

カリムはクロノの右隣に座り、はやてはそのカリムの隣に座った。なのはとフェイトは未だ座らず、イスの横で起立していた。

「失礼します」

なのはは3人が座るのを確認すると一礼し、クロノの横の席、左隣へと座った。フェイトはその隣で敬礼し、

「クロノ提督、少し、お久しぶりです」

挨拶されたクロノはフェイトの挨拶を生真面目に笑いもせず、目だけをフェイトに向け仕事での挨拶をした。

「ああ、フェイト執務官」

そんな真面目な兄妹二人のやりとりを横で見ていたカリムはクスリと笑う。

「うふふ、お二人とも、そう硬くならないで。私達は個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ」

「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで」

「平気や」

カリムの一言に、クロノは柔和な顔になり、口調も固さがなくなった。はやては終始やわらかい。

「じゃあ、クロノ君久しぶり」

なのはも堅い表情を崩し、気さくに話しかける。

「お兄ちゃん、元気だった？」

フェイトも義理の兄であるクロノに普段の挨拶をした。すると、クロノはうっと小さく呻き、恥ずかしそうに顔を少し赤くする。

「・・・それはよせ。お互い、もういい歳だぞ」

「兄弟関係に年齢は関係ないよ、クロノ？」

どうやらこういうやり取りはフェイトのほうが一枚上手のようである。クロノは顔を赤くしながらうつむいてしまった。そんな兄妹のやり取りを他の3人はクスクス笑いながら見ていた。そしてその和やかな空気の中カリムが首を傾げながら

「所ではやて、八神中将はどうしたんです？一応来るように連絡を入れておいたんですが？」

「う～ん、そんな話は聞いてへんけど、カリムとシャッハが苦手やから来ないって言ってたで」

その言葉に眉を顰めるカリム

「そうですか・・・出来れば話に同席にして貰いたかったんですけど・・・」

「アイツそういう奴だから気にしないほうが良い。僕は最初からアイツは来ないと言っていたんだ」

不機嫌にクロノが口を開く、龍也とクロノは仲が悪い訳ではないだが、クロノはシスコンであり、義妹が想いを寄せる人間が嫌いなのだ。だが忘れてはいけない此処にははやてが居るのだ

「クロノく～ん？人の兄ちゃんをアイツ呼ばわりかそれは許容できんなぁ」

フフフと黒い射抜く様な目で睨んでいるはやてにしまったと言う顔をする、

「いや・・違うんだ。話せば判る・・・だから落ち着け・・フェイト？」

立ち上がろうとするクロノ腕をフェイトががっちりと掴んでいる。髪が垂れて目が見えない

「ふふふふふふ」

と不気味な笑い声と黒い空気が発生している。やばい・・・誰か助けをと辺りを見る、

「・・・・・・・」

無言だが凄まじい威圧感を放つなのはが居る。カリムは目を閉じて、十字を切っている

「すまない・・・謝るから許してくれないか？」

許してもらおうと謝罪を口にするが

「駄目やね」

「少し頭を冷やして、お兄ちゃん」

「お話で良いよ」

黒い笑みで立ち上がった三人に冷や汗を流す、デバイスは無いだろうだが三人は龍也に護身術を教わっている。素手でも十分強い

今日の教訓・・・人の想い人の悪口はやめましょう。

血がついたまま咳払いをし何事も無かったように話を切り出したはやて

「・・・さて、昨日の動きについてのまとめと、改めて機動六課設立の裏表について、それから、今後についてや」

「あの・・・はやて?クロノ提督がやばい具合に痙攣してるんですが?」

「大丈夫。お兄ちゃんはこの程度じゃ死なないから」

部屋の隅で額から血を流し痙攣している。クロノを冷めた視線でそれを見るフェイト

「う~ん、五分くらいで復活するよ・・多分・・・もしそうじゃなかったら葬儀屋を呼ぼう」

酷いことをさらっと言うなのはに恐怖しながら、カリムはクロノに治癒魔法を施した

「死ぬかと思った」

それから五分間治癒を受け何とか持ち直したクロノだが、顔は青い血を流しすぎたようだ

「さっきの１００％クロノ君が悪いから、謝らんで」

その言葉にコクコクと頷く。なのはとフェイト。味方はどうやら居ないようだ

「判ってる、僕が全て悪いと認める。だから話の続きを頼む」

「判ってるって、じゃ昨日の動きについてのまとめと、改めて機動六課設立の裏表について、それから、今後についてや」

５人のいる部屋のカーテンが閉じ、外から視認できなくなった。途端、部屋は暗くなり、圧迫されたような感覚に包まれる。それに呼応して、空間もどこか外とは切り離されたような別空間を錯覚させる。そんな空気の中、クロノが重々しく口を開いた。

「六課設立の表向きの理由は、ロストロギア『レリック』の対策と、独立性の高い少数部隊の実験例」

クロノはなのは達から視線を外し、誰もいない空間を見つめた。そして、そこにモニタが展開し、クロノとカリム、続いてリンディの

画像が映し出された。

「知っての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それと僕とフェイトの母親で上官のリンディ・ハラオウンだ」

一度言葉を区切ると、3人の画像が消え、代わりに三提督の画像が映された。

「それに加えて非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め、協力を約束してくれている。僕も信じられないんだが・・地上のレジアスゲイズ中将も極秘裏の協力者だ」

なのはとフェイトは目を見開いた。二人ともコレには驚いたようだ。自分達の協力者に、あのレジアスゲイズ中将に、伝説の三提督がいるとは

「その理由は、私の能力と関係があります」

そう言い、カリムはイスから立ち上がり、皆の見つめているモニタの後ろに回った。展開されていたモニタが消え、皆が見る位置へとゆっくり歩き出したカリムは、紐で括られた紙の束を持っていた。ちょうどタロットカード程の大きさの紙の束である。カリムはその紐をゆっくりと解くと紙の束は光りだした。

「私の能力、プロフェーティン・シュリフテン（預言者の著書）」

そう言うと、紙の束はカリムの周りを囲むように一枚一枚浮き上がった。

「これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き

出した預言書の作成を行うことができます」

カリムの周りに浮いている紙は光り続け、カリムを中心にゆっくりと回っている。

「二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しかできません」

そう言うと、カリムの前の二枚の紙がなのはとフェイトの前まで飛んでいき、彼女達の前で止まった。

「預言の中身も古代ベルカ語で、しかも解釈によって意味が変わることもある難解な文章。
世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程度、つまりは、あまり便利な能力ではないんですが」

なのはとフェイトの前に浮いている紙にもなにやら文字が書いているが、二人にはさっぱりわからないようで、顔を見合わせて困った顔をし、首を横に振る紙はカリムの元へ戻り、輪の中をカリムを中心にくるくる回っている。

「聖王教会は勿論、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。信用するかどうかは別にして、有識者による予想情報の一つとしてな」

「ちなみに昔はレジアス中将も嫌いやったみたいやけど・・其処は兄ちゃんに感謝やな」

その言葉に首を傾げるクロノ達に

「ああ、そうやったな、クロノ君達は知らへんな。兄ちゃんがレジアス中将を説得して味方に変えたんやで。今は何か友達らしいけど」

自分たちが知らない間、龍也がどれ程働いていたかを知る者は少ない

「それに兄ちゃんの中将の地位やけど。推薦したのはリンディさんに三提督、後レジアス中将やで？知らんかったやろ？」

にこやかに笑うはやての言葉を信じるなら。今龍也のバックにはとんでもない大物たちが居ることになる。

「まぁ。それは置いといて、カリムの予言能力に数年前から少しずつ、ある事件が書き出されているんや」

旧い結晶と黒い亡者達が集い交わる地

邪悪なる王の元、死地より暗黒なる城が蘇る

亡者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる

なのはとフェイトはその予言を聞いてハッとなった。

「それって・・・」

「まさか・・・」

「ロストロギアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅と、そ

して管理局システムの崩壊」

カリムの言葉になのはとフェイトは言葉が出ない。おもわず息をのんでしまう。あまりにも非現実的であまりにも荒唐無稽で、とても信じられるものではない予言だからだ。いや、信じたくない、というのが本音だろうか。

「情報源が不確定と言うこともありますが、管理局崩壊ということ自体が、現状ではありえない話ですから」

カリム自身、この予言の危険性と信憑性を鑑みて、現状の管理局システムの強固さや高い完成度が崩壊するとは考えにくいと言う。

「そもそも、地上本部がテロやクーデターにあったとして、それがきっかけで本局まで崩壊・・・いうんは考えづらいしな・・・」

はやても顎に指を添え、予言に対しての脅威を思案する。現状、時空管理局に対抗脅威となる組織は一つしか存在しないネクロ達だ。だがそれについて詳しく知るものは永い間一人でネクロと戦っていた龍也のみ・・だがその事に関しては口を開こうとしないのだ。言う言葉は唯一つ時を待てだけだ

「龍也に命令して話させる事は出来ないか？」

クロノが尤もな事を言うが

「それは無理や、その事に関する事は、兄ちゃんが権限を使って聞くことを禁じとるから」

龍也の権限それはあらゆる部隊に干渉できることそれとあらゆる部

隊からの不干渉である。この権限を使われたら三提督でないと命令することは出来ない

「そうか・・龍也は何を考えてるんだ?時・・・まさか地上本部が落ちるのを待てというのか?」

幾ら考えても出て来ない。龍也は昔からそういうことを口にしない。真意を測れるのは長年共に居たはやてくらいだろう。だがそのはやてが判らないと言うのだから手のつけようが無いのだ。皆で考えている時カリムが驚くべき事を言った。

「・・・実ははやてやクロノにも言っていないのだけれど、つい先日、また新たな予言が出たの」

「え!?ほんまか!?」

これにははやてとクロノも驚いていた。

「ええ、翻訳も本当につい先程終わったところなのよ」

暗黒なる城蘇るとき。神なる王もまた蘇る

神なる王と邪悪の王。最強なる二人の王

暗黒なる城にて相打つ

滅び行く暗黒なる城の中、神なる王は唯一人炎と共に時限の海へと消えてゆく

彼の者は王にして最強の守護者なり
その命を賭して世界を救わん

短い文ではあるが、「暗黒なる城」という文面からして、先程の予言の続きに当たるのだろう。だが、ある単語が気になった。それは

「王にして最強の守護者？」

王にして最強の守護者・・・？

「まさか・・・兄ちゃんか？」

守護者というイメージが在るのは龍也だけだ

「龍也さんが死ぬって言う予言なの？」

予言を信じるなら龍也は魔王と相打ちになり、一人死ぬことに成る

「そんなこと無い。龍也が死ぬ訳無いんだ！！」

フェイトが声を荒げ立ち上がろうとするが、

「落ち着いてください。何も八神中将が神なる王と決まった訳では無いのですから」

カリムがそれを手で制し、諭すように言う

「そうですね・・御免なさい。ついカッとなっちゃって」

謝罪しながら座りなおしたフェイトを見てから

「・・・実は、『王』というキーワードに疑問を持ちまして、私は古代ベルカ時代の書物や文献を調べました。そこでわかったことがあります」

カリムの予言の中で三つのキーワードに注目したそれは「黒い亡者」と「邪悪の王」に「暗黒なる城」というキーワードだ
確かに、古代ベルカ時代には多くの「王」が存在したと聞く。詳しい所は判らないが様々な分野に特化にした王が聖王の名を冠したのではないかと言われている、その中には悪に目覚めた王も居たかもしれない
歴史に埋もれ、表立っては語られない「王」も存在するなかで、もしかしたら「邪悪の王」も存在したのかもしれない。聖王教会にはベルカの歴史に関する資料や文献などが多数ある。禁書扱いのものも保管されている。そんな期待を込めて皆カリムの次の言葉を待った。

「「黒い亡者」というのはかつてベルカが生み出した禁呪「ネクロマンシー」で生み出された兵士の事だと推測できます」

「ネクロマンシー？」

聞き覚えの無い言葉にクロノが首を傾げながら尋ねると

「はい、かつてベルカで争いが起きた時に作られた物で、魔力で死んだ騎士の魂を縛りつけ忠実な兵士にするという魔法らしいですが・・・詳しい所は判りません」

調べてみたが其処のところだけ黒く塗り潰されており、どういった

魔法なのかというのが判らない

「次の邪悪の王ですが、かつて聖王に反旗を翻し、反乱を起こした王でネクロマンシーを開発したのもその王だそうです、此れは名前が記されていまして名をジオガディス。文献では剣と呪術に優れ、聖王を圧倒する魔力を持っていたそうです、ですが聖王の中で唯一神の名を持つ、神王に破れ体を封印されたそうですが・・ですがその際にこんな言葉を残してるんです、我は消して滅びることなく生き続ける、遠い未来にて再び蘇ると・・・恐らく既に復活していると思います」

ネクロが現れている点からそれは間違いない

「私多分見たことあるよ・・・龍也さんの目と腕を奪った騎士、それが多分ジオガディスだと思う」

ジオガディスはこの時代と言っていた多分蘇って直ぐ現れたんだと推測される

「当時の龍也を圧倒し、行方不明にした正体不明の騎士探していたが見つからない筈だな」

クロノ達が広域次元犯罪者として指名手配していたが、情報が一切入らなかったのも納得できる。恐らくジオガディスを見つけた者は殺されネクロにされていたのだろう

「最後に暗黒なる城ですが、これはジオガディスが使っていた要塞だと思います。聖王のゆりかごと言う兵器に対応策としてジオガディスが製作したのでしょうが。これ以上は判りませんでした」

「いや。こんだけ判れば、対応策も出来るんちゃうかな？」

朗らかに言うが実際詳しい所は殆ど判らずじまいだ、だが判ったことも多い

「所で龍也は元気なのか？」

話し終え世間話になっていた頃、クロノが思い出したように尋ねる

「うん、元気や。ＦＷ陣に訓練をつけたりしとるで」

訓練とい言う言葉に顔を青褪めるクロノ

「・・・付いて行けてるのか？龍也の訓練は厳しいぞ？」

かつてクロノが龍也に訓練を頼んだ際は、足腰が立たなくなるまで打ちのめされていた

「大丈夫だよ、龍也さんちゃんと個々のステータスに合わして訓練してるから。どうせなら教導隊に入ってくれれば良いけど」

紅茶を飲みながら言うが

「なのは、そんな事をしてみろ。きっと殆どの隊員が局を辞めるぞ」

龍也の訓練を頼む部隊は数多く存在する、だが龍也訓練は凄まじく厳しい。耐える事が出来れば間違いなく強くなる。だが恐らく挫折者が多く出るだろう

「はは・・そうだね、私達も死ぬかと思ったよ・・・」

フェイトが乾いた声で言う。隊長陣も訓練受けたが本気で死ぬかと思うほどきつい物だった

「なにをやったんだ？」

その乾いた声に何があったんだろう？とクロノが尋ねるが

「兄ちゃんの攻撃を回避か防御、全員リタイアするまで。兄ちゃん手加減してたけど３００のスフィアは多すぎや。私でもあかんと思った。プロテクション打ち抜いて迫ってくるんやで？むっちゃ怖いわ。そうやクロノ君もまた訓練してもらえば？」

「・・・遠慮しておく・・・折角閉じたトラウマを再び開く気は無い・・・」

俯いたクロノどうやら、思い出してはいけない記憶を思い出してしまったようだ。そして穏やかに時間は流れた、機動六課の待遇についての事に触れた。

「勿論、皆さんに任務外のご迷惑はおかけしません」

カリムのそんな言葉にフェイトとなのはは相槌を打ち答える。

「ああ、それは大丈夫です」

「部隊員達の配慮は八神二佐からも確約はいただいていますし」

なのはがちらりとはやてを見ると、はやては頷いた。

そして、カリムは改めてなのは、はやて、フェイトの顔を見ると頭を下げた。

「改めて、聖王教会教会騎士団騎士カリム・グラシアがお願い致します。華々しくもなく、危険も伴う任務ですが、協力をしていただけますか？」

平和を願うため、安寧を願うため、その力を正しく使うために。なのはとフェイトは力強く頷いた。

「非才の身ですが、全力にて」

「承ります」

隊長達3人が聖王教会から帰って来ると、副隊長が呼び出され、聖王教会での事を話した。

カリムの預言のこと、管理局崩壊の危険性、そして王にして最強の守護者という単語

「王にして最強の守護者・・・やはり兄上なのか？」

腕組みをしてシグナムが言う、やはり王にして最強の守護者に当てはまるのは龍也しか居ない。だが

「シグナム！馬鹿なこと言うな！！兄貴が死ぬ？そんな訳在るか！！」

その言葉にヴィータが詰め寄り言うが

「だが可能性として兄上だけだ、今居る騎士・魔導師の中で最強といえば兄上しか居ない。私だって信じたくないが！それしかないだろう！！」

シグナムとヴィータが怒鳴りあう、二人だって信じたくないのだ、神なる王は唯一人炎と共に時限の海へと消えてゆくの一文を

「二人とも落ち着き。兄ちゃんがまだ王にして最強の守護者って決まった訳や無いんやからな」

私が仲裁に入ると二人共落ち着きを取り戻し

「すまん、ついカッとなった」

「いや、こっちも御免・・」

二人が謝罪した所で

「今日は皆解散。明日も早いでもう休んでや」

皆に解散するように言い、一人部屋の中に残った私は

「兄ちゃんが死ぬ・・・そんな訳ない・・そんな訳はないんや」

繰り返し自分に言い聞かせるように呟く

「大丈夫。大丈夫に決まっとる。兄ちゃんが死ぬわけない」

繰り返し言うがその最悪の予想は中々頭から消えてくれない

「嫌や・・・そんな事考えたくない」

頭を振りその考えを飛ばそうとする、だが振り飛ばそうとする度にその予想が強く頭に残る、その考えに押し潰されそうになった時

コンコン

ノックの音がし、その考えから引き戻される

「誰か知らんけど感謝やな」

頭を強く振った為ぼさぼさになった髪を整えてから

「どうぞ」

中から呼びかけた

「すまん、今良いか？」

頭を下げたから入ってきたのは、兄ちゃんだった

「大丈夫や、んで何のようや」

慌てて笑顔の仮面を被るが

「どうしたんだ？泣いていたのか？」

兄ちゃんにはその仮面は呆気なく見抜かれた

「泣いてへんけど・・・ちょっと悩み事があって・・な」

俯きながら言うと、優しく頭に手が置かれる

「大丈夫か?悩みなら私が聞くが?」

易しく諭すように言うが。この悩みだけは言うわけにはいかないのだ

「ううん、大丈夫や、自分で解決できるから。で兄ちゃんは何の用や?」

強引に話を摩り替える、このままでは言ってしまいそうになったから、兄ちゃんは一瞬鋭い視線を浮かべるが直ぐにそれを消し

「ああ・・ちょっと頼みがあってな」

「頼み?なんや結婚して欲しいとかか?」

からかう様に笑うと兄ちゃんは困ったような笑みを浮かべ

「まだそんなことを言ってるのか?いい加減彼氏でも作ったら如何だ?」

「はなら、兄ちゃんが彼氏に成ってくれたらええんや」

再び笑みを浮かべ言うと兄ちゃんは困った顔をする、私はこの顔が好きだった、巧妙に隠しているがこの顔は照れてるときや恥ずかしい時に浮かべる顔だ。だから兄ちゃんは照れてるか恥ずかしいと思っている、そう思うと自然に笑みが零れてくる

「・・・もう良いこの話は終わりだ、それで頼みなんだが良いか？」

「うん、ええで」

からかうのは此れくらいにして置こう、私は今の妹と言う心地よい場所をまだ手放す気は無いのだから

「あのだな、明日スバルの訓練を免除にして欲しいのだが？」

眉が上に上がったのを私は感じた

「スバルの？どうしてや？新人は訓練せないかんのやで？」

私は今たぶん黒い笑みを浮かべてるだろう、でも我慢は出来ないのだから仕方ない

「ああ、それは十分理解している。だが明日ゲンヤさんに会いに行くと言ったものの。私はゲンヤさんに余り面識が無い、だからスバルに仲介を頼もうと思ってな」

困ったように言う兄ちゃん・・嘘は言ってないと判る。付き合いが長いのだ、なのはちゃん達では判らない微妙な変化が私には判る

「判ったで、明日のスバルの訓練は免除にするようになのはちゃんに言うとく。何で急にゲンヤさんに会いに行こう思ったんや？」

其処が腑に落ちない。兄ちゃんはゲンヤさんに余り面識が無いはずだが・・それを何故会いに行くと言い始めたのか気になった

「昔世話になったからな・・・一度挨拶に行こうと思っていたんだ」

確かに兄ちゃんは余り面識が無い。だが若く才のある兄ちゃんをゲンヤさんは気に掛けていたし。行方不明という通達が各部署に入った時も。自分の部下を派遣し兄ちゃんを必死に探してくれていた。そして何より私が落ち込んでいるとき

「譲ちゃんよぉ、妹のお前さんが兄貴の事を信じずに如何するんだ？信じろよ。誰が何と言おうと自分の兄貴は生きてるってよ」

不器用な微笑を浮かべながらそう言ってくれたゲンヤさんが居たから。私は兄ちゃんが生きてるって信じてこれた

「判った、そういう事ならもう聞かへんよ。ゲンヤさんに宜しく言う取ってくれる？」

「ちゃんと伝えておくよ。はやてが宜しくと言っていたとな」

微笑み左手を頭に置き撫でてから

「私はもう寝るからな。おやすみはやて」

「うん。おやすみ、兄ちゃん」

片手を振り兄ちゃんを見送り、再び一人に成った部屋の中で

「そうや、兄ちゃんが死ぬ訳ない。そうやこれからも兄ちゃんはずっと私の傍に居てくれる。そう決まってるんやから」

そう思うと自分の考えが馬鹿らしく思えてくる、そう思っていると

急に眠くなった

「ふぁああ。う～ん私もそろそろ寝ようか」

眼を擦りながらロングアーチの部隊長室を後にし、自分の部屋に向かいながら

（そうや、私はずっと兄ちゃんと一緒に居るんや。絶対に・・・）

ずっと好きだったのだ、幼い頃からずっとずっと傍に居てくれた。ずっと一緒に居てくれた兄ちゃん。私は絶対兄ちゃんを振り向かせて見せる。私と兄ちゃんは従兄弟・・・本当の兄弟じゃなくて本当に良かったと思う。兄弟だったらこの恋は決して叶うことは無い。だが従兄弟なら話は別なのだから

「兄ちゃんは誰にも渡さへん。兄ちゃんは私の兄ちゃんなんだから」

そう呟き私は部屋に帰って行った、今日は良い夢が見れそうだと微笑みながら眠りに付いた。

第３４話に続く

## 第３４話（前書き）

今回の話から暫くオリジナルの話が続きます、オリジナルの分ストーリーはご都合主義になっていますが。楽しんで読んで下さると嬉しいです

感想、アドバイスお待ちしています。作者の励みになるのでよろしくお願いします

# 第３４話

第３４話

ピピピッと目覚ましの音がする。それを止めもう一眠りと思うが

「・・・・はっ！！今何時だ」

慌てて飛び起きる昨晩龍也さんに６時に部屋の前に来いと言われていた事思い出し、慌てて時計を見る時間は６時五分前

「やばい～早く行かないと」

慌てて着替えバタバタと部屋を後にする、全速力で管理人室の前に行く。其処には既に何時もの黒のコートを着込んだ龍也さんが壁に背を預け待っていた

「はぁっ・・・すいません、寝過ごしてしまいまして」

肩で息をしながら言うと

「気にしない・・少しくらいならな・・・なんだその髪は？はぁ・・ほら後ろ向け梳いてやるから」

気にしないと言っていたが髪を見て、呆れながらコートから櫛を取り出しながら言う龍也さんに

「いいいいい、良いですよ。ほっとけば直りますから」

手を振り断ろうとするが

「良いから、後ろを向け直ぐに済む」

「うっ・・・判りました」

観念し後ろを向く。ゆっくりと髪が梳かれていく

（・・・何か凄く気持ちが良いな・・・ヴィータさんや部隊長の気持ちが判るや）

優しく櫛が動かされ髪が丁寧に整っていく暫くし

「終わりだ。それじゃあ行くか？」

櫛を仕舞い歩き出した龍也さんの隣を歩いて行く

「ベヒーモス。セットアップ」

隊舎前でベヒーモスを起動させ跨り

「早く乗れ、行くぞ」

タンデムシートに乗り、実家へと向かって行った、バイクで走りながら

「お前の家は何処にあるんだ？」

結構な速さで走りながら尋ねて来る龍也さんに

「クラナガンの中心の方ですよ」

「中心・・・まだ大分先だな。飛ばすから確り掴まれよ？」

掴まるよう言う龍也さんに

「えっ・・・とはい」

恥ずかしくて顔が赤くなるが確りと龍也さんの背にしがみ付く

「行くぞ」

アクセルを全開にし急に加速する、それはマッハキャリバーと同じかそれよりも速く、吹き抜けていく風がとても心地良かった

隊舎を出てから一時間程で実家に付いた

「此処か・・・中々感じが良いな」

少し離れた所から家を見上げそう呟く龍也さん。それはどことなく優しい感じがした

「スバル、今日ギンガとゲンヤさんは居るんだよな？」

確認してくる龍也さんに

「はい、今日はギン姉とお父さんが非番の日ですから居ますよ」

「そうか・・・では行くとするか」

家の方に歩き出した龍也さんの後を追いかけて行く。家の前に行く

と其処には

「おう、スバルに坊主・・・いや今はもう坊主なんて言えねぇな」

穏やかな笑みを浮かべたお父さんが居た、

「朝早くから申し訳ありません、ですがどうしても話しておきたかった事があったので」

そう言って頭を下げる龍也さんを見て

「良いって、頭上げなよ?今じゃお前さんの方が上官だぜ」

頭を上げるよう言うとゆっくりと頭を上げたのを見てから

「ほれ。立ち話も何だからよ、家の中で話そうぜ」

お父さんに先導され家に入って行った

「しかし、でかくなったな龍也、昔はもっと小さくなかったか?」

今で笑いながら言うゲンヤさんに

「何時の話を最後に会ったのは8年前ですよ?」

微笑みながら言い返すと

「違いねぇ、そりゃでかくなるわな」

ガハハと笑うゲンヤさんに吊られて笑い出してしまう、変わってないなと思っていると

「八神中将。お茶をどうぞ」

ギンガがお茶を運んできてくれるが

「いや・・・中将なんで飾りみたいなものだ。龍也で良い」

「いえ・・しかし上官な訳ですし」

トレーを抱え困ったような素振りを見せるギンガに

「ギン姉駄目だよ。龍也さんはそういう呼ばれ方が好きじゃないんだよ？」

お茶を飲みながら言うスバルに

「スバル！そういう呼び方はいけないと「いやスバルの言うとおりだな。私はそういう呼び名の方がいい」・・・判りました龍也さん此れで良いですか？「それで構わないよ、中将等と言われる肩が凝るよ」」

穏やかな空気の中暫く世間話をしていたが

「所で何で私が今日ここに来たか知っていますか？」

「いや・・・特に聞いてないな。明日朝から二人で来るとしか聞いてないぜ」

「そうですか・・・では少し失礼しますよ」

バチン指を鳴らし結界を展開する

「・・結界とはな。それほど重大な話って訳か」

鋭い視線のゲンヤさんを見据え

「ええ、余り聞かれたい事では無いので、極秘裏の話です。管理局では5人しか知らぬ最重要機密です」

その言葉に

「私とスバルは席を外しましょうか?」

気を使ってギンガが言うが

「いや・・駄目だ、此れはどちらかと言えばゲンヤさんより。ギンガとスバルに関係している・・・こんな言い方は嫌だが戦闘機人である二人に用があるんだ」

その言葉に顔を青褪めさせるギンガと睨むような顔をして

「何処で知ったんだ?二人が戦闘機人だと?」

「簡単ですよ。クイントさんに聞いてんです」

クイントと言う言葉に更に眉を顰めるゲンヤさんだが

「ふざけてんのか?クイントはもう死んでるんだぜ?」

立ち上がり今にも殴り掛かって来そうなゲンヤさんと、あたふたとしているスバルとギンガを見ながら

「ええ。表向きは死んでますね。ですが彼女は生きています。いえ彼女だけではありません、ゼストもメガーヌも生きてますよ」

「・・・・詳しく聞こうか？」

ゼスト、メガーヌと言う言葉を聞き座りなおしたゲンヤさんに

「元よりその積もりですよ」

と微笑み話し始めた

「まずゼスト隊ですが・・ネクロによって壊滅したと聞いてますね？」

「ああ、そう聞いてるが」

「実際は最高評議会によって、ネクロ達の基地に派遣されたんです」

「どういう意味だ？その言い方だと最高評議会とネクロが繋がっている用に聞こえるぜ？」

「その通りなんですよ、最高評議会・・もう壊滅してますが。当時はネクロと繋がってたんです」

息を呑むギンガとスバルを見てから

「ゼストはその線を疑い捜査している内に邪魔者として排除されかけました。ですがギリギリのところで間に合って全員保護する事に成功しました」

本当にギリギリの所で保護する事に成功したのだ

「成る程・・それでゼスト達は今何処に居るんだ?」

安心した様子で何処に居るのか問いかけて来るゲンヤさんに

「スカリエッティの研究所ですよ」

嘘を言わず事実を言う、ジェイル・スカリエッティの名に

「スカリエッティだと!!何でそんな犯罪者の所に居るんだ!!!」

怒鳴りながら立ち上がったゲンヤさんに

「落ち着いてください、ジェイルも被害者なんですよ」

「どういう意味ですか?スカリエッティは犯罪者として指名手配を・・・」

黙り込んでいたギンガが尋ねてくるが

「その通りだが・・世界には誰も知らない真実がある、ゲンヤさんもし貴方がスバルとギンガを誘拐されて、無事に帰して欲しければ言うことを聞けと言われたら如何ですか?」

「言うことを聞く・・・まさか・・・」

何が言いたいのか気付いたゲンヤさんは目を見開く

「貴方の予想したとおり・・・ジェイルは娘を人質に脅されていたんですよ。娘の命が惜しければ従えとね」

事実だ私がまだ隻腕の時、虱潰しにネクロの基地を破壊して回ってる時。基地に監禁されているウーノ達を発見した。最初は何故此処に人間が思った。向こうは向こうで私の黒い騎士甲冑を見て怯えていた。私が彼女達を檻から出した時もトーレやチンクは私を敵だと勘違いして襲って来た。まぁその時はネクロが押し寄せてきて、私がネクロの敵だと理解し協力してくれた。それからウーノ達をジェイルのアジトまで連れて行って。私とジェイルの付き合いはそこから始まった。ジェイルが私の義手を作ってくれただけじゃなく，ベヒーモスも製作してくれた。私はその礼としてナンバーズに護身と戦う為の術を教えていた、そうだ・・・ジェイルが君たちの兄のような男だ、何て言うから。暫く私の呼び名がお兄様になっていた。今でもその名残はあるが・・まぁ仕方ないだろうそんな事を考えていると

「ちょっと、待ってください、スカリエッティは独身の筈どうして娘が居るんです？」

流石と言う所か目の付け所が違うな

「ジェイルは身寄りの無い子供達を保護し、自分の娘として育てていたんだ。アイツは情報のような酷い奴じゃないよ。ギンガ」

「そうなんですか？」

信じられないと首を傾げるギンガに

「言って置くがジェイルの娘の前でそんなこと言うなよ？怒り狂うぞ全員」

ジェイルがウーノ達を愛するようにウーノ達もジェイルを本当の父親の様に思っている。そんな中でそんなことを言えばギンガは間違いなく重傷を負うだろう

「話は逸れてしまいましたが私が今日此処に来たのは。ゲンヤさん達とクイントさんを再会させる事と。スバルとギンガに同じ戦闘機人としての悩みを持つジェイルの娘と話をさせるのが今日此処に来た理由です」

一旦話を切る

「あの・・質問なんですが？同じ戦闘機人って、スカリエッティの娘さんは人間なんじゃ？」

スバルが尋ねてくる、ゲンヤさんとギンガも同じ事を疑問に感じていたのか頷いている

「・・・ネクロは私が人を傷つけないことを知ると、それを利用してやろうとジェイルの娘達を後天的に戦闘機人に改造したんだ・・・つまり私の所為でウーノ達は人間じゃ無くなってしまったんだ・・・」

私の責任だ・・私がもう少し早ければ人のまま幸せに生きていた筈なんだ。気にするな其処おかげで戦えるんだと言ってくれるが。俯き黙り込んでしまう

「龍也・・あのよぉ。俺が言えた義理じゃねぇが・・お前さんはその娘達を救ったんだ胸を張れよ。なっ！」

ゲンヤさんがそう笑い肩を叩いて言う、スバルとギンガも同じように微笑んでいる

「少しだけ軽くなりましたよ。ありがとうございます」

やはりゲンヤさんの所に来たのは正解だったようだ

見たことの無い表情だった、何時も優しくそれでいて真っ直ぐ前を見ていた龍也さんだが、今は歯を食いしばりギリギリと嫌な音を立てて俯いている。勘違いしていた龍也さんだって人間なんだ悩みもするし、迷いもする、でも龍也さんはそれを隠す術を知っている。だから気付く事が出来なかったのだ

（龍也さんだって偶には弱気になることもあるんだな・・・）

普段は見ることの出来ない一面を見た気がした

「それでゲンヤさんにギンガ、今日クイントさんに会いに行きますか？」

普段の表情を浮かべ真っ直ぐにお父さんとギン姉を見据え問いかける龍也さんに

「決まってんだろ？会いに行くぜ、それが例え地獄でも行ってやる。もう一度クイントに会えるならな」

「私もです、私はお母さんに会いたいです」

お父さんとギン姉が返事を返すと

「予想通りですね・・きっとそう言うと思っていましたよ」

微笑む龍也さんに

「おし、じゃあ今から行こうぜ」

と立ち上がるお父さんに

「待ってください。ゲンヤさん貴方は大切なことを忘れています」

「あっ？なんだよ大切なことって？」

言ってることが判らず首を傾げるお父さんに

「失礼ですが、まだ食事をしてないのでは？」

あっ・・と呟き黙り込む、お父さんとギン姉。どうやらお母さんに会えると聞きテンションが上がりすぎたようだ

「でもそれなら・・龍也さんとスバルも食べてないんじゃ？」

「それなら大丈夫、来る途中に龍也さんが作ってくれた。サンドイッチ食べたから」

途中で休憩で停車したときに龍也さんが持ち出した物だ、量もボリ

ュームも味も最高だった。その言葉を聞き信じられないという表情を浮かべるお父さんとギン姉何か不味いこと言ったかな?と首をかしげ龍也さんを見る、龍也さんも判らないと言う表情をしている

「龍也・・悪りいが久しぶりにお前の料理が食いたくなった。作ってくれるか?」

コクコクと頷くギン姉。後に知るが龍也さんの料理は非常に美味で有名で、過去に様々な部署を転々としている際に料理を作り振舞っていたらしく、それを食べた隊員はその美味さに驚いたそうで、ある意味伝説になっている

「別に構いませんが・・如何したんです急に?」

自覚なしの龍也さんは首を傾げていると

「偶には良いじゃねぇか、な頼むよ」

と頭を下げるお父さんに

「判りました。では待っていてください、直ぐに作ってきますから・・スバルは如何する?食べるのか?」

コートを脱ぎ立ちが上がりながら尋ねてくる龍也さんに

「少しだけ、食べます」

と返事を返すと苦笑しながらキッチンに消えた龍也さんを見ていると

「スバルよぉ、お前何度か食べたことがあるのか?アイツの料理?」

今のテーブルに座り尋ねてくるお父さんに

「二週間に一回、料理を作ってくれるよ？」

何事もないように言うが

「それ羨ましいな・・・龍也さんの料理って凄く美味しいらしいから」

まだ食べたことが無いだろうギン姉が言うと、キッチンから

「ゲンヤさん、和食で良いですか」

と声が聞こえる

「なんでも良いぜ。美味けりゃな」

と返事を返すお父さん、凄く仲が良いなと思う、暫く世間話をしながら待ってると

「お待たせしました」

器用に三つのトレーを持ちながら歩いてくる、龍也さん。長い黒髪はバンダナで縛られていた

「和食で固めたので口に合うかは判りませんが、どうぞ」

置かれたトレーにはご飯、魚の塩焼き、野菜の漬物に、味噌汁、完璧な和食である

「「「頂きます」」」

手を合わせそう言ってから食べ始める

「美味い！」

味噌汁を飲みながら本当にご機嫌で食べてるお父さんに

「本当、凄く美味しい」

ギン姉も笑顔で食べている、私もお父さん達よりかは少ないが、龍也さんの美味しいご飯を笑顔で食べていた。その間龍也さんは何かの本を読みながら難しい顔をして考え込んでいた

「「「ご馳走様でした」」」

食べ終えると本を閉じ皿を片付けようとする龍也さんにギン姉が

「あ、これは私がやるので」

ギン姉が洗い物をしている間、世間話をし時間を潰していると

「すいません、お待たせしました」

洗い物を終えキッチンから出てきたギン姉がソファーに座るのを見てから

「それでは今からジェイルのアジトに行きますが、何か持っていく物は在りますか？」

もって行くものは無いかと確認を取る龍也さんに

「いや特にないな、それより早くクイントに会いたいな」

「「私も早くお母さんに会いたいです」」

思わずギン姉と声を揃えて言うと

「クク、判りました。それでは行きましょうか？」

声を押し殺して笑い、コートから黒い鍵を取り出しそれを投げる、
するとそれは黒の装飾が施された見た事の無い扉になった

「さぁ、この扉の中へ・・」

と扉の横で頭を下げる龍也さんに促され私達は扉を潜った

第３５話に続く

## 第３５話（前書き）

自分はリリカルなのはの小説を読んでいて感じたことは。

スカリエッティは純粋な悪ではないと感じました。

ですので本作では子供思いの好人物になっています。

今回はクイントさんとナカジマの再会のお話です、できればもう少し感動的にしたかったのですが、作者のレベルではこれが限界でした。

少々ご都合主義だとは思いますが楽しんで読んでくださると嬉しいです

それでは本編始まります

# 第３５話

第３５話

扉を潜ると其処深い森の中でした

「此処から大分歩きますが、ゲンヤさんなら問題ないでしょう。此方です」

先導する龍也さんの後を付いて行く、其処は大分暗い森の中で足元も良く見えない

「しかし深い森ですね、此処は何処なんですか？」

ギン姉が尋ねると

「ミッドの郊外だな・・地図の一番端のほうにある深い森だ」

説明しながら進んでいく龍也さんは歩き慣れているのかスルスルと進んでいくが、私達は付いて行くのがやっとだ

「しかし・・よお何で・・こんな所に・・・隠れてんだ・・よ」

息も絶え絶えといった様子でお父さんが尋ねると

「ジェイルは犯罪者として管理局に追われ、更にはネクロにも追われていますからね。かなり慎重になってるんですよ」

納得だこの森はかなり深い、龍也さんの案内が無ければきっと直ぐ

に迷子になるだろうと思い進んでいくと

「何者だ・・・」

何処かから女性の声が聞こえると、龍也さんは微笑みながら

「トーレ、私だダークネスだ、すまないが此処を通してくれないか？」

以前の名を言うと

「ダークネス・・・ふふ、もうその名は名乗らなくて良い。父さんから聞いてるぞ、八神龍也として生きてるとな」

女性の笑い声が聞こえると目の前の茂みが消え、洞窟が姿を現す

「セキュリティは解除した、早く来い」

という声が聞こえると

「それでは行きましょうか？」

と微笑み洞窟に入っていった、龍也さんの後を付いて洞窟に入っていった

「中は機械的なんですね」

洞窟は偽装で中は最高クラスの機械の宝庫だから、スバルの感想は当たり前だろう

「まぁ、偽装だからな」

と説明しながら歩いていくと、通路の影から

「久しぶりだな、八神、元気そうで何よりだ」

長身の女性が姿を見せる

「トーレも元気そうだな。他の皆は如何だ?」

尋ねると頭を抱え

「セッテを除き元気だ、セッテはもう末期だな、龍也様、龍也様と言っている」

「何故そうなった?セッテは元気じゃなかったか?」

記憶では何時も元気でにこやかだったが・・

「・・きっとお前が鈍感だからだ、もう少し女心を学べ、お前たちもそう思わないか?」

溜め息を吐きながらスバル達に問いかけるトーレ、振り返るとスバルとゲンヤさんが頷いていた。ギンガは苦笑を浮かべていたが・・

「っと・・申し訳ない、自己紹介がまだだったな。私はトーレだ」

自己紹介をしてないことを思い出したのか頭を下げながら、名乗るトーレに

「ご丁寧にどうも、俺はゲンヤナカジマこっちは娘の・・」

「スバルです」

「ギンガです」

とお互いに自己紹介をしていると、何処からダダダッと走ってくる音が聞こえる

「まさか・・・・」

嫌な予感がし身構えると

「龍也兄～！」

凄まじい勢いで赤い髪の少女・・ウェンディが突撃してきた

「ごふう！」

予想外の出来事にダイレクトに突撃を喰らい、息が止まる。鳩尾にウェンディの頭が命中している、スバル達も驚きの余り硬直している、トーレは怒っているのが目に見えて判る、そんな空気の中能天気に

「元気だったすか？・・あれ龍也兄、どこか痛いんっすか？」

自分のやったことに気付いていないウェンディの頭に

「この馬鹿者が！」

トーレの拳骨が振り下ろされた。またそれと同時に私は片膝をついてしゃがみ込んだ・・

「痛いっすよ～」

頭を抑えて涙目のウェンディに

「この馬鹿者が！そういうことはするなと、何回言えば判るんだ！！」

怒鳴りつけているトーレを尻目に

「大丈夫ですか？」

心配そうにスバルが寄って来る

「だ・・・大・・丈夫だ・・・だが・・すま・・・ない肩を貸してくれ・・・」

予想以上のダメージに立ち上がることが出来ず、スバルの肩を借り立ち上がる

「本当に大丈夫です？」

スバルが心配そうに顔を覗き込んでくるが

「大丈夫だ。此処に居るときはしょっちゅうこの突撃を喰らっていた。だが余りに久しぶりで反応できなかった」

事実だ良くこの突撃を喰らっていて、何回目かで成れて受け止めることが出来る様になっていたが、どうやら久しぶりすぎて反応出来なかった様だ

「お前さん・・・いろんな意味でずれてるぜ？」

ゲンヤさんが呆れた様に言っていた

「トーレ、それ位にしてやったら如何だ？」

以前説教を続けているトーレに言うが

「駄目だ、やはり姉として叱らないといけない事はあるんだ」

と取り付く島も無いトーレと助けてと言う目で此方を見るウェンディに溜め息を吐きながら

「すまないが、スバル達の案内があるんだ、悪いが手伝ってはくれないか？」

「案内？八神が居るんだ問題ないだろう？」

と此方を見ずに言うトーレに

「判らないか？ナカジマ・・・クイントさんの娘さんだ」

「！？っ・・・そう言う訳か・・判った一緒に案内しよう」

クイントの名に何を言いたいか理解したトーレは了承した、ウェンディも立ち上がろうとするが

「お前は此処で正座私が戻るまで其処で反省して居ろ」
と無慈悲な判決が下され涙を流すウェンディを見ずに
「行くぞ、こっちだ」
と歩き出してしまったトーレの後を追いスバル達が歩き出すが
「助けてくれないっすか？」
と涙声で言うウェンディに
「すまん、・・・頑張れ？」
と呟き歩き出した
「あのトーレさん？さっきの人は？」
ギンガが尋ねると
「聞いてるだろう？父さんの義娘だよ・・・私もだがな」
と呟くように返事を返すトーレに先導され歩いていくと
「あら？あら？これは八神兄様じゃないですかぁ」
独特な甘い声の女性の声が聞こえ、その声の方を見ると大きな丸メガネを掛けた女性がにこやかに笑っていた

「クアットロか、元気そうだな」

「当然ですわ、それに八神兄様も元気そうで何よりですわ・・・ところで後ろの女の人は誰ですかぁ」

微笑んでいるがその瞳の奥に見定めるような色を浮かべるクアットロから視線を外す、スバルとギンガ、気持ちは判るな

「クイントさんの娘さんと旦那さんだ、それで判るな?」

「・・・当然ですわ、私達とは違う戦闘機人・・・一度話してみたかったですわぁ」

と笑うクアットロだが真意は伺えない。こいつは本当に良く判らんな

「トーレ姉様、此処から私がご案内しますので」

「むっそうか?すまん八神まだやらねばならんことがあってな。ここで失礼する」

消えたトーレに代わり

「さっ此方ですわ・・目的地は父様の部屋で宜しいですか?」

と言い微笑むクアットロに

「ああ。それで頼むよ」

「ふふ、それではお喋りでもしながら行きましょうか?」

と楽しげに笑い、歩き出したクアットロを見て

「龍也・・俺なんかアイツ苦手だ」

「奇遇ですね。私もクアットロは苦手なんですよ」

と返事を返し歩き始めた

「ふふ。やはり家族以外と話すのは楽しいですわぁ」

と独特な甘い声で上機嫌に言うクアットロに

「そ・・そうですか・・」

そのテンションに引き気味なスバルに

「あら?判りませんかぁ?同じ悩みを持つ者として自分と同じ存在に合えたのは嬉しくありませんか?」

成る程・・こいつの異様なテンションはそれの所為か・・

「まぁ嬉しいですけど・・・」

スバルがぼそりと言うと

「クスクス、そうですよね・・ああそれと最初に言っておきますが。私達の中には貴方達に似た能力を持つ娘が居ますよ」

更に上機嫌になったクアットロに

「似た能力？ウィングロードの事ですか」

「そうですよぉ、ギンガ貴方は中々頭の回りが良いですねぇ。ノーヴェちゃんって言ってウィングロードに似たエアライナーという先天性の魔法が使えますわぁ。ちなみに私は幻術系ですけど～」

と語る本当に上機嫌だ、今まで見た事が無いくらいご機嫌だ

「それで他の人たちは？」

「他の子達ですか？皆訓練してますよぉ」

と言う確かに此処まで他のナンバーズを見ないのは珍しいと思っていたがそれで納得した

「訓練？どうしてそんな事を？」

「クスクス、父様の罪を今レジアス中将が取り消そうとしてますわ。そして無事に取り消す事が出来たなら、姉妹の中で何人かは六課の隊員として配属される事になってますからね。その為の準備ですよ、八神兄様の足手纏いにならない為のね」

と微笑みながらクアットロが言うとスバルが横に寄ってきて

「龍也さん知ってたんですか？」

「何を？」

「そのクアットロさん達が配属されるって事・・・」

「当然だろう?私はレジアスの推薦もあって中将をやってるんだぞ?知ってて当然だ」

納得という感じで下がるスバル達と通路を進んでいくと

「此処ですわ、それでは私は失礼しますわ」

来た道を引き返していくクアットロを見送ってから、ジェイルの部屋に入る

「やあ、良く来てくれたね、龍也、それにスバル君とギンガ君にゲンヤさん歓迎するよ」

立ち上がりにこやかに歩いて来るジェイルに

「「始めまして」」

「よろしくな」

と挨拶をすると嬉しそうに笑う

「ああ、良いねぇ、こうして人と話すのはとても楽しいよ」

ジェイルも上機嫌だ、本当に嬉しそうに微笑んでいる

「取りあえずお茶でもどうだい?いい茶葉が手に入ったんだ」

座るように促し全員にお茶を渡し、再び席に着いたジェイルは

「どうぞ。このお茶は中々手に入らないんだ」

とにこやかにお茶を薦めた、しばらく他愛無い話をし、ジェイルの印象が変わってきたところで本題に入る

「ジェイル、今日此処に来たのはクイントさんとゲンヤさん達を再会させるのが目的なんだが」

その言葉を待っていたと言いたげに笑う、ゲンヤさんを見てジェイルが微笑みながら

「クイントさんか、彼女は元気だよ。早く娘と旦那に会いたいって言ってたし。会っていくと良い」

お茶を飲みながら返事を返すジェイルに見送られ、クイントさんが居る部屋に向かって行った

先導するのは龍也さんだ、暫く暗い通路を進み一つの部屋の前で立ち止まる、龍也さん

「ゲンヤさん、スバル、ギンガ、私が呼ぶまでここで待っていてくれるか。少し驚かせようと思うんだ」

と微笑む龍也さんに

「良いな、俺は賛成だぜ、精々吃驚させてやろうぜ」

とニヤリと笑うお父さんに続くように頷くと、龍也さんは部屋の中に入っていった、部屋の中から懐かしいお母さんの声が聞こえる

「クイントさん、元気そうですね」

「龍也どうしたの？貴方が来るなんて珍しいわね」

龍也さんとお母さんの会話が聞こえる、胸がどんどん高鳴っていく

「クイントさん、今日は貴方にプレゼントがあるんですよ」

「プレゼント？何いい加減、スバルかギンガの旦那になる決意でもしたの？」

その言葉に私の顔が真っ赤になる、ギン姉も同様だ。お父さんは難しい顔をしている

「ご冗談を・・私のような男ではスバル達と吊り合いませんよ」

「あらあら、相変わらず自分の評価は低いのね、でも私は本気よ、貴方ならきっとスバル達も気に入る筈よ」

かなり乗り気なようだ、もう恥ずかしくて俯くしか出来ない

「それに貴方は戦闘機人だからって色目で見ない、だからきっとノーヴェちゃん達も貴方のことが好きなのよ。スバル達もきっと同じ貴方に惚れるはずだわ」

「ふー、冗談はやめてくださいよ、私なんかをからかって楽しいですか？」

疲れたように言う龍也さんだが

「からかってる訳じゃないだけどね」

クスクスとお母さんの笑い声が聞こえてくる

「プレゼントと言うのは。実は・・クイントさんに会わせたい人が居まして。きっと喜ぶ筈ですよ。入って来てください」

その言葉を聞いてから部屋の中に入る。お母さんが目を見開いているのがわかる

「ど・・どうして此処に・・・龍也が会いに行ったら駄目だって・・・」

動揺しているのか途切れ途切れに言うお母さん、少し歳を取ってるが間違いなくお母さんだ

「確かにクイントさんが会いに行くのは駄目だと言いましたよ、ですがその逆なら良いんですよ」

口を押さえ笑っている龍也さん

「お・・母・・・さん」

「クイント・・・」

色々言いたいことは合った、でもお母さんを見たらそれは全て何処かに飛んでいってしまった。涙がボロボロと流れ始める

「皆・・・」

お母さんも目に涙を浮かべている

「家族だけで話したいこともあるでしょう。私はジェイルの部屋で待ってますよ」

部屋から出て行こうとする龍也さんに

「あ・・あり・・がと・・う・・ござ・・い・・ます」

涙で途切れ途切れにしか話せないでも何とかお礼を言う事は出来た

「気にしなくて良いさ・・クイントさんに甘えれば良いだろう」

と振り返らず出て行った龍也さん

「うう・・お母さん・・お母さん・・・うわわあああんんっ！！！」

私は思いっきりお母さんに抱きつき涙を流した。その背中をお母さんが優しく撫でてくれた事がとても嬉しかった。どれくらい抱きついて泣いていたか判らないでも私とギン姉の目は涙で真っ赤になっていた、お父さんも涙を流して喜んでいた

「スバル？貴方は龍也の事が好き？」

泣きやみ、お母さんが居なくなってからの話をしていると、突然そういわれ驚きで動きが止まる

「おおお、お母さん。ななななな何言ってるのの？」

噛みながら言うとお母さんはやっぱりという顔をして微笑んでるし。
ギン姉は驚きといった表情だし、お父さんは

「アイツならスバルを任せれるな・・・」

と呟いてるし

「だってスバル貴方、龍也に助けられた時の話をしている時、物凄い笑顔だったわよ？」

「うっ・・・それは・・・」

指をつんつんとして俯く。

「だって・・・龍也さんは優しいし、格好良いし、頼りにもなるし」

私は真っ赤になりながら言うと、お母さん達はクスクスと笑ってる

「良いじゃない、人を好きになるのは良い事だわ。それにウカウカしてるとジェイルの娘達に龍也盗られちゃうわよ～」

「それは駄目っ！！」

思わず大きな声で反論する。何を言ったのか理解して顔が茹蛸みたいになる

「それなら頑張りなさい、ライバルは一杯居るけどきっとスバルなら大丈夫よ」

何故か自信たっぷりという感じでサムズアップするお母さんに

「良し、頑張れスバル。龍也を振り向かせろ、アイツは究極的な鈍感だが信頼に値する男だ」

フォローしてるのか、馬鹿にしてるのか判らないが真顔で言うお父さんに

「スバルにも恋が・・・私も頑張らないと・・・」

何故か物凄く慌てた様子で呟くギン姉と物凄く混沌(カオス)だった

「お母さん、部隊長とかなのはさんとかフェイトさんも居るけど大丈夫かな?」

最悪のライバル（恋仇）である人物の名を言うが

「大丈夫!私の娘なんだもん、きっと大丈夫よ」

笑顔で言うお母さん、ずっと蓋をしていた感情、私は龍也さんが好きなのだ・・・ティアには私は諦めると言っただが。お母さんと話をしてその感情は我慢出来なくなった。もういい立ち止まらない私は龍也さんが好きなんだ

「決めた・・絶対龍也さんを振り向かせて見せる」

そう宣言すると。お父さんとお母さんは嬉しそうに笑っていた。

そうだ関係ない・・・私だって龍也さんが好きなんだ、部隊長とかなのはさんとかフェイトさんも関係ない恋は自由なんだ。もう決め

た、私は絶対龍也さんを振り向かせるって。まずはティアに協力してもらおう。龍也さんは凄まじい鈍感だからきっと私の事も妹としてみてる、ならまずは其処から出ることが最優先だ。一人では無理だ、ならティアに協力してもらう。そうだそれが良いと決意を固めた頃

「ブルっ・・・何だ?何故か寒気がする」

談笑していたが突然寒気がし、体が震える

「風邪かい?気をつけなよ?君が倒れたらネクロは止められないのだから、そうだそれより私の娘と結婚する気は「フン!」ごふぅ」

何時もと同じく結婚するように言ったジェイル、左フックを叩き込み殴り飛ばす

「ふふふ。君は・・・凄まじい女・・・難なんだ・・・きっと凄まじい争・・・奪戦になる・・・だろう・・・ガク」

そう言い残し気絶したジェイルを見ながら。その言葉が当たらない事を願った

第３６話に続く

## 第３５話（後書き）

スカリエッティを出すとどうしてもギャグ色が強くなってしまいますね

次の話では更にギャグ色が強くなると思いますが、楽しんで読んで下されると嬉しいです

それでは失礼いたします

## 第３６話（前書き）

今回は少々・・大分ですか?ギャグ色を入れてみました
やっぱりスカリエッティを出すとギャグの要素が強くなってしまいますね

と言っても作者の感覚でのギャグなので、過度の期待は禁物です
それでは本編始まります・・

Ｐ・Ｓこれが終ったらナンバーズの設定を詳しく考えようと思っています

# 第３６話

第３６話

お母さんと一緒にスカリエッティさんの部屋に戻ると

「うん？お帰り」

「はっはっは、すまないが助けてくれない・・・がふ」

物凄くイイエガオでスカリエッティさんを殴りつけている龍也さんが居た

「何をしてるんだ？」

お父さんが驚きながら尋ねると

「何、簡単ですよ、この馬鹿の頭の中を親友として矯正してやろうと思いまして」

その隙にスカリエッティさん逃げようとするが。ガンッ！！目の前に足が振り下ろされる、それは固い金属の床を突き破り地面にめり込んでいる。それを見て顔が真っ青になるスカリエッティさんに

「何処に行くのかな～？話はまだ終わって無いぞ？」

この角度からが見えないがきっと素晴らしいエガオをしているだろう

「龍也・・謝るから許してくれないか？」

「駄目だ。一度死ね！！」

左フックで壁まで殴り飛ばされ

「がふっ」

うめき声を上げ気絶するスカリエッティさんに駆け寄る、茶髪のメイド服の服の少女。私と同じか少し下くらいだろうか？

「お父さん？大丈夫？」

何度か声を掛ける呻き声を上げながら目を覚まし、その少女に笑いながら

「はは、大丈夫だ。次は猫耳でも・・「フン！」がっ・・・」

最後まで言うことなく、龍也さんの投げた本が頭にめり込み再び気絶した。スカリエッティさんを無視して

「オットー、この馬鹿は無視して着替えてきなさい」

「似合わないかな？兄様」

メイド服の少女が首を傾げる、なんだろう物凄く小動物のような感じがする

「そういう服は着るものじゃないんだ、ちゃんとした奴を着てきなさい」

年上のお兄さんが諭すように言うと

「でもこれなら、兄様も落ちるってお父さんが・・・」

その言葉に顔を顰めながら気絶したスカリエッティさんを持ち上げ

「本気で・・一度死んで来い！」

窓の外へ投げ捨てた

「おおおおおおおおっ！？」

絶叫しながら落下していき、暫くするとボグッ！と言う凄まじく鈍い音があたりに広がった

「良し、悪は滅びた。オットー早く着替えてきなさい」

「あっうん。判った」

トテテと言う感じで歩き去ったオットーを見送ってから

「お茶でもしましょうか？」

何事も無い様に言うが

「あの・・スカリエッティ死んだんじゃ」

顔を青くしてギン姉が言うと、頭を振りながら

「・・残念だがアイツはあの程度じゃ死なない。私の砲撃をゼロ距

離で喰らってもピンピンしてる、化け物だぞ？」

「親友なんじゃないのか？」

その余りの言い方にお父さんが尋ねると

「親友ですよ。ですがそれはアイツが馬鹿をやったとき意外です。何処の世界に自分の娘に夜這いを進める親がいますか？」

「良し。判った。色々苦労させられてんだな」

その言葉に何が言いたいのか理解した、お父さんが慰めるとブツブツと文句を言い出した龍也さん。此れも見たことが無い様子だ

「龍也は弱さを見せない様にしてるの、自分が弱気になれば不安がる人が居るでしょ。だけど龍也も人間なのよ、弱気になることも泣きたくなる時もあるわ。そういう龍也の弱さを支えられないと龍也の傍に入られないわよ。スバル」

そう呟くように言うお母さんに

「うん」

と小さな声で返事を返した、その話の間も龍也さんはどんどん暗いオーラを発生させてる、よほど嫌な思い出なのだろうか？だが考えてみようスカリエッティさんの子供は皆女性、さっきも見たが皆美人だった・・・なんだろうこのモヤモヤとした感じは？そんな風に始めて感じる気持ちに戸惑っている間も龍也さんはブツブツとお父さんに愚痴を零してる。僅かだがその呟きが聞こえてくる

「判りますか・ゲンヤさん・・私だって男なんですよ?美人に抱きつかれたりすれば、緊張するんですよ、それが妹のはやてだって判ってても動揺してしまうんですよ・・・」

「判るな、譲ちゃんはお前にえらくご執着だからな。昔からだよな」

「それだけじゃ無いんです。最近何故かヴィータが大きくなって。以前にも増してべったりなんです。私は如何すれば?」

「とりあえず、止めてくれって言うのは如何だ?」

「涙目であたしが嫌いなのか?なんて言われればそんな事言えません」

物凄く消耗した声だ

「それは言えないな、うん、判る泣く女は無敵だからな」

肩をポンポンと叩いてる

「私は判りません、私は義手で隻眼ですよ?どうしてこんな男を好きになる人物が居るんです?」

「きっと。それはお前が優しいからだ、そうに違いない」

完全鬱モードで呟き続けている、なんだろう?物凄く可愛い?何時もは格好良いと言葉がピッタリな龍也さんだが、今は何か保護欲をいい具合に刺激してくる不思議な可愛さを持っていた

「あっそうだ、写真撮ろう」

お母さんと一緒に写真を撮ろうと思い、持ってきていたカメラで落ち込む龍也さんを写真に収める。だが此れが後に悲劇の引き金になる事をこの時の私は知らなかった

鬱モードが解除されると目の前に消耗したゲンヤさんが居た

「気にすんな・・・偶には・・愚痴りたいこともあるだろうし・・・」

相当長い間愚痴に付き合ってくれてのだろう、酷く消耗している

「あれ?兄様何してたの?」

グッドタイミングと言うべきか着替え終えたオットーが帰ってくるが

「・・・何だそれは・・」

「えっ!変かな?」

自分の服を見て首を傾げるオットー、似合ってはいる、似合って入るが

「何でゴスロリだ?」

「ウーノ姉が縫ってくれた、似合うからって」

上機嫌で笑っている、オットーは小柄だから怖いくらい似合っている

「一度ウーノと話してみるか・・・」

ウーノが一番ジェイルと付き合いが長い為、一番毒されている、つまり発想がジェイルと同じなのだ

「龍也さん、座ったら如何ですか？」

背後から底冷えする声が聞こえる、間違いなくスバルの声だ・・だが

（一瞬はやてに言われてるような気がした・・・）

席に付く私の隣にスバルとオットーが座っている。向かいには笑っている、クイントさんとゲンヤさんにギンガが居る

「貴方が僕達と違う戦闘機人？」

興味津々と言う感じだ

「まぁ・・そういう言い方は嫌いだけどね・・」

「僕も嫌いだよ、貴方とは気が合いそうだね」

にこやかに笑うオットーに

「私は貴方じゃなくて、スバルだよ」

「僕はオットー、宜しく」

お互いに微笑みながら自己紹介をしていると

「久しぶりだな、龍也」

上機嫌で赤い髪の少女がジェイルの部屋に入ってくる

「ノーヴェかお前も元気そうだな」

「はっ！当然だろ。所で父さんは何処だ」

居るはずのジェイルの姿が見えないので、辺りをキョロキョロ見回すノーヴェに

「あの馬鹿は窓の下だ」

割れた窓を指差し言うと

「成る程・・・また龍也を怒らせたわけね・・・所でこいつらは誰だ？」

スバル達を見て、好戦的な声で言うと

「こら！ノーヴェちゃん、そういう言葉使いは駄目だって、何度言えば判るの」

クイントさんに怒られ

「う・・・判ったよ。この人たちは誰ですか？此れで良いか？」

不機嫌に言う、どうやら間だノーヴェはクイントさんが苦手なようだ

「宜しい、この人達は私の娘のスバルとギンガと旦那のゲンヤさん

よ」

「・・へ～、宜しくとは言っとくよ」

見定めるように言う、ノーヴェに

「えっと、ノーヴェだよね？宜しく私はスバルだよ

手を出し握手しようとすると

「ニヤ・・ああ宜しく、スバル」

力一杯握り締めるノーヴェに負けじと握り返す、スバル暫くお互いに我慢比べをしていると

「くく、良いね、スバル気に入ったよ」

手を離し、肩をバンバンと叩き上機嫌なノーヴェに

「なんか仲良くできそうだね。私達」

同じく肩を叩き微笑むスバル。なにか妙な友情が芽生えたのだろう

「龍也、折角きたんだ、久しぶりに飯でも作ってくれよ」

何をしに来たのか思い出したようにノーヴェが言う

「うん？もうそんな時間か？」

時計を見ると１２時を過ぎている

「そうですね。私もお腹空きました」

スバルも空腹を訴える

「なら、皆呼んできてから何か作ろう?何が良い」

ノーヴェに尋ねると

「何でも良いぜ。龍也の料理はどれも美味いからな」

そういうのが一番難しいのだが。と思いつつ他のメンバーを呼びに行く為に訓練場に向かった・・・その様子を見てゲンヤさん達が笑っていた

訓練場に行くと、チンクとディードにセッテが居た、他のメンバーは休憩中の様で二人の訓練を見ている

「おし。早速呼びに行こうぜ」

訓練場に行こうとする、ノーヴェの服を掴み動きを止める

「なんだよ、早く行こうぜ」

「まぁ。待て私が居るのをチンク達は知らないのか?」

「知らないはずだ、知ってるならセッテがアンタに抱きついて離れないはずだ」

「・・・そんな人が居るの？」

セッテの事を知らないスバルが尋ねると

「ああ。一人居る、究極的な龍也至上主義者が、なんでも自分の気持ちを自覚したら止まらなくなったそうだ」

射抜くような黒い瞳で睨むスバル、何だろうフェイトに睨まれてるような気がする

「私は知らんぞ、そんな話」

私が首を傾げていると。コソコソと後ろの方で

「龍也さんって、本当に鈍感だね」

「全くだぜ、好きだって言ったことあるけど。冗談は止してくれって言われた」

「ノーヴェも好きなの？」

「当然だろ、優しくて強くて、あんないい男、他に居ないぜ」

「うん、そうだよね、頑張ろう、龍也さんは凄い鈍感だから」

「おう、お互いに頑張ろうぜ」

と何故か凄く意気投合していた。お互いにがっしりと握手をしていた、仲良くなるとは思っていたが、まさか此処まで早く仲良くなるとはと思いながらコートから以前使った仮面を取り出し、装着する

「これで模擬戦に乱入したら、驚くと思うか？」

その仮面を見て、スバルとノーヴェは

「・・龍也その仮面は無いぜ」

「・・・同感です」

辛口な評価だ、割と気に入ってるんだが・・・この仮面

「そうか？じゃあ如何すれば驚かせることが出来る？」

仮面を外し問いかける

「そうだな・・・アイツに頼んで後ろから・・・」

ぼそぼそと作戦会議をする。

「じゃあ、後ろからこれで・・・」

スバルが取り出したのはよく冷えたジュースの缶

「何処にあった？」

さっきまで持ってなかった、スバルに驚きながら尋ねると

「あそこですよ、ほら」

指差す方には自販機がある

「ノーヴェ、あんなのあったか？」

「つい最近設置したんだ、訓練すると喉が渇くからな」

そんな話をしていると。下のほうから

「あ～喉が渇いたよ・・・龍也？如何して・・モガモガ」

呼ぼうと思っていた少女がゆっくりと歩いてきて。私を見つけ同様し、大声を上げる前にノーヴェが口を押さえる

「セイン、良い所に来た。静かにこっちに来い」

「うん」

静かに隠れてる場所に来た、セインが隠れていたスバルを見つけ

「誰？」

見たことの無いスバルに驚きながら問いかけると

「あ、始めまして、スバルです」

「私はセイン宜しく」

お互い自己紹介を終えると、作戦を説明すると

「良いね、良いね、私のＩＳで龍也を地面に連れ込んで後ろからジュースの缶で驚かす良いね」

物凄く乗り気のセイン、元よりこういう悪戯が大好きなのだ、必ず乗ると計算していた

「じゃあ、やろうか」

皆が休憩に入り座り込んだところで計画を実行するが。ここで予想外の出来事があった

「そんな顔で睨まないで、お願い、怖いから」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

セインのＩＳディープダイバーは密接しないと使えないつまり私が抱きつくか抱きつかれる必要性がある。その事に気付いたノーヴェがセインを睨み、説明を受けたスバルも睨んでる、ぶっちゃけ超怖い

「もう駄目、怖い、ＩＳ発動」

その無言のプレッシャーに堪えれず、セインは私に抱きつき、地面の中に引きずり込んだ

「ふう、疲れました」

座り込み息を整える、ディードとセッテに

「腕を上げたな、姉は嬉しいぞ」

チンクが微笑みながら言う。その姿を見て笑っている。向かい側のイスに座っていたトーレ、ディエチの顔が一瞬驚きに染まる。しーとジャスチャーで口を押さえながら地面から私が姿を見せる。その背後には消耗したセインが居る、スバルとノーヴェからプレッシャーで精神が磨り減ったらしい。ゆっくりと気配を殺し手に持ったジュースの缶を三人の首に押し当てる

「「「きゃあああっ！」」」

その余りの冷たさに悲鳴を上げる、チンク、セッテ、ディード。そして怒りながら振り返る、おそらくセインの悪戯だと思ってるだろう

「セイン・・・八神？」

「セイン姉様・・・龍也様？」

「セインお姉様・・龍也兄様？」

驚き目が点の三人に

「クク、ずいぶん可愛らしい悲鳴だったな」

その言葉に真っ赤になりながら

「違うぞ！」

「違いますからね」

「びっくりしました・・・」

立ち上がり文句を言うが

「ははは、気にしなくても良いじゃないか。ククク、きゃあああっか。ははははは」

我慢していた笑いが遂に我慢出来ず声に出る

「笑うな！」

「笑わないでください」

「・・・・・／／／／／／／」

真っ赤で笑うなと言うチンクとセッテに恥ずかしくて声も出ないディード。

「クックック、久しぶりだな、チンク、セッテ、ディード」

笑いながら言うと怒るかと思えば

「ああ、そうだな、八神も元気そうだな、今日は如何したんだ？」

「龍也様、会いに来て下さったのですか？」

夢見る乙女のような表情でセッテが言う、記憶の中のセッテとは大分違う

「龍也兄様？どうして此処に・・・もしかして義手の調整ですか？」

三者三様の私が如何して此処に居るのかの予想を言うが

「残念だが、どれも外れだ、今日此処に来たのは・・・スバル来い」

上に居るスバルを呼び寄せる。軽やかに結構な高さから飛び降りすたっと着地する。大分運動神経が強化されたようだ

「誰だ？」

「女・・・龍也様の傍に・・・女が・・・」

「誰ですか？」

チンクとディードが誰かと尋ねてくる中。セッテだけは怖すぎる黒いオーラを発生させていた

「スバルと言ってな、クイントさんの娘さんだ。今日はちょっとクイントさんに会いに来たんだ」

「始めまして、スバルです」

自己紹介するスバルを見て

「成る程・・似ているな。私はチンクだ」

「同じ戦闘機人・・・良いですね、仲良く出来そうです。私はセッテです」

「始めまして、ディードです」

チンクはスバルを見て似ていると言い。セッテはオーラを解除し微

笑み。ディードは手を出し握手をしようとしてる

「ふむ。良かった馴染んでくれたようだ。そうそう、今から昼飯にしようと思うのだが何か食べたいものは？」

自己紹介をしてるスバル達を見ながら言う、結局自分ではメニューが浮かばなかったのが理由だ

「スパゲティが良いな」

「私はムニエルが食べたいですね」

「シチューかな？」

見事にバラバラなリクエストだが、全部作ればコース料理のようになる、あとデザートを付ければ完璧だ

「良し、決定だな」

メニューが決まり、皆で食堂に移動を始めた、スバルはどうやら完全に打ち明けた様で皆で仲良さげに話している、どうやら上手く馴染めたようだ。その様子に一安心しつつ食堂に向かって行った

第３７話に続く

## 第３７話（前書き）

お気に入りが１００を突破しさらには評価点も２００を越えました。
作者はとても嬉しいです。
これからも頑張って執筆して行きたいので宜しくお願いします

誤字脱字の報告と感想レビュー随時お待ちしています

# 第37話

第37話

食堂に全員集まっている、私とギン姉にお父さんとお母さんにノーヴェ達も居るがそれより気になったのは

「はっはっは、いやー死ぬかと思ったよ」

頭から血を流し、笑っているスカリエッティさんだ

「ドクター？頭から血が出てますよ？」

見た事の無い女性がハンカチを取り出し、手渡す

「はっはっは、有難うウーノ」

ハンカチを受け取り、血を拭うスカリエッティさん

「からかうから、悪りいんだよ」

ノーヴェが笑いながら言うと

「いや、私は本気だ、本気で龍也を義息子にしようと思って・・・・・龍也・・・包丁は無いぞ」

力説するスカリエッティさんの横の壁に包丁が突き刺さっている、厨房を見ると振り返らず投げたのだろう。後ろを向いたまま鍋をかき回す龍也さんの姿がある、青いエプロンを付け頭には黒のバンダ

ナを巻いている、髪が長いからその対策だろう

「たわけには丁度言い仕置きだろうよ・・次は闇に沈めてやろうか？」

振り返らず鍋を回し、味見をし納得と言いたげに頷きながら横目で睨む龍也さんに

「デアボリックエミッションは止めてくれ、あれは軽いトラウマだ」

冷や汗を流すスカリエッティさんに

「お父さん、水飲んだら？」

オットーがコップに入った水を手渡している中

「龍也。作りすぎじゃない？」

気になっていた事をセインが言う、私も気になっていたかなりの大きさの寸胴鍋、恐らくシチューが入っているだろうがその大きさは可也異常だ。背の高い龍也さんがギリギリ覗き込める大きさの鍋なのだから・・・

「そうか？此れくらいなら余裕だろ？人数も多いだし」

そう言うと何名かが顔を顰めながら

「判ってないですわ。美味しすぎるから食べ過ぎて、太ってしまうというのに・・・」

「龍也の料理が上手・・でも美味しすぎるから駄目」
先程訓練場で会った・・・ディエチとクアットロが俯きながら言う
「そうですね・・前のケーキの時も大変でしたし・・・・」
ウーノさんが俯きながら言う、恐らくかなり体重計に乗るのが怖い事態になったのだろう
「じゃあ、訓練頑張ればいいじゃねぇか」
「その通りです、お姉様方」
ノーヴェとセッテは訓練を頑張れというが
「その通りだな」
トーレさんがカップを置きながら言う、何か私達の回りには居ないタイプの美人だ
「大丈夫ですか?ウェンディ?」
椅子に座らず崩れ落ちている、ウェンディにディードが問いかけると
「だ、大丈夫っじゃないっす、幾ら龍也兄に突撃したからって酷いっす・・・」
足が痺れて動けないのだろう、ウェンディが言うと
「ほお。お前は又やったのか?姉が何度話してやれば判るんだ?八

神が優しいから怒らないが姉は別だぞ」

チンクさんが怖い笑みで迫る、どうやら龍也さんの言うとおり、常習犯らしい

「ごめんなさいっす、だから許して欲しいっす」

「駄目だな、姉と話をしよう」

はっ！一瞬なのはさんがお話しようって言ってるのが見えた、どうやらチンクさんのベクトルはなのはさんに似てるらしい、助けてと言う目で見るが皆視線をそらす味方はいないようだ。チンクさんが一歩前に進んだ時、救世主の一声が

「チンク、ディード、少し手伝ってくれないか？」

厨房から呼ぶ声がする、量が多いので一人では大変になったのだろう。手伝ってくれという龍也さんに

「むっ。、了解した、今行く」

「龍也兄様、今行きます」

呼ばれた二人が厨房に行く、その後ろでスッと微笑む龍也さん、どうやらウェンディを助ける為に呼んだらしい

「助かったっす～」

安堵を声を上げるウェンディの頭をトーレさんが掴む。

「どれ、では私が説教をしてやろう」

「あああああああっ！！」

無慈悲なトーレさんの言葉にウェンディが悲鳴を上げた

「チンクはスパゲティを炒めてくれ、ディードはムニエルを頼む」

頷いた二人を見ながら、デザートを考える

（アイス系か・・・それともゼリー・・いやプリンという線も良いな）

時間はある、ジェイルが作ったフリーザーなら。あっという間にどれも作れる故にどれを作るか迷う

（今日は暖かいな・・・ならば・・・・）

気温から何を作る決め。棚からチョコレートを取り出し。それを細かく砕きつつ、ナッツも砕いておく、生クリームと牛乳に砂糖を加え。バニラエッセンスを加え香り付けをする、最後に砕いたチョコとナッツを加え、フリーザーに入れる

メインを食べ終わる頃には即席アイスが出来るだろうと考え、シチューに火を入れる

「八神出来たぞ」

スパゲティはミートボールを入れた、少々脂っこい物だが。そこは加えるハーブや自家製のスパイスで若干辛めに仕上げ盛り付けてい

く。ディードも盛り付けに入っている。使う油やハーブに気をつけ、さっぱりとしつつ尚且つ旨みは逃がさないように自分で考えたレシピを渡し、ムニエルのほうは完全にディードに任せて見た、チンクは料理が上手なので特に問題は無い

「出来ました」

流石女の子というべきか・・盛り合わせに気をつけ見た目から食欲をそそる

「上手になったな」

頭を撫でると、顔を真っ赤にし俯いてしまう、ディード

（やはり嫌われてるのだろうか？）

見当違いのことを考えながら、全員の皿にシチューを盛り付け運んでいく、全員の前に並べ席に着く。正面にはゲンヤさんとジェイル両隣はスバルとノーヴェだ、視界の隅にはがっくりと項垂れる少女が2人。

「どうして、あそこでグーを出してしまったのです（っす）

ジャンケンで席を決めたらしいが。負けてしまった二人は可也遠くの方に座っているが自分ではどうしようもないので

「「頂きます」」

とりあえず目の前の料理を食べる事にした、ジェイル達も手を合わしている、やはりこういうことは大事だと思う。

「美味しい」

皆口々に美味しいと言いながら食べている、チンクとディードも、自分で作った料理の味に納得という表情をしている

「いや、しかし龍也は本当に料理が上手だ」

ジェイルは上機嫌に食べている、チンク達にはシャマルに渡した物と同じ物を渡している

「そうか？此れくらい誰でも作れるだろう？」

と言うと項垂れる、クアットロ、トーレ、ディエチ、ウェンディ、スバル、ノーヴェ。全員可也落ち込んでいる。教えてみたが全然上達しなかった者達だ、以外にオットーは料理上手でチンクよりは劣るが十分なレベルだし。ウーノ、セインはチンクと同レベルだが、味付けを自分好みにする為余り料理はしないと言うか、させて貰えないウーノは辛口でセインは肉料理を好む、やはり各人の好みに合わして作るべきだ、と思いながらシチューを口に運ぶ、

「ねぇ、龍也貴方の好みの女性ってどんなタイプ？」

クイントさんの突然の質問に慌て、シチューを喉に詰まらせる

「ごほっ！ゴホッ、何を言ってるんです」

スバルに手渡された水を飲み干し一息付くと気付く。私のコップは目の前にある、じゃあこのコップはと横をみる作戦成功と微笑むスバル、なのはにも以前こんな事をされた気がする。

「龍也・・・」

ノーヴェが暗く言う、怖いな・・・はやてを連想させる

「八神・・・」

「龍也兄」

「兄様」

「龍也様」

「龍也兄様」

もう怖いとしか言いようが無い、暗くどんよりとした空気が辺りを包む、クイントさん達が笑っている、成る程嵌められたと言う訳か質問に答えるしか逃げ道は無い・・・ジェイルが楽しそうに笑ってる、成る程こいつの差し金か、私はそう理解すると手加減無しのスフィアを顔面目掛け打ち込んだ

「げふっ・・・」

吹っ飛んだジェイルを無視して

「さっ、キビキビ吐きましょう。貴方の好みについて」

笑顔で言うクイントさんとすまなそうな顔のゲンヤさん、に興味津々と言う顔のウーノ達と黒のオーラのチンク達。逃げ道は無い

「今日は厄日か・・・」

私はそう呟いた・・・

「それでは。知り合いの中で外見が好みな人を三人上げてください」

デザートまで食べ終えたところで、クイントさんが切り出した

「クイントさん、勘弁して貰えませんか・・・駄目か・・・」

何とか答えず許して貰えないかと言うが、殺気が増大する、答えるしか命は無いようだ

「外見か・・私はそういうのは余り気にしないんだが。敢えて言うなら・・・」

考え込む・・知り合いの中・・・知り合いの中で好みと言えば

「ティアナと・・ノーヴェ・・其れに・・なのはか？」

自分たちの中ではノーヴェしか名前が出ずに落ち込むナンバーズだが。

「ティア、なんですか？」

まさか自分の相棒の名が出ると思わなかったスバルが尋ねてくる。

しかしスバル以外はティアナを知らず首を傾げてる

「ふん、ふん、此れは以外ね。なのはちゃんの名前が出るとはじゃあ理由は？」

楽しそうに笑うクイントさん、どうやら間だこれは続くらしい

「なのはと言うか三人共なんですが。放って置くと無茶しそうで気になるんですよ。そういえばスバルもですけど」

三人とも無茶というか自分の事を気にしない傾向があるので、見ていると不安になるのだ

「そのコメントはやはり、妹して見てますね・・・」

ウーノが言うと

「いや・・当然だろう?妹見たいじゃないか全員私より年下だし」

ナンバーズだけでなく、はやて達も私より年下。恋愛感情というより、妹を心配する兄の心情というのがピッタリだ

「ふむ・・・やはりその枠組みからでないと、龍也を振り向かせる事は難しいようだな」

何時の間にか復活した、ジェイルが冷静に分析する姿に本気で殺意を覚えると

「それじゃあ、一緒にいて楽しいのは誰?あっ!此れも三人ね」

間だこの吊るし上げは続くらしい

「・・・はやてとチンク・・・それにセッテ」

一緒にいて楽しいと思えるのはやはりダントツではやてだろう、一番長く一緒に居たわけだし。チンクはあれで知識欲が強くて色々聞いてくるし、セッテは何だろう?気が付いたら、傍に居て甘えてくるので、なんとなくはやてを連想させる

「ここで一番の強敵の名前が出たね」

「一番の強敵?誰だそれ」

「はやて部隊長だよ、一番龍也さん事知ってるし。可也のブラコンと言っても、従兄弟だから当て嵌らないかな?」

スバル達が後ろの方で情報を纏めてる

「やっぱ、はやてちゃん出てきたね~、じゃあ最後」

此れで終わるのかと思っていると

「もし彼女にするなら誰?この中でね」

ジーザス、最後の最後で絶体絶命の質問が切り出された、スバル達が興味津々と言う感じでこっちを見てる、出来れば逃げたいな

「答えないと駄目ですか?」

「勿論、答えないと駄目よ、もし答えなかったら・・・ふふどうなるかしら?」

逃げ道無し・・・ゲンヤさんとギンガ手を合わせてる。ジェイルは笑ってる、ウーノ達レコーダーをスタンバイ、下手なことを言えば

此れで脅されるがそんな事を言われても

「クイントさん流石にそれは無理ですよ、だって今までそんな事を考えたこと無いですから」

ピシッ音を立てて世界が止まる

「えっ、考えた事が無い？でもほら告白された事とかラブレター貰ったこと無い？」

記憶を探る・・・

「そんな事は今まで無かったですね・・」

龍也が知らないだけで、ラブレターとかは下駄箱に入れられていたが、その全てはやてによって処分＋出した人はやてによって脅迫される、つまりそういう恋愛事に疎いのははやての策略にがっちり捕まっているからだ

「成る程・・・予想が出来たな、龍也が恋愛に疎いのは全て譲ちゃんの策略に嵌ってるからだな」

はやてを良く知る、ゲンヤは気付いた。僅か１９歳で部隊を立ち上げた才能溢れる美女。寄って来る男は多いだろうだが、彼女の傍には龍也が居た、どんな良い男でも龍也と比べれば霞んで見える、妹として育った譲ちゃんがそうなのだ、他の女性も同じ発想だろう、だが譲ちゃんはえらく龍也に執着してる、つまり考えるは他の女が近寄るのを防ぐ事。恐らくラブレター等を出した人物は譲ちゃんによって排除されている（脅されてる）な

（恐ろしいな・・譲ちゃん）

概ねその予想が当たっていると確信し、そう思っている頃

「ああ～兄ちゃんに会いたいわ」

部隊長室で詰まらなそうに書類整理をするはやての姿があった、詰まらなそうだがその指は一度も止まることなく動き続けている

「そうや・・今日は兄ちゃんの布団に潜り込んだろ、それが良いな」

と怪しい計画を立てていた、ヴィヴィオは龍也の事をパパと呼び懐いてるが、寝るときはなのはやフェイトの部屋で眠っている。潜り込んでも大丈夫だ

「夜が楽しみやね」

ふふふふと怪しい笑みを浮かべながらも完璧に書類整理をしていた

最後の質問は該当なしと結果に終わり皆詰まらなそうだが解散した、スバルとギンガはノーヴェ達に案内されアジトを回り

ゲンヤさんとクイントさんは散歩に出かけた・・・と言ってもアジト内部だが・・私はジェイルと共に研究室に居た

「龍也、ジオガディスには、遭遇したか？」

「いや・・無いな、ＬＶ３には遭遇したが。ジオガディスには会っていない、何を考えてるんだ。あいつは私を狙ってくると思ってい

たのだが」

ジオガディスは黒騎士としては何度か対峙している、私を上回る剣技に動きを拘束する呪術、ハッキリ言って負け越している。だが私を殺すことなくその場を去っている、言うには

「お前は神王ではない。アイツは何処に居るんだ」

と言い消える、ではアイツの言う神王とは何なのだ?

「神王・・かつてジオガディスを封印した、歴代最強の王、聖王の称号と共に神の名を冠した。最強の王」

「判る事は無いのか?情報が少なすぎる」

ジェイルと共に天雷の書が安置された。遺跡に調べに行って判ったことは、少しだけだ

「金色の鎧に、赤き不死鳥の如き炎の翼。その身に纏いし虹色の魔力・・彼の者は聖王であると同時に神である・・か」

遺跡の刻まれた、古代文字に刻まれたのはその一文のみだ

「ふむ、蘇ったジオガディスがそう言うんだ、神王も又蘇ると言う事なのだろうか?」

「判らない・・だが私がやることは決まっている。私は今度こそアイツを倒す、全力でな・・」

「ふむ・・あれを使う気か、私は余りオススメ出来ないな、確かに

強力だが体に掛かる負担が大きいぞ」

それは私も承知してるが。倒しきるにはあれを使うしかないという結論に至った

「判ってる。だがジオガディスを倒すには、あれしかない無いのはお前も判ってるだろう」

前に起動した時は体が付いていけず、直ぐに解除されたが今なら問題ないだろう。あれから体を鍛え続けていたのだから

「ああ、だがその為にはやることがある。義手の強化だ」

ジェイルが言うにはその膨大な魔力に今の義手では耐える事が出来ず、崩壊するとの事

「2日で完成させてみせる」

頼もしい笑顔のジェイルを信じ、義手をジェイルに預けた、そしてそろそろ帰る為、スバル達と合流する為に部屋を出た

「龍也さん？義手どうしたんです？」

帰る為に待っていたスバル達の所に行くと、真っ先にスバルが気付いた、どうやらチンク達は居ないようだ

「うん、調子が悪いからな、調整を頼んだんだ」

「そうなんですか。でも片腕で不便じゃないんですか？」

ギンガが言うが

「急に隻腕になった訳じゃない、ジェイルに会うまではずっと隻腕だったからな。もう慣れてるさ」

慣れている確かにその通りだ、最初こそ苦戦したが、今では隻腕でもなんら問題は無い

「今日は楽しかったぜ。クイントにも会えたしな」

見送りの為にアジトの入り口まで、来ているクイントさんを見ながらゲンヤさんが笑う

「ふふ、私も楽しかったわ。今度会うときは皆で又暮らしましょう？あの家で」

「ああ、そうだな、また家族四人で暮らそうぜ、クイント」

「ふふ、さあ四人とは限らないかもね」

怪しく笑いながら私の顔を見る、クイントさんにスバルは何故か下を向く。

「？どういう意味ですか」

首を傾げると、全員深い溜め息

「苦労するわね、でも大丈夫諦めなければ、きっと叶うわ」

スバルの肩を叩きながらクイントさんが笑う、スバルも頷き握り拳

を作る、何だろう打倒なのはでも誓ったのか？と思いながら鍵を取り出しゲートにする

「名残惜しくなるので、そろそろ行きましょう」

「そうだな・・・クイント又会おうぜ」

「「お母さんも元気でね」」

「勿論よ、ゲンヤさんもスバル達も元気でね」

クイントさんに笑顔で見送られゲートを潜った

「龍也、今日は本当に楽しかった、礼を言うぜ」

家の前で笑うゲンヤさんとギンガ。二人ともとても楽しそうだ

「喜んでもらえて何よりですよ、ただゼストに会えなかったの残念でしたが」

なんでもネクロの基地を見つけ、ルーテシアとメガーヌ共に出ていたので会えなかったのが残念だったが

「生きてるんだ、またいつでも会えるぜ。それより早く帰らないと不味くないか？譲ちゃんが怒るぜ？」

時刻はもう夕方、大分永く居過ぎた様だ

「そうですね、それじゃあ失礼します」

スバルと共にベヒーモスが泊めてある場所に行くが、此処で一つの問題気付く、現在私は隻腕バイクの運転は出来ない

「・・・・スバル任した」

考えた結果スバルに運転させることにしたが

「無理ですよ、私免許持って無いし。バイクなんて運転したことありません」

「大丈夫だ。ベヒーモスがサポートしてくれるから」

『お任せをスバル様、私が完璧にサポートして見せます』

チカチカとスピードメーターを光らせる、ベヒーモスを見て観念したようにバイクに乗るスバル

「まさか私がタンデムシートに乗るとはな」

後ろのタンデムシートに乗ろうとすると

「えええええっ！、龍也さんが後ろ乗るんですか？」

動揺ＭＡＸでスバルが絶叫する

「仕方ないだろう？サイドカーなんて出せば、ベヒーモスのサポートがあっても大変だからな」

後ろに乗る、スバルは真っ赤になりながらベヒーモスを走らせた

思っていたより帰るのに時間がかかり、辺りはもう真っ暗だ。一応はやてには連絡を入れているので怒ることは無いだろう・・多分そんな事を思っているとき消耗＋真っ赤でスバルが言う、

「何か凄く疲れました・・・」

「そうだな・・途中でバランスを崩して抱きついたのは謝ろう、すまない」

途中で不覚にもバランスを崩し、咄嗟に抱きついてしまってからずっとこの調子だ

「いえ・・そういう訳じゃないんですが、ちょっと・・その恥ずかしくて」

俯きながら言うスバル。突然抱きつかれれば、恥ずかしくもなるし動揺もする

「すまない」

「いや、もう気にしてないんで良いです、それより私明日早いんでもう寝ますね」

と早口に捲くし立て、スバルは駆け足で消えた

「嫌われたか・・な」

と呟き私も自室に戻った

自分とティアの部屋に戻ると

「お帰り、遅かったわね」

何時もの本を読みながらティアが待っていた

「うん、ちょっと。龍也さんの義手職人の所まで行ってたから」

「そう、どんな人だった？」

「なんて言うか面白い人だったよ」

スカリエッティさんはとても面白い人だった、そうだ言うことがあったんだ

「ねえ、ティア。私前龍也さんは諦めるって言ったじゃない？」

「そう言ってたわね」

読んでいた本から視線を外し、こっちを見るティアに

「私決めたんだ。諦めない振り向かせて見せるって」

「どういう心境の変化？なのはさん達には勝てないから諦めるんじゃなかったの？」

「そのつもりだったんだけど・・やっぱり無理みたいなんだ。私は龍也さんが好きだから」

「良いんじゃない？私も好きだし。とりあえず二人で攻めれば落とせると思うけど？」

と笑うティアに見せる物がある

「でね、龍也さんがお父さんと話してる時、急に落ち込み始めてね。その様子を写真に取ったんだ」

落ち込んでいる龍也さんの写真をティアの前に置く

「！？スバル・・・此れ貰って良い？」

写真を見て顔色を変えながら言うティア、それは判る何時も堂々としている、龍也さんが俯いて何かを言う姿は凄まじい破壊力がある。多分なのはさん達に見せても同様の反応を見せるだろう

「良いよ、まだあるし」

ノーヴェ達にも現像し分けた、この写真はティアに上げる為に持って来たものだ。ティアはいそいそとその写真しまう

「それでさ。義手職人さんがね、龍也さんの好きなタイプについて聞いたんだ」

本当に聞いたのはお母さんだが、引き金を引いたのはスカリエッティさんだ。ティアが座っていた椅子から落ちる

「・・・なんて言ってた？」

床の上から言う、見た事の無いティアだ

「その職人さんの娘さんたちは省くけど、ティアと私と、なのはさんと部隊長だって」

「・・・本当？」

自分の名前が出た事に驚きながら尋ね返してくるティアに

「本当だよ。だから教えてあげようと思って」

立ち上がり手を差し伸べてくる

「頑張りましょう、何としても龍也さんを落としましょう」

その手を握り返しながら

「うん」

返事を返した。スバルティアナチームが結成した頃

「ブルッ！何だ急に寒気が・・・」

直感的に身の危険を感じた、龍也は

「早く寝よう、風邪かもしれない」

素早く布団に入り眠りに付いた、スカリエッティの言う女難はまだ始まったばかりだ

おまけ

簡易呼称表

| | |
|---|---|
| ウーノ | 龍也 |
| ドゥーエ | 龍也様 |
| トーレ | 八神様 |
| チンク | 八神 |
| クアットロ | 八神 |
| セイン | 八神兄様 |
| ディエチ | 龍也 |
| ノーヴェ | 龍也 |
| ウェンディ | 龍也 |
| オットー | 龍也兄 |
| ディード | 兄様 |
| セッテ | 龍也兄様 |
| | 龍也様 |

| | |
|---|---|
| ジェイル | |
| ドクター | |
| 父さん | |
| 父さん | |
| 父さん | |
| 父さん | |
| 父様 | |
| 父さん | |
| 父さん | |
| 父さん | |
| お父さん | |
| お父さん | |
| お父さん | |
| お父さん | |

第３８話に続く

## 第３８話（前書き）

少し投稿の間隔があいてしまったので、今回は2話連続投稿で行きたいと思います
今回のお話は一声で言えばティアナ無双ですね。

と言っても戦闘ではなく会話ですが・・
これからも夜天の守護者を宜しくお願いします

# 第３８話

第３８話

皆眠り付いた頃、私は兄ちゃんの部屋に向かい移動していた

「こういう時、部隊長は便利やな」

部隊長は全部屋のスペアキーを持っている、つまりどの部屋にも進入自由だ、職権乱用？んなもん知らん！！！

「ふふふ、兄ちゃんの部屋へ、ゴー」

ゆっくりと兄ちゃんの部屋に足を向けた

カチャッ、ギィと音を立てて扉が開く

「兄ちゃ～ん、起きてますかぁ？」

一応声を掛けてから部屋に入る、この際鍵を掛けておくのを忘れない。

「寝とるな」

よく眠ってるようで、規則正しい寝息を立てている

「あれ？兄ちゃん義手してへんわ」

布団に潜り込もうとして気付く、左腕の義手が無い

「調整でもして貰ってるかな?」

職人さんの所に行くと、連絡があったので恐らくそうだろう

「ふぁああ、眠なってきた、兄ちゃん。おやすみ」

布団に潜り込み、兄ちゃんに確り抱きついて眠る。きっと朝になったら、兄ちゃんは慌てるだろうと思い眠り付いた

「体が動かない・・・・」

何時もの様に夜明け前に目を覚まし、起き上がろうとするが体が動かない。が金縛りとかではなく

「はやてか・・・」

布団の中で実にいい笑顔で眠りについている、普段なら脱出可能だが今は義手が無いく振りほどくことが出来ない

「ううん、すう～、すう」

一瞬起きるかと思ったが、再び規則正しい寝息を立てる

「しかし・・如何した物か」

確りとはやてに拘束されており、動くことは出来ない、しかも可也密着されているので恥ずかしい

「本当にどうすれば、兄離れしてくれるんだ？」

切にそう思った、その間も確りと抱きつかれ脱出不能、しかも顔が近くなってきている、妙に顔が赤い此処で気付いた

「・・・・起きてるな？」

寝たふりをしている事に気付いた、おかしいと思った。段々力が強くなってるし、顔が私の顔に近づいている。嫌な予感だらけだ

「・・・・なんでバレたんや？」

目を開くどうやら大分前からおきていたようだ

「バレルだろう？私の顔にはやての顔が近づいてきてる」

もう目と鼻の先まではやての顔が来ている、もう少し気付くのが遅かったら。私のアイデンティティの崩壊の危機を迎えていただろう

「ふふ。兄ちゃん気付いても遅いと思うで？」

「？」

はやての言葉の意味が判らず首を傾げる

「兄ちゃん片手でどうやって私から離れる気や？」

そうだった、脱出できない状況だった

「ふふふふ、兄ちゃんの唇頂きや」

「・・・サッ」

首を動かしはやてを回避する。再びはやて接近又回避する、苛々とした表情浮かべながら

「いい加減、私の物になったらどうや？」

「何処の世界に妹に欲情する兄が居る！」

アイデンティティの崩壊を防ぐ為に必死に回避する。何度かそのやり取りを行うと

「・・・ちッ、今日は諦めるわ」

抱きつきを止め、自室に戻っていくはやてだが去り際に

「唇は無理やったけど、ほっぺは貰ったで？」

と微笑み消える。鏡を見る右の頬にキスされた後があった

「・・・・本当如何すれば良いんだ？」

この呟きは誰にも聞かれること無く宙に消えていった

食堂に向かいって行く途中で黒のコートが視界に入る

「旦那、おはよう御座います」

「うん？ヴァイスかおはよう」

右目の切り傷の所為で怖そうに見えるが。話してみれば穏やかでとても優しいのだ

「旦那？義手はどうしたんすっか？」

左腕の袖がユラユラと揺れている

「調子が悪いんでな、調整を頼んだんだ」

六課管理局で旦那が隻腕という話は有名で、今は義手をしているが隻腕でも負け知らず・・本当この人は人間か？

「でも隻腕で不便じゃないですか？」

「割と問題ないな。元々隻腕で何年かは生活してたんだからな」

その言葉には妙な説得力がある、と思いながら旦那と共に食堂に行く

「旦那、俺が旦那の分も持ってくんで、席お願いしますわ」

隻腕の旦那では多少不安なので自分が持っていくと言うと、頷き席を探しに行った旦那と判れメニューを決め、二人分のトレーを持ち旦那を探す

「こっちだ」

旦那の周りには誰も居ない。対外の人は恐れ多いとか言って。距離を取るがその行動は俺から見れば、唯の馬鹿にしか見えない

「すいませんね、ちょい混んでたんで」

二人分のトレーを置きながら言うと。

「気にしなくて良い。それより私の分までありがとう」

律儀だねぇ、真面目で仕事も速く、尚且つ強い。以前隊長陣全員と模擬戦をやっていたがほぼノーダメージで勝利。英雄って言うのも納得だよなぁ、食事をしながらそんな事を思っていると

「お父さん、ここ良いですか？」

うん？声のした方を見る、そこにはライトニングのエリオとキャロが居た。そりゃそうだな、旦那と合い席するなんて、慣れてる人じゃないと絶対に無理だもんな。俺も最初怖かったし

「エリオとキャロか、別に良いぞ、座りなさい」

笑顔で座るように促す

「はい、お父さん」

エリオとキャロは旦那の事をお父さんって言う、確かに包容力もあって優しいからその呼び名も納得だな

「・・・お父さん？義手は如何したんです？」

キャロが揺れる左袖に気付いたのか尋ねている

「うん？ああ。今調整中でな、暫くは隻腕だな」

食事は既に終えたのか紅茶を飲みながら微笑んでいる

「大丈夫なんですか？」

何時ものように可也の量の入った、食器の中身と格闘しながらエリオが言うが

「問題ないぞ、慣れてるからな」

人の良い笑顔だなと思っていると。

「兄貴、此処座るぞ」

向かい側に座る、ヴィータさん、話は聞いていたから知ってるが、可也美人になったなぁ、

「兄貴・・義手如何したんだ？」

やっぱ気付くなぁ、まぁヴィータさんも旦那にぞっこんだし。直ぐに判るわな

「調整中だよ、ヴィータ」

「二日も片手で大丈夫なのか？」

心配そうに言うヴィータさん、本当この人は旦那が好きなんだねと思ってると

「パパ～、おはよう」

とてとてと可愛らしい足音を立ててヴィヴィオが走ってくる。後ろからなのはさんにフェイトさん、ティアナにスバルも来ている、開いてる席があるのに態々奥まで来るか。本当旦那は愛されてるねぇ

「パパ！手如何したの？」

風に揺れる袖を見て慌てて、ヴィヴィオが言うと

「調子が悪くてお医者さんに見て貰ってるんだよ」

心配そうなヴィヴィオの頭を撫でる旦那、こうしてみると本当に親子みたいだな

「龍也、おはよう」

「ああ、おはよう。フェイト」

膝の上にヴィヴィオを乗せながら挨拶をしている、ヴィヴィオは旦那の膝の上で笑顔で食事中だ、直ぐに隻腕に気付くが、なのはさん達は義手の調整中だと気付いたのか、その事は尋ねなかった、大き目の机は既に大分埋まってきている。両手に花どころか花に埋もれてるって感じだな

「じゃ、旦那、俺は失礼しますわ」

旦那と自分の空のトレーを持ち立ち上がる、周りの男性局員の視線が痛くなってきたのが理由だ。

「うん？そうか。態々ありがとうな」
律儀に礼を言う旦那に
「気にしないでくださいよ、旦那」
と笑い俺は食堂を後にした

「龍也さん、昨日はどうも」
斜め向かいのスバルが席に座るなり、そう笑う
「いや。礼を言うのは此方だな、ゲンヤさんと話せて中々楽しかったよ」
クイントさんのあれさえ無ければ、実に有意義な時間だっただろう
「兄貴よ、その職人の所に義手預けてきたんだろ？どうやって帰って来たんだ？」
ベヒーモスで出かけたのは皆知っている、隻腕で運転は出来ると聞いていたが、それはあくまで戦闘時の話。それに隻腕でバイクに乗っていたら確実に止められる。それではどうやって帰って来たのか？皆其処が気になっているようだ
「私もそれ聞きたいなぁ～」
隣からはやての声が聞こえ、驚きながら横を見る。何時の間にかヴァイスが座っていた席に座り、食事をしている

「何時の間に・・・」

驚きながらフェイトが言う。確かについさっきまでは居なかった。それが突然現れれば驚くだろう

「リィンも居ますよ～」

何時の間にか肩にリィンが座り込んでいる。全然気付かなかった

「まぁ、気にしない、気にしない、それでどうやって帰って来たんや？」

笑ってるが誤魔化しは通用しないだろう、だから此処は

「スバルに運転させたが？」

ピシッと音を立てて世界が凍る、龍也は気付いていません。スバル顔を引き攣らせる

「スバルってバイクの免許持ってた？」

「持ってないです・・・・」

なのは詰め寄られ、俯きながら言うスバルを見て

「いや、なのはあれは私悪かったんだ。だからスバルを怒らないでやって欲しい」

「パパ悪い事したの？」

膝の上のヴィヴィオが首を傾げながら、尋ねてくる

「少しだけな・・帰ってくるのに必要だったんだ。悪いとは思ったがな」

頭を撫でる。・・・少し無計画だったな

「悪い事だと思いますけど。良いじゃないですか?隊長たちを心配するから、お父さんが急いで帰ろうとしたんだと思います」

エリオとキャロがフォローに入ってくれる、いやそう思ったが、結局遅くなったしな

「良し、初犯やから見逃すわ、でも次は無いで・・・女の子の運転するバイクの後ろに乗ったなんて。私は許さへん」

コクコクと頷く、なのは、フェイト、ヴィータ

「怒ってたのは其処か!」

無免許で運転させたことに怒っていると思っていたが、怒っていたのはどうやら別に理由らしい

「当たり前やろ?なぁ?」

コクコクと頷く、なのは、フェイト、ヴィータどうやら同様の理由で怒っていたらしい

「お父さんは鈍感ですね」

キャロに言われるが訳が判らず首を傾げる、スバルは少々肩身の狭い思いをしただろう

「所でスバル、義手職人さんってどんな人だった？」

「えっと、凄く面白い人ですたよ、何が楽しいのか良く判らないですけど、笑ってました」

その言葉に顔を引き攣らせる面々。ヴィヴィオは食事を終えリィンと共に。ザフィーラに乗って消えた。不安だがザフィーラが一緒なら大丈夫だろう・・そろそろ現実逃避は止めるとするか

「・・スバル・・あいつが可愛そうだ・・一応親友なのだが」

あれは優秀だ、だが優秀すぎて少し変なのだ。その頃アジトでジェイルはくしゃみをしていた

「兄ちゃんが其処まで言う人・・・名前は何て言うん？」

まいった・・やつの名を出すわけにはいかんし・・・偽名を聞いていた事を思い出した

「クロウリードアルベルンだ」

何でも魔導師がなんとか言っていたが、詳しくは思い出せないな

「クロウリード変わった名前だね。どんな人なの」

興味を持ったのかフェイトが尋ねてくる

「自分の娘達と静かに暮らしてるな。人嫌いだから山奥に住んでるが」

「へ～、ん娘？龍也その人の娘さんって何人？」

娘達という単語に目の色が変わるものが５名、指を折りながら

「１２人だな確か」

１２人と言う言葉にスバルが

「あの私１１人しか会ってないですが？」

「一人は管理局の隊員だ、ドゥーエ、聞いた事無いか？」

はやてが何かを考え込む素振りを見せながら

「確か可也美人で有名な人やね・・・それより今から大切な話が有ります」

首を傾げる面々、かという私も首を傾げてるが

「兄ちゃんは今隻腕です。なので義手の調整が終わるまでの２日間の今日と明日、一日ずつ順番で兄ちゃんの世話係を決めたいと思います」

「はいっ？」

はやての言うことが判らず、首を傾げている中

「「「「「「じゃんけん、ぽん！」」」」」」

はやて、ヴィータ、なのは、フェイト、スバル、ティアナ達はジャンケンを開始していた

「私の意見は完全無視なんだな」

「ははは・・・」

「お父さん・・・頑張ってください」

乾いた笑い声のエリオと頑張れとキャロに言われ。空を仰いでいる内に勝者は決まった

「龍也さん、どうぞ」

「ありがとう」

勝者は以外にもティアナだった。にこやかに笑うティアナから渡された紅茶を飲む

「むっ・・美味い」

紅茶には煩いと思う私だが、その私から見てもこの紅茶は美味い

「少し勉強してみたんですよ」

微笑むティアナ、私が部屋に戻る際、食堂からシュミレーションルームへ引きずられて行くスバルを見た、無事だと良いが

「無理だと思いますよ？」

私の考えを読んだのか、ティアナが言う

「根拠は？」

「龍也さんの友達の１２の娘さんの辺りから。やばいと思いましたよ？」

確かにその件から、はやて達は不機嫌そうだったが

「そうなのか・・・唯の知り合いなのだがなぁ」

そう呟くと、ティアナは溜め息をつきながら

「もう少し、女心を知ってください」

と言われたが意味が判らなず、首を傾げると

「・・まぁ良いです、とりあえず。義手の調整が終わるまで、ゆっくりすれば良いですよ」

にこやかに笑うティアナから視線を外す為、本を開くティアナは嫌いでは無い、むしろ好みに分類されるが、こう面と向かっていると緊張すると思いながら、大して頭にも入っていない本を捲った

（スバルの言ってた事は本当みたいね）

昨晩スバルが言っていたが、龍也さんは色恋沙汰に極度に鈍い、それは部隊長が原因だそうだが、その所為でなのはさんたち含め、龍也さん知り合いの女性は友達以上恋人未満の状態になりやすいらしい。そして今この状況でもかなりテンパッて居るのが一目瞭然だ

「龍也さん？本逆ですよ？」

本が逆向きなのだ。それでは読むことは出来ない。その事を指摘すると、バタバタと本をひっくり返し。正しい向きで読み始めているが可也動揺しているが見に見えて判る

「そう言えば・・昨日スバルから聞いたんですよ」

更に動揺させる為のカードを切ることにした

「・・・何を？」

可也間が入ったが尋ね返してくる龍也さんに、微笑みながら

「好みのタイプで私の名前を出したそうですね？」

ガタンッ！椅子から落下＋ゆっくりと後退していく。少しでも距離を取ろうとしている、チラッと見えたが顔は真っ赤になっている

「クスクス、如何して逃げるんです？」

一歩進む。一歩下がる一進一退だが下がる龍也さんには限界がある。どんと壁にぶつかり後退不能になる

「・・・来ないでくれると有り難いんだが？」

真っ赤で来ないで欲しいというが

「嫌ですねぇ、こんなに真っ赤な龍也さんを見る、機会は早々ありませんから」

こんな機会滅多に無いのだ、手放す気は無い

「・・・頼んでも駄目か？」

「無理ですね・・彼氏になってくれるなら話は別ですが」

彼氏になってくれるなら、接近を止めても良いがそれ以外には今の私は靡かない

「冗談だよな・・」

「結構本気ですけど？」

顔を引き攣らせる龍也さん、隻腕隻眼の男を好きになる物好きは居ないと言っていたが、そんな事は無い優しく、強い龍也さんを好きになる人物は多いだろう。動きが硬直する龍也さんに

「えいっ！」

座り込み確りと抱きつく

「！？！？！？」

真っ赤になる龍也さん、完全に仮面が剥がれたらしく、完全に硬直

しているそしてその耳元で

「私は本気ですよ？貴方は闇の中に居た私を、光の中まで引き上げてくれた。私はあの時からずっと好きだったんです」

離れまいと力を込め抱きつく

「・・・・・・・・」

無言だが気にすることではない

「そして再び再会出来た時、私は凄く嬉しかった。私ずっと貴方のことを想っていたのだから・・・」

「・・・・・・」

さっきから何の反応も無い事を不信に思うが

「貴方はずっと私の目標で憧れだった、もう一度言います、私ティアナランスターは八神龍也が好きです。この世の誰よりも」

生まれて初めての告白に、私も顔が紅くなるが最後まで言うことは出来た。

「・・・・・・・・」

龍也さんは何の反応も無い、そこで

「龍也さん？」

揺すって見ると

「きゅう・・・」

変な悲鳴を上げ龍也さんは倒れこんでしまった

「気絶しちゃってる・・折角告白したのに返事が貰えなかった・・」

その事は残念だが此れで良いのかもしれない、今は此れで良いんだ

「少しでも貴方の心に私が残ります様に・・・」

気絶している、龍也さんの頬に軽く触れるだけのキスをする

「私は諦めないですよ?絶対に・・・」

気絶している龍也さんに言う。この恋だけは絶対に諦めるわけにはいかない。

「絶対に振り向かせて見せるんだから」

気絶した龍也さんを膝枕しながらそう思う。お兄ちゃんが死んで悲しみの中に居た私に光と目標をくれた。龍也さんの事が、ずっと好きだったのだ、ライバルが居るからって諦めるわけにはいかないのだから

「ふふ、此れは此れで良いかな?」

目を回している龍也さんの髪を撫でながら私は微笑んでいた。この時私は気付かなかった。昔龍也さんに貰ったアクセサリーの石が淡

い光を帯び始めていたことに。

第３９話へ続く

## 第３９話（前書き）

連続投稿2話目です、今回はフェイトメインになると思います

しかし・・なのはは動かしにくいです・・多分大分先までなのはメインのお話は無いですね

それでは本編始まります

# 第３９話

第３９話

「うん？何時の間に眠っていたんだ？」

寝た記憶が無い、その前に何をやっていたかが丸々抜けている

「あれ？起きたんですか？」

キッチンから料理を運びながら紅いエプロンのティアナがやってくる

「ティアナ？どうして・・・いや思いだした、はやてが世話係が同とか言っていたな」

「覚えてないんですか？」

少し残念という表情でティアナが言うが

「何か忘れてるか？」

思い出せないので首を傾げるしか出来ないが

「・・・少し残念ですけど良いです、私は楽しかったですし・・・」

ぼそりと呟いているがよく聞こえない、辺りを見るともう真っ暗だ

「もう夜だと！私は何時間寝てたんだ？」

私は昼少し前に部屋に戻って居た筈なのだが・・

「疲れてたんじゃないんですか。よく眠ってましたから。それよりご飯作ったんで、一緒に食べましょうよ」

「ああ、貰うとするよ」

立ち上がり、席に着き並べられた料理を見る、良く煮てあるであろうロールキャベツにスープにパンだが、ティアナは地球の料理を知らない筈だがと思っていると

「これを見つけまして」

そう言って差し出されたのは。私が書いていたレシピの冊子だ

「細かく書いてありますね」

ビッシリと細かく分量やポイントが書かれている

「そうか・・それを見たのなら納得だな。それより折角の料理だ冷める前に頂こう」

ロールキャベツを一口分斬り、口に運ぶ

「うん、美味い」

確り味が染みており実に美味い

「そうですか、ありがとうございます」

ティアナが若干顔を赤らめながら、食事を進めている

「うん、とても美味しいよ」

誰かに作って貰った、料理と言うのはとても美味しいと思える、

「美味しかったよ、ありがとう」

美味しいのとこういうのが久しぶりで。思っていたより早く食べ終わってしまった

「いえ・・・初めて作ったので其処まで喜んで貰えて嬉しいですよ」

食器の片づけを終え部屋に戻ると言うティアナに

「良かったら、持って行くといい」

レシピの本を手渡す

「えっでもこれは龍也さんがいるんじゃ」

「私はもう全部覚えているからな。持って行ってくれて構わないよ」

「それじゃあ、貰っておきます、ありがとうございます」

レシピの本を持ったティアナを見送ると急に眠くなり

「・・・眠るとするか・・・」

今日は何だか寝てばっかりだと思いながらも眠りに落ちた

「変じゃないよね？」

朝の訓練を終えてから、龍也に会いに行く為。鏡の前で何度も髪型を確認する

「龍也？起きてる？」

扉越しに声を掛ける

「フェイトか？鍵は空いてるから、入って来てくれて構わないぞ」

扉を開き初めて龍也の部屋に入る

「何の様だ？」

天雷の書を開きながら問いかけてくる

「いや・・・ほら・・あの世話係だから」

「ああそれか・・別にそんなことしなくても良いのだがな、とりあえず座るといい」

一瞬難しい顔をするが、それを直ぐに消し、微笑みながら席に座るように促されたので、向かい合う様に座る

「王、お客人ですか？」

トレーにカップを乗せセレスが姿を見せる

「ああ、フェイトが来てるんだ、悪いがもう一つ頼んでも良いか？」

「お任せを」

微笑み再びキッチンに戻る、セレスを見ながら

「何してたの？」

「守護騎士の状態を見てたんだが・・・多分修復は間に合わないだろうな」

難しい顔で天雷の書を見せられる、修復率は４０％弱と記されている

「時間が掛かるんだね」

「そうだな、大分破損が酷い様だな」

自分の方に戻しながら笑っていると

「どうぞ、お待たせしました」

カップに入った紅茶を置き、龍也の隣の席に座るセレス

「どうですか？守護騎士達は」

「難しい所だな・・・アイギナなら間に合うと思うが」

守護騎士の事で話し込んでいるので若干蚊帳の外だ

「っと・・すまない、折角尋ねて来てくれてのに。話し込んでいては失礼だな」

天雷の書を閉じ謝る龍也

「あっ、ううん気にしないで、連絡も無しに尋ねてきた、私が悪いから」

慌てて言うと、ふと気付く

「そうだ。龍也まだご飯食べてないよね、私が作るから」

なんとなく気不味くなり。キッチンに逃げるように駆け込んだ

「何なんだ？」

慌ててキッチンに行った、フェイトに訳が判らずセレスを見ると

「私も存じかねますね」

案外この二人は似ているのかも知れない。天然と言う嫌な所で

「ご馳走様でした」

食べ終わり、食べ物に感謝して手を合わせる。セレスは食事の必要は無いのでと、無限書庫に行って来ると言い消えた

「フェイト料理上手になったな」

本当にそう思う、昔料理を教えてと言われ教えた事があったが、酷い結果だった

「・・昔のことは言わないで、お願いだから・・」

結構なトラウマになっているようだ、アルフが食べて痙攣したしなぁ

「だから・・思い出せないで」

私の考えを読んだ!?思っていたよりフェイトは鋭くなっていたらしい。昔は天然という感じだったが・・・

「もう昔の話はいいから!!」

真っ赤で怒鳴るフェイト、予想以上に鋭い・・

「判った。それで如何するんだ?」

休暇扱いでやることが無い。昨日何かあった気がするが、思い出せないので保留（思い出せばきっと良くない事になる）

「そうだよね・・私も休暇扱いだし」

どうやら世話係になった者も、強制的に休暇状態らしい。お互い頭を抱え込む

「そうだっ!今本局にお兄ちゃんが居るから。会いに行こう」

その提案について考える、クロノはいい奴だが、下手をすれば凶暴化の危険性がある（シスコン化）だがまだ直接会ってないと考えると

「そうだな、クロノにはまだ顔を見せてなかったしな、行くとしよう」

クロノに会いに行く事にし、フェイトの車で本局へ向かった

「・・疲れた・・・」

「ははは」

「大丈夫か？」

本局の用意された部屋で深くソファーに座り込み、私はそう呟いた。
本局に付いた途端若い魔導師からの質問攻めに会ったのが理由だ

「・・久しぶりだな、クロノ。元気だったか？」

「その台詞は、もう少し自分が元気な時に言うべきだな。今にも死にそうな顔をしているぞ？」

そう苦笑するクロノ、事実で精神的にも体力的にも可也消耗している

「龍也、はい紅茶」

手渡された紅茶を飲み一息つく

「ありがとう。フェイト、落ち着いた」

礼を言うと俯いてしまう。フェイトに首を傾げると

「クク、本当に相変わらずだな」
その様子を見て、楽しそうに笑っているクロノ始めて見る表情だ
「お兄ちゃん、楽しそうだね」
フェイトも始めて見るのか驚きと言う感じで言うが
「そうかな。自分では判らないが」
他愛の無い世間話をしていると
「そう言えば龍也は僕が結婚したのを知ってるか？」
思い出した様にクロノが結婚したと言うが
「知ってるさ・・とういうか私も居たからな式場に、良い結婚式だったよ」
その言葉に驚きと言う表情のフェイト、式場にははやて達も居たが、気付かれなかったし
「何処に居たんだ？」
式場に居たと言う言葉に、驚きの表情を浮かべ問いかけて来る
「バルコニーの影だな、それに控え室の前に花束があっただろう？それは私が置いた物だ」
気付かれないように慎重に気配を殺しながら、控え室の前に花を置

いたしな。

「あの花は君か、驚いたぞ。差出人の名前も無い花束だったからな」

思い出したように笑うクロノに

「クク、真っ赤だったなぁ。実に面白い顔をしていたな」

真っ赤だったが、エィミィの手を絶対に放すものかという決意が見て取れた。それだけでも見に行った価値があった

「龍也、じゃあブーケトスの時も居た?」

「ブーケトス?・・いや居なかったな。郊外のネクロの気配を感じたからな。倒しに行ったしな」

「・・そうなんだ。良かったよ・・・」

ほーっと息を吐くフェイトの姿に、興味が沸き

「クロノ、ブーケトスはどんな有様だったんだ?」

顔を引き攣らせながら

「はやて、なのは、フェイト、ヴィータの乱戦。全員デバイスまで取り出し大騒ぎになった。結果で言えばはやてが取ったよ。その時に兄ちゃんは生きてるに違いない。だからこれで・・・ふふふと笑っていた」

聞かなければよかったと思った。そして見つからなくて良かったと

思った

「・・・クロノ。どうやったらはやては兄離れしてくれると思う？」

そう問題は其処なのだ、どうやらはやては可也本気のようだ

「かなり難しいじゃないのか？はやてのブラコンはそう簡単には治らないと思う」

「奇遇だな。私もそう思う」

クロノと話し合うが具体的な解決策は出ない・・・いや出てこない、出て来る筈は無い。シスコン馬鹿＋天然では同ひっくり返ろうがプラスにはならない。マイナスの二条が良いとこだろう

「真っ直ぐに兄離れしたらどうだって言うのは？」

フェイトも考えていたのか提案を出すが

「無理だ、一度言った。そしたら女として迫ると言われたので。逆効果だ」

あの時のはやては凄く怖かった、本気で身の危険を感じた

「・・・考えても出ないな。時を待とう。それしかない」

結果論で言えば諦めて再び、世間話に戻る事にした

「所で龍也」

「うん？何だ」

フェイトと話していたら、クロノに話しかけられ。クロノの方を見る

「君をハラオウン家に迎える話があるといったら如何する？フェイトの夫として」

ぶふぅ。紅茶を吐き出すフェイト。可也動揺したようだ

「ごほっ、ごほっ。お兄ちゃん何言ってるの？」

「フェイトは龍也が嫌いか？」

「嫌いじゃないけど・・でも・・・」

真っ赤なフェイトを見て言う。その顔は真剣で嘘や冗談ではないようだが

「何で急にそんな話になったのか聞きたいのだが？」

真っ赤で俯き、指をちょんちょんとしているフェイトは無視の方向で行くことにした

「良く考えてみて欲しい、フェイトは美人だな。それで寄って来る男は多い訳だが」

此処で一旦話を切り、紅茶を口に含むクロノ。フェイトはまだ思考停止中である

「信頼に値する男はそうは居ない。だが龍也お前なら信頼に値する

と思うが？」

「信頼に値する？私が、とんでもないよ、私は臆病ではやて達から逃げた男だぞ？とても信頼には値しないな」

自信を嘲るように笑うが

「確かにそれも一つの事実だが、もう一つの真実があるだろう？」

知っているという訳か

「もう一つの真実って何？お兄ちゃん？」

思考停止から復帰したフェイトが尋ねると

「龍也はフェイト達をネクロから護っていたんだ。思い出してみろ、黒騎士の出現場所と仕事でフェイト達が出かける場所。その全てが一致しているんだ。つまりフェイト達を襲撃しようとしていた、ネクロを龍也が先回りして倒していたんだよ」

フェイトも気付いたようだった

「やれやれだ」

肩を竦める出来ればこの事は知られたくなかったのだが

「その事を踏まえて君を信頼すると言うのだが・・如何だろう？」

意地の悪い笑みを浮かべているクロノに

「残念だが無いな。フェイトには私よりもっと相応しい男が現れるさ」

その言葉に顔を顰めるクロノ

「僕は君ならフェイトを任せれると言っているのだが？」

射抜くような視線で、言うクロノだが・・・

「これ以上何も言うことは無いな・・そろそろ失礼させてもらう。フェイト行くぞ」

「えっ、うん。お兄ちゃん又ね」

黙り込んでいた、フェイトを連れ部屋から出ていく

「ふぅ、損な役回りだよ。本当に・・・」

クロノの最後の呟きは私の耳には届かなかった

少し悲しかったかもしれない、あの時頷いて欲しかったと思う私がいる。車を運転させながらそう思った。龍也が先程から黙り込んで流れ行く景色を見ている、私も少し暗い気持ちだから

「あの・・・龍也少し行きたい所があるんだけど良いかな？」

「好きにすれば良い」

それだけ言い再び黙り込んだ龍也は怖い、何か苛々している感じが

する。そんな事を感じながら私はあの場所へ車を走らせた

「着いたよ」

着いたのは私が良く来る、小さな丘の上。迷ったり悲しい時に良く来ていた場所だ

「綺麗な場所だ」

夕日が差し込み、その場所は幻想的な美しさを持っている

「私のお気に入りの場所なんだ」

ベンチに座り

「ほら、龍也も座ったら?」

笑顔で座るように促す、すると無言で座る龍也、暫くお互い無言で時が流れる

「・・・私は別にフェイトが、嫌いな訳じゃない」

静かに口を開いた龍也

「えっ・・・」

聞いた事のない龍也の気持ちに驚く

「だがそれはやはり恋愛感情ではない、あくまで友達としての物だから、クロノの話を受け入れる事は出来なかった」

「そう・・何だ」

私は間違いなく龍也の事を一人の男性として好きだろう、だが龍也は違うと言う私はずっと好きだった、だから龍也が生きていると信じてこれたの。だが龍也は違うと言うでもそれは仕方ないと思う、はやてと私達は同い年だ。だから妹して見ていると言うのは判っていた

「すまない、だが此れが私の気持ちであることには間違いは無い」

「ううん、良いよ別に、判ってた事だから。それより遅くなるから帰ろうか？」

再び車に乗り隊舎に向かう。その間お互いに無言だった

（どうすれば、この気持ちは伝わるだろう）

私は車を走らせながらそう思う。だけど答えは出てこない

（お兄ちゃんの馬鹿。折角楽しい時間だと思えたのに）

大好きな兄と龍也と一緒に居る時間は、とても楽しい物の筈だったのだが・・ここでふと気付く何故突然お兄ちゃんがそんな話をしたかだ

（どうしてお兄ちゃんは急にそんな話をしたんだ？）

クロノは慎重な人物だ、何の考えも無しにあんな話を切り出す理由が無い

（考えろ、お兄ちゃんは何を言いたかったんだ？）

運転しながら必死にクロノの真意を考える

（言ってくれないと、判らないよ・・・はっ！そうか。そういう事か）

クロノが言いたかった事を理解する。理解した頃には隊舎はもう目と鼻の先だった

「今日はすまなかったな、不快な気持ちにさせてしまった」

隊舎裏の駐車場でそう言い部屋に帰ろうとする、龍也に

「待って、私は貴方に言わないといけない事がある」

ここでこのまま龍也を部屋に返してしまえば、二度と私の恋が叶うことは無くなる。それは嫌だ・・だから

「私はあなたのことが好きです」

その言葉に顔を顰める龍也

「私はずっと好きだった、それはずっと変わることはありません。貴方が私の事を妹としてみるなら。私は其処から出て貴方を振り向かせるまでです。私フェイトＴハラオウンは八神龍也が好きなんです」

その言葉に同様を見せる龍也に

「今は返事は良いです。だけどいつか貴方を振り向かせて見せますよ」」

龍也の横を通り直ぎざまに軽く抱きつき、直ぐに離れる

「何を・・・」

真っ赤になって動揺する、龍也を見て微笑む

「クスクス、私からの決意の証と言うことで、それじゃあ」

恥ずかしくてその場から逃げるように駆け出した。そうだ諦めない私は龍也が好き、お兄ちゃんは素直に気持ちを伝えないと判らないと教えてくれたんだ。最初からそう言ってくれれば良かったのに。私はそう思いながら部屋に戻った

「私は如何すれば良いんだろうな?」

駐車場に一人残された、龍也の呟きに答える者は居なかった

第４０話に続く

## 第３９話（後書き）

次回はナンバーズ＋ルーテシア、アギトコンビが登場します
さてさて次回はどうなるでしょう?楽しみにしていてくだされば作者は嬉しいです

## 第４０話（前書き）

今回の投稿で第４０話です。
読んで下さった、方々にはただただ感謝です

前の投稿の原作キャラの変更点の最後の方に書きました
龍也の技のアイデア募集中です
格好良い技のアイデアお待ちしています

# 第４０話

第４０話

薄暗い研究室の中で

「ふふふ。出来た。出来たぞっ！」

目の前の義手を前に私はハイになっていた。持てる知識をフル活用し完成した。新しい龍也の義手は、龍也の全開の魔力にも耐えれるように改良し、握力や腕力と言う問題も強化し。元の腕と寸分変わらぬ性能を持たせることに成功した

「やはり。私は天才だ。はっはっは」

と上機嫌に笑っていると

「ドクター？何笑ってるの？」

「ジェイル、何笑ってんだ？」

心配そうなルーテシアと若干引き気味のアギトに

「見たまえ、龍也の新しい義手が完成したのだ」

完成した義手を見せると

「じゃあ。龍也此処に来るの？」

龍也に会えなかったので、落ち込み気味だった、ルーテシアが笑うが

「残念だが、龍也を此処に来ない。チンク達に頼んで届けてもらおうと思ってるのだが・・・」

その言葉に沈んだ表情を見せる。ルーテシアだがアギトが

「そんなら、あたし達も行くぜ。兄にこれも見せたいし」

そういうとアギトが光に包まれ、ルーテシアと同じくらいの背になる。リィンフォース?の、アウトフレームとやら解析し。アギトに組み込んだがどうやら成功のようだ

「じゃあ、ルーテシアとアギトにも六課に行って貰おう。だが私のことはクロウリードアルベルンだぞ?そこを間違えるなよ」

下手に私の名を出させる訳には行かないので念を押しておく

「判ってる・・・」

「そこまで、あたしは馬鹿じゃないぞ」

笑うルーテシアと不機嫌なアギトに義手を渡す

「チンクとノーヴェ、それとオットーとディードと一緒に行くんだよ?」

笑顔のルーテシアとアギトを見送り、

「眠い・・・少し眠るか・・」

龍也が帰ってから今まで休憩も無しで、義手の調整に集中していた為。完成したと一安心すると急激に眠気が襲って来た。研究机の椅子に座り込み白衣を布団代わりに眠りに落ちた。ジェイルは眠りに落ちた頃

「解放してくれ、頼むから」

私ははやての食堂の椅子にバインドで拘束されていた。解放するように頼むが

「嫌や、一緒にご飯食べよっ！」

笑顔で二人分のトレーを持ち微笑む、はやて

「一緒に食べるのは良い、ならばこのバインドを解いてくれないか？」

バインドで縛れていたら食事が出来ないので解放するように言うが

「大丈夫や、ほらッ。あーん」

箸で一口分に切ったおかずを持ち、口を開けるようにはやてが迫る

「いや、バインドを外してくれれば、一人で食べれるのだが？」

「あ～ん」

私の言葉を完全無視し、なお接近するはやてに、観念し口を開く

「ふふふ、楽しいわぁ」

本当に楽しそうに笑い、再び

「あ～ん」

私には逃げ道が無いことを悟った

「ふふふ、凄い楽しかったわぁ」

可也時間を掛け、食事が終わると、私はやっとバインドから解放された

「・・・そうか」

「なんや。兄ちゃんはこんな可愛い妹にあ～んして貰って、嬉しくないんか」

不機嫌そうになった、はやてが言うが

「そうじゃないが・・・凄く疲れた」

周りの隊員の目が痛い、又かという表情を浮かべている。完璧だと思われていたはやてが、実は重度のブラコンであると知ったときは皆目を丸くしていた

「はやてちゃん」

「はやて」

「「部隊長・・・」」

更に後方のなのは達が非常に怖い、なのは達が近づこうとすると

「すまないが、下がってくれ」

「ごめんね、皆それ以上近づかないで」

シグナムとシャマルに妨害され。なお不機嫌化が進む

「兄貴、朝飯美味いな」

ヴィータは隣で食事をしており、超ご機嫌だ。そんな空気の中私は

「早く、義手が完成しないかな・・」

と思った。このままでは私のアイデンティティは完全に破壊される、何者でもないはやてとヴィータによって、それを回避するには早く義手が完成するのを祈るしかなかった

「此処か・・・」

六課の隊舎前で、隊舎を見上げながら私呟いた、可也大きいなそれが見た感想だった

「此処に龍也が居んのか」

同じようなことを考えているだろう、ノーヴェも隊舎をみている

「早く行こうよ、兄様とスバルに会いたい」

二日前にあったスバルは中々面白い人物で、妹の何人かは非常に気に入っている

「龍也兄様」

ディードが笑いながら、八神の事を呼んでいる

「チンク、早く行こう？」

ルーテシアは待ちきれないと言いたげに、私の服の裾を掴み引っ張る

「そうそう、チンク達は兄に会ったけど、あたしとルールーは違うんだ、だから早く行こうぜ」

「ああ、そうだな。早く届けないと八神も不便だからな」

皆を引き連れ、隊舎の方へ歩き出した

「中は綺麗なんだね」

「そうみたいですね」

キョロキョロとオットーとディードが辺りを見回している。

「余りキョロキョロするなよ」

「恥ずかしいから、落ち着いてろ。ルーテシアを見習え」

ノーヴェが言う先程から落ち着きの無い、オットー、ディードと違い。静かにしているルーテシアを見習えと言って、椅子に座ると

「チンク姉、私達は此処で待ってるよ」

ノーヴェに面倒を見るのを任せ、私は受付に歩いて行った

「すまないが、八神龍也を呼んで欲しい」

受付嬢は一瞬、驚きの表情を浮かべるが

「アポイトメントは在りますか」

確か来る前に会いに行くと連絡を入れることだったな

「・・いや。無いんだが・・」

失態だった、来る前にちゃんと連絡を入れて置くべきだった

「そうでしたら、後日またお越しください」

「いや・・それは困るんだが、アルベルンが来たとだけ伝えてくれないか?それで判ると思うんだが・・」

此処で帰るわけには行かないので粘っている

「どうしたよ?」

揉めていることが気になったのか、一人の男が歩いてくる

「ヴァイス陸曹、この人達が八神中将に会いたいと言っているのですが」

説明を受けると、人の良い笑顔でヴァイスと呼ばれた男は

「何。お宅ら旦那のファンとか？」

「いや・・そうじゃないんだが。父さんに言われて八神の義手を届けに来たのだが・・・」

「旦那の義手？・・ああ成る程、アルベルンさんね」

八神から話を聞いていたのか、判ったと言う表情のヴァイスが

「この人らは旦那のお客さんだ。俺が案内するからよ、旦那が今何処に居るか教えてくれよ」

「えっと・・・今はミーティグルームですね、皆さんそこに集合しているみたいです」

「ＯＫ。ありがとう」

何処に居るのか調べると

「えっと・・・アルベルンさんで良いのか？」

名前がわからず困っているような素振りを見せる、ヴァイスに

「私はチンク、であっちが私の妹のノーヴェ、ウェンディにオット

ーと知り合いのルーテシアとアギトだ」

少し離れている所に座っている、ノーヴェ達を指差しながら言うと

「判った、チンクさんにノーヴェちゃん達ね、今旦那の所に案内するよ」

ノーヴェ達を共にヴァイスに案内されながら、通路を進んでいくと

「ほれ、此処に旦那とおっかない旦那の妹が居るよ」

からかって居るのかと思うがその目は真剣だ、スバルの話は本当のようだ

「おお、スバルに聞いてるぞ、ブラコンだって」

ノーヴェがスバルから聞いたとおりに言うと

「それは言うな！殺されるぞ！」

どうやら、それは禁句のようだ

「そんなに危険なんですか？」

若干の青褪めたディードが言うと

「やばいなんてもんじゃないからな。気をつけなよ？」

心配そうに言い歩き去った、ヴァイスを見てから、ミーティングルームに入る

「あんなぁ、なのはちゃん達に言うけど、兄ちゃんは私達のや、手出すな！！」

「そうだそうだ」

「龍也さんは物じゃないんだよ！」

「その通りだよ！はやて！」

４人の女性が言い争いをしていた、その部屋の隅で

「お兄様、何とかなりませんか？」

アギトと同じくユニゾンデバイスであろう、少女が八神に言うが

「無理だな、今の私の状況を見ろ・・・チンク達が如何して此処に？」

色とりどりのバインドに拘束され、疲れた表情を浮かべる八神と視線が合うと、驚きながら言う八神の声を聞いて、言い争っていた女性たちが此方を見る

「・・・兄ちゃんの知り合いか？」

黒い視線に射抜かれる、凄まじいプレッシャーだ。オットーとディードは顔が青い

「ああ、アルベルンの娘さんだよ」

と笑うと

「・・・違う、私も居る」

「あたしも居るぜ」

何時の間にか八神の前に移動した、ルーテシアとアギトが笑ってる

「ルーテシアとアギトか元気そうだな」

バインドに拘束されまま笑ってる、

「どうして？バインドされてるの」

聞きたかった事を言うと

「いや。私もそれを聞きたいよ。如何してバインドされてるんだ？」

どうやら八神も自分が拘束されてる、理由が判らないようだ

「はやて、バインドを解いてくれ無いか？チンク達が硬直している」

いや違う・・そうじゃない。バインドされてるお前に驚いているじゃなく。目の前の女達の視線が怖くて動けないんだ

「そうやね・・」

バインドが解除された立ち上がると

「ほら、立ってないで座ると良い」

全然その殺気に気づいてないのか、何の気なしに座るように言われ、
椅子に腰掛けた

「はやて、こっちから、チンク、ノーヴェ、オットー、ディードに
ルーテシアとアギトだ」

「判った、私ははやてや、始めましてやな」

「ああ、此方こそ始めまして」

チンク達とはやて達がお互いに自己紹介していると

「リィンです」

「アギトだ」

リィンとアギトも自己紹介をしていると

「右」

「左」

何かお互いに右か左と言うと、二人同時にアウトフレーム化し

「リィンが右です」

「じゃあ、あたしは左で良い」

何故か左右別れ、背中にぶら下がる。リィンとアギト

「指定席は落ち着きますぅ～」

「納得だ、あたしも落ち着くよ」

何か協定が出来たようだと、思っていると

「はやて、うん仲良く出来そうだ」

「そうやね」

チンク達もお互いに握手をし、穏やかな空気に包まれている、喧嘩にならなくて良かったと思っていると

「僕は龍也の事を兄様って呼んでるの」

「へ～、どうして？」

なのはとオットーが話し込んでいる

「お父さんがね、お兄さんみたいな人だよ。って言ってから」

どうやらお互いに私の呼び名について話してるようだ

「リィンはお兄様です、アギトちゃんは？」

「私は兄だな、ルールーは龍也って呼んでるよな」

「うん」

隣の席でクッキーを食べ笑っている、ルーテシア

「へ～、じゃあ、ノーヴェは？」

「私は龍也だな、フェイトは？」

「私も龍也って呼んでるよ」

お互いに話していると、どうやら一つの結果に至ったようだ

「兄ちゃん、この人ら良い人や」

笑顔で言うはやて、チンク達も同様だ

「それなら、良いがな、所で如何して此処に居るんだ？」

思い出したようにルーテシアが

「龍也の新しい義手を持って来たの」

背負っていた鞄から義手を取り出し机の上に置く、ルーテシア

「おー、此れが兄ちゃんの新しい義手か。チンクさんのお父さんが作ったんやろ？凄いなあ本物そっくりや」

はやてが義手を持ちながら言うと

「当たり前ですよ？お父さんが作ったのですから」

微笑みながらディードが言うと

「お前も何か手伝ったのか？」

ヴィータが余りに自信満々に言うので手伝ったのか？と問いかけると

「当然ですよ、龍也兄様の義手の調整を良く手伝っていましたから

「へ～そうなのか」

ヴィータが感心という表情で言うと

「それより、兄ちゃん。早く義手を付けたらどうや」

そうだなと思い、義手を付ける為に一回部屋から出ようとすると

「八神、悪いが此処で服を脱いでくれ、微調整をしないといけないんだ」

チンクに呼び止められる、はやて達は若干興奮気味だ

「ここ・・・で上着を脱げと？」

部屋の中、男１人女１２人、流石にそれは無いだろう

「「「気にしない」」」

全員気にしないと言うので、嫌々上着を脱ぐ、ルーテシア、リィン、アギトはお互いに手で目を塞いでいる

「お～」

はやてが歓声を上げる、物凄く恥ずかしいのだが・・・

「我慢しろ、直ぐ終わる」

チンクも若干顔が紅い、部屋の隅で

「やっぱり、龍也は体鍛えてるね」

「龍也兄様・・・凄いです」

「／／／／／／兄様凄い」

「レイジングハート、写真取れないかな？」

『出来ますよ、マスター』

「兄貴・・・」

物凄く怖い、身の危険を感じる

「よし、じゃあ行くぞ。少しビリッと来るが我慢しろよ」

ジェイルの義手は見かけは完全に人の腕だが、中身は金属で生身の体と義手の間機械の接続部があり、そこに疑似神経を繋げる、際静電気に似た刺激がするのだ

「行くぞ・・1・2・3」

チンクが神経を繋ぐ為の金具を回す。その瞬間ビリィと静電気が走る

「痛いな・・・」

この感覚だけは何度やってもなれないと思う

「我慢しろ、それで感じはどうだ？」

手を閉じたり、開いたりして感覚を確かめる

「良い具合だ。前よりずっと良い」

脱いだ上着を再び着込む、その際に聞こえた、落胆の声は気のせいだと思いたい

「当然だな、アクチュエータやモータとジェネレーターを強力な物に交換したのだからな」

この感じなら問題なく戦闘も可能だろう

「感覚を確かめる為に模擬戦でもやるか？」

こうして調整の後は感覚を確かめる為に模擬戦をするのが良い

「頼んでも良いか？」

チンク達がどれ程レベルアップしたのか気になるので。頼むことにする

「任せろ、私とディードは準備はしてある」

ノーヴェが好戦的な色を瞳に浮かべながら笑う

「お願いするよ」

座っていた椅子から立ち、コートを着込む。ノーヴェは拳を使う近接型、ディードは剣を使うから、模擬戦相手には丁度良い

「はやて、シュレーションルームを使うが良いか？」

「うん、ええで、その代わり私達も見に行くでな」

はやて達も見ると言うので、全員で演習場へ移動した

第４１話に続く

## 第４０話（後書き）

次回は久しぶりの戦闘描写です、色々と考えてやって見ましたが余り自信はありません。
戦闘描写のアドバイス、感想、そして技のアイデア常時お待ちしています
それでは次回まで少しの時間お別れです。
これからも本作を宜しくお願いいたします

## 第４１話（前書き）

今回はノーヴェとの模擬戦です。
そして新たにオリジナルデバイスが登場します。
上手く戦闘描写が出来ているかは判りませんが、お楽しみいただけると作者は嬉しいです、それでは本編始まります

# 第４１話

第４１話

「スバル達は一回訓練を止めて、上がって来て」

なのはさんに呼ばれ、一度訓練を止めてなのがさんたちが居る所にいく。すると

「スバル、元気そうだな」

居ないはずのチンクさんに

「スバル」

手を上げるオットーに

「楽しみだね」

ルーテシアが居た、知らない組みは沈黙している

「チンクさん。オットー何してるの？」

動揺しながら言うと

「八神の義手を届けにきてな。そのまま機動テストと言う訳だ」

冷静に返事を返す、チンクさん

「スバルも見ると良いよ？兄様が模擬戦をするから」
楽しそうに演習場を見る、オットー
「ルーテシアちゃん、ジュースどうぞですぅ」
「ありがとう」
リィンがルーテシアにジュースを渡し、何かとてもリラックスしている
「なのはさん？この人達は？」
エリオがなのはさんに尋ねに行った
「アルベルンさんの娘さんだって。それで今から新しい義手のテストをやるらしいんだ。ほら出て来たよ」
先程まで私達が訓練していた場所に、龍也さんが姿を見せる。その向かい側に
「ノーヴェにディードだ」
やる気満々という感じで腕を振り回すノーヴェに。目を閉じ集中している、ディード
「それじゃあ、始め」
部隊長の模擬戦開始の言葉と同時にノーヴェが駆け出した

「ディード、私はから先に行くぜ？」

龍也の貰ったデバイスを握り締め、龍也を見る、何時もと同じ雰囲気を受ける

「構いませんよ、どの道順番ですし」

そう言い、笑い後ろに下がったディードを見てから、意識を集中する、最高の状態で無ければ直ぐ負ける、それほど力の差が在るのだ、なら最後まで気を抜か無い事だ

「それじゃあ、始め」

はやての開始の合図と同時に私は駆け出した。

「フェンリル、セットアップ！」

距離を詰めながらフェリルを起動させる、これは龍也から譲り受けた大切な物だ。濃紺のバリアジャケットに、獣を思わす装飾が施されたガントレット、足の鎧の踵にはローラーがある、此れならエアライナーも問題なく駆ける事が出来る。接近しながら先手必勝と

「喰らえ」

右手で正拳を繰り出す。パシっ！

「なっ！」

渾身の力を込めた、拳は左手で軽々受け止められた

「良い調子だ、ノーヴェの一撃を止めれるか」

どうやら、腕の具合を確かめる為に動かなかったようだ

「龍也！本気で行くぜ！」

これなら遠慮はいらない、全力で立ち向かうまでだ

「良いだろう、全力を持って私を打倒して見せろ！」

その言葉と同時に駆け出してくる、その手には天雷の書がある

「セットアップ」

稲妻と共に騎士甲冑を生成する、黒の鎧に杖だがこれはフェイクだ

「モード、ブレイカー起動」

騎士甲冑が光り、再び変化する。黒の民族衣装の様な物に、両肩に狼の紋章が施された肩当に、胸部と足に展開された黒の鎧、両手は大型の黒いガントレット、本気みたいだな

「おおおっ！」

雄たけびと共に正拳を繰り出してくる、こっちも負けじと

「おらぁっ！」

正拳を繰り出しお互いの拳がぶつかり合う、鈍い音が響く

「はあっ！」

即座に体を反転させて、回し蹴りを放つが

「甘い！」

軽く受け止められ、逆に足を掴まれる

「はああっ！」

気合と共にビルに向かい投げられる、このままでは大ダメージを受けるのは間違いないが

「エアライナー！！」

黄色の道を空に作り、その上を駆ける

「ちっ！そう簡単には一撃取れないな」

エアライナーの上から、龍也目掛け

「オラァっ！！」

手加減無しの踵落しを叩き込む

「ふん」

両手をクロスさせ簡単に止められる、そこでニヤリと笑う龍也の顔が見える

「ゼロ距離取ったぞ！」

肩当がスライドし、其処からスフィアが見える。反射的にガードする

「クラススフィア！」

両肩から散弾のようなスフィアが、連続で放たれる。

「ぐうっ！」

手加減されていたのか、それともガード出来た分なのか、ダメージは思ったより少ない、吹っ飛ばされながらそう感じていると

「はあああっ！」

追撃に接近して来る、このままじゃ次の攻撃で私は戦闘不能になる。まだ負ける訳にはいかない

「カートリッジロード」

着地と共にカートリッジを消費し。両手に冷気を集める

「氷狼撃！」

「玄武剛弾！」

ズドンッ！！！

お互いの拳が凄まじい轟音を立ててぶつかる、そのままお互いに

「「はあっ！（喰らえっ！」」

ガンッ！！！

膝蹴りを放ち再び凄まじい追突音がする

「ふんっ！（おりゃあっ！）」

ドガッ！！！

体を反転させながらお互いに肘打ちを放つが、それも又お互いに相殺される、そのまま後方に飛び体制を立て直す

「やるな」

握り拳を作りながら言う龍也だが・・・

「まだ本気じゃないくせによく言うぜ！」

まだあっちは本気じゃない。まだ上がある

「本気で勝負しろ！じゃなきゃ意味が無い！」

本気の龍也に勝つ、それが私の目標だ、今の手加減された状態じゃ意味が無い

「良いだろう・・・後悔するなよ？」

気配が変わる、冷たく鋭い視線だ。体が震える怖いだが・・・それ

でこそ戦う意味がある

「はっ！、今日こそあんたを超えるぜ！龍也！！」

恐怖心に負けない為に大きな声を出し、再び駆け出した

「調子に乗りすぎだな・・」

ノーヴェと八神の模擬戦を見ながら、そう呟いた

「どういう意味ですか？」

隣のティアナ・・だったか？がその独り言に気付いたのか此方を見る

「ノーヴェはさっきの動きが最高の状態のはずだ。だが八神はまだ上がある、それが理由だ」

先程のスフィアクラスターも可也手加減して使われた。本気ならその攻撃でノーヴェは戦闘不能になっている筈だ

「でもノーヴェは前に一撃入れたって、言ってましたけど？」

「一撃入れることは出来ても、倒し切ることは出来ない」

八神の武器、それは膨大な魔力でも多彩な戦闘技能でもない。八神の武器それは経験だ

「チンクさんは一撃入れれますか？」

スバルが聞いてくる

「ああ、出来るがそれだけだ、とても倒し切るまでのレベルではない」

ランブルデトネイターと譲り受けたルナエッジを使えばダメージを与えることは出来る。だがそれまでだな。密かに譲り受けたルナエッジを触る。投擲武器としてはこれ以上無いと言える最高の一品だ。それを持ちえても掠り傷が限界、八神の戦闘技能の高さには唯脱帽するまでだ、そんな事を考えながら模擬戦の行われているほうを見る。実は姉妹の中で確実に龍也に一撃入れれるのはチンクとトーレだけだったりする

「行くぜぇっ！」

エアライナーに乗り突撃し、そのままの勢いで

「喰らえっ！」

拳を繰り出す

「ふっ！」

小さな溜めの呼吸と共に龍也の拳が繰り出される、ぶつかり合うが

「うわっ！」

私の拳は押し負け、後ろに後退させられる。信じられない、エアラ

イナーで加速してからの一撃だ。そう簡単に止めれる筈が無いのに

「今度はこっちから行くぞ・・」

ヒュンッ！

「えっ・・」

大分離れていた筈なのに、龍也はもう目の前に居る

「はあっ！」

拳が放たれる、条件反射で左腕で止めるが

（お、重い）

さっきまでの一撃とは違う、とんでもなく重い一撃に目を見開く

（龍也は本気だ、なら此処で倒してみせるっ！）

と思い反撃をしようとするが

「遅い・・・白虎咬！」

一瞬で後ろを取られ、両手の一撃で宙に上げられる

「グッ！」

体制を立て直し、龍也を見ようとするが居ない

「何処だ！」

辺りを見るがその姿は無い、ゾクッ、後ろから気配を感じ反射的に体を少し横にずらす

ビュン！

鋭い突きが一瞬前まで私の肩が会った場所を貫く

「外したか・・・」

背後から驚きの声が聞こえる、その声を頼りに

「はあっ！」

後ろ回し蹴りを放つ

「ぬうっ」

若干苦しげな声が聞こえるが、当たってはいないのが判る

「はあっ・・はぁっ」

着地する荒い息を整える、龍也は腕を組み目を瞑っている

「まだ、私は負けてないぜっ！」

全力で向かわなければ負ける、龍也はまだ全然余裕がある、今動きを見せないのは私を試していると言うのが判る。ならまだチンク姉達ちにも見せてない、一撃に賭けるまで！

「カートリッジロード！」

両手のガントレットから空の薬莢が飛び出す

「行くぜ！私の最高の一撃で決めてやる！エアライナー！！」

上空目掛けエアライナーを展開する。それに乗り上空に駆け上がる

（此れに賭けるしかない！）

龍也目掛け上空から一気に駆け抜ける

「氷雪撃！！」

カートリッジで魔力を増加させ、強烈な冷気の嵐を発生させる

「前が見えん」

フェンリルから発生させた吹雪で龍也の目を潰す

「おらあっ！」

全力で踵落しを叩き込む

「ぬっ！」

防がれたがそれで良い、着地と同時に肘打ちを叩き込む

「ぐっ！」

苦悶の声と共に後ろに吹っ飛ぶ龍也目掛け

「氷刃閃！！」

エアライナーで加速しながら、肘から発生した氷の刃で切りつける

「っ！」

吹雪で視界を塞がれているのに的確に私の攻撃を回避していくが、何発かは掠っている

「氷幻演舞撃！！」

氷で作った分身を次々龍也にぶつける。徐々に体が凍り、完全に動きが止まった龍也目掛けて

「これで止めだ！」

全力で氷の刃を振り下ろした

ガキィーン

金属がぶつかる独特な音が響く

「今のはやばかったな」

両手に炎を灯した、龍也のガントレットに私の渾身の一撃は止められていた。私は全力を出し切った時、特有の脱力感に襲われていたそんな事を知ってか知らずか

「降参か？」

と冷ややかな目で私を見るが

「まだだ！まだ負けてない！！」

魔力は空に近い、だが負ける訳に行かない、拳を繰り出すがそれは軽く回避された

「そうか・・・なら今度はこっちの番だ！」

降参の意思が無いことを知ると、龍也のガントレットから空の薬莢が飛び出す

「コード、麒麟！参る！！」

両手に青い魔力光を湛えたまま跳躍する

「喰らえっ！」

散弾のようなな光が降り注ぐ

「くうっ！」

プロテクションを全力で張りそれを防ぐが

「はあっ！」

腰だめに両手を構え此方目掛け急降下してくる

「でえええええい！！！」

手が分裂して見えるほどの高速でラッシュが叩き込まれる

ピシッと音を立ててプロテクションに皹が入っていく

「おりゃあ！！！」

アッパーでプロテクションごと宙に打ち上げられる

「くうっ」

全力でプロテクションを張っているが、それももう限界に近い

「この一撃で極める！！」

左腕に魔力で形成された刃が見える

「っ・・私の負けか・・・」

「はあああっ！」

私が最後に見たのは、私に向かい迫り来る蒼い魔力の刃だった

ドオオオッン！！

刃がプロテクションに命中と同時に凄まじい爆発音が響いた

「やれやれ・・思ったより腕を上げていたな」

赤くなった左頬を擦る、ノーヴェの攻撃は私の頬を確実に捉えていた

「・・痛てて・・私の負けか・・・」

ダメージでダウンしていたノーヴェが言うが

「そうでもないぞ？」

「あっ？慰めは良いぜっ！」

慰められてると勘違いしたノーヴェが不機嫌に言うが

「良く見ろ、一撃確かに貰っているぞ」

「本当だ。よっしゃあ、龍也に一撃入れたぜー」

当たっている場所を見せると両手を上げ叫ぶ、やっぽど嬉しかったのだろうか？と思っていると

「龍也兄様、次は私と勝負してください」

待機状態のベルゼルガを持ちながら、ディードが笑う。かなりやる気だ

「そうみたいだな・・私はチンク姉達の所に行くよ」

ノーヴェが立ち上がり歩き去り、演習場の戦場は私とディードだけになる

「一撃喰らったみたいですね」

微笑みながら赤い左頬を見る、ディード

「・・思っていたより、ノーヴェが腕を上げていたという事だな」

「それなら・・私も負けていませんよ?今日こそ龍也兄様に一撃入れて。言う事を聞いてもらいます・・」

異様な殺気を放っている、ディードは少し怖いと感じる

「無茶な要求は無しな・・」

若干身の危険を感じ言うと、笑いながら

「判ってますよ、唯少し買い物に付き合っていただければ、良いのです・・それでは始めましょうか。ベルゼルガ、セットアップ」

白の清純というイメージがピッタリなバリアジャケットに、二振りの大型の両刃刀を軽々振りましながら

「龍也兄様はそのままで宜しいので?」

「このまま戦おうとは思わんな。モードブレイド起動」

剣相手に素手で挑む等と馬鹿なことはしない、ブレイクモードからブレイドモードに切り替える

騎士甲冑が光に包まれ再び変化する、黒のバリアジャケットに胸部と両肩、そして篭手と脚に新しく鎧が構築される。グラムの物と瓜

二つだが所々金の装飾が施され少し違うところがある、その手には大型で両手で持つ幅広のバスターソードを握る

「行くぞ・・？」

「望むところです」

私とディードは同時に駆け出した

第４２話に続く

## 第４２話（前書き）

現在技のアイデア募集中！！
読者の方のアイデアをお待ちしています

# 第４２話

ガキンッ！、私のバスターソードとディードの両刃刀が追突し、鈍い音が響く

「はあッ！」

気合と共に両刃刀をずらしそのまま私の首目掛け振るう

「っ・・」

後方に跳躍し回避するが

「甘いです！」

片手の両刃刀の先からＩＳの魔力刃でリーチを伸ばす

「ふんっ！」

魔力刃を切り払い、ディード目掛け振り下ろす

「くうっ！」

苦悶の声を上げる、力で言えば私の方が上なのだからそれは当然だ、追撃に踏み込もうとすると

ヒュンッ！

鋭い音を立てながら魔力刃が迫る、今の形は剣より鎌に近い。死角から迫る鎌に

「くっ！」

即座に拳に魔力を纏い殴りつけ、軌道をずらす

「てぇい！」

拳を振りぬいた一瞬の隙を突いて蹴りを放ってくる

「っ・・！」

蹴りを受け止めるが予想以上の重みに動きが止まる、ディードが後方に飛んだ魔力刃が消え元の姿に戻る

「ちぃっ！」

舌打ちしながら此方も剣を構え直す

「ベルゼルガと私の能力を組み合わせるのに大分苦労しました」

両手の両刃刀を軽々回しながら呟く、その声は静がだが確かに聞こえる

「ですが・・私は遂に使いこなせる様になりました。この力で龍也兄様を超えて見せます！」

両手の両刃刀を回転させながら、突撃してくるディードに

「簡単に私を倒せるなと思うなっ！」

バスターソードを構え直し私も、駆け出した

「ディードって強いんですね」

模擬戦を見ながらそう思う、穏やかそうなディードだが。龍也さん相手に明らかに押し気味だ

「ディードは剣を使うからな、八神に一番稽古を付けて貰っていたしな・・・」

チンクさんが思い出したように言っていると

「ふ～、やっと戻って来れたぜ」

迷っていたのかノーヴェが腕を振りながら、戻ってくる

「ノーヴェだっけ？凄かったぜ！兄貴を良くあそこまで追い込んだな」

ヴィータさんが言うと、手を振りながら

「全然だ。確かに技は本気だったけど。攻撃は肩と足だけに集中してる。まだ本気を出された訳じゃないな」

バリアジャケットは肩と足と両手のガントレットにはダメージは出ているが、それ以外はほぼ無傷だ

「兄貴らしいな」

龍也さん訓練でも顔や腹を狙って攻撃はしてこない。そういう所も優しくて私は好きだ

「顔とかに傷を付けたりしたら、兄様の事だから責任を取るとか言い出しかねないよね」

オットーのその発言を聞いた途端

「「「・・・・それだっ！！」」」

ティアとなのはさんとフェイトさんの顔色が変わる

「いや・・それは無いんじゃないですか？龍也さんがそんなミスしないと思いますけど？」

どんな乱戦でも龍也さんとの模擬戦で顔や腹に攻撃が向かったことは無い

「・・・幻術を使えば・・ぶつぶつ・・・」

ティアが思いっきり悪巧みをしている

「「むしろ業と当たりに行けば・・・」」

なのはさんとフェイトさんも可也悪い顔をしている

「そうならん様に先手を打たなかんな・・・」

部隊長も悪巧み開始

「・・・睡眠薬・・・いやいっそ押し倒すか？」

ぶつぶつと可也怖い単語が幾つか飛び出している、如何すれば止めれるかと考えると何故か

（そうだ、業と足を滑らせれば・・・って違う私は何を考えてるんだ）

良い感じにスバルもはやて達に染まってきた頃

「ノーヴェ一撃入れたな、なに頼むんだ？」

「買い物でも付き合ってもらおうかな？それとも何か新しい技でも教えて貰おうかな？」

チンクさんとノーヴェが何を頼むか相談しながら

「アギトちゃん、ルーテシアちゃん、はいお兄様のクッキーです」

龍也の自室から持って来たであろう、クッキーの皿を二人に差し出す

「ありがとう」

「兄のクッキーは美味いからな」

ほのぼの空気の幼い組みに

「僕も貰って良い？」

今回爆弾を投下したオットーが、何事も無いようにクッキーを口に運んでいた。天然の存在が一番恐ろしいのである

「部隊長達が怖いです」

エリオとキャロが涙目で言う

「耐えねばならんのだ」

シグナムもその異様な気配に顔を青褪めている。きっとこの中で一番苦労しているのは、シグナム達に違いないだろう

「どうしましたか？」

何度か打ち合いをし。お互いに間合いを計っていると、突然龍也兄様がその体を震えさせたので気になって尋ねると

「何かとんでもなく嫌な予感がするんだ・・・」

バスターソードを下に向けながら頭を抱える龍也兄様。恐らくその嫌な予感は姉様達だと思うが、今のこの隙は大きなチャンスだ

「てえええいっ！」

急接近しベルゼルガを振るう

「うおっ！！」

体制を崩しながらも後方に跳躍し回避される。

「惜しいです、今ので一撃取ったと思いましたが」

届くことなく空ぶった、ベルゼルガをみながら呟くと

「いや・・・今の無い・・・隙を見せて私が悪いか・・」

距離を取った龍也兄様も自分のミスを悔いていた

「二連地斬疾空刀！！」

ベルセルガを地に這うように振り。魔力刃を飛ばす

「地斬疾空刀！」

龍也兄様も同じように魔力刃を飛ばす。三つの魔力刃が追突し砂煙を上げる

「・・やりましたか・・？」

思ったより砂煙が大きく完全に視界を隠す、私の剣技は龍也兄様の物を真似した物だ。オリジナルには遠く及ばないはずだが・・

そう思っていると砂煙から蒼い魔力刃が飛び出してくる

「そう甘くは行きませんか・・」

ベルゼルガを回転させ切り払う

「甘いんじゃないか？」

！？そんなもう目の前に居る

「水流爪牙！」

地を這う様な一撃が叩き込まれ。そのまま蹴り上げられる

「くっ・・・」

反射的にベルゼルガで受け止めるが、ダメージで若干右手が痺れる

「モードリリース！デバイス召還！」

騎士甲冑を解除し、天雷の書から別のデバイスを召還しようとしている。龍也兄様が見える

「させません！」

左手のベルゼルガを投擲する。天雷の書のデバイスはどれも強力だ、下手に召還を許せば負けに直結する。投げつけたベルゼルガが命中する少し前に天雷の書からデバイスが召還される

「参式斬神刀！！！」

召還された刀を鞘に納まったまま。ベルゼルガを切り払う

「惜しいな、もう少し早ければ迎撃出来たのにな」

参式斬神刀の鞘を見ながら笑う、姿は先程までの騎士甲冑と違い。
赤い着物の様な物に肩と篭手が具現化している

参式斬神刀が鞘から抜刀される、それと同時に魔力が強大な奔流となり駆け巡る

「我が剣に迷いは無い、何時如何なる時も誰かを守る為に、私はこの剣を振るおう」

圧倒的な威圧感だ、勝てない・・負けると後ろ向きな考えが浮かぶが

「私は龍也兄様を超えて見せます」

その考えを振り払い、ベルゼルガを構える

「その意気は良し、いざ真っ向勝負！」

刀を正眼に構え突撃してくる。小手先の技等通用しない、なら全力で立ち向かうまでだ

ガンッ！

ベルゼルガと参式斬神刀が追突するたび火花を散らす

「真っ直ぐで迷いの無い良い太刀筋だ！」

高速で参式斬神刀が振るわれる

「くぅっ！！」

早い！私なんかより数倍早い、連激で叩き込まれる参式斬神刀は早く、ギリギリで受け止めるのがやっとだ

（やはり・・まだ届かないのですか？）

圧倒的な差が私と龍也兄様の間にある

（あの時の龍也兄様に憧れて、剣も頑張って使えるようになった・・でもまだ私の剣は届かない）

参式斬神刀を受け流しながら、あの時ネクロの基地から助け出された時の事を思い出す。隻腕ながら私達を守る為にたった一人で。ネクロと戦い続けた龍也兄様。思えばあの頃から好きだったのかも知れない、そして私が剣を教えて欲しいと言ったら、快く引き受けてくれた龍也兄様に追いつきたくて・・・認めてもらいたくて。頑張って訓練をした、だがまだ私の剣は届かないと考えていると

「戦いの最中に何を考えている？私の問いに、応えた闇を晴らす光に成りたいと言ったのはどうなったんだ？」

（そうだ！私は何を考えているんだ！こんな所で諦めていたら龍也兄様の隣を歩く資格は無い！）

さっきまで諦めかけていたが、再び闘志が涌いてくると感じながら、私は今まで感じた事の無い感覚を感じていた

（見える、さっきまで全然見えなかったのに・・今ははっきりと見える！）

参式斬神刀を左手のベルゼルガで受け止め、そのまま右手のベルゼルガを振るう

「ぬっ・・」

左肩に確かにベルゼルガが命中した。

「ふふ、これで良い何か掴んだな」

当たった左肩を見ながら微笑んでいる、龍也兄様に

「笑っている余裕はありませんよ」

踏み込み大きくベルゼルガを振るう

「くっ！」

参式斬神刀を取り出してから初めて、龍也兄様から苦しげな声が聞こえる、私自身も驚いている、今までのどの攻撃よりも鋭く早い高速の一撃これなら勝てる！

「行きます！」

ガンッ！凄まじい音を立てながら参式斬神刀とベルゼルガがぶつかるが、ベルゼルガの方が鋭く食い込んでいる

「ぬっ！このままでは・・」

後退する龍也兄様、だがその隙は今の私になら大きなチャンスになる

「はあああッ！」

ベルゼルガが風を纏う、今までは出来なかったでも今なら使いこなせる

「奥義！風刃閃！」

ベルゼルガから放たれた風が龍也兄様を拘束する

「くっ・・」

もがいてその拘束から脱出しようとしているが。そう簡単に抜け出ることは出来ない

「音速を超えて切り込みます！ベルゼルガ！カートリッジロード！！」

両手のベルゼルガから計４発の薬莢が飛び出す、踏み込むと同時に世界が色を失う

（早い・・でも今ならこの世界を駆けることが出来る）

風刃閃はカートリッジを使用し、超高速での斬撃を叩き込む奥義だ。その前にはどんな防御や障壁も通用しない！

「はあああああっ！」

ザンッ！ザンッ！

「く、ぐうっ！！」

防御も回避も出来ない、攻撃を喰らい苦悶の声を上げる龍也兄様、
だが此処で手を抜きはしない。全力で龍也兄様を超えてみせる

「これで・・決まりです！！」

ベルゼルガを全力で振るう。命中と同時に風の拘束から解放され、
後方に吹っ飛んで行き。そのままビルに背中から追突する

ドガーンッ！！

「はあっ！はあっ！これで決まりましたか」

初めて使う技だけに消耗が激しいが・・・次の瞬間ビルから龍也兄
様が飛び出してくる

「・・ぐっ・・可也ダメージは貰ったが、まだ私を倒すことは出来
んぞ」

可也消耗しているが、まだ瞳に宿った強い光は消えていない

「次は此方の番だっ！」

参式斬神刀を再び正眼に構え目を閉じる、裂帛の気合と共に目が開
かれる

「我はっ！守護者の剣なり！！」

参式斬神刀の柄が開き、そこから魔力で構成された刃が現れ。両刃
の巨大剣になる

「受けて見よ！！我が奥義を！！！」

巨大な剣を正眼に構え

「奥義！斬神刀・疾風怒涛！！！」

正眼に構えたまま、突撃してくる姿は、紛れも無くあの日私が憧れた姿そのままだった

「私の負けですね・・でも次は・・・勝って見せます・・・」

そう呟き私は目を閉じた

「チェストォォォ！！！」

振り降ろされた一撃は私に当たる事無く隣のビルを切り裂いた

「えっ・・・？」

どうしてと思い龍也兄様を見ると

「其処までする訳が無かろう。お前はさっきの一撃で。魔力も体力も限界だろう」

参式斬神刀が元のサイズに戻り、バリアジャケットが解除される

「次に闘う時を楽しみにしている」

何時もの優しい笑みで笑う龍也兄様に

「そういえば一撃入れましたね。だから今度買い物に付き合ってくださいよ？」

とりあえずそれだけ言わないと思い口にする、チンク姉様やトーレ姉様は龍也兄様に簡単に一撃入れる事が出来る、だがそれ以下の姉妹で一撃入れる事が出来る可能性を持つのは、セッテとノーヴェだけ、現に私が一撃入れたのも今回が初めてなのだ、だからちゃんと言っておかないと、と感じたのだ

「約束だから仕方ないか・・・」

困ったような笑い顔を浮かべながら手を伸ばしてくる、龍也兄様の手を借り立ち上がる。手を繋いだことで私の胸が高鳴るが、龍也兄様は普段と同じ笑みを浮かべている。きっと私の事も妹して見てるに違いない、だが何時の日か私の気持ちに気付いてくれる日が来ます様に・・心の中でそう思いながら、チンク姉様達が待つ場所に向かって行った

第４３話に続く

## 第４２話（後書き）

もう本当私にはオリジナルの技を考える才能がありません。
今回もスパロボの技が登場しています・・どうして私にはオリジナルの技を考える才能が無いのでしょうか?他の作品では格好良い技が多いのに・・・

と愚痴はここら辺にしておいて、今回のお話はどうだったでしょうか?
ノーヴェに続き、ディードも強化してみました。後強化の予定があるのはスバルとティアナを除けば、チンク、ウェンディ、オットーそしてセッテです。登場は大分先のほうになりますが、これからも本作を宜しくお願い致します

## 第４３話（前書き）

現在技のアイデア募集中です、
アイデアは感想の方にお願いします

さて・・今回のお話はルーテシア及び幼い組みが強いですね
龍也を困らせる無邪気な天使がコンセプトになっています

# 第４３話

第４３話

「兄ちゃん、危なかったなぁ。もう少しで負けるとこやったろ？」

皆が待つ場所に戻ると、にこやかに笑うはやてに迎えられた

「ああ、少し危なかったな。こんなに追い詰められたのは何時振りだろう？」

記憶を探るが一対一で負けかけたのは、本当に久しぶりの事だと思っていると

「ディード、凄いじゃねえか！もう少しで倒せたんじゃないのか？」

楽しそうにアギトが言うと

「それは無理でしたよ・・風刃閃の地点でもう魔力が限界でしたから」

冷静に返事を返すディードに

「いや、十分だろう、八神をあそこまで追い込んだのは姉妹の中では、ディードが初めてだな」

「そうそう、胸を張れよ。もう少しで龍也を倒せたって」

チンクとノーヴェに健闘を褒められ、更に

「凄いねぇ、ディード。もう少しで兄様に勝てそうだったね」

オットーにまで褒められ

「／／／／ありがとう／／／／」

と姉妹間で褒められ、物凄い和やかな空気になっている頃

「龍也。私と模擬戦しない？」

何かを企んでいるだろう、フェイトの嫌な笑顔が見える

「龍也さん、私とですよね？」

フェイトと同じ笑みのなのはが接近してくる、身の危険を感じ一歩下がる

ドンッ！誰かにぶつかる、恐る恐る振り返る

「龍也さん、私と模擬戦してくれますか？」

にこやかに笑うティアナの顔を見た瞬間。頭の中にザザッ！ノイズが走る、なんだ今思い出してはいけない扉が開きそうだったぞ！

「いや・・疲れてるから又な・・」

今の状態ではとてもじゃないが模擬戦は無理だと判断し、言うと

「「「そうですか・・・」」」

何かとてもがっかりした様子で3人とも頷いた。なんだろうこの3人と模擬戦をしてはいけないと本能が騒ぐ。とても大変な事に成る予感がしたそんな事を思っていると

「龍也、私ケーキ食べたい・・・」

ルーテシアが俯きながら言う、やはりルーテシアも女の子だな、甘いものは好きみたいだ

「良いよ。今から作ろうか?」

しゃがみ込みルーテシアの目線に合わせると

「本当?」

「私が嘘を言ったことが合ったかな?」

というと首を横に振りながら

「無い・・龍也は嘘付かない」

「じゃあ行こうか?」

「うん!」

ケーキを作るために皆で食堂へ移動した

うーん、ディードもノーヴェも凄いなぁ、兄ちゃんに一撃入れたかぁ・・・。食堂でケーキを作り始めた兄ちゃんを見ながら、そんな事を思っていた、兄ちゃんはリィンとアギトと一緒に様々なケーキを作っているようや。さっきからリィンとアギトがパタパタと忙しそうに動いている

「はやて、少し良いか？」

目の前にチンクさんが座る

「うん、ええで。何の用や？」

私の本能が言う、この人は敵だと、私から兄ちゃんを取りかねん存在だと、本能が警告するが、そんなことは関係ない、なのはちゃん達同様兄ちゃんに関してはライバルやけど。それ以外やったら仲良く出来ると感じていた

「お前の兄の八神は良い奴だな」

兄ちゃんを見ながら笑っているチンクさんだが

「なあ・・なんで兄ちゃんのこと八神言うん？普通に龍也とかオットーみたいに呼んだらどうや？」

気になっていたことだ、チンクさんは何故か兄ちゃんのことを八神って呼ぶ、それが何でかとても気になった

「／／／／それは・・その恥ずかしいのと・・・自分自身にまだ自信が持てないからだ／／／／」

真っ赤になって言うチンクさん、やっぱ兄ちゃんの事が好きみたいやねと思いながら

「自信って？どういう意味や？」

「私が知っているのはダークネスの時の八神だけだ。何時も悲しそうにしていてな・・良く悪夢に魘されていたみたいだった。だからその時決めたんだ八神を支えれるようになりたいと」

そういって兄ちゃんを見るチンクさんの顔はとても幸せそうだ

「だから、私が八神の事を本当の意味で支えられると、判断したら龍也と呼ぶつもりだよ」

判るなぁ、兄ちゃんは悩みとか抱え込む癖が有るからなぁ

「ええね、でも私は兄ちゃんをそう簡単に手放す気は無いで？」

「判ってる、はやてにも認めてもらわないと。八神の傍で歩いていくことは無理だろうからな」

「判ってるみたいやね。そうや、私が認めな兄ちゃんの隣を歩いていくなんてさせへんで？」

お互いに笑いあう、どうやら本当に仲良く出来そうだ。他の子達もなのはちゃん達と仲良く話してる、みたいやしと思っていると

「後二人・・姉妹の中で八神の事が好きな者がいる」

「どんな人なんや？」

どんな人なのか気になって尋ねると

「一人は八神至上主義者、もう一人は抱きつき癖があるな」

「・・・なんか癖がある人やね」

どんな人なのかと考えていると

「待たせたな」

大き目のトレーに大量のケーキを乗せて、厨房から出てくる兄ちゃんと

「リィンも頑張りました～」

鼻の頭に生クリームを載せたまま笑うリィンと

「あたしも頑張ったぜ」

小麦粉で少し髪が汚れているが、アギトも笑顔でやってくる

「ヴィヴィオは？」

食堂にヴィヴィオの姿がないので辺りを見回す、兄ちゃんに

「今ヴィータちゃんが呼びに行ってるよ」

なのはちゃんが笑いながら言うと、そうかと呟き食堂の机の上にケーキを並べ始める兄ちゃん

「ショートケーキにチーズケーキ、それとチョコケーキを作ってみたんだが・・如何したその顔は？」

厨房に見える大量のケーキに目を丸くする、どうみても１０ホールはあるだろう

「八神・・私は前も言わなかったか？作り直ぎるなと・・・」

チンクさんが頭を抱えながら言う、どうやら何回か同じことがあったようだ

「また太るな「ます」「かな？」」

ケーキを見ながら呟いている、ノーヴェ、ディード、オットーに

「「「「これだけ食べたら私達も太るね」」」」

ケーキを見て絶望という感じの、なのはちゃん、フェイトちゃんにティアナ、かという私も若干不安だ

「お～！ケーキがいっぱいある～」

ヴィータに連れられたヴィヴィオが笑顔で言うなか、ヴィータが呆然としながら

「兄貴作りすぎじゃ？」

兄ちゃんに言うが

「いや、残りはお土産の分だ、チンク達に持ってて貰おうと思ってな」

あ～成るほど、兄ちゃんは今日来てないチンクさんの姉妹の分も作ったみたいだ、それならこの量も納得だ

「さっ！食べると良い」

兄ちゃんに促され皆でケーキを食べ始めた

「「「「美味しい！」」」」

体重をあまり気にしない子供組みは笑顔でパクパクと食べている。ヴィヴィオとルーテシアは兄ちゃんの膝の上で食べており、リィンとアギトはその両隣だ、兄ちゃんは甘いものは苦手なので、ヴィヴィオとルーテシアの口に付いた生クリームを拭きながら、紅茶を飲んでいる

「太っちゃう・・・でも美味しい！」

「体重計が怖い・・・」

「もぐもぐ、そうですか？」

「スバルあんたは良いわね・・・」

なのはちゃんとフェイトちゃんにティアナは自分と格闘しながらケーキを口に運んでいるが、スバルは特に気にしてないようで普通に食べている

「お父さんはお菓子も上手なんだね」

「・・ぱくっ。お父さんに作り方教えてもらおう」

「私は甘いものは・・・」

「ふえーん、私また太っちゃいます～」

「兄貴が作ってくれたんだから。残すのは駄目だな。・・・でも太るな・・・」

エリオ・キャロは普通に食べているが、キャロは作り方を教えてもらおうって呟いてるし。シグナムは甘い物が苦手なので殆ど口にしていない。シャマルは泣きながらもフォークは一度も休んでいない。ヴィータは考え込みながらケーキを口に運んでいる

「もぐっ。兄ちゃんのケーキはさっぱりしてるから食べ過ぎてまうわ～」

私も体重が怖いが、美味しいので食べることを止める事は出来ない

「ぱくっ、本当に八神は乙女心を理解していない。女の子にこんなにケーキを食べさせるか？」

チンクさんも文句を言いながらもケーキを口に運んでいる。本当兄ちゃんは乙女心を知らないへんなと思い、兄ちゃんの方をみる

「「あ～ん」」

ヴィヴィオとルーテシアにケーキを食べさせられそうになっていた・

・・凄い羨ましいな・・・私もやりたいなぁ

「ヴィヴィオ、ルーテシア私は甘いもの・・・いや食べる食べるから。泣かないでくれ」

甘いものはいらないと言おうとすると、ヴィヴィオとルーテシアが涙目になるので、食べると言い口を開く

「「美味しい？」」

純真無垢な天使二人に美味しいかと言われ

「ああ・・・美味しいよ・・・」

兄ちゃん無理し取とるな・・と思ってると

「お兄様。あーんですぅ」

「兄、ほれ美味いぜ！」

今度はリィンとアギトに口を開くように言われている

「・・・・判った・・・貰う」

再び口を開き、ケーキを口に含む

「お兄様、美味しいですか？」

「兄、どうだ？あたし達が作った奴は美味いか？」

どうやらチョコケーキは二人が作ったようだ。二人とも感想が聞きたいらしく、笑顔で兄ちゃんに尋ねている

「・・大丈夫だ。とても美味しいよ・・・」

力のない笑顔だが、リィンとアギトは気付いていない。二人の合作ケーキはとても甘い、どちらかと言えば兄ちゃんが苦手な物に分類される。偶には兄ちゃんも苦労したら良いわ。と思い再びケーキを口に運んだ、うん、やっぱり兄ちゃんのケーキが一番美味しいわと思ったのは仕方ないことだろう、

辛いと思った・・私は甘いものは苦手だ、だがヴィヴィオ達を泣かすくらいなら我慢して食べる

「「美味しかった～」」

笑顔のヴィヴィオとルーテシアをみればこれ位如何って事は無いが・・できれば今回限りにして欲しい。

「お兄様～又作ってあげるですよ～」

「おう、今度はもっと上手に作ってやるぜ」

・・・悪意は無いのだろう・・今度に備えて少しは甘いものを食べれるようにしておこうと思った、暫くそのまま皆で談笑していたが

「八神・・私達はそろそろ帰る事にするよ」

チンク達が帰ると言うで見送り行くことにした

「・・・大丈夫か？」

チンク達は大量のケーキを見て頭を抱えている、大分食べたが数的に言えば6ホール残っているので、その内3ホールチンク達が持ち帰ることになったが持ち帰る手段が無い・・・ウェンディがいれば又違っただろうがと思うが現状ではどうしようもない

「龍也・・私に任せて」

小さくVサインで笑うルーテシア

「そうか。ルーテシアは転移魔法が得意だったな」

ルーテシアの得意な魔法は転移と召還、ケーキを転移させれば良いんだ

「へ～、ルーちゃんは転移が得意なんだ」

すっかり仲良くなった、キャロが言うと

「うん・・でも召還も出来るよ？」

「本当！私もなんだよ！ねっ！フリード」

「きゅく～」

自分と同じ召還のスキルを持つ者が居た事に、笑顔になるキャロとその頭の上で前足を上げるフリード。とても和やかな空気だ

「兄様。転移するのは良いけど、連絡入れないと」

確かにその通りだ、いきなり転移させたら驚かせてしまうなと思い、連絡用の端末でクアットロを呼び出す

『はい～クアットロですよ～何の御用ですか？八神兄様～』

独特な甘い声だ・・な。と思いながら本題を言う

「今日、チンク達が義手を持ってきてくれただろう？その御礼でケーキを作ったのだが・・・」

ケーキと言う言葉に顔を顰めるクアットロ

『作りすぎたとかですか？』

「いや違う・・３ホール分なんだが今から持って帰らすのは大変だし、かと言って私が届けるわけには行かないからな・・ルーテシアの転移魔法でそちらに送ろうと思うのだが、良いか？」

『別に構いませんけど・・・八神兄様はもう少し考えて物を作ってくださいね？』

そう言うと通信が切れた、何を考えろというんだ？最後の考えて物を作ってくださいの意味が判らず首を傾げていると

「ねえ、オットーちゃん昔何があったの？」

「兄様が１２ホール、一人一つずつケーキを焼いてくれたんだけど」

「判った、体重だね？」

「そうですよ、私達は別ですけど。お父さんの研究を手伝っている姉様方は・・大変だったみたいです」

となのは達がひそひそと話をしていた

「ルーテシア、連絡は付いた転移させても大丈夫だ」

「うん・・判った」

ケーキの箱の下にベルカの魔方陣が浮かび、次の瞬間ケーキは消えた

「ばっちり」

笑顔でVサインのルーテシアの頭を撫でる、もう転移魔法ではルーテシアに勝てないなと思った。

「八神。今日は中々楽しかったぞ」

「態々、届けに来てくれたて、ありがとう。奴に礼を言っておいてくれ」

「判った、ちゃんと伝えておこう、父さんも喜ぶだろうな」

と別れをしていると。

「また遊びに来てね？」

「うん。エリオとキャロにまた会いに来る・・・」

ルーテシアは同年代のエリオとキャロとすっかり打ち明けたようだった

「兄様、また遊びに来るよ」

オットーが笑いながら言う

「ああ、来るのが良いがアイツの言う事は聞くなよ?何を言うか判らないからな」

オットーはジェイルの言うことを聞いて、ほぼそれを実行に出る、例・・メイド服・・チャイナ・・等如何してそんなものがあのアジトにあるのだろう?と毎回不思議に思う

「ウーノ姉様が作ってるんですよ」

私の考えている事が判ったのか、ディードが答えを教えてくれる。やはりウーノとは一度話をしないとなと思っている頃

「完成しました・・・猫耳メイド服。これなら、龍也様も・・・ふふ。慌てる姿が目に浮かびますね」

完成した3着のメイド服を見ながらウーノが笑っていた。ウーノ・・妹思いの良い姉だがそのベクトルは少しずれている。

「龍也。今度買い物に付き合ってくれよ?一撃入れたんだからな」

ノーヴェが笑いながら言うと

「そうですね。私も一撃入れましたから。買い物に付き合ってもらいますよ？」

ディードも笑いながら言う

「判った、今度な、約束は護るよ」

私に一撃入れたら言う事を聞くといったが・・何時までだろうな？

「龍也さん、ノーヴェ達から聞きましたけど。訓練で一撃入れたら言うことを聞いてくれるんですよね？」

・・・ティアナが笑いながら言うが、何処か底冷えする笑みだ

「まぁ・・無茶な物以外はな、聞いてるがそれがどうかしたのか？」

「いえ。唯一つ聞きたいことが、それは私達にも適応されますか？」

ティアナの後ろで、なのは、フェイト、スバル、ヴィータ、はやての目が妖しく光っている

「・・無茶な物じゃないなら、訓練で一撃入れたら言う事を聞こう」

ガッツポーズのなのは、フェイト、スバル、ヴィータ、はやてが見える、なんだろうこの選択は間違えたかな？

「ふふふふ・・・チンクさんに教えても貰った、戦術なら・・・」

ティアナが怖いなぁ・・それと最近ティアナを見ると体が震える・・・何故だろう？そんな事を思ってると

「ではな、八神また遊びに来るからな」

チンク達は帰り始めたので

「気をつけてな・・それと体に気をつけろよ？」

声を掛け手を振る。チンク達は振り返らず後ろ向いたままを手を振り。歩いていった。偶にはこう言うのも良いかもしれないと思った

「兄ちゃん・・」

気が付くとはやてが隣にいる

「皆良い人やった・・また遊びに来て欲しいわ」

はやて達もえらくチンク達が気に入ったようだ

「そうだな・・今度来たら。皆で海鳴に行こう、ゆっくりと皆で遊ぶと良いな」

姿が見えなくなるまでチンク達を見送り、皆で隊舎に戻った

第４４話に続く

## 第４３話（後書き）

次はスバルとティアナの強化イベントですね

ヒントはスパロボに登場する機体がモチーフです。

まぁ読者の方なら一発で判ると思いますが・・

それでは次の話しで又お会いしましょう

## 第４４話（前書き）

現在技のアイデア募集中！！
読者の方のアイデアをお待ちしています

感想の方にたくさんの募集が来ることを願っています

# 第４４話

第４４話

新しい義手が届いてから、数日たったある日、食堂でのはやての一声で全てが始まった

「ＴＶの取材？」

食事中突然はやてがそう切り出した

「そうや。何かなレジアス中将が言うとるんよ。今度六課にＴＶの取材があるんやて」

向かい側に座って皆に説明している

「パパＴＶに出るの？」

膝の上でヴィヴィオが首を傾げている。食事の際は必ずヴィヴィオは私の膝の上に座っている

「そうみたいだな。でも何でだ？」

突然六課に何故取材の話しが来たのか、気になり尋ねると

「これ見て」

はやてが取り出したのか一冊の本、見た感じ週刊誌の様だが

「あれ？はやてちゃんもそれ見てるの？」

なのはも見ているようだが、私はそういう週刊誌の類は殆ど見ないので始めてみる

「見たことが無いな・・・一体何なんだ？」

見たことの無い週刊誌に首を傾げると

「龍也さん、見たこと無いんですか？」

スバルもどうやらその週刊誌を見ているようだった

「ああ、こういうのは余り見ないな」

パラパラとページを捲っていると

「兄ちゃん、最後の方のページや、其処に乗ってる記事を見てくれへん？」

はやてに言われて最後のページを見る

「・・・なんだこれは？」

乗っていた記事は『第１８回　謎に包まれた管理局最強の魔導師、蒼天の守護者に迫る！！』とデカデカと書かれその下には、隊員のコメントが掲載されている、幾つか読んで見る

『あの人は優しくて気さくな人物です　ＧＬ准陸尉』

『強くて、優しいし、尚且つ相談にも乗ってくれますね　ＳＦ一等陸士』

『鈍感な人ですね、でも良い人ですよ？　ＲＲ二等陸士』

『旦那？最高の男だぜ！　本人の希望により本名で掲載します、ヴァイスグランセニック　陸曹』

『ぜひとも、教会の騎士へ！　ＫＧさん』

六課に所属する隊員に今回はコメントを聞くことが出来ました。次回は何と！六課に突撃取材をしたいと考え。現在アポイトメントを取ろうと努力しています、それでは次回の特集をお楽しみに！！

「・・・１７回もあったのか？」

１７回もこんな感じで特集記事が組まれていたのかと思うと、軽く頭痛がした

「そうやで？毎回楽しみに見てるわ」

はやてこんなの見なくても直接聞けるだろうに

「龍也、近くでいると判らない事もあるけど。こういう記事は客観的に見れるから好きなんだよ」

フェイトは私の考えている事を呼んだのか答えてくれる。

「・・それでその週刊誌とＴＶの撮影と何の関係があるんだ？」

週刊誌を捲りながらとＴＶ撮影の関係を尋ねると

「管理局のイメージアップに繋がるからって、レジアス中将とリンディさんがその週刊誌の編集部にな、許可を出したんやって」

軽く頭痛がした、あの二人は一体何を考えているんだろう？

「それで今度、六課の仕事と兄ちゃんにインタビューをして。それをＴＶで放送するんやて。ごっつ楽しみやろ！」

ものすごいハイテンションだ、なにがそんなに楽しいのだろう？

「何時あるんだ？」

気になったのは其処だが

「う～ん、もう少ししたらやな。ＴＶに出るのか～楽しみやな～」

はやて達は可也テンションが高い。こうして今日もまた忙しい一日が幕を開けた、

食堂での話しを終え、一人自室に戻り。紅茶を片手に天雷の書を開く

「・・・やはりな・・」

デバイスが記録されているページから二つのデバイスの情報が消えていた

「王、やはりこれは答えを得たと言う事でしょうか？」

「判らないな、だがそれに近い状態か。それともう一押し何か足りないのかもな」

スバルとティアナが持つ。アクサセリーは実は一種のデバイスなのだ。天雷の書とリンクしており。ある条件を満たすとデバイスに変化するのだ。（ノーヴェ達が持つデバイスもこれが変化したものだ）。また消えてはいるが暫くすると復活し召還することが出来る

「確かめてみるか・・」

情報が消えていたページには鋼鉄の孤狼、白銀の鷹とデバイス名が記されていた

「最強クラスのデバイス・・・王の身近な女性は皆お強いですね」

からかうようにセレスが笑う

「まったくだ。ノーヴェ達もだがな」

天雷の書から消えたデバイスは今まで計6個、所持しているのは、ノーヴェ、ディード、チンク、ウェンディ、オットー、セッテだ皆SSSクラスのデバイスを得た、そして今またSSSクラスのデバイスが2つ消えようとしている。それは喜ぶべきか否か悩む所だ

「しかし、少々手荒い方法になるしかないのが欠点だな」

戦闘中にしか変化しないという変わった特徴を持つ為、模擬戦の中で答えに辿り着かねばならない

「ふー、女性に手を上げるのは趣味じゃないんだがな」

その事で若干気落ちするが

「これからの戦いに備えるには。早く目覚めさせる必要があるな」

強力だが癖のあるデバイスだ。使い始めて2日、3日で使いこなせる物ではない

「仕方ない、今から模擬戦に行くとするか」

紅茶を一息で飲み干し、演習場に向かった

「はい、今日の訓練は此処までだよ」

「「ありがとうございました」

演習場でなのはさんが笑顔で言う。

「皆大分慣れきたみたいだね、皆平気そうだし」

最初はなのはさんの訓練に付いて行けず、へばってしまったが今はそれほどでもない

「このリストの御蔭だと思いますよ?」

スバルが身に着けていたリストを持ち上げながら笑う、以前龍也さんに貰った物だがこれを着け始めて、早一ヶ月魔力も順調に増加している

「はは、そのリストね、私も着けてみたけど。結構きついからね」
なのはさん達は、私達のと違い更に強力なリストを渡されたらしく、結構苦戦していたようだった
「兄貴らしいけどな、皆が怪我しないように考えてるんだろうよ」
最近ネクロは全く現れない、龍也さんが言うには何かに備えてるんだろうと言うが、龍也さんも判らないようだ
「それじゃあ、訓練の終わりに模擬戦をしようか？」
訓練の締めになのはさんと模擬戦をやることになったが
「待て・・それは私がやる」
何時の間にか現れていた、龍也さんに止められる
「龍也さん・・如何したんです？急に」
歩いて来る龍也さんはどこかピリピリしている
「少し確かめたい事があってな、悪いがなのは達は下がってくれ」
「判りました。設定はどうしますか？」
なのはさんとヴィータさんがデバイスを待機状態に戻し、尋ねる
「市街戦で頼む。それと・・普段の結界より一ランク上の物にセッ

トしてくれ

「判ったけどよ、どうしてだ？」

一ランク上の結界にする理由が判らず、ヴィータさんが尋ねると

「必要だからな。それより頼んだぞ」

なのはさんとヴィータさんが操作室に行き、演習場が市街に変わる

「さて・・スバル、ティアナ。言って置くが今回私は本気だ。一瞬たりとも気を抜くな」

圧倒的な威圧感が放たれる。それだけでも本気と理解できる

「スバル、気を抜いちゃ駄目よ」

隣に立つスバルに声をかける

「判ってる、龍也さん、本気だ」

スバルも理解しているのか、鋭い視線だ

「セットアップ・・・」

目の前の龍也さんが静かにデバイスを起動させる。ノーヴェと模擬戦の時の騎士甲冑になる

「準備は良いですか？それでは始めっ！」

なのはさんと合図と共に模擬戦が開始された

「行きます！」

スバルが駆け出そうとするが、その動きは強制的に止められる

「遅い・・」

既にスバルの目の前に立っている。そんな・・早すぎる

「ふんッ！」

ドゴッ！鈍い音を立ててスバルの腹に龍也さんの膝蹴りがめり込む

「かっは・・・」

予想外の衝撃に動きが止まるスバルに

「消えろ・・」

即座にスバルの顔に拳を叩き込み殴り飛ばす

バキィ！

鈍い音を立ててスバルがビルに叩きつけられる。今まで顔や腹を狙わなかった龍也さんが、いきなり顔を狙った。その事が信じられず動きが止まる

「私は言わなかったか？一瞬たりとも気を抜くなと！」

ドスッ！

「かは・・・」

龍也さんの拳が腹に突き刺さり。肺から強制的に息が吐き出される

「言っただろう?私は本気だと」

そのまま鋭い龍也さんの蹴りを喰らい、私もスバル同様ビルに叩き付けられた

「ティア、大丈夫?」

スバルが苦しそうに言う。たった二撃それだけで私達は戦闘不能寸前だ

「だ・・大丈夫よ。このくらい如何って事無いわ」

立ち上がり、クロスミラージュを構える。

「私が撹乱するよ。ティアはサポートお願い」

「了解。龍也さんは本気、接近戦に気をつけてね」

今日の龍也は何処かおかしい。普段は狙わない腹や顔を狙った事が気になる、何か目的があるはずだ

「判ってるよ。それより援護任せたよ」

スバルがウィングロードに乗り駆け出す

「てえええぃ！！」

加速してからの拳を放つが

「何処を狙っている？」

軽いサイドステップで回避し、再び顔目掛け拳が振るわれそうになる

「させない！」

即座に魔力弾を放ち龍也さんとスバルを引き離させる

「ちぃ！」

舌打ちをし、後方に跳躍しスバルから距離を取る

「でえええええいっ！」

スバルが加速し、龍也さんに蹴りを放つが

「甘いと言っている」

その足を掴みそのまま持ち上げる

「わっ！わっ！」

スバルが何も出来ず持ち上げられそのまま、私目掛け投げつけられる

「スバル！」

飛び出し受け止めようとするが、思ったより勢いがあり、私は受け止めた物のビルに叩きつけられ意識を失った

「痛たた、ティア大丈夫？」

ビルに叩き付けられる瞬間、ティアが受け止めてくれた御蔭でダメージは少ない、

「ティア？」

無反応のティア、どうやら気絶しているようだった、

「なんだこの魔力は！」

異常な魔力を感じ前を見る、龍也さんが魔方陣を展開し、今にも砲撃が放たれる寸前だ

「スバル、お前の答えを見せてみろ」

そう言うと龍也さんは

「ヘルズ・・キャノン！！」

漆黒の砲撃を放った

「くっ！」

その場を離れようとするが駄目だ、ティアを置いてはいけない、こ

こで避ければティアは間違いなく重症を負う。私に出来ることは唯一つ

「相棒！カートリッジロード！！」

『カートリッジロード！！』

マッハキャリバーから空の薬莢が飛び出し、魔力を増加させるそして

「プロテクション！！！」

全力で龍也さんの攻撃を受け止めるだけだ！

「くっ・・・」

思ったより、砲撃の威力は低いがこうやって受け止めるのが限界だ

『相棒！頑張ってください！』

マッハキャリバーが頑張れという

「判ってるよ！大丈夫！」

そうは言うが徐々にプロテクションに皹が入る

（駄目だ！これ以上は持たない）

放射時間が予想以上に永い。これ以上耐えることは・・・

「うぅ・」

ティアの声が聞こえる、そうだ！守るんだ！さっきティアが私を守ってくれたように、今度は私が守る！！消えかけた闘志に再び火が灯る、その瞬間

（汝・・答えを見つけたり・・）

その声と共に世界が停止した

「これは・・・」

（汝が示し心は守ること・・）

お守りとして持っていた鍵が宙に浮かび、その姿を変える。

「狼？」

その場にいたのは機械で出来た赤と黒の鋭利なフォルムを持つ、機械の狼だった

「汝。我が主たる資格を持ちし者・・我が名は鋼鉄の孤狼・・ベオウルフ。我・・汝と共に覇道を駆けん！！」

大きく叫びを上げ赤い球体になり、マッハキャリバーにその光は飛び込んだ

『わっ！なんですか・・』

マッハキャリバーは驚きの声を上げると

『お前の体を取ろうと言う訳ではない。お前が主を支えるのだ』

静かに諭すようにベオウルフが語る

『王は強い、だが今王は一人、セレスもアイギナ達も居ない。ならば主とお前が協力すれば王を打倒できる。そして王の望む答えを示せ！』

マッハキャリバーが待機状態に戻るが、その色は赤い。そのクリスタルはゆっくりと点滅し、点滅が終るとベオウルフの気配は完全に消えた

『相棒・・行きましょう。龍也様に答えを示しましょう』

点滅するマッハキャリバーを確りと握り締める

「うん、行こうマッハキャリバー・・セットアップ・・」

バリアジャケットが展開されるがそれは少し今までの物と違っていた。白のバリアジャケットは真紅に染まり、胸部と肩と足には鎧が展開されている。ベルカの騎士甲冑とミッドのバリアジャケットが少しずつ融合した感じだ

「あれ？左手にもリボルバーナックルがある」

左手にはリボルバーナックルに似ているが、少しデザインの違う紅い篭手が装着されていた

『相棒、バリアジャケットの性能が大幅に上昇しています』

能力を確認している間に、停止した時間が徐々に動き始める

「相棒！プロテクション！！」

『了解！！』

全力でプロテクションを展開した、瞬間爆発が巻き起こった

「遣り過ぎたか？」

大分手加減したが・・・着弾時の爆発でスバルとティアナの姿は完全に消え、見る事が出来ない。

『龍也さん！！遣り過ぎですよ！！」

なのはの怒鳴り声が聞こえ、一瞬ビルから視線をずらした、瞬間

「ウィングロード！」

青い光の道が走り。その上をスバルが駆け抜けてくるが、バリアジャケットが多少変化している

「リボルバーブレイク！！」

左手の篭手に青い魔力光が集まり、そのまま殴りつけてくる

「はあっ！」

迎撃の為に拳を繰り出すが

（お、重い）

予想以上の攻撃の重さに耐えることが出来ず、後方に殴り飛ばされる

「まだですよ！」

ウィングロードの上を駆けてくるが

（速いっ！）

その速さは先程よりも遥かに速く、殴り飛ばされた私に追いつき

「てぇぇいっ！」

上空に蹴り上げる

「ぐっ」

空中で体制を立て直すが

「スフィアクラスターッ！！」

「！」

スバルの肩の鎧から、散弾の様なスフィアが次々打ち出された。反射的にプロテクションを使うが、貫通し幾つかは体に直撃する

「くぅっ」

ダメージは其処まで大きくは無いが膝を付く。すると私の目の前にスバルが立ち

「私が得た答えは守る力！この力で貴方を倒します！！」

答えを得たか・・だが私もそう簡単に負ける訳には行かないな・・立ち上がり拳を再び構え

「そう簡単に私を倒せるなどと思うな！」

私とスバルの拳が交差する。まだ戦いは始まったばかりだ

第４５話に続く

## 第４４話（後書き）

スバルのデバイスを変化させて見ました。
元ネタはスパロボのＯＧシリーズに登場する、古い鉄を意味するアルトアイゼンです。スバルとティアナはどこか、キョウスケとエクセレンに似ていると感じたので
そうしました。次回はティアナのデバイスが変化する番です。

そして龍也との模擬戦は結末はどうなるでしょうか？
楽しみにしていてください

## 第４５話（前書き）

募集を開始してから４日経ちましたが・・今だ一つも来ていません（悲）
やはり私の小説は面白くないのでしょうか？

まぁそれでもめげずに更新していきますが。

なので今回も前書きに書かせていただきます

現在技のアイデア募集中！！
読者の方のアイデアをお待ちしています

感想の方にたくさんの募集が来ることを願っています

# 第４５話

第４５話

「・・凄い・・」

目の前の光景が信じられなかった

ガンッ！ガンッ！

紅いバリアジャケットを身に纏った、スバルが龍也さんと同レベルで接近戦をしている

「・・・いや・・駄目だな」

演習場を見ながらヴィータちゃんが言う、確かにヴィータちゃんの言うとおりだ。最初の一撃は不意打ちに近かった為直撃を喰らっていたが、今スバルの攻撃は惜しい所まで行っているが。直撃はしていない。ふと視線を最初にスバルとティアナが叩き付けられたビルに向ける、ティアナは気絶しているのかピクリとも動かない

「ティアナ・・大丈夫かな？」

ティアナのことを心配しながら演習場に視線を戻した

「ここは・・・？」

私は気が付いたら、昔兄さんと暮らしていた家の中にいた。

「私は・・あれ?何をしていたの?」

何をしていたのかがすっぽり抜け落ちている。思い出そうとしていると

ガチャリ、音を立てて家の扉が開く

「ティアナ!ただいま」

入ってきたのは

「お・・兄・・ちゃん?」

「如何したんだ?お帰りは言ってくれないのか?」

悲しそうに言うお兄ちゃんに

「あっ。ごめんなさい。お帰り。お兄ちゃん」

笑顔で笑うお兄ちゃんと一緒に食事をした

「ティアナ!聞いてくれ、今度お兄ちゃん執行官になるんだ」

楽しく話をしているが、違和感を感じる

「如何したんだ?ティアナ食欲が無いのか?」

心配そうに此方を覗き込む。お兄ちゃん、だがこの時も違和感を感じる

「ううん、そんなこと無いけど・・・」

！思い出した、お兄ちゃんは・・・死んでるんだ

「貴方は誰？」

ピクリと眉が動き、目付きが鋭くなる

「ティアナそれは酷くないか？」

と悲しそうに言うが

「ううん、酷くないわ。だって・・・お兄ちゃんは執行官になれなくて死んだんだもの」

そう言うと。家が消え何も無いくらい空間に私とお兄ちゃんは居た

「もうばれちゃったか・・もう少し誤魔化せると思ったんだけどな・・」

口調や癖もお兄ちゃんそっくりで言うが

「幾らなんでも其処まで私は鈍くないわよ？お兄ちゃん」

「くく、まだ俺をお兄ちゃんと呼ぶか・・賢いお前なら判っているのだろう？」

楽しげに笑い問いかけるお兄ちゃんに

「ええ。これは私が夢見た理想の世界ね」

返事を返すと

「正解だよ。これはティアナが夢見た世界の一つ、俺が生きている世界の幻想さ」

笑っているお兄ちゃんに

「でも違うのもの・・お兄ちゃんは死んじゃったもの・・・こうして幻でも会えたのは嬉しいけど」

少し俯きながら言うと

「まあ・・騙した事は悪かったと謝るけど。これも試練でな」

パチンッ!指を鳴らすとお兄ちゃんの姿が消え。変わりに白銀の翼を持つ機械の鷹が姿を現した

「汝が望むものは何だ?」

威圧的な声で問いかけてくる鷹に

「私が望むものは・・・」

答えは決まっている。

「明日を切り開く翼です」

あの時龍也さんに答えた様に言うと

「汝。我が主たる資格を示したり、我が名は・・白銀の鷹。シュツルム、我、汝と共に大空を駆けん!!」

シュツルムが白い球体になり、待機状態のクロスミラージュと一体化する

『行くが良い。そして王にお前の答えを示せ!お前の相棒と共に!』

そして私の意識は現実に戻された

「ここは・・・そうだ演習場だ」

辺りを見回すとスバルと龍也さんが戦っているのが見える

「スバルも新しい力を手に入れたって事かな?」

スバルは紅いバリアジャケットを身に纏っている。

「私も行こう。クロスミラージュ行けるよね?」

『勿論です。龍也様に私達の力を認めて貰いましょう!』

力強く返事を返すクロスミラージュに笑みを零し

「行くわよ!セットアップ!」

クロスミラージュを起動させる

「大分違うわね・・・」

展開したバリアジャケットを見て呟いた。デザインは以前のバリアジャケットに近い物の、露出が少ない物になっていて大人っぽい印象を受けた。しかしそれより印象的だったのは

「翼・・？」

背中には白銀に輝く一対の翼があった

『どうやら、飛行魔法のサポート用の物の様ですね』

自身の体を覆うバリアジャケットを見る、なんと言うか天使のイメージかな？

『マスター、デバイスを具現化させますよ』

そんな事を考えている私の手の中に、大型のライフルが現れる

「凄いわね・・これ」

見た感じ可也大口径で、可也威力が有りそうだ

『マスター、どうやら、直線と散弾の２タイプに大型の大出力砲が使用できるみたいですね。マスターには残念ですが・・ストライクバレットは消滅していますね」

その事は残念だが、仕方が無いと割り切り

「行こう！スバルと協力して龍也さんを倒すわよ！」

『了解！』

クロスミラージュを構え、スバルと龍也さんが戦う所に向かった

「クッ・・強い」

先程から私の攻撃は掠りもしていない。確かに私の反応速度や攻撃力も上昇しているが龍也さんはそれ以上だ

「どうした？動きが鈍っているぞ？」

さっきの攻撃と違い、顔や腹は狙ってこないが。それでも避けたり防御するのがやっとだ。そんな事を考えていると

「うわッ！」

足払いを喰らい倒れかける

「まだ反射が鈍いな？」

龍也さんが肩目掛け、拳を繰り出してくるのが見える。来るであろう衝撃に備えようとするが

バキュン！バキュン！

上空から魔力弾が連続で龍也さん目掛け、放たれる

「ちぃ・・・」

舌打ちをしながら後方に跳躍しその弾を回避する。誰が？と思い上空を見る

「何やってるのよ？スバル」

白銀に輝く翼を羽ばたかせティアが降りてくる

「ティア？それは・・・」

「あんたと同じよ」

柔らかく微笑み浮かべていると

「話していて良いのか？」

体勢を低くして龍也さんが突っ込んでくる

「スバル、接近戦は任せるわ。私は上空からサポートするから」

そう言い上空に再び舞い上がると同時に

「玄武・・剛弾！！」

両手に蒼い魔力光を溜め殴りつけて来る

「リボルバーブレイク！！」

私も魔力光が宿った拳で殴り返した

ガンッ！！

鈍い音を立てて、拳と拳がぶつかる。やはり龍也さんの方は力が上なので少し押され気味だ

「ふっ！」

体を反転させて回し蹴りが放たれるが

「はぁっ！」

私も同じように蹴りを放つ

ガキン！

お互いの足の鎧がぶつかり鈍い音を立てる、だがやはりここでも力負けし体制を崩す

「喰らえっ！」

龍也さんの拳が放たれそうになるが

「私を忘れてませんか？モードショット。シュート！」

クロスミラージュから散弾が放たれる

「くっ！」

腕をクロスしてその弾を受け止める。この隙は逃がさない！大きく踏む込み

「リボルバーブレイク！！」
魔力を込めた拳で殴り飛ばす
「ぬうっ・・・」
そのまま苦しげな声を上げ、吹っ飛んでいく龍也さん。勝てる・・
私とティアなら勝てる！！。私はそう確信し追撃の為に駆け出した

「兄貴が押されてる・・」
信じられなかった、ノーヴェやディードが兄貴に一撃入れた事にも
驚いたが、今あたしの目の前で起きている事に更に驚いた。どこか
ら持ち出したは知らないがスバルとティアナのデバイスが変化して。
二人の動きが格段に良くなっている

「空戦魔導師みたいだね・・」
なのはが模擬戦を見ながら呟く。ティアナの動きはまるで最初から
空戦魔導師の様に鮮麗された、美しい機動を描いている。スバルも
兄貴よりかは劣るが兄貴の動きに付いて行っている。スバルが接近
戦に持ち込み、ティアナが隙を見て狙撃する、的確なコンビネーシ
ョンだ。兄貴の顔に余裕は無い真剣に二人の連携を崩そうとしてい
る。
「龍也さん・・押され気味だね」
なのは見ていてそう感じたようだ。あそこにあたしかなのはどちら

かが入ればまた違うかもしれないと思った

「大丈夫だ、幾ら二人の連携が良くても兄貴には間だ届かないぜ」

確かにスバルとティアナは押し気味だが。まだ兄貴には届いていない

「ほれ、見てみろよ」

スバルが突っ込みすぎて兄貴の反撃を喰らっている。ティアナも近接に持ち込まれ苦戦している

「簡単には兄貴には勝てないぜ」

ティアナがスバルの方に投げ飛ばされたのを見ながらあたしはそう呟いた。

「馬鹿スバル！あんなに突っ込んで如何するのよ！」

スバルが一時戦線を離脱した際に私もダメージを受けている

「う～御免。チャンスだと思ったんだ」

確かにさっきはチャンスだと思ったがそれは囮だった。やはり戦闘では私達まだ龍也さんに届いていない。龍也さんは拳を構えながら此方を見ている。やはり間だ龍也さんには余裕があるみたいだ。このままではジリ貧だろう・・何か大技で仕留める必要がある。そんな事を考えていると頭の中に一つの案が浮かぶ。昔兵学校でやったクロスシフトそれなら龍也さんに勝てる。

「スバル・・ちょっと耳を貸しなさい」

龍也さんは私達を試している。その証拠に龍也さんはこの大きな隙を突く事無く待っている、なら私達の全力を見せるまでだ・・考えた作戦をスバルに話す

「・・・判った、ティアを信じるよ？」

神妙な表情で頷くスバルに

「任せなさい、良い二人で勝つわよ」

さぁ・・行きますよ、龍也さん私達の切り札で貴方を倒して見せます！

「まず私が行くよ・・ウィングロード！！」

複雑に入り組んだウィングロードが展開されその上をスバルが駆ける・・

「さてと・・私も行きますか！」

自分自身の残像を大量に生み出す。そして

「ブラスターショット！！」

高速移動しながら、連続で砲撃を放つ。龍也さんが回避しようとするが

「させません！クラスタースフィア！！」

スバルの肩から龍也さんも使える散弾型の射撃魔法で動きを塞ぐ、
その止まった隙に連続で砲撃を放つ

「ぐうっ・・・」

雨の様に降り注ぐ砲撃の嵐が龍也さんを襲う、その内何発かはスバルに当たりそうになるが

（スバル！右後方のウィングロードに飛び移って！！）

（了解！ティア少し任せるよ！）

縦横無尽の張り巡らせたウィングロードはスバルの回避手段であり、
次の一手に繋ぐ為の布石だ

「はあああああっ！！」

全力だ後を考えず、全力で砲撃の嵐を放ち、スバルの姿を隠す

「く・・・プロテクション！！」

龍也さんがプロテクションを発動させる・・それが私がさせたかった行動だ。此処で一度砲撃を止める

「・・・スバルは何処だ？」

先程まで入たスバルの姿が見えない事に驚きの声を上げる龍也さんの上空から

「でやあああああっ！！」

全体重を乗せた踵落としを放ちながら落下してくるスバルの姿が見える。先程の砲撃の嵐それはスバルから意識をずらす為の囮だ

「スバル！？」

咄嗟に腕をクロスさせてその踵落としを防ぐが、砲撃の嵐とスバルの渾身の一撃で、強固な龍也さんのプロテクションは完全に砕けた

「まだまだぁ！！」

着地と同時に強烈な膝蹴りを放つ

「ぐふっ・・」

動きが止まる龍也さんに

「でやあああああああっ！！！！」

スバルが高速でラッシュを叩き込む

「ぐっ・・がっ・・・」

苦しそうにう呻き声を上げる龍也さんに

「ティア！そっち行くよ！！」

此方目掛け全力で殴り飛ばす

「ナイス！スバル！！」

待機していた場所にピンポイントで飛んで来る龍也さんの背中に

「ブラスター！！フルパワーショット！！！」

銃口を押し当て全力の砲撃を撃つ

「ぐあッ！」

その砲撃に押され凄まじい勢いでスバルの方向に押し戻す

「カートリッジロード！！」

スバルがその真下でカートリッジを消費し

「ヘブンズ・・・ナックル！！！」

龍也さんに教えて貰った技を放つ

「がっ・・・」

バキン！！

水色の光を帯びた拳が龍也さんに命中する。その瞬間音を立てて騎士甲冑が砕ける・・だがこれでまだ終わりではない！！

「ティア！！」

水色の魔力光に押され此方目掛け龍也さんの体が浮かび上がってく

る。間に

「カートリッジロード！！」

これが私の全力魔法・・・

「ファントム・・・ブレイザーッ！！！！」

私のファントムブレイザーとスバルのヘブンズナックルがぶつかった瞬間爆発が起きる。辛うじてそれから離脱する。余波に巻き込まれないよう、ギリギリのタイミングで上空へと離脱した。そしてフラフラの状態で着地する。魔力も体力も限界だ

「決まったかな？これで倒せてなかったら・・・」

幾ら龍也さんでもこれは耐えれないと思うが・・・

ガチャッ！ガチャッ！

爆炎の中から龍也さんが姿を見せる

「そんな・・あれでも倒せなかったの？」

スバルが驚きながら言うと

「・・・全く・・・お前たちには驚かされる・・まさか私を・・始めて倒すのがなのは達じゃなくて、スバルとティアナとは・・な」

グラッ！ドサリッ！！

音を立てて倒れこむ龍也さんに驚き、慌てて駆け寄る

「・・・気絶してる・・・」

完全に意識を失っている様だった

「「やった!!龍也さんに勝った!!!」」

嬉しくて大きな声で勝ち名乗りを上げた瞬間。立ち眩みがしてふらつく

「ティア・・ごめん私・・もう限界・・」

スバルも疲労で倒れる

「私もみたいね・・・」

意識を失う前に見たのは心配そうに此方に駆け寄る、なのはさんとヴィータさんの姿だった

「まさかお兄さんがスバルとティアナに負けるなんて」

医務室に気絶したお兄さんとスバルとティアナをつれて、なのはちゃんとヴィータちゃんが来た時は本当に驚いた。しかもお兄さんがスバルとティアナに負けたと聞いたときは信じられなかったが、診察してみるとスバルとティアナよりダメージが可也酷い。

「魔力が限界まで削られてますね・・・やれやれどんな攻撃をしたんですか?」

お兄さんが眠るベッドの隣で同じように眠りに付く、スバルとティアナを見てそう呟くと

「シャマル。主はやてが呼んでいる。模擬戦の様子を記録した物を皆で見るそうだ」

「判りました」

シグナムと共に医務室を後にし、はやてちゃんの部屋に向かった

「シャマルも来たか・・・はぁ～信じられへんけど、兄ちゃんがスバルとティアナに負けたみたいや」

自分の机に座りながらはやてちゃんが大きく溜め息を吐く、はやてちゃんも信じられないみたいだ

「本当？なのは龍也が負けたって？」

フェイトちゃんが信じられないとと言う表情でなのはちゃんに言うと

「私も・・信じられないよ。龍也さんが負けるなんて。でも本当だよ・・これを見てくれれば判るよ」

レイジングハートから映像が移しだされる、最初の方はお兄さんが押していたが、突然スバルとティアナのデバイスが変化してからはお兄さんが押され始めていた、そして最後に映し出されたのはスバルとティアナの連携攻撃を喰らい、倒れるお兄さんの姿だった

「う～。兄ちゃんが負けた・・・」

その映像を見て不機嫌そうにはやてちゃんが言うが

「しかし・・どうしてスバルとティアナのデバイスが変化したんだ？」

シグナムが映像を見て疑問に感じたことを言う、それは私も気になっていたが考えても判らない、セレスはお兄さんに付いていると言い、医務室に私と入れ違いで来ていたので此処には居ない・・それを言えばエリオとキャロも居ないが

「うー、考えても判らへんから。兄ちゃんが起きてから聞こうか？」

デバイスの件は此処で切り上げられた

「所でシャマル、兄ちゃんとスバル達の様子は？」

はやてちゃん、やっぱり気になるみたいね

「大丈夫よ、３人共魔力ダメージで気絶してるだけなんだけど・・・ね」

言いにくい事が一つだけあった

「どうしたの？」

フェイトちゃんが不信に思ったのか尋ねて来る、隠すのも無理なので正直に言うことにする

「その・・・スバルとティアナの顔に怪我が・・・」

時間がたてば完全に消えるだろうが、確かに二人の顔に切り傷があるのだ

「・・マジか・・・」

はやてちゃんの顔が絶望一色に染まる・・お兄さんの性格からして女の子の顔に傷をつけたなると、責任を取るとか言い出しかねない皆その結論に到達したようで、次の瞬間

「嫌やーーー、兄ちゃんがスバルとティアナに取られるー！！！！」

頭を抱え絶叫するはやてちゃん

「嫌だ～兄貴がー！！！」

ヴィータちゃんも今にも泣き出しそうな顔で絶叫している

「なのは・・・スバルとティアナ・・・殺ろうか？」

「うん・・それで行こう」

怖い笑みで部屋を出て行こうとするなのはちゃんとフェイトちゃんに

「大丈夫だから！傷は消えるから！！と言うか私が消すから落ち着いて～！！

ううう・・お兄さん恨みますよ・・もう少し考えて模擬戦して下さい。暴走しかける皆を止める為に多大な労力を消費した事を此処に記しておく

第４６話に続く

## 第４５話（後書き）

今回もバトル中心の話でした。
日常やほのぼのは楽なんですけどね・・戦闘となるとどうしても執筆速度が遅くなってしまいます・・
バトル描写のアドバイスと感想、それと技のアイデアをお持ちしています、

次回はティアナのキャラが強いですね・・でも私の作品のキャラは性格の変化が凄いですね・・・私の小説でも読んでくださって、評価をくれる方が居る限り。
更新して行こうと思いますのでこれからも宜しくお願い致します

# 第４６話（前書き）

どうも、混沌の魔法使いです

技のアイデアはまだ一つも来ていません・・

やはり私の小説は面白くないのかと思い始めましたのですが。

それで今日始めてアクセス解析と言う物があるのを知り、見て驚きました

通算３１０，０００もアクセスが来ていました、それを見て読んでいて下さる方が居るんだなと凄い安心感を得ました

なのでこれからも頑張って更新していきたいと思います

感想、技のアイデアは常時お待ちしているので。宜しくお願いいたします

記念小説も載せたいと思っています、唯いまある番外編のストックは、本編完結後の話になるのでネタバレになると思うんですよ。やはりネタバレは良くないと思うんです。なので見たいと言う意見が一つでもあれば番外編として投稿したいと思います（ちなみに番外編はヴィヴィオがメインですね）

少々前書きが長くなりましたが本篇　始まります

# 第４６話

第４６話

「うっ・・・ここは・・・医務室か？」」

目を開くと同時に軽い頭痛がした

「王よ、お目覚めになりましたか？」

ベッドの横にはセレスが腰掛けていた

「セレス・・ああ大丈夫だが・・しかしスバルとティアナに負けるとは思わなかったな」

セレスの手を借りて上半身を起こす。思ったよりダメージが大きく出ているようだ

「・・・なんでスバルとティアナも寝てるんだ？」

私が寝ていたベッドの隣ではスバルとティアナが眠っていた

「魔力の消費で気絶したようです・・それより立てますか？」

「問題ない」

少々体がだるいが大して気になる事ではない

「はやて様達が聞きたいことがあるそうですよ」

「・・デバイスの事か？」

思い当たるのはそれだけだが、私にも判らないことがある

「まさか・・融合するとは思わなかったのだが・・・」

今まで天雷の書からデバイスを得たのは。チンク達のみそれは天雷の書に記されたままの形だった。恐らくスバル達も同じだろうと思っていたのだが。まさかマッハキャリバーとクロスミラージュに融合するとは思っても居なかった事だ

「私もですね・・」

セレスも判らない様だ

「まぁ・・此処で話していても変わらんから、はやての部屋に行くか・・」

枕元の机に置かれたコートを着ようとするが

「王、今の貴方は疲労しています。そのコートを着るのはオススメできません」

と言われてコートを取り上げられてしまった

「判った・・・」

何時も来ているコートが無く、少し違和感を感じるが、セレスの言う通りなので着る事を諦め。私とセレスははやての部屋に向かった

「・・・帰っても良いか？」

はやての部屋の前で私は隣のセレスに尋ねたその理由は

『シャマル！そこ退いて！！スバルとティアナにお話出来ないでしょ！！』

『シャマル・・邪魔しないで・・・』

『いやー！！デバイスを振り回さないでー！！！！』

ドタドタッ！と暴れまわる音がし、更にはシャマルの悲鳴が断続的に聞こえてくる

『くすんっ・・兄貴がスバルとティアナに取られるなんて嫌だ・・・』

『こうなったら・・もう兄ちゃんを押し倒すしか・・・』

『ヴィータも主はやても落ち着いてください！』

シグナムの絶叫が扉越しにもしっかり聞こえてくる

「・・・駄目です・・」

セレスも不安げで言う。今この扉を開けば待っているのは混沌（カオス）だけだ

「大丈夫ではないでしょうか？王が行けば事態は収拾されるでしょう」

不安を感じながらはやての部屋の扉を開いた

「二人とも落ち着いてー！！」

シャマルが必死にレイジングハートとバルディシュを押さえ込んでいるが

「先にシャマルからお話しようか・・？」

「邪魔するなら消す・・・」

なのはとフェイトの怒りの矛先がシャマルに向き始めている・・と言ってもなんで怒っているのか判らない

「もう薬でもなんでも使ってまうか？でもそれは私が嫌やな・・・」

「兄貴っー！！！！！」

「二人とも落ち着いてください！！」

シグナムが物凄く消耗した様子で私の方を見る

「・・・・・」

見なかった事にし部屋から出て行こうとする私と目が合う

「兄上！！何処へ行くのです！！！」

ザッ！！はやて達が一斉に此方を見る

「兄ちゃん！」

「兄貴！」

「龍也！」

「龍也さん！」

「お兄さん、助けてください！！」

どうやら逃げ道は完全に絶たれたようだった・・観念し私は

「何があったんだ？」

と問いかけ話を聞き始めた。支離滅裂で何を言っているか良く判らなかったが、幾つかキーワードを聞く事に成功した。負けたのか、スバルとティアナの顔に傷、汚されてないか等だ。最初の二つは判るが最後は意味不明だった、言いたい事が言い終わったのか落ち着きを取り戻したなのは達に一安心し

「シャマル・・・大丈夫か？」

燃え尽きたという感じでソファーに座り込んだ、シャマルは

「お兄さん・・・私は疲れました・・・・ガクッ」

そう言い残し意識を手放した

「シャマル？・・・おい大丈夫か？」

揺すって見るが全くの無反応、どうやら完全に落ちたらしい

「所で兄上、如何してスバルとティアナのデバイスが変化したのです？」

気絶したシャマルはソファーに横にしている。今回最も被害を受けたのは間違いなくシャマルだろう

「私も判らんな・・チンク達は普通にデバイスとして手にしてたしな」

私も判らなくて首を傾げるが

「・・兄ちゃん・・チンクさん達も同じようなデバイスを持ってるん？」

はやてが向かい側に座り尋ねてくる

「まあ・・そうだな、・・・所でヴィータ離れてくれ」

先程から私にしがみついて離れないヴィータに離れるように言うが

「やだ・・・・・」

離れる気は無いようだ・・そんな事を思っていると

「龍也さん・・私も座って良いですか？」

「龍也・・・ごめんなさい」

デバイスを取り出し暴れた二人は現在正座中だ

「話し終わるまでそのままで我慢していろ、・・まったくデバイスまで取り出して何が原因なんだ」

二人からデバイスを取り上げ、レイジングハートに話しかけると

『龍也様・・そのマスターはスバルとティアナの顔に怪我があると聞いたら、暴れだし始めまして』

言いにくそうにレイジングハートが言った

「・・・・顔に怪我か・・不味いことをしたな・・・」

あの時は気付かなかったが、どうやらスバルとティアナは顔に怪我をした様だ

「兄ちゃん・・責任取るとか無いよな・・？」

「何のことだ？そんなに深くないんだろう？それなら私が治せるが・・・何か埋め合わせをしないとな」

そこまで深くないなら私が怪我は治せるから問題ないだろうと言う。それより倒されてしまったので何か言うことを聞かないと、と私は考えていた・・二人とも常識人だから無茶な要求はないと思うが・・・そんな事を考えていると

「ほー良かったわ」

物凄く安堵した表情で呟くはやてを見ていると立っていたセレスが

「王、話がずれています、デバイスの件はどうなったのです？」

セレスの言葉で思い出した、そう今の問題はスバルとティアナのデバイスの件だ

「そうやったな・・・」

はやても完全に忘れていたようだった

「兄貴ー♪」

しがみついているヴィータは笑顔のままだ、いい加減離れてくれるとありがたい

「「足が・・・痺れました」」

なのはとフェイトは足が痺れダウンしている、

「それで兄ちゃん何か判ってることは？」

はやてが身を乗り出しながら尋ねてくるが

「まぁ・・私が言えることは一つだな・・使う分には何も問題がないそれだけだ」

事実それ以上言えることも判っている事も無いので、この話は此処で終了となり解散となった。ただシャマルだけはスバルとティアナが心配だからと医務室に戻っていった。私は自室に戻りながら

（顔に傷か・・・治せれば良いけどな）

スバルとティアナの顔の傷が気になっていた

「ここは？」

目を覚ますと白い天井が目に入った

「あっ！ティアも起きた？」

隣のベッドからスバルの声が聞こえ隣を見る、左の頬にガーゼを張ったスバルが笑っていた

「スバル、ほっぺ如何したのよ？」

「・・・ティア、自分の右の頬見てみなよ？」

呆れた感じのスバルに言われ鏡を見ると私の頬にもガーゼが張られていた

「シャマル先生が言うには浅いけど切り傷があるんだって」

スバルと話をしていると

「あら？ティアナも起きた？」

シャマル先生がカルテを見ながら

「怪我は大したことないわ、ちょっと顔に切り傷があるけどこれも問題なし。時間が経てば治るから心配ないわ」

体の状態を丁寧に説明してくれるが

「あの・・龍也さんは？」

私達と同じで気絶した筈の龍也さんの姿が見えないので尋ねてみると

「お兄さんはもう自分の部屋で休んでるから大丈夫よ。・・・それより食欲はある？」

そういえば空腹感があると感じた。どうやらもう夜のようだ

「シャマル先生、私は食欲あります！！」

スバルが右手を上げながら言うと

「判ったわ、じゃあ今から何か持ってくるから待っててね？ティアナも食べるわよね？」

「はい、お願いします」

シャマル先生に食べると言うと微笑み、医務室を出て行った。暫くしてサンドイッチをトレーにを乗せたシャマル先生が戻ってきた。

サンドイッチを食べ終わるともう部屋に戻っても良いと言われ、二人で自室に戻った

「ティア・・私達龍也さんに勝ったんだよ」

スバルがポツリと語り始める

「そうね・・私達は龍也さんに勝ったわ」

ゆっくりと返事を返した

「・・・一撃入れたら、言うことを聞いて貰えるんだよね？」

スバルが思い出したように言う

「そうね・・・その筈よ」

私も忘れていたがその約束の筈だ

「何お願いしようか？」

スバルが何を頼む？と尋ねてくるが、私が頼むことは既に決まっている

「・・・スバル・・・今から龍也さんの部屋に行くわよ」

「へっ？もう夜だよ、迷惑になるんじゃ」

スバルが聞き返してくるが

「嫌なら良いわ、私だけで行くから・・じゃあね」

「ちょっと待って、私も行くよ」

二人で龍也さんの部屋に向かった

「ねぇ・・ティア・・なに頼むの・・・」

不安げに言う、もし此処でなのはさん達に見つかれば確実にお話し、ヴィータさんや部隊長なら間違い無く死が待っている

「行けば判るわ。それより大きな声出せないで見つかるから」

私達は無事に龍也さんの部屋の前に到着した

コンコン！ノックをすると

「誰だ？用があるなら入ってきてくれ」

と声がしたので龍也さんの部屋の中に入る。

「スバルとティアナか、怪我はどうだ？」

本を片手に怪我の事を聞かれた

「大丈夫ですよ？直ぐに治るみたいですから」

そうかと頷き再び本のページを捲る龍也さんに

「私とスバル、龍也さんに一撃入れましよね？」

「そうだな・・それで来たのか？」

頷き紅茶を飲みながら本を読む龍也さんに

「ええ、一撃入れたから言うことを聞いて貰えるのかの確認に」

「言ったことは守るよ?正し無茶な物意外だぞ・・」

穏やかに笑う龍也さんだが、私達の顔のガーゼを見て

「顔の怪我はどうだ・・・」

心配そうに言う龍也さんに

「平気ですよ、でも顔は少し酷いんじゃないですか」

「そうだな・・・それは悪いと思っている。何か出来る事ならするが?」

この言葉を待っていた

「それじゃあ、一撃入れたのとは別に、一つ言うことを聞いてくれませんか?」

スバルは何を頼むのかと首を傾げている

「別に構わないが?」

良し、言質取った!

「それじゃあ、聞いて貰えます?私達のお願いを」

「だから構わないと言っているだろう?」

と笑う龍也さんに

「それじゃあ、今日一緒に寝ても良いですか？」

「「ぶふぉっ！！！」」

スバルと龍也さんが同時に噴出す、紅茶を口に含んでないのがせめてもの救いだろう

「何を言っている！」

「ティアー！何言ってるの！！」

二人が同時に言うが

「別に深い意味がある訳じゃないですよ？唯一緒に寝たいと思っただけですから」

そう深い意味はないから問題ないのだ、

「いや・・だが・・その・・何だ」

龍也さんがしどろもどろで何とか止めさせようとするが

「何ですか？龍也さんは私達に変なことをする気ですか？」

スバルは完全に脳の処理を超えたのか真っ赤でぶつぶつ言っている

「するかっ！！！」

即座に切り返してくる、龍也さんがそんな事をしない人とは私達が十分理解している

「じゃあ問題ないじゃないですか」

何も言えなくなった龍也さんに

「さっき言ったじゃないですか?言うことを聞いてくれるってそれとも嘘を付くんですか?」

龍也さんの逃げ道は完全に絶った

「・・・判った・・正し一つだけ条件がある」

龍也さんが妥協案を出した

「少し計画がずれたわね」

ティアが隣でブツブツ呟いている。龍也さんが出した案それは、一緒の布団で寝るのは駄目だ。正し同じ部屋なら良いという物だったティアは不満そうだが私はこれで良い、幾ら龍也さんが好きでも恥ずかしいからだ、普段龍也さんが使っているベッドで私とティアが眠り、龍也さんは床に直接布団を引いて既に眠っている

「ねぇ・・ティアは何でこんな事を頼んだの?」

気になっていた事を問いかけると

「そうね、どうしてかな？・・・・今思うと凄く恥ずかしいわ」

ティアも冷静になったのか真っ赤だ

「でもこういうのも良いかもしれない・・」

既に眠っている龍也さんを見ながらティアが呟く

「もう寝ちゃってる龍也さんが凄いと思うけど」

私達が龍也さんと一緒の部屋と言うだけで緊張して眠れないのに、・・もしかすると私達は女として見て貰えてないのかも知れない、そう思うと少し寂しい気もするが、今は此れで良いそんな風に思っている

「スバル。私達のデバイスどうしたんだろうね・・」

ティアが待機状態のクロスミラージュを持ち上げ呟く、

「そうだね・・」

私達のデバイスは全く別物になってしまっている。説明では太古のデバイスと融合したと聞いてるが。それ以上の事は龍也さんでも判らないらしい・・・でも一つだけ判ってることがあるそれは・・・

「でも・・マッハキャリバーはマッハキャリバーだよね！！」

どれだけ姿が変わろうとそれだけは変わらない

『相棒・・はい、その通りです』

待機状態のマッハキャリバーが光る

「そういう事よね、クロスミラージュもそれは同じでしょう？」

ティアも同じ様にクロスミラージュに問いかけている

『はい。その通りです・・』

クロスミラージュが返事を返す、その様子を見ながら

「「それに此れは私達が答えを得た証」」

デバイスの変化は私達が答えを得た証なのだ、そう思うと自然に笑みが零れた

「「これからも宜しくね、マッハキャリバー（クロスミラージュ）」」

『『此方こそ、宜しくお願いします』』

力強く返事をする己デバイスに笑みを零しながら、私達は眠りに付いた・・

きっとこれからも私は歩いていけるだろう。出来ればその時龍也さんが隣を歩いてくれたら良いなと思った。

第４７話に続く

## 第４６話（後書き）

何でしょう・・段々はやてが病み始めました・・
当初の性格から徐々にずれ始めています
どうしてこうなってしまったのでしょう？
作者は判りません・・

次回ははやてが怖くなるかもしれません・・
でもこれもありかなと作者は思います
それでは暫しの間お別れです、次回の更新をお楽しみに・・・・

## 第４７話（前書き）

今回は少々難しかったです。
どうしてもはやてが病んでしまいまして。結果的にもうこれで行く事にしました

現在技のアイデア、感想をお待ちしています

それと誤字脱字に気をつけていますが、もしあったら連絡をお願いします

追伸　活動報告始めました、一度見て下さると嬉しいです

それで本編どうぞ

# 第４７話

第４７話

「ううん・朝か」

ベッドから抜け出し辺りを見る

「あれ？ここ何処・・・私の部屋じゃないわね？」

どう見てもこの部屋は私の部屋ではない

「すぅ～すぅ～」

ベッドからスバルの穏やかな寝息が聞こえる、そこで思い出した

「そうだったわね・・昨日龍也さんの部屋で寝たんだ・・・」

今思えば恥ずかしくて顔から火が出そうだ、

「・・・龍也さんは？」

龍也さんが寝ていた布団は既に畳まれており、その姿は無い

「もう起きてるのかな？」

そう思い、寝室から出ると

「うん？・・もう起きたのか？おはよう。良く眠れたかね？」

本を片手に挨拶して来る。龍也さんに

「はい・・良く眠れましたよ。偶にこの部屋で寝たいですね」

若干からかいの意味を込めて言うと

「・・・今回限りで頼む」

疲れた様に言う龍也さんが少し可愛く見えた

「所で紅茶かコーヒー、それともココアどれが良い？」

立ち上がりキッチンに行く龍也さんに

「紅茶でお願いします」

以前まではどちらかと言えば、コーヒー派だったが。龍也さんの紅茶を飲んでからは紅茶の方が好きだ

「少し待っていてくれ」

そういってキッチンに消えた龍也さんの隙を見て。部屋の中を見てみる

「物凄く整理整頓とされてるわね・・」

男の部屋だからもう少し汚いかなと思っていたが。部屋の中は凄く綺麗だ

「あ・・・やっぱりこの写真飾ってあるわね」

部屋の中を見ると依然見かけた写真が飾ってあった。幼い頃の部隊長達に囲まれて困ったような笑い顔を浮かべてはいるが、実に幸せそうな顔をしている龍也さんの姿がある

「今度一緒に写真とって貰おうかな・・」

そう思い椅子に座りなおしたと同時に

「待たせたな」

二人分の紅茶を持って龍也さんが戻ってきた

「熱いから気をつけろよ？」

龍也さんと紅茶を飲みながら暫く世間話をしていると

「おはようございます・・・」

眼を擦りながらスバルが寝室から出てくる

「おはよう。良く眠れたかね？」

そう尋ねるとスバルは

「良く眠れたと思いますよ」

椅子に座りながら返事を返したスバルに

「それは何より、所で紅茶かコーヒー、それともココアどれが良い？」

私と同じようにスバルに尋ねると、スバルは少し迷った素振りを見せてから

「ココアでお願いします」

了解と言い龍也さんがキッチンに消えた、間に

「どうしてココアなのよ？あんた紅茶好きじゃなかった？」

記憶ではスバルは紅茶が好きな筈だが

「そうだけど、ヴィヴィオがココア美味しそうに飲んでからかな？」

そういえば、エリオや達にはココアを良く作っていた。確かに美味しそうに飲んでいた

「そういえばそうね」

そんな事を話していると

「ほら、スバル出来たぞ」

ココアのマグカップをスバルの前に置き、椅子に座った龍也さんは本を読み始めた。その様子を見て、龍也さんは本当に本が好きなんだなと思った。そんな事を考えてると勢い良く部屋の扉が開けられ部隊長が笑顔で入って来たが

「兄ちゃ～・・・スバル、ティアナがどうして兄ちゃんの部屋に・・・」

最初笑顔、終わり黒い笑みで笑う部隊長。・・・殺される!?物凄い殺気だ

（ティアナ、スバル、話を合わせろ。じゃないと今日が二人の命日になるぞ）

龍也さんもその殺気を感じ取ったのか。小声で注意してくる

「兄ちゃん、説明を要求します。事と次第によってはスバルとティアナを抹殺します・・・」

・・・抹殺!!・・・・殺される!?部隊長は本気で私達を殺しかねない

「デバイスの事を聞かれていたのだが?」

顎の下に手を置き考え込む素振りを少し見せ

「・・そうか～そりゃ自分のデバイスが急に変化したんやもんな。気になるわな」

笑顔で言うが、その目はまだ確り私とスバルを捕らえている

「でもこんな朝から人の部屋に押し掛けるのは失礼やと思うで?」

部隊長の目が言っている、早く出て行けじゃないと・・・殺す!

「「はい。それじゃあ龍也さんまた後で！！」」

私とスバルは逃げる様に龍也さんの部屋を後にした。

「兄ちゃんも兄ちゃんや、こんな朝の早よから女の子を部屋の中に入れたらあかんで？」

はやては向かい合う様に座り言う

「はやては良いのか？」

その言葉に従うとはやてもここに居てはいけない筈では？と思い言うと

「当たり前やろ？兄ちゃんの部屋に妹が行くのは何かおかしい？」

正論だな・・

「まぁ・・そうだな、それで何の様だ？」

「うん？唯一緒にご飯食べに行こうって誘いに来ただけや」

紅茶を口に含み微笑みはやてが言う

「もうそんな時間なのか？」

時計を見ると確かに朝食の時間まであと少しだ

「そうや、だから一緒に行こ？ご飯食べに」

にっこりと微笑むはやてと共に食堂に向かった

最悪やね・・兄ちゃんの隣を歩きながら私はそう思った

（朝兄ちゃんの所行ったら、スバルとティアナが居るなんて最悪の朝や）

「はやて？どうした怖い顔をしているが？気分でも悪いのか？」

「何でもないで、気にしんといて」

しまったな～考えが顔に出てたか、気にしないでとは言った物の兄ちゃんは心配そうにこっちを見ている

「あっ！はやてちゃんにお兄様おはようです！！」

曲がり角からリィンがやって来て、おはようと笑いかけてくる

「リィン、おはよう。良く寝れたかな？」

「おはようさん、リィン」

兄ちゃんがリィンの頭を撫でながら笑う

「お兄様とはやてちゃんもご飯ですか？リィンも一緒に行くですよ？」

リィンが私の肩に乗り笑う、本当リィンと居ると和むなぁ、さっきまでのモヤモヤした感じが消えたわ

「そうだな、一緒に行こうか？」

「はいです！」

私と兄ちゃんとリィンの三人で食堂に向かった

「席が空いてないですね～」

少し出遅れたので空いてる席が見当たらない、三人で如何したものかと考えていると

「お父さん！こっちですよ」

エリオが手を振って呼ぶ、どうやらエリオが座ってる席は空き椅子があるようだ

「あそこで食べるとしようか？」

私は兄ちゃんと一緒にご飯食べれるなら何処でも良い。なのでエリオの呼ぶ席に行ったが

「「あっ・・・・」」

エリオとキャロがいる席に行くとそこには

「スバルとティアナも一緒か」

兄ちゃんとリィンは何事も無い様に座るので、私も座るが正直言って不快以外の何物でもない。でも兄ちゃんが一緒やから我慢する、他に席空いてたら最高やったな・・そんな風に思いながら食事をする

（あんま、美味しないわ・・・）

普段美味しいと思える食事も今朝の一件の所為で味気なく感じる

「あっ！部隊長に八神中将ここ良いですか？」

トレーを持ってシャーリーが歩いてきて笑う。兄ちゃんが居るだけで対外の隊員は合い席を断るが、そんな事を気にしないのはシャーリーとヴァイス君くらいだろう

「良えで」

「すいません、部隊長席が空いてなくて」

人なつっこい笑みで腰掛けるシャーリー、はぁ・・・これで少しは美味しくご飯が食べれるわ

そんな風に思いながら食事を再開した

「八神中将、スバルとティアナのデバイスが変化したそうですね」

朝食を終え、思い出したようにシャーリーが言う

「そうだな、天雷の書のデバイスと融合して全くの別物に成っている」

前までのデバイスと比べて強力になってるし・・・思い出した、二人共兄ちゃんに一撃入れてるから言うこと聞いて貰えるやったな。何とかせなかんな。そんな事を考えていると

「スバル、ティアナ。クロスミラージュとマッハキャリバー私に預けてくれない？構成とか調べてみたいから」

機械オタ・・・いやメカニックデザイナーの血が騒いだのか、デバイスを預けるようにスバルとティアナに言う

「判りました・・どうぞ」

「壊さないでくださいね？」

スバルは普通に渡したが。ティアナは壊さないでくださいといってから手渡した

「ふふ。大丈夫、大丈夫。少し構造とか調べてみたいだけだから」

シャーリーは待機状態のクロスミラージュとマッハキャリバーを懐にしまい、怪しい笑みを浮かべた

「シャーリー、言って置くが無茶なことはするなよ？」

兄ちゃんが不安げ言う、かという私も若干不安だ

「無茶しちゃいけませんよ！きっと大変なことになるです！！」

リィンが慌てて言う、きっと本能的に感じ取ったのだろう

「きゅくっ！きゅくっ！」

フリードも前足を上げ鳴いている、やはり何か危険なのかもしれない

「お父さん、大丈夫なんですよね・・・」

エリオもリィンとフリードの慌てように不安げに言う

「大丈夫だ・・何かあってもシャーリーにだ、私達には関係ない。シャーリーの自業自得だ、つまり自己責任だ気にするな」

兄ちゃんはシャーリーを止めるのを諦めたようだ。だが私も無理だと思う

「ふふふ・・・二日くらいかな～構成調べて、スペックも全部調べてみたいな～」

シャーリーは上機嫌で食堂から消えた、ん？二日・・・これや！この二日を使わせて言う事を聞いて貰える権利を消滅させる

「スバル～、ティアナ～、少し話しがあるんやけど？」

「「ヒィ！・・・何ですか？」」

スバルとティアナが悲鳴を上げるが、二人にも悪い話ではないはずだ

「兄ちゃん、私、スバルとティアナに話があるからもう行くわ」

半強制的にスバルとティアナを連れ部隊長室に向かった。

「さて・・・二人にはとても大切な話があります」

「ははははは、はい」

二人とも顔が真っ青だ。・・・そんな怯えんでも良いやん、

「さて・・二人は兄ちゃんに一撃入れました約束で言うことを聞いて貰えます。それに間違いあらへんな？」

「ははは、はい。仰るとおりです」

・・・なんでこんなに怯えるんよ

「さてそれで二人がデバイスが2日ありません、だから今日と明日。兄ちゃんとデートする許可を与えます」

「はっ？」

二人の目が点になる。

「だから！今日と明日。兄ちゃんとデートする許可を与えるん言うとるんや！！！」

本当は嫌で嫌で仕方ないが、こういう形で言うことを聞いて貰える権利を消滅させるしかない

「正し。条件がある」

1、兄ちゃんの唇を奪わない事（頬ならギリギリ許可）

2、兄ちゃんに迫らない

3、門限までに帰ること

「・・・これさえ守れば。龍也さんとデートしても良いと？」

ティアナが確認してくる

「そうや。正し言う事を聞いて貰える権利はそれで消滅や」

下手なことを頼まれるくらいなら、嫌だけど兄ちゃんとデートさせたほうが良い

「ティア、どう思う？私はこれで良いけど？どの道買い物に付き合って貰おうと思ってた訳だし」

「私もね・・妨害されるくらいならこの条件を呑んだほうが良いわ」

中々頭が回るみたいやな・・勝手に買い物に兄ちゃんを連れ出したら妨害するやったしな。

「その条件で良いです」

話し合った結果、私の出した条件で良いと言うスバルとティアナに

「んじゃ、二人で話し合ってどっちからデートするか決めや。ああそれと・・もう行って良いで」

二人が出て行き、独りになった部屋で

「はぁ～本当は嫌で嫌で仕方ないけど我慢しよか・・・」

そう呟き書類整理を始めた

第４８話に続く

## 第４７話（後書き）

次回はスバルメインでその次はティアナにする予定です

今回の話しは少々時間が掛かってしまいましたが、これからも本作を宜しくお願いします

## 第４８話（前書き）

今回は前回の後書きに書いたとおりスバルがメインの話になります

上手くデートの雰囲気が出せているかは判りませんが、楽しんで呼んでくださると嬉しいです。

それと鳴神様とアルト様の感想で、作者のテンションがＭＡＸになり、

一気に次の話も完成したので今回は２話連続投稿です。

楽しんでくだされば嬉しいのですが、それでは本編始まります

# 第４８話

第４８話

「それでどっちから龍也さんを誘う？」

自室でどちらが先にデートするか話す

「私はどっちでも良いよ？」

スバルは一緒に出かける事が出来ると言う事で可也満足なようだ

「それじゃあ、今日はスバルが行ったら良いわ」

私はやはり色々と準備をしたい、服や髪型、アクセサリーとかも考える時間が欲しかった

「良いの？」

自分が先で良いのかと尋ねるスバルに

「良いから早く着替えて、龍也さん誘って出掛けて来なさいよ」

早く行かないとデートする時間が減ってしまうから早く行くように言う

「うん、じゃあ着替えてくる・・・ティア服貸してくれない？」

着替えに自室に戻ろうとした瞬間振り返り、服を貸してくれと言う

スバルに

「しかたないわね、良いわ来なさい。何か服を貸してあげるから」

私の服でスバルに似合いそうな物を幾つか選び渡す。選んだのは少し厚めシャツの上に半袖の上着と下は膝丈ほどのスカート。活動的なスバルにはワンピースよりかはこういう服が似合う

「ありがとうティア、じゃあ行って来るね」

渡した服に着替えたスバルは龍也さんの部屋に向かって行った

「さてと・・私も服考えよう」

クローゼットを開き、明日のデートの為の服を選び始めた

「うう・・凄い緊張する・・・」

龍也さんの部屋の前に来た物の、いざ誘うとなると緊張して体が硬直する

「でも早く誘わないと・・・」

覚悟を決め扉を開いた

「うん?スバルか如何した?」

何時ものように椅子に腰掛け本を開きながら、穏やかな笑みで迎えてくれた

「あの～龍也さん今暇ですか？」

緊張しながら暇かと尋ねる

「暇だが？何か用か」

良し！何とかこのままの流れで

「私、今日休暇なんですよ」

私とティアは二日の間休暇扱いになっている

「それは良かったな。前の休暇はネクロで潰れてしまったしな。所で態々それを言いに来たのか？」

戦闘時の鋭さを少しで良いから日常に使って欲しいなぁ～

「それで、その～良かったら買い物に付き合ってもらえませんか？」

言えた～これで一安心かな？龍也さんは少し考える素振りを見せてから

「・・・別に構わない。着替えてくるから、少し待っていてくれ」

本を机に置き着替えに行った龍也さんを見て

「良かった～。断られたら如何しようと思ったよ～」

本当断られたら如何しようと思っただけ、凄く安心した

「待たせたな、では行こうか？」

戻ってきた龍也さんの姿に目を奪われた。黒のジーンズにアクセントになるよう細身のチェーンをつけ、シンプルな黒シャツの上から青のジャケットを羽織っているが袖等には銀の装飾が施されておりとても美しい物で、長身の龍也さんと相まってとても格好良い

「どうしたんだ？ボーっとして？」

いけない・・つい見惚れていた

「いえ、何でも無いです、早く行きましょう」

龍也さんの隣に立ち歩き出す、本当は手を繋ぐか腕を組みたいが、其処は我慢しよう

「そうだな、では行くとするか」

街に二人で出掛けていく、きっと今日は良い日になる私はそう思った

「それで何を買うんだ？」

クラナガンの街中を歩きながら龍也さんが尋ねてくる

「新しい服でも買おうかと思いまして」

今までお洒落などは興味が無かったが、やはり少しはお洒落をした方が良いだろう。ティアのクローゼットを見てそう思った。

お洒落な服が大量に掛けられていて自分のクローゼットとは大違いだった。それを見て、お洒落をした方が良いと思った

「服か・・それじゃあ、デパートにでも行くか？」

行く所が決まり二人でデパートに向け歩き出した

「着きましたね、少し時間掛かりましたけど・・」

ゆっくり歩きながら来たので大分時間が掛かったが。その間龍也さんと話が出来たからとても楽しかった

「そうだが偶にはこういうのも悪くない、・・・それでは服を見に行くか？」

その言葉に頷き、二人で婦人服売り場に向かった

二人がデパートに付いた頃の機動六課ロングアーチの部隊長室

キーボードを叩く音だけが静かに私の部屋に響いていた

「仕事が捗らん・・・・止めや」

静かに仕事をしていたが、やはり苛々として仕事に集中できない

「はぁ～兄ちゃんの居らんと仕事する気にならん・・・」

椅子に深く腰掛け溜め息を落とす

「今頃・・兄ちゃんは何処に居るやろ?デパートかな」

丁度その頃デパートで龍也はくしゃみをしていた

「・・私だって兄ちゃんとデートしたいのに・・・」

段々苛々してきたので、机の引き出しを開きぬいぐるみを取り出すが。そのぬいぐるみは・・・

そのぬいぐるみを見て、にへらとだらしない表情を浮かべながら。ぬいぐるみを抱きしめるそのぬいぐるみは。黒いコートを羽織った右目に傷のある男の姿をしていた

「時間掛かったけど作ったのは正解やった。兄ちゃん人形~」

そのぬいぐるみを抱きしめたままクルクルと回転する。それだけで段々苛々が消えて行くが

「我ながら末期やな・・・・」

兄ちゃんの姿をしたぬいぐるみを抱きしめながらそう思うが

「まぁええか、私は兄ちゃんと結婚するから」

今は妹の場所で良い、けどずっとその場所にいる気はないのだから、

「私も今度兄ちゃんとデートしたいなぁ~、そや遊園地のチケットでも用意しとこか・・」

思いついたら即実行、端末を操作して遊園地のフリーパスの予約をしている頃

「なのはねね、パパ居ないの・・パパ何処？」

泣きそうなヴィヴィオに言われ

「ちょっと待ってね、今龍也さん探すから。龍也さん何処ですか？」

物凄く動揺しているなのはの姿があった。その姿を見て

「そういえばお兄さん見ませんですね、ザフィーラ。お兄さん何処に居るか知りません？」

地に伏せているザフィーラにシャマルが尋ねるが

「・・・主の許可を得たスバルと共に街に出掛けていた。龍也殿に一撃入れ言うことを聞いてもらう権利を消滅させる為に、スバルとティアナに条件付でデートの許可を出したそうだ」

シャマルは少し考えた素振りを見せた後

「・・得策じゃないですか？下手な事を頼まれるくらいなら。デートさせたほうが良いです。はやてちゃんも判ってますね」

シャマルの視界にはぐったりしているなのはが居る。探しても見つける事が出来ず疲れ果ててしまったようだ

「パパ居ないの・・・ザッフィー知らない？」

そんななのはとは対照的に、まだ元気であろうヴィヴィオは泣きそうな顔のままシャマルとザフィーラの元へ歩いてきた

「龍也殿はヴィヴィオにプレゼントを買いに行った、楽しみにしていると良い」

「本当！楽しみだな～パパ何買って来てくれるだろう？

その言葉に笑顔になるヴィヴィオを見ながら

（お兄さん、デートに行ったんでしょ？嘘付いてどうするの？）

小声でザフィーラに言うと

（ふっ！簡単だ念話でヴィヴィオにプレゼントを買って来て貰うように言えば万事解決だ）

何だかんだで一番切れ者なのはザフィーラかもしれない

服を買い終え、デパートの喫茶店で休憩していると

「服とかのお金全部払ってもらって、良かったんですか？」

服の入った袋を見ながら、申し訳なそうにスバルが言うが

「気にする事は無い、私が好きでやったことだからな」

中将の地位で給料は可也の額があるが、大して欲しい物が有る訳でもない、ならこういう時に使うのが良いだろう

「でも・・やっぱり悪いですよ・・・」

気にしなくて良いと言ってるのにな、と思っていると

「それなら、頼みがある」

先程ザフィーラから連絡があったから、如何しようかと思っていたから丁度良い

「何ですか？」

頼みという言葉に不思議そうな顔をするスバルに

「うん、ヴィヴィオが私が居なくて寂しいそうなんだ、だから何かプレゼントを買って行こうと思う。だからそれをスバルに選んで貰おうか？」

スバルも女の子だし、やはりヴィヴィオのプレゼントを選ぶのは男より、女の方が良い

「プレゼントですか・・判りました！任せてください！！それじゃ早く行きましょう」

私が会計を済まそうとレジに向かうと

「ここは私が払うんで、早く行きましょう！」

凄まじい勢いで会計を済ませ、私の手を引いて。おもちゃ売り場向かい歩き出したスバルに

（なんだろうな?嫌な予感がするな・・・）

何処かで感じたことがある、嫌な予感がしていたその頃スバルの頭の中は

（これはチャンスだ!ヴィヴィオに気に入って貰えれば・・ふふふふ）

打算だらけだったりする。

「何が良いですかね～」

おもちゃ売り場を見ながらスバルが呟く

「うーん、やっぱりぬいぐるみが良いよね」

私はスバルに任せた為何も言わない、

「あっこれ・・龍也さんこれにしましょう」

差し出された人形は

「ほう・・中々可愛らしいな」

ピンクのウサギのぬいぐるみだ、ヴィヴィオはウサギが好きだからこれは良い物だ

「良しそれでは会計を「私がするんで、それじゃあ・・」・・何なんだ?」

そのぬいぐるみを持ったままレジに向かって行った、スバルに首を傾げると

「うん？あれは・・ふむ丁度良いな・・」

視界の隅に止まった店の中に入っていった

「すいません、ちょっと包装して貰ってたんで」

私がその店から出たと同時にスバルが戻ってくる

「私も買う物が有ったからな、気にしなくて良い。それじゃあ・・そろそろ戻るか？」

日も大分傾き空は紅くなっていた

「そうですね・・帰りましょうか」

茜色の空の下を二人でゆっくりと歩く、周りには人の姿は無く居るのは私とスバルだけだ

「今日は楽しかったです」

ポツリとスバルが言う

「如何したんだ？急に？」

突然そんな事を言い出したスバルに困惑しながら尋ねると

「私だって女の子です、好きな人とデートしたいって思います」

デート、その言葉に硬直する

「その反応やっぱりデートって思って無かったですね？」

私の微妙な顔の変化に気付き詰め寄るスバル

「むう・・前も言ったがな。私は隻眼隻腕だそんな男を好きに「違います、少なくとも貴方の目の前に一人、貴方の事が好きな人が居ます」・・うっ」

私の言葉を遮り、真っ直ぐに此方を見るスバルから視線をずらす

「ふふふふ、良いですね。こういうのも」

と微笑み私から離れるスバルはそのまま夕日を背に

「女の子は一途なんですよ。思えばあの時からですか・・空港火災の時。貴方に助けられたあの時から私は貴方が好きでした・・だから貴方には見て貰いたい物がある」

目を閉じ次に開いた時、スバル瞳の色が緑から黄色に変わっていた

「この眼は私が戦闘機人・・兵器という証。それでも貴方は私のことを人として見てくれますか？」

不安げな表情で問いかけるスバルに

「ああ見えるな、何処から如何見てもお前は人だな」

そのくらいでは私の考えは変わらない

「・・くす・・だから私は貴方が好きなんですよ。龍也さん」

スバルが笑うと瞳の色は元の緑に戻っていた

「くすくす・・本当・・私は・・貴方を好きになってよかった」

ポタポタ、スバルの目から涙がこぼれる

「ああ。嬉しくても涙は出るんですね。私はこんなに嬉しいのに・・」

スバルはずっと思い悩んでいたのだろう、人じゃない体に・・・

「帰りましょう、早く帰らないと部隊長が怖いですから・・」

涙を拭いながら微笑み二人でまた歩き出した

「・・・龍也さん・・その・・手繋いでも良いですか」

歩きながらそう尋ねるスバルに

「好きにすれば良い」

「はいっ！それじゃあ好きにします」

スバルはそう笑うと手を繋がずに私の腕を確りと抱きしめた

「おい、何で腕を組む?」

尋ねるとスバルはにっこり笑い

「好きにして良いって言いました、だから腕を組むんです。好きな人と腕を組むのは女の子の憧れですから」

そう笑うスバルの顔はとても美しかった

「龍也さん、私は本気なんです、本気で貴方が好きなんですよ?」

歩きながらスバルが言うが

「もっと良い男が居ると思うがな?」

「そんな事無いですよ、龍也さん程素敵な人はそうは居ません」

私の腕を更に抱きしめながら言う、スバルは本当に幸せそうな顔をしている

「楽しい時間はあっという間だな~もう少し龍也さんとデートしたかったな」

隊舎が見えてきた所でスバルが言う

「スバル手を離してくれないか?」

何時までも腕を組んでるわけには行かないので話すように言う

「・・判りました。本当はもう少し腕を組んで居たいけど我慢しま

す」

手を離したスバル、渡すなら今しかないか・・

「今日は私も楽しかった、だからこれはお前へのプレゼントだ」

上着のポケットから箱を取り出す。スバルがぬいぐるみの会計をしている間に買った物だ

「あの・・開けても良いですか？」

その箱を見ながら言うスバルに

「構わない。気に入ってくれれば良いがな」

スバルはゆっくりとその箱を開けた

「わぁ・・綺麗・・」

箱の中にあったのは花をモチーフにしたブローチだった。スバルはそのブローチを見て

「龍也さん、この花の花言葉知ってますか？」

見た感じが気に入って買ったので。モチーフの花の花言葉までは気にしていなかった

「いや知らないが、スバルは知っているのか？」

ブローチのモチーフの花は。五枚の花びらを持つ紫色の花だ

「この花の名前はアネモネ、花言葉は「あなたを愛しています」ですよ？」

「なっ！・・・」

そんな花言葉とは知らなかった。動揺し顔が赤くなるのが判る、その様子を見て悪戯っぽく笑いながら

「嬉しいですね・・まさか龍也さんから愛の告白を受けるなんて」

ブローチを握り締めクスクスと笑うスバルに

「違う、そんなつもりで買ったのでは・・」

動揺しながら言うと

「判ってますよ、唯少しからかっただけですよ。まぁそのつまりだったら嬉しいですけど・・」

悪戯成功と笑い、ブローチをポケットにしまいながら。私の目の前に立つ

「ありがとうございます、これ大切にしますね・・それとこれは私からのお礼です」

スバルの唇が私の頬に当てられる、一瞬硬直するが直ぐに

「なななななな、何を・・・・」

キスされた右頬を押さえながらスバルから距離を取ると

「今日のデートのお礼ですよ、本当今日は楽しかったです。それじゃあ失礼しますね」

振り返らず走って行ったスバルの後姿を見ながら

「本当・・私なんかの何処が良いだか。判らんな」

ヴィヴィオのプレゼントが入った箱を持ち直し。私も隊舎の自室に帰っていった

「あっ！パパお帰り」

私の部屋にはヴィヴィオが待っていた

「ただいま、ヴィヴィオ」

可愛らしい足取りで私の前まで歩いてきて

「ヴィヴィオね、パパ居なくて寂しかったの」

俯きながら言うヴィヴィオの頭を撫でながら

「ごめんなヴィヴィオ、ほらプレゼントだよ」

隠していた箱をヴィヴィオに手渡す

「ありがとう、パパ」

目を輝かせながら箱を開け、中のぬいぐるみを見て

「ウサギさんだ・・・あれ？パパまだ何か入ってるよ？」

ウサギのぬいぐるみを抱きしめ、笑っていたヴィヴィオだが。箱の中にまだ何か入ってると言いそれを取り出した

「何だろう？」

出てきたのは可愛らしくラッピングされたクッキーの袋だった

「クッキー？何でこんな物が？」

私もそれに驚いていると

「パパ、これスバルが選んでくれたの？」

ヴィヴィオが何かを見ながら尋ねてくる

「そうだけど、何で判ったんだ？」

「ほらだってこれ」

差し出された物には

「これは・・スバルめ、こんな仕掛けを隠していたのか・・」

出てきたのはスバルがピースサインしている写真だった。そしてその下には

「ヴィヴィオへ、あなたのすきなウサギのぬいぐるみとクッキーをおくります　スバル」

まさかこんな仕掛けを隠して居たとはな・・

「スバルに言わないと、ウサギさんとクッキー、ありがとうって」

ウサギのぬいぐるみを抱きしめながら言うヴィヴィオだが

「ふぁあああ、パパ。ヴィヴィオ眠いから・・なのはねねの所行くね・・」

眼を擦りながら部屋から出て行こうとするヴィヴィオに

「偶には一緒に寝るか？」

一緒に寝るかと尋ねてみる

「良いの？」

俯きながら言うヴィヴィオに

「構わないさ、ほら行こうか？」

「うん・・」

ヴィヴィオの手を引きベッドに入った。ヴィヴィオは寝るのを我慢していたの直ぐに眠ってしまった

「う～ん、パパ大好き・・・」

寝言を言うヴィヴィオの頭を撫でながら

「パパか・・結婚もしてないのに子持ちか。だが悪くは無いな」

願わくばこの幸せが長く続きますように・・別れの・・運命の日が来るその時まで、皆が笑顔で居られますように・・

私は信じても居ない、神にそんな事を願いながら眠りに付いた

第４９話に続く

## 第４８話（後書き）

今回の話はどうでしょうか？
デートならやっぱり買い物ですよね。
そしてヴィヴィオに懐かれようと考えるスバル・・でも原作ならそんな事しませんね（笑）

今回は２話連続です。ティアナと無自覚な龍也のデートの話をお楽しみください。

それでは暫しの間失礼致します

## 第４９話（前書き）

連続投稿です

ティアナとのデートの話になります。楽しんでくださると嬉しいです

アンケートの方も宜しくお願いします

それでは本編始まります

# 第４９話

第４９話

「ううん、良く寝た」

ベッドから抜け出し大きく背伸びをする

「良しっ！今日は頑張るわよ」

ベッドの横に掛けられたワンピースを見て、気合を入れる

「スバルは昨日上手く行ったみたいだしね・・」

昨日戻ってきたスバルは、踊りだしそうな勢いだった

「私も頑張ってデートに誘わないと」

置いてある映画のチケット、少々高かったがこれくらいは安いものだ

「さてと・・行きますか」

何時もの陸士の服に着替えて食堂に向かった、この時間なら龍也さんは食堂で食事をしている筈だ

「龍也さんは何処かな？」

食堂で自分の分のトレーを持って龍也さんの姿を探す

「居た・・ヴィヴィオとリィン曹長も一緒みたいね・・」

相変わらずというか龍也さんの周りには人は居ない

（本当馬鹿な人しか居ないのかしら?恐れ多いとか言ってさ・・・）

トレーを持ち龍也さんの居る場所に向かう

「うん?ティアナかおはよう」

膝の上にヴィヴィオを乗せたまま、片手を上げて挨拶してくる

「ティアナ。おはようです」

「ティアナ～おはよう」

ヴィヴィオとリィン曹長も挨拶してくれる

「おはようございます、あのここ良いですか?」

開いている席を見ながら言うと

「構わない、ほらヴィヴィオあ～ん」

構わないと言ってから、ヴィヴィオの口にスプーンを向ける

「あ～ん」

可愛らしく口を開けるヴィヴィオの口にスプーンが収まる

「もぐもぐ、パパ美味しい！」

笑顔で笑うヴィヴィオの頭を撫でながら笑う、龍也さんを見ていると保父さんに見えてくる

「お兄様、リィンもして欲しいです」

口を開き言うリィン曹長その姿を見ていると。どれだけ龍也さんが慕われているのか判る

「はいはい。リィンは甘えん坊だな？」

そんな事を言いながらスプーンにおかずを取り、リィン曹長に向ける龍也さん

「ほら」

「むうっ・・あーんが無いです」

そっぽを向くリィン曹長に謝りながら

「ごめんな、忘れてたよ。ほらあ～ん」

笑顔で口を開きながら

「それで良いです、あ～ん」

その姿を見て、若干羨ましいと思いながら食事をした

「お腹一杯」

にこにことお腹を叩きながら笑う、ヴィヴィオの顔は満足そうだ

「そうですね～、リィンもお腹一杯です」

同じようにお腹を叩きながら笑うリィン曹長に

「リィン曹長は甘えん坊なんですね？」

龍也さんはデザートを取ってくると席を外している

「そうだと思います。でも甘えるのは子供の特権です。だからリィンはお兄様に甘えるんです！」

胸を張るリィン曹長、前は子ども扱いするなと言っていたが、やはり龍也さんが居ると変わる様だ

「ヴィヴィオも！」

同じように胸を張るヴィヴィオ、本当に龍也さんに懐いているようだ。そんな事を思っていると

「ほら、ヴィヴィオとリィンはプリンで良かったな、ティアナはゼリーにしたが、好きだったか？」

小さめのトレーにプリンとゼリーを乗せて戻ってくる

「ありがとうです、ほらヴィヴィオちゃん」

龍也さんからプリンを受け取り食べ始めた。リィン曹長とヴィヴィ

オを見ていると

「ほら、ティアナも食べると良い」

私の前にゼリーを置き椅子に座った龍也さんを見ながら

（本当龍也さんは優しいわね・・これでもう少し人の気持ちに敏感だったらなぁ）

そう思いながらゼリーを口に運んだ、デザートを食べ終え話をしていると

「龍也さん、見つけましたよ」

なのはさんが歩いてくる

「うん？如何した何か用が合ったのか？」

紅茶を飲みながら尋ねる龍也さんに

「はい、ＴＶの取材の日が決まりまして。明日だそうです」

急な話しだなと思っていると

「それだけか？」

「違いますよ？ヴィヴィオの健康診断があるんで、ヴィヴィオを探してたんですよ。ヴィヴィオ行こうか？」

しゃがみ込んでヴィヴィオに目線を合わせながら、なのはさんが言

うと

「わかった、パパ行ってくるね」

ウサギのぬいぐるみを小脇に抱えなのはさんと歩いていった。その後姿を見てると

「やっと見つけたぜ。リィン悪いけどよあたしの訓練に付き合ってくれないか？」

ヴィータさんが入れ違いでやって来て、リィン曹長に言うと

「判ったです」

リィン曹長を連れ私の目の前で一回立ち止まり

（はやてに聞いてるから何も言わねぇ。でも・・兄貴に手出したらどうなるか判ってんだろうな！）

えらくドスの聞いた声で念話が来る

（判ってますよ。ちゃんと部隊長に言われてるんですから）

念話で話してると

「どうしたんだヴィータ？えらく怖い顔をしてるが？」

「いや、何でもないぜ。じゃあな兄貴」

手を振り食堂を後にするヴィータさんだが、最後の最後で一回振り

返り

（兄貴に変なことすんじゃないぞ！もしそんな事して見ろ！私がお前を叩き潰す！！）

ピンポイントで私にだけ殺気を飛ばし、ヴィータさんとリィン曹長は食堂から消えた

（どうして、部隊長もヴィータさんもあんなにブラコンなの？少しやばいレベルじゃない？）

はたしてそれは他人事だろうか？私も多分そうなる可能性があるだけ余り深くは言えない

「さてと・・私も部屋に戻るか・・」

そう呟き食堂を後にした龍也さん。さて後は上手く龍也さんを誘うだけ・・気合入れて行きましょう

私も陸士の服から着替える為に自室に戻った

「どうして仕事が無いんだ？」

基本私は独立部隊の為、隊長室がないなので自室で仕事をしているのたが。今日も仕事が無い事に疑問を覚えた

「ふー、はやてが何か手を回してるのか？」

やることも無いのでチンク達が合流したときのメンバーを考える。

実際の所私の部隊はチンク達で構成しようと考えてる

「メンバーはやっぱり、チンク、ノーヴェにセッテとウェンディ。ディード、トーレ。オットーはジェイルのガードに回したいやはり４人編成か」

そんな事を考えてると、端末の呼び出し音がした

「うん？誰だろうな？」

端末を開くと同時に姿を見せたのは

『龍也、元気にしてた？』

長い髪をリボンでまとめた老女、三提督の一人ミゼット・クローベルだった

「これは。ミゼット提督もお元気そうで何よりです」

『まだまだ私は現役よ、龍也』

人の良い笑顔で笑うミゼット提督は

『そうそう、あなたから申請されていた、スカリエッティの件だけど・・上手く行ったわ、被害者として罪は無効よ』

この連絡を待っていたのだ、ジェイルを此方側に引き込む為に、レジアスと三提督に頼んでいて正解だった

「その連絡を待ってましたよ。それでチンク達は？」

戦闘機人であるチンク達の件も頼んでいたが

『ふふ、私を誰だと思ってるの？チンクちゃん達も完璧よ。貴方の部下に出来るわ』

これで手持ちの札は全て揃った、機動六課の戦力にチンク達が加わればＬＶ３のネクロ達にも対抗できる

「すいません、大変だったでしょう？」

『そうでもないわね、６年前からスカリエッティは犯罪をしてる訳でもないし。それにやった犯罪だって大したものじゃないからね。割と簡単だったわ』

そうは言うが可也苦労しただろう

「そうですか・・今度ケーキでも作って持って行きますね」

『それは楽しみだわ。ラルゴとレオーネの分も宜しくね』

ウィンクして映像は途切れたその姿を見て

「本当元気そうで良かったな」

そう微笑み、本を開ていると

コンコンとノック音がしてから

「失礼します」

白いワンピースを着、何時ものツインテールを下ろしたティアナが入ってきた

「如何したんだ?お洒落して」

食堂であった時は陸士服だったのに。今は白のワンピースを着てる事に疑問を感じ尋ねると

「あのスバルか聞いてませんか?私今日休暇なんですそれで・・」

はて?昨日もこんな事があったような?

「その一緒に映画を見に行ってくれませんか?」

俯きながら、映画を見に行こうと言うティアナ

「映画・・偶には良いな・・・」

確か映画とかを見るのは気分転換に丁度良い

「それじゃあ!一緒に来てくれるんですか?」

顔を上げ笑顔のティアナに

「ああ構わない、着替えてくるから少し待っていてくれ」

着替える為に寝室に向かう

「何で私なんかを誘うんだろうな?スバルとか居るだろうに・・」

着替えながらそんな事を考えていた

「ふむ・・これで良いか？」

黒のジーンズに黒のシャツと昨日と似た格好だが、上から羽織っているジャケットは赤だ

「赤は似合うといわれて買ってみたが、如何なんだろうな？」

昨日スバルに言われて買ってみたが、自分では良く判らない

「大して気にする訳でもないな・・・」

寝室のクローゼットを閉じ、リビングに戻る

「待たせたな・・それでは行こうか？」

椅子に座り待っていたティアナに声を掛ける

「はい、早く行きましょう」

ティアナと共に昨日に引き続きクラナガンに向かって行った。

その頃のスバル・・・

「止めて下さい！！！、死んじゃいますよ～！！！！」

黒い瞳のフェイトが放つ、フォトンランサーから必死の表情で逃げ回っていた

「シグナムさん、スバルさんは何をしたんです?」

その様子を見ながらエリオがシグナムに尋ねる

「昨日スバルは兄上とデートしたそうだ。それでテスタロッサが荒れてるのだろう」

ズドン!ズドン!凄まじく鈍い音を立てながらフォトンランサーがスバルを追い続けていた

「いやーっ!!!龍也さん助けてーっ!!!!!」

スバルの悲鳴が演習場に木霊していた・・・

・・・龍也さん格好良すぎるよ・・・隣を歩きながら私はそう思った。長い黒髪に黒のジーンズとシャツ。その上から羽織っている赤いジャケット、普段余り見ること無い私服だと感じる印象も違う

(普段は優しいお兄さんって感じだけど・・・今はなんか鋭い刃物みたいな感じがするな・・)

目の傷と赤いジャケットでどこか野性的な印象を受ける

「ここか・・」

龍也さんが立ち止まる、気が付いたら私達はもう映画館の前に来ていた

（私の馬鹿！見惚れてないで何か話せばよかった～！！！）

軽い自己嫌悪に陥りながら龍也さんと映画館に入って行った

見る映画は恋愛とアクションの合体した映画で、死んだ筈の男が陰ながら愛した女性を守りながら戦っていくという物語だ

（龍也さんにはつまらないかな？）

私は見たかったから楽しいが、龍也さんには如何だろうと思い隣を見る

「・・・ふむ・・悪くない」

真剣な表情で映画を見ている・・龍也さんも気に入ったようだ

（良かった、龍也さんも楽しそうに見てるし・・）

そう思いながらスクリーンに視線を戻した、映画はクライマックスを迎えていた

「中々面白い映画だった」

映画館を出ながら龍也さんが笑いながら言う

「そうですね・・」

二人で映画館の中を歩いていると龍也さんが立ち止まり

「ふむ・・ここのレストランで何か食べていくか？」

映画館の中にあるレストランを見ながら尋ねて来る。時刻は昼過ぎ、昼食にするには丁度良い時間だ

「そうですね」

二人でレストランに入って行った

「感じの良い店だ」

料理を注文して待っていると。龍也さんが店の中を見て呟いた

「確かに良い感じですね」

店内は明るく、飾られている絵もとても綺麗だ

「お待たせしました。ごゆっくりどうぞ」

二人分のパスタを置いてウェイターが厨房に戻る

「それでは食べるとするか」

二人で手を合わせてから食べ始める。私は野菜のパスタだが、龍也さんはやはり男だからか、肉を大量に使ったパスタを頼んでいた

「美味いな」

パスタを食べ笑っている龍也さん、何度か食事をした事はあるが二人きりと言うのは初めてだ

（映画に誘ってよかった。こんなの滅多に無いよ）

と思いながら食べているとふと気になった。

「龍也さん。それ美味しいですか？」

本当に美味しそうに食べている、龍也さんが気になり尋ねると

「何だ気になるのか？ほら」

何事も無いように、自身が使っているフォークにパスタを巻いて私に向けてくる

「ななななな、何を」

動揺して噛みまくる

「何って気になるんだろ？早くしないと落ちるぞ？」

なんでこう無自覚なんですか・・・でもこれはチャンス、私は覚悟を決め口を開いた

「なっ！美味しいだろう？」

笑顔で龍也さんが言うが・・恥ずかしくて味なんて判らない

「・・そうですね。凄く美味しいですよ・・」

真っ赤な顔でそう言うのがやっとだった・・

「ご馳走様でした」

私にとっては、嬉しいハプニングがあった物の食事は楽しく終わった。

「さてと・・買い物でもするか？」

レストランを後に街中を歩いていると龍也さんが尋ねて来る

「そうですね・・服でも見ていきましょうか？」

二人でデパートに足を向けた

「龍也さんはどんな服が好きですか？」

婦人服売り場で服を見ながら尋ねると

「良く判らないが、こういうのは如何だ？」

そう言って差し出されたのは

「可愛いじゃないですか」

ツーピースだった、私から見てもお洒落で可愛いと思う

「どうだ？私はティアナに似合うと思って選んだのだが」

頭を掻きながら言う龍也さんから、その服を受け取り

「ちょっと試着してみますね？」

試着室で着替えてみる

「う～ん、良いわね」

デザインも可愛いし、見かけよりずっと動きやすい

「これにしよう、折角龍也さんが選んでくれたんだし」

ツーピースを脱ぎ元のワンピースに着替え龍也さんの所に行く

「どうだった？気に入ったか」

不安げに言う龍也さんに

「ええ、とても気に入りました、これ買いますよ」

手に持ったツーピースをレジに持っていく

「■■■■円になります」

高い・・私の手持ちでは足りない

「■■■■円ですね、これでお願いします」

龍也さんが財布からお金を出して、店員に手渡す

「龍也さん悪いですよ・・」

申し訳なくて龍也さんに言うが

「気にしなくて良い、こういうのは男が払うものだからな」

と笑い会計を済ませてしまった

「ほら、ティアナ」

袋に入った服を手渡される

「ありがとうございます」

渡された袋を抱きかかえる、凄く嬉しい反面、悪いことをしてしまったという気持ちがある

「気にしなくて良いからな?」

私のその気持ちに気付いたのか。頭に手を置きながら微笑む龍也さんに

「本当、ありがとうございます」

もう一度頭を下げてお礼を言ったら

「まったく気にしなくて良いと言ってるだろ?」

私の頭をぐりぐりと撫でながら笑う龍也さんの姿は、一瞬だが死んだお兄ちゃんの姿と重なった

(こういうのも良いな・・・)

私は知らずの内に笑っていた

「もう帰るか？それともまだ何処か行きたい所はあるか？」

デパートを出てから尋ねて来る龍也さんに

「後一箇所だけ行きたい所があるんです」

私はどうしても行きたい所があると言い、龍也さんと一緒に歩き出した

「ここは・・墓地か？」

龍也さんが辺りを見ながら尋ねる

「そうですよ、ここにお兄ちゃんが居ますからね」

途中で買った花を持ってお兄ちゃんの墓の前に行き、花を置き手を合わせる

（お兄ちゃん・・今日はね、好きな人連れてきたの）

手を合わせながら心の中で言う

（ライバルも一杯居るけど・・諦めないんだ。だって私はこの人の事が好きだから。だからお兄ちゃんも応援して欲しいな）

手を合わせながらお兄ちゃんに頼んでみる、

（それじゃあ、もう行くね。今度来るときはもしかしたら結婚報告

かもよ？）

そんな事を思いながら立ち上がる

「もう良いのか？」

後ろで同じようにしゃがみ込み手を合わせていた、龍也さんが立ち上がりながら尋ねて来る

「ええ、もう良いですよ。それじゃあ帰りましょうか？」

茜色の空の下、二人でゆっくりと隊舎に向かい歩き出す。穏やかでとても幸せな時間だった

（何時か龍也さんと恋人同士で歩いてみたいな・・・）

そんな事を思っていると

「そうだった忘れる所だったな・・」

龍也さんが立ち止まりポケットから箱を取り出す

「それ何ですか？」

突然差し出された箱に驚きながら尋ねると

「映画のお礼と言った所だな」

そう言って差し出された箱を受け取る

「開けても良いですか？」

やっぱり尋ねてから開けるべきだと思い尋ねる

「好きにすると良い。気に入ってくれるかは判らんがな」

と笑う龍也さんは何処か子供みたいだった。そんな風に思いながら箱を開ける

「綺麗・・」

入っていたのは紫水晶のペンダントだった

「気に入って貰えれば良いのだが・・」

と笑う龍也さんに

「これ付けて貰っても良いですか？」

後ろを向きながら言うと

「判った」

ペンダントを付けて貰う

「ありがとうございます。これ大切にしますね？」

首から下げられたペンダントを見ながら言う

「まぁ・・そうして貰えるとこっちも嬉しいな」

ゆっくりと茜の色の空の下を歩き出した。日が暮れる寸前で到着し隊舎の前で龍也さんと別れ自室に戻る、その日の夜

「ふふ・・今日は楽しかったな」

ベッドに横になりながら天井を見上げる

「龍也さん・・・」

所持している龍也さんの写真を見る。その写真は訓練の最中の写真で龍也さんと私が並んで写ってる物で私の宝物一つだ

「おやすみなさい・・龍也さん・・」

その写真を見ながら眠りに付いた・・今日は良い夢が見れそうだ

第５０話に続く

## 第４９話（後書き）

どうでしたでしょうか？

鈍感かつ無自覚な龍也とそんな龍也に恋するティアナ・・上手く表現出来たかは自信がありませんが楽しんでくれたのなら作者は嬉しいです。

次の話の終わりの方でスカリエッティが登場します。ここからは殆どオリジナルになるので更に自信はありませんが、これからも本作を宜しくお願いします

## 第５０話（前書き）

今回はＴＶの取材の話です、上手く取材の雰囲気が出ていれば良いのですが

現在アンケート実施中です、たくさんの意見がくることを願います

# 第５０話

第５０話

今日の機動六課はすこし浮足立っていた。局員の大半がソワソワしていた。なぜなら今日はテレビが撮影にくるからだ。主に取材やインタビュー等は前線メンバー、隊長陣が担当するので他の局員は気にすることはないのだが、機動六課はなぜか女性の比率が高い。だから少しでも映ることを考えてか、皆身嗜みやメイクに余念がない。もちろんそれは隊長やフォワード達にも言えた。今前線メンバーは部隊長室に集まりミーティングを行っていた。シグナムやヴィータまでもが気合いの入った化粧をしていた。

「今日はテレビの取材が来る。これは管理局のイメージアップにも繋がる大事な任務や。みっともないところは見せられへん」

いつになくはやてが皆に真剣に語りだす、フォワード達も些か緊張した面持ちではやての言葉を聞いている。するとはやてはフッと顔を笑みに変えた。

「・・・と、固い事は終わりにして。ま、普段通りやったらええよ。飾り立てることのない、本当の私達の仕事を見てもらおう」

「はい！」

はやての言葉に皆が元気よく返事する中、私は若干憂鬱だった

「なんや兄ちゃん、そんな暗い顔してどうしたんや？」

私の気持ちを感じ取ったのかはやてが尋ねて来るが

「それは憂鬱にもなる。こんな服は着たくなかった・・」

今着てる服は管理局でも上位の隊員だけが着る事が出来る制服で、私はこの堅苦しい感じが嫌いで普段は、一般の男性局員が着る制服の上から黒のコートを羽織っている。だが今回は中将としてＴＶに出る事に成ったので嫌々この制服を着たが、やはりこの服は好かんはやてが皆を見ながら言うと

「なに言うとるんや、無茶苦茶似合ってとるやん。なぁ？」

「そうですよ、お父さん。凄く格好良いですよ」

そうは言うがな・・・

「お兄様、普段からそれを着れば良いです」

リィン・・私は余りこう言うのは・・・

「お父さん。それで買い物に連れってくれませんか？」

もう良い・・我慢すれば良いのだろう・・

半分諦めの境地で幼少組み（リィン、エリオ、キャロから視線をずらす）

「うん、やっぱ良いわ・・」

振り返ると、直ぐ目に入る怪しい目のはやて

「写真撮られないかな？」

「カメラ持ってるよ？」

写真撮れないかとなのはが言うと、即座に懐からカメラを取り出すフェイト

「・・・昨日の服も良かったけど・・やっぱりこっちの方が・・・」

もう嫌だな・・どうしてこうなったんだろう？

「ヴィータさん、写真撮ってましたよね？これと交換でどうです？」

「！？これは・・・良いぜ換えてやる」

お互いに何かの写真を取り替える、スバル、ヴィータの姿を見て

「こんなので大丈夫なのか？」

胸の中に去来する不安に押しつぶされそうだった

「えー、今私は機動六課前に居ます」

私の名前はクリス・アンダーソン、週間管理局の編集長であり。レポーターでもある

「何度もアポイトメントをとり。漸く取材の許可が下りました」

歩きながら思う、この取材の為に何度管理局の上層部にアポイトメントを取った事か・・・

「それではいざ、取材に行きたいと思います」

そんな事を考えながら六課の中に入って行った

「始めまして、機動六課部隊長、八神はやてです」

ロビーでは部隊長のはやてさんが待っていた

「此方こそ始めまして、クリス・アンダーソンです。今日の取材宜しくお願いします」

握手をしながら思う

（確か・・情報では・・可也危険域のブラコンって聞いてるけど・・痛い！）

私が今までの取材で聞いたことを思い返していると。突然握手していた手が凄まじい力で握り込まれる。その力はまるで万力の様だ

そんな事を思いながら恐る恐る、はやてさんを見る笑ってる。笑ってるけど目が笑ってない

「如何しましたか？」

笑い掛けてくるが正直言って恐ろしい。私はどうやら地雷を踏んだ

ようだ

「いえ、何でもありません（すいません。もう考えません）

なんでも無いと言いつつ頭の中で謝罪の言葉を言う。すると手の力は緩まった

「それでは行きましょうか？（次は無いで？」

穏やかな言葉等裏腹に、底冷えする声が聞こえた気がした

「はやて部隊長は仕事が無いんですか？」

施設内を案内して貰いながら気になったことを尋ねると

「そんな訳無いですよ。取材が来るんで早めに自分の仕事を終らせただけですよ」

流石僅か１９歳で部隊を立ち上げた才女だ。

「まずは朝の訓練の方を見学してもらいますので。此方へ」

演習場へと案内された

「これが最新鋭のシュミレーターですか・・・」

演習場は使用中だけあって、市街地になっていた

「六課が誇る最新鋭の装置ですよ。それより此方へどうぞ」

案内されたのは演習場を見渡せる場所だった

「凄いですね・・」

目の前ではエースオブエース、高町なのはと金色の戦乙女、フェイトＴハラオウンに、ベルカの騎士の八神ヴィータ、八神シグナムに訓練を付けて貰っている。４人の新人の魔導師の姿がある

「そうですか？これは何時もの訓練より大分軽いですよ？」

信じられない。ミッド式の高町さんとテスタロッサさんに、ベルカの騎士のシグナムさんとヴィータさん、如何見ても可也厳しい物だ

「もう終わりみたいですね・・もう少し早く来れば良かったですか？」

高町さん達が離れていくので、これで訓練は終わりかと尋ねると

「違いますよ、ここからが午前の訓練の本番ですよ」

そうはやてさんが笑うと一人の男が姿を見せた

「・・蒼天の守護者。八神中将・・」

管理局最強にして、伝説とも言える最強の魔導師、八神中将。かなり離れているが存在感というか威圧感は凄まじい物がある

「今から何が始まるんです？」

訓練とはいえランクが違いすぎる、模擬戦とかで無いだろうと思い

ながら尋ねると

「見てれば判りますよ、兄ちゃんの訓練は厳しいけど可也プラスになりますからね」

と言われたので演習場を見ると、八神中将の回りにとんでもない数のスフィアが浮かんでいた

「すいません、あれ幾つくらいあるんですか？」

軽く見ても１００はあると思うが・・

「２５０ですよ。ちなみに隊長陣は４５０です」

笑顔で言うがそれは到底笑顔で言える数ではない

（これ絶対出来るわけ無いよ・・）

そう思いながら演習場を見ると

「嘘・・・」

４人とも回避しながら八神中将に接近している。その動きは無駄が全く無かった

「この訓練は3分の間に兄ちゃんに接触できれば終わりです。勿論出来なくても良いですが」

恐らく出来はするが、そう簡単には出来ないように設定されているんだろう

「さて・・後３０秒・・皆出来るかな?」

もうカウントダウンだ。

２５秒・・・龍の隣の少女・・キャロだったかな?が頭を低くした

１５秒・・・そのまま走り出す

５秒・・・体に当たり掛けるスフィアを回避しながら大きく前に跳ぶ

２秒・・・体当たり気味に八神中将に突撃する。八神中将は微笑みながら抱き止める

「お～、キャロがやったか～」

パチパチと手を叩きながらはやてさんが笑う

「凄かったですね」

軽くトラウマになる、スフィアの雨を回避しながら八神中将に突撃したキャロちゃんは本当に凄いと思う

「さてと行きましょうか?次は食堂に行くので、そこでインタビューをすると良いですよ」

はやてさんに連れられ演習場から食堂に向かった、暫くそこで他の隊員にインタビューをしていると

「あ～お腹すいた～」

先程演習場で見た青い髪の少女・・確かスバルさんと

「スバル。ＴＶ来てるのよ馬鹿じゃない？」

辛口のツインテールの少女・・ティアナさんが入ってくる

「次はあの二人にインタビューしてみたいと思います。行きましょう」

カメラマンとスバルさんとティアナさんの所に向かった

「すいません、少し良いですか？」

二人が座っている席に座りながら尋ねる

「何ですか？」

尋ね返してくるティアナさんに

「少しインタビューをしたいんですが宜しいですか？」

メモ帳を取り出しながら訪ねると

「良いですよ。何をお答えすれば良いですか？」

笑みを浮かべるティアナさんにインタビューを開始した

「まずは何時もあんなにきつい訓練何ですか？」

「今日はまだ優しいほうですね。普段は龍也さんとの模擬戦がありますから」

メモしながら次の質問をする

「龍也さん・・八神中将の事ですね。そんな呼び方をして怒られませんか？」

ティアナさんが口を開く前に

「龍也さんは中将って呼ばれるのが好きじゃないんですよ」

スバルさんが答えてくれる

「そうなんですか・・それじゃあ八神中将のデバイスはどんな物ですか？」

さっきはデバイスを起動していなかったのでどんなデバイスか尋ねると

「すいません。それは余り他言して良い事じゃないので答えれません」

申し訳なそうに言うティアナさんとスバルさんにインタビューをしていると

「お父さんは暖かいです」

「リィン曹長の気持ちが判ります・・凄く安心します」

「そういう物なのか？」

背中にキャロちゃんとエリオ君を背負った八神中将が姿を見せた

「えっと・・なんであの二人をおんぶしてるんですか？」

疑問に感じながらスバルさんに尋ねると

「龍也さんに一撃入れるか。タッチ出来ると言う事を聞いて貰えるんですよ」

なるほど・・そう言うご褒美があるのかと思いメモをする

「うん？この人がレポーターの人か？」

背中に二人を乗せたまま此方に歩いてくる。私は慌てて立ち上がり

「今日は取材の許可を頂きありがとうございます。クリス・アンダーソンです」

手を出しながら自己紹介すると

「始めまして、八神龍也です」

手を握り返してくる八神中将に

「感激です。生きる伝説に握手してもらえるなんて」

握手しながら二言三言話していると、背中の二人を降ろしながら

「やる事があるので失礼しますね」

そう言い食堂から消えた、八神中将に首を傾げると

「お父さんはレジアス中将に呼ばれてるんですよ」

エリオ君が説明してくれるが、１つ気になった事があった

「どうして八神中将の事をお父さんって呼んでるの？」

「その・・お父さんって呼んで良いですか？って聞いたら好きに呼んで良いと言ってくれたので。お父さんと呼んでるのですが・・」

少し話しただけだが、八神中将は包み込むような優しさを持っていたので、その呼び名は納得だと思いまたインタビューをしていると

「クリスさん、もう直ぐお昼なんで収録止めて貰っても良いですか？」

八神さん達が食堂に来たので一度収録を中断した

「ふー、緊張しますね」

カメラマンが言う、確かにその通りだ。私達が座っている机は隊長陣と六課の主要メンバーで固められている。此れで緊張しない方がおかしい。そんな事を考えていると

「クリスさん達も昼食にすると良いですよ」

八神さんに促され一緒に昼食を摂る事にした。他愛無い世間話をし

ながら食事をしていると

「私もお邪魔して良いかね？」

トレーを持った八神中将に声を掛けられる

「兄ちゃん遅かったなぁ。何してたんや？」

「レジアスと私の部隊についての話をしていた。・・・所で私は何処に座れば良い？」

私が座ってる机で空いてるのは、八神さんとヴィータさんの間。高町さんとテスタロッサさんの間とスバルさんとティアナさんの間だ

「兄ちゃんここ座れば良いやん」

「龍也さんここ空いてますよ」

「龍也、こっちだよ」

3方向からお呼びが掛かる。その瞬間穏やかな空気は消えた

「いい加減、人の兄ちゃんにちょっかい出すの止めてくれへん？」

「ちょっかいじゃないですよ。私はここが空いてると言っただけですよ？」

「はやて、いい加減に兄離れしたらどう？」

・・・怖っ！なにこの空気いるだけで凄いプレッシャーなんだけど

「・・ああ。また始まりましたね。お父さん争奪戦」

何事も無いようにエリオ君が言うので

「エリオ君こんな事が良くあるの？」

「良くありますよ？お父さんはモテますからね」

そういうエリオ君の視線は言い争う６人の美女達を見ている

「何で喧嘩するんだろうな？」

トレーを持ったまま首を傾げる八神中将

（この人何て鈍感なの。普通判らない？）

と思っていると痺れを切らしたのか

「勝手に座るぞ？」

そう言うと八神中将は、高町さん達の間に座った

「なっ・・くっ！兄ちゃんの性格を考慮すべきやった」

立ち位置的に一番近い所に腰掛けた八神中将見て、残念そうな八神さん達と違って勝ち誇った顔をする高町さん達を見ながら

（成るほど・・この人達は八神中将が好きなのね）

僅かな時間の攻防だったが、それだけで六課の内部が少し判った気がした

「八神中将。インタビュー良いですか？」

八神中将が食事を終えた所で尋ねると

「別に構わない」

笑う八神中将に一安心しインタビューを開始した

「独立遊撃部隊、アサルトフォースの隊員の目処は付いてるんですか？」

八神中将は独立部隊の隊長なのだが、隊員が居ないのでまだ部隊は発足されていない

「目処は付いてるが、それは此処で話す事ではないな」

流石にガードが固いわね

「それでは。聖王教会にスカウトされていると聞いた事がありますが。それはどうですか」

「ノーコメント。唯一つ言えるのは騎士の称号に興味は無いそれだけだ」

八神さん達も真剣な顔で話を聞いている

「今日の訓練を見せて貰いましたが、少し厳しいんじゃないですか

？」

「各々の能力をちゃんと計算している、厳しい物だが出来ない物ではない。現にキャロがクリアしている」

確かにクリアしてる人が居るしね・・メモをしながら

「今日はデバイスを使っていませんでしたが、どんなデバイスを使用してるんですか？」

「ノーコメント。悪いが極秘事項だ、ただ種類は教えてやる・・アームドとユニゾンデバイスだ」

これはいい情報だ。使用しているデバイスの事を聞けたのはプラスだ。噂ではインテリジェンスだ、アームド。ストレージいろんな噂があるが、どれも確証は無かった。でもこれで次の記事が決まったわ

「それでは次の質問をしても宜しいですか？」

「悪いがここまでにして貰おう、そろそろ次スケジュールに移りたいからな」

私達の取材スケジュールは。午前の訓練。昼食。デスクワークで終わりになっている。

「そうですね・・少し残念ですが、次のスケジュールに向かいましょう」

食堂を後にし、各部署のデスクワークを見学し。取材の終わりの時間になった

「今日は本当にありがとうございました」
六課の前で八神中将に頭を下げる
「いや此れで少しは管理局の仕事が、いかに大変か判って貰えれば良いのだが」
と笑う八神中将にもう一度頭を下げ、六課の敷地内を後にした

「中々大変だったな・・・」
クリスさんを見送り、自室に戻ると
『龍也、待っていたぞ』
仮想モニターが展開されジェイルが笑っていた
「何してるんだ馬鹿、まだ通達は通ってないんだぞ?」
無実の通達が入るのは今日の夜、まだこの時点ではジェイルは犯罪者だ
『そんな事は判ってる、だが話さずには居られないんだ』
楽しげに笑うその顔はまるで子供のようだ
『明日から晴れて私は日の本を歩く事ができる。何度夢見たことか・

・・・』

子供の様にキラキラした目で笑うジェイルの気持ちは判る

「少し位は話に付き合おう、友よ」

『それはありがたいね』

二人では他愛無い世間話をしていると

「来たぞ。三提督からの通達が」

私の元にもその通達は届いた

【犯罪者、ジェイル・スカリエッティは捜査により、ネクロによって脅されていたことが判明した。よって罪を無効とし。明日より機動六課の協力者として向かい入れる事をここに発表する　三提督及びレジアスゲイズ中将】

この通達は全ての部署に通達されてる

『ははは、素晴らしい自由に乾杯だ、龍也』

「では私も付き合おう」

机の上に赤ワインを置き笑うジェイルに

同じようにワインを入れるが私は白ワインだ

『素晴らしい自由と』

「これからの未来に」

『乾杯！！』

画面越しにグラスを合わせ。一気に飲む

「どうせなら向かい合って飲みたいものだな」

画面越しでは少々味気ない

『くく、それもそうだ。ウーノにでも注いで貰いながらな』

違いない。再びグラスワインを注ぎ

「明日また共に飲もう、ジェイル」

明日からはジェイルも管理局の隊員だ。いつでも共に飲める

『そうだな、それでは今日はこれ位にしておくか・・』

グラスを空にして笑い、モニターの電源は切れた。

「私も寝るか・・」

グラスを片付けベッドに横になる

明日運命の歯車が大きく音を立てて回り始める

第５１話に続く

## 第５０話（後書き）

次回は龍也の闇と罪です。

龍也が背負う罪、それが何なのかと楽しみにしてくれたら良いです

それとスカリエッティが格好良くなる予定です

## 第５１話（前書き）

ついに５０話を超えました！これも読者の方々のおかげです。
今回は龍也が背負う闇と罪がメインになります

それとスカリエッティが良い役です

現在アンケートと技のアイデアを募集しています。アイデアについては基本的に不採用になることは無いので、たくさんのアイデアが来る事を願っています

# 第５１話

第５１話

「何故私達は一緒に行ってはいけないのですか！」

アジトの入り口でチンクが言う

「すまないね、まだこれから君たちの話をしないといけないから。連れて行けるのはウーノだけなんだ」

本当なら全員連れて行きたいところだが、三提督に許可されたのはウーノだけだ

「ごめんなさいね」

ウーノが申し訳なそうに頭を下げる。ウーノも出来るなら全員で行きたいのだ

「・・もう良いです、八神に宜しく言っておいてください」

まだ納得してない表情だが、頷き戻っていくチンクを見ていると

「よお、チンク達は納得してくれたのか？」

態々迎えに来てくれたゲンヤさんが笑う

「いやいや、納得させるのに大分苦労したよ・・」

セッテは酷かった、この世の終わりと言いたげに俯き泣いていた

「やれやれですよ・・セッテの龍也至上主義は」

セッテは命の恩人である、龍也の言う事なら無条件で聞いてしまう

「私も何回か言ったのですが・・セッテの考えは変わりませんでした・・・」

姉妹間でもセッテの事は重大な問題になりつつある

「龍也は罪作りだな・・」

１２人に言い寄られているのに、それを冗談と思う龍也の鈍感さ加減は凄い

「でも・・きっと家のスバルが龍也を落とす。だってよアネモネのブローチを貰ったそうだぜ」

!?何てことだ・・龍也の事だからアネモネの花言葉を知らないで送ったのだろう

「くっ・・早急に手を打たねば、このままでは龍也を義息子に出来なくなる」

龍也の事は友だと思っているが、それと同時に娘の婿にとも思っている

「ふん、諦めな。龍也はナカジマ家の物だ」

「まだだ！龍也の鈍感スキルがある限り、まだ娘にも勝利の目はある」

「いえ・・龍也様の妹のはやて達は如何するつもりです？」

はっ！？最凶の敵を忘れていた・・いやまだなのは君とフェイト君も居る

「くっ・・どうすれば良いのだ」

龍也の事で頭を抱えていると

「早く行かないと、龍也様が怒りますよ？」

それは不味い。龍也は時間にうるさいからな

「そうだな、行ってから考えれば良いか」

ポケットから鍵を取り出し投げゲートにし。私達はそれを潜り転移した

六課の中は妙にピリピリした空気に満たされていた。昨夜の通達は全部署に通ってるが、納得していない者も居る

そんな空気の中ロビーで待ってると

「来たか・・」

ゲンヤさんに先導されている。ジェイルとウーノの姿が見える

「本当に大丈夫なの龍也？」

フェイトとエリオは落ち着きが無い

（プロジェクトFを考案したのはジェイルだしな・・無理も無いか）

二人は純粋な人間じゃないことにコンプレックスを持ってるからな・・

（こればかりは私が何を言っても変わるものではないからな・・）

そんな事を思ってるとゲンヤさん達がロビーに入ってくる。私とジェイルの目が合いお互いに歩き出す

「ちょ、兄ちゃん何考えとるんや」

「龍也さん！？」

はやてとなのはの慌てる声がするが関係ない。ゆっくり歩きジェイルの前に立つ

「・・・・」

緊迫した空気が包む、私とジェイルの関係を知るスバルとゲンヤさんは笑いを堪えている

「遅いんじゃないのか？」

「くく、すまないね。少々ハプニングがあったんだ」

お互いに笑いながら拳を持ち上げる。六課の隊員が慌て出すのを尻目に

「「友よ！待っていたぞ！」」

お互いに拳をぶつけながら言う

「・・・・・友？」

辺りを沈黙が包み込み、次の瞬間

「えええええええええっ！！！！！！！」

はやて達の大絶叫が木霊した

「中々賑やかな所ですね」

ウーノは一人冷静に呟いていた

「兄ちゃん、どういう事か説明して欲しいやけど」

「説明も何もジェイルは友だが？」

これには間違い無いだろう、ジェイルの方を見ながら言うと

「おお、君がはやて君か龍也に聞いてるよ。ジェイルスカリエッティだ」

手を出しながらジェイルが笑う

「あっ、これはご丁寧に・・じゃなくて!!何で兄ちゃんとスカリエッティが知り合いやねん!!!」

はやてが爆発した、そんなに怒る事だろうか？

「はは、譲ちゃんそんなに怒るなって。話してみれば良い奴だぜ？」

ゲンヤさんも笑いながら言うが

「犯罪者ですよ!?何でそんなフレンドリー何ですか!?」

なのはが詰め寄りながら言う

「はっはっは、どうやら私の評判は予想以上に悪いようだな。龍也」

外笑い、中半泣きでジェイルが笑う

「大丈夫、話せば皆判ってくれるさ。だからウーノその握り拳を下げろ」

顔に青筋を浮かべながら・・拳を振り上げるウーノに言うが

「いえ・・これは無理ですね。幾ら温厚な私でも、ドクターを犯罪者呼ばわりされるのは不快です」

殴りかかる寸前のウーノを見て

「なのは謝れ!、ウーノが爆発する」

ここでウーノが暴れれば大変な事になる

「すいません。ウーノさん!!」

なのはも、その危険なウーノの素振りに頭を下げる

「・・今回は初犯なので許します。ですが次は無いです」

拳を下げジェイルの右斜め後ろに立つウーノを見ながら

「まぁ、とりあえずブリーフィングルームに行くか?」

はやて達とブリーフィングルームに向かう中

「「・・・・・」」

エリオとフェイトは鋭い視線でジェイルを見ていた

「さて・・何が聞きたい?」

ブリーフィングルームの映像は館内放送で映し出されている

「まず龍也さんとスカリエッティの関係を」

なのはがジェイルを見ながら尋ねる

「ふむ・・簡単に言えば。私の義手の製作者だ」

「龍也、アルベルンさんとか言ってなかった?」

フェイトが言うと

「それは私の偽名だ！！！」

胸を張りながらジェイルが言う

「・・まぁそういう訳だ、ちなみにチンク達もジェイルの娘な」

隠さずにチンク達もジェイルの娘だと教える

「！？！？！？」

同様するはやて達を見ているとシグナムが

「兄上。スカリエッティは犯罪者の筈です。何処で知り合ったのですか？」

犯罪者の言葉に、ウーノの額に再び青筋が浮かび上がる

「ウーノ、落ち着け。それとシグナム、ジェイルを犯罪者と呼ぶな」

シグナムを軽く睨みながら言う

「すいません、兄上」

頭を下げるシグナムを見て。落ち着きを取り戻すウーノに一安心しながら

「何処で知り合ったかと言うと・「龍也様、私が説明します」・・判った、ウーノに任せる」

自分で説明すると言うウーノに任せ、はやての隣に腰を下ろす

「まず私達と龍也様が会ったのはネクロの基地でした。ネクロはドクターの優れた化学力に目を付け私達を誘拐し。私達の命が惜しければ従えと脅迫されていました」

ゆっくりと語るウーノの話を真剣な表情で聞くはやて達

「その間に犯罪者として指名手配を受けましたが、ネクロの指示の為ドクターに罪はありません、そして今から6年前私達は龍也様に救助されました。もっともその時はダークネスと名乗って居られましたが・・」

ちらりと此方を見るウーノに苦笑してると

「体は何とも無いんだろう?兄貴に助けてもらったんだから」

ヴィータが言うと、ウーノは何かを考える素振りを見せ

「・・そうでもないのですが・・私達は「言うなっ!それは此処で言うことではない!!!」・・いえ・・言わせていただきます」

怒鳴る私の一瞬硬直するがウーノはゆっくりと

「私は戦闘機人。後天的にネクロによって体を改造されました」

「!?!?!?」

聞いていた者達の顔が驚愕に染まる中私は

「ウーノ！何故言った！それは言わなくて良いと言った筈だ！！！」

立ち上がりウーノを怒鳴る

「判ってますよそんな事は、ですが私はこの人達を信じてみたい。貴方の妹達を・・貴方が信じる者を私も信じてみたいのです」

穏やかに言うウーノの声は私の心を大きく乱す

「・・勝手にしろ！！」

私はウーノを怒鳴りつけ、ブリーフィグルームを出ようとすると

「龍也、あれは君の所為じゃない、私達は君を恨んではいない」

ジェイルの声がするが、私は振り返らずその場を後にした

兄ちゃんどうしたんや、あんなに苦しそうな顔して私は不思議に思い、ウーノさんに尋ねると

「ネクロは龍也様が人を傷つけない事を利用しようとしたのです」

・・そういう事か・・ウーノさんが言おうとした事を理解した。

「龍也は自分の所為で、ウーノ達が人の体で無くなった事を気にしてるんだ」

兄ちゃんの性格だとそれは当たり前だと思う

「その・・すまねぇ、無神経だった」

ヴィータが沈んだ顔で言う、他の面々も同様だ

「私は別に気にして無いんですよ、だけど優しい人ほど心を痛めてしまった」

ウーノさんは悲しそうに笑いながら

「何度も謝られました。私の所為だと私がもう少し早ければと」

兄ちゃん・・だからあんな苦しそうな顔してたんや・・・

「他の妹達、チンク達は龍也様の役に立てると言っていましたが、それさえも龍也様には重い十字架になっていたのかもしれません」

暗い空気の中でウーノさんの話を聞いてると

「部隊長！大変だ！旦那が何処にも居ねぇ！！」

慌てた様子でヴァイス君から連絡が入る

「龍也さん、本当に何処にも居ないの？」

なのはちゃんが尋ねると

「探したんですけど、何処にも居ないんですよ！それに部屋にこれが」

ヴァイス君の手には中将のバッジがあった

「・・嫌な予感がする。皆兄ちゃん探しに行くで」

皆も同じ嫌な予感がしたのか頷き部屋から出て行く

「私も行こうか？」

スカリエッティさんが言うが

「いえ、貴方達はここに居て下さい。それと犯罪者呼ばわりした事を謝罪します。すいませんでした」

頭を下げると、スカリエッティさんは笑いながら

「気にしなくて良いよ、それより早く龍也を見つけた方が良い。龍也は思い悩むタイプだからな」

その通りだ早く見つけた方が良い

「それじゃあ探してきますね」

部屋から出ようとすると

「待ってください、龍也様なら多分あそこに居ると思います」

ウーノさんに兄ちゃんが居るであろう場所を聞き

「ありがとうございます、ウーノさん。それじゃあ行ってきますね」

私はその場所に向かって行った

「・・此処か・・」

規則違反だがそんな事は言って居れず、騎士甲冑を展開して上空から兄ちゃんの姿を探す

「こんな所に居るんやろか?」

ウーノさんの話し通りならこの森の外れに居る筈だが

「・・・居った・・」

森の外れの小高い丘の上に兄ちゃんの姿を見つけた

「・・・はやてか・・」

丘の上の木に腰掛け兄ちゃんは居た

「兄ちゃん、皆探しとるではよ帰ろう?」

兄ちゃんに近寄りながら言うと

「・・ウーノに聞いたろ?何が最強の魔道士だ」

自嘲の笑いを浮かべるその姿は小さく見えた

「私が早ければ良かったんだ、そうすればウーノ達は人として幸せに生きる事が出来たんだ」

俯きながら言う兄ちゃんに近寄ると

「来ないで欲しい・・」

と言う兄ちゃんに

「嫌や、そんな悩んでる兄ちゃんを見てられへん」

近づき兄ちゃんの前に座る

「少しは私を頼って欲しいで」

笑うと兄ちゃんはその顔を歪め

「・・私にはそんな資格は無い・・・」

視線をずらす、兄ちゃんに腹が立って

「少しは私を頼って！何で兄ちゃんは何時もそうなんや！そんなに私は頼りないか！兄ちゃんの悩みすら聞くことが出来んのか！」

涙ながら怒鳴ると兄ちゃんは力なく笑い

「すまない・・・泣かないで欲しい」

兄ちゃんがハンカチを取り出し、私の涙を拭う

「私は馬鹿だな・・悩みこんで・・偶には誰かに悩みを聞いて貰えば良いんだ・・」

ぽつりぽつりと語る兄ちゃんの悩みを静かに聞く

「私は辛い・・どうせなら恨んで貰った方が良かった。私の罪を忘れずに居られるから」

兄ちゃんの姿は儚くて今にも消えてしまいそうだった

「そんなこと無いで。兄ちゃんはウーノさん達を助けたんや。胸張らな」

励ます為に肩を叩きながら言うと

「その言葉・・ゲンヤさんにも言われたよ。ありがとう少し楽になったよ」

と微笑み立ち上がる。兄ちゃんの姿は何時もと同じく大きく見えた

「皆探しとるで、はよ帰ろう？」

「そうだな・・」

兄ちゃんの手を引きながら六課に帰った、私達が帰ると皆六課の前で待っていた

「兄貴・・心配させないでくれよ」

「龍也・・お帰り」

「お父さん・心配しましたよ」

皆が次々兄ちゃんに声を掛ける中、スカリエッティさんが兄ちゃんの前に立ち

「龍也、歯を食いしばりたまえっ！！！」

ドガッ！！

鈍い音を立ててスカリエッティさんの拳が兄ちゃんに当たり、兄ちゃんが殴り倒される

スカリエッティさんは、倒れた兄ちゃんの服を掴み。無理やり立ち上がらせ

「私達が何時君を憎いと言った！君は私の大切な娘を助けてくれたんだ！胸を張れ！！八神也！！！」

兄ちゃんの服を掴み怒鳴ると

「・・・ああ、そうだな。はやてにもゲンヤさんにも言われたよ。胸を張れって」

兄ちゃんと肩を組みながら

「まったく、心配を掛けさせないでくれ。今日は一緒に飲むのだろう？」

子供みたいに笑うスカリエッティさんに

「ああ、そうだったな・・」

子供みたいに笑う兄ちゃん達と食堂に向かった

「旦那っ！たっく心配させないでくださいよ」

ヴァイス君達が笑いながら待っていた

「何なんだそれは？」

食堂に掛けられた垂れ幕には、スカリエッティ歓迎パーティと書かれていた

「いや～どうせなら盛大にパーティしようと思いまして」

机には大量の料理と酒が並べられていた

「おい、スカリエッティ、龍也こっち来いよ」

ゲンヤさんが手を振りスカリエッティさんと兄ちゃんを呼ぶ

「辛気臭いのは此処までだ！龍也今日は飲むぞっ！」

「程ほどにしておけよ？」

二人でゲンヤさんの席に行く姿を見て

（良かった兄ちゃん、元気になったみたいや）

と思い私達も席に着く

「おっしゃあ、それじゃ歓迎パーティの始まりだ！！」

ヴァイス君の乾杯の音頭でパーティが始まった

第５２話に続く

## 第５１話（後書き）

次回は少々ギャグが強いと思います

そして龍也が暴走します（笑）

それでは次回をお楽しみに

## 第５２話（前書き）

今回は少々時間が掛かりました。理由は初シリアスの感覚が判らず苦戦したのが理由です。

今回は少々長いと思いますが、お付き合いください。

アンケートも残すところ６日になりました、まだ参加していない方はお知らせに詳しく書いてあるので、そちらにお願いします

それと技のアイデア、無期限募集中です、不採用になることは無いのでどなたも気軽に参加ください

それでは本篇始まります

# 第５２話

第５２話

賑やかなムードでパーティーは始まった

「話しは聞いたぜ、ウーノさん、俺らはそんなんであんたと妹さん達を拒絶しないぜ！」

ウーノさんの周りにはなのはちゃん達と未婚の男性局員がいる

「ふふ、やっぱり信じてよかったですね」

ウーノさんも軽くお酒を飲みながら受け答えをしてると

「ウーノさん、俺と結婚してくれ～！！」

酔った男性局員がそう叫ぶと

「残念ですが、お断りします。私は好きな人が居るので」

「龍也じゃないよね？」

ウーノさんの隣のフェイトちゃんが言うと

「違いますよ。私が好きなのは・・」

ウーノさんの視線の先には

「龍也、ゲンヤさんもっと飲め！」

赤ワインのボトルを兄ちゃんとゲンヤさんに向ける。スカリエッティさんの姿がある

「・・・もしかしてお父さんが好きとか？」

なのはちゃんが若干引きながら言うと

「私達はドクターの養女ですからね、別に好きになっても問題ないですよ」

・・・ウーノさんの周りの時が止まり

「ちくしょー！！！なんでこんな良い人がファザコンなんだー！！！」

ウーノさんに求婚した男性局員が絶叫する

「すいませんね、一度死んでください」

ウーノさんの拳がその局員を捉え殴り飛ばす

「げふっ・・」

その局員は泡を吹いて気絶した

「貴方達も死にますか？」

ウーノさんの周りに居た局員達は大きく首を振る

（なんや。私と似てるな）

自分もブラコンと言われるのは嫌なので、似てるとと思い、自分も並べられた料理を口に運ぶ

（少し位お酒飲んでも良いと思うけどな～）

ミッドチルダでは酒は１８から飲む事が出来る、だから飲酒しても問題ないが

（兄ちゃんに止められてるでな～我慢しよか）

兄ちゃんに酒は二十歳からだ、と言われたので大人しくジュースを飲んだ

「龍也！もっと飲まないか！！」

ゲンヤさんに強制的にグラスに酒を注がれる

「私は・・そんなに飲めないのですが・・」

私は酒は嗜む程度で二人みたいに酒豪では無い

「何を言っている、私達の酒が飲めないのか！」

ジェイルも良い具合に出来上がってるのか、飲めと言う

「ぐう・・お前は知ってるだろう。私はそんなに酒には強くないだぞ？」

「知らんなぁ、良いからさっさと飲みたまえ」

飲むしかないのか・・入れられた酒を飲み干すと

「おっし、次はこれだ！！」

ゲンヤさんが杯を取り出すが

「・・何処から持って来たんですそれ・・」

でかい。とんでもない大きさの杯に酒を淹れ

「おっしゃあ、一番ゲンヤ飲むぜ！！！」

ゴッゴッゴと音を立てて一気飲みし

「ほれ、次はお前だ。スカリエッティ」

その杯を渡すと

「ははははははははっ！！！私はワインだ！！！もうガンガン行くぞ！！！」

ワインのボトルを纏めて5本逆さにし、杯に注ぎ

「ふっはっはっは！！チンクもトーレも居ない。今日は倒れるまで飲むぞ！！」

杯のワインを一気に飲み干す。そうか・・チンクとトーレが居ないからストッパーが居ないのか。そんな事を思っていると

「「さて・・次は龍也だ、飲めぇ」」

杯に酒を淹れる酔っ払いコンビ。断ることは出来ない。私は覚悟を決め

「くっ・・判りました飲みますよ」

杯の酒を飲み干すが、クラクラと目が回る

「ひっく・・ゲンヤさん・・ひっく・・ジェイル・・もう飲めん・・ひっく・・私は・・ひっく・・寝る」

もう無理だ。これ以上は飲めないと思い。立ちあがろうとすると

「誰が寝て良いって言ったよ。まだ飲むぜ!!」

ゲンヤさんに肩を掴まれ強制的に座らせられる

「ひっく・・勘弁してください・・もう・・「ははは、飲みたまえっ!!」がもっ!!」

口に無理やり酒瓶を突っ込まれる、その中身を全て飲むと同時に私は意識を失った

「あ～、お兄様が！」

お兄様の口に無理やり酒瓶を入れ、飲ませているスカリエッティさんの姿が見えたです

「お父さん、大丈夫かな？」

キャロちゃんも心配そうに言うので、二人でゲンヤさんの席に行ったです

「お兄様、大丈夫ですか？」

「お父さん？寝るなら部屋に戻ったほうが良いですよ？」

二人で揺すると

「ん～？リィンとキャロか～？お兄ちゃんはとても楽しい気分です」

上機嫌に笑う、お兄様は何時もと違い子供みたいでした

「ほら。お水ですよ」

コップに水を入れて渡すとそれを一息で飲み

「んふふ～ありがとう～お兄ちゃんはとても嬉しいです～だから～」

完全に酔ってるお兄様が下を向きました。大丈夫かな？と思って覗き込んだです。

「お。お兄様！？」

「お、お父さん!?」

「んっふっふ～捕まえた～」

突然立ち上がったお兄様に抱きしめられたです

「んふふふ～お兄ちゃんは二人が大好きですよ～」

「止めてください～目が回ります～」

「エリオ君～助けて～」

クルクルとリィンとキャロちゃんを抱えたまま、お兄様が回り始めました

「兄貴っ!?」

「龍也!?」

「兄ちゃん!?」

「「「龍也さん!?」」」

はやてちゃん達の驚きの声が聞こえる中

「ははははははは、作戦成功だっ!!龍也は酔うと抱きつき癖が出るんだっ!!!」

スカリエッティさんが楽しそうに言うですが、リィン達には冗談じ

ゃないです。お酒臭い上に力が強いです

「お兄ちゃんは・・二人が大好きですよ～だから～」

チュッ！

「へっ？」

「かぁぁぁ・・・」

お兄様にほっぺにキスされたです。恥ずかしくて顔から火が出そうでした・・

「んふふ～二人とも可愛い可愛い」

更に力を込めて。リィン達を抱き抱えクルクル回り始めた。お兄様は突然止まり

「あっはははは、高速回転スタンバイ～」

「えっ？」

「嘘・・魔力・・？」

お兄様が魔力を纏いました・・ああ・・リィン達は此処でリタイヤ見たいです

「ご～」

ギュルルルルルルと凄まじい音を立ててお兄様が回転し始めました。

リィンの記憶は此処で途切れたです

「兄ちゃんは酒乱なんか？」

目の前でぐったりとした、リィンとキャロを降ろし

「あっははははっ」

と笑う兄ちゃんは正直危険な匂いがする。そんな事を思ってると私の前に影が落ちる。恐る恐る顔を上げると

「はやて～見つけた～」

「きゃあっ！！」

逃げるとか止める様に言う間もなく、私も兄ちゃんに抱き抱えられた

「ちょっ・・兄ちゃん恥ずかしいから降ろして」

周りの隊員の目が気になって言うと

「うう・・はやては私が嫌いなのか・・」

ピシッ・・空気が凍る。普段なら決して聞くことの無い泣きそうな声だ

「いや・・私は兄ちゃんが好き・・ちょっ頬擦り止めて～」

好きと言った瞬間兄ちゃんに頬擦りされる。嬉しいけど止めて恥ず

かしい

「んふふ～私ははやてが大好きですよ～」

そう笑うと兄ちゃんの唇が私の頬に押し当てられる。

「！？！？！？」

兄ちゃんにキスされた瞬間、なのはちゃん達の顔が驚愕に染まる

「ちょ・・止めて～頬にキスしないで～」

放す気ゼロ＋頬にキス。もう恥ずかし過ぎる

「んふふ～はやては可愛いな～」

もうどうでも良うなってきたわ・・

「んふふ～ヴィータ見つけた～」

「うおっ！兄貴！？」

呆然としていたヴィータを捕まえ

「んふふ～ヴィータも可愛い可愛い」

笑いながらヴィータに頬擦りする・・酒乱とかのレベルじゃないでこれ

「頬擦り・・・って首にキスするなぁぁぁ！！」

ヴィータが羞恥心で真っ赤に成りながら絶叫する

「んふふふ～お兄ちゃんは可愛い妹が居て幸せです～」

と笑い更に力を込めて私とヴィータを抱きしめる。

「お兄ちゃんは～はやてやヴィータが傍に居てくれるだけで幸せなんです～」

兄ちゃんの腕の力は更に強まり、まるで手に入れた温もりを放したくないと言ってる気がした

「お兄ちゃんは～はやて達が大好きですよ～」

ふふふと笑いながらまたクルクルと上機嫌で回り始め

「ん～シグナム～捕まえた～」

「兄上っ！？」

兄ちゃんの話に沈黙していた、シグナムを捕まえ。私達同様抱き抱える

「お兄ちゃんはシグナムも大好きですよ～」

「あああああ、兄上！？止めて、止めて下さい！キスしないで～」

シグナムも真っ赤で絶叫する。周りの局員は目を点にしている。

「んふふ～お兄ちゃんはとても楽しいです～」

と笑いクルクル回り、視界の隅にシャマルを見つけ

「シャマル～見つけた～」

「お、お兄さん!?放して下さいぃぃ～。頬擦りやめてください～」

私達に加えシャマルも捕らえながら、兄ちゃんはクルクル回ってる

「ひっく・・お兄ちゃんは可愛い妹が沢山居て幸せです～」

暴れても放すように言っても無駄なので、私達は諦めの境地に達していた

「・・・・龍也さんって酒乱?」

目の前で凶行を行う龍也さんを見て首を傾げる

「いや～!耳、耳噛まないで～」

「～♪～♪～」

はやてちゃんが耳を噛まれて絶叫してる、多分私でも絶叫するだろう

「なのは、止めたほうが良くない?」

フェイトちゃんも唖然の表情で言うが

「フェイトちゃんも・・死にたいの？・・グリフィス君見たいになるよ？」

食堂の隅では龍也さんを止めようとした猛者達の骸と、グリフィス君とザフィーラの姿がある

「裏拳で一発・・龍也酔うと怖いね・・・」

止め様とした瞬間裏拳で、グリフィス君とザフィーラを沈めた・・全員良い具合に痙攣し泡を吹いている。ザフィーラは辛うじて立ってる状態だ

「でもあのままだと部隊長・・・大変な事になりません？」

ティアナとスバルがはやてちゃんを指差す

「ひゃあああっ！首噛まないで～」

「～♪～♪～」

龍也さんは上機嫌ではやてちゃんの首を噛んでる・・あれ？シグナムとシャマルの姿が無い

「・・なんとか脱出できた・・・」

「ううぅ、恥ずかしいです・・」

ふらふらの状態で歩いてくる。二人は酷く消耗している

「大丈夫？」

真っ赤の二人は俯きながら

「・・兄上は酒乱だったんだな・・・」

信じたくないけどそうみたいだと思ってると

「兄貴～首を舐めるなぁ～っ！！！」

ヴィータちゃん全力で暴れてるが、がっちりとホールドされている

「もう諦めよ・・ヴィータ我慢しよ・・・・・」

はやてちゃんがそう言うが・・顔は笑顔で幸せそうだ・・ちょっと羨ましいかもしれない・・・

「ごくっ・・・なのは・・私も行ったら・・抱きしめてくれるかな？」

フェイトちゃん！？もう可也追い詰められてるの？目が正気じゃないよ・・

「龍也さん酔ってるから・・酔ってる・・？正気じゃない・・？抱きついてもばれない・・チャンス？・・はっ！？私は何を・・」

いけない・・大分私も追い詰められてる

「何の騒ぎなんだ・・？」

最近見なかったセレスさんが騒ぎに気付き、姿を見せる

「セレスさん・・龍也さんを止めてください」

酔ってはやてちゃんを捕まえ放す気配の無い龍也さんを指差しながら言うと

「・・・判っている、王を止めるのもまた家臣の役目だ」

これで一安心かな?と思いセレスさんを見る

「王よ、お二人を放したらどうですか?」

「やだ」

即答!?

「・・それではお休みになられた方が良いのでは?」

「・・・そうだな、うん・・寝る・・お休みなさい・・・」

振り返り食堂を後にする龍也さんだが

「ちょっ放してねえなぁぁぁ・・」

「放してくれよおぉぉぉ・・・」

二人を放す事無く消えた・・・って!二人抱き抱えたままですよ!

セレスさんを見ると

「・・・すまん。失敗した・・だが大丈夫だ・・たぶん間違いは

無いと思うから・・」

不安げに言うセレスさんを見て、不安を感じながら・・龍也さんの後姿を見送った

パーティが終わり、自室でベッドに横になりながら、私はモヤモヤした何かが胸に募るのを感じていた

スカリエッティが龍也の友達・・私は信じられなかった。スカリエッティはプロジェクトFを生み出した憎い相手・・悪い事だけでは無かった、なのはやはやてに出会えた・・そして何より龍也に出会えたそのことは感謝している、が彼は憎い私とエリオの道を歪めた仮に彼が居なければ、私とエリオは龍也に会う事は無かった・・その点では感謝しているはその所為で私とエリオを一生消えない烙印を持つ・・人ではない・・クローンという事実・・それが重く胸に圧し掛かる。彼が憎い・・殺し・・

「止めよう・・そんな事しても何にもならない・・」

一瞬殺せば良いという考えが頭を過ぎる、それを振り飛ばす為にシャワーを浴びようと思い立ちあがると

ピピ！

メールの着信音がする

「誰だろ？こんな時間に・・」

そう思いながらメールを開く

「これはっ！？」

メールの差出人はスカリエッティだった

『大切な話がある、君さえ良ければ演習場に来てくれ』

短い文章が其処にあった

「何のつもりか知らないけど・・とりあえず行って見よう」

私はそう思いながら演習場に向かった

「フェイトさんの所にも来たんですか？」

演習場には既にエリオが居た

「うん。私の所にも来たよメールが、エリオにも来たの？」

尋ねると頷くエリオと待ってると

「すまないね・・ウーノを寝かせていたんだ」

白衣を翻しスカリエッティが姿を見せる・・ドクン！！憎い・・彼が・・！！再び胸に黒いモヤモヤとした物が現れる

「こんな時間に何の用ですか？」

それを隠すために冷静な口調で話しかけると、

「私は君達に謝らないといけない・・自分の娘の為とは言え、プロジェクトFなんて物を考えた事を私はずっと悔いていた・・造られた命その辛さは自分が一番判ってるのに・・」

悲しげに語るスカリエッティに

「どういう意味ですか?造られた命の辛さと言うのは?」

エリオが睨みながら問いかける

「私も又、人造魔導師なのだよ・・最高評議会に悪になる為だけに造られた・・最初は死を考えた・・生きていても意味は無い、私は所詮造られた人間だったから」

悲しげに語るスカリエッティ、知らなかった彼もまた人造魔導師だったなんて・・

「だがそれは出来なかった・・死のうと思い街を歩いていたら、出会ったんだ彼女に・・ウーノに・・ウーノは病気を患っていた・・それも命に関わるレベルの病気だ・・彼女の目は死んでいた・・輝きを失い・・唯り来る死を待っていたんだ・・私は迷った・・助けるべきか否か・・私なら救える・・だが造られたこの身で人助けなどしても良いのかと・・」

自嘲気味に語る、スカリエッティの話を静かに聴く・・そうしなければならない気がしたから

「私は彼女に近付いた、すると彼女は笑いながら言ったんだ・・近付いてはいけない・・と私はもう死にます・・近付けば貴方もこの病気に侵されてしまう・・だから近付くなと・・私は決心した・・

私は彼女を連れて家に帰った・・私は彼女を救いたかった・・それからは私は楽しかった・・日に日に元気になっていくウーノを見るのが楽しみになった・・元気になったウーノと暮らしてると私は孤児院が解体される事を知った・・私は慌ててその孤児院に行って、引き取り手の居ない娘達を連れて帰った・・そんな事を繰り返してると何時の間にか１２人も娘が出来ていた・・私は幸せだった・・こんな私でも誰かの役に立っているのだと・・」

昔を思い出しているのか懐かしそうに語る、スカリエッティだったが

「だがその幸せは長く無かった！私は命令を聞かないことで捨てられた・・なら娘を人質にすれば良いと考えた最高評議会は・・ネクロと結託し私の娘を誘拐した！そして私は娘達の為に犯罪に手を染めた・・失いたくなかった！あの暖かい場所を！そして私はプロジェクトＦを考案した・・造られる事が辛いと知っていたのに！」

血を吐くような声で嘆くスカリエッティの姿はとても痛々しい物だった

「そして・・フェイト君達が造られたのを知った・・私は後悔した・・だがそれでも私はまだ罪を重ねなければならなかった！娘はまだ人質になっていたのだから・・私は願った・・誰でも良い娘を助けて欲しいと・・そしてそれは叶った・・雪の降る日私の研究所に侵入者が現れた・・それは当時隻腕で漆黒の騎士甲冑を身に纏った龍也だった・・そして彼はこう言ったんだ・・お前がウーノ達の父親かと・・その言葉に頷くと彼の背後から娘達が姿を現した・・私は泣いた泣いて泣き続けた。そして私は姿を隠した・・ネクロにも管理局にも見つからぬ様に・・そして今まで姿を隠してる間もずっと悔いていた・・だから」

その言葉と共に銃が投げ渡される

「君達の気が私を殺す事で晴れるのなら・・私を殺せ・・」

そう呟き目を閉じたスカリエッティと渡された銃を見る・・私が彼を殺す・・だがそうすれば私はウーノ達から父親を奪う事になる

「フェイトさん・・」

エリオが心配そうに見る中・・私は引き金を引いた

ダーンッ!!

「・・・何故外した?」

その銃弾はスカリエッティの顔の横の壁に命中した

「私は貴方を殺したい程憎い・・だけど・・・そんな事をすれば悲しむ人が居る・・だから私は貴方を撃てなかった」

銃を落とす・・これで良いんだ・・私はこれで良いんだ

「そうか・・本当にすまなかった・・謝ってすむ問題じゃ無いのは判ってる、だけどもう一度言わせてくれ・・本当にすまなかった」

土下座してなんども謝るスカリエッティに、エリオが近付き

「あの・・スカリエッティさん。僕は其処まで貴方を憎んでいません・・貴方のおかげでキャロやフェイトさん・・それにお父さんに会えました・・だからもう頭を上げてください・・」

私もスカリエッティに近付き

「私は貴方が憎いでも・・それのおかげでなのは達と龍也に会えた・・その点は感謝してる」

と良い肩に手を置くと

「すまない・・本当にすまなかった・・」

顔を上げ再び謝るスカリエッティに

「もう謝らないでください・・私は貴方を許しますから」

「僕もです・・僕も貴方を許します」

この時胸の中にあった黒いモヤモヤは消えた・・私は彼を撃てなかっただけどこれで良かったんだよね？・・アリシア

私はそう思いながら部屋に戻って行った

第５３話に続く

## 第５２話（後書き）

初シリアスどうでしたか？

次はギャグが強いです、ジェイルはギャグでもシリアスにも使えるのでとても楽です

それでは次回をお楽しみに

## 第５３話（前書き）

アンケートも残す所。後５日です・現在はヴィヴィオと親馬鹿が同票ですね
まだ参加してない方は是非参加してください

技のアイデア、感想は常時お待ちしています

今回はギャグが強いです

楽しんで読んで下さい、それでは本編始まります

# 第５３話

第５３話

朝日が差し込み始めた部屋の中で

「・・・何時になったら私らは解放されるんや？」

「知らねぇよ・・」

私の呟きにヴィータが反応してくれるが

「すぅ～すぅ～」

兄ちゃんは私達を抱えたまま眠っており、脱出不可・・一応眠る事は出来たが、朝になっても兄ちゃんが起きる気配は無い

「兄貴に抱きついて寝た事あったけど・・抱きしめられたまま寝たことは無かったな・・」

そういえばそうやな～酔った勢いでの行動だが・・幸せを感じていた

「ううん・・朝か・・」

兄ちゃんが目を開く、その瞬間私とヴィータと目が合う

「兄貴おはよう」

「おはよう、兄ちゃん・・いい加減放してくれへん？」

兄ちゃんの目が驚愕に広がる

「おおおおおっ!?!?」

私とヴィータを一瞬で放し、ベッドから転がり落ちた

「何で?何で?私がはやてとヴィータを抱きしめて寝てる!?・・私は何をやったんだ?」

立ち上がり頭を抱えながら絶叫する兄ちゃんは、信じられないくらい動揺している

「痛い・・頭が・・痛い・・昨日私は何をしてたんだっ!!」

頭をぶんぶん振り絶叫している兄ちゃんに

「兄貴は昨日私達を抱き抱えて・・ほっぺにキスして・・ぶんぶん振り回してたんだ」

ヴィータが昨日の事を言うと

「・・私達?複数形・・?ヴィータとはやて、あと誰だ?・・何も覚えてないのだが・・」

頭を抱えながら尋ねて来る兄ちゃんに

「キャロとリィンとシグナムにシャマル・・頬擦りして・・頬にキスして・・抱きしめて・・振り回してたで?」

兄ちゃんの顔が真っ青になった・・そのまま

「私は何という事を・・妹に私は何をしてたんだぁぁぁっ!!!」

ガンッ!ガンッ!!ガンッ!!!

「兄ちゃん!?何してるんやっ!!!」

「兄貴・・血が血が出てるぞっ!!!」

凄まじい勢いで頭を柱に打ちつけ始め・・額が割れ血が出てるがお構いなしで

「私はっ!私はっ!何という事をっ!!

ガンッ!ガンッ!!ガンッ!!!

「兄ちゃん死んでまうて・・ヴィータ止めるでっ!!」

「おうっ・・早く止めないと・・兄貴が出血多量で死んじまう」

二人で柱に頭を打ちつける、兄ちゃんを止めるのに可也苦労した事を此処に記す

「お父さん起きて来ませんね?」

食堂でキャロが首を傾げる。

「本当ですね?お兄様らしくないです・・でも昨日のほっぺにチュ

ッは嬉しかったです～」

右頬を押さえながら笑うリィン、その場所は昨日龍也さんにキスされた場所だ

「・・私も・・ちょっと・・恥ずかしかったけど・・嬉しかったです・・・」

左頬を押さえ真っ赤になるキャロの姿を見ると。私も勇気を出して近づいてみれば良かったと思った

「皆、おはようさん・・」

「おはよう・・」

疲れた様子ではやてちゃんとヴィータちゃんが姿を見せる

「あっ・・おはようございます・・お父さん!?」

キャロが動揺し大声を上げる

「ひっ!?」

スバル達も短い悲鳴を上げた。かという私も悲鳴を上げそうだった

「・・私は・・何という事を・・・」

ふらふらと幽鬼の様に姿を見せた龍也さんの頭は包帯が巻かれている

「・・朝から柱に頭を打ち付けること１５回・・止めるのに苦労し

たで・・」

唖然としている私にはやてちゃんが説明してくれる

「覚えてたの?龍也さん酔ってた時の事?」

あそこまで落ち込んでいる姿を見ると、酔っていた時の事を覚えてるのかと思い尋ねると

「うんや・・なんも覚えてへんけど・・精神的に追い詰められてる・・ほら・・見てみい」

はやてちゃんに言われ龍也さんを見る

「私は・・妹に何という事を・・・・」

暗黒の鬱オーラを纏い。机に伏せている龍也さんに

「お兄様・・おはようです」

「お父さん。おはようございます」

リィンとキャロが接近する

「・・うん・・おはよう・・それと御免・・」

物凄い小声で返事を返す

「兄貴・・凄い自己嫌悪になってるみたいなんだ・・」

ヴィータちゃんの言う通りの様で

「うん・・御免・・許してくれ・・」

俯きどんどん鬱オーラを発生させている

「気にしてないですよ？むしろリィンは嬉しいです～」

「私・・もです」

二人がそういうと龍也さんは立ち上がり

「私はっ！私はっ！なんという事をっ！！」

「おっ！お兄様っ！！！！」

「お父さんっ！血が出てますっ！！！

ガンッ！ガンッ！！ガンッ！！！

その凶行を二人が止めようとするが、それを完全に無視し凄い勢いで柱に頭を打ちつけ始めた。ええっ！？龍也さん死にますよ！？

「いかん！止めなっ！！スバル！ティアナ！兄ちゃんを柱から引き離せっ！！」

慌ててはやてちゃんが指示を出し、スバルとティアナが龍也さんを柱から引き離そうとするが

「くそっ！死んでしまえっ！！」

ガンッ！ガンッ！！ガンッ！！！

「龍也さん！死にますよっ！！！」

「スバル！そんな事言ってないで、龍也さんを柱から引き離すわよっ！！

二人が離そうとするのを振りほどき更に頭を柱に打ち付ける

ガンッ！ガンッ！！ガンッ！！！

「なのはちゃん、私らも止めに行くでっ！！」

この後龍也さんを止めるのに３０分近く掛かった事を此処に記す

ずーんっ・・

試合を終えたボクサーの様に項垂れる龍也さんからは、凄まじい鬱オーラが出ている・・いやこれはもう瘴気だ

「どうして私はあんなに酒を飲んだ？・・私は酔うまでは飲まない様にしているのに・・」

ぶつぶつと呟き・・昨日の事を思い出そうとしているが、頭に包帯を巻き呟くその姿は何処かシュールだ

「確か・・もう飲めないと言って立ち上がろうとして・・ゲンヤさんに肩を掴まれて・・」

お父さん!?なにやってるの!それの所為で龍也さん瀕死だよ・・

「そうだ・・ジェイルだ・・ジェイルに酒瓶を口に押し込まれたんだ・・はっは・・そうかアイツの所為か・・」

ゆらりと立ち上がるその姿は悪鬼に見えた。体からは濃密な殺気が徐々に滲み出ていた

「お。お父さん何をするつもりですか?」

エリオが震えながら尋ねると、素晴らしくイイ笑顔で

「少しお話（殴り倒す）をしないといけないからな」

・・・今お話って裏に殴り倒すって声が聞こえたっ!!

「「「・・・・・・」」」

皆も聞こえてみたいで、顔が引き攣っている

「はっはっは。しかし昨日の龍也の酔い方は面白かったなぁ」

「龍也様に殺されますよ?」

歩きながら話しているスカリエッティさんの声が聞こえる

「・・どうやら咎人から出向いて来たか・・ゴキっ!!話し（殴り倒す）をしないとな・・」

首を鳴らしながら龍也さんが笑う・・スカリエッティさん来ちゃ駄目です・・確実に龍也さんに殺されますよっ!!

「はっは・・龍也・・」

笑っていたスカリエッティさんの顔が引き攣り・・逃げようとするがガシッ!!

「何処へ行く?愚か者・・」

その肩を掴み無理やり動きを止める

「痛い・・龍也骨が軋んでる・・いかん折れる・・折れてしまう」

ミシッ!ミシッ!と嫌な音が聞こえてくる

「お前は知っていたよなぁ?私がアルコールに弱いと・・では何故あんなに飲ませた?」

濃厚な殺気が食堂を包み込む・・ゾクッ!!部隊長に睨まれている特有の気配だが

(・・龍也さんも出来たんだ・・)

嫌なところで部隊長と龍也さんが良く似ている事を知った

「ははは・・酔った龍也を・・げふう・・」

最後まで言い切る事無く、龍也さんの拳が顔にめり込み殴り飛ばさ

れる。スカリエッティさんを踏みつけながら

「良し・・判った。では親友としてその愚かな思考回路を矯正してやろう・・なに礼は要らないぞ」

龍也さんの足の下のスカリエッティさんの骨が嫌な音を立てている

「死ぬ！死んでしまう！ウーノ龍也を止めてくれぇ！！」

その痛みに耐えかね助けを求めると

「龍也様・・程々にして置いてください。これからの事を話さないといけないので」

ウーノさんも度が過ぎていたと判断したのか、助ける気は無さそうだ

「・・では9割破壊するか・・」

・・9割！？それ普通に死にますよ！？それ以前に破壊！？殺す気満々じゃないですか

「・・エリオ達は目を塞いだ方が良いな・・」

子供組みの目を塞ぐ、隊長達

「・・久しぶりに見たよ・・本気で怒ってる龍也・・」

「そうだね・・・・」

・・・昔を思い出しているのか遠い目をしている、なのはさんとフ

エイトさん

「さて・・お話し（処刑）をしようか？・・ああ・・スバル達も目を塞いでおきたまえ・・女の子が見るものではない」

そう言われ目を塞いだ瞬間

「ちょ・・まっ・・ぎゃあああああああっ！！！」

スカリエッティさんの悲鳴が聞こえた・暫くの間声だけをお楽しみください・・

ドゴッ！ドスッ！！ベキャッ！！！

「龍也・・折れる・・折れる・・ぐおおおおっ！！！！」

ドスッ！ドスッ！！ドスッ！！！

「ぎゃあああっ！！！内臓・・内臓はやばい・・ボディーブローを止めてくれぇぇ！！！」

ゴガッ！ドスッ！！フォンッ！！！

「ま、魔法！？止めろ龍也！！それは駄目・・ぎゃあああああッ！！」

「穿て・・ブラッディダガーッ！！！！！」

ドガッ！ドガガガッ！！！

シーン・・・

スカリエッティさんの悲鳴が途絶えたので恐る恐る目を開く

「・・・・・・・・」

ブラッデイダガーで壁に縫い付けられた、ズタボロのスカリエッティさんの姿が見えた

「お話し（処刑）は終ったぞ・・はやて」

頬に血をつけたまま龍也さんが歩いてくる

「兄ちゃん?血が付いてるで?」

部隊長!?スカリエッティさんはスルーですか?

「兄上?まさか・・殺したのですか?」

シグナムさんが震えながら言うと

「まさか・・殺しはしてないさ・・骨が幾つか逝ってるかもしれんがな・・クックックッ・・」

声を押し殺し笑う龍也さんを見て、この人を怒らせない方が良いと感じた

今日の教訓・・優しい人ほど怒ると怖い

「さて・・ウーノ何の話をするんだったか?」

処刑を受けた馬鹿を放置しウーノに尋ねる

「えっとですね・・姉妹の中で何人か六課にお預けしようと思っているのですが・・」

当初の予定通りだな

「はやて・・私の方で誰を呼ぶのか決めてるのだが・・はやての方でも意見が有るなら聞こう」

私の目で見たトーレ達の能力を話し、部隊長としてのはやての意見を聞く

トーレ　所持デバイスなし

空戦適正あり・・戦闘スタイルは高速機動からの接近戦　スピードはフェイト同レベルか少し下

チンク　所持デバイス　ルナエッジ

中距離支援と近接戦闘による陸戦適応を持つ　デバイスは二振りのダガーだがチンクの意思で数を増やす事が出来るまたそれを投げつけ爆弾としての使用も可能　指揮官の能力を持つがまだ荒削りである

クアットロ　所持デバイスなし

後方指揮タイプ　戦闘力はほぼゼロに近いが防御はそれなりの物がある　幻術系のＩＳを所持している

セイン　所持デバイスなし

非戦闘タイプ　ＩＳで無機物に潜行する事が出来るが、戦闘力は皆無　護身レベルの近接戦闘は可能

ディエチ　所持デバイスなし

後方タイプ　ＩＳで可也の威力の砲撃、狙撃が可能　だがその分近接能力が低く単独行動は出来ない

ノーヴェ　所持デバイス　フェンリル

陸戦適応あり　高い近接技能を持つが、感情的で頭に血が上りやすいという欠点がある　デバイスは篭手で氷雪の付加の特性を持つ

ウェンディ　所持デバイス　バニシングバード

万能タイプ　防御・射撃・飛行とほぼ万能に対応できる筈だが経験不足、デバイスのバニシングバードはボードモードと騎士甲冑の二つのモードがある　ボードモードなら物や人を運ぶことが可能　騎士甲冑の能力は可也高いと思われるが本人に使う気が無い為保留

オットー　所持デバイス　ケルビム

中距離支援タイプ　バインドと結界構築が得意だが射撃も可能　デバイスはケルビム　腕輪型で射撃のサポートとオットーの姿を隠す幻影の能力を併せ持つ　経験が少ない為柔軟性に難あり

ディード　所持デバイス　ベルゼルガ

近接タイプ　前までは近接に不安があったが今ではその不安は無い
　デバイスのベルゼルガは二刀の両刃刀で可也の重量があるはずだが片手で軽く振り回す　ＩＳと組み合わせる事でリーチを変化させたり槍の様な使用も可能

セッテ　所持デバイス　ソルエッジ

中距離支援と近接戦闘が可能、柔軟性、状況把握の能力が高い　デバイスはチンクのルナエッジと対を成すソルエッジで形状はブーメラン切れ味威力ともに文句無し、さらにＩＳで自在に操る事が出来る

「さて・・これを踏まえた上で、私はチンクとノーヴェにセッテとウェンディを六課に迎えようと思うがどうだろう？」

「ううん・・ちょい過剰戦力の気がするなぁ・・特にチンクさんの爆弾って何？」

顎の下に手を置き難しい顔をしながら、尋ねるはやてに

「金属製の物に触れた瞬間、爆発物に置き換える事が出来て。昔義手を誤って爆破された事がある・・」

あの時は少し死を感じた・・なにせゼロ距離爆破は少々きつい物があった

「そうですね・・あの時は大変でしたね・・チンク首を吊ろうとしてましたし・・」

自殺しようとするチンクを止めるのにかなり苦労した

「・・チンクさんって意外とどじっ娘？」

はやてが首を傾げながら尋ねると・・愚か者の声で

「そうでもないのだが・・予想外の事が起きると中々立て直せないな・・」

頭から血を流した、ジェイルがふらふらと歩いてくる・・軽いホラーだ

「スカリエッティさん！？生きてたんですか！？」

なのはが驚きながら尋ねると

「なのは君、私はこの程度は死なんよ・・昔ゼロ距離でのスターライトとラグナロクブレイカーを喰らったが・・全治三日で回復したからな！！」

頭からを血を流し、良い笑顔でサムズアップする。ジェイルに皆ドン引きだ

「それで何の話だね？」

頭から血を流したまま椅子に座る。エリオとキャロ、リィンは大きく距離を取った

「ふむ・・チンク達の内、何人かを隊員として呼ぶと言っただろう？そのメンバーでチンクとノーヴェにセッテとウェンディを推薦してるのだが？」

ジェイルは少し考えた素振りを見せ

「クアットロも呼んだ方が良い、ティアナ君は幻術系でクアットロも幻術系・・良い経験に成ると思うが？」

頭から血を流しているが言ってる事はまともだ

「それもそうか・・はやては同思う？」

此処の部隊長ははやてだ、最終的な決定権ははやてにある

「私は全員呼べば良い思うけど？」

「そうも行かないんだ、ジェイルは天雷の書があった遺跡を調べに行くんだ、その護衛を除くと４～５人にまでしか此方に呼べないんだ」

これは前々から考えていた事だ、謎に包まれたままの神王とジオガディスの事は詳しく調べておきたい

「そうか・・そんならそのメンバーで良いと思うで？」

はやての了承が出たのでチンクとノーヴェにセッテとウェンディにクアットロを呼ぶ事になった

「う～ん、どんな人なのかな？楽しみだな～」

フェイトは少し楽しそうだ・・それにジェイルを睨んでないどういう事だ？

「スカリエッティさん、武装隊で何人かこちらからも護衛を用意しましょうか？」

なのはが武装隊に要請を出そうかと尋ねるが

「申し出はありがたいが遠慮しておく、あの場所はネクロの出現率が高い、それこそＳかＳＳ相当の魔導師で無いと足手纏いになる」

実力の無い者があそこに行くのは死にに行くような物だからな・・・ジェイルのいう事は的を射ている

「・・そうですか・・それで何時出発するつもりなんです？」

なのはが尋ねると

「うーん逃亡生活で大分疲れてるからな。ゆっくり骨休みをしてからに・・そうだ！海鳴だったかね？私は其処に行きたい」

と子供のように笑うジェイルに

「良いんじゃないのか？レジアスに頼んでお前達が行けるようにしておこう」

転送ポートを使えるように手続きを取ろうとすると

「何を言ってる？龍也達も一緒に決まってるだろう？はっはっはっ！一度行ってみたかったんだ、龍也が育った街に」

立ち上がり大声で笑い始めたジェイル・・いかんな何時もの発作が出たか

「いや・・それは少し無理やと思います・・仕事がありますし・・」

はやてが無理だと言うとジェイルは笑いながら

「私を誰だと思っている!天才科学者ジェイルスカリエッテイだ!!私の辞書に不可能は無い!!」

そう叫ぶと仮想モニターを展開し

「レジアス!レジアス!!早く出ろ!!私はお前に用があるんだ!!」

モニターに向かい叫ぶその姿は、とても天才には見えない

「龍也さん・・あの人・・本当に天才なんですか?私にはそうは見えないのですが・・」

ティアナがジェイルを指差しながら言う

「あれは天才だが、ほら言うじゃないか、天才と馬鹿は紙一重と・・だから今のアイツは馬鹿だ」

皆引き攣った顔でその凶行を見てると

『やかましいわぁぁぁ!!!何だ貴様わしに恨みでもあるのか!!お前の無実を証明する為に三日三晩寝ていなかった。わしの安眠を妨げるとは何のつもりだぁぁ!!』

凄まじい怒声と共にレジアスの顔がモニターに映る

「おお、やっと出たか！それよりお前に頼みがある」

物凄い怒りのオーラを出しているがそれを完全に無視し言う

『・・何の様だ・・下らんことだったら貴様を殺す！』

可也頭に来ている様だ・・このままだと火に油を注ぐ続けるだけだと思い

「レジアス・・少し落ち着け血圧が上がるぞ？」

馬鹿の頭をヘッドロックしながら言う

『龍也か・・馬鹿は何を言いたいんだ？』

ギブ！ギブ！！死ぬと叫ぶジィエルを完全無視し話を進める

「何でも骨休みに私の育った街が見たいそうなんだが・・私達も一緒に来いと言うのだこの馬鹿は」

ぐったりしたジェイルを持ち上げながら言う・・いい具合に痙攣し死ぬ一歩手前に見える

『本当に馬鹿だな・・こんな奴がどうして天才なんて呼ばれるんだ？』

同時に溜め息を吐く・・その間ジェイルの口から青い人魂の様な物が出ていた

「にんに兄ちゃん!?スカリエッティさんの口から魂見たいのが出てる!?」

はやてが動揺しながら言う・・皆顔が引き攣っている

「レジアス、少し待ってくれ、ふんっ!!」

ゴキャッ!!間接に力を込め蘇生を施す

「はっ!?此処は何処だ!?あの美しい川は何処へ消えた!!」

どうやら本当に死に掛けていたようだ・・三途の川かミッドチルダの人間でも三途の川を見るんだな・・私は少し感動した

「それでやはり無理だろ?私達は仕事が有るから。馬鹿とウーノ達を行ける様に手続きをしてくれるか?」

だがレジアスの返答は私の予想を超えていた

『別に構わんぞ?お前達も海鳴だったか?に行っても構わんが』

「冗談のつもりか?私達の仕事は如何するんだ?」

はやて達を指差しながら言うと

『前のＴＶの取材で可也管理局のイメージアップになった・・だから有給を出そう。龍也お前もはやて達も骨休みすると良い・・ああ・・言って置くが拒否権は無い。大人しく有給を楽しめ・・ではなわしは寝る・・』

言うだけ言ってレジアスは画面から消えた

「どうする?はやて?有給だと」

はやて達を見る

「良しっ!!全員今から着替えとかの準備!!兄ちゃんも準備せなかんで?」

全員ハイテンションで消えた・・残されたのはウーノと私だけだ

「ウーノ?馬鹿は如何した?」

何時の間にか消えたジェイルに首を傾げると

「姉妹を迎えに行きました・・龍也様私も準備が有るので失礼致します」

物凄い早歩きでウーノも消えた

「・・・私も準備しに行くか・・・」

若干疲れながら自室に戻り準備をしながら

「・・・どうしてこうなるんだろうか?」

この呟きは誰にも聞かれず消えていった

第５４話に続く

## 第５３話（後書き）

次回は海鳴編２です
どうしても全員で海鳴に行かせたかったんですよ

次回の更新もお楽しみに

ＰＳ、コラボしても良いという作者さんが居ましたらご連絡ください

## 第５４話（前書き）

海鳴編です・・ギャグと龍也とはやての思い出の話が出ます、是非お楽しみを

アンケートは残り四日、ヴィヴィオ、親馬鹿が並んでいますどちらが勝つのか楽しみですね

# 第５４話

第５４話

急遽有給を強制的に与えられ、皆で海鳴に行く事になったのだが

「兄様、どうしてお父さんを殴ってくるの？」

オットーが尋ねてくるが

「ああ、気にしなくて良い、この馬鹿を冥界に叩き込むだけだ。直ぐに終るから向こうで皆と話してきなさい」

ドスッ！！ドスッ！！！

「ぐほっ・・龍也・・死ぬ・・死んでしまうぞ・・・」

息も絶え絶えでジェイルが言う、先程から私とお話（殴る）をしているのが原因だ

「貴様の思考はそう簡単には治らないんだな・・私は言った筈だ・・娘にメイド服を着させるなと！！このたわけっ！！！」

チンク達の内何故か、オットー、ディード、セッテはメイド服で来た。はやて達は目を丸くし驚いた

「すまん・・もうやらないから許してくれ！！！」

泣きながら謝るのでお話を止める事にした

「お父さん?大丈夫ですか?」

膝を付いて蹲ったジェイルにセッテが尋ねる・・服は着替えさせたので普通の服装をしている

「だ。大丈夫だ・・ふふ・・龍也を怒らせてはいけないと再認識したよ・・」

フラフラとウーノ達の所に歩いて行く、ジェイルを見てからはやての隣に立つ

「・・兄ちゃんあの人は馬鹿や・・自分の娘に何を考えてメイド服を着せるんや」

六課の面子・・主に、はやて、ヴィータ、なのは、フェイト、スバル、ティアナのジェイルを見る目は非常に鋭い

「だから言っただろう?馬鹿と天才は紙一重なんだよ」

優秀すぎるのも考え物だな・・と考えてると服の裾が引っ張られたので下を見ると

「パパ。肩車してくれる?」

笑いながらヴィヴィオが言うので笑いながら

「良いよ、・・これで良いかな?」

ヴィヴィオを肩車しながら尋ねると

「うん、これで良いよ・・パパの肩の上はヴィヴィオの特等席なの」

上からなので判らないがヴィヴィオの声はとても楽しそうだ

「さて、皆さん有給を使って旅行に行きます!!目的はスカリエッティさんの娘さん達との親睦会です!!

おおっ!!となのは達が声を上げる、なんだこの空間は

「そして、帰ってきたら六課に新しい仲間が増えます!!」

はやての隣にはチンク達の姿がある

「こういうのは駄目だ・・」

「我慢しようぜ?チンク姉・・」

「あはは、宜しくっす」

「別に私は仲良く出来なくても良いです・・私は龍也様の傍に居るだけで幸せですから・・」

「宜しくですわぁ~うふふふふ」

・・・何でこう姉妹間で、こうも対応が違うんだ?チンクとノーヴェは困惑、ウェンディとクアットロは友好的。セッテは・・怖い

「それでは皆で有給を楽しも~っ!!!」

お～っ！！若干異様なテンションなまま、転送ポートに入った

「おお～素晴らしい！！此処が地球かっ！！」

前から話しは聞いていたが本当に素晴らしい！とても美しい場所だ

「ここは私のお気に入りの場所でな・・春になると桜が見れる良い場所なんだ」

確かに後ろにある木は桜の木だが今は花は付いていない

「・・花が無いのが残念だが・・記念撮影だ！！娘達よ写真だ！写真を撮るぞ！全員並びなさい・・ああ・・龍也カメラを頼む」

龍也にカメラを手渡し桜の木をバックに写真を撮る

「ふふ。いやいや本当に良いね。自由というのは・・」

頬に当たる風・・降り注ぐ太陽どれをとっても素晴らしい

「楽しそうですね、スカリエッティさん。喜んでもらえて嬉しいですよ」

はやて君が笑いながら話しかけてくる

「本当に素晴らしい！地球という場所はなんと美しい事か！！」

娘達も気持ちよさそうに大きく背伸びをしている

「そうだッ！今度は私が写真を撮ろう！さぁ！！はやて君達も並びたまえ！」

龍也からカメラを受け取り、はやて君達と龍也を写真に収めようとするか

「なのはちゃん！兄ちゃんの隣は私とヴィータやっ！！そこを退き！！」

「いや・・こういうのは早い者順なんだよ？はやてちゃん？」

龍也の隣が誰かで言い争っているはやて君達を見ると

（龍也・・君は本当に罪な男だ・・１２人も女性に好かれる等と滅多にある事ではないよ）

後ろで娘の中で、龍也に想いを寄せてる者が不機嫌に成るのが判るが。此処は我慢してもらおう

「これで良いだろう！」

龍也が痺れを切らしたのか、微弱な身体強化を発動させ

「きゃっ・・兄ちゃん、何すんや・・良いかもこれ・・」

「兄貴の肩の上か・・これ良いぜ・・」

はやて君とヴィータ君を抱え上げ、自分の肩の上に腰掛けさせる、大柄な龍也だから出来る荒業だな

「「「「・・・ずるい・・」」」」

なのは君達が肩の上の二人を睨むが完全に無視している

「ジェイル、早く撮ってくれ」

「ああ、判ってるよ・・動くなよ・・カシャッ!!」

写真には龍也の両隣になのは君とフェイト君、その隣にスバル君とティアナ君が続き。龍也の両肩にははやて君とヴィータ君。龍也の前にエリオ、キャロ。リィンとヴィヴィオに続き、龍也の後ろはシグナム君、シャマル君、ザフィーラ君と続いている

「ふむ、良い写真だ、はやて君。すまないが今度は私と娘達と龍也で写真を撮りたい。カメラマンを頼めるかね?」

「良いですよ・・良い記念になりますからね」

心良くカメラマンを引き受けてくれた、はやて君に礼を言い桜の木の前に行く

「龍也!お前は私の隣だっ!」

「やれやれ・・もう少し静かにしたらどうだ?」

文句を言いながらも私の隣に立ち。私達の周りに娘達が並び立つが、龍也の周りはチンク、ノーヴェ、オットー、ウェンディ、ディード、セッテで固められている、そに様子を見ていると

「なぁ、兄あたしも肩に乗せてくれよ」

「私も肩に乗せて欲しい・・」

ルーテシアとアギトが肩に乗せて欲しいと言う

「構わない・よし・・行くぞ」

二人を抱え上げ、器用に肩の上に座らせる

「おお～高いぜ～」

「本当・・」

二人の喜んでいる姿を見ていると

（ゼストも来れば良かったのにな・・）

メガーヌの調子が悪いからと、残ったゼストも来れば良かったのに・・

「兄ちゃん。スカリエッティさん行くで・・カシャッ！」

この写真は良い記念になるなと思った

「さて・・はやて君此処からどうするんだい？ホテルにでも泊まるのかね？」

「ちゃいますよ・・私達の幼馴染の所に泊めて貰うんですよ・・ほら来ましたよ」

二人の女性が此方に向けて歩いてくる

「なのは～！フェイト～！はやて～！龍也～！！」

「あっ！アリサちゃん！すずかちゃん！」

「久しぶり～！」

「本当に久しぶり！元気にしてた？」

「もちろんや！二人も元気そうで何よりや！」

「ほう・・アリサとすずか、か久しぶりだな」

「龍也！前の時は会えなかったけど。あんたも元気そうね」

「アリサちゃん、そんな言い方無いよ？それにしても元気そうで良かったです」

はやて君の幼馴染と言う事で、龍也も面識があるようだ

「所で・・そこに居る白衣の人と女の人たちは誰？」

おっと・・私とした事が自己紹介がまだだった

「始めまして、私の名前はジェイルスカリエッティだ。龍也とはまぁ・・簡単に言えば友だな」

はやて君達が苦笑している・・はて？可笑しな事を言ったかね

「それで私の後ろに居るのが私の最愛の娘達だ！！ほら皆自己紹介だ」

「私はアリサバニングス。でっこっちは友達の」

「月村すずかです」

「ウーノです。宜しくお願いしますね」

「トーレだ・・暫く世話になる」

「チンクだ・・アリサとすずかだな。宜しく頼む」

「クアットロですわ～仲良くしましょう」

「セインだよ。宜しくね二人とも」

「ディエチ・・お世話になります」

「ノーヴェだ、暫く世話になるぜ」

「ウェンディっす。いや～此処は良い所っすね～」

「オットーだよ。宜しくね」

「ディードです・・宜しくお願いします」

「セッテ・・」

皆の自己紹介が終ると

「旅行だったわよね？」

アリサ君がなのは君に尋ねる

「うん。２拍３日の旅行だよ。すずかちゃん・・いきなりでごめんね」

「気にしなくていいよ。皆に会えるの楽しみにしてたしね」

ふむ・・本当に仲の良い幼馴染みたいだ

「・・・龍也様？どうしてそうなったのですか？」

セッテの怒りと困惑の混じった声がし。振り返ると

「私も知らんが別に良いだろう？皆喜んでいる」

龍也に抱き抱えられるヴィヴィオ。肩の上にリィンとアギトが腰掛け、背中にはエリオ、キャロ、ルーテシアがぶら下っている

「う～ん、お兄様の肩の上は落ち着きますね～」

「判る・・凄く安心するからな」

肩の上でほのぼのとした空気でリィンとアギトが笑い

「・・・本当のお父さんみたいです・・」

「うん・・私もそう思うよ・・・」

「龍也は暖かい・・安心する・・」

エリオ、キャロ、ルーテシアが心底安心と言う声で呟き

「パパの腕の中は暖かいの・・すぅ～すぅ～」

腕の中で眠りに付くヴィヴィオ・・何故ああなるんだっ！本当に龍也の子供の好かれ方は異様だ

「それで翠屋に行くのだろう？早く行くとしよう」

何事も無いように歩いて行く龍也の後姿を見ながら

「一度龍也の中の常識を調べた方が良いな・・」

皆も頷いていた・・皆そう思ったようだった・・

「それで翠屋と言うのはどんな店なんだ？」

スカリエッティさんが楽しげに笑いながら尋ねて来る

「翠屋は私のお父さんとお母さんがやってる店ですよ？」

皆で移動している中、擦れ違う人の目は龍也さんとスカリエッティさんに集中している

「うん？人の視線を感じるのだが何故だと思う？はやて」

「・・・多分、ヴィヴィオとかが原因ちゃうかな？」

龍也さんの方は、ぶら下っているキャロ達が原因で

「いや～本当に良い所だ」

スカリエッティさんの方は白衣が原因だ

（早く行こう・・何か視線が辛いよ・・）

擦れ違う人の目が痛く、私は早歩きで歩を進めた

「お父さん、ただいま～」

今この時が凄く嬉しかった

「なのは、お帰りどうしたんだ？おおっスバル君達も一緒か。さっ暑かっただろう、まずはこれでも飲みなさい」

「「ありがとうございます」」

お父さんが笑いながら皆に紅茶をいれる・・龍也さん達は外で待っている

「それで急に如何したんだ？また何か事件でも起きたのか？」

店の中は私達で貸しきり状態の為、こういう話をしても問題が無い

「ううん、違うよ。有給が出たから旅行に来たんだ・・それでまだ

人が居るんだけど呼んで良い？」

店の外にはスカリエッティさん一行と龍也さんが居る、可也の大勢なので一応聞いてからにしようとなった

「構わないが・・可也の人数なのか？」

流石お父さんだ、感覚的に判ってるのだろう

「うん・・１９人かな？そのうち４人は龍也さんとリィンちゃんにキャロとエリオ君なんだけど・・良いかな？

「１９人か・・はっはっ、満員になってしまうな」

お父さんが笑いながら看板を本日貸切にする

「ほら、早く呼んで来なさい・・幾ら龍也君でもこの暑い日に外に居るのは辛いだろう？」

「うん！じゃあ呼んで来るよっ！！」

良かった！駄目だって言われたら如何しようって思ってたから、私は一安心し。外に居る龍也さん達を呼びに行った

第５５話に続く

## 第５４話（後書き）

暫く、海鳴編です

その間にバトルの考案をしたいと思います

## 第５５話（前書き）

海鳴編です

ギャグが強く・・完全に原作から離れたキャラも居ますがお楽しみください

またはやての凶化もあります・・この話ではないですがね（笑）

アンケートも残り3日です

ヴィヴィオ、親馬鹿が並んでいますね・・どちらが勝つか非常に楽しみです

# 第５５話

第５５話

なのはに呼ばれ皆で翠屋に入るなり

「・・・龍也君、多分いつか後ろから刺されるよ？絶対」

突然士郎さんにそんな事を言われた・・

「突然なんですか？意味が判りません、リィンは判るか？」

肩の上のリィンに尋ねる

「う～ん、リィンは判りません。アギトちゃんは？」

「兄が刺されるとか無いだろ？兄だと素手でナイフとかへし折りそうだし・・ルールーは判るか？」

「判らない。龍也は優しいから人に恨まれる訳が無い、キャロは？」

「私も無いと思います・・エリオ君は？」

「お父さんなら刺されても平気だと思います」

エリオ・・私でも刺されれば痛いのだがなぁ・・

「・・・ああ・・気にしないでくれ・・多分私の思い過ごしだ」

真剣に悩み始めた私達を見て、士郎さんが思い過ごしだと言うので

「焦りましたよ・・心当たりが無いんで、昔何か恨まれる事でもしただろうかと思いましたよ」

団体客用の席にリィン達を降ろしてから、腰掛ける

「・・・ああっそうだね・・君が刺されるわけ無いよ（何だこの殺気は・・あの娘からか・・）

士郎さんは若干冷や汗を流しながらセッテを見ていた。（この時士郎にはセッテの強烈過ぎる殺気が叩け付けらていた）

「いや～このシュークリームは本当に美味しいですよ」

ジェイルは上機嫌でシュークリームを頬張っている。ジェイルはかなりの甘党なのだ

「そうですか・・それは嬉しいですよ。ジェイルさんで良いですか？」

「ジェイルでもスカリエッティでもお好きな方でどうぞ」

ジェイルはカウンター席に座り、士郎さんと話しながらシュークリームを食べている。その顔は子供の様だ

「パパ。ヴィヴィオお代わり欲しい！」

頬にクリームを付けたまま笑うヴィヴィオの頬を拭ってから

「すいません、ヴィヴィオにもう一個シュークリームお願いします」

「ん、判ったよ・・少し待っていてくれるかな」

士郎さんがシュークリームの準備をしてる時

「兄ちゃんそっち行って良いか？」

はやてが此方の席に移動して良いかと言った瞬間

「「「ガタッ！そうはさせません」」」

一斉に立ち上がるなのは達・・どうしてこの席に拘るんだ？視界の隅で揉めるはやて達を見ていると、

「八神・・此処座らせてもらうぞ」

チンクがスルッとその中から抜け出し腰掛ける、その瞬間

「「ああっ！！！」」

なのは達が大声を上げる・・だから何故この席に拘るんだ？

「君の鈍感具合も凄いな」

士郎さんが呆れながらヴィヴィオの前にシュークリームを置く

「ありがとう！！」

笑顔で食べ始めたヴィヴィオを見ながら

「どういう意味です?私には良く判りません」

本当に意味が判らず首を傾げると

「・・・本当無自覚な男と言うのは罪だな・・はやて君達も苦労するな」

溜め息×１１・・なんだ、何故私は責められると思ってると

「あんた、本当夜道気をつけたほうが良いと思うわ」

アリサが溜め息ながらそう忠告した

「・・・本当意味が判らないな・・」

私の呟きに

「お父さんはもう少し女心を知れば良いと思います」

キャロに肩をポンポンと叩かれた

「いや～美味しかったよ!これはまた食べに来たいものだ!!」

ジェイルは持ち帰りのシュークリームを持ちながら笑うとこっちを見て

「さて・・そういえば何処に泊まるんだったかね?」

お惚け博士が・・すずかの家の離れを借りると話しただろうが

「そろそろ・・皆で泊まるとこ行こか？」

はやて達に先導されながらすずかの家の離れに向かっている中私は

「・・・セッテ・・腕を放してくれ・・頼むから・・」

私の腕を抱え込むようにして隣を歩くセッテに腕を放すように頼んでいた

「嫌です・・これはクジで決めた権利です。私は離れに着くまで。龍也様と腕を組んでいて良いのです」

セッテが静かに説明してくれる中

「・・・・・・・ジーッ・・・・・」

なのは達の視線はセッテに集中しているが、セッテはそれをさらりと流し歩いていた

「・・・何かとても疲れた・・このまま眠っても良いか？」

離れに付いた頃私の精神は大分磨耗し、可也の疲労感が襲って来ていた

「駄目っ！ヴィヴィオと遊ぶの！！」

ヴィヴィオ達とトランプをする事になった。

（本当・・子供は元気だ・・だがこれも良いか・・）

ヴィヴィオ達（子供組み）とトランプをしていると

「はい！皆重大発表があります！！」

はやての声で皆が集められる

「何が始まるんだ？」

はやてに尋ねると

「すずかちゃんの離れの部屋の数は９です、なので一部屋３人で使います！！なので此処はクジで部屋を決めたいと思います！！皆恨みっこ無し！今日最高に運の良い人が兄ちゃんと同じ部屋で寝れます！！ちなみにリィンは私と同じで、アギトはルーテシアと同じです」

私はどうにでもなれと思いながらクジを引いた

「ほな、みんなくじを引いてや～」

全員ドキドキしながらくじを引いていく

「みんな引いた引いたみたいやな・・・。ほな、くじオープン！！」

それぞれの部屋が決定した。

部屋割りはこちら！

１０１
なのは、フェイト、ヴィヴィオ

１０２
ティアナ、スバル、ルーテシア（アギト）

１０３
ヴィータ、エリオ、セイン

１０４
ノーヴェ、チンク、シャマル

１０５
シグナム、はやて（リィン）、ザフィーラ

１０６
ウーノ、ジェイル、クアットロ

１０７
キャロ、ディエチ

１０８
ディード、トーレ、オットー

１０９
ウェンディ、セッテ、私

「「「「神は死んだッ！！！」」」」

はやて達が項垂れ絶叫する

「ふふふ、何と素晴らしい・・龍也様と共に寝る事が出来る・・ああ・・神に感謝しなければ」

「やったっす!!私は運が良いっす!!」

ジャンプしながら喜ぶ、ウェンディ、セッテを見ていると

「皆様、夕食の準備が出来ましたよ」

ファリンに呼ばれ皆で食事を終え、皆で宛がわれた部屋に行った。
他の部屋は既に布団が引かれていたが、私達の部屋は違った

「・・・何故布団が二つなんだッ!!!」

そう布団が二つしか無いのだ

「すいません此方の手違いで布団が足りないんです」

申し訳なそうにファリンが言い、部屋から出て行った・・3人の間に沈黙が流れる・・

「・・・布団は二人が使え、私はソファーで寝る」

ソファーに横になろうとすると

「駄目です・・風邪を引きますよ」

セッテに止められる

「この程度で風邪を引くほど柔じゃない」

「おっ！！じゃあこうするっす！！」

ウェンディが二つの布団をくっつける

（まさか・・・）

「？」

セッテが首を傾げる

「こうすれば一緒に寝れるっす♪」

「（やっぱり・・・）」

「素晴らしい！龍也様は風邪を引かず、私達は安心を得ることが出来る！！なんと素晴らしいのですか！！」

セッテとウェンディがハイタッチをしながら笑いあう、私がそれを何とか阻止しようと話し合いになり

話し合いが続き、結局・・・

「龍也兄の身体あったかいっすね～」

「龍也様・・・／／／」

セッテが左腕にしがみつき、ウェンディが右腕にしがみつく形になっていた

（・・・もう良い寝てしまえ・・）

私は考える事を廃棄し眠りに着いた

「朝ですか・・良く眠れました・・」

そう呟きながら隣を見る

「・・・・・・」

眠っている龍也様の姿がある

「むにゃ～ふふふ・・龍也兄～大好きっす～」

寝言を言うウェンディを、龍也様を起こさぬ様に慎重に揺すり起こす

「はにゃ！もう朝っすか？・・龍也兄起き・・・ムガッ！！！」

龍也様を起こそうとする、ウェンディの口を塞ぎ龍也様から距離を取る

（なにするっす、龍也兄起こさないと・・）

（待つんです、これは神がくれた絶大なチャンスです！！）

（チャンス？どういう意味っす？）

（普段なら龍也様は既に起きている時間です、それが寝ている事が

チャンスなんです！）

この時間なら既に起き、本なり紅茶なり楽しんでいる時間なのだ

（今なら・・龍也様の唇を奪う事が出来ます）

（!?!?・・そうか・・これはなんて美味しいチャンスっすか）

ウェンディも私の言いたい事を理解したのか、頬を赤らめる

（ガードが固い・・いえ鋼鉄並みのガードを誇る、龍也様も寝起きは無防備です。今の内にバインドを掛け唇を奪いましょう）

バインドを掛け龍也様の動きを封じましたが・・

（いざこうして見ると・・龍也様の顔は整ってますね・・）

可也の至近距離の為、非常に意識してしまう

（やはり・・寝ている人を襲うのは間違っているでしょうか？）

何か罪悪感が芽生えるが

（いえ・・良いんです・・女の子がファーストキスを捧げるんです・・だからこれは問題ありません）

いざキスをしようと身を屈めると

「・・セッテ？何してる？」

龍也様の左目が開く、その瞳には驚愕の色があるが・・

「おはようございます・・そして・・唇頂きます」

状況は私が有利・・このまま唇を奪います!!

「はっ?・・サッ!何をする!・・体が動かない!?バインドかッ!!!」

卓越した反射神経で私の唇を回避し、立ち上がろうとするが体が動かず驚愕する龍也様に

「くすくす。バインドと防音の結界です・・幾ら騒ごうが龍也様の声は外に届きませんよ?」

念には念を入れ、防音の結界も張ったのは正解だった

「セッテ。急ぐっすよ・・私だってキスしたいっす」

ウェンディが急かすが

「そう簡単には行かないんです!・・くっ!何故避けるのです!!」

何度か唇を奪い掛けるがギリギリで回避する、龍也様に苛立ちながら言うと

「何でだ!何で朝から私は襲われている!!はやて!!はやて!!助けてくれ!!!」

かなり錯乱しているようで、はやてに助けを求めている

「くっ・・急がないとあのブラコンが来る!!ウェンディ、龍也様の顔を押えてください!!」

「判ったっす!!」

ウェンディが龍也様の顔を押さえる

「ふう～これでやっと龍也様の唇が奪えますね・・」

胸が高鳴る・・しかしその感覚は心地良かった

「それでは・・頂ま・・「兄ちゃんに何すんじゃぁぁぁ!!!」・・ガンッ!!!はう・・・」

いざ唇を奪う段階でブラコンの踵落としが私の頭を捕らえ、私は意識を失った

「ふんっ!!」

「げふっ!!」

ウェンディも同様に踵落としを喰らい。意識を失ったようだ

「はぁ・・はぁ・・油断も隙も無いなぁ・・」

兄ちゃんの呼び声が聞こえた気がし、慌てて１０９に向かったら、兄ちゃんが汚される寸前やった

「セッテとウェンディ・・厄介やな」

此処までアグレッシブに迫るのは私くらいかと思っていたが・・どうやら強大な敵が現れたようだ

「はぁ・・今全力ではやてを抱きしめたい気分だ・・」

疲れた様子で立ち上がる兄ちゃん・・どうやらバインドは破壊したようだ

「兄ちゃん・・抱きしめてくれるの？」

兄ちゃんの全力ではやてを抱きしめたい発言が本当かと尋ねると

「・・抱きしめない・・頭は撫でてやる・・ありがとう助かった」

ゆっくりと兄ちゃんに頭を撫でられる

（・・まっ！これで良いか！兄ちゃんも汚されてへんし）

本当なら言葉どおり抱きしめて欲しい所だが・・我慢しよう

「所でどうしてあのタイミングで来れたんだ？」

おっ！忘れるとこやった

「そうそう！ご飯に呼びに来たんやっ！皆待ってるで、はよ行こう！！」

兄ちゃんの手を引き１０９を出ようとすると

「セッテとウェンディは？」

目を回している二人を指差し言う兄ちゃんに

「知らん・・兄ちゃんに手を出そうした罰や・・勝手に来るやろ？」

兄ちゃんに手を出そうとした罪・・本来なら万死に値するとこを踵落としで勘弁してやったんや！これ以上は知らん

「・・・いや・・不味くないか？泡吹いてるぞ？」

魔力込めた踵落としやからな、当然やね

「大丈夫大丈夫、ほれ朝ごはん食べに行くで」

兄ちゃんの手を強引に引いてリビングに向かって行った

第５６話に続く

## 第５５話（後書き）

どうでしたか？セッテは使いやすいんですよね・・
でもそれよりはやて、ヴィータですが・・

アンケートと感想、技のアイデア常時お待ちしています

気軽にご参加ください

ＰＳ　コラボ小説・・やってみたいですね・・でも相手が居ません・・

## 第５６話（前書き）

今回は龍也の意外な弱点とチンク・・そしてザフィーラがメインですね

ザフィーラは完全に野生化し・・某バラエティ番組のレギュラーで子供から大人気のおっさんかしています・・判るかな～

アンケートが残り二日ですが・・以前ヴィヴィオと親馬鹿が並んでいます・・
どちらかに決まらないと延長戦になるかもしれませんね・・
決着が付くと良いです

それと活動報告もほぼ毎日更新しているので・・お暇な方は一度ご覧下さい

それでは本編始まります

# 第５６話

第５６話

「やぁ、龍也、はやて君おはよう・・セッテとウェンディは？」

二人揃って姿を見せた龍也とはやて君にセッテとウェンディはどうしたかと尋ねると

「兄ちゃんに手を出そうとした愚か者は・・まだ寝てる・・いや・・私が物理的に沈めた」

ニヤッ！と黒い笑みで微笑むはやて君と

「ジェイル・・貴様何か娘に植え付けたのか？そうなら処刑する」

怒ってる龍也に言われるが

「いや・・特に何も言ってないなぁ、何かあったのか？」

尋ねると龍也は疲れた様子で

「バインドされて・・キスされそうになった・・はやてが助けてくれなかったら・・・」

どんよりとした空気を発生させた龍也に

「大丈夫だったの！龍也さん・・手遅れになってない！？」

「龍也！大丈夫なんだよね！？キスされてないよね！！」

なのは君とフェイト君が近寄りながら尋ね

「ちょっと用事思いだした・・・・」

ヴィータ君が怖い笑みで出て行った

「チンクさん、少し妹さんと話しても良いですか？」

「ちょっと・・私もそれはやりすぎだと思うんですよ」

スバル君とティアナ君がチンクに詰め寄る

「いや・・それは私のほうから話をするから、勘弁してやって欲しい」

チンクはやはり良いお姉ちゃんだね、妹を庇ってるよ

「もぐもぐ・・どうしてみんな怒ってるですか？」

「知らねぇ・・兄、はやて、こっちで皆で食べようぜ！！」

アギトがはやて君と龍也を呼ぶ

「うん、じゃあアギト達と一緒に食べよか？」

「そうだな」

二人でアギト達の席に座わった瞬間

「くたばれえええええ！！！」

デバイスを振り回してヴィータ君が登場

「こんな所で死んでたまりますか！！」

「ひえええええ、ごめんっす。許してっす！！！もう寝ている龍也兄にちょっかい出さないっす！！」

転がりながらその猛攻撃を回避する、セッテとウェンディを見つけ

「ちょっと私もお話しないとね・・」

「なのは・・私も手伝うよ」

何時の間にかデバイスを起動させた、なのは君とフェイト君が参戦していた

「セッテ達も、もう少し考えてから行動すべきでしたね」

ウーノは優雅に紅茶を啜りながら言う

「ははは。しょうがないな、恋する乙女は一直線なんだよ」

目の前で繰り広げられる戦いを見ながら私は微笑んだ

「さて・・今日は皆で海に行きます！！水着はファリンさんたちが用意してくれたんで、皆好きなのを選ぶようにじゃっ解散！！」

波乱の戦いはお父さんの一喝で強制終了しました、それで今は皆で水着を探しています

「よっしゃ、皆水着は決めたな。それじゃあ海へ行くで！！」

「おお～っ！！」

水着を決め、みんなで海に向かって行きました

「綺麗な所ですね・・でも人が居ないのは何でですか」

綺麗な砂浜を見ながら僕はフェイトさんに尋ねた

「此処はアリサの家のプライベートビーチだから、他の人も来ないんだよ？」

そうなんだ～本当にアリサさんってお嬢様なんですねっと思っていると

「完成だ！」

お父さんがブルーシートを引いて、その上に椅子を置き、パラソルを準備していたが、その姿は水着ではなかった

「お父さんは泳がないんですか？」

皆着替えているのに一人だけ、私服のままのお父さんに尋ねると

「うん?ああそうかエリオは知らなかったか・・私は泳げないんだ」

ピシリ、世界が凍った・・えっ!?完璧超人だと思ってたお父さんが泳げない?

「冗談だよね?龍也本当は泳げるでしょ?」

フェイトさんも信じられないという表情で尋ねる

「いや。私は本当に泳げんぞ?昔海に投げ出された事があってな・・それ以来泳げないんだ」

あっはっはと笑ってるが、実際は笑い事では無い。隊長達やスバルさんたちは一緒に泳げると話をし、とても楽しみにしていたのだが

「「「「そんな・・折角一緒に泳ごうと思ってたのに・・」」」」

今はこの世の終わりと言いたげに、項垂れるスバルさん達の姿が見えた

「兄様・・泳ぎ方教えてあげようか?」

「龍也様・・私達で泳げるようにして差し上げますが?」

セッテさん・・朝あんなにお話されたのになんでこんなに元気なんです?だってウェンディさんは・・

「あああ・・ハンマーが・・桜色の閃光が・・金色・・が・・ああああああああっ・・・」

虚ろな目で頭を抱えて魘されています・・・それを

「ウェンディ・・しっかりして・・」

ディエチさんが介抱しています。その様子を見ながらトーレさんが

「八神にいたずらしようとするから、そんなことになるんだ。馬鹿者がっ・・・」

呆れながら介抱していました・・同じお話をされたセッテさんは何故あんなに元気なのかと思いました

「いや別に泳げなくても死ぬ事は無いからな・・気にしなくて良い。二人は泳いでくれれば良いさ・・私は釣りでもしてるから」

クーラーと釣竿が入っているだろうバッグを背負い、磯に歩いていったお父さんだが途中で止まり

「ザフィーラ!今日の昼食を捕りに行く手伝ってくれ」

砂浜で準備運動していたザフィーラさんを呼ぶ・・僕知らなかったです、ザフィーラさん人に成れたんですね

「了解しました、それで私は何を使えば?」

お父さんに尋ねると、バッグから銛を取り出して

「それで魚を突いてくれ、私は釣りをするから」

「了解しました」

二人で磯に歩いて行く後姿を見てると

「しまった・・兄ちゃんが泳げないの忘れてた・・・」

項垂れる部隊長の姿があった・・

（部隊長・・お父さんの事なんでも知ってるって言ってなかったけ？）

と思いながら僕は準備体操を終え、海に入って行った

「龍也殿は何を狙うんですか？」

シュノーケル完全装備でザフィーラが尋ねて来る

「スズキかクロダイ・・・運が良ければハマチやカンパチも狙えるな・・」

潮の通りも良いし、運が良ければハマチ等の青物の回遊もある、

「ハマチですか・・釣れれば皆喜びますね・・それでは私も行ってきます」

磯から海に飛び込み泳いでいくその姿は

（まるで沖縄の漁師みたいだな・・ザフィーラは肌も黒いし）

これで口調が沖縄の言葉だったら、完璧なのにと思い私はルアーを投げた

「そう簡単にはいかんか・・」

何回か、岩の影にルアーを投げてみるが無反応

「暑いからな・・トップを止めてシンキングにするか・・」

今使ってるのは浮くタイプの物で、活性が高い時には絶大な効果を発揮する物だ

「シンキングなら・・ロックフィッシュも対象だな・・」

シンキングは重い物で簡単に言えば沈むタイプのルアーだ

「さてと・・何が釣れるかね～」

私は再びルアーを投げた

カリカリカリ・・リールを巻く音だけが響く中・・沖のほうで

「サザエ！捕ったぞー！！！！」

ザフィーラの雄たけびが聞こえてきた、一瞬何をしてるんだと思ったが・・

「・・・楽しそうだから良いか・・グンっ！！！・・むっこっちも来たか！」

竿が強烈に水面に吸い込まれる

「この引き・・カサゴか？」

独特な引きを感じさせる当りに首を傾げながら巻いていく

バシャ！バシャ！

魚が水面を割り姿を見せる

「キジハタ・・良いサイズだな」

網で掬い上げる・・かなり大型で４０はある

「ふふ、一発目にしては良い獲物だ」

血抜きをしてからクーラーに入れる

「シンキングは当りだな・・」

再びルアーを海に投げ込んだ

カリカリカリ・・・

「居るなら此処で食ってくる筈だが・・・グンッ！！来た！！」

竿を起こす、グングンっと糸が持っていかれる

「これは・・かなりの大物だな」

竿は折れんばかりに海面に向かっている

「これは・・切られるか？・・」

かなりの引きの強さにラインが切れるかと思うが、何とか耐え魚を浮かせる

「クロダイ・・良いね・・こいつは美味いんだ」

海面で暴れるクロダイを掬い上げる

「やはり磯は正解だな・・この調子なら昼食は豪華な物になる・・・」

血抜きをしてると再び沖から、

「タコ！捕ったぞーーー！！！」

ザフィーラの雄たけびが響いてくる

「アイツは多分銛さえあれば生きていけるな・・・」

野生の本能が刺激されたザフィーラの逞しさに脱帽していた

「・・大分釣れたが・・もう少し大物が欲しいか・・・」

クーラーは半程埋まっていたが、サイズで言えば４５のクロダイが最大だ。出来れば当初の狙い通りハマチ系が欲しい

「もう少し遠投するか・・」

竿を大型のルアーロッドに換えていると

「八神、調子はどうだ？」

後ろから声を掛けられ振り返る

「チンクか・・どうしたんだ？もう少し泳いでれば良いだろう？」

パーカーを羽織ったチンクに言うと

「それも良いが・・魚釣りというのに興味があってな。少しやってみようと思ったんだ」

と笑うチンクに

「そうか・・ではお前の分も準備するか・・」

竿の袋からチンクに使えそうな竿を用意する

「八神・・その虫は苦手なんだが・・」

恥かしそうに虫が苦手と言うチンクに

「ルアーだから大丈夫だ・・良し・・準備できたぞ・・投げて見ろ」

「ああっ判った・・」

おっかなびっくりという感じでルアーを投げるチンク・・飛距離は無いが・・真っ直ぐ飛んでいるな

「上手いじゃないか・・後はゆっくり、リールを巻いて弱った魚の様に見せるんだ」

「あっあ・・これで良いのか?」

カリ・・カリ・・と不規則な音を立ててリールを巻いてると

バシャアア!!!

突然水面から轟音がする

「うわぁ!!何なんだ今のは!」

慌てて竿を立て、びっくりするチンクに

「くっく、今のが当たりだよ。惜しいな。あれで合わせを入れたら掛かっていたのにな」

自分の竿を投げながら説明する・・今の当りは間違いなくスズキだな

「そうなのか・・だが今ので判ったぞ」

再びルアーを投げるチンク・・そして先程当りがあった所で再び

バシャアア!!とスズキがルアーに食い付く

「良し!今度は確り喰わせたぞ!!」

リールを巻こうとする・・チンクの手の上から竿を握る

「やっ八神!?」

動揺するチンクの手の上から竿を握りながら

「スズキは初心者には難しい・・私がサポートする」

スズキは気性が荒く・・ジャンプしたりエラ洗いをする・・初心者では間違いなくラインブレークする

「落ち着けよ?・・これはかなりの大型だ」

二人で竿を握るがかなりの力で水面に引き込まれる

「あっあ・・判ってる・・大丈夫だ」

ギッ!ギッ!と音を立ててリールが回る、暫くスズキと格闘していると

バシャバシャ!!!

大きな音を立てて暴れるスズキを網で掬う

音を立てて暴れるスズキの頭部を石で殴る

「八神!?何で殴るんだ?」

魚釣り初心者のチンクに

「スズキはひれが鋭い・・下手に触ると手を切るからな。殴って気

絶させるんだ」

気絶したスズキを血抜きしてから、メジャーで図る

「やったな。良いサイズだ」

６５はあるかなりの大物だ

「あっああ。魚釣りは面白いのだな・・だが・・私はもう良い腕が痛い」

流石にいきなり６５のスズキは大変だったか・・

「そうか・・それじゃあ私の釣りでも見てるか。はやて達の所に戻ると良い」

自分の竿を握りリールを巻き始める。

「そうだな・・少しお前の釣りを見ているよ」

後ろの岩場に腰掛けるチンクを横目で見ながらルアーを投げた

八神め・・いきなり手を握るからビックリしたじゃないか・・

ルアーを投げる八神の後姿を見ながら私は胸を押さえた

（ドキドキする・・私はやはり八神が好きなんだな・・だがアイツは気付いて無いだろな・・）

八神の鈍感は今に始まったことではないが・・酷い物がある

（まったく・・これほど女に囲まれても平然としてる八神は凄いな・・）

八神の回りは女性が多い、従兄弟のはやてにヴィータ、なのはにフェイト、そしてスバルとティアナに私達だ

（どうすれば・・八神は気付いてくれるだろうな？）

私は八神が好きだ・・無論男としてだ。ネクロの基地から救い出してくれた、八神の姿は今でも鮮明に思い出せる

（・・いずれは気付いてくれるだろう・・）

ルアーを投げる八神の姿を見ていると

「来たッ！！」

グン！グン！！大きく竿が曲がる

「この引き・・間違いないな・・ハマチだ」

岩場で足に力を込め、その強烈な引きに耐えている八神の姿を見ていると

「チンク！網を準備してくれ。これは網がいる」

声を掛けられ慌てて網を掴む

「チンク！次に魚が浮いたら網で掬えよ」

竿を大きく上げ魚を浮かせる

「良し・・八神良いぞ」

網で魚を掬い上げる

「ふぅ～、ハマチだ・・やれやれ疲れたよ・・」

汗を拭い笑う八神に

「まったく、一人だったら、どうやって掬うつもりだったんだ？」

「そうだな・・考えてなかったな」

ったく・・変なところで無計画だな、と思うと笑みが零れる

「むっ・・何故笑うんだ」

「いや・・くっくっ・お前は変な所で無計画だと思ってな」

笑われた事で不機嫌になる八神に

「いやいや・・むくれるな・・そういう所がお前の良い所だよ」

優しく強く、そして何処か抜けている八神の存在はまるで太陽のようだ・・

（まったく・・お前と居ると・・とても楽しいよ・・）

私は胸の中でそう思ってると、沖の方から

「ウツボ！捕ったぞーーー！！！！！」

ザフィーラの雄たけびが響き渡り、お互いに顔を合わせ笑いながら

「なんなんだ、アイツはまるで野生児だ」

「まったくだ。アイツなら銛があれば生きて行けそうじゃないか？」

とお互いに笑い会いながら、はやて達との合流場所に向かって歩いていった。その間を笑い声は絶えることが無かった

（何時の日か・・私の想いに気付いてくれる日が来ると良いな・・）

そんな事を思うが、それはかなり先の事になるだろう・・でもそれでも構わない

（お前は何時の日か私の物になるのだからな・・それまでは今の関係で構わない）

友達でもなく、かと言って恋人でも無い。今のこの関係はとても穏やかな物だ

（願わくばこの幸せな時が続きますように・・）

私はそんな事を思いながら歩を進めた

第57話に続く

## 第５６話（後書き）

どうでしたか？ザフィーラの壊れは面白かったでしょうか？

作者は執筆しながら笑っておりました・・

次回も海鳴です・・あと２話くらいは海鳴ですね

その後は多分バトルが多くなる予定です・・投稿された技を徐々に採用しつつ

話しの構成をしています、アイデアを送ってくださった方は自分の技が登場する話をお楽しみに

ＰＳ・・コラボ・・良いですよね・・やってみたいです・・でも相手がいません

誰か作者とコラボしてくれる作者は居ないでしょうか・・居ないですよね・・多分

作者はまだ未熟ですから・・・

## 第５７話（前書き）

総合評価が５００を超えました、感激です！！
作者は評価が低ければ直ぐに打ち切るつもりだったので、これは凄く嬉しいです
作者は読書が趣味ですが・・やはり読むのも良いですが、書くのも良いです
これからも頑張って更新していきます。

アンケートが残り一日・・

ヴィヴィオと親馬鹿が並んでます・・このままだと延長戦決定です・・
期限は明日の正午までです。それまでに決着がつかない場合は延長戦か・・正午直ぎに一番最初に感想でヴィヴィオか親馬鹿か書いた人の意見を採用します

# 第57話

第57話

「兄ちゃん遅いなぁ？」

昼時になっても姿を見せない兄ちゃんの心配をしていると

「はやて、チンク姉見なかったか？さっきから探してんだけどよ・・」

ノーヴェがチンクさんも居ないと教えてくれる

「・・・チンクさんに兄ちゃんが襲われてる可能性は無い？」

最悪の予想が頭に過ぎるが

「ないない、私とチンク姉は龍也の事好きだけどよ、幾らなんでもそんな事しねぇよ」

手を振り笑っているノーヴェに

「ほい、暑いから、ジュース飲み」

ジュースの入ったコップを渡す

「サンキュ・・ふー美味いね」

飲み干しながら笑うノーヴェとは本当に気が合う、

「はやて・・いい加減にこの足の上の重りを退けて下さい・・・」

「駄目や、セッテ解放したら兄ちゃんに何するか判らんからな」

セッテの足の上に重りを載せ正座の刑、もうかれこれ３０分このままだ

「でも。龍也さん遅いよね、ちょっと探してこようか?」

なのはちゃんも心配になってきたのか探してくると言うが

「大丈夫やて、兄ちゃんも子供やないし・・それになのはちゃんたちが探しに行くほうが不安や」

兄ちゃんが女性に免疫が無いのを知ってる、なのはちゃん達は皆ビキニ・・そんな格好で兄ちゃんに遭遇すれば兄ちゃん昏倒するのは判りきっている、だから私やシグナム達は露出が少ない水着を選んでいた（チンクさんたちも同じだが、セッテのみビキニ装備である）

「それはどういう意味かな?なに?私が龍也さんを襲うって言いたいの?」

なのはちゃんが額に青筋を浮かべながら笑う

「そうは言ってへんよ、その内兄ちゃんも来るで、私らは昼ご飯の準備でもしようや?」

今日はみんなで浜辺でバーベキューだ、兄ちゃんもその為に釣りに行ったのだから。ここは準備をするのが正解だろう

「・・それもそうだね、じゃあ準備しようか」

なのはちゃんも理解したのか、昼食の準備に取り掛かろうとしたが

「ちょいまち、ビキニの人は皆パーカーを着る事、今兄ちゃん帰ってきたら気絶するから」

ちっ、と舌打ちするもの5人・・ふん思い通りにはさせへん、でも

（兄ちゃん・・初心やからなぁ・・多分パーカー着ててもアウトやろなぁ・・・）

少し女性に対する耐性をつけさせるべきだったかなぁ・・若干後悔しながらバーベキューの準備を進めた

「うーん、肉とか焼いとくか？」

食材を切り終えたが兄ちゃんが帰ってくる気配は無い、

「そうしたほうが良いと思うよ」

オットーと一緒に肉を焼き始めていると

「なんだ、もう始まっているのか？」

クーラーを担いだ兄ちゃんと

「少々お喋りがすぎたようだな」

その後ろからパーカーを羽織った、チンクさんが姿を見せる

「兄貴、お帰りどうだった？魚は釣れたのか？」

ヴィータが兄ちゃんに近寄りながら尋ねると

「見るか？大漁だぞ」

クーラーを開ける、ヴィータだけではなく、アギト達も覗き込んだ

「おおっ！！凄い大漁じゃねぇか！！！」

クーラーからははみ出た魚の尾びれが見え隠れしている

「龍也さん、釣り上手なんですね」

スバルとティアナが一歩近づいた瞬間、兄ちゃんの顔が赤くなる・・

くっ、やっぱパーカーじゃ誤魔化しきれなかったか

「すす、スバル！それ以上私に近寄るな」

耳まで真っ赤にして近寄るなと言う兄ちゃんの姿を見て、スバルと

ティアナが笑いながら

「くすくす、これ以上近寄ったら。どうなるんです？」

一歩踏み込む、その瞬間ヴィータが

「それ以上兄貴に近寄るなっ！！」

兄ちゃんの前に立つが・・ヴィータ・・あかん・・遅かったみたいや・・

「きゅう・・」

目を回し兄ちゃんはひっくり返ってしまった・・やっぱもう少し女性に対する耐性必要やね・・

「私は・・・」

体を起こす、ブルーシートの上に寝かされていたようだった

「どうして・・・思い出した・・」

そうだ、スバルとティアナに接近されて、ひっくり返ったんだ

「どうして、ああ水着というのは生地が少ないんだ」

立ち上がりながら呟く、少し離れた所からはやて達の声が聞こえる、どうやら皆食事をしているようだ

「私も行くか・・腹が減ったしな・・」

声の聞こえる方に行くと

「龍也、目が覚めた?・・どうして顔が真っ青なの?」

はやて達の居る方からフェイトが歩いてくる、どうやら泳ぎに行くようで、パーカーを羽織っていない

「い・・いや何でもない・・」

フェイトの横をすり抜け、食事をしていたヴィータの隣に腰掛ける。

「兄貴、大丈夫か？」

「問題ない・・ヴィータ、私にも一本くれ」

ヴィータが食べている、串を一本くれと頼む

「良いぜ、ほら」

ヴィータから一本貰い齧り付いてると

「龍也、くく・・水着の女性に近づかれて気絶するとは情けないな」

からかうようにジェイルが笑うが

「誰だって苦手な物はあるだろう。お前がピーマンが苦手なのと同じだ。ウーノ、ジェイルが又好き嫌いをしてるぞ」

さり気無く、ウーノに教える。さっきからディエチに食べて貰っているのだ

「ドクター、好き嫌いはいけないと何度言えば判りますか？ちゃんと食べてください」

ウーノがジェイルの隣に腰掛ける、これで奴の逃げ道は絶たれた

「龍也！恨んでやるからなっ！！！」

涙目でピーマンを食べる、その姿は子供のようだ

「でも兄貴、幾ら何でも水着くらいは平気になろうぜ？」

ヴィータが呆れたように言うが、無理だなと思いながら食べていると

「おお、兄ちゃん起きたか、ほら兄ちゃんの分や」

はやてが私の分の皿を持ってきて、そのまま私の隣に腰掛ける

「どうや？美味しいやろ」

ジュースを飲みながら尋ねて来るはやてに

「ああ、美味いな。やはりはやての料理が一番だな」

味付けや焼き加減、その全てが私好みに調整されている所為か、非常に美味い

「ふふ、兄ちゃんの好きな味付けは全部覚えてとるでな。どんどん食べてや」

そう言うと自分の皿から、私の皿に串を移動させるはやて

「はやては良いのか？お前もお腹が空いてるんじゃないのか？」

皿の殆どを私の皿に移動させた為、はやての皿は殆ど空に近いが

「ああ、私は大丈夫や、焼きながら食べてたからな。それより兄ちゃんおなか空いてるやろ？はよ食べな」

はやてに促され食事を進めてると、ふと気付く、はやては笑顔で私の顔をずっと見ている

「どうしたんだ？私の顔に何か付いてるか？」

「ううん、なんも付いてへんよ、気にしんといて」

と微笑みはやてに首を傾げると

「兄貴、ジュース淹れたから飲みなよ」

ヴィータも笑いながら、ジュースの入ったコップを手渡してくる

「ああ、ありがとう」

それを受け取りながら、私はどうしてはやて達がこんなに笑顔なのか考えた

「う～、龍也さんの所に行きたいよ～」

浜辺で遊んでいると、龍也さんが食事をしているのが見えそう呟くと

「お兄さんに近づき過ぎたからですよ」

私達は海から帰るまで、龍也さんに近づくことを禁止されたので、
こうしてビーチボールで遊んでいるのだが

「だって、シャマル先生私だって女の子ですよ?好きな人の水着姿
見せたいじゃないですか、ねっティア」

「まぁ・・それは判るけど。ビキニを選んだのは間違いだったかし
ら?」

ティアが自分が選んだ水着を見ながら言うと

「兄上は女性に対する耐性が殆ど無いからな、こういう物の方が良
いんだ」

シグナムさんとシャマル先生の着ている水着は、露出が少ない物だ

「でも。普通男の人って露出が多いほうが好きなんじゃないんです
か?」

普通ならビキニとかは男性が喜びそうな物だが・・

「いや・・兄上は露出が多い服は嫌いなんだ、少々兄上は考え方が
古いから」

シグナムさんが言うには、年頃の女の子は肌をむやみやたらに見せ
る物ではないと、龍也さんが言っていたのを聞いていたらしい

「そうだね・・私前ミニスカートで龍也を遊びに誘ったら、怒られ
たよ・・スカートの丈が短いって」

フェイトさんとなのはさんも、思い出したように呟いている

「僕兄様に服作って貰ったことがあるよ?動きやすくて可愛いかったよ、ねっディード」

「そうですね・・私はあの白のワンピースはお気に入りですよ」

そんなっ!!オットー達は龍也さんに服を仕立ててもらって事があるの、

「オットー、龍也さんに服作って貰ったことがあるの?」

なのはさんが笑いながら尋ねるが、その目は笑ってない

「僕だけじゃないよ?皆作って貰ったよ、誕生日プレゼントだって」

誕生日プレゼント・・じゃあ私も欲しいって言ったら作ってくれるかな

「・・・誕生日プレゼントか・・龍也に頼んでみよう。服を作って欲しいって」

フェイトさんが頼もうと言っていると

「無理だと思うぞ?テスタロッサ・・主はやてが許可を出すと思うか?」

「・・絶対無いね、はやてがそんな事許可してくれるわけ無いね」

確かに部隊長が許可を出してくれないと、服を作ってもらうのは難しい。そんな話をしていると

「スバル、遊ぼ！！」

ヴィヴィオはとてとてと可愛らしい足取りで歩いてくる

「ヴィヴィオ、私と遊ばない？」

なのはさんがヴィヴィオの視線に合わせて言うが

「ううん、ヴィヴィオ、スバルが良い、ヴィヴィオ、スバル大好きだから！！」

ピシリ、世界が音を立てて凍る

「ヴィヴィオ、どうしてスバルが大好きなの？」

「うーんとね、前ねスバル、ヴィヴィオにクッキーとうさぎさんくれたの！だからヴィヴィオ、スバル大好き！！」

あの時のうさぎのぬいぐるみとクッキーは、かなりヴィヴィオの好感度を上げるのに役立ったようだが・・・

「「「スバル・・少し私達とお話しようか？」」」

なのはさんたちが怖いよ・・オットー達は逃亡しており既に此処に居ない、じりっとなのはさんたちが一歩目前に踏み込む・・ティアまでいる・・ああ・・私死んだかな・・と諦めの境地に達した瞬間

「なのはねね！！スバル苛めたら駄目なの！！！」

ああ・・ヴィヴィオが天使に見える・・でもそれで行くとなのはさん達は悪魔になるのかな？

「「「いや・・私達はスバルを苛めてるわけじゃ無いんだよ？」」」

なのはさん達がしどろもどろで言うと

「ヴィヴィオ、乱暴な人嫌い！！スバル行こ！！」

真っ白に燃え尽きたなのはさん達を横目で見ながら、私はその場を後にした

「どうしたんだ？そんなこの世の終わりみたいな顔して？」

海から帰る車中の中で項垂れる、なのは達に尋ねると

「なんでもないですよ・・はぁ～～」

大きく溜め息を吐くなのは達に

「なのはねね、膝の上に乗せて！！」

ヴィヴィオが近づき膝の上に乗せてと言う

「ヴィヴィオ！なのはの事嫌いになったんじゃないの？」

なのは達は・・ヴィヴィオに嫌われるような事をしたのだろうか？

「うーんとね、ヴィヴィオ、スバル大好きだけど・・なのはねね達も大好きなの！！」

その言葉で機嫌を直した、なのはは笑顔でヴィヴィオを膝の上に乗せて微笑んでいた

（なのは達は一体ヴィヴィオに何をしたんだ？）

私は知らなかった・・ヴィヴィオに懐いてもらう為に皆が色々なプレゼントをしている事を

「さーて！今日の寝る部屋を決める、くじ引きをやりまーす！！」

離れに戻り、夕食とお風呂を終えた所で、はやてが昨日のくじの箱を取り出しながら言う

本日の部屋割りはこうなりました！！

１０１
なのは、スバル、ヴィヴィオ

１０２
ティアナ、フェイト、キャロ

１０３
ザフィーラ、エリオ、セイン

１０４

ノーヴェ、チンク、トーレ

１０５
はやて（リィン）、ディエチ、セッテ

１０６
ウーノ、ジェイル、ルーテシア（アギト）

１０７
ウェンディ、クアットロ

１０８
ディード、シャマル、オットー

１０９
ヴィータ、シグナム、私

「おっしゃあああっ！！！兄貴と同じ部屋だ！！」

ヴィータはくじを握り締めて喜びの叫びを上げ

「兄上と同室か・・」

シグナムは微妙な表情だった

「どうして・・龍也さん（龍也）と同じ部屋のくじが引けないの？」

項垂れ自分の部屋に向かっていくなのは達に

「シグナムとヴィータか・・まぁ家族やから良いか」

宛がわれた部屋に向かって行った、はやて達を見送ってから自分達に宛がわれた部屋に行く

「今日はちゃんと三つ布団があるな・・」

どうやら今日はちゃんと布団が三人分用意されていた

「兄貴と同じ部屋だ。嬉しいぜ」

上機嫌で布団の上に座るヴィータ、

「兄上と同じ部屋で寝るなどあの時以来か・・」

昔を思い出しているのかそう呟きながら、布団の上に座るシグナム

「昔は良く居間に布団引いて皆で寝ていたなぁ・・」

闇の書事件の前は良くそうやって皆で寝ていた、しばらく昔の事を思い出しながら話していると

「止めだ!止め、そんな昔の話してないで早く寝ようぜ」

ヴィータの言葉に頷き・・私達は眠りに付いた

「・・ぐす・・ひっく・・」

日付が変わった頃、私はヴィータの泣き声を聞き目を覚ました

「ヴィータ?どうしたんだ?何を泣いているんだ?」

心配になりヴィータを見る、ヴィータは眠りながら涙を零していた

「ヴィータ、大丈夫か？」

ヴィータを揺すり起こすと

「はぁ・・はぁ・・夢か・・」

酷い汗を掻きながら、ヴィータは目を開いた

「どうしたんだ？何か怖い夢でも見たのか？」

その余りの顔色の悪さに尋ねると

「・・昔の夢を見たんだ・・はやてが主になる前の夢を・・怖くて・・苦しくて・・寂し・・ひっく・・うぅぅ・・」

涙を零すヴィータを抱き寄せる

「あ・・兄貴・・？」

ヴィータの涙を拭いながら

「大丈夫だよ・・もう悪夢は終ったんだ・・大丈夫ヴィータはもう泣かなくて良いんだよ」

背中を撫でながら宥める・・

「兄貴・・うう・・兄貴ぃぃ・・・」

抱きついて涙を流す。ヴィータの背を撫でる

「ほら・・泣かなくて良いんだよ」

泣き続けるヴィータの背を撫でてると

「兄貴・・一緒に・・寝ても・・良いか？一人だと・・又あの夢を見そうで怖いんだ」

途切れながら一緒に寝て良いか？と尋ねて来るヴィータに

「良いよ。一緒に寝ような・・」

一つの布団で横になる・・狭いのでヴィータを抱え込む形になっているが

「兄貴・・ありがとう・・すぅ、すぅ」

腕の中で穏やかな寝息を立て始めた、ヴィータの長い髪を撫でながら、私も眠りに付いた

夢を見ていた・・何も無い闇の中を歩いていたが、怖くて・・寂しくて・・動けなくなってしまう。そんな中・・闇の中から

「ほら・・ヴィータおいで」

優しい兄貴の声と手が見える

「兄貴？・・」

私はその手を掴んだ・・その瞬間闇は消え、穏やかに笑う兄貴の顔が見えた

「兄貴・・兄貴ぃぃ・・」

嬉しくて兄貴に抱きついた所で目を覚ました

「もう朝か・・うおっ！！」

ふと横を見る、兄貴の顔が超至近距離にある。いやどちらかと言えば抱きしめられているが正解だろう

「そうだ・・昨日・・夢を見て怖くて・・兄貴と一緒に寝たんだったな・・シグナムは？」

視線をずらすと既にシグナムの布団は畳まれ、シグナムの姿は無かった

「まだ朝早いよな・・朝の訓練でもしてるのか？」

姿が無いのでそんな事を考えてると

「ううん・・もう朝か・・」

兄貴を起きて、私から手を退ける・・もう少しあのままでも良かった・・

「ヴィータ、おはよう」

「あっ・・うん。おはよう」

と挨拶を返していると、まだ兄貴の顔は私に近い事に気付いた

(どうしよう・・これチャンスだよな・・ええい・・考えるのは止めだ!!)

「兄貴、ちょっとこっち向いてくれよ」

「うん?どうし「兄貴・・昨日はありがとうな・・これお礼だ」

すっと近づき兄貴の頬に唇を当て、そのまま抱きつく

「ヴィ・・ヴィータ!!」

兄貴が動揺して離れようとするが、力を込めて兄貴の動きを封じる

「兄貴が私の事を妹って見てるのは知ってる・・でもこれだけは言いたいんだ・・」

私も恥かしいが此処で言わないで何処で言うんだ

「私は兄貴が大好きだ・・何よりも誰よりも・・これだけは覚えていて欲しいんだ」

告白しないと兄貴に私の気持ちは伝わらない・・思ってるだけじゃ駄目なんだ、ちゃんと言葉にしないと

「私は・・」

兄貴は何か言おうとして口篭っている

「今は妹で良いんだ・・でもその内・・その内で良いんだ。私の気持ちに応えてくれよ・・返事はその時まで待ってるからさ」

それだけ言い、逃げるように部屋を後にする。恥かしくて兄貴の顔が見れなかったのが理由だ

（へへ・・はやてに言おう・・んで・・二人で兄貴を私達のにしよう・・誰にも渡したく無いんだから）

私はずっと兄貴と一緒に居たい・・私はそう思いながらリビングに下りて行った

「ヴィータにまでに好きと言われるとは・・私はどうすれば良いんだ？」

一人残された部屋で頭を抱える龍也の姿があった

第５８話に続く

## 第57話（後書き）

次回で海鳴編は終わりです。

龍也の独白とはやてのとの記念日・・さてさて・・どうなるかお楽しみに

## 第５８話（前書き）

今回で海鳴編はラストです

龍也がはやてやヴィータの事をどのように思ってるのか？それがメインですかね？

ちょいイベントでヴィータの騎士甲冑の変更がありますけどね

アンケートの最終日です、決着がつかない様なのでヴィヴィオか親馬鹿・・どちらが良いか、投稿の後、感想に一番最初に書いた人の意見を採用しますので、希望の作品にならない人もいるかと思いますが、ご了承ください

それでは本編始まります

# 第５８話

第５８話

「今日で帰らないといけないのか・・楽しい時間はあっと言う間だな」

朝食の席でジェイルが残念そうに笑っている

「また来ればいいだろう?今度は桜の咲いてる時期にな」

「そうそう。皆でお弁当作って、お花見しよ」

隣の席のはやても賛同する

「そうですね・・昔皆でお花見しましたよね・・懐かしいですよ」

「・・私は余り良い思い出じゃない・・はやてにナイフ投げられて、髪切られたから・・」

フェイトがどんよりした様子で言うと

「ちっちっ!フェイトちゃんあれはナイフちゃうで?あれはスローイングダガー言うんや・・ほれっ!」

スカカッ!!

軽い素振りで投げられたダガーが、３本フェイトの顔の横の壁に刺さる

「・・・はやて・・これ止めて怖いから」

青褪めながら言うフェイトに

「いやー昔はこれ様投げたなぁ・・こう兄ちゃんに近づく邪魔者を排除する時に・・くすくす」

楽しげに笑っているはやてに

「「・・・・・・・・」」

皆ドン引きだった・・

「八神、はやてに投げナイフを教えたのか?」

同じくナイフ使いのチンクが尋ねて来る

「いや・・教えてない・・気が付いたらはやては投げナイフ使ってたな・・・」

記憶では小学3年の終わり頃には、既にあの技能を修得していたと思う

「・・もしかしてはやても、危険人物なんじゃないのか?」

・・余り賛同したくないが・・その通りかもしれない・・

「ちょ・・はやて止めて!!!」

スカッ！スカカッ！！

フェイトを狙いダガーを投げるはやて、フェイトは必死で回避している

「う～ん、中々当たらんな・・本数増やすか・・・」

ズラッ！！

「！！！」

両方の手にダガーを持つ、フェイトだけではなく、シグナム達を除いた全員の顔が青褪める

「ほいほい・・次は避けれるかなぁ～」

振りかぶり投擲準備に入るはやてに

「はいはい。良い子だからそれ仕舞おうな」

頭を撫でながらダガーを取り上げる、昔何度かこんなやり取りがあったな・・・

「はーい・・仕舞います」

服の中にダガーを仕舞うはやて・・何時の間に仕込んだんだ？

「た・・助かった・・」

へたり込むフェイトがかなり可哀想だった

「部隊長どうしてあんなこと出来るようになったんですか？」

朝食を終え、休憩してるとエリオが尋ねてきた

「ん？あれか？いやな・・昔私足が不自由でな・・暇やったから、練習してたら知らんうちに出来るようになったなぁ・・」

本当知らないうちに出来るようになっていた・・

「それで・・死に掛けたけどね・・・」

なのはちゃんが俯きながら言う

「死に掛けたって大袈裟な・・ブラッディダガー同士をぶつけて、死角から命中と同時に爆発させただけやん」

折角身に着けた投げナイフの技能を、有効利用しただけやけどね・・

「・・・それ・・絶対危険です」

エリオが青褪めながら言う・・そんな危険かなぁ・・兄ちゃんは簡単に切り払ってたけど・・

「多分お父さんじゃないと出来ないですよ・・そんな超人技・・」

かもなぁ・・１６本同時に切り捨ててたし

「でも兄ちゃんも同じようなことするで？こう連続でブラッディダ

ガーを発生させて、途中でそれ掴んで接近技に持ち込んで爆発させるんや、あんな風に」

視界の隅では

「死ぬ！死んでしまう！！トーレ助けてくれ！！！！」

兄ちゃんの攻撃を回避しながら絶叫しながら、スカリエッティさんがトーレさんに助けを求めるが

「自業自得ですから・・自分で何とかしてください」

トーレさんは簡単に見捨てていた・・とう言うかあの状態の兄ちゃんを止めるのは不可能に近い

「貴様は何度言えば判る！！娘にコスプレをさせるなと！！」

両手にブラッディダガーを握り締め、振るう兄ちゃんの後ろには

「おかしいかな？」

「判りません・・可愛いと思うのですが・・」

「猫が駄目だったのでしょうか？」

猫耳メイド服姿のオットー達がいる・・本当スカリエッティさん馬鹿やね・・あんなん着せたら、兄ちゃん怒るに決まってるやん

「くたばれぇぇ！！」

ブラッディダガーで壁に貼り付けにし、指を鳴らす

パチン！！

それと同時に凄まじい爆発音がし

「ぐはっ・・あれは・・ウーノがやったのに・・ガクッ・・・」

爆発でボロボロになった、スカリエッテイさんはそう言い残し気絶した

「悪は滅びた・・オットー、ディード。セッテ・・ちゃんとした服に着替えて来なさい」

はーい、と返事をし着替えに戻ったオットー達を見ながら

「朝から、皆元気やね」

私はそう呟き、兄ちゃんが淹れてくれた紅茶を飲んだ、うん・・やっぱ兄ちゃんの紅茶は美味しいわ

「今日は皆で買い物行こうと思ってるんですけど。龍也さんはどう思いますか？」

なのはが尋ねて来る

「別に良いんじゃないのか？欲しい物くらいあるだろう？」

天雷の書を開きながら返事を返す、セレスは聖王教会で神王とジオ

ガディスの事を調べているので、今回の旅行には同行していない

「それじゃあ、皆で行きましょう」

笑顔でなのはが言うが

「？悪いが私とはやてとヴィータは参加出来んぞ？」

えっ？と呟きなのは達が停止する

「ど・・どうしてですか？」

なのはがどもりながら、尋ねて来るので

「いや・・ヴィータの騎士甲冑のデザインを変えないと・・いつまでもあのゴスロリは無いだろう？・・それに今日はあの日だ・・」

体が大きくなった為、以前の騎士甲冑だと違和感があるので、デザインを変えることになったのだ。だがそれを除いても今日はなのは達に付き合うつもりは無かった・・今日は大切な日なのだから

「思い出しましたよ、そっか・・今日でしたね・・判りました、買い物は私達だけで行って来ます」

首を傾げるスバル達を連れて、なのは達は出掛けて行った・・そうか・・なのは達も覚えていたのだな・・

「それじゃあ。騎士甲冑のデザインを考えるか？」

少し思考の海に浸りそうだったが切り替え、ヴィータの騎士甲冑の

話をする

「良し。格好良いのにしようぜ」

「えー。私は可愛いほうがええと思うで」

3人で紙と鉛筆、それと資料を見ながら新しいヴィータの騎士甲冑を考える

「これはどうや？」

はやてが書いたデザインを見るが

「いいいい・・やだやだ。そんなの嫌だかんなっ！！！」

ヴィータが断るのも納得だ

「私もそれは駄目だと思う・・」

「そうかなぁ・・可愛いと思うけど」

はやての考えたデザインは、なんというか・・ウサギ？みたいなデザインだった。それは可愛いかもしれんが以前の物と大差ない

「私はこれだ！」

ヴィータが自信満々で自分の書いた絵を見せるが

「・・・無いわ」

「私もだ・・」

その絵を見て私とはやては停止した。重厚なデザインの物で、なんとなく私の騎士甲冑に似ているがヴィータには似合わない。そのデザインなら間違いなくシグナムだな

「うー。兄貴とお揃いにしたかったのに・・」

却下を受け落ち込むヴィータ

「ではこれはどうだろうか？」

私の書いたデザインを見せる

「おお・・・」

「良いな・・」

私の書いたデザインを見る二人の目は輝いている

「私の騎士甲冑と以前の物を少しずつ混ぜてみたんだ」

ドレスのデザインはそのままに、色は赤を基調に所々に黒のワンポイントが入った物だ。さらに急所を覆う僅かな鎧、これならばヴィータの動きを制限してしまう事も無い、全体的に見ればブレイドモードを軽量化した感じがする

「これで良い！！兄貴のに似てるから」

ヴィータはかなり気に入ったようで、とても喜んでいる

「私もこれで良いと思うで」

はやても気に入ったようで、早速騎士甲冑のデザインが変更された

「へへ、どうだ兄貴、似合うか？」

変更した騎士甲冑を纏い、くるっと一回転するヴィータ

「良いんじゃないか？良く似合ってる。はやてはどう思う？」

私の目では良く似合ってると思うが、一応はやてにも聞いてみる

「ばっちりや、よう似合ってるで」

はやてにも似合ってると言われ

「へへ、二人ともありがとうな」

嬉しそうに笑うヴィータを見ていると、そろそろ昼食の準備をするのに丁度いい時間である事に気付いた

「そろそろ昼ご飯の準備でもするか・・ヴィータ何が食べたい？」

「そうだな・・久しぶりに兄貴のオムライスが食べたい！」

オムライス・・そうだな久しぶりに作るか

「判った、今から準備をしてくるか・・」

「確か・・なのはちゃん達は、外でお昼食べてくる言うてたから3人分で良いで」

そう言うはやてに見送られ、私は厨房に向かった頃

「なのはさん、龍也さんが言ってたあの日って何ですか？」

レストランで食事をしていると、スバルが思い出したように尋ねて来る

「私も知りたいですね。龍也様の事は私は何も知りませんから」

セッテ、いや皆聞きたそうな顔をしている

「フェイトちゃん、どうする？話す？」

勝手に話して良い物なのか迷い、同じくそれを知るフェイトに尋ねる

「シグナムに聞いたほうが良いよ、シグナム話しても良いかな？」

腕を組んでるシグナムにフェイトちゃんが尋ねる

「・・良いんじゃないのか？兄上と主はやてにとっては今日はとても大切な日。邪魔させない為に話したほうが良いだろう。今日という日を邪魔をすれば、殺傷設定で主はやてが暴れるかもしれんからな・・・」

・・私も経験があるからなぁ・・今日ははやてちゃんがとても大切

にしてる日だから

「判った、じゃあ教えるよ、今日は・・龍也さんがはやてちゃんのお兄ちゃんになった日なんだよ」

私は知っている事を話し始めた

「もう十年近くたつのか・・」

なのはが私の話しをしている頃、私達は食事を終え、私達のお気に入りの場所である桜の丘の上に来ていた

「そうやね・・兄ちゃんが私の兄ちゃんになってくれた日。今日は大切な日やからね」

はやても懐かしそうにしている、今日は私とはやてにとっては何よりも大切な日だ、３人で桜の木の前で話をしていた

「私はあんま知らないけど、ここにいて良いのか？」

詳しい事情を知らないヴィータが此処に居て良いのかと尋ねて来る

「居て良いに決まってるだろう？お前だって私の大切な家族なんだから」

そう笑いながら、ヴィータの頭を撫でる。私にははやて同様ヴィータ達もなによりも大切な家族なのだ

「兄ちゃん。私も！私も！」

寄って来るはやてに苦笑しながら、頭を撫でる

「ふふ・・やっぱ兄ちゃんは暖かいで・・」

気持ちよさそうに目を細める、はやてとヴィータを見ながら微笑む

（今の私が居るのは全て、はやてとヴィータ達のおかげだ・・もしはやて達が居なかったら、私は狂っていたかも知れんな・・・）

私の事を最強や無敵と言う者も居るがそうではない、私は弱い・・体は強いかもしれんだか心は弱い・・二人の頭を撫でながらそう思う・・何よりも大切で何よりも護りたい家族・・私ははやて達が居るから立っていられるんだ

「「ふぁあああ・・眠くなってきたわ（ぜ）」」

欠伸をする二人に

「私の膝枕でよければ、使ってくれても構わんぞ？」

膝を叩きながら笑うと

「ええの？じゃあ遠慮なく使うで・・」

「・・私もじゃあ・・折角だから・・」

二人とも私の膝の上に頭を置き横になる。しばらく頭を撫でながら二人を見ていると、規則正しい寝息が聞こえてくる

「二人とも寝たか・・」

寝息を立てる、二人の頭を撫でながら歌を口ずさむ、曲名も知らない、メロディーも合ってるかも判らない。だけどこの歌は私は好きだった・・気が付いたら歌っていたこの歌・・調べても曲名さえ判らないこれは誰の歌なんだろうか？

「むっ・・又か・・」

知らないうちに溢れ出した涙を拭う、この歌を歌っていると知らずに涙が流れる

「気が付いたら歌っていたこの歌・・一体何なんだろうな？」

そんな事を思いながら、歌を口ずさむ。この歌はもしかしたら母さんの歌なのかもしれない・・顔も覚えていない・・写真も無い、だけど優しい人だったのは覚えてる・・・

「ふふ。もしそうだったらならば良いな・・・」

殆ど父さんと母さんに関することは覚えていない、だからこの歌が母さんの物だったら良いなと、思い再び歌を口ずさんだ

「そろそろ、帰る時間ですね」

そろそろ太陽が沈みかけている。龍也さんとはやてちゃんの邪魔をしないように大分外で時間を潰した。そろそろ戻っても良いだろう

「そうだな、私達も今日の夜には戻らねばならん、はやて君には悪いがそろそろ戻るとしよう」

皆ですずかちゃんの離れに向かいながら

「龍也様の記念日ですか・・やはり私達は龍也様の事を何も知りませんね」

ウーノさんが静かにそう呟く、

「「私達もですよ・・やっぱり龍也さんの事何も知らないんですよね」」

スバル達も落ち込んでいるようだ

「スバル達だけじゃないよ、私もフェイトちゃんも龍也さんの事殆ど知らないからね・・・」

ちゃんと龍也さんの事を知ってるのははやてちゃんくらいだろう、良く考えたら龍也さんが管理局に戻って来た目的も知らない、

若干落ち込みムードの中離れに着くと、そこに龍也さん達の姿は無く変わりに手紙が置いてあり、そこには桜の丘に居ると書いてあった。なのですずかちゃんにお礼を言ってから、皆で帰る準備をし桜の丘に向かいました

～♪～♪～♪～

丘の上から風に乗り龍也さんの歌声が聞こえてくる

「凄く優しい歌・・龍也さんが歌ってるのかな?」

ティアナがその歌を聞き、そう呟く。確かに綺麗で何処までも透き通るその歌声は優しさに満たされている

「本当優しい歌だ・・まるで子守唄のようだ・・」

チンクさんも目を細め呟く、皆でその歌を聞きながら、丘を登るそしてそれと同時に私達は龍也さんの姿に目を奪われたそれは幻想的な美しさを持っていた、桜の木に背を預けはやてちゃん達に膝枕しながら、静かに目を閉じ優しく歌を紡ぐ。その姿はまるで天使を連想させる。二人の頭を優しく撫でながら静かに静かに歌を歌い上げる、邪魔をしてはいけない私はそう感じた、しかし

ジャリッ!

スバルが音を立ててしまう。その瞬間歌は止まり

「・・・何だ・・聞いてたのか・・」

閉じていた目を開き。静かに言う龍也さん

「すいません、邪魔するつもりは無かったんです・・」

物音を立てた、スバルが謝る・・先程からセッテ達の責める様な視線が集中している

「あの・・龍也様歌の続きを聞かせてくれませんか?」

ウーノさんが言うと

「聞くなら静かにな・・はやて達が寝てるからな・・・」

龍也さんの膝の上で安らかな表情で眠っている、二人の頭を撫でながら再び歌を歌いだす

～♪～♪～♪～

その歌は何処までも優しく、包み込む優しさを持っていた

「本当綺麗な歌声・・」

ティアナが呟く、確かにそのとおりだ、これなら本職の歌手にも負けていない

「これは・・何処かで聞いた事がある・・どこだったかな?」

スカリエッティさんが呟いている

～♪～♪～♪～

静かに歌声が響く中ふと、龍也さんの顔を見る

「涙・・」

閉ざされた目からは静かに涙が零れていた、流れる涙をそのままに歌を歌い続ける

～♪～♪～♪～

皆がその流れる涙に驚いている内に歌が終わり、右手で涙を拭いながら

「やれやれ・・どうしてこの歌を歌うと涙が出るのだろうな?」

そう呟きながら二人の頭を撫でているが

「そうか・・もう帰る時間か・・はやて、ヴィータ起きろ」

私達が居るので、もう帰る時間だということに気付いたのか、二人を起こそうとするが

「「すぅ、すぅ・・・」」

二人とも熟睡しているようで、起きる気配は無い

「・・仕方ないか・・ふっ!」

短く溜めの呼吸をし、二人を持ち上げそのまま背中に背負う

「すまないな、態々呼びに来てくれたのだろう?」

背負ったまま笑う龍也さんの顔はとても穏やかな物だった

「いえ、気にしないで下さい。所で重くないのですか?」

「重い?とんでもない。軽いくらいだよ」

セッテが龍也さんと会話しながら、寝ている二人を黒い瞳で睨み続

けている・・多分視線だけで人が殺せるなら二人は死んでる・・でもそれはセッテだけでなく

「・・はやて・・・」

「部隊長・・・ヴィータさん・・」

フェイトちゃんとティアナも刺すような視線で睨んでいる中

「良いなあ・・私もおんぶして欲しいかも・・」

「僕は膝枕のほうが良いよ・・頼んでみようかな?」

「・・一撃のお願いで膝枕を希望したら、どうなるでしょうか?」

スバル、オットー、ディードは二人を羨ましそうに見ていた・・いや多分これは私も同じだ

「さてと・・では戻るとするか?」

その視線に気付かない、龍也さんは何事も無い様に二人を背負い、転送ポートの方に歩いて行ってしまった

(少しはそういう人の好意に気付いたほうが良いですよ龍也さん・・お父さんの言う通りその内刺されますよ?)

視界に居るヤンデレ予備軍の3名を見ながら私はそう思った・・

隊舎で皆と別れ、はやてとヴィータを背負ったまま、はやての部屋に向かう

「はやて、ヴィータ・・部屋に着いたぞ・・・起きないか・・」

寝室で背中の上で寝息を立てる、はやてとヴィータに声を掛けるが

「「むにゃ・・むにゃ・・」」

起きる気配は無い、仕方ないので二人をベッドに横にし

「やれやれ・・本当に何時になったら兄離れしてくれるんだろうな・・」

ベッドの淵に腰掛け、寝息を立てる二人の頭を撫でる

「むにゃ!・・兄ちゃん!!!私は兄離れせんでぇ!!!・・すぅ・・すぅ・・」

はやてが飛び起きそう言うと、再び眠りに着く

「・・やれやれだな・・」

苦笑を浮かべているのが判る、暫くそのまま二人の髪を撫でてから、立ち上がろうとすると

「・・そうだ・・今日くらいは良いな」

良い事を一つ思いつき、そのまますっとしゃがみ込み、はやてとヴィータの額に軽く口付けをする

「良い夢を見ろよ・・」

昔は怖い夢を見て寝れないと言うはやてに良くしたな・・と昔の思い出に浸りながら自室に戻って行った数分後

「びっくりしたわぁ・・まさか額にキスされるとは思って無かったわ・・」

はやてとヴィータが起き出す、実は私は兄離れせんでぇの地点で、既に起きていたのだが寝たふりをしていたのだ

「うう～恥かしい」

ヴィータが額を押さえ悶絶する姿をみながらはやては

「ううん、やっぱ兄ちゃんは私らには無警戒やね・・」

これがなのはやフェイト達なら、寝たふりだと龍也は気付く。だがやはり懐の一番奥に居るはやてやヴィータには警戒心が薄いのだ

「これなら、寝ぼけたふりでもして兄ちゃんの唇奪うべきやったなぁ・・凄いチャンス逃がしたわぁ・・・」

とはやてが自分の失態を後悔してる頃

「ゾクッ！・・何だこの寒気は？・・嫌な予感がする早く寝るか・・」

自室で布団に包まる龍也の姿があった、近いうちに龍也のアイデン

ティティは崩壊するかもしれない・・

第５９話に続く

## 第５８話（後書き）

次回からが再びミッド編です。

アイデア募集に来た技を使う話が増えると思いますので・・募集に参加してくださった読者の方は登場をお楽しみに

## 第５９話（前書き）

今回は鳴神様のアイデアの技が登場します。
鳴神様には大変感謝しています。

ただ来た技が多いので全て登場させる事が出来るか不安ですが。
出来るだけ採用しますのでご安心を

それでは本編始まります

# 第５９話

第５９話

まだ朝日も昇らぬ時間に私は隊舎の前に居た

「もう行くのか？せめてみんなに挨拶してからにしたらどうだ？」

隊舎の前で遺跡に向かう準備をするジェイル達に言うと

「そうもいかんさ。私としては早く神王の事を調べたいからな」

荷物を移動要塞のような、大型の車に積み込みながら返事を返すジェイルと

「兄様ともう少し一緒に居たいけど・・行きたくなくなるからね・・早く行くんだよ」

オットーが準備を終え、車に乗り込む。

「そうか・・では私から一つだけ命令を出そう」

窓から顔を出すウーノ達を見て

「お前達のもう一つの家は此処だ、絶対全員で此処に帰って来い」

そう笑うと全員おかしそうに笑い

「「了解・・それじゃあ行ってきます」」

敷地内から出て行く車を見送っていると

「兄、ジェイル達はもう行ったのか？」

眠そうにアギトが姿を見せる、アギトは六課に残る事になったのだ

「ああ、ついさっきな行ったよ。ルーテシアが頑張れって伝えてくれって言ってたぞ」

ルーテシアはゼストとメガーヌと合流した後、ジェイル達と一緒に遺跡に向かう事になっている

「そっか・・ルールーに行ってらっしゃいって言いたかったけどな・・ふぁああ」

眠そうに欠伸をするアギトに

「まだ早い、もう少し寝てるといい」

「うー。じゃあ少し兄の部屋で寝る・・」

ふらふらと私と一緒に部屋に戻って行く、アギトを見ながら。私はジェイル達の無事を祈った

う～ん、アギトちゃんは何処ですかぁ？私とアギトちゃんには少し大きいですけど二人部屋になったんです。それで朝起きたらアギトちゃんが居ないので探していると

「あっ！アギトちゃん見つけたです！！」

お兄様の肩に腰掛けて、お兄様と話しているアギトちゃんを見つけたです・・

「おっ！リィンかおはよう！」

肩の上からおはようと言って来る、アギトちゃんと

「ふむ・・朝からリィンは元気だな」

と笑うお兄様の肩に座りながら

「アギトちゃんは朝早いんですね・・リィンは朝は苦手です・・」

リィンは朝が苦手なのに、アギトちゃんがこんな朝早くから起きてる事に、ショックを受けながら言うと

「そうでもないぜ。ジェイル達を見送りに起きたんだけどよもう居なくてさ。そのまま兄の部屋で少し寝てたんだよ。私も朝は苦手だからなぁ・・ふぁああ・・まだ眠いしよ・・」

目を擦りながら言うアギトちゃんは本当に眠そうです・・良かったです。これでアギトちゃんまで朝が早かったら、リィンは立ち直れないです・・

「それでこんな朝早くから何処行くんですか？」

朝食にはまだ早いこの時間に何処に行くのか尋ねると

「朝の訓練に参加すんだよ、飛び入りでな。へへ・・きっと驚くぜ」

そう笑うアギトちゃんとリィンを肩に乗せて演習場に行ったです

「えい！やあっ！！」

「どうした？間だ踏み込みが足りんぞ？」

エリオ君がシグナムに訓練を付けて貰っていたです。う～んエリオ君も強くなってますけど。間だシグナムには届いてないですね

「大分動きは良くなってるな、この調子で行けばランクアップも夢じゃないな」

う～ん、リィンには良く判らないですけど。お兄様が言うなら強くなってるんでしょう

「さてと、リィン耳を貸せ。少し実験をやってみようと思うんだ」

お兄様の提案を聞いて、リィンは驚きました

「そんな事が出来るんですか？」

信じられなくて尋ねると

「理論上は可能だな、私の魔力なら十分実用可能なはずだ」

自身ありげに笑うお兄様と

「大丈夫だって、兄が言うなら間違いないからよ」

それはリィンだって思います、お兄様は根拠無いことは言いませんから

「そうですね・・それじゃあやるです！」

ふふふ・・これならきっとシグナム達も驚くです。そう思いながらエリオ君達の所に向かったです

「ふう～疲れました」

シグナムさんとの訓練を終え座り込む。スバルさん達も休憩に入っている

「何だ、鍛え方が足りんな、それでは兄上を超える事など不可能だ」

うっ・・痛いとこです。なんとかお父さんに一撃入れたいんですけどね・・

「シグナム、エリオ。おはよう。朝から頑張ってるな」

肩にリィンさんとアギトさんを乗せて。お父さんが歩いてきます、慌てて飛び起きて

「おはようございます！」

と言うと、お父さんは嬉しそうに笑い

「ああ、おはよう。所でまだ戦う元気はあるか？もしあるならなら私と模擬戦をするか？」

そう笑うお父さんに

「お願いします！

僕は体の疲労を忘れて、その申し出を引き受けた

「さて・・その前にエリオこっちに来い」

手招きするお父さんの所に行くと、

「傷ついた戦士に天界の祝福を・・ヘブンズヒール」

掲げられた左手から蒼い風？って言えば良いのかな？それが僕の体を包むと、疲労や減っていた魔力が全て元通りになっていた

「お～兄、凄ごいな・・兄は回復魔法も得意なのか？」

肩の上のアギトさんが訪ねると

「私は元々攻撃魔法は余り得意じゃない、今でこそ使えるが昔はなのはより威力も低いし、錬度も低いだからＢランクだった。射撃や砲撃が苦手な分防御と近接に長けてたんだ」

へ～話は聞いてたけど本当にお父さんは昔はＢランクだったんだ。今はＳＳＳランクだから信じられないけど

「さてと・・では始めるか？」

拳を向け、微笑むお父さんと距離を取りながら

「はい、お願いします」

ストラーダを構える、お父さんはデバイスを何も持っていない・・

何を使うんだ?ガーディアンズハートか?天雷の書か?どっちだ?

「リィン、アギト。行くぞ」

「おう」

「はいです」

「「「ダブルユニゾン!!」」」

そんな事を思っていると、お父さんにリィンさんとアギトさんがユニゾンする

ええっ!ダブルユニゾン!!そんな事出来るんですか?

「「「嘘!ダブルユニゾン!!」」」

シグナムさん達の驚きの声が聞こえる、中ユニゾンが終る

「成功だ。上手く行ったな」

美しい光沢を持つ金髪に、血の様に赤く染まった瞳、騎士甲冑は白銀で赤のマントが体を包んでいた、そして両手はそれぞれ龍の頭を模した篭手と狼の頭を模した篭手が嵌められていた

「エリオ。行くぞちゃんと構えていろよ?」

ダンッ!

地を蹴る音と共にお父さんの姿がぶれる

「えっ?」

一瞬で姿を見失う何処だと思い見回すと

『上です!早く構えてください』

ストラーダの警告を聞き上を見る

上空からお父さんが、龍の篭手から炎の剣を振りかざし落下してくる

「フレイムブレイク!」

「くうっ・・!」

全力で受け止めるが

「その程度は止められんよ?」

その言葉の通りで勢いは全く止まらず、迫ってくる

「くっ!でえええい!!」

渾身の力で弾き飛ばす、クルクルと回転しながら着地し

「中々やる・・がそれでは駄目だな・・オーヴァフレイム！！」

篭手から炎の弾丸が放たれる

「プロテクション！」

魔力の壁でその炎を防ぐが・・

「判断は良い・・だがその後は落第だ」

その声と共に拳でプロテクションが砕かれる

「黒き獄炎の炎耐えれるか？ヘルプロミネンス」

足元から黒い炎が巻き上がる、熱くは無いだが

（魔力が減っていく・・）

魔力ダメージでは無い、ただこの炎に包まれていると魔力が減少していく

「くっ！」

大きく地を蹴りその炎から逃れる、距離を取り肩で呼吸を整えていると

（にしし、見たか兄と私の力を）

楽しげに笑うアギトさんの声と

（次はリィンの番です、エリオ君行くですよ？）

狼の篭手を此方に向けると同時に

「フリージングガンッ！！！」

氷の弾丸が迫る、僕はそれを回避しお父さんに向かって行った

「ダブルユニゾン・・そんな事が出来るのか・・」

演習場を見ながら私はそう呟いた、

「良く見ろよ？当たればそこで終わりだぞ」

シュバババババッ！！！

風を切る音を共に赤い閃光が走る、その全ては兄上の剣での一撃だ。

威力よりも精度をとった一撃だが、あの速さでの一撃は致命傷になりかねない、エリオに当たるか当たらないかのギリギリのラインで連続で繰り出される一撃を

「ふっ！」

短い呼吸で的確に自分に当たるものだけを迎撃していく

「エリオ、強くなりましたね」

スバルが見ながら呟くが

「まだまだ、兄上には遠く及ばない・・それは私にも言えるがな」

見ながらそう思う、兄上はその気になれば素手でも私を圧倒するだけの力を持っている。

（責めて一太刀は入れれる様にならねば・・・）

そう思い再び演習場を見る

ガキーン!!

金属と金属がぶつかる音が何度も響き、兄上の剣とストラーダがぶつかる

「龍炎斬!!!」

炎を纏った一撃をエリオは跳躍する事で回避し、着地と同時に

「紫電一閃!!!でえええいっ!!!」

飛び込みながら右拳での一撃を当てようとするが・・それより早く兄上の氷の盾が現れ

「破滅の光よ・・咎人に光の断罪を・・・」

盾に光が集まりそれでエリオの拳を受け止めると同時に

「ファイナルエリシオン!!!」

兄上の魔力光とエリオの魔力光が混じった強烈な光が放たれ

「うわあああああっ！！！！」

その余りの威力に悲鳴を上げながらエリオが吹っ飛ぶ。その様子を見ながら

「・・加減を間違えた・・・」

兄上の額に冷や汗が見えた

「ごほっ・・はぁ・・はぁ・・参りました」

咳き込みながら参りましたと言うエリオに

「すまん・・手加減を間違えた・・大丈夫か？」

心配そうにエリオに問いかけると

「大丈夫です。はぁ・・はぁ・・やっぱり・・お父さんは強いです・・」

肩で息するエリオの頭を撫でながら

「ユニゾンアウト」

兄上の体からリィンとアギトが姿を見せ、その場にへたり込む

「うぇ・・疲れた・・」

「うう・・結構きついです・・」

かなり消耗した様子の二人に

「ふむ・・まだ研究の余地ありだな・・二人への負担が大きすぎるか」

冷静に分析する兄上の姿に疲労の色は無い

「龍也さんって疲れる事ってあるんですかね？」

ティアナが呆れた様子で言う

「判らん・・私の記憶では、疲れた等と言う素振りを見せた事は一度も無かった」

疲れた様子のリィンとアギトにエリオを抱え上げ歩き出した、兄上を見ながら私はそう呟いた

「いやー良く寝たっす」

管理局の制服を着て、頭を掻きながら言うと

「寝すぎだ馬鹿。朝の訓練に間に合わなかったじゃねぇか」

不機嫌なノーヴェに

「でも今日は参加しなくて良いって聞いてるっすよ？」

確かなのはには今日は参加しなくて良いと聞いていたっすけどねぇ・・

「確かにそうだが、今日は三日に一度の八神が訓練を付けてくれる日なんだそうだ」

チンク姉が教えてくるっす、私達は5人部屋で姉妹で使ってるっす

「あちゃー、それは不味い事したっす。知ってたなら早起きしたっすけど・・所でクア姉は？」

姿の見えないクア姉の事を尋ねると

「クアットロ姉様は早く起きて、部隊の話に行きました。私達は龍也様の部隊に配属予定ですから。打ち合わせに行きましたよ」

成る程っす・・でもふふ、龍也兄の部隊っすか～良いっすね～

「ウェンディも起きた事だし、食堂に行くぞ。その後は本局に行くそうだ。私達の魔導師ランクを調べるそうだ」

チンク姉の説明を聞きながら食堂向かっていくと

「おっ、チンクさん、おはようございます」

スバルに会ったっす、首からタオルを下げて今シャワーを浴びてきた感じっす

「スバルか、おはよう。もう訓練は終ったのか？」

「終りましたよ、龍也さんとの訓練は凄いきついから朝からへとへとですよ～」

と笑うスバルの後ろから

「スバル？何してるのよ。早く行かないと龍也さんの席埋まっちゃうわよ？」

ティアナも同じように首からタオルを下げて姿を見せたっす、でもこの人は警戒っすね・・龍也兄の好みの人らしいっすから

「あっ・・チンクさん、おはようございます。良く眠れましたか？」

此処で私達の気付いたのかおはようと言って来るティアナに

「大丈夫っすよ、良く眠れたっすよ」

ピースしながら笑うと

「それは良かったですね、私達これから食堂に行くんですよ、良かったら一緒にどうですか？」

ティアナに誘われて一緒に食堂に行くことにしたんっすけど・・

「何で私を睨むのよ」

「睨んでないです、唯貴方は不快です、龍也様に近すぎる」

にらみ合おうセッテとティアナにちょっと疲れたっす、食堂に着くと

「八神の席に人が居ない様だが？」

チンク姉も気付いた見たいっす。龍也兄の席はガラガラになってるっす

「龍也さんと合い席するなんて恐れ多いとか言って、大概の人は龍也さんの席に座らないのよ。私から見れば唯の馬鹿の集まりよ」

そう言うと龍也兄の席に向かっていく、ティアナの後を付いて行くと

「あーん」

口を開くアギトと

「魚で良いか？少し待てよ・・・ほらあーん」

その口にほぐした魚の身を入れる、龍也兄・・何してるっすか！

「お兄様、リィンもリィンもです！」

同じように口を開く、リィンの口に

「はい、あーん」

「美味しいです！」

龍也兄の両隣で食事をしているリィンとアギトに驚いていると

「うん？チンク達かおはよう。立ってないで座ったらどうだ？」

私達に気付いて、微笑む龍也兄に促されて席に座ると

「あら、あら・・チンクちゃん達も来てたんですかぁ～」

独特な甘い声でクア姉登場

「クアットロ、話は終ったのか？」

「当然ですわ、八神兄様。此処失礼しますよ」

と笑い向かい合う席に座ろうとすると

「クアットロさん、そこは私の指定席や、横にずれてくれへん？」

ダガーを片手に挟んではやてが来たっす・・

「それはすいませんでしたぁ～知らなかったもので」

即座に横にずれるクア姉・・その顔は少し引き攣っていたっす・・

「兄ちゃん、おはようさん。よう眠れたか？」

「何時もどおりだ。はやてダガーを仕舞いなさい」

はーいと言いダガーを服に仕舞う、はやて・・龍也兄に下手に近づけばあれの餌食っすか・・怖いっすねと思ってると

「ああ、大丈夫や、ウェンディに投げる気は無いから、安心しい」

そんな!?考えてる事を読まれた?と驚いてると

「「部隊長、おはようございます」」

スバルとティアナが挨拶をすると

「ほい、おはようさん」

と笑うはやての姿を見て

「部隊長?何か良い事でもありました?」

スバルが驚きながら尋ねるっす・・普段は返事を返してくれないっすか?と思ってると

「ふふ・・良い事所か最高の事があったんや」

と笑うはやてに

「何があったんだ?はやて。凄く幸せそうだな?」

はやてと仲が良いチンク姉が尋ねると

「知りたいか?」

と焦らす様に笑うはやてに

「いいから早く教えないさい、豆狸・・・」

ピシリと音を立てて世界が凍る、セッテがとんでもない暴言を吐く・・ああ・・血の雨がふるっすか?恐る恐るはやてを見るっす

「ははは・・今は最高の気分やから、そんな言葉も全然平気や」

笑っているしかも心からの笑顔っす・・そんな昨日までならあの瞬間ダガーか魔法が炸裂するはずなのに。セッテも怒らせるつもりが笑われたのでどうすれば良いのか困惑してるっす

「本当なにがあったのか教えてくれよ」

ノーヴェが言うと

「ふふふ・・じゃあ教えたるわ・・なんと昨日の夜兄ちゃんにキスしてもらいました」

にこやかに言うはやてとが逆に私達の席の時が止まるっす・・ああ冗談?本気?どっちっすか?と思う中凍った時が動き始める

「「「ええええええっ!!!!!!!!!」」」

スバル、ティアナ、セッテの絶叫が木霊するっす、良く見ると他の隊員はどこにも居ないっす・・ああ逃げたんすっね・・流石と言えば良いのか慣れてるって言えば良いのか、どっちっすかねぇ・・そんな事を考えてると

「龍也さん、部隊長は妹ですよ!判ってますか!!」

「寝ぼけてたんですか?それとも部隊長が好きになったとかですかっ!!!」

「龍也様・・いえ・・違います悪いのは豆狸・・龍也様に非は無い筈です・・」

凄い剣幕で詰め寄るスバル達と

「はは・・嘘だろ?まさか・・龍也はやては妹って言ってたじゃないか・・・」

「八神・・そんな・・まさか・・」

項垂れＯｒｚ状態のチンク姉とノーヴェに

「やっぱりです、はやてちゃんにはお兄様しか居ないのです！」

「そうかもなぁ・・兄とはやてお似合いだもんな・・」

祝福モードのリィンとアギトに硬直している龍也兄

「・・・はっ！あれはキスには入らんだろう?」

硬直から復活した龍也兄が首を傾げながら言うっす

「いえ・・あれはカウントに入れたいと思います」

と手を上げるはやてに、龍也兄は

「待てよ・・はやてお前あの時起きてたな?」

ビクっ！と動き目を逸らしながら

「ソンナコトナイヨーワタシハネテマシタ・・」

エセ外国人の様に片言で喋る、はやてに頭を抱えながら

「あれはキスではないだろう？あれはおまじないだ」

おまじない？ああ！あれっすか！？私が気付くと同時にリィンとアギトが

「「ああ！あれだ！（です！）おでこにだ（です）。良く眠れるおまじない！！」」

手をポン！と叩き同時に言うと

「リィン、アギトあれはキスでは無いよな？」

二人に尋ねると

「あれは違うと思うです！あれはおまじないです！！」

「そうだよねぇ・・あれはキスじゃ無いよな」

と言う二人の声を聞き、皆正気に戻る

「だよねぇ・・龍也さん（龍也様）（八神）（龍也）がそんなことするわけ無いもんね（です）（な）（ぜ）」

と冷静さを取り戻す、スバル達と

「ちぇ・・これで兄ちゃんを諦めさせよ思ったのに・・・」

と呟くはやてを見て、それに詰め寄り文句を言うセッテ達を見ながら

「いや～こういうのも良いすっね～。朝からワイワイ、賑やか私は楽しいっすよ～」

こんな賑やかなのも良いなと思い私は呟いた、大好きな姉妹が居て、にぎやかで気の良いスバル達が居て、大好きな龍也兄が居る、こんな幸せな事は無い。私はそう思いながら冷めかけた朝食に箸を伸ばした。それは少し冷たかったがとても美味しかった・・

第６０話に続く

## 第５９話（後書き）

技の解説です

ファイナルエリシオン
相手の攻撃または魔力に自身の魔力を上乗せして放つカウンターの技。
本来はデバイスの盾を使うが今回は、氷で作った盾で代用した

威力は微調整が可能で本気で放てばスターライトを上回る破壊力を出す事が出来る

とこんな感じです。これからは少しずつですが、来たアイデアの技を使っていきます。これからも本作を宜しくお願いします

# 第６０話（前書き）

ついに５００，０００アクセスを超えました・・感激です

それの記念の小説ですが作者の独断でヴィヴィオシリーズに決定しました。

お知らせに書いた通り、アンケートの意味が無かった事が残念です。

番外編のヴィヴィオの日常は現在考案中なので、投稿するのはまだ後になりますが

お楽しみに。

今回はランク変動です。スバルとティアナにチンク達の魔導師ランクの話になります、オリジナルの話なので構成が甘いと思いますがお付き合いください

# 第６０話

第６０話

「はやて、八神はどうした？」

本局に移動する為に隊舎の前で、待っていたのだが姿の無い八神の事を尋ねると

「何か、変装してくるって、若い魔導師に捕まるのは御免だ、言うとったで？・・それにしても兄ちゃん遅いなぁ？」

私達とへ別になのは達は既に本局で試験の準備をしてるので、後は八神が来れば直ぐに出発できるのだがと思っていると

「待たせたな、では行くとしよう」

八神の声が聞こえ振り返るが・・

「「「誰・・？」」」

私は困惑した、茶色の短髪に、青のシャツと茶色のスーツに黒のネクタイ。スーツの上から薄茶色のコートを羽織り黒の眼鏡を掛けた男がゆっくりと歩いてきた。私達全員硬直した、八神だとは判ってるがこれは既に別人だ

「もしかして・・龍也兄っすか？」

ウェンディが驚きながら尋ねると

「私以外に誰が居る？どうだ完璧だろう？幻術魔法で変装した見たのだが・・どこかおかしいか？」

体を見ながらそう言う八神？に

「いや。大丈夫や、兄ちゃんじゃあ行こか？」

私達は本局に向かって行ったが

「・・それにしても本当別人見たいやね」

車の中ではやてが八神を見ながら言う

「ふむ・・そうか、だがこれくらいやっておかないと面倒だからな・・・」

顎の下に手を置きながら笑う八神に

「それにしても、私とティアまで本局に行く理由は何ですか？」

八神の後ろの席からスバルが尋ねると

「何だ聞いてないのか？スバルとティアナにも試験を受けて貰う、Aランク昇格試験だからな」

スバル達も試験を受けるのかと思ってると

「聞いてないですよ！！何時決まったんです！！」

ティアナが詰め寄り八神に尋ねると

「二人が私を撃墜した日だが？なのはから聞いてなかったか？おかしいな？ちゃんと話しておいたのだが？」

・・・待て、今信じられない単語があったぞ

「八神、お前はスバル達に撃墜されたのか？」

信じられなくて尋ねると

「ああ、クロスシフトでな、ははまさか二人に撃墜されるとは思ってなかったが・・やはり天雷のデバイスは強力だな・・・いやこの場合二人のコンビネーションが良かったんだな」

とからからとおかしそうに笑う八神だが、その二つ後ろの席では

「龍也様を撃墜するとは身の程を知りなさい、このオレンジ頭」

ティアナにソルエッジを向けるセッテ

「だまれこの病み娘、龍也さんに私達の力を見せただけよ」

睨み合う二人と

「スバル、やったな！龍也を撃墜したのか、おっしゃあ！！私も頑張らないと」

「いやー凄いっすね、龍也兄を撃墜っすか。スバル凄いっすよ」

二人に褒められて

「いやー、私一人じゃ駄目だったよ?ティアが居たから・・・って二人とも何してるの!!」

振り返りながらスバルが絶叫する、ふと振り返ると

「はは、此処で私が貴方を地獄に落として差し上げましょう・・オレンジ頭」

「やれるもんならやって見なさい。その前に私が貴方の頭を打ち抜いて上げるわ・・病み娘」

二人ともデバイスをお互いの喉と頭に突け付けている・・ティアナとセッテの相性は最悪の様だ。

「うん?どうしたんだ?何かあったのか?」

その騒ぎに気付いた八神が振り返った瞬間

「「いえ、何でも無いですよ?」」

一瞬で待機状態に戻し笑う、セッテとティアナを見て

「そうか・・それなら良いが・・」

と前を向いた瞬間二人は同時に拳を繰り出した

「ちッ・・此処で気絶させてやろうと思ったのに・・」

「残念ね、私龍也さんに近接戦闘を教えて貰ってるの、この程度なら止めれるわ」

お互いの拳をぶつけながら

「いつか蜂の巣に（切り裂いて）してやる（差し上げましょう）」

お互いに睨みあう二人を見ながらクアットロが

「あらあら。八神兄様も厄介な人物に好かれましたね・・ガキンッ!!・・あらら怖いわね、お二人さん」

厄介と言った瞬間二人の拳がクアットロに向かうが、それを受け止めながら笑うクアットロ・・判っててからかうから性質が悪い

「ですが・・そんな事では八神兄様に嫌われますよ?八神兄様は喧嘩とかが好きではないですから」

とニコッと笑うクアットロの言葉を聞き

「・・っちっ・・決着はいずれ、龍也様が居ない所で付けて差し上げます。ティアナ」

「ふん、それはこっちの台詞よ、セッテ」

お互いに距離をとって座りなおす二人を見ながら

「うふふ、やっぱり八神兄様に嫌われるという言葉が効いたみたいですね」

と笑うクアットロ・・やはり姉妹間で一番策略家なのはクアットロなのかもしれない・・・私はそう思った

「ふう～車はやはり疲れる・・ベヒーモスで来れば楽だったな」

車から降り背伸びしながら言うと

「そんなら、帰りはそれで帰ろ。サイドカーにヴィータ乗せて後ろに私乗せてねぇな」

とはやてが笑いながら言うが

「「異議あり!!」」

ティアナとセッテが異議を申し立てる・・なんだ二人は意外と仲が良いのか?（逆です、二人の仲は最悪です）

「部隊長権限で却下、今日私とヴィータは兄ちゃんのバイクで帰ります。これは既に決定しました」

うう～と睨み合う、はやて達を見ながら

「はやて、私はレジアスの所に行くから。レジアスとの話しが終ったらここら辺で待っているからな?」

「了解。私らもここら辺で待ってるわ」

はやて達が試験場に歩いて行く中、私は逆に受付に歩いて行った（

ちゃんとみあげのケーキを持っている）

「すまないがレジアス中将に会いたいのだが？」

「アポイトメントはありますか？」

と冷静に受け答えをする、隊員に懐から隊員賞を見せながら

「管理局機動六課所属　八神龍也だ。私が来たと言えば会ってくれると思うが？」

一瞬だけ幻術を解除して素顔を見せる、すると隊員は慌てた素振りを見せながら

「も、申し訳ありませんでした、八神中将。レジアス中将は執務室に居られます」

敬礼しながら言う隊員に

「ありがとう、ああ・・それとこれは後で皆で分けて食べなさい。・・私が居ると言うことはそれで内緒にしてくれよ？」

懐から作っておいたクッキーを手渡し、シーというジェスチャーをする

「あっ、はい判りました。ありがとうございます」

そう言って頭を下げる、隊員の横を通り過ぎてエレベータに乗りレジアスの部屋に向かった

コンコン！

「入るぞ？」

ノックしてから部屋に入る

「うん？誰だお前？」

首を傾げるレジアスに

「私だ私。すまないが勝手に座らせてもらうぞ？」

幻術を解除してソファーに腰掛ける

「龍也、どうしたんだ態々変装などして？」

驚きながら同じようにソファーに腰掛けるレジアスに

「前本局に来たら、若い魔導師に囲まれて疲れたのでな。今回は変装してきた。それとこれはみあげだ」

作っておいたケーキを手渡す

「ほう、ありがとう、わしはこれが好きでな」

と笑うレジアス、作って来たのは甘さ控えめのチョコケーキ（それでも私は食べれないが）でレジアスがこれが好きなのだ

「所で如何したんだ？急に何か様でもあったのか？」

「チンク達の魔導師ランクを測るために本局に来る事になったからな、ついでに話しでもと思っただけだ」

と話をしていると

「どうぞ」

オーリスが紅茶を淹れて私の前に置くが

「オーリス・・いや・・ドゥーエだな？私を騙そうな等と十年早い」

そう言うと

「ふふ、ばれると思いましたが、やって見たかったんですよ」

ＩＳを解除して元の姿を見せる、長い金髪の美しい姿に戻りながらソファーに腰掛ける

「やはり八神様が凄いですね、完璧だと思ったんですが・・・」

自分に淹れた紅茶を飲みながら首を傾げるドゥーエに

「人にはその人だけしか出せない気配がある。姿形はオーリスだったが、感じる気配で判ったんだ」

どうして判ったのか説明していると

「おお、チンクとノーヴェの試験の結果が来たぞ」

ディスプレイに映し出されたのは、陸戦ＡＡ－と陸戦Ａ＋と表示さ

れた。チンクとノーヴェの顔写真だった

「ふふ、チンク達もやるわね。いきなりＡＡランクとは恐れ入るわ」

と楽しげに笑いケーキを口に運ぶドゥーエに

「はは、これでスカリエッティの娘だと言うから驚きだ、あの馬鹿と天才は紙一重を地で行ってる様なやつだからな」

と笑うレジアスの元に次々情報が来る

「クアットロが指揮のＡＡ－、セッテは空戦Ａ＋、ウェンディも空戦Ａ＋。ふむなかなかやるじゃないか」

楽しげにモニターを展開し、ケーキを食べながら微笑むその姿はまるで孫思いのお爺ちゃんのようだ

「龍也・・今わしの事をお爺ちゃんのようだと思ったか？」

横目で睨んでくるレジアスに

「気のせいじゃないか？」

と誤魔化す為に笑うが

「まぁ良いがな・・」

と笑いモニターを見ると

「次は六課の隊員か。どうなんだ実力の方は？」

次の受験者のティアナの事を尋ねて来るレジアスに

「実力は申し分ない、高い状況判断に戦局眼に指揮も出来る、私は次期エース候補だと思ってるよ」

素直にティアナの能力を言うと

「絶賛するじゃないか、辛口のお前にしては珍しいな」

と笑うレジアスに

「仮にも私を撃墜したんだ、そのくらいの評価は当然だ」

スバルとのコンビネーションは素晴らしい物がある。間違いなくティアナとスバルはエース級の実力がある

「なんと・・この子は八神様を撃墜したのですか」

驚くドゥーエに

「スバルとのコンビなら完璧だ、多分なのはも撃墜できるんじゃないか？」

あのコンビネーションははっきり言って脅威だ。多分セレスとユニゾンしていても大ダメージは必須だからな

「ほうほう。それは素晴らしいな」

と話をしていると試験が始まった、大量のガジェットが現れるが

『モード、ショットシュート！！』

華麗に空を舞いながら的確に撃墜していく。そのうち一機がその散弾を回避して迫ってくるが

『ストライクダガー！』

ライフルの先が取れ大型のナイフになり、それを駆使して破壊する

「ほほう、やるじゃないか。しかし書類には陸戦とあったが？」

確かにレジアスの手元の書類には陸戦と書いてあるが

「私のデバイスの一つと融合してな、今は空戦魔導師だよ」

華麗な機動を描くティアナを見ながらそう呟くと

『ブラスターショット！！』

残像が出来るほど高速で動きながら、高威力のブラスターを連射する。確実に打ち抜き数を減らしていく

『これで決まり！ハウリングブラスター！！』

ライフルが開き巨大な銃口が姿を見せ

ゴウッ！！！

なのはのスターライトよりかは劣るが強力な砲撃が放たれ、ガジェ

ットを全て破壊した

『・・試験は終了です・・控え室で結果をお待ちください』

試験管が驚きながらそう言い、ティアナが控え室に戻っていくと同時に結果が届く

「空戦ＡＡ－・・殲滅戦及び支援に特化している。妥当な評価だな」

結果ティアナは一気に3ランクもアップした

「いやいや。これは逸材だな」

レジアスも笑顔で見ていると

『よっしゃあ！次は私だ！！』

腕を回しながらスバルが姿を見せる

「ナカジマ・・ゲンヤの娘か・・それでこの子は如何なんだ？」

プロフィールを見ながら尋ねて来るレジアスに

「ティアナ同様、実力は申し分ないだが少し・・猪突猛進だな・・またか・・」

映像では

『リボルバーブレイク！！』

高速でウィングロードの上を駆けながら拳でガジェットを粉砕して回っている、その内破壊出来なかった物が光線を放つが

『そんな物！！プロテクション！』

青い魔力壁を纏いそのまま突貫して行き、体当たりで粉砕する

「龍也・・これは少し所じゃないぞ？」

レジアスが呆れながら言うと

『一撃必倒！！ディバインバスターァァッ！！！！！

左拳でスフィアを保持し、右拳で加速をつけて撃ち出しガジェットを粉砕しているが

「なんて馬鹿げた魔力なんですか？」

ベオウルフと融合したマッハキャリバーは攻撃の瞬間に、爆発的に魔力を増加させる効果がある。これのおかげでカートリッジを使わなくてもかなりの破壊力がある。そんな事を思ってると

『おお。でかいなぁ・・』

今までチンクとノーヴェにしか出なかった、ガジェット・ドローンⅡ型　巨大な球体の機械が姿を見せる

『へへ・・これなら試せるね。相棒！カートリッジロード！』

マッハキャリバーから空の薬莢が飛び出し、それと同時にウィング

ロードを高速で駆ける

『クラススフィア！！！』

肩から散弾状のスフィアを連続で放つ、それはガジェットに確実に命中しガジェットの姿を青い魔力が覆い隠す

『でえええい！！！！』

気合の入った声と共に上空から踵落としを放ち、ガジェットを凹ませる

『これが私の新しい切り札だああっ！！！！』

左拳をガジェットに叩き込む

『はあああああッ！！！！』

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドゴン！！！

連続で魔力を直接叩き込み続ける、その内装甲が大きく凹む

『これで決まりだあああッ！！！リバルバーブレイク！！！！』

大きく振りかぶりガジェットを青い魔力光と共に殴り飛ばす、吹っ飛んでいく途中で大きな爆発音と共にガジェットは消えた

『・・・・・・はっ！？試験は終了です・・控え室で結果をお待ちください』

『はーい』

返事を返し控え室に戻っていくスバルを見ながら

「龍也お前何したんだ？」

額から汗を流しながら尋ねて来るレジアスに

「・・私に一撃入れたらいう事を何でも聞くと言ったら・・何故かかなり張り切って訓練を皆やり始めた・・」

そう言うと

「お前・・いや何も言うまい・・天然に何を言っても判らないだろうからな・・・」

呆れた様に言うレジアスの前のモニターに

「陸戦ＡＡ＋・・破壊及び突貫に適している」

スバルは唯一ＡＡ＋に昇格が決まった・・これはなんとも言えないな・・

「龍也、お前が発表して来い」

レジアスから結果の紙を受け取り演習場に向かう

「おっと・・変装を解除しないとな・・」

向かう途中で幻術を解除し、スバル達が居るであろう控え室に向か

った

「龍也様。話しは終ったのですか？」

控え室ではスバル達とチンク達が居た

「ああ。終った。それと試験の結果も聞いてきた、はやて達と合流したら教える」

そう言い控え室を出ようとすると

「えいっす」

背中に重みを感じ振りかえる

「ウェンディ・・・何してる？」

「判んないっすか？背中にしがみついてるんっす」

何事も無いように微笑むウェンディ・・そうか・・こいつは抱きつき癖があったと思い。降りるように言うのを諦め歩き出した。

その間妙な寒気を感じたのは気のせいだろうか？（気のせいではなく、ティアナが原因です）

「おっ・・兄貴だ。背中はウェンディか。聞いてたけど抱きつき癖があるってのは本当みたいだな」

集合場所で兄貴に先導されてスバル達が姿を見せる・・兄貴の背に

はウェンディが居る事に気付いたフェイトが

「どうして・・私は・・おんぶなんかしてもらったこと無い・・ブツブツ・・・」

うつむきぶつぶつ言い始めた、フェイトが怖ええ、それをなのはが宥めようとするが

「フェイトちゃん、落ち着いて。しょうがないよ、ウェンディは抱きつき癖があるそうだから・・でも私も憎いかも・・・」

黒化×2少しやばくないかと思ってると

「ヴィータ、はやて、試験は終ったぞ。所で・・なのはとフェイトが何か言ってるが大丈夫か?」

ブツブツと呟きながら暗黒オーラを撒き散らす、二人を指差しながらはやてに尋ねると

「大丈夫や、ほっとけば治るわ。で試験の結果はどうやったんや?」

なのはとフェイトを無視・・いや・・この場合ほおって置くのが正解だから。この行動は当たっている

「今から発表しようだがその前に・・ウェンディ降りなさい」

背中のウェンディに言うと

「ほいほい、了解っす」

案外さっと離れたウェンディを見て、

（案外簡単に降りるんだな・・もう少し嫌とか言いそうな気がしたけど・・）

私はそんな事を思っていた

「それではまずはクアットロから、指揮のＡＡ－だ」

ＡＡ－・・中々凄いな

「ふふ、当然ですわ、八神兄様に指揮の取り方を教わったのですから」

と微笑み、本当に嬉しそうに笑っている

「次はチンク、陸戦ＡＡ－、本来ならプラスでも良いそうだが能力の所為でワンランクダウンだ」

だよなぁ。あの触れた金属を爆弾って厄介な能力だもんな

「むっそうか・・もう少し力を使えるようにならないといけないな」

チンクは素直って言うか向上心が強いみたいだ

「次はノーヴェ、陸戦Ａ＋。もう少し冷静に戦局を見るべきだな？」

そういうと視線をずらしながら

「私はそういうのは駄目なんだよ、周りを見るとかはどうも駄目だ、

そもそもフェンリルの能力は広域凍結だぜ?下手すれば味方ごと凍らせちまうよ」

確かにノーヴェの広域凍結ははやて並みの威力がある、だけど制御がまだ甘いから味方にもダメージが出ちまうそうだ。だから近接もやるそうだ。それと近接戦闘の方が性に合ってるのも理由らしい

「それもそうだが、私もフェンリルは使った事がある。上手く制御できれば味方に被害は出ない。ようはノーヴェの頑張り次第だな」

「判ったよ、少しは制御できるようにする」

手を振り笑うノーヴェを見てから兄貴はセッテの方を向き

「セッテは空戦Ａ＋、状況判断、戦術どれも上だが、もう少し仲間の事を考える事」

指示は出すけど、実行するのは少しきついものが多いもんな・・だけどその分正確で、的確にその状況を打破出来るから。優秀な指揮官なのかもしれない

「そうですか・・もう少し気をつけて見ます」

案外素直に頷いたと思ったが。その視線は兄貴をロックオンしてる・・なんかセッテは危険な感じがするぜ

「次はウェンディ、セッテと同じ空戦Ａ＋、だが少しは騎士甲冑モードを使え」

ウェンディのバニシングバードはボードモードと騎士甲冑の二つの

形態がある、万能タイプらしいがボードモードしか使ってなかった

「う～ん、あれはあんま好きじゃないんっすよ、でも龍也兄が言うなら仕方ないっすね、少しは使うようにするっす」

とうんうんと頷くウェンディの後ろから、ティアナが

「龍也さん、私とスバルはどうでしたか？やっぱり昇格できませんでしたか？」

不安げなティアナの頭を撫でながら

「おめでとう、ティアナは空戦ＡＡ－だ」

なっ・・一気に3ランクアップ！？なのは達も復帰して驚きながら

「冗談ですか？」

と尋ねるが、兄貴は首を振りながら

「いや、本当だ。ティアナは3ランクアップでＡＡ－。更に登録を陸戦から空戦に変更になった。良かったな、おめでとう」

信じられないと言う表情から笑顔になり

「本当ですか！？やった！ありがとうございます。龍也さんの訓練のおかげです！！！」

兄貴に抱きついて喜ぶティアナ・・今回くらいは良いかと思うが

「すすすまん。離れてくれ」

真っ赤になって離れるように言う兄貴。つうか兄貴はそういう耐性が低すぎる

「嫌です」

即答し離れる気配の無いティアナに

「てい！」

ガスっ！

「はうっ！！」

はやての手刀が命中し、鈍い音を立てる、涙目でうずくまるティアナと

「はぁ・・」

肩で息する兄貴・・つうか私が抱きついても平気なのに、スバルとティアナが駄目な理由は何だ？

「はぁ・・はぁ・・最後はスバル、４ランクアップの陸戦ＡＡ＋だ・・」

「・・・・はぁっ！！！４ランクアップ、嘘だろ！！」

私は思わずそう叫ぶと

「話しは最後まで聞け、だが私の権限で1ランクダウンでＡＡ－にした。理由は・・ガシッ！！」

思い当たる伏しがあるのか逃げようとした、スバルの頭を鷲掴みにし

「私は言ったよな?デバイスの能力に任せて突貫するなと・・」

ああ、納得したぜ・・兄貴に何度も言われたもんな

「ははははは。はいそのととおりです・・・」

ガクガク震えながら頷くスバル、この角度からは見えないが兄貴はきっと怒ってる

「良いか?次あんな事をしてみろ・・・クイントさんに連絡するぞ」

顔が一気に青褪めるスバル。確か死んだはずの母親が生きてたとか・・まぁ兄貴が助けたそうだけど

「はい、わわわ判りましたから。お母さんには言わないで下さい」

よっぽど怖いんだなと思ってると

「さてと・・じゃあ六課に帰るか・・ベヒーモスセットアップ」

黒塗りの大型バイクが姿を見せる

「はやて、ヴィータ行くぞ、バイクで帰るんだろ?」

ヘルメットを投げわたされる・・それを被りサイドカーに乗り込むと

「「うう・・良いな・・」」

なのはとフェイトが言うがセッテも羨ましそうに見ている

「今度の休暇にでも乗せてやる、ほらフェイトは車の運転を頼むぞ」

兄貴はそう言うとバイクに乗り

「はやて、乗れ行くぞ」

「了解や」

はやてがタンデムシートに乗った所でベヒーモスで走り出した

第６１話に続く

## 第６０話（後書き）

どうでしたか？魔導師ランクの更新に重点を置いた話です。
やっぱり龍也を撃墜したんですから、何時までもＢランクはおかしいというコンセプトの話です。

楽しんで貰えたら作者は嬉しいです

## 第６１話（前書き）

最近・・感想が少なくて少し寂しいです・・また弱気の虫が出てきました・・
やはり私の小説は面白く無いのでしょうか？その不安と戦いつつこの話を作りました・・（関係性は無いですよ？）

今回は子煩悩な龍也とでも言いましょうか・・ヴィヴィオとキャロがメインです
少し自信を失いかけていますが・・頑張って執筆していきます

# 第６１話

第６１話

「う～ん、風が気持ち良いなあ・・」

ベヒーモスで六課に向かっていると、はやてが楽しそうに言うが

「落ちたら、危ないからしっかり捕まっていろ」

はーい、と返事をし確り捕まってくるはやてに

（はやては平気なんだがなぁ？どうしてスバルとティアナは駄目なんだ？）

何故かスバルとティアナには妙な苦手意識があると思いながら、ベヒーモスを加速させた

「おおー、風が気持ち良いぜ」

サイドカーのヴィータが気持ち良さそうに言うのを見ながら、ミラーでフェイト達の車を見るが

「・・・なんだ？目の錯覚か・・？」

フェイト達の車は妙に黒く感じた、その頃車の中では・・

「はやて（ちゃん）・・・」

「豆狸～！」

「部隊長・・・・」

フェイト、なのは、セッテ、ティアナが嫉妬の炎を燃やしていた

「・・・チンクさん。どうして龍也さんはあんなに鈍感なんでしょう？」

「知らん。むしろ私が聞きたいくらいだ」

スバルとチンクが話す中

「私は無理っす・・ガクっ！」

「おい、確りしろ、ウェンディ！」

その黒い空気に耐え切れず気絶した、ウェンディの頬を叩くノーヴェの姿があった

「ふふふ、さてさて誰が八神兄様を落とすんでしょうか？」

と楽しげに微笑むクアットロ、車の中は混沌としていた

う～ん、最高やね、バイクの後ろの乗るのってこんなに気持ち良いんやね。

「着いたぞ、はやて降りろ」

六課に着いたらしく降りろと言うので、正直名残惜しいけど降りる事にした

「気持ち良かったな・・これ癖になりそうだ」

ヴィータが背伸びしながら言う、でも確かにその通りやな、なんかバイク乗る人の気持ちが判ったわ、そんな事を話してるとフェイトちゃん達が乗った車が来る、一瞬凄まじい殺気を感じたがそのまま車は駐車場に行った

「フェイト達も来たか、しかしスバルとティアナは驚いたな」

と言い笑いかけて来る兄ちゃんに

「そうやね、いきなり3ランクアップは驚いたわ」

3ランクアップは正直驚きだ、確かに兄ちゃん特製のリストで魔力も増えて、訓練で能力が上昇したがいきなりＡＡ－は驚いた

「まぁ、それだけの才があったという事だな」

と笑ってる兄ちゃんの手を握る、良く見るとヴィータを同じように手を握っている

「どうした？」

急に手を握られ困惑する兄ちゃんに

「食堂に来るように言ってあんだ、此処で待ってる必要は無ぇ、だから食堂に行こうぜ」

ヴィータがそう言い歩き出すので私もそれに合わせて歩き出す。私とヴィータが兄ちゃんを引っ張る形になっている

「ああ、判った、判ったから引っ張るな」

と言うがそれを無視して引っ張り、兄ちゃんを食堂に連れて行く間にヴィータと念話で

（どうしたんや？急に兄ちゃんの手握って？）

（ううー昨日のあれ思い出して、恥かしくなったけど嬉しかった、だから兄貴が他の女を持つのを見たくなかった）

思い出したのか顔を背けるヴィータを見ながら

（やっぱヴィータも独占良く強いなぁ・・まぁそれは私も同じやけど）

そう思い兄ちゃんに見えない角度で笑う、自分でも判ってる独占欲が強いのはでもそれは仕方ないと思う

何せ小さい頃から一緒にいてくれて、護ってくれた人を好きにならないのはおかしい。

（やっぱ・・私は兄ちゃんが大好きや）

私はそう思いながら、ヴィータと一緒に兄ちゃんを食堂まで引っ張

って行った。その間背後から殺気を感じたが無視することにした

「あっ、お父さんです」

キャロの声で食堂の入り口を見ると、部隊長とヴィータさんに引っ張られながらお父さんが来ました、

「お。エリオ達か。試験終ったで、もう直ぐ皆来る筈や」

席に着きながら教えてくれますが、聞かなくても判ります、だって黒い気配が徐々に近付いて来てますから

「怖いです・・」

キャロは怖いと言ってます、僕も怖いですが大分慣れました

「何が怖いですか？アギトちゃんは判りますか？」

「判んねぇ・・何が怖いんだ？」

この気配が判らない、リィンさんとアギトさんは羨ましいです、あっ！でもルーちゃんも平気そうな気がします（ルーテシアもリィン達と同じでこの気配には気付きません）そんな中フェイトさん達が来ます

「ひっ・・」

思わず悲鳴が出そうになります。黒オーラのフェイトさんを先頭に

なのはさんとティアナさんとセッテさんが来ます。その後ろからは困惑した顔のスバルさん達と笑ってるクアットロさん・・どうしてこのオーラの中で笑えるのでしょう?今度聞いてみましょう

「フェイト達も来たか、座ったらどうだ?」

お父さんは凄いですね、何故何事も無い様に微笑む事が出来るんでしょう?

「そうですね・・座りますよ」

フェイトさん達が座りますが、その視線は部隊長とヴィータさんを捉えています。部隊長は気にした素振りを見せません、凄いです

「なぁなぁ、ランクはどうだったんだ?」

アギトさんが笑いながらお父さんに尋ねると

「チンクとクアットロ、それにスバルとティアナはＡＡ－、ノーヴェとセッテそれにウェンディはＡ＋だ」

それは凄いです、一気に3ランク近く上がるなんて、僕もＡランクになれるでしょうかと考えてると、

ぽふっ

お父さんが僕の頭を撫でる。同じようにキャロも頭を撫でられている

「エリオもきっとＡランクになれる。もちろんキャロもだ。だがまだ早い、ゆっくり焦らず地力をつけような」

と微笑むお父さんに

「「はい！」」

僕とキャロは元気良く返事を返した

「大丈夫だ私が保証する、二人もきっとAランクになれる、でも今は駄目だ二人には早すぎる」

多分僕達はもうAランクに合格するくらいの力があるんだろう、だけどまだ早いと判断したから、僕とキャロは本局に連れて行ってもらえなかったと理解した、その頃視界の隅では

「豆狸、この場で処刑してやりましょう」

「っは！私は仮にもベルカの騎士や、広域殲滅だけが武器と思わんで」

ダガーをスタンバイする、部隊長・・広域殲滅に近接も出来るってどんな規格外・・あっ違うもっと規格外な人が居るや

「ん？どうした」

紅茶を啜るお父さんを見る、多分部隊長が強いのはお父さんの影響だろうなと思ってると

ガキン！

セッテさんに弾き飛ばされた、ダガーがお父さんに飛んでくる

「んっ？パシ・・危ないな」

指で挟み何事も無い様にそれをテーブルの上に置く。次々飛んでくるがそれを見ずに掴み置く。凄いな僕も出来る様になるだろうか？

「ふむ・・フェイト紅茶のお代わりを頼む」

カップをフェイトさんに渡す

「うん、判った」

直ぐに淹れ手渡し、それを飲み

「ダージリン・・良いな私が好きな奴だ」

上機嫌にそれを飲みながら何かの書類を見るお父さんに

「何を見てるんですか？」

気になり尋ねると

「秘密だ。だが必要な物に間違いは無い、・・・・はやて達もそろそろ座ったらどうだ？」

乱戦中の部隊長に言う、良く見るとウェンディさんが巻き込まれてダウンしてる。それをノーヴェさんとチンクさんが回収。その間も部隊長とセッテさんの乱戦・・いやティアナさんとなのはさんも居る、・・・・どうしてこうなるんでしょう、僕は判りません

でもそれより判らないのは

「「「「はーい」」」」

お父さんの一声で争いを止める部隊長達でした。

「さてと・・チンク達はこれ纏めて出すように」

お父さんはチンクさん達に書類を渡してる

「試験での反省点と直すべき所？」

多分中身は僕達と同じレポートだろう。今日はお父さんに訓練をして貰ったので、僕も提出しないといけない

「そうだ、明日の昼までに提出してくれ、判らない所は聞きに来てくれれば良い。私は自室に居るから」

そう言って自室に戻っていくお父さんだが、その背後では

「では早速聞きに行きますか・・ビンッ！！・・何をするんです豆狸？」

足元に投げられたダガーが突き刺さる

「最初から聞きに行かんで、少しは考えるべきやと思うで？兄ちゃんは優しいけど、判るのに判らない振りなんてすれば怒るで？」

左手にダガーを持ち笑う部隊長。と少し考える素振りを見せるセッテさん

「そうですね・・いきなり聞きに行くのも何ですね。ありがとうございます、はやて」

初めてセッテせんが部隊長の事を名前で呼びましたね、普段は豆狸か禁止ワードですから

「まぁ、どうしても判らんかったら聞きに行けば言いやろ。場所はスバルかエリオに聞いてな」

立ち上がりダガーを回収しながら自分の部屋に戻って行く、部隊長・・服の中にダガーを入れるのは危なくないのかな？

「すまんがエリオ、私達を仕事をする部屋に、案内して貰えないだろうか？私達はまだ此処に詳しくないんだ」

チンクさんに言われたので

「判りました、こっちです」

僕とキャロで仕事部屋まで案内しました、部屋に着くと直ぐに宛がわれた机に座り、作業を始めたチンクさん達を見て

「エリオ君、私達もレポートを纏めないと」

キャロに言われて、僕も自分の机に座り

「そうだね、ちゃんと纏めないとお父さんに怒られちゃうもんね」

からかうように笑う、お父さんがそんなことで怒る人ではないのは

判ってる。どこまでも優しいお父さんが僕は大好きです
互いに笑いながら自分のレポートを纏め始めました。スバルさん達も同様です。さぁ・・張り切っていきましょう！
僕はそう思いながら、訓練での反省点と次に置ける目標をレポートに纏め始めた。

「パパ。お帰り～」

自室に戻るとヴィヴィオが出迎えてくれた、最近はますます懐かれてこの部屋に居る事が多くなっている、

「ただいま、ヴィヴィオ」

寄って来るヴィヴィオの頭を撫でると、えへへ～と笑い目を細める姿は昔のはやてを連想させる

「ヴィヴィオね、パパにプレゼントがあるの」

後ろ手で紙を持ったヴィヴィオが笑う

「何かな？」

頭を撫でながら尋ねると

「えへへ、はい！ヴィヴィオからパパにプレゼント！」

差し出されたのは

「これは・・私か」

クレヨンで書かれた私の絵に、その下にやさしいパパと書かれていた

「えへへ～、ヴィヴィオ頑張ったの！」

可愛らしく笑うヴィヴィオを抱き上げる

「ありがとうヴィヴィオ、大切にするよ」

抱き上げてヴィヴィオの目を見て言う

「うん！大切にしてね！」

元気良く笑うヴィヴィオを降ろしてから、渡された絵を壁に張る。
とても嬉しいと思い。戸棚からクッキーを取り出す（自家製）

「ヴィヴィオ、クッキー食べるか？」

と尋ねると飛び跳ねながら

「食べる！食べる！ヴィヴィオパパのクッキー大好き！！」

飛び跳ねるヴィヴィオを椅子に座らせて、牛乳と一緒にクッキーの
入った皿を机に置く

「いただきまーす！」

笑顔でクッキーを食べ始めたヴィヴィオを見ていると

コンコン

ノックと共に

「すいません、お父さん今良いですか？」

キャロとフリードが部屋の中に入ってきた、その手にはレポートがある

「キャロか・・判らない所でもあったか？」

「いえ・・終ったので持って来たんです」

「きゅく」

キャロがレポートを渡すと同時にフリードが前足を上げる。それを受け取りながら

「良し良し、頑張ったな。クッキーがあるからキャロも食べると良い」

頭を撫でながらクッキーを食べるように言うと

「ありがとうございます」

椅子に座り、ヴィヴィオと共にクッキーを食べるキャロを見てると

「きゅう」

私のズボンの裾を加えて何を言いたそうにするフリードに

「判ってるよフリード、牛乳で良いか？」

立ち上がろ冷蔵庫の前でフリードに言うと

「きゅくっ！」

前足を上げるフリードを見て、牛乳で良いと判断しフリード用の皿に牛乳を入れ、それをフリードの前に置く

「きゅう～」

頭を下げるフリードの頭を撫でてから、キャロのレポートを見る、色々書いてあるが要約すると

反省点は・・スフィアに怯えてしまった事・・これは慣れるしかないな

目標は時間ギリギリではなく、もう少し余裕を持ってタッチできるようになるだ。うん良い目標だ、キャロなら出来る様になると思いレポートを閉じる

「どうですか？」

不安げなキャロの頭を撫でながら

「完璧だ、流石だな」

褒めると嬉しそうに笑いながら

「ありがとうございます」

と笑うキャロと暫く話をしてると

「あの・・お父さん覚えてますか?その・・服を作ってくれますか?って言ったのを」

おずおずと尋ねて来る、キャロの頭を撫でながら

「ちゃんと覚えてるよ。はやての許可は貰ったのか?」

はやての許可を貰ったら作ると約束したが、どうなったんだろうかと思い尋ねると

「はい!部隊長から許可を貰えました!!」

嬉しそうに笑いながらキャロが言うと

「パパは服も作れるの?」

目が輝くヴィヴィオに

「作れるよ、ヴィヴィオにも作って上げようか?」

頭を撫でながら笑うと

「うん!ヴィヴィオもパパの服欲しい!!」

笑うヴィヴィオを見て笑ってると

「それで、デザインを書いてみたんです」

差し出された紙を見る

「キャロはこういうのが好きなのか」

バリアジャケットの様な民族衣装の流れを汲んだ、フリル付きの服のデザインが書かれていた

「はい！それでこういうのは作れますか？」

そう尋ねて来るキャロを見ながら、立ち上がり棚の中身を確認する

「えーと。生地もあるし・・うん・・大丈夫だ。今からでも作れるがどうする？今から作るか？」

生地を取り出しながら尋ねると

「はっ、はいお願いします」

早速服を作る作業に取り掛かった

「キャロすまないが、こっちに来てくれ」

キャロを呼び、メジャーでサイズを図るが・・

「少し恥かしいです・・」

恥かしいと言うので素早くサイズを測り終え、紙に書き起こしていく

「良し・・サイズは全部判ったぞ。後はクッキーでも食べてると良い」

「判りました。凄い楽しみです」

ヴィヴィオと共にクッキーを食べ始めた、キャロ達を見ながら作業に取り掛かった

型紙にデザインを書き、布に書き写していく、白の布でベースの型を取り、次にピンクと青の生地でアクセントになる部分の形のデザインを書いていく・・

「わぁ・・凄い」

キャロの驚きの声を聞きながら、次に布をサイズ通りに切って行く

「ふむ・・次は針と糸か・・」

裁縫箱を取り出し縫う準備をし、仮縫いを始める

布を縫い上げていく、布は徐々に服の形を形作っていく

「凄い・・パパはやっぱり凄いんだ」

ある程度仮縫いが終った所で

コンコン

ノック音がしてから

「八神少し良いか?・・何してるんだ?」

チンクが入って来て困惑する

「何って・・服作ってるんだが?どうした?」

スタンドにキャロのデザインした服を作りながら、チンクに尋ねると

「いや・・レポートが終ったから来たんだが・・あれからずっと作っていたのか?もう夜だぞ」

そう言われ、窓の外を見ると既に日が暮れていた

「もう夜か・・全然気付かなかった・・そう言えば腹が空いてるな」

どうやら服を作るのに集中しすぎた様だ

「そういえばそうですね。お父さん食堂に行きましょうよ」

キャロも見てるのが楽しかったようで、時間を気にしてなかったようだ

「そうだな・・食堂に行くか・・チンクも来るか?」

ヴィヴィオを抱き上げ。肩の上に乗せながら尋ねると

「そうだな。私も一緒に行こうか」

チンクとキャロと共に食堂に向かって行った

八神は一つの事に集中すると周りが見えなくなるからいかんな、私が行かなかったら多分完成するまで作業していただろう

「後どれくらいで出来ますか？」

食堂を目指しているとキャロが八神に問いかける

「そうだな・・2～3日っといった所だな」

そう言い微笑む、八神の顔はとても穏やかな物で私が余り見た事のない表情だった

（私はやはり八神の事を何も知らんな・・こんどはやてにでも聞いてみるか）

そんな事を思いながら、食堂に行くと

「ううー頭痛いっす・・」

机に伏せ呟くウェンディと

「おいおい、確りしろよ。まだ半分も出来てないぞ」

机の上でウェンディのレポートを確認する、ノーヴェに

「えっと・・これで良いですか？」

クアットロにレポートを見せながら、尋ねるセッテ。

「えーとですね・・ふんふん・・これで良いと思いますわ」

クアットロは指揮を学んでいる為、こういう時の書類の整理は早い

「皆頑張ってるようだな・・うん良いことだ」

そう笑いノーヴェの隣に腰掛ける、当然ヴィヴィオとキャロは八神の膝の上だ。八神は子供好きだからなと思い、私も椅子に腰掛ける

「うん？何だ龍也じゃねぇか。如何したんだ？」

気付いたノーヴェが笑いながら尋ねると

「夕食を食べるのを忘れていた・・だから今から3人で食べようかと思って。ヴィヴィオとキャロは何にする？」

「うーんとね・・ヴィヴィオ。パパと同じの食べる！」

膝の上で楽しげに笑う、ヴィヴィオと

「私も・・お父さんのと同じので良いです・・」

真っ赤ながらそう言うキャロ。八神は本当に子供に好かれるようだ

「私と同じで良いのか？」

八神は二人に確認を取る

「はい、（うん）！」

笑顔で頷く二人を見て、苦笑しながら

「それじゃあ、貰ってくるから降りてくれるか？」

膝の上に居る二人に降りるように言うと

「いや（です）」

首を振る二人に

「退いてくれないと取りに行けないのだが？」

「いや（です）」

降りる気ゼロの二人を見て苦笑しながら

「クアットロすまないが、とって来て貰っても良いか？」

メニューを指差しながら言うと

「良いですよ～」

ニコニコ笑いながら、料理を取りに行ったクアットロを見ながら

「ヴィヴィオは八神が好きか？」

気になったので尋ねてみると

「うん！ヴィヴィオパパ大好き！暖かくてぽかぽかするの！」

と笑うヴィヴィオはとても可愛らしい

「それでは私は好きですか？」

セッテが尋ねると

「ヴィヴィオね！皆大好き！でもパパが一番なんだよ！」

笑うヴィヴィオと

「私も・・その・・お父さんが大好きです・・本当のお父さんだったら良いです」

指をチョンチョンとしながら言うキャロの頭を八神が撫でながら

「うんうん、二人に好かれて私はとても嬉しいよ」

微笑み笑うその姿は、何処までも優しく包み込む暖かさがある・・

私・・いや姉妹は皆これに心を奪われたのだ。

クアットロが3人分のトレーを持って来て、食事をしている間も、

その穏やかな空気は消して消える事無かった

「さてと・・食事も終わった事だし、私はもう寝るとするよ」

ヴィヴィオとキャロを一度降ろし立ち上がってから、ヴィヴィオを

肩の上に座らせる

「書類は明日で良いからな？チンク達も休めよ？無茶は体に良くないからな」

と笑いキャロの頭を撫でながら

「又明日なキャロ、そうだ。部屋の前まで送ろう」

「あっ・・ありがとうございます！」

頭を下げるキャロを肩に担ぎ軽き出した八神を見ながら

「龍也兄って、子供好かれるっすね」

しみじみ呟くウェンディと

「龍也なら保父に成れるな、むしろそれが天職の様な気がするぜ」

ノーヴェがレポートを片付けながら言うと

「そうですね～八神兄様なら。良い保父さんになれそうですわ～」

と笑うクアットロ達と共に自分達の部屋に戻って行った。

こうしてチンク達の六課での初日は終わりを告げた

第６２話に続く

## 第６１話（後書き）

次回は再び、軽いバトルとネクロの幹部の話です・・

さてさて・・ネクロの幹部のモデルが判る人はいるかな～それが少し楽しみです

それでは少しの間失礼致します

感想レビュー常時お待ちしています・・感想が来るたびに、作者のテンションが上がるので感想が来る事を楽しみにしています

## 第６２話（前書き）

総合評価とおきに入りの数は増えていますが、感想が少なくて少し寂しいと思う
混沌の魔法使いです。最近は感想も余り来る事が無く、寂しいです
読者からの面白いというコメントは、作者のやる気に大幅に影響しますから・・

ですので感想や誤字脱字の報告は常時お待ちしています

今回もアイデア募集で来た技を使います
鳴神様が見ていてくれる事を期待しています

それでは本編始まります

# 第６２話

朝の演習場で戦う、シグナムと龍也の姿があった、今日は隊長陣の訓練の日だ。なのは、フェイト、はやてが終了し残るはシグナムとヴィータだ。はやて達はへたり込んで息を整えている。その様子を横目で見ながらシグナムを挑発する

「どうした?その程度では私には届かんぞ?」

からかうように笑う私に

「笑っていて、良いのですか!」

横薙ぎにレヴァンティンを振るうが

ガキーン!

足で受け止めそれを軸に後方に飛ぶ

「戦いは常に冷静に、心は熱く頭は冷たくだ」

とんとんと頭を叩きながら笑う。今の私はデバイスを使わず魔力で自身の体を強化してるだけだ

「ふっ!言ってくれますね兄上・・私だって強くなってるんですよ!」

「!?!?」

空間が爆発し凄まじい勢いで肉薄してくるシグナムに、直感で後ろに飛ぶ

「むぅ・・服が・・」

シグナムの一撃は私の服を切り裂いていた、当たってはいない・・これは純粋な抜刀により起きたカマイタチか・・

「兄上・・いい加減。真面目にやってくださると嬉しいのですが?」

どうやらシグナムを甘く見ていたようだ

「いや・・全くその通りだ・・此処からは真剣にやるとしよう」

天雷の書をブレイクで起動し、右足でリズムを取りながら

「行くぞ?一瞬たりとも気を抜くな」

「望むところです」

その瞬間私とシグナムの姿がぶれ、レヴァンティンと私の拳がぶつかった

「ふっ!」

短い呼吸と共に上段から振り下ろされる一撃を

「はあっ!」

篭手から発生させた魔力の爪で受け止め

「喰らえっ！」

シグナム目掛け爪を振るうが

「そう簡単には！」

即座に切り返し、私の爪を受け止め、

「せいっ！」

蹴りを繰り出してくるが

「甘いぞ！シグナム！」

左の爪で蹴りを受け止め、反撃で踏み込むと同時にシグナムの鳩尾を蹴り吹っ飛ばす

「ぐうっ・・」

苦しげな呻き声を上げ、蹲るシグナムに

「はあっ！」

追撃に大きく踏む込み爪を振るうが

「・・掛かりましたね」

にやりと笑うシグナムが見える、しまった罠か！

「カートリッジロード！」

レヴァンティンから薬莢が飛び出し

「スパイラルマスカレードッ！！」

高速での斬撃が迫る、それは螺旋上の斬撃だった。反射的に爪を動かす

ガキン！ガキン！

二発受け止めたが・・其処までだったシグナムの全力は的確に私を捉える

「ぐぅッ・・・」

螺旋状の斬撃は的確に私にダメージを与えて行き

「これで決まりだ！」

全力の横薙ぎの一撃を喰らい、吹っ飛ばされる

「ぐふっ・・」

吹っ飛ばされるが途中で強引に体勢を立て直し、ビルを蹴りそのまま

「ブレイブトルネード！！」

高速で回転し発生させた竜巻と共にシグナムに体当たりを仕掛ける

「!?・・当たりません!」

一瞬驚愕の表情を浮かべるが、冷静にサイドステップで回避する、

だがそれが狙いだ

「甘い!はあああああっ!」

ブレイブトルネードはブラフ・・本命はこの大出力殲滅魔法だ!両手から魔力と共に炎を発生させそれを一つに纏め上げる

「不味い!レヴァンティン!」

『パンツァーガイスト』

シグナムを魔力光が包むが

「喰らえっ!!ガイア・・・フォースッ!!!!!!」

放たれると同時に強大化する、巨大な火の玉

「くっ・・・・」

シグナムが苦しげに呻き、ガイアフォースを受け止めるが、徐々にパンツァーガイストがその効力を失い

「っ・・ぐあああああっ!!」

ガイアフォースに吹っ飛ばされ、ビルに突っ込みかけるシグナムを

「っと・・」

回り込み受け止める・・・お姫様抱っこで

「負けましたか・・」

腕の中で寂しげに呟く、シグナムを降ろすと

「兄上、次は必ず勝って見せますからねっ！」

そう気合の入った声で言うと、はやて達がいる方へ歩いて行く。それと入れ違いで

「うっしゃああっ！次は私だ！」

アイゼンを振りながらヴィータが姿を見せる

「さてと・・次はヴィータか。ならこれだな」

騎士甲冑を一度解き、天雷の書からデバイスを呼び出す・・呼び出すのは

「アイゼン！セットアップ！」

ヴィータの物と瓜二つな大型槌を肩に担ぐ、騎士甲冑は赤塗りの重厚な物だが

「！・・そんな事も出来んのか・・凄いな」

驚くヴィータに

「ふふ、これならヴィータにも意味があるだろう？」

アイゼンを担ぎ笑う。槌という武器は強力だが使い手を選ぶ。スバルやシグナム達と違い独学で強くなるしかない。なら私も同じ槌を使えばヴィータにも良い経験になると考えたのだ

「成る程・・私に為ってか・・へへ・・兄貴ありがとうよ」

同じようにアイゼン担いでいたがそれを構え直し

「でもよ・・槌なら私の方が分が在るぜ？」

「それは判らんぞ？いつも近くでヴィータの戦い方は見てたんだぞ？」

と笑うと真っ赤に成るヴィータ、？何か変な事を言ったか？

「ええい。兄貴行くぞ！」

アイゼンを構え突撃してくるヴィータに合わせ、私も大きく踏み込みアイゼンを振るった

ええい！顔が赤くなるのが判るぜ！なんで兄貴はああ鈍感なんだ！

「おりゃあっ！」

それを誤魔化す為にアイゼンを振るうが

「はッ！」

短い気合と共に兄貴のアイゼンと私のアイゼンがぶつかり、火花を散らす

「ふむ・・やはり槌ではまだヴィータに分があるか・・」

と楽しげに笑い、バックステップで距離を取る、追撃に踏み込みアイゼンを振るう

「おっと・・危ない危ない」

跳躍し軽々回避し微笑む兄貴だが、その目は真剣だ

「さてと次は此方から行くぞ」

上段からアイゼンを振り下ろして来るのを回避するが

「せいっ！」

振り下ろしたアイゼンを軸に体を反転させて蹴りが向かってくる

「うおっ！」

反射的に受け止める。流石兄貴だな・・こんな連携今まで考えなかったぜ・・

「ふむ・・今ので一撃入れるつもりだったのだが・・流石だなヴィ

ータ」

パチパチと手を叩く兄貴に

「その余裕も長くは無いぜ。一撃入れて言うこと聞いて貰うんだからな！」

はやて達も一撃入れる事は出来なかった、シグナムは一撃入れたがあいつは兄貴に頼む事は無いだろう。なら私が一撃入れてやる

「行くぜっ！カートリッジロード！」

ハンマーヘッドの片方が推進剤噴射口に、その反対側がスパイクに変形する

「行くぜ！ラケーテンハンマーッ！！！」

高速回転しながら兄貴に迫るが

「喰らう訳にはいかんな・・ならば・・カートリッジロード！」

同じように兄貴もアイゼンを変形させ

「ラケーテンハンマーッ！！！」

同じように高速回転し技を放つ

ガキーンッ！！！！

「ぬうっ！」

兄貴が苦しげな声を出す、同じ技でも使った回数が違う！兄貴のは威力が低い！同じ技を使う私にははっきり判る

「行っけぇぇッ！！！」

全力でアイゼンを振るう

「くっ・・」

力負けして吹っ飛ぶ兄貴に

「続けて行くぜッ！！」

まだ兄貴にもはやてにも教えてない、私の新必殺技

「雷帝降臨！！」

アイゼンを覆うように電撃が発生する、最近私にも魔力変換が出来るようになった。

「トールハンマーッ！！！！」

電撃を纏ったままアイゼンを振り下ろす

「なっ！プロテクション！！！」

兄貴がプロテクションを使うが

「無駄だぁぁッ！！！」

この電撃にはバリアブレイクの術式が組まれてる、幾ら兄貴のプロテクションも意味が無い。アイゼンは簡単にプロテクションを砕き

ズドーンッ！！！

稲妻と共にアイゼンが兄貴に命中した

「おっしゃあッ！」

文句なしで一撃入れた事で歓喜の声を上げると

「痛たた、くぅ・・何時の間にあんな技を覚えたんだ？」

兄貴が起き上がりながら尋ねて来る、ちょっとやりすぎたかな？兄貴凄い痛そうだ

「へへ・・最近な・・電撃の魔力変換が出来るようになったんだぜ」

手を上げるとパチパチと帯電音がする

「凄いな・・所ですまないが肩を貸してくれ」

申し訳無さそうに言う兄貴に

「どうしたんだ？兄貴。立てないほどダメージがあったのか？」

不安になり尋ねると

「いや・・感電して動けないんだな。これが」

頭を掻きながら笑う兄貴は子供見たいで、可愛いと思ったのは私だけの秘密だ

「おお～ヴィータ何時の間にあんな技を」

モニターで見ていたがさっきの技は凄かった、電撃付きのハンマーかぁ～兄ちゃんのプロテクションを簡単に砕いた事に驚いた、なにせラグナロクブレイカーも耐えたプロテクションだ。その硬さは折り紙つきだ

「ああ～ヴィータちゃん！！なんて羨ましい事を！！」

なのはちゃんが突然そんな事を言ったのでモニターを見ると、ヴィータが兄ちゃんに肩を貸して歩いて来ていた。多分感電して動けないのだろうと私は推測した、

「龍也。どうしたの？」

フェイトちゃんが兄ちゃんに近寄りながら尋ねると

「ああ、感電してて、足にも腕にも力が入らないんだ」

からからと笑う兄ちゃんだが、そこまでのダメージがあったんかと驚いた

「はやて。ちょっと手伝ってくれ。私一人じゃ、兄貴支えられないんだ」

苦しそうに言うヴィータに頷き、二人で兄ちゃんを支える

「すまんな、暫くすれば歩ける様になると思うんだが」

と笑う兄ちゃんとなのはちゃん達と一緒に食堂に向かった

「お父さん、如何したんですか？」

食堂に入るなり、エリオが驚きながら尋ねて来る

「ヴィータの新しい技を喰らってな、体が動かないんだ。ああヴィータ此処で良い」

空いてる席にヴィータと共に兄ちゃんを座らせる

「ふう～。凄い威力だったな。此処までダメージがあるとは思わなかった」

苦笑する兄ちゃんに

「どんな技だったんですか？龍也さんが此処まで動けなくなるなんて」

スバルが笑いながら兄ちゃんに尋ねる

「稲妻と共にアイゼンでの一撃だな。凄い一撃だったよ」

兄ちゃんの説明に頷いてるスバルを見てると

「兄貴、持って来たぞ」

ヴィータが兄ちゃんのトレーを持って来て、兄ちゃんの前に置くが

「ありがとう、ヴィータ」

笑いながら箸を持つが。ぽろ・・兄ちゃんの手から箸が零れ落ちる

「む・・まだ指に力が入らんか」

困ったように笑う兄ちゃんに

「しょうがないな。私が食べさせてやんよ」

ヴィータが箸を掴みながら言うが

「「「異議あり!!!」」」

なのはちゃん達が待ったをかける

「私がやるよ」

「いえいえ。隊長達も疲れてるでしょう。此処は私がやりますよ」

「龍也、ほら早く食べないと落ちるよ?」

フェイトちゃんが抜け駆けするが

「ていっ!」

バシッ！

私がその手を叩いて妨害する

「はやて・・何するの？」

「兄ちゃんには私とヴィータが食べさせるで、邪魔しんでくれる？」

私達が睨み合ってると

「パパ、ヴィヴィオが食べさして上げるよ！」

ヴィヴィオがフォークにおかずをさして笑うが

「ありがとう、だけど」

笑うとヴィヴィオを抱え上げて

「もう痺れは取れたよ。だから大丈夫だよ」

ヴィヴィオを膝に座らせて、自分で食べ始めた兄ちゃんを見て

「「「惜しい事をしたよ」」」

がっくりと項垂れる、なのはちゃん達を見ながら私も食事を再開したが

（惜しかったなぁ・・堂々と間接キスするチャンスやったのに）

惜しい事をしたと後悔しながら食べた食事は少し味気なかった

「ヴィヴィオ、あ～ん」

膝の上のヴィヴィオの口に箸を持って行く

「あーん」

笑顔でもぐもぐと口を動かすヴィヴィオはとても可愛らしかった事を追記しておく

「ヴィータとシグナムに一撃貰ったから、私は何をすれば良い？」

食事を終えた所で二人に尋ねると

「私はそうだな・・兄貴又膝枕してくれ」

膝枕か・・ヴィータは随分気に入ったみたいだ

「私はそうですね、少し考える時間を下さい」

考える時間を下さいというシグナムに頷き

「ヴィータは本当に膝枕で良いのか？」

確認を取るとそれで良いと頷くので

「判ったよ。では今度な」

そう言いヴィヴィオと共に自室に戻った

「むにゃむにゃ・・・パパ大好き～」

自室に戻るとお腹が一杯になった所為か眠ってしまった、ヴィヴィオの頭を撫でてから、キャロの服を作り始める

「しかし・・少しは心を開いてくれたという事かな？」

大分完成したので作業を止めて、私はそんな事を感じていた。キャロは少し皆と一線引いてる気がする・・理由は判ってる

「ヴォルテール・・アルザスに棲む守護竜と呼ばれる竜か・・恐れてるんだろうな・・自分が皆を傷つけるんじゃないかと・・」

フェイトから話しは聞いていた、制御出来ず暴走させてしまい、そして村を追放された・・私はその話を聞いた時怒りを覚えた・・大人が子供に全ての責任を負わせ、村から追い出す・・まだ小さな女の子に何故そんな事が出来るんだ！子供は大人が護る物なんだぞ

「何とかしてやりたいな・・・」

子供は甘える物だ、例え魔導師として活躍していてもそれは変わらない・・なんとかしてやりたいと思ってると

「龍也今良いか？・・そんなに考え込んでどうしたんだ？」

入ってきたノーヴェが心配そうに尋ねて来る・・いかんなそんなに考えてるように見えたのか

「いやな・・キャロとエリオの事なんだがな・・どうすればもう少し子供の様に甘えてくれるか考えてる」

そう言うとノーヴェも

「成る程ね・・ヴィヴィオ見たいに甘えて貰うにはどうすれば良いのかって事か」

理解したのか椅子に座り考え始める

「そうだな・・ケーキとか作ってやるのはどうだ?」

「いや・・それは前やった」

二人でああでもない、こうでもないと話してると

「ん?おい。龍也これ見ろよ」

二人のプロフィールの一文を指差す

「んっ・・これは」

其処に書かれていたのは、キャロとエリオの誕生日の事だった。エリオの誕生日まで後二日・・キャロは更にそれの二ヶ月後だ

「誕生日・・そうだ!これだ!!」

誕生日という事で二人を連れて遊びに行こう・・仕事?関係無いな。二人の方が今は重要だ

「おい。龍也どうしたよ・・きゃっ・・」

此方を覗き込んできたノーヴェを抱き抱える

「ノーヴェ、お前は天才だ。そうだ・・これだ！」

抱き抱えたノーヴェの頭を撫でながら、絶賛する。どうして気付かなかったんだ。誕生日を祝って貰って喜ばない子供は居ない

「放してくれ～」

「おっとすまん」

真っ赤に成って呟くノーヴェを降ろし

「これで行くぞ！早速はやてに許可を貰いに行って来る！」

真っ赤に成ったノーヴェをそのままにはやての部屋に駆け出した

「あう・・あう・・龍也に抱きしめられたなんて・・きゅう・・」

残されたノーヴェが目を回して倒れた事を私は知らなかった・・

「チンクさん達は優秀やね・・なのはちゃん達にも負けず劣らずって所かな～」

と笑いながら書類を纏めてると

「はやて！いるかっ！」

突然兄ちゃんが凄い勢いで扉を開き、姿を見せた

「なんや？兄ちゃん流石の私でも驚くで？」

その余りの勢いに流石に驚いたのでそう言うと

「むっ・・すまん・・しかし大事な話がある「なんや？プロポーズなら私はオッケーやで？」・・違う・・」

大事な話言うから、何時もの感じでからかうように・・いや・・結構本気で良いと言うと。兄ちゃんは酷く消耗した顔になりながら違うと言う・・むぅ・・何時になったら兄ちゃんは私にプロポーズしてくれるやろか？

「そうそう大切な話がある、エリオとキャロの事だ」

？なんやろかと思い首を傾げると

「エリオの誕生日が近付いてる、だから私達で誕生日パーティーをしようと思う」

兄ちゃんは真剣な顔で語る

「私はそれで良いと思うけど・・何で？急に誕生日パーティーをやるつもりになったんや？」

其処が気になり尋ねると

「二人にもう少し子供らしく振舞って欲しい、子供らしく笑いながら過ごせる時間を過ごして欲しいんだ」

成る程ね・・兄ちゃんは二人の事を凄く心配してるから・・私は理解した。兄ちゃんはまだまだ甘えたい盛りの二人が、無理をしてないかと心配になったんだ

「了解。二人に内緒でパーティの準備しよか?それで誕生日まで何日や?」

やっぱそれを聞かないといけないと思い尋ねると

「あと2日だ。当日は私が二人を連れて遊園地に行こうと思っている。その間にパーティーの準備を終らせて欲しい」

計画を聞きつつ、エリオとキャロ以外に、この誕生日パーティーの事を伝える為にメールを作成する

「よっしゃ!みんなにメールで送ったで・・所で何処の遊園地に行くか決めたんか?」

そうなると行く場所も非常に重要に成って来るの尋ねると

「前に雑誌で見た、遊園地に連れて行こうと思う。大人気の場所らしいな」

うんうん、それは私も知ってる場所や、あそこなら二人も満足する筈だ

「すまないな・・私の我侭ではやてに負担を掛けてしまうな」

そう笑うとゆっくりと頭が撫でられる、確かに仕事をしながら内緒でパーティーの準備をするのは大変だ。だが兄ちゃんに頭を撫でて貰えるなら、それくらいの苦労は喜んで引き受ける

「嫌やな～そんなん気にしんでええよ？」

頭を撫でて貰いながら笑うと兄ちゃんは笑いながら

「そうか・・では今度二人で遊びに行くか？」

最高や・・兄ちゃんと二人だけで遊びに行く・・しかも兄ちゃんからのお誘いだ

「行く！絶対行く！」

思わず大きな声で言ってしまったが、兄ちゃんは笑いながら

「良し、それじゃあエリオとキャロのパーティーが終ったら、二人で遊びに行こうな」

と穏やかに笑うと

「私もプレゼントを用意するから、部屋に戻るからな」

と言い部屋から兄ちゃんは出て行き、一人になった部屋で

「おっしゃあああっ！やる気が出てきたでっ！！」

二日分の仕事の資料を取り寄せ、やり始めた・・流石に量が多くて

大変だが・・

「兄ちゃんと遊びに行けるなら、これ位なんとも無いわ」

私は凄まじい勢いで書類を処理し始めた・・・

何処か判らない深い森の中で

「ねぇねぇ・・ヘルズ・・どうして戦いに出て行っちゃいけないの？守護者を倒せば王様も喜ぶよ？」

無邪気な声とは対照的に、不気味な赤黒い鎧を身に纏ったネクロが部屋の中奥にいる、青い鎧のヘルズと呼ばれたネクロに話しかける

「・・確かに・・王様が喜ぶでしょう・・ですが勝手に出撃するのも如何なものかと思いますよ？ブリッズ」

ヘルズは丁寧な口調でブリッズと話してると

「そんなことは関係ない！守護者とあの魔導師達を倒せば敵は居ないのだぞ！」

龍を思わす黒い鎧のネクロがそれに反論するが

「うるさいですよ、カーズ・・・・折角良い気分で眠っていたのに・・」

赤のマントを羽織ったネクロは文句を言うと

「黙ってろ!ヴェノム!俺はヘルズと話してるんだ!」

いらいらとした声でカーズがヴェノムに黙れと言う

「やれやれ・・もう少し紳士的に話せないのですか?我ら選ばれしＬＶ４のネクロですよ?品が無いのはどうにも納得できませんね?」

大袈裟な素振りで落胆したと言いたげなヴェノムに

「ヴェノムの言うと通りだ・・カーズ少し黙って居なさい」

ヘルズがカーズを睨みつけると

「うっ・・判った!黙れば良いのだろう!!」

不機嫌に椅子に座り込んだカーズ

「ヴェノム・・所でヨルムンガンドの完成は近いですか?」

ヘルズが尋ねると

「そうですね・・後一ヶ月と言う所でしょうか?体は完成が近いですが・・如何せん知能が低いんですよ・・「がああああっ!!」ほらね?これでは我らに牙を剥くかもしれないでしょう?」

呆れた様に言うヴェノムが指差した方には、鎖に繋がれた巨大な龍のネクロの姿があった

「でもさ～なんであんな欠陥品作ったの?・・確かに強そうだけど

さ・・僕はデクスの方が好きだよ、強いし死なないし」

ヨルムンガンドと呼ばれたネクロは雄たけびを上げながら鎖を破壊しようとしている

「ふふふ・・あれで良いのですよ・・あれに知能が付けば守護者として苦戦するでしょう・・あれは無差別破壊のネクロですから・・それにデクスにも欠点はありますよ?無限再生の代わりに知能が低くて命令どおりの動きしか出来ない・・はぁ・・完成形のデクスウルゴレラは一体のみ・・あとは劣化コピーばかり・・私としてはゴレラを量産したかったですよ」

頭を抱えるヴェノムを見て、ブリッズは

「ゴレラね～アイツは訳判んないよ・・子供助けたり・・殺しをしなかったり・・アイツも欠陥品でしょ?まぁ・・守護者を倒すって言ってるから僕はどうでも良いけど」

と笑うブリッズの元に

「ブリッズ様、貴方様の出撃許可が出ました」

ＬＶ３のネクロが現れ頭を下げる

「本当?」

ブリッズが楽しげに笑いながら尋ねる

「はっ!本当にございます」

ブリッズは笑いながら跳ね起き

「良いねぇ・・くく・・最高の気分だから・・お前死ねよ・・ブリッズハンマーッ！！！！」

「はっ？ブリッズさ・・ぎゃあああああっ！！！！」

爆発音と共にＬＶ３は跡形も無く消し炭になった・・

「ブリッズ・・アイツはお前の部下だろう何故殺した？」

カーズが非難の眼を向けると

「だってさぁ～ＬＶ３だよ～代わりなんて掃いて棄てるほど居るんだから別に良いじゃん」

ハンマー担ぎ笑うブリッズに

「それで直ぐに出撃するおつもりですか？」

ヘルズが尋ねると

「うんや・・何して遊ぶか決めてから行くよ・・折角外に出れるんだから楽しまないと」

と笑い出て行ったブリッズを見て

「一番恐ろしいのは無邪気な子供ですか・・ブリッズには期待しましょう。我らダークマスターズの一員として」

と笑うヘルズ達・・龍也達が知らない所でネクロの陰謀が動き始めていた

第６３話に続く

ネクロ

ネクロマンシーによって再生された、死んだ魔導師のなれのはて。
魔力を喰らう事により成長し４段階の進化がある、また亜種としてデクスと言う種類が居る

ＬＶ１
影の様な姿をしており、片言でしゃべり知能も低い・・団体で行動する

ＬＶ２

進化し知能が少し向上した、姿はボロボロの鎧を身に纏う亡霊騎士、特殊な力を持つ

ＬＶ３

更に進化し高い知性と戦闘技能を持ち、更に特殊な力を持つ
今まで登場ではレイジングハートに寄生した者、姿を隠し砲撃した者、等様々なタイプが居る

ＬＶ４

進化を繰り返し凄まじい力を取得したネクロ、言葉は片言では無くスムーズに喋る。性格は残虐性が表に出る者、冷静な者様々なタイプが居る

ダークマスターズ

ネクロの中でも希少で貴重なＬＶ４のネクロに与えられる称号。各々が高い戦闘技能と特殊な力を持つ
リーダーはヘルズで、彼に逆らえるネクロは居ない・・

デクス

ヴェノムが作成したネクロ・・高い再生能力と魔力を喰らう特性を持つが知能は低い・・姿はＬＶ１とＬＶ２の中間で獣の様な姿に鎧を身に纏っており。戦い方は獣そのものである

デクスウルゴレラ

デクスシリーズの唯一の完全体ＬＶ３とＬＶ４の中間で。限りなく人型に近い・・また他のネクロと違い子供助けたり・・殺しをしなかったり・・と慈悲を持つらしい・・目的は守護者（龍也）に勝つ事で、その所為か剣の扱いに長ける・・また他のネクロと違い魔力を自分で生成出来る為、人を襲う事は無くまたジオガディスに忠誠を誓っている訳でもない・・異端の存在で自身の事をハーティーンと名乗る

ブリッズ

ダークマスターズの一人、不気味な赤黒い鎧を身に纏いその手に持ったハンマーで戦う
性格は無邪気で邪悪。殺す事にためらいが無く、同じネクロでも邪魔するなら簡単に殺すが、自分が死ぬ事は極端に恐れる魔導師ランクで換算するとＡＡ＋に匹敵する魔力を保持している

## 第６２話（後書き）

オリジナルの技を幾つか登場させて見ました・・次回はエリオ強化イベントです
新しいバリアジャケットのモデルはデジモンです！どのデジモンがモデルか判るかな？

またＬＶ４のネクロもデジモンがモデルです、誰がどのデジモンをモデルにしてるでしょうか、わかる方は居るでしょうか？作者はそれが少し楽しみです
それでは次回の更新をお楽しみに

## 第６３話（前書き）

連続投稿ですね・・やる気とアイデアが止まらなかったので、勢いで書き上げました。その所為で次の更新が遅れます（多分月曜日か日曜日です）

２話連続投稿・・お楽しみください

# 第６３話

第６３話

最近フェイトさん達がおかしいです、僕とキャロに隠れて何かをやってるみたいです。それが気になりますが・・とりあえずは今やる事に専念します、お父さんに一撃入れるためのシュミレーションを繰り返し作成していますが、結果は余り良くないです・・リーチ、技能、状況判断。その全てが最高クラスの人ですから。そう簡単には一撃入れれませんねと思い。そのシュミレーションを見てると

「エリオ君、まだそれやってたの？」

キャロが尋ねてきます

「うん・・どうやったらお父さんに一撃入れれるか考えてたんだ」

笑いながらシュミレーションを止めて、お父さんから貰ったアクセサリーを握り締めてると

コンコン

ノックの音がしました

「誰だろ？こんな時間に？」

キャロが首を傾げながら扉を開くと

「エリオ、キャロ少し良いか？」

穏やかな笑みを浮かべるお父さんの姿がありました

「お父さん？何の用ですか？」

椅子に腰掛けたお父さんに尋ねると

「うん、二人はこの場所を知ってるか？」

差し出された雑誌には

「これ・・遊園地ですよね？」

前から行きたいと思っていた遊園地の事が書かれていた

「私此処知ってます。有名な遊園地ですよね」

キャロが笑いながら言うと

「ああそうだ。それでな前にＴＶの取材があっただろう？その時のお礼としてな。これが来たんだ」

コートの中から出されたのは３枚分の、遊園地のチケットだった

「お父さんこれもしかして・・この遊園地のですか？」

キャロがそのチケットを見ながら尋ねると

「ああ、そうだ。それでな明日私と一緒にこの遊園地に行かないか？」

笑いながら遊園地に行かないか?と尋ねて来るお父さんに

「でも・・仕事がありますよ?」

やらないといけない仕事があると言うと

「それは大丈夫だ、はやてに頼んであるから大丈夫だ。それで明日遊園地に行くか?」

と笑い頭を撫でてながら尋ねて来るお父さんに

「「はい!行きます!!」」

僕とキャロは大きく頷いた、

「そうかそうか・・明日の朝迎えに来るからな」

言い部屋から出て行ったお父さんを見ているとキャロが

「エリオ君!楽しみだね!!」

笑顔で僕の手を取るキャロに

「うん!僕も楽しみだよ!そうだ早く寝ないと」

僕とキャロは明日に備えて眠りに付いた

「龍也どうだった?二人とも行くって言ってくれた?」

二人の部屋を出るとフェイトが待ち構えていた

「ああ、二人共行くと言ってくれたよ」

返事を返すと

「良かった~二人が行かないって言ったら。計画失敗だもんね」

安心した表情で微笑むフェイトに

「そうだな・・どっきり誕生日パーティーだからな」

明日の為にこっそりと誕生日の準備をしていたからな

「明日龍也が二人を遊園地に連れて行ってる間に、パーティーの準備するからね」

微笑むフェイトと明日のパーティの予定を話し、私は自室に戻り眠りに付いた

次の日・・・

「さてと・・二人を迎えに行くか・・」

何時もより気持ち遅めに起き、着替えてから二人の部屋に向かった

「二人とも起きてるか?」

部屋の前から尋ねると、勢いよく扉が開き

「お父さん！待ってましたよ！」

笑顔でエリオが飛び出してくるのでそれを抱きとめる

「おっとと・・エリオ・・おは・」

抱き抱えたエリオにおはようを言おうとすると

「お父さ～ん！！」

キャロが突撃してくるので、それもエリオと同じように抱きとめる

「えへへ～待ってましたよ」

笑顔のキャロとエリオを降ろし

「二人ともおはよう・・良く眠れたか？」

頭を撫でながら尋ねると二人とも元気よく

「「はいっ！！！」」

頷きながら笑う二人に笑みを零しながら

「それじゃあ・・朝ごはんを食べようか？」

二人の部屋に入り、冷蔵庫を空けながら

「エリオは何を食べたい？」

エリオに何を食べたいか尋ねると

「えーと・・ハムエッグとかが良いです」

エリオのリクエストを聞き、ハムエッグを作りながら、パンをトースターに入れ焼きながら。スープを作ってると

「良い匂いです・・お父さん今度料理を教えてくれませんか？」

キャロがそんな事を言うので

「良いとも。休日に私の部屋においで、用事が無かったら料理を教えてあげるよ・・・っと完成だ」

焼きあがったパンを皿の上に乗せ、焼きあがったハムエッグをフライパンから下ろし。スープ用のカップにスープを入れる。当然フリードの分もある。それをトレーに乗せ二人の前に置く

「美味しそうです」

目を輝かせるエリオとキャロを見ながら

「それじゃあ・・食べるとしようか・・頂きます」

「「頂きます（きゅく）」」

三人と1匹で食事をした、美味しそうに食べるエリオとキャロは、歳相応の子供みたいでとても可愛かった

「「お父さん！早く！早く！行きましょう！！」」

食事を終えた、エリオとキャロが飛び跳ねながら言うので

「判った、判った。遊園地は逃げないぞ」

苦笑しながら二人を抱え上げ、遊園地に向かって行ったのを見計らって

「・・おし・・兄ちゃんが二人を連れて行ったで。急いでパーティーの準備をするで！！」

「「「了解ッ！！」」」

六課のメンバーが協力し、パーティーの準備を始めた

「はい、チケットを確かに受け取りましたよ・・ごゆっくりどうぞ」

遊園地の入り口で係員さんにチケットを渡し、僕達は遊園地に入った

「凄い人です・・」

キャロが隣で言う、確かにその通りで沢山の人がいるなと思ってると

「はぐれたらいけないからな」

お父さんが優しく僕の手を握りながら笑う

「さぁ・・エリオはまずどれに乗りたいかな?」

笑いながら尋ねて来るお父さんに言われ、アトラクションを見るどれも目移りしてまうが・・目に止まった物があった

「あれです!あれに乗りたいです!」

僕が乗りたかったのは

「ゴーカートか良いな、それじゃあ行くとするか?」

ゆっくりとゴーカートの方に歩いて行くと

「あれ・・もしかして八神中将じゃない?」

「まさか~こんな所に居る訳無いよ・・でも似てるわね」

すれちがう人がお父さんの事を指差しながら、ひそひそ話をしてるのが、ちらほらと聞こえて来るが。お父さんは全く気にした素振りを見せず歩いて行って、ゴーカート乗り場に着き大きめのゴーカートに乗り込んだ

緩やかなスピードで走りだすカート。確かに飛行魔法の方が早いでも。お父さんと一緒だからとても楽しい

「おっとと・・中々難しい物なんだな」

お父さんは操作に困りながらもゆっくりとコースを走っていく、カーブとかでお父さんにくっついたりするのが凄く安心できて・・嬉

しかったし楽しかったドライブは、あっと言う間に終わってしまった・・

「ふぁ～、面白かった！」

「だね！また一緒に乗ろうね！」

キャロと笑ってると

「ふふふ。楽しんで貰えて私は嬉しいよ」

穏やかに笑うお父さんの手を再び握る

「次はキャロだな・・キャロは何に乗りたい？」

キャロは考え込む素振りを見せてから

「あれです！あれに乗りたいです！」

キャロが指差したのはメリーゴーランドだった

「あれか・・よし行こう」

3人でメリーゴーランドに乗った。お父さんに抱き抱えられる形でだった・・嬉しいのか恥かしいのか良く判らなかったけど、楽しかったと思う。お父さんと色々なアトクラクションに行った・・お化け屋敷にシューティングゲームそれとジェットコースターどれも。楽しかった・・思えば僕はずっとこんな風にお父さんと遊びたかったんだ・・・夢が叶ったのかと思いながら遊園地を歩いてると

「そろそろ・・昼ご飯の時間だな・・・何を食べる？」

今居るのはレストラン等がある。コーナーだった

「えっと・・えっと・・お父さん！あそこで食べましょうよ！」

キャロが指差したのはこの遊園地のマスコットがやっているレストランだった

「ほー、今はあんなのがあるのか・・私が子供の時はああいうのは無かったな・・」

年寄りの様な言い方に思わず噴出してしまうと

「・・そんなにおかしい事を言ったか？」

首を傾げるお父さんと一緒にそのレストランで、食事をした、暖かくて・・とても美味しかったと思う

「美味しかったです～」

食事を終え、店から出るとキャロが笑いながら言う

「そうですね～美味しかったです」

「少し休んでから、また遊ぼうな」

僕とキャロの頭をわしゃわしゃと撫でる、お父さんの手の感触がとても心地良かった・・それから少しベンチで休憩してから、また３人で遊園地のアトラクションを選んでは遊ぶを繰り返してると。あ

っと言う間に夕暮れ時になっていた

「もう夕暮れか・・悪いが少し用事があるから。此処で待っていてくれ」

お父さんはそう言うと僕達から離れて行った

「はやて・・もう直ぐ戻るが準備はどうだ?」

はやてと連絡を取り、準備の方はどうかと尋ねる

「ばっちりや~飾りつけもケーキも料理も完璧やで・・ちょっなにすんやっ!!」

はやての声が一度怒声と共に消え代わりに

「龍也様、準備は完璧です。後どれくらいで戻ってきますか?」

セッテが尋ねて来るので

「観覧車に乗ったら・・帰るつもりだ」

「そうですか・・ザザ・・ツーツーツー」

突然ノイズが走り、通信が切れた

「何だ?何が・・・「がああああっ!!!」・・!!」

突然襲って来た何かを、反射的に跳躍し回避する

「がああああっ！！！！」

此方を見て放校する何かを見る

「ネクロ・・？いや・・気配が違う・・何だこいつは？」

ネクロとは違う・・黒い体に鎧とネクロに近いが・・何かが違う・・
ＬＶ１とＬＶ２の中間といえば言いのだろうか？

「がああああっ！！！」

放校と共に飛び掛ってくるネクロに

「セットアップ！」

天雷の書をブレイドモードを起動させ、その突撃を防ぎ

「はあっ！！」

踏み込みと同時に胴を穿ち、吹っ飛ばすが手応えは合ったが

「ぐるるるるっ・・・」

唸り声を上げながら立ち上がる、ネクロには傷が無かった

「再生か？・・・」

ネクロと睨み合ってると

ズドーンッ！！！

エリオ達が居る方から爆発音が聞こえてきた

「！？・エリオ達の方にも居るのか！」

焦りが出てくる・・もしエリオ達の方にもこんなのが現れていたら、二人は勝てない

「くっ！早く合流しなければ」

踏み込み斬撃を放つが

ザシュ！！当たった傍から回復してる

「・・デクス・・（ＤＥＡＴＨ－Ｘ）と言った所か・・はぁっ！瞬連刃！！」

高速で縦横と切り付け上段から全力で振り下ろし両断するが

「がぁぁっ・・」

やはりダメージが無い様で直ぐに回復し始めている

「・・成る程・・死の概念が無い・・魔力の捕食者か・・」

剣に纏ったいた魔力が消えている事から、そう推測した

「悪いが・・貴様などにくれてやる時間が惜しい・・一瞬で消し炭にしてくれる」

初めてこの状態でカートリッジは使い、魔力を増加させる

「モード・・ツインブレイズ・・」

バスターソードを二つに分離させ、それぞれ手に装着する

「行くぞ・・」

ドンッ！

地を大きく蹴り一瞬で懐に飛び込み蹴り上げる

「ぎゃあッ！！」

流石に痛みを感じるのか苦悶の声を上げるデクスに

「はあああああッ！！！！」

ザシュ！ザシュ！

両手のツインスラッシャーで次々切りつけ、最後に両手のスラッシャーを突き立てる

「ぎゃあああああっ！！！！」

凄まじい絶叫を上げるが、それを無視してスラッシャーに魔力を溜め・・

「消え失せろ・・トライデントガイアァァッ！！！！」

ゼロ距離で溜めていた魔力を解放する・・シグナムに使ったガイアフォースの強化版・・その威力はスターライトを遥かに超える！！

「ぎゃあああ・・・・・・」

その強大な魔力で生み出された火球は再生する間を与えず、デクスを消し炭に変えた

「エリオ達の所・・お前達はよほど私を怒らせたいようだな？」

足元に黒い染みが広がり、其処から次々ＬＶ１のネクロが姿を見せる

「キキ・・」

耳障りな声を上げるネクロを睨み

「悪いが・・私は機嫌が悪い・・早々に退場願おうか」

スラッシャーをバスターソードに戻し、私は駆け出した

「守護者・・ふふふふ・・見せてもらおう・・お前の力を」

その後ろ姿を見る一体の騎士の姿があった

「お父さん・・遅いね？どうしたんだろ？」

中々帰って来ない、お父さんの事をキャロと話してると

「あはは～魔導師みーつけた！！」

「！！」

驚きその声の方を見る

「ネクロ・・」

其処に居たのは赤黒い鎧を身に纏い、ハンマーを背負ったネクロだった

「ぴんぽーん！大正解！！僕はダークマスターズのブリッズだよ～」

ハンマーを担いだブリッズを見ながら、バリアジャケットを展開し、ストラーダを向ける、お父さんが来るまで時間を稼げば良い・・キャロはフリードが居ないから戦えない、なら僕がお父さんが来るまでの間時間を稼げば良い、ストラーダを握り締めブリッズを見る

「良いねぇ～僕と戦うっての？言っとくけど僕は強いよ～ほらっ！」

ドン！

何かが爆発したような音と共に向かってくる、ブリッズが大きくハンマーを振りかぶり

「喰らえっ！」

ガキーン！

ストラーダで受け止めるが

（お・・重い・・）

ヴィータさんと同じくらいの威力を持った一撃だ

「ははは・・どんどん行くよ～」

ブリッズはまったく気にした素振りを見せず、次々と振るわれるハンマーをストラーダで弾く。

「くうッ・・」

お父さんと比べると遅いがそれでも弾くのが精一杯だ

「良いね、君強いね～やっぱこうじゃないとね！！」

楽しげな声と共に振るわれたハンマーを受け止めるが、手が痺れる・・これは不味い・・お父さんが来るまで持ち堪えられるか？

「ははは、お前今守護者が来るまで耐えれるかって、思っただろ？残念でした～守護者の方にもネクロ・・いやデクスが行ったから。簡単にはこっちに来れないよ～」

！こっちの考えを読まれた！？でもこいつの言う通りならお父さんの方にもネクロが居る事になる

「ほらほら！考え事してて良いのかな～エア・・ハンマーッ！！！

！」

！？今までより早いハンマーの一撃を回避するが

「うわあああッ！！」

衝撃で吹っ飛ばされてしまう

「エリオ君ッ！！」

キャロの悲鳴に似た声が聞こえる・・直撃は回避したがダメージは大きくて動く事が出来ない

「ふっふっふ・・僕に勝つなんて十年早いよ？魔導師」

見下した声で笑うブリッズが、ハンマーを振りかぶりながら

「さぁ～止めと行こうか・・・「アルケミックチェーンッ！！！」・・邪魔しないでくれる？お前？」

キャロがアルケミックチェーンでブリッズの動きを一瞬止めるが、直ぐに拘束を振り解き冷たい目でキャロを睨む

「エリオ君は殺させないっ！！」

キャロがもう一度アルケミックチェーンを使うが・・

「だから・・こんなの意味無いんだよ・・まぁ・・良いや・・どっちにしろ二人共殺すんだから・・先に君を殺してあげるよ」

ゆっくりとキャロの方に歩いて行く・・

「あああっ・・」

その殺気に当てられてキャロは動けなくなっていた

「さてーと・・じゃあ君から死んでよ・・ブリッツハンマーッ!!!」

魔力が込められたハンマーがキャロに振り下ろされそうになる・・

その瞬間僕の中で何かが弾けた

「うおおおおおおっ!!!」

動かない体を無理やり動かしてキャロの前に立ち

「プロテクション!!!」

障壁で防ぐが

「無駄無駄・・そんなんじゃ防げないよ?」

嘲笑う様にブリッズが言うと

ピキ・・ピキ

徐々にプロテクションに皹が入る

「キャロ・・逃げて・・・・」

キャロに逃げる様に言うが・・

「嫌！エリオ君を置いて逃げれないよ・・」

嫌だとキャロが言った瞬間、プロテクションが砕けた。僕はキャロだけは護らないと思いキャロを突き飛ばした

「エリオ君！？」

驚くキャロの声を聞いた瞬間、僕の前でハンマーが振り下ろされると同時に爆発が起き

「う・・うわあああああッ！！」

僕は吹っ飛ばされながら意識を失った・・

ここは何処・・？気が付いたら僕は何も無い闇の中に居た

「寒い・・寂しい・・辛い・・どうして誰も居ないの？」

とても辛くて人の姿を探すが、誰も居ない・・そうか・・僕は一人なんだ・・・・

「違うよ・・君は一人じゃない」

突然聞こえた声の方を見て、目を開く

「あっ・・あああああっ・・・どうして・・」

僕の目の前に居たのは

「始めましてで良いのかな？エリオモンディアル？僕もエリオモンディアルだからおかしいけどね・・」

そこに居たのは・・僕だった

「どうして・・」

歯がガチガチと音を鳴らすのが判る

「どうして？おかしな事を聞くね？僕は君で君は僕・・判るだろう？」

！？僕の中で何かが壊れていくの感じた・・そうだ僕は・・ひ・・

「ストップ！それ以上は認識しちゃいけない・・何も僕は君をとって食おうって訳じゃないんだ。話し位聞いてくれないか？」

穏やかに笑うエリオ？に頷き座る

「そうそう、少しだけ話を聞いて欲しいだけなんだ」

と笑うエリオ？は僕の前に座り込んで

「良いかい？ここは僕の世界・・本来なら君が来れない世界だ・・簡単に言うと君は二重人格だったと思ってくれれば良い」

その説明に頷く

「それで何だけど・・君は自分の中で何かが弾けるのを感じただろう？それが僕と君の世界の壁を壊れた証拠なんだ。だからこうして話が出来る」

ここで一度話が途切れ

「だけど・・本来これはあっていけない事だ・・一つの体に二つの精神は共存できない・・つまり・・どちらが消えないといけない」

消えないといけないの言葉で僕は理解した

「そっか・・君は僕の体が欲しいんだね・・良いよ・・僕は人じゃないし・・必要とされてないか・・」

バキッ！！

そこまで言いかけた所で頬を殴られた

「えっ？」

僕が訳が判らず困惑してると

「君は何を言ってる！！君は自分の事を大切に想ってくれている人を裏切るつもりか！！」

エリオ？が泣きながら

「良いか！僕は君の中でずっと見ていた！！キャロ・・フェイトさん・・そして龍也さん！！君の事を大切に想ってくれている人が居

るんだ!!何故人じゃないなんて言える!!君は誰がなんと言おうと人なんだ。今だって君の事を待ってる人がいる」

暗い世界に映像が映る・・そこには

「キャロ・・」

キャロが僕を護る為にプロテクションを張って、ブリッズの攻撃を防いでいる

「判っただろう?君は必要とされてるんだ。それでもまだ人じゃない、必要とされて無いなんて言えるか?」

言えない・・僕はキャロを護りたいでも・・僕じゃあいつに勝てない・・

「だから僕が力を貸してあげる・・君が護りたい人・・場所を護る力を・・」

そう言うとエリオ?の手から光が溢れ出し、彼は涙を流しながら

「僕は君が羨ましい・・優しい人・・護ってくれる人がいる君が・・僕にはそんな人は居ない・・」

ぽつりぽつりと語る彼の言葉に耳を傾ける

「でも・・良いんだ・・君の中でそういう人達に出会えたから・・もう思い残す事は無いんだ・・だから僕は逝くよ・・逝くべき場所に・・」

その顔は何処までも澄んだ笑顔だった、彼は涙を流しながら微笑み

「君はまだやるべき事がある・・大切な人を護って・・笑って生きる義務がある・・僕は上から見てるよ・・君が進む道を」

彼の手から光の粒子が溢れ出し・・僕の中に入っていく

「さぁ・・行くと良い・・君の事を待っている人の所へ！」

その言葉と共に僕の意識は遠ざかっていった

「ああ・・もう鬱陶しいな！！いい加減死になよ！！」

ブリッズが苛々とした声で言う、私はさっきから全力でプロテクションを張って、自分自身とエリオ君を護ってる

「もう良い！！！二人とも消し炭にしてやる！！！ブリッツハンマーッ！！！！」

黒い魔力で覆われたハンマーが振り下ろされる

「くうっ・・きゃあああああッ！！」

全力でも防ぎきれない一撃で二人とも吹っ飛ばされる

「さぁ～鬱陶しいバリアも消えたから・・・まずは君から死になよ！！！！」

ブリッズが私目掛けてハンマーを振るう、私は思わず目を閉じた

ガキーン！！

金属と金属がぶつかった音がして目を開くと

「エリオ君・・・」

エリオ君がそのハンマーを受けとめていた

「お前・・生きてたんだ・・でも僕が殺したいのはお前じゃないんだよ！」

私目掛けて拳を振るってくるが

「・・触れるな・・・」

バシ！

エリオ君がその拳を受け止め。何かを呟く

「ん～何だって？良く聞こえなかったな～」

ブリッズが首を傾げると

「キャロに触れるなっと言ったんだッ！！！」

怒声と共にブリッズを殴り飛ばす

「キャロは僕が護る！！！ストラーダセットアップ！！！！」

気絶したので消えていたバリアジャケットが再構築されるが・・それは前の物に似ていたが細部が違っていた・・肩や足には龍のエンブレムが刻まれた甲冑に赤と黒が混じったマント・・それはまるで龍が翼を広げている様な力強さがあった。そしてその手に握られるストラーダも形を変え・・鎌と槍が融合した独特な形状をしていた

「エリオ君・・？」

本当にエリオ君なのかと思った・・力強く・・見ているだけで安心できた

「キャロ下がってて、巻き込まれたら危ないから」

その言葉に頷き、エリオ君から少し離れた

「ブリッズ！僕が相手だ！！」

ブリッジに向かって行った、エリオ君の後姿はとても力強く安心できた

第６４話に続く

## 第６３話（後書き）

今回は２話連続です！
技は通りすがりの勇者王様と鳴神様のアイデアを採用しました！
後編をお楽しみに

## 第６４話（前書き）

２話連続の後編です！

エリオのパワーアップがメインです！

更に通りすがりの勇者王様と鳴神様に頂いた、アイデアの技が登場しますので

アイデアを下さったお二人が見てくださる事を期待します

# 第６４話

第６４話

軽い・・体がとても軽い・・自分の体じゃないみたいだ・・僕はストラーダを振るいながらそう感じていた、

ガキーン！！

ハンマーとストラーダがぶつかる。重いと感じていた一撃だが今は片手で受け止める事が出来る

「このッ！お前生意気なんだよ！！エアハンマーッ！！！」

空気と共にハンマーが振り下ろされるが

「ふっ！！」

マントでその攻撃を完全に防ぐ、攻撃が防がれた事で硬直するブリッズの胴に

「紫電一閃！！でえええぃッ！！！」

魔力を込めた拳を叩き込み吹っ飛ばす

「ぐはっ！！」

苦悶の声を上げながら吹っ飛ぶブリッズだが

「くっ・・僕は・・強いんだっ！！」

体勢を立て直して、僕ではなくキャロに突撃していくが・・

「させないっ！！！」

ブリッズの前に回りこみ、ストラーダを振るうが

「にや・・ば～かッ！！！掛かったな！！！」

しまっ・・・反射的に防御の体勢を取った所で

「喰らえっ！！ブリッズハンマーッ！！！」

ハンマーが振るわれた、何とか直撃は防いだが

「くっ・・うわあああああっ！！！！」

命中と同時にハンマーが炸裂し、僕は後方に吹っ飛ばされた

「エリオ君っ！！」

壁に追突する所でキャロに抱き止められた

「あはははははっ！！！やっぱり人間だね！！！！！！こんな簡単な罠に掛かるなんて何て愚かなんだ！！！」

僕を見下して狂ったように笑うブリッズ。僕は立ち上がりストラーダを構えようとするが・・

「あぐっ・・腕が・・」

腕には深い傷があり、ストラーダを支える事が出来ない・・

「くっくっ・・その腕じゃもうその槍は使えないだろ?」

ハンマーを担いで歩いてくるブリッズ・・キャロを護らないと・・

ストラーダを構えようとするがやはり持つ事が出来ない

「くっ・・」

護りたいのに・・失いたくないのに・・どうして僕は戦う事が出来ない・・僕は誰かを護るなんて出来ないのか?自分の中に暗い考えが過ぎった時

(君は一人じゃない・・一人では勝てなくても・・君には仲間がいる・・頼るんだ・・そして本当の力を解放するんだ)

消えたはずの僕の声が聞こえた気がした・・そうだ僕は一人じゃないんだ

「キャロ・・僕にキャロの力を貸して・・君を護る為の力を貸して・・」

キャロの目を見て頼む

「うん!!」

キャロは即座に頷き、詠唱の体勢に入る

「我が願うは・・闇を払う光の翼・・若き槍騎士に空を舞う為の翼を・・」

その詠唱と共に僕の体をキャロの魔力が覆っていく

「我が望むは前に進む事・・暗き闇を払い舞う為の翼をッ！！！・・フォルムチェンジ・・デュナスフォルムッ！！」

バリアジャケットが形状を変えていく・・

赤の鎧は透き通るような光沢を持った白銀の鎧に・・ストラーダは形を変えて龍の頭を模した篭手になり、マントは白銀に輝く大きな翼になる・・力が張っていく・・それと同時に安心感が広がっていく・・一人じゃない・・僕には大切な仲間が居る・・

「なんなんだよ・・それはあああああっ！！！」

怒声と共にブリッズがハンマーを振り下ろしてくるが

「ふっ・・」

素手で受け止める

「なっ・・！？」

驚くブリッズに

「えええぇぃっ！！！」

踏む込みただ単純に拳を叩き込む

ビキッ！！

それだけでブリッズの鎧に皹が入る

「嘘だろっ！僕の鎧が・・お前・・もう許さないぞっ！！！粉々のボロボロにしてやるッ！！！！」

怒りの形相で向かって来るブリッズを確りと見据え、僕も駆け出した

「エリオ！キャロ無事かっ！！！」

ＬＶ１を全て消滅させ。慌てて二人が居た場所に向かうと

ガキーンッ！！

白銀の鎧を纏ったエリオとネクロが戦っていた・・離れた所でキャロが腕を組んでエリオを見ていた

「エリオの魔力だけじゃない・・あれはキャロの魔力か？」

エリオの拳にはそれぞれ自身の魔力光とキャロの魔力光が灯っている

「お父さん！そっちは大丈夫でしたか」

キャロが私に気付き近寄ってくる

「ああ私は大丈夫だ、キャロは大丈夫か？」

キャロもバリアジャケットに傷がある為、尋ねると

「私は大丈夫です！エリオ君が護ってくれましたから」

キャロは笑顔で言う、私はキャロの頭を撫でてから剣を構えると

「待ってください・・エリオ君に任せてください・・エリオ君は絶対勝ちますから」

キャロに押し止められる、その目はエリオを信じる揺ぎ無い物だった

「判った、だが危なくなったら介入する。それで良いな？」

頷くキャロと共にエリオとネクロの戦いに視線を戻した、エリオの方が優勢で的確にダメージを与えている

「この！ちょこまかと動くな！！」

苛々とした声でネクロ・・ブリッズと言うらしい。がハンマーを振るうが

「ふっ！」

最小限の動きで回避し

「ダブルクレセントミラージュ！！」

両手の篭手から、魔力光で出来た三日月の衝撃波が放たれ

「うっ・・うあああああああっ！！」

それにより鎧がズタボロにされ、蹲るブリッズ

「これで止めです！カートリッジロード！！！」

篭手から二発の薬莢が飛び出し魔力を増加させる

「ブレス・・オブ・・ワイバーンッ！！！！！」

両手を組みブリッズに向け・・魔力を放つ・・・

グオオオオオッ！！！！

その魔力は飛龍の姿になり、ブリッズを飲み込もうと迫って行く

「うあああああっ・・いやだあああっ！！死にたくないぃぃっ！！！！」

頭を抱えて絶叫するブリッズの叫びを聞いて

「！！！」

エリオは照準をずらす・・それにより飛龍は目標を失い空中に消えていった

「！あはははは・・馬鹿めっ！！！！！マギイレイズッ！！！！！」

ブリッズが手から糸を放ち、それがエリオを捕らえると

「バリアジャケットがっ・・」

エリオのバリアジャケットが解除される

「あははは!!!馬鹿だね!!敵を倒す事を躊躇う何て!!でも僕は違う!!死ねぇっ!!!」

ブリッズがハンマーをエリオに振り下ろそうとする、私はエリオを助ける為に駆け出そうとしたが・・それより早く

「暗黒月光剣　満月の太刀!!!」

私ではない誰かの声と共に黒い衝撃波が放たれた・・

「えっ?・・嘘・・」

それはブリッズを両断した

「ゴレラ・・何で・・僕を・・・こ・・ろ・・す・・の・・さ・・・」

ブリッズはそう言うと塵となり消えた・・私はその衝撃波が来た方を見ると

「!?」

其処に居たのは・・騎士だった・・だがそれは間違いなくネクロでもあった

漆黒の鎧に黒のマント・・手には振りぬかれたままの無骨な大剣が

あり、鎧兜から僅かに見える、瞳には強い意志の光が灯っていた

「貴様何者だっ！！」

エリオとキャロの前に立ち剣を向けると

「何者とは随分な言い方だな、守護者・・俺はお前の仲間を助けてやったというのに？・・まぁ良い・・俺と貴様は敵だからな」

騎士は剣を背中の鞘に戻しながら、

「俺はハーティーン・・デクスのハーティーンだ・・守護者俺の名を覚えておけ・・俺は貴様を倒す者だ」

そう言い残し歩き去ろうとする、ハーティーンに

「待て！あいつはお前の仲間じゃなかったのか！」

ハーティーンは振り返り

「あいつが仲間？くくっははははっ！！勘違いするなよ？守護者！俺は俺だけの味方だ！誰の味方でもない！！それを覚えておけ！」

ハーティーンは振り返らず、今度こそ歩き去った。私はエリオとキャロを見る、重傷ではないが二人とも怪我をしている

「すまなかった。助けに来るのが遅れてしまった」

二人に謝罪しながら回復魔法を発動させる・・それは二人を包み込み怪我を瞬時に回復させた

「あの・・お父さん頭を上げてください・・ちゃんとお父さんは助けに来てくれました・・僕はそれで良いです」

「私もです」

エリオとキャロを抱きしめる、二人が動揺するが関係ない

「すまなかった・・私が付いていながら、二人に怪我をさせてしまった・・本当にすまない」

二人を抱き抱えたまま謝る・・折角二人を喜ばせようと遊園地に来たのに・・怪我をさしてしまっては意味が無い

「お父さん・・良いんです・・お父さんはちゃんと僕達を助けに来てくれました・・だから良いんです」

良いと言うエリオとキャロを放し。はやてに連絡を入れる

「兄ちゃん!どうしたんや急に連絡が切れたで驚いたんやけど」

仮想モニターには心配そうなはやての顔がある

「すまない。ネクロの襲撃を受けた、私は無傷だが、エリオとキャロは若干負傷している・・悪いが迎えに来て貰えないだろうか?」

はやては直ぐに頷き、迎えを出してくれた、遊園地の外のベンチで迎えを待っていると

「「こっくり・・こっくり・・」」

二人共疲れていたのか船を漕ぎ始めてしまった

「まだ子供だもんな・・」

私は二人を膝の上に乗せ頭を撫でながら迎えを待っていた

「龍也・・迎えに来たよ」

迎えはフェイトだった・・急いで駆けつけて来てくれた様だった

「すまない・・私が付いていながら、二人に怪我をさしてしまった・・」

眠っている二人を抱き抱えたまま、頭を下げる

「龍也は二人を助けてくれたんでしょ?謝らなくて良いよ・・それに二人の寝顔を見れば判るよ、二人とも凄く良い顔してる」

二人は私の服を確りと掴んで、寝息を立てている

「ねっ?龍也は二人のお父さんなんだから、ちゃんとしないと」

そう笑うフェイトに頷き、私達は六課に戻って行った

「むにゃ・・ほえっ・・ここはお父さんの部屋ですか?」

目を覚ますと僕はお父さんの部屋のソファーの上でした

「むにゃむにゃ・・」

向かい側のソファーを見ると、キャロが寝息を立てていましたが、お父さんの姿はありません

ガチャ

音を立てて扉が開き

「っと・・起きてたのか・・痛い所は無いか？シャマルに見て貰ったから。大丈夫だと思うが」

心配そうに僕に目線を合わせて尋ねて来るお父さんに

「大丈夫ですよ、何処も痛くないです・・あれ？服が・・」

此処で始めて気づいた、服も綺麗になっている

「ああ・・血とかで汚れてたからな。寝てる間に勝手に風呂で洗った・・キャロはフェイトに任せたがな」

説明されて理解したが、少し恥かしかったかもしれない

「エリオ、ココアでも飲むか？」

僕は頷きソファーから起き上がった、ココアを飲みながらふと思いだし、ストラーダを机の上に乗せる

「お父さん、ストラーダの形が変わったんですけど・・如何してだ

か判りますか？」

尋ねるとお父さんは無言で天雷の書を開き、僕の前に差し出した

「龍騎将の槍・・エグザ・・」

そこにあったのはストラーダが変化した槍の絵だった

「次のページも見てみろ」

そう言われ開いた次のページには

「可能性の証・・デュナス」

純白の龍を模した篭手の絵が書かれていた

「どういう訳かは判らんが、エグザとデュナスのデータがストラーダにコピーされたようだ」

お父さんの説明を受けたが・・お父さん自身も良く判らないようだ

「むにゅ？・・ここ？どこ？」

寝ぼけ眼でキャロが辺りを見ている

「キャロおはよう、ココア飲むか？」

マイペースにキャロにココアを飲むか？と尋ねるお父さんに

「んにゃ！飲むにゃ・・」

起きたばかりの所為か舌が回っていなかった・・がお父さんは了解と頷き、キャロの分のココアを用意して。キャロの前に置いた

「コクコク・・・ああ美味しいです・・あれ?ここお父さんの部屋ですか?」

今気づいたの?キャロはどうやら寝起きが大分弱いようだ

「正解、ここは私の部屋だ。キャロ痛い所は無いか?」

僕と同じように痛い所は無いかと尋ねる

「・・痛い所は無いです・・でも・・お腹が空きました・・」

俯いて言うキャロの頭を撫でながら

「良し、それじゃあ食堂に行こう」

お父さんに連れられて食堂に行きましたが・・

「お父さん?真っ暗ですよ?」

食堂は真っ暗で人の気配も無い

「いや・・これで良いんだ・・そろそろだな・・エリオ今日は何の日か判るか?」

お父さんの問いかけに首を傾げる・・今日?・・何の日だ?・・そうだ今日は・・

「・・僕の誕生日・・」

忘れていたが今日は僕の誕生日だ・・僕がその事を思い出すと同時に

パン！パン！！

「「ハッピーバースデーッ！！エリオッ！！！！」」

クラッカーの音と六課の皆の声と共に食堂に明かりが点いた

「あ・・あ・・・これは・・」

僕の目の前に広がっていたのは・・・

【誕生日おめでとう！エリオ！】

と書かれた大きな垂れ幕に六課の皆の笑顔だった

「いやいや・・中々苦労したんだ、エリオとキャロ見付からない様に、パーティーの準備をするのはな」

僕とキャロの頭をわしゃわしゃと撫でながらお父さんが笑う

「エリオ、ほら主役はこっちだよ！」

フェイトさんに呼ばれて、フェイトさんの前に行く

「ほい・・主役からの一言・・頑張りや」

部隊長からマイクが渡されるが、こんな時何を言えば良いのか判らない・・

「素直に自分の気持ちを言えば良いんだよ？エリオ」

フェイトさんに促され僕は

「あの・・なんて言えば良いのか・・判らない・・ですけど・・ありがとうございい・・ます」

嬉しいのに涙が溢れ・・言葉が途切れ途切れになるが最後まで言う事が出来た・・俯く僕の頭にお父さんの手が置かれる

「エリオの誕生日パーティーの始まりだッ！！」

お父さんの合図でパーティーが始まった

「エリオ、ほら私頑張って作ったんだよ！！」

フェイトさんが自分の作った料理を持ってきてくれたり

「ほいほい・・育ち盛りなんやで一杯食べ」

「その通りだ、子供はどんどん食べて育て」

僕のお皿にどんどん、料理を乗せてくれる部隊長とチンクさん、パーティーは賑やかで楽しい物だった

「さてと・・では私からの誕生日プレゼントだ」

食事が終わったら、皆から誕生日プレゼントを貰いました、スバルさんからゲーム、ティアナさんからは本、フェイトさんからは何故かぬいぐるみを貰いました（何処と無くお父さんに似てる気がします）最後にお父さんから渡されたのは大きな箱でした

「キャロ、おいで」

僕にその箱を渡すと、キャロを呼び寄せ同じように箱を渡す

「これもしかして・・あの服ですか？」

キャロがその箱を抱きしめながら尋ねる

「そうだよ、折角だからエリオにも作ったんだ・・着て見てくれるかな？」

頷き一回着替えに食堂から出て、着替えてから食堂に戻りました

「おお・・ピッタリやな」

部隊長が驚いたと言う感じで呟くのが聞こえます

「どうですか？似合ってますか？」

お父さんがくれた服は黒を基調にした物で、所々青と金のワンポイントが入っていて格好良いと思う

「エリオ、凄い似合ってるじゃん！良いな・・私も作って欲しいな・・服・・嘘・・嘘ですからダガーを仕舞って下さい！！」

スバルさんがダガーを向けられ慌てて謝罪してるのが見えました・・

「えへへ～お父さんぴったりですよ」

キャロが僕が来た方向の逆から歩いてきました

「うわ・・凄い・・可愛い・・」

僕は思わずそう呟いた・・ピンクを基調としたフリル付きの服で、どことなく民族衣装に似てますが、今風にアレンジされていて。とても可愛い服でした

「あらあら・・流石八神兄様・・服作りの腕はピカイチですね」

クアットロさんがその服を見ながら呟き

「良いなあ・・私も作って欲しいな・・」

ティアナさんが言うと

「ふふふ。貴方は持っていないのですか?私達は皆。龍也様に服を作って貰いましたよ?」

セッテさんが挑発しています、視界の隅で二人が言い合っていましたが、僕はそれを無視してキャロの前に行きました

「エリオ君・・凄い格好良いよ」

キャロが格好良いと言ってくれるので僕も

「キャロも凄い可愛いよ」

二人でお互いの服を褒めてると

「ふふ・・気に入ってくれたか?だが私のプレゼントはそれで終わりじゃないぞ?」

お父さんが何か楽器の入っているであろう。ケースを担いで笑っています

「お父さん・・それは何ですか?」

気になって尋ねると

「ヴァイオリンさ・・一曲弾いてあげるから踊ると良い」

そう笑うお父さんだが

「僕ダンスなんか出来ませんよ?」

ダンスなんてした事が無いので、慌てて踊れないと言うと

「好きに踊れば良いんだ・・それにキャロは待ってるぞ?」

えっ?振り返るとキャロは何か期待した目でこっちを見てます

「うう・・判りました・・やってみます」

決心してダンスに挑戦すると言うと、小声でお父さんが

（こういうのは男の方から誘うんだ・・頑張れよ）

と良い僕の背を押してくれました、僕は決心して

「キャロ・・その一曲踊ってくれる？」

「うん！」

キャロの手を取って、判らないなりに踊り始めると

お父さんのヴァイオリンから優しい音が奏でられます・・それはとても綺麗で心に響いていきます。それに判らないのにステップが踏めます・・踊ってると周りから

「良いなあ・・私もあんな風に踊りたいな・・」

というフェイトさんの声や・・

「凄い綺麗な音色・・龍也さんってヴァイオリンも弾けたんだ・・」

ティアナさんのうっとりとした声が聞こえてきます・・

「えへへ・・エリオ君・・楽しいね」

キャロが楽しそうに言うので僕も

「うん・・凄く楽しいよ」

と笑いながら返事を返し。踊ってると曲が終ったのか・・音楽が止まります

「さて?どうする?もう一曲踊るか?」

と笑いながら尋ねて来るお父さんに

「はいっ!!もう一曲お願いします!」

と言うとお父さんは頷き

「それじゃあ・・次はクラシックは止めて・・ヴァイス来い!!」

ヴァイスさんを呼ぶと。二本のギターを持ってヴァイスさんが歩いてきます

「旦那・・俺は旦那みたいに上手く弾けないっすよ?」

頭を掻きながら笑うヴァイスさんに

「音楽は技術じゃない・・心で弾くものだ」

と笑いヴァイスさんからギターを受け取り

「ヴァイス・・合わせろよ?」

チューニングしながら、ヴァイスさんに笑うと

「ええい・・男は度胸だ!!旦那・・行きますぜ!!」

二人のギターから激しい中に優しさを持った。音が流れ出します。

二人で又踊り出します・・それはとても明るい音楽で・・聞いてる

だけで心がぽかぽかとして来ます・・僕とキャロはその音楽が終るまで踊っていました・・こんなに楽しくて・・賑やかな、誕生日パーティーは初めてでとても楽しかったです

「お父さん・・本当に良いんですか?」

パーティーが終わり、部屋に戻ろうとすると、お父さんに呼び止められて。一緒に寝るかと言われたので、キャロと一緒にお父さんの、部屋に付いてきましたが・・本当に一緒に寝て良いのか?と尋ねると

「良いに決まってるだろう?ほら・・二人ともおいで」

呼ばれてお父さんの方に行って、ベッドに横になります

「暖かい・・です・・」

恥かしい気もします・・でもそれよりも安心感の方が上でした

今日は・・良い夢が見れそうです・・

「ゴレラ・・いえ・・ハーティーン。貴方はブリッズを助けに行ったのではないのですか?」

基地に戻るなりヘルズが姿を見せ尋ねて来る

「忘れたか?俺は俺の味方だ・・誰が死のうと関係ない・・それにブリッズは情けでダークマスターズになったんだ。居なくても困らんだろう?」

ブリッズはかなり不安定なＬＶ４で折角増やしたネクロも暇だからという理由で消滅させる。簡単に言えば問題児だった

「それは・・そうですが・・ＬＶ４は貴重なんですよ・・出来れば助けて連れて来て欲しかったです・・もし戦えないのなら・・ヴェノムに実験材料として渡せば良いのですから・・」

・・・こいつも何気に酷い事を言う・・と思いその場を後にした

「守護者・・何故こいつは誰かを護る？」

宛がわれた質素な部屋で、守護者の事を思い出す・・判らない・・何故アイツは誰かを護る・・？アイツ程の力の持ち主なら・・一人でも戦える・・その気になれば管理局のトップにもなれる・・だがそれをしないのは何故だ？

「判らない・・俺は・・アイツが判らない・・」

俺も誰かを助ければ判るのかと思い、子供を助けた事もある・・

「だが・・判らない・・どうして守護者は誰か助けて笑う事が出来る？」

俺はアイツのように笑えなかった・・確かのその子供を助ける事は出来た、だが笑う事は出来なかった・・

「アイツを倒せば判るのか？・・俺は・・答えを得る事が出来るのか？」

俺は答えの出ない自問自答を繰り返していた・・・

第６５話に続く

## 第６４話（後書き）

２話連続・・少し疲れました・・次の更新は日曜か月曜になると思います・・
それでは次回の更新をお楽しみに

## 第６５話（前書き）

日曜日更新予定でしたが、予定より早く話が完成したので、投稿します
今回は・・はやてとのデートの話ですね・・はやてが暴走しがちになるので気をつけて執筆しました。次の投稿は少し遅れると思います（エリオの強化のしすぎで、すこし困ってるのが理由です）投稿は遅れますが、完結まで書くので応援宜しくお願いします。

感想、レビューは常時お待ちしています

# 第６５話

第６５話

誕生日パーティーの次の日の演習場で

「もう終わりか？」

ブレイクモードで騎士甲冑を起動させたままで、目の前のセッテに問いかける

「はぁ・・はぁ・・まだです・・まだ私は・・負けていません・・」

ソルエッジを杖代わりに立ち上がるセッテの瞳はまだ負けを認めておらず・・強い意志の力があった

「行きますッ！！」

息を整え、踏み込みながらソルエッジを振るってくる

「ふっ・・」

左の篭手で受け流し。軽く肩に打撃を加える

「・・つ・・」

よろめき倒れかけるセッテに

「無茶をしても強くはなれんぞ？」

私の目から見れば、すでにセッテは限界を軽く超えている

「まだです・・私は龍也様を超える・・・貴方を護れるよう・・に・・」

グラッ・・意識を失い倒れかけるセッテを

「っと・・まったく・・気絶してまでソルエッジを放さないか・・」

気絶してまでソルエッジを放さないセッテを背負う

「まったく・・私の何処が良いんだ?・・セッテみたいな美人ならもっと良い男が居るだろうに・・」

気絶したセッテを背負いながら私はそう思う・・何故セッテはここまで私を慕ってくれるのか・・それが判らなかった

「八神・・セッテは?」

チンクが心配そうに駆け寄ってくる

「魔力の酷使で気絶してる・・少し休めば目を覚ますと思うが・・一応念の為にシャマルに見て貰うと良い」

気絶してるセッテを下ろしながら、チンクにセッテの様子を説明すると

「ったく・・この馬鹿は・・無茶しすぎなんだよ」

ノーヴェが心配そうに濡れたタオルをセッテの額に乗せる

「セッテの八神兄様至上主義も困った物ですわ・・私はセッテを医務室に連れて行きますわ」

クアットロがセッテを背負い演習場を後にした

「う～ん、セッテも無茶するっすね・・龍也兄次は私っすか？」

セッテの事を心配しつつも、次は自分かと尋ねるウェンディに頷く。チンクはノーヴェ達の情報をクアットロと共に纏めていたから今回は不参加・・ノーヴェはもう組み手をしたので終わり。残るはウェンディだけだ

「・・緊張するっす・・」

ウェンディは大きく深呼吸をしながらこっちを見ている。

「ええい・・行くっすよ！！セットアップ！！」

濃紺のバリアジャケットに、その足元には大型のボードがあった。これがウェンディのデバイス・・バニシングバード・・凶鳥を意味するが・・味方ならこれほど頼もしい物は無い・・防御・砲撃・近接・・マルチに対応する事が出来るからだ

「ＩＳ発動！！・・んで・・マッハインパルスッ！！！」

ＩＳで浮上すると同時に。加速突撃してくる

「むっ・・」

サイドステップで回避するが

「まだまだっす！！」

即座にボードの機首を上げて、上空に向かい

「でえええいっす！！！」

私目掛けて急降下してくる・・あのスピードでの体当たりだ・・喰らえば大ダメージは必須だが・・

「当たると思ってるのか？」

後方に飛びそれを回避すると

「当たるとは思ってねぇっすよ！！私の狙いは・・ナイトモード！！」

ボードを騎士甲冑に変化させて、着地と同時に

「ストライクザンバーッ！！」

足の騎士甲冑から魔力刃を発生させて蹴りこんでくる

「！・・甘い・・」

驚きはしたが・・蹴りには切れが無く狙いも甘い。足を掴み

「うあっ！」

そのまま投げ飛ばす

「げふっ・・・酷いっ・・す」

体裁きの甘いウェンディはビルに追突して。気絶した

「・・・私が悪いのか？」

気絶したウェンディを指差してチンクに尋ねると

「・・・私がもう少し体術を教えておく・・」

チンクの呟きに頷き・・ウェンディを背負いチンク達と合流し食堂に向かった

「龍也さん・・訓練は終った・・・何故ウェンディを背負ってるんですか？」

ティアナが鋭い目でウェンディを睨む

「訓練中に気絶したので。背負ってきたんだが・・何か問題があったか？」

気絶してるウェンディを下ろし、自分の朝食を取りに行ったが・・

「へっ・・此処は食堂っすよね・・・はっ！ティアナ・・・」

「良いわね・・龍也さんにおんぶしてもらって・・私とお話しましょう？」

「あああああああっ！！！」

ウェンディの絶叫が聞こえたが、私は振り返る事が出来なかった・・
すまない・・私はお前を見捨てる事になる・・

「あううう・・酷いっす・・」

机に伏せてるウェンディは酷く消耗し

「嫉妬に狂う女は怖ぜっ・・」

ノーヴェは青い顔をして、震えていた

「くすくす・・」

ティアナは黒い笑みで笑っていた・・その笑みは何故か底冷えする
恐ろしさがあった

（・・しかし何故？ティアナは怒ってるのだろう？）

私は何故ティアナがウェンディに怒ったのかが判らなかった・・
鈍感過ぎる男・・八神龍也。彼に想いを寄せる女性の気持ちに、彼
が気付くのは何時の日になるだろう・・

「なぁ・・ヴィータ・・おかしくないか？」

自室で私服に着替えてヴィータに聞く

「私はそれで良いと思うぞ?兄貴に露出のある服を見せるのはマイナスだかんな」

二人で服を考える・・・誕生日パーティーの後に遊びに行くと約束していたので。もう直ぐ兄ちゃんが迎えに来るはずだ

「普通なら・・露出のある服は男の人好きそうやけど・・相手は兄ちゃんやもんな・・普通じゃだめやから」

それに普通ならもう少し人の好意に気付くもんやろ?まぁ・・気付かれるのは私が嫌やけど・・

仮に兄ちゃんが彼女を作ったと仮定しよう・・・ビキッ!!

「はやて!?どうした顔が怖いぞ!?」

ヴィータの声で正気に戻る・・仮定だとしても殺意が抑えられん・・まじでその女殺しかねんな・・

「なぁ・・ヴィータ。兄ちゃんは、どうしたら私の気持ちに応えてくれると思う?」

昔からなんどもやったやり取りだ

「そうだよなぁ・・私さ兄貴に好きだって言ったって言ったただろう?でも兄貴は前のまま・・意識した素振りを見せねぇ・・どうしたら良いかなんて私にも判らねぇよ・・」

うーなんで兄ちゃんはあんな鈍感なんや・・と頭を抱えてると

「はやて?準備できたか?出掛けるぞ?」

扉の外から兄ちゃんの声が聞こえたので

「ちょっと待ってて・・今着替えとるで」

と返事を返し、出していた服をクローゼットに仕舞ってから

「おっしゃ!!ヴィータ行って来るわ!」

気合を入れて部屋を後にした

「兄ちゃん・・お待たせ」

部屋の外で兄ちゃんは腕を組んで待っていた

「いや・・そんなに待ってないから気にするな」

と笑う兄ちゃんの黒を基調とした服を着ていて、凄く格好良いと思う

「えへへ・・兄ちゃんと一緒に出かけるなんて何時振りやろか?」

二人で街に出掛けながら、私は笑顔で兄ちゃんに話しかけた

「そうだな・・昔はずっと二人だったからな・・」

その通りだ・・昔は私と兄ちゃんは二人だけで、ずっと二人で居るのが当たり前だった・・ヴィータやシグナムは良いでも。なのはち

ゃんやフェイトちゃんは余り好きやない・・二人は私から兄ちゃんを遠ざける・・そんなのは嫌だ・・兄ちゃんは私の兄ちゃんなんやから・・私の大好きな私だけの兄ちゃんなんやから

「・・兄ちゃん大好きや」

私の物だという意味を込めて、兄ちゃんの腕を抱き抱えて私が言うと

「やれやれ・・いい加減兄離れして欲しい物だ」

と言いながらも私の頭を頭を優しく撫でてくれる

「嫌や～私はずっと兄ちゃんと一緒に居るって決めたんやもん」

そうだ・・私はずっと兄ちゃんと一緒に居るんや・・誰にも渡さない・・兄ちゃんは私のなんやから・・

私は兄ちゃんの腕を更に抱きしめて笑いながら歩を進めた。

「んふふ～最高や」

私の腕をしっかりと抱え込んだはやては良い笑顔で笑っている

「歩きにくいんだが？」

余りに距離が近い為歩きにくいと言うと

「知らん・・私は歩きにくない」

取り付く島も無い様で更に抱きしめる力を強める、はやてに苦笑しながら、デパートへ向かった

「ふっふーん。兄ちゃん。これなんかどうや？」

婦人服売り場ではやてはどんどん試着して、私に感想を求めてくるが

「すまない・・私は余り良く判らない・・」

普通ならもっと気の聞いた事が言えるだろうが・・私には良く判らなかったので、正直に言うと

「そんなん判ってる。私が聞きたいのは、兄ちゃんはこういう服は好きかどうかや」

はやての着ている服を見る・・シンプルな物だがお洒落だ・・それに露出も少ないし・・はやての魅力は充分に引き出していると思う

「そうだな・・私はそういう服のほうが良いと思う」

返事を返すとはやては満足げに笑い

「そうか～、じゃあ私これ買うわ・・ちょっと待っててな・・」

はやてが着替えに戻った間に

「・・何かプレゼントを買うべきだな・・」

私は近くの装飾店に入り、はやてへのプレンゼントを購入し、綺麗にラッピングして貰ってから、はやての所へ戻った

「・・おっ・・兄ちゃん探したで?何処行ってたんや?」

婦人服売り場に戻ると、はやては服の入った袋を持って、少し怒ったような顔をしていた

「すまん・・少し買うものがあったから探しに行っていた・・」

「なんや・・そんなら私も一緒に捜しに行ったのに・・」

と笑うはやてと共に、再び買い物戻ったが・・

「所ではやての周りに人が居なかったが、どうしたんだ?」

はやての周りに綺麗に人が居なかったので尋ねると

「ナンパされそうやったから。ダガー投げた・・」

若干後悔という顔をしているので深くは聞かなかった

「次は何を買うんだ?」

デパートの中を歩きながら尋ねると

「えへへ・・ロケット!私とお揃いで買おっ!・・ペンダントもボロボロやしさ・・」

私とはやての首から下げられているペンダントは、8年前に買った

物なので所々メッキが剥がれてしまっている

「そうか・・判ったでは行こうか?」

「うんっ!」

装飾店に入り、お揃いでロケットを探す

「いらっしゃいませ・・どのような物をお探しでしょうか?」

初老の店員が人の良い笑顔で尋ねて来る

「すいません・・そのお揃いでロケットを探してるのですが・・」

ロケットを探してると言うと

「さようですか・・判りました。良い品があります」

初老の老人が差し出したのは・・

「これは・・ベルカの十字架ですか?」

ベルカの剣十字をモチーフにされた、金と銀のロケットだった

「はい。その通りでございます、如何でしょうか?お気に召しましたか?」

そのロケットは私の目から見ても。美しい装飾が施されとても良い物だとは判る

「そうですね・・気に入りました。これ貰います」

「そうですか、■■■■■になります」

高いな・・だが買えない額じゃない

「判りました・・■■■■■ですね。これでお願いします」

支払いをすると少々お待ちください・・と言い消えた店員を見ていると

「兄ちゃん・・あんな高いの良いの？」

はやてが不安げに尋ねて来るが

「気にしなくていい・・私もあれは気に入ったからな」

と笑いはやての頭を撫でてると

「お客様・・こちらの方へお願いします」

呼ばれた方に行くと、カメラが置かれた部屋があった

「本店ではロケットを買われたお客様には、中に入れる写真もセットですので」

と笑う店員に促されはやてと並んで立つ

「それではそのままでお願いします・・カシャッ！！・・もう宜しいですよ。直ぐに現像しますので暫くお待ちください」

店員を待って二人で話して時間を潰してると

「お待たせしました・・どうぞ」

ロケットを手渡されて中身を見る

「綺麗・・」

ロケットの中の写真には、とても美しい笑顔で笑っているはやてと、
それに寄り添う形で私が立っていた

「またのお越しをお待ちしています」

店の外まで見送られその店を後にした

「ありがとう・・兄ちゃん・・大切にするわ」

はやてはそのロケットを握り締め笑っていた

「そうだな・・私も大切にするよ」

金色に輝くロケットを握り締めた。誓いを・・はやてを護るという
誓いを忘れぬ為に

「兄ちゃん・・そろそろお昼やから、何か食べよ」

ロケットを買って、ウィンドショッピングを楽しんでいたが、そろ

そろお昼だという事に気付き。兄ちゃんに言う

「そうだな・・何か食べるとしよう・・はやては何が良い？」

何にしようかな～と思い店を見ていると、一軒の店が目に止まった

「そうや！・・偶にはファーストフードでハンバーガーにしよか？」

偶にはこういうのも良いと思いそう言うと

「そうだな・・偶にはこういうのも悪くないな」

と笑う兄ちゃんと一緒にハンバーガーを食べた・・美味しかったと思うが、前に兄ちゃんが作ってくれた方が美味しかったと思った

「・・今度作ってみよう・・あのテリヤキバーガー」

兄ちゃんは何故か注文したテリヤキバーガーが気に入ったようで、そんな事を呟いていた・・それがおかしくて笑ってると

「むっ・・何がおかしいんだ？」

首を傾げる兄ちゃんの腕を抱き抱えて

「なんもおかしないよ、それよりはよ買い物行こっ！」

急に腕を抱き抱えられた、兄ちゃんは驚いたのか、目を見開くが

「判った、行こうな」

と微笑む兄ちゃんの腕を確りと抱き抱え歩き出した

「やっぱ・・兄ちゃんと一緒に居るのが一番楽しいわ」

夕暮れ時まで買い物を楽しみ、帰り道で私がそう言うと

「・・私としては早く兄離れして欲しいと思うがな」

と言う兄ちゃんに

「別に私は兄離れしても良え、でもそうやったら女として迫ります。私と兄ちゃんは従兄弟やからね。私は別にどっちでも良いで？」

兄離れしても良いが兄ちゃんを他の女に渡すつもりは無い、ならどんな手を使っても自分の物にするまでだ。妹ならそこまで変な事をするつもりは無いが、女としてならどんな手でも使う。それこそ薬でもなんでもだ・・

「・・今のままで良い・・」

疲れた様に言う兄ちゃんに頷き、二人でゆっくりと六課に戻って行くと

「ああ・・忘れる所だった、プレゼントがあったんだ」

そういって差し出された箱を受け取り

「開けて良え？」

開けて良いかと尋ねると

「勿論。開けて良いぞ」

兄ちゃんの了承を聞いてから箱を開ける

「綺麗やわ・・兄ちゃんこれ高かったやろ?」

紫色の宝石・・多分アメジストだ、それが大量に使われた花のブローチを見ながら尋ねると

「今まで渡せなかった、誕生日プレゼントだと思ってくれれば良い」

なんや・・兄ちゃん気にしてたんやな・・今まで誕生日プレゼントを渡せなかった事を・・

「そんなん気にせんで良かったのに・・でもありがとう!大切にするわ!」

渡されたブローチを大切にポケットにしまい。兄ちゃんの腕を再び抱き抱えた。

(ふふふ・・嬉しいなぁ・・これ大切にしないとな・・)

私はロケットとブローチを見ながら私はそう思った。昔からずっと一緒に居てくれた兄ちゃん・・ずっと護ってくれた兄ちゃん・・

私は兄ちゃんが大好きやっ!これからもずっと・・ずっと大好きや!私は絶対兄ちゃんから離れない!そう決めたのだから・・

「喜んでもらえて良かったな・・」

はやてと別れ、自室で休憩しながら私はそう呟きながら。紅茶を一口飲み

「ふふ・・はやてはあの花の花言葉に気付くかな？」

はやてがあの花の花言葉に気付くかと思っていた。気付けば気付いたで大変だとは思うがそれでも良い。と思い笑っていると

「王よ、どうなされたのです？その様に笑っている等と、何か良い事があったのですか？」

問いかけてくるセレスに

「ふふ・・ああ・・今日はとても良いことがあった、久しぶりにはやてと二人きりだったんだ」

と言うとセレスは柔らかい笑みを浮かべ

「それはそれは良かったですね、どうでしたか？はやて様と共に居た時間は？」

と尋ねるセレスに

「そうだな・・とても楽しかった・・はやてと共に居るときは一番心が安らぐ・・なにせはやては・・私に光をくれた者だからな」

と笑う。父さんと母さんが死んで絶望の淵に居た私を救ってくれた

のは誰でもない、はやてだ。私ははやてには言葉で言い切れないほど感謝していると言うと

「王よ・・私に名の意味を覚えていますか？」

と問いかけてくるセレスに

「ああ、覚えているとも・・空の上から見守る者・・天界の青き風・・セレス・・違うか？」

と答えるとセレスは満足げに頷き

「私はその名に恥じぬように、貴方と貴方の家族を護る事を今一度誓います」

と頭を下げるセレスの姿は間違いなく騎士だった・・

「判った、セレスの誓いしかと。この胸に刻んだ。これからも天雷の騎士としての活躍に期待している」

と言うとセレスは微笑みながら

「はっ！お任せください！我が名と誇りに懸けて」

と頭を下げてセレスは溶ける様に消えた・・

「やれやれ・・心臓に悪いな・・」

セレスの得意技だとは知ってるが・・やはり心臓に悪いと思ってると

「兄ちゃん・・起きてるか？」

はやてがノックしてから入ってくる

「うん？どうしたはやて？」

あのブローチの花言葉に気付いたのかと思ったが・・違うようだった

「あんな？兄ちゃんが私の兄ちゃんになってくれた日は、一緒に寝る約束やったやろ？でもあの時は一緒に寝れなかったから・・今日一緒に寝よう思ったんやけど・・駄目？」

と尋ねて来るはやてに

「別に良いよ・・じゃあ一緒に寝ようか？」

「うんっ！」

笑顔で頷くはやてと一緒にベッドに横になった

「なぁ・・兄ちゃんあのブローチの花の花言葉って何？」

布団に包まりながら尋ねて来るはやてに

「秘密だ・・」

教える訳には行かない・・此処で教えたら私のアイデンティティは崩壊させられてしまうからだ

「んーそうか・・じゃあ自分で調べるわ」

と笑うはやてを見ながら私は

（あの花の名はゼラニウム・・花言葉は・・君ありて私の幸せ・・）

あの花言葉を教える訳には行かないからな・・はやての事だからプロポーズやねっ！とか言いそうだしな・・と思いはやてを見ると

「むにゃ・・むにゃ・・兄ちゃん大好きや・・」

疲れていたのか直ぐに眠ってしまった、はやてに苦笑しながら髪を撫でる

「ふふふ・・・いい加減、兄離れしてくれると良いんだけどな・・」

と思いながら、私も眠りに付いた。

決して色褪せる事の無い誓いを胸に・・私は剣を振るおう・・大切な家族を護る為に・・

第６６話に続く

## 第６５話（後書き）

セレスの名前の由来は鉱石なんです、少し調べれば判ると思いますよ？
作者はその石が好きなんですよ。

ゼラニウムの花言葉・・作者は好きです。この話は大分初期から考案していました

次回はバトルです・・少し間隔があくと思いますが、次の更新をお楽しみに

# 第６６話（前書き）

少し間隔が空いてしまいましたが、最新話を投稿します
天雷の書の最終形態となのはの強化の話です。
クアットロが味方なので、今回のネクロは原作のクアットロの役割を与えています
次の話でなのはの強化が完了しますが・・かなりの強化になると思うので・・・
登場をお楽しみに

# 第６６話

第６６話

「闇を晴らす黄金の輝き・・エクストリームジハード・・うう・・何が足りないんだろう？」

自室で私は頭を抱えていた。・・今のままでも威力はあるが、スターライトと同クラス・・スターライトを超える力は無い。それに

「スバルもティアナもヴィータちゃんも凄いパワーアップしてるから。私も頑張らないと・・」

部下の大幅のパワーアップに私は少し焦っていた。龍也さんを撃墜することに成功したのはスバルとティアナのみ・・私はダメージは与えれるが・・倒すまでは行かない。・・

「違う！違う！何で私は龍也さんを倒す事考えてるの！！」

何故か、龍也さんを倒す方法にシフトして行った思考を、頭を振る事で正常に戻すが・・それと同時に

「・・はぁ～最近ライバル多いよね・・」

私は溜め息を吐いた・・昔は、はやてちゃんとフェイトちゃんにヴィータちゃんがライバルだったが。今はかなり増え１１人・・どうしてこうなったのだろう

「うう・・龍也さんモテすぎだよ・・」

昔から龍也さんはモテた。理由は簡単スポーツは水泳以外万能、頭も良い。料理等も完璧で顔も良い・・それに何より優しい・・これでモテ無い方がおかしいと私は思う・・

「ああ・・もう止めっ！寝る！」

段々イライラしてきたので、寝る事にした・・

次の日・・

「うう～ん・・良く寝た・・」

大きく伸びをしながら布団から出て、身嗜みを整えてから自室を出る

「龍也さん居ないかな？」

通路を歩く、龍也さんは基本朝が早いので、早起きすれば遭遇する確率が高くなる。と思い龍也さんの姿を探しながら歩いてると

「居たっ！」

黒のロングコートと腰元まで伸ばされた黒髪、間違いなく龍也さんだが

「・・演習場？今日は訓練無いはずだけど・・」

真っ直ぐに演習場に向かう、龍也さんが気になりこっそり後を付ける

「天雷の書とガーディアンズハート？・・何するつもりなんだろう

？」

演習場に入るなり、二つのデバイスを取り出した、龍也さんに首を傾げてると

「・・なのは・・そこで何してる？」

振り返った龍也さんの目と何時の間にか視線が合っていた

「あははは・・すいません。龍也さんが演習場に行くのが見えたので、気になって着いて来たんです」

正直に言い龍也さんの傍に歩いていくと

「はぁ・・別に良いが・・邪魔はしないでくれよ？私だって訓練をしないと腕が鈍るからな」

そう言うと龍也さんはコートを脱ぎ、椅子の上に置いた

「なにするつもりなんですか？」

気になり尋ねると

「天雷の書の最終形態の訓練をしようと思ったんだ」

！？最終形態・・まだ上があったんだ、と驚いていると

「兄ちゃん来た・・なんでなのはちゃんが居るんよ」

はやてちゃんが嬉しそうに来たが。私の姿を見るなり鋭い視線で此

方を睨む・・うう・・慣れてるけど怖い・・

「私が演習場に来るのが見えたから着いて来たそうだ」

はやてちゃんに龍也さんが説明すると

「まぁ・・良いわ。スバルとかやったら問答無用で叩き出すけど、なのはちゃんなら許すわ」

何気に怖い事を言って、私の隣に腰掛けるはやてちゃんと、龍也さんを見るセレスさんとユニゾンしているのか、髪は銀に瞳は蒼銀に染まっていた。ゆっくりと詠唱を行う・・

「大いなる守護の力よ・・天空を支配する、天雷の力と共に・・今こそ真なる力を解放せよ」

二つのデバイスが光り輝き、龍也さんの姿を隠す

「凄い・・」

光が晴れ、龍也さんの姿を見たとき私は思わずそう呟いた。白銀に輝く鎧とその背に生えた、龍の様な翼・・手には翼を広げた鳥の様な装飾が施された、美しい刀身を持つ白銀の剣。その姿は神々しいまでの力強さがあった・・

「さてと・・やるか」

そこから剣を振るう・・それは一種の舞の様な美しさがあった。鋭く振り下ろしたかと思えば、緩やかに後退しながら剣を振るう、剣は銀に輝く一本の線にしか見えないが、とても美しい演舞だった

「思ったよりも動きやすい。前は禄に動けなかったのだが・・」

（そうですね・・やはり王の身体能力が上がったのが理由では無いでしょうか？）

二人の話を聞くと、どうやら前は龍也さんでも制御出来ないほどだったようだ・・しばらく龍也さんの剣舞を見ていたが

「あの龍也さん、頼みがあるんですけど良いですか？」

少し剣舞の動きが緩やかになった所で声を掛ける

「何だ？」

剣を腰の鞘に戻した龍也さんに

「あの・・スターライト使えますよね？」

龍也さんの事だからきっと、私達の魔法も習得していると思い尋ねると

「出来るが・・それがどうかしたか？」

首を傾げる龍也さんに

「今新しい砲撃魔法を考えてるんです、参考にしたいので使って貰いたいんですけど・・良いですか？」

他の人が使うスターライトを見るのも、良い参考になると思い頼む

「そういうことなら協力しよう。少し離れてろ」

龍也さんから少し距離を取ると、龍也さんは魔力の収束を始めた

「全ての咎人に聖なる星の断罪を・・」

龍也さんの目の前にミッドの魔方陣が展開される。それに凄まじい勢いで魔力が収束されていく・・

「・・スターライト・・」

収束された魔力が更に収束される

「ブレイカーッ！！！」

放たれた蒼色の砲撃は、簡単にシュミレーションのビルを消滅させた

「これで良いか？」

振り返り尋ねて来る、龍也さんに

「はい！ありがとうございましたっ！」

ヒントは得た、後はこれをベースにエクストリームジハードを完成させれば良い。と思い頷くと

「そうか、参考になったのなら良いが・・さてとモードリリース・・ユニゾンアウト」

騎士甲冑を解除し、ユニゾンも解除し

「さてと・・そろそろ朝食だ。はやて、なのは食堂に行こうか？」

と笑う龍也さんに頷くと

「私は失礼します。私に食事は必要ないので・・」

頭を下げ演習場を後にしたセレスさんを見ながら、はやてちゃんが

「兄ちゃん、気になってたんだけど・・セレスさんは何で物食べへんの？」

私も気になっていた事をはやてちゃん尋ねると

「なんでも私の魔力があれば、食べ物は必要ないそうだ」

その説明に頷き。三人で食堂に行ったがその際、ティアナとセッテの連合に、問い詰められた事を此処に記す

「ヘルズ様お呼びでしょうか？」

何も無い空間から突然聞こえてきた声に

「ふふふ・・待っていましたよ。ファントム」

笑みを零しながら返事を返す

「ファントム・・貴方には頼みたい事があるんですよ」

ファントムに指示を出す

「判りました・・必ずや成功させて見せます」

頭を下げ空気に溶ける様に消えたファントムに

「ふっふっふっ・・これで良いファントムなら必ずや成功してくれるでしょう」

一人になった部屋で私は笑っていた・・極上の悪夢を味わって貰いましょうか?エース・オブ・エース・・

ビーッ!ビーッ!

「部隊長!市街にネクロの反応です。数は４０!その内２８がＬＶ１、１１がＬＶ２・・そしてＬＶ３が一体です!」

報告を聞きながら、作戦を考える。市街なら民間人の避難が最優先だ

「よし。アサルトフォースとライトニングは民間人の避難誘導。スターズと兄ちゃんはネクロの進軍を防いで」

馴染んでいないチンクさん達を前線に出す訳には行かない。ライトニングと協力して民間人の保護が最適な任務だろう。ヘリに向かう

なのはちゃん達に作戦を伝えると

「待ちなさい！はやて。何故私達が避難誘導なんですか！私達は充分戦えますよ！」

セッテが怒りながら尋ねて来るが

「悪いなぁ、流石に直ぐ前線に出す訳には行かんのや。それにネクロが暴れてるのは繁華街や。人がようさん居る。流石にライトニングだけや非難誘導が間に合わんのや、だから今回は裏方に回ってええな」

諭すように言っていると

「セッテ、はやてを困らせるな。説明は判った。私達も出る」

チンクさんがセッテに言うと、渋々といった様子で頷いたセッテを見てると

「はやて、私達は先に出る！」

兄ちゃんとなのはちゃん達がヘリに乗り込み言う

「うん！判った！、ネクロ達の方は任せるで兄ちゃん」

「任せておけ。ヴァイス！ヘリを出せっ！」

「了解！確り捕まってて下さいよ。飛ばしますからね」

勢い良く飛び立っていくヘリを見ながら

「うしっ！私達は皆の援護を頑張るでぇっ！」

「「了解！」」

私は皆が向かった先が映ったモニターを見ながら、そう声を掛けた

「それでメンバーの編成はどうしますか？」

現場に向かいながら、なのはが尋ねて来る

「私となのは。スバル、ティアナ、ヴィータのチームだな。私となのはでＬＶ３とＬＶ２の大半を押さえる」

作戦を話してると

「兄貴、二人で大丈夫なのか？スバルかティアナを連れた方が良くないか？」

ヴィータがそう言うが

「スバルとティアナはコンビだから、離す訳には行かない。それにヴィータなら二人に指示を出せる。つまりこの編成が一番良い」

最適な編成だと話してると

「旦那！現場に着きましたよ！降下してください！」

ヴァイスに頷き降下しながら、天雷の書をブレイドで起動させる

「ヴィータ！そっちは任せるぞ！」

別の方向に降下していくヴィータ達に声を掛けると

「任せとけ！こっちが早く片付いたら援護に行くかんな！」

頼もしい返事を返すヴィータに笑みを浮かべながら、着地する

「守護者ダ・・たおセ！」

私となのはに気付いたＬＶ２が、耳障りな声で味方のネクロに声を掛ける

「なのは。後ろは任せる」

後ろのなのはに声を掛ける

「任せてください。龍也さんの背中は私が守りますよ」

笑みを浮かべるなのはに頷き、私は剣を構え駆け出した

「死ネ！守護者！」

ＬＶ２が武器を構え向かってくるが

「遅い・・」

この程度の攻撃目を瞑っていても交わせる

「ふんっ！」

「ぎゃあっ・・・」

回し蹴りから、袈裟切りに斬り付け消滅させる

「キキー！！！」

ＬＶ１が飛び掛ってくるが

「させません！ディバインシューターッ！！！！」

三つの光球を生み出し放つ、それはＬＶ１を確実に貫く

「キ・・キ・・」

貫かれたネクロは苦しみながら消滅していく

「やるじゃないか」

迫ってくるネクロを斬捨てながら言うと

「当然です、私だって強くなってるんですよ？」

と微笑む、なのはの周りには待機状態のディバインシューターが浮かんでいる

「ふっ・・そうだったなっ！・・ザンッ！キキッ・・」

影から飛び出してきたネクロを見る事無く斬捨てる

「ディバインシューターッ！！！！」

誘導弾でＬＶ２のネクロにダメージを与え、私が

「瞬連刃っ！！」

ダメージで動きの鈍ったＬＶ２に接近し、高速の斬激で次々消滅させていき、ＬＶ２が殆ど姿を消した所で

「ソウル・・チョッパーッ！！

背後から巨大な鎌が回転しながら迫ってくる

「むっ！」

ガキーンッ！

反射的に剣で受け止めるが、回転は止まらず

ギャリッ！ギャリッ！

剣と鎌がぶつかり、火花を散らす

「はあっ！」

力を込め切り払う

「流石は守護者だ。この程度では倒せんな！」

クルクルクル・・バシッ！

飛んでいった鎌を掴むネクロの姿が見えた

「ひっひっひ・・私はファントム・・悪夢を司る者だ」

黒のマントに巨大な鎌を背負ったファントムは・・まるで死神のようだった

「大層な事を言うな・・っ！！」

地を蹴りファントムに接近し、剣を振るうと

「おっとっと・・危ない・・危ない・・」

マントを翻しながら私の攻撃を回避し笑いながら、なのはに近付くが

「ディバイン・・・バスターッ！！！！」

それより早く、なのはがファントム目掛け、ディバインバスターを放つ

「ひひ・・そんなのは当たりませんねぇ？」

マントで受け止めたと思うと

「そら・・守護者。味方の攻撃をお返ししますよ？」

マントを振るうとディバインバスターは向きを変え、私に向かって来る

「何ッ！・・くっ・・」

剣を盾代わりにするが、衝撃までは殺せず後方に飛ばされる

「龍也さんっ！」

なのはの声が聞こえ、私が体勢を立て直した時に見た物は

「ひっひっひ・・覚める事の無い悪夢に沈め・・ナイトメア・・クローズッ！！」

「っきゃあああああっ！！」

暗黒の球体に飲み込まれて行く、なのはの姿だった

ここはどこ・・寂しい・・悲しい・・辛い・・

何も無い暗い空間に私は居た・・

「ひっひっひ・・お前に何のとりえがある？」

先程まで対峙していたネクロの声がする

「・・何を言ってるの！」

「ひっひっひ・・知らないと言うのか?お前に魔法が無かったら何のとりえがある?役立たずのなのは・・?」

!!!嘲笑うネクロの声は私の心を抉る

「いや!止めて!聞きたくないっ!」

耳を塞ごうとするが、塞ぐ事が出来ない

「ひっひっひ・・お前の友達のフェイトにはやて・・それに愛しい守護者・・お前に魔法が無かったら。あいつらはお前は認めてくれるか?」

嫌だ!聞きたくないっ!

「認めろ・・お前は役立たずに過ぎないんだ・・ほら・・聞こえるだろう?」

「役立たずのなのは・・」

!フェイトちゃん・・

はやてちゃん・・

「なのはちゃんは何の役にもたたんなぁ?」

「お前が居なければ私は目と腕を失う事は無かった・・お前が居なければ良かったんだ!」

!?嫌だ聞きたく無い・・聞きたく無い・・首を振るがその声は消

えない・・

「「「居なければ・・お前が居なければ・・」」」

繰り返される、言葉・・

「嫌だ！嫌だ！聞きたくな・・・い」

これは違う現実じゃない！龍也さん達がそんな事言う訳無い！

「認めろ！お前は要らないんだ・・消えろ・・消えてしまえ・・その方がよっぽど役に立てるぞ？」

ネクロの声は途切れる事無く私の心を抉る

「いや・・いや・・いやあああああああっ！！！」

私は大声を上げ首を振るが声は消えない・・嫌だ・・嫌だ・・龍也さん・・たす・・け・・て・・

私は意識を失った・・

「貴様！なのはに何をした！」

剣を向けながらファントムを睨むと

「いっひっひ・・何もさ・・こいつは己の心の闇に喰われ・・心が

死ぬ・・そして残った空っぽの体は、我らの尖兵にするのさ・・」

黒い球体を見ながら笑う、ファントムに

「カイザー・・デルタ・・」

目の前にエネルギーを三角形の形で生み出し、それを

「ブレイカーッ!!!」

剣で打ち出す。それは炎。氷、雷の力を帯びた衝撃波になるが・・

「ひっひっひ・・無駄無駄・・」

当たった瞬間ファントムの姿が消える・・これは幻かっ!!

「ひっひっひ・・正解・・私の本体はこの闇の中・・私は倒す事が出来ないのさ」

嘲笑いながらファントムは姿を消した、どうすれば良いのか考えてると

「兄貴!大丈夫か!」

「「龍也さん!」」

ヴィータ達が合流してくるが

「なのはは?まさかやられたのか?」

ヴィータが不安げに言う

「いや・・違う・・なのははあの球体の中だ。早く助けないとなのはが死ぬ・・だがどうすれば良いか判らないんだっ！」

判らない・・どうすればなのはが救えるのかがっ！！

「いっひっひ・・あと少し・・あと少しでこいつの心は死ぬ・・いっひっひ・・」

嘲笑うファントムの姿が球体の中に消える・・！そうか・・なんで気付かなかったんだ・・

「兄貴？どうした何か思いついたのか？」

ヴィータが尋ねて来るので

「ああ。簡単だったんだ・・私があの中に飛び込んでなのはを救う・・ヴィータ・・後は任せるぞっ！！」

剣を腰の鞘に戻し駆け出す

「無茶ですよっ！龍也さん！」

慌てるスバルの声が聞こえるが、私にはそれしか思い付かなかった。

魔力を込めその球体に触れる・・・その瞬間

「っ・・ぐあああああっ！！！！」

凄まじい電撃が私の体を駆け巡る・・

「兄貴っ！！無茶だ！！」

ヴィータの無茶だという声が聞こえるが、それを無視し更に魔力を込め

「う・・・うおおおおおおおっ！！！」

強引にその球体の中に飛び込んだ

「っう・・」

電撃が絶え間なく私を襲う

「ぐうっ・・何処だ・・何処に居る？」

電撃に耐えながら。なのはの姿を探す

「ソウルチョッパーッ！！！」

ザシュッ！！！

背後から突然ファントムが飛び出し、私を襲う

「ぐあっ！！」

「くっくっく・・馬鹿め・・此処は私のフィールド・・貴様に勝ち目は無いぞ？」

連続で振るわれる鎌を回避しようとするが、体が動かず直撃を喰ら

い吹っ飛ばされる

「うぐっ・・」

騎士甲冑ごしでもダメージは大きい

「苦しいか・・くっくっく・・良い機会だ。お前も一緒に殺してやるッ！！」

再び振るわれた鎌で吹っ飛ばされる

「うぐっ・・・！！なのは」

吹っ飛ばされたおかげで、なのはを見つける事が出来た

「なのは！なのは！しっかりしろっ！！」

なのはに声を掛けるが、反応が無い

「くっくっ・・こいつは闇に囚われている。お前の声は届かない・・そうだ・・良い事を思いついた・・ソウルチョッパーッ！！！」

私ではなくなのは目掛け振るわれる鎌・・！！いかん

「くっ・・がああああっ！！」

なのはの前に立ちその攻撃を受け止める

「くっくっくっ・・死ね！死んでしまえっ！！」

次々振るわれる鎌を背で受け止めながら。なのはを抱きしめる

「戻って来い・・戻って来いっ!!・・ぐっ・・戻って来いッ!なのはっ!!」

「戻って来いッ!!!」

!龍也さんの声・・

「戻って来い!なのはッ!!」

・・満たされていく・・龍也さんの声が聞こえる度に・・心が・・満たされていく

「「「居なければ・・お前が居な・・けれ・・ば・・・・・・」」」」

さっきまで聞こえていた声は消え代わりに

「戻って・・ぐっ・・来い!・・戻ってくるんだ!なのはっ!!」

力強い龍也さんの声が聞こえる。私は近くに落ちていたレイジングハートを握り締める

『マスター、聞こえますか?龍也様が貴方を呼ぶ声が?』

問いかけてくるレイジングハートに

「うん・・聞こえる・・聞こえるよ・・龍也さんの声が・・」

目を閉じる・・確かに聞こえる龍也さんが私を呼ぶ声が・・

「戻って・・ぐっ・・来い！・・戻ってくるんだ！なのはっ！！」

その声と共に私の意識は浮上していった・・！？えっ！抱きしめられてる！？抱きしめられてる事に驚きながら龍也さんを見て、私は目を見開いた・・酷い怪我だ、騎士甲冑も殆ど砕けている

「ぐっ・・大丈夫か？・・」

自分のほうが酷い怪我をしているのに、私に大丈夫かと尋ねて来る、龍也さんの顔は血で汚れている

「馬鹿なっ！自力でこの闇を祓える人間が居るなんて」

ファントムの驚きの声と共に。黒い世界に輝が入っていく

「馬鹿なっ・・馬鹿なっ！馬鹿なあああっ！！」

ファントムのその叫びと共に、黒い世界は完全に砕け、私達は元いた繁華街の上空に居た

「うぐっ・・」

苦しげに呻き、落下して行く龍也さんを抱き抱える

「龍也さん！大丈夫ですか！」

背中の甲冑は殆ど無く、背中から血が溢れている

「うぐ・・問題・・ない・・なのは！後ろだ」

反射的にプロテクションを張る

ガキーンッ！！

鎌とプロテクションがぶつかり火花を散らす

「くそっ！貴様達だけは・・」

大きく振りかぶったファントムの隙を突いて、

「ディバイン・・バスターッ！！」

砲撃を放つ、それはファントムの胴に命中し

「なっ！がああああッ！！！」

苦悶の声と共に、吹っ飛んでいったファントム。今の内に、辺りを見回す・・居たっ！ヴィータちゃんを見つけ、慌てて其方に向かう

「なのは！大丈夫だったか・・・兄貴！！！」

私が抱き抱えた、血まみれで意識を失っている龍也さんを見て、ヴィータちゃんが絶叫する

「ヴィータちゃん！早く手当てを！！このままだと龍也さんが危ない」

このままだと出血多量で命を落としかねない、

「ティアナ！お前回復魔法が使えたな！兄貴の治療をっ！」

ヴィータちゃんに指示を出され、ティアナが治療を始めると

「そうはせるか！ソウルチョッパーッ！！！」

巨大な鎌が回転しながら迫ってくる・・狙いは龍也さんだ

「させないっ！！リボルバー・・ブレイクッ！！」

スバルが一番最初に気付き、その鎌を殴り弾き飛ばす

「ヴィータちゃん！スバル！龍也さんをお願い！私はアイツを倒す！」

私はファントムに向かって行った・・

「うぐ・・ここは・・そうだっ！なのはっ！・・ぐっ」

なのはの事を思い出し、慌てて起き上がろうとすると

「駄目です！今は動いちゃいけませんっ！！」

涙目のティアナに押し戻される

「ティアナ？・・どうして・・うっ・・・」

体中に激痛が走る・・

「兄貴！目を覚ましたのかっ！」

心配そうにヴィータが顔を覗き込んでくる

「うぐっ・・ヴィータ・・ファントムは？」

ファントムの事を尋ねるとスバルが

「なのはさんが戦ってます」

スバルとヴィータに抱き起こされ、なのはとファントムの戦いを見る

「アクセルシューターッ！！」

なのはが光弾を放つが・・

「無駄無駄ッ！私にはそんな物は効かんッ！！」

鎌で光弾を弾き飛ばすファントム

「まだまだッ！！エクセリオン・・バスターッ！！・・ブレイクシュートッ！！！！！！」

かなりの近距離でエクセリオンバスターを放つ

「なッ・・くそっ！！」

この距離でこんな大威力の砲撃を使うと思わなかった。ファントムは慌ててマントで防御するが

「くっ・・ぐううううッ！！！」

防御しきれず吹っ飛ぶ、ファントムだが・・

「そう簡単に・・死んでたまるかッ！！ソウルチョッパーッ！！！」

吹っ飛ばされながら鎌を投げつける

「・・・きゃあっ！！」

プロテクションが砕かれ吹っ飛ぶなのは

「いかん・・助けなければ・・うぐっ・・」

慌てて立ち上がろうとするが、激痛が走り立ち上がる事が出来ない

「無理ですよっ！！死んでもおかしくない位の出血なんです！！！戦闘なんて無理ですよっ！！！」

スバルが慌てて私の動きを封じるが・・

「くっ・・こんな物どうという事は無い・・私は剣を握れる・・」

その静止を振り解き、立ち上がろうとすると

「兄貴っ！止めてくれ！そんな体で戦おうとしないでくれっ！！」

ヴィータが泣きながら、戦わないでくれと言い私の体を押さえる

「ヴィータ・・」

ヴィータは泣きながら

「もう嫌だッ！あの時みたいに血を流しながら、戦う兄貴は見たくないっ！！」

あの時・・闇の書の時か・・その事を知らないスバルとティアナは首を傾げている

「なのはなら、私が助ける・・だから兄貴は動かないでくれ・・私に任せてくれ・・なっ」

ヴィータが諭す様に言うと・・

「大丈夫だよっ！！ヴィータちゃん！！私は一人で大丈夫！！」

ボロボロのバリアジャケットでなのはが大丈夫だと言う

「なのはっ！本当に大丈夫なのかっ！」

そのボロボロの姿に、不安になり私が訪ねると

「大丈夫です！私は！龍也さん・・もう貴方の足手纏いにならないと決めたッ！！だから・・ＬＶ３位一人で倒せないと、私は貴方の足手纏いになってしまう・・だから此処は私に任せてくださいッ！

！」

笑顔でそう答え、なのははファントムの方へ飛んで行った

第６７話に続く

デバイス解説・・天雷の書　最終形態・・パラディンモード

白銀に輝く鎧に龍の様な翼が最大の特徴、武器は美しい装飾が施された白銀の剣・・天雷の書、ラストガーディアンの二つのデバイスが融合する事で完成する、究極のデバイスで、ユニゾン状態でなければ禄に動く事も出来ない。砲撃、射撃、直射、防御、回復、全てに高い能力を誇るが、デバイスの召還と復元を行う事が出来ない

## 第６６話（後書き）

天雷の書のモデルはデジモンの、インペリアルドラモンのパラディンモードです
かなり前の話しで出した、天雷の書の設定を変更して、完全無敵にしてみました

# 第６７話（前書き）

少し間隔が空いてしまいましたが。最新作を投稿します

なのはの強化とネクロの幹部が登場します

余り多く書くのは、物語の内容を言ってしまいそうになるので。

今回は前書きは此処で終りたいと思います

それでは本編・・どうぞ

# 第67話

第６７話

「ＬＶ３位と言いましたか・・くっくっくっ・・甘く見られた物ですね？私は貴方にとっては最悪の敵ですよ？」

最悪の敵・・確かにその通りだ・・こいつには射撃魔法も砲撃も効果が薄い・・多分それがこいつの能力なんだろう

「そうかもしれないね、だけど私は貴方を倒す！アクセルシューターッ！！」

７発の桜色の光球を放つが

「くっくっくっ・・貴方も物分りが悪いですね？」

鎌の一振りで全て消滅した

「この際ですから、教えて差し上げましょう。私の能力は魔法吸収・・貴方が魔法を使うほど私は強くなるのですよ！」

シュンッ！

そう言うと、ファントムの姿が消える

！？何処？何処に居る？辺りを見回す

「くく・・死神の一撃・・喰らえ！デスサイズ！！」

！？後ろ！直感を信じて頭を下げる

ブンッ！

鎌が頭の上を通過するのが判る、

「なっ！？」

攻撃が回避された事に、驚くファントムの

「ディバイン・・・バスターッ！！！！」

胴体目掛け、砲撃を放つ

「なっ・・くそッ！！」

慌てて回避するファントム・・

「魔力吸収も絶対じゃないみたいですね？」

本当にどんな魔法でも吸収できるなら、今の砲撃を回避する必要は無い・・・

「カートリッジロード！！」

『イエスマスター』

レイジングハートから空の薬莢が飛び出し、魔力を増加させる

「アクセル・・シューターッ！！！」

カートリッジを使い魔力を増加させ、威力の上昇したアクセルシューターを４発。胴体と手足に狙いを定め放つ

「ちぃっ！！」

悪態を付きながら回避をする、ファントム・・やっぱり吸収出切る場所は限られているみたいだ

「くそッ！！」

マントを身に纏う、ファントム。マントにアクセルシューターが当たると、構成が崩されマントに吸収されるが

「がああああッ！！」

マントに入り切らなかった、胴体の一部にアクセルシューターが命中し、鎧を破損させる

「やっぱり・・魔力を吸収出来るのは、マントと鎌だけ・・上手く狙えば勝てる！」

私は勝ちを確信した、幾ら魔力を吸収出来ても、吸収出来ない場所があるなら勝てる

「・・いえいえ・・そう簡単に勝ちを確信されたら、困りますね・・」

!?誰・・突然聞こえた声に驚き、振り返ると

「くっくっくっ・・始めまして・・エースオブエース」

黒いスマートな紳士の様な服に、顔の上半分を隠す独特な仮面を被り、赤いマントを風に靡かせた。ネクロが上空に佇んでいた

「貴方は何者ですか！」

レイジングハートを向けながら言うと

「私の名はヴェノム・・ダークマスターズの一人です」

ダークマスターズ!?・・確かネクロの幹部!

「アクセルシューターッ!!」

反射的に魔法を放つと

「・・やれやれ・・行き成りですか?私はまだ貴方と戦うつもりはないんですがね」

笑いながら片手で魔法を殴り飛ばす・・そんな素手で!?

「今は邪魔しないで下さい・・エースオブエース」

黒い瞳に睨まれ動きが硬直する・・これはバインド!?体がバインドに掛かったように動かない

「そうそう・・貴方の相手は私ではないのですから・・」

と笑いゆっくりファントムに歩いて行き、ファントムの頭を掴み、無理やり立ち上がらせる

「ヴェ・・ヴェノム様・・何をなさるのです？」

震える声で尋ねるファントムに

「くすくす・・貴方に初のＬＶ３からのデクスになって貰いましょう・・・」

デクス？・・聞き覚えの無い言葉に疑問を感じていると

「嫌だ！あんな者になるのは嫌だ！」

暴れヴェノムの手から逃れようとする、ファントム・・一体何が起こるというの？

「くっくっく・・恐れる事はありません・・・貴方に最強の力を与えましょう」

バリバリッ！！

電撃がファントムを襲う

「ぎゃあああああっ！！！！！」

凄まじい絶叫に顔を背けると

「くすくす・・これで良い・・さぁ・・こいつと戦って貰いましょ

うか？」

その言葉と共にファントムの体が変化する・・黒の鎧に髑髏の文様が浮かび・・足は消え魔力で体を浮上させる・・・その手には魔力で出来た強大な鎖鎌・・・ファントムの体の変化が終ると同時に、私の体も動くようになった

「くっくっくっ・・デクスファントム・・初のＬＶ３からのデクス化・・一対どれ程の力があるでしょうか？」

楽しげに笑いマントで体を隠す

「くっくっくっ・・では次に会う時を楽しみにしていますよ・・エースオブエース・・まぁ・・次があれば良いですけどね？くくっ・・はっはっはっ！！！」

笑いながらヴェノムの姿は消えた、それと同時にファントムの目に光が灯る

「・・・エース・・オブ・・エース・・・殺す・・・殺すッ！！！・・殺すッ！！！・・・がああああああッ！！！！」

！？先程までとは比べられない速さで突撃してくる、ファントム

「死ねえええええッ！！！」

反射的にプロテクションを張るが・・

バリーン！！簡単に砕かれる

「なっ！！・・死ねえええッ！！・・きゃあああッ！！」

鎌の持ちで殴られ、吹っ飛ばされる・・・

「くっ・・・なんてパワーなの・・」

龍也さんよりかは見劣りするが・・今までのネクロとは比べられない程強い・・だけど・・

「負けられない・・・私は足手纏いには成りたくない・・」

向かって来るファントムの胴目掛け

「アクセルシューターッ！！」

１２発のアクセルシューターを放つ

「クオオオオオッ！！！」

その叫びと共にアクセルシューターの構築が砕かれる・・そんな魔法吸収もパワーアップしてると言うの！？

「死ねえええッ！！！ソウル・・ブレイカーッ！！！」

魔力で出来た鎖鎌が高速回転しながら迫ってくる

「くっ・・プロテクション！！」

全力で障壁を発生させるが

ピキ・・ピキ・・

「耐えられない・・・っ・・きゃあああッ！！」

鎌の直撃を喰らい・・私は意識を失い落下していった・・

私じゃ勝てない・・・薄れていく意識の中で私はそう感じていた・・

少し戦っただけだが判る・・あのネクロには私では勝てない・・

「諦めるのですか・・情けない事ですね」

誰！？聞いた事の無い女性の声に驚き、声のほうを見る。そこには緑の髪に翡翠色の瞳を持った、女性が冷めた目で私を睨んでいた

「情けない・・王を護る・・足手纏いにならない・・大層な事を言っていた割には、直ぐ諦める・・なんと情けない事か・・」

その女性は王と呼んだ・・まさか・・

「貴方は・・天雷の騎士ですか？」

王・・つまり天雷の書の主・・龍也さんを指す筈だと思い尋ねると

「その通り・・私は天雷の騎士が一人・・氷のシャルナ」

鋭く冷めた視線で私を睨み続ける。シャルナだったが・・

「貴方は諦めるのですか？・・王を護ると言ったのは、唯の思い付きなのですか？」

「違います！私は・・私は龍也さんを護りたい！護られるだけじゃなくて！隣を歩いて行きたい！だけど・・私には力が無い・・・隣を歩けるだけの力が無いんです！」

思いつきなのか？と尋ねられた瞬間、私は大声でそれを否定した、思い付きなんかじゃない・・私は龍也さんを護れるだけの力が欲しい・・だけど・・私には力が無い・・護るだけの力が無い・・俯きながら言うと

「その思いに揺らぎはありませんか？どんなに険しい道でも、王と共に歩きたいと言いますか？」

優しく問いかけてくるシャルナに

「はい・・・私はどんな険しい道でも龍也さんと共に歩いて行きたいです・・でも私にはそれだけの力がありません・・」

そう答えるとシャルナは

「合格です。貴方に私の力を・・王を護る為の力をお貸ししましょう」

「えっ・・？」

驚きながら、顔を上げるとシャルナは微笑みながら

「貴方の想いは判りました・・だから私の力をお貸ししますよ」

シャルナの手から、翠の球体が浮かびレイジングハートの中に入る

「ふふ・・これで貴方のデバイスは更なる力を発揮するでしょう・・」

その声と共に私の意識は浮上していった、

「なのはがっ！」

ヴィータの指差す方を見ると。なのはがビルの間を落下していた

「がああああああッ！！」

そのなのはを追うように、ファントムが落下していく

「ティアナ！ここから狙えるか！？」

ティアナにここからファントムを狙えるか、と尋ねると

「・・・くっ・・・無理です！遮蔽物の所為で射角が取れません！」

無理か！くそっ！立ち上がり駆け出そうとするが・・

「うぐっ・・」

激痛が走りその場に膝を着いてしまう

「兄貴！？」

ヴィータが慌てて、私を支える

「私は良い・・それよりなのはを！！」

ファントムがなのはに追いつき、その手に持った鎌を振りかぶる

「死ねぇ！エースオブエースッ！！」

鎌がなのは目掛け振るわれる

「「「「なのはー（さん）ッ！！！！」」」」

私達が思わず、最悪の結果を予測し思わず大声を上げるが

ガキーンッ！！！

金属と金属がぶつかる、甲高い音がする

「なんだ！！あれはッ！？」

鎌の一撃を防いでいたのは、クリスタルだった・・桜色の４つのクリスタルがなのはを守るように集まり、鎌の一撃を防いでいた

「何っ！？」

ファントムが驚き硬直する、その隙を突いてクリスタルがファントムに体当たりを仕掛け、弾き飛ばす

「バリアジャケットが・・」

なのはの回りをクリスタルが回る度に、バリアジャケットが姿を変えていく・・

白のバリアジャケットは青く染まり・・その背には魔力で構成された6枚の翼・・

手に持ったレイジングハートも姿を変え・・一回り大きくなっていた

体勢を立て直し、目を閉じ宙に佇むなのはの回りに、4つのクリスタルが集まり。なのはを護るように浮かぶ、

その姿は幻想的な美しさを持っていた・・

「・・・綺麗・・」

ティアナが呟く・・背中の翼が羽ばたく度に魔力の粒子が空を舞う・・その姿は天使・・いや・・女神だった・・

「・・・」

なのはがゆっくり目を開いた瞬間・・

「何これーーッ!!!」

なのはが絶叫した

「はっ!?」

その突然の絶叫に私達も驚いた・・えッ・・レイジングハートの新

しいモードとかじゃないのか？

「嘘ッ！何これ！？えっ・・翼ぁッ！？何で！？何で！？」

かなり動揺している様で・・自分の姿を見てうろたえている・・

「ソウルブレイカーッ！！！」

うろたえている・・なのは目掛け鎌が迫るが・・ガキーンッ！！

その巨大な鎌をレイジングハートで軽く受け止めていた

「そうだった・・今は戦闘中だね・・」

思い出したように呟くなのはに、私達は

（忘れてたのかッ・・・）

そう思った・・動揺しすぎだろう・・なのは・・

「取りあえず・・今はアイツを倒すのが先決だね、レイジングハート？」

『イエス、マスター行きましょう』

手に持ったレイジングハートに話しかけてから

「アクセル・・・シューターッ！！！」

レイジングハートとクリスタルから、嵐の様な魔力弾が放たれる

「なっ！・・・クオオオッ！！」

ファントムが叫び声を上げ、魔力弾の構成を砕くが・・半分も破壊出来ず・・

「がああああッ！！！」

ファントムの胴体に次々命中して行き・・ダメージを与えている

「・・・すげぇ・・」

ヴィータがその嵐の様なアクセルシューターを見て呟くと、ファントムが

「調子に乗るなっ！！」

鎌を振り回し・・アクセルシューターを切り払うが・・次の瞬間桜色のバインドがファントムを捕らえる

「なっ！？・・こんな物・・・」

暴れて、バインドから逃れようとするファントムだが、その拘束が砕ける気配は無い

「闇を晴らす・・黄金の輝き・・

なのはが詠唱に入り、魔力がクリスタルとレイジングハートに収束されていく

「全てを照らす・・黄金の輝きは・・全ての悪を薙ぎ払う・・・

クリスタルに収束された、魔力は眩いばかりに輝く

「これが私の新しい・・切り札・・・エクストリーム・・・」

クリスタルが全てファントムの方を向く

「ヒィッ・・・」

ここからでもファントムが引き攣った悲鳴を上げたのが聞こえた

「ジハードッ！！！！」

４つのクリスタルと、レイジングハートから放たれる砲撃がファントムを飲み込み・・消滅させた・・・

「凄い威力・・・」

私は自分の放った砲撃の威力に驚いた・・スターライトの強化で考えた砲撃だが・・・スターライトを遥かに超える威力だ・・私がその余りの威力に驚いていると・・

『フォトンモード・・解除・・通常モードに戻ります・・』

バリアジャケットが元に戻る・・・

「レイジングハート・・今のは？」

レイジングハートに今のは何と尋ねると

『恐らく・・ブラスターモードの進化形だと思います・・正し魔力の消耗が激しい為・・強制的にモードが解除されました』

確かにかなり魔力が減少している・・リミッター有りではさっきの形態は長く維持できないだろう

『マスター、早く龍也様の元に戻りましょう・・龍也様の怪我が心配です』

「そうだね・・戻ろうか・・」

頷き・・私は龍也さん達の所へ戻った・・

「龍也さん。怪我は大丈夫ですか？」

龍也さん達が居た所に戻ると、そこには騎士甲冑を解除して、瓦礫に腰掛けている龍也さんの姿があった

「大丈夫だ・・ティアナの回復魔法の御蔭で大分楽だ」

と微笑む龍也さんの隣に腰掛ける

「あの・・ヴィータちゃん達は？」

姿の見えない、ヴィータちゃん達は何処かと尋ねると

「ヘリを呼びに行った・・私は大丈夫だと言ったんだがな・・・」

と苦笑する龍也さんだったが・・

「所でさっきのバリアジャケットは？」

思い出した様に尋ねて来る、龍也さんに

「なんか、強制解除されちゃいまして・・良く判りません」

よく判らないと言うと

「そうか・・シャーリーにでも解析して貰うと良いな」

暫く龍也さんと話をしていると

「兄貴～！！迎えに来たぜ～ッ！！！」

ヘリからヴィータちゃんの声がする

「どうやら迎えが来たようだな・・行こうか？」

立ち上がり笑う、龍也さんと一緒にヘリに乗り込んだ

「兄貴・・横になった方が良い」

ヴィータちゃんが横になった方が良いと、言うと龍也さんは手を振りながら

「いやいや、私は大丈夫だ・・・「良いから!横になれ兄貴!!」・・・判った・・」

凄い剣幕でヴィータちゃんに言われ、渋々と言った様子で横になる。
龍也さんの傍にヴィータちゃんが座り込む

「なぁ・・兄貴あんまり心配させないでくれ。兄貴が強いのはわかってる・・でもな・・怪我してまで戦わないでくれよ」

俯きながら言う、ヴィータちゃんの隣に腰掛け

「そうですよ。龍也さん・・あんまり心配させないで下さい・・これは私達だけじゃなくて皆も一緒ですよ?」

スバルとティアナを見ながら言うと

「むっ・・判った。もう少し気をつけるとしよう」

バツが悪そうな顔をして笑う、龍也さんを乗せたヘリは、ゆっくりと六課に戻って行った

「兄ちゃん!大丈夫か!!」

ヘリポートでは、はやてちゃんとチンクさん達が待っていた

「大丈夫だ、回復魔法も掛けて貰ったからな・・っと」

笑う龍也さんだが、ふらつき倒れかける

「ああ・・兄ちゃんやっぱ、無茶しとるな」

はやてちゃんが慌てて駆け寄り、龍也さんを支える

「もう、あんま無茶して心配させへんでな？・・セッテ肩貸して。一人じゃ支えられん」

珍しくセッテに声を掛けるはやてちゃん、

「判りました、はやて。私も協力します」

はやてちゃんとセッテに支えられ、龍也さんは医務室に向かって行った

「さてと・・私は報告書でもやってくるよ」

隊長室に向かって歩き出そうとすると

「待つっす、なのは。あんたも怪我してんじゃ無いっすか？」

ウェンディに呼び止められるが

「大丈夫、こんなの龍也さんと比べたら掠り傷だよ」

確かに私も怪我をしているが、本当に龍也さんと比べれば、この程度掠り傷だ。と笑い隊長室に向かって行った

「お兄さん・・また無茶して。あんまり無茶したら駄目ですよ？」

シャマルが手当てをしながら言う

「判ってはいるんだがな」

と苦笑すると

「判ってるだけじゃ駄目です。・・はい・・手当ては終りました・・それと部屋に戻っても良いですが・・ちゃんと大人しくしてくださいよ?」

シャマルに念を押され、医務室を出ると

「龍也様、怪我の具合はどうですか?」

セッテが医務室の前の椅子に座り待っていた

「・・はやては?」

はやても居るだろうと思っていたが、姿の見えないはやての事を尋ねると

「仕事があると言い、部屋に戻りました」

「そうか・・所でどうしてセッテは私を待っていたんだ?」

どうして待っていたのかが、気になり尋ねると

「いえ・・特に理由はありませんが。怪我をなさっていた。龍也様が心配になりまして」

と言い微笑むセッテに

「心配してくれてありがとう」

と笑い礼を言うと

「御気になさらず。部屋の前までお送りします」

セッテと話をしながら自室に戻った

「龍也様。私はこれで、失礼します」

部屋の前でセッテと別れ、自室に入る

「さてと・・本でも読んでるか・・」

大人しくしていろと言われたので、大人しく本を開き読んでいると

コンコン

「兄貴?入るぜ」

ヴィータが部屋に入ってくる

「どうした?ヴィータ」

突然尋ねて来たヴィータに首を傾げながら、尋ねると

「いや・・兄貴の怪我の具合が心配で見に来たんだけど・・どうだ?」

私の前に座り尋ねて来るヴィータに

「心配ない、ありがとうヴィータ」

本を閉じながら言うと

「へへ。気にすんなよ兄貴」

気にすんなと言う、ヴィータの頭を撫でると

「んっ・・へへ・・兄貴の手は暖かいな」

気持ち良さそうに目を細め、私の手が暖かいと言うヴィータに

「そうか?私は良く判らないが・・」

首を傾げながら尋ねると

「兄貴の手は暖かいぜ・・太陽みたいでな・・」

笑いながらヴィータはそう答え、立ち上がり

「私は仕事があるから戻るな。兄貴も無茶しちゃ駄目だぜ?」

私に念を押してから、ヴィータは私の部屋から出て行った

「やれやれ・・あんまり妹達に心配を掛けさせてはいかんな・・・」

私はそう呟き、淹れて置いた紅茶を口に含み、本を開いた

「レイジングハートの新しいモード・・フォトン・・」

シャーリーに調べて貰った、レイジングハートの詳細を見ながら、コーヒーを口に運んだ

「出力、防御力、機動性・・どれもブラスターモードより上」

想定されていたレイジングハートの最終形態である、ブラスターより遥か上回るスペック

「でもその所為か・・ブラスターモードは無しか・・」

フォトンのスペックは、非常に高く・・シャーリーが言うには従来のデバイスを遥かに上回る能力。何故この様な変化が起きたのかが判らない・・だけどこの力があれば・・龍也さんを護れる・・共に歩いていく事が出来る

「私は護られるだけなんて嫌だ・・私は龍也さんの隣を歩いて行きたい」

護られるだけじゃ意味が無い。龍也さんの背を護り共に歩いて行く・・その事に意味がある・・・多分この考えは皆同じだと思う

「護られる姫・・って言うのは柄じゃないからね・・」

自分で言っておいて赤面するが。その通りだ護られる姫ではなく・・

共に歩いて行く姫・・それが私が思い描く姫だ

「今度こそ・・龍也さんを護ってみせる・・」

私は決意を固め・・フォトンモードの詳細書を片付け。眠りに着いた・・

なのはが眠りに落ちた頃、演習場では

「はあッ・・はぁ・・こんなんじゃ駄目だ・・」

人気の無い演習場で、額から大粒の汗を流しながらアイゼンを振るう。ヴィータの姿があった

「はぁ・・はぁ・・まだまだ・・私は強くなれる・・」

汗を拭いながら再びアイゼンを握り直した所で

「ヴィータ?・・こんな時間に何をしている?」

シグナムが演習場に姿を見せる

「見りゃ・・判るだろうが・・自主連だ・・お前は?」

判っているが、敢えて尋ねる

「私もだ・・所で・・ヴィータ、お前はいつから演習場に居たんだ?」

何時から居たのかと尋ねて来る、シグナムに

「夕飯を食ってから直ぐだ・・っと・・何だ・・」

そう言ってから、再びアイゼンを振ろうとすると、シグナムがペットボトルを投げて寄こす

「無茶をしては何にもならん・・少しは休め」

私の横に腰掛けながら言う、シグナムに頷きペットボトルの中を口にする

「そうだな・・貰うぜ・・・・はぁ・・美味い・・・」

ペットボトルの中を飲み干し、持って来ていたタオルで汗を拭いながら

「・・シグナム・・あの時・・私とお前とで約束した事・・覚えてるか？」

シグナムは直ぐに頷き

「もう一人の主である・・兄上を護るという誓いのことだな」

私達の主は・・はやてだ、だけど兄貴も間違いなく。もう一人の主だ

「そうだ、私は兄貴とはやてを護る・・騎士の・・鉄槌の騎士の名に賭けて・・だから私はこんな所で立ち止っていられないんだ！」

気合を入れて、再びアイゼンを振ろうとすると

「待て、一人でやるより、二人の方が効率が良い・・判るだろう？」

騎士甲冑を展開し、私の前に立ち笑うシグナム

「へっ・・ありがとうよ・・シグナム。・・遠慮なく行かせて貰うぜッ！！」

「ふっ・・当然だ・・遠慮なく全力で掛かって来いッ！！」

アイゼンとレヴァンティンがぶつかり、火花を散らす・・そうだ私はこんな所で立ち止っている暇は無い・・今度こそ私は兄貴を護る、二度と失ってたまるか・・あの暖かい場所を！！私は決意を固めアイゼンを振るった・・シグナムとヴィータの戦う姿は、その日の夜遅くまで消える事は無かった

第６８話に続く

## 第67話（後書き）

どうでしたでしょうか？
なのはの強化と、ヴィータ・・シグナムの強化フラグです・・
エリオを強くしすぎたので・・急遽なのは達も強化することにしました
どのような感想が来るか不安ですが。それも真っ直ぐ受け止めたいと思います

次回はヴィータかフェイトの強化の話にします・・
敵をどうしようかなと考えながら、少しずつ執筆しています
それでは・・少しの間失礼いたします

## 第６８話（前書き）

大分遅れましたが・・最新話を投稿したいと思います！

今回はフェイトの強化のお話です。楽しんで貰えれば私は嬉しいです

それでは本編始まります

# 第６８話

第６８話

「ヴェノム・・貴方・・ファントムをデクス化しましたね？」

研究室にヘルズが姿を見せ、不機嫌そうに言う

「ええ・・デクス化しましたよ？・・それが何か？」

研究の手を休めそう言うと

「別にどうこう言おうと言う訳ではありませんが・・せめて一声掛けて欲しかったですよ・・ファントムをデクス化すると」

非難の色が浮かぶヘルズ

「それはすいませんでした・・ですがあのままではエースオブエースに勝てないと判断したので、私の独断でデクス化しました」

素直に頭を下げ謝ると

「別に構わないですが・・今度からはちゃんと声を掛けてくださいね・・所で今何をしてるのです？」

ヘルズが大き目のポッドを指差しながら言う

「ふふ・・あれは・・私の新しい作品・・デクス・・キメイラです」

培養液の中のネクロははっきり言って異形だった・・体のパーツが全てバラバラのネクロのパーツで構成されており。かなり不気味な姿をしていた

「キメイラ・・合成獣ですか・・一体何体のネクロを使ったんです？」

「１５ですよ・・それももう直ぐでＬＶ４の到達しそうな、ネクロを使いましたよ・・まぁ・・決してＬＶ４に成れない出来損ないですが・・」

ＬＶ４に成れるのは限られた者だけだ。ＬＶ４は選ばれた者しか到達できぬ・・高み・・そう簡単に進化できる物では無いのだ

「ほう・・ＬＶ３を１５体・・どれほどの力があるのですか？」

楽しげに笑うヘルズに

「そうですね・・ＬＶ４に近いと思いますよ・・まだ調整中ですがね」

培養液の入ったポッドを見上げると。真紅に輝く瞳と目が合う

「ええ・・判っていますとも・・キメイラ・・もう少し待ってください」

私にはキメイラの声が聞こえた・・早く戦いたい・・敵を殺したいと言う・・叫びが

「デクス・・ネクロとは違う・・新たな存在・・か」

!?この声は・・

「「ジオガディス様!!」」

慌ててヘルズと共に膝を着き、頭を下げる

「ふっふっふっ・・ヴェノム・・お前は素晴らしいネクロだ・・この様な者を生み出す等と」

培養液を見上げるジオガディス様に

「私等には勿体無いお言葉でございます」

「ふっふっふっ・・謙遜する事は無い・・俺はお前の事を高く評価している・・此処に来てデクスについて説明してくれ」

立ち上がりジオガディス様の傍に立つ

「ではデクスとは何だ?・・俺のネクロマンシーの産物では無いようだが?」

「はっ!我らネクロには魔力を吸収し進化すると言う特徴があります・・ですがＬＶ３・ＬＶ４に到達できる者は僅かです」

「確かに・・限られた者しか高いＬＶになることは出来んな」

「そこで私は進化の特徴を無くし、知性も限界まで削り、身体能力と再生能力を極限まで高めた、存在デクスを作りました」

我らには限界がある。ならばその限界を取り払えば良い・・自我を無くし・・知性を無くし・・唯敵を倒す事を考える、不死の兵士・・それがデクスだ

「ほほう・・確かにお前の言うとおりだな・・ヴェノム・・所でこいつはまだ動けないのか？」

キメイラを指差すジオガディス様に

「まだ無理なのです・・魔力がまだ全身に行き渡ってないので・・ならこうすれば良かろう？・・なっ何を」

ジオガディス様の手から漆黒の魔力が放たれ、キメイラの中に入る

ドクンッ！ドクンッ！！ドクンッ！！！

キメイラの体が大きく動き始める

「おおっ・・キメイラが目覚める」

ドゴン！ドゴン！！ドゴン！！！

キメイラの４本の腕から放たれる、拳が何度もガラスに叩き付けられ、遂に

ガッシャアアンッ！！！

凄まじい音を立てて、ガラスが崩壊する

「グルルルルっ・・・」

ポッドから現れたキメイラの姿を見て私は震えた

「素晴らしい・・これぞ私の求めた究極の力・・」

龍の様な頭部に力強い４本の腕に・・バラバラの４枚の翼と・・獰猛な猛禽類の様な鋭い瞳は、血の様な真紅に輝がやいていた・・その姿は悪魔その者だった

「グルルル・・グオオオオオオオッ！！！！」

キメイラは歓喜の雄たけびを上げた・・それは誕生の喜びか、敵を待ち望むデクスとしての本能の叫びなのか・・私に判らなかった

演習場で戦う龍也とエリオの姿があった・・龍也は金色の騎士甲冑に、身の丈ほどの大剣を片手で軽々振り回している。エリオは赤のマントを靡かせてストラーダを振るっていた

「ドラモン・・ブレイカーッ！！」

巨大なバスターソードが迫る

「でえええいッ！！」

ストラーダの鎌の部分で受け止め受け流し

「紫電一閃！！」

踏み込みお父さんの胴目掛け拳を放つ

「甘いッ・・」

即座に後方に飛び僕の拳を回避し

「ツインスラッシャーッ！」

大剣が二つに別れ、お父さんの両手に装着されると同時に、跳躍し

「ブレイブ・・・トルネードッ！！」

魔力の竜巻と共に体当たりを仕掛けてくる

「！！ええいッ！！」

ストラーダを手放し。両手で受け止める

ギャリギャリッ！！

篭手と魔力の竜巻がぶつかり、凄まじい火花を散らすが・・徐々に竜巻の回転が落ちてくる・・チャンスだと思ったが

『駄目です！早く離れてください！！』

ストラーダの声にえっ？と思いながらお父さんを見ると、両手に魔力が溜まってるのが見える

「！！」

慌てて後方に飛ぶと同時に、お父さんの手から巨大な炎弾が打ち出された

「ガイア・・フォースッ!!!」

巨大な火の玉が僕を飲み込もうと迫ってくる

「くっ・・早すぎる!」

スピードには自信があるが。迫ってくる炎弾の方が早い。交わし切れない事を悟った僕はストラーダを構え、大きく振りながら

「クレセント・・ミラージュッ!!」

大きな三日月状の衝撃波を放った。この技は本来ならデュナスフォルムの物だが・・エグザフォルムでも使えない事は無い。放たれた三日月は炎弾を真っ二つに切り裂いた、それと同時にストラーダを後方に振るう

ガキーン!!

ストラーダとお父さんの両手に装着された刃が追突する

「ほう・・これに反応するか・・」

驚きと言う感じで笑い掛けて来るお父さんに

「僕だって・・そう何度も負けていられません!!・・クレセント・・ミラージュッ!!」

空いている手から小型のクレセントミラージュッを放つ

「むっ・・」

首を傾げて回避する・・だけどそれが目的だ

「はあッ!!」

全力で胴に蹴りを放つ

「ぐうッ・・」

不意打ちに近い形の一撃によろめく、お父さんの隙を突いて後方に大きく跳び

「ストラーダ。カートリッジロード!」

ストラーダから薬莢が飛び出し、魔力を増加させる

「・・最後の一撃という所か・・では私も・・」

お父さんの両手に膨大な魔力が溜まって行くのが判る・・だけど・・僕の方が早い!!

「これが・・僕の最大魔法です!!」

マントで上空に飛び上がり、ストラーダをお父さんに向ける

「ペンドラゴンズ・・・」

全力の魔力を一つの形に纏め上げる

「トライデント・・・」

僕が砲撃の準備に入ると同時に、お父さんも魔力を放つ段階に入っていた・・速い・・僕なんかとは比べられない速さだ。だけど負けるつもりは無い！全力勝負！！

「グローリーッ！！！」

「ガイアッ！！！」

同時に放たれた魔力が追突し大爆発を起こした

「・・・演習場が物凄い事になってる・・・」

フェイトちゃんが隣でボソリと呟く・・確かにその通りだ。二人の魔法の衝突でクレーターが出来ている

「あっ・・煙が晴れて来たで・・・」

二人の魔法の激突で発生した煙が晴れ・・見えて来たのは

「・・兄ちゃんの勝ちみたいやな・・」

黄金色の騎士甲冑を身に纏った、兄ちゃんはまだ余裕の表情でエリオを見ている。それとは対照的に

「はぁ・・はぁ・・」

肩で大きく息をする、エリオの表情はかなり辛そうで、今にも墜落しそうだ

「うっ・・」

エリオが意識を失ったのか・・頭を下にして落下していく・・だが地面に落下する前に兄ちゃんがエリオを抱き止める

「訓練も終ったみたいやし・・兄ちゃんの所行こうか?」

頷く、なのはちゃんとフェイトちゃんと共に演習場に向かう

「うん?はやて達か・・どうした?」

エリオの手当てをしていた兄ちゃんが笑いながら尋ねて来る

「どうした?じゃないよ!・・龍也・・・最近にエリオに無茶な訓練してるでしょっ!!私知ってるんだよっ!!」

フェイトちゃんが無茶な訓練をしてると言い、兄ちゃんに怒鳴るが

「・・エリオが望んだ事だ・・強くなりたいと・・キャロを護る力が欲しいと・・だから私はエリオに協力しているだけだ」

エリオの髪を撫でながら言う兄ちゃんに

「でも無茶しすぎじゃないですか?龍也さん?」

鬼教官と言われるなのはちゃんでも、そう思ったみたいだ。私でもそう思ったけど・・兄ちゃんと一対一での模擬戦？・正気の沙汰じゃない・・リミッター無しでも兄ちゃんと戦うなんて御免や・・勝てる訳が無い・・

「無茶では無い・・昔私も同じような事をしていたからな・・ザフィーラとか・・シグナムとかとな・・１００の訓練より１の実践・・これが一番早く強くなれるんだ」

その通りやな・・それに兄ちゃんの事やし。そんな無茶な事はしてないだろうと思い頷く

「でも・・エリオはまだ子供だよ？・・無茶な事はして欲しくないんだけど・・」

まだ納得して無い様でフェイトちゃんが言うと

「私もそう思うよ・・だけど強くなりたいと言う、エリオの気持ちも理解してやれ・・フェイト」

諭すように言う兄ちゃんに、渋々と言う感じで頷くフェイトちゃんを見て

「さてと・・私はシャワーにでも行って来るか・・」

立ち上がり・・シャワーに向かい歩き出した兄ちゃんを見ながら

「さーて・・・エリオをシャマルとこ連れて行こか？」

気絶しているエリオを背中に背負い。私達は医務室に向かった

「ふー・・すっきりした」

着替えてからシャワー室を後にする・・流石に長い黒髪は完全に乾いてないのでまだ湿っているが・・仕方ない。そう思いながら食堂に向かっていると

「あっ・・龍也兄っす・・か・・・」

ウェンディに会うが顔が真っ赤だ

「どうした?ウェンディ?顔が赤いが・・風邪か?」

顔を覗き込むと

「なななな・・何でも無いっすッ!!」

真っ赤なまま走り出し、ウェンディの姿はあっというまに消えた

「なんだったんだ?一体?」

首を傾げながら再び歩き出すと

「あ・・龍也・・さん・・」

スバルに会ったがウェンディ同様、真っ赤になり俯く

「スバルも風邪か?」

風邪かと思い近付くと、ぶつぶつと呟いているのが聞こえる

「・・なんで男の人なのに・・こんな色っぽいの・・恥かしくて見れない・・」

色っぽい?私は男なんだがな・・と思いながら

「今食堂に行くのだが・・スバルも一緒に行くか?」

食堂に行くかと尋ねると

「ははははは・・はい・・いいい行きます!!」

噛みながら頷くスバルと一緒に食堂に向かうが

「・・何故か視線を感じるのだが・・何でだと思う?」

隣をギクシャクを歩くスバルに尋ねると

「・・本当に判らないんですか?」

判らないから尋ねてるんだがな。と思い頷くと

「龍也さんが格好良いからですよ」

私が格好良い?一体なんの冗談だろう?と思った・・自分の評価は余り高くない龍也は気付いてないが。スラリとした長身に・・長い黒髪・・目の傷・・それが相まって・・どこか野性的でワイルドな

印象がある。龍也は正直かなり格好良いのだ

「さてと・・何処か空いてないか？」

トレーを持ちながら空いてる席を探してると

「お父さ～んっ！！ここ空いてますよ！！」

奥の方でキャロが手を振って呼んでくれる

「スバル、あそこで食べるとしようか？」

「そうですね」

頷くスバルと共にキャロの呼ぶ方に行くと

「お兄様～」

「兄～」

どうやらリィンとアギトも居たようで、手を振りながら笑っているので二人の間に腰掛けると。自然な流れで私の膝の上に座る、リィンとアギトに一瞬驚くが別に良いかと思い、食事を食べ終え、書類を纏めていると

ビーッ！ビーッ！

警報が鳴る、どうやらネクロかデクスが出た様だ。書類仕事を一時中断してブリーフィングルームに向かう

「兄ちゃんも来たか・・良し・・じゃあ状況を説明するで」

私がブリーフィングルームに着くと同時にはやてが状況を説明する

「良いか?街中でデクスが暴れとる、数は２０・・武装隊では押さえられん・・しかも逆方向にはネクロ達が現れてる」

分断か・・どちらかに強力な者が居るはず・・ＬＶ３・・いや４の可能性もある

「という訳やから、部隊を二つに分けるで。デクスの方はライトニングと兄ちゃん、ネクロの方は・・スターズとアサルトや。それじゃあ皆、頼むでッ!!」

はやての言葉に頷き頷き、私はフェイト達と同じヘリに乗り込み現場に向かった

「お父さん・・デクスはどんな感じの敵ですか?」

まだデクスと対峙した事の無い、エリオが不安そうに尋ねて来る

「デクスはネクロより回復速度が速くて、耐久力もあるが・・エリオなら問題ない・・それより問題なのはキャロの方だ」

急に名指しされたキャロが驚きながら

「私ですか?・・どうしてですか?」

不安げに尋ねて来るキャロに

「デクスは獣そのものだ・・フルバックのキャロでは少々きつい・・フリードも同じ事だ・・キャロが居ないとフリードも力を発揮出来ないだろう？」

キャロとフリードを見ながら言うと

「きゅく～・・・」

フリードは悲しげに鳴き、キャロは

「じゃあ・・私はどうすれば・・良いんですか？」

泣きそうな声のキャロの頭を撫でながら

「キャロはキャロの出来る事をすれば良い・・つまり・・エリオのサポートだ。エリオも余りキャロから離れすぎない様に、気を付けろ・・キャロとフリードを護るのはお前だからな？」

「「はい！！」」

元気良く返事を返す二人を見ていると

「八神中将、現場に着きましたよ」

パイロットが現場に着いたと言う。降下の準備をしながら

「良いか？もし危険だと思ったら直ぐに後退しろ。判ったな」

エリオとキャロに念を押してから私は降下した。

「大分数が多い・・」

降下しながら戦況を見る・・かなりの数のデクスが暴れている

「龍也・・私と龍也で大半を押さえよう・・エリオとキャロは数の少ないほうに回って貰おう」

フェイトの提案に頷き、私はデバイスを起動させる・・数が多いので高速戦闘の為のブレイカーモードだ。着地地同時に

「玄武・・剛弾ッ！！」

魔力を込めた正拳突きでデクスを二体消滅させる、それと同時に

「ハーケン・・セイバーッ！！」

ハーケンフォームのバルディッシュを振るい、デクスを消滅させ背中を合わせ周りを見る

「「「ぐるるるる・・・」」」

大量のデクスが私達に迫って来ている。やはり狙いは私か・・」

近付いてくる者に蹴りを放つが・・ネクロと違い一発で消滅しない

「厄介だね・・デクスって言うのは・・プラズマランサーッ！！」

ハーケンフォルムからアサルトフォームに戻した、バルディッシュから雷撃を放ちながらフェイトが言う

「確かにな・・だが・・勝てない相手ではない！・・・白虎咬ッ！！」

魔力を込めた拳でデクスを打ち上げ

「沈めッ！！」

体を反転させ強烈な踵落としで消滅させ、フェイトに

「出来るだけ派手な魔法を使え！・・エリオ達の方のデクスもこっちに集めるぞ！」

デクスは強力な魔力に集まる習性がある。だから出来るだけ派手な魔法を使えば、エリオ達のデクスもこっちに寄って来る筈そう思い言うと

「了解・・少しの間お願いするよ」

フェイトが目を瞑り意識を集中させる、その強大な魔力に反応してデクス達がフェイトに近寄るが

「おっと・・悪いな・・ここから先は通行止めだ！！・・円月蹴り！！」

倒すまでもない・・私の役割はデクス達を一箇所に集める事・・適度なダメージを与えながらデクスを一箇所に集める

「・・・龍也！！・・離れてッ！！」

フェイトの指示に従い後方に跳ぶと同時に

「サンダー・・フォールッ!!!」

限界まで集中した事により限界まで威力を高めた、その一撃は

「「「ぎゃあああああッ・・・・・」」」

一箇所に集められていたデクス達を纏めて焼き払った

「やるな・・フェイト・・デクスの気配は無いな・・・エリオ達と合流しよう・・そうはさせません!!守護者ッ!!ナイトレイドッ!!・・・!プロテクションッ!!!」

エリオ達と合流しようと言った瞬間、突然後方から放たれた黒い魔力の闇に、反射的にプロテクションを使い防ぐ

「・・今ので少しは手傷を負わせるつもりだしたが・・そう簡単には行きませんね?」

赤いマントのネクロ・・両手を振りながら言う、その目はギラギラと輝き私とフェイトを睨んでいる・・・確かこいつはなのはが遭遇したと言っていた

「貴様・・ヴェノムかッ!!」

瞬間的にブレイクから・・ブレイドに切り替え剣を向けながら言うと

「おやおや・・私の名を知っているとは・・私も少しは有名になったという事でしょうかね?」

ふざけた素振りのヴェノムにフェイトが

「プラズマランサーッ！！」

ヴェノム目掛け魔法を放つが・・ガシッ！！ヴェノムはその魔力の塊を掴み

「おやおや・・話している間に攻撃するとは・・とんだ正義の味方が居たものですね？」

簡単に握りつぶしながら

「まぁ・・その方が判り易くて・・私が楽ですがね？・・ほら・・来ましたよ・・悪魔が・・」

バサ・・バサ・・バサ・・

翼が羽ばたく音が聞こえ上空を見る

「！何だあれはッ！！」

つぎはぎの体に４本の腕と翼を持った異形が・・私達の頭上を跳び越して行く・・あっちの方角はッ！！

「クックック・・そうですよ・・キメイラが向かっているのは・・ブリッズを倒した子供がいる方向ですよ・・クックック・・」

頭を抑え可笑しそうに笑い声を上げるヴェノムに剣を振るい

「フェイト！！こいつは私が抑える・・お前はエリオ達の所へ向かえ！！」

「判った・・龍也も気をつけて！！」

エリオ達の所に飛んで行くフェイトを攻撃させない為に、ヴェノムに攻撃を仕掛けようとするがヴェノムの上げられた手に止められる

「なんのつもりだ！」

突然の行動に不信感を抱きながら、剣を向けると

「クックックッ・・これで私の目的の半分は成功しました・・私の目的は守護者・・貴方を足止めする事ですから」

！！しまった・・こいつは・・慌ててフェイトの後を追おうとするが

「おっと・・そうは行きません・・貴方はキメイラがあの魔導師達を殺すまでの間・・ここに居て貰わなくてはいけませんからね！ヘル・・ストライクッ！！」

足から黒い魔力弾が放たれる

「！！」

剣で受け止め魔力弾を受け流し、斬りかかる

「おっと・・危ない・・危ない・・」

マントを翻しながら斬撃を回避し

「ブラッデイ・・クロスッ！！」

長い足から放たれた魔力奔流に体の動きを止められると同時に、凄まじい速度で蹴り抜かれた足から黒い十字架が迫ってくる

「くっ・・・」

拘束は一瞬だったので、跳躍してそれを回避すると

「少し焦り過ぎですね・・ブラッディ・・ストリームッ！！」

左手から放たれた赤い電撃の鞭が迫ってくる

「くっ・・がああッ！！！」

回避しきれず直撃を喰らい、体が痺れて思うように動けないが・・何とか体勢を立て直し着地する

「流石は守護者・・中々やりますね・・ですが・・私はそう簡単には倒せませんよ！！」

向かって来るヴェノムの突撃を回避し剣を振るうが

「なっ！！」

マントが形を変え剣を防ぐ

「クス・・隙ありですね・・マーヴェリックッ！！」

「うぐっ・・」

強烈な回し蹴りを喰らい吹っ飛ばされながら、私はこいつの戦闘スタイルを分析していた

（マントや鞭の遠隔攻撃にトリッキーな足技・・こいつは厄介だな）

破壊力は低いだが・・攻撃が読みにくい・・これは長くなりそうだ・・フェイト・・無事でいてくれよ

私は剣を構え駆け出した・・戦いはまだ始まったばかりだ

「ドラゴンズ・・ラッシュッ！！」

手が分裂したように錯覚するほどの高速の連続突きで、デクスを消滅させる

「ふぅ・・モードエグザ・・」

消滅させると同時にデュナスフォルムを解除する。デュナスフォルムは確かに強力だが魔力の消耗が激しいのが欠点だ。

「エリオ君・・とりあえず今の所デクスの反応は無いよ」

キャロの言葉に頷き座り込む・・お父さんとの訓練で大分疲れていたから・・少しきつい

「大丈夫？」

心配そうにキャロが尋ねて来るので慌てて

「全然大丈夫！！それよりキャロの方が心配だよ」

デュナスフォルムはキャロの魔力も消費する・・僕とキャロの合計の魔力が使えるが・・先に消費していくのはキャロの魔力だ。だから心配だよと言うと、キャロは笑いながら

「私も大丈夫だよ・・エリオ君が護ってくれたから」

と笑うキャロに思わず赤面してしまい目を逸らす

「どうしたの？」

キャロが首を傾げながら尋ねて来る。言えない・・恥かしくて顔を見れないなんて言えない・・そう思いながら空を見上げると。上空に異形が浮いており口から炎を吐き出そうとしたのが見えた

「！！キャロ！！！」

慌ててキャロを抱き抱え後方に跳ぶ、その瞬間赤黒い炎がキャロが居た場所を焼く

「あ・・ありがとう・・エリオ君」

お礼を言うキャロを降ろすと同時に

バサ・・バサ・・ズズーン

地響きを立てて異形が着地する。改めてみると化け物と言うのが一番しっくり来る。複数の獣のパーツを持ち・・腕は４本で翼も４枚ある。その瞳は真紅に染まり・・ただ立っているだけなのにとんで

もないプレッシャーがある

「グルルル・・グオオオオッ！！！！」

僕達を見つけて雄たけびを上げる、異形・・その目は僕とキャロを捉えている

「キャロ！」

「うん」

即座にデュナスフォルムに切り替え

「カートリッジロード！」

篭手から2発の薬莢が飛び出し魔力を増加させ、腕を組み照準を合わせ

「ブレス・・オブ・・ワイバーンッ！！！」

僕は異形目掛けて全力で砲撃を放った

グオオッ！！魔力で出来た飛竜は異形を完全に捉え・・爆発する・・

どうだ・・ダメージはあるか？

煙が晴れるとそこには無傷の異形が立っていた

「そんな・・全力の攻撃が効いてない？」

僕が驚き目を見開くと同時に

「グルルルッ・・・」

異形が唸り声を上げながら向かって来た。異形はその巨体の割りに素早く僕たちに迫ってくる

「キャロ！」

僕はキャロを抱き抱え宙に逃げた

「ガアアアッ！！」

その瞬間僕達が居た場所に拳が振り下ろされる

ドゴンッ！！

拳の形にクレーターが出来る・・信じられないパワーだ

「グルルル・・」

僕とキャロを真紅の瞳が捉え続けている

「ガアアアッ！！」

上下左右から豪腕が僕とキャロを捉えようと迫ってくる。僕は必死でその攻撃を回避する

「グルルルッ・・・」

隙が全然無い・・４本の腕と口から吐き出される炎・・その全てが

計算された物で的確に僕とキャロに迫ってくる

「ガアアアッ！！」

ちょこまかと逃げる僕に痺れを切らしたのか口を大きく開き

「グルルルル・・ガアアアアアッ！！！！」

とんでもない大声上げる・・クラッ・・何だ？・・目が回・・る・・

その声の所為なのか僕はバランスを崩し地に着地した

「グルルルッ！！」

異形が僕とキャロを見る・・そうか・・さっきの叫び声は・・僕とキャロのバランス感覚を崩す為の・・何度か立ち上がろうとするが足が震え立ち上がる事が出来ない

「ガアアアッ！！！」

僕とキャロの方を向いて、大きく口を広げるその中に巨大な火の玉が見えた・・回避も出来ない・・防御も出来ない僕とキャロは思わず目を閉じた

「エリオとキャロがッ！！」

私がようやく二人の姿を見つけた時は、二人の前に異形・・確かキ

メイラが口を開き二人に炎を吐き出そうとしていた時だった・・

慌てて更に加速するが・・間に合わない・・炎の方が速い・・それでも私は全速力で二人の元に向かう・・だがそれより速く灼熱の炎が二人に向け吐き出された・・私はそれでも止まらず二人の元に向かおうとした時

「汝・・何故護れなかった?」

突然背後から声を掛けられる。慌てて振り返るとそこには

「!!」

巨大な赤い鳥が私の方を見ていた・・いや・・それだけじゃない・・時が停止している?空間が硬直したように何も動いていない

「汝は・・護りたい者を護る事が出来なかった弱者・・・そんな者にそれは必要ない・・」

!!!私の手からバルディッシュが消える

「何をしたの!!」

理屈は判らないが多分この鳥がバルディッシュを消したのだと思い怒鳴ると

「何を?・・弱者に武器は必要ない・・ただそれだけの事」

私を４つの目が見つめる

「私のデバイス・・バルディッシュを返して!!!」

「返す・・どれの事だ?」

鳥の回りに数百・・うううん・・もっとある・・沢山のバルディッシュが浮かび上がり。地に落下する

「さて・・どれがお前の物だ?」

その沢山のバルディッシュを見る・・全部同じでどれが私の物かわからない

「おっと・・言っておくが・・声を掛ける事は出来んぞ・・さぁ・・探せ・・お前のデバイスを・・時が終る前に」

鳥の背後に巨大な砂時計が現れる

「これが落ちきれば・・止まっている時は動き出す・・そしてあの幼子達は死ぬ・・それが嫌なら見つけるのだな・・お前のデバイスを」

そう言うと鳥は姿を消した

「この中から・・本物を見つけるの?」

視界を埋め尽くすほどのバルディッシュを見る・・その間も砂時計の時は減っている

「考えてる時間は無い・・早く見つけよう」

私は一つずつ待機状態のバルディッシュを拾い。セットアップする・・それと同時に砂になり消える

「偽者は消えるんだね・・」

どんどんセットアップしていくが・・全部消えていく・・

「時間が無い・・早く早くしないと・・」

砂時計の砂は消えて行く・・それがどんどん私を焦らせる

「判らない・・判らないよ・・バルディッシュ・・どこ?」

慌てて探すが判らない・・ずっと一緒に居たのに・・なんで判らないの

私は思わず膝を着くと、鳥の声が聞こえてきた

「お前はパートナーだ相棒だと、言っておきながら本物は判らない・・お前はバルディッシュを唯の道具としか思ってなかったのだろう?」

「違う!バルディッシュは・・私の大切なパートナーだ!!」

「なら何故判らない!!お前を呼ぶバルディッシュの声がッ!!」

声?・・目を閉じると聞こえてくる

『マスタ・・・マスター・・私はここです・・早く・・』

聞こえる・・バルディッシュの声が!!私はその声を頼りに走り出した

「バルディッシュ・・ごめんね・・少し待たせちゃったね」

足元のバルディッシュを拾い上げると、偽者のバルディッシュが全て消え代わりにあの大きな鳥が姿を見せる

「汝・・我が試練を乗り越えたり・・我が試すは真実の絆・・汝真実の絆を示したり」

その鳥から赤い球体が飛び出し、バルディッシュの中に入る

「何をしたの?」

何をしたのかと尋ねると

「何もだ・・我はきっかけを与えたに過ぎない・・後はお前次第・・我が与えた力を使えるかはお前次第だ」

さっきまでは気付かなかったがこの鳥からは、神々しいまでの魔力を放っていた

「さぁ・・行け・・そして護るのだ・・」

その声と共に時が再び動き出した、それと同時に加速する・・速い・・今までの速さとは比べられない。私は炎がエリオとキャロに当たる前に二人を抱え上げ。宙に逃れた

「「フェイト・・さん?」」

二人がぼんやりと尋ねて来る

「ごめんね・・少し遅れちゃったけど助けに来たよ」

二人を降ろしキメイラを見ていると

「ガアアアッ！！」

私も敵と判断したのか、咆哮と共に炎を吐き出してくると、同時に私は炎に向かい飛んだ

（バルディッシュ・・私に力を貸して・・二人を護る為の力を・・）

（マスター、私は何時だって貴女の味方です・・さぁ・・行きましょう）

その声と共にバリアジャケットが金色の光に包まれた

「フェイトさんッ！！」

突然炎の向かい飛んで行ったフェイトさんの名を呼ぶ。このままだとフェイトさんが炎に呑まれる。そう思った瞬間

ズパンッ！！

炎が真っ二つに斬られ爆発する。一瞬何が起こったのか判らなかった・・煙でフェイトさんの姿が見えなくなった

バサッ！！

力強い羽ばたく音と共に炎が消え・・フェイトさんの姿が見えた

「あれは・・一体・・」

フェイトさんが纏うバリアジャケットは以前の物と違った。美しい青い軽鎧に赤のマント・・それに美しい装飾が施された二つのブレスレットに、魔力が閃光の様に輝きフェイトさんの周りを包み込んでいた

「エリオとキャロは私が護るッ！！」

その言葉と共に右手のブレスレットから金色の輝く魔力の刃が現れ異形に向かっていくその姿は・・間違いなく騎士だった

第６９話に続く

## 第６８話（後書き）

今新しい番外編のアイデアを考えています

タイトルは八神龍也の日常で、本編終了後の龍也の周りに起きる小話がメインです

投稿はまだ先に成ると思いますがお楽しみに

## 第６９話（前書き）

仕事が休みなので一気に執筆しました

フェイトの強化の話の続編です、今回も感想が来る事を心待ちにしています

それでは本編始まります

# 第６９話

第６９話

軽い・・体が羽みたいに軽い、私は魔力刃を振るいながらそう感じていた。今までの速さは何だったと思うくらい体が軽い

「ガアアアッ！！」

唸り声と共に迫る豪腕も酷く遅く見える、軽く回避し右手の魔力刃を振るう

ズバッ！！

鋭い音と共にキメイラの腕を深く傷つける

「ギャアアアアッ！！！」

悲鳴の様な声を上げ、倒れるキメイラだが次の瞬間、口から炎が吐き出される。咄嗟の事で回避が間に合わないと思った瞬間

フォンッ！！

左手のブレスレットから魔力の盾が発生し、その炎を防ぐ、私はその炎を防ぎながら

「ソニックミラージュ・・・」

強烈な加速により４体の分身を発生させ、キメイラを囲むように配

置する

「ガアアアッ！！！」

雄たけびを上げながら分身を殴りつけるがそれは当たる事は無く、
空振りに終る

「プラズマ・・ランサーッ！！！」

本体である私と分身から同時に魔力の槍が放たれる

「ガアアアアアッ・・・」

バチ！バチ！！

稲妻が落ちたような轟音と共にキメイラの叫び声が響き渡り

ズズーンッ！！

地響きの様な音を立てて・・その巨体が地に沈む・・だがまだ消滅
する気配は無い・・とんでもない体力だ

「グルルルッ！！！」

怒りの声を上げながら立ち上がるキメイラの目は私を睨みつけている

「大分頭に来てるみたいだね」

多分こいつの知能は低い・・優れた身体能力の代わりに知能が低い、
獣そのものだ

「ガアアアッ！！」

４本の腕が私の方を向く、それと同時に赤黒い魔力が溜まって行く

「大技かな？・・！！知能が低いって訳じゃないみたいだね・・」

ふと後ろを見る・・私の背後にはエリオとキャロが居る、多分こいつは攻撃を喰らいながら、私が絶対回避出来ない位置に誘導したんだ

「ガアアアッ・・・・ヒート・・バイパーッ！！！！」

初めて言葉を発したキメイラの腕から４つの魔力波が放たれる、回避は出来ない・・もし避ければエリオ達に当たる・・じゃあどうすれば・・

『マスター！風です・・風を呼ぶんです！！！』

バルディッシュの声に従い、マントで風を呼ぶ

「大いなる風の守護・・ウィンド・・ガーディアンッ！！」

マントを振ると、それに従う様に風が動き、私達を護る様に流れ・・風で出来た壁を発生させる

ズドーンッ！！！

「グルルルッ！！・・グオッ！？」

勝ち誇ったような唸り声を出していたキメイラだが、無傷の私達の

姿を見つけ困惑したような声を上げるキメイラに

「風は・・私達の味方になった」

凄まじい暴風がキメイラに吹き付け。その動きを封じる

「今度は私の番・・バルディッシュ！！カートリッジロードッ！！」

『イエス、サーッ！！」

ブレスレットから薬莢が飛び出し魔力を増加させる

「エルン・・・」

バチバチと音を立てて、魔力刃に稲妻が走る

「ストンウェルッ！！！」

高速で魔力刃を振り抜く、それと同時に魔力が巨大な衝撃波になりキメイラに迫る

「ガアアアッ！！！」

雄たけびと共に風の拘束を振り解き、４本の腕でその衝撃波を受け止めるが・・やはり簡単に勢いを止める事は出来ないのか、後ろに下がって行くが、ダメージは殆ど無さそうだ・・でもそれだけ下がらせる事が出来たなら！

「・・・・」

目を閉じ意識を集中させながら、思い出すのは龍也のガイアフォースだ、あれは変換素質と膨大な魔力を同時に使用し。強大な威力を持つ広域殲滅の魔法・・前の私では使う事が出来なかった、だけど今の私なら使える筈！

バチバチ！！音を立てて両手に魔力が溜まって行くのが判る・・私は炎は使えない・・だけど雷なら！必要な分魔力が溜まったのを感じ、閉じていた目を開く

「ライトニング・・・」

両手の魔力が纏まり一つの球体になる、そのまま両手を頭上に掲げると

バチッ！！バチッ！！！

凄まじい音を立てながら、巨大な球体になる

「フォースッ！！！！」

キメイラ目掛け、その球体を投げつける

「ガアアアアッ！！！！」

エルンストウェルを砕き、そのままその雷も受け止めるが、止める事は出来ず徐々に雷に包まれて行き

ズガーンッ！！！バチバチバチッ！！！！

「ギャアアアアアアアアッ！！！！」

稲妻の落ちた様な音と共に、キメイラの咆哮が響き渡り、キメイラの巨体は今度こそ完全に沈黙した

ズドーンッ!!凄まじい轟音が響き渡る、まさかフェイトがあいつを倒したのか

「キメイラ!!まさか・・くッ!守護者!!勝負は預けて置きますッ!!」

ヴェノムも同じ事を考えたのかマントを翻し飛び去っていく

「待て!!」

私もヴェノムの後を追い飛んで行った、暫く飛んでいるとビルの上にフェイト達の姿を見つけ合流する

「怪我は無いかッ!!」

フェイトの前に着地しながら訪ねると

「私達は大丈夫・・それよりキメイラを!!」

フェイトが指差す方を見ると黒こげで地に沈む込む、キメイラの巨体とその傍に佇むヴェノムの姿があった

「キメイラ・・なんという事です・・まさか・・貴方が負けるとは」

嘆くヴェノムだが私達の方を向き

「少々貴女の事を甘く見ていたようです！！ですが・・詰めが甘い！！キメイラはまだ生きています！！」

その言葉の通りでキメイラがよろよろと立ち上がる

「クックックッ・・まだ生きているなら何とでも出来ます・・では御機嫌よう・・」

その言葉と共にヴェノムとキメイラの姿は消えた

「くっ・・逃がしたか・・」

ヴェノムは良いとしても、せめてキメイラは倒したかった

「ごめん・・龍也・・私じゃ・・キメイラは倒せなかったよ・・・」

私の方を見ながら謝るフェイトに

「いや・・謝るのは私の方だ・・すまなかった・・幾らＬＶ４とは言え時間を掛けすぎた」

フェイト達を見ながら謝ると

「お父さんの方が怪我が酷いじゃないですか・・大丈夫ですか？」

キャロが私の騎士甲冑を見ながら言う。私の騎士甲冑は所々砕け素肌が見えてる場所もある

「この程度・・怪我の内に入らない・・フェイト?どうした顔色が悪いぞ」

ここで気付いたフェイトの顔色は真っ青で今にも倒れそうだ

「ごめん・・龍也・・私・・もう限界・・」

ふらっ・・意識を失い崩れ落ちるフェイトを抱き抱える

「フェイト!!大丈夫か・・気絶してるのか・・」

抱き抱えたフェイトは眠りに落ちている・・どうやら魔力の消費しすぎで気絶したようだ

「お父さん・・フェイトさんは大丈夫ですか?」

エリオが不安げに尋ねて来る

「大丈夫だ・・魔力の消費しすぎで気絶しているだけだ」

エリオの頭を撫でてからフェイトを背中に背負いエリオ達も抱き抱える

「お父さん!?・・!」

キャロが急に抱き抱えられた事に驚き大声を出す

「フェイトが心配だ・・悪いがこのままヘリの所まで飛んでいく」

私はそう言うとエリオ達を抱き抱えたまま、ヘリに戻り六課へ戻っ

て行った

「これで良いか・・」

気絶しているフェイトをフェイトの部屋のベッドに横にしてから、私は医務室に向かい、その後にはやての部屋に向かった

「兄ちゃん・・お疲れ様・・その様子やと・・大分シャマルに絞られたようやな？」

にこやかに笑うはやてに

「むっ・・無茶をするなと言われた・・唯の打撲なんだがな・・」

ヴェノムとの戦闘で体のあちこちが痛いが・・大した問題があるわけで無い

「あんな・・普通の人なら骨が折れてても、おかしくないんやで？あんま無茶して心配させへんでね？」

はやてに頷きソファーに座り込む

「そんで・・ヴェノム言うネクロはどうやった？」

各部署に通達する為の書類を作成する為に、はやてが尋ねて来る

「やっかいだな・・優れた体術に遠隔攻撃の手段も豊富・・せめてもの救いは攻撃力が低い所だな」

「あんな・・それは兄ちゃん限定やろ・・普通の魔導師なら一発で

戦闘不能やない？」

呆れたように言うはやてに

「いや・・本当に攻撃力は低い・・唯一威力があるのは鞭だけだな」

「んじゃ・・交戦した時は鞭に注意やね・・・ほんでフェイトちゃんが戦闘した言うキメイラは？」

「私が交戦した訳じゃないが・・暫くは出て来ないだろう・・かなりのダメージを喰らっていたみたいだからな」

はやては書類を作りながら

「ほいほい・・でも一応出て来るかもしれへんって事やね・・・良しっと書類はこれで終わりっと」

椅子に腰掛け背伸びをするはやてに

「それで他に用が無いなら私は部屋に戻っても良いか？」

部屋に戻って良いかと尋ねると

「んーいや・・もうちょいここ居ってえな」

もうちょっとここに居てと言うはやてに頷くと

「ちょい・・疲れた・・兄ちゃん・・膝枕して・・」

机の椅子から立ち上がり言うはやてに

「男の膝枕なんて固いだけだと思うが？」

「良いの！兄ちゃんの膝枕が私は好きなんやから！！」

そう言うはやてに苦笑しながら膝枕をしてやると

「んふふ～～やっぱり気持ち良いわ」

目を細めるはやての髪を撫でると

「んっ・・気持ち良いわ・・」

と笑うはやての髪を撫でながら、感じる穏やかな時間に私は目を細め笑っていた

「ううん・・ここは私の部屋？」

私が意識を取り戻すとそこは私の部屋だった

「・・確か・・魔力の消費しすぎで気絶したんだよね・・・」

立ち上がり意識を失う前に何があったのか思い出す

「そうだ・・・私・・龍也に抱えられたんだ・・・恥ずかしいな」

意識を失いかけていたが確かに龍也に抱き抱えられたのは感じていた

「ううう・・恥かしい・・・あっ・・・でも嬉しかったかも・・」

龍也は非常に恋愛には疎い・・その龍也が抱き抱えてくれたという事が私は嬉しかった

コンコン

「フェイトちゃん?起きてる?」

扉の外からなのはの声が聞こえたので、扉を開く

「あっ・・良かった起きてたんだ・・夕ご飯持って来たけど・・食べれる?」

と笑いかけてくるなのはに

「うん、大丈夫、食べれるよ入って」

部屋の中になのはを招き入れる

「凄いね・・これ本当に食堂のメニュー?」

なのはが持って来てくれたトレーには、凄く美味しそうな料理が並んでいた・・とても食堂のメニューに見えず尋ねると

「ううん・・違うよ・・龍也さんが作ってくれたんだよ」

龍也が・・本当に優しいね・・・これでもう少し人の好意に敏感だと良いのにね

「ほら・・・食べないと冷めちゃうよ？」

なのはの言葉に頷き、ハンバーグを口に運ぶ

「もぐ・・・相変わらず美味しい」

久しぶりに食べたがやはり龍也の料理は美味しい

「だよね・・女の私より料理が上手って・・なんか自信無くしちゃうよね」

なのはが笑いながら尋ねて来る

「本当だよ、どうして龍也はこんなに料理が上手なんだろうね？」

コーンスープを口に運びながら言うと

「んー多分あれじゃない？はやてちゃんとかに美味しい料理を食べさせたかったんじゃない？」

はやてか・・・やっぱり・・龍也に一番近いのは妹として育ったはやて、次にヴィータだよね・・

「そういえば・・なのはは食べたの？」

半分ほど食べた所でなのはに尋ねると

「うん、私達も皆食べたよ・・スバルとエリオとセッテはお代わりしてたよ」

ふふ・・しょうがないよね・・龍也の料理は美味しいから。そう思いながらデザートのゼリーを食べ終え

「ごちそうさまでした・・所で何か用があるの？なのは」

食事中ずっと待っていたなのはに用があるのか？と尋ねると

「うん・・ちょっとね・・えっと・・はい」

なのはが差し出して来たのは

「新しい形態の纏め？」

かなり厚めの書類の束を見ながら言うと

「私のレイジングハートと同じ様に、バルディッシュにも新しい形態が出来たみたいだから、シャーリーに見て貰ったんだ」

頷きながらその書類を見る

「・・・本当・・凄いスペックだよね・・」

自分で使っていたから判るが・・化け物のような性能だ。想定されていた真・ソニックフォームを遥かに上回る性能だ

「本当だよ・・私のレイジングハートも凄いパワーアップしたからね」

頷きながら書類を読み進める

「真ソニックフォームより、防御・・加速・・攻撃力は上・・更に広域殲滅の魔法の行使が可能な、アルフォースモード・・・とんでもないよ」

最後に使った広域殲滅の魔法はかなりの威力があった、多分気絶したのはリミッターの所為だと思いながら、読んでいた書類を閉じる

「でもさ・・フェイトちゃん。私達のデバイスがパワーアップしたのは、やっぱりこれからもっと大変な戦いになるって事かな」

やっぱり・・なのはも感じたのかな

「うん・・私もそんな気がする・・だけど大丈夫だよ。私達も強くなった・・龍也だけに負担を掛けなくて澄む」

私達が弱いから龍也が無茶をする、だけど私達が強ければ龍也は無茶をしなくても良い

「そうだね・・もう私達は足手纏いじゃないよね」

暫くなのはと話をしていると

「じゃあ・・トレーは私が持って行くから。フェイトちゃんはちゃんと休んでてね」

トレーを持ってなのはが私の部屋を後にし、一人になった部屋で

「そうだよね・・私はもう足手纏いじゃない・・龍也を護る事が出来る」

昔は何度も龍也に助けられた・・でも今は違うバルディッシュと一緒に龍也を護る事が出来る

「バルディッシュ・・・これからも宜しくね」

ベッドに横になり、枕元のバルディッシュを持ち上げながら言うと

『はい・・私は何時だってマスター、貴女の味方です』

その言葉に笑みを零しながら、私はもう一度眠りに付いた

「キメイラが敗れるとは・・少々魔導師の事を甘く見ていたようですね」

いらいらとしながら、キメイラの入ったポッドの調整をしていると

「ふん！だからそんな物が守護者を倒せる訳が無いんだ」

この声は・・

「やれやれ・・久しぶりに声を聞いたと思ったら皮肉ですか・・ゴレラ」

シャッ！！！

ゴレラと言った瞬間、剣を構え一瞬で私の前に立ち、剣を首筋に当てながら

「俺はハーティーンだ!!そのふざけた名で俺を呼ぶな!!」

怒鳴るハーティーンに

「いや・・すいませんね・・ハーティーン・・つい口が滑ってしまいまして」

素直に謝る事にする・・ハーティーンは私より強い、私を倒す事など容易い事だからだ

「ふん・・次は無いぞ」

剣を鞘に戻すハーティーンに礼を言ってから、ポッドの調整を再開すると

「まだそんな物を弄くっているのか?一度負けた物に用は無いだろうに」

呆れたと言いたげなハーティーンに

「くす・・そうでしたね・・ハーティーンは知らないのですね・・キメイラはこれで完成では無いのです」

まだ重要な部分が無いキメイラは未完成品・・言うなら失敗作なのだが」

「完成ではない?何を言っている・・どうみてもこれで完成だろう

キメイラを見ながら言うハーティーンに

「くす・・気付きませんか・・キメイラが何の姿をしているか？」

笑いながら言うと

「姿？・・・んッ！！こいつの姿は・・馬鹿なっ！！何故」

気付いた様で慌てるハーティーンに

「その様子なら気付いた様ですね・・そうです！キメイラのベースはカーズです」

カーズは特殊なネクロで、様々のタイプのネクロの優れたパーツを持つ・・いわば合成獣・・まぁ・・本人の前で言えば怒るの判っていますがね

「私はカーズを分析して・・キメイラを作りました・・つまり足りない物とは・・」

「カーズか・・」

中々頭が切れる見たいですね・・キメイラに足りない物・・それはカーズだ！！

「キメイラはカーズの残骸を取り込んだ時。真の完成を迎えるのです」

キメイラを見ながら言うと

「馬鹿か！カーズが簡単にやられる訳無いだろうが！」

怒鳴るハーティーンに

「いや・・カーズは負けますよ・・その時こそ私の最高傑作は完成するのです」

そう・・負けて貰わないと困るのだ・・私の最高傑作の為に!!

「ちっ・・こんな所に来るんじゃなかった」

私の研究室を後にする、ハーティーンの姿を見ながら

「クク・・ハハハ・・・ハッハッハッハ!!!!!完成が待ち遠しいですよ!!キメイラ!!!」

パンデモニウムにヴェノムの狂ったような笑い声が響いていた

「シャマル・・兄ちゃんの調子はどうや?」

頼みがあると言って来た、シャマルに兄ちゃんの調子を尋ねると

「正直に言いますよ、お兄さんの体の調子は最悪です」

最悪か・・何が原因なんやろか?

「原因はファントムとの戦闘でなのはちゃんを庇ったのと、今日の戦闘ですね・・まぁ、疲労が蓄積しているのが一番の原因ですが」

疲労か・・兄ちゃんを休ませるのはかなり難しい問題やな

「どれくらい休ませれば良いんや？」

「2日ですね・・その間魔法の行使は絶対にさせてはいけません」

「絶対か・・・どうするかな・・監禁とかか？」

「・・監禁は駄目ですよ・・」

シャマルが呆れた様に言う

「嫌やな・・3割り冗談や」

「それ殆ど本気じゃないですか！駄目ですよ！！監禁なんかしたら休みにならないじゃないですか！！」

怒鳴るシャマルに

「嫌やな・・兄ちゃんを独占したいと思うのは自然の事やろ？」

肩を竦めながら言うと

「それは判りますが・・犯罪は駄目ですよ」

犯罪や無かったら良いのか・・

「んじゃ・・軟禁は？」

監禁が駄目なら・・軟禁なら良いだろうと思い言うと

「駄目です!!!監禁する方向から離れてください!!」

文句が多いなぁ・・兄ちゃんを休ませたいからアイデアを出してくれ言うたのはシャマルやのに

「あのですね・・文句とかじゃなくて・・もっと常識的な事を言ってください」

「極めて常識的な事やったで?」

言うとシャマルは頭を抱えながら

「あのですね・・はやてちゃんがお兄さんが好きなのは判ります・・ですがもっと常識の中で行動してください」

別に良いやん・・兄ちゃんは誰にも渡すつもりがないんやから

「はぁ・・じゃあ・・私のアイデアを聞いてください・・良いですか・・なのはちゃんとフェイトちゃんも体の調子が良くありません・・却下!!兄ちゃんが襲われるやろが!!」

理解した・・シャマルは兄ちゃんとなのはちゃん達をデートさせる気や!そんなこと私は許さへん!!

「ですが!!監禁とか軟禁と比べれば!!１００倍ましです!!スバルとティアナの時みたいに条件を出せば良いでしょう!!」

「嫌や!!兄ちゃんが気の迷いで好きになってしまう可能性がある

やろがッ！！！」

暫くシャマルと言い合いをし、肩で息を整えながら

「はぁ・・はぁ・・１０００歩譲って、デートの許可は出しても良え・・だけど兄ちゃんがなのはちゃん達に靡く可能性があるやろ」

そうなったら最悪だ・・私とヴィータは大切な人を永遠に失う事になる、そんなのは御免だ

「はぁ・・はぁ・・その可能性は低いです・・あの鈍感なお兄さんがそう簡単に人を好きになる筈がありません」

正論やな・・兄ちゃんは究極的な鈍感やしな

「はぁ・・判った・・二人のデートの許可出す・・今からメール送るわ」

メールの内容はこうだ

二人に2日の休暇を与えます・・その間兄ちゃんとデートをしてもかまわへん、だけど条件がある

1　兄ちゃんに迫らない

2　キス禁止

3　腕組み禁止

4　暗くなる前に帰る事

5　露出のある服を着ない事

6　兄ちゃんを襲わない事

以下の条件を守るなら兄ちゃんとデートしてもええ。でもデートをする場合は、兄ちゃんに絶対魔法を使わせん様に見張る事が条件や

「これで良いか？」

メールをシャマルに見せながら言うと

「良いんじゃないですか」

シャマルの了承が出たのでメールを送り

「私はもう寝るわ・・おやすみシャマル」

「おやすみなさい、はやてちゃん」

シャマルに見送れながら自室に戻ったが

「むう・・兄ちゃんとなのはちゃん達がデートか・・もやもやする・・」

スバルやチンクさん達と違い、二人は兄ちゃんとの付き合いが長い分だけ危険だと思う

「ああ・・なんであんな許可出してもうたんやっ！！！」

自作の兄ちゃん抱き枕を抱えながら私はメールを出した事を後悔していた

「うう・・兄ちゃんが二人を好きになりませんように」

私はそう祈ってから眠りに付いた

第７０話に続く

## 第６９話（後書き）

次回はデートの話ですね・・
今まで空気状態のなのはとフェイトの話です！
それでは次回の投稿まで少しの間のお別れです

感想が来る事を期待しながら待っています

# 第７０話（前書き）

ついに７０話です！！出来れば番外編をやりたいのですが・・本編のアイデアが大分溜まっているので・・番外編の方はもう暫く時間を下さい

それと私の小説に誤字が多いのは・・判っているので出来ればここが間違っていたという報告が貰えると嬉しいです

少々長話になりましたが本編始まります

# 第７０話

第７０話

「うう～ん・・良く寝た」

ベッドから抜け出し身嗜みを整えてから、紅茶でも飲もうと思い準備をしていると

コンコン

「なのは！！入るよ！！」

フェイトちゃんが凄まじい勢いで部屋に入ってくる

「どうしたの？そんなに慌てて・・何か事件でも起きた？」

ネクロかデクスが出たのかと思ったが、警報が無いので首を傾げながら尋ねると

「メール！！メールを見て！！」

フェイトちゃんに言われた通りメールを見る・・差出人ははやてちゃんか・・

「これは！！」

そこには条件付だが龍也さんとデートしても良いという事が書かれていた

「なのは！！龍也と遊びに行っても良いって！！」

凄くテンションが高いフェイトちゃんに驚きながら

「そうだね。龍也さんと一緒に遊びに行けるなんて凄い楽しみだね」

二人で紅茶を飲みながらどうするかと話しながら

「それで休暇は今日と明日・・どっちが先に龍也と出かけるか決めないと」

フェイトちゃんに

「フェイトちゃんは今日遊びに行きたい？」

「えっ・・私が先で良いの？」

驚いた表情のフェイトちゃんに

「うん・・別に良いよ。私は明日でも」

準備とかしたいし・・今日はフェイトちゃんに譲ろうと思う

「あっ・・ありがとう！！なのは！！じゃあ私準備してくるね！！」

凄まじい勢いで部屋から出て行ったフェイトちゃんを見ながら、私も明日の為の準備を始めた

「一体何なんだ」

演習場に行こうとしたら、スバルとティアナに止められ、仕事をしようとしたらセッテとクアットロに強奪される

「・・はっ・・嫌われてるのかッ！！」

まさか皆に嫌われてるのかと思い始めた頃

「旦那・・どうしたんすか？そんなに落ち込んで？」

ヴァイスにどうした言われ

「いや・・もしかしたら皆に嫌われているのか思ってな」

事情を説明すると、ヴァイスは呆れたように

「旦那・・部隊長からメール見てないんですか？」

メール？・・そう言えば来ていた様な気がと思ってると

「その様子だとメール見て無いっすね・・旦那は今日と明日強制休暇です。聞いただけですが無茶のしすぎで大分ダメージが溜まってるそうですね？シャマルさんから聞きました、多分皆も同じです・・指示は訓練と仕事をさせない事ですから、多分皆指示通りに動いただけで、旦那の事が嫌いになった訳じゃないと思いますよ？」

そうか・・唯の私の勘違いか・・

「それに・・あの人達が旦那を嫌いになる訳が無いっすからね」

ボソリと呟いたヴァイスに首を傾げると

「ああ、龍也。やっと見つけたよ！」

私服のフェイトが歩いてくる

「どうしたんだ？私服で」

隊舎の中なのに私服のフェイトにどうしたのかと尋ねると

「私、今日休暇なんだ、まぁ休暇って言ってもバルディシュを詳しく分析してるから、代休みたいな物だけどね」

バルディシュか・・確かなのは同様変化してたな・・あのマッ・・・いやシャーリーの事だからまた発作が出たか・・

「それでどうして？私を探してたんだ？」

休暇なら直ぐに出かければ良いのにと思いながら尋ねると

「龍也今日訓練も仕事も出来ないんでしょ？だから私と遊びに行こう！！後・・答えは聞いてないからね！！」

そういうと私の手を取り、フェイトは強烈な力で私を引っ張って行った・・どうやら私に拒否権は無いのだと悟り・・私は大人しくフェイトに連れて行かれた、その光景を見ていたヴァイスは

「いやーフェイトさんが積極的なのは珍しいっすね・・さーてこれでまた人気に変動があるかな～と思うと楽しみだね～旦那争奪戦」

彼は龍也と誰がくっつくかのトトカルチョの元締めでもある・・ちなみに今の人気は

1位　はやて　ヴィータ

2位　スバル　ティアナ　セッテ

3位　なのは　ノーヴェ　チンク　オットー　ディード

4位　フェイト　ウェンディ

となっている、はやてとヴィータの人気が高いのは当然で、次に積極的なスバル、ティアナ、セッテで冷静に状況を見ながら行動している、なのは達の人気は余り高くないが、買ってる人は多い・・で一番人気が無いのが意外な事にフェイトとウェンディで。フェイトは余り積極的に行動してないのが理由で、ウェンディは良くティアナにお話され戦闘不能になってるのが理由だ。それでもゼロではないが・・やはり人気は薄い・・だけど今日のデートでかなり変わってくるかもしれないと思うと非常に楽しみだ

「ふっふっふっ・・フェイトさんには頑張って欲しいっすね～」

ヴァイスは楽しげに口笛を吹きながら、仕事に戻って行った

「とりあえず服を買わないとな」

街中を歩きながら言うと

「なんで？」

首を傾げるフェイトに溜め息を吐きながら

「あのな・・私は管理局の制服だ。考えてみろ・・制服の局員が街中を歩いていれば、皆何か起きたと思うだろうが」

呆れながら言うと

「あっ・・そっかごめん・・着替えてから来れば良かったね」

謝るフェイトに

「気にしてないから良いが・・早く服を変えた方が良いな・・」

そう言い近くの服屋に入る

「えっと・・まずはバッグだな・・」

着ている制服を入れるのに丁度良いバッグを買ってから

「フェイト、何か服を選んでくれないか？」

フェイトを見ながら言うと、驚いた表情で

「なんで？龍也服のセンス良いと思うけど？」

首を傾げながら言うフェイトに

「私の服の大半は、はやてとヴィータが選んだ物でな・・実際自分で選んだ服など無い」

実際私の服のセンスは壊滅的らしいのだ・・

「・・判った・・私が龍也に似合う服を選ぶよ」

暫く待っていると

「お待たせ!これなら龍也に似合う筈だよ!」

フェイトが持って来てくれた服を着てみる

「どうだ?似合うか?」

試着室から出ながら尋ねる

「・・ばっちり・・凄く格好良いよ」

と笑うフェイトを見ながら着ている服を見る、黒のシャツに薄茶色のジーンズに肩の無い赤のジャケットだ

「これで遊びに行けるね・・じゃあ何処に行こうか?」

会計を済まし、服屋から出るとフェイトが嬉しそうに尋ねて来る

「フェイトの好きな所に行けば良いだろう?」

そう言うとフェイトは

「それじゃあ、意味が無いよ。折角遊びに来たんだから、龍也も何かアイデアを出してよ」

少し怒ったようなフェイトに

「しかしなぁ・・私はそういうのは良く判らないんだが？」

良く判らないと言うと

「それじゃあ・・歩きながら考えようか？」

二人でぶらぶらと街中を歩いていると

「おっ・・祭りか・・」

祭りがやっているのが目に止まる

「お祭り・・クラナガンにもあるんだね・・」

フェイトが驚きと言った感じで言う

「面白そうだ・・行って見るか？」

何をしようか迷っていたので丁度良いと思いながら言うと

「うん！行こう」

フェイトが頷いたので二人で祭り会場の中に入って行った

お祭りか・・クラナガンにもあるんだね・・私はそんな事を考えながら龍也の隣を歩いていたが、突然龍也に手を握られる

「た・・龍也!?」

その突然の行動に驚くと

「なんでそんなに驚く?人が多いからはぐれたら大変だと思ったから、手を繋いだのだが・・嫌だったか?」

首を傾げながら嫌だったか?と尋ねて来る龍也に

「嫌じゃないけど・・突然だったから少し驚いたんだよ」

「むっ・・そうかすまない」

謝る龍也に

「気にしなくて良いよ・・それより早く行こう!!」

龍也の手を引き屋台を見て回る

「おっ・・兄ちゃんじゃないか・・どうだい?また買ってくれないか?」

露天商のおじさんに話しかけられた・・その親しげな話し方に知り

合いかと思い尋ねると

「ああ・・ヴィータの髪飾りを売ってくれた露天商の人だ」

あの髪飾りの・・

「龍也ちょっと待ってくれる?欲しいのが無いか見たいから」

しゃがみ込み商品を見ていると

「またまた・・兄ちゃんも隅に置けないね・・こんな別嬪さん連れて?彼女かい?」

龍也と露天商の話が聞こえてくる、彼女か・・龍也はなんて返事を返すかな?商品を選びながら話を聞いていると

「いえ・・違いますよ、休暇だから一緒に遊びに行こうと誘われたんですよ」

やっぱりか・・はぁ・・ここは嘘でも良いから彼女って言って欲しかったな・・と一瞬気落ちし、下を見ると

「あっ・・これ」

銀細工の施されたペンダントが目に止まった

「ん?それにするのか?すいませんこれお願いします」

龍也がそのペンダントを露天商に渡す

「ほいほい・・毎度あり・・ほれ兄ちゃんからのプレゼントだよ」

露天商からペンダントを受け取り、直ぐに首から下げる

「龍也ありがとう・・」

ペンダントを見ながらお礼を言うと

「気にしなくて良い」

と笑う龍也とその露天商の出店を後にし、歩きながらたこ焼きなどを食べながら歩いていると

「わあああああッ!!」

祭り会場の中心の方から歓声が聞こえてくる

「ふむ・・何か大掛かりなイベントでもやってるのか?・・どうする行ってみるか?」

頷きその歓声の聞こえた方に行くと

「さぁ~特別ゲストの・・蒼天の守護者・・八神中将と戦ってみたいという猛者は居ないか!」

・・・余りの事で一瞬硬直してしまう

「えーと・・偽者だよね?」

ステージで仁王立ちしているのは明らかな偽者だ、黒の仮面にマン

ト姿・・正直非常に暑苦しい

「ふむ・・祭りの客寄せと言うところかね？」

龍也は全く興味が無さそうだ・・元々地位とか名誉には興味が無いから、この反応は当然だなと思った

「そこのお兄さんどうだい？挑戦してみないか！！」

司会者が龍也を名指しする・・知らないとは言え・・無謀だね・・本物がここに居るよ・・

「私か？良いね挑戦してみようか？」

龍也は意外と乗り気の様でステージに上がっていった

「さぁ・・新しい挑戦者だ！！さぁ・・彼は八神中将に勝てるのか！！それが見物ですね」

馬鹿だ・・馬鹿が居る・・その人本物だよ・・と思いステージを見ていると

「所でもし勝てたら、なにか商品みたいのはあるのか？」

龍也が騎士訓練用のデバイスを持ちながら、司会の人に尋ねる

「えっ・・はい商品はありますけど・・勝てるつもりですか？」

驚く司会者に龍也は笑みを零しながら

「いや・・もし景品があるなら、やる気が出るじゃないですか？」

勝つ気だ・・龍也は絶対に勝つつもりだ・・私がそんな事を思ってる中試合は始まった

「せえええいッ！！！」

偽物は中々鋭い攻撃を繰り出す・・多分それなりに名の通った魔導師だろうが・・龍也相手では役不足だね

「ふむ・・隙があるな」

体勢を低くしその攻撃を回避し、腹部に蹴りを放つ

「うぐッ・・・」

数歩下がり、苦しそうに膝を付く偽者に

「むっ・・まさかこの程度とは予想外だな」

龍也としては牽制のつもりの攻撃だったんだろう・・それでかなりのダメージを受けてる男に龍也は驚いた様に言った

「まだ・・私は負けてないぞ！！」

馬鹿にされたと感じたのか直ぐに立ち上がりデバイスを振るうが

「ふむ・・まだ荒い・・要修行だな・・偽者君」

龍也はデバイスを蹴り上げ、男の首を掴み地面に叩き付けた

「がはっ・・・」

苦悶の声を上げ沈黙した男を指差しながら

「勝ったが・・何をくれるんだ?」

と龍也は司会者に尋ねると

「えっ・・はっはい・・商品は・・これです・・」

差し出された物を見て

「いらんな・・はやてとかのブロマイド何かは・・」

それを返しステージを降りようとすると

「待ってくれ!!あんた何者だ!!俺は確かに八神中将じゃない!!だがベルカの騎士団ではそれなりに名のある騎士だが、あんたは別格だ!!教えてくれ!!あんたの名前を!!」

黒の仮面とマントを取り払った男に、龍也は笑みを零しながら

「時空管理局機動六課所属・・アサルトフォース隊　隊長　八神龍也中将だ」

懐から管理局の隊員証を見せながら

「祭りを盛り上げたいのは判るが・・人を騙すのは良くないと思うぞ?」

そう笑う龍也に

「す・・すいませんでした!!これが始めての祭りで盛り上げたかったんです!!」

司会者の人が土下座しながら龍也に謝る

「そうか・・なら私も協力しようか?」

「えっ!?」

顔を上げた司会者に

「祭り・・これは地球の物だろう?」

「はっ・・はいっ!!私は昔地球に行った事がありまして・・そこの祭りというのが凄く楽しくて・・クラナガンでもやりたいと思ったんですっ!!」

そうか・・悪意は無かったんだ・・単純に皆に祭りを知って欲しかったんだこの人は

「そっか・・じゃあ今から私が祭りに参加しても良いか?」

「えっそれじゃあ・・本当に協力してくださるんですか!!」

龍也らしいと言うか・・龍也は人が良いよ

「勿論・・それに協力者は私だけじゃないぞ?」

・・やっぱりね・・私もだね・・私は覚悟を決めステージに上がる

「！！貴女は・・ハラオウン執行官！！」

私と龍也がステージに立った事で、会場のボルテージは一気に最大になる

「さてと・・後はお前次第だ」

司会者の耳元でぼそりと呟くと、司会者はマイクを拾い

「はい！！それではスペシャルゲストの！八神中将とハラオウン執行官が到着したので！！大握手会を行います！！」

凄い勢いで子供達が龍也と私の前に並ぶ

「八神中将！！僕こんど士官学校に入るんだけど！八神中将みたいに強くなれるかな！！」

龍也の方に並んでいた男の子が笑いながら尋ねると

「勿論さ、頑張れば私みたいに強くなれるよ」

握手をしてから、その男の頭を撫でる

「うん！！僕頑張るよ！！！」

龍也を見ながら私も握手をしていた

「つ・・疲れた・・」

夕暮れ時で祭りは終了し今は片付けの最中、私は机に伏せそう呟きながら龍也の方を見ると

「流石に・・私も疲れた・・」

龍也はかなり疲労困憊と言った様子でぐったりとしていると

「八神中将とハラオウン執行官の御蔭で祭りが盛り上がりました！！本当にありがとうございます！！これはお礼です！！」

お金が入っているであろう袋を差し出す司会者に

「いや・・それは良い。その代わり次回の祭りの時は連絡をくれ・・また来たい今度は客としてな」

龍也が笑いながら袋を司会者に返し言うと

「はっ・・はいっ！！必ずご連絡を入れます！！」

そう笑い司会者に見送れ私達は祭り会場を後にした

これは余談だが・・この祭りには毎年龍也やはやて達が必ず参加する祭りとして、ミッドガルでもかなり有名なイベントになる

疲れた・・祭りは楽しかったが・・握手会はかなり疲れたと思いながら歩いていると、公園が目に止まる

「フェイト・・あそこの公園で少し休んでから帰るか？」

流石にこのまま帰るのは辛いので公園で少し休むかと尋ねる

「うん・・そうするよ・・」

フェイトと共に公園のベンチに腰を下ろす

「ふー・・疲れたな・・フェイト」

フェイトを見ながら言うと

「そうだね・・でも楽しかったよ」

確かに楽しかったと思い頷くと

「私はお祭りが大好きなんだ・・昔皆でお祭りに行ったの覚えてる？」

確か・・私が行方不明になる前の事だな

「覚えてる・・フェイトがはしゃぎすぎて・・迷子になった時だな？」

「・・なんでそんなに正確に覚えてるの？」

がっくりと肩を落とすフェイトに

「だって私が探したんでからな・・ちゃんと覚えてるのも当然だろ

う？」

私が探したのだから、覚えてるのは当然だろう

「・・まぁ・・それは置いといて・・皆で祭りを回って・・笑って・・私は凄く楽しかったんだ」

昔を思い出すようにフェイトの話に耳を傾ける

「私は・・さ・・人造魔導師じゃない・・だから皆と一緒に居ても良いのかとか迷ってた・・」

私は何も言えない・・私は当事者じゃない・・だから何も言えず・・ただ静かにフェイトの話を聞く

「でも龍也は違ったよね・・私に普通の女の子みたいに接してくれた・・私に生きていても良いって言ってくれた・・私は龍也に救われたんだよ」

そう言うとフェイトは立ち上がり

「だから今度は私が龍也を護る・・だからもう無茶しないでね？」

と笑うフェイトの顔はとても美しく不覚にも赤面してしまいそうになった

「ふふ・・さっ早く帰ろうよ、龍也」

手を差し伸べてくるフェイトの手を取り立ち上がり、夕焼けの中二人でゆっくりと歩きながら六課へと戻った

「今日は楽しかったよ・・龍也じゃあね・・また明日」

私の部屋の前でフェイトと別れ、私は部屋に戻った

「ふー・・今日は何とかなったが・・明日はどうするかな?」

明日はどうしようかと思いながら、今日の報告書を見ていると

ピピピ

「ん・・メールか・・差出人はなのはか・・」

メールを開くと

「何々・・はは・・どうやら明日の予定も決まったようだな?」

メールには明日遊びに行きましょうと書かれていた

「やれやれ・・私なんかと遊んで楽しいのかね?」

私は首を傾げながら、返事を返してから

「さてと・・寝るとするか・・」

仮想モニターを消し、ベッドに横になりながら、明日はどんな一日になるかと思いながら眠りに付いた

第71話に続く

## 第７０話（後書き）

どうでしたでしょうか？ほのぼのを目指したのですが・・余り自信がありませんので感想で指摘して貰えると嬉しいです

それと次回の更新は日曜日の夕方になると思うのでちょっと長い間失礼しますね

それと他の小説だとイメージＣＶの人の事が書いてあるじゃないですか・・私はそういうのは余り判らないので・・龍也のイメージＣＶの人を募集したいと思います
もしこの人はどうだろう？という方が居ましたら感想の方に宜しくお願いします

それでは失礼します

## 第７１話（前書き）

大分間隔が空きましたが７１話です
それと今回は番外編も二つ投稿しますので、出来れば感想が欲しいです
それでは本編始まります

# 第７１話

第７１話

「あああああ～っ！！どうしてメール送っちゃったんだろう！！」

私は部屋の中で頭を抱えた、明日どうするかどうかも何も決まっていないのに

「あうあうあう・・ピローン！！・・はうっ！！・・何だメールか・・」

私が頭を抱えているとメールの着信音が響き、一瞬かなり驚き変な声を出してしまったが、落ち着いてメールを見る

「あう・・龍也さんからだ・・・」

差出人は龍也さん・・つまり明日の事の返答だよね？・・もしかしたら断られるかな？・・内心ビクビクしながらメールを見る

「あっ・・良いんだ・・よかっ・・って良くないッ！！！」

返信のメールで明日一緒に出かけることになったが・・不味い、何も決まっていない・・服は大丈夫だ・・だが予定が無い

「あああああ・・・どうすれば良いの？」

こういう経験がまるで無い私はどうすれば良いのか判らない。

「と・・取りあえず・・週刊誌でも見ながら考えよう・・」

週刊誌のデートの特集記事を見ながら、私は明日の予定を考え始めてから、二時間後

「良し・・これで行こう・・」

どうするかの予定を決め、龍也さんにメールを送ると同時に私は眠りに落ちた

「ふむ・・どうしたのだろうか？」

待ち合わせの時間になっても、なのはが姿が見せないことに私は首を傾げた

「こういう時は早く来る物なんだよな？」

待ち合わせの３０分前には待ち合わせ時間に居たほうが良いと聞いたので、早く来たが・・既に１時間待っている

「寝過ごしたのか・・それともからかわれただけか・・どっちだろうか？」

そもそも・なのはが私を誘う事自体、不思議だ・・美人で人気のあるなのはと、隻眼の私・・どう見ても吊り合う者では無いだろう・・そんな事を考えていると

「寝過ごしたあああああッ！！！」

なのはの絶叫と共に走ってくる音が聞こえた

「・・どうやら・・寝過ごしたのが正解の様だな・・」

私は走ってくる音の方を見る、なのはが慌てて走って来る、暫くその姿を見ていると

「はぁ・・はぁ・・すいません・・寝過ごしちゃって・・」

私の目の前で息を整えながら謝ってくるなのはに

「いや・・別に大して待ってないから気にしなくて良い」

笑いながら言うと

「本当すいません・・私から誘っておいて寝過ごすなんて・・」

まだ気にしているのか謝ってくるなのはに

「だから気にしなくて良いと言っているだろう?・・それより何処に行くんだ?」

何処に行くのかと尋ねると

「えっと・・取りあえず・・映画館でも行きましょうか?」

映画・・か悪くないな・・

「そうだな・・それでは行こうか?」

「はいっ！」

元気良く返事を返すなのはと共に私達は映画館に向かって行った

「大人二人ですね・・■■■になります」

映画館の受付でチケットの支払いをしようとすると

「龍也さん悪いですよ・・ここは私が・・」

気まずそうにいうなのはに

「気にするな・・大して金の使い道があるわけじゃないからな」

と笑い支払いを済まし、映画館の中に入って行った

「ふむ・・悪くないな」

今日上映されている物はホラーだった。私はそんなにホラーが嫌いという訳ではないので、中々楽しんで見ていると

「あうううう・・怖い・・」

なのははかなり怖いようで、私の服を確りと掴んでいる

「きゃあっ・・・ううう・・失敗だった」

なのはが涙目で失敗だったと言うので

「怖いなら出るか？」

余りの怖がりの様に、映画館を出るか？と尋ねると

「いいい良いです、自分で見るって言ったんだから最後まで見ます」

最後まで見ると言うなのはに苦笑しながら、私はスクリーンに視線を戻した

あうあう・・失敗だったよぉ・・何で今日に限ってやってる映画がホラーなの・・

「がああああああっ！！」

スクリーンでゾンビが雄たけびを上げる

「きゃあっ・・あうあう・・怖いよぉ・・」

怖くて龍也さんの服を掴みながら映画を見続けた

「大丈夫か？」

映画が終わり、二人で映画館を出ると龍也さんが尋ねて来る

「だ・・大丈夫ですよ・・私は全然平気です・・」

そう返事を返すと

「あのな・・あれだけ怖い怖い騒ぎながら、大丈夫は無いぞ？」

呆れたという感じで笑う龍也さんが私の手を握り

「まぁ・・良いがな・・さてと・・そろそろ昼時だからレストランにでも行こうか？」

私の手を握りながら歩いて行く龍也さん

（あうううう・・行き成り手を繋ぐのは反則じゃないかな？）

私は赤面しながら、龍也さんに手を引かれながらレストランに向かって行った

「しかし・・最近はミッドでも地球の料理が多いんだな？」

レストランのある通りを歩きながら龍也さんが、私に尋ねて来る

「そうですね・・最近良く見ますよね・・地球の料理・・やっぱりあれじゃないですか？龍也さんの影響とか？」

ＳＳＳ＋であり、管理局最強の魔導師の龍也さん、その知名度は非常に高い、しかも余りメディアに顔を出さないので、素顔を知る者は非常に少ない。それに前の取材のＴＶもまだ放送されてないので、こうして街中を歩いていても騒がれる事は無い

「私の影響？・・どういう意味だ？」

首を傾げる龍也さんに

「正最強無敵の騎士・・・蒼天の守護者、いろんな噂があるんですよ?それに龍也さんは地球生まれじゃないですか・・まぁ・・私達もですけど・・多分それで最近地球に注目が集まってるそうですよ?」

管理局の高ランクの魔導師・・まぁ・・私やはやてちゃん達に龍也さん・・全員が地球生まれ。それが原因か最近地球に旅行に行く人が多いそうだ、

「そんな物なのか・・」

初めて知ったと言う感じの龍也さんと歩いていると一軒の店が目に止まる

「龍也さん、ここにしましょうよ」

「ほう・・こんな物であるのか」

龍也さんは感心という感じで笑った、あった店は洋食専門店と書かれていた

「ほら、龍也行きましょう!」

龍也さんと一緒にそのレストランに入って行った

「ごゆっくりどうぞ」

メニューを渡され、二人でメニューを見ながら

「何にします?」

龍也さんに尋ねると

「そうだな・・私は・・ドリアにでもするよ。なのははどうするんだ？」

笑いながら尋ねて来る龍也さんに

「私は・・スパゲッティにでもしますよ」

メニューが決まった所で、ウェイターさんを呼び注文をし、料理が来るのを話していると

「お待たせしました」

ウェイターさんが、私達のテーブルにドリアとスパゲッティを置き

「それでは失礼します」

ウェイターさんが下がった所で

「それでは食べるとしようか？」

笑う龍也さんに頷き、目の前に置かれた料理を口に運んだ

「美味しいですね」

これはかなり地球の味付けに近い、多分かなり試行錯誤を繰り返したのだろうと一口で判る

「確かに・・これは美味しいな」

龍也さんは上機嫌で答える、二人で話しながら食べた食事はとても和やかで楽しかった

「またのお越しをお待ちして居ます」

ウェイターさんに見送られ、レストランを後にした

「それにしても、良い感じの店でしたね」

感じの良い店だったと龍也さんに言うと

「確かに良い店だったと思うよ、・・所で次はどうするんだ?」

次はどうするのかと尋ねて来る龍也さんに

「そうですね・・特に予定も無いですし・・暫く歩きながら考えましょうよ」

折角のデートだが、はっきり言って何をすれば良いのか判らないのでそう言うと

「悪くないな・・それでは行くとしよう」

龍也となのはが話しながら街中を歩いている頃・・

「部隊長・・少し落ち着いてもらえませんか?」

グリフィス君がそう言う

「私は落ちついとるよ・・グリフィス君の気のせいやろ？」

私がグリフィス君を見て言うと

「そそそ・・そうですね！！すいません！！僕の気のせいです」

コクコクと頷くグリフィス君を横目に、書類整理をするが

（いかん・・イライラする・・兄ちゃんの要素が足りん）

昨日と今日兄ちゃんと一緒に居た時間が無かった為、酷くイライラとする

（ああ～！！もう嫌や！！はよ兄ちゃん帰ってこんかな）

イライラとしながら時計を見る、まだ昼を少し過ぎたばかり、少なくとも後４時間は帰ってこない

「八神中将・・早く・・早く帰ってきてください」

グリフィス・・多分六課の中で一番苦労している人物である。龍也が居ない事でイライラとし、機嫌が悪くなるはやての補佐を出来るのは恐らく彼だけであろう。

「ああ！！グリフィス君！！私は一人で大丈夫やから！！暫く一人にして！！」

グリフィス君に部屋から出て行くように言うと

「はっ？しかし・・」

渋るグリフィス君に

シャッ！！ドガガッ！！

懐からダガーを5本取り出し投げつける

ツツー・・掠めた左頬から血を流す、グリフィス君に

「私は一人で大丈夫・・オッケー？」

ダガーを指で挟み投擲準備を取りながら、グリフィス君に問いかける

「はいいいいいっ！！！失礼します！！！」

グリフィス君が部屋から血相変えて出て行くのを確認してから、机の引き出しから兄ちゃん人形を引っ張り出し抱きしめる

「ううー・・兄ちゃんに会いたい」

暫くそのまま人形を抱きしめていると

「段々落ち着いてきた・・よいしょと」

人形を仕舞い、書類整理を再開しようとすると、ディスプレイに映像が映っていたのでそれを見る

『離してください！！！私はあの女を殺します！！！』

デバイスを構えジタバタと暴れるセッテと

『落ち着け！！』

『不味いわね～、八神兄様が帰るにはもう少し時間が掛かりますし～』

チンクさんとクアットロがセッテを両サイドから抑えながら、落ち着かせようとし

『ウェンディ！！おい確りしろ！！』

『私最近・・こんなん・ばっかっす・・』

気絶しているウェンディの頬を叩くノーヴェの姿が映っていた

「・・セッテかぁ・・私とそっくりや・・でも嫌いやな」

私はその映像を見ながらそう呟いた、多分これが同属嫌悪という奴だろうと思いながら、書類整理を始めた

「うーん・・偶にはこういうのも良いですね～」

背伸びをしながら隣の龍也さんに言うと

「確かに、偶には悪くない」

龍也さんは木に背中を預け、空を見上げながら返事を返した、今私達は街外れの丘の上に居る

「風が気持ち良いですね～」

柔らかく吹き付ける風はとても優しい物だ

「まったくだ、今度ヴィヴィオでも連れて来るとしよう、ハイキングになるからな」

ハイキング・・確かにその通りだね、ここは緩やかな傾斜の山だ、これくらいならヴィヴィオでも上ってこれるだろう

「ヴィヴィオとも遊んでやりたいからな」

龍也さんは穏やかな笑みで笑っている

「そうですね・・ヴィヴィオもきっと喜びますよ」

そう言うと龍也さんは

「そうだな・・きっとヴィヴィオも喜んでくれるだろうな・・」

笑う龍也さんの顔には、父親の様な優しさが見えた、多分これがヴィヴィオやエリオ達が龍也さんを父親の様に慕う理由だろう、そんな事を思いながら龍也さんを見ていたが

「龍也さん？どうしたんですか？」

龍也さんが黙り込んだのでどうしたのだろうか?と思い顔を覗き込むと

「すぅ・・すぅ・・」

穏やかな寝息が聞こえてくる

「寝てるのか・・やっぱり龍也さんも疲れてるんだよね」

龍也さんの隣の腰掛けながら私はそう呟いた

「皆の訓練見て・・ネクロが出たら前線で戦う・・本当龍也さんは無茶するよ」

穏やかな寝息を立てる龍也さんの髪を撫でる

「本当無茶ばっかして・・はやてちゃん達や私達を心配させてばっかで、もう少し皆を頼ってくれれば良いのにね」

お父さんが言っていた、龍也さんは誰かを頼る事を忘れてしまったのだと・・何時だって龍也さんは頼られる側だったから・・

「偶には私達を頼ってくれると良いのにね・・ドサッ・・きゃっ・・」

龍也さんの寝顔を見ていると突然龍也さんの体が傾き、私の膝の上に乗る

「・・膝枕か・・恥かしいけど・・これも良いかもね」

一瞬かなり驚いたが別に気にする事じゃない、私はそう思いながら龍也さんの髪を撫でた、暫く無言で居たが

「・・はっ！もしかして凄いチャンスじゃない？」

現状を把握しよう、龍也さん・・膝の上で寝てる・・回り・・人が居ない＝邪魔者は居ない

「今ならキスしてもばれないかも・・ああっでも駄目だ・・キスは禁止だったよね・・」

良く考えればこれは酷い生殺し状態だ、膝の上では龍也さんが無防備で寝てるのに何も出来ないのは非常に辛い

「待って！・・キスは唇の事だ・・なら他の場所なら良いはずだ・・そう例えばほっぺとかなら無問題の筈だ」

そうだ・・問題は無い・・唇ではないのだから、はやてちゃんの条件も護っている

「初めてじゃないんだ・・一回したから問題ない・・落ち着け私」

そうだ前に一回したから問題ない筈だ

「すいません・・寝込み襲うみたいですけど・・唇じゃないんでそれだけ言っておきます」

私はそう言うと龍也さんの右頬に唇を当てた

「何時か・・龍也さんが私の想いに気付いてくれますように・・」

私はそう呟き、もう一度龍也さんの頭を撫でながら空を見上げた

「起きましたか？」

目を開くとなのはの顔が目の前に広がる・・いやそれどころか私はなのはに膝枕されている？

「・・はっ！！・・バッ！！・・すまん」

慌てて頭を退かし、なのはに謝ると

「くすくす・・別に良いですよ気にしてないですから」

おかしそうに笑うなのはに

「何時からだ？・・何時から私はなのはの膝の上で寝ていた？」

何時から寝ていたのか気になり尋ねると

「えっと・・二時間前くらいからでしょうか？」

二時間も・・私は・・なんという事だ・・寝ていた事より膝枕をして貰ったという事が気になってしょうがない

「そろそろ暗くなるから帰りましょうか？」

私が苦悶していると、なのはは何もない様に帰りましょうと言う

「いや・・なんでそんなに普通なんだ?」

その余りの自然体に尋ねると

「くす・・好きな人を膝枕するのは女の子の憧れですから」

と笑うなのはに完全に思考が停止した

「ほら早く行きますよ?」

なのはに手を引かれる様に私は六課に戻っていた

「はぁ~最近好きと言われることが多いような気がするなぁ・・私なんかをからかって楽しいのだろうか?」

そもそも、フェイト達やスバル達の様な、美女と美少女が私を好きと言うこと自体が冗談だろう(鈍感スキル・・遺憾なく発揮中)

はやてはブラコンという奴だろう・・多分ヴィータも・・それは判るが・・なのは達は私をからかっているとしか思えない

そんな事を考えながら、風呂から上がり着替えてからリビングに向かう

「あっ!兄ちゃんお風呂から出たんか?丁度良かったな~今ご飯が出来たところやで?」

!!はやてが居る!!鍵を掛けていた筈なのにッ!!

「パパ~ご飯食べよう」

ヴィヴィオかっ！！ヴィヴィオが鍵を開けたんだな！！

「ほらご飯冷めるではよ食べよう？」

・・まぁ・・別に良いか

「そうだな、折角だから冷めない内に頂くとしようか」

はやてと向かい合うように腰掛ける

「ヴィヴィオはパパの膝の上～」

何時もの様に私の膝の上に腰掛けるヴィヴィオの頭を撫でる

「んっ・・えへへ～パパ～」

膝の上で笑うヴィヴィオに笑みを零しながら、はやての用意してくれた料理を口に運ぶ

「もぐ・・うん美味いな」

どれも私の舌に合わせてある所為か、どれもとても美味い

「当然！兄ちゃんの好きな味付けは完璧に覚えてるで」

笑いながら自分の頭を叩く、はやてを見ていると

「パパ～、あ～んして」

口を開くヴィヴィオに

「良いとも、はいあ～ん」

おかずをヴィヴィオの口に運ぶ

「ん～もぐもぐ。美味しい～」

美味しい～と笑うヴィヴィオを見て笑ってると

「兄ちゃん～私も～」

口を開くはやてに苦笑しながら、おかずを箸で掴みはやての口に運ぶ

「ん～、最高や～」

もぐもぐと口を動かすはやてを見ながら、自分の分の食事を再開した

「「「ご馳走様でした」」」

三人で手を合わせると、はやてが皿の片付けをしている間私はヴィヴィオと遊んでいた

「んふふ～パパ～」

私の胸に額を押し付け笑うヴィヴィオの頭を撫でていると

「兄ちゃん、お皿の片付け終わったで、私は部屋に戻る・・嫌だ！はやてねね行っちゃ嫌だ！！・・う～んしょうがないなぁ～兄ちゃん、今日私も兄ちゃんの部屋で寝て良い？」

はやてが部屋の戻るというと、ヴィヴィオが嫌だと言いながらはやての服を掴む。はやては苦笑しながら私の部屋で寝て良いかと尋ねて来るはやてに

「そうだな・・別に構わないぞ」

少し考えたが別に良いかと思い、はやてに良いと言うとはやては笑いながらヴィヴィオを抱き上げ

「良し、兄ちゃんの許可も出たし、今日は一緒に寝ようかヴィヴィオ？」

「うん！！パパとはやてねねと一緒～っ！！」

えへへ～と笑うヴィヴィオとはやてと一緒に寝室に向かった

「う～ん・・こうやって寝るのも良いなぁ」

今私達はヴィヴィオを挟む様に川の字でベッドに横になっていた

「パパとはやてねねと一緒～」

私達の間でヴィヴィオが楽しそうに笑いながら言う

「パパ～大好き・・」

直ぐに眠ってしまったヴィヴィオの頭を撫でていると

「なぁ・・兄ちゃんは何でそこまでヴィヴィオを大切にするんや？・・こんな言い方は嫌やけど・・言うなら兄ちゃんとヴィヴィオは赤

の他人やで？」

確かにその通りだが・・

「確かにな・・だがな・・そんな物は些細な事だ。ヴィヴィオが私を父と呼ぶなら私はヴィヴィオの父親だ、そこに血縁関係等は必要ない、事実より今だよ・・はやてが私の事を兄と呼ぶのと同じ事だ」

そう返事を返すと

「そっか・・そやな・・兄ちゃんの言いたい事は判るわ」

はやても私の言いたい事を理解したのか頷く

「さっ・・もう寝よう・・明日も忙しいからな」

「そやね・・兄ちゃんおやすみ・・」

はやてにおやすみと言ってから私は眠りに落ちた

龍也達が眠りに落ちた頃、天雷の遺跡に居るジェイルは

「・・大いなる呪の力を持つ王は・・ものを失い悲しみに耐えることが出来なかった・・か」

遺跡の古代文字を解読している・・判った事は余り多くない・・壁の字も所々欠けてるし・・何より古代文字だ翻訳が間違っている可能性もある・・私には立ち止まってる暇は無い、だから翻訳を続ける

「・・彼の者は大いなる・意思・・その魂を・・渡し・・邪悪の王となる・・邪悪の王は・・・・死者を操る禁術・・・・・・を生み出す、だがそれは彼の者の望む物ではない・・その事実は・・彼の者・・さ・・る・・き・・・きの・・駄目だこれ以上は翻訳出来ない・・・」

今私が調べていたのはジオガディスに関する事だが・・肝心な所が欠けている

「ジオガディスが・・失った物?・・それは一体何なんだ・・?」

ジオガディスも最初から悪の王ではないのだ・・彼は元は聖魔王と呼ばれた、聖と魔の力を併せ持つ優しい王だったそうだ・・

「何かが原因で彼は完全な魔に堕ちた・・それが何なんだ」

ジオガディスの目的・・多分奴が何を失ったのかが判れば判るはずだが・・如何せん情報が少なすぎる、私が頭を抱えていると

「ドクター・・まだ翻訳をしていたのですか?そろそろ休んではくれませんか?」

ウーノが心配そうに話しかけてくる

「ああ・・判ってるよ・・丁度一区切りついた所だ・・そろそろ休ませて貰おう」

翻訳用のツールの電源を切り、ウーノの隣に立つと

「あんまり無茶をしてはいけませんよ?ドクターが体を壊しては意味が無いですからね?」

気遣ってくれるウーノに

「ああ・・判ってるよ・・ウーノ・・私が無茶をしては意味が無い事は私も判ってるよ」

「判っているなら、早く休みましょう?まだ戦いは始まったばかりなのですからね?」

ウーノに連れられ私はテントに戻って行くなか

(龍也・・私は必ず・・奴を倒すヒントを見付けてみせる・・だからそれまであんまり無茶をしないでくれよ・・)

唯一無二の親友である、龍也の事を私は考えていた・・カリムの予言は知っているだが私はそれを信じない・・いや信じたくない・・彼の・・龍也の死の予言など信じて堪るか・・私はそう思いながらテントの戻り眠りに落ちた・・その頃遺跡の外では

「科学者・・漸く見つけたぞ・・」

遺跡を鋭い視線で睨みつけるネクロの姿があった・・スカリエッティ達にも確実にジオガディスの魔手が迫っていた・・

第72話に続く

## 第７１話（後書き）

次回はスカリエッティサイド話です、その後にヴィータ、シグナム・
・はやて・
と続いた後に原作の合同演習の話になります、
それでは次回の更新をお楽しみに

# 第７２話（前書き）

今回はスカリエッティのデバイスとゼストのデバイスがメインです
戦闘は少しで次回は本格的な戦闘の予定なので、お楽しみに

# 第７２話

第７２話

「うう・・中々疲れが取れないものだ・・」

テントの中で私はそう呟いた・・やはり熟睡とは行かないようだ

「ドクター？朝ごはんの準備が出来ましたよ？」

テントの外からウーノが声を掛けてくる

「ああ・・判ったよ・・今行くよ・・」

寝袋から抜け出し、何時もの白衣を着込んでからテントを出る

「ドクター、おはようございます・・少し顔色が悪いですが・・大丈夫ですか？」

心配そうに顔を覗き込んでくるウーノに

「大丈夫、少し疲れてるだけだよ」

笑いながら言い、歩いて行くと

「スカリエッティか・・おはよう・・良く眠れたか？」

既にゼストが席に腰掛け待っていた

「良く眠れたよ・・ゼスト・・所でルーテシアは？」

早起きであるルーテシアの姿が見えない事を尋ねると

「機動六課のエリオとか言う小僧にメールを送っている」

ほールーテシアにも春という所かな？彼女は大分エリオを気に入っているようだし・・そう思いながら席に着くと

「お父さん・・おはよう・・」

寝ぼけ眼でオットーとディードが歩いてくる

「ああ、おはよう二人とも・・まだ眠いなら顔を洗ってきたらどうだい？」

まだ眠そうな二人に言うと頷き、顔を洗いに行ったオットーとディードを見ていると、突然背後から

「わっ！！」

大声でわっ！と言われるが、私は驚かず笑いながら

「セインか・・おはよう」

振り向き言うとセインは笑いながら

「えへへ～父さんおはよう」

目を細め笑いながら、セインが席に着くと

「・・父さん・・おはよう・・」

「ああ、ディエチおはよう、良く眠れたか？」

と尋ねるとディエチは

「良く寝れたから・・お腹すいた・・」

と小さく返事を返し椅子に腰掛けると同時に、顔を洗ってきたオットーとディードも腰掛ける

「皆来たか・・もう少し待ってくれ・・今運ぶから・・」

トーレとメガーヌがトレーを持って歩いて来る

「はは、メガーヌのおかげでトーレも料理が出来るようになった、これは喜ばしい事だな」

と笑っているとトーレが怒りながら

「そんな風に言わなくても良いじゃないですか！！」

と私の前にドンと皿を置くトーレに

「いや・・すまない・・つい・・」

と謝るとトーレは素直に許してくれ、席に着いた

「ドクター、おはよう」

とてとてとルーテシアが歩いて来てゼストの隣に腰掛ける

「うん、おはよう・・さっ皆揃った事だしご飯にしようか？・・・頂きます！」

「「「頂きます！！」」」

流石に質素な食事だが、こうして大勢で食べると美味しく感じる物だ・・私はそんな事を考えながら食事を進めた

「さてと・・私は遺跡の調査に行ってくるよ」

食事を終休憩しているところでそう言うと

「駄目です、ドクター今日は休んでください」

ウーノに止められる

「休むとはどういうことかな？」

首を傾げながら尋ねるとウーノは

「ドクターは最近遺跡に篭りっきりです、偶には休んでください」

回りを見ると皆こくこくと頷いている・・やれやれ・・ここは言う通りにするしかないか・・私はそう判断し

「判ったよ・・今日は遺跡に行かないよ、ウーノの言うとおり休む事にするよ」

「そうですよ、余り無茶をしてドクターまで倒れたら大変ですからね」

と笑うウーノに見送れ、私は暇つぶしの為の本を取りに行った

「偶には休んで貰わないと・・ドクターにも」

歩いて行くドクターを見ながらそう呟くと

「確かにスカリエッティにも休んでもらわないとな」

ゼストが私の隣の立ちに言い

「騎士ゼストもそう思いますか？」

尋ねるとゼストは頷き

「まったくだ・・スカリエッティも龍也も自分の体を気にしないタイプの人間だからな」

ゼストはそう笑い歩いて行った、私はドクターと龍也様の事を考えた・・二人は良く似てる・・家族を大切にする所も・・自分の体も気にしない所もそっくりだ・・私はそう思いながら空を見上げた

「ウーノ、エリオがこれ送ってくれた」

空を見上げているとルーテシアが何かを持って歩いてくる

「何ですか？・・ああこれは・・」

ルーテシアが持って来たものそれは・・

「ふふふ・・龍也様の人形ですか・・良かったですね」

可愛らしくデフォルメされた、龍也様の人形だった

「うん・・エリオがプレゼントだって・・さっき送ってくれたの・・」

そのぬいぐるみを抱きしめながら笑う、ルーテシアの頭を撫でながら

「本当、良いお友達が出来ましたね」

そう言うとルーテシアは笑いながら

「うん！エリオもキャロも大事な大事な友達だよ！」

と笑いルーテシアは

ゼストが歩いて行った方向に走って行った、私はその後姿を見ながら

「ゼストにも見せてくる！！」

「ふふふ・・エリオも龍也様に似ているのかもしれませんね・・無自覚な所とかが・・」

多分まだ恋心にはなっていないが・・近いうちに代わるかも知れな

い・・もしそうなったら

「キャロに強力なライバルと言ったところかしら？」

エリオの事を好きな少女の事を思いながら散歩をし始めた・・散歩をするウーノの姿を遥か上空から見る漆黒の影

「きき・・まだだな・・まだ早い・・じっくり策を練らせて貰うか・・」

灰色の鎧に大きな黒い翼を持ったＬＶ３のネクロ・・ディルグの姿があった

「ふむ・・まだ出力が不安定だな・・」

私は自分専用のデバイスの調整をしていた・・チンクから送られてきた、龍也とリィンとアギトのユニゾン状態の映像・・それを見た時・・私のデバイスの姿がうっすらとだが思いついた

「二人の融合騎とのユニゾン・・ふむ・・相変わらず規格外の男だ・・」

いくら適合率が高いからと言っても、同時にユニゾン・・体に掛かる負担が半端じゃ無い筈なんだが・・私は映像を見ながら自分のデバイスの調整をしていた

「しかし・・オメガとはよく言った物だ・・隙が全く無い・・」

アギトの炎を充分に発揮する為の、龍の頭を模した篭手は剣を武器にし、リィンの氷の特徴は狼の篭手で武器は銃・・しかも騎士甲冑の防御も尋常じゃないほど強固な物だ・・

「ふむ・・だが再現できるはずだ・・」

私には龍也の様なダブルユニゾンは無理だ、だが二つのデバイスを融合させれば・・同じような事が出来るはずだ

「しかし・・瓜二つというのも詰まらない・・そうだ・・私のは龍の方を銃に・・狼・・いや・・ライオンだ・・ライオンの方に剣と装甲は・・黒と白の混合・・名前は・・カオスだな・・」

調整を進め、七割完成しているカオスを二つに分ける

「こっちが・・ギガスティックランス・・」

置かれた指輪の上にディスプレイには、展開された状態の騎士甲冑の映像が映し出されていた

「うーん・・良いね・・中々格好良いじゃないか・・」

青の騎士甲冑に大型の槍に、背中には魔力を噴出させ具現化した翼・・全体的に見るとイメージ通り龍その物だ

「まぁ・・悪者ぽいが・・別に良いだろう・・私の趣味だし・・」

ギガスティックランスの調整を終え、次に

「次はライオンハートだな・・」

金色の指輪の上の映像を見る

黒のバリアジャケットに赤い帽子・・それと腰に剣が収められた鞘が見える・・ライオン・・確かにライオンだが・・

「これは・・番長とか言う奴か？」

地球に昔居たと言うあれかもしれない・・そう思うと中々良いかもしれない

「ふーむ・・確かに強そうだし・・良いかもな・・」

ライオンハートの調整も終え

「さて・・・ここからが問題だ・・ギガスティックランス、ライオンハート・・ジョグレス！」

映像で二つのデバイスが融合し、更に展開された騎士甲冑が表示されるが

「ふーむ・・ますます悪者という感じだな・・」

見た感想は悪者だ、白と黒の混合の騎士甲冑に、龍の頭とライオンを模した篭手からはそれぞれ、剣と大砲が姿を見せ、その背には翡翠色マント・・強そうだが・・悪者と言う印象が強いが

「だが・・龍也と並べば様になるんじゃないか？」

映像で龍也と並べてみる

「！！おお良いじゃないか・・素晴らしい私のイメージ通りだ」

私は暫くカオスの能力を確認していた、飛行も可能で遠近両方に充分な戦闘力

「ふむふむ・・だがオメガと比べるとやはり見劣りするか・・」

性能は高いだが、オメガと比べると見劣りするなと思い、出力のグラフを見ると

「むっ！・・・出力が安定しない？」

さっき、５０だと思ったら今は１５０・・

「また代わった？」

１５０の次は４５・・出力のグラフは全く安定しない

「ふむ・・何かが足りないのか・・それとも・・無茶なのか・・いや無茶ではない筈だ・・多分何か足りないのだな・・」

何せ二つのデバイスの融合というのは長い歴史の中始めての試みだ・・まだ何かが足りないのだろう

「とにかく・・カオスはまだ実用段階ではないという事か・・」

操作しジョグレスを解除して、ギガスティックランスを右手にライオンハートを左手に嵌めた

「カオスは無理でも、ギガスティックランスとライオンハートは使える・・これで娘に負担を掛けなくても済む・・」

幾ら戦闘機人とは言え、怪我をすれば血が出るし・・下手をすれば死ぬ・・私はそんなのは御免だ

「チンク達は大丈夫、龍也が居るんだ・・だが不安なのは私達の方か・・」

今遺跡の周りには結界が張られている、だからネクロの襲撃を受けていないが・・万が一という事もある・・

「早めに調べ終えて・・龍也達と合流したい物だ・・」

報告では最近ＬＶ３、ＬＶ４が動き始めたそうだ・・トーレ達は強いだが・・ＬＶ３になると少々苦戦する・・ＬＶ４になれば・・下手をすれば死んでしまう・・だから早めに調査を終えたい所だが・・今大事な部分の為・・ここで帰る訳には行かないのだ

「出来れば奴らが動く前に六課に帰りたい物だな・・」

私はそう呟き、空を見上げた

「今日も襲撃は無いか・・ザザッ！！・・いや違うな・・襲撃のようだ・・」

遺跡の入り口の方で姿を隠しながら、ネクロの襲撃が無いか見張っていたが・・どうやら・・襲撃のようだ・・

「キキ・・ミツケタ・・ミツケタ！！」

ＬＶ１が２５・・

「騒ぐナ・・・敵がこいつだケの内に倒すのダ！！」

ＬＶ２が１０体・・・少し少ないか・・多分偵察組みなのだろう、
俺はそんな事を考えながら待機状態のアンブロジウスを取り出し

「俺一人の内にか・・甘く見られた物だ・・貴様ら如き・・俺一人で充分だ・・セットアップ」

騎士甲冑が展開される、左腕を覆い隠すように鎧と槍が一体化した、篭手が展開され・・それに続くように赤の騎士甲冑が展開されていく、それはかなり重さのある強固な物だ・・そして最後に赤のマントが展開される

「行くぞ・・亡者ども・・元居た場所に逝くが良い！！」

俺はアンブロジウスを力任せに振るう

「ギャアッ！！！」

かなり大型のアンブロジウスは、槍の分類とすれば城壁破壊用の大型の槍・・その大型の槍の一振りは簡単にＬＶ１を１０体、消滅させた・・俺はアンブロジウスを見ながら

（漸くここまで使いこなせるようになったか・・最初は酷い有様だったからな・・）

渡された直後はまともに扱う事も出来ず、少し動けば息が切れる・・
そんな有様だった・・だが今は違う・・

「キキ！！」

飛び掛ってくるＬＶ１に横薙ぎの一撃を叩き込み消滅させる

この力で・・今度こそ全てを護ってみせる！最高評議会の罠で俺の
部隊はほぼ全滅・・生き残ったのは俺とクイントにメガーヌだけ・・
最初の方は恨みだけ戦おうとした・・だが今は違う・・仲間を・・
家族を・・娘を護る為に俺は戦う、俺はアンブロジウスを振るい
ＬＶ１を殆ど一瞬で消滅させた所で、唖然とするＬＶ２に、接近し
アンブロジウスを振るったが

「甘イ・・その槍でハ、ここまで接近されたラ・・振れないだろウ
死ネ！！！」

少々踏み込みが甘かったのか、攻撃を回避し１体のＬＶ２が迫って
くるが

「確かに槍は無理だが・・俺の武器は槍だけではない」

右腰の柄だけの剣を抜き放ち、魔力を込めるそれと同時に

フォンッ！！鈍い音を立てて魔力刃が展開され、俺はそれを振りな
がら

「アウスターベンッ！！」

接近してきたＬＶ２を両断する、アンブロジウスの最大の武器はその巨大な姿だ、だがそれは欠点でもある・・懐に入られればそこで終り、だがアウスターベンと組み合わせればその弱点は消える、俺はアンブロジウスとアウスターベンを巧みに操り、次々消滅させて行く・・そして最後に残ったＬＶ２に歩み寄ると

「ヒイイイッ！！！」

慌てて背を向け逃げようとするＬＶ２に

「敵の近くで背を向ける等・・馬鹿のすることだっ！！」

素早く回り込み、アンブロジウスを突き刺す

「ギャアアッ！！！」

悲鳴を上げるＬＶ２を持ち上げ

「消えろ・・そして元居た場所に逝け・・アヴァロンズゲートッ！！」

ズガンズガンッ！！

二発のカートリッジがＬＶ２に打ち込まれる、ネクロは魔力を吸収するだがアンブロジウスは別だ・・アンブロジウスの魔力はネクロに取っては猛毒・・それは一瞬でネクロの体を駆け巡り消滅させた

「・・あるべき場所で穏やかな眠りを・・」

俺は十字を切ってから、ネクロと戦闘をしたと報告する為にスカリ

エッティのテントに向かった

「くくく・・良いぜ・・これでデータは集まった・・」

歩き去るゼストを見るネクロ・・ディルグだ

「きき・・俺にはお前の戦闘データが無かった・・だがこれで判った・・もうすぐ・・お前達に終わりの時が来る・・ジオガディス様に逆らった罪その命で償え・・きき・・」

ディルグの後ろには5体のデクスの姿があった・・

スカリエッティ達に近付くジオガディスの魔手は、ゆっくりとだが確実に迫っていた

第73話に続く

# 第一回キャラクター人気投票！

どうも、混沌の魔法使いです
今回は突然ですが、第一回キャラの人気投票を行いたいと思います
理由は特にありませんが・・強いて言うなら・・知人にやってみたらどうだと言われたのが理由です

人気投票の対象は
龍也サイドのキャラクターの善人サイドと
ジオガディスとネクロ達の悪人サイドです

それぞれ一票ずつの投票でお願いします、それと静夜、雷華、星奈は3人一組でお願いします
この人気投票で1位になったキャラで、番外編を作りたいと思っていますので、アンケートに参加して貰えると嬉しいです
期間は8月13日から23日までですので、沢山の方が参加してくださる事を期待しています

それと票を入れてくれたキャラについて一言貰えると嬉しいです。
一言貰えると作者のやる気が上昇します、
私はオリキャラには自信が無いので、オリキャラについての感想は大歓迎です
それとキャラについての一言は感想かメッセージの方にお願いします

それでは皆様の一票が来る事を期待しています

## 第７３話（前書き）

少し間隔が空いてしまいましたが、本編を投稿します
また感想を貰えると嬉しいです

いま迷ってる事があるんです、前に募集したイメージＣＶの事を覚えていますか？

それで３人来たのですが・・どれも好きな声優さんでとても迷ってるんです

森川智之に宮野真守と諏訪部順一・・どれも好きなのでとても迷っています・・
ですがもう少ししたら決めたいと思っていますので、もう暫くお待ちください

少し話が逸れましたが本編始まります

ＰＳ　人気投票の対象を変更したので、もう一度人気投票説明を見てもらえると嬉しいです

# 第７３話

第７３話

スカリエッティにネクロが出た事を伝える為、奴のテントに向かっていると

「どうした?ゼストそんなに慌てて?」

トーレがどうしたと尋ねてくるので

「ネクロが出た、雑魚は倒したが・・もしかするとＬＶ３が居るかも知れない・・だからスカリエッティに教えに行こうと思っているのだが」

そう言うとトーレも

「判った、早く父さんに伝え・・」

トーレが伝えに行こうと言いかけた瞬間

「ぐるるる・・がああああッ!!!!」

茂みから雄たけびを上げて異形が飛び出してくる

「危ない!」

硬直するトーレを自分の方に引き寄せ

「ふんっ！！」

回し蹴りを叩き込み吹っ飛ばすが

「手応えが無い・・？」

渾身の蹴りの筈だったのに、手応えが無かった事に首を傾げながらも、アンブロジウスを起動させる

「トーレ！早くオットーかディードと合流しろ！こいつら・・ネクロとは違う！」

妙な気配を放つ異形に、前龍也から報告のあったデクスの事を思いだした・・

（不死の兵士・・デバイスが無いトーレ達では戦いにならない、こいつらは俺が押さえないと）

茂みの中から次々姿を見せるデクス達、その数は5体・・一人では少々きついが・・仕方ない・・

「トーレここは何とか俺が押さえてみる！だから早くオットー達と合流するんだ！」

俺はトーレにそう言い、デクスに向かって駆け出した

「くっ・・こんな時に私は・・無力だ」

デクスと戦うゼストの姿を見ながら、オットー達がいる地点に向かう

「私にもデバイスがあれば・・」

私もオットー達同様、八神からデバイスを貰ったが・・適応率が低く扱う事が出来なかったのだ

「くそ・・とにかく早く合流しなければ・・」

全力で走り出そうとした瞬間・・

「デスアローッ!!」

上空から3本の闇色の矢が飛んでくる

「!!」

反射的に前に飛び回避する

ザクッ!ザクッ!!

回避した矢は木を簡単に貫いた、

「くく・・やるな・・不意打ちのつもりだったのだが・・避けられるとは・・少し驚いたぜ」

バサ!バサ!!

羽ばたく音と共にネクロが私の前に着地する、漆黒の甲冑に大きな二枚の翼を持った、そのネクロは一つしかない黄色の目で私を睨み

ながら言う、直感的に判るこいつは・・

「おっと・・戦う前に俺の名前を教えておいてやるよ、俺はＬＶ３・・ディルグだ！」

やはりＬＶ３・・私はＩＳを起動させながら拳を構える

「くく・・一人で俺に勝てるかな・・」

爪を振りかざし突撃してくる、ディルグに私も拳を振るったが・・

ガンッ！！

「がッ！！！」

簡単に押し負け背中から木に追突する・・

「弱い・・ちっ・・外れか・・まぁ良い・・命令は皆殺しだからな・・まずは一匹・・貴様から死ねぇ！！」

私目掛けて爪を振るってくる、ディルグ・・回避は間に合わない・・私は腕をクロスしてその攻撃に備えた瞬間

「ライトニングスピアッ！！！」

「二連地斬疾空刀！！」

雷で出来た槍と地を走る衝撃波が木の陰から飛び出す

「なっ！・・がああああっ！！」

翼で衝撃波を防いだが、槍は回避できず体に直撃し吹っ飛ばされる
ディルグ、それと同時に

「大丈夫、姉様」

ピンク色のバリアジャケットのオットーと

「トーレ姉様、大丈夫ですか？」

白のバリアジャケットに両刃刀を持ったディードが姿を見せる

「ああ・・大丈夫だ・・」

妹の前で情けない姿を見せる訳にはいかないので、立ち上がり拳を
構えると

「ちっ・・伏兵が居るとは予想外だったが・・その程度の攻撃で俺
に勝てると思っているのか？」

闇色の魔力を両手に溜めながら、ディルグが無傷で姿を見せる

「驚いた・・・全力だったんだけど・・」

オットーが驚きと言う感じで呟く、オットーの最大攻撃はライトニ
ングスピアだ・・それの直撃でノーダメージと言うのは正直驚く

「数が増えようが・・雑魚は雑魚・・さっさと殺して科学者を殺し
に行かせて貰うぜ！！」

翼を羽ばたかせ突撃してくる、ディルグ

「ゼストが来るまで私達でこいつを押さえるぞ！」

「「はいっ！！」」

ディードと共にディルグに向かって駆け出した

「妙な気配だ・・まさかっ！ネクロか！」

ギガスティックランスとライオンハートの調整中に感じた妙な気配に嫌な予感を感じテントを飛び出す

「どっちだ・・」

気配を探る・・龍也に教わったから出来るようになった気配感知・・これのおかげで何処で戦っているのか判る・・

「こっちは・・ゼストと・・デクス・・こっちは・・不味い！トーレ達が居る！！」

トーレ達が戦っている方が不味い、ゼストの方は数は多いが・・そこまで戦力差があるとは思えない・・それより問題はトーレ達の方だ、ネクロの気配だが・・今まで感じた事がある気配より・・遥かに負の気配が強い・・まさか・・

「ＬＶ３かっ！！」

トーレ達は強い・・だが・・ＬＶ３となると話は別だ

「今行くぞ！！」

私はギガスティックランス、ライオンハートを指に嵌めトーレ達の居る方に向かって走り出した

「どこだ？・・こっちの方の筈だが・・」

深い森の中なので詳しい場所が判らず、辺りを見回していると

ドーンッ！！

凄まじい爆発音が森の奥から聞こえてくる

「あっちか！」

私は爆発音を頼りに森の奥に向かって走り出した・・

「トーレッ！！」

私が森の奥についた瞬間見た物は私にとって最悪の光景だった・・オットーとディードはバインドで拘束されて入るが、そこまでダメージを受けている様子は無いが・・トーレの方は酷かった・・ネクロに首を掴まれ上に持ち上げられ・・苦しそうにネクロの腕を叩くがそれを物ともせず、トーレの首を締め上げるネクロの姿を見て・・私の中で何かが弾けた・・

「貴様ぁぁっ！！！」

駆け出すと同時にギガスティックランスを起動させた、濃い青の騎士甲冑が展開されると、同時に目の前に現れた大型の槍を握り締め

「トーレを放せぇっ！！！」

全力が槍を振るいトーレを掴んでいた腕を切り落とす、

「があああああっ！！」

腕を切り落とされた事で絶叫する、ネクロに

「でえええいっ！！」

横薙ぎの一撃でネクロを吹っ飛ばし、トーレに駆け寄る

「大丈夫か、トーレっ！」

蹲り咳き込むトーレに声を掛ける

「ごほっ！ごほっ！・・大・・大丈夫です・・」

咳き込みながら大丈夫というトーレに

「何が大丈夫だっ！！そんな有様で！」

ボロボロの姿をトーレを抱き上げ、オットーとディードのバインドを破壊し

「オットー、ディード！トーレを連れてウーノの所に行け！」

ウーノの所に行けと指示を出す、直ぐに頷き下がって行くオットー達を見ながら、ネクロが飛んで行った方向を睨む

「デスアローッ！！」

すると茂みから４本の闇色の矢が飛び出してくるが

「ふっ！」

慌てずにギガスティックランスを回転せさ、打ち落とす

「くっく・・科学者・・お前から出て来てくれるとはありがたい・・ここで死んで貰おうか・・」

茂みから姿を見せるネクロに

「私の名前は科学者では無い・・私はジェイルスカリエッティだ、ネクロ」

睨みながら言うとネクロは押し殺した笑い声を上げながら

「くっくっ・・それは申し訳ないスカリエッティ・・ついでだ・・俺の名はディ・・くだらんお前の名を聞く気など無い・・私の大切の娘を傷つけた貴様を生かして返すつもりはない！」

名乗ろうとしたネクロの言葉を遮り、言い放つ・・私の大切な娘に怪我をさせたこいつを許すつもりはない・・ここで消滅させる！！

「貴様！調子に乗るなよ！！科学者如きが俺に勝てると思うなよ！！」

翼を羽ばたかせ突撃してくるネクロに

「科学者では無い・・私はスカリエッティだと言っただろう」

その突撃をしゃがみ込んで回避し、上空に向かって蹴り上げるが直ぐに体制を立て直し、私の前に着地し

「ぐう・・貴様ぁ！！」

憎しみと殺意の篭った目で私を睨むネクロに

「掛かって来い・・格の違いを教えてやる！」

挑発しながら言うと

「貴様！調子に乗るのもいい加減にしろ！！貴様如きに俺が負ける訳が無いんだ！！デスアローッ！！」

再び闇色の矢を放つネクロに

「やれやれ・・こんな技回避するまでも無い・・起きろ・・食事の時間だ」

ギガスティックランスに声を掛けると槍の龍の目が開き

『やれやれ・・人使いの荒いマスターの事で・・』

文句を言いながら放たれた闇色の矢を喰らう、ギガスティックランス・・こいつの特徴は魔力食い・・放たれた魔力を喰らい私の魔力にする事が出来る・・まぁ・・ネクロ限定だが・・強力な能力だ

「馬鹿な！馬鹿な！馬鹿なぁっ！！」

がむしゃらに矢を連発するネクロに

「ふう・・いい加減無駄だと悟ったらどうだい？」

フラッシュムーブで背後を取り首筋に槍を突き付きながら言うと

「舐めるな！」

槍を片手で振り払い、私から距離を取り魔力を増幅させるネクロ

（大技か・・まぁ良いか・・どんな技でも射撃系は向こうだからな・・）

ギガスティックランスが吸収出来るのは、射撃系や放射と言う遠距離で、近接は吸収出来ないのが欠点だ

「人間が！この技を耐えれる訳が無い！消え失せろ！エクスプロージョン・・アイッ！！！」

闇色の砲撃をギガスティックランスで受け止めると同時に、大爆発が起きた・・

「ははははは！！人間が如きが調子に乗るからそういう目に合うんだ！！」

狂ったように笑うネクロに

「一体何がおかしいのだね?説明してもらえるとありがたいのだが?」

何事も無いように笑いながら問いかける

「ば・・馬鹿な・・人間如きが・・俺のエクスプロージョンアイを受けて無傷だと・・」

驚き目を見開くネクロに

「さっ・・君の技は見させて貰った・・次は私の番だな・・リミットブレイク・・」

ギガスティックランスの封印を解除する・・それと同時に闇色の魔力の翼が発生する

「餞だ・・受け取りたまえ!!・・ダークロアッ!!」

限界まで吸収したネクロの魔力を更に収束させ、レーザーの様な一撃を放つ

「くっ・・・馬鹿なあああああっ!!!!」

回避できず闇の光線に飲み込まれ消えていくネクロを見ていると

「!!この気配は!!」

ウーノ達が居る筈の方向から更に強いネクロの気配を感じた

「誘導だったのか！！」

慌てて遺跡の方に戻る

「ドクター！！早く遺跡の奥へ！！ネクロが遺跡の奥へ！！

ウーノ達は闇色のバインドに拘束されていたが、怪我をしている様子は無い、だから私は遺跡の奥へ向かった

「これは・・酷い・・」

遺跡の壁のジオガディスに関する部分は全て削り取られ、見る事が出来ない・・その遺跡の壁を見ながら最深部に向かう

「おや？思ったより早かったですね？スカリエッティ？」

遺跡の最深部では青色のネクロが立っていた・・こうして立っているだけだが判る・・とんでもない威圧感を放っている

「おっと・・私とした事が自己紹介がまだでしたね・・私はダークマスターズのリーダー、ヘルズと申します」

大袈裟な身振りで自己紹介するヘルズにギガスティックランスを向けると

「おやおや・・ずいぶん好戦的ですね・・でも止めた方が良いですよ？・・ほら回りを見てみたらどうです？」

そう言われ辺りを見回すと

「！！！」

何百何千と言う剣が私の方を向いて、宙に浮かんでいた・・動けない・・動けば・・この剣は私目掛けて降り注ぐだろう

「そうそう・・私は戦いに来た訳では無いのですから・・そこで黙って見ていて下さい・・トランプ・・ソードッ！！」

背中の鞘から剣を次々取り出し、壁に投げつけて行く・・剣は的確に遺跡の壁を削って行く・・私は黙って見ている事しか出来無かった・・ある程度遺跡の壁を破壊するとヘルズは剣を投げるのを止めた

「さてと・・私の仕事は終わりですね」

パチン！！

指を鳴らすと私を囲んでいた剣が全て消えた

「さてと・・私の仕事は終ったのでここら辺で失礼させて頂きますね・・」

そう言い宙に浮かんで行くヘルズに

「待て！貴様は何をしに来たんだ！！私達を殺す為ではないのか！！」

態々リーダーから攻めて来たのだ、私達を殺す為に来たのではないのなら、何の為にここに来たのかと思い尋ねると

「私がここに来た理由は簡単です、ジオガディス様が自分の事をこそこそを探られるのが嫌だそうで、だから私が遺跡を破壊しに来たのです、それと今は貴方達を殺す理由が無いので殺さないのです・・いずれ死に行く定め・・今殺そうが・・後で殺そうが・・それは代わりませんからねぇ?良かったですね・・短い命が延びて・・それでは失礼致します」

もう一度頭を下げヘルズの姿は闇に溶ける様に消えて行った・・

「・・何とかなった・・いや・・手掛かりが全て消えてしまったか・・」

騎士甲冑を解除し、遺跡の壁を見る・・的確にジオガディスに関する部分が全て破壊されている・・

「これが目的だったのか・・自分に関する事を全て破壊する事が・・」

多分私が戦ったネクロが私達を殺そうが殺せまいが関係ない・・奴らは遺跡さえ破壊出来れば・・良かったんだ・・

「ドクター!!大丈夫ですか!!」

ウーノが駆け込んでくる

「ああ、私は大丈夫だ・・だが遺跡がな・・」

辺りの壁を指差しながら言うと

「酷い・・これではジオガディスの事が・・」

遺跡の壁を見て絶句するウーノに

「まぁ・・命があっただけ良しとしよう・・さっ・・一回キャンプに戻ろう・・」

私はウーノと共に遺跡の最深部を後にした・・

「うぐっ・・」

ベッドの上で私は激痛に顔を歪めながら、目を覚ました・・

「あら・・トーレ起きた?体の調子はどう?」

ベッドの枕元でメガーヌに声を掛けられ

「最悪だ・・」

体の節々が痛い・・あれだけネクロの魔力波を当てられたんだそれは当然か・・起き上がろうとすると

「駄目よ、トーレ動いては駄目」

メガーヌにベッドに戻される・・ここで思い出した

「そうだ!あのネクロはどうなったんだ!」

圧倒的な強さを持ったあのネクロ・・オットーやディードでは倒せないはずだと思い尋ねると

「スカリエッティよ・・彼が倒したから大丈夫、だから今は休みなさい・・」

諭す様に言うメガーヌに頷き、ベッドに横になろ

「オットーとディードは大丈夫だったのか？」

ネクロと一緒に戦っていた、オットーとディードの事を尋ねると

「二人は大丈夫よ、怪我も少ないから、ウーノと一緒に結界の補強をして回ってるわ」

そうか・・二人が無事という事で私は一安心した・・すると強烈な眠気が襲って来た・・

「ほら・・無理して起きてるからよ・・今は眠りなさい」」

優しく微笑むメガーヌに頷き

「ああ・・今は眠るとするよ・・」

私はそう言うと深い眠りに落ちて行った・・

天雷の遺跡の上空から遺跡を見下ろす・・一つの影・・ハーティーンだ・・彼は苛々とした様子で

「ちっ！何故こんなに苛付くんだ！」

俺の中に自分でも判らない苛付きに襲われていた・・

「判らない・・守護者も科学者も何故、誰かを護る？あいつらは一人でも強いのに」

強ければ・・誰も必要ない・・自分一人なら・・失う物は無いのに・・何故あいつらは一人にならない？

『貴方の名前は何？』

目の前に小さな少女の幻が現れる

「！！知らん・・俺はあいつなど知らん！！」

その姿を振り払う様に頭を振るが、その姿は消えない・・いやむしろ強くなっていく・・

『名前が無いの？可哀想・・そうだ！私が名前を上げる！！』

嬉しそうに飛び跳ねる少女の残像に俺は・・

「名前・・俺の名前をくれるのか？」

その少女の残像に手を伸ばす

『うん！名前が無いと、私貴方の事をなんて呼べば良いのか判らないじゃない」

えへへと笑う少女の幻に・・

「・・俺は異端と呼ばれ・・蔑まれた俺に名をくれると言うのか？」

手を伸ばしながら話しかける

『異端？・・じゃあ貴方はハーティーンだね！』

そうだ・・俺はこの少女に名を貰った・・それは俺の宝物になった・・

『助けて！！ハーティーン！！』

その少女が助けてと叫ぶ

「そうだ・・俺は・・彼女を助けようとした・・」

段々思い出してくる・・過去の・・まだ俺が未完成の時の事を・・

『ありがとう！ハーティーン！！助けてくれて！！』

そうだ・・俺は彼女を助けた・・そして彼女は

『あっ！お兄ちゃんが呼んでる！ハーティーン、私もう帰るね』

帰ると言う彼女に

「名前を教えてくれ・・お前の名を」

走り出そうとした少女を呼び止める、すると少女は笑いながら振り返り

『■■■！■■■だよ！またねハーティーン！！』

思い出せない・・そう感じていると・・少女の姿は溶ける様に消えて行った・・

「くっ・・思い出せない・・俺は彼女に名を貰ったのに・・何故彼女の名が思い出せない！」

何故思い出せない・・俺に名をくれた者の名を！暫くそのまま宙に浮かんでいると

「ハーティーン・・探しましたよ、命令ですもう監視の必要はありません、だからパンデモニウムに戻りますよ」

ヴェノムが俺に話しかける

「・・ヴェノムか・・判った・・戻る・・」

素直にパンデモニウムの方を向くと

「驚きましたね・・貴方が素直に私の言う事を聞くとは・・貴方の事だから、私の指図は受けないと言うと思ったんですけど？」

驚いたと言うヴェノムを無視して、俺はパンデモニウムに向かって移動を始めたが、俺は

（彼女は誰だ？・・何故思い出すんだ・・）

今まで思い出す事の無かった過去の記憶に戸惑いを感じていた・・
俺に名をくれた彼女に会えば・・俺は答えを得る事が出来るかもし
れない・・俺はそんな事を思いながらパンデモニウムに戻って行っ
た・・

第７４話に続く

## 第７３話（後書き）

次回はヴィータの強化の話です・・敵はダークマスターズの一人ですヴィータが勝てるかどうか?それが次回のメインですので、次回もまた宜しくお願いします

ＰＳ　感想が来る事を心から願っています

# 第７４話（前書き）

少し遅れましたが・・最新話の投稿をしたいと思います
ただ少し今回は時間が無かったので、本編のみになってしまった事
をお許しください。

今回はヴィータ強化のお話です、３１話のヴィータの成長に続いて
アイゼンが変化します・・かなりの強化になると思います

それでは本編始まります

# 第７４話

第７４話

「どうだ?何か掴めたか?」

私の訓練に付き合ってくれていた、シグナムが尋ねて来るが

「駄目だ・・もう少し・・もう少しで何か判りそうなんだけどよ・・」

あと少し、あと少しで何か掴めそうなんだけど・・何か足りない・・

だがそれが判らない・・

「ええい!シグナム!もう一回だ!もう一回模擬戦してくれ!」

シグナムにアイゼンを向けながら言うと、シグナムは

「駄目だ、これ以上は体に負担が掛かりすぎる、だから今日は休め」

休めというシグナムに

「待ってくれ!私は大丈夫だ!まだ・・うっ・・」

大丈夫だと言いかけると目の前がふらつき、倒れかける

「言っただろう?体が休みを欲してるんだ・・これ以上は模擬戦をしても何にもならないぞ」

諭すように言うシグナムに

「だけど・・今のままじゃ・・兄貴を護れないんだよ・・力が足りないんだよ・・私には兄貴を護るだけの力が無いんだ・・」

俯きながら言うと

「それは私も同じだ・・今の私達は高町よりもテスタロッサより弱い・・だが私達は一人じゃない、皆が仲間がいる・・焦る気持ちも判るが、余り無茶をして兄上を心配させては意味が無いぞ？」

・・シグナムの言うとおりだ・・焦っても何にも変わらないか・・

「判った・・今日はもう寝るよ・・おやすみ・・シグナム・・」

私はシグナムにそう言い残し、演習場から自室に戻り眠りに落ちた・・

ジリリリッ！！

「う・・朝か・・」

目覚ましの音で目を覚まし、起き上がる

「ううん・・良く寝た・・」

起きて体をほぐす、昨日は少し早めに寝たから体の調子が良い

「さてと・・顔でも洗ってくるか・・」

顔を洗ってから髪を三つ編みにする、この時髪を止めるのに使うのは、兄貴に買ってもらった三日月の髪飾りだ

「へへ・・やっぱりこれが一番だな・・」

兄貴に貰った髪飾り・・それだけで心がポカポカして来る・・

「さてと・・行くか・・」

制服に着替えてから自室を後にし食堂に向かっている、黒のコートが視界に入る・・兄貴だ嬉しくて追いつき後ろから抱きつく

「うん?何だヴィータか・・どうしたんだ?」

兄貴は穏やかに笑いながらどうした?と尋ねて来る

「んー何でもねぇ・・ただ兄貴を見つけたからかな?」

抱きつきながら言うと

「そうか・・まぁそれは良いが・・離れてくれるとありがたいな」

笑っているように見える兄貴だが・・実は凄く動揺してるのが判る・・と言ってもはやてに教えて貰ったから判るようになったんだけどな・・これ以上抱きついてるのもおかしいから離れると、兄貴が

「今から私は食堂に行くのだが・・お前も一緒に来るか?」

笑いながら尋ねて来る兄貴に頷き、私と兄貴は食堂に向かって行った・・

「ぬう・・戦いに行けぬとは何と暇な事だ・・」

戦いに出ることが出来ない・・それは俺にストレスを溜めていく・・

「戦ってこそ俺だ・・戦えなければ意味が無いか・・」

そう呟いていると

「おやおや・・カーズずいぶん暇そうですね？」

ニヤニヤと笑いながらヴェノムが姿を見せる

「ちっ！貴様か何のようだ？」

俺はこいつが嫌いだ、だから若干威圧的に返事を返すと

「やれやれ・・折角貴方に良い知らせを持って来たのに・・随分な反応ですね？」

からからと笑うヴェノムに

「言いたい事があるならさっさと言え！」

その態度に更に苛付き、怒鳴りながら言うと

「はいはい・・私が言いたいのは貴方に出撃許可が出たという事ですよ・・」

出撃許可・・それを待っていたんだ・・

「くっくっくっ・・それを早く言えヴェノム・・まぁ良い・・俺は出撃するぞ・・」

立ち上がりヴェノムの横を通り過ぎようとすると

「カーズ、私のデクスを何体か連れて行きますか？」

笑いながら尋ねて来るヴェノムに

「いらん・・あんな獣同然の物など必要ない・・」

俺はデクスが嫌いだ、あんな獣同然の物よりネクロの方がよっぽど使える・・いちいち面倒な指示を出す必要があるデクスなど・・所詮紛い物だ・・

「あんな物ですか・・まぁいらないなら良いですよ、それではお気をつけて」

ニヤニヤと笑うヴェノムに見送られながら、俺はＬＶ２とＬＶ１をそれぞれ３０体ずつ連れ、パンデモニウムを後にした

「くっくっくっ・・上手く行きましたね・・」

飛び去ったカーズを見ながらヴェノムは押し殺した笑い声を上げていた

「これでカーズが守護者達に敗れれば・・キメイラは更なる力を得

る事が出来る・・」

押し殺した声を上げながらヴェノムは暗い通路を歩いて行き、一つの部屋の中に入る

「ぐるるるる・・」

その部屋の中では、フェイトに致命傷を与えられた筈のキメイラが無傷の姿で居た・・そしてキメイラの回りには消滅し始めている、ネクロとデクスの姿があった・・ヴェノムはそのネクロ達を見て

「ははは・・良いですね・・出来損ないが大量に居たおかげで、キメイラの傷が治ったみたいですね」

大ダメージを受けていたキメイラを回復させるには、大量の魔力が必要になる・・だから出来損ないのネクロとデクスを喰わせたのだ

「くっくっくっ・・待っててくださいねキメイラ・・もう少しで極上の餌が食べれる筈ですから・・」

狂気の色を瞳に写し、ヴェノムは狂ったように笑い声を上げていた・・

「・・・なんという事だ・・遺跡が破壊されたのか・・」

ヴィータと食事を終え、自室で書類整理をしているとジェイルからメールが来ている事に気付き、それを見て私は驚いた・・メールの

内容はネクロとデクスの襲撃を受け、なんとか撃退したが・・代わりに遺跡を破壊された・・神王の部分は大丈夫なので・・神王について調べると書かれていた

「よほど・・遺跡には調べられたくない事があったのか・・」

態々ダークマスターズが動いたという事は、相当調べられたくない事があったようだなと思っていると

ビーッ!!ビーッ!!

警報が響き渡る・・どうやらネクロかデクスが出たようだ・・私は書類整理を止めブリーフィングルームに向かった・・

「すまん・・少し遅れた・・」

ブリーフィングルームでは既に全員集合していたので、遅れたと謝ると

「ううん・・龍也の部屋はブリーフィングルームから一番遠いから気にしないで」

と笑うフェイトに礼を言ってから、ブリーフィングルームの椅子に腰掛ける

「うし・・じゃあ状況を説明するで?」

私達の顔を見ながらはやては状況を説明し始めた

「まずクラナガランの市街にネクロの反応が現れたんや・・ＬＶ２

とＬＶ１がそれぞれ３０体ずつ、バラバラに行動してる・・南側と北側に東側・・必然的に三チームに分ける必要性がある・・しかもデクスの反応が無い・・多分罠やと私は思うけど、出撃しない訳にはいかん・・でも罠の可能性が高いから皆気をつけてな」

気をつけろと言うはやてに頷き、私達はブリーフィングルームを後にした・・

「八神と一緒か・・」

チンクがルナエッジを持ちながら言う・・考えてみれば私はチンク達の隊長になるのだが・・あまり隊長らしい事をしてない様な気がした・・チンク達は大分鍛えているから、どうしてもスバル達の訓練を見てしまうしな・・そんな事を考えながらヘリの椅子に腰掛け

「とりあえず、クアットロが居ないからな・・二人二人に分けるぞ？」

クアットロは指揮タイプだから、はやてと共に戦況を見ながら指揮を出す為に六課に残っている

「それなら、私とノーヴェとチンク姉様とウェンディで分けたらどうでしょう？」

セッテがそう提案する・・近接と援護の出来るセッテとノーヴェに・・万能のウェンディと戦闘経験の多いチンク・・良い組み合わせだ・・

「そうだな・・それで行こう・・チンクとウェンディは逃げ遅れた民間人の保護に回ってくれ、私はセッテとノーヴェと一緒にネクロ

の方に行く」

万能タイプだが・・戦闘経験の低いウェンディを前線に出すのは少々不安がある、だからここはチンクと共に民間人の保護に回って貰う方が良い・・私はそう判断し言うと

「ぶー龍也兄と一緒の方が良いっす・・セッテとノーヴェずるいっす・・」

不貞腐れるウェンディに

「お前は戦闘経験が余り多くない・・だから今回は保護の方に回ってくれチンク、ウェンディを頼む」

諭すように言うと不貞腐れながら頷いたウェンディを見ながら、チンクに頼むと言うと

「任せておけ、八神はネクロの方に専念してくれれば良い」

頼もしい返事を返すチンクに頷いていると

「現場に到着しました、降下し始めてください」

ヘリのパイロットの指示に従って私達は降下した

「さーて・・どこから倒していく？」

デバイスを起動させ、どうするか尋ねて来る、ノーヴェに

「ＬＶ２を先に仕留める・・後は状況に応じてだな・・」

目の前に居る十体のＬＶ２を見ながらノーヴェに返事を返す、

「それでは私は援護で良いですね・・」

セッテは私の魔力光と同じ色のバリアジャケットを身に纏い、両手にブーメランの様な形をしたデバイスを持ちながら、私とノーヴェの後ろに立つ

「ああ・・援護は任せる・・ノーヴェ行くぞ！」

「おう！」

ブレイカーモードの騎士甲冑を身に纏い、ノーヴェと共にＬＶ２の群れに向かって行った・・

「玄武・・剛弾ッ！！」

「氷狼撃！」

私とノーヴェの魔力の篭った拳がＬＶ２を貫き・・

「私の目の前で龍也様を攻撃しようとは・・身の程を知りなさい・・」

単色の目で私とノーヴェを攻撃しようとした、ＬＶ１にブーメランを投げつけ消滅させるセッテに

「私はどうでも良いのかよ・・」

ノーヴェが少し寂しそうにそう呟いた・・私はどう反応すれば良いのか判らないので無言でＬＶ２を貫いた

「ああ・・もうどうでも良いぜ！敵はぶっ潰す！それに限る！！」

ノーヴェの拳がＬＶ１を貫く・・だが

「キキーッ！！」

二体のＬＶ１がノーヴェの影から飛び出し、爪を振ろうとすると

ザンッ！！

セッテの投げつけたブーメランがネクロを切り裂き消滅させる

「ノーヴェ、突っ込み過ぎですよ・・龍也様と連携を組んで下さい・・好き勝手やられると援護がしにくいです」

戻ってきたブーメランを握り締めながらセッテが言う

「おお・・すまねぇ・・少し突っ込みすぎたぜ・・」

謝りながら私の隣に立つノーヴェを見ていると

「「キキ・・」」

「「守護者・・殺ス・・」」

ＬＶ１とＬＶ２が更に現れる・・

「ちっ・・まだ現れるのか・・何か目的があって動いてるのか？」

統率の取れたネクロ達の動きを見ていると、何か目的があって動いているように見える・・なら一気に片付けるとするか・・

「ノーヴェ・・一気に決めるぞ・・」

「・・了解・・」

同時にカートリッジを使用し魔力を増加させる

「はあああああッ・・氷幻演舞撃！！」

氷で出来た分身と共に突撃しＬＶ１を消滅させていくノーヴェ

「私も負ける訳にはいかないか・・コード・・麒麟！・・参るっ！！」

ＬＶ２目掛け、魔力弾を放ちそれと同時に突っ込んで行き、次々と魔力の篭った拳で貫いて行き消滅させていく

「「これで・・決まりだっ！！！」」

最後にお互いに魔力で出来た刃を振るい残ったネクロを両断する

「お疲れ様です、龍也様・・ノーヴェ・・」

後方で援護していたセッテが労いの言葉を掛けて来る

「この程度は問題無い・・」

ＬＶ２程度なら幾ら出てこようと私の敵ではない・・ＬＶ２は黒騎士の時からこれでもかと戦っているのだから・・

「・・！」

念の為にフェイト達となのは達が向かった方の気配を探る・・するとヴィータの方に今までと比べられない負の気配を感じた・・

「ちぃッ！！・・ノーヴェ、セッテ、お前達はチンク達と合流してフェイト達の所に行け！良いな！」

突然の事に驚き硬直する二人を無視して、私はヴィータの方に向かった

「ふう～これで一息ついたか？」

最後に残ったＬＶ２を消滅させ、私はそう呟いた・・

「・・！！・・」

突然背後から強烈な殺気を感じ、後ろに飛びのくと

ドガッ！！ジャラララッ！！

私が立っていた場所に巨大な爪が突き刺り・・その爪と繋がっている鎖が音を立ててビルの上に戻って行く、私は爪が戻って行く方を見上げた

「ぐははははッ！！良いぞ！！戦いとはこうでなくては！！」

爪が戻ったビルの上には、漆黒の龍を思わす鎧に巨大な二本の砲塔を背負ったネクロの姿があった

（何て威圧感だよ・・こいつまさかＬＶ４か？）

兄貴と比べると大した事は無いが・・今まで戦ったどのネクロよりも強い負の気配にＬＶ４かと思っていると

「守護者では無いが・・まぁ良い・・我らに逆らう魔道士どもは皆殺しだ！！」

皆殺しと叫び、ネクロは私目掛け突撃して来た

「！！」

反射的に横に跳んで回避する

「良い反応だ・・だがその程度で俺の攻撃を回避出来たと思うな！！！・・ブースタークローッ！！！」

その叫びと共に左手の爪が私目掛けて飛んでくる

「プロテクション！！」

タイミング的に回避は無理だったのでプロテクションで防ぐ

「良い判断と言いたいが・・それでは防げんぞ！！ぬうんっ！！」

弾かれた爪と繋がっている左腕を振り回し、連続で爪をプロテクションに叩き付けて来る

（こいつなんて力だ・・力だけなら兄貴にも負けてないぞ）

全力でプロテクションを張る、

「ぬう・・硬い・・こんな子供騙しでは駄目か・・」

爪が戻って行く・・今だ！

「雷帝降臨！！」

アイゼンと私を強烈な電気が包み込む、前使ったときは模擬戦だったから手加減したが・・今回は全力だ！

「トール・・ハンマーッ！！」

ズドーンッ！！

全力でアイゼンを振り下ろした、それと同時に稲妻がネクロの姿を包み込んだ

「はぁ・・はぁ・・どうだ？・・やったか？」

手応えはあった・・正真正銘私が持てる最高の一撃だが・・

「それで終わりか？」

アイゼンはネクロの右腕で受け止められていた、私がその事に驚いていると腹部に強烈な膝蹴りが叩き込まれる

「がっ・・」

突然の攻撃に反応できず直撃を喰らい吹っ飛ばされる

「げほっ・・げほっ・・なんて威力なんだよ・・」

余りの威力に咳き込んでいると、ネクロが私を鋭い冷めた目で睨みながら

「ふん・・お前の最強の一撃がこの程度・・まぁ良い・・今度はこっちの番だ・・」

ネクロに凄まじい魔力が収束していく・・

「さぁ！消し飛べ！∞キャノンッ！！！」

背中の砲塔から漆黒の砲撃が放たれ・・私は思わず目を閉じた

ズガーンッ！！！

痛くない？・・どうして・・？

痛みが無い事に驚きながら目を開く・・そして私は目を見開いた

「がふっ・・・」

兄貴が私を庇うように立っていた・・兄貴が咳き込むと同時に大量

の血が吐き出され、兄貴は膝から崩れ落ちた

「くっくっくっ・・まさか・・守護者がこんな事で倒せたとは・・俺はついてるぜ・・」

ネクロがゆっくりと私と兄貴に近付いてくる、私は反射的に兄貴を抱き抱えた

「くっくっくっ・・そうか・・守護者と共に死にたいと言うのだな・・良いだろう!望みどおりにしてやる!!消え失せろ!!∞キャノンッ!!!」

漆黒の砲撃に呑まれると同時に、意識が何処かに落ちていくのを感じていた・・

「ここは・・どこだ・・」

気が付いたら私は何も無い白い世界に立っていた・・この世界には見覚えがあった・・ここはクレアの世界・・そう思っていると

「ヴィータ・・」

後ろから聞こえた声に振り返る、そこには私に力をくれたクレアが居た・・

「クレア・・どうしてここ・・ブンッ!!!・・何するんだ!!」

突然槍を振るって来た、クレアに怒鳴りながら尋ねると

「何を?・・簡単ですよ・・私の信頼を裏切ってくれた貴女を倒す

んですよ・・」

殺気の篭った目で私を睨むクレア・・判る・・クレアは本気で私を殺すつもりだ・・私は足元に落ちていたアイゼンを拾い握り締める

「・・さっきのは挨拶代わり・・騎士として丸腰の相手を攻撃するのは気が引けますからね・・ですが・・武器を持った以上・・私は本気で貴方を倒す！・・ユニティ・・リミッター解除・・」

持っていた槍が光り輝き、私の視界を奪う・・そして光が消えた瞬間、強烈な殺気を感じ後ろに飛びのく

ブンッ！！

何かが通過する音が聞こえ、それと同時に

「今のは避けたんじゃないですよ・・避けさせて上げたんです・・さぁ・・ここからが本番です！！」

クレアの騎士甲冑は姿を変え、紺色の騎士甲冑に月を思わせる盾と、槍が変形したと思う斧を振りかざし向かって来た

「くっ！」

アイゼンで斧を受け止めるが・・

「その程度で止めたつもりですか！」

下から抉り込む様な蹴りが叩き込まれる

「がっ・・」

息が止まる・・とんでもない威力だ・・私が戦っていたネクロより遥かに痛烈な一撃だ

「止まっているとは余裕ですね！ルナティックハーケン！！」

魔力で刃を巨大化させ、私目掛けて振るってくる

「くらってたまるかっ！！」

アイゼンを下から振り抜き斧を上に弾くが・・

「甘い・・甘すぎます・・ふんっ！！」

クレアの拳が鳩尾に叩き込まれる

「ごふっ・・」

余りの威力に咳き込みながら蹲ると

「貴女は王を護るといった・・だが結果は貴女は王に庇われ・・王は重傷を負った・・貴女には王を護る力など持ってはいない！！」

私を睨み怒鳴るクレア

「貴女を信じ・・私は力を貸した・・だが貴女は負けた・・その程度の強さでは王と共に歩くなど不可能・・なら・ここで私の代わりに眠るが良い・・」

兄貴の傍に居られない？・・嫌だ・・私は決めたんだ・・兄貴の傍に居るって・・兄貴を護るって・・決めたんだっ！！

ゆっくりと立ち上がり、アイゼンをクレアに向ける

「まだ立ち上がるのですか？・・貴女では・・私には勝てない・・ブンッ！！バキャッ！！・・！！」

勝てないと言い掛けたクレアの騎士甲冑にアイゼンを叩き付け、甲冑を破壊する

「勝てない？・・ふざけんな・・私は決めたんだ・・絶対兄貴を護ってみせるって・・だから・・決めたんだ！！・・私は誰にも負けねぇってっ！！！」

一気に肉薄しクレアにアイゼンを次々叩き付ける、クレアは盾で防ぐが

「重い・・さっきとは比べれない重さ・・」

苦しそうに呟くクレア・・勝てる！・・私はクレアに勝てる！！

「行くぜっ！カートリッジロード！」

ハンマーヘッドの片方が推進剤噴射口に、その反対側がスパイクに変形する

「行くぜ！ラケーテンハンマーッ！！！」

高速回転しながらクレアにスパイクを叩き付ける

「ぐっ・・私が押し負ける・・なんて・・」

まさかという感じで呟くクレアに

「こいつで決める！雷帝・・降臨ッ！！！」

稲妻が私とアイゼンを包み込む・・

「行くぜ・・トール・・ハンマーッ！！」

全力で稲妻と共にアイゼンをクレアに振り下ろす

「！！！」

持っていた盾で防ごうとするが・・

「無駄だぁっ！！鉄槌の騎士に・・砕けねぇ・・物はねぇっ！！！」

その叫びと共に稲妻がクレアを包み込んだ・・

「ぐっ・・まさか負けるとは・・予想外でした・・私は答えを聞ければ良かったのですが・・」

ボロボロの騎士甲冑で蹲りながら呟くクレアに

「答え？・・どういう意味だっ！！」

意味が判らず怒鳴ると

「やれやれ・・少し落ち着いてください・・まずは話をしましょう・・全てはそれからです・・」

パチンッ！

クレアが指を鳴らすと机と椅子が現れる・・クレアはゆっくりと立ち上がり椅子に腰掛け

「どうぞ・・貴女も座ってください」

にこやかに笑うクレアに敵意は無いので、警戒を解き椅子に腰掛ける

「私は別に本気で王から貴女を遠ざけるつもりはありません・・ただ貴女の想いを確かめたかっただけ・・そして今の貴女ならこの力を使える筈・・」

クレアの手から紅色の球体が浮かび上がる

「それは何だ・・」

私の魔力光と同じ球体に首を傾げながら尋ねると・・

「私は本来・・雷の騎士でした・・ですがかつてジオガディスとの戦いの際で風が死に・・死んだ風のリンカーコアを引き継ぎ・・私は嵐の騎士となった・・そして今・・風は貴女の力となる事を望んでいます・・しかし風の騎士の力は強すぎる・・だから私と戦って風の力を扱えるかどうか・・確かめさせてもらいました・・そして貴女の力なら扱えるはず・・受け取ってください・・」

その球体を私に手渡そうとするが・・私は躊躇った・・話の内容か

らすれば・・これを受け取ればクレアは弱体化するのでは・・と

「大丈夫ですよ・・風の力は完全に私と同化してますから、貴女にこの力を渡しても私の力が弱まる事はありませんよ」

と笑うクレアに頷き、私がその球体を受け取ると同時に、その球体は粒子となり私の体の中に入って行った・・

「特に変わった様子は無いけどなぁ？」

魔力の増加も感じられず・・これと言って変わった様子が無いので首を傾げると

「ここでは力の変化は判らないでしょう・・ですが此処から元の世界に戻れば直ぐに変化が判りますよ・・さっ・・行って下さい・・

そして・・王を今度こそ護ってください・・お願いします・・」

私はその言葉に頷くと同時に私の意識は浮上していった・・

「くっくっくっ・・死んだか・・」

俺は砲撃の直撃と共に舞い上がった煙が消えるのを待っていたが・・

「誰が死んだって？」

煙の中から女の魔導師の声が聞こえた・・馬鹿な・・俺の∞キャノンの直撃を受けて耐えれる筈が・・俺が混乱していると

ブオンッ！！

空気の切る音と共に煙が消え・・そこには先程までとは違う騎士甲冑を纏った女の姿があった・・さっきまでの騎士甲冑は赤を基調にした物だったが・・今女の体を覆っているのはまったく別物だった・・赤の騎士甲冑は蒼い騎士甲冑に変化し・・その背には魔力で構成された、半透明の2枚の翼・・その手に握られていた槌はその姿を変え、三日月を思わせる巨大な姿に変化し・・その姿は力強さに満たされていた・・

「てめえは許さねぇ・・私の兄貴を傷つけた・・てめぇだけは・・私のこの手でぶっ潰す！！」

女はそう言うと・・俺目掛けて槌は振りかざし突撃して来た

「舐めるなよ・・貴様如きに俺が負ける者かぁっ！！」

俺は爪でその一撃を防ごうとしたが・・

ガンッ！！

「ぐあっ・・馬鹿な・・」

俺は簡単に吹っ飛ばされ、ビルに背中から追突した・・俺が力負けだと？・・ありなえない・・

「ぶっ飛びやがれっ！！ラケーテン・・ブレイカーッ！！」

槌を頭の上で振り回す女・・回す度に魔力が槌を包み込んでいき、

元の大きさの三倍になった所で俺目掛けて槌を振るう

「ぐがっ・・」

バキャンッ！！

槌が甲冑にめり込んだ・・俺はその凄まじい衝撃に耐える事が出来ず吹っ飛ばされ、瓦礫の山に背中から突っ込んだ

「力が漲って来る・・」

私は吹っ飛んで行ったネクロの方を見ながらそう呟いた・・私が意識を取り戻すと同時にアイゼンと騎士甲冑が姿を変えた・・

「そうだ・・兄貴は」

少し離れた所に倒れている兄貴の所に行く

「・・・」

兄貴は完全に意識を失っている様で、ぐったりとしていた・・顔色も悪くて・・見た感じ死人の様に見えた・・

「良かった・・生きてる・・」

私は慌てて兄貴の胸に手を置く・・トクン・・トクン・・と弱弱しいが心臓はちゃんと動いていた

「判る・・今まで回復魔法なんて判らなかったのに・・でも今なら判る・・傷ついた旅人に月の祝福を・・ムーン・・ヒール・・」

私の手から紅色の魔力があふれ出し・・兄貴を包み込む・・これで一安心の筈・・これで私は・・

「魔導師ーッ！！！」

瓦礫の山を弾き飛ばしネクロが姿を見せる・・判っていた・・あの程度であのネクロが死ぬ筈が無いと・・

「兄貴・・少し待っててくれよ・・直ぐにあいつを倒して・・シャマルの所に連れて行ってやるからな・・」

私はアイゼンを握り締めネクロに向かって行った・・

第７５話に続く

## 第７４話（後書き）

次回はヴィータ強化の完結版ですね・・また少し時間が空くと思いますが・・これからも本作を宜しくお願い致します

ＰＳ　感想が最近多いのでとても嬉しい、混沌の魔法使いです

# 第７５話（前書き）

どうも、混沌の魔法使いです、また少し間隔が空いてしまいましたが・・最新話を投稿したいと思います。

今回はヴィータ強化の完結編です・・ヴィータの新必殺技が登場します（以前募集した技のアイデアで頂いた物です）楽しんで貰えれば嬉しいです

それでは本編始まります

# 第７５話

第７５話

「おらぁっ！！」

大きく跳び上がりながらネクロ目掛け、アイゼンを叩き付ける

「ぬうっ！舐めるな！！」

右腕の爪でアイゼンを弾き飛ばし、即座に左の爪を振り下ろしてくるが・・

「へっ・・当たるかよ」

即座に後ろに跳び回避し

「おらよ！お返しだ！！」

がら空きの腹にアイゼンを叩き込み、即座に距離を取る・・

「ぐう・おのれ・・魔導師・・風情が・・図に乗るなッ！！！サイコキャノンッ！！」

痺れを切らしたのか、背中の砲塔から放射線状に広がる砲撃を放つネクロ

「ちぃ！・・こんな技まであったのかよ・・プロテクション！！」

背中の砲塔は砲撃用だと思ったが・・こんな器用な事も出来たのかと舌打ちしながら、プロテクションで防ぐ

「喰らえっ!!ブースタークローッ!!」

プロテクションを砕こうと、鋼鉄の鉤爪が迫ってくるが・・

「喰らうか!」

アイゼンを下から振るい鉤爪を弾き飛ばす

「ぬう・・」

バランスを崩しながら後ろに飛ぶネクロに

「へっ・・ＬＶ４も大した事ねぇな?」

アイゼンを肩に担ぎながら言う・・こういう気の短い奴にはこういう挑発が一番効くからだ

「ぬうううう・・貴様!!調子に乗るのもいい加減にしろよ!!・・良いだろう・・俺の全力で貴様も!!守護者も!!叩き潰してくれる!!」

その言葉と同時に奴を赤い魔力が包み込んでいく・・ちっ・・挑発が裏目に出たか・・私がそう思っている内に奴を包み込んでいた赤い魔力が消え・・奴の姿がはっきりと見えた・・

「貴様如きに・・俺が・・ダークマスターズのカーズ様が全力を出すとはなっ!!!」

漆黒の甲冑が血の様な赤に染まり・・背中の砲塔が一回り巨大化し、奴が身に纏う魔力がさらに暗く・・淀んだ物になっていた・・だが・・それでも負ける気はしない・・何故なら・・

「へっ・・そうかい・・だけどな!!私だって負けるつもりはねぇんだよっ!!」

そうだ・・私はもう二度と負けない・・私は決めたんだ・・兄貴を護る・・ずっと一緒に居るってなっ!!私は両手でアイゼンを握り直し、カーズ目掛け全力で振りかざした

ガキーンッ!!!

甲高い音を立ててアイゼンとカーズの爪がぶつかる、・・押し勝っていたのは私だった・・

ビキッ!!

音を立ててカーズの爪に皹が入る・・

「馬鹿なっ!!俺の爪が砕けただと・・」

驚愕の声を上げるカーズの腹に

「おらあっ!!ぶっ飛びやがれっ!!!」

全力でアイゼンを叩き込む

ドガッ!!

鈍い音を立ててアイゼンがカーズの甲冑を砕く!!

「馬鹿なっ!!この俺が・・このカーズ様が・・負けているだとっ!!」

腹を押さえながら後退するカーズ・・私がこいつに負ける筈が無い・・人って言うのは・・護りたい者がある時・・何倍も力が跳ね上がるんだ・・こいつみたいに破壊や殺す為に力を奴に負ける筈が無いのだ

「ぐううう・・!!はっ!!馬鹿めっ!!守護者の事を忘れてたな!!

奴の砲塔が倒れている兄貴の方を向く・・兄貴は気絶している・・防ぐ事は出来ない・・私は慌てて兄貴の方に向かった

「くっくっくっ・・どうやら俺の勝ちの様だ!!貴様ら人間は誰かを護る等という心の所為で死ぬのだ!!回れ!!悪意の無限力よ!!」

奴が詠唱に入る・・ちっ・・間に合うか?距離が離れすぎている・・兄貴から遠ざける為に奴を吹っ飛ばしたが・・それが完全に裏目に出ている・・兄貴の方に向かっている、その間にも奴の詠唱は続く

「憎悪と殺意に呑まれ!!漆黒の世界に消えよ!!テトラクテュス・グラマトン・・」

奴の体を漆黒の・・いや・・闇だ・・闇色の魔力が包み込む・・そ

して・・

「消えろ!!アイン・・ソフ・・オウルッ!!!」

背中の砲塔から闇色の砲撃が放たれた・・それは真っ直ぐに兄貴に向かって進んで行く・・

「やらせて・・堪るかぁぁっ!!!」

ギリギリのタイミングで兄貴の前に回り込む事が出来た、私はカートリッジで魔力を強化し、即座にプロテクションを発動させ奴の砲撃を受け止める・・

（ぐっ・・不味い・・威力がありすぎる・・）

カートリッジで強化した魔力のプロテクションなのに・・奴の砲撃を受けて徐々に壊れていっている

（負けられない・・ここで私が倒れれば・・）

私の後ろには兄貴が居る・・ここで私が倒れれば兄貴は死ぬ・・そんなのは嫌だっ!!

「負けて・・負けて堪るかぁぁぁっ!!!!」

防御はこれ以上不可能・・なら弾き飛ばす!!大きく踏む込みながらアイゼンで砲撃を弾き飛ばそうとするが・・押し返される・・

「こんなもんに負けて堪るか!!・・私はもう誰にも負けねぇっ!!」

その叫びと共にアイゼンを全力で振るい、奴の砲撃を弾き飛ばした

ドゴーンッ！！！

弾き飛ばした砲撃がビルを砕き消滅させる・・どうやら強制消滅系の魔法だったようだ・・

「馬鹿な・・俺の砲撃を弾き飛ばしただと・・？」

信じられないと言いたげに言うカーズに

「あいつ・・一度ならず二度までも兄貴を殺そうとしやがったな・・許さねぇ・・アイゼン！！カートリッジロード！！！」

カートリッジが飛び出し、アイゼンが形を変えていく・・

「迅雷・・覚醒・・」

アイゼンがギガントフォルムに変化すると同時に騎士甲冑が更に変化する・・蒼い甲冑からは柔らかな光が放たれ、背中の翼は一回り巨大化し・・髪がその色を変え白銀に染まる・・それと同時に頭の中に声が響く・・

『護って・・王を・・私の代わりに護って・・』

「そうか・・お前が風の騎士か・・」

さっきから頭の中に響く柔らかな女性の声に返事を返す

『そう私は風の騎士・・もう戦う力を持たぬ・・存在・・でも私は王を護りたい・・だから貴女に力を貸す・・だから王を護って』

懇願するように繰り返し、王を護ってと言う声に

「判ってる・・兄貴は私が護るからよ・・お前の力も貸してくれ・・」

『判った・・私の力を全部貴女に預ける・・だから王を護って・・お願い・・』

その声と共に女の声は完全に消え、代わりにギガントフォルムのアイゼンを、更に紅色の魔力が包み込み更に巨大な姿になる・・・

「行くぜ・・フルムーンメテオ・・・」

カーズ目掛けアイゼンを

「インパクトッ!!!」

振り下ろした・・

「ウォオオッ!!この俺が・・ダークマスターズのカーズがぁぁ・・こんな・・・」

ズガーンッ!!!!!

隕石が落ちたような音と共にカーズの姿は消えて行った・・

「はぁ・・はぁ・・くっ・・勝った・・これで兄貴をシャマルの所

に連れて行ける・・」

私は魔力の消費のしすぎて揺れる視界のまま、兄貴を担いでなのは達と合流する為に合流ポイントに向かった・・

ヴィータの姿が消えてから数分後・・クレーターの中心が動き・・次の瞬間カーズが姿を見せる

「はぁっ！・・はぁっ！！危なかった・・直撃の瞬間に地面に潜らなかったら俺は死んでいた・・」

直撃の瞬間、ブースタークローで地盤を砕き落ちた・・そのおかげでまだ俺は生きている

「魔導師・・次は・・次は負けん・・今度は俺が勝つ・・ジオガディス様の為に・・」

まずはパンデモニウムに戻って傷の回復が最優先だ・・俺が立ち上がった瞬間

「おやおや・・まだ生きていたのですか？」

ニヤニヤと笑いながらヴェノムが俺の前に着地する

「ヴェノム・・助けに来てくれたのか？」

助けに来てくれたのかと思い尋ねると

「助ける?・・はて?何の事でしょうか?我らに敗者は必要ない・・私は後始末に来たのですよ」

手に鞭を具現化させるヴェノム・・そうか・・俺を殺しに来たのか・・

「ふんっ!!調子に乗るなよ・・ヴェノム・・貴様が俺に勝てると思っているのか!!」

俺は爪をヴェノム目掛け振り下ろす

「やれやれ・・その様な体で私に勝つつもりですか?・・片腹痛いですね」

爪をサイドステップで回避し、俺の腹に連続で蹴りを叩き込むヴェノム

「ぐぅ・・サイコキャノンッ!!」

ヴェノムに放射線状に広がる砲撃を放つが

「やれやれ・・射程だけの汚い技・・そんな物で私を捉えようとは・・悪い冗談ですね」

跳躍しサイコキャノンを回避し、俺の顔を蹴りつけるヴェノム

「くっくっくっ・・大人しく死んでくれれば・・これ以上痛い思いはしなくてすみますよ?」

嘲笑うように言うヴェノムに

「どうせ・・貴様の事だ・・俺は実験材料にするつもりだろう・・
俺はそんな不様な死に方はせんっ!!」

唯で死ぬつもりは無い・・こいつの実験材料になるくらいなら・・
俺は自らの手で死ぬ

「全てが貴様の思い通りに行くと思うなよ・・オーバーカタストロ・・」

俺が自爆技を発動させようとした瞬間

「くっくっくっ・・いやいや・・ここまで私の思う通りに行くとは・・
・正直驚きですよ・・さよならですねカーズ・・キメイラ・・食事の時間です」

そうヴェノムが言った瞬間

ズガンッ!!!

「がっ!!・・ば・・か・・な・・」

俺の体を漆黒の腕が貫いていた・・

「ぐるるる・・」

ドクンッ!!ドクンッ!!

自爆の為に溜めた魔力が、俺を貫いている腕に吸い取られていく・・

「くそ・・俺は・・こ・・ん・・な・・」

俺は最後まで言葉を紡ぐ事無く・・意識は途絶えた・・

「くっくっくっ・・これでキメイラは真の完成を迎える事が出来る・・」

消えていくカーズを見て笑うヴェノム・・その顔は狂気に染まっていた・・

「ぐるるるる・・・があああああっ!!」

カーズを吸収したキメイラが雄たけびを上げると同時に、キメイラの体を漆黒の魔力が包み込む・・そして漆黒の魔力が消えた瞬間

「があああああっ!!!」

雄たけびを上げるキメイラ・・だがその姿はさっきまでの物と違っていた・・つぎはぎだらけでバラバラだった体色は、漆黒に染まりその背にはカーズの背負っていた砲塔が現れ・・最後にキメイラの背中と両腕と頭にカーズの甲冑の特徴を持った、半透明のオーラが現れる

「ぐるるる・・ぐおおおおっ!!!」

キメイラは空を見ながら咆哮する・・

「はは・・はっはっはっ!!!完成だ!!私の最高傑作が遂に・・遂に完成したっ!!!」

ヴェノムは狂ったように笑いながら

「さぁ！キメイラ！帰りますよ・・何時までもこんな所に用はありませんから」

ヴェノムが指を鳴らし、漆黒のゲートが現れる

「くっくっく・・この力があれば・・守護者など・・恐れる事はありませんね・・」

ヴェノムとキメイラは漆黒のゲートに入り、闇に溶ける様に消えて行った・・

「兄貴・・」

医務室のベッドで眠っている、兄貴の額の汗を拭う・・なのはと合流し直ぐに六課に戻り、シャマルに見て貰った・・命に別状は無いそうだが・・暫くは絶対安静だそうだ

「また・・兄貴に護られたな・・」

私はまた兄貴に護られた・・護る為に力を付けたのに・・結局私はまた護られた・・まだ私は弱い・・

「うっ・・・」

苦しそうに呻く兄貴の額の汗を拭う、幾ら兄貴でもプロテクションも無しに砲撃の直撃を受けたんだ・・そのダメージは計り知れない・・それから一時間ほど兄貴の様子を見ていると

「うっ・・・ヴィータ?・・どうしたんだ?そんなに泣きそうな顔をして・・」

兄貴が目を覚まし、私の頬に手を当てながら尋ねて来る

「兄貴・・良かった・・ぐすっ・・」

兄貴が目を覚ました事で緊張の糸が緩んだのか、涙が溢れだす

「どうしたんだ・・泣いて?」

どうしたんだ?と尋ねる兄貴に

「どうしたんじゃねぇよっ!!兄貴が死んじまうかもしれないと思って!!怖かったんだよ!!」

と怒鳴ると兄貴はすまなそうに笑い

「すまないな・・また心配させてしまった様だな」

すまないと言いながら、私の髪を撫でる兄貴に

「違う!・・どうして!!兄貴は私は責めないんだよ!!私が油断したから・・あいつの砲撃を・・馬鹿・・えっ?」

こつんと力無く兄貴の拳が額に当たる

「何処の世界に妹を責める兄が居るんだ・・兄は妹を護る物なんだぞ？」

と力無く笑い兄貴は私を抱き寄せる

「えっ・・」

突然抱きしめられた事に驚いていると

「心臓・・動いてるだろ・・大丈夫私は死なないよ・・」

トクン・・トクン・・と兄貴の心臓が動く音が聞こえる

「本当だ・・動いてる・・」

当たり前の事なのに・・思わず口にしてしまう

「当たり前だ・・私はそう簡単に死なない・・だから安心しろ・・」

安心しろと言いながら私の髪を撫でる兄貴に・・私はもう涙を我慢する事が出来なかった

「あああああっ・・ぐすっ・・うう・・あああああっ・・・」

兄貴の胸に顔を埋めて涙を流す

「大丈夫だよ・・私はここに居る・・」

優しく私の背を撫でる兄貴にまた涙が溢れ出す・・私は涙が枯れる

まで泣き続けた・・

「・・ふぁああっ・・」

私は大きく欠伸をした・・泣いて泣いて泣き続けた所為か、私は強烈な睡魔に襲われていた

「眠いのか?・・ほらおいで」

ベッドの横を叩く兄貴に

(ど・・どうしよう・・小さい時(クレアの成長プログラムをコピーされる前)は普通に寝てたけど・・今は凄く恥かしい・・)

多分これがクレアに会う前なら、迷う事無く兄貴に抱きついて寝ていただろう・・でも今は恥かしい気持ちの方が強い・・私がどうしようと迷っていると

「どうした?眠いんじゃないのか?」

と尋ねて来る兄貴・・そりゃ眠いけど・・暫くどうしようか迷う・・自分のベッドで寝るか・・ここで兄貴の隣で寝るか・・でも待てよ・・兄貴は怪我してる・・一緒に寝たら不味い・・あっ・・でも一緒に寝たい・・

「なぁ・・兄貴は体痛くないのか?」

兄貴に怪我は痛く無いのか?と尋ねると

「うん?体?・・少し腕が痛い程度だな・・大して問題無い」

痛くない・・なら大丈夫だよな・・私はそう判断し

「じゃあ・・一緒に寝る・・」

私はそう言ってから、兄貴の体に抱きつきベッドに横になった

「兄貴・・おやすみ・・」

「ああ・・おやすみ・・ヴィータ」

兄貴が私の頭を優しく撫でる・・私はそれだけで幸福感に包まれ、とても幸せな気持ちで眠りに落ちた

「ヘルズ・・ハーティーンを呼んで来い・・」

王座に腰掛けながら、ヘルズにハーティーンを呼んでくるように指示を出す

「はっ・・了解しました・・暫くお待ちを・・」

頭を下げると同時にヘルズの姿が掻き消える・・暫くすると

「ジオガディス様・・ハーティーンを連れて来ました・・」

ヘルズとハーティーンの姿が現れる

「ご苦労・・ヘルズは下がれ・・」

下がるように言うと

「はっ・・了解しました・・」

ヘルズの姿は闇に溶ける様に消えて行った・・

「さて・・ハーティーン・・次はお前に出撃してもらいたい・・」

ハーティーンに出撃するよう指示を出す

「・・了解した・・」

短く返事を返し、ハーティーンは王座の間から消えた

「これで良い・・ハーティーンの戦闘力を一度見ておきたいからな・・」

ハーティーンの目的は守護者に勝つこと・・だから危なくなれば逃げる筈・・だから丁度良いのだ

「デクスシリーズの完成品・・その力どれ程の物か見せてもらおう、異端の騎士・・ハーティーンよ」

これからの戦いの戦力になるのかどうか見極めさせてもらうぞ・・

ハーティーン

「出撃か・・守護者も居ないというのに・・」

守護者はカーズの攻撃を受けて戦闘できる状態ではない筈だ

「まぁ良い・・守護者の仲間と戦えば判るかもしれない・・」

遺跡で科学者の戦いを見てから、自分では説明できない感情が渦巻いていた・・

「護る存在・・それがあるから・・守護者と科学者は強いのか?」

俺は知りたいのだ・・どうして自分が傷ついてまで誰かを護ろうとするのか

「俺の心に空いた穴は・・どうすれば埋まる・・護りたい者を見つければ埋まるのか?・・それとも守護者を殺せば埋まるのか?・・俺の心の渇きはどうすれば癒える?・・俺は何なのだ・・」

遺跡で少女の幻を見てからずっと考えていた・・俺は何の為に存在しているのかと・・

「知りたい・・俺は・・俺は・・どうすれば答えを得れるのだ・・誰でも良い、俺に教えてくれ・・」

日に日に強くなっていく・・心の渇き・・俺は知りたい・・俺の生まれた意味を・・

『それは貴方自身が見つけないと・・』

!!俺の目の前に遺跡で見た少女の幻が現れる

「お前は・・お前なら判るのか?俺の生まれた意味を・・」

少女に問いかけようとすると

『ううん・・私じゃ判らないよ・・ハーティーン』

少女は悲しげに笑う・・そうだ思い出した・・俺は昔彼女に尋ねたのだ

『でもきっと、いつか判る日が来るよ!・・ううん・・私も一緒に考えてあげるよ!』

と笑う彼女の姿に手を伸ばす

『んっふふ・・ハーティーンの手は暖かいね・・』

そうだ・・彼女は俺の手が暖かいと良く言ってくれた・・この戦うしか出来ない俺の手を・・

『ハーティーンは何時も私を助けてくれる・・ハーティーンは私のヒーローだね!・・あっでもお兄ちゃんも・・私は大好きなんだ』

彼女は何時も自分にはお兄ちゃんが居ると良く話してくれた・・俺は彼女の話を聞くのが好きだった・・

『ハーティーン、お兄ちゃんが呼んでるから私もう帰るね・・また会おうね、ハーティーンッ!!」

彼女は笑いながら帰って行った・・それ以来俺は彼女に会ってない・

・いや・・俺が忘れてしまったんだ・・

俺の体の完成と同時に、俺の記憶の一部が抜け落ちてしまった・・
だが俺は思い出す事が出来た・・だから信じられる・・彼女の言葉を・・

「また会おうね・・か・・ふっ・・そうだな・・お前に会えば判るかもしれないな・・俺の生きる意味が・・」

俺はそう呟きパンデモニウムを後にした・・孤独の騎士は答えを得る為に空を舞う・・彼は見つける事が出来るのだろうか・・自身の生まれた意味を・・それは誰にも判らない・・それを見つける事が出来るのは・・誰でもない彼だけなのだから・・

第７６話に続く

## 第７５話（後書き）

どうでしたか?ヴィータの強化の話は・・自分では良い出来だと思っているのですが・・やはり自分では判りにくいので感想でご指摘が貰えると嬉しいです

それと明日で人気投票は終わりです、まだ参加してない方は是非参加して貰えると嬉しいです、それでは次回の更新まで少しの間失礼致します

## 人気投票結果発表～（前書き）

８月１３日から２３日までやっていた、人気投票の結果を発表したいと思います
参加してくださった方には大変感謝しています、それでは結果を発表したいと思います・・それではどうぞ

## 人気投票結果発表～

どうも混沌の魔法使いです！

今回は人気投票の結果を発表したいと思います・・それではまずその他の部門から発表したいと思っていたのですが・・その前に対象外ですが二票獲得したキャラの発表をしたいと思いますそれは・・ネクロのナイトメアです！

「いっひっひっ・・以外でしたね～たかが二話で消えた私に二票入るとは・・」

そうですね・・作者も予想外でした・・ちなみにナイトメアに票をくれた方の意見は・・こんな風でした

『笑い方や、戦い方が悪役らしい・・』

『もう少し登場しても良かったのでは？』

という意見がありました、ナイトメアのイメージは原作版のクアットロを更に黒くした感じですね・・やはりなのはのトラウマを抉るキャラが必要だったので・・完全な当て馬キャラですが・・割と人気がありましたね・・そこの所はどう思いますか？

「いっひっひっ・・エースオブエースの砲撃で完全消滅したのにも意味があったのですね・・いっひっひっ・・私に票を入れてくれた方には・・感謝しますよ・・まぁ・・もう会う事は無いでしょうが・・本当にありがとうございました・・」

いっひっひっと笑いながら消えていくナイトメアを見ながら

さぁ・・それではこれからは票毎に発表して行きたいと思います
まずは一票を獲得した・・悪サイドのキャラクター・・キメイラさんです！

「ぐるるるる（俺に票をくれた者に感謝する・・）があああああっ！！！（俺はまだまだ活躍の予定がある）」

最新話ではキメイラはカーズを取り込み、完全体になりましたが・・
予定では更に凶悪になる予定です

「ぐおおおおおっ！！（俺が活躍する話を楽しみにしていてくれ）」

歓喜の雄たけびを上げるキメイラさんでした・・

そして次はその他の部門で二票獲得した・・八神はやてさんです！

「どうも二票獲得した・・八神はやてやっ！！・・結果としては満足してへんけど・・まぁ・・公正な勝負やから、文句は言わんで」

そうですね・・私としては二票という結果に少々驚いています・・
やはりブラコンでヤンデレと言うのは濃すぎたのでしょうか？

「うーん・・そうかもなぁ・・でもそういう需要もあると思うで？」

そうですよね・・ちなみにはやてさんに来た意見は

『どこまで黒くなるのか見てみたい』

『計画的に龍也を追い詰めている所が良いと思う』

でした・・これを見ると・・ヤンデレ、ブラコンにしたのは正解だったような気もしますね

「うーん・・やっぱもうちょい・・強引に兄ちゃんに迫ったほうが良いかもな・・」

ぶつぶつと悪巧みを開始したはやてさんは置いといて

次の人は、はやてさんと同じく二票を獲得した善の部門で・・本作の主人公である・・八神龍也さんです!!

「ふむ・・私は二票か・・まぁ・・妥当な所だな・・」

ちょっと意外な評価でしたね・・もう少し票が来るかと思ったんですけどね?ちなみに龍也に寄せられた感想は

『龍也は戦闘もカッコいいのですが、子供と遊んでたりするシーンが一番龍也らしい』

『冷静で大人の男という雰囲気が格好良い』

等と・・ほのぼのの話の龍也が良いという人も居れば、戦闘の際の

冷静な部分が良いと、真っ二つに分かれました

「うー・・兄ちゃんも二票か・・」

悪巧みをしていたはやてさんが合流する

「そうらしい・・私とはやてが同じ二票だな・・」

と笑う龍也さんに

「んー兄ちゃんと同じなら私は二票でも良いなあ・・そや・兄ちゃん膝枕して」

はやてさんに膝枕をしながら龍也さんが

「悪いが・・私は暫く動けない・・だから次の人の発表をしてくれ」

そうですね、こうなってしまったらはやてさんはてこでも動かないので、はやてさんは龍也さんに任して次の人の発表に行きましょう

次もまたその他部門のキャラで三票を獲得した、・・ジェイルスカリエッティさんです!!

「はっはっは!!私が三票とは正直以外だよ、龍也の方が人気があると思っていたのだがね?」

そうですね・・以外と人気がありましたね・・ちなみに読者の方の意見はこんな感じです

『強い、格好良い』

『良い意味で原作を離れた人物』

『馬鹿・・だけどそこが良い・・』

『龍也にお話されてる所が面白い』

龍也と同じく、ほのぼのしてる所とシリアスの場面が良いと言ってくれる方が居り、龍也と同じく意見が分かれました

「やはり偶には息抜きも必要と言うわけさ」

ちなみにジェイルは最後の方では大活躍の予定です、龍也との最強コンビと言った所でしょうか？

「はっはっはっ！！私と龍也が組めば、怖い物無しだ！」

最初からジェイルは強化の予定でした・・理由はまぁ単純で私が好きなキャラと言う理由です、原作では完全悪役ですからね・・良い役にして、活躍させたいと思っています

「私の大活躍を楽しみにしていてくれたまえ！！」

テンションが上がり始め、笑い始めたジェイルさんは無視して次の人の発表に行きたいと思います

その他部門で1位になったのは・・エースオブエース!!高町なのはさんです!!獲得した票は五票でした

「やった!1位だーッ!!」

やはり原作では主役の方ですから高評価でした!!なのはさんに来た意見は

『なのはの頑張りや想いを考えると・・』

『登場は少ないが、やっぱり本気だと思うから』

と応援系の意見が多かったです・・やはり主役ですからね人気があるのは当然ですね

「これで私が主役の番外編を書いてくれるんですよね?」

そうですよ、やはり1位の方がメインの番外編をやりたいですから

「それでどんな番外編にするんですか?デートとかですか?」

いえ、デートとかではなく、龍也さんとなのはさんが初めて会った時の話にするつもりです

「私と龍也さんが初めて会った時・・原作が始まる前の話だね」

はい、原作が始まる前の話です、どんな話になるかを楽しみにして貰えると嬉しいです

「んふふ~楽しみだな~早く書いて欲しいな~」

それでは次の番外編をお楽しみに！！

次は善の部門で1位になったのは、番外編で大活躍中のマテリアルズです！！獲得した票は七票でした

「やったぞっ！！我達が1位だっ！！」

番外編のみの登場ですが、七票と大人気でした、ちなみにマテリアルズに来た意見は

『マテリアルと龍也の優しい空気が良い』

『龍也とマテリアルズのほのぼのが最高』

『番外編のみの登場が惜しいです』

等とほのぼのとした、龍也とマテリアルと聖王と、の雰囲気が良いですねとう感想が多かったです、ですがそれと同じくらい番外編のみの登場が惜しいという意見が多かったです

「わーい！僕達が1位だ！！嬉しい！！」

雷華達の人気は凄まじいですね～やはり没にした話の方が良かったかな？

「ん？没にした話とは何だ？我達は知らないぞそんな話は？」

静夜達は知らないと思うんですが、最初の予定では第２９話で登場予定だったんです

「えっ？そうなの？でも何で僕達じゃなくてネクロにしたの？」

まぁ・・文才の問題ですね、登場させた物の話が詰まったので登場の話を止めたんです

「そうだったんですか・・まぁ・・本編に登場出来ないのは残念ですが・・番外編ではお父様と一緒なので良しとしましょう」

そう言って貰えると嬉しいです、・・ちなみにマテリアルズの記念小説は旅行か遊園地にしようと思っています

「僕は遊園地が良いな！」

「遊園地か旅行か・・我は旅行が良い！」

「私はどちらでも、お父様と一緒ならどこでも良いです」

と静夜達は意見が分かれましたね・・まぁ暫く考えてから執筆したいと思いますので、投稿の時をお楽しみに！

最後に総合と悪の部門で１位になったのは・・ハーティーンです！！獲得した票は九票と他のどの部門より多かったです

「俺が１位か・・ふっ・・興味は無いが・・１位というのは気分が良いな」

悪役ですが、圧倒的な人気で悪部門と総合で1位になりました、ハーティーンに来た意見は

『悪サイドとは思えません』

『印象が強い』

『格好良い！』

『強さが気になります』

等と強さが気になる、印象が強いや悪サイドとは思えない、龍也のライバルとして考えたキャラなので、人気があるのは嬉しいです

「ふん・・くだらん事を言ってないで、早く俺の話を書いたらどうだ？」

いやー考えているんですけど・・ネタバレになっちゃうんですよね～

「そうか・・だが俺が1位なんだ、番外編は書かなくてはいけないぞ？」

判ってます、取り合えずネタバレ覚悟で過去の話の構成を考えています

「過去・・か・・俺の無くした記憶が判ると言うのは気分が良い・・俺に名をくれた者の名が判るからな」

やっぱり、ハーティーンも気になってるみたいですね、感想でも気

になると言う意見が多いですから、取り合えず本編の前に投稿したいと思います

「それも良いが・・俺としては早く守護者と戦いたい物だ・・」

そうですよね・・本編での戦闘シーンはブリッズを倒したシーンだけですからね、まぁ最新話ではかなり戦闘シーンが多いと思いますので、最新話をお楽しみに！

さて・・各人のコメントを頂いた所で、総合結果を発表したいと思います

対象外　ナイトメア

6位　キメイラ

5位　龍也　はやて

4位　ジェイル

3位　なのは

2位　マテリアルズ

1位　ハーティーン

となりました、人気投票に参加してくださった方には大変感謝して

います

暫くは番外編の執筆をしたいと思うので、本編の更新は番外編の３作が終るまではお休みの予定です

それでは記念の番外編をお楽しみに！！

# 第７６話（前書き）

久しぶりの本編更新です

いやー中々上手く行かなかったので間隔が大分空いてしまいましたね～反省です

今回はハーティーンの強さとシグナムの強化がメインです

あまり前書きが長いのも何なので、本編どうぞ！！

# 第７６話

第７６話

「ううーん・・良く寝たぜ・・うおっ・・」

殆どゼロ距離に兄貴の顔があって、驚き・・一気に意識が覚醒した

「そうだった・・昨日兄貴と一緒に寝たんだ・・」

顔が近いし・・抱きしめられているから少し恥かしい・・でも嬉しい気持ちもある

「んー幸せ・・」

兄貴に抱きしめられる幸せを感じる事が出来るのは・・多分私かはやてにヴィヴィオ位だろう・・そう思いながら兄貴の胸に顔を埋めていると

「ヴィータちゃん?・・何してるの?」

ビクッ!ゆっくりと振り返る・・そこにはシャマルが頭を抱えて立っていた

「えっと・・幸せを感じてた?」

私が疑問系で返事をすると

「どうして疑問系なんですか?・・それよりお兄さんの胸に顔を埋

めると幸せなんですか？」

首を傾げながら尋ねて来るシャマルに

「うん・・凄い幸せ・・多分シャマルもやれば判る」

と言うとシャマルは

「・・止めて置きます・・それよりヴィータちゃんお兄さんから離れてくれます？お兄さんの体の様子を見たいんで」

カルテを持ちながら言うシャマルに頷き、名残惜しいが兄貴から離れ、シャマルの隣に立つ

「んーやっぱお兄さんの回復力は尋常じゃ無いですね・・昨日のダメージが大分回復してますね」

呆れた様子で兄貴の様子を見ていると、兄貴がゆっくり目を開く

「お兄さん・・体の調子はどうですか？」

シャマルが兄貴に尋ねると兄貴は

「・・体が重い・・それに腕に力が入らない・・」

兄貴は布団から手を出しそう言う

「魔力ダメージで体の神経が麻痺してるかも知れないですね・・」

シャマルは首を傾げながら呟く

「兄貴・・大丈夫か・・」

私は心配に成って兄貴の顔を覗き込むと

「大丈夫だ・・少し体の反応が鈍いだけだ・・だからそんなに心配そうな顔をするな」

兄貴が優しく頭を撫でてくれる・・暫く兄貴と話をしているとシャマルが

「ヴィータちゃん、ほらお兄さんに肩を貸してあげて・・多分今のお兄さんは一人じゃ歩けないから・・一応杖は用意してるけど・・やっぱり誰かついてる方が良いと思うから」

兄貴に杖を手渡し、私に肩を貸すように言うシャマルに頷き、私は兄貴に肩を貸しながら医務室を後にした

「大丈夫か？」

ゆっくりと歩く兄貴に大丈夫かと声を掛けると

「大丈夫だが・・まるで老人の様だな・・」

ゆっくりとしか歩けない兄貴に

「大丈夫だぜ・・兄貴の体の調子が良くなるまでは、私とはやてが兄貴の身の回りの事は手伝うからよ」

と言うと兄貴は

「はは・・ありがとう・・ヴィータ」

穏やかに微笑む兄貴と一緒と食堂に向かっていると

「あっ・・お兄様もう大丈夫なんですか?」

「兄・・体の調子はもう良いのか?」

リィンとアギトに会い、二人が兄貴に近寄りながら大丈夫なのかと尋ねると

「大丈夫だ・・少し体の調子が悪いが・・問題無いよ」

兄貴が笑いながら言うと

「そうですか・・でも無茶しないで下さいね?」

「そうだぜ、兄が怪我したら私だけじゃない・・皆心配するんだからな?」

と言うリィンとアギトと共に再び食堂に移動を再開した・・

「「おはようございます、龍也さん大丈夫ですか?」」

食堂で食事をしていると、スバルとティアナが現れ、兄貴に大丈夫かと尋ねると

「特に問題ないぞ?老人の様だがな・・」

現在兄貴は手に力が入らないので・・

「はい、お兄様あーんです」

リィンとアギトにあーんをして貰いながら食べている、

「・・・本当ですね・・おじいさんみたいですね・・」

スバルが言うと、兄貴は

「ははは、仕方ない体が動かないのだからな」

となんら気にした素振りを見せず笑っていた・・その笑い顔につられ私も笑ってしまった、その時私は気が付かなかったが、食堂から気配を殺しながら出て行くシグナムの姿があったそうだ・・

「部隊長、郊外にネクロの反応が1あります・・どうしますか?警報を鳴らしますか?」

アルトの報告に首を振りながら

「いや良いで、警報鳴らしたら兄ちゃんも来てまうやろ?今兄ちゃんには休息が必要や・・悪いけどスバル達を呼んで来てくれる?兄ちゃんに見付からないようにな?」

近くに居た隊員に頼むと、直ぐに頷きスバル達を呼びに行った隊員が戻るのを待っていると

「部隊長、何があったんですか？」

スバル達とエリオとキャロが姿を見せる、流石になのはちゃん達が動けば兄ちゃんも気付く・・だからスバル達だけを呼んだのだ

「うん今な、郊外にネクロの反応が１つあるんや・・多分偵察組みかやと思う・・悪いけどスバル達だけで見て来てくれるか？もしやばいと思ったら直ぐに戻ってきて構わんでな」

スバル達に指示を出し、出て行ったスバル達の姿を見おくり、モニターに視線を戻した・・

「えっと・・ここら辺だと思うんだけど・・」

スバルが辺りを見回しながら言う

「そうね・・ここら辺だと思うんだけど・・隠れてるのかしら・・！！そういう訳じゃないみたいね・・」

ふと開けた場所を見て驚いた、そこには腕を組み仁王立ちしている、１体の騎士の姿・・確かこいつは・・

「エリオ・・あいつってハーティーン？」

確認の為に尋ねるとエリオは頷きながら

「はい・・間違いありません・・ハーティーンです・・」

まずいわね・・龍也さんの話では相当ヤバイ相手の筈・・私達じゃ勝ち目が無いわ・・

「皆・・ここは一度退くわよ・・」

見付からぬ様に後退を開始したが・・

「何処へ行く？」

！！！

ハーティーンが何時の間にか私達を見下ろしていた・・そんな早すぎる・・

「悪いが逃がす訳にはいかんな・・俺の求める物を見つける為に俺と戦ってもらおう・・」

剣を構えるハーティーン・・どうやら逃げるのは無理みたいね・・覚悟を決めデバイスを向けると

「そうだ！それで良い！！俺と戦え！！」

そう笑い向かって来るハーティーンに

「ハウリングブラスター！！」

牽制を兼ねて砲撃を放つが・・

「無駄だ！！俺にそんな物が通用すると思っているのか！！」

剣を振るい、簡単に弾き飛ばす・・そんな・・結構本気で撃ったんだけど・・余りに簡単に弾かれ驚いていると

「ティア!!退いて!!ヘブンズナックル!!!」

チャージをしていたスバルが魔力波を放つ・・するとハーティーンは剣を鞘に戻し、拳に黒の魔力が収束し

「デモンズ・・・フィスト!!!」

黒の魔力波が放たれる・・そんなヘブンズナックルにそっくりなんて・・私がそれに驚いた瞬間、スバルの魔力波は簡単に砕かれハーティーンの魔力波が私達に迫ってくる

「スバル!!」

私はスバルの腕を掴み上空に逃れ

「キャロ!!」

エリオはキャロを抱え上げ私と同じ様に上空に逃れるが

「無駄だ・・そんな回避では間に合わんぞ」

黒の魔力波が私達が居た場所に着弾し、大爆発が起き

「「きゃあああっ!!!」」

私達はその爆発に飲み込まれ、吹っ飛ばされた・・・

「うぐ・・強すぎる・・」

一撃・・たった一撃で戦闘不能寸前・・強すぎる・・龍也さんと同じくらい・・ううんもっと上かもしれない、ハーティーンの強さに驚いていると、ハーティーンは無言で、気絶しているキャロの頭を鷲掴みにし持ち上げる、するとハーティーンの手に魔力が収束していく・・!!やばい!!あんな距離で砲撃を喰らったら・・キャロは死んでしまう!!立ち上がろうとするが足が言う事を聞かない・・見ているしか出来ないの!!と思った瞬間

「クレセント・・ミラージュッ!!」

エリオが立ち上がり三日月の衝撃波を放つ

「ぬっ・・」

それはキャロを鷲掴みしていたハーティーンの腕を直撃し、キャロが落下していく・・それより早くエリオが回り込みキャロを抱きとめる・・早い・・今までのエリオの早さと違う・・その早さに驚いているとハーティーンが大声で

「それだ!!!俺はそれが見たかったのだ!!!護る為に強くなるお前達!!!お前達と戦えば判るんだ!!!俺が求める答えが!!!見せてみろ!!!貴様の力を!!!」

ハーティーンは私とスバルを無視して、エリオに向かっていく

ガキーン!!

剣とストラーダが追突して、凄まじい火花を散らす・・だがエリオは力負けし飛ばされる

「ふっ!!」

吹っ飛ばされた先のビルに着地し、凄まじい勢いでハーティーンに肉薄ストラーダを振るう

「ぬっ・・鋭い・・これだ!!これが見たかったんだ!!もっとだ!!もっと見せてみろ!!!」

紙一重で回避し、凄まじい勢いで剣を振るう、ハーティーンの攻撃をエリオはピンポイントで回避していく

「ふっ!」

サイドステップ、バックステップで軽やかに回避し反撃をするが・・それはダメージを与えている様子は無い・・硬すぎるのだ・・奴が着ている鎧が・・はっ・・何冷静に分析してるのよ・・私より小さい子があんなに戦ってるのに・・足が動かないとか・・泣き言は言ってられない!!!震える足を殴りつけ立ち上がると

「へへ・・ティアも立てたみたいだね・・」

スバルもフラフラと立ち上がる笑う

「当たり前よ・・エリオが戦ってるのに見ているだけなんて、情けない真似は出来ないわ」

と言うとスバルは笑いながら拳を構え

「最大攻撃行けるよね？」

と尋ねて来る

「当たり前よ、何発だって行けるわよ」

と言うとスバルは笑い

「やせ我慢して・・でもそれは私も同じかな・・」

先程の攻撃で私とスバルは爆風の直撃を受けた、つまりエリオよりダメージは大きいのだ・・そう何度も攻撃は出来ない・・なら私達が切る札はただ1つ

「私達の最大攻撃で行くわよ」

龍也さんを撃破したあの技しかないと思い言うと

「そうだね・・それで一気に決めよう！！！」

ゆっくりと呼吸を合わせ・・タイミングを計る・・まだだ・・まだ早い・エリオに当たる・・高速で動く二人の動きを冷静に見ているとエリオが後方に大きく跳ぶ・・今だ！！！

（スバル行くわよ！！）

念話で指示を出すと、

（了解・・先に行くよ！！）

複雑に入り組んだウィングロードが展開されその上をスバルが駆ける・・

（後先考えず・・全力で行く！！）

自分自身の残像を大量に生み出す。そして

「ブラスターショット！！」

高速移動しながら、連続で砲撃を放つハーティーンが回避しようとするが

「させるか！クラスタースフィア！！」

スバルの肩から散弾型の射撃魔法で動きを塞ぐ、その止まった隙に連続で砲撃を放つ

「ぐうっ・・・」

雨の様に降り注ぐ砲撃の嵐がハーティーンを捉える、その内何発かはスバルに当たりそうになるが

（スバル！右後方のウィングロードに飛び移って！！）

（了解！ティア少し任せるよ！）

縦横無尽の張り巡らせたウィングロードはスバルの回避手段であり、次の一手に繋ぐ為の布石だ

「はあああああっ！！」

全力で砲撃の嵐を放ち、スバルの姿を隠す

「く・・・舐めるなよ！！！」

闇色のプロテクションがハーティーンを包み込む・・ここからはスバルの番だ、私はここで1度砲撃を止める

「・・あの魔導師は何処だ？」

スバルの姿が見えない事に驚きの声を上げるハーティーンの上空から

「でやあああああっ！！」

全体重を乗せた踵落としを放ちながら落下してくるスバルの姿が見える、先程の砲撃の嵐それはスバルから意識をずらす為の囮だ

「上だと！？」

咄嗟に腕をクロスさせてその踵落としを防ぐが、砲撃の嵐とスバルの渾身の一撃で、ハーティーンの闇色のプロテクションは完全に砕けた

「まだまだぁ！！」

着地と同時に強烈な膝蹴りを放つ

「ぐうっ・・」

その余りの威力に動きが止まるハーティーンに

「でやあああああああっ！！！！」

スバルが高速でラッシュを叩き込む

「ぐっ・・がっ・・・」

そのラッシュに耐える事が出来ず宙に浮かんで行くハーティーンを

「ティア！そっち行くよ！！」

此方目掛け全力で殴り飛ばす

「ナイス！スバル！！」

待機していた場所にピンポイントで飛んで来る、ハーティーンの背中に

「ブラスター！！フルパワーショット！！！」

銃口を押し当て全力の砲撃を撃つ

「ぐおッ！」

その砲撃に押され凄まじい勢いでスバルの方向に押し戻す

「カートリッジロード！！」

スバルがその真下でカートリッジを消費し

「ヘブンズ・・・ナックル！！！」

バキン！！

水色の光を帯びた拳がハーティーンを捉える、その瞬間音を立てて騎士甲冑が砕ける・・だがこれでまだ終わりではない！！

「ティア！！」

水色の魔力光に押され此方目掛け浮かび上がってくる、ハーティーンに

「カートリッジロード！！」

私の全魔力持って行け！！！

「ファントム・・・ブレイザーッ！！！！」

私のファントムブレイザーとスバルのヘブンズナックルがぶつかった瞬間爆発が起きる・・フラフラ状態で着地する・・私達の全魔力・・これで決まってなかったら・・もう打つ手が無い・・これで決まっていてくれと思いながら煙が晴れるのを待っていると

ブオン！！！

鋭い風を切る音と共にハーティーンが姿を見せる・・信じられない事だが奴は殆ど無傷だった

「まさかこんな技があるとはな・・少し驚いたが・・所詮この程度

の威力・・俺を倒すには程遠いな」

そう言いながら着地し、腰から二振りのダガーを抜き放ち

「だが魔導師にしては良く戦った・・褒美だ・・せめて苦しまずに逝くが良い・・」

ゆっくりと迫ってくるハーティーン・・駄目だ・・殺される・・そう思った瞬間

「シュツルムファルケン!!!」

後ろの方から矢が飛んでくる

「ぬっ!!伏兵か!!」

ダガーで矢を弾き飛ばし後方に跳ぶハーティーンの前に、騎士甲冑を見に纏ったシグナムさんが着地する・・その姿を見て私は助かったと感じていた・・だが・・それは間違いだったのだ・・

間に合ったか・・隊舎を後にするスバル達の姿を見て、嫌な予感がし居って来たのだが・・途中で見失ってしまった・・・先程の爆音のおかげで見つける事は出来たが・・正直1人で来たのは間違いだったか・・目の前にいる騎士・・確か・・ハーティーンだったか・・奴は強い・・兄上と同レベルかそれ以上・・正直私1人では勝ちはまず無いだろう・・私はそう考えていると

「・・烈火の将か・・丁度良い・・貴様を殺せば守護者は更なる力

を発揮する・・悪いが俺の目的の為に死んでもらうぞ!!」

ダガーを両手に握り締め突撃してくる、ハーティーンに

「悪いがそう簡単に私を倒せる等と思うな!!」

その突撃に合わせる様に横薙ぎの一撃を放つが

フォン・・

ハーティーンの姿が消え、背後から

「こっちだ!!」

回転しながらダガーを振るってくる

「くっ!!」

受け止めようとレヴァンティンを構えるが

フォン・・

ダガーがそれをすり抜け、私に命中する・・おかしい・・受け止めた筈なのに・・確かに受け止めた感触が合った、だが実際は当たっている・・これはどういう事だ?訳が判らず混乱していると

「戦闘中に考え事とは余裕だな!!」

背後から蹴り上げられ、連続で斬り付けられる

「がっ！！」

一撃の威力は低いだが・・こうも連続で喰らうとダメージは蓄積していく

「はあああああっ！！！！！！」

連続でダガーを振るいながら突撃してくるハーティーンの攻撃を、飛び上がり回避しようとするが

フォン・・

またハーティーンの姿が消える・・幻術なのか！？先程から攻撃しようとしたら消え、別方向に現れるハーティーンに幻術でも掛けられているのか？と思った瞬間

「ブラックエンド！！！！！」

背後から斬り付けられ、地面に叩き付けられる・・

「ぐう・・どういう事だ・・どうして攻撃も防御も出来ないんだ・・」

何も出来ず良い様に攻撃をされる・・どうして・・まるで攻撃も防御も先読みされて・・先読み！？まさか・・こいつの能力は・・確かめて見る必要があるな・・ゆっくりと近付くハーティーンの僅かな隙を突いて

「カートリッジロード！」

レヴァンティンから薬莢が飛び出し

「スパイラルマスカレードッ！！」

高速で回転する螺旋状の斬撃を放つが

フォン・・

また妙な気配がし、全て回避する・・やはり・・こいつの能力は・・

私は確信した・・こいつの能力が何なのかを

「その顔だと気付いたようだな？お前の推測どおり・・俺の能力は戦闘時間を無くす能力「アルファインフォース」俺の前では全ての攻撃も防御も全て無意味だ」

ダガーを握り直し、私に言うハーティーンに

「良いのか？敵にそんな事を教えて？能力が判れば幾らでも対処法はあるぞ」

レヴァンティンを構えながら言うと

「対処法か・・悪いがそんな物は無いな・・」

そう言うとハーティーンの姿が消え

ズガガガガガガガッ！！！！！！！！

凄まじいまでの衝撃を感じた瞬間、私の背後にハーティーンが姿を見せ

「遅いな・・倒れる事さえ遅すぎる・・」

そう呟くと同時に、私の騎士甲冑は全て砕けた

「ば・・馬鹿な・・・」

ガシャンッ!!!!

私はそう呟くと同時に、膝から崩れ落ちた

「ふっ・・所詮はこの程度・・退屈な事だ・・さてと・・行くとするか・・守護者を殺しにな・・」

兄上を殺す?・・・ガリッ!!!

落ちていたレヴァンティンを握り締めると

「まだ息があったか・・しぶとい事だな・・だが貴様はもう死ぬ・・俺が態々止めを刺すまでもなくな・・大人しくそこで倒れていた方が懸命だぞ」

と言うハーティーンに

「私は・・誓ったのだ・・兄上を護ると・・」

そうだ私は・・誓ったのだ・・兄上を護ると・・震える足で立ち上がりながら言うと

「誓っただと?誰にだ」

振り返り私を睨み、尋ねるハーティーンに

「誰でもない・・ただ・・私の・・魂にだ!!」

震える足に無理やり力を込め切り掛かると

「魂にか・・くだらんな・・」

ザン!!!!

ガキンッ・・・

両断されたレヴァンティンが地に落ちると同時に、私はゆっくりと後ろに倒れていった・・

「「「「シグナムさん!!!!」」」」

私を呼ぶエリオ達の声がとても遠く聞こえた・・私は倒れながら

(兄上申し訳ありません・・約束は護れそうにありません・・・」

昔兄上と交わした約束・・

(シグナム、お前は・・いやお前だけじゃない・・皆だ・・頼むから私より先に死んでくれるなよ・・もう誰かを見送ると言うのは嫌なんだ・・だから私とお前達との約束だぞ・・)

穏やかに微笑む兄上の事を思い出しながら、私は意識を失った・・

「ここはどこだ・・」

私は気が付いたら紅い世界に立っていた・・

「・・地獄という奴か?・・当然か・・私はあれだけ罪を犯したのだからな・・」

と呟いていると

「馬鹿が、何を言っている」

背後から女の声が聞こえ振り返るとそこには燃えるような赤い髪に金の瞳の女が立っていた

「お前は何者だ?」

と尋ねると

「答える義理は無いと言いたいが・・まぁ良い私はアイギナ・・天雷の騎士アイギナだ」

名乗るアイギナに

「ここは何処なんだ?教えてくれ」

ここがどこかと尋ねると

「私の領域・・本来なら私以外の誰も入れぬ世界・・だが貴様はこの世界にやって来た・・つまり私の力を扱うだけの技能があるという事だ・・鉄槌と同じ様にな」

と言いアイギナの手から紫色の球体が浮かび上がり、私の中に入る

「これで終わりだ、早く私の世界から出て行け・・」

私の後ろに門が現れる

「それを通れば元の世界に戻れる・・早く行け貴様の仲間が死ぬぞ」

!!エリオ達か、慌てて門の中に飛び込むと

「1つ良い事を教えてやろう、自分の気持ちを偽って何になる?素直になるべきだな」

と言う声を最後に私の意識は遠のいていった

「そんな・・シグナムさんが手も足も出ないなんて・・」

僕は目の前の光景が信じられずそう呟くと

「さてと・・お前達も烈火の将と同じく、死んでもらうとしよう」

ハーティーンが僕達の前に立ち、剣を振り下ろそうとした瞬間

「ビフロスト!!!」

炎で出来た4つの矢がハーティーンに迫る

「ふん！！」

即座にそれを迎撃するが・・

「竜斬剣壱の型！！天竜斬破！！」

回転しながら剣を振り下ろしハーティーンを吹き飛ばす1人の女性・・

「シグナムさん・・生きてたんですね・・」

それは間違いなくシグナムさんだった・・纏っている騎士甲冑は姿を変えていたが間違いなくシグナムさんだった・・燃え盛る紅蓮の炎のような騎士甲冑に、魔力で構成された半透明な8枚の翼、その手には巨大な大剣・・左腕にはボウガンの様な弓が装着され、更には体を覆うように発生している、魔力と相まってシグナムさんの姿はまるで炎の化身の様だった

「お前達はさがっていろ、あいつは私が倒す」

シグナムさんは巨大な大剣を振りかざし、ハーティーンに向かって行った・・

第77話に続く

## 第７６話（後書き）

どうでしょう？

ハーティーンは強すぎですね～
シグナムＶＳハーティーン、どちらが勝つのか？
それをお楽しみに！！

それでは来週の土日にまたお会いいたしましょう

# 第７７話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！

日曜更新予定でしたが急な用事が入り無理になってしまいました、
楽しみにしていてくれた方には申し訳ないです、ですが今回は番外編との二本立てです、
楽しんでもらえれば幸いです、それでは本編始まります

# 第77話

第７７話

「ビフロスト！！！」

迫ってくる４本の矢を切り払うが・・

「はぁっ！！」

即座に懐に飛び込み剣を振るってくる、烈火の将・・その速さは先程までの速さとは比べられない程速い

フォン・・

アルファインフォースが発動し、俺に当たりかけた剣の動きが巻き戻るが・・

（ちぃ！！・・速すぎる・・巻き戻しきれない！！）

アルファインフォースは確かに無敵の能力だ、だが相手の魔力が高ければ高いほど、巻き戻し出来る時間は短くなってしまう・・烈火の将の魔力はさっきと比べれらない程上昇している・・俺の能力でも巻き戻し仕切れず、甲冑に浅くだが傷をつける

バッ！！

剣が振り切られる前に後ろに跳び距離を取って甲冑を見る・・

（馬鹿な・・守護者以外の攻撃で俺の甲冑を傷つける者がいる等とありえない・・）

信じられなくて甲冑を見ていると

「そんなに信じられないか?私の攻撃がお前に手傷を負わせた事が」

!!目の前に既に烈火の将が現れ剣を振るってくる、

ザン!!!

瞬間的に跳躍し回避するが、回避が間に合わずマントの端が切り飛ばされる・・ちぃ!!アルファインフォースの能力が間に合わない

「はぁっ!!竜斬剣弐の型!!昇竜斬破!!」

剣を振りぬくと同時に龍の形をした衝撃波が迫ってくる・・回避は無理だ・・なら迎撃するしかない!!

「暗黒月光剣　三日月の太刀!!」

黒い衝撃波を放ち迎撃しようとするが・・

ゴウッ!!

烈火の将の魔力波が俺の魔力波を打ち破る

「なっ!・・馬鹿な!!」

烈火の将の魔力波の直撃を喰らい、弾き飛ばされる

（馬鹿な・・俺が魔力で押し負けるだと！！・・・）

体勢を立て直し着地すると同時に

「暗黒月光剣　三日月の太刀！！」

連続で魔力波を放ち、それと同時に背中のバスターソードを抜き放ち突進していく、それに気付いたのか烈火の将も

「ビフロスト！！！」

俺の魔力波と同じ数炎の矢を放ち、それと同時に剣に魔力を纏わせ突撃して来る

ズドン！！！

俺の魔力波と炎の矢がぶつかり合い消える

「はぁぁぁっ！！！暗黒月光剣　新月の太刀！！」

突進しながら剣で円を描き漆黒の魔力を身に纏い上段から剣を振り下ろす、それに合わせる様に

「竜斬剣壱の型！！天竜斬破！！」

紫色の魔力を纏いながら高速回転し、俺と同じ様に上段から剣が振り下ろされる

ガキーン！！！

甲高い音が響き渡る、力は互角・・いや・・僅かに・・だが確実に・
・

グッ・・

烈火の将の剣が迫ってくる・・

（馬鹿な・・俺が・・俺が負けるのか？・・これが・・俺が求める
答えなのか・・）

護りたいと思う心・・俺はそれに負けるのか・・？違う・・俺にだ
って護りたい者がある・・

（ハーティーン！！）

脳裏に俺に名をくれた少女の姿が浮かび上がる

（そうだ・・俺は彼女を・・ラグナを護ると決めたんだ！！負けて・
・負けて堪るかぁぁっ！！）

俺は自然に少女の名前を思い出せた・・それと同時に俺の剣に再び
魔力が灯る

「おおおおおっ！！！！！」

俺は全力で剣を振るい烈火の将を弾き飛ばすと同時に

（思い出せ・・・思い出せ・・）

俺の前に半透明の男が現れ、思い出せと言う始めた・・それと同時に激しい頭痛が俺を襲い始めた・・

「信じられない・・あの状態からここまでの反撃が出来るとは・・」

かなり弾き飛ばされたが、何とか体勢を立て直しハーティーンを見る

「・・・・・」

剣を振りぬいた体勢のまま硬直している

（どうする？防御力に任せて突撃するか？）

今の騎士甲冑ならハーティーンの反撃を受けても大したダメージにはならないだろうが・・

「・・・」

沈黙しているハーティーンに嫌な予感がする・・それに魔力の揺れ幅が半端ではない・・低い時はEクラスくらいまで魔力が下がっているが、高い時は兄上と同クラスにまで上昇している・・何かを企んでいるのか？・・チャンスだと思うがそれ以上に嫌な予感がする・・

（攻めるに攻めれない・・一体何を企んでいるんだ？）

左腕のムスペルヘイムを盾の様にし、様子を伺っていると

「う・・があああああっ！！！！！」

突然頭を抱え絶叫するハーティーン、それに合わせる様に膨大な魔力が嵐の様に駆け巡る

「不味い！！」

攻撃ではない・・恐らく魔力が暴走しているのだ・・制御できず暴れまわる魔力はそれだけで凶器になる・・それにこれだけの魔力・・今のエリオ達では防げない・・そう判断し即座にエリオ達の前に移動しプロテクションを発動させる・・

ガキン！！ガキン！！！

凄まじい魔力がプロテクションにぶつかり、後方に流れていく・・その間もハーティーンの体からは魔力が放出され続けている・・

「うがあああ！！黙れ！！黙れ！！！黙れ！！！！！俺はお前など知らん！！消えろ！！消えろ！！！消えろぉ！！！！」

ハーティーンはしきりに黙れと叫びながら出鱈目に剣を振り回す

「あああああああっ！！！！！行くなぁ！！！！！神王お前1人では奴には！！ジオガディスには勝てない！！！！！」

神王！？何故ハーティーンの口から神王の名が！？ジオガディス側である筈のハーティーンが発した神王の名に驚いていると

「うわあああああ！！！！知らん！！！！俺は知らん！！！誰だ！！誰だ

貴様は！！！何故俺に話しかける！！！黙れ！！黙れ！！！」

頭を抱え遂に蹲るハーティーンの姿に・・

「一体どうしたんですか？ハーティーンは？」

エリオが首を傾げながら尋ねて来る、その間にハーティーンは頭を片手で押さえたまま立ち上がり

「はぁ・・はぁ・・烈火の将！！勝負は預ける！！！次に会った時が貴様らの命日だと思え！！！ネガティブゲイト！！」

ハーティーンの前に漆黒の渦が現れ、私が止める前にハーティーンはその渦の中に飛び込み消えた・・

「逃がしたか・・」

・・だがこれで良かったのかもしれない・・負傷しているエリオ達を狙われれば私に勝ち目は無かった・・そう思いながら

「帰還するぞ・・」

エリオ達を連れ私は六課に戻って行った・・

「ふぅ・・・疲れました・・まさかハーティーンだとは思って無かったです・・」

エリオは椅子に腰掛けながら言う、今私達は兄上に見つからない様に隠れながら体を休めていた・・

「本当・・私死ぬかと思ったわ・・強すぎたわ・・ハーティーンは・・」

ティアナが深刻な表情で言う・・

「確かに・・時間を巻き戻す能力・・あれの前では大概の魔導師では手も足も出ないだろうな・・」

私が額の汗を拭きながら言うとスバルが

「シグナムさん・・傷は大丈夫なんですか?」

私が斬られた場所を指差しながら尋ねて来る

「ああ、問題ない・・何故かは判らないが・・体の傷が全て塞がっている・・」

斬られた腕を見せながら言う・・確かに腕を斬られたが今その傷跡は無い・・自分でも判らない・・いや多分アイギナが癒してくれたのだろうと推測していると

「傷が無いなら良いですね、早く食堂に行きましょう、この時間だと多分もう龍也さんがいますよ」

時計を見る、確かにもう兄上が食事をしている時間だ・・

「そうだな・・私達だけが居ないと兄上も何かあったのだろうか思うだろうな・・早く食堂に行くとしようか・・」

私達は食堂に向かって移動をしていると、食堂の方から大声で言い

合う女の声が聞こえてきた・・・この声は・・

「部隊長と病み娘・・かしら?」

ティアナが首を傾げながら言う

「うーん・・何かあったんでしょうか?気になるから早く行きましょう」

速足で歩き始めたキャロに先導される形で食堂に入ると・・・

「いい加減!!私の兄ちゃんにちょっかい出すの止めろ!!!!」

スローイングダガーを指の間に挟み怒鳴る主はやてと・・

「貴方こそ早く兄離れすべきです!!!いつまでも龍也様にべたべたするのを止めなさい!!この豆狸が!!」

こっちもデバイスを展開し怒鳴るセッテ、2人の間には兄上が椅子にバインドで拘束されていた・・・

「一体何が合ったの?」

スバルが首をそう呟くと

「ん?おうスバル達かこっちに座れよ」

ノーヴェが私達に気付いたのか手を振ってくる、私達は手を振るノーヴェの方に移動すると

「シグナム、お疲れ様だ」

チンクが椅子に腰掛けながらお疲れ様だと言って来るので

「一体何が合ったんだ?」

食堂を指差しながら尋ねる、今食堂にはチンク達と主はやて達しか居ない・・

「ううー・・酷いです・・」

前言撤回壁に貼り付けにされている、グリフィスしか居ないだからチンクに尋ねると

「見れば判るだろう?八神が原因だ・・」

・・まぁそれくらいしか考えられないか・・と思い兄上を見ると

「ん~どうして私はバインドされてるんだろうな?」

バインドされながら首を傾げるその姿は何処かシュールだった・・と思う反面何故か胸がドキドキする・・

(何だ?この胸の高鳴りは・・)

知らず知らずの内に胸に手を置いていると、ふと思い出すアイギナの言葉を

自分の気持ちを偽って何になる?素直になるべきだな

（まさか・・私は兄上が好きなのか・・いやありえない・・兄上は兄上であって・・でも最近兄上がスバル達と話していると胸がムカムカする・・まさか私は本当に兄上の事が・・）

そう自覚すると兄上の顔が見れず、私は食堂を後にした・・

六課の外を1人でブラブラと歩く・・少し歩けば落ち着くだろうと思い散歩をしていたが・・

「余計・・胸がモヤモヤする・・何なんだ・・この不快感は・・」

その不快感の正体が判らずブラブラと歩いていると

「お～い、シグナムどうしたんだ？」

ビクッ！！今一番聞きたく無い声が聞こえ振り返るとそこには・・

私の予想通り

「居ないから探したぞ・・シグナム」

杖を片手にゆっくりと歩いてくる兄上の姿が視界に入ると

ドキッ！！

また胸がドキドキし始める

（また・・どうしたんだ私は・・）

また感じる胸の高鳴りに首をかしげていると

「どうした?何処か痛いのか?」

知らずの内に兄上が私の目の前に立っており、心配そうに顔を覗き込んでくる・・

ドキドキ!!

先程とは比べられないくらい胸が高鳴る

「いいいい・・ええええ何でもありません!!」

手を振りながら兄上から距離を取ろうとすると

ズル!!

不覚にも足を滑らせ兄上にもたれかかってしまう・・直ぐまじかに兄上の顔がある・・近くで見ると非常に整っているのが良く判る・・って違う!!私は何を考えているんだ!!と思い兄上から離れようとして気付いた

「うっ・・・」

兄上の額に脂汗が見える・・そうだった兄上は体の調子が悪かったんだ・・

「すいません!!えっと・・」

脂汗を流す兄上の体を支え近くに見えたベンチの所まで歩いて行き、兄上をベンチに座らせ自分もその隣に腰掛け

「すいません・・大丈夫ですか?」

兄上に大丈夫かと尋ねると

「だ・・大丈夫だ・・問題ない・・」

問題ないという兄上の額には大量の汗が見える・・・相当無理をしているのが判る・・

「大丈夫な訳が無いじゃないですか!!良いから横になってください」

恥かしいとかは関係ない・・今は早く兄上を休ませる事は最優先だ・・私は考えるより早く兄上に膝枕をすると

「シ・・シグナム・・私は大丈夫だから・・」

兄上が顔を真っ赤にしながら立ち上がろうとするがそれを手で静止しながら

「良いから早く休んでください!!」

兄上にそう怒鳴る・・何時もそうだ・・兄上は無茶をする・・それが私は嫌なのだ・・何時も私達を護る為に傷つく兄上を見るのが私はたまらなく辛かった・・そう思っていると目の前が歪む・・一体何がと思っていると・・

「シグナム?どうしたんだ?泣いて・・」

兄上が私の膝の上から尋ねて来る・・それで気付いた私は泣いてい

るのだと・・そして気付いてしまった・・自分の気持ちに・・今なら判る、主はやてやヴィータの気持ちが・・私は兄上が好きなのだ・・だから傷ついた兄上を見て涙しているのだと・・

「それは泣きもします!!好きな人が怪我をしていてどうして笑えるというのですか!!」

思わず感情的になりそう怒鳴ると兄上は

「好き?・・私をシグナムが?・・からかってるのか?」

からかっているのか?と言う兄上に

「からかって等はいません!!私は本当に兄上が好きなんです!!!」

と言うと兄上は私の膝の上から離れ

「はぁ・・はぁ・・冗談ではないのか?・・シグナムは本当に私が好きだというのか?」

杖に体を預けながら尋ねて来るので、私は兄上の目を見て

「そうです、私は本気で兄上の事が好きなんです」

そう返事を返すと兄上は顔を真っ赤にしながら・・

「もう良い・・私はもう部屋に戻って寝る・・」

兄上は真っ赤に成りながら部屋の方に歩いて行った・・私はその後

ろ姿に向かって

「私は本気です！！必ず私は兄上を振り向かせて見せますからね！！」

と言うと兄上は杖を早く動かし歩き去っていった・・だがその耳は真っ赤に成っていた・・かなり恥かしいと思っているのだろうと推測しながら、私は主はやての部屋に向かって歩き出した・・やはりここは主はやてに報告すべきだろうと思ったのだ・・そう思いながら主はやての部屋に行き、私は兄上の事が好きだと伝えると、主はやては笑いながら

「良いねぇ！これで兄ちゃんも気付いてくれるやろ！」

と笑いながらそう言いながら、それにと付け加え

「男の人は大きい胸が好きやからな、私とヴィータにシグナムが加わればチンクさん達にも負けんで～兄ちゃん覚悟しいや～私達はもう止まらへんで～」

握り拳を作りながら言う主はやてを見ながら、私は主はやての部屋を後にした・・自分の部屋に向かって歩きながら

（前から感じていた不快感は嫉妬だったのか・・）

前から感じていた不快感・・その正体は嫉妬だったのだと理解した・・感じていた不快感の正体が判り、心なしか軽い足取りで歩き出した・・そして決意を固めていた・・好きと理解した以上、兄上は誰にも渡さない・・私はそう決意をしっかりと固め、自分の部屋に戻って行った・・究極的な鈍感である龍也を追い詰める、はやてとヴ

ィータの2人にシグナムが加わった瞬間だった・・

「また来ちゃったね・・」

私は初めてハーティーンに出合った公園に来ていた・・

「あの時からハーティーンは居ない・・」

私が人質にされた次の日からハーティーンには会っていない・・居ないと判っていても毎日ここ来てしまう

「会いたいな・・ハーティーンに・・」

そう思いながら公園の奥に足を進める、そこはハーティーンとよく空を見上げた場所だった、ゆっくりとその場所に足を進めていると

ガサガサ・・

物音が聞こえてくる・・

「おかしいな?・・ここは余り人が来ないんだけど・・」

不審に思いながら歩を進めていると

「うう・・」

今度は苦しそうな呻き声が聞こえてくる・・

「まさか誰か怪我をしてるの？」

慌てて走り出し、私が見た物は・・闇より深い黒い甲冑にマント・・倒れていたのは・・

「ハーティーン！？」

慌ててハーティーンの横にしゃがみ込むと

「うう・・ラグナ・・？良かった・・まだここに来ていてくれたのだな・・」

苦しそうだが・・どこか嬉しそうに言い、ハーティーンは意識を失った・・

「えっと・・傷はそんなに深くないみたいだね・・」

漆黒の甲冑には傷が沢山あるが、どれも深くはないようだ・・

「良かった・・死んじゃうくらい傷が深かったら、私じゃどうしようもないけど・・これくらいだったら私でも治せる・・」

私はそう呟き回復魔法を発動させハーティーンの傷を回復させ始めた・・

「ふぅ・・終った・・」

ハーティーンの傷をあらかた治した所で私は額の汗を拭った・・

「さてと・・後は休ませるだけだけど・・どうやって家につれて帰

ろう・・」

私ではハーティーンの体を運ぶ事は不可能、かと言って誰かにに頼む事も出来ない・・ではどうすれば？と考えていると

「おーい！！ラグナーここかー？」

お兄ちゃんの声が聞こえてくる・・そうだった確か、今日お兄ちゃんは仕事に必要な物があるから家に来るって言ってた・・

「ちょっと待っててね、直ぐに家につれて帰るから」

私はハーティーンをお兄ちゃんに運んで貰おうと思い頼みに行った・・

異端の騎士と少女はまた出合った・・この出会いが何を意味するかは誰にも判らない・・

デバイス変化詳細　紹介

シグナム編

アイギナの力の一部を引き継ぎ進化した新しい騎士甲冑、高い防御力を誇る反面スピードは以前と比べ少し低下している、レヴァンティンは一回り巨大化しているが、以前同様片手で振るうことが可能である、背中の翼は余剰魔力の放出の為に具現化しているが、一応翼と同じ能力を持ち飛行魔法のサポートを行う、新しく左腕にムスペルヘイムと呼ばれるボウガンを装備し、炎で出来た弓矢を放つ事が可能でまた連射能力も高い

新しい魔法解説

スパイラルマスカレード　カートリッジを使用し螺旋状の魔力波で敵を攻撃する　射程威力共に高く凡庸性の高い技である

ビフロスト　高威力の灼熱の矢を放つ、速射力に長けた矢と威力重視の矢、２つの特徴を持った矢を放つ

天竜斬破（てんりゅうざんば）竜斬剣の壱の型　回転体術によって加速させた剣を相手の脳天から打ち込み一刀両断する

昇竜斬破（しょうりゅうざんば）　竜斬剣の弐の型　剣に纏わせた龍の形をした波動を放ち、剣圧だけで相手を破壊する

咬竜斬刃竜斬剣の参の型（こうりゅうざんば）　至近距離まで踏み込み、シュランゲフォルムのレヴァンティンを相手に巻きつけ、縛りつけた刀身で相手の全身を削り取る

この技は全て鳴神様のアイデアの技です、技のアイデアに参加して頂き大変感謝しています

ヴィータ編

クレアの力を完全に引き出し進化した騎士甲冑、龍也の魔力光と同じ蒼色で防御力と加速力が強化されている、グラーフアイゼンは形を変え、三日月を思わせる姿になっている、シグナム同様余剰魔力を翼の形に放出している、これはギガントフォルム使用時の体勢制御の為の物である、またギガントフォルム使用時は騎士甲冑が淡く

光を放ち背中の翼も一回り巨大化し、髪は白銀に染まる、破壊力が大幅にアップし、鉄槌の2つ名に恥じない攻撃力を取得している

新しい魔法解説

トールハンマー　魔力素質雷をアイゼンに纏わせ放つ強力な一撃で、追加能力として相手のプロテクションを破壊する事が出来る

ラケーテンブレイカー　ラケーテンハンマーの強化型、頭上でアイゼンを回転させ魔力でアイゼンを巨大化させ放つ一撃

フルムーンメテオインパクト　ギガントフォルムから放たれる一撃、破壊力、射程ともに高くメテオインパクトの名前どおり、直撃した場所が隕石が落ちたように陥没する程の高威力である

第78話に続く

## 第７７話（後書き）

どうでしたか？楽しんでもらえたなら幸いです
次回も日曜更新予定ですが、また間隔があいてしまうかも知れません・・
ですが完結までは書きたいのでこれからもよろしくお願いいたします

それでは次回の更新時にまたお会いいたしましょう

# 第７８話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回は本編の更新です！

メインはハーティーンとまだ登場していないダークマスターズです！！

それでは今回も楽しんで読んで貰えると嬉しいです、それでは本編始まります

# 第７８話

第７８話

私は今とても困っていた・・理由は至って簡単で

「どうしましたか？」

目の前で首を傾げる女性・・シグナムが原因である・・昨日好きと言われ、その時は冗談だと思っていた・・だが次の日になって本気だったと理解した・・正直今私は体のあちこちが痛くまともに動けない状態で、ヴィータやはやてに、食事などを手伝ってもらっていた・・だが今現在私はシグナムに食事をするのを手伝って貰っている・・それで理解してしまった・・シグナムは本気なのだと・・そう思い横を見る

「「にこにこ」」

満面の笑みのはやてとヴィータが座っており、その反対側には

「「にこにこ（恐）」」

底冷えする笑みを浮かべたなのは達が見える・・一体私が何をしたと言うのだ・・そもそも何故私等を好きになる人物がいる・・こんな隻腕、隻眼の男の何処が良いと言うのだ・・私は現実逃避をしながら食事を再開した

「どうぞ・・」

シグナムがお茶を手渡してくる、それを受け取って飲んでいると

「龍也さん・・シグナムに何したんですか？」

笑いながらなのはが尋ねて来る・・それは笑っている筈なのに恐ろしいと感じた・・

「何もなんだが・・そうシグナムが私を好きだと言い始めたんだ・・何故か・・」

そう返事を返すとなのはとフェイトはシグナムを見て

「シグナム・・どうしてかな？今までそんな素振り見せなかったよね？どうして急にそんな事言い出したのかな？私に教えてよ」

なのはがどんよりとした目でシグナムを睨みながら尋ねると、シグナムは冷静に

「自覚しただけだ・・私は兄上が好きなのだと、傍に居たいとそう思うようになった、それが理由だ」

と言い放つ・・その瞬間ピリピリとした気配が充満する・・正直辛いと言い様が無い・・私はそのピリピリとした空気に耐えながらお茶を飲んでいた・・その光景を見ているティアナ達は

「「あーあ・・またライバルが増えたなぁ」」

と呟くスバルとノーヴェに

「ちっ・・油断していました、まさかこんな所に伏兵が居たとは・・

」

舌打ちをするセッテに

「シグナムさんまでなんて・・」

計算外と言いたげなティアナ達を見ながら、私は空を見上げた・・

龍也がティアナ達の発するプレッシャーに負けて、空を見上げた同時刻

（どうしてこうなってるんだ・・）

俺は頭を抱えながら部屋の一角を見る・・そこには・・

「はい、ハーティーン」

嬉々として、漆黒の騎士に食事を渡す、俺の妹ラグナと

「ありがとう・・」

礼を言いそれを受け取る、ハーティーンの姿がある・・

（何でだ?何でラグナはこんなに嬉しそうなんだよ・・）

兄である自分でも見た事が無いくらい、ラグナは嬉しそうだ

「美味しい？」

と首を傾げながら尋ねるラグナに

「・・美味しいと思う・・」

返事を返すハーティーンの姿を見ながら

（どうすっかな・・報告するか？ハーティーンが居るって・・でもなぁ・・）

報告しようかと思いながらラグナを見る・・とても嬉しそうに笑っている・・

（はぁ・・監視してるって事にすっかな・・）

ハーティーンは確かにジオガディスの兵隊・・デクスの筈だ・・だが今のハーティーンには悪意が無い・・ただここにいる・・そんな感じだ・・

（とりあえず・・暫く休むって連絡を入れとくか・・）

休むと連絡を入れていると

「お兄ちゃん、ちょっと私買い物に行って来るね」

買い物に出かけて行くと言う、ラグナを見送り

「さてと・・話くらいは聞いとくか・・」

ハーティーンに近付く、するとハーティーンはゆっくりと俺の顔を見て

「守護者の所の魔道士か・・」

守護者・・旦那の事かと思いながらさっきまでラグナの座っていた椅子に腰掛け

「確か・・ハーティーンで良かったよな?幾つか聞きたい事があるんだけどよ良いか?」

笑いながら尋ねると

「構わない・・だがその代わり俺の話も聞いてくれ、それが条件だ・・」

俺はそれに頷き、幾つか質問をし始めた

「なぁ・・なんで俺とラグナを殺さないんだ?・・お前達は魔力がないと体が維持できないんだろう」

今まで報告で判った事だが、ネクロとデクスは魔力を吸収しなければ体を維持できない、その為に魔導師を襲う必要がある・・だからハーティーンが俺達を襲わない事が気になり尋ねると

「俺は他のネクロやデクスと違う、自分で魔力を生成できる・・だから魔導師を襲う必要性は無い・・極端に消費すれば襲うかもしれんがな」

成る程ね・・だからハーティーンが普通の魔導師を襲った記録が無

いのか・・

「それじゃあよ、ダークマスターズはどうやって魔力を集めてるんだ？あいつらも滅多に目撃報告が無いんだけどよ？」

ダークマスターズの事を尋ねると、信じられない返答が返って来た・・

「レリックや進化出来ないネクロを喰らってだ」

味方を喰らうか・・酷い事すんな・・それとレリックか・・成る程ね・・その為にレリックを集めてるのか・・

「それじゃあ、ヘルズとヴェノムを除いたダークマスターズの事を教えてくれないか？」

駄目元で訪ねてみると

「ヴィルヘリア、バラガルト、アンテルテート、ランレ・デルーパ・・それとデクスのキメイラにヨルムンガンドだ・・」

以外にも答えが帰って来て驚きながら手帳に記していると

「ヨルムンガンドには気を付けるんだな・・あいつは知性がない正真正銘の化け物だ・・」

その警告も手帳に書いていると

（ん？どうしてこんなにすんなり答えてくれるんだ？・・何か考えてんのか？）

スムーズに返事を返すハーティーンに疑問を感じ

「なぁ・・聞いといて何だけどよ、どうしてこんなにすんなり答えてくれんだ?・・何か考えてんのか?味方の事をぺらぺら喋って良いのか?」

どうしても気になり尋ねると、ハーティーンは

「俺は俺の味方だ・・他の奴らがどうなろうが構わない・・俺は守護者と決着がつければそれで良い」

守護者・・旦那と決着をつけたいと言うハーティーンに

「最後に聞きたいんだけどよ・・どうして旦那に拘るんだ?」

どうして旦那に拘るのかと尋ねると

「・・俺は知りたい・・どうして守護者も科学者も誰かを護る?・・あいつらは一人でも強い・・群れを成す必要は無いのに・・それに誰かを護る為に無限に強くなるあいつらの事が知りたい・・俺にはあいつらが理解出来ない・・だからあいつらと戦う・・倒せば判る・・そう思うからだ」

知りたい・・か・・手帳を閉じハーティーンを見る・・近くで見ると良く判るこいつはネクロとデクスとは別物だ・・ネクロやデクスは人に近いが化け物って感じがする、だがこいつは人間のような感じがするのだ・・

(まぁ・・そんな訳ないか・・)

手帳を胸ポケットにしまい

「ほれ、次はお前だ・・今度はお前の話を聞いてやるよ」

答えてくれた礼に話を聞いてやると言うと、ハーティーンはゆっくりと頷き話し始めた・・

「・・声が聞こえた事はあるか？」

声？・・なんの事だと思いながら

「声？今も聞こえてるだろ？」

ハーティーンは首を振り

「頭の中に2つの声が聞こえるんだ・・・壊せ・・殺せと言う声と思い出せって声が聞こえるんだ・・」

壊せ、殺せに思い出せ・・か・・ううー良く判んないぜ

「悪い、俺は精神科医じゃないかんな・・そう言うのは判らんぜ」

返事を返すと、ハーティーンは

「そうか・・」

頷き窓から空を見上げた・・その姿は儚くて・・何か寂しそうだった・・

「ヴェノム・・ハーティーンの反応が無いそうですね？」

私はヴェノムを呼び出し尋ねると

「はい・・理由は判りませんが・・全く反応がありません・・考えられるのは・・死んだか・・なんならかの不確定要素により魔力の流れが切れているのが理由だと思います」

・・不確定要素・・！？まさか・・

「ヴェノム、洗脳が解け掛けているのではありませんか？」

私にはそれしか考え付かずヴェノムに言うと

「洗脳が・・いえそれはありませんね・・私とヘルズにジオガディス様の魔力ですよ？幾ら精神力があろうとそう簡単には解ける訳がありませんよ・・考えすぎですよヘルズ・・では私は戻りますよ・・新しいデクスの作成中ですので・・」

マントを翻し姿を消したヴェノムに代わって

「何ぐだぐだ考えてんだ？ヘルズ・・裏切るなら消す・・それが俺らのやり方だろうが！！」

暗闇の中から紫色の電撃を身に纏った、カブトムシの様なネクロが姿を見せた

「ランレ・デルーパ・・珍しいですね・・貴方が姿を見せるなんて・・」

ランレ・デルーパは滅多に姿を見せないネクロだ・・それが姿を見せた事に内心驚きながら尋ねると

「ふん・・何少々体が鈍ってな・・出撃許可を貰いに来たんだ」

パチパチと放電する、ランレ・デルーパに

「出撃許可ですか？・・別に良いですよ・・好きにしてください」

どうせ許可など無くても勝手に出て行こうとする、ランレ・デルーパだ、どうせ許可を取りに来たと言う事実が欲しくて来たんだろう・・ここで駄目だと言っても出て行くと判ってる以上、好きにさせるのが一番だと思い返事を返すと

「くっくっく・・ではな」

笑いながら闇に溶ける様にランレ・デルーパは姿を消した・・

「やれやれ・・気の早いことで・・」

もうパンデモニウム内にランレ・デルーパの反応は無い事に呆れながら、私は椅子に腰掛けた

「剣帝の復活・・それだけは防ぎたいですね・・」

そっと自分の仮面の右側の傷を撫でる・・これは過去の剣帝によって付けられた傷

「ですが・・復活させるのも1つの手ですね・・」

我らを裏切らない為に厳重に洗脳を施したが・・今なら洗脳が解けても良いと思う・・

「過去の因縁を断ち切ると言うのも良いですね・・」

過去に対峙した最強の剣士・・魔である闇を自在に扱い、神王とたった2人だけでジオガディス様に逆らった騎士・・そしてあいつとの決着はついていない・・

ガチャッ!!

背中の短剣を知らずの内に抜き放ち、それを両手に構え

「洗脳を解くなら解けば良い・・その時は決着を付けましょう・・剣帝・・ルシルファーシャッカスッ!!!!」

ビュン!!!ドガガ!!!

投げられた短剣は柄まで深く壁に突き刺さった・・

「くっくっくっ・・洗脳が解ければ良いですね・・ルシルファー・・その時は私の手で貴方を闇に葬って差し上げますよ・・」

暗いパンデモニウムの中にヘルズの笑い声が木霊していた・・

「ふーむ・・剣帝か・・」

天雷の遺跡の最深部で私はそう呟いた・・

「成る程ね・・神王と共に戦った最強の騎士ね・・」

ジオガディスの伝承が全て破壊されてしまったから他の壁を調べていたら見つけた、新しい伝承・・魔剣士の伝説

「闇を扱う剣士ねぇ・・それだけ聞いたら完全な悪者だな・・」

闇と聞いたらやはり悪という印象を受けるからな・・

「ふむ・・成る程ね・・この剣士が復活してくれれば、ありがたいのだがねぇ・・」

遺跡の壁を調べていると

「ん？ああ・・もうこんな時間か夕食の時間に遅れるな・・」

夕食の時間に遅れるとウーノが怒るので、作業を一度止めテントに戻り始めた

「父さん、今呼びに行こうと思っていたんですが・・丁度良かったです」

遺跡の入り口でトーレに会った、どうやら迎えに来てくれるつもりだったらしい

「はは、食事の時間に遅れるとウーノが怖いからな・・さっ早く行こうか？」

2人で笑いながらテントに戻り食事が終わり、皆で話していると小さなリュックを背負ったルーテシアがメガーヌのテントから出てくる

「おや？ルーテシアどこに行くのかね？」

そのリュックを指差しながら尋ねると

「龍也の所・・ネクロが多くなったから私じゃ危ないって・・ゼストが・・」

ゼストを見ながら言うルーテシア、ふむ・・まぁ正論か・・

「そうだな・・ネクロが多くなってきたからな・・ルーテシアじゃ危ないもんな・・」

まだ幼いルーテシアが狙われる可能性が高い・・ゼストの判断は正しいか・・

「良し、準備出来たわよ、ルーテシア」

メガーヌが転送用の機械の設定が終ったようでルーテシアを呼ぶ、するとルーテシアはちょこちょこと、その機械の方に歩いて行き機械の中心に立つ

「それじゃあ・・行って来ますお母さん」

メガーヌに行って来ますと言うと、機械が動き始めルーテシアの体

は消えていった・・

第７９話に続く

デバイス変化詳細　紹介

マッハキャリバー改

天雷の書のデバイスである、ベオウルフと融合し変化したマッハキャリバーで、加速力と攻撃力に防御力が大幅に上昇している。
真紅のバリアジャケットに、胸部と肩と足には鎧が展開され、左腕には紅い篭手が装着されている、魔力を打ち込む追加能力がある
スバルの突進力を強化する形の為これといって追加能力は無いが、その分基本性能が大幅に上昇している

魔法解説

リボルバーブレイク　左腕の篭手から強烈な一撃を放つ、龍也の玄武剛弾を相殺する威力がある

スフィアクラスター　両肩の鎧から散弾を放つ、射程は短く射角も狭い為、近～中までのレンジをカバーする、追加能力としてバリアブレイクの能力を持つ

ヘブンズナックル　魔力を凝縮した衝撃波を打ち込む、射程威力ともに高い

切り札　スフィアクラスターから踵落としに繋ぎ体勢の下がった敵に左拳と叩き付け、連続で魔力を打ち込み最後に全力のリボルバー

ブレイクで殴り飛ばす、魔法と言うより近接コンビネーションだがその破壊力は凄まじく高い、文字通り切り札である

クロスミラージュ改

マッハキャリバー同様、天雷のデバイスであるシュツルムと融合し変化した物で、主に飛行能力と射撃の精度が上昇している。
ベースは以前同様白だが、露出が少なくなり大人っぽい印象になっている、最大の特徴は背中の翼である、またデバイス本体も変化し大型のライフルになっている、手元のレバーで直線と散弾の2タイプに大出力砲の3つに切り替える事が可能である

魔法解説

モードリバルバー　魔法と言うより射撃の状態の事で直線の砲撃を放つ事が出来る形態、威力と命中率が高い

モードショット　魔法と言うより射撃の状態の事で散弾の砲撃を放つ事が出来る形態、威力よりも命中と射撃の範囲が高い

ブラスターショット　幻術魔法発動と同時に高速機動と共に連続で砲撃を放つ

ハウリングブラスター　大出力砲撃でライフルの銃口が変形し巨大な銃口になる、そこから放たれる砲撃でなのはのスターライトと同クラスの破壊力を持つ、ティアナの最大魔法である

ストライクダガー　ライフルの先が取れ大型ダガーになる、近接戦闘時に使用する

## 第７８話（後書き）

如何でしたか？今回はインターバルがメインですね・・次回は新しいネクロとルーテシア、エリオコンビの予定です、次回も楽しんでもらえると嬉しいですそれでは次回の更新時にまたお会い致しましょう

# 第７９話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです

予定より早く完成したので投稿いたします

また感想が貰えるととても嬉しいです、それでは本編始まります

# 第７９話

第７９話

「体が重い・・」

私はベッドの中でそう呟いた、カーズとの戦闘での後遺症も殆ど消えたはずなのに・・この体の重さは何だ?謎の体の重さに疑問を感じながら、ゆっくりと布団の中を見る

「すぅ・・すぅ・・」

柔らかな紫色の髪が見える・・それは間違いなく

「ルーテシアだな・・」

何故か居る、ルーテシアに首を傾げていると

「むにゃ・・むにゃ・・ううん・・龍也・・おはよう」

ルーテシアが目を覚ましおはようと笑いかけてくる

「ああ、おはよう」

おはようと返事を返すと満足気に頷き、私のベッドから飛び降り顔を洗いに行ったルーテシアを見ながら

「ココアでも淹れておくか・・」

ルーテシアの為にココアを用意する為にキッチンに向かった

「コクコク・・はふぅ～」

ココアを飲んで笑っているルーテシアに

「どうしてここに居るんだ？」

遺跡に居るはずのルーテシアがここに居る事に疑問を感じ尋ねると

「ネクロが遺跡に良く出るようになった・・危ないから龍也の所に行けって、お母さんとゼストが・・」

成る程・・娘が心配になったという事か・・そう思っていると気付く

「ガリューは？」

何時もルーテシアの傍に居るガリューの姿が見えない事に疑問を感じ、尋ねると

「ガリューはお母さんの所だよ・・」

そうか・・ガリューは遺跡に残ったのか・・事情を聞き頷いていると

「・・龍也・・お腹減った・・」

可愛らしくお腹を擦るルーテシアに

「そうか、では食堂に行こうか？」

私はルーテシアを連れ食堂に向かった・・

「お父さんはどこかな～」

食堂でエリオ君とお父さんの姿を探しいていると

「あっ、キャロ居たよ」

お父さんの姿を見付けと言うエリオ君とそっちの方に歩いて行くと

「もぐもぐ・・」

紫色の髪をした女の子が居る事に気付く、それは間違いなく

「「ルーちゃんだ・・」」

私とエリオ君が同時に言う、どうしてここに居るのかな?そう思いながらお父さんの前に行く

「ん?エリオとキャロか、席は空いてるから座ると良い」

穏やかに笑うお父さんに頷き席に腰掛け、朝食を食べ始めた

「エリオ、キャロ久しぶり・・元気だった?」

朝食を食べ終えた所でルーちゃんが元気だったか?と尋ねて来るので

「うん！私もエリオ君も元気だったよ！！ルーちゃんは？」

元気だよと笑いながら言い、ルーちゃんはどうだったかと尋ねると

「龍也が居なかったから寂しかった・・でもこれで少しはましだった・・」

鞄からなにかを取り出し机の上に置くルーちゃん・・机の上に置かれた物は・・

「私の人形・・？どうしてこんな物が？」

それは間違いなくお父さんの人形だった、お父さんはその人形を見て困惑した顔でそう呟いた

「あっ！それ僕です！誕生日に貰った奴をルーちゃんに上げたんです、お父さんに会えなくて寂しいって言ってましたから」

そう言えばエリオ君がそんな事を言っていたなと思い頷いていると

「エリオ、ありがとう・・嬉しかったよ・・」

皆で食事の後の話をしていると、ルーちゃんはお父さんの膝の上に座り

「うーん・・やっぱり・・龍也の傍は落ち着く・・」

私がその姿を見て羨ましいと思ったのは誰にも知られたくなかったです・・

「えっ！ルーちゃんもライトニングなんですか？」

食事の後の訓練でお父さんがルーちゃんもライトニングに入れると言い始めました

「ああ、ルーテシアはエリオとキャロと同い年だし、やっぱり歳が近い方がルーテシアも早く馴染めるだろう？」

笑いながら言うお父さんは訓練の準備を始めました、今日は私とエリオ君のペアを重点的に鍛える日で、私達以外の人は本来なら居ないが今回は

「1、2、3、4・・良し・・準備完了・・」

ルーちゃんも一緒です、念入りに準備体操をするルーちゃんはバリアジャケットを展開しています、紫を基調にした民族衣装の様な物で私のに良く似てます・・デバイスも私のと同じでグローブ型です・・

「さてと・・最初に言っておくが、キャロとルーテシアのスタイルではネクロやデクスと戦うのは難しい・・」

・・これは何度も言われた事だ、私のフリードにネクロが組み付くと直ぐに魔力を吸収され、飛竜形態から子竜形態に戻ってしまう・・それに下手をすれば死んでしまう・・だから戦闘の際は私の護衛以外の事は出来ないのだ・・

「だから2人が目指すのは完全なサポートタイプだ、エリオやスバル達に援護のみに集中して攻撃はしない・・だから今日からはブーストを発動させながらの回避や防御訓練を重点的にやる、エリオは

何時も通り私と組み手だ」

お父さんの指示を受けながら訓練を始めました

「スッ・・スッ・・」

2人でお父さんのスフィアを回避します・・体格も近いからか動き方も良く似てます、暫くするとスフィアの動きが止まります・・どうやら訓練終了の様です、重点的に訓練をする時は時間は短く内容は濃くが基本だそうです、そんな事を考えながら座り込んでエリオ君とお父さんの組み手を見ます・・

ガン！ガン！！

エリオ君がストラーダを振るいますが、お父さんは足だけでそれを弾き飛ばし

「脇が甘い・・それに踏み込みもだ・・」

ストラーダを片手で受け止め

「今日は終わりだ・・続きはまた今度だ・・」

「はい・・はぁ・・はぁ・・ありがとうございました・・」

肩で息を整えながらエリオ君とお父さんが戻って来ます、肩で息をするエリオ君と違いまったく疲れた素振りの無いお父さん・・本当にお父さんは凄いんだなと改めて認識しました

「暇・・」

訓練が終った所でルーちゃんが呟きます、それも無理は無いです・・
今までは遺跡に居て今日は訓練・・正直かなり暇でしょうね・・

「遊びに行って来ても良いぞ？エリオも今日は半日休暇だしな？」

お父さんが料理の本を開きながら言います、今日は私達はお昼から
休暇なので、約束通り私はお父さんに料理を教わる為に何を作るか
考えています

「そうですか・・それじゃあ少しルーちゃんと出掛けて来ますね・・
行こルーちゃん」

「うん・・龍也・・キャロ行って来ます・・」

2人で出掛けて行く後姿を見送り、私は料理の本のページに視線を
戻しました

上空から街を見下ろす1体の異形・・ランレ・デルーパだ・

「しかし・・どいつもこいつも屑ばかりだな・・」

俺は舌打ちをしながら呟いた、どいつもこいつも魔力が弱い・・態
々出て来てこんな雑魚どもと戦っても面白くない・・それこそ時間
の無駄・・余計苛々するだけだ・・

「ちっ・・こんな事ならデクスを連れて来るんだったぜ・・」

俺は今1人・・そんな状態で六課に戦闘を挑めば負けると判ってる・・だからこうして魔力の高い奴を探してるんだが・・小粒ばかりで戦う気も起きない・・

「戻るか・・ん?・・あの餓鬼は確か・・」

余り小粒ばかりなのでパンデモニウムに引き返そうとしていると、視界に2人組みの子供が入る・・1人は確か科学者と一緒に居る筈の子供で、もう1人は確か

「ブリッズを殺った餓鬼だな・・」

俺にも報告が入っていた、ブリッズが槍を使う子供に敗れたと・・その時は恥さらしだと思ったが・・こうして餓鬼を見てみると

「良い顔してやがる・・くっくっく・・ついてるぜ・・帰ろうとした時にこんな大物を見つけるなんてな・・」

仮にもLV4を倒したんだ、その能力は高い筈・・俺はそう感じ餓鬼どもがどっちに移動しているのかを見る

「!!はは!!良いぜ!!俺の領域だ・・」

2人が向かう場所・・それは俺の領域である森の方だった・・

「俺の領域なら、守護者に見つからず戦いを楽しめる・・くっくっく最高だぜ・・」

俺は笑いながら森の方に向かって行った・・

「ルーちゃん、何処行くの？」

ルーちゃんに先導されながら街中を歩く・・どんどん歩いてお店を通り過ぎていくルーちゃん・・僕は買い物でもしたいのかな？と思っていたので何処に行くの？と尋ねると

「もう少しすれば判る・・こっち」

もう少しで判ると言うルーちゃんの後を追っていると

「着いた・・」

ルーちゃんが街を出て直ぐの所で立ち止まります・・そこは

「森林園？」

そこは森林園でした・・ルーちゃんは僕の手を握り・・

「行こう・・」

2人で森林園の中に入って行った・・

「んん～気持ち良いよ・・やっぱり落ち着く・・」

森林園の中のベンチで気持ち良いと言いながら背伸びするルーちゃんに

「ルーちゃんは森とかが好きなの？」

そう尋ねると

「そうだね・・私は森の中とか好きだよ・・私の召喚出来るのはキャロと違って昆虫だからね・・」

そうなんだ・・ルーちゃんの召喚は見た事が無いから初めて知ったと思い頷くと

「見てみる？そんなに強力なのは無理だけど・・簡単のなら出来るよ？」

見てみる？と尋ねて来るルーちゃんに

「うん！見てみたい」

見てみたいと返事を返すと、ルーちゃんは立ち上がり

「良いよ・・ちょっと待ってね・・」

ルーちゃんの前に召喚魔法陣が現れます、でも真ん中はベルカの剣十字でした・・

「吾は乞う、小さき者、羽搏く者・・言の葉に応え、我が命を果たせ・・召喚」

ルーちゃんの前に小さな羽虫が５匹現れます、その一匹を手の甲に乗せ

「これが私の召喚・・インゼクト・・偵察とか・・狭い所を調べる時に力を貸して貰うの・・」

ルーちゃんの説明を聞きながら

「ねぇ・・他のはどんなのが召喚出来るの？」

さっきルーちゃんは簡単の、と言っていただから他のはどんなのが居るの？と尋ねると

「まずはガリュー・・今はお母さんの所に居るけど・・普段は私の傍に居るよ・・忍者みたいで凄く強い・・それと地雷王・・凄く大きくて広域殲滅が得意・・最後に白天王・・凄く強いけど・・上手く制御できないから召喚した事無い・・」

ルーちゃんの召喚出来るのは凄く種類が多いんだ・・感心しているとキン！！

金属が打ち合う音が聞こえ、僕達の周りに結界が張られた

「まさか・・ネクロ！？・・ストラーダ！セットアップ！！」

この結界は見たことがあった・・だから敵が来ると思いストラーダを起動させる・・後ろの方ではルーちゃんもデバイスを起動させていた・・どこから来るんだ？・・警戒しながら辺りを見回しているとと

「くっくっく・・やはり正解のようだな・・結界発動と同時にデバイスを起動させるとはな・・」

木々の間からカブトムシの様な体を持ったネクロが姿を見せる・・
４枚の翼に足は無く・・尻尾の様な物で体を支え両手は鋭い鉤爪に
なっている・・

（なんていう威圧感・・まるでブリッズ・・まさか!?）

過去に対峙したＬＶ４と同クラスの威圧感にまさかと思った瞬間

「その顔・・気付いたようだな・・俺はＬＶ４・・ダークマスター
ズが１人ランレ・デルーパだ・・貴様と戦いに来た・・ブリッズを
倒したお前とな・・精々楽しませてくれよっ!!」

ドンッ!!

ルーちゃんには目もくれず僕目掛けて突撃してくる・・その速さは
お父さんと比べると遅いが・・それでもかなりの速さだ

「シザーアームズ!!」

左腕の鉤爪の振り下ろしてくる

「!」

ストラーダでそれを受け止める

（お・・重い・・でもこれくらいなら!!流せる!）

ストラーダをずらしその鉤爪を受け流し

「はぁっ！！」

踏み込む胴を穿つ・・それは完璧な直撃コースだったが・・

ガキーン！！

甲高い音と共にストラーダが弾かれる・・

「甘いな・・そんな攻撃では俺の鎧を傷つける等不可能だ！！・・デスロート・・パイル！！」

尻尾に魔力が集まり凄まじい速さで迫ってくる

「っ！」

完璧な回避は無理なので首をずらし直撃だけは回避する

ズパッ！！

右頬に浅い切り傷が出来る、それと同時にフラッシュムーブで距離を取る

「良いぞ・・今のを回避するとは・・やはり貴様を選んだのは正解だ！！」

肉薄してくるランレ・デルーパ・・このままだときつい！・・回避も出来るだが攻撃が通らなければ勝ち目は無い・・そう思った瞬間僕をルーちゃんの魔力が包み込む

「ブーストは余り得意じゃないけど・・少しはましの筈・・頑張っ

て・・」

ルーちゃんが笑いかけてくる、僕はそれに頷きランレ・デルーパに向かって行った

「シザーアームズ!!」

「クレセント・・ミラージュ!!!」

お互いの魔力が篭った一撃がぶつかり合い、甲高い音を上げる

「デスロートパイル!!」

即座に尻尾での一撃が来るが

ガキーン!!

ストラーダで弾き飛ばし

「紫電一閃!!でえええぃッ!!!」

がら空きの胴に拳を叩き付けるが

ガーン!!!

鈍い音が響き渡る

「無駄だ!!貴様の力では俺の体を傷つける等不可能だ!」

体を軽く振るわれ後方に弾かれる・・さっきからこのやり取りの繰

り返しだ・・お互いの攻撃はどれも致命打にはならず・・何度も攻撃を繰り返しているがどれも効果は無い

（硬い・・）

先程叩き付けた右腕が痺れる・・それほどまでにランレ・デルーパの体は硬いのだ・・腕が痺れてる為自分から攻める事が出来ず・・間合いを取っていると

「・・・ちっ!!何だ!!強い奴かと思ったらこそこそ逃げるだけか!!俺はそんな腑抜けに長々付き合ってやる気は無いぜ!!ぶっ飛びやがれ!!メガ・・ブラスターッ!!!」

頭の角から強烈な電撃が放たれる

「!!」

その電撃を回避するために跳躍すると

「甘いんだよ!!シザーアームズ・・Ω!!」

魔力で巨大化した鉤爪の一撃を喰らい

「うわああッ!!」

地面に向かって叩き付けられ、それと同時に

「こいつで消し飛べ!!ギガ・・ブラスターッ!!!」

先程より更に強烈な電撃が放たれる、僕はその直撃を喰らいルーち

ゃんの所まで弾き飛ばされた

「大丈夫?」

ルーちゃんが心配そうに駆け寄ってくる

「だ・・大丈夫・・ルーちゃんのブーストのおかげでそんなに酷くないよ・・」

得意ではないと言っていたが、ルーちゃんのブーストはかなり強力で、防御力がかなり上昇していた為そこまでのダメージは無い

「ちっ!・・どこだ・・どこに居やがる・・」

僕達の目の前をランレ・デルーパが通っていく・・どうして?と思っていると

「ステルスの魔法・・あっちからは私達は見えない・・今の内に傷を回復させる・・」

ルーちゃんが回復魔法を発動させる・・僕は傷の手当てを受けながら

(こんな時にキャロが居れば・・)

僕だけではデュナスは使えない・・キャロが強力がどうしても必要になる・・どうすればと考えていると

「エリオ・・私じゃ駄目かな?」

傷の手当てを終えた所でルーちゃんが尋ねて来る

「駄目って？」

その言葉の意味が判らず尋ねると

「キャロの力を借りて騎士甲冑が変化するのは私も知ってる・・それを私と出来ないかなって意味なんだけど、やっぱり無理かな？」

ルーちゃんの力を借りて・・出来るかも知れない・・

「出来るかも知れない・・けど・・どうすれば良いのか判らないよ？」

あの時とは違う・・どうすれば良いのか判らないと言うと

「大丈夫・・出来ると思うよ・・」

ルーテシアが詠唱に入る

「我が願うは・・闇を切り払う光の剣・・若き槍騎士に闇を切り裂く光の剣を・・」

その詠唱と共に僕の体をルーちゃんの魔力が覆っていく・・それはデュナスフォルムに変化する時と同じ者だった・・僕は出来ると確信し

「我が望むは前に進む事・・暗き闇を切り裂き立ち止まらない事！！・・フォルムチェンジ・・グランドフォルムッ！！」

バリアジャケットが形状を変え始めた頃

「ええい・・止めだ!!ギガ・・サンダー・・・・インパクト!!!」

上空から凄まじいまでの紫色の電撃が降り注いだ・・

「どうだ・・殺ったか?・・」

俺の切り札であるギガサンダーインパクトで焼き払われた森を見ていると

「ディメンジョン・・シザーッ!!!」

下の方から餓鬼の声と共に魔力で出来た刃が飛んでくる

ザン!!!

それは俺の方の甲冑の一部を切り飛ばした

「!!俺の甲冑が・・くっく・・どうやらまだまだ楽しめそうだ・・」

俺は笑いながら魔力刃が飛んできた所に着地する・・そこには

「・・・・」

黒を基調にし肩や腕には赤のワンポイントが入った、騎士甲冑を身

に纏った餓鬼が立っていた・・その右手には幅広の剣が握られ、左腕には右手の剣より短い剣が握られていた

「成る程・・さっきの攻撃はそれか・・まだ力を隠し持っていたか・・」

先程と違う騎士甲冑を見ながら言うと

「隠してた訳じゃないですよ・・でも貴方はここで終わりです・・僕が貴方を倒して決着です!!」

ドン!!

剣を振りかざし突撃してくる餓鬼に

「はは!!言ったな餓鬼が!!俺を倒すだと?やって見ろ!!俺がお前を返り討ちにして終わりだ!!」

俺も鉤爪を振り下ろした・・戦いはまだ始まったばかりだ

第８０話に続く

デバイス変化詳細　紹介

ストラーダ　エグザフォルム

天雷の書のデバイスである、エグザと融合し変化したストラーダ、攻撃力、防御力、素早さ、その全てに高い性能を誇る

新しく肩や足に騎士甲冑が展開され、それには龍のエンブレムが刻まれている、甲冑の肩からは赤と黒が混じったマント・・それは見

る角度によっては龍が翼を広げている様にも見える。ストラーダも形を変え鎌と槍が融合した独特な形状になっている

ストラーダ　デュナスフォルム

キャロの魔力を上乗せし変化したストラーダ、エグザと比べると攻撃力、防御には低下が見られるが、加速力と飛行能力が大幅に上昇しているエグザフォルムの赤い鎧は透き通るような光沢を持った白銀の鎧に変化し、ストラーダは形を変えて龍の頭を模した篭手となり両手に装着される、マントは白銀に輝く大きな翼に変化する、スピードを生かした接近戦が得意

ストラーダ　グランドフォルム

ルーテシアの魔力を上乗せし変化したストラーダ、全フォルム中、最高の攻撃力と防御力を持つが、その分スピードは全フォルムの中で一番遅い、全身を覆う黒と赤の甲冑に背中の翼で飛行も可能、ストラーダは二振り剣型のディメンジョンブレードに変化している、鉄壁の防御でチャンスを待ち、ディメンジョンブレードで敵を両断する

魔法解説

全フォルム共通で使用可能

クレセントミラージュ　拳又はデバイスから三日月状の刃を飛ばす、破壊力、射程を自在に変化させることが出来凡庸性の高さが特徴

ダブルクレセントミラージュ　両手からクレセントミラージュを放

つ、デバイスありではデュナスフォルムでしか使えない

ドラゴンズラッシュ　高速で拳又は槍と剣による連撃、破壊力と命中力が高い

各フォルムのみ使用可能

ブレスオブワイバーン　デュナスフォルム専用　両手を合わせた体勢から飛竜の形をした魔力波を放つ

ペンドラゴンズグローリー　エグザフォルム専用　上空から超高威力の砲撃を放つ、欠点としてその高すぎる威力の為魔力の消費が激しい

ディメンジョンシザー　グランドフォルム専用　ディメンジョンブレードから凝縮された魔力刃を飛ばす・・隠された追加能力もある

## 第７９話（後書き）

次回はエリオ強化の完結編です、
次回は番外編の予定ですので、よろしくお願い致します
それではこれからも本作をよろしくお願い致します

# 第８０話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです

予定では番外編の予定でしたが予定を変更して、本編を更新したいと思います

今回も少々長めですがまた感想が貰えると嬉しいです！それでは本編始まります

# 第８０話

第８０話

「シザーアームズ！！！」

魔力が篭った鉤爪が僕目掛けて振り下ろされる、咄嗟に回避しようとするが・・

ズン！

（お・・重い！！）

騎士甲冑の重みで一瞬反応が遅れ、ランレ・デルーパの一撃が肩を捉える、来る衝撃に身構えたが・・

ガキーンッ！！！

甲高い音と鉤爪が命中するが、それだけだった・・

「馬鹿な！、俺の一撃を・・がふっ！！」

困惑するランレ・デルーパの腹にディメンジョンブレードを叩き付け、吹っ飛ばす

バキバキ！！

大量の木を巻き込み吹き飛んでいく、ランレ・デルーパの姿に僕は確信した・・

（この形態は攻撃力、防御力重視なんだ・・）

エグザとデュナスの両形態はどちらかと言えばスピード重視だ、だが新しいフォルムであるグランドの特徴は、ランレ・デルーパの巨体を簡単に吹っ飛ばす攻撃力と、ランレ・デルーパの攻撃を弾き飛ばすその高い防御力・・だがその分スピードが大幅に低下しているが・・

（これくらいなら問題ない・・このまま一気に押し切る！）

僕が両手のディメンジョンブレードを握り直していると

「ギガブラスターッ！！！」

先程僕を弾き飛ばした、紫の稲妻が木々の間から飛び出てくる

「！！」

反射的にディメンジョンブレードをクロスさせ受け止め、上空に弾き飛ばすと

「そうすると思ってたぜ！！シザーアームズ・・トライデントッ！！」

両手の鉤爪と頭の角から、魔力刃が放たれる

「ぐうっ！」

がら空きの腹に魔力刃が命中し、後ろに吹っ飛ばされる・・そして

直ぐに

「もう一発喰らえ！シザーアームズ！！」

物凄い勢いで肉薄してくるランレ・デルーパの姿に、反射的にディメンジョンブレードを振るう

ガキーン！！

それは偶然にも振り下ろされた鉤爪と衝突した、ランレ・デルーパにしたら、必中のタイミングで放った技が防がれ一瞬だが動きが硬直する、僕にとってはその隙のおかげで体勢を立て直し着地する事が出来た、僕はしっかりとディメンジョンブレードを握り間合いを計る・・ランレ・デルーパも同様で左の鉤爪を僕の方に向け間合いを計っている・・ミドルレンジでは僕が不利・・僕が勝つにはクロスレンジまで飛び込む必要がある・・すり足で飛び込むタイミングを計る・・エグザやデュナスなら一瞬で踏み込める、だがグランドではそれは不可能・・一瞬の隙を突くか、直撃を恐れず飛び込むか二つに一つ・・そのタイミングを計る・・先に痺れを切らしたのはランレ・デルーパだった

「こいつで消し飛べ！！シャイン・・オブ・・ビーッ！！！」

ランレ・デルーパの体が光り輝いたと思った瞬間

ゴウッ！！！

ランレ・デルーパの体を中心に爆発が起きる

「ぐっ・・」

腕をクロスして爆発が止むのを待つが次々と爆発し止む気配が無い・・こうなったら僕に出来る事は１つ・・

（爆発の間隙を突くしかない！）

連続で爆発しているが、一瞬だけ次の爆発まで隙がある、その隙を突いて懐まで飛び込む！腕の隙間からタイミングを計る

ゴウッ！！ゴウッ！！・・

今だ！！爆発が一瞬止んだ隙に一気に懐に飛び込む

「何っ！？」

驚くランレ・デルーパに連続でディメンジョンブレードを叩き付ける

ギャリ！！ギャリ！！

滑らかだが硬い甲冑に弾かれ、火花が出る・・だが確実に浅いが甲冑に傷を与えていく

「くっ！！ちょこまかと！！」

両手の鉤爪が僕に迫るがここまで接近すると思うように攻撃できないのか、動きが鈍い・・この状態なら僕の方が有利！！後は連続で攻撃を続けるだけだ！！

ギャリ！！ズパン！！

何度目かの攻撃で遂にランレ・デルーパの体に深い傷を与える、何度も攻撃を喰らい続けた所為で遂に甲冑に限界が来たのだ

「俺の甲冑が・・・デスロートパイルッ!!!」

自身の甲冑が傷つけられた所為か、凄まじい速さで尻尾による突き攻撃を繰り出してくる。

（速い!!・くっ・・距離を取るしか無い!!）

甲冑同士が密着する距離まで接近している為、回避が間に合わなくなると判断し大きく後方に跳び距離を取る

「くそが!!ここまでコケにされたのは初めてだ!!許さんぞこの餓鬼がっ!!!」

ランレ・デルーパに物凄い勢いで魔力が収束していく・・多分さっきの森を焼き払った一撃が来る!

（一か八か・・カートリッジありのディメンジョンシザーに賭けるしかない!!）

そう思いカートリッジを使うと同時にディメンジョンブレードが輝き、一本の巨大なバスターソードになる

「ディメンジョンシザーッ!!!」

全力でディメンジョンブレードを振るう、それと同時に巨大な魔力刃がランレ・デルーパに向かって放たれる

シュン！！

直撃かと思った瞬間、ランレ・デルーパの前に障壁が現れ、ディメンジョンシザーを受け止める

「馬鹿が！こんな隙の多い技に何の防御も考えないと思ったか！！」

くっ・・駄目なのか・・一瞬諦めかけたが次の瞬間それは消えた

ズズッ・・

ディメンジョンシザーが障壁に徐々にだが食い込んで行き

「くッ馬鹿な！！俺の障壁が・・・ぐわあああああっ！！！」

カッ！！ズドーンッ！！！

ディメンジョンシザーが障壁を切り裂きランレ・デルーパの体を捉えた・・

「凄い・・」

私は思わずそう呟いた・・いくらＬＶ４とは言え、あそこまで巨大な魔力刃を喰らえば致命傷になるだろう、私はそんな事を考えながらエリオに近付いた

「はぁ・・はぁ・・ルーちゃんのおかげで勝てたよ・・」

肩で息をしながら礼を言うエリオに

「そんな事無いよ・・エリオが頑張ったから勝てたんだよ?」

笑いながら返事を返すと同時にランレ・デルーパの居た方向から

「あらあら・・随分詰めの甘い魔導師ねぇ?」

聞き覚えの無い女の声が聞こえ、次の瞬間舞い上がっていた砂煙が消し飛んだ・・蹲るランレ・デルーパの前に、妖艶な姿をした女性・・いや・・ネクロの姿があった、エリオが慌ててデバイスを構えようとするが

「あらあら・・随分勝気な子ね・・でも待ちなさい私はここに戦いに来たわけじゃないのよ?だから大人しくしててね?」

からからと笑うネクロに毒気を抜かれたようでデバイスを降ろすエリオを横目に

「貴方はネクロなの?」

そう尋ねると

「あら?ネクロに見えないかしら?・・まぁ無理も無いわね・・ＬＶ４になると限りなく人間に近いか、彼みたいに化け物になるか２つしかないからねぇ・・まぁ人間みたいになるのはかなり珍しいのよ?・・あら・・私とした事が自己紹介がまだだったわね?私はヴィルヘリア勿論ダークマスターズの１人よ宜しくね?」

ウィンクをしながら自己紹介をするヴィルヘリアに

「くそが・・俺の戦いを邪魔するんじゃねぇ！！」

ふらふらと立ち上がるランレ・デルーパに

「あのねぇ・・私は一応貴方を助けに来たのよ？少しは感謝して欲しいわね・・」

ヴィルヘリアはランレ・デルーパを抱えながら

「まぁいいわ、悪いけど私達は忙しいから失礼するわ、まだパンデモニウムの準備も終ってないのに、貴重なＬＶ４を失う訳には行かないの、だからまた会いましょう？可愛い魔道士さん」

そう笑いながらヴィルヘリアとランレ・デルーパの姿は消えて行った

「はぁ・・あのままだったら負けた・・」

騎士甲冑を解除しそう呟くエリオ、確かにその通りであのヴィルヘリアと戦闘になれば疲労している私達に勝ち目は無かった

「そうだね・・それより体は大丈夫？」

エリオに体の調子を尋ねると

「うん、全然平気どこも痛くないし、少し休めば直ぐに六課に戻れるよ」

笑いながら言うエリオに頷き、２人で太陽を見上げながらエリオの体力が回復するのまでの間、話をしていた・・

「おかえり！・・あれエリオ君頬っぺたどうしたの？」

六課に帰るとキャロが出て来ておかえりと言うが、エリオの頬を指差し尋ねるとエリオは

「ちょっとネクロが出て来て、戦闘になっちゃって・・」

戦闘になったとエリオが言うと

「本当！？大丈夫だった２人とも」

大丈夫だったか？と尋ねて来るキャロに

「大丈夫だったよ、それに聞いてよキャロ！さっきねデュナスフォルムみたいに甲冑が変わったんだ」

甲冑が変わったとキャロにエリオが言うと

「えっ・・ルーちゃんとでも変わったんだ・・私だけじゃなかったんだ・・」

何かショックを受けているキャロに

「ちょっとエリオは向こう行ってて、私キャロと話があるから・・」

エリオに部屋から出て行くように言うと

「うん・・判った・・食堂で待ってるね」

怪訝そうだが頷き、エリオは食堂に向かって行った、2人になった部屋で

「ショックだった？・・私でもエリオの騎士甲冑が変わったのが？」

ショックだったかと尋ねると

「そうだね・・ショックかな・・私だけだと思ってたから・・」

ショックと言うキャロに私は

「そっか・・ショックだったんだ・・でもそれを言うなら私はキャロが羨ましいよ・・」

キャロが羨ましいというと

「どうして？私が羨ましいの？」

どうして羨ましいの？と尋ねるキャロに私は

「何時もエリオと一緒に居られるし、龍也とも一緒に居られる・・それが私は羨ましかった・・」

ジェイル達と居るのは楽しいだけど、やっぱりエリオや龍也と一緒に居るキャロが羨ましいと言うと

「そっか・・そうだね・・ルーちゃんもエリオ君が好きなんだ・・」

好き・・確かに私はエリオが好きだと思う、優しくしてくれるし護ってくれた・・だから私はエリオが好きなんだと思う

「でもそれはキャロも一緒、キャロもエリオが好きでしょ？」

真っ直ぐにキャロの目を見て言うと

「うん、私もエリオ君が好き・・だからルーちゃんとはライバルになるのかな？」

ライバルになるのかな？と言うキャロに私は

「違う、私とキャロはライバルにはならない・・2人でエリオを捕まえれば良い・・」

ライバルになるのではなく、2人でエリオを捕まえれば良い・・1人より2人の方が効率が良いと言うと

「そっか！その手が合ったね！そっか2人で捕まえれば良いんだ・・」

うんうんと頷くキャロに

「そう2人で捕まえて、2人で幸せになれば良い・・いがみ合う必要は無い」

2人でそんな事を話している頃食堂では・・

「ブルッ！・・おかしいですね・・急に寒気が・・」

寒気がと言うエリオに龍也が

「風邪か?薬を飲んでおいたほうが良い・・はいヴィヴィオあーん」
膝の上にヴィヴィオを乗せあーんをしながら言う龍也にエリオは
「風邪とかじゃないと思うんですけどね・・どうしたのかな?」
首を傾げるエリオ、齢１０歳にしてピンクと紫の鎖に雁字搦めになっている事に、エリオが気付くのはもう少し先の事になる

「何やってるんだ?ハーティーン?」
俺は目の前の光景が信じられず目を擦りながら尋ねると
「俺も良く判らない・・だがラグナがこうしてくれと・・」
首を傾げるハーティーンの膝の上に、枕を置いて眠っているのは俺の妹に間違いが無い
(おいおい・・マジかよマジでラグナはこいつが好きなのかよ・・)
ハーティーンを監視し始めて今日で3日目だ・・その間ラグナはハーティーンにべったりで兄としては大変複雑な気持ちだった・・
(ハーティーンは確かに良い奴だけどよ・・ネクロだし・・俺らにしたら敵だもんな・・はぁ・・マジでどうしよう・・)
もうこうなっては報告も無理だし、かといって俺ではこいつには勝

てないと判りきっているし・・どうすれば良いのか困っていると

キラッ！

ハーティーンの首にペンダントがある事に気付く

「ハーティーン、お前首のペンダントどうしたんだ？」

昨日まで無かったペンダントを指差し尋ねると

「前にラグナの事を忘れていたと言ったら殴られただろう？忘れられないようにこれを持っていろと言われた、裏側にラグナの名前が刻んである・・」

ラグナ・・そこまでやるか・・普通・・

自身の妹の事が判らなくなってきた・・

「所で話は変わるけどよ、まだ声は聞こえるのか？」

頭の中に聞こえるという声の事を尋ねると

「今は聞こえない・・どうしてか判らないがラグナと居るようになってからは聞こえないんだ・・」

聞こえないのか・・でもその声の思い出せって言うのはどういう意味なんだろうな？

「まぁ良いか・・それよりラグナを起こして飯にしようぜ、俺腹減ってんだよ」

何だかんだ言って、ハーティーンとの奇妙な共同生活に慣れて来ているヴァイスだった・・

「ふふふ・・完成しました・・」

パンデモニウムの中で微笑むヴェノム、彼の前には言うなら竜人型のデクスの姿があった

「これが私の持てる全てをつぎ込んで造ったデクス・・デクス・・ドライヴォルティス・・」

ハーティーンとは違う、一から創り上げたデクス・・それがドライヴォルティスだ

「ふふふ・・やっとですよ・・」

随分と長い時が経ったが、漸く完成した・・これでハーティーンは必要ない

「ヘルズにはああは言いましたが、洗脳が解け掛かってる可能性が強いですからね・・目覚められる前に消しておくのが得策ですね」

ドライヴォルティスはハーティーンをベースに創り上げたデクスだ、デクスの中で唯一ハーティーンに対抗出来る可能性を持っている

「ふふふ・・もう少しで貴方の出番です・・そして私に証明してく

ださい・・あんな奴より貴方の方が強いとね」

私はドライヴォルティスの入ったポッドを触りながら呟いた・・狂気のネクロ・・ヴェノムが造りし悪意の化身は少しずつだが確実に目覚めの時を待っていた・・

第８１話に続く

デバイス変化詳細　紹介

レイジングハート　フォトンモード

ファントムとの戦闘中にシャルナから譲り受けた力で変化したレイジングハート、白のバリアジャケットは青く染まり、背には魔力で構成された６枚の翼を持つ、レインジングハートも姿を変え、一回り大きくなっている、最大の特徴は４つのクリスタルで防御にも攻撃にも使える、背中の翼と巨大化したレイジングハートから女神と言われる形態である

魔法解説

エクストリームジハード　クリスタルとレイジングハートから放つ超高出力砲撃、その威力はスターライトの約７倍で龍也の全力のプロテクションを貫く事が出来るが、威力が巨大すぎる所為かリミッターありでは１発、リミッター無しでも３発が限界の必殺砲撃である

バルディッシュ　アルフォースモード

キメイラとの戦闘の際に覚醒した、バルディッシュの最終形態、美しい青い軽鎧に赤のマントを持ちその姿は魔導師と言うよりかは騎士である、バルディッシュは美しい装飾が施された二つのブレスレットに変化しており、右手からは魔力刃、左手からは盾を発生させる事が出来る、防御に加速、さらには攻撃力まで真・ソニックフォームより上、更に広域殲滅の魔法も行使が出来る最強形態である

魔法解説

ソニックミラージュ　強烈な加速により発生する分身、魔法というよりか体術に近い、最大で４体まで発生させる事が出来る

ウィンドガーディアン　プロテクションとは違う防御魔法、マントを振るい風を操り強固な防壁を作る、だがその性質上発動中は他の行動を取る事が出来無い上に移動も出来ない為、凡庸性は低いが現存する魔法の中では最高の防御力を誇る

エルンストンウェル　カートリッジを使用し放つ巨大な斬撃魔法、形式としては抜刀術に近く神速の一撃で射程、威力ともに高く、尚且つ雷と共に放つため貫通性も高い必殺の一撃

ライトニングフォース　龍也のガイアフォースをアレンジした技、龍也のが炎に対してフェイトのは雷である、周囲の魔力を吸収し放つ為カートリッジの使用は必要ないが、溜めの時間が必要である為凡庸性は低い、フェイトの持つ最大威力の魔法

## 第８０話（後書き）

どうでしたか？今回も少々長めでしたがお付き合いを頂き感謝しています
次回は予定通り番外編の予定です、また本編ははやての狂化を予定しております
それでは次回の更新の際にまたお会い致しましょう

# 第２回人気投票～

どうも、混沌の魔法使いです

今回は第２回キャラの人気投票を行いたいと思います、

龍也サイドのキャラクターの善人サイドとジオガディスとネクロ達の悪人サイドです

それぞれ一票ずつの投票でお願いします、前回同様この人気投票で１位になったキャラで、番外編を作りたいと思っていますので、アンケートに参加して貰えると嬉しいです
期間は１０月１６日から２６日までですので、沢山の方が参加してくださる事を期待しています

それと票を入れてくれたキャラについて一言貰えると嬉しいです。
一言貰えると作者のやる気が上昇します、
私はオリキャラには自信が無いので、オリキャラについての感想は大歓迎です
それとキャラについての一言は感想かメッセージの方にお願いします

それでは皆様の一票が来る事を期待しています

投票可能なのは前回同様善サイドと悪サイドに原作の三つに一票ずつの投票が可能です、それで対象のキャラは

善サイド

龍也、セレス、アイギナ、クレア、シャルナ、グラム、ベレン、ユナ

悪サイド

ジオガディス、ヘルズ、キメイラ、ヴェノム、アンテルテート、ヴィルヘリア、ランレ・デルーパ

その他

原作キャラ

原作キャラはなのはを除き全員が対象ですが・・原作キャラはどこがどう良いのかと追記して貰えると嬉しいです

今回の人気投票は前回トップだった、なのは、マテリアルズ、ハーティーンは対象外ですので宜しく御願い致します

それでは次回の更新の時か活動報告にてお会い致しましょう

## 第８１話（前書き）

今回は二本立てです、１つは本編ともう１つは特別編でＯＧとのクロスです
自信がないので感想が欲しいです・・あと出来れば、クロスと本編の感想は別々でお願いします！それでは本編始まります

# 第８１話

第８１話

「今日の訓練はこれまでだ・・」

私は騎士甲冑を解除しながら言った、目の前には

「「「ぜはー・・ぜはー・・」」」

肩で大きく息をしているスバル達に

「ふ・・ふん・・この程度で息切れ・・ですか・・情けないですねオレンジ頭・・」

「はぁ・・はぁ・・貴方こそ足元がふらついてるわよ・・病み娘」

震える足で無理やり立っている、ティアナとセッテが睨み合っていた

「さてと・・朝食を終えたらデスクワークだ・・エリオは少し残ってくれ・・では解散」

エリオに残るように言ってから解散の指示を出した

「その・・お父さん何かへまをしてしまいましたか？」

残されたエリオが不安そうに尋ねて来るが私は笑いながら

「いや違う、動きも良かったし魔力の使い方も良かった・・今日残

って貰ったのは新しい騎士甲冑の事だ」

エリオは今日新しい騎士甲冑を使っていた、それは今までの物と違い重厚で力強かった

「新しい騎士甲冑？・・グランドフォルムの事ですか？」

首を傾げるエリオに頷き

「その通りだ、新しい騎士甲冑は重いから体の動きが低下してるからな、それの改善方法を教えておこうと思ってな」

今のエリオでは騎士甲冑の重さに耐え切れず動きが低下してしまう、その改善法を早いうちに教えておこうと思ったのだ、コートから前から渡そうと思っていたリストバンドを取り出し渡す

「これは？」

渡されたリストバンドを見ながら首を傾げるエリオに

「それは私のコートの劣化版だ、それで体力と魔力を強化すればグランドフォルムも無理なく使えるだろう」

リストバンドの説明をしてから、私とエリオも食堂に向かった・・

「ふーむ・・中々ダメージを受けてますね・・ランレ・デルーパ？」

パンデモニウムの一室で、ヴェノムがランレ・デルーパの体の怪我

を調べていた、ランレ・デルーパの体にはエリオのディメジョンシザーの一撃で付けられた大きな切り傷があった

「黙って俺の傷を治せ、貴様の仕事だろうが？」

苛々とした感じで言うランレ・デルーパに

「判ってますよ、これくらいなら簡単に治せますよ」

ヴェノムが傷の治療を始めた頃、ヘルズの部屋に1体の異形の姿があった

「珍しいですね、アンテルテート・・貴方が動く気になるとは」

私は笑いながらアンテルテートに声を掛けた、アンテルテートは私より少し後に作られ封印された、ネクロでその能力は強大だ

「俺は・・戦いに出る・・守護者を屠り・・偉大なる王にその首を差し出してくれる・・」

漆黒の目に強い意志の光を灯して言うアンテルテートに

「倒したいというのは判りますが、守護者は強いです・・貴方でも苦戦すると思いますが？」

アンテルテートの実力は私が一番知っている、恐らく私の次に強い存在だが、守護者相手では分が悪いと言うと

「奴とて欠点はある・・それは奴が守護者であるという事・・そこを突けば・・楽に始末できる・・朗報を待っていろ・・」

アンテルテートはそう言うと黒い煙を纏い姿を消した・・

「守護者が守護者たる由縁？・・成る程そういう事ですか・・確かにそこを突けば勝てるかもしれませんね・・」

私はアンテルテートの目的を知り、確かに勝ち目があると思った

「守護者の弱点・・それは・・」

スカッ！！

私の投げたダガーが一枚の写真を貫く・・その写真は・・

「夜天の王・・守護者に護られし姫・・それが守護者の弱点です・・」

機動六課を創設した魔導師・・八神はやての写真だった・・ネクロの次の標的ははやてだ・・

「んー最高やね～」

私は兄ちゃんに膝枕をして貰いながら呟いた・・やはり仕事の後は充電せんとな～

「最高なのは良いが・・そこまで確り私の膝を掴まなくて良いだろう？」

兄ちゃんが呆れた様に言う、私は両手でしっかり兄ちゃんの膝を掴んでいる為、兄ちゃんはいま身動きが取れないのだ

「嫌や～」

兄ちゃんの膝に頭を擦り付けながら言うと

「はぁ・・まぁ良いがな・・」

兄ちゃんは1回溜め息を吐いてから、私の頭を撫でてくれた・・私が仕事の後の休息を楽しんでいると

ビーッ!!ビーッ!!

警報が鳴り響く

「ちっ・・良い所やったのに・・むかつくわ・・兄ちゃん、ブリーフィングルームに行こ」

私は楽しい時間を邪魔したネクロに怒りを覚えながら、兄ちゃんと共にブリーフィングルームに向かった

「状況は?」

ブリーフィングルームから通信士のアルトに尋ねると

「前にネクロとガジェットが出た、海の上にネクロの反応があります・・数は1ですが・・魔力反応が大きいです・・恐らくＬＶ４だと思います」

ＬＶ４で海の上か・・海の上となるとＦＷ陣とチンクさん達は出られん・・出撃出来るのは兄ちゃんと隊長陣だけか・・

「良し、隊長陣だけで出る、今回は私も出撃するで」

なのはちゃんだけではきついと思い、私も出ると言うと

「はやて、お前は最近現場に出てないだろう?大丈夫なのか?」

現場に出てないのに大丈夫か?と尋ねて来る兄ちゃんに

「大丈夫や!戦闘くらい出来るわ!」

胸を叩きながら言うと

「そうか・・では行くとしよう・・スバル達は待機だ、もしかすると市街にネクロとデクスが出るかもしれん、そうなったらクアットロの指示に従って行動してくれ、頼むぞクアットロ」

「了解ですわ～私にお任せを」

兄ちゃんが流れるように指示を出す、やはりこういう経験は兄ちゃんの方が上やなと思いながら兄ちゃんと共にヘリポートに向かった

「あれか・・」

兄ちゃんがヘリの中から頭を出しながら言う、兄ちゃんの見る方向には巨大な六角形のボディを持った異形の姿があった

「大きいな・・長期戦になりそうですね、兄上」

シグナムが兄ちゃんに尋ねる

「そうだな、長期戦になるだろう・・ここははやて達は後方で魔力を溜めて、私とシグナムとヴィータで接近戦と行こう・・ある程度はダメージを与える・・止めは任せるぞ？」

兄ちゃんはそう言うとシグナムとヴィータと共にヘリから飛び出していった・・

「さ～私達は大出力砲の準備と行こか！」

なのはちゃんとフェイトちゃんに声を掛けてから、私もヘリから飛び出していった・・

「おらあっ！！ラケーテン・・ブレイカーッ！！」

「ビフロストッ！！」

先手必勝と言いたげにシグナムとヴィータがそれぞれバーストモードとブラストモードで攻撃を繰り出すと

ジャラララッ！！

六角形のボディから触手が現れそれを弾き飛ばす、それと同時に

「ブラックシュート・・」

その触手から黒い矢が放たれ、シグナムとヴィータに迫るが

「そうはさせん・・」

兄ちゃんがそれに割り込み矢を弾き飛ばす・・流石兄ちゃん・・自分の仲間には怪我させんと言う所か・・私はそんな事を考えながらなのはちゃん達と共に魔力を収束する、その間も兄ちゃん達とネクロの戦闘は続いていた

「ブラックスピアッ！」

触手が槍の形になりシグナムと兄ちゃんに迫るが

「「はぁっ！！」」

同時に踏む込みそれを弾き飛ばす、それと同時にヴィータが

「トール・・ハンマーッ！！」

電撃と共にアイゼンを叩き付け、ネクロを弾き飛ばすがダメージは無さそうだ

「硬いね・・全力の砲撃じゃないと止めにはならないね」

フェイトちゃんが魔力を収束しながら言う、確かにフェイトちゃんの言うとおりだ、全力じゃないと効果は薄そうだ

「良し・・行けるよ」

なのはちゃんが準備が出来たと言うと同時に私とフェイトちゃんも魔力の収束が終る

「兄ちゃん！！シグナム！！ヴィータ！！離れて！！砲撃行くから！！」

声を掛けてから

「ラグナロク・・」

「プラズマザンバー・・」

「スターライト・・」

兄ちゃんたちがネクロから離れると同時に

「「「ブレイカーッ！！！」」」

全力で砲撃を放つ、直撃かと思った瞬間信じられない事が起きる

「ダーク・・エボリューション・・」

触手が光り輝き私達の砲撃を吸収する

「馬鹿なっ！」

珍しく兄ちゃんの動揺する声が聞こえたと思った瞬間

「返すぞ・・グランデス・・ビッグバンッ！！」

強烈な閃光と同時に私達は吹っ飛ばされた

「うっ・・ミスったわ・・こんな攻撃があるなんて・・」

さっきの攻撃で決めるつもりが逆に大ダメージを受け、ふらつく視界の中で皆の事を探していると

ジャラ・・

私の後ろで鎖の音が聞こえ驚きながら振り返ると、そこには黒い光を溜めた触手が合った

（あかん、殺られる・・）

思わず目をつぶると

ドンッ!!

横から誰かに突き飛ばされる、驚きながら目を開くと

「はっ・・はっ・・」

頭から血を流した兄ちゃんの姿があった・・私が兄ちゃんの姿を認識すると同時に触手から黒い光が放たれる

「うぐっ・・」

その黒い光は兄ちゃんの体をゆっくりと呑みこんで行く、

「兄ちゃん!」

兄ちゃんに手を伸ばそうとすると

「来るなっ!!・・お前まで呑まれるぞ!!・・シグナム!!1度・・も・・ど・・」

兄ちゃんは最後まで言う間もなく黒い光に呑みこまれた・・私がその触手に手を伸ばそうとすると

「主はやて!!ここは1度、退きましょう」

シグナムが私の腕を掴みながら退こうと言うが

「放せ!兄ちゃんが捕まったんやぞ!!戻れる訳無いやろ!!」

その手を振り解こうとすると

「くっ・・仕方ありません・・」

ズンッ!!

シグナムの拳が私の鳩尾に突き刺さる

「シ・・シグ・・ナム・・?」

私は強烈な痛みを感じながら意識を失った・・

私は気絶した主はやてを脇に抱え六課に帰還し・・主はやてを医務室に横にしてからブリーフィングルームに向かった・・

「シグナムも来たわね・・今の状況を説明するわね・・」

シャマルが説明を始める、新人達とチンク達はここには居ない、街にネクロが現れて私達と入れ違いで出撃したのだ

「まずあのネクロだけど、シグナム達が攻撃してたのは本体じゃないわ・・本体は・・ここ」

映像のネクロの上を指差すシャマル、そこには人間と同じ大きさの黒い異形の姿があった

「こいつが本体か、くそ・・どうして気付かなかったんだ」

ヴィータが机を叩きながら言うと高町が

「龍也さんは捕まってるだけだから大丈夫だよね?あのネクロを倒せば助かるよね?」

若干顔を青褪めさせながら尋ねるとシャマルは首を振り

「その可能性は低いわ・・あのネクロはお兄さんの魔力と生命力を吸収してる・・近い内にお兄さんは・・死ぬ・・」

ガラガラと私の中で何かが崩れていくのを感じた・・兄上が死ぬ?・・馬鹿な・・そんな訳が・・

「!!」

テスタロッサが慌ててブリーフィングルームを出ようとすると

「待ちなさい！」

シャマルが怒鳴りながら待てと言うと

「こんな所で油売ってる暇無い！！早くあのネクロを倒さないと・・」

テスタロッサがそう言うと

「今はあのネクロは倒せない・・調べたけど今攻撃すればお兄さんを傷つける事になるの・・」

苦しそうに搾り出したその声に

「攻撃すれば龍也さんを傷つける？・・どういう意味？」

高町が尋ねるとシャマルは

「あのネクロは魔力と生命力を吸収してるの・・今攻撃すれば・・その吸収の早さが速まるだけなの・・」

そんなそれでは何も出来ないではないか・・私が何も出来ない事に歯を食いしばると

「今は何も出来ないわ、でも後3時間あるその間に、どうやればお兄さんを助けられるか考えましょう・・それが私達に出来る事よ」

シャマルの言葉に頷き、どうすれば兄上を救えるのかを話し合い始めた・・

「ここ何処やろか？」

私は気付くと何もない空間に立っていた、ここが何処かと思いながら辺りを見回すと

「目覚めたか・・」

後ろから声を掛けられ、驚きながら振り返るとそこには巨大な龍が居た、私が驚いていると

「お前は選ばなければならない・・」

「何を選べって言うんや、教えてくれな判らんで？」

龍にそう言うと

「選ぶのだ・・世界か兄か・・お前が決めるのだ・・」

世界か・・兄ちゃんか？・・！思い出した

「その様子だと思い出したようだな、そうだお前の兄は今ネクロに囚われている、あのネクロを倒す方法は１つ・・取り込まれたお前の兄ごと消し飛ばすしかない・・それが嫌ならばあのネクロに殺されるのを待つしかない・・さぁ・・選べ・・兄か世界かを！」

兄ちゃんか世界か？・・・そんな物は悩む事ではない

「兄ちゃんか世界か？・・そんな物、選ぶものや無いわ・・私は兄ちゃんを選ぶ！」

私がそう言うと

「良いのか？たった1人の為に世界を棄てるのか？」

たった1人・・確かにその通りだが

「見ず知らずの人間がどうなろうが知った事や無い！！赤の他人が死のうが生き様が興味が無い！！世界か兄ちゃん？・・選ぶまで無い！！私は兄ちゃんを選ぶ！！」

そう選ぶまでも無いのだ・・世界か兄ちゃんなら私は迷う事無く兄ちゃんを選ぶ・・世界が滅びようが兄ちゃんと一緒なら怖くない・・逆に怖いのは兄ちゃんがまた私の目の前から消えてしまう方が怖いからだ

「兄の為に世界を棄てる・・本当にそれで良いのか？」

確かめる様な龍に私は

「くどい！！私は何度聞かれても兄ちゃんを選ぶ！！私の世界は兄ちゃんが居ってこその世界や！！兄ちゃんが居ない世界なら・・私は要らん！！」

そうだ・・私の世界は兄ちゃんが居て初めて意味が生まれる、兄ちゃんの居ない世界なら消えてしまえば良い・・そんな世界私は要らない！龍の目を見ながら言うと

「くく・・そうか・・兄を選ぶか・・お前の心は何処までも澄んでいるが何処までも歪んでいるな・・」

声を押し殺し笑う龍に私は

「そんな物、私が一番判ってるわ!!」

自覚している・・私の心が歪んでいる事はそんな事、ずっと前から自覚しているのだ・・兄ちゃんは本当に兄の様に接してくれた、そんな人を好きになったその日から自覚しているのだ・・私は歪んでいると・・それでもこの想いは消える事が無い事も判っているのだ

「くっくっ・・ここまで自分の闇を自覚している人間も珍しい・・良いだろう!!受け取れ!!」

龍の体から青く輝く球体が現れ、私の前で止まる、それを見ながら

「これ、何や?」

何かと尋ねると

「それは我の力の一部・・・それを使えばお前は新たな力を得れる・・その力を持って救えば良い・・お前なら・・自分の闇を受け入れているお前なら使える筈だ・・」

その球体に手を伸ばすと同時に青い球体は一瞬で漆黒に染まり、私の中に消えていった・・それと同時に私は意識が浮上していくのを感じていた

「ここは・・医務室か・・」

私は目を覚ますと私は医務室のベッドに横になっていると気付いた

「はやてちゃん!!良かったです!!目を覚ましたですか」

良かったと言い笑うリィンを見ながらベッドから立ち上がり夜天の書を持ち上げると

「どこに行くつもりですか?」

どこに行くのか?と尋ねるリィンに

「兄ちゃんを助けに行く・・リィンはどうする?・・一緒に来るか?来ないなら邪魔せんで・・今の私は邪魔したら何するか判らんで?」

自分でも判る今の私を支配しているのは怒りだ、最愛の兄を傷つけたネクロに対する圧倒的な怒り・・怒りの沸点を越えてる所為か逆に頭が冷えていくを感じていた・・リィンは

「行くです・・はやてちゃんと協力して、お兄様を助けるです」

一緒に行くと言うリィンと共に私は六課を抜け出した

「来たか・・愚か者が・・」

ネクロが馬鹿にするように言うが、私はそれを無視した・・まだ早いからだ・・怒りを爆発させるのは・・

「リィン・・行くで？」

「はいです・・」

頷くリィンの頭に手を置き

「「ユニゾン・・イン・・」」

リィンとユニゾンする・・それと同時に私の目の前に１０の球体が浮かび上がり、騎士甲冑と一体化していき・・私の騎士甲冑を変化させていく・・光が晴れると同時に頭の中がクリアになっていく・・自分の体を覆う騎士甲冑を見る・・その姿は禍々しくも美しかった・・漆黒の騎士甲冑は見ようによっては悪魔の様にも見える、私の手には一回り強大化した、シュベルトクロイツ・・いやゼローアームズだ、私の背に８枚に増加した、スレイプニール・・しかしそれは翼ではなく・・後光の様にも感じた・・手を閉じたり開いたりしながら、ネクロを睨み

「私の兄ちゃんに手を出した罪・・その命で償ってもらおうか」

左手でゼロアームズを握り締め、私はネクロに向かって行った・・

第８２話に続く

## 第８１話（後書き）

次回は凶化はやて無双です・・強く凶悪なイメージですね・・スパロボならアストラナガンです・・

また特別編も更新しますので感想を宜しくお願い致します

## 第８２話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです

少し遅れましたが最新話の投稿です、はやての完全狂化の話です・・
強い、黒いがコンセプトになっておりますので、かなり怖い感じに
なっています

それとＯＧのクロスを正式投稿するので、そちらのほうもよろしく
お願いいたします

それでは本編始まります

# 第８２話

第８２話

「クリスタルビローッ！！」

海の水をクリスタルに作り変え、ネクロに打ち込むが

「無駄だ・・そんな物は通用しない・・」

金色の装甲に阻まれ、ダメージは無い

（ピクッ・・この魔力の流れ・・兄ちゃんの魔力を吸収し取るな・・）

クリスタルビローは兄ちゃんの閉じ込められてる場所を探す為に放った技だ、これでダメージを与えようなどと虫の良い話は考えていない・・距離を測っていると念話で

（はやてちゃん！攻撃したら駄目だよ！！）

なのはちゃんの声で攻撃を止める様に言うが

（黙れ・・あいつが兄ちゃんの魔力を吸収し取る事くらい判ってるわ・・良いから黙って見とけ・・これ以上グダグダいうならなのはちゃんも私の敵や）

念話を切りネクロを睨む、ジャラジャラと邪魔な触手があるがそんな事は気にしない・・今問題なのは兄ちゃんが何処に閉じ込められ

ているかだ・・

（仕方ない・・兄ちゃん・・少し痛いと思うけど勘弁してな）

頭の中で兄ちゃんに謝ってから、私はゼロアームズを足元に付き

「レインボー・・シンフォニーッ！！」

強烈な竜巻を打ち込んだ

「ぬおおおおっ！！！」

巨大な竜巻はネクロにダメージを与える・・今だ！！魔力の流れを探れ

・・・見つけた・・魔力が減っていく場所を見つけ即座に

「ラプラスの魔・・」

私の前に鏡が現れる、私はその中に腕を叩き込んだ

ガシッ！！

私の腕に何かが当たる感触がする・・私はそれを掴み引っ張った

「がっ・・あああああ・・力が・・俺の力が・・」

苦しそうに暴れるネクロを無視して、私は鏡から腕を引き抜いた

ズルッ！！！

鏡の中から兄ちゃんが姿を見せる、即座に私は念話で

（シャマル！今から兄ちゃんをそっちに送る！！手当てせい！！）

ラプラスの魔をブリーフィングルームに繋ぎ、兄ちゃんをその中に押し込んだ

「さてと・・後は兄ちゃんを傷つけた愚か者を始末するだけやな・・」

肩にゼロアームズを置きながら呟いた・・さっきまでは兄ちゃんがあいつの体の中に居たから全力で攻撃できなかったが、もう何も遠慮する事はない・・全力で潰す、その時私の頭の中になのはちゃんとフェイトちゃんの声が響く、余り聞き取れないが自分達も来ると言っている・・私はそれに

（来るなっ！！あれは私の敵や！！もし来て見ろ！！例え誰であろうが私の敵や！！邪魔する奴から消す！！それが嫌なら来るな！！判ったな！！）

私は念話を送りつけ、ネクロに向かって行った・・

「はっ・・はっ・・なんて殺気・・」

ブリーフィングルームでなのはとフェイトがへたり込み、呼吸を整えていた

「殺される・・本当にそう感じた・・」

シグナムも顔が青い・・歴戦の戦士であるシグナムさえ、恐怖させる程はやての殺気は凄まじかった・・今の彼女の中にあるのは愛する者を傷つけた者に対する圧倒的な怒り・・その前には仲間でさえ邪魔なのだ・・

「シャープネス・・クレイモアッ!!」

右手から光の刃が2本飛び出し、触手を根元から斬り飛ばす

「がああっ!!」

苦悶の声を上げるネクロを無視して更に魔法を発動させる

「オメガ・・バーストッ!!」

掲げた右手から超高熱の魔力波が放たれ触手を完全に焼き払う・・

「ぐあああ!!・・何という威力だ・・」

(残るは8本・・その後は邪魔な胴体・・最後に本体を叩き潰すか・・)

怒りで沸点を越えてる所為か、頭が逆に冷えていく・・

「カラミティ・・サンダー!!」

触手を破壊され、苦しむネクロに強烈な電撃をぶつける

「があああああっ!!」

絶叫ともに後退しながら、魔力を溜めるネクロ・・そして

「喰らえ!!スターダスト・エクスプロレーション!!

４本の触手から黒い球体が放たれ私に迫る・・魔力がかなり収束されている・・直撃なら唯ではすまないだろう・・直撃すれば・・

「コード・・解析・・アルダーサイン・・ラプラスの魔・・発動・・」

私の前に先程、兄ちゃんを救い出した鏡が現れ、それに黒い球体が当たると同時に鏡はその球体を吸い込んだ

「何!?」

驚くネクロに

「あんたの攻撃・・返すわ・・」

そう呟き、ネクロの前に鏡が現れると同時に

ゴオオッ!!!

黒い魔力球がネクロを呑み込むと同時に嵐の様な砲撃が巻き起こった・・

「ば・・馬鹿な・・俺がたった一人の人間に負けるだと・・ありえん!!・・そんな事はありえんのだ!!・・ズバッ!!!・・がああああっ!!!」

自身の攻撃でボロボロのネクロにシャープネスクレイモアを撃ち込むと同時に

「八雷神(やくさのいかずち)ッ！！」

強烈な８本の電撃を打ち込む

バキャンッ！！！

音を立てて金色の装甲が砕け、小さな黒い人型が視界に入る

「あれか・・」

私はその人型に一気に肉薄した

「がああああっ！！」

ネクロが私に気付いて拳を振るってくるが・・

ドガッドガッ！！

それを回避し２発拳を叩き込む

「がぁっ・・がふっ！！」

頭が下がったネクロにアッパーを叩き込み、上がった所で首を掴み、ネクロの目を睨み

「ネクロエクリプス・・」

赤い魔力を放ちネクロの動きを完全に封じる・・後はこの愚か者に相応しい死を与える・・それが私の目的だ

「大いなる氷神よ・・全ての咎人に死という裁きを・・」

強烈な魔力が収束していく・・それと同時にネクロの首から手を放す

「オーディンズ・・ブレスッ!!」

ゴオオオオッ!!!

落下していくネクロに強烈な吹雪が放たれた

ピキーン・・

信じられない事だが海が凍りついた・・その中心にネクロが氷の棺に閉じ込められる形で浮いていた、私はそれを見ながら

「本当はあの時一瞬でお前も粉々に出来たんやけど・・それじゃあ私の怒りは収まらへん・・お前は私の手で消し飛ばすわ・・」

ゼロアームズを振りかぶる

「さいなら・・今まで見たネクロの中で最高にむかつくネクロやったわ・・」

ネクロ目掛け全力で投げつける

ズガンッ!!

ゼロアームズはネクロを貫くと同時に、一瞬だけラプラスの魔を発動させ、ゼロアームズを手の中に戻すそして直ぐに魔法を発動させる

「魂の救済なんぞ与えん・・お前は一生地獄で苦しめ・・ダークブラスト・・」

粒子化し消えていくネクロの下に黒い門が現れ、その中から無数の手が現れ、消えていくネクロの体を掴む

「うわあああっ!!放せえええええっ!!」

放せ!!と叫ぶネクロはもがくが、無数の黒い手の力を緩む事無くゆっくりと門の中に引き込んでいく

「嫌だ!!・・放せ・・俺を・・解放しろおおおおっ!!」

ゴーンっ・・・

もがくネクロは門の中に消え・・それと同時に門は砕け散った・・

「ふん・・相応しい死に様やな・・」

私は冷めた目でそれを睨み、ラプラスの魔で六課に跳んだ

「圧倒的すぎる・・」

私が震えながらそう呟やいた

「はやてって、あんなに強かったんだ・・」

フェイトちゃんが震えながら言うが、あれは強いなんて物じゃない・・あれは狂気と言っても良い・・容赦なくただ敵を屠るだけの戦法だ・・

「はやてが怒るとあんなに怖いんだな・・」

ヴィータちゃんも信じられないと言う様子で言う、それは私も同じだ、何時もニコニコとしていたはやてちゃんが本気で怒るとあんなにも残虐になれるという事が信じられなかった

「兄上を傷つけられたという事が許せなかったんだ・・だからあそこまで残虐になれたんだと私は思う・・」

そんな話をしていると・・

フォンッ！！

鏡が現れその中からはやてちゃんが姿を見せる、そしてその目を見た瞬間私は恐怖した・・どこまでも澄んだ黒・・邪悪な筈なのに美しいとも感じる黒い光がまだ瞳から消えていなかった、はやてちゃんは私達を見ずにブリーフィングルームから消えた・・私ははやてちゃんが纏う空気に何も声を掛けることが出来なかった・・

「リィン、もう休み・・疲れたやろ・・」

リィンとアギトの部屋の前でリィンに言うと

「はいです・・疲れたからもう寝るです・・」

部屋の前でリィンと別れ医務室に向かった・・直ぐにでも兄ちゃんの顔が見たかった・・それが理由だ

「はやてちゃん・・」

シャマルが私が来た事に気付き声を掛けてくるが、それを無視して兄ちゃんの寝ているベッドの横の椅子に腰掛ける

「すー・・すー・・」

兄ちゃんは穏やかな寝息を立てていた・・それで私が一安心しているとシャマルが

「バイタルは安定していますが魔力と体力がかなり減ってます・・暫くは安静ですね・・」

カルテを持ちながら説明するシャマルに

「判った・・兄ちゃんは私が見とく・・シャマルも休めば良いわ・・」

兄ちゃんの手を握りながら言うと

「大丈夫なんですか?・・戦闘の後なのに?」

戦闘の後なのに大丈夫なのか?と尋ねて来るシャマルに

「平気や・・私は兄ちゃんの傍に居たいから・・」

シャマルの方を見ずに言うと

「そうですか・・でも無茶はしないで下さいね?・・それとお兄さんの容態が変わったら呼んで下さいね?」

シャマルの言葉に頷くとシャマルは医務室から出て行った・・

「すー・・すー・・」

頭に包帯を巻いたまま眠る兄ちゃんの顔を覗き込みながら

「ごめんな・・私が・・油断・・したから・・」

ポタ・・ポタ・・

涙が私の手の甲に落ちる・・

「また・・私の所為で兄ちゃんが怪我した・・もう嫌や・・怪我する兄ちゃんは見たないよ・・」

涙を流しながら呟く、闇の書の時もそうだった・・油断していた私を庇って兄ちゃんは胸を貫かれた・・リーゼなんとかに貫かれた場所をだ・・普通なら死んでいると言われた・・怖かった・・兄ちゃんが私の傍から消えてしまうと思うと怖くて仕方なかった

「私は・・見たく無いねん・・皆を護って傷つく・・兄ちゃんは・・見たくないねん・・」

私はもう兄ちゃんと離れたくない・・ずっと一緒に居たいんだ・・

「なぁ？・・兄ちゃんは優しすぎるよ・・皆を護りたいのは判る・・でもその度に傷ついてたら・・兄ちゃん死んでまうよ・・」

こんな事を繰り返していては兄ちゃんは死んでしまう・・それが容易に想像できてしまう・・そんな事は嫌だ・・

「ぐすっ・・お願いや・・もう無茶しんで・・私を心配させないで・・お願いやから・・」

涙を流しながら呟いていると

「は・・や・・て・・」

兄ちゃんの口から私の名前が聞こえる・・それに起きたのか？と思い顔を覗き込むが目は閉じられたまま・・寝ていると判る、静かに兄ちゃんの言葉を聞く

「は・・や・・て・・は・・私が・・護る・・どんな・・物からも・・どんな悲しみ・・から・・も・・」

護ると言う兄ちゃんに

「何でそんなボロボロになってまで・・私を護ってくれるって言うんよ・・？」

兄ちゃんの手を握り締めながら言うと

「や・・く・・そ・・く・・護る・・って・・私は・・誓った・・おじさんと・・おばさんの・・墓の前で・・」

あの時の・・約束を・・

「兄ちゃん・・うっ・・うっ・・」

私は涙を流す事しか出来なかった・・こんなになってまで護ってくれると言う兄ちゃんに涙を流す事しか出来なかった

「絶対に・・護る・・」

兄ちゃんはそう言うと再び深い眠りに落ちた

「兄ちゃん・・もう大丈夫や・・私も兄ちゃんを護るから・・だからな・・私も頼ってな・・」

私は兄ちゃんの額に触れるだけのキスをしてから眠りに落ちた・・そうだ・・今度は私が護る番だ・・兄ちゃんが私を護ってくれたように今度は私が護る・・私はそう決意を固めた・・夜天と守護者の絆はどんな物より強く、決して断ち切れる物では無いのだから・・

「ルキルメス、居ますか？」

私はパンデモニウムの奥にある、ルキルメスの部屋に入りながら尋ねると

「何のようだ?ヴェノム・・貴様が俺に用があるとは思えないが・・」

闇の中から人型のネクロが姿を見せる、鋭利な甲冑には7つの目が付いており、両肩には鷹を模した装飾が施され、両腕に剣を持った、貴重な人型のネクロだ

「居ましたか、ルキルメス・・貴方に頼みたい事がありまして、宜しいでしょうか?」

頼みがあると言うと

「事と次第による・・お前には貸しが有るからな」

ルキルメスは本来ならダークマスターズに入るネクロだが、ＬＶ４の姿が醜くて嫌いだという理由から、私の技術でＬＶ３に退化しているネクロなのだ・・まぁそれは私も同じだが・・私の場合魔力量が圧倒的に多い為、ＬＶ３だがダークマスターズと呼ばれている

「それなら話を聞いてから決めてください、スバルという魔導師が六課に居るんですが・・そのスバルという少女と戦って貰いたいのです」

ルキルメスは首を傾げながら

「態々戦うまでも無いだろう?守護者や死神なら判るが・・何故普通の魔導師と戦う必要があるんだ?」

納得出来ないと言う様子のルキルメスに

「ええ、普通の魔導師ならです、ですが私の予想では普通の魔導師では無いのです・・恐らくプロトタイプの戦闘機人だと思うんです・・そこでそれを確かめて頂きたい・・」

予想ではあのスバルと言う魔導師は戦闘機人・・その力を見極めたいと言うと

「成る程・・納得した・・今からでも出撃しよう・・」

出撃しようとするルキルメスに

「いえ、まだ良いです・・もう少し後で・・」

もう少し後で良いと言うと

「何故だ？」

首を傾げるルキルメスに

「貴方のＬＶ４の形態を変化させれる可能性があります・・それを試す気はありますか？」

ルキルメスの顔色が変わる

「変わると言うのか？あの醜い姿が・・もし変わるなら俺は試すぞ・・」

喰いついた、私は笑いながら

「そうですか、それなら試して見ましょう・・これを使ってね？」

私は1つの宝石を取り出した・・それはジュエルシードと呼ばれる、ロストギアだった・・

第８３話に続く

デバイス変化詳細　紹介

シュベルトクロイツ　フォールダウンモード

堕天を意味するシュベルトクロイツの新しい形態、何処までも澄んでいるが何処までも歪んでいると称される心に呼応し変化した姿、禍々しいまでの美しさを持つ、漆黒の騎士甲冑は見ようによっては悪魔の様にも見える事から、漆黒の女神と称される、シュベルトクロイツは攻撃性を高めた剣と杖が一体化したゼローアームズに変化し、スレイプニールはその数を増やし後光の様にも見える、圧倒的な魔力によって天候さえを支配する、文字通り最狂の姿である、重厚なデザインの騎士甲冑は強すぎる力を制御する為の拘束具でもある、風、光、雷、炎、木、土、闇、氷、鋼、水、天の１１種類の魔法の行使が可能で、その中で木、土、鋼の３種類は防御や拘束の為の能力で、その他の属性は高い破壊力を誇る

使用魔法解説

風　レインボーシンフォニー　強烈な竜巻を打ち込む魔法、破壊力と発生までの速度に優れる

風　ストームゲイザー　指定した位置に巨大な竜巻を発生させる、発生まで時間は掛かるが威力は高い

光　シャープネスクレイモア　手から光の刃を放つ　威力よりも連射性に長ける

雷　カラミティサンダー　強烈な電撃の弾を撃ち込む、破壊力もさる事ながら、電撃により内側から破壊する魔法

炎　オメガバースト　太陽熱に近い温度の魔力波を放つ、破壊力はカラミティサンダーより上

水　クリスタルビロー　水をクリスタルに変化させ撃ち込む、水がある場合無限に乱射できる、水が無くても魔力で代用が出来る為、凡庸性に長ける

鋼　ラプラスの魔　転送用の鏡を作り出す、相手の体の中に直接発生させ、魔法を撃ち込む事も出来、敵の攻撃を反射する事も出来る、防御魔法

鋼　アルダーサイン　相手の攻撃や移動位置などの完全予測、アルダーサインとラプラスの魔を組み合わせる事により、如何なる攻撃も無効とすることが出来る・・だがアルダーサインは脳に掛かる負担が大きい為長時間の発動が出来ないと言う欠点もある

天　八雷神　やくさのいかずち　８本の雷を自在に操り攻撃にも防御にも使える、非常に凡庸性に長ける魔法

闇　ネクロエクリプス　相手の目を睨み、体の自由を奪う魔法、また催眠や精神操作にも使う事が出来、使用する際は目が赤く光る、騎士甲冑を展開しなくても使用が可能

氷、光、天の複合　オーディンズブレス　海をも凍らせる超強力な凍結魔法、登場の際は砕かなかったが本来は凍らせてから粉々に砕

く魔法、はやての最強魔法に分類される

闇、天　ダークブラスト　消滅するネクロの魂を地獄に落とす、ネクロの元になった人間の魂は通常通り成仏させる

## 第８２話（後書き）

次回はインターバルなので少し短めです、ですので番外編との二本立ての予定です

それと人気投票開催中なので参加してもらえると嬉しいです、それでは失礼致します

## 結果発表〜

どうも混沌の魔法使いです！！

今回は人気投票の結果発表です！！

原作　リィン、スバル　獲得一票

善サイド、アイギナ、ベレン一票　セレス五票

悪サイド、ジオガディス一票　ヘルズ二票

となりました！！セレスがダントツ人気ですね！！私も好きなキャラなのでとても嬉しいです！！

記念番外編は　ヘルズ、セレス、リィンで行きますので、是非見に来て下さい！！

内容はヘルズは過去の話、セレスはほのぼの系、リィンは単体ではなくユナとアギトも参戦予定です！！ほのぼの系は非常にやりやすいので楽ですが、ヘルズはかなりのネタばれになると思います！！ヘルズには色々謎があります、それの幾つかの解明予定です！！番外編は少し短めになると思いますがご了承ください！！

それでは次回の更新のときにまたお会い致しましょう

# 第８３話

第８３話

「うう・・ここは・・兄ちゃん！！・・うおっ！！」

起きると同時にはやてに抱きつかれ驚き大声を上げる、はやては私の胸に顔を押し付け

「うう・・兄ちゃん2日も起きへんかったから・・もしかするとこのまま起きないんじゃないかって・・思って・・」

泣きながら言うはやての背を撫でながら

「そうか・・心配掛けてすまなかった・・」

はやてに謝っていると

「兄貴っ！！」

ドンッ！！

「ごふうっ・・」

完全な不意打ちでヴィータの突撃を喰らい、息が詰まる

「ううう・・良かったっ！！良かったよぉっ！！」

泣きながら抱きつくヴィータとはやての姿に

（ごほ・・ごほ・・痛いとは言えんか・・）

突撃された痛みをじっと堪えるしかないと判断し、２人が泣き止むのを待つことにした

１０分後、シャマルの登場により2人の抱きつきは終った・・その代わり説教タイムに突入した・・

「良いですか!!お兄さんは怪我をしてるんです!!そんな力一杯抱きついたら・・傷口が・・っきゃあああっ!!血がっ!!」

シャマルの指差す方を見る・・シーツは真紅に染まっている・・

「ああ・・道理で痛いと思った・・」

そう呟き私は意識を失った・・私が目覚めたのは2時間後の事だった・・

「「ズーンッ・・・」」

起きるなり物凄い落ち込んでいるはやてとヴィータに

「良いですか!!2人ともお兄さんが好きなのは判ります!!ですがお兄さんの体の事も考えて行動してください!!」

怒りの形相で説教しているシャマルの姿があった・・

「あー・・シャマル?・・私は大丈夫だから・・・そんなに怒らなくても・・」

落ち着くようにシャマルに言うと、シャマルは

「お兄さんは黙っててください！！」

私も怒鳴られ黙り込んだ・・それから２０分シャマルの説教は続いた・・

「まったく・・あの２人は・・」

シャマルはぶつぶつと呟きながら私の傷の手当てをしている・・私は手当てが終るのを待っていると

コンコン

ノックの音と共に扉が開き

「シャマル今良いか？」

シグナムが姿を見せる

「シグナム？・・別に良いわよ？」

シャマルが手当てを終え、良いわよと言うとシグナムが私のベッドの前に立つ

「兄上・・起きていたのですか・・気分はどうですか？」

気分はどうか？と尋ねて来るシグナムに

「全然平気だな・・ただ少し血が足りんかもしれん・・」

さっきの出血の事を思い出しながら言うと、シグナムは

「りんごを買って来ましたが・・食べられますか?」

りんごを見せるシグナムに

「大丈夫だ・・貰うとしよう・・」

りんごの籠に手を伸ばそうとすると

「待ってください・・私が切りますから・・」

自分で切るというシグナムを見ていると

「痛っ・・・」

りんごではなく自分の指を切っている・・

「・・やっぱり・・私が切ろう・・」

シグナムの手からりんごを取り、皮を剥く・・その間シグナムは

「私は・・駄目な騎士だ・・」

かなり落ち込んでいた・・

「はい、切れたぞ・・シグナムも食べると良い」

りんごを差し出すとシグナムは

「いえ・・仕事の途中で抜け出して来たので・・これ以上居るとテスタロッサが怒るので戻ります・・」

シグナムは落ち込みながら医務室から出て行った・・

「ふむ・・今度包丁の使い方でも教えてやるか・・」

そう呟きながらりんごを口に運んだ・・うん・・甘い・・今度アップルパイでも作ろうか・・籠一杯のりんごを見ながら、アップルパイでも作ろうかと考えていた頃・・はやての部屋では

カタカタ・・

キーボードを叩く音が響く・・先程グリフィス君に捕まり強制的に仕事をさせられている・・横目で睨むと

「睨んでも駄目です・・仕事が終ったら、八神中将の所に行って良いので・・今は仕事してください・・」

冷や汗を流しながら言うグリフィス君を見ながら

（ちっ・・確かに私が悪いから大人しく仕事せんとな・・）

2日間仕事してなかった、私が悪いので大人しく書類を整理し・・書類整理から1時間後・・

「終ったで・・兄ちゃんの所に行って良い？」

睨みながら言うとグリフィス君は

「どうぞ・・それとこれを持っていって下さい・・」

グリフィス君はお見舞いの品であろう、お菓子を差し出してくる

「おおきに・・兄ちゃんにちゃんと伝えておくわ・・」

そのお菓子を受け取り、私は医務室に向かった

「はやて様ですか・・どうしましたか？」

兄ちゃんのベッドの隣にセレスさんが腰掛けていた

「うん・・兄ちゃんのお見舞いに来たんやけど・・・兄ちゃん寝てるん？」

兄ちゃんの顔を覗き込むと、穏やかな寝息を立てている

「先程お眠りになりました・・なんなら起こしましょうか？」

起こそうか？と尋ねるセレスさんに

「うん、良いわ・・暫く兄ちゃんの寝顔でみさせて貰うから・・」

そう呟きセレスさんの真向かいの椅子に座る

「子供みたいな顔してるなぁ・・」

私はそう呟いた・・無防備に眠る兄ちゃんの寝顔を見ているとセレスさんが

「私は・・こんなに穏やかな王の寝顔を見た事がありませんでした・・」

そう呟くセレスさんに

「私はよう見るけどなぁ？」

首を傾げながら言うとセレスさんは

「私が王に出会った頃は・・王は悲しみの黒い衣で心を覆ってました・・」

黒騎士の時の事やなと思い黙り込んでセレスさんの話を聞く

「王は何時も悲しそうにしておりました・・だから今の王の姿を見るのがとても楽しいです・・」

穏やかに笑うセレスさんに

「そうかぁ・・セレスさんは兄ちゃんが落ち込んでいる時の事しか知らんのか・・」

セレスさんの顔を見ながら言うと、セレスさんは

「私だけではないですよ・・クレアもシャルナもアイギナも王の悲しみの姿しか知りません・・きっと今の王の姿を見たら驚くでしょ

う・・」

笑いながら言うセレスさんに

「兄ちゃんの守護騎士さんか・・会って見たいなぁ・・」

どんな人達なのか気になると言うと

「いずれ会えますよ」

穏やかに笑うセレスさんと話しながら兄ちゃんが起きるのを待っていた・・

「うーん・・限界かな・・」

私はそう呟きながら考え事をしていた・・

「元々射撃魔法とかは苦手だしねぇ・・本当どうしようか・・」

私は元々射撃とかは苦手で、格闘戦が出来るようにシューティンアーツを学んでいたが・・それに限界を感じていた

「どうしようかな・・龍也さんならアドバイスを貰えると思うんだけどな・・」

今龍也さんは医務室で療養中・・尋ねに行くのも気が引ける・・

「うーん・・ノーヴェに聞きに行こうかな・・」

ノーヴェは龍也さんに格闘技を教わっていたと言っていたので、聞きに行くならノーヴェしか居ないと思い、チンクさん達の部屋に向かった・・

「ああ?・・龍也の格闘戦の資料?・・あると思うけどよ・・ちょっと待っててくれ・・」

ノーヴェはどうやら寝ていたようで、少し苛ついた素振りを見せながらも資料を探してくれた

「ああ・・ほれ・・これだよ・・でも龍也の格闘戦はかなりレベル高いから参考になるとは思えないけどな・・」

そう言うノーヴェからＣＤを受け取り

「ありがとうノーヴェ、今度アイスでも奢るよ」

アイスを奢ると言うと

「楽しみにしとくよ・・私は眠いから寝るぜ・・ふぁあああっ・・」

欠伸をしながら部屋に戻って行くノーヴェと別れ自室でＣＤを見る

「隻腕の時の龍也さんだ・・」

映像の龍也さんは触れたら切れる様な鋭い気配を纏っていた・・

ヒュンッ・・

「早い！」

踏み込みが全然見えなかった・・例えるなら閃光という表現がぴったりだ

ズバババッ！！

落ちてくる木の葉に拳を叩き込む・・すると

バッ・・・

全て塵となり消える・・

「とんでもないよ・・」

龍也さんは剣と言うイメージが強いがそれ以上に格闘戦も超一流なのだ・・

「でも・・参考になるね・・」

映像の龍也さんは魔力を纏っている・・

「うーん・・こうかな？・・」

見よう見まねで魔力を纏ってみるが・・

「うーん・・弱いなぁ・・」

私のは薄っすらと見える程度で、龍也さんのはハッキリと見える・・

「収束の仕方が違うのかな?」

色々と試行錯誤する

「欲張って全身でやろうとするから上手く行かないんだ、まずはピンポイントで・・」

足や腕に魔力を収束する

「つぅ・・・何・・今の感覚・・」

上手く行ったと思った瞬間、激痛が走り収束が消える・・

「何か違うのかな?・・・うーん・・」

考え込むが判らない・・

「うー駄目だ!!今度龍也さんに聞こう・・」

今度龍也さんの魔力の収束の仕方を聞こうと思いながら、映像の龍也さんの動きを見る

「機神拳・・」

ヒュンッ!!

龍也さんの姿が掻き消え・・神速の速さの拳が繰り出される・・

「うーん・・凄い・・これが私の目指す最高の場所・・」

格闘戦しか出来ない私が目指す為の頂点・・それがこの映像の龍也さんだ・・

「目指す所が判ってるから・・楽だね・・」

目標地点は判っているのだ・・後はそれを目指していけば良い・・

私はそう思いながらＣＤプレーヤーの電源を切った・・

「ううん・・良く寝たな・・」

私が目を覚ますとセレスと目が合う

「おはようございます、王よ・・気分はどうですか？」

気分はどうだ？と尋ねて来るセレスに

「大分良い・・」

返事を返すとセレスは

「今はやて様がお粥を作りに行ってます・・もう少ししたら戻ってくると思いますよ？」

はやてがお粥を作りに行っていると教えてくれる、そこで認識する

「そう言えば・・腹が空いているか・・」

そう呟き起き上がろうとすると

「まだ駄目です・・大人しく横になっていてください・・」

セレスにベッドに押し戻される

「判ったよ・・大人しくしてるよ・・」

大人しくベッドに横になりセレスと話をしていると

「ん～兄ちゃん起きたんか～今お粥が出来た所やで」

はやてが小さな土鍋を持ってきながら笑う

「それでは王、私は失礼致します・・」

そう笑いセレスは溶ける様に消えて行った・・それを見たはやては

「始めて見る訳や無いけど・・心臓に悪いなぁ・・」

そう呟きはやては私の前に土鍋を置き、小皿に中身を取り

「ふぅ～ふぅ～はい兄ちゃんあーん」

スプーンをこっちに向け笑うはやてに

「1人で食べれるぞ？」

と言うと

「良いの、私がやりたいんやから！」

笑うはやてにお粥を食べさせてもらっていると

「兄貴～」

「兄上」

シグナムとヴィータもそれぞれ何かを持ってやって来る

「偶にはこういうのも良いな・・」

龍也がはやて達に囲まれている頃、医務室の外では

「「何か入りずらい雰囲気・・」」

お見舞いの品を持って来たが、医務室に入れないなのはとフェイトの姿があった・・

第８４話に続く

## 第８３話（後書き）

今回はインターバルなので少し短めです、次回はハーティーンの話のつもりです、悪役でダントツ人気のハーティーンがどう動くかお楽しみに！！それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

**八神龍也　イラスト（もらい物です）**

＞ｉ１３６８７―１９１１＜

どうも混沌の魔法使いです！！

今回は坂本様に頂いた、私の小説の主人公の八神龍也のイラストを載せたいと思います！！
イメージどおりに書いて貰えてとても嬉しかったです！！

私は坂本様の絵がとても上手いと思って依頼しました・・快く引き受けてもらった上に、イメージ通りの絵を書いて貰い、坂本様には本当に感謝しています・・

今週は日曜日の更新予定です・・土曜が仕事なので更新できないのです・・申しわけありません
日曜は本編の更新予定です！！メインはハーティーンと龍也の戦闘の始まりの所です！！
そしてその次は決着編です！！次回は土日が休みなので番外編も投稿できると思います！！

まだまだ未熟な作者ですが

これからも本作を宜しくお願い致します

# 第８４話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです

本編の更新です！！今回はスバルの更なる強化フラグとハーティーン戦の始まりの話です！！今回も少々長めですが・・最後までよろしくお願いします

それと始まりの魔法の作者の　坂本様に龍也の絵のほうを描いてもらったので見てもらえると嬉しいです・・関係ない話が入りました・・本編始まります

# 第８４話

第８４話

「何？・・魔力の収束を教えて欲しいだと？」

私は体の調子が完全に回復し、久しぶりに訓練に参加したが、その際にスバルが行き成り魔力の収束を教えてくれと頼み込んでくる・・頭を深々と下げるスバルの姿を見ながら

「これの事か？」

私は右手に魔力を収束させる・・蒼い光が右腕を包み込む・・それを見てスバルが

「それです！！私にそれを教えてください！！」

教えてくれと言うスバルに

「教えると言ってもな・・これは負担が大きいんだぞ？」

これは骨や筋肉にかかる負担が大きいと言うと

「構いません！！それを私に教えてください！！」

繰り返し教えてくれと言うスバルに

「ふー・・仕方ない・・教えるが・・そう簡単には覚えられないぞ？」

そう前置きをしてから私はスバルに魔力収束のやり方を教え始めた

「つぅ・・」

スバルが右腕を押さえ込みしゃがみ込む・・

「やり方が雑すぎる、まずは薄く魔力を収束させてその上から更に収束させろ・・じゃないと本当に腕を痛めるぞ・・」

ただ収束させるのではない・・まずは薄く魔力を収束させ腕を護る、更にその上から魔力を収束させるのだ

「はい・・えっと・・こうかな・・」

ぶつぶつと呟きながら魔力を収束させるスバルを見る

（飲み込みが早い・・元々独学でヘブンズナックルを作り上げたスバルだ・・こういう収束のコツは掴んでいるのだろう・・）

熱心に魔力収束をするスバル・・練習開始から1時間後・・

フォン・・

スバルの右腕を水色の魔力が包み込む、スバルはそれを見せながらスバルは

「龍也さん!!出来た!!出来ましたよ!!」

飛び跳ね喜ぶスバルにヘッドギアと防具を投げ渡す

「？・・何ですか？」

受け取った物の首を傾げるスバルに

「収束を教えてくれと言うことは自身の技に限界を感じてるんだろ？・・私の技を幾つか教えてやる・・だが口での説明は無理だ・・だから組み手の中で自分で掴め・・」

スバルの目を見据え言うと

「はい！！宜しくお願いします！！」

防具を身につけるスバルと組み手を始めた・・その姿を見るティアナは

「スバルばっかり・・私だって・・教えて欲しいのに・・」

ぶつぶつと呟くティアナを見て、エリオ達は

「「ティアナさんが怖いです・・」」

怖いと呟くエリオとキャロに

「？？？？」

どうして2人が怖がっているか判らないと首を傾げるルーテシアの姿があった・・３０分後・・

「も・・もう・・無理です・・」

肩で大きく息を整え無理だと言うスバルを見ながら私は

「そうか・・では少し休憩していろ・・後で組み手をまたやるぞ」

そう言うとスバルは

「は・・はい・・またお願いします・・」

へたり込み返事を返すスバルを横目に私はティアナの方に向かった・・

「ぶつ・・ぶつ・・」

ティアナがぶつぶつと呟きながらターゲットを射撃している・・命中率はかなり高いようで次々と命中していく・・

（射撃感は抜群だな・・元々才能はあるんだ・・無茶をしなければエースも夢じゃないか・・）

ティアナは天才と言っても良いだろう・・焦らず訓練を続ければエースも夢ではない・・だが・・改善点もある・・それは射撃型の魔道師が抱える基本的な弱点・・それは接近戦だ・・私はデバイスを置き射撃の精度を見ているティアナに

「流石だな・・射撃の腕はピカイチだな?」

後ろから声を掛けるとティアナは驚いたように振り返り

「龍也さん!!次は私の番ですか?」

笑いながら尋ねて来るティアナに

「そうだ・・ティアナの番だ・・ああ・・デバイスはストライクダガーで準備しろ」

私は軽く拳を握りながら言うと

「ストライクダガーという事は接近戦の練習ですか・・」

ダガーを構えるティアナに

「今から１０分、拳、脚、ダガーどれを使っても良い・・私に一撃入れてみろ」

軽く拳を構え、ティアナの攻撃に備える・・

ジリ・・ジリ・・

すり足で迫ってくるティアナはダガーを逆手に構えている・・隙はありそうでない・・恐らくこの隙は業と出しているもの・・

（接近戦も苦手ではないという事か・・）

重心を後ろに置くと同時にティアナが駆け出してくる

バッ！！

顔を狙って蹴りが放たれる

「狙いは良いが・・相手との身長差を考えるべきだな・・」

ガッ！！

その足を掴み軽く後方に投げ飛ばす

「っとと・・」

体勢を立て直し着地する・・ティアナを見ながら

「さっ・・全力で打ち込んで来い」

私は手で挑発しながらティアナに声を掛けた・・

１０分後・・

「ぜはー・・ぜはー・・」

肩で息をするティアナは酷く消耗している・・攻撃する時一番疲労する物・・それは攻撃の空振りだ・・私はティアナの攻撃を捌き続け・・ティアナの体力が尽きるのを待っていたのだ・・

「もっと攻撃する時は考えてやるようにな？」

「は・・はい・・ありがとうございました・・」

龍也達が演習場で訓練している頃・・・

「んーと・・これと・・これと・・」

ラグナが買い物をしている市街に

「フフ・・行くとするか・・」

市街を見下ろす蝶のような炎を翼を持った異形・・ストレイツォと

「やれやれ・・僕に命令しないで欲しいね・・」

黒い体を持った狼の様な異形・・ノワールの姿があった・・

ビーッ!!ビーッ!!

六課に警報が鳴り響く・・それに伴いブリーフィングルームに向かった

「ネクロか?」

ブリーフィングルームに入りながらはやてに尋ねると

「そうや、ＬＶ3が2体だけやけど・・ちょっと不味いことになってるんや・・」

モニターには人質であろう少女の姿があった・

「人質か・・どうするべきか・・」

蝶の様な翼を持ったネクロが少女の頭に右手を突きつけ、

「ブルーサンダーッ！！」

狼の様なネクロが角から電撃を放ち市街を破壊している・・

「ちっ・・私が出る・・フェイト達は一緒に来い、私がネクロの注意を引き付けている隙に人質を解放するんだ」

私はフェイト達を連れ出撃して行った

「クックッ・・漸く現れたか守護者・・」

蝶の様なネクロが少女の頭に腕を突きつけながら笑い

「派手に暴れてたのにも意味がある訳だ・・ストレイツォの馬鹿な計画に参加したのにも意味があったのか・・」

嘲笑う様に言う狼のネクロにストレイツォと呼ばれたネクロは

「馬鹿とでも何とでも言え、守護者を引きずり出せたのだからな・・ノワール」

ノワールと呼ばれたネクロは口に電撃を溜めながら

「まぁ良いさ・・僕達の目的は守護者を倒す事だしね・・ストレイツォは人質を放すなよ・・」

バチバチッと帯電音をさせるノワールに

「判ってる・・お前も仕留め損ねるなよ？」

ストレイツォのその言葉と共に青い電撃が走った・・

「！！」

サイドステップで回避し剣を構えようとするが

「おっと・・動くなよ・・動けば・・この女の頭を消し飛ばすぜ？」

ストレイツォが少女に突きつけた右手に炎が溜まって行く・・私は構えかけた剣を鞘に戻した

「そうそう・・動かないでね！！」

ギュンッ！！

上下左右から迫ってくるノワールに

「くっ・・」

辛うじて直撃は回避しているが・・このままではジリ貧だ・・ストレイツォは少女の頭から手を退けない・・フェイト達も飛び出すタイミングが掴めない・・

（このままでは不味い・・）

私に選択できるのは２つ・・少女を見捨てるか・・このまま死ぬかだ・・そう思った直後

ザンッ！！

私の背後に紺色のマントに闇色の騎士甲冑を纏った異形が姿を見せる

「ハーティーン・・」

漆黒の騎士が背中の鞘から剣を抜き放つ・・それと同時にストレイツォが

「はは!!ハーティーン!!守護者を仕留めに来たか・・良いだろうお前が止めを・・ザンッ!!・・がああああッ!!」

止めと言いかけた直後ストレイツォの腕が切り飛ばされる、ハーティーンは少女を抱き抱え、一瞬で瓦礫の影に隠れていたフェイト達の前に行き

「おい、女!!ラグナの手当てをしておけ!!」

フェイトにラグナと呼ばれた少女を渡し、私の隣に立つ

「何のつもりだ?」

腰から剣を抜き放ちながら訪ねると

「人質などと卑怯な事をする奴らは気に食わん・・だから排除しに来たが・・1人で勝てるほどあいつ達は弱くない・・だから・・」

ハーティーンが何を言いたいのか理解し

「成る程な・・敵の敵は味方・・と考えても良いか?」

ハーティーンを見ずに言うと

「ふん・・そんな所だ・・だが覚えておけ・・あいつらを倒せば次は貴様の番だ・・守護者・・」

にやりと笑うハーティーンに

「そうだな・・では・・ここは1つ・・」

私の剣とハーティーンの剣の切っ先が重なる

「「共同戦線と行くかっ!!!」」

最強の守護者と己を探す騎士が同時に空を舞った・・

「凄い・・」

僕は思わずそう呟いた・・お父さんとハーティーンが空を舞う・・それはとて美しく・・まるでかなり前から2人で居るのが当然だったように鮮麗されていた・・僕は・・いや僕だけじゃない・・フェイトさん達もその動きに魅了されていた・・

「ブルーサンダーッ!!」

ノワールが電撃を放つが

「無駄だっ!!」

ハーティーンが電撃を切り飛ばし

「はぁっ！！」

お父さんが凄まじい踏む込みでノワールの懐を取り、切り上げながら蹴り飛ばす

「がっ！！」

ビルに背中から追突するノワールに

「消えろ！！暗黒月光剣　満月の太刀ッ！！」

漆黒の魔力を纏ったハーティーンの剣が上段から振り下ろされる

「ぎゃあああああっ！！」

断末魔の叫びと共にノワールが消滅する

「この裏切り者があああああっ！！」

ストレイツォがハーティーン目掛け炎の弾を放つが

バッ！！

一瞬早くお父さんがその攻撃に割り込み、マントでその炎を防ぎながら

「油断してるんじゃないか？」

ハーティーンに挑発するように言うと

「ふん・・俺があの程度の攻撃でどうこうなる訳が無いだろう？」

同じく挑発するようなハーティーンに

「口の減らない奴だ・・」

お父さんがそう呟くと同時に

「「ぐるるるッ！！！」」

１５体のデクスが姿を見せる・・ストレイツォに援軍が来た様だが、

お父さんとハーティーンは

「やれやれ・・数だけで私に勝てると思っているのかね？」

剣を構えそう呟くお父さんに

「・・出来損ないが何体来ようが同じ事だ・・俺の剣の錆となれ・・」

２人同時にデクスに向かって行った・・

妙な感覚だ・・俺はダガーを振りながら感じる妙な感覚に戸惑っていた・・

（まるで遠い昔・・同じ事があったような気がする・・）

ダガーでデクスを両断しながら俺はそんな事を感じていた・・

「はぁッ！！」

守護者の剣がデクスを両断する・・それに別の男の姿が重なる・・
赤い髪を持った男の姿がダブって見える

（何なんだ・・この記憶は・・）

知らない男なのに何故か妙に懐かしく感じそれに戸惑いながらデクスを両断していく・・それと同時に

（どうした？■■■■■■・・腕が止まっているぞ！！）

赤い髪の男が俺に話しかけてくる

（知っている・・俺はこの男を知っている・・）

何故か判る・・俺はかつてこの男と共に戦場を駆けた事があると・・
その記憶の所為か動きが止まった所に

「がああああっ！！」

デクスが飛び掛ってくる

（しまった・・戦場で考え事など・・）

マントで防ごうとするがそれより速く

「瞬連刃ッ！！」

守護者が割り込みデクスを消滅させる

「何をしている？ハーティーン・・動きが止まっているぞ！！」

！！先程の男の言葉と守護者の言葉が重なる・・俺はそれに驚きながら

「ふん・・抜かせ・・貴様こそ・・動きが止まっているぞ！！」

守護者の影から飛び出したデクスを両断し、背中合わせで剣を構える

「やれやれ・・わらわらと鬱陶しいな・・大技で消し飛ばすとするか？」

俺に声を掛ける守護者に

「そうだな・・ストレイツォごと消し飛ばすか・・」

2人同時に魔力を収束させる

「全ての罪人に・・血の裁きを・・」

守護者の回りに真紅のスフィアが浮かぶ、俺も詠唱をする

「黒き獄炎に呑まれ・・燃え尽きろ！！」

俺の周りに漆黒のスフィアが浮かび・・2人同時に

「ブラッディ・・・レイ！！」

「ダークネス・・・スフィア！！」

デクスとストレイツォに無数の魔力弾が打ち込まれた・・

「ば・・馬鹿な・・俺が・・この俺がああああッ！！」

俺と守護者の嵐の弾幕に呑まれ、デクスとストレイツォは消滅して行った・・

「「・・・・・・」」

バッ！！

残兵が居ない事を確かめてから守護者から距離を取る・・そしてお互いに剣を向け

「これで邪魔者は居ない・・守護者・・ここで決着をつけてくれる・・」

俺が剣を構えながら言うと

「そうか・・ならば・・私も全力で相手をしよう・・」

守護者が剣を俺と同じ様に構える・・漸くだ・・漸く・・答えが見つかる・・捜し求めた答えがこの男を倒す事で判る・・しっかりとダガーを握り直しながら守護者を見る

「・・・・」

片手で軽く剣を構え、俺を見る守護者の姿に再び赤い髪の男の姿と重なっていく・・それと同時に軽い頭痛が俺を襲い始める

（ちぃ・・折角・・守護者と決着をつけれるチャンスだと言うのに・・）

守護者に俺の変調を悟られるように必死にその頭痛と戦っていると

（剣を退け・・その方はお前の敵ではない・・）

ラグナと居る時には現れなかった男の幻が俺に声を掛ける

（黙れッ！！消えろ！！俺は・・守護者と戦い答えを得るんだ・・邪魔をするなッ！！）

俺がそう叫ぶと同時に幻は消え、頭痛も治まる・・俺はそれに安堵しながらダガーを構える・・それと同時に

スッ・・

守護者も剣を正眼に構える・・俺はそれに笑みを浮かべながら

「「いざ・・尋常に・・」」

2人同時に体勢を低くし・・

「「勝負ッ！！」」

ガキーンッ！！

守護者と俺の剣が交差した・・答えを得る為の戦いの幕が斬って落とされた・・・

龍也とハーティーンの戦いを見る、異形の鎧の騎士・・ヘルズだ、ヘルズはその戦いを見ながら

「やはり・・洗脳が解け掛けているのか・・」

私の記憶の中の剣帝の姿とハーティーンの姿が重なっていく・・ハーティーンの剣筋は荒々しくも完成された物だ・・剣帝の剣筋は美しい中にも獰猛な狼の様な鋭さがあった・・徐々にだが・・剣帝の太刀筋に近付き始めていた・・

「このまま守護者と戦い続けられると・・本当に記憶が蘇る可能性がありますね・・そしてその切っ掛けを与えた者は・・」

私は死神に看病されている少女から守護者とハーティーンの戦いに視線を戻す・・

「あの少女ですか・・それに守護者の動きに切れが無いのも気になります・・」

守護者の剣筋には何時もの鋭さが無い・・

「もしかすると・・科学者から何か聞いてるかもしれないですね・・」

遺跡には剣帝の眠っていたクリスタルがあった・・そしてそこには剣帝の伝承が刻まれていた筈だ

「まぁ・・仮に聞いていても・・関係ないですね・・」

スラッ・・

私は背中の鞘から剣を抜き放ち

「勝っても負けても・・ハーティーンは始末しますからね・・」

私は押し殺した笑い声を上げながら、守護者とハーティーンの戦いを見ていた・・

第８５話に続く・・

## 第８４話（後書き）

今回はここで終わりです！龍也とハーティーンの戦いはどうなるのか！！それを楽しみにして貰えると嬉しいです！！
それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第８５話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！夜天の守護者の最新話の投稿です！！今回は予定では、番外編との同時更新でしたが無理だったので、ＯＧとの同時更新にしました！！ですのでＯＧの方も見てくれると嬉しいです！！

そして今回はバトルを多めにして見ました・・バトルは苦手なので、改善点などを教えてもらえると嬉しいです！！それでは本編始まります

# 第８５話

第８５話

ガキーンッ！！！

私の剣とハーティーンの剣が追突する・・私達は弾かれた様に後方に跳び再び間合いを計る・・

ジリ・・ジリ・・

お互いにゆっくりと間合いを計る・・私とハーティーンの実力はほぼ互角と言った所だ・・私がそんな事を考えながら間合いを取っているとと

「来ないなら・・こちらから行くぞッ！！」

ハーティーンが痺れを切らしたのか突撃してくる

ビュンッ！！

鋭い風を切る音と共に迫る、ダガーをバックステップで後ろに跳びながら回避し、反撃にと上段から剣を振り下ろすが

「無駄だッ！！」

左手のダガーで私の攻撃を受け止め、そのまま右手のダガーが胴に向かって振るわれる

「！！」

即座に地を蹴り、バク転をしその攻撃を回避するが・・

カランッ・・

騎士甲冑の一部が音を立てて地に落ちる・・

（完全な回避は無理だったか・・それにしても強い・・）

剣を構え直しながらハーティーンを見る

「・・・・」

ダガーを油断無く構えるその姿はまったくの自然体だが・・隙は全く無い・・

（手加減をしていて勝てる相手ではないか・・仕方ない・・本気で行くとするか・・）

私は本気で行くと決め、剣をハーティーンに向けながら

「ハーティーン・・お前は本当に強い・・だから・・私も本気で相手をするとしよう・・リミット解除・・」

長い間自身にかけていた、リミッターを解除する・・それと同時に押さえ込んでいた魔力が解放される

ゴオオオッ！！！

凄まじい音を立てて解放された魔力が暴れまわる・・久しぶりに体が軽く感じる・・私はそんな事を考えながら体勢を低くする

「行くぞッ！！！」

ドンッ！！

一気に地を蹴り間合いを詰める

「！！！」

ハーティーンが驚きながらダガーを構えるが・・

「遅い！！」

横薙ぎの一撃を叩き込む

バキャン！！

鈍い音を立てて剣がハーティーンの甲冑に当たるが・・

（今のタイミングを外すか・・）

確実に胴を捉えたと思ったが命中してるのは篭手の部分・・あのスピードでも防ぐか・・そんな事を考えながら次々と剣を振るう

ガキン！！ガキン！！

ダガーと剣がぶつかり、火花を散らす・・信じられない事だが・・ハーティーンは私の本気に反応している

（信じられないな・・まさかここまでとは・・）

本気を出した以上直ぐに終ると思ったが・・ハーティーンは完璧に反応している・・いや・・それとは少し違う・・

（まるで私の力に反応しているようだ・・）

私と剣を交える度にハーティーンの力が上昇している・・

（まだまだ・・決着は付きそうに無いなっ！！！）

全力でハーティーン目掛け剣を振るうが

「ふっ！！」

マントを翻しその一撃を回避する・・目標を失った私の一撃はビルに命中し

ズッ・・ズズ・・・

ビルを両断する・・それを見ながらハーティーンは

「成る程な・・力を押さえ込んでいたか・・だが・・それでこそお前を倒す意味がある・・俺は貴様を倒し・・捜し求めた答えを得てみせる！！ダークネス・・スラッシュッ！！！」

両方のダガーに黒い魔力を纏わせ振るってくるハーティーンに

「はあああああッ！！」

私も同じく魔力を纏わせた一撃を繰り出す

ズガガガッ！！！

お互いの魔力がぶつかり合い、凄まじい音を立てる・・私達は弾き飛ばされた様に後ろに跳び着地と同時に

「デモンズ・・・フィスト！！！」

「ヘブンズ・・・ナックル！！！」

お互いの拳から繰り出された魔力波がお互いにお互いを消し飛ばす・・お互いの魔力波が消えると同時に

「ヴァリアブル・・・シュートッ！！」

「ブラック・・・バーストッ！！！」

お互いの手の平から収束砲が放たれ・・また相殺しあう・・

「ブレイブ・・トルネードッ！！」

「ブラック・・トルネードッ！！」

お互いに竜巻を纏い体当たりを繰り出す

ズガガガガッ！！！

お互いの竜巻がお互いを喰らい、消し飛んでいく・・お互いに纏っ

た竜巻が消えると同時に

「「ガイア・・フォースッ！！！」」

まったく同じタイミングで青い炎と黒炎の弾が放たれた・・

ドーンッ！！！

全く同じタイミングだった所為か、お互いに弾き飛ばされる

ズザザッ！！

地に後を付けながら体勢を立て直し・・ハーティーンを見る

「・・・・」

あちこち甲冑が陥没しているが、瞳に宿った闘志は消えていない・・

いや寧ろ強くなっている・・そんな事を考えていると・・

「ふんっ！！」

ハーティーンの一撃が私の手を捉え剣を弾き飛ばす

「はぁっ！！」

こっちもお返しに蹴りを放ち、ハーティーンの手からダガーを弾き

とばすが・・

「おおおっ！！！」

武器も無しに殴り掛かって来るハーティーンに

「はあああっ！！！」

こちらも拳を繰り出す、最強の守護者と最凶の騎士の戦いはまだ始まったばかりだ

「互角だ・・・」

私は龍也とハーティーンの戦いを見ながらそう呟いた・・ハーティーンの実力は本気の龍也と互角と言っても良いだろう

「玄武・・剛弾ッ！！」

「ぬんっ！！！」

お互いに魔力を込めた拳を繰り出す、次の瞬間

ドゴーンッ！！！！！

とんでもない爆風が巻き起こる・・だが2人の動きはそれで止まらずに

「羅刹・・剛鉄甲ッ！！！」

龍也がハーティーンの懐に飛び込み、体を回転させながら2発裏拳を叩き込み、魔力波を打ち込む

「ぬううっ！！」

バキャンと音を立てて拳が黒い甲冑にめり込むが・・即座に龍也の腕を掴むハーティーンは一気に龍也を引き寄せ

「おおおおおっ！！！」

全力で拳を龍也の腹に叩き込む

「ごふっ・・・」

龍也の体が九の時に曲がり、一瞬動きが硬直するそして

「吹き飛べっ！！」

龍也の腹に掌を当てると同時に漆黒の魔力が放たれ、龍也を吹っ飛ばす、その隙にハーティーンがビルに突き刺さっていたダガーを抜き放つ・・だが龍也も同じくビルに突き刺さっていた剣を抜き放ち・・２人は同時に

「蒼龍・・月牙斬ッ！！！」

「暗黒月光剣・・三日月の太刀ッ！！！」

蒼い衝撃波と漆黒の衝撃波がぶつかり、お互いにお互いを消し飛ばす

「はあああああッ！！！光刃閃ッ！！！」

龍也が蒼い魔力を纏いハーティーンに突撃する

「暗黒月光剣　新月の太刀ッ！！！」

同じ様にハーティーンも漆黒の魔力を纏い突撃する・・2人の剣がぶつかった瞬間

ドゴーンッ！！！！！！！

今まで一番凄い爆風が巻き起こった・・あれほどの一撃だ・・2人とも少なからずダメージを受けている筈だろうと思ったが・・

「・・嘘でしょ・・」

2人ともほぼ無傷で剣を振るっていた・・信じられない事だがお互いの攻撃の威力が同じで、完全に衝撃を相殺したとしか考えられなかった・・私がそのことに驚いている間も龍也とハーティーンの戦いは続いていた・・

強い・・本当に守護者は強い・・俺はダガーを振るいながらそう感じていた・・守護者の剣は鋭くそして重い・・こうして弾き飛ばすのが精一杯だ・・だが不思議と負ける気はしない・・体の中からどんどん力が沸いて来る・・まだ戦える・・まだ動ける・・体は疲労しているのに俺の体は不思議と動き続ける・・

（判る・・この戦いで・・俺は俺が何者なのか・・判る筈だッ！！）

俺は渾身の力でダガーを振りぬいた

ズバンッ！！！

ダガーは守護者の肩の甲冑を切り飛ばすが

「はあっ！！」

こちらも肩の甲冑を切り飛ばされる・・互角・・まったくの互角だ・・肩の甲冑が切り飛ばされた事で一瞬体勢を崩した俺に

「はあああっ！！！

守護者の強烈な回し蹴りが叩き込まれる

「ぐあっ！」

完全な無防備な状態で喰らってしまい、凄まじい勢いで後方に弾き飛ばされる

「くっ！！」

なんとか体勢を立て直しビルの壁を蹴り、守護者に肉薄するが・・

シュン・・・

守護者の体が消え次の瞬間

「獅子吼・・烈破ッ！！！」

俺の体の下から強烈な魔力波が打ち込まれた・・

「ぐあああああっ！！！」

ドゴンッ！！！

弾き飛ばされビルに背中からめり込む・・負ける・・勝てない・・
俺の力は守護者に届かないのか・・俺が一瞬弱気になった時・・

キラン・・・

ラグナから貰ったペンダントが光る・・

（まだだ・・まだ負けていない・・俺には・・俺には・・まだ・・
剣を握れるッ！！）

俺はビルから抜け出し、背中のバスターソードを抜き放ち・・

「守護者っ！！！これが俺の持てる最大の一撃だッ！！この一撃で
俺は貴様を倒すっ！！！」

そう叫ぶと守護者も剣を正眼に構え

「ならば・・私も全力で立ち向かうまでっ！！いざ・・真っ向勝負
っ！！！」

そう叫び返す守護者に内心感謝した・・俺は既にボロボロ・・守護
者にはまだ余力がある・・離れて砲撃を使えば楽に俺に勝てる・・
だがあえて剣での勝負に乗ってきた守護者に感謝しながら剣を上空
に向ける

「雷天・・蒼覇・・」

ズガーンッ!!!

雲から電撃が落ち俺の体に帯電する・・それと同時に体勢を低くする・・守護者の方を見ると

「・・・」

剣を鞘に戻し俺を見る守護者・・向かい打つ準備は万全か・・そんな事を考えながらすり足で近付き・・お互いの間合いに入った時

カッ!!!

ビルの上から瓦礫が落ちる・・それと同時に駆け出す

「おおおおっ!!!!」

雷を纏い守護者に迫る・・守護者も駆け出し

「届けっ!!!雲耀の速さまで!!!奥義・・斬神刀・・・雲耀の太刀ッ!!!」

俺と守護者の体が交差した・・

「「・・・・・」」

暫くお互いに交差した体勢のままだったが・・守護者が膝を着く・・

俺は守護者の方を見ながら

「ふっ・・俺の・・負けか・・」

バキンッ・・

バスターソードが砕けると同時に俺は崩れ落ちた・・

（結局答えは見つからなかったか・・・）

俺はそんな事を考えながら終わりの時を待っていた・・

ザッ・・・

守護者が俺の前に立つ・・

（捜し求めた答えが見つからなかったが悔いは無い・・俺は満足している・・）

俺は目を閉じた・・だが次の瞬間

「駄目!!お願いだから・・ハーティーンを殺さないで・・ハーティーンは優しいの・・ハーティーンは悪者じゃないの!!だから・・お願いします・・ハーティーンを殺さないで・・」

涙ながら俺を庇うラグナに守護者は

「・・・」

俺の顔の横の瓦礫に剣を突き刺した・・そして

「デクスのハーティーンは死んだ・・ここにいるのはハーティーンだ・・殺す必要はない・・そしてお前が私達とジオガディスと戦う

と言うなら・・一緒に来い・・私はお前を味方を認める」

そう言い瓦礫から剣を抜き放ち、俺から離れる守護者に

「甘いことだ・・俺がお前達を裏切るとは考えないのか？」

俺がそう言うと守護者は

「裏切ったら私はお前を殺さないといけない・・だから裏切らないで貰えるとありがたい・・」

そう笑う守護者を見ていると

「ねぇ・・ハーティーン・・八神中将に協力して・・それで私の傍にいて・・」

俺の手を握るラグナ・・俺はラグナを護りたい・・なら傍にいるのが一番良い筈・・俺はそう考え頷くと

「本当！・・良かった・・ハーティーン・・」

笑い掛けてくるラグナを見る・・そして気付いた・・ラグナの上空で剣を構えているヘルズに

「！！ラグナッ！！」

俺はラグナを突き飛ばした・・それと同時に

「がはっ・・」

ヘルズの短剣が俺を貫いた、そして俺はその場に倒れ込み意識を失った・・

「ハーティーン!!・・やだやだ・・死んじゃやだよぉっ・・」

ラグナの泣き声で俺は意識を取り戻した・・

「ラグナ・・?・・どうして泣いている?」

俺は手を上げようとするが手が動かない・・それどころから体の感覚もないゆっくりと目だけ動かし足を見る・・

「そうか・・俺は・・死ぬのか・・」

ゆっくりと足の方から粒子化している・・

「ラグナ・・ありがとう・・俺はお前のおかげで答えが見つかったのかもしれない・・」

ラグナにありがとうと言うと

「ハーティーン・・」

ラグナが俺の手を握る

「俺はきっと・・護る者が欲しかったんだ・・守護者や科学者が羨ましかったんだ・・」

そうだ・・俺は羨ましかったんだ・・護る者がいる守護者達が・・

「最後に・・最後に・・お前を護る事が出来た・・俺はそれで満足だ・・」

粒子化が胴に来る・・自然と怖くはなかった・・

「八神中将!!ハーティーンを治せないの!!このままじゃ・・ハーティーンが死んじゃうよ・・」

涙ながら守護者に詰め寄るラグナに

「無駄だ・・俺達に回復魔法は効かない・・俺達は死人なのだから・・」

俺達は仮初の命で動いているに過ぎない・・だから俺には回復魔法は使えないのだ

「でも・・このままじゃ・・死んじゃうんだよ?」

動かない手を無理して動かしラグナの頭に手を置き

「大丈夫・・俺は傍にいる・・姿は見えなくても・・お前を護ってる・・だから・・大丈夫だよ・・ラグナ・・」

俺は最後にそう言うと、俺の意識は闇に沈んだ・・

カタンッ・・・

ハーティーンが消滅し、首から下げていたペンダントがラグナの前に落ちる

「ぐす・・ハーティーン・・うう・・」

涙を流しながらラグナはそのペンダントを拾い上げる

「ぐす・・ぐす・・助けてくれて・・ありがとうございました・・私・・もう帰りますね・・」

涙を流しながら歩いて行くラグナの姿を見ていると

「龍也・・ハーティーンはもしかしたら・・操られてた騎士だったのかもしれないね・・」

フェイトが横に立ち言う・・私もそれは感じていた事だった・・ハーティーンはネクロやデクスと違い邪悪な気配はしなかった・・どこまでも誇り高い騎士だった・・

「そうかもしれない・・だがもう遅い事だ・・ハーティーンは死んだ・・最後の最後に護りたい者を護ってな・・」

敵だったが・・どこまでも気高い騎士であった・・もし敵として出会わなければ良い友になれたのかもしれない・・

「帰ろう・・はやてに報告しないといけないからな・・」

胸に募る不快感を抱えたまま、私達は六課に戻った・・異端の騎士は死んだ・・筈だった・・パンデモニウムがある渓谷の下に灰色のクリスタルがあった・・それに漆黒の粒子が吸い込まれていく・・

そして灰色のクリスタルは徐々に青い輝きを放ち始める・・・そのクリスタルの中には1人の男の姿があった・・・

第８６話に続く・・

## 第８５話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！どうでしたか？ハーティーンは一度表舞台から消えますが・・再び復活します・・もう少し先に成りますがね・・それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう、それでは失礼致します

## 第８６話（前書き）

どうも～混沌の魔法使いです！！今回はスバルメインの最新話の更新です！！新ネクロが２体登場いたします！！それと１７話を改定してみました！！龍也の父親としての面を強くしたので見てもらえると嬉しいです！！それでは本編どうぞ！！

# 第８６話

第８６話

「はぁぁ・・」

呼吸を整える・・それと同時に水色の魔力が私の体を包み込む・・
魔力を直接身に纏うこの技は精神集中にはもってこいだ・・私がベッドの上で精神を集中していると

「まだやってたの？」

ティアが髪を拭きながら呆れたように言うが

「もう少しだけ・・もう少しでコツが掴め・・ヒュン・・あっ・・
失敗か・・」

返事を返した瞬間魔力が消える・・集中が途切れてしまったからだ・・

「はぁ・・上手く行ったと思ったのに・・極光・・・」

魔力を身に纏うこの技は極光と言うらしい、限界まで高めた魔力が光り輝く事から名付けられているらしいが・・私はまだ光り輝くレベルまでは到達していない・・強いて言うなら篝火と言った所だ・・
私が落胆していると

「極光ねぇ・・それより先にやる事があるんじゃないの？」

ティアに言われて思い出す、そうだこれより先にやる事があった・・

「技のこと考えないと・・」

極光は優れた戦闘技能だ、それが何故現代に伝わっていないか？それは簡単だ・・この技には重大な欠点がある・・それは

「砲撃も直射も・・魔法が全部使えなくなる・・事か・・」

身体能力を爆発的に跳ね上げる対価に攻撃系の魔法が全部使えなくなる・・それが極光の欠点だ・・廃れて行ったのも無理も無い・・だが私には相応しい技だ・・射撃系の魔法が元々苦手な私だ・・極光は私に最も適した戦闘技法だ・・

「極神撃ね・・ちゃんと考えているよ」

極神撃？首を傾げるティアに

「極光の極に龍也さんの機神拳・・最後に撃破の撃で、極神撃だよ」

名前の由来を言うとティアは

「またまた大層な名前付けたわね・・少し大袈裟なんじゃない？」

大袈裟な名前だと言うティアに１つのＣＤを見せる

ドゴーンッ！！！

極光状態の龍也さんがビルを殴った瞬間一撃で崩れ落ちた・・

「・・・判った・・私が悪かった・・大袈裟じゃないわ・・その名前・・」

謝るティアに頷き、別のＣＤを再生していく・・全て龍也さんの格闘戦時の映像でクアットロさんが録画していた物らしいが・・動きが全て見えるため良い資料になる、私がそんな事を考えて映像を見ていると

「ふーん・・まぁ良いけど・・私は寝るから静かにしててよね・・じゃおやすみ」

自分の部屋に戻って良くティアを横目に、私は自分に合う技をピックアップしていた・・

「やっぱり拳か体当たり系だよね・・」

龍也さんの使う、玄武剛弾や足技は私には向いていない・・やはりここは機神拳か羅刹拳から技を選ぶべきだと思う・・２つとも拳を主に使った技が主体だ・・見ているだけでも参考になる・・私はその日の夜遅くまで龍也さんの映像を見ていた・・

「どうです？ルキルメス？体の調子は？」

笑いながら尋ねて来るヴェノムに

「悪くは無い・・だが本当にＬＶ４の姿がこれで変わるのか？」

醜い姿が変わるのか？と尋ねると

「その筈ですけどね・・まぁ不安なら1回進化してみては？貴方は私と同じでＬＶ３と４に自在に変化出来るんですからね」

そう言うヴェノムに頷き魔力を上昇させる・・一定値を越えた瞬間俺の体を漆黒の魔力が包み込み姿を作り変える

「・・これが新しい俺の姿か・・」

ＬＶ３の時の鎧に骨で出来た二枚の翼・・そして左腕には一回り巨大化した剣があった・・

「いや・・上手く行ってよかったです・・どうです？気分は」

気分はどうか？と尋ねるヴェノムに

「最高だ・・今なら守護者とも互角に戦える・・」

俺が握り拳を作りながら言うと、部屋の中に1体のネクロが飛び込んでくる

「ルキルメス！！進化したのかっ！？」

両腕が機械で出来た、俺より一回り大きいネクロ・・

「ライガ・・随分待たせてしまったな・・」

俺がダークマスターズに名を連ねていた時、俺の配下だった3将軍のリーダー　迅雷将　ライガに言うと

「ああ、待っていたんだ・・お前が進化する時を今か今かと待っていたのだからな・・」

俺がＬＶダウンした時３将軍も解散となった・・３将軍は下位のＬＶ４で俺はＬＶ３・・ＬＶ３に４を支配する権利が無いからだ

「ヒューガとスーガは元気か？」

他の２人の事を尋ねると

「ああ、元気だ・・お前が進化したんだ・・３将軍もこれで復活か？」

３将軍が復活か？と尋ねて来るライガに首を振り、ＬＶ３の姿に戻り

「俺にはまだやるべき事がある・・それが終ったらダークマスターズに復帰する・・それまで待っていてくれ」

進化態を変えて貰った以上、俺にはやらねばならない事があるとライガに言うと

「覚えててくれたんですね・・スバルと言う魔道師と戦ってくれると言う約束を・・」

ヴェノムが笑いながら言う

「当たり前だ、貸しは返す・・それが俺のやり方だ・・」

そう言って出撃しようとすると

「待て、俺も行く・・恐らく守護者が出てくるだろう・・お前がスバルと言う魔道師に集中できるように俺も一緒に行こう」

ライガが俺も行くと言う

「ライガ・・ああ・・頼む・・2人で行くとしよう・・」

2人で出撃すると話をしていると

「そうそう・・スバルと言う魔道師に本気を出させるためにこうしてくださいね・・」

耳打ちするヴェノムに

「俺に戦士としての誇りを捨てろと言うのか!!」

その作戦が気に食わず怒鳴ると

「ですからスバルという魔道師が本気を出したら好きに戦ってくれれば良いですから、それまでは作戦通りにしてください」

そう言うヴェノムに忌々しいが頷き、俺はライガと共にパンデモニウムを後にした・・

「市街にネクロの反応が2つ・・1つはＬＶ3、もう1つは4や」

ブリーフィングルームではやての話を聞きながら私は

「最近、頻繁に出てくるな・・何か目的でもあるのだろうか？」

最近上位のネクロが良く出てくる事に疑問を感じながら言うとはやては

「多分なのはちゃんとか私の新しい形態の偵察に来てると私は思う」

はやて達の新しいバリアジャケットの偵察・・その線が濃いか・・

私もはやてと同じ事を考えていたのでそれに頷きながら

「判った、私が出よう、スバル達とチンクとウェンディを連れて行く、フェイト達は待機していてくれ」

私はそう指示を出し出撃していった・・

「私とチンクはＬＶ４の方に回る、スバル達はＬＶ３を頼む・・ＬＶ３は強いがスバルとティアナにウェンディが居れば何とかなるだろう・・もし危険だと感じたら直ぐに下がれ・・良いな」

スバル達に指示を出し、私とチンクは先に降下して行った・・だがそれは間違いであったと後で悟る事になる・・

「来たか・・」

私とチンクの前に1体のネクロが立ち塞がる・・灰色の体に機械で出来た巨大な両腕を持ったネクロが全身に雷を纏いながら

「俺は迅雷将ライガッ！！守護者っ！！！正々堂々俺と勝負しろッ！！」

私に右腕を向けながら言うライガに

（ネクロの中にもこういう奴が居るんだな・・）

私は感心しながら騎士甲冑を展開し

「チンク、お前もスバル達の方に回れ」

チンクに言うと

「伏兵の気配も無い・・どうやら嘘は言ってないようだな・・判った・・私もスバル達と合流する・・八神負けるなよ・・」

チンくはそう言うとチンクはスバル達の方に向かって走り出した・・

「戦いとは一騎打ちこそ・・相応しい・・」

バチバチと帯電しながら言うライガに

「ネクロの中にもお前の様な者が居るんだな・・」

拳を握り締めながら言うとライガは

「俺は誇り高き闘士!!卑怯な真似はせんっ!!正々堂々力で貴様をねじ伏せてくれるっ!!」

ドンッ!!

コンクリートを砕きライガが肉薄してくるが・・

「はぁっ！！！」

真っ直ぐに向かって来たライガの拳に向かって自分の拳を繰り出す

ガキーンッ！！！！！

弾かれた様に距離を取ると・・

「はあああああっ！！」

高速で蹴りを拳を繰り出してくるライガ、その一撃は確かに重く強いが・・だが・・

（私はそれより強い一撃を貰った事がある・・この程度では私には勝てんっ！！）

脳裏に誇り高き異端の騎士の姿が浮かぶ・・あいつの拳はもっと重かった・・もっと鋭かった・・

「はあああっ！！」

繰り出された左拳に合わせて右拳でカウンターを打ち込んだ

「があっ・・・」

完璧なタイミングのクロスカウンターに一瞬よろけるライガだが・・

「エレクーゲルッ！！！！」

両肩から強烈な電撃を放射してくる・・

（直ぐに反撃して来るか・・）

余裕を持って回避すると

「ガイア・・ブレイカーッ！！！」

上段から拳を振り下ろしてくる

「くっ！！」

腕をクロスして受け止めるが

ビキッ！！

コンクリートに私の足がめり込む・・

「喰らえっ！！！」

全力の右ストレートを打ち込んでくる、だが今までの攻撃と違い大振りだ、私はスウェーで回避し

「はあああああっ！！」

がら空きの腹に拳を叩き込む

「がぁ・・・」

呻き声を上げ吹っ飛んでいくライガに

「おおおおおっ！！！」

極光を発現させる・・蒼く輝く魔力が私を包み込む

ズドンッ！！！

コンクリートを砕き一気に肉薄する

「でやあああっ！！！！」

右のボディブローでライガの体を跳ね上げる、直ぐに返しの左のボディを叩き込む

「がはっ・・」

動きの停止するライガに

「おおおおおっ！！」

連続で拳と蹴りを繰り出す

ズガガガガガッ！！！

遠くから見れば蒼い閃光が次々とライガの体を打ち抜いているように見えるだろう

ズドンッ！！

ラッシュが収まり落ちてくるライガ目掛け

「真覇・・剛掌閃ッ！！！」

全力で拳を叩き込むっ！！

「がああっ・・」

ビルを砕きながらライガが吹っ飛ぶが・・

（手応えが無い・・あの一瞬で自ら後ろに跳んだか・・）

手応えが少ない事からそこまで致命的な一撃ではなかったはずだ・・

自分の拳を見ていると

「おおおおっ！！！」

瓦礫を突き破ってライガが殴りかかってくる、その一撃を受け止めながら

（どうやら・・ＬＶ４は伊達ではないか・・・）

腹の甲冑に僅かに皹が見える程度しか、見て取れるダメージは無い・・

（まだ合流できそうに無いな・・）

私は蒼い光に包まれた右拳を見ながらそう呟いた・・

龍也がライガと戦闘している頃・・私は

「つ・・強い・・」

ルキルメスの前に膝を付いていた・・

「立て・・この程度ではないはずだ・・」

ルキルメスが立てと言う・・ルキルメスは後ろを向きながら

「お前が立たなければ・・仲間が死ぬぞ・・」

ルキルメスの見る方向にはティアとウェンディにチンクさんがいる、
3人とも漆黒のドームの中に閉じ込められている

「グラビドジオルグ・・あの中の重力は徐々に強くなっていく・・
仲間を助けたくば俺を倒すんだな・・」

冷めた目で私を見るルキルメスに

「でやあっ!!」

足払いを放つが

「遅い・・」

軽く交わされ鳩尾に拳を叩き込まれる

「がっ・・」

息が詰まる私に

「ふんっ！！」

蹴りが叩き込まれ後方に弾き飛ばされる

「げほっげほっ！！」

余りの威力に咳き込んでいると

「立て、本当に仲間が死ぬぞ・・」

私の前に立ち言うルキルメスだったが・・顔つきが変わり

「！！・・悪いが予定が変わった・・お前が本気になるまで待つつもりだったが・・そうも言ってられなくなった・・」

バチンッ！！

ルキルメスが指を鳴らすと私の体に鎖が巻きつく

「それを切れなければ・・お前の仲間は死ぬ・・」

ゴオオオオッ！！

ティア達を閉じ込めていると重力の結界が強くなっていく・・

「「「ぐぅぅ・・・」」」

それまで何とか耐えていたティア達の体が地面にめり込んでいく・・

「くっ！！」

ガチャガチャッ！！

鎖を断ち切ろうとするがビクともしない、その間もティア達の体が地面にめり込んでいく

「くそっ！！切れろっ！！！」

鎖を切ろうとするがやはり切れる気配は無い・・

（どうする？・・極光に賭けるか・・いや・・それより確実な手が・・）

戦闘機人としての力を解放する・・それが一番確実だ・・だが・・

（怖い・・なのはさん達も多分この状況もモニターしてる・・知られるのが・・拒絶されるのが怖い・・）

多分この状況を六課でもモニターしているはず・・大勢の前でこの力を使うのが怖い・・拒絶されるのが怖い・・

「「「うぅっ・・」」」

３人の声で決意する

（私は何を考えてる！！！・・仲間を助けるのが大事に決まってる！！）

目を瞑り・・戦闘機人としての力を発動させる・・私の目が緑から黄色に変わる・・そして思いっきり力を込めるが

ガチャガチャッ!!

鎖はまだ切れる気配が無い・・

（そんな・・これでも駄目なの・・もう・・私に残された手は・・戦闘機人モードでの極光だけ・・）

戦闘機人でも駄目なら極光を使うしかない・・普通に使っても駄目なのに戦闘機人状態では使えるかどうかも怪しい・・かといって戦闘機人モードを解除してたら間に合わない・・

（こうなったら・・極光に賭けるしかないっ!!!）

私は戦闘機人としての力に極光を上乗せした・・

「むっ・・遂にか・・」

ルキルメスが何かを呟くがそれどころではない

（力が暴れる!!）

戦闘機人化で上昇しているのにそれを収束しようというのだ・・そう簡単に行く訳が無い・・

（出来るはずだ!!この力を制御して・・皆を助けるんだっ!!）

私の体を水色の魔力が包み込み光り輝く、それと同時に力を込める

バキャンッ！！！

強固だった鎖が弾き跳ぶ

「はあああっ！！」

一気に肉薄しルキルメスを殴り飛ばす・・それと同時に漆黒の結界が消滅する

「「「はぁっ・・はぁっ・・」」」

肩で息をするティア達だがそれまで深刻なダメージは無さそうだ・・それに胸を撫で下ろしていると

「あれ・・バリアジャケットが・・」

バリアジャケットが変化しているのに気付く・・動きやすい白を基調とした服にナックルガードと足のすね辺りまでの甲冑・・肩にあった装甲などが無くなっているが・・

（体が軽い・・それに力が張ってくる・・これが完成形の極光・・これなら勝てるッ！！）

私が握り拳を作ると同時にルキルメスが姿を見せ

「これで・・やっと俺らしい戦い方ができる・・人質を取るなど戦士としての恥だ・・忌々しい」

舌打ちをしながら言うルキルメスは私の方を見て

「お前の全力が見たかったからと言って人質などを取って済まなかった・・だがここからは別だ・・我が名は闇の闘士　ルキルメス！！貴様に正々堂々一騎打ちを挑むっ！！」

ルキルメスはそう言うと

「うおおおっ！！！」

ルキルメスの姿を漆黒の魔力が包み込む・・それと同時にルキルメスから感じる威圧感が倍増する

（進化してるの・・ＬＶ３から４にそうは・・させないっ！！）

進化させる物かと拳を繰り出すが

パシッ！！

「焦るな・・」

極光状態の私の拳を軽々と受け止めるルキルメスの姿は、さっきよりさらに刺々しく禍々しくそしてその背には骨で出来た翼・・死神・・という表現がピッタリなルキルメスは私から距離を取り、拳を構える

「さあっ！！ここからが本当の勝負だっ！！！」

私とＬＶ４ルキルメスの真の戦いはまだ始まったばかりだ・・

第87話に続く

## 第８６話（後書き）

さて、いつもどおり戦闘シーンは前後編です、次回は決着ですが・・ルキルメスが退場するとは限りませんよ?、さて今回の登場したネクロ、ライガはデジモンクイズに参加してくれた、冥府の死神様からのアイデアです、さてさて・・ライガのモデルのデジモンは判るかな～それとルキルメスは鳴神様に命名して頂きました！！ルキルメスも当然デジモンベースの敵です、誰か判るかな～それとスバルの極光状態のモデルはスーパーロボットの１体です、これも誰か判ると凄いです！！それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう！！

# 第87話（前書き）

今回は本編と番外編の更新です！！ＯＧは今週はお休みですが必ず最後までやるので是非お付き合いください、それでは本編始まります

# 第87話

第87話

「凄い・・」

私はモニターを見ながら呟いた・・スバルが美しい水色の魔力を纏いネクロに肉薄し、次々と拳を振るう・・だがネクロもネクロだ・・その鋭い一撃を最小限の動きで回避し、左腕の剣を振り下ろす・・それは完璧なタイミングだったが・・スバルの手に・・

フォンッ・・

チンクさん達が能力を使う時に現れるのと全く同じテンプレートが浮かび

「おおおおっ！！！」

振り下ろされた剣を素手で砕く・・そしてそのままネクロを殴り弾き飛ばす・・ネクロはビルを3個ほど貫いて弾き飛んで行った・・私はその威力に驚かされたが・・それ以上に驚いた点があった・・

「スバルも・・戦闘機人・・」

スバルの手にテンプレートが浮かんでいる以上・・スバルも戦闘機人と言うことになる・・知らなかった・・スバルが戦闘機人だなんて・・私が驚いていると

「その様子ではスバルが戦闘機人とは知らなかったようですね？」

クアットロさんが笑いながら言う、私は

「知ってたんですか？スバルが戦闘機人と？」

知っていたのか？と尋ねると

「勿論ですよ～私達・・お父様達と三提督にレジアス中将・・ああそれと・・八神兄様も知ってますよ～」

からからと笑うクアットロさんに

「なぁ・・何でスバルは隠してたんや？チンクさん達が合流した時に言えば良かったやん？」

はやてちゃんが言うと・・クアットロさんは

「人は異質な者を恐れる・・人造魔道師・・戦闘機人しかり・・私達とて戦闘機人と言うのは非常に怖い・・拒絶され・・恐れられ・・化け物扱いをされる・・私達は八神兄様の役に立てれば化け物扱いでも構わない・・ですが・・普通に人に混ざって生活していたスバルにとって戦闘機人だと告白するのは恐ろしい事・・だから隠してたんですよ・・いずれ時を見て自分で話すとは言ってましたけど・・そうは言えない自体になってしまったようですし？」

試すように私達を見るクアットロさんに

「私達はそんなことで仲間を見捨てない、戦闘機人だろうが・・人造魔道師だろうが・・仲間は仲間だ」

ヴィータちゃんがクアットロさんの目を見ながら言うと

「うふふ・・流石は八神兄様の妹と言った所でしょうか・・多分そう言うと思ってましたよ・・」

からからと笑うクアットロさんの本性は判らない・・龍也さんでも探りきれないと言っていたんだ・・私達では到底判らないだろう・・笑いながらモニターを見るクアットロさんにつられ、私達もモニターに視線を戻した・・

私は拳を繰り出しながら、昨晩遅くまで見ていた龍也さんの動きを思い出していく・・極光を使っている以上、ディバインバスターやヘブンズナックルは使用不能・・・あくまでも純粋な体術でルキルメスを圧倒しなければ成らない・・だがそれは難しい相手だ

「はあああっ!!!」

剣は砕いたがルキルメスの闘志は消えない・・寧ろ強くなっていく・・どうやら素手の戦闘が本来のルキルメスの姿なのだろう・・高速で迫る漆黒の弾丸を受け流し、懐に飛び込み拳を繰り出すが・・

「甘いっ!!」

膝で私の拳を防ぎ、そのまま蹴り込んでくる・・反射的に防ぐが衝撃までは殺せず弾かれた様に後ろに飛ばされる・・私は体勢を立て直しながら・・

（やっぱり力押しじゃ駄目だ・・何とか打開策を・・）

ルキルメスの力は私より上だ・・スピードもパワーもその全てが私を上回っている・・そんな相手に力押しで勝てる訳が無い・・私がそんな事を考えていると・・

「戦場で考え事とは余裕だなッ！！・・喰らえっ・・ガイスト・・アーベントッ！！」

ルキルメスの両手足に漆黒の魔力が集まると同時に、それを私目掛けて打ち出してくる・・

「ウィングロードッ！！」

普通では回避は無理と悟り、ウィングロードで空へ逃れる・・だが私は先程のガイストアーベントが気になった・・

（あの技・・龍也さんも極光の時に似たような技を使ってた・・魔力を纏うだけじゃない・・手足に集中してインパクトの時に炸裂させる・・行けるかも知れない・・）

この土壇場の状況で私は新しい技のヒントを掴んだ・・極光だけに頼ってはいけない・・それを有効に活用するのだ・・私はそんな事を考えながら身に纏っている極光の光を足と左腕に集め・・

「でやあああっ！！」

一気にウィングロードを駆ける・・両足に極光を発動させている為その速さは今までより格段に早かった・・その速さに困惑しているルキルメスの懐に飛び込み

「極神撃・・・絶ッ！！！」

左腕に溜め込んでいた極光をゼロ距離で炸裂させる

ドォンッ！！！

砲撃を放ったような轟音が響き渡りそれと同時に

「がはぁっ・・」

ヒュンッ！！！

凄まじい勢いでルキルメスが吹っ飛んでいく・・追撃にと走り出そうとしたが・・

「つぅ・・・」

ビリビリと腕が痺れる・・折れてはいないが・・暫くは使い物にはならないだろう・・その痛みのせいで立ち止まっていると

「面白いっ！！良いぞ戦いとはこうでなければっ！！」

嬉しそうにルキルメスが瓦礫から飛び出してくる・・腹の甲冑が砕けているがそんな事は気にしないと言いたげに

「今度は・・こちらの番だっ！！プルートΣレーゲンッ！！」

骨の翼が羽ばたく度に漆黒の弾丸が浮かび上がる・・それは遠めでも判る・・ドリルの様に螺旋回転を繰り返すそれは

「行けっ！！」

ルキルメスの合図で一斉に私に降り注いだ・・

「くっ！！」

極光を完全に足だけに集め駆け出す・・直感でわかる・・あれを防ごう何て考えてはいけない・・あれは避けるしか出来ないと・・私の直感は当たった・・その弾丸はビルに当たると同時に・・

ズドンッ！！

ビルに螺旋状の穴が開く・・プロテクションもきっとあのビルの様に簡単に砕かれていただろう・・後ろを見ると・・

「居ないっ！！何処に・・ここだっ！！・・！！」

ルキルメスの姿が見えないことに困惑していると・・私の影からルキルメスが飛び出し蹴りを放ってくる

「くっ！！」

腕で防御し反撃に拳を繰り出す・・

「ぬっ・・」

お互い超接近戦で拳を繰り出し合う・・お互いに超接近戦で攻防を繰り返す・・

（駄目だ・・押し負ける・・）

ダメージを喰らっている私の方が不利・・・何とか体が動く内に・・
勝負を決めないと・・

「でやああっ！！」

ルキルメスが大振りのフックを繰り出してくる・・

（ここだっ！！）

極光を足に集めると同時に地を蹴る・・

ヒュンッ！！

「な・・き・・消えたっ！？」

完全に極光を足に集めれば・・その移動速度は魔法にも匹敵する・・
私が消えたことに困惑するルキルメスを背後から殴りつける

「ぐわぁっ！！」

面白いように吹っ飛んでいくルキルメスを後を追い駆け出す・・いや・・追い抜く・・移動速度は私の方が速いのだ・・・吹っ飛んだルキルメスを待ち構え

「極神撃・・崩！！！」

極光を纏った右足でルキルメスの頭を蹴りぬく

ドォンッ！！

さっきの極神撃絶の様に轟音が鳴り響きルキルメスは再びビルに背中からめり込んだ・・

（やったか・・）

足に激痛が走る・・絶と同様私自身にもダメージが来ているのだ・・長期戦は不利・・私にはまだ極光を完全使いこなせていないからだ・・だから決まってくれと祈る様にルキルメスのめり込んだビルを見ていると

「まだだっ！！この程度で俺の闘志は砕く事は出来んぞっ！！！」

甲冑に輝は入っている物のまだその闘志は消えていない・・やはりもっと高威力の一撃じゃないとルキルメスの意識を刈り取る事は出来そうも無い・・だが・・

（どうする・・もっと破壊力のある技・・龍也さんの技しかない・・でも使いこなせるのか？・・）

龍也さんは完全に極光をマスターしている・・だが私はまだ使えるようになったばかり・・魔力が暴発する可能性もある・・

「ブルート・・ストライクッ！！！」

私が迷っているとルキルメスが漆黒の魔力を纏い突撃してくる

（迷ってる暇は無いっ・・一か八か・・やってやるっ！！）

ゴオオオッ！！！

極光が嵐の様に渦巻き、私の手足を包み込む・・

「おおおりゃあああっ！！！」

漆黒の魔力で強化された拳打を受け止める・・腕に激痛が走る・・

だが

「でやあああっ！！！」

全力で膝蹴りを叩き込む

「がっ・・」

動きの止まったルキルメスを更に蹴り飛ばし間合いを取り・・そして・・

「行けっえええええっ！！！」

両腕の極光を龍の形に作り変え打ち込む

「がああああッ！！！」

龍が咆哮を上げルキルメスを呑みこむ・・それと同時に駆け出しルキルメス目掛け全力で拳を叩き込むっ！！

「がふっ・・」

バキャンッ！！

音を立てて私の拳がルキルメスの甲冑にめり込む、動きが完全に硬直したルキルメスに我武者羅に拳と蹴りの連打を叩き込む・・私は攻撃を繰り出しながら

（体がバラバラになりそうだ・・力が・・暴れまわってる・・）

極光が体の中で暴れ回る・・内側から壊れそうだ・・だが唇を噛み締め耐える

（龍也さん見たいに・・仲間を・・護るんだッ！！）

途切れそうになる意識を必死で繋ぎ止め

「でやあああっ！！！」

腕を上空に振り上げる

「おおおおっ！！！」

ルキルメスが叫び声を上げながら上空に吹き飛んでいく・・それに合わせて全身に極光を纏い地を蹴る・・上昇しながら極光が龍の形になっていく・・極光に動きを封じ込められているルキルメスに掌を押し付け

「真覇・・・猛撃烈破ッ！！！！」

全ての極光をゼロ距離で炸裂させた・・

「がああああっ・・」

絶叫しながら落ちていくルキルメスは背中からビルに突っ込んだ・・
私はそのビルを見ながら着地した・・その瞬間・・

ガクッ・・

足に力が入らず倒れかけるが・・

（まだ・・倒せてないかもしれない・・ここで倒れる訳には・・）

極光の光は殆ど消えている・・それに全身が悲鳴を上げる・・もう無理だ・・これ以上は動けないと全身が私に言う・・だが倒れる訳には行かない・・殆ど力の入らない拳を上げながらビルを見る・・砂煙で見えないが・・どうなっているんだ?・・ダメージはあるのか?・・不安を感じながらビルを見ていると・・

「危ない所だった・・大丈夫か?ルキルメス・・」

聞き覚えの無いネクロの声が響き、砂煙が消滅する・・そこには・・

「行き成り・・死んで貰っては困る・・」

緑色の体に両腕が魔力刃で出来たネクロと

「グルルっ・・ソノトオリダッ・・」

キメイラと似た体を持ったネクロがボロボロのルキルメスを受け止めていた・・

「ヒューガ・・スーガ・・どうして・・」

ボロボロのルキルメスが尋ねると

「俺が呼んだ・・」

灰色のネクロがルキルメスの前に立つ・・そのネクロはボロボロで肩や足には輝が入っている・・一気に敵が４体に増えた事に私が動揺していると

「大丈夫か？」

龍也さんが私の前に現れる・・私と同じで極光を発動させているのか。龍也さんの体は蒼く輝いていた・・私が龍也さんが来たこ事で安心感を得ていると

「シュゴシャ・・ショウブハ・・アズケル・・」

キメイラに似たネクロの肩から霧が放たれ、私と龍也さんの視界を隠す・・霧が晴れた頃・・ネクロ達の姿は無かった・・

「やれやれ・・取り逃がしたか・・」

そう呟く龍也さんの騎士甲冑もあっちこっち砕けている・・それだけで龍也さんの方も大変だったと判る・・私がそんな事を考えていると・・

（もう・・無理だ・・眠い・・）

視界がぶれる・・それだけではない・・足にも力が入らない・・それにとても眠い・・

「おいっ!!大丈夫か!!」

龍也さんの声を聞きながら私の意識は闇に呑まれて行った・・

医務室には私の他になのは達が居た、戦闘終了後、昏倒してしまったスバルを心配して、シャマルの診断が終るのを医務室で待っているのだ・・シャマルの診断が終るのを待っているとはやてが

「なぁ・・兄ちゃんは知ってたんやろ?・・スバルが戦闘機人やて」

そう尋ねて来るはやてに頷き

「そうだな・・知っていたよ・・スバルが戦闘機人だとな」

椅子に座りながら言うとなのはが

「何時から知ったんですか?」

何時知ったのか?と尋ねるなのは

「最初からだ・・私は最初にスバルに会ったときから知っていた」

スバルの事を話していると

「スバルが目を覚ましましたよ?」

シャマルがスバルが起きたと言うので、ベッドの方に行くと

「・・あはは・・ばれちゃったみたいですね・・私が戦闘機人だって・・・」

腕をギプスで固定しぎこちない顔で言うスバルに

「1人で良く頑張ったな・・スバル」

スバルの頭を撫でながら言うとスバルは

「えっ？・・ああ・・ルキルメスのことですか・・そうですね無我夢中でしたから・・」

訳が判らないと言う顔で返事をするスバルにデコピンをする

「痛っ！！何するんですか！！龍也さん！！」

ギプスで固定されてない方の手で額を押さえるスバルに

「何もくそも無い、何時まで落ち込んでるつもりだ、良いか前にも言ったが、私はお前を人として認めている、戦闘機人がどうとかでお前を拒絶する者はここには居ない」

スバルの目を見ながら言う、それに私の背後ではなのは達も頷いている・・スバルは私達の顔を見ながら

「えっ・・あっ・・その・・」

しどろもどろのスバルの頭をもう一度撫でると

「あ・・う・・う・・その・・ありがとう・・ございます・・ぐすっ・・」

涙を流しながら言うスバルに

「礼を言う必要は無いさ・・私達は仲間そうだろう?」

笑いながら言うとスバルは

「そ・・そうですね・・私は・・そう・・仲間・・なんですよね・・ううう・・」

遂には完全に泣き出してしまったスバルが泣き止むまで待つ・・

「さてと・・スバル・・体の調子はどうだ?」

30分後漸く泣き止んだスバルに体の調子はどうかと尋ねると

「うー何か体全体が重くて・・だるいです・・」

だるいと言うスバルの話を聞いていると、スバルは眠そうに目を擦る・・

「むっ・・そうだな・・戦闘の後だもんな・・詳しい話は明日にしよう、皆行くぞ」

なのは達を連れて医務室を出て行こうとすると

「龍也さん、おやすみなさい」

ベッドから手を振るスバルに手を振り返してから、医務室を後にした・・

第８８話に続く・・

技能解説

究極戦闘技法　極光

セレスの時代を最後に廃れていった、究極の近接格闘術、名前の由来は全身に纏った魔力が眩いばかりに輝く所からとられている。
全身を高密度の魔力が覆っている為、攻撃力、防御力、素早さ、その全てが大幅に上昇するが、その代償として攻撃魔法の全てが使用出来なくなるという欠点がある、廃れていったのはこれが原因だと考えられる、また極光の光は獣や龍の形に作り変え打ち込むことが可能、現在使用可能者は　スバルと龍也のみである

スバル極光発動状態

発動と同時に赤の重厚なデザインの騎士甲冑から、白を基調としたバリアジャケットに変化する、見た目では防御力が下がっているように見えるが極光のおかげで寧ろ上昇している、動きやすさに重点を置き格闘戦にその真価を発揮する、ＩＳと極光の同時使用で攻撃力なら龍也を上回るが、使いこなせてない分自分にもダメージが来てしまうという弱点があるが、それは時間と共に解決されるので特に問題ではない

## 第87話（後書き）

次回はインターバルなので少し短いですが、宜しくお願いします！！
それと次回の更新はネクロの詳細も紹介しますので宜しくお願いします

それでは次回の更新か活動報告でお会い致しましょう

## 第８８話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！

少々遅くなりましたが最新話の公開です！！今回は予告どおりインターバルなので少し短めです・・次回はかなり盛り上がると思うので次回を楽しみにしていてください！！

それでは本編始まります

# 第８８話

第８８話

「うー良く寝た・・」

私はベッドの中でそう呟いた・・普段なら直ぐに顔を洗いに行くのだが、左腕と右足が痛くベッドから抜け出す事が出来ない・・せっかくだからもう1寝入りしようと布団を被り直そうとした時

「あら?お兄さんどうしたんですか?こんなに朝早くから・・」

シャマル先生の声が聞こえる・・だがそれ以上に気になる単語があった・・

（お兄さん?・・シャマル先生のお兄さんは・・龍也さん!?・・）

起きたばかりなので理解するまで数秒掛かった・・私が混乱していると

「何だ・・起きてたのか・・」

!!声の聞こえた方を見ると龍也さんが居た・・

「ふむ?どうした・・顔が赤いが?」

龍也さんが尋ねて来る・・私は自由に動く右腕を振りながら

「大丈夫です!!なんでもないですからっ!!」

そう言うと龍也さんは頷きながら椅子に腰掛け、ギプスで固定された左腕を見て

「相当リバウンドが来てる様だな・・まぁ無理もない極光を全開にすれば、まだ使いこなせてない分体にダメージが来るのは当然だな」

淡々と語る龍也さんに

「その・・完全に使いこなせれば体に影響はないんですか?」

使うたびに行動不能になっては意味がない・・だから完全にマスターすれば影響は無いのか?と尋ねると

「そうだな・・完全にマスターできればその不安は無くなるが・・そう簡単にはマスターは出来ないだろな・・私でも二ヶ月掛かったし・・」

龍也さんで二ヶ月なら、私ならその倍近い時間が掛かると思った・・

「まぁ・・リバウンドを減らしたいなら、体を鍛える事だな・・ある程度はそれで抑えられる・・」

そういう龍也さんの言葉を聞きながら

(そうか・・体を鍛えれば良いのか・・うん・・それなら1人でも大丈夫だね・・)

龍也さんに1から全部教えて貰っては後が怖い、ティアとか・・部隊長とか・・セッテとか・・ヴィータさんとか・・でも筋トレなら

1人でも大丈夫だなと考えていると

「お兄さん、車椅子はこれで良いですか？」

シャマル先生が車椅子を持ってくる

「ありがとうシャマル、さてと・・」

龍也さんは何事も無いように私を抱え上げる・・一瞬思考が停止した・・だが直ぐに再起動し

「龍也さんっ！？・・降ろしてくださいっ！！」

ぱたぱたと暴れるが、龍也さんはそれを無視して

「大人しくしてろ、どの道暫くは禄に動けんのだ、大人しく車椅子に乗っていろ」

そう言って私を車椅子に座らせて、龍也さんは車椅子を押しながら医務室を後にした・・その後部隊長達に遭遇し、凄まじく冷たい目で睨まれたのは言うまでも無いだろう・・

スバルがはやてに睨まれ冷や汗を流している頃・・天雷の遺跡に居るジェイルは・・

「ん？・・こんな所に隠し扉が・・」

私は剣帝と神王の事を調べていた・・そして見つけた・・遺跡の最深部に続く隠し扉を

「あると思っていたが・・ビンゴだな・・」

こういう遺跡には隠された物がある・・それがある筈だと探し続け漸く見つけた・・黒く広がる闇を見据え私はその通路に足を踏み入れた・・奥にあったのは二枚の石碑・・私の背丈の3倍近い石版にはびっしりと古代文字が刻まれていた・・

「・・これは・・何だ・・今まで見たことが無い・・」

神王とジオガディスの伝承かと思ったが・・違う・・今まで見た事が無いこの伝承に疑問を感じながら翻訳していく

「私は・・何という過ちを犯してしまったのだ・・幾らこの長き戦争を終らせる為とは言え・・私はなんと言う物を創ったのだ・・」

どうやらこの石碑を作った人物は酷く後悔しながら刻んだのだろう・・私はそんな事を感じながら翻訳を続ける

「私は争いを終らせる為に魔獣を作り上げた・・あらゆる魔力を吸収し無限に進化する魔獣だ・・こいつがいれば全てが終るはずだった・・だが想定外の出来事が起きた・・魔獣が暴走してしまったのだ・・理由は恐らく限界以上の魔力を吸収してしまったからだろう・・無である筈の魔獣は・・悪となり全ての王国を滅ぼそうと動き始めた・・」

ここで一枚目の石版は終っていた・・私はもう1つの石版も続けて翻訳を始めた・・

「魔獣の存在は全ての王国に対する脅威となり、聖王の下に全ての王国の王達が協力し魔獣に挑んだ・・だが・・聖王達でも魔獣を倒す事は出来なかった・・そして次々と王国が滅んでいく、残った国が１２になった時・・１人の王がただ１人で魔獣に挑んだ・・王はボロボロになりながらある禁呪を用い魔獣を己の身に封じ込んだ・・これにより魔獣は消えた・・ここで途切れてる・・どういう事だ・・」

この石碑では魔獣が消えた所で終っている・・

「他にも隠し部屋があるかもしれんな・・・そこにこの石碑の続きがあるかもしれない・・」

魔獣の存在がどうしても気になり・・私は再び遺跡内の捜索を開始した

「パパ、パパっ！遊ぼっ！！」

部屋で書類整理をしているとヴィヴィオが笑いながら部屋に入ってくる、私は書類整理をしている手を休め

「おいで、ヴィヴィオ」

手招きしヴィヴィオを呼び寄せ、膝の上に座らせる

「んふふ～パパ大～好きっ！」

笑いながら言うヴィヴィオの頭を撫でていると

「お兄様～休憩中ですか～」

リィンと

「兄、またお菓子を作ってみたんだぜ～」

アギトがそれぞれお盆にお菓子を載せて来る、最近2人はお菓子作りに凝っているのだ

「それは・・ありがとう・・どうせだから皆でお茶にしようか」

甘いものは苦手だが折角、リィンとアギトが作ってくれたのだ食べない訳には行かない・・それにもう直ぐ3時だ・・おやつには丁度良いと判断し、人数分のお茶を淹れる、リィン達は砂糖を入れ甘くしてある

「「「頂きます」」」

お茶を淹れ終り椅子に座るとリィン達がお菓子を食べ始める・・その姿は見た目通り子供で見ているだけ幸せな気分になる・・私が紅茶を飲みながらそんな事を考えていると

「はいっ！！パパの分だよっ！！」

ヴィヴィオがクッキーを1つ差し出してくる

「ああ、ありがとう貰うとするよ」

手渡されたクッキーを齧る・・甘い・・だが2人が私の為に作ってくれたのだ・・それだけでとても嬉しいし美味しいと感じる・・私がクッキーを食べながらそんな事を考えていると

「「・・・・・」」

リィンとアギトが私の顔をジーッと見ている・・多分感想が聞きたいのだろう・・私はそう判断し

「美味しいよ」

笑いながら2人の頭を撫でると、2人はとても嬉しそうに笑い

「良かったです～リィン達は・・お兄様みたいにお菓子作りが上手じゃないですから不安だったですよ」

安心したというリィンに

「大丈夫さ、美味しいから自信を持つと良いよ」

頭を撫でながら言うと

「はいですっ！！今度はケーキを作ってみたいです！！」

笑いながら言うリィンに

「そうだ・・前にりんごを沢山貰ってな、折角だからアップルパイでも作ろうか？」

前にアップルパイを作ろうと思っていた・・折角だから2人に作り方を教えてやろうと思い言うと

「作るですっ！！」

「教えてくれよっ！！」

作ると言う頷く2人を見ながら、前にお見舞いに貰ったりんごを取り出し、2人と一緒にアップルパイを作り始める

「まずはりんごの皮を剥くんだ・・」

リィンとアギトにもりんごを渡し皮を剥いていく

「よいしょ・・よいしょ・・」

「あり・・切れちまった・・」

リィンはかなり実を抉ってしまっているがとりあえず剥けてはいる・・アギトは皮を途中で切ってしまいながらも器用に皮を剥いている

「皮を剥き終わったら、りんごを切って・・真ん中の芯を取ると・・」

見本を見せると2人も同じ様にりんごを切っていく・・

「次に鍋にバターを入れて、そこに切ったりんごと砂糖を入れて煮込む・・これで中身が出来ると・・アギト頑張れよ」

アギトが鍋の中身を覗き込みながら焦げないようにかき回して行く・

・アギトは混ぜながら

「なぁ、兄これでどれくらいパイが作れるんだ？・・見た感じかなり量があるけど・・」

大きな鍋一杯に入ったりんごに苦戦しながら尋ねて来るアギトに

「そうだな・・６個は作れるな・・さてアギトが中身を作ってくれてる間に生地を作ろうか」

リィンに教えながらパイ生地を作っていく・・６個分だからかなりの重作業だ・・私は平気だが・・リィンは・・

「はぁ・・はぁ・・大変ですぅ・・でも頑張るです」

リィンは苦戦しながらパイ生地をこねている・・

「出来た～疲れた～」

アギトがりんごジャムを作り終えたと同時に私達も生地作りが終った

「これでパイが作れるですか？」

ジャムと生地を見ながら尋ねるリィンに

「残念だがパイ生地は寝かさせなければならない、パイは明日になるな・・」

リィンとアギトに言うと

「そうなんですか・・パイ作りは大変なんですね～」

「うー思ったより大変なんだな～」

しみじみと呟くリィンとアギトに

「明日またおいで、明日パイを完成させて皆に配ろうな・・さっご飯にしようか」

パイと同時進行で作っておいた夕食を食べさしてから、2人を部屋に返した・・リビングを見ると

「こっくり・・こっくり・・」

お腹が一杯になったせいか、ソファーに座り眠っているヴィヴィオを抱き上げると

「ん・・・パパ・・？」

目を擦りながら尋ねて来るヴィヴィオに

「さっ・・もう寝ような・・ヴィヴィオ」

ヴィヴィオを連れて寝室に行き、私も少し早いが寝る事にした・・

次の日・・

私が朝食を作っていると

「パパ～」

ヴィヴィオが後ろから抱き付いてくる

「ん？起きたのかヴィヴィオ、もう直ぐ出来るからな、座って待ってなさい」

頭を撫でながら言うと

「うん！！ヴィヴィオ待ってる！！」

ぬいぐるみを抱き抱えリビングに戻ったヴィヴィオを見ながらフライパンを振るった・・うん良い焼き具合だ・・私はフライパンの中のオムレツを見ながら笑みを零した

「ご馳走様でした～」

にこにこと笑うヴィヴィオに笑みを浮かべながら、食後のお茶を飲んでいると

「お兄様！！パイを完成させましょう！！」

「頑張るぜ～」

リィンとアギトがパイを作ろう、と言って来る

「そうだな・・では早速作ろうか」

今から作って、冷やせば昼食の後にデザートとして出せる、時間的には丁度良いと判断しエプロンとバンダナを身に付け、キッチンに入る

「まずはパイの型に昨日作った生地を入れて・・ここにジャムを入れて・・作った生地を短冊に切って・・×字に交互に編んでいって・・溶かしバターを塗って・・オーブンで焼くと・・これでアップルパイの完成だ」

オーブンにパイを入れて時間をセットし、キッチンから出て焼きあがるのを待つ・・

チーンッ！！

タイマーが鳴る、私は微笑みながら立ち上がりオーブンから焼きたてのパイを取り出す

「うわぁ・・美味しそうです・・」

「本当だ・・美味そうだな・・」

リィンとアギトがキラキラとした目でパイを見ながら呟く、私は小さくパイを切り3人の前に置く

「食べて良いですか？」

首を傾げながら尋ねる、リィンに

「まだ焼けるんだ・・少し位食べても問題ないさ・・今お茶を淹れて来よう」

ヴィヴィオ達に紅茶を淹れ様と思い立ちあがると

「お父さん、ちょっと良いですか？・良い匂いですなんですか？」

「お父さん・・何か作ったんですか？」

「龍也・・遊びに来たよ・・」

エリオ達が入って来て、良い匂いだと笑い何か？と尋ねて来る

「丁度良い所に・・今なアップルパイが焼き上がった所だ、リビングに入って食べておいで、ヴィヴィオ達も食べてるから」

食べておいでと笑いながら言うと、エリオ達は笑いながらリビング向かった・・私はエリオ達の後姿を見ながら

「やはり子供だな・・甘い物は大好きと言う所か・・」

私はそんな事を考えながら人数分の紅茶を用意していた・・その間リビングから聞こえてくる楽しげな、エリオ達の声が妙に嬉しかった・・そして改めて感じた・・この平和な時こそが・・私が護りたい物なのだと・・

第８９話に続く

## 第８８話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！さてさて・・新しい敵へのフラグ・・これが何を意味するのか！！もう少し続いたらラストに向け話が進んで行きます！！まだまだラストまで間があります、まだまだ色々イベントがあるんですよね・・リアルに１００話を越えそうですが是非最後までお付き合いください・・それでは失礼致します

## 第８９話（前書き）

今回は少しギャグが強いと思います、アンケートで決めた龍也を追い詰める人物とは?・・まあ判っていると思いますが・・宜しくお願いします、それでは本編はじまります!!

# 第８９話

第８９話

「お～い、クイント？・・クイント何処だ～おかしいな・・あんまり出歩くなって言っといたんだけどな・・」

俺は自宅にクイントの姿が見えないことに疑問を感じていると・・

「ん？なんだこりゃ？」

机の上に手紙が置いてあるのを見つけそれに目を通す内容は・・

『あんまり暇なので、龍也をからかいに行って来ます。お昼は机の上なので温めて食べてください、　クイント・・』

要約するとこんな感じだ、俺はその手紙を読んだ瞬間・・窓から空を見上げて

（すまねぇ龍也・・今度何か奢るから勘弁してくれよ・・）

恐らく酷い目に会うであろう龍也に心の中で謝っていた・・

「何だ？・・急に寒気が・・風邪か？」

食堂で皆で昼食を食べている頃、急な寒気を感じ首を傾げていると・
・

「風邪ですか？兄上？」

向かい側に座るシグナムが風邪かと尋ねて来る、私は

「いや・・そうではないと思うんだが・・」

風邪かどうかと話をしていると、食堂に1人の女性が入ってくる・・
その女性は私達を見つけると

「やっほー、龍也遊びに来たわよ～」

・・馬鹿な・・どうして・・ここにクイントさんが・・いや・・そ
んな事を考えてる場合では無い・・まず私がすべき事は・・膝の上
のヴィヴィオを降ろす・・それと同時に走り出す・・だが

「嫌ねえ・・人の顔を見るなり逃げるんて・・えいっ」

クイントさんが何かを投げると同時にそれは私の手足に絡みつき、
私はその場に顔面から倒れ込んだ・・

「へぶっ・・」

結構スピードが出ていたので私は変な声を上げながら食堂の床にダ
イブした・・その背後からゆっくりと近付いてくる足音を感じ

（今日は・・厄日か・・）

心の中でそう呟いた・・

「まったく・・人の顔を見るなり逃げるなんて酷いと思わない？」

私を椅子にバインドでグルグル巻きにした（クイントさんは魔法を使えないので、ノーヴェにやらした）クイントさんはその背後にいるはやて達に酷いと思わないか？と尋ねる・・すると

「そりゃ・・酷いと思いますけど・・なんでバインドまでする必要があるんです？」

はやてがそう言うと、なのは達も同意見なのか頷く・・するとクイントさんは笑いながら

「そうでも無いと思うけどねぇ・・まぁ・・良いわ・・龍也は捕まえたし・・今日はね皆に面白い物を見せてあげようと思って良い物持って来たのよ」

ポケットから何かのＣＤを取り出すクイントさんはおかしそうに笑っている・・それに嫌な予感がし

「あの・・クイントさん？・・それなんですか？」

嫌な予感がする物の勇気を出して尋ねると

「これ？・・これはわね～龍也を追い詰める物よ」

笑いながら言うクイントさんを見て・・

「放して下さい！！お願いしますから！！」

バインドを破壊しようともがくが壊れる気配が無い・・おかしい・・
ノーヴェのバインドなら破壊出来る筈なのに・・そんな事を考えながらもがいていると・・

「それにしても・・これ凄いわね～スカリエッティが作った、龍也の魔力を分散させるこの機械・・」

そう笑うクイントさんの説明を聞き・・

（あの大馬鹿者が・・今度あったら・・覚えて置けよ・・）

遺跡にいるであろう馬鹿に必ず報復してやると決意していた・・

「さー・・これはかなり面白いわよ～」

そう笑いながらクイントさんがＣＤを再生する・・直ぐに映し出された物は・・

「それでは・・知り合いの中で外見が好みな人を三人上げてください」

！！これは・・あの時のっ！！！スバルをクイントさんに再会させる時にあった・・会話！！！私が動揺していると・・

「クイントさん！！・・これ何時の映像ですかっ！！」

フェイトがクイントさんに詰め寄りながら尋ねると、クイントさんは

「ふふふ・・これわね・・スカリエッティがまだ追われてる時の・・

と言っても・・そんなに前の事じゃないわよ」

そう笑うクイントさんを見ながら全力でバインドを破壊しようとも
がいている中、映像が切り替わり

「外見か・・私はそういうのは余り気にしないんだが。敢えて言う
なら・・・」

不味い・・不味い・・早く早く・・破壊しなければ・・私が1人焦
ってる中・・はやて達は興味津々と言う表情でモニターを見ている・
・その中映像の私が・・

「ティアナと・・ノーヴェ・・其れに・・なのはか?」

ああ～・・遅かった・・バインドを破壊出来なかったか・・その絶
望感に打ちひしがれてる頃・・食堂の一角では・・

「「やった・・私の・・私の名前が出たよ・・」」

握り拳を作り・・喜びを全身で表しているなのはとティアナに・・

「へへ・・2度目でもやっぱ・・嬉しいや・・」

ノーヴェがへへ・・と嬉しそうに笑い・・

「「呼ばれなかった・・呼ばれなかった・・嘘だ・・」」

ヴィータとシグナムが項垂れている中・・再び映像が切り替わり、
今度はクイントさんが映り

「ふん、ふん、此れは以外ね。なのはちゃんの名前が出るとはじゃあ理由は？」

理由・・その言葉に

「「「・・そうだよ・・理由だよ・・理由だ・・理由が一番大事だよな・・」」」

理由・・その言葉に復帰した、シグナム達と

「はは・・何か複雑かな・・」

内容を知っているスバルとチンク達は複雑な表情を浮かべている・・その中私はまだバインドを破壊しようともがいていた・・

「なのはと言うか3人共なんですが・・放って置くと無茶しそうで気になるんですよ・・そういえばスバルもですけど」

その理由を聞いた、なのはとティアナは

「「無茶しそう？・・可愛いとか・・性格が良いとかじゃなくて・・そっち・・？」」

さっきまでと違い落ち込み始めた、なのはとティアナに

「「「そうだ・・そうだよ・・無茶しそうで気になる・・って事に決まってるんだ・・そうに決まってる・・」」」

ぶつぶつと呟く、ヴィータとシグナムにフェイト・・その間に再び映像が変わり

「それじゃあ、一緒にいて楽しいのは誰?あっ!此れも3人ね」

2度目の質問に顔色が変わる面々・・

「「そうだよ・・これで・・これで呼ばれれば良いんだよ・・一緒に居て楽しい・・それが一番大事なんだよ・・」」

まだ希望はあると言いたげなシグナム達がモニターを見た瞬間

「・・・はやてとチンク・・・それにセッテ」

映像の私がそう言うと

「おしっ!!私が呼ばれたで!!・・病み娘が呼ばれたのは癪やけど・・まぁ良いわ・・」

笑いながら言うはやてと・・

「癪なのはこっちですよ・・豆狸・・」

ぶつぶつと不機嫌オーラを撒き散らすセッテ・・それに

「ああ・・あう・・」

真っ赤になりオーバーヒート寸前のチンク・・

「「「やっぱり・・呼ばれなかった・・呼ばれなかった・・」」」

絶望状態のヴィータとシグナムにフェイト達・・食堂の中が混沌と

してきた中・・

「もし彼女にするなら誰？この中でね」

最後の映像に切り替わった瞬間

「「それだっ！！その答えが聞きたいんだっ！！」」

絶望状態から復帰したヴィータとシグナムにフェイト達・・そのほかの面々がモニターに注目している中最後の映像に切り替わった

「クイントさん流石にそれは無理ですよ、だって今までそんな事を考えたこと無いですから」

ピシリ・・世界が音を立てて凍結した所で映像は終った・・

「さて・・前は考えた事が無いで終わりました・・なので今回は真面目に彼女について・・」

クイントさんがそう言い掛けた瞬間

「ふんっ！！」

これ以上さらし者になるつもりは無く全力でバインドを打ち砕き、そのまま全力で走り出すと

「ああっ！！逃げた！！」

そう叫ぶクイントさんの声を聞きながら、私は全力で走り続けその日クイントさんが帰るまで隠れ続けていた・・

「むぅ・・隠れてもうたか・・」

私は兄ちゃんを探すのを諦め食堂まで戻って来ていた・・

「兄ちゃんはシャイやし・・これ以上からかったら可哀想やしね・・」

兄ちゃんが本気で隠れてる以上、恐らく私達では見つけられない・・

兄ちゃんのスキルの中には「気配完全遮断」と「隠れ身（ＳＳＳ）」

がある・・この２つを使われたらたとえ目の前に居ても兄ちゃんを

認識できないのだ・・私がそんな事を考えていると

「「見つけられないよ・・」」

続々と兄ちゃんを探しに行っていたメンバーが戻ってくるので

「なぁ・・あんま兄ちゃんからかうの勘弁したってや・・兄ちゃん

シャイやから隠れて本当に出て来んくなるで」

私が言うと

「うん・・判ってる・・ちょっと・・調子に乗りすぎちゃったって・

・判ってるよ」

そう笑い椅子に座るなのはちゃんを見ていると・・気付く

「あれ？クイントさんは？もう帰ったんか？」

姿の見えないクイントさんの事をスバルに尋ねると

「ああ・・お母さんならさっき帰りましたよ・・あんまりからかい過ぎたから謝っといて、って言ってましたよ」

その説明に頷いていると、セッテが

「でも・・あの龍也様は可愛かったです・・」

思い出したように言うセッテに

「うん・・凄い・・可愛かったと思うよ・・」

フェイトちゃんが賛同する・・映像が流れてる間の兄ちゃんは酷く可愛いと思った・・普段の堂々とした感じが無く・・耳まで真っ赤で俯いていた兄ちゃんはとても可愛いと思ったのは私だけではなかったのだ

「ああ・・あの兄貴は・・可愛かったな～」

ヴィータも可愛かったな～と言う・・だが

「ん～でもあんまり可愛い、可愛い、言うと兄ちゃん本当に隠れて出て来なくなるでこの話はこれ位にしといて・・兄ちゃんとアギト達が作ってくれた、アップルパイでも食べよう」

食堂の机の上に置いてある、アップルパイを指差し言うと

「そうだね・・折角龍也とアギト達が作ってくれたのに食べないなんて勿体無いよね」

そう笑うフェイトちゃん達と一緒に美味しいアップルパイに舌鼓を打っている頃・・

「ちっ・・先にスバルが極光に辿りつくなんてよ・・冗談じゃないぜ・・」

私は1人演習場に居た・・眼を閉じ魔力を身に纏い始めるが・・直ぐに消える

「くそ・・私の方が早く龍也に教えて貰ってるのに・・なんで出来ないんだよ・・」

私は悔しくてそう呟いた・・私の方がスバルより早く教わっているのに・・私はまだ満足に発動させることが出来ない・・確かに発動は出来る・・だがそれだけ・・とても発動させたまま戦うなんて事は出来ない・・

「くそ・・追い付かれる所か追い抜かれちまったよ・・」

格闘戦の技能では私が上だろう・・だが私が使えない極光をスバルが使えると言う所が酷く私を追い詰める・・私が1人で演習場で練習していると

「駄目だな・・それではいくらやっても極光には辿りつけん・・」

その声に驚き振り返るとそこには・ふわりとした銀髪に蒼い瞳の女・
・

「セレス・・あんたかよ・・珍しいな・・あんたが龍也以外に話しかけるなんてよ・・それより私が極光に辿りつけないってどういう意味だよ」

セレスは基本的に他人と会話をしない・・それ所か基本的には姿を隠している・・そのセレスが私に話しかけてきた・・それに驚きながら尋ねると

「己の得意な事を封じて、訓練したところで真の高みには辿りつけんと言っているのだ・・」

ふわりと私の前に着地したセレスは鋭い眼光で

「お前は拳を使った戦闘スタイルより、足を使った方が得意だ・・それなのに拳を使う・・姿だけを真似しても王の様にはなれん」

図星だ・・私は元より足技の方が得意・・それなのに拳を使う理由は龍也みたいになりたいから・・私が言葉に詰まっていると

「まぁ・・悪いとは言わん・・拳を鍛えるのも大事だ・・だがそれ以上に自分の得意な事を伸ばす方が大事だぞ?」

諭すように言うセレスに

「でもよ・・私の周りには足技が得意な奴が居ないんだけどよ・・」

私の周りには足技が得意な者は居ないと言うと

「確かにな・・だが・・私を忘れてないか？」

そう笑いセレスは足を上げ

「羅刹刃・・」

ビュンッ！！

足の爪先から濃紺の魔力刃が放たれる・・私はそれを見て

「まさか・・あんたが・・私に教えてくれるのか？」

技を教えてくれるのか？と尋ねると

「教えるというのは少し違う・・自分の体で・・目で覚えろ・・それが出来なければ・・お前は置いて行かれるだけだ・・」

そう言いながら足技の見本を見せてくれるセレスの動きを慌ててデバイスに記録する・・この日からセレスと奇妙な訓練が深夜にひっそりと行われるようになった・・

ノーヴェとセレスの訓練中・・ベルカ聖王教会の地下では・・カリムが居た・・彼女は・・

「・・これは本当にロストギア何でしょうか・・」

私は聖王教会に安置されている、１つの石像を見上げながら呟いた・

・かなり前の時代・・空白の時代の存在を物語る、唯一の証拠・・空白の時代に存在したと言われた、デバイスらしいのだが・・どう見てもデバイスには見えない・・これはどう見ても石像だ・・

「これが剣帝のデバイス・・でもこれの何処がデバイス何でしょう？」

唯一教会に記された空白の時代の伝承とその時代のデバイス・・

「龍の石像・・いくら見ても私には判りませんね・・今度スカリエッティにでも解析して貰いましょうか・・」

私が子供の頃からここに安置されている、龍の石像から視線を外し、その隣の伝承を読む

「闇を扱いし、究極の騎士は・・神王により封印され、再び蘇る魔王の抑止力となった・・」

子供の頃から聞かされていたこれが本当の事だと知ったのはつい最近の事・・そしてこの場所に足を踏み入れるのも本当に久しぶりだ

「彼の者は蒼き棺の中で眠り続ける・・再び必要とされるその時まで・・」

これが教会に伝わる、剣帝の伝承だ・・書物庫を調べ続けて、見つけた唯ひとつの手がかりがこれ・・

「これでははやてに報告出来ませんね・・」

はやてにこの伝承の中身を教えても意味が無い・・彼女が欲しいの

は自分の兄が死なないと言う確かな情報だ・・

「ふう・・・本当に・・最近気疲れが多いですね・・」

ネクロの事・・ジオガディスの事・・八神中将の死の予言の事・・
最近精神的に疲れるものが多すぎる・・そう呟きながら私はその場
所を後にした・・カリムの姿が消えてから数分後・・

「やれやれ・・やっと見つけましたよ・・剣帝の剣・・」

教会の地下にヘルズが姿を見せる・・彼は背中の鞘から剣を抜き放ち

「剣帝はもう居ませんが・・貴方に目覚められ守護者の力となられ
たら厄介なんですよ・・だから・・ここで消えてくださいっ!!」

その剣を石像に投げつける・・当たると思った瞬間

カッ!!

石像の目が輝きその剣を弾き飛ばす・・それを見てヘルズは・・

「成る程・・そういう事ですか・・くっくっく・・」

何かを理解したようにヘルズは呟き、次の瞬間

「はっはっ!!成る程っ!!!貴方は生きているんですねっ!!剣
帝!!」

大声でそう叫ぶとヘルズは浮き上がり

「くっくっ・・決着をつけるという私の願いは叶いそうですね・・良いでしょう・・剣帝が目覚めるその時を心待ちにするとしましょうか・・」

ヘルズは心底楽しそうに笑い闇へと消えて行った・・それと同時に石像の龍の目の光は消えて行った・・その時遠く離れた渓谷の下の、灰色のクリスタルは鮮やかな蒼色に染まりつつあった・・それが何を意味するか・・それは誰にも判らない・・

第９０話に続く

## 第８９話（後書き）

さてと・・インターバルを２つ挟んだので、次回は凄く盛り上がる話の予定です！！自分ではかなりの自信作なのでお楽しみに！！それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第９０話（前書き）

自分ではかなり盛り上がる話にしたつもりです・・ですが・・余り自信が無いので・・そこまで期待しないで貰えると気が楽です・・でもそれなりには楽しめると思うので・・宜しく御願い致します

# 第９０話

第９０話

機動六課にクイント台風が直撃した次の日、パンデモニウムの一室では

「ドライヴォルティス・・漸く貴方の出番ですよ・・」

私がそう言いながら調整槽を見上げると

ギンッ！！

閉ざされていた眼が開きドライヴォルティスが活動を始める

ドゴンッ！！ドゴンッ！！

自分の動きを封じている調整槽に拳を叩き付ける・・調整槽はドライヴォルティスの剛拳に耐える事が出来ず簡単に崩壊する・・そして自由になったドライヴォルティスは上空を見上げ

「グルル・・グオオッ！！！！！」

凄まじい雄叫びを上げる、私はその姿を見ながら

「ドライヴォルティス・・私の言う事が判りますか？」

そう尋ねると

「グルル・・」

雄叫びを上げるのを止め私を見る、ドライヴォルティスに一枚の写真を見せる

「良いですか?ドライヴォルティス貴方のターゲットはこの少女です・・この少女を見つけて殺しなさい・・良いですね?」

私がターゲットの写真を見せながら言うと

「グルゥ・・」

ドライヴォルティスは頷き、パンデモニウムから飛び出して行った・・私はその後姿を見ながら

「ドライヴォルティスに組み込んだ、ステルス能力・・上手く行っていれば守護者達に見つからず、この少女を殺す事が出来る・・」

ヴェノムの手の中には街で買い物している、ラグナの姿が写っていた・・

「また来っちゃったな・・もう・・ハーティーンは居ないのに・・」

私はハーティーンと始めてであった公園の中を歩きながら呟いた・・

私の足は自然と公園のある一角に向かう・・

「ここにあった結界も無い・・本当にハーティーンがもう居ない・・」

ハーティーンが居ない間も維持されていた結界が存在しない・・それは術者が居ない事を示す・・私は俯きながら公園の奥に向かう・・

「ここでハーティーンと話して・・空を見て・・楽しかったな・・」

何時もハーティーンが腰掛けていた、切り株の隣に座り空を見上げながら呟く・・

「無愛想で・・ぶっきらぼうで・・それでもハーティーンは優しかった・・」

思い出すように呟く・・私は空を見上げながら・・呟き続けた・・

「本当は知ってたんだ・・ハーティーンがデクスだって・・悪い存在だって知ってたんだ・・」

お兄ちゃんもハーティーンもその事を隠していたが、私は知っていた・・ハーティーンがネクロの仲間だと・・

「それでも・・私はハーティーンと一緒に居るのが楽しかった・・何時かは居なくなってしまう・・そう判ってたけど・・それでも良かった・・」

ネクロやデクスは体を維持するのに魔力が必要だと聞いていた・・私にも一応魔力適正はある・・そんなに高い訳ではないが・・でも魔力適正がある以上何時かは、ネクロ達に襲われると判っていた・・

出来るなら・・私の命を奪うのがハーティーンだったら良いなと思っていた・・だがそれは決して起きない事だ・・

「ハーティーン・・姿は見えなくても護ってくれてるんだよね・・」

ハーティーンに上げたペンダントを握り締めながら言うと、ペンダントに太陽の光が反射して輝く・・私はそれを見て笑みを零しながら・・

「はは・・まるで元気を出せって言われてるみたい・・でもそうだよね・・何時までも俯いててもしょうがないもんね・・大丈夫だよ・・私は前を向いて歩いて行けるから・・」

私はそう呟きながら振り返り、公園を後にしようとした時・・

ズドンッ!!!

まるで岩石が落ちたような音が響く・・私がゆっくりと振り返るとそこには

「グルルッ・・」

灰色の体に扇状に広がった翼を持った龍人が私を睨んでいた・・体中が警告を上げる・・逃げろっ!!速くここから逃げろと・・私はその声に従い一気に走り出した・・その瞬間

「グルル・・ウオオッ!!!」

龍が雄叫びを上げながら、宙に浮かび追い掛けて来た・・そのスピードは私より少し早い程度で遊んでいると判る・・私は走りながら・

・

（助けて・・ハーティーン・・）

もう居ない筈の騎士に助けを求めていた・・

「はぁっ・・はぁっ・・」

必死で公園から出ようと走る・・この場所は公園の一番奥で、入り口までは歩いて２０分は掛かる・・だから速くこの場所から逃れようと走る・・この場所から出る事が出来れば、八神中将達・・機動六課の魔道師達が・・お兄ちゃんが・・助けに来てくれるかもしれない・・だから私のやる事はこの公園から１秒でも速く出ることだが

「グルルッ・・」

龍が私の前に回りこみ、思うように出口に向かう事が出来ない・・この龍は適度に尻尾で私に攻撃してくる・・それは業と外しているのだろう・・私は尻尾による攻撃を交わさせて貰いながら・・

（私が疲れるまでこうやって追い回すつもりだ・・）

この龍が本気なら私はもう死んでいる・・この龍は私が疲れるまで追い回して・・私が立ち止まったらそこで殺すつもりだろう・・そんな事を考えながら必死で走っていたが

「グルォォッ！！」

遊びは終わりだと言いたげに龍が吼え、尻尾が私に迫る

「！！」

反射的にしゃがみ辛うじて回避できたが・・運動神経がお世辞にも良いとは言えない私は尻餅を着いてしまった・・

「グルル・・」

龍がゆっくりと近付いてくる・・

「あ・・あ・・」

ジリジリと後退するが直ぐに動けなくなる・・龍がその様子を見て笑いながら拳を振り上げる

「・・けて・・」

涙を零しながら私は自然と呟いた・・

「助けて・・・」

脳裏に浮かぶ・・漆黒の騎士の姿・・

「助けて・・助けてよ・・ハーティーンッ！！！」

私がそう叫ぶと同時に龍人が拳を振り被る・・私が反射的に眼を閉じた掛けた瞬間

「させ・・る・・かあああああっ！！！」

男の怒声と共に黄金の光が駆け抜ける・・それにつられて目の前の

黄金に輝くバイクに跨る男の顔を見る

「ハーティーン・・？」

好戦的な色を紫色の瞳に浮かべ・・逆立った金髪の男が居ない筈のハーティーンに思えてそう呟くと

「遅くなってすまない・・だがもう大丈夫だ・・俺がお前を護るから」

謝る男の姿に確信した・・この男・・いや・・この人は・・

「良かった・・生きてたんだね・・ハーティーン・・」

私はそう呟くと同時に意識を失った

時は少し遡る・・ラグナがドライヴォルティスに追われている頃、パンデモニウムが眠る渓谷の下では・・

（・・える・・き・・こ・・える・・だれ・・だ？・・俺を呼ぶのは・・）

俺は誰かに呼ばれる声に目を覚ました・・俺は深い闇の中に佇んでいた

「ここは・・俺は・・誰だ？」

判らない・・俺が誰なのか・・そして俺を呼ぶのが誰なのか・・俺がそんな事を考えていると

「「思い出せ・・思い出せ・・」」

俺の前に2人の男が姿を見せる、1人は漆黒のライダースーツに逆立った金髪の男・・もう1人は闇色の甲冑に紺のマントを羽織った騎士・・2人は繰り返し思い出せと言う・・だが判らない・・俺が何を忘れているのか・・それが判らないから思い出しようが無い・・俺は再び目を閉じようとした時

「・・けて・・」

聞こえる・・誰だ・・誰が俺に助けを求めてるんだ・・？

「助けて・・・」

閉じかけていた目を開く・・その間も誰かの助けを求める声が聞こえる

「助けて・・助けてよ・・ハーティーンッ！！」

その瞬間、俺の脳裏に1人の少女の笑顔が浮かび上がる・・そして凄まじい量の情報が流れ込んでくる

『それは貴方自身が見つけないと・・』

『ううん・・私じゃ判らないよ・・ハーティーン』

『でもきっと、いつか判る日が来るよ！・・ううん・・私も一緒に

考えてあげるよ！』

『んっふふ・・ハーティーンの手は暖かいね・・』

脳裏に少女と話している騎士の姿が思い浮かぶ・・

『ハーティーン、お兄ちゃんが呼んでるから私もう帰るね・・また会おうね、ハーティーンッ！！』

彼女は・・ラグナは・・俺に色んな話をしてくれた・・そうだっ！！・・思い出した・・

「お前は俺か・・」

目の前の騎士に話しかけると

「ふん・・漸く思い出したか・・そうだ・・俺はお前で・・お前は俺だ・・とっとと全てを思い出して、ラグナを助けに行け」

騎士はそう言い放つと漆黒の球体となり、俺の中に入ってくる・・その瞬間俺の両手首に龍を思わすブレスレットが現れる・・その瞬間再び俺の中に情報が流れ込んでくる

『すまない・・ルシルファー・・私ではジオガディスを倒しきる事が出来なかった・・恐らく・・遠い未来・・再び奴は蘇るだろう・・』

俺の前に真紅の服を身に纏った男と漆黒の騎士が現れる・・男はゆっくりと漆黒の騎士の前に立ち

『私はお前に過酷な運命を与えてしまう・・誰よりも私を理解してくれたお前に・・』

真紅の服に身を包む男は涙を流しながら何かを呟く、その瞬間騎士の体を青いクリスタルが包み込み始める・・騎士はゆっくりとクリスタルに飲み込まれながら

『気にするな・・俺はこうなる事を判っていた・・だからお前が気に病む事はない・・』

そう笑う騎士に男は

『すまない・・本当にすまない・・ルシルファー・・我が生涯の親友よ・・』

騎士は最後にもう1度微笑み、クリスタルの中に完全に飲み込まれた・・その瞬間・・閉ざされていた記憶の扉が完全に開いた・・そうだ・・俺は・・蘇るジオガディスのカウンターとして、神王によって体を封印された・・そして目覚める前にヘルズ、ヴェノムによって洗脳され・・ハーティーンなり・・ジオガディスの為に戦った・・俺は全ての記憶を取り戻した・・俺の本当の名は・・

「漸く、思い出したか・・」

話しかける男・・いや・・俺自身に・・

「ああ・・今全てを思い出した・・俺は俺の名は・・ルシルファー・・ルシルファーシャッカス・・かつて剣帝と呼ばれ・・神王と共に戦いし騎士が1人・・」

俺がそう言うと目の前の俺は満足気に頷き

「そうだ・・だが・・お前はルシルファーであり、ルシルファーでは無い・・」

そう判っている・・俺の中にはハーティーンとしての記憶もある、この地点でもう俺はルシルファーでは無いのだ・・良く考えると目の前の俺自身とは口調が少し違う・・おそらくハーティーンとしての部分が強いからだと思う

「そうだな・・俺はもうお前ではない・・俺はまったく別の人間だ」

俺がそう言うと

「そうだ、俺とお前は既に別人・・護りたい者も願いも違う・・だからこそ・・だからこそお前はまた歩いていける・・立ち止まるな・・進み続けろ・・さすれば道は開かれん・・」

男はそう言い残し徐々に足から粒子となり俺の中に吸い込まれ消えた・・その瞬間漆黒の世界に急速に色が入る・・そして俺は

「う・・ウォオオッ!!!」

俺の体を封じているクリスタルを力任せに破壊する

「・・ラグナ・・今行く・・ネガティブゲイト」

漆黒のゲートを作り出すそして

「グレイダルファー・・モードビークル・・」

左手首のブレスレットが消え、俺の前に黄金のバイクが現れる、俺はバイクに跨り漆黒のゲートの中へ飛び込んだ・・

バイクのエグゾースト音を聞きながら街の中を走る、暫く走ると俺の前に魔道師が現れ何かを言うが・・

「邪魔を・・するなあああっ!!!」

バウンッ!!

バイクを跳ね上げ、その魔道師を飛び越える・・もっと・・もっと速く・・あの場所へ・・ラグナのいる場所は判っている・・俺とラグナが始めてあったあの場所にいるはずだ・・ただそれだけを考えバイクを走らせる・・そして・・

「グルルル・・」

ラグナに拳を振り下ろそうとする龍を見つける

「させ・・る・・かあああああっ!!!」

全速力で体当たりをし、龍を吹っ飛ばすそしてラグナの前に立つ・・ラグナは閉じていた目を開き

「ハーティーン・・?」

ぼんやりとした声で呟くラグナの手に頭を置き

「遅くなってすまない・・だがもう大丈夫だ・・俺がお前を護るか

ら」

そう言うとラグナは

「良かった・・生きてたんだね・・ハーティーン・・」

ラグナはそう言うと意識を失った、俺はラグナの前に立ち

「起きろっ!!グレイダルファー出番だっ!!」

右手首のブレスレットとバイクが輝き、騎士甲冑が展開される・・
漆黒に甲冑に紺のマント・・それを確認しながら両手に現れたグレイダルファーを握り締め、駆け出した・・

「グルルッ!!!」

両手の鋭い鉤爪を振りかざして龍が迫ってくるが

「遅いっ!!!」

その龍の攻撃は確かに鋭いだろう・・だが俺から見ればスローモーションにしか見えない、俺は左でのダガーで弾き飛ばし、即座に右のダガーで龍の腹を穿ち即座に蹴り上げる

「グウウウッ・・・」

後方に跳ぶ龍を見ながら俺は疑問を感じた

（おかしい、ここまで派手に戦っているのに・・守護者たちが来ない・・こいつ・・何らかの方法で魔力の波動を消しているのか・・）

守護者達が出てこない事をに疑問を感じ・・目の前の龍を見る・・
そして気付く体とは不釣合いな大きさの角に

（あの角が・・怪しいな・・試してみるか・・）

俺は一気に踏み込み龍の角を切り落とした

「ギャアアッ！！」

悲鳴を上げる龍と同時に遠く離れた所から強大な魔力が動き始めるのを感じた・・

ルシルファーがドライヴォルティスの角を切り落とした瞬間

ビーッ！！ビーッ！！

六課に警報が鳴り響く、私は慌ててブリーフィングルームに行き状況を確認する

「兄ちゃんも来たか、今な市街の公園に突然魔力反応が２つ現れたんや、１つはＳＳ、もう１つは兄ちゃんと同じＳＳＳ＋」

はやての説明を聞きながら首を傾げた、幾らなんでもそれほど強大な魔力を感知できないのはおかしい・・私はそんな事を考えながら

「・・ダークマスターズかもしれん・・はやて、なのはとフェイト

連れて出撃する、ヴィータ達とティアナ達を待機させておいてくれ・・それとスバルは医務室に戻せよ」

今禄に動けないスバルは正直足手纏い・・だから医務室に戻しておけというと

「判ってる、それとヴィータ達も待機させとく・・だから兄ちゃん達も気をつけてな？」

心配そうに言うはやてに頷き、私達は公園に向かった・・そこで私は目を見開いた・・

「ギャアアアッ！！！」

龍・・恐らくデクスだろう・・だが私が驚いたのはそこではない、龍を両断し、消滅させた騎士の存在だ、その背後にはラグナが倒れていた、その騎士が身に纏うは消えた筈の漆黒の騎士が身に纏っていたのと全く同じ物・・私達が困惑していると

「トランプソードッ！！」

7本の剣が騎士に向かって放たれたが、当たると思った直後騎士の姿が掻き消え

「ふん・・不意打ちとは・・相変わらず卑怯な事だな？ヘルズ」

ラグナを抱き抱え私達の前に着地した騎士にヘルズは

「ふん・・そういう貴方こそ・・しぶといですね・・私の剣でその心臓を確実に抉ったつもりだったんですけどね？」

普段と同じ口調のヘルズだが、その目には憎しみの色が見て取れた・・騎士は

「俺はそう簡単には死なん、神王との・・親友との誓いを果たす為に」

神王?・・どうしてこの騎士の口から神王の名が?・・私達が騎士とヘルズの関係に困惑していると

「そうですか・・それならば・・良いでしょう・・剣帝・・今度こそ決着をつけましょう」

ヘルズが指を鳴らすと、ヘルズの影から無数のネクロが姿を見せる、私達もデバイスを起動させ戦闘体勢に入ると騎士が

「勘違いするな・・ヘルズ・・俺は剣帝・・ルシルファーではない・・俺は・・異端の騎士・・ハーティーンだっ!!!」

漆黒の甲冑に紺のマントが色を変えていく・・漆黒の甲冑の肩や篭手の部分に金の装飾が入り、紺のマントが白に染まる・・騎士・・いやハーティーンはラグナを降ろし何かを呟く、するとラグナを漆黒のプロテクションが包み込んだ・・ハーティーンはそれを確認してから私を見て

「守護者・・俺についてこれるか?」

挑発するような口調に確信した・・この男がハーティーンだと

「ふっ・・ついて来るのは私じゃない・・お前の方だろう?」

同じ様に挑発するように言うと、ハーティーンは腰の鞘から変わった形の刀を抜き放ち

「ふん、言ったな・・なら・・最後までついて来いっ！！」

ヘルズに向かい突撃していくハーティーンを見ながら

「なのは、フェイト、２人はネクロを頼むぞっ！！」

「「はいっ！！！」」

ネクロ達をなのはとフェイトに任せると言ってから、私も腰の鞘から剣を抜き放ち、空を舞った・・

今ここに最強の守護者と最凶の剣士が揃った・・

第９０話に続く

# 第９０話（後書き）

どうでしたか？異端の騎士復活の前編は？・・私としてはかなり良い線言ってると思っているのですが・・余り自信がありませんので・・感想が来るのを心待ちにしています・・次回はなのはとフェイトの簡単な戦闘シーンとヘルズＶＳ龍也、ハーティーン戦がメインとなります・・最強の２人と戦うヘルズに勝ち目があるのか・・楽しみにしてくれると嬉しいです！！それとハーティーンの容姿を簡単に説明したいと思います、長身で細身のモデル体型ですね・・背は龍也より少し高いです、服装はＦＦのスコールみたいな感じで、両手首に龍を思わす黄金のブレスレットを身に着けています、髪は金で逆立っており、目は紫色です、性格の方はラグナを除き高圧的で上から目線と言うのがルシルファーの設定ですね・・、ちなみにルシルファーのコンセプトは年下の彼女に逆らえない男だったりします、こういう感じの方が馴染みやすいかな？と思った物で・・それと騎士甲冑はデジモンのアルファモンの鎧を少し簡略化した感じで、両手に幅広の黄金のダガーを持っています・・立ち方は・・アーチャーみたいな感じをイメージしてくれると嬉しいです・・声優さんは特に考えていないので・・この人はどうか？と言うのがありましたら感想にお願いします！！それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第９１話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、久しぶりの投稿です・・とても嬉しいですなので調子に乗って４話連続投稿です・・内容は本編３話と番外編１つです・・出来れば１つ１つ感想が欲しいですが・・無理なら良いです・・それでは連続投稿の１話目は今回は前回の続きのヘルズＶＳ龍也、ハーティーンのお話です・・ダークマスターズの将と最強の２人の戦い・・どうなるのか楽しみにしていてくれたなら嬉しい限りです・・それでは本編始まります

# 第９１話

第９１話

龍也さんとハーティーンがヘルズと上空で戦闘するのを確認してから、私達もネクロとの戦闘を開始する・・

「キキキッ・・・」

ネクロの大半はＬＶ１でちらほらとＬＶ２が居るのが目で確認出来る、数は多いが所詮はＬＶ１、２・・私達の敵ではない・・早く全て倒して、ヘルズと戦ってる龍也さん達も応援したい・・だから一気に片付けようと思う

「フェイトちゃん・・一気に行こうか？」

「そうだね・・」

フェイトちゃんも同じ考えなのか頷き、２人同時にフォトンとアルフォースモードに変化する

「前衛頼むけど・・大丈夫？」

フェイトちゃんに前衛を出来るか？と尋ねると

「大丈夫、龍也に剣の使い方は教わったから」

そう微笑み、右手のブレスレットから魔力刃を出すフェイトちゃんを見て

（そう言えば・・フェイトちゃん・・龍也さんに付きっ切りで剣の使い方教えて貰ってたな・・今思うと凄く羨ましいな・・）

そんな事を考えていると、ＬＶ１が飛び掛ってくる・・

（丁度良いや・・ネクロに八つ当たりしよ・・）

そんな事を考え、背後に浮いているクリスタルを２個操作して飛び掛ってくるネクロにぶつける

「「ギャッ！！」」

がら空きの所にクリスタルの体当たりを喰らい吹っ飛んで行く、ネクロから直ぐに視線を外し、ディバインシューターをスタンバイする・・横目でフェイトちゃんを見ると

「アーク・・セイバーッ！！」

魔力刃から金の刃を飛ばし、ＬＶ２を次々両断している・・

（あっちは大丈夫そうだね・・）

３０体居るＬＶ２はフェイトちゃんに任せても大丈夫だろう・・私は７０体居るＬＶ１を確実に仕留めていこう・・そう判断し・・クリスタルを４つを的確に操作しＬＶ１を一箇所に集め

「ディバイン・・シューターッ！！！」

４つのクリスタル全てからディバインシューターが放たれ、雨の様にＬＶ１に降り注ぎＬＶ１を全て消滅させる・・それだけではなくコンクリートやビルに無数の穴が開いてしまった・・私は目の前に惨状を見て・・

「今度・・もう少し訓練しよう・・」

もう少しフォトンモードでの戦闘訓練をしようと決意した・・実際の所私では有り余る程、フォトンの力は強いのだ・・そんな事を考えていると

「Ｖウィング・・ブレードッ！！！」

体ごと回転し、巨大な金色の魔力刃を飛ばし最後のＬＶ２を切り裂き消滅させた、フェイトちゃん大分使いこなしてるな・・そんな事を考えていると、フェイトちゃんが私の前に着地する・・その顔は少し怒っている様に見える

「なのはっ！！私に恨みでもあるの！！！２発ディバインシューターが掠ったけど！！！」

フェイトちゃんの赤いマントに２か所穴が開いていた・・

「ごめん・・まだ上手く制御出来てなくて・・」

１００％私が悪いので素直に謝ると

「もうっ！！気をつけてよねっ！！仲間に撃たれて撃墜なんて私嫌

だからねっ！・・それに上手く制御出来てないなら、龍也に頼んで訓練して貰ってよ！！私だって仕事の合間に頼んで訓練してもらったんだからねっ！！」

そう怒鳴るフェイトちゃんに謝っていると

「うう・・ん・・はっ・・ここは・・」

漆黒のプロテクションに護られていたラグナが目を覚ます、それと同時にプロテクションが消える、私達が近付くと

「そうだ・・ハーティーンが助けてくれた・・そうですよねっ！！」

私達に凄い剣幕で尋ねるラグナに頷くと、その場に蹲り

「良かった・・良かったよぉ・・ハーティーン・・生きてたんだ・・」

ポロポロと涙を流すラグナの前に立ち、私達は龍也さん達の戦っている場所を見上げた・・

キンッ！！キンッ！！！

甲高い金属同士がぶつかる音が響き渡る中

「くく・・はっはっは！！！どうしたのですか！！２人掛りで・・私に手傷１つ負わせられないのですかっ！！！」

ヘルズの挑発の声が飛ぶ・・それに

「くっ！！調子に・・乗るなっ！！」

ハーティーンが飛び出すが

「猪のようですねぇ？」

ひらりと回避し、剣を投げつけるヘルズ、それは的確にハーティーンの右肩に突き刺さる・・私は剣を投げ、一瞬動きの硬直したヘルズに一気に接近し剣を振るうが

「ふふふ・・甘いですね？」

空気に溶ける様にヘルズの姿が消え

「トランプ・・ソードッ！！！」

私の遥か上空から無数の剣が雨の様に降ってくる

「くっ！」

何とか直撃は防ごうと、迎撃に出るが・・

「ぐうっ・・」

左足に1本剣が突き刺さる、それを引き抜き治療をしていると

「ふふ・・いかに守護者、剣帝とは言え・・私の前では無力ですね・

・」

左手に美しい装飾が施された剣を持ち、右手に3本の剣を構えたヘルズは挑発するように言う・・悔しいがヘルズの言うとおりだ・・私達の一撃は全て鮮やかに回避され、一撃一撃のダメージは低いがヘルズの攻撃は確実に私達の体力を奪っている・・このままではジリ貧だと考えていると

（守護者・・聞こえるか？）

隣のハーティーンが念話で話しかけてくる、私も

（聞こえるが・・何のようだ？）

「トランプソードッ！！」

再び雨の様に降り注ぐ剣を弾き飛ばしながら返事を返すと

（良いか？ヘルズの能力は瞬間転移と重力制御・・重力制御を使ってない以上、まだ俺達には打つ手がある）

私と同じ様に剣を弾き飛ばしながら、念話で話しかけてくるハーティーンは

（あいつは攻撃受けると同時に転移し、こちらの攻撃を回避する・・だがそれには多少のラグがある・・お前なら見切れる筈・・俺が攻撃するから、そのタイミングを掴め・・良いな・・）

捲くし立てるようにハーティーンは言うと、菊燐という変わった形の刀を振りかざしヘルズに向かって行った

キンッ！！キンッ！！

ヘルズの剣と菊燐が火花を散らす

「ふんっ！！」

ハーティーンがヘルズの短剣を弾き、胴を狙って刀を振るうが

ヒュン・・

一瞬ヘルズの姿が消え、刀を振り終わると同時に同じ場所にヘルズが現れ、剣を振るう

キンッ！！

ハーティーンは右の刀でその短剣を弾く・・成る程・・そのタイミングか・・注意深くヘルズとハーティーンの戦いを見ながら、ヘルズの姿が消えるタイミングを覚える・・まだだ・・まだ早い・・

ヘルズが姿を消しながら短剣を投げつける、それをハーティーンが弾くのを見ながらタイミングを合わせる

タンッ・・タンッ・・

一定のリズムで姿を消すヘルズ、恐らく無意識の物であろう・・だがヘルズのトランプソードでリズムが一定であるというのを巧妙に隠している・・だがこうして見る事だけに集中すれば・・そのタイミングを掴むのは・・

「容易いっ！！」

剣から魔力刃を飛ばす

「ぬっ・・」

その魔力刃はヘルズの足を捉える、その隙にハーティーンが一気に肉薄する、私もここでヘルズを仕留める為向かって行った・・

まいりましたね・・私とした事が・・

上下左右から迫る、守護者と剣帝の弾きながら、己の無策を恥じていた・・昨日剣帝が生きていると知り、街を監視していたのは正解だろう・・復活して直ぐに始末しようとしたが・・圧倒的に手駒が少なかった・・連れて来たネクロは死神とエースオブエースに撃破され、私自身も足に傷を負い若干スピードが低下している

（やれやれ・・ＬＶ３か４をもう少し連れて来ておくべきでしたね・・）

直撃は防いでいるが、このままではジリ貧だ

（剣帝に執着しすぎましたか・・守護者の事を完全に視界から外していたのはミスでしたね・・）

自分らしく無い行動を恥じていると

「水流・・爪牙ッ！！」

水を纏った剣を振り下ろしてくる、守護者の一撃をバックステップで回避すると

「菊燐・・三の型・・氷雪華っ！！」

闇色の氷の華が迫る

「くっ！」

左から小型の重力球を打ち出し、その華を迎撃する・・もう出し惜しみをしている場合では無い

「グラビティブレイクッ！！」

左手から重力波を打ち出す

「むっ・・・」

剣帝と守護者は軽く回避したが・・狙いは2人ではない・・私の狙いは・・

「！！！」

私の狙いに気付いたのか、守護者がマントを翻し降下していく・・守護者が向かう先には・・エースオブエース達が居る・・この遥か上空からの攻撃に気付くのは回避出来ない所になってからだ・・守護者なら味方を助ける為こう動くと判っていた・・あっというまに姿の見えなくなった、守護者を見ていると・・

「黒狼撃っ！！」

一瞬で剣帝が私の懐飛び込み、半月状の軌道を描きながら菊燐を振るってくる、少し軸をずらして転移し、即座に剣を振るうが

「甘いっ！！」

素手で受け止め、即座に蹴りを放ってくる

「ぬぅっ・・」

反射的にガードするが威力を完全に殺せず後方に弾かれた様に飛ばされる、それと同時に剣帝も後方に跳びお互いに体制を立て直し・・

「ふふふ・・やはり貴方は変わっていない・・あの時と・・私の仮面に傷をつけたあの時から何も変わっていない・・」

私が笑いながら言うと

「ふん・・どうかな？・・俺はまだジョーカーを切っていない・・忘れたか？俺の最強の剣の事を・・」

それさえ使えば勝てるという確信を持っているのだろう、勝ち誇ったように言う剣帝に

「いいえ・・忘れてなど居ませんよ？・・どうです？折角なら呼んで見てはどうですか？」

背中の鞘から８本の剣を抜きながら言うと

「良いだろう・・俺の剣で貴様の呪われた命に終止符を討ってやろう・・来い・・王龍・・」

左手を掲げ最強の相棒を呼ぼうとする剣帝だが・・直ぐに顔色が変わる・・

「っ！！・・馬鹿な・・」

困惑する剣帝に

「くく・・はは・・ははははははっ！！！」

嘲笑の意味を込めて笑いながら・・

「はは・・気付いてないのですか！！貴方の魔力の波長はかつて剣帝と違う！！今の貴方がどれほど呼ぼうが王龍は貴方の声に耳を傾けないっ！！！」

剣を投げながら言う、剣帝の最強の武器・・それは当時の科学力の全てと神王によって作られた、半自立型龍型デバイス王龍だ・・あれはそのままでも充分な戦闘力を誇るが、最大の特徴は甲冑と融合する事により、剣帝の能力を格段に跳ね上げる事だ・・だが今の剣帝の魔力の波長では、主として認めて貰えないのだ・・だから王龍は目覚めない・・自身の最大の武器を失っている事に気付いた剣帝は目に見えて動きが鈍っている・・その隙を突いて

「堕ちなさいっ！！」

上空から魔力を伴った踵落しを放つ

「ぐあっ！！」

頭から地表に落下していく、剣帝を見ながら

「・・もう少し手傷を負わせておく方が得策ですね・・守護者は後回し・・今は剣帝をもう少し傷めつけておきますか・・」

私はそう呟き、剣帝の後を追う様に降下していった・・だが後に悟る事になる・・深追いをすべきではなかったと・・

ヘルズの放った重力波を空中で受け止めるが・・

「ぐっ・・」

思ったより威力があり、若干ダメージを受けながら地表に向かって行く・・

「龍也さんっ！？」

下でなのはの困惑の声が聞こえると同時くらいに漸く、重力波の勢いを殺せ、なのは達の手前に着地する・・それと同時くらいに

「ぐうっ・・・」

呻き声と共にハーティーンが落下してくる、受け止めようと動き出す前に

「ふっ・・」

短い為の呼吸と同時にハーティーンが体制を立て直し、ラグナの手前に着地するが・・

「ぐっ・・」

ダメージが大きいのか膝を付く、ハーティーンに

「大丈夫っ？」

ラグナが近寄ろうとすると

「大丈夫だ・・それより早くこの場から離れろっ！！」

手で近寄ろうとするラグナを制し、ここから離れろと言うと立ち上がり私の横に立つ、ハーティーンに

「回復してやろうか？」

ふらついている、ハーティーンに回復するか？と尋ねると

「問題ない・・この程度なら勝手に治る・・」

そう言うとハーティーンの傷に漆黒の魔力が集まり、怪我を治していくそれを見て

「レアスキルか？」

見た事の無い現象に驚きながら尋ねると

「そんな所だ・・さてと・・守護者・・どうやってヘルズを退ける？」

ヘルズをどうするかと尋ねて来る、ハーティーンに

「私に協力する気はあるか？」

そう尋ねると

「ふん・・協力するも何もお前は俺に仲間になれと言ったのを忘れてるのか？」

鼻を鳴らしながら言うハーティーンに

「忘れてないさ・・では・・私に協力して貰おうか・・」

どうするかと話していると

「トランプソードッ！！！」

上空から１４本の短剣が降り注いでくる、それを目で確認しながら・・

「手筈通りに頼むぞ・・」

話した作戦通りに頼むというと

「抜かせ・・貴様こそミスるよ・・」

あくまで高圧的な態度を保ったまま、ハーティーンが飛び上がりながら降り注ぐ短剣を弾き飛ばし始める

「さてと・・久しぶりだが・・錆付いてくれてるなよ・・」

そう呟き魔力の収束を始め・・暫くすると私の周りに

フォンッ・・

機械で出来た、蝙蝠の様な、鳥の様な物が１２機浮かび上がる

「ガンファミリヤ・・錆付いてなかったか・・」

セレスとの訓練で使えるようになったが、私は射撃は余り趣味では無い為今まで禄に使ってなかったが・・こういう状況では役に立つだろう・・

「・・捉えた・・」

意識を集中させ、上空で戦っているであろうヘルズとハーティーンの動きを読み・・完全に捕捉したところで・・

「行けっ！！！」

私の前に飛び回るガンファミリヤ達を打ち出した・・

「キィッ！！キィッ！！」

ファミリヤ達が縦横無尽に飛び交い、ヘルズに魔力弾を打ち出す

「くっ・・ちょこまかと・・」

ヘルズは短剣でファミリヤを打ち落とそうとするが・・そんなへまはしない・・細かく操作を繰り返しヘルズの意識をハーティーンから完全にこちらに向ける、ある程度ヘルズがハーティーンから離れた所で

「ブラック・・トルネードッ！！！」

左右の刀の構え、高速回転をしながらハーティーンがヘルズに突っ込む

「くっ・・」

短剣をクロスさせその突撃を受け止める・・回転が弱まると同時に竜巻の中から

「龍鳳・・天嚇ッ！！！」

無数の漆黒の魔力刃が飛び出す

「ぐっ・・あああっ・・」

無数の魔力刃に切り裂かれながら後退して行くヘルズに

「次元を破壊せし・・無限力よ・・呪われし命に安らかな終焉を・・・」

ガンファリヤ達を自分の周りに集め、複雑な魔法陣を作り上げ

「アキシオン・・バスター・・」

魔法陣全体が蒼く光り輝くと同時に

「デッドエンドシュートッ！！！」

全力で砲撃を打ち込む

「なっ・・ぐあああああっ！！！！」

絶叫と共にヘルズが砲撃に呑まれると同時に、私の魔力で上空の雲が全て吹き飛んだ・・

「とんでもない砲撃を放ってくれる物だな・・」

私の横にハーティーンが現れ、その砲撃を見て呆れたと言う口調のハーティーンに

「ここであいつを仕留めておきたかったからな・・全力で撃ったしな・・」

正直自分でも驚いていると言うのが本音だ・・本気で砲撃を撃ったのは実際これが初めてだ・・まさかここまでの威力とは私も思っても居なかったのだ・・だがここまでやればヘルズを仕留めたと確信していたのだが

「・・はぁっ！！・・はぁっ！！・・やれやれ・・・とんでもな

い砲撃をしてくれますね・・」

ボロボロのヘルズが左腕を押さえながら現れる・・ボロボロの姿のままヘルズは

「やれやれ・・重力魔法で迎撃しなければ・・今頃私は消滅してましたよ・・」

そう呟き、左手の剣を背中の鞘に戻し

「・・やれやれ・・私1人で貴方達2人に挑んだと言うのが間違いでしたね・・・今日の所はこれで失礼致しますよ・・」

ヘルズはそう笑いながら空気に溶ける様に消えて行った・・

「仕留め損ねたか・・そう簡単には行かないか・・」

ダークマスターズの将と言うだけはあるか・・そんな事を考えながらハーティーンと共になのは達の元へ降下して行った・・

「ハーティーンッ!!!」

着地したハーティーンにラグナが飛びつく、それを抱き止めながら

「やれやれ・・」

溜め息を吐きながらも微笑みながらラグナの頭を撫でる、ハーティーンに

「私達は六課に戻るが・・お前はどうする?」

ハーティーンに尋ねると

「とりあえず、俺も六課とやらに行こう、俺が知る限り事でジオガディスの事を教えてやる」

そう言い放つハーティーンになのはが

「どうして、貴方がジオガディスの事を教えてくれるんですか？・・・言い難いですけど貴方はジオガディス側じゃないんですか？」

警戒の色を瞳に写しながら言うなのはに

「確かに俺はお前達から見ればジオガディス達とたいして変わらんだろう・・俺が信用できんというならそれでも構わん・・俺には俺の使命がある・・それを果たす為にはお前達に信用されまいと俺はお前達と剣を合わせるだけだ・・」

鋭い眼光で言うハーティーンを見ながら

「大丈夫だ、なのはハーティーンは信用出来る、そこまで警戒する必要は無いさ・・それにそんな事を言うと怖い敵が増えるぞ」

そう言いながらハーティーンの後ろに居るラグナを見ると

「ううううっ・・・」

頬を膨らませなのは達を睨んでいるラグナに

「大丈夫だ、私はハーティーンを信用している、だからそんなに睨

まないでくれ」

そう言うと、ラグナは睨むのを止め

「それなら良いです・・」

ぼそりと呟くラグナを連れて、私達は六課へと戻って行った・・ここに予言にあった剣帝は蘇った・・

第９２話に続く

# 第９１話（後書き）

どうも～如何でしたか？復活編の後半は？あくまで復活がメインだったので戦闘描写は少なめですね～次回はハーティーンが知るジオガディスと神王についての話にするつもりです・・この後に最後の強化が残っている原作キャラの話と、遺跡の最深部の魔獣についての話をし、最終話に向けて動いていこうと思っていますが・・予定の変更は多少はあると思います、それと龍也とハーティーンの合体攻撃の名前は「メトラジェウス・ノヴァ」です、もう少しで１００話越えの夜天の守護者・・是非とも最後まで付き合ってくれると嬉しいです、それでは２話目の前書きでまたお会い致しましょう・・

# 第９２話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！！今回は説明メインのお話です、大分謎に隠されている、パンデモニウム、ジオガディスの事が少し判ります、しかし完全解明ではないです・・書かなくても判りますよね？まだ最終話はまで間隔がありますしね、それでは４連続投稿の２話目をどうぞ！！

# 第９２話

第９２話

六課のヘリポートに着くなり、私はハーティーンに

「悪いがデバイスを貸してくれ、一応規約でな」

デバイスを渡しように言うと

「ふん・・受け取れ・・」

両手首のブレスレットと懐から金色のカードを投げつけてくる、それを受け取り

「信用していると言って置いて悪いな」

謝るとハーティーンは

「当然の事だから気にしてない・・」

そう言うと黙り込んでしまったハーティーンに内心困りながら、私はブリーフィングルームに向かった・・そこにはシグナム、ヴィータに、はやてそれとセレスが居た・・ハーティーンはセレスを見て

「統制人格か・・やはり貴様も蘇っていたか・・」

目を細め言うハーティーンにセレスは

「そういう貴様も漸く蘇ったと言う所か・・ベルカ神聖騎士団軍団長　ルシルファーシャッカス・・いや・・剣帝」

セレスがハーティーン・・いやルシルファーの役職を言うと、ハーティーンは眉を顰め

「俺にその名を名乗る資格は無い・・操られていたとは言え神王の意思に逆らった俺にルシルファーの名は重い・・俺は異端の騎士・・そしてここに居るラグナの騎士・・ハーティーンだ、統制人格」

ラグナの前に立ちながら言うハーティーンの後ろでは

「あう・・」

真顔で言われたその言葉に赤面しているラグナを見ながら、セレスは

「私はもう統制人格ではない・・私はセレスだ」

名前を言うセレスにハーティーンに

「成る程・・守護者に名を貰ったという事か・・判った・・セレスと呼ばせて貰う」

自己紹介を終えたハーティーンは椅子に腰掛け、机の上に足を組み

「さてと・・何を話せば良い?・・ジオガディスの目的か?それともパンデモニウムの事か?・・それとも俺が信用出来ないから話を聞くつもりは無いか?」

挑戦的な口調のハーティーンにはやてが

「ん～信用できないって訳や無いね・・兄ちゃんが信用する言うなら私も信用する、兄ちゃんの判断に間違いは無いからな～」

笑いながら言うとハーティーンは

「ふん・・そうか・・それなら構わん・・どっちみち信頼されようがされまいが俺のする事に変わりは無いからな」

そう言うとハーティーンは机の上の足を降ろし、机の上に腕を組み

「さぁ・・何から話す？俺が知る限りの事では全部話そう」

と言うハーティーンにヴィータが

「パンデモニウムって奴について教えてくれよ・・どんな兵器なのかとかよ・・」

ヴィータがそう尋ねるとハーティーンは

「パンデモニウムは機動要塞だ、城壁全てが武器で国潰し専用の兵器だ・・実際これで１０の国が焼き野原になった・・神王と聖王ゆりかごで破壊され、今は断絶された空間の中で修復中だ」

冷静に言うハーティーンにフェイトが

「こっちから行って破壊は出来ないの？」

こっちからその断絶された空間に行けないか？とフェイトが尋ねると

「残り全てのダークマスターズとＬＶ４・・それに９００体近いネクロにジオガディスに直接戦闘を挑む気か？そんなのは戦いではない・・ただの自殺行為だ・・それに今のパンデモニウムにそこまでの火力は無い」

鋭い目で言うハーティーンにセレスが

「そうか・・思い出したぞ・・貴様がパンデモニウムを両断したんだったな」

セレスの言葉になのはが

「国を焼き野原にした機動兵器を両断した？・・嘘でしょう？」

そう呟くなのはにセレスが

「ハーティーンの能力でな・・超高圧縮された魔力の刃を作る事が出来るんだ・・その刃ならダイヤモンドさえ簡単に切れる・・それさえ使えばそれくらいは出来る」

能力について説明するセレスに

「こんな風にな・・」

左手に漆黒の魔力を集め、軽く振るうとハーティーンの前のティーカップは簡単に両断された・・

「俺の能力は闇の変換素質でな・・炎等の変換素質に加えて、圧縮や放射も自由自在・・俺が魔剣士と呼ばれたのはそれが由縁だ」

ニヤッと笑ったハーティーンは次に

「次にジオガディスの目的だが・・これは推測の域でしか判っていないが・・何十万のリンカーコアを集める事としか判ってない・・神王なら何か知ってると思うのだが・・生憎俺はそんな話は聞いてないからな・・」

簡単だがジオガディスの目的について話した、ハーティーンは

「さてと・・夜天・・俺が知るのはこれくらいだ・・どうやら操られる前に記憶を幾つか消されたらしい・・肝心な所が思い出せない」

頭を軽く押さえながら言うハーティーンに

「ん、ありがとう・・それと私は夜天ちゃう・・はやてやちゃんと名前で呼んで」

はやてがジト目で言うと

「む・・それは悪かった・・何せ俺はお前達の名を知らんからな・・ヘルズが呼んでいた名しか知らんのだ」

そういうハーティーンになのは達が自己紹介した所で

「はやて、ハーティーンの部屋を用意してやってくれるか?・・それとなのはとフェイトはラグナを家まで送ってやってくれ・・もう夜も遅いから」

はやてとなのは達に言うと

「ん・・大丈夫や空き部屋あるでその部屋好きに使ってくれて良いで」

はやては空き部屋の手筈をしてくれ

「うん、判ったよ」

フェイトとなのはがラグナを連れてブリーフィングルームを出ようとすると

「明日また会おう・・ラグナ」

ハーティーンがそう声を掛けると

「うん!!また明日・・ハーティーンじゃあね・・」

出て行くラグナを見送り終えたハーティーンに

「ハーティーンこっちだ・・」

行くぞと声を掛けてから、私達もブリーフィングルームを後にした・・

「守護者・・俺と貴様の決着はついていない・・何時かどちらが上か貴様に判らせてやる」

空き部屋に向かって行く途中でそんな事を言う、ハーティーンに

「そうだな・・勝負はついていない・・いずれ決着をつけよう・・」

私としても決着つかずだった、ハーティーンとの戦いに決着をつけようと言いながら、空き部屋に案内し

「今日からここがお前の部屋だ、好きに使ってくれ・・それじゃあな・・」

部屋の前でハーティーンと別れ、私も部屋に戻った・・そこには

「王・・お待ちしておりました・・」

セレスが待っていた・・私は内心驚きながら

「どうしたんだ?セレス」

何の用かと尋ねると、セレスは

「はい、ハーティーンの事なのですが・・明日ハーティーンを連れて聖王教会に一緒に行って貰えないでしょうか?」

聖王教会に一緒に行ってくれないか?と言うセレスに

「別に構わないが・・聖王教会に何の用があるんだ?」

そう尋ねるとセレスは

「はい、聖王教会には剣帝が使っていたデバイスが安置されています・・それがあればこれからの戦いが楽になると思うのです」

その説明に頷き

「判った、明日聖王教会に行こう」

一緒に行くと言うとセレスは頷き

「ありがとうございます・・それでは失礼致します・・」

溶ける様に消えていくセレスを見送ってから、私はベッドに横になり眠りに落ちた・・

「・・朝か・・」

ベッドから起き出し呟く・・

「中々寝付けなかったな・・やれやれ・・」

昔は野宿やテントでの睡眠が多かった・・それとどうも感じが違い中々寝れなかったのだ・・

「まぁ・・良い・・さてと・・どうするか?」

起きたのは良い・・だがやる事が見つからない・・デバイスは預けてるし・・暇つぶしする物も無く・・どうするかと考えていると

コンコン

ノック音の後に扉が開き

「起き・・てるか・・ハーティーン、ちょっとついて来て欲しい場所があるんだが良いか?」

そう言う守護者に

「別に構わん・・どうせ暇だしな・・」

やる事も無いので頷き、俺は守護者と共に敷地の外に出た

「ベヒーモス・・セットアップ」

敷地の外に出るなり、守護者が黒塗りの大型バイクを呼び出す

「私はこれで行くが・・サイドカーで良いか?」

そう尋ねる守護者に

「断る、そんなものより俺のデバイスを返せ、それにバイクモードがある」

そう言うと守護者は懐から、俺のデバイスを取り出し渡してくる、俺はそれを受け取り

「グレイダルファー、モードビークル」

俺の隣に守護者のバイクと同じ大きさの黄金のバイクが現れる、俺はバイクに跨り

「良いぞ・・それで何処に行くんだ?」

何処に行くかと尋ねると守護者は

「悪いが・・少し待ってくれ・・セレスが来るんだ」

暫く待っていると

「申し訳ありません・・お待たせしました」

セレスが守護者のバイクのサイドカーに乗り込む

「待たせたな・・ハーティーン・・行くとしよう」

そう言うと走り出した守護者のバイクの後を追い、俺もバイクを走らせた

「・・ここは・・ベルカの土地か・・」

俺はバイクを走らせながら呟いた・・建物や辺りの雰囲気は違うが判る・・この場所はベルカの土地だと、俺の呟きに気付いたのか守護者が

「流石に鋭いな・・ここはベルカの自治区になる・・私達が向かってるのはベルカの聖王教会だ」

目的地を教えてくれる守護者に

「聖王教会・・？・・そんな物が出来てるのか・・」

俺の時代に聖王教会などと言う施設は存在しなかった・・やはり俺の時代とは大分違うと考えている中、俺達は聖王教会に到着した・・

「こっちだ・・」

俺の前を歩いて行く、守護者とセレスの後を追い、俺も建物の中に入って行った・・

「お待ちしてました・・八神中将・・」

迎えの女に守護者は

「久しぶりだ・・カリム・・元気そうだな」

そう呟く守護者にカリムと呼ばれた女は

「そうですね・・私は元気ですよ・・それと・・貴方が剣帝ですか？」

俺を見て尋ねて来るカリムに

「そうだ・・だが1つ聞こう何故俺が剣帝だと知っている」

何故知っていると尋ねると

「ふふ・・ここには剣帝・・つまり貴方の伝承と貴方のデバイスが安置されているのです・・だから私は貴方の事を知っているのですよ」

柔和な笑みのカリムに

「俺のデバイス・・？・・まさか・・王龍かっ！何処だ！！何処に

あるっ！！」

詰め寄りながら怒鳴ると

「そんなに大きな声を出せなくても直ぐに案内しますよ・・此方です」

そう言うと奥に向かって歩き出したカリムの後を追い、俺達は教会の奥に向かった

コツコツ・・

薄暗い通路を歩きながら、カリムが

「ここには龍の石像が安置されています・・それがデバイスだと・・次元さえ切り裂く最強の剣だと聞いているのですが・・私にはとても剣には見えなかったのです」

そう呟くカリムに俺は

「王龍は自立型のデバイスでな・・基本的に龍の姿で存在し、俺とユニゾンする時だけ剣になる」

俺は簡単に王龍の説明をしながら

（あの時俺の呼びかけに王龍は答えなかった・・だがこうして直接会えば・・あるいは・・）

ヘルズは言っていた・・俺と剣帝の魔力の波長は違うと・・俺は確かに剣帝だ・・だが俺はかつての俺とは違う・・もしかしたら・・

王龍は俺に答えてくれないかも知れない・・俺は内心そんな不安を感じていた・・

「ここです・・ここに王龍が居ます・・」

カリムが扉を開き、俺と守護者を中に促す・・俺はゆっくりとその部屋に足を踏み入れた

「・・王龍・・」

部屋の中心に存在する、龍の石像・・それは間違いなく王龍だった・・俺はゆっくりと王龍に手を伸ばすが・・

バチィッ!!

凄まじい音を立てて手が弾かれる・・俺は王龍の目を見て

「やはりお前は・・俺を認めてくれないのか・・」

そう呟く・・悲しかった・・王龍は親友との・・神王との絆の象徴だった・・それが俺を拒む・・それがとても寂しかった・・俺がポケットに手を戻すと

「やはり・・王龍に拒まれるか?」

そう尋ねるセレス・・どうやらある程度の予測は着いていたようだ・・俺は

「見ての通りだ・・王龍は俺を主と認めない・・」

俺とセレスが話しているとカリムが

「待って下さい、おかしいじゃないですか・・これは貴方のデバイス・・何故それに拒まれるですか？」

訳が判らないと言う口調のカリムに俺は

「俺はヘルズとヴェノムによって限りなくネクロに近い存在にされた・・それが原因で俺の魔力はかつての物と違う・・だから王龍は俺を認めてくれない・・」

俺がそう呟くと、守護者が俺の肩に手を置き

「今は駄目でもいずれ王龍はお前を認めてくれる・・だからそんなに気を落とすな」

そう言う守護者に

「ふん・・誰が気を落としてるって？・・俺はかならず王龍を再びこの手にしてみせる」

握り拳を作りながら言い、俺達は機動六課へと戻って行った・・

「・・ふふふ・・面白いわね・・この坊や・・」

私は画面を見ながら呟いた・・そこには槍を持った幼い騎士・・エ

リオの姿があった

「うふふ・・あの時は見逃したけど・・次に会ったら・・この手で・・」

異形の右手を見ながら呟いていると

「・・貴方も飽きないですね・・ヴィルヘリヤ・・良く毎日同じ映像を飽きないですね？」

私の部屋にヴェノムが入りながら言う、私は横目で

「うるさいわね・・貴方だって毎日毎日飽きもせずキメイラを弄くってるじゃない・・それと同じよ」

皮肉を込めて言うとヴェノムは肩を竦め

「まさかそう切り替えされるとは予想外でしたよ・・」

頭を抱えながら言うヴェノムに

「それにしても・・貴方がここに来たっていう事は私の出番かしら？」

ウィンクしながら言うと

「中々鋭いですね・・その通りです・・ヘルズが剣帝と守護者に大分痛めつけられましてね・・回復のために膨大な魔力がいるんですよ・・しかしここにレリックはもう残ってないです・・だから管理局忍び込んで盗んで来ようと思っているのですが・・その為に貴方

に陽動をして欲しいんですよ」

そう笑いながら言うヴェノムに

「別に良いわよ～出撃すればこの坊やを奪えるかもしれないし・・」

映像の坊やを指差しながら言うと

「貴方前、守護者が良いとか言ってませんでしたっけ？」

そう言うヴェノムに

「うふふ・・守護者は確かに良いわ・・でもね・・あれを思い通りにするのは難しいわ・・あれだけ信念が強いと私の能力じゃ難しいのよ・・でも坊やなら違うわ・・この位の精神を操るなんて造作も無い事・・そして坊やと守護者を戦わせるの・・面白そうでしょ？」

守護者は仲間を傷つけない・・その守護者がどう動くか楽しみじゃないか？と言うと

「確かに面白そうですね・・判りました貴方の好きにしてください、ネクロ、デクスは好きなのを持っていってください・・それじゃあ宜しくお願いしますよ」

そう呟き出て行ったヴェノムの後姿を見送ってから

「うふふ・・あの娘達がどんな顔するか楽しみだわ～さてと準備しようかしらね～」

あの坊やと一緒に居た、ピンクと紫の魔道師の事を考えながら、私

は準備の為にパンデモニウムの奥に向かった・・私が向かう先から

「ゴルルルル・・グアアアアッ！！！」

地獄の底から響く様な凄まじい叫び声が響いていた・・

第９３話に続く

## 第９２話（後書き）

どうも～混沌の魔法使いです！！次の次はエリオがメインの話ですね～デジモン好きの人ならどんなデジモンベースの騎士甲冑か判ると思いますよ？ヒントは昆虫忍者と豪腕龍人のジョグレス体の進化です～判るかな～それでは次の投稿も宜しくおねがいします

## 第９３話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、４連続投稿の３つ目ですね・・最初の方は微妙ですが・・後半はかなり盛り上がると思っています・・それと新しい試みが１つあるので見てくれる嬉しいです！！それでは本編始まります

# 第９３話

第９３話

聖王教会から戻った所でハーティーンに

「皆に紹介するから一緒に来てくれ」

一緒に来てくれと言うとハーティーンは、一瞬考え込むような素振りを見せたが

「判った・・一応自己紹介くらいはしよう」

頷いたハーティーンと共に私は演習場に向かった

「１・・２・・３・・４・・っと・・」

準備体操をしているスバル達に

「全員集合ッ！！」

集合するように号令を掛ける、目の前に整列するスバル達と

「ん？誰だ・・あいつ・・？」

訓練を見ていたノーヴェ達に

「今日から私達に協力してくれる・・ハー・・」

皆に紹介しようとするとそれを手で制し

「ふん・・貴様達は久しぶりになるな?俺を覚えているか?」

スバル達を見て言うハーティーンだが、スバル達は判らず首を傾げる・・それを見て

「判らないか・・では思い出させてやろう・・」

ザッ・・

ハーティーンが拳に魔力を集め、シュミレーションのビルに向かって

「デモンズ・・フィストッ!!!」

私のヘブンズナックルナックルに似た技を放つハーティーンにスバル達は

「その技はっ!?・・」

驚愕の声を上げるスバル達にハーティーンは

「これで思い出せたか?・・魔道師?」

にやり笑いながら言うハーティーンにスバルが

「どうしてお前がここに居る!!ハーティーンッ!!!」

敵意を見せながら言うスバルにハーティーンは

「守護者の話を聞いてなかったのか？・・今日からお前達に協力すると」

そう笑うハーティーンの前に立ち

「そう敵対するな・・ハーティーンはもう私達の協力者だ、だから安心してくれ」

臨戦態勢のスバル達に言うと

「龍也さんがそういうなら・・信じますけど・・」

納得できないという表情だが頷いたスバル達に

「それじゃあ・・訓練をしようか・・スバルとエリオは走れ、良いか六課の外を3週だそれが終ったら戻って来い」

そう言うとエリオが

「あの・・走るのに何か意味があるんですか？」

訳が判らないと言う表情のエリオに

「良いか？スバルとエリオは拳を使う戦闘も出来るだろう？強力な拳打を打つには強靭な足腰が必要になる、今日から毎朝3週六課の外を走れ、良いな？」

走る意味を説明すると納得したのか走りに行ったスバルとエリオを見ていたノーヴェは

「私も行くか・・よっと・・」

見ていた場所から飛び降り走り行った・・走りに行ったスバル達を見ながら

「さてと・・ティアナは前回に続いて護身術を覚えてもらう、それとウェンディお前も来い、同時進行で教えるから」

離れた所で見ていたウェンディに声を掛けると

「了解っすよ～」

にこにこと笑いながら来るウェンディを見ていると、ティアナが

「その・・龍也さん気を悪くしたら悪いんですけど・・射撃とか魔法の訓練の方は良いんですか？」

申し訳なそうに尋ねるティアナ・・ここミッドチルダでは魔法がメインで己の体を使ったりする格闘技能はあまり重要視されていない・・だからティアナの質問はもっともだが・・

「まぁ・・その通りだが・・近接技能も出来た方が良いと言うだけだ、ネクロは数で押してくる時もある、だからスバルとエリオが抜かれる可能性も有るからな・・そうなった時の為の護身術だ、納得できたかな？」

どうしてか説明すると、ティアナは

「そうですね・・確かに近接も出来た方が良いですね・・判りまし

た・・宜しくお願いします」

頭を下げるティアナに

「う～し・・準備完了っすよ～」

私とティアナが話している間にストレッチをしていたウェンディが準備完了だと言う、それを確認してから

「それじゃあ、2人で好きに攻撃して来い、私に一撃入れるか、スバル達が戻ったら終わりだ良いな?」

2人にルールを説明してから、私も構えを取った・・

甘いな・・俺は守護者の訓練を見てそう感じた・・好きに攻撃させその全てを防ぐ、守護者の技能は高い・・だがその後が甘い度々反撃に出ているが全て寸止めだ・・それでは訓練の意味が無い・・俺がそんな事を考えていると

「何故そんなに兄上を睨んでいるのだ?」

背後から声を掛けられた・・だが驚きはしない・・気配で判っていたからだ

「烈火・・いやシグナムだったな・・睨んではいない・・ただあの訓練では意味が無い・・そう思っただけだ」

自分の意見を言うとシグナムは不機嫌そうに

「意味が無い？・・何故そう言い切れる？・・兄上の訓練で新人達の能力は大幅に上昇しているのだぞ」

睨みながら言うシグナムに

「上昇ね・・だが聞くが寸止めに何の意味がある？痛いから回避や防御に力が入る・・だから意味が無いと言いたいだけだ・・まぁ・・その内守護者も攻撃を振り切るだろうがな・・」

今は恐らく下地作り・・ある程度鍛え終えれば守護者も攻撃を当てる様になるだろうと思い、そう言うと

「確かにそういう見解もあるな・・」

納得という感じのシグナムと話をしていると

「ぜはー・・ぜはー・・三週って結構きついですね・・」

肩で息をするエリオとか言う小僧を見て、一瞬過去の事を思い出し・・考え込んでいると守護者が来て

「走り終わったか・・それじゃあそのまま基礎をやるぞ、私も一緒にやるから頑張れよ」

そう声を掛けてから腕立てを始めた守護者達を見ながら、俺は演習場を後にした・・

・・数分後・・

「ここは・・何処だ・・」

俺は迷っていた・・やはり道が判らない・・自分の部屋に戻ること
も出来ず・・かといって演習場に戻る事も出来ず・・困惑していると

「ん?・・お前誰だ?」

背後から声を掛けられる・・この声には聞き覚えがあった・・俺は
振り返りながら

「俺が判らないのか?ヴァイス?」

振り返った先にはラグナの兄である、ヴァイスが居た・・知らない
男に名前を呼ばれ困惑しているヴァイスに

「これで判らないか?」

ラグナに貰ったペンダントを見せると・・ヴァイスは表情を変えな
がら

「お・・お前まさか・・ハーティーンかっ!?」

驚きながら尋ねて来るヴァイスに

「俺以外にこのペンダントを持つ者はいない筈だが?」

このペンダントはラグナの手作り・・つまりこの世にこれ1つしか
存在しない物なのだ・・

「だよな・・そっか・・お前やっぱり人間だったんだな・・」

うんうんと頷きながら言うヴァイスに

「所でここは何処だ?・・俺は自分の部屋に戻りたかったのだが・・迷ってしまった・・」

迷っていると言うと

「お前の部屋・・確か空き部屋はあそこだけだったよな・・良いぜ案内してやるよ」

案内してくれるというヴァイスに礼を言い、俺は自分の部屋に向かって移動を始めた

「・・そうだ・・もうラグナには会ったのか?」

自分の妹にあったか?と尋ねて来るヴァイスに

「ああ・・もう会った・・元気そうだったよ」

と他愛も無い話をしながら部屋の前に着いたが

「~♪~♪~」

誰も居ない筈の俺の部屋から鼻歌と共に掃除機の音が聞こえてくる・・

「・・・ヴァイス・・俺はこの歌に聞き覚えがある」

そう呟くとヴァイスは

「奇遇だな・・俺もだ・・随分長い間聞いてた歌だ・・」

これから導き出される答えは・・1つしかない・・

「とりあえず・・開けようぜ」

ヴァイスの言葉に頷き、俺は自分の部屋の扉を開き停止した・・ベッドしか置いてなかった部屋には、何時の間にか様々な家具が置かれ・・埃りが溜まっていた部屋は綺麗になっていた・・そして部屋の真ん中には

「あっ・・おかえり、ハーティーン・・とお兄ちゃん」

ここに居ない筈のラグナの姿があった・・想定外の自体に困惑していると

「ちょっと待っててね、今朝ごはんの支度するから、座って待ってて」

その言葉に反応し、2人で椅子に座ったが

「「・・ちょっと待て!!何でここに居る!!」」

2人同時に突っ込むとラグナは

「はやてさんがここの鍵くれたから居るんだけど?」

首を傾げながらフライパンを振るうラグナにヴァイスが

「鍵くれたからって、男の部屋にほいほい入っちゃ不味いだろう！！」

最もな事を言うがラグナは冷静に

「でも、一緒に暮らしてたし・・ハーティーンは変な事しないし・・大丈夫だよ」

笑顔で言うラグナに疲れ果てた様にヴァイスは座り込み

「ちくしょう・・どうしてこんな事に・・ハーティーン・・最初に言っておくが・・ラグナに手を出したら殺すぞ・・」

半泣き状態で睨みつけてくるヴァイスと

「ハーティーン、卵は目玉焼きかスクランブルエッグどっちが良い？」

キッチンから聞こえてくるラグナの楽しげな問いかけを聞きながら俺は

「・・何とまあ・・賑やかな事だ・・」

そう呟いた・・その時俺の顔は自然と笑っていた・・心から楽しいと思ったのは本当に久しぶりのことだった・・

龍也達が訓練と朝食を終えた頃、六課内に警報が鳴り響いた・・

「またネクロか？」

私は慌ててブリーフィングルームに向かい絶句した・・モニターに映し出された1体の異形の姿に

「グルル・・グオオッ！！！」

雄叫びを上げながら暴れ回る、漆黒の龍の姿に・・私だけでなくはやて達も黙り込んでいると

「ヨルムンガンド・・遂に出したか」

何時の間にか現れたハーティーンが呟く・・その間にはやてが

「これだけ大きいと全員で当たらんと無理やと思うんやけど・・そうも行かんみたいや・・」

モニターが切り替わり、別の通りが映し出されるそこには複数のＬＶ１の姿があった・・

「この大きいのは隊長陣とチンクさん達と兄ちゃんやな・・民間人の保護はスバル達で・・ＬＶ１の方は・・」

はやてが全員の顔を見ながら作戦を考えていると

「ＬＶ１の方は僕が行きますっ！！！」

エリオが自分が行くと言う・・

「その気持ちは買うが・・1人では無理じゃないか？」

私が言うとエリオは胸を張りながら

「ＬＶ1位なら、僕とキャロ達で大丈夫です!!、お父さん達はヨルムンガンドの方に回ってください!!」

自信満々に言うエリオに

「判った・・ではＬＶ1の方はエリオ達に任せる・・皆行くぞ」

私はエリオの言葉を信じ、任せたが・・それが間違いであったと後に知ることになる

「しかし・・デカイな・・」

ヘリから見下ろしながら私は呟いた・・こうして見てもかなりの巨体だ・・しかもその周りに居るデクス達の存在が厄介だ・・出来る事ならハーティーンにも協力して欲しかったが・・手続きがまだ取れてなく出撃してもらう事が出来無かったのだ・・

「とりあえず、私達でヨルムンガンドに攻撃を仕掛けてみる・・チンク達はデクスの方を頼むぞ」

そう指示を出してから私達は降下した・・

「しかし・・デカイな・・どうする兄貴？・・バーストモードになるか？」

まだ離れているヨルムンガンドを見ながら尋ねて来るヴィータに

「いや・・止めて置いた方が良いな・・恐らく今回の目的は偵察になると思う・・敢えてあちら側の策に乗ってやる必要は無い・・時間は掛かるが遠くからダメージを与えるのが妥当な戦だろう・・」

あれ程の巨体に接近戦を挑むのは無謀だ・・遠くから砲撃等で少しずつでも良いからダメージを与えるのが得策だと判断し

「それじゃあ、なのはとフェイトは上から砲撃を頼む、私達も遠くから削っていって見る」

作戦を説明してから、私達は戦闘を開始した・・その様子を見る赤いマントのネクロ・・ヴェノムは

「成る程・・作戦通り掛かってくれましたか・・それでは私は私の仕事をするとしますか・・」

ヴェノムはマントにその体を隠すと同時に蝙蝠になり、管理局の方に飛んで行った・・

「でやあっ！！」

迫ってくるＬＶ１をエグザフォルムのストラーダで両断する、今までのストラーダと違いエグザフォルムでは鎌が追加されているのでこういう斬るという攻撃も大分得意になってきた・・そんな事を考

えていると

「エリオッ！！右後方のビル影からネクロが出てくるよ！！油断しないで！！」

後ろの方で索敵をしていたルーちゃんから指示が飛ぶ、その指示に従い

「クレセント・・ミラージュッ！！」

巨大な魔力刃を飛ばす、飛ばすと同時に

「キキ！？」

飛び出てきたネクロが両断され消える、だが大振りな攻撃の所為で一瞬隙が出来ネクロ達が飛び掛ってくるが

「させないっ！！我が求めるは、戒める物、捕らえる物、言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖・・錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

飛び掛ろうとしたネクロ達の足元から複数の鎖が現れ捉える、この拘束は一瞬といっても言いが・・その一瞬の隙があれば

「倒せるっ！！・・スピーア・・アングリフッ！！」

一瞬だけ魔力を背中のマントから放出し一気に加速し纏めて３体のネクロを貫く、これも今までのストラーダでは直線的かつ応用性が低かったが、お父さんに協力してもらいかなり凡庸所為の高い技になっている、それにこれだけではなく・・

「紫電・・一閃・・でえええぃッ！！！」

全力で拳を地面に打ち付ける、それと同時に稲妻が地面を駆け巡る、打撃だけではなくこういう風に地面を利用し広範囲かつ高威力の技へと仕上げたのだ・・

「これで・・終わりかな？」

ＬＶ１の姿が見えなくなった所で僕はそう呟いた・・お父さんに出会う前ではＬＶ１にも苦戦していたが・・今ではそんなに苦戦しずに倒す事が出来る、一応自分でも索敵しているとと

「大丈夫・・もう近くにＬＶ１の気配はしないよ・・」

索敵していたルーちゃんが合流してくる・・だから気を緩めているとと

「でも大分、流れが掴めて来たね、エリオ君」

キャロも合流してきてそう呟く、僕達のチームは僕がメインで戦い、キャロが防御及び支援、そしてルーちゃんが索敵と支援・・これが一番上手い具合に回るのだ

「そうだね・・大分慣れてきたね」

敵も居ないので少し話していると、上空の方から

「あらあら・・前に言わなかったかしら？・・詰めの甘い事だって？」

その声と共に黒い魔力波が飛んでくる、反射的にプロテクションを

張りその攻撃を防ぐと

「あら、中々どうしてやるわね・・今ので少しはダメージを与えようと思ったのだけど」

そうは言っているが敵意は無い・・何を考えているか全く判らないでも・・

（相手はＬＶ４・・やる事は・・先手必勝だッ！！）

一気に肉薄しストラーダを振るったが

ガキーンッ！！

甲高い音を立てて僕の一撃は異形の右手に防がれていた、ヴィルヘリヤは作戦成功と微笑み

「うふふ・・馬鹿な坊や・・こんなに簡単に罠に掛かってくれてありがとう」

その言葉と同時に僕の足元から闇色の魔力が放たれ、僕は意識を失った・・

「うふふ・・作戦成功ね・・」

私は微笑みながら坊やを降ろす・・それと同時に坊やの赤い騎士甲

胄が色を変える・・漆黒の禍々しいまでの色にそれを見て

「エリオ君に何をしたのッ！」

飛竜を連れたピンク色の魔道師が怒鳴る、私は笑いながら

「何って・・簡単よ・・精神を支配したの・・つまり坊やはもうこちら側・・判る？」

そう言うと同時に坊やが駆け出し、槍を振るう

「！！」

咄嗟の事に反応出来なかった、ピンク色の魔道師を紫の魔道師が突き飛ばしその一撃を回避する・・肉体的にダメージは無かったがそれ以上に精神的にダメージを受けたのだろう

「え・・エリオ君が・・私を・・」

信じられないと言う様子で呟くピンク色魔道師・・言いにくいわね・・確か・・キャロとルーテシアだったわね・・興味が無いから間違えてるかもしれないけど・・私はそんな事を考えながら瓦礫に腰掛け

「さて・・その坊やの精神を解放するには、私を倒すか・・貴方達が死ぬか・・坊やを殺すか・・どれか１つだけ・・うふふ・・貴方達がどれを選ぶか楽しみだわ～精々私を楽しませてね～」

私はそう呟きながら手を振り、坊やと魔道師同士の戦いを見ていた・・

第９４話に続く

敵の手に落ちたエリオ・・その狂気の刃が２人に迫る！
絶体絶命のピンチの時に２人はある決断をする・・
その純なる想いが最後の奇跡を呼び起こす！！

次回　龍帝の騎士への目覚めっ！！

お楽しみに下さい・・

## 第９３話（後書き）

・・なんとなく次回予告を入れてみましたが・・微妙ですね・・こういうのは本当に才能が無い作者ですね・・ちなみフレーズ等はデジモンアドベンチャーをイメージしてみました・・最初に書いた通り今回は本編３つと番外編の更新です、それでは最後の番外編の前書きでまたお会い致しましょう、それでは失礼致します

# 第９４話（前書き）

今回はエリオ強化フラグの完了編のその１になります、自分ではそれなりに良い出来だと思うので宜しくお願いします、それと私の小説のオリキャラなのですが、もしクロスやちょっとした感じで使いたいという人が居ましたら、メッセージを貰えると嬉しいです・・まぁ・・余り居ないと思いますが・・少し期待しながら待っています・・それでは本編始まります

# 第９４話

第９４話

「ちくしょーっ！！本当に攻撃効いてるのかよーッ！！」

さっきから攻撃を当てているのだが全く弱らないヨルムンガンドを見て絶叫するヴィータに

「魔法が弾かれるっ！龍也さんどうしよう・・」

上空のなのはの普段からは決して想像出来ない声を聞きながら、私はヨルムンガンドを観察していた

（この巨体だ・・攻撃力はあるはず・・なのに何故攻撃してこない？）

時折炎を吐いたり、足を叩き付けて来るがそれも時々でじっと何かを待っているようにも見える・・それに私が攻撃の素振りを見せると

「カウダッ！！」

その巨大な尻尾を振り回し私の動きを束縛に出る、攻撃範囲が広く回避は難しいが当たるほどドジではないつもりだ・・その尻尾を回避し着地すると

「大丈夫ですか？兄上」

近くに居たシグナムが心配そうに声を掛けてくるので

「問題ない・・それよりそっちは？」

シグナムに大丈夫かと尋ね返すとシグナムは

「こっちも大丈夫です」

そう微笑む返すシグナムを横目にヨルムンガンドに視界を戻す、するとなのはやフェイト目掛け

「タイラントサベージッ！！！」

巨大な足を力任せに振り回すその姿を見て

（何かを待っているのか？）

何かを待っているようにしか見えず、何か嫌な予感を感じていた・・

どうすれば・・どうすれば良いの？・・私はエリオ君の攻撃を回避しながらどうすれば良いのか考えていた・・

「・・・・・」

無言で私とルーちゃんにストラーダを向けるエリオ君に普段の面影

は丸で無い・・その何処までも暗い瞳のエリオ君に

（・・絶対にエリオ君は取り戻すんだから・・）

少し離れた所でニヤニヤと楽しそうなヴィルヘリヤを横目に、少し離れた所にいるルーちゃんと合流し

「ルーちゃん・・どうすれば良いと思う？」

私では良い作戦が思いつかず尋ねると、ルーちゃんは

「私達に出来るのは龍也達が合流してくれのを待つだけ、私やキャロ、フリードの火力じゃエリオは愚かあのネクロのプロテクションは破れない・・でも逃げてるだけだと気付かれては駄目・・適度にネクロにも攻撃しないと」

そう、その通りだあのネクロに時間稼ぎが目的だと気付かれては駄目だ、つまりエリオ君を回避し、ネクロには適度に攻撃をしなければならない・・かなり難しいがやるしかない・・私達が自分達の作戦を話していると

ユラッ・・

私とルーちゃんの前に影が落ちる、それと同時に横に跳ぶと

ザンッ！！

さっきまで私達が居た所にストラーダが突き刺さる、それを見てエリオ君は本気で私達を殺すつもりなんだと再認識し、私達はさっき決めた作戦通り、２人で同時に駆け出した

「うふふ・・やっぱりそう来たわね」

私は全て自分の思い通りに動いている事に確認し、微笑みながら2人の魔道師を見ていた、仮にも自分の好きな人間を攻撃できるか？・・答えは否・・そんな事は出来はしない・・だから魔道師の取る行動は判っている

ヒュンッ！！

「ほらね・・やっぱりこう来るわけよ」

飛んで来た魔力弾を簡単にかき消し呟く、目的は守護者が来るまでの時間稼ぎ、でもそれを気付かせまいと適度に攻撃をしてくる魔道師を見ながら

（・・これからどうなるかしらね？・・どう転ぼうが楽しみだわ）

洗脳を解くには最初に言ったとおり、私を殺すか、自分達が死ぬか、坊やが死ぬかの三択しかない、あの魔道師がどの選択肢を取るのかと考えていると

「「ヴィルヘリヤ様」」

背後の2体のネクロが現れる、私は若干興が削がれたと感じながら

「何？タイラントにパワー？」

タイラントにパワーはかなりの巨体を誇るネクロだ、タイラントは何故か背中に山を背負い、パワーは斧を持っている、肉弾戦が得意なネクロで本来はカーズの配下のネクロだが、カーズが負けたので回り回って何故か私の配下に成っている2人組みだ、私が何か?と尋ねるとパワーが

「はっ、今しがたヴェノム様が目的を達成したと陽動はもう良いそうです」

そう・・完全に忘れてたわ・・今回の目的は陽動だったのよね

「なので後は我々に任せて、パンデモニウムにお戻りください」

私が本来の目的を思い出しているとタイラントが戻れと言う

「嫌よ、折角面白くなって来た所なんだから・・もう少ししたら勝手に帰るからほっといてよ」

2人の魔道師が徐々に坊やに追い詰められている・・ここからどうなるかが見たいのに帰る訳が無い、私の性格を知っているタイラントとパワーは少し考え込む素振りを見せたが

「判りました、ヴィルヘリヤ様の命に従います・・しかし万が一何かが起きては困るので私達もここに残りますが宜しいですね?」

冷静に言うパワーに

「はいはい、好きにすれば?・・でもあの魔道師の邪魔をしちゃ駄目よ?」

私は念を押してから魔道師と坊やの方に視線を戻した・・

「ど・・どうしよう・・？」

私とルーちゃんは追い詰められていた・・確かにエリオ君は正気を失っている・・だがお父さんに教えられた戦闘技能は体が覚えている・・大分長い事逃げる事は出来たが・・それももう終わりかもしれない・・

「まずい・・こんな時ガリューがいてくれたら・・」

瓦礫を背に呟くルーちゃんを見ながら・・何か？・・何か無いか？と考える・・ヴィルヘリヤは洗脳を解くにはどうすれば良いと言っていた？・・

「「！！・・そうか・・それしかないよね・・」」

ルーちゃんと同時に呟く・・もう残された手はそれしか無かった・・私達が何をしようとしているのか理解したフリードが

「きゅくっ！！きゅっく！！」

鳴きながら体を振るフリードの頭を撫でながら

「ごめんね・・私にはもうこれしか思いつかないの・・」

エリオ君を取り戻す方法はもうこれしかないと私とルーちゃんは判断したのだ・・隠れるのを止めエリオ君の居る通りに立つ

「・・・・」

黒く濁った瞳のエリオ君がストラーダを引きずりながら歩いてくるのを見ながら、ゆっくりと歩き出す

「・・エリオ君・・」

「エリオ・・」

ルーちゃんと一緒にエリオ君に声を掛けるが

「・・・・」

私達の事を本当に倒すべき敵として認識しているのか、ゆっくりとストラーダを振り上げたエリオ君に聞こえているか判らないが声を掛ける

「エリオ君・・私はエリオ君と一緒に居れて凄く楽しかったよ」

聞こえているかは判らないでも言わないといけない気がしたから・・私とルーちゃんはエリオ君の眼を見ながら声を掛け続けた

「私は・・余り長い間エリオと一緒に居れなかった・・でも一緒に居た時間は私にとっての宝物・・」

ルーちゃんが言い終わると同時にストラーダに魔力刃が展開される、私達はそれを見ながら

「だから・・大切なエリオ君に言うよ・・例え私とルーちゃんを殺しちゃっても悲しまないで・・私達は・・姿は見えなくてもエリオ君と一緒に居るから・・だから悲しまないで・・ずっと笑っていて・・お願いだよ・・」

2人でそう言うと目を閉じた・・それと同時に狂気の刃が振り下ろされた・・

ザンッ!!

坊やの鎌が振り下ろされ、それと同時に血しぶきが上がる・・私はその光景を見ながら

「ふふふ・・中々面白い見世物だったわね・・さてと・・坊やを始末・・あら・・?」

確かに血しぶきが上がっているのだが、2人の魔道師は立ち続けている・・ではあの血は誰の?・・私が困惑していると

「・・けるな・・」

唸るような坊やの声が聞こえた・・まさかと自力で私の洗脳を打ち破ったと言うの!?・・私が混乱している中

「えっ?」

魔道師が首を傾げながらえっ？と言うと坊やは

「ふざけるなって言ったんだっ！！！僕は！！キャロとルーテシアと一緒に居るって決めたんだっ！！それなのに・・2人を殺して悲しむな？・・笑っていろ・・？・・ふざけるなっ！！2人が居なくちゃ笑えるわけ無いだろっ！！」

そう怒鳴ると坊やは振り返り私を見る・・その目には強い殺意があった、それにさっきは見えなかったがどうやら自分で自分の足を切り裂いてその痛みで自意識を取り戻したようだ・・私は

（・・坊やって言って侮っていたけど・・中々強い心を持ってるみたいね・・でも・・）

私の思い通りにならないおもちゃは要らない・・だから

「私の洗脳を破ったのは褒めてあげるわ・・でももう終わりよっ！！・・ダークネス・・ウェーブッ！！」

全力で私は砲撃を放った、それと同時に一瞬プロテクションが見えたが直ぐに私の砲撃に呑まれ消えた

「うふふ・・これで終り・・後は死体を持って守護者の所へ・・！！・・何この魔力は！？」

強烈な魔力を感じ、歩き去りかけたが・・本能的に振り返り私は眼を見開いた

グルルルル・・・・

「！！！」

思わず私は後ずさりをした・・私には見えた・・巨大な体を持った龍の姿を・・私が驚いていると

「許さない・・お前だけは・・許さないぞ・・」

その龍の姿が消えると同時に坊やが姿を見せる、漆黒の騎士甲冑に両腕には銃の様な物が装備され、左腕には今までの槍とは違い斬る事に特化していると思われる槍に・・その背には力強い真紅の翼が現れていた・・私には坊やがまるで龍の化身の様に見えた

「お前だけは・・僕のこの手で倒す・・覚悟しろっ！！」

そう叫ぶと同時に坊やは背中の翼を羽ばたかせ突撃して来た・・

エリオ達を砲撃が飲み込む少し前・・

「ダークネス・・ウェーブ！！」

迫ってくる黒い砲撃から二人を護らないと反射的にプロテクションを張るが

ズキッ・・

洗脳を解く為とは言え自分の右足を切り裂いたのは失敗だったのかもしれない・・踏ん張る事が出来ず徐々にその砲撃が迫ってくる・・

「エリオ君っ！」

「エリオッ！」

自分の後ろに居る、僕が護りたい者の声が聞こえる・・僕は痛む右足に無理やり力を入れる・・だが思う様に力が入らず徐々に後退して行く・・それにプロテクションにも亀裂が入り始めている・・このままでは長く持たない・・それでも2人を護る為に砲撃を防ぎ続ける・・このとき僕が思い出していたのはブリッズとランレ・デルーパとの戦闘時の事だ、僕は2人に護られた・・だから今度は・・僕が2人を護るっ！！僕がそう決意を固め目を開いた瞬間・・世界が停まった・・

「えっ・・？」

突然起きたその現象に驚いていると、急に僕の前に紫色とピンク色の球体が現れていた・・驚きながら振り返るとそこには

「「・・・・」」

腕を組んで祈りを捧げているキャロとルーテシアの姿があった・・2人ともももう限界が近いのに・・それでも僕を助ける為にデュナスとグランドを呼び出してくれたのだと・・僕がそう思うと同時に球体は一気に宙に浮かび上がり螺旋を描きながら、魔力の粒子となり僕に振り注ぐ・・それと同時に聞き覚えの無い声で

ジョグレス・・

静かだが確りと意思の篭った声が聞こえた・・それはまるで包み込むような力強さに満たされていた・・

バサァ・・

僕がそんな事を考えていると何かが羽ばたく音が聞こえた、それと同時に真紅の翼が現れ騎士甲冑が変化していく・・全身を覆っているが重さはまるで感じない・・だが防御力が低い訳ではない・・恐らくグランドより強固だろう・・だが僕が1番違うと感じたのは

「暖かい・・それに感じる・・2人の力を・・」

デュナスやグランドとは違う・・体全体を包み込むような2人の魔力を感じながら、左手に握られていた新しいストラーダを振るった・・

ヒュン・・

それほど力を込めたつもりは無かった・・だがその一振りで僕たちに迫っていた砲撃は跡形も無く消し飛んだ、それと同時にヴィルヘリヤと2体のネクロが視界に飛び込んでくる・・ヴィルヘリヤは何かに怯えるような素振りを見せ、2体のネクロは臨戦態勢に入っていた・・僕は確りとストラーダを握り締めながら

「許さない・・お前だけは・・許さないぞ・・」

この世で一番大事な者を殺させようとした、ヴィルヘリヤを逃がすつもりは無い・・ここで仕留める

「お前だけは・・僕のこの手で倒す・・覚悟しろっ!!」

僕は背中の翼を羽ばたかせ、ヴィルヘリヤ達に向かって行った・・

第９５話に続く

## 第９４話（後書き）

どうでしたか？自分ではそれなりに自信があるのですが・・やはり読者の方の意見が一番楽しみなので、いつもどおり感想をお待ちしています・・それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第９５話（前書き）

エリオ完全強化の完全版です！これで原作で強化が残っているキャラは終わりですね・・これからは魔獣についての話に徐々に踏み込んでいくつもりです、それでは是非最後までお付き合いくれると嬉しいです！！それでは本編始まります

# 第９５話

第９５話

「はああっ！！」

斧を振りかざしながらネクロが迫ってくる、僕はその一撃を防ごうとした瞬間・・その余りの光景に驚いた・・

スパン・・

受け止めた先から斧が無いのだ・・いや正確にはストラーダが斧を切断したのだ、ネクロも信じられないのか

「馬鹿な・・俺の斧が・・」

自分も驚き停止していたが、ネクロより先に立て直しストラーダを振るった

「が・・ぁ・・ば・・か・・な・・」

その一撃は簡単にネクロを両断し消滅させる・・消えていくネクロを見ながら

（・・なんて・・パワーだ・・グランドとデュナスとは比べられない・・）

自分でも驚いてしまう・・この新しい騎士甲冑は強すぎる・・全力を出せばどうなってしまうか全く判らない・・僕がそんな事を考え

ていると

「貴様っ！！よくもパワーを！！」

背中の山から炎を吐き出しながら突進してくるネクロを見て、回避しようとしたが

「！！」

後ろを振り返り回避を出来ないと悟った・・僕の後ろではキャロとルーテシアが倒れていたのだ・・多分この騎士甲冑を具現化させるには恐ろしいほどに魔力を消費するのだろう・・だから魔力の消費で昏倒してしまったのだろう、僕はそう判断し即座にストラーダを手放し

「でやあああっ！！！」

「おらあああああっ！！！」

真っ向から向かって来るネクロの巨体を真正面から受け止めた・・

「逆上せ上がったな！！力で俺に勝てると思うなよ！！」

グッ・・ネクロの体が沈み込み、更に力を感じたが・・それだけだった・・僕の体は一ｍもそこから動いていなかったのだ・・僕は膝蹴りをネクロの腹に叩き込み、そのまま蹴り抜いた

「がはっ・・」

苦悶の声を上げながら跳ね上がったネクロに両腕の銃口を向け

「ポジトロン・・レーザーッ！！！」

螺旋状に収束された魔力波を打ち込んだ

「がああああっ・・・」

その魔力波に飲み込まれていくネクロを見ていると・・背後から

「ダークネス・・ウェーブッ！！」

漆黒の砲撃が迫ってくる、反射的にストラーダを掴み振るう・・それはさっきと同じ様に簡単に消し飛んだ・・その光景を見ながらヴィルヘリヤは

「・・凄いわね・・まるで守護者並みね」

笑っているがその目は強い殺意の色が浮かんでいた・・ヴィルヘリヤは底冷えする笑みを浮かべながら

「まぁ仮に力が守護者並みだったとしても・・坊やには経験が無いわ・・だから・・簡単に・・」

そこまで言うとヴィルヘリヤの姿が掻き消え、背後から

「こういう手に簡単に引っ掛かる・・ナザルネイル・・」

その声を聞いた瞬間、反射的に体勢を低くし横っ飛びに飛んだ・・目標を失ったヴィルヘリヤの黄金の右手は瓦礫の山に突き刺さった・・そして次の瞬間僕は信じられない物を見た・・

ジュワアアッ・・

音を立てて瓦礫が溶けていったのだ・・僕が驚き目を見開いているとヴィルヘリヤは

「うふふ・・私の右手は何でも溶かす・・何でもね・・一撃でも掠ればそこから坊やの体は溶けるわよ・・さあ・・何処まで持つかしらっ!!」

ドンッ!!

ヴィルヘリヤの姿が消える、それと同時に後方に気配を感じストラーダを振るう

ガキーンッ!!

甲高い音を立ててストラーダとヴィルヘリヤの右手が交差する

「あはは・・良い反応よっ!!坊や・・でも何時まで付いて来れるかしら!!」

その声と同時に再びヴィルヘリヤの姿が消える・・僕もフラッシュムーヴを発動させ、ヴィルヘリヤの後を追った・・

ガキーンッ!!・・キンッ!!キンッ!!

目で追うのがやっとという速度の中、何度も何度も僕とヴィルヘリヤの獲物が交差する・・何回打ち合ったか判らない・・でも何回目かの打ち合いで僕は自分の右足に違和感を感じた・・

（・・そうか・・あの傷は治ってないんだ・・）

洗脳を解く為に切り裂いた右足は何も治ってはいないのだ・・この新しい騎士甲冑が恐らく痛みを軽減してくれていたのだろうが・それも限界なのだろう・・僕は一か八かの賭けに出ることにした

ザッ・・

フラッシュムーヴを止めたのだ・・もうスピードでは敵わない・・ならば破壊力で上回るしかないのだ

「カートリッジロード・・」

ストラーダの柄から薬莢が飛び出す、それと同時にストラーダの穂先を3色の魔力光が包み込み巨大な魔力刃となる

「成る程ね・・一か八かの賭けに出たのね・・良いわ・・そういうのは嫌いじゃないわよ」

姿は見えないがヴィルヘリヤの楽しげな声が聞こえた・・だが僕には笑う余裕なんて無い・・掠ればそこから体が溶かされてしまう・・文字通り・・これは命をかけた賭けだ、僕は意識を集中させヴィルヘリヤが来るのを待った・・

ガッ・・

右後方のビルの方から音が聞こえる・・だがそれだけでは無い上下左右から音が聞こえる・・音で撹乱しながら襲うタイミングを計っているのだろう・・僕は目を瞑りながらお父さんの言葉を思い出し

ていた・・敵の姿が見えないとき・・高い確率で

ダンッ！！

後ろから襲ってくると！僕は気配を頼りに後ろにストラーダを振った・・

ガキーンッ！！

甲高い音を立てて僕の右手からストラーダが弾き飛ばされる

「惜しいわね・・考え方は合ってたんだけどね・・遊びはもう終わりよっ！！」

ヴィルヘリヤが向かって来る・・デバイスも無い・・もう駄目か・・諦めかけたが

「まだ・・諦めるわけには・・行かないんだぁっ！！」

左腕に魔力を集中させると同時に地を蹴り駆けだした・・

「ナザルネイルッ！！！」

「紫電一閃ッ！！！」

お互いに渾身の魔力の魔力を込め拳を繰り出した・・

ブシュッ！！

左頬から鮮血が飛び散る・・それと同時に凄まじい痛みが襲ってく

る、体が溶け始めると思ったがそれだけだった・・僕の左手はヴィルヘリヤの胸を貫いていた

「・・私の敗因は・・貴方を・・坊やだと侮った所ね・・私が死んだからナザルネイルの効果は消えるわ・・でも・・私を殺したのは間違いね・・守護者達が戦っている・・ヨルムンガンド・・あれはね最大攻撃のために魔力を溜めてるの・・ヨルムンガンドがその魔力解放すれば・・クラナガンなんて簡単に消し飛ぶわ・・ふふふ・・結局何にもならなかった・・わね・・坊・・や・・」

そう呟きながらヴィルヘリヤは消えて行った・・僕は直ぐにキャロとルーテシアを抱え

「早く・・お父さんに伝えないとっ!!」

お父さん達が居る場所に向かって行った・・

「グルルル・・グオオッ!!!」

突然ヨルムンガンドが凄まじい雄叫びを上げ、それと同時に凄まじい速さで魔力を収束しながら

「アルティメット・・フレアッ!!」

巨大な口を開き出鱈目に火球を吐き出し始める

「なっ・・」

ヨルムンガンドの咆哮に驚き、動きが硬直してしまったヴィータにその1つが向かって行く・・私は即座にヴィータと火球の前に回り込み

「蒼龍・・月牙ッ！！！」

蒼い魔力刃を飛ばし、火球を両断する・・私は上空に居るなのはとフェイトに

「なのは！！フェイト！！1回下がれ！！」

こっちまで下がる様に指示を飛ばす、直ぐに頷き下がってくるなのはとフェイトにシグナムを見ながら、ヨルムンガンドを見る

「グルルル・・グアアアアッ！！！」

さっきまでと違い、出鱈目に炎を吐き出し尻尾を振り回すヨルムンガンドの姿を見ながら

（・・おかしい・・どうしたんだ急に・・）

急に暴れ始めたヨルムンガンドに驚いていると、上空から凄まじい魔力を感じ新しい敵かと思った瞬間

「お父さん！！早くあいつを倒してください！！あいつの目的はクラナガンを消し飛ばすことなんです！！」

その魔力の持ち主は、見たことの無い騎士甲冑をエリオだった・・エリオは背中にキャロとルーテシアを背負いながら焦った様子で声を掛けてくる・・

「はぁ・・はぁ・・この作戦が成功すると・・クラナガンなんて簡単に消し飛ぶ・・そうなんです・・だから早く・・ヨルムンガンドを・・」

そこまで言うと膝を着いたエリオにフェイトが駆け寄った瞬間、フェイトの顔色が変わり

「酷い・・ネクロにやられたの？」

右足に簡単な治癒魔法を掛けながら尋ねるフェイトにエリオは

「・・自分でですよ・・フェイトさん・・敵に操られちゃって・・もう少しで・・キャロとルーテシアを・・殺しちゃう所だったんですよ・・」

血の気の無い顔で言うエリオの横を通りながら

「全員、全力でプロテクションを張れ、一撃で決める」

セレスを呼び出しながら言うとシグナムが

「兄上！！幾らなんでも無茶ですよ！！」

シグナムだけではなく、なのはとフェイトも無茶だと言う、私は一度だけ振り返り

「私がやると言ったらやる・・良いからプロテクションを張っていろ」

それだけ言い、私はヨルムンガンドに向かって歩き出した

「お待たせ致しました・・」

セレスが私の隣に立つ、私はセレスを見ずに

「ユニゾン・・いけるな？」

そう尋ねるとセレスは静かだが確りとした声で

「当然です・・」

私は軽く微笑み

「ならば行くぞ・・あれは目障りだ・・」

セレスとユニゾンを行う・・即座に騎士甲冑が変化する、白銀に輝く鎧とその背に生えた、龍の様な翼・・目の前に現れたには美しい刀身を持つ白銀の剣を握りながら

「パラディンモード・・」

私は剣を握り締め魔力を収束させる・・私は頭上に剣を掲げ

「九頭・・招来・・」

魔力で作られた9体の龍が具現化する・・私が剣を正眼に構えるとヨルムンガンドは

「カタストロフ・・・デストロイヤーッ！！！」

超巨大な熱線を吐き出そうとしていた・・私は即座に駆けだした・・

無茶だ・・幾ら兄上でも1人では倒せる訳が・・無茶だ・・無理だと思うだが・・だが心の何処かで兄上なら・・と思ってしまった・・

「九頭・・龍陣ッ!!!」

「カタストロフ・・デストロイヤーッ!!!」

兄上が剣を振り下ろすと8匹の龍が一斉に突撃して行き、ヨルムンガンドの魔力波とぶつかった・・

「グギャアアアッ!!!」

凄まじい悲鳴が響き渡る・・8匹の龍はヨルムンガンドの巨体を貫いていたのだ・・動きが硬直しているヨルムンガンドに

「はあああああっ!!」

兄上が龍と共に突撃して行き・・次の瞬間白銀の閃光がヨルムンガンドを両断した・・

「グルルル・・・ゴアアアっ・・・・・」

最後に咆哮を上げヨルムンガンドは一瞬で粒子となり消えた・・

カシャンッ・・

兄上は剣を鞘に戻し、こちらに歩いてきた・・その姿は神々しいまでに力強かった・・私がそんな事を考えていると、兄上は

「エリオ達が心配だ・・すまんが先に戻る、なのは達はチンク達と合流してから戻ってくれ・・」

それだけ言うと兄上は気絶していたエリオ達を抱き抱え転移した・・私達は

「あれが龍也さんの本気・・私達とは比べようが無いね・・」

ぼそりと呟く高町の言葉に私は

（・・兄上が本気を見せてくれたのは良かった・・どれほど力の差があるのか判ったからな・・）

私は兄上を護ると決めたのだ・・だから目指すべき場所が判ったのは本当に良かった・・私がそんな事を考えているとチンク達が合流してくる・・私は簡単に事情を説明し、チンク達が納得したところでヘリが到着し私達はヘリに乗り込み六課へと戻って行った・・

第９６話に続く

## 第９５話（後書き）

エリオ超強かったですね～でもこれは色々な要素が組み合わさった結果で、通常時はここまで強くはありません・・でも通常時でもかなりの戦闘力を持っています、まぁ制約付ですけど・・これは次回で判ります・・それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

## 第９６話（前書き）

今回はエリオのデバイスの詳しい話とインターバルの話になります、まぁ・・何時も通りの展開ですね・・バトル→インターバルの流れは（笑）まぁ・・自分ではこうでもしないと上手く話が作れない訳でして、魔獣について気になっている人はもうすこし待ってくれると嬉しいです、それと現在第２部のアンケート中です、詳しくは前の投稿の第２部のアンケートを見てください、投票可能人数は１０人まで、対象も詳しく書いてあるので、御気軽にご参加下さい、途中経過はこうなっています

ハーティーン　２
ラグナ　２
なのは　２
はやて　２
フェイト　３
ヴィータ　１
ウーノ　１
セイン　２
チンク　１
スバル　１
ティアナ　１
セッテ　１

まだまだアンケートの期間中なので参加者をお待ちしています、それでは本編始まります

# 第９６話

第９６話

「シャマル、エリオの様子はどうだ？」

ヨルムンガンド襲撃の夜、医務室でエリオの容態を見ていたシャマルに尋ねると

「そうですね・・かなり負荷が掛かってます・・普通なら掛かるはずの無いレベルでリンカーコアにダメージが溜まってますね」

カルテを見ながら言うシャマルに

「やはりあれが原因か・・」

一瞬だけ見た、エリオの新しい騎士甲冑は私から見ても凄まじい魔力を持っていた、オメガに匹敵・・いやもしかしたらそれ以上の可能性もあった・・だがそれゆえに幼いエリオには過負荷になってしまったのだろう・・私が推測を立てているとシャマルは

「私もそうだと思いますね・・多分いまのエリオでは長くて１０分・・短くて・・５分といった所ですね・・」

やはり私と同じ結論のシャマルに

「そうか・・エリオには私の方から説明しよう・・それでは悪いがエリオを頼む」

シャマルの目を見ながら言うと、シャマルは穏やかに微笑みながら

「大丈夫ですよ、お兄さんエリオはちゃんと私が見てますから、お兄さんもちゃんと休んでくださいね」

私にも休めというシャマルに頷き、私は自室に戻った・・

次の日・・

「ふむ・・まだ眠ったままか・・」

早朝からエリオの様子を見に来たが、依然として眠ったままのエリオを見ながらベッドの横に置かれた椅子に腰掛ける、エリオが眠っているのは何も魔力消費だけではない、足の怪我も大きく関係している傷はかなり深く、そして流れ出た血も可也の量だ、それでエリオは眠ったままなのだ

「さてと・・早く起きないと、キャロとルーテシアが心配するぞ・・」

エリオが寝ている部屋の隣で眠っている、キャロとルーテシアの事を考えながらエリオの髪を軽く撫でた・・昼少し前にエリオが漸く目を開く

「・・あれ・・ここは・・」

何処に居るのか判ってない様子のエリオに

「ここは医務室だ・・それにしても随分無茶をしたものだな?」

場所を説明してから、無茶をしたなと言うと

「お・・お父さん・・えっと・・その・・すいません・・」

ベッドから上半身だけを起こし謝ってくるエリオに

「謝るのは私ではないな、お前が謝るべきなのは誰か判っているな」

そう尋ねるとエリオは神妙な顔で頷き

「はい・・キャロとルーちゃんですよね」

確り判っている様子のエリオに

「別ってるなら良いさ・・さて起きたばかりで悪いが新しいストラーダのモードは余り使うな」

昨晩シャーリーからストラーダの新しい形態の分析結果が来たが、それを見て決めたのだ・・あのモードはまだエリオには早過ぎると、この判断をしたのは私だけではなくフェイトの判断でもある、エリオは少し驚いた素振りを見せながら首を横に振った

「それは・・幾らお父さんの言葉でも聞けません・・インペリアルでなければキャロもルーちゃんも護れないんです・・だから誰がなんと言おうと僕はインペリアルを使います」

はっきりと言い切ったエリオの頭に手を置く、一瞬目を瞑ったエリオ・・もしかしたら殴られると思ったのかも知れない・・私はそんな事を考えながら

「そこまで言うなら私は止めんよ、護りたい者を護りたい時に力が無いのは嫌だからな・・だが今まで以上に厳しい訓練になるが・・それでも構わないか？」

スバルの極光同様あの力は鍛えればノーリスクで使えるようになるだろう・・その為に今まで以上厳しい訓練なるが良いか？と尋ねるとエリオは

「お願いします！！僕は・・もっともっと強くなりたい！！大切な者を護れるように！！」

強い口調のエリオの頭を撫でながら立ち上がり

「判った・・フェイトの方は私で説得しておこう」

かなりの過保護であるフェイトの説得をしようと言いながら医務室を出掛けた所で

「ああ・・忘れる所だった・・2人の姫の気を付けると良い」

そう言うとエリオは

「姫・・？どういう意味ですか・・？」

意味が判らず首を傾げるエリオに

「意味は直ぐに判る・・」

私が部屋を出ると同時にキャロとルーテシアが医務室に入る、私は

ゆっくりと医務室から歩き去りながら、時折医務室から聞こえてくる

「あああ・・ごめん・・ごめん!!無茶したのは僕が悪かったから泣かないで～」

悲鳴にも似たエリオの声を聞き

「ふむ・・ヴァイスが言っていた意味が漸く判った・・」

以前ヴァイスが言っていた、エリオはピンクと紫の鎖に雁字搦めになっているの意味を漸く理解していた・・エリオが目覚めてから3日後・・演習場では

「死ぬ・・死んでしまいます・・」

「もう・・駄目・・一歩も動けない・・」

大の字で死んでいるエリオとスバルの姿があった・・エリオが完全に復帰したので、3日前から言っていた通り訓練を再開したのだが・・案の定ついて来れずこうして大の字で寝

転がっている・・私はその2人の姿を見ながら

「ふむ・・もうギブアップか・・それではやはり極光とインペリアルでの戦闘許可は出せんな」

そう言うと2人はよろよろと立ち上がり

「「まだです・・まだ・・やります」」

はっきりと私の目を見て言う2人に

「そうか？・・無理なら構わんぞ・・唯戦闘許可が出せんと言うだけだからな」

軽く挑発しながら言う、こういう時はあえて挑発し反骨精神を煽る方が良いのだ、案の定2人は

「「無理じゃないです！！まだ行けます！！」」

ふらふらとしていたスバルとエリオは確りと立つ、それを見てから

「ふむ・・では訓練再開と行こうか・・」

外させていたリストバンドを着けさせる、それと同時に

「「うぐっ・・」」

2人の体が沈み込む・・今このリストバンドの負荷は通常の7倍、とてもじゃないが2人の魔力量では動けなくなるレベルだ・・だがあえて高い負荷を体に掛ける事で短時間で極光とインペリアルに耐えれる体を作るのが目的だ、2人がリスト着けたのを確認してから

「走るぞ・・ちゃんと着いて来いよ」

そう声を掛けてから私は走り出した、当然2人は走ると言うよりかはジョギングと言う感じだ、体の重みと魔力の消費でとてもではないが走れる訳が無いのだ・・だが

「どうした！！ちゃんと走れ」

そう檄を飛ばすと

「「は・・はいっ！！」」

意地で走ってくる二人を見ながら、私は六課の敷地の外を走り始めた

「スパルタと言うよりあれは拷問に近いような気が・・」

その訓練光景を見ていたなのはが呟く、それに

「拷問？・・何を言うか・・まだ甘いな・・あのへろへろの状態で模擬戦をした方が良い」

何だかんだで既に六課に一員として受け入れられている、ハーティーンが言う

「模擬戦って・・死んじまうぞ？・・真剣であの２人」

その言葉にヴィータが呆れながら言う、龍也がスバルとエリオの訓練をするって言い始めてまだ３日だが、あの訓練はスパルタを通り越して拷問では？と言う意見が挙っている・・または龍也はドSでは？と言い始めた隊員も居る・・ちなみにその者は粛清の対象になっている・・

「だが・・あれは２人が望んだ事だ・・我々がどうこう言う問題ではない」

シグナムがそう言うと皆

「そうだよね・・自分でやるって言い始めたんだから私達がどうこう言う問題じゃないよね・・」

口々に自分たちが言う問題ではないと言い始める、龍也は訓練が終るたびに辛いなら止めるか?と聞いているがそれでもまだやると言いやっているのはスバルとエリオだ、自分でやると言っている以上第三者がどう言おうが止める筈無いのだ・・皆がそんな事を思っている中・・シグナムが1人で演習場を後にする、それを見てヴィータが

「どうしたよシグナム?兄貴が戻ってくるまで待たないのか?」

そう尋ねるとシグナムは

「・・少し1人で考えたい事がある・・悪いが私は部屋に戻る・・」

そう返事を返し、シグナムは演習場から出て行ったその様子を見て

「何だろうね?シグナムが考えたい事って?」

なのは達があれこれと憶測を話す中、ハーティーン1人だけが

「・・・・」

冷めた目線でシグナムの後姿を見ていた・・

「くっ・・私は弱くなった・・」

私は部屋に戻らず、六課の敷地の一部に結界を張りその中に居た・・
レヴァンティンを構えながら

「もう1度だ・・」

魔力を収束しブラストモードに変化しようとするが・・

バチンッ!!

音を立てて騎士甲冑が解除される・・私は自分の手から離れたレヴァンティンを拾い直しながら

「何故だ・・何故・・ブラストモードに成れない・・」

もう一週間になる・・兄上のユニゾン形態の一撃を見てからもっと強くなろうと思い・・ブラストモードを使いこなす為に訓練をしているのだが・・何故かは判らないがブラストモードが発動出来ないのだ・・いやそれだけではない・・魔力も不安定だし・・体の調子もおかしい・・良く考えればヨルムンガンドの時から体の不調は感じていた・・だがこんな事を誰かに相談する訳にも行かずこうして1人でどうしてか?と考えるが答えは出ない

「こんな様では兄上を護る等と・・夢のまた夢だ・・私は一体如何してしまったんだ・・」

答えの出ない自問自答を繰り返す・・ブラストモードを手にする前まではこんな事は無かった・・強くなる為に手にした力なのに・・その所為で弱体化している等と笑えない冗談だ

「今日は・・もう休もう・・きっと明日には元の戻っているさ・・」

そんな事は無いと判っている・・なのにそう口にし部屋に戻ろうとした瞬間

フラッ・・

急に足に力が入らず倒れかける、慌てて木に手を置きバランスを取る

「くそ・・一体何が・・「お前では王を護る力は無い・・」・・はっ!!・・私は何を・・」

一瞬何かを口走った気がするが思い出せない・・私は疲れているのだろうと思い部屋へと早足で戻って行った・・その姿を見る黒い服の男・・ハーティーンは虚空を一睨みし

「何時まで不干渉を決め込むつもりだ?セレス・・お前はシグナムに起きている現象に気付いているのだろう?」

そう声を掛けると何も無い空間から浮き出るようにセレスが姿を見せ

「不干渉な訳ではない・・唯私でもどうにも出来ないのだ・・あれは烈火自身が乗り越えなければならないことだからな」

そういうセレスにハーティーンは

「まぁ・・俺には興味の無い事だ、シグナムが炎に体を乗っ取られようが取られまいがな・・」

シグナムの不調・・それはブラストモードの力を与えた存在・・ア

イギナが体を乗っ取ろうとハッキングをしているからだ・・セレスは眉を顰めながら

「あれの忠誠心は我々の中でも相当強い・・最初からそれが目的で力を与えたんだ・・」

クレアと違いアイギナやシャルナは夜天の守護騎士の事を認めていない・・それが力を与えた時点でおかしいと気付くべきだったのだ

「ふん・・貴様でも予定外の事か・・守護者は気付いていない・・早く手を打つのだな・・手遅れになる前に」

ハーティーンはそう言い残し戻って行った・・一人残されたセレスは

「手を打てか・・生憎だが・・私でもどうしようもない・・烈火自身の問題なのだからな・・」

そう・・もうセレスでも手が出せる問題ではないのだ・・元々夜天の守護騎士システムのオリジナルはこっちだ・・つまりアイギナにとってハッキングするのは訳が無い事なのだ・・

「こんな事になろうとは・・物事とは思いとおりにならぬものだ・・」

セレスもそう呟き溶ける様に消えて行った・・シグナムの不調の正体・・それはアイギナの存在・・それがどう影響を及ぼすかは・・誰にも判らない

第９７話に続く

## 第９６話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回はシグナムの不調についての話でしたね・・元々この話を組み込むつもりでした・・そもそも天雷の騎士は夜天の騎士の存在が気に食わないのですから、これは当然の流れですよね？・・それでは日曜の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第９７話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回はシグナムの不調編ですね・・読者の方は気付いていたと思いますが、シグナムは大分前から弱体化し始めていた訳ですね、アンテルテート、ヨルムンガンド戦で大した活躍が無かったのはこの話を組み込む為のものでした・・この話が終ればシグナムは本来以上の力を手にするわけですので、今回も楽しんでもらえると嬉しいですそれでは本編始まります

# 第９７話

第９７話

キンッ！！

軽い金属音を立てながら私の手からレヴァンティンが弾け飛んでいく・・今まで長い間戦ってきたが・・こんな事は一度も無かった・・騎士が己の武器を失う・・それは死でしかないからだ・・

「どうしたのシグナム？・・何処か調子が悪いの？」

私の手からレヴァンティンを弾き飛ばした張本人、テスタロッサが心配そうに声を掛けてくる、私は

「大丈夫だ・・少し手が滑っただけだ・・」

自分でも嘘だと判る言い訳をしながら、レヴァンティンを拾い上げ

「私から頼んでおいて悪いが・・模擬戦はもういい・・ありがとうテスタロッサ・・」

礼を言ってから演習場を出ようとすると

「どうしたんだシグナム？・・ここ最近調子が悪いように見えるが・・大丈夫か？」

私達の模擬戦を見ていた兄上が心配そうに話しかけてくる、真っ直

ぐに私を見る兄上から視線を逸らしながら

「・・だ・・大丈夫です・・本当に手が滑っただけで・・兄上が心配する事ではありませんから・・それでは失礼します」

私は早口にそう捲くし立て、逃げるように演習場を後にした・・

「・・・今の気配・・気の所為か・・？」

私は走り去っていく、シグナムの後姿を見ながら呟いた・・一瞬・・そう本当に一瞬だがシグナムからアイギナの気配を感じたのだ・・天雷の書の中で眠りについているはずのアイギナの気配がするわけが無いのだが・・私が首を傾げていると

「龍也、シグナム何処か調子が悪いの？」

バリアジャケットを解除したフェイトが尋ねて来る

「判らない・・本人が違うと言うのだからその言葉を信じたいのだがな・・」

最近のシグナムはどこかおかしい・・体の切れや魔力の収束がまるで出来ていない・・まるで始めて魔法を扱う見習い魔導師の様だ

「・・そうだけど・・でもやっぱり何処かおかしいよ・・さっきの切り払いだってそんなに力を入れてなかったのに・・あんなのでシグナムがデバイスを落とすなんて信じられないよ」

シグナムを心配しているフェイトに

「明日、私がもう1度シグナムに聞いてみよう・・悪いがスバル達の訓練を頼む」

本来なら今日はスバル達とチンク達の訓練を見る日だが、どうしても気になる点がある・・その事を調べようと思い、フェイトに訓練を頼むと言っていると

「納得できませんっ！何故龍也様で無く、フェイトに訓練をして貰うのですか！！私は納得できませんっ！！」

セッテが納得できないと言いながら近付いてくる、良く見ると・・

「・・私・・ばっか・・こんなの・・もう嫌っす・・」

ぐったりとしているウェンディが見える、どうやらセッテを止めようとしていたのだろう・・私がそんな事を考えていると

「聞いているのですか！！龍也様！！どうして私がこんな女の言う事を聞かねばならないのですか！！」

最初はフェイトと言っていたが、遂にはこんな女呼ばわりされたフェイトは明らかに不機嫌になっている

「すまない・・しかしどうしても気になる事があるんだ・・今日だけで良いフェイト達の言う事を聞いて訓練をしてくれないか？」

セッテに頭を下げながら言うと、セッテは慌てたように

「ああ・・私はそんなつもりで言ったのではなく・・と・・とりあえず頭を上げてください・・」

かなり慌てた口調で言うセッテの声を聞きながら頭を上げると、セッテは

「判りました・・龍也様に用事が有るなら我侭は言いません・・言われた通りにします・・」

明らかに気落ちした様子でチンクの所へ歩いて行くセッテに

「本当にすまない・・今度セッテの好きなチーズケーキを焼いてやるからな」

こんな物で機嫌が治ると思えなかったが、そう言うとセッテは

「本当ですね!!楽しみに待ってますからね!!」

飛び跳ねそうな勢いで振り返り笑顔で言うセッテに困惑しながら頷き、私は演習場を後にした・・その際聞こえてきた

「消えろ!!この女狐がっ!!」

「そっちが消えれば良いでしょっ!!」

セッテとフェイトの怒声は聞かなかったことにしたかった・・

「ふむ・・中々興味深い資料だ・・」

私は珍しく遺跡内ではなく、自分のテントの中でチンクから送られて来た、エリオ君の新しいモードインペリアルの情報を解析していた・・魔獣の事も気になるが・・それ以上にこっちを調べる事に興味を惹かれたからだ・・魔獣の詳しい情報があるであろう部屋は既に見つけている・・だがプロテクトが硬すぎて入る事が出来ず、困っている時にこの資料が来た・・気分転換には丁度良いのでこうして解析している

「成る程・・3人の魔力を収束して、データ化した騎士甲冑のデータを造り替えているのか・・」

変化していく過程を見ていて気付いた・・まずデュナスとグランドが粒子化、その後に3人分の魔力でデータ化したデバイスを集め、エリオ君を基点にその情報を上乗せしているのだ、考えてみれば簡単な事、3人分の魔力に3つのデバイス・・その力が強大なのは子供でも判る理屈だ、私はそんな事を考えながら

「だが・・そんな簡単な事に気付かなかった私も子供か・・」

カオスの完成は程遠いと思ったが・・この資料のおかげで完成は近い・・そんな事を考えていると

ピピッ・・

龍也から通信が入る・・よっぽどの事が無ければ連絡を寄越さない、龍也からの通信に何かあったのだろうかと思いながら通信機の電源を入れ

「どうした龍也？何かあったのか？」

軽く微笑みながら尋ねると龍也は神妙な表情で

『何かとは上手く言えないのだが・・シグナムの様子がおかしいんだ』

龍也から見たシグナム君の話を聞いている内に、私は1つの仮説にたどり着いた

「龍也・・これは仮説だが・・シグナム君はアイギナにハッキングされてるのではないか？」

私の考えを言うと龍也は

『お前もそう思うか？・・私も色々考えたのだが・・これにしか思いつかなかったんだ』

そう言う龍也に私は

「それしかないだろうな・・安定しない魔力・・身体能力の低下・・それにシグナム君からアイギナの気配・・その全てが意味している」

私がそう言うと龍也は

『ありがとう・・私の考えで合っているのだな・・少しセレスに話を聞いてみることにする」

統制人格であるセレスなら対処法を知っているかも知れない・・そういう期待を込めた口調の龍也は

『忙しい時にすまない・・だが助かったよ・・私では確証をもてなかったからな』

モニター越しに頭を下げる龍也に

「気にしないでくれ、私だって偶にはお前の役に立ちたいからな・・それじゃあすまないが、私は調べ物があるから失礼するよ」

そう声を掛けてから通信機の電源を切った、私は椅子に深く座り直し

「さてと・・私は私のすべき事をするとしようか・・」

今私が出来る最大の事・・それは遺跡の最深部にある部屋に眠る魔獣についての伝承・・それを知ることだ・・私はそんな事を考えながら、遺跡の最深部のプロテクトの解除作業を始めた・・

「話は聞いていたな・・」

通信機を片付けてから部屋の隅を見ながら言うと

「はい・・聞いておりました・・」

滲み出るようにセレスが姿を見せる、私はセレスの顔を見ながら

「シグナムは今アイギナからハッキングを受けている・・これに間違いは無いのか？」

そう尋ねるとセレスはゆっくりと頷き、そして

「申し訳ありませんっ！！・・私もまさかアイギナがハッキングをしている等と思いもしなかったのです、全てはこの私の責任です」

深く頭を下げるセレスに

「セレス・・頭を上げてくれ・・過ぎてしまった事を変える事は出来ない・・私達がすべき事はシグナムをどうやって元に戻すかだ」

そう言うとセレスはゆっくりと頭を上げたが・・その顔はまるで今にも泣き出しそうな子供の様な顔をしていた

「・・アイギナのハッキングを止めさせる方法は1つだけあります・・ですが・・これにはリスクもあります・・」

セレスの話を聞いた私は

「それしか方法は無いのか？」

確認の為に尋ねるとセレスは

「はい・・これしかシグナムを元に戻す方法はありません」

ぼそりと呟くセレスに私は決断した

「そうか・・それでは仕方ない・・明日・・賭けに出るしかないか・・」

賭け所かこれははっきり言って負けると決まっている言っても良い

勝負だ・・だがこれしか方法が無いのならこれに賭けるしかない

「分の悪い賭けは嫌いじゃないが・・今回ばかりはそうも言ってられんか・・」

勝つか負けるかでシグナムのこれからが決まる・・この勝負は負ける訳には行かない・・私はそう呟きながら窓の外から夜空を見上げた・・明日・・シグナムの全てが決まる

私は自室にベッドに横になり天井をぼんやりと見上げていた・・私の胸の中にあるのは恐怖だけだった・・自分が自分で無くなる様な言い知れぬ恐怖を感じていた

「こんな気持ちは初めてだ・・」

闇の書の騎士だった時にも感じなかった・・感情に私は戸惑っていた・・この気持ちを持った理由は判っている

「兄上・・」

部屋の隅に置かれている、私達と兄上の写真を見る・・普段ならそれで落ち着くが今回は違う

「怖い・・怖い・・私が居なくなってしまう・・兄上の傍から・・」

そう・・私は兄上の傍に入れれば良かった・・確かに恋心を抱いていたのは認めよう・・だがその所為でこうも恐怖を感じるのならば

「私は・・プログラムのままで良かった・・」

そう唯のプログラムとして・・兄上の傍に居れば良かった・・私が望んだ事はきっと間違いだったのだ・・兄上に愛されたいと・・想ったのは間違いだったのだ

「私は・・私は・・心など欲しくなかった・・唯の道具であれば良かった・・」

そう召喚された時のまま・・心を持たず・・道具として存在すれば・・こんな恐怖を感じることは無かったのだ

「私は・・どうすれば・・「私に体を寄越せ・・お前のような弱者は王に必要ない」・・まただ・・私は何を言っているのだ・・」

判らない・・突然意識が途絶え何かを呟く・・その何かは判らないが・・

「それで兄上を護れるのなら・・私は・・それでも構わない・・」

私が消え、別の何かになったとしよう・・自分が消えるのは怖いが・・それで兄上を護れるならば・・私はそれでも構わない・・私はそんな事を考えながら眠りに落ちた・・

第９８話に続く

## 第97話（後書き）

ちょっと今回は珍しく3部構成にしてみました、次回でシグナム編の終わりになると思います、どういう流れでシグナムが元に戻るのか？そこを楽しみにしてくれると嬉しいです、それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第９８話（前書き）

どうも２話連続投稿の２つ目です！！所で話は変わりますが、もう直ぐ１００話し越えですね、目標としては１００話を超えるのを目標にしていたのでもう少しで達成なのが嬉しいですね・・まぁ・・後残っている大きなイベントは、「魔獣について」「最終決戦」「守護者の消失」「蘇る守護者」の４つくらいですかね、プチイベントはまだちょこちょこ残ってますが基本的に大きなイベントは後４つです、話自体は何処まで行くか判りませんが、是非最後までお付き合いください・・それでは本編始まります

# 第９８話

第９８話

「気が重い・・行きたくないな・・」

今日は隊長陣・・つまり私達の訓練の日だ・・兄上と顔を合わせるのが何か気まずくて行きたくないと思ったが

「そうな事は言ってれんか・・早く行って終わりにしよう」

適当な所で書類整理が残っているとでも言って、訓練を切り上げて貰おう・・私はそんな事を考えながら演習場に向かった

「・・・来たか・・待っていたぞ」

演習場では兄上が腕を組んで待っていた、私は

「お待たせしたみたいで申し訳ありません、すぐにでも始められます」

私がそう言うと兄上は鋭い眼光で私を見据え

「そうだな・・すぐにでも始めよう・・」

ヒュン

兄上の姿が掻き消えた思った瞬間、目の前・・いや息と息が掛かる

くらいの距離に兄上が居た・・驚き飛びのこうとすると

「・・悪いが・・少しばかり我慢してくれ」

その言葉と共に抱き寄せられる

「「！！！！」」

見ていた高町やスバル達が声にならない悲鳴を上げてる気がした・・

私がそんな事を感じていると

「・・天雷の炎よ・・今ここに具現化せよ」

兄上がぼそりと私の耳元で呟く、それと同時に

「な・・消える・・私が・・消・・え・・る・・」

凄まじい勢いで私が消えていく・・私は薄れていく意識の中

「信じている・・シグナム・・お前が戻ってくるとな・・負けるなよ」

兄上のその言葉を最後に私の意識は闇に沈んだ

「・・もしかして龍也さんが好きなのってシグナム・・？」

私がそう呟く・・皆もまさかという顔をしている・・そもそも龍也

さんが誰かを抱き寄せる等と滅多に無い事だ・・それが目の前で起きた事に驚いていると、龍也さんがシグナムから離れ臨戦態勢に入る、私はモニターで

「龍也さんが・・好き・・ううん・・シグナムはどうしたんですか？」

一瞬龍也さんがシグナムが好きなのか？と尋ねようと思ったが、その鋭い眼光に何かあると思いシグナムはどうしたのか？と尋ねると

「すぐに判る・・」

龍也さんがそう言うと同時に

「うう・・うわあああああああっ！！！」

シグナムが物凄い叫び声を上げる、その余りの叫び声に

「兄ちゃん！！どういう事や、何が起こってるんや」

はやてちゃんがそう尋ねると龍也さんは

「シグナムはアイギナからハッキングを受けていた、それがシグナムの最近の不調の原因だ・・今からシグナムが元に戻るかどうかの賭けに出る・・失敗すれば・・シグナムは消える」

シグナムが消える・・私達がその言葉に驚いていると

「・・・」

さっきまで叫び声を上げていたシグナムが黙り込み、騎士甲冑を展開する・・それは普段の物ではなくブラストモードだ・・だがその色は禍々しい色に染まっていた・・シグナムが辺りを見渡したと思った瞬間

ジャララッ！！

シグナムの手が振られたと同時に、レヴァンティンがシュランゲフォルムに変化し演習場の壁を出鱈目に斬り付ける、その突然の行動に驚いていると

「暴走が始まったか・・」

ぼそりと呟いた龍也さんは騎士甲冑を展開する、高速戦闘用のブレイカーモードで油断無く拳を構える龍也さんに

「暴走ってどういう意味ですか！？」

龍也さんに言葉の意味を尋ねると

「シグナムとアイギナが今身体の主導権を賭けて戦っている、シグナムが勝てばシグナムは元に戻る、だがシグナムが負ければシグナムはアイギナに吸収され消える・・そして今は1つの身体に2つの意識がある矛盾で暴走しているんだ・・そして私がすることは・・シグナムの暴走を食い止める事だっ！！」

龍也さんが駆け出し、シグナムに向け拳を振るう

ガキーンッ！！

無造作にシグナムは素手で受け止め、がら空きの龍也さんの胴を切り払おうとする、龍也さんは当たる直前に身を捩り直撃は回避したが

ズバッ！！

「くっ・・」

脇腹を右手で押さえながら、シグナムから距離を取る龍也さん

「暴走していてもこの剣筋・・流石はシグナムと言った所か・・だが・・そう簡単に私を倒せるとは思わない事だっ！！」

龍也さんとシグナムの戦いはまだ始まったばかりだ

龍也とシグナムが戦闘している頃

「ここは・・？」

私は気が付いたら、見覚えのある紅の世界に立っていた・・ここは・・確か

「はっ！？」

あたりを見渡していると強烈な殺気を感じ反射的にレヴァンティンを掲げると

ガキーンッ！！

美しい装飾が施された剣とレヴァンティンがぶつかり、火花を散らす私は横薙ぎにレヴァンティンを振るい襲撃者を弾き飛ばす

「ふん・・腐っても守護騎士という訳か・・」

襲撃者は私に力を与えた存在・・アイギナだった・・アイギナは美しい赤色の騎士甲冑を身に纏い鋭い視線で私を睨んでいた

「どういうつもりだ・・何故私を襲う・・」

襲われた理由を尋ねるとアイギナは

「理由・・?そんな事も判らないのか?・・私はお前が気に食わない・・私より弱いのに王の傍に居る貴様が気に食わない・・王の傍に弱者は必要ない・・理由などそれで充分だ」

吐き捨てるように言うとアイギナは剣を構え

「貴様を倒し、貴様の身体を奪い私が王を護る・・貴様はここで私の変わりに眠れ永遠にな」

そう言うと駆け出してくるアイギナに

「そう簡単にはっ!!」

昨日は消えても良いと思った・・だが今は嫌だ・・私は兄上の傍に居たいのだ・・こんな所にで眠りにつくつもりは無い、向かって来るアイギナ目掛けレヴァンティンを振るう

「ふん・・甘いっ!!」

左腕でレヴァンティンを受け止め即座に剣を振るってくる、私は篭手で受け止めようとしたが

「ぐうっ！！」

受けきることが出来ず簡単に弾き飛ばされる、何とか体勢を立て直し着地したが即座に

「はああっ！！」

アイギナが向かって来る、何とかその攻撃を防いでいたが

（このままでは・・駄目だ・・）

力の差ありすぎるのだ・・子供と大人くらい・・私の魔力よりアイギナの方が遥かに上なのだ・・何とかしようと策を練っていると

「このまま逃げ続け・・打開策を得ようという所か・・だがそんな暇は与えんっ！！」

アイギナが剣を振り下ろすとアイギナの背後から無数の燃え盛る剣が現れ

「貫けっ！！」

その合図と共に弾丸の様に打ち出される剣・・一瞬受け止めようと考えたが嫌な予感がし横っ飛びに回避する、剣が私が居た所に突き刺さると同時に剣が爆発する・・これを受け止めていたら私は戦闘不能になっていた・・その余りの威力に驚いていると

「はあああっ！！」

アイギナが突っ込んでくる反射的に受け止めるが、アイギナの力の方が上で簡単に弾き飛ばされる・・何とか体勢を立て直し着地するが・・状況は不利・・それでも・・

「私は負ける訳にはいかない・・私は兄上のところに戻るのだからなっ！！」

地を蹴り駆け出しながらそう叫ぶ、兄上は言っていた・・「信じている・・シグナム・・お前が戻ってくるとな」・・私は兄上のその信頼に応えなければいけないのだ・・私はアイギナ目掛け全力でレヴァンティンを振り下ろした・・

何故諦めない・・こんなにも力の差は明らかなのに・・私は向かって来る烈火を弾き飛ばしながらそんな事を考えていた・・力の差は明らか・・早く諦めれば良い・・そうすれば傷浅い内に終る事が出来るのに

「はあああっ！！」

何度も何度も弾き飛ばされ、ぼろぼろの姿だがその目の闘志は微塵も消えていない、私は桜花で烈火の剣を弾き飛ばし

「いい加減に・・諦めろっ！！貴様では私には勝てんという事がまだ判らないのかっ！！」

そう怒鳴りつけながら烈火の顔面に拳を叩き付ける

「がはっ・・」

口から血を流しながら吹っ飛んで行く烈火を見ながら、自分の右手を見る・・私の右手は震えていた

「くっ・・私は間違っているのか・・」

唯王の傍に居たいと思って何が悪い・・私の存在意義は王の為に存在する事だ・・その私が王の傍に行きたいと願って何が悪い・・

「間違ってない・・私は間違ってない・・」

震える手に力を込め桜花を握り直す、それと同時に

「シュツルム・・ファルケンッ!!」

烈火が矢を飛ばしてくる、それを片手で弾き飛ばしながら・・心の中で叫ぶ・・私だってこんな事がしたい訳じゃない・・私は知っている王がどれほど・・烈火を・・夜天の守護騎士達を想っているか・・王が何より大切に想う者に剣を向ける・・それは何より王の考えに背く事だ・・その事が私の胸を締め付ける・・それでも

「それでも・・私は王の下に行きたい・・もう1度・・王の声を・・あの優しさを・・得たい・・」

太陽の様に包み込むような優しさ・・プログラムである私達を人間の様に扱ってくれる王・・心から思ったのは初めてだ・・この方の

為に剣を振るいたいと・・その為には例え王の命に背く事になっても烈火の身体を手にする必要がある・・だから・・

「恨みは無い・・だが・・お前にはここで眠って貰わなければならないのだ・・」

そう恨みはないのだ・・確かに夜天の守護騎士は気に食わない・・だが王の家族にそんな感情を抱く訳は無い・・こうして敢えて烈火を馬鹿にしたような口調で喋るのは憎んで欲しいからだ・・憎まれれば自身の罪を忘れずに居られるから・・私はそんな事を考えながら駆け出した・・早くこの戦いを終らせる為に

何度打ち合っただろう・・もう数は判らなくなるほど打ち合った・・騎士甲冑は既にボロボロで、レヴァンティンにも無数の傷が入っている・・それでもレヴァンティンを振るうのを止めない・・何故なら私はアイギナの剣を通して、アイギナの感情を感じていた・・彼女の剣にあるのは悲しみだった・・戦えば相手の心が判るなんては言わない・・だが感じるのだ・・ある者は己の信念を貫く為に・・またある者は復讐の為に・・闇の書の時からだ・・剣を通して相手の心を感じる時がある、今回もアイギナの心を感じていた・・アイギナの剣からは悲しみや寂しさばかり伝わってくる・・

（セレスが言っていた・・アイギナの忠誠心は天雷の騎士でも最も強いと）

アイギナは騎士である事に誇りを持っている・・それが王の・・つまりは兄上だ・・の為に戦えないのは相当辛い事であると容易に判る

（どうすればいいんだ？・・私もアイギナも救われる方法は無いのか・・？）

仮にアイギナが勝てばアイギナは心に傷を負う事になる、かといって私が負ければ私は兄上の傍に居られなくなる・・それは嫌だ・・丸く納めるには・・

（これしかないか・・）

ひとつの結論に辿り付き、向かって来るアイギナに向かって駆け出す・・レヴァンティンとアイギナのデバイスが交差する瞬間・・レヴァンティンを手放し素手で剣を受け止める・・刃が私の手を切り裂くが大した問題ではない

「何っ！？」

驚くアイギナに

「やっと捕まえたぞ・・石頭」

逃がさぬように両手でデバイスを握り締めながら、アイギナの目を見て話す

「お前の気持ちは判った・・兄上の傍に居たいと思う気持ちは間違っていないと私は思う・・」

逃げようとしていたアイギナの動きが止まる、その目は何故判る？と言っていた・・私は軽く微笑みながら

「だが私だって兄上の傍を離れたくは無いのだ・・私は兄上の傍に居たいと心から思っている」

デバイスを手放し崩れ落ち掛けるアイギナに

「だから・・こうしよう・・」

私が考えた案を話すとアイギナは

「・・良いのか？・・私が約束を破るかも知れんぞ」

ぼそりと呟くアイギナに

「私はお前がそんな事をしないと信じている、誇り高い騎士であるお前をな」

そう言うとアイギナは少しだけ笑い

「信じているか・・ふふ・・おかしな物だ、ついさっきまでお前を殺そうとしていた者を信じるか・・」

アイギナ笑いながら立ち上がり

「ありがとう、烈火・・いやシグナム・・お前の提案受けさせてもらう」

手を差し伸べてくるアイギナに

「ちゃんと兄上に説明しておいてくれ」

そう言いながらその手を握り返すとアイギナは

「判った・・ちゃんと伝えておく」

そう呟くアイギナに頷くと同時に、紅の世界は消えて行った・・

「どうなったんだ・・？」

私は拳を構えながらそう呟いた、先程からシグナムはぐったりと下を向き動き出す素振りが無い・・戦いは終ったのだろうかと考えていると、急にシグナムは上を向いた・・それと同時に騎士甲冑が音を立てて崩れて行く・・アイギナとシグナムの戦いが終ったのだろうと判断し近付くと

「・・王よ・・」

シグナムは私に気付くと、一言それだけ呟いた

「アイ・・ギナなのか・・？」

シグナムの瞳は金に染まり、髪も若干赤みが掛かっている・・シグナムは・・負けたのか・・私がそんな事を考えていると

「王よ・・シグナムは私を倒しました・・武力ではなく心で・・そして私はシグナムの好意で今ここに居ます」

シグナムの好意？・・アイギナの言葉が判らず首を傾げると

「もう少し・・王とお話したいのですが・・残念ながら・・もう限界のようです・・」

アイギナはそう言うと倒れかける、慌てて受け止めると

「魔力が・・底を尽きました・・申し訳ありませんが・・少し眠りに着かせて頂きます・・」

そう言うと穏やかな寝息を立て始めたアイギナを背中に背負うと

「兄ちゃん!!シグナムは・・シグナムはどうなったんや!!」

はやて達が走ってくる、私ははやて達に

「どうやらシグナムが勝ったそうだが・・良く判らないんだ・・明日アイギナが起きたら詳しく聞いてみよう」

私はそれだけ言うとアイギナを背負ったまま演習場を後にした・・アイギナとシグナムの間に何が起こったのかは明日判るとそう思いながら・・

第９９話に続く

## 第９８話（後書き）

今回は少し長めでしたね・・２部にしようかと思ったんですけど長くても良いやと思いまして、こういう形にしました・・アイギナＶＳシグナムの勝者はシグナムです、力ではなく心で勝利しました・・打ち倒すというのは後編で後腐りが出そうで嫌だったので（笑）それでは明日の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第９９話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回が９９話目ですね・・次回で第１００話です！！自分では人気が無かったら止め様かと思っていましたが、感想をくれる方やアクセス数を見てやる気を出してここまで来れました、まだまだラストには程遠いですが是非最後までお付き合いください、それでは本編始まります

# 第９９話

第９９話

「・・ここは・・そうか・・機動六課とやらだったか・・」

私は自分が何処に居るのか理解し、そして喜んだ・・長い事待ち続けた漸く王の傍に行ける・・これほど喜ばしい事は無い・・私が１人感動に震えていると

「起きてたんですか・・えっとアイギナさんで良かったですよね？」

金髪のおっとりとした感じの騎士が入ってくる・・確か

「湖・・いや・・シャマルだったか・・？」

そう言うとシャマルは

「はい、そうですよ・・所で気分はどうですか？」

気分はどうかと尋ねて来るシャマルに

「とても良い気分だ・・王と同じ場所に入れる・・それだけでとても嬉しい」

そう言うとシャマルは穏やかに微笑みながら服を差し出してくる

「とりあえず・・それを着ていて下さい、今の貴方はシグナムでは無くアイギナさんですから、制服で居られると不味いんです」

そういうシャマルに頷き服を着替える、着替えながらふと

「お前は不安ではないのか?私がこのままシグナムの身体を乗っ取ってしまうとは考えないのか?」

そう尋ねるとシャマルは

「そうですね・・それは考えましたけど・・後で詳しく説明してくれるのでしょう?シグナムと何が合ったのか・・なら私はそれを待つだけです」

そう笑うシャマルに

「そうか・・所でこれはどうやって着るんだ?」

渡されたは良いが着替え方が判らず尋ねると

「はい、判りました・・着方はお教えします」

そう笑うシャマルに礼を良い、私はシャマルの手を借り着替えを終えた

「ふむ・・私の時には無かった服だな・・」

髪を左肩から前に前に降ろしながら呟く・・私が存在していた時はもっと質素な感じだった・・だがこの服は見た目にも綺麗だった

「ありがとうシャマル・・所で王の部屋は何処だろうか？」

着替えを手伝ってくれたシャマルに礼を言い、王の部屋は何処かと訪ねるとシャマルは

「そうですね・・レヴァンティンが教えてくれますよ」

そう笑うシャマルに礼を言い私はその部屋を後にした

「レヴァンティン・・私を王の部屋に案内してくれ」

そう言うとレヴァンティンがゆっくりと私を王の部屋の前へと案内してくれた・・私は王の部屋の部屋の前に立ち

「ここに・・王がいらっしゃるのか・・」

そう思うと気持ちが高ぶった・・嬉しくて嬉しくて仕方が無かった・・私はゆっくりと王の部屋の扉を開いた

「すー・・すー・・」

どうやら王は眠っているらしく穏やかな寝息が聞こえてきた・・私は王を起こさぬようにゆっくりと枕元にたった・・ああ・・なんと幸福な時間だろうか・・ずっとこのままでも良いと思ってしまったが、自分がここに来た目的を思い出し

「こんな事をしている場合ではない・・私はこんな事の為にここに来たのではないのだから・・」

若干惜しいと思いながら、目的地である厨房に立った置いてあった

バンダナとエプロンを身に付け

「さてと・・やるか」

私は騎士だが王の日常生活をサポートをするという面も持っている、つまり料理などは得意なのだ・・ちなみにクレアも料理は出来る、私達の中で料理が駄目なのはシャルナだけだったりする・・その分裁縫などはシャルナが一番得意だ・・私はそんな事を考えながらフライパンを手に取った

「ん・・良い匂いだな・・」

私はキッチンから漂ってくる匂いで目を覚ました、誰が料理をしているのかとキッチンを見て

「シグナ・・いやアイギナ・・か・・」

一瞬シグナムかと思ったが、キッチンに居たのはアイギナだった、アイギナは楽しそうにフライパンを振るっていた・・暫く様子を見ていると

「出来た・・完璧だ」

嬉しそうに笑うアイギナの顔を見ながら私はベッドを抜け出した

「お目覚めになられたのですか、今起こしに行こうと思った所です」

そう笑うアイギナに頷き椅子に座る、机の上にはスクランブルエッ

グとベーコンを炒めた物に、サラダとスープが並べられていた

「どうぞ召し上がってください・・久しぶりなので錆付いているかもしれませんが・・」

そう言うアイギナに

「ありがとう、ありがたく食べさせて貰うよ」

そう笑いアイギナが作ってくれた朝食を口に運ぶ

「うん・・美味しいよ」

味付けはシンプルだがその分身体には良いだろう、私はゆっくりと朝食を食べ終え

「ありがとう、とても美味しかったよ」

そう笑うとアイギナは嬉しそうに

「お口に合い何よりです」

そう笑うアイギナに

「そうだ・・早速で悪いがシグナムと何があったのか教えてくれるか？」

そう尋ねるとアイギナは

「・・話すのは構わないのですが・・王だけに話せば良いのでしょ

うか？・・妹君達にも聞いて頂いた方が良いのでは？」

それもそうかと思い私はアイギナを連れ、ブリーフィングルームへ向かった、ブリーフィングルームではやて達が待っていた、アイギナはモニターの前に立ち

「初めましてになると思う・・天雷の騎士のアイギナだ・・今はシグナムの好意で今日一日だけ身体を借りている」

アイギナの説明を纏めるとこうだ、自分はシグナムに破れたと・・だが武力ではなく心で・・シグナムは戦いの中で私の心の中の悲しみを読み取り、たとえ一日だけでも王の下に行けるようにしてくれたのだと・・今日一日だけシグナムが私の変わりに天雷の書の中で眠り・・身体を一日だけ貸してくれると・・だから今日の夜には元に戻るという事だった・・アイギナは

「例え一日だけも王の傍にいれるようにしてくれたシグナムには、とても感謝している」

その言葉でアイギナは説明を締めくくった・・黙り込んで聞いていた面々だが・・その中ではやては

「そうか・・それでアイギナさんは何をしたいんの？」

何をしたいのかと尋ねるとアイギナは

「何をしたい？・・私は王の傍に居れればそれで良いのですが・・」

首を傾げながら言うアイギナにはやては

「そんだけ？・・他に何をしたいかとかないん？」

アイギナは首を傾げながら

「私は本当に王の傍に居れればそれで良いのですが・・」

そういうアイギナにはやては

「うん・・判った・・アイギナさんは私の敵や無いね」

敵じゃない？何を当たり前の事を言っているのだろう・・私が首を傾げながら

「アイギナが敵じゃないのは当たり前の事だろう？」

そう尋ねるとなのはが

「良いんです、龍也さんには判らない事ですから」

その言葉の意味が判らず私が首を傾げていると、はやてが

「そうや！！アイギナさん折角やから兄ちゃんと遊びに行ったらどうや？」

突然そんな事を言われたアイギナは

「な・・な・・何を・・私は王の配下であり・・一緒に遊ぶ等と恐れ多くて出来ませんよ」

首をぶんぶんと振り無理だと言うアイギナを

「はいはい・・答えは聞いてないから行くで」

むんずとはやてとヴィータがアイギナを捕まえ

「兄ちゃん、アイギナさんにクラナガン案内したってや、準備はこっちでするで」

そう言うとアイギナを引きずって歩いて行くはやてとヴィータに

「お・・王よ!!助けてください!!」

ばたばたと暴れるアイギナに

「はやては言い出したら聞かない・・悪いが諦めてくれ」

そう言うとアイギナは

「そんなぁぁぁ・・」

ドップラーを残しながらアイギナは何処かへと引きずられて行った・・

「私は王の配下だったはず・・如何してこんな事に・・」

私はぶつぶつと呟く事しか出来なかった・・あの後強制的に遊びに行くことが決定し・・こうして王を待っているのだが・・その間も

心臓が爆発しそうになっている

「でも・・王の傍には居れるし・・望みが叶ってると言えば叶ってる・・」

ぶつぶつと呟いていると

「待たせたな・・」

王が姿を見せる、黒の上下に何時ものロングコートを羽織っている・・一瞬その姿に見惚れてしまっていた

「どうした？」

反応の無い私を気遣ってか、王が尋ねて来る

「あ・・すいません少々考え事をしてました・・それではその・・案内をお願いしても良いでしょうか？」

私がそう言うと王は穏やかに微笑み

「ああ、判っている・・行こうか」

そう笑う王の後を着いて、私は街へと向かった・・

「凄いな・・」

私の感想はこれだった・・見る物全てが初めての物だった・・高いビルやデパートという物は私の時代には無かった物で・・こうして歩いているだけでも楽しかった・・目に止まる物その全てが珍しく

気になる度に

「王、これは何ですか？」

と尋ねた、王は嫌そうな顔をせずに色々と教えてくれた、今回私の目に止まったのは車輪のついた店だった、漂う香りから甘いお菓子系統の食べ物だと判るが・・気になり尋ねると王は

「これはクレープだな・・甘いお菓子なんだが・・食べてみるか？」

食べてみるか？と尋ねて来る王に

「はい、食べてみます」

笑いながら言うと王は店主に

「すいません、イチゴのクレープ1つお願いします」

メニューを見て注文をする・・暫くしてから

「はい、お待たせしました。■■■円です」

お金を手渡し王はクレープを持ってくる、私はそれを両手で受け取りながら

「ありがとうございます」

お礼を言ってから1口齧る・・甘い生クリームと酸味の利いたイチゴが合っていて、とても美味しかった

「もぐ・・美味しいです・・これはとても気に入りました」

気に入ったと言うと王は

「それは良かったな、食べながらで良いから行こうか」

私はクレープを齧りながら王の後を着いて回った、管理局の本局とやらに聖王教会等・・私の時代に無いものを沢山見た・・だが楽しい時には終わりが来る物だ・・クラナガンを一望できる丘の上に私と王は居た・・私は丘の上からクラナガンを見ながら

「今日という日は夢の様に楽しかったです・・でも夢には終わりが来ます」

そう言うと王は

「そうか・・もう戻らないといけないのか・・」

私が何を言いたいのか理解してくれた王はそう静かに呟いた・・私は王の前に立ち

「本当に私はシグナムに感謝しています、一度は身体を奪おうとした私に身体を貸してくれた・・シグナムには言葉に出来ないほど感謝しています」

そう言うと急激に身体の力が抜けていく・・どうやらタイムリミットの様だ

「王よ・・シグナムの意識が戻ったら御礼を言って置いてください・・宜しくお願いします・・」

私はそう言うと意識を失った・・いや・・私の本来の居場所である天雷の書の中へと戻って行った・・

一瞬シグナムの瞳から光が消え直ぐに戻る・・その瞳の色はアイギナの物ではなくシグナムの物だった・・辺りをきょろきょろと見回していたシグナムは

「どうしてこんな所に居るのですか?」

どうしてこんな街外れに居るのか?と尋ねて来るシグナムに

「アイギナに街を案内していたからだ」

事情を説明するとシグナムは

「そうですか・・アイギナはそんな事を言っていたのですね」

アイギナの感謝の言葉を伝えるとシグナムはそう呟き

「私にはアイギナの気持ちが良く判った・・騎士である事に誇りを持っている以上、兄上の傍にいたいと思うのは当然の事だと思ったんです」

シグナムは空を見上げながら言う、シグナムは振り返り私を見ながら

「私だってそうですよ・・ずっと兄上の傍に居たいと思っています・・だからアイギナに身体を貸したんです」

そう言うとシグナムは私の手を取り

「さっ、兄上六課へ戻りましょう・・主はやてやヴィータ達が待っていますよ」

言うだけ言うとシグナムは私の手を引いて歩き出した・・私はシグナムに手を引かれながら

（アイギナ・・いやアイギナだけじゃないクレアもシャルナも早く目覚める事が出来ると良いな）

天雷の書の中で眠りにつく3人の騎士の事を考えていた・・

一日だけの魔法・・それは直ぐに消えてしまうけれども・・思い出となり心の中に残り続ける・・今日の出来事はそんな魔法の１つ・・

第１００話に続く

# 第９９話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回はデートと言えるかどうかは判りませんが、デート的なイベントの話でした、アイギナさんが少し嫌な役になっていたので本来の性格を出せる話をと思いこの話を作りました、アイギナさんは少し狂信が入ってますが・・基本的には純真な乙女なんです・・でも純粋過ぎて暴走してしまう事があるんです・・でも根はこの話で出て来たみたいな良い人なんですよ。さて次回は実際に私がよく作る、簡単なデザートの作り方を組み込んだ、日常編の話をやりたいと思っています、それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第１００話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は遂に第１００話です！！目標であった１００越えの小説を書くというのはこれで達成しました！！しかし私はこれで満足はしません、夜天の守護者を完結させなおかつ第二部を書き始める事を新たな目標としました、未熟な作者ですけど頑張っていこうと思います、そして１００話目という事で今回はコラボ小説の前後編と合計三本立てです！！それと今回は本編とコラボの感想は別々にしてくれると嬉しいです、それでは本編始まります

# 第１００話

第１００話

シグナムとアイギナの戦いが終った数日後・・私は珍しく演習場に居た

「・・はぁぁぁ・・・」

ゆっくりと息を吐きながら魔力を収束させる・・それは徐々に眩いばかりの輝きを放ち全身を包み込む・・私はそれを確認してから身体を動かし始める、突き、蹴り、基本的な体裁きを重点的に行う・・その理由は

「思ったより・・スバルとエリオの成長がが早いからな・・」

私でもかなりのスパルタだと思う・・だが2人は私の訓練だけでなく、自主練もやっているせいか、恐らく近いうちにインペリアルと極光での戦闘も無理なくこなせるようになるだろう・・そうなれば後は実践訓練をやらねばならない・・その為には対等な敵が必要だ・・エリオは問題無い・・パラディンにオメガ・・どちらでも良いからだ・・だが問題はスバルだ・・スバルは極光を使う・・すなわち極光を使える相手で無いと意味が無いのだ・・だからこうして極光を扱う為に自主練をしている訳だ・・２時間ほど身体を動かした所で休憩する・・私は額の汗を拭いながら

「ふー流石に疲れるか・・」

極光は体力と魔力を同時に消費する・・その分性能はピカイチなのだがやはり短期決戦向きの技だ

「だが・・スバルの場合・・私とは違うからな・・」

嫌な言い方だがスバルは戦闘機人だ・・私とは身体の作りが違う・・恐らくスバル・・いやチンク達もだが極光をマスター出来れば・・恐らく私以上に使いこなせるだろう・・

「追い抜かれるのも時間の問題か・・」

私はそんな事を考えながら笑みを零した・・若い世代が育つと言うのは良い事だ・・私がそんな事を考え持ってきていたスポーツ飲料を飲んでいると

「・・守護者・・丁度良い所に・・」

獰猛な笑みを浮かべたハーティーンが演習場に姿を見せる・・私は嫌な予感がした・・そしてそれは的中した

「守護者!!今日こそ貴様との戦いに決着をつけてやる!!俺と戦え!!」

ハーティーンは私との決着が付いてない事に拘っており、私の顔を見れば直ぐに戦え、戦えと言う・・私がどうしようかと困っている時・・救世主は来た・・

ブンッ!!

何かを投げた音が聞こえたと思った瞬間

「ぐはぁっ!!・・誰・・だ・・ラ・・グナ・・」

ハーティーンの頭に分厚い辞書が追突し、ハーティーンはその辞書を握り締めながら振り返り停止した・・その視線の先にはあからさまに怒っていますという表情を浮かべたラグナが腕を組んで立っていた・・ラグナは速足でハーティーンの前に立ち

「ハーティーン!!何度言えば判るの!!八神さんに迷惑掛けたら駄目だって!!」

ラグナがハーティーンを怒鳴りつける・・怒鳴られたハーティーンは

「うっ・・いや・・・その・・」

何か言い訳しようとするハーティーンにラグナは

「言い訳なんか聞きたく無い!!私は喧嘩しないで何時も言ってるでしょ!!仲良くしてよ!!それの今日は私の買い物に付き合ってくれるって言ってたよね!!如何してこんな所に居るの!私待ってたんだよ!!」

はーはーっと肩で息をするラグナにハーティーンは

「うっ・・その・・すまない・・待ってる間暇だったんだ・・だからウロチョロしてたら・・守護者を見つけたからつい・・」

謝るハーティーンにラグナは

「だから言い訳は聞きたく無いの!!態度で見せてよ!!」

そう言うラグナにハーティーンは

「ああ、判った・・今すぐ出かけよう！！ほら行くぞ」

ハーティーンはラグナを抱き抱える様に演習場を後にした・・私はその後姿を見ながら

「・・・最凶はラグナか・・」

最凶とも言われるハーティーンだが、彼が頭が上がらない存在・・ラグナの方がよっぽど強くないだろうか・・？私はそんな事を考えながら演習場を後にした・・

「さてと・・何を作るかな・・」

セッテにチーズケーキを作ると言った以上作る必要がある・・だが折角だから他にも何か作ろうと思い考えていると

「兄～」

「お兄様～」

リィンとアギトがエプロンを持って来る、折角だから2人にも教えてやろうと思い、声を掛けておいたのだ・・

「思ったより早かったな・・2人とも・・そうだ！2人は何を食べたい？」

私ではなく食べる側の人・・リィンとアギトに何を食べたいと尋ね

るとアギトは

「私は前食べた兄のえっと・・大福だっけ・・あれが食べたいけど・・でも食べるだけじゃなくて作り方も知りたい！」

大福か・・確か前に作ってやった事が・・中々好評だったが・・チーズケーキと合うだろうか？・・まぁ良いか・・アギトが作りたいと言ってるのだし・・

「判った、じゃあチーズケーキと大福の作り方を教えようか」

2人に尋ねると、2人は笑顔で頷いた・・私もエプロンを身に付けキッチンに向かった・・

「まずな・・ボウルにクリームチーズを入れるんだ」

大き目のボウルにクリームチーズを入れ、泡立て器を手に取り

「これを混ぜるのだが・・2人だと無理だから私がやろう」

このクリームチーズを柔らかくするのは思ったより重労働なのだ・・私は中身が零れないように泡立て器でクリームチーズを柔らかくする・・

「ここに生クリームと砂糖を入れて・・ゆっくりと混ざるんだ」

柔らかくしたとは言え、固形物であるチーズに液体である生クリームを混ぜるのはコツがいるのだ・・アギトに泡立て器を手渡し

「ゆっくりだぞ・・ゆっくり混ぜないと生クリームが零れるからな・

・」

注意しながらアギトの様子を見る

「えっと・・うわ・・うー混ぜにくな・・」

零れそうになる生クリームに苦戦しながら、ぎこちない手付きで混ぜているアギトを見ながら

「よし・・じゃあリィンは卵を割って、薄力粉の用意をしようか？」

リィンに卵を手渡す、リィンは慣れた手つきで卵を割る、その様子を見ながら薄力粉とふるいを用意する

「それじゃあ、薄力粉をふるいに掛けて・・それが終ったらアギトのボウルに薄力粉と卵を入れるんだ」

リィンがアギトのボウルに薄力粉と卵入れている間に、ヘラを用意して

「リィン、これで混ざるんだ」

「判ったです！！アギトちゃんちゃんと押さえてて下さいね・・」

ゆっくりと材料を混ぜ合わせ始めたリィンとアギトを横目に、レモンを用意し果汁を絞っておく・・風味付けにはレモンが丁度良いのだ・・２人が混ぜた材料にレモンの絞り汁を加え、ケーキの型にバターを塗り、そこに材料を全部入れてオーブンに入れる

「良し、これでチーズケーキの方は大丈夫だな・・それじゃあ次は

大福を作ろうか？」

そう声を掛けてから材料を用意する・・材料と言っても漉し餡と白玉粉だ・・白玉粉で大福？と思うかもしれないが・・これで簡単に大福を作ることが出来るのだ

「えっと・・お兄様・・これで本当にお餅が出来るですか？」

リィンが首を傾げながら尋ねて来る私は

「そうだよ・・これで美味しい大福が出来るんだ」

そう笑いながら耐熱のボウルに白玉粉を入れ、そこに水を加えて軽く混ぜ合わせ

「これをレンジに入れてっと・・」

レンジに入れて加熱する・・この際途中で加熱を止めてボウルを取り出し

「うん・・良い具合だ・・」

菜箸で軽く混ぜ、再び加熱する、今度は自動で止まるまで待ち、タイマーが鳴った所でボウルを取り出し、中身を確認する・・白くお餅の様になった、白玉粉を見ながら

「アギト、大き目のお皿に米粉を入れてくれ」

「うん・・判った・・」

アギトがお皿に米粉を入れてくれたのを確認してから、そこにボウルの中身を出して、米粉をまぶしながら細長く丸める・・これで生地が完成する

「おおー本当に餅みたいだ」

「凄いですね・・こんな作り方があったんですね・・」

そのお餅の生地を指で突きながら笑う2人に、パンの生地を切る道具を渡し

「これで1口だいに切るんだ・・こうやってな、やってごらん」

2人が私と同じ様に生地を切った所で

「それでこれを広げて・・」

餃子の皮の様に丸く広げて

「ここに餡子を乗せて・・丸める・・これで完成だ」

見本の大福を一個お皿の上に乗せる

「良ーし・・兄みたいに上手に作るぞ」

「リィンも頑張るですよ～」

作り始めた2人の様子を見る

「ありっ?・・中身が出ちまった?」

「上手く丸まらないです・・」

上手く出来なくて頭を抱えている2人に

「アギトは餡子が多いんだ、それでリィンは生地の伸ばしが甘いから上手く伸びないんだよ」

何処が駄目なのか指摘すると2人は

「えっと・・これで多いなら・・これくらいかな?」

「もうちょっと伸ばして・・これなら上手く出来そうです!」

2人であーだこーだと呟きながら大福を作り・・それから30分後・・

「「出来た（です）!!」」

お皿の上には形は歪だが、リィンとアギトが作った大福が沢山並べられていた・・ちょうど大福を作り終えた所でレンジのタイマーが鳴る

「どうやら、チーズケーキも出来たみたいだな・・それじゃあ冷やして持って行こうか?」

チーズケーキをフリーザーに入れて、急速に冷やす・・本当は自然に粗熱を取るのが良いのだが・・それをやっていては3時のおやつに間に合わない・・なので今回だけフリーザーを使う事にした

「さてと・・飲み物も出来たし・・食堂に持って行こうか？」

チーズケーキを載せたトレーを持ち、私達は食堂に向かった・・食堂でははやて達が既に待っていた・・リィン達がメールで呼んでおいたのだ

「おー兄ちゃん来たか～待ってたで」

にこにこと笑うはやてに

「ああ・・龍也様が私の為に・・ふふ・・」

何か不気味な笑い声を出しているセッテ・・何はともかく楽しみに待っていてくれたようだ、私とリィンとアギトで皆の前にチーズケーキを置いて行く、そして机の真ん中に大福を乗せたお皿を置き

「今日のおやつは、私とアギト達で作ったチーズケーキと大福だ」

そう言うとスバル・・と言うかミッド側の人間が首を傾げ

「えっと・・龍也さん・・大福って何ですか？」

代表としてかティアナが尋ねて来る、私は簡単に説明する事にした

「これはな、地球の代表的なお菓子でな・・和菓子という奴で上品な甘さと食感が特徴だな・・もぐっ・・うん・・美味い」

説明しながら大福を１つ取り齧る・・その様子にスバル達は

「龍也さんが甘い物を食べた！？」

と言いたげな顔で私の顔を見ていた、私は軽く微笑みながら

「まぁ・・甘い物が苦手な私でも食べれる物だと思ってくれれば良いさ・・さてとさっそく食べてくれ」

そう言うと早速セッテがチーズケーキを食べ、嬉しそうに微笑む・・セッテだけではなく皆もチーズケーキや大福を食べて嬉しそうに笑っている・・私がその様子を見ていると、リィンとアギトが

「皆、美味しい、美味しいって食べてくれてるぜ・・兄に料理を教えて貰って良かったぜ」

「リィンもです！皆が美味しいって言って食べてくれるのは凄く嬉しいです！！もっと・・もっと料理を覚えて皆に喜んで欲しいです」

にこにこと笑いながら言うリィンとアギトの頭を撫でながら

「そうか・・それじゃあまた何か料理の作り方を教えてやるからな」

と言うと2人は嬉しそうに笑いながら抱きついて来た

「んふふ・・兄は本当に優しいな・・私は兄が大好きだ」

「リィンもです～お兄様が大好きですよ～」

と言いながら頭を擦り付けてくる2人を見ながら

（今日も機動六課は平和だな・・）

そんな事を考えていた・・平和な一時・・それは何物にも変えがたい宝の時間でもある・・

第１０１話に続く

# 第１００話（後書き）

どうも～１００話目の話はほのぼのメインのお話でした！！最初のハーティーンとラグナの件は違いますけどね（笑）それと今回紹介した大福のレシピは私が実際によく作る物なので、気が向いたらお試しください、私の家の電子レンジは自動で止まるのでタイマー式の場合は上手く行くか自信が無いですけどね（苦笑）またこの大福のレシピにイチゴを加えればイチゴ大福、アンコの代わりにアイスクリームを入れれば雪見大福と、割と凡庸性の高いレシピです・・っと小説には関係の無い話でしたね（笑）次回は遺跡編か、もう１つ日常編かどちらかの予定です、次回も楽しみにしていてくれると嬉しいです、感想もアンケートもお待ちしていますのでどうか宜しくお願いします、それではコラボ小説の前書きでお会い致しましょう

# キャラ紹介　完全版（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！私の小説も１００話を突破し・・漸くラストに向けて動き始めました。そこで今回は新規に私の小説を読み始めた方もいると思い、善サイド、悪サイドのオリキャラ、原作キャラの紹介を改めてやろうと思います・・一部のキャラは新しい設定を紹介していますのでどうか宜しくお願いします、それと今回は番外編の４話連続投稿です、かなり長くなると思いますが・・どうか宜しくお願いします

# キャラ紹介　完全版

## オリキャラ（善サイド）

### 八神龍也

本作の主人公で時空管理局中将の地位を持つ、性格は温厚でとても優しく人に好かれ易い（圧倒的に女性が多い）、使用するデバイスは天雷の書と呼ばれる、夜天の書と同タイプの魔道書、だが夜天の書と違うのはデバイスや戦闘技能を記録している所である。天雷の書は通常モード、ブレイドモード、ブレイカーモードの3タイプがあり、それぞれ魔法戦、剣を使う接近戦、拳を用いた高速戦闘用に特化している。またユニゾン時のみ使用可能なパラディンモードは万能形態でありありとあらゆる戦闘に対応できる、だがこの形態では天雷の書の固有能力のデバイスの召喚、復元が出来ない等の欠点も持つ。また禁忌の魔法を２つ習得しており、１つは固有結界「雪の庭園」（番外編の守護者ＶＳ剣帝参照）もう１つは今だ登場していないが、龍也の狂気を具現化するものである、番外編ではマテリアルズの父親になっていたり（番外編の龍也とマテリアルと聖王と）、仮面ライダーに変身してたりと、活躍の場が多いキャラ。このように人格的にも非常に優れた人物だが、２つほど欠点があり、１つは非常に鈍感である事（現在１３人の女性に好意を寄せられている）点と非常に酒に弱い事である。

### セレス

天雷の書の統制人格、初代リィンフォースに似た容姿を持つが、目の色だけが違い蒼色である。復活した当時は心を閉ざしており全てに対して無反応であったが龍也の優しさに触れ徐々に今の様になる、その点から自分の全てをもって龍也を勝利に導く事が自分の使命だと思っている、性格は超がつくクール美人だが、ぬいぐるみが大好きとファンシー趣味を持つ

アイギナ

天雷の騎士であり司るのは炎である、燃えるような赤い髪に金の瞳を持つ絶世の美女である（外見年齢は１９歳くらい）。龍也に絶対的な忠誠を誓っており、敵対者には一切の容赦をしない、デバイスは桜花と呼ばれる剣型のデバイスを所持する、炎熱の変換素質と優れた接近戦能力を誇る、騎士甲冑は赤を基調に所々に黒と金が施されとても美しい物である。特殊能力として天雷の書に記録された武器を召還することが出来。また召還した武器を弾丸の様に打ち出すことも可能である

クレア

金の髪に空色の瞳持つ少女のような姿をしている（外見的年齢は１５歳である）司るのは風と雷であり二つ名は嵐、騎士の中で唯一二つの変換素質を持つ、予知能力を持つ参謀的な役割もこなすが基本はアタッカーで敵陣に切り込むのが役割である。柔らかい物腰だが基本的にはアイギナと同じで敵対者には一切の容赦をしない。デバイスはユニティと呼ばれる槍で、同時に二つの変換素質を使用する事が出来る唯一のデバイス、騎士甲冑は金を基調とした動きやすい物だが防御力は高い。特殊能力は予言の書でカリムと同等の物だが映像として見る事が出来る（本人のみだが）予言は龍也に関することしか判らず、ほかの事を見ることは出来ない

シャルナ

緑の髪に翡翠色の瞳を持った女性で（外見年齢は２０歳である）氷を司る騎士。騎士の中で最も忠誠心が厚い、丁寧な口調で常に微笑を絶やさないが、敵対者には絶対零度の対応をする、デバイスはケルキオンと呼ばれる杖で高い防御能力と治癒の力を持つ、更に見かけによらず近接戦闘が得意で蹴りや打撃技が得意、騎士甲冑は水色で肩や急所を覆うように展開される、氷系の魔法が得意で冷気を用いた幻術や結界に閉じ込め氷付けにする、魔法を最も愛用する。特殊能力は凍れる世界、全てを包み込む絶対零度の防御幕だが中は柔らかい光に包まれており、役割は傷ついた王や仲間を回復させる時間を稼ぐ為の結界である、外から触れようとすると忽ち強力な冷気の嵐を巻き起こす、完全防御の結界である

ルシルファー・Ｓ・ハーティーン

剣帝と呼ばれる騎士、優れた戦闘力を持ちそのレベルは龍也と同クラスである、正体は古代ベルカで神王と共に戦場を駆けた、超一流の騎士、本編では最初ハーティーンと言う名のデクスで登場している、これは敵幹部のヘルズ、ヴェノムによって記憶を封印されていた事が原因である。また１度表舞台から消えており、理由はラグナを庇いヘルズの攻撃を受けた為、また記憶を取り戻した切っ掛けはラグナの助けを求める声である点から、ラグナの存在は大きなウェイトを占めている。現在は本来のデバイスを失っているがそれでも剣帝の名に恥じない戦闘力を持つ。

原作キャラ

高町　なのは

いわずと知れたリリカルシリーズの主人公、本作ではヒロイン候補の一人ですが、若干影が薄いですね

アンノウンによる撃墜事件が無い為、魔力、体の調子共に原作より上です。護身術を教わっており、デバイス無しでもある程度までは戦闘が可能、無印の開始前から龍也とは面識があり、憧れの存在でもあった。無印終了の地点で憧れは恋心に変わっている、A's編ではヴィータとはやてに目の敵にされており、龍也に近づく事が出来ずストレスが溜まっていた、A's終了後には司法取引で龍也が管理局の隊員になったので。そのストレスも解消された・・不屈のエース・オブ・エースとして知名度は高い為、男性局員の人気も高いが龍也を想っていた為、彼氏がいた経験は無い。ジオガディス襲撃事件の後暫く引き篭もっていたが、はやてに諭され復帰、その後は龍也生存を信じ待ち続けていた、また第67話でレイジングハートが変化し、フォトンという新しい形態を獲得している、これはファントムとの戦闘中にシャルナから譲り受けた力で変化した物で、白のバリアジャケットは青く染まり、背には魔力で構成された6枚の翼を持つ、レインジングハートも姿を変え、一回り大きくなっている、最大の特徴は4つのクリスタルで防御にも攻撃にも使える、背中の翼と巨大化したレイジングハートから女神と言われる形態である

フェイトTハラオウン

なのは同様本作のヒロイン候補ですが、影は薄めです、PT事件の際に龍也に出会い、当初は龍也の事を嫌っていただがアリシアのクローンと言われた際に、龍也に励まされそれ以来は龍也の事を想っている・・また嘱託はやっておらず。普通に管理局に入隊している。

ＰＴ事件の重要参考人として連行されたが、龍也の弁護により無罪放免となった時に完全に恋する乙女になった、Ａ'ｓ編ではヴィータとはやてに目の敵にされており、なのは同様ストレスが溜まっていた・・Ａ'ｓ終了後には司法取引で龍也が管理局の隊員になったので。そのストレスも解消された、また第６９話でバルディッシュが変化し、アルフォースモードを獲得している、これは合成デクス・・キメイラとの戦闘の際に覚醒した物で、バルディッシュの最終形態、美しい青い軽鎧に赤のマントを持ちその姿は魔導師と言うよりかは騎士である、バルディッシュは美しい装飾が施された二つのブレスレットに変化しており、右手からは魔力刃、左手からは盾を発生させる事が出来る、防御に加速、さらには攻撃力まで真・ソニックフォームより上、更に広域殲滅の魔法も行使が出来る最強形態である

八神はやて

本作の最有力ヒロイン候補
幼い頃の龍也を知る唯一の人物で、龍也の好み、苦手なもの全てを把握している（偶に忘れるときがある）
足が動かないときからずっと共に居てくれた龍也を非常に愛しており。幼い頃は龍也に近づく女は皆嫌い発言を良くしていた
当初はなのは達も嫌いでずっと睨んでいた事から、若干ブラコンとヤンデレである
「闇の書事件」終結後管理局の本局に連行されかけたが、司法取引をした龍也のおかげで地球に残る事が出来た。
しかしその際に龍也と大喧嘩をした。理由は自分達の為に管理局に入隊した
シグナム達が現れた際もずっと睨んでおり、シグナム達を困らせた
龍也の胸の怪我はリーゼロッテとリーゼアリアが原因の為、二人の

事は今も嫌いではあるがそれでも改善されたほう
昔は二人を見つける度、殺そうとする事が多数あった（龍也によって全て阻止されている）
ジオガディス襲撃事件の際に言った、大嫌いの事をずっと気にして悩んでいた
現在は恋敵が大量に増えた事から、龍也の鈍感さをもう少し和らげるべきだったかと後悔している
龍也の鈍感は全てはやてが仕組んだ事で、ラブレターや告白しようとした物は排除していた・・また第８２話で、シュベルトクロイツの新形態フォールダウンモードを獲得しており、これは名前通り堕天を意味し、何処までも澄んでいるが何処までも歪んでいると称される心に呼応し変化した姿、禍々しいまでの美しさを持つ、漆黒の騎士甲冑は見ようによっては悪魔の様にも見える事から、漆黒の女神と称される、シュベルトクロイツは攻撃性を高めた剣と杖が一体化したゼローアームズに変化し、スレイプニールはその数を増やし後光の様にも見える、圧倒的な魔力によって天候さえを支配する、文字通り最狂の姿である、重厚なデザインの騎士甲冑は強すぎる力を制御する為の拘束具でもある、風、光、雷、炎、木、土、闇、氷、鋼、水、天の１１種類の魔法の行使が可能で、その中で木、土、鋼の３種類は防御や拘束の為の能力で、その他の属性は高い破壊力を誇る・・またこれに影響されてか若干ブラコン、ヤンデレから・・完全ブラコン、ヤンデレに進化している

烈火の将　剣の騎士シグナム

登場当時は龍也の事を嫌っていたが、同じ家で暮らしている内に、はやてから絶大な信頼を受ける龍也の事を信用し、兄上と呼ぶ様になった。闇の書事件の際、胸を貫かれ自身が瀕死の重傷を受けながらも、はやてを守り続けた龍也の事を尊敬しつつも、無茶をするそ

の性格を直して欲しいと考えている、本作では既に龍也がシグナムを完全に超えているが、昔は龍也の剣の師匠でもあったまた自分の感情を偽らないと決め龍也に好きだと告白している、また第７７話でアイギナの力の一部を引き継ぎ進化した新しい騎士甲冑、ブラストモードを獲得している、これは高い防御力を誇る反面スピードは以前と比べ少し低下している、レヴァンティンは一回り巨大化しているが、以前同様片手で振るうことが可能である、背中の翼は余剰魔力の放出の為に具現化しているが、一応翼と同じ能力を持ち飛行魔法のサポートを行う、新しく左腕にムスペルヘイムと呼ばれるボウガンを装備し、炎で出来た弓矢を放つ事が可能でまた連射能力も高い

紅の鉄騎　鉄槌の騎士ヴィータ

本作のヒロイン候補、登場当時はシグナム同様龍也を嫌っていたが、昔の闇の書の主の夢を見涙を流してる時に龍也に抱きしめられてから。それは消え、龍也の事を兄貴と呼び、非常に愛している・・本作３１話までは原作同様幼女の姿だったが、３１話からは美しい女性になっている、龍也に近づく女は皆嫌いで実力行使に出ることが多いまた、第７５話でクレアの力を完全に引き出し進化した騎士甲冑・・バーストモードを獲得している、これは龍也の魔力光と同じ蒼色で防御力と加速力が強化されている、グラーフアイゼンは形を変え、三日月を思わせる姿になっている、シグナム同様余剰魔力を翼の形に放出している、これはギガントフォルム使用時の体勢制御の為の物である、またギガントフォルム使用時は騎士甲冑が淡く光を放ち背中の翼も一回り巨大化し、髪は白銀に染まる、破壊力が大幅にアップし、鉄槌の２つ名に恥じない攻撃力を取得している

風の癒し手　湖の騎士シャマル

登場当時は龍也の事を嫌っていたが、同じ家で暮らしている内に、はやてから絶大な信頼を受ける龍也の事を信用しお兄さんと呼ぶ様になった。
料理は龍也に教えてもらい、辛うじて食べれるレベルだが、アレンジすると死人が出る
はやてとヴィータの恋を応援している為、さり気無く龍也の行動を誘導している

蒼き狼　盾の守護獣ザフィーラ

登場当時の時から龍也を友好的に見ていた唯一の人物で、龍也に防御魔法の基礎と体術の師匠だった
今は影が薄く、殆ど登場していない

リインフォースⅡ（ツヴァイ）

原作と同じくはやてによって製作されたユニゾンデバイスで八神家の末妹になる。
非常に甘えん坊で龍也の肩の上や胸のポケットがお気に入りである。
また甘えるのは子供の特権を持論にしている
はやてのリンカーコアコピーのだけではなく龍也のリンカーコアの情報もあるため、魔導師ランクはＡＡ＋
龍也とのユニゾンも可能だが、セレスが居るため滅多にユニゾンすることは無い

アギト

古代の融合機で龍也によって救助された。性格は元気でとても明るい。
リィン同様、アウトフレームの能力を有している。魔導師ランクはＡＡ＋で龍也とのユニゾンも可能
炎の変換素質を持つ

ユナ

外見は１０歳前後の少女、長い銀髪に金の瞳を持つ、言動は大人びているが、甘えん坊でぬいぐるみが大好きと子供っぽい所もある
リィンとアギトは仲が良い、同じ融合騎と言う所でシンパシーがあるのかもしれない、魔力ランクはＳＳＳ－と融合騎の中では最高の能力を誇り、龍也だけではなくアイギナやはやてともユニゾン出来るが嫌だそうだ、好きなものは甘い物、嫌いな物は怒った龍也の顔である

アザレア

第二部で登場する新キャラ、非常に人見知りが激しく他人とはまずまともに会話できない、口調はおどおどとした敬語。また常にフードを着用しており、外出時に外れるとパニック状態になってしまう、魔道師としては珍しく直接攻撃系の魔法は一切使用できないが、強制睡眠系や幻、洗脳と言った精神干渉系の魔法が得意、龍也とユニゾンする時はアリウムと同じで黒の騎士甲冑と蝙蝠の翼が展開され、白の手袋が両手に現れます、またユニゾン中は龍也の髪は金に染まる。そしてアギト、リィンと同じくダブルユニゾンが可能で、ユナと同時にユニゾンする事で現存する魔道師、騎士を遥かに上回る能

力を発揮する、またアリウムはアザレアの中から見ており、アザレアが体験している事をアリウムも同時に体験している、自由にアリウムと人格を切り替える事が出来る、また龍也を呼ぶときは兄さんと呼ぶ。
名前の意味　アザレア　愛される事を知った喜び

アリウム

第二部で登場する新キャラ、性格は冷静だが少し上から目線で話す癖がある、魔道師としては極めて凶悪な、抹殺系の魔法を得意とする・具体的には精神を完全に崩壊させ、尚且つ身体も破壊する凶悪な魔法を使うが、龍也の指示で威力を制限している、それでも精神に多大なダメージを与える為、対人ではまず負けは無い、また二種類のデバイスを持ちい近接戦闘にも高い能力を持つ、アームドデバイスとしての能力を使用する際は、ファルクスはデスサイズどちらかに変化する。龍也とユニゾンする時はアザレアと黒の軽鎧と蝙蝠の翼が展開され、白の手袋が両手に現れます、またユニゾン中は龍也の髪は金に染まる。そしてアギト、リィンと同じくダブルユニゾンが可能で、ユナと同時にユニゾンする事で現存する魔道師、騎士を遥かに上回る能力を発揮する、何故アザレアとアリウムと言う2つの人格を持っているのか、アザレアは知らないが、アリウム本人は理解している、龍也の事を呼ぶ時は兄上様と呼ぶ
名前の意味　アリウム　深い哀しみ　この名前が恐らく二重人格になった理由だと思われるが、詳細は不明

スバル・ナカジマ

ヒロイン候補の一人

空港火災の際にダークネスと名乗っていた、龍也に命を救われ、それからは憧れであり目標であった龍也の姿を追い続けていた
見よう見まねのヘブンズナックルを切り札としていたが。チャージの時間及び本来の威力には遠く及ばなかった
戦闘機人であることにコンプレックスを持つが、龍也の優しい言葉を聞いてから完全に恋する乙女と化した
原作ではクイントさんは死んでいるが本作では生存しており、龍也によって再会する事ができた・・また第４４話で天雷の書のデバイスである、ベオウルフと融合し変化したマッハキャリバー改を獲得している、マッハキャリバー改はマッハキャリバー比べ加速力と攻撃力に防御力が大幅に上昇している。真紅のバリアジャケットに、胸部と肩と足には鎧が展開され、左腕には紅い篭手が装着されている、魔力を打ち込む追加能力がある、スバルの突進力を強化する形の為これといって追加能力は無いが、その分基本性能が大幅に上昇している

ティアナ・ランスター

ヒロイン候補の一人
兄であるティーダの死から、無茶な魔法訓練をしている時に龍也に出会い、そこからは龍也の姿を追い続けていた
原作ほど力を求めていない理由は、龍也から送られた言葉が理由で、その言葉を信じ無茶をせず魔法訓練をしていた為、
原作よりも戦術、指揮能力に優れる為、完全な後方指揮タイプになっている。はやてに睨まれても真っ向から睨み返すことが出来る、唯一の人物でもある、また第４５話でクロスミラージュ改を獲得しており、これはマッハキャリバー同様、天雷のデバイスであるシュツルムと融合し変化した物で、主に飛行能力と射撃の精度が上昇し

ている。ベースは以前同様白だが、露出が少なくなり大人っぽい印象になっている、最大の特徴は背中の翼である、またデバイス本体も変化し大型のライフルになっている、手元のレバーで直線と散弾の２タイプに大出力砲の３つに切り替える事が可能であるが、ライフルでの戦闘が難しい場合は元のクロスミラージュに戻す事も出来る

エリオ・モンディアル

基本的なところは原作と同じだが魔力量は原作より多い、龍也の事をお父さんと呼び非常に慕っている。
戦闘技能の向上が見られるが幼い為その全てを使い切ることは出来ていない、また第６４話でキャロの魔力で変化する、ストラーダの新形態デュナスを獲得している、これは加速力と飛行能力が大幅に上昇している形態でスピードを生かした接近戦が得意、更に第８０話でルーテシアの魔力で変化するグランドを獲得している、これは鉄壁の防御でチャンスを待ち、ディメンジョンブレードで敵を両断する、一撃必殺がメインの形態である。そして第９５話で２人の魔力で変化する、究極形態インペリアルを獲得している、凄まじいまでの攻撃力、防御力を誇り、それは下位であれＬＶ４を一撃の下に消滅させるほどである、だがまだ幼いエリオには強すぎる力の為身体に強い負荷をかけてしまうという欠点がある

キャロ・ル・ルシエ

エリオ同様、基本的なところは原作と同じだが魔力量は原作より多い、龍也の事をお父さんと呼び非常に慕っている
他の新人は龍也の訓練で戦闘力の向上が見られるが、キャロの能力

は基本原作と同じだが回避と防御は大幅に上昇している
非常に甘えん坊なのだが恥かしい為、人が居る前で龍也に甘える事は少ない、

ルーテシアアルピーノ

ゼストとメガーヌの娘。性格は穏やかで物静か。
甘い物が大好きで龍也作のケーキが大好物、龍也の近くに居ると安心すると言う理由で、良く近くにいる
ゼストは父だが、結婚するまではお父さんと呼ぶ気は無く、普段はゼストと呼ぶ

ヴィヴィオ

休暇中のエリオとキャロが偶然発見し、機動六課のもとで保護することになった謎の幼い少女。左右で瞳の色が異なるオッドアイ
龍也に非常に懐いており、パパと呼び慕っている。なのは達のことはねねと呼ぶ（ママでは無いのは作者の都合です）非常に甘えん坊で食事の際は龍也の膝の上に座る事が多い。また龍也自身もヴィヴィオに甘い為、ヴィヴィオに懐かれれば非常に有利な立場に立てるため、なのは達もヴィヴィオに懐かれようと努力している、

ジェイルスカリエッティ

原作から完全に離れた人物
マッドな点は残っているが基本的に好人物、第５０話の最後で罪を全て無効とされ、管理局の一員になる

ウーノ達は皆身寄りの無い、子供達で不便に思ったスカリエッティが皆養女として引き取った（それの所為で後に戦闘機人になる）
子供思いで思慮深いが、基本的馬鹿の面と天才の面が同居しており。
突然凶行に出る事がある
龍也に想いを寄せる自分の娘の幸せを考え、色々と入れ知恵するがその全ては逆に出ている（コスプレ、夜這いを進める当り少々・・いやかなりおかしい）その度に龍也の制裁を受けた所為か、常人離れした体力を持つ
龍也とは親友の関係にありとても仲が良い、またプロジェクトFを考案した事を悔いている

ナンバーズ。元は人でネクロにより後天的に戦闘機人化している為、クローン等ではないまた引き取った順番に姉妹になっている為同い年でも姉と妹に別れている。戦闘力は原作より上でその気になればなのは達も圧倒できるがそれはしない。
龍也に好意を抱く者が多いが、その仲でも異性としてか知り合いとしてかが丁度6、6に分かれている（読者の意見で代わるかも知れませんけどね）

ウーノ

基本原作と同じだが、ＩＳの能力に向上が見られる。
義理の父である、スカリエッティに父親以上の想いを抱いている為、ドクターと呼ぶ
龍也には好意持つが異性としてではない、また妹の恋を応援しており、その為服の製作している（コスプレが多い）
若干思考にズレがあり、龍也を困惑させる事がある

ドゥーエ

原作と同じだが、近接技能に向上が見られる。
ＩＳも原作と同じ、妹思いの良い姉である

トーレ

原作以上の近接戦闘の技能を有する。高速戦闘を得意とし、龍也に確実に一撃入れることが出来る
デバイスは所持していないが、充分に高い戦闘力を持つ。

チンク

原作と違い、クアットロの姉である、また容姿は原作より大人びており、ロリではない（それでも背と胸は小さいが・・）
龍也からルナエッジと言うダガー型のベルカ式のデバイスを貰っており、宝物にしている
ヒロイン候補の一人であり、さり気無く龍也の傍に行く技能を修得してるが、そこまで積極的ではない
はやてとも仲が良く、龍也を落とす前にまずはやてを納得させる必要があると認識している

クアットロ

原作より腹黒ではない。妹と事を心配する良い姉であり、暴走する事があるセッテのストッパーでもある

また龍也と誰がくっつくかととても楽しみにしている、仮にそれが姉妹ではなくても龍也が幸せになるならそれでも良いと考えている

セイン

原作に近い性格で人懐っこい面がある、龍也の事は好きではあるが、異性としてではない
悪戯好きで良く姉妹に悪戯を仕掛ける事がある、龍也にも悪戯をした事がある。（下着姿で接近した際、気絶された）
その所為で龍也が女性に弱いと初めて知った人物である。

ディエチ

無口で冷静な性格をしており、原作と同じ。戦闘力は高いが近接は苦手で遠距離戦が得意
龍也の事を非常に気に入っているが異性としてではない。又龍也から砲撃でのサポートを教わっていた

ノーヴェ

スバルに似ているが、其処まで似ているわけでは無い、龍也の事を非常に気に入っており想いを寄せている
ヒロイン候補ではあるが、チンク同様積極的に迫る事は少ないが、龍也の事は大好きである。
近接戦が得意で龍也から受け取ったデバイス、フェンリルを宝物にしている、乙女な部分があり龍也から貰ったリボンをつけるべきか迷っている

ウェンディ

原作同様非常に明るい、龍也が大好きで抱きつき癖があるが、離れろと言われれば直ぐ離れる
それは龍也に嫌われる事を恐れる為の行動である。また龍也から貰ったデバイスバニシングバードが宝物でとても大切にしている
ヒロイン候補の一人

オットー

原作同様一人称が僕だが、普通に女の子の服を着ている、それは龍也に好かれる為の行動であり女物の服を非常に好む
ヒロイン候補の一人で、スカリエッティの案を全て実行に出る為、龍也を困らせるが悪意は無い、また龍也からケルビムと言うデバイスを貰っていてとても大切にしている

ディード

原作より表情が豊かで笑う事が多い、使う技は全て龍也の物を独自に研究し、オリジナルに近い完成度を誇る
ヒロイン候補で、オットーと協力する事が非常に多く、龍也を困らせるが悪意は無く、純な感情の為龍也も強く言うことが出来ない
龍也に作って貰った白のワンピースと龍也から貰ったデバイス、ベルゼルガを宝物にしている

セッテ

原作と違い非常に感情が豊かで嫉妬深い、妄信的な龍也至上主義で龍也とスカリエッティ、ゼスト、レジアスには心を開いているがそれ以外の男性を非常に嫌う。かなりの病み属性を持ち非常に毒舌になることが多く、皆を怒らせようとする

例　はやて　豆狸　ティアナ　オレンジ頭

正しこれは極端に苛々してる時のみで、普段は名前で呼ぶ、また龍也から貰ったソルエッジが宝物でお風呂以外では決して手放す事は無い

クイントナカジマ

原作では死亡してるが、本作では生存している、人の良い好人物で龍也のことを非常に気に掛けている

龍也をナカジマ家に引き入れようとしている為、スバルだけでなくギンガも龍也の事を好きにならないかなと思っている

リンカーコアが破損している為、魔導師としての活動は出来ない

メガーヌアルピーノ

ルーテシアの母親で非常に優しく、母親の鏡と言う感じである

ルーテシアはゼストとの娘で、ゼストとの結婚を考えている

ゼストグライガンツ

原作では半死人で、長く戦う事が出来なかったが本作ではその欠点は無い

戦闘力技能は大幅に上昇しており。魔導師ＳＳ＋ランクで龍也から渡されたアンブロジウスという槍のデバイスを愛用する
またルーテシアの父親で非常に子供思い（親馬鹿）
メガーヌとの結婚を考えている

ここからは悪サイドです！特に新しい設定も無いので今後登場予定のＬＶ４を一体紹介します、なお敗北したネクロも紹介していますではまずはネクロの基本的な設定からです

ネクロ

ネクロマンシーによって再生された、死んだ魔導師のなれのはて。
魔力を喰らう事により成長し４段階の進化がある、また亜種としてデクスと言う種類が存在し、魔力を吸収することで生きている、その為一定期間魔力を摂取しないと自然消滅する、さらにネクロは死者の為回復魔法が効かないという特性を持つ

ＬＶ１
影の様な姿をしており、片言でしゃべり知能も低い・・団体で行動する

ＬＶ２

進化し知能が少し向上した、姿はボロボロの鎧を身に纏う亡霊騎士、特殊な力を持つ

ＬＶ３

更に進化し高い知性と戦闘技能を持ち、更に特殊な力を持つ今まで

登場ではレイジングハートに寄生した者、姿を隠し砲撃した者、等様々なタイプが存在し、人型から獣や様々な姿を持つ

ＬＶ４

進化を繰り返し凄まじい力を取得したネクロ、言葉は片言では無くスムーズに喋る。性格は残虐性が表に出る者、冷静な者様々なタイプが存在し、ここまで来ると人に近いか化け物の二択である、また人型のネクロは大変希少でありその能力も獣型と比べると非常に高い

ダークマスターズ

ＬＶ４に到達すれば基本的にダークマスターズに分類されるが、下位の者はこれには含まれない（本編ではライガがこれに当たる）
各々が派閥を持ち、自身の信念に沿ったネクロを配下としている、また単独行動を好む者は配下が居ない、ヘルズやヴェノムがこれに当て嵌まる・・

ここからネクロの大将達であるダークマスターズの詳細です！！死んだ者・・リタイヤした者もここに書いてあります

ヘルズ

青い鎧に４つの鞘を背負ったダークマスターズの将、正体はジオガディスと長年ともに居た歴戦の騎士で名をカイエル、王国が滅びた際に狂気の書の力により、異形の姿になっている、顔を仮面で隠し大袈裟な素振りで敵を挑発するが、それは自分の力に絶対の自信があり、決して負けないという強い意思から来る物である、特殊能力

は空間転移と重力制御で、単体でも複数戦でも１００％の力を発揮できる、現存するネクロの中ではもっとも長い時を生きている

ヴェノム

紳士の様な服に赤いマントを羽織ったネクロ、ダークマスターズに名を連ねているが実際はＬＶ３であり、本来は支配される立場にあるが、桁並み外れた魔力と頭脳で例外的にダークマスターズになっている。また下位のネクロを改造したり、負けたネクロを実験台にするなど、その行動は狂気じみている・・役割的には参謀であるが、電撃鞭や長い足を使ったミドルレンジの戦闘が得意で、龍也に大ダメージを与えている点から戦闘力も非常に高いと推測される・・特殊能力は吸血、血を吸った対象を完全に支配する・・さらにただ支配するのではなく、自身の魔力を相手の体に流し込む為、血を吸われた相手はネクロに近い存在へ変化してしまう・・またその狂気は原作のある人物に良く似ている

カーズ

漆黒の甲冑を身に纏い、背中に巨大な砲等を背負った龍型のネクロ、正確は非常に好戦的で戦いを非常に好む・・その性格上ヴェノムとは馬が合わない・・特殊能力は無限の悪意・・発動後は全身が一回り巨大化し甲冑が真紅に染まる、強制消滅系の魔法の行使が可能に成り龍也に瀕死のダメージを与えたが、バーストモードに目覚めたヴィータにより撃破される・・その後キメイラに取り込まれ消滅した・・

ブリッズ

不気味な赤黒い鎧に巨大なハンマーを装備したネクロ、性格は無邪気だが・・それ上の残虐性を兼ね備えている、ＬＶ４の中では出来損ないでジオガディスの狂気と魔力に引きずられ進化した為、他のＬＶ４と比べるとその能力は低い・・特殊能力はマギイレイズ・・両手から糸を飛ばし絡め取った相手の騎士甲冑などを強制的に消滅させる・・不意打ちでエリオを殺そうとしたがハーティーンにより命を落とした・・

アンテルテート

巨大な六角形のボディを持ったネクロだが本体は人型の黒い亡霊、ヘルズの次に長い時を生きているためその能力は高い・・筈だったが・・フォールダウンに目覚めたはやてにより完全抹殺される、現在もまだダークブラストによる地獄の苦しみを受け続けている・・特殊能力は反射吸収で、なのは達の砲撃を反射し、龍也をその身に取り込み勝利まで後一歩の所まで龍也達を追い詰めた・・

ランレ・デルーパ

紫色の体に４枚の翼を持ち、両腕に鋭い鉤爪を持った、昆虫型のネクロ、性格は非常に好戦的だが弱者と戦うのを嫌い常に強者ととの戦いに飢えている・・特殊能力は他のネクロと比べると劣り、電撃を自在に使いこなす事だが、ＬＶ４が持つ膨大な魔力を使用する事により、あたり一面を灰にするほどの高威力の稲妻を扱う事が出来る・・現在は自身の体に傷を付けたエリオをターゲットにしている

ヴィルヘリヤ

紫色の法衣を身に纏った妖艶な姿した女性型ネクロ、見た目は完全に人だが右手は異形の手になっている、性格は穏やかで女性その物だが・・一旦戦闘に入ると非常に狡猾でじわじわと敵の戦力を削っていく戦法を得意とする、特殊能力は支配・・対象の精神を完全に支配し自分の手駒とする・・この力はネクロ、デクスにも使用可能で、知能の低い者や暴走する者を制御するのにも用いる、インペリアルに覚醒したエリオの手によって胸を貫かれ敗北している

バラガルト

本編未登場のネクロ、獣人の様な姿に蝙蝠の翼を持ち異形の左腕を用いて戦う、純粋な攻撃力なら龍也を完全に上回るがスピードと防御に難がある、また赤いローブに身を隠した人型形態にも変化する事が出来る・・この形態時は防御とスピードに優れる、特殊能力は激情・・喰らったダメージを一気に反射する・・反射されたダメージは巨大な炎となりあたり一面を灰と化す

ルキルメス

刺々しく禍々しい鎧に骨で出来た翼を持つネクロ、性格は武人そのもので卑怯な事を嫌い、正々堂々戦う事を好む、剣を持つがそれは飾りで基本は素手での戦いを得意とする、特殊能力はヘルズより劣るが重力制御である・・また圧縮した魔力をドリル回転させ打ち込むという変わった魔法も得意とする

ライガ

ルキルメス一派のネクロ、機械で出来た両腕と灰色の体を持つ、迅雷将と呼ばれるＬＶ４のネクロだが下位のＬＶ４でありダークマスターズには含まれない・・性格はルキルメス同様高潔な武人である、３将軍のリーダーであり他の将軍を支配する権限を持つ、迅雷将の名の通り雷を用いた格闘戦が得意、正し３将軍全てはバラバラの性能を持った機械の腕を持ち、ライガは電撃を増幅させる能力を持つ豪腕通称ブリッツアームを持っている

ヒューガ

ルキルメス一派のネクロ、緑色の体と機械で出来た腕を持つ、疾風将と呼ばれるＬＶ４のネクロ、ライガ同様下位のＬＶ４であり、ダークマスターズには含まれない、性格は冷静沈着で常に冷静に戦いを進めるが、卑怯な真似はせず正々堂々の戦いを好む、ＬＶ４の中では最高ランクの素早さを誇り、疾風将の２つ名通り風を用いた戦法を得意とする、ヒューガはライガと違い鋭い魔力刃を発生させる事が出来る腕、通称クリティカルアームを持ち、自身のスピードと組み合わせカマイタチを発生させる事も出来る

スーガ

ルキルメス一派のネクロ、ライガ同様機械で出来た両腕とカーズのパーツを持つ異形のＬＶ４、ヴェノムの実験材料として扱われキメ

イラの素体が完成したさいに破棄された、その後ルキルメスによって回収され、爆流将の2つ名を与えられた、その経験上ルキルメスに絶大な忠誠を誓っている、特殊能力は霧や水を自在に扱う事だが、カーズの∞キャノン、キメイラのヒートバイパーも未完成ながら使用できるため、単体での攻撃力ならライガを上回っている、だが巨体上にスピードが低いという欠点を持つ、スーガはパワータイプの通称アクセルアームを持ち、∞キャノン、ヒートバイパー、破壊力の高い技で敵を圧倒する

ストレイツォ

燃え盛る炎で出来た翼を持ったネクロ、ＬＶ３の中では中の上でその戦闘力は高く、炎を自在に扱い戦う、人質等を取るなど・・卑怯な事も平気に行う、またノワールとは同時に行動する、龍也、ハーティーンのコンビによって敗北している

ノワール

黒い体を持った狼の様なネクロ、ＬＶ３の中では中の上でその能力は高い、雷を自在に扱い高速戦闘を得意とする、性格は少々子供っぽいところがある、またストレイツォとは同時に行動する、龍也、ハーティーンのコンビによって敗北している

グリム

ネクロの中では大変珍しい機龍型のＬＶ４、全身を建設器具に似た物で武装している、他のネクロと違い機械がベースの為、魔力を摂

取しなくても生きていける特殊なネクロ、また自身の体がどうなろうとジオガディスの願いを叶えるという信念に基づき行動する為、自分が幾ら傷つこうが戦いをやめることは無い・・彼が通った後は何も残らないと言われ、ネクロの間でも恐れられている

ディアボリック

獣型と人型の中間に位置するＬＶ４、極めて特殊な能力・・分身を持つ、これは自分のＬＶ１、ＬＶ２、ＬＶ３、ＬＶ４状態のコピーを無限に生み出す事、戦闘スタイルは自由自在に伸びる両手と超強力な砲撃魔法

ここからはデクスの紹介です！！数は少ないですが宜しくお願いします

デクス　ＬＶ１

ヴェノムが作り出した、ネクロの亜種・・ネクロを上回る回復力と戦闘力を持つが知能が非常に低く獣その者である、だが実力は本物で六課以外の魔道師では手も足も出ない程強い・・数ではネクロより少ないが一体でＬＶ２、５体分の戦力を持つが、進化する事が出来ず・・このままの姿で行動する、上位の者はヴェノムによって改造され強制的に進化している物

キメイラ

１５体のデクスを組み合わせ誕生した異形の怪物、闘争本能と殺戮衝動しか持たない正真正銘の怪物、フェイトにより大ダメージを与えられたがカーズを取り込み傷を癒しただけではなく、カーズの魔力も吸収しその能力を格段に跳ね上げた、ヴェノムの最高傑作である、またデクスは進化する事が出来ないが、キメイラだけは例外的に進化を行う事が出来る、恐らくその理由はカーズを取り込んだ事によると推測される

ドライヴォルティス

ヴェノムがハーティーンをベースに作り上げた龍人型ネクロ・・能力は自分の魔力を隠す事だったが、覚醒したハーティーンに一太刀の元に敗北している

ヨルムンガンド

一番最初に作られたデクス、巨大な龍の姿を持ち、頭部等に漆黒の外郭を持つ・・知能は殆ど無く敵味方関係無しに襲い掛かる失敗作・・だがその戦闘力は本物でヘルズでさえ一目置いている・・その巨体を生かし出鱈目に暴れ回るだけだが・・そのシンプルさゆえの恐ろしい所がある、現在はヴィルヘリヤの支配によって制御下に置かれている・・本気になった龍也の一撃で消滅している

そして最後に魔王　ジオガディスの紹介です

ジオガディス

赤黒い騎士甲冑と7枚の黒い翼を持つ、本作中最強の敵、黒塗りの魔剣　ダインスレイフを所持している、ダインスレイフには傷つけた相手の魔力と体力を急速に奪い取る術式が刻まれている為、長期戦は不利である・・正体はセレスの時代より更に前のベルカ近辺の王国最後の王、本来は聖魔王と呼ばれる優しい王、だがベルカとの調停が決まった日に襲撃を受け、愛する者、王国を失い復讐の為に、王国に封印された狂気の書と呼ばれる、ロストギアを使用しカイエルと共に人外の存在に転生している。目的は何十万の魔道師の命を対価に失われた時を取り戻すこと、また第1話登場の際は復活したばかりだったので特徴的な7枚の翼は存在していない・・

????

狂気の書に封印されていた何か・・ジオガディスとカイエルに人知を超えた力を与えた存在・・正体は一切不明だが・・現在も存在していると考えられる・・何故封印されていたのか?・・そしてジオガディスとカイエルに人知を超えた力を与えた目的とは・・?謎に包まれた存在

## キャラ紹介　完全版（後書き）

今までバラバラに紹介していた登場人物紹介を全て纏めて見ました、やはりバラバラより１つに纏めた方が見やすいですよね？今回は番外編４つの更新になりますが、どうか宜しくお願い致します、それでは次の番外編の前書きでお会い致しましょう

# 第１０１話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！本当は日曜更新の予定だったんですけど・・調子が良くて楽に話を書くことが出来たので連日投稿です！投稿するのは１０１話と１０２話と番外編の３本立てです・・本当調子と気分に左右される作者ですが・・今回も宜しくお願いします・・そして今回からは予定通り遺跡編の始まりですね・・謎の魔獣と過去の大戦について判るので楽しみにしてくれると嬉しいです、それでは本編始まります

# 第１０１話

第１０１話

リィンとアギトにお菓子を振舞って貰った日の次の日

「・・ヴェノムが管理局のロストギア保管庫に侵入・・中に保管してあったレリックが全部消滅か・・ヨルムンガンドは陽動だったか・・」

私はレジアスから送られて来た被害報告書を見て顔を顰めた・・レリックはネクロとデクスの食料と言っても良い・・それが全部奪われた・・恐らく戦いの為の準備といった所だろう・・私が考え事をしているとコンコン

「入りますよ？」

ノックの後からなのはが入ってくる、なのはの手には書類が見えた、

「書類か？・・今判子を押す」

持って来た書類に判子を押していると、なのはが私の隣に座り

「どうしたんですか？そんなに難しい顔して？」

心配そうに尋ねて来るなのはに

「ヴェノムがロストギア保管庫のレリックを全て強奪したらしい」

そう言うとなのは、神妙な表情になり

「最終決戦が近いという事ですか？」

そう言うなのはに

「かもな・・だが大丈夫だよ、なのは・・！！」

不安そうな表情のなのはを安心させる為にそう言うと、無言でなのはは私の腕を取り胸の間に抱き抱える様にする・・私が腕に感じる柔らかい感触に私が困惑し停止する・・私が停止しているとなのはは微笑みながら

「例え・・どんな強力なネクロ達が出て来ても大丈夫です・・貴方が私を護ってくれたように・・今度は私が貴方を護る・・その為の力は手にしたつもりです・・だから私を頼ってください」

穏やかに微笑むなのはの顔はとても美しく・・一瞬呼吸する事を忘れた・・なのはは私のその様子に気付いたのか悪戯っぽく微笑みながら

「どうしたんですか？顔が真っ赤ですよ・・」

くすくすと笑うなのはに私は慌てて腕を引き抜き

「なのは・・お前も仕事があるだろう？早く戻ると良い・・」

このままでは不味い・・何か判らないが・・間違いを犯してしまうかも知れない・・だからその前になのはを部屋から追い出し、椅子に深く腰掛け

「ふう・・危うくなのはの信頼を裏切る所だった・・」

私はそう呟き、送られて来た書類に目を通す・・殆どはネクロに対する報告書だった・・だが最後の1枚だけは違い

「ん?合同演習について・・なるほどゲンヤさんの所から、ギンガと何人かの魔道師が来るのか・・」

その書類に判子を押し、そのままはやてのPCに転送し、私は息を大きく吐き出しながら、紅茶を口に含んだ・・

「んふふ・・やっぱり少しは意識してくれてるのかな?」

私は龍也さんの部屋の前から離れながらそう呟いていた・・さっきの龍也さんは明らかに私を意識していた・・それだけでも少しは収穫があった・・以前ならポーカーフェイスを貫いていた龍也さんだが、最近はアプローチを掛けると多少は反応が返って来る・・告白したのが良かったのかもしれない・・

「この反応で判ったね・・龍也さんは私も意識してくれてる・・はやてちゃんやヴィータちゃんだけじゃない・・これが判れば・・」

今日私がやった事には意味がある・・龍也さんが私を女として意識してくれているのか?それを確認する為だったのだ・・

「これを教えに行ってあげないとね」

私は口笛を吹きながらフェイトちゃんの部屋に向け、歩き出した

「・・ん・・なのは？・・どうしたの？」

フェイトちゃんは昨日夜勤だったから・・この時間では寝ていただろう・・だが一刻も早く教える必要があったのだ・・

「ごめんね、フェイトちゃん・・寝てた所悪いけど・・ちょっと部屋に入れてくれる？」

そう尋ねるとフェイトちゃんは目を擦りながら、私を部屋に招きいれてくれた

「・・はふう・・それで何のよう？」

眠そうなフェイトちゃんに

「さっきね・・ちょっと龍也さんにアプローチを掛けてみたの・・と言ってもそんなに過激なのじゃなくて・・腕を抱き抱えた位なんだけどね・・」

そう言うと眠そうなフェイトちゃんは一気に覚醒したのか・・

「私を挑発しに来たの？」

嫉妬の色を目に浮かべるフェイトちゃんに

「違うよ・・私がここに来たのは・・龍也さんが少なからず私の事を、女として意識してくれたって事を教える為・・きっとこれは私だけじゃなくて・・フェイトちゃんも同じ・・言いたい事・・判るでしょう？」

そう尋ねるとフェイトちゃんは

「前に話した同盟の事だね・・でもあの時はなのは嫌だって言わなかったっけ？」

そうあの時は嫌だった・・でも今は違う

「うん・・あの時は嫌だった・・でもそんなこと言ってる余裕が無くなったの・・このままじゃ・・私達は失恋するだけ・・ならそうなる前に手を打つのが大事」

ライバルはかなり増え・・このままでは出遅れるばかり・・こうなったら子供じみた独占欲は捨てて・・どんな手を使っても龍也さんを物にする方が重要だと思ったのだ・・私が言いたい事を理解したのかフェイトちゃんは

「私は協力しても良い・・私は龍也の恋人に成りたい・・1人で無理なら2人で良い・・例えそれが2番目であっても・・私は構わない・・それはなのはも同じ？」

そう言って手を差し出してくる・・私は微笑みながら

「勿論・・私はそれでも構わないよ・・でもそれは私とフェイトちゃんだけに限っての事・・スバルやティアナ・・チンクさん達に・・はやてちゃん達じゃ嫌だ・・」

そう言って手を握り返すとフェイトちゃんは

「ふふ・・そうだね・・私もそう思うよ・・良いよ・・これから2人で頑張ろう・・龍也を私達の物にする為に」

ここに私とフェイトちゃんの協力体制が完成した・・その頃龍也は

「ブルッ!!・・なんだ風邪か・・？」

強烈な悪寒を感じ頭を抱えるとヴィヴィオが

「パパ・・調子悪いの？・・大丈夫？」

小首を傾げるヴィヴィオの頭を撫でながら

「大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

全然大丈夫ではないのに、大丈夫と言いながら微笑んでいたりする

龍也の包囲網が狭まった頃・・天雷の遺跡の外に広がる無数のテントの中では・・

「ふむ・・結合率８９．８パーセント・・ギガスティックランスとライオンハートの調整も大分済んだな・・」

私はテントの中でギガスティックランスとライオンハートの調整を行っていた・・近いうちジオガディス達との決戦が起こるであろう・

・その為には戦力は多い方が良い

「ふーしかしカオスが完成してもな・・プロテクトが解けないしな・・」

遺跡の最深部のプロテクトはまだ解除出来ていない・・複雑すぎて時間が掛かるのだ・・

「解析を始めてもう一週間になる・・予想ではそろそろ解除出来る筈なんだがな・・」

私がブツブツと呟きながらコーヒーを啜っていると、テントに

「ドクターッ!!」

ウーノが慌てて飛び込んでくる、私は飲んでいたコーヒーを吐き出しそうになったが、ギリギリで我慢する事が出来たが・・その代り咽こんでしまった

「ごほっ!ごほっ!!・・どうしたんだウーノ・・そんなに慌てて」

咳き込みながら尋ねるとウーノは

「はぁ・・はぁ・・遺跡の最深部のプロテクトが解除できました・・早く・・遺跡へ」

ウーノのその言葉を聞き、直ぐに準備を整え

「良し・・行くぞ・・」

護身用のギガスティックランスを指に嵌め、私とウーノは遺跡の奥へと潜っていった・・私達が向かうのは魔獣についての伝承が刻まれていた場所から更に奥・・地底深くの1室だ・・その部屋の前には2体の石像がありそれが強固なプロテクトを発生させているのだ・・私は速足で遺跡の中を歩きながら

「しかしウーノがプロテクトを解除するとはな・・大分腕を上げたんじゃないのか？」

笑いながら言うとウーノは首を横に振り

「いえ、私が解除したのではなく何時もの様に解除しようとしていた時、突然石像の目が光ってプロテクトが解除されたんです」

私はウーノの話を聞きながら1つの仮説を立てた、この部屋のプロテクトは時間と共に解除される仕掛けだったのではと・・それなら強固なプロテクトにも納得が行く・・様はタイムカプセルの様な物だったと思えば良いのだ・・そんな事を考えてる内に私とウーノは遺跡の最深部へと到達していた・・私はその部屋の前に立ちゆっくりと扉に手を掛けた

ギギギッ・・

古めかしい音を立てて開く扉の中に私は足を踏み入れた

「・・ここは・・何だ？」

その部屋は不思議な感じのする部屋だった・・他の部屋とは明らかに違う雰囲気だった・・無数の古代文字に・・青いクリスタルが部屋の真ん中に安置されていた・・私は一番近くの石碑を見て

「これは・・やはり魔獣の伝承・・」

その石碑には案の定、魔獣の伝承が刻まれていた・・

「・・魔獣の身体はある王の体内に封印され・・精神は書物の中に封印された・・暫く・・その王は平和に暮らしていたが・・ある日突然・・倒れ・・人間ではなくなった・・体内に魔獣を封印した影響か・・体組織が人間と魔獣の中間の地点に変化してしまった・・彼はその事を知り・・1人・・聖王の元を去った・・こんな人間が居たのか・・まるで龍也の様だ・・」

私はその古代文字を解析しながらそう呟いた・・自分の体に魔獣を封印するなど並みの精神力で出来る事ではない・・私はその王に龍也に似た印象を受けながら、別の石碑の解析を始めた・・そこには

「私は争いを止める為・・禁忌の丘に安置されていた・・生物の遺伝子を使い・・合成獣を作り上げた・・こいつはあらゆる魔力を吸収し、自分の物にする能力を持っていた・・」

それは前に見た科学者の手記だった・・私はそれの解読を夢中で始めた・・この人物の手記こそが全ての謎を解く・・手掛かりになると確信したからだった・・

「魔獣・・何時までも魔獣というのはおかしいな・・私は魔獣にヴェルガディオスと言う名をつけた・・ジオガディスに似た名だな・・何か関連性があるのだろうか・・」

私はヴェルガディオスとジオガディスの関係について考えながら・・解析を始めたが・・その石碑の古代文字は大きく破損しており・・

解読にはとても時間が掛かると思った・・だが私は解読する事を諦めず・・解読を続けた

「ドクター・・そろそろ夕食の時間です・・1回戻りましょう?」

1回外に戻ろうと言うウーノに

「ウーノ・・すまないが・・暫くこの古代文字の解読を進めたい・・悪いが・・おにぎりかサンドイッチを持って来てくれないか?」

そう言うとウーノは眉を顰めながらも頷き・・1回遺跡の外へと向かって行った・・

「ふー中々上手く行かないな・・」

破損が酷く中々解読が進まず・・私が天井を見上げると

キラリッ!!

部屋の真ん中のクリスタルが淡い光を放つ・・私は

「何だ?」

どうしてもそのクリスタルが放つ光が気になり、それに触れた瞬間

「う・・うわあああああっ!!!」

凄まじい光の本流に呑まれ・・私の意識は深い闇へと沈んでいった・

・

第１０２話に続く

# 第１０１話（後書き）

どうでしたか?前半はなのはとフェイトの結託の話・・後半は遺跡編の始まりの話でした・・これから少し太古の争いについての話をやるので龍也達は登場しませんが・・ご理解ください・・それでは次の話の前書きでお会い致しましょう

# 第１０２話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は過去の大戦の記録をジェイルが見ていると言う流れの話しです・・如何せん始めてやるタイプの話なので上手く出来るか・・自信が無いのですが・・どうか宜しくお願いします

# 第１０２話

第１０２話

私はある物を見ていた・・ここは豪華な王宮の中だった・・辺りにある物に手を伸ばすが・・私の手はそれを通り抜ける・・私がその現象に驚いていると・・目の前から騎士甲冑を纏った騎士が走って来る・・騎士は私の存在に気付かないのか真っ直ぐ走って来る

「！！！」

私がぶつかると思い目を閉じた瞬間

スゥ・・

騎士と私はぶつかる事無く・・通り過ぎた・・

「これは・・映像なのか？」

私はここで見ているが、私は居ない人物・・だから触れる事も出来ないし・・話す事も出来ない・・

「ただこれからどうなるか見ているしかないのか・・」

私はそう呟き、騎士の後を追った・・騎士は真っ直ぐに王宮の一番奥の部屋に向かい、その前で跪き

「聖王よ・・再び隣国の騎士達が襲撃を仕掛けてきました・・このままでは我が王国の民が危険です・・どう致しましょう？・・迎撃

の準備は出来てますが・・」

その騎士に聖王と呼ばれた男は

「直ぐに迎撃準備をしろ・・正し敵兵は殺すな・・勿論お前達も死ぬな・・判ったな？」

鋭い眼光の男の言葉に騎士は

「了解致しました・・我が兵は勿論・・敵兵も殺しはしません・・直ぐに迎撃準備を致します」

そう言うと騎士はその部屋を後にした・・残った聖王と呼ばれた男は王座に深く腰掛け

「どうして、隣国同士で争わなければならない・・今この危機を協力して乗り越えるべきなのに・・」

そう呟く男の前に黒い騎士甲冑の男が現れ

「まだ悩んでいるのか・・」

親しい口調の騎士甲冑の男に

「悩みもする・・この大飢饉の時に残った僅かな食料を奪い合い・・罪も無い民が殺され・・親を失った子供達が涙を流す・・こんな事は間違っている・・一刻も早く争いを止めさせなければ・・」

聖王がそう呟くと、王宮がぐにゃりと歪み・・別の風景になっていく・・そこは遺跡のような場所だった

「ここは・・？」

私が突然場所が変わった事に驚いていると、後ろの方から

「ここに全てを終らせる鍵があるのか・・」

茶色の髪をした男がここに足を踏み入れながら呟く・・その男はゆっくりと遺跡の奥に進んで行き

「これが・・禁忌・・」

紅いクリスタルに封印された、何かの肉片の前に立ち止まる・・私もそのクリスタルを覗き込んだ瞬間・・

グオオッ！！！

凄まじい雄叫びと同時に白い体を持った悪魔が飛び出し・・私と男目掛け・・その鋭い爪を向け振るう

ドスッ！！

「なっ・・に・・！？」

映像の筈の爪だが・・確かに身体を何かに貫かれた感触がし・・思わずその場に蹲る・・だが私の身体には何の変化も無い・・

「今のは・・幻・・？だが確かに私は一瞬死んだ・・」

強烈な死のイメージ・・それだけで判るこれに触れてはいけないと・

・男の方も同じイメージを見たのかその場に蹲り荒い呼吸を整えていたが

「・・はぁ!!はぁ!!・・今のが・・禁忌・・だが今の・・私達にはこいつの力が必要だ・・それに今なら制御出来るはず・・かつて制御出来ず・・暴走してしまったこいつの力を平和の為に使える筈だ・・

男はそう言うとそのクリスタルをポケットに仕舞い、引き返して行った・・私も引き返そうと思ったが

「ん?・・これは・・」

遺跡の壁に刻まれた言葉が気になり・・解読を始める・・どうせあの男がここから出るまではここにいれるんだ・・その間に急いで解析を始める

「・・触れてはならぬ・・ここにあるのは偽りの神・・彼の者は決して死なず・・決して滅ぶ事は無い・・彼の者は無限にその姿を持つ・・ある世界では全てを飲み込む黒き闇・・またある世界では死の宣告者・・またある世界では怨霊の王・・またある世界では創世者・・またある世界では滅びを告げる使徒・・またある世界では時空の破壊神・・彼の者はありとあらゆる世界に存在する・・悪意の塊・・決して制御する事叶わず・・もう1度言う・・偽りの神に触れてはならない・・彼の者は全てを壊し・・殺す・・偽りの神?・・無限にその姿を持つ・・?・・平行世界の事を言っているのか?・・まさか私達の世界の偽りの神は・・魔獣なのか・・?・・いや・・くそっ!!頭が回らない・・これは・・?」

衝撃の事実を知った所為か・・頭が上手く回らない・・私が頭を抱

えながら隣の壁を見て目を見開いたそこには

「これが・・偽りの神なのか・・」

沢山の姿がそこには描かれていた・・だがその中で私の目に止まったのは・・他のとは明らかに雰囲気が違った・・髑髏の様な文様が胴体に浮かびその背には４枚の翼がある姿だった・・だが肩や足には装甲といえば良いのだろうか？・・それが無い為他のと比べると弱そうに見えたが・・その姿がどうしても私の頭の中に残った・・私がその石碑から視線を逸らすと同時に再び世界が歪み、場所が変わる・・そこは研究施設のような場所だった・・

コポコポ・・

緑色の培養液の中に紅いクリスタルが収められている・・男はキーボードの様な物を叩きながら

「・・制御ユニットと・・破壊、殺戮衝動を極限まで抑えて・・従順な生物へと生まれ変わらせるんだ・・」

ブツブツと呟きながら幾つものディスプレイを展開し、凄まじい勢いでプログラムを組み上げていく・・私はそのクリスタルを見ながら

「偽りの神・・か・・！！そんな・・馬鹿な・・」

私がそう呟いた直後、紅いクリスタルの肉片からギョロリ！！と言う音を立てて目が現れ私を凝視する・・いや・・私を見ているのではない・・私の背後にいる男を見ているのだろう・・その肉片は徐々に大きくなって行く・・・

「何という速さで成長してるんだ・・」

最初は本当に小さな肉片だったのだ・・だが今は・・

「おおっ！もうここまで再生しているのか・！！素晴らしい・・これで・・これでこの争いは終るんだ・・」

私を押しのけるように男が培養液の中の異形を見つめる・・そこには

「ギチギチ・・」

４本の腕を持つ何とも形容しがたい形状の生き物が居た・・男はその生き物を見ながら

「これほどの成長スピードならば・・直ぐに戦場に出せる・・そうすれば・・この無意味な争いも終る・・やった・・やったぞ・・私の苦労はこれで報われる・・」

そう言うと男は椅子に深く腰掛け眠りに落ちてしまった・・私は嫌な予感を感じながらもその生き物を見ていた・・すると黒い目が真紅に光り・・明らかに理性の色を灯す

「ギギ・・アワレナオトコダ・・ワレノチカラヲ、セイギョデキルナドトムソウヲイダクトハ・・」

培養液の中から這い出しながらその生き物が呟く・・すると異形の身体が光り

「もう・・ココまで再生シタカ・・」

子供と同じサイズにまで変化する生き物・・白い身体に二本の角・・
そして鞭の様な両手を持った異形は

「前ヨリ・・ワレは強くナル・・誰モ・・ワレをトメルコトハ出来
ない・・そして・・今度コソ・・この世界をホロボス・・」

異形はゆっくりとそう呟きながらディスプレイの前に立ち

「ワレを制御する事はデキナイ・・こんな物は・・コウシテクレル・
・」

鞭のような腕でディスプレイを操作し・・直ぐに離れる

「コレデ良い・・ワレが完全体にナル頃には・・前ヨリ・・我は強
くナル・・ククク・・楽しみダ・・それまでは従順な・・ふりをして
おくカ・・」

そう呟くと異形は再び培養液の中に戻る・・そして異形の目からは
理性の光が消える・・

「・・寝てしまったのか・・んん・・」

男は椅子の上で大きく身体を伸ばし、培養液の中を除きこみ

「！！もうこんなに成長しているとは・・私の方も急がねば・・こ
いつをより強くする必要もあるしな・・」

そう言うと男は凄まじい勢いでキーボードを叩き始める・・そして
ディスプレイに私が遺跡で見た、偽りの神と同じ姿のＣＧの様な物
が映し出される

「ここは・・こうして・・ここはこうだ・・」

そのCGの偽りの神の肩や足に鋭利なデザインの外骨格が追加されていく・・私はその男を止めようとしたが

「・・ここは過去だったな・・私ではどうする事も出来ないか・・」

そう呟き私は培養液の中の異形を無言で見ていた・・すると再び景色が歪み風景が変わっていく・・

「・・お前に名前を与えよう・・」

場所は前と同じ研究施設の中だったが・・窓から見える風景は辺り一面の白銀の世界だった・・

「ギギ・・ギチギチ・・」

培養液の中の異形は更に前より成長し・・完全な人型になっていた・・白い身体に2枚の翼・・そして鋭利な尻尾を持ち・・角も一回り大きくなっていた・・鞭のような腕は普通の腕へと変化していた

「お前の名はヴェルガディオス・・この無意味な争いを終結に向かわせる存在になるんだ・・」

その男はその異形に希望を見ていたのだろう・・だが前に見た遺跡の伝承通りなら・・この男は希望でなく絶望を見る事になる

「ヴェルガディオス・・お前の出番だ・・行けっ!!」

男の指示に従いヴェルガディオスはその翼を広げ、飛んで行った・・
己が完全体となる為に・・

第１０３話に続く

# 第１０２話（後書き）

どうでしたか？遺跡の魔獣編は？少しは謎が解けたでしょうか？・・でもこれはまだ前編であり後編で魔獣は暴走し・・いえ・・本来の・・偽りの神として動き始めます。それと前に書いた「ある世界では全てを飲み込む黒き闇・・またある世界では死の宣告者・・またある世界では怨霊の王・・またある世界では創世者・・またある世界では滅びを告げる使徒・・またある世界では時空の破壊神」はそれぞれＦａｔｅのアンリマユ、ペルソナ３のニュクス、第三次スーパーロボット大戦α　終焉の銀河へのケイサルエフェス（こいつだけうろ覚えです）ネギまの始まりの魔法使い、ディーグレイマンの千年公とノアの一族を指し・・最後はデジモンのズィードミレニアモンを指しています・・まぁ・・単純に言って自分が印象に残っている悪役を出したかっただけなんですけどね・・次回は魔獣の後編と神王の話と続いていきます、今回と同じ感じで流れていくのでご理解ください、なお感想やアドバイスは常時お待ちしています、それでは３本だての最後は番外編です！それでは番外編の前書きでお会いしましょう

# 第１０３話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！３話連続投稿の２話目は本編です！！内容は魔獣編の後編になりますね・・やはり前回と同じく話が流れて行くと言う形の物語になりますが・・どうか宜しくお願い致します

# 第１０３話

第１０３話

ヴェルガディオスは偽りの神の名に相応しく・・恐ろしいまでの強さを持っていた・・

「何だ!!こいつは!!・・うっわあああああああっ!!!!」

両腕から触手が飛び出し、次々と騎士達を絡め取って行きその魔力を吸い取っていく・・魔力を吸い取り終わると

「ううっ・・」

騎士甲冑が解除された騎士から興味が無くなったという素振りで手放し、次の獲物を探しに行く・・

「これがヴェルガディオス・・まるでネクロの様だ・・」

魔力を吸収し成長する・・それは正しくネクロに似た特性だった・・私がそんな事を考えているとヴェルガディオスの背後から男が現れ

「ヴェルガディオス!次はこっちだ!」

指示を飛ばす、するとヴェルガディオスはコクリと頷き指示通りに動く・・その姿を見て

「まだ偽りの神として・・動いていないという事か・・だが・・それも時間の問題か・・」

私から見てもヴェルガディオスの魔力は大幅に上昇している・・近い内に更に進化するだろう・・次の進化を遂げた所で・・ヴェルガディオスはこの男の手元を離れるだろう・・私がそんな事を考えながら男の後を着いて行き・・そしてその時は来た・・１００人近い騎士の魔力を吸収し終えた所で

「ギギ・・ギィィィッ！！！！」

凄まじい叫び声と同時に黒い光を放ち、ヴェルガディオスの身体が大きくなって行く・・全体的に一回り巨大化し・・顔を仮面が包み込む・・そして２枚の翼は４枚にその数を増やす・・そして瞳に理性の色が灯る・・ヴェルガディオスはその翼で空を舞いながら

「くく・・ははははっ！！！！」

身が竦むようなおぞましい声で笑い声を上げる、ヴェルガディオスに男が近付く

「ヴェルガディオス・・？どうしたんだ・・」

何が起こっているのかわからないと言う表情の男にヴェルガディオスは

「どうしただと・・くく・・愚かな人間如きが我を完全に支配できる等と思っていたのではあるまいな！」

その口調に男は

「ま・・まさか・・偽りの神・・なのか・・？」」

震える口調の男にヴェルガディオスは

「その通り・・我は偽りの神・・だがヴェルガディオスと呼ぶが良い・・貴様は我を復活させてくれた・・だから今は殺さぬ・・貴様は最後の最後に絶望と共に我の手で殺してくれる・・ふふ・・ははははっ!!!」

そう笑うとヴェルガディオスはその４枚の翼を羽ばたかせ消え去った・・残された男は

「わ・・私は・・なんと言う事を・・はっ!・・後悔している場合じゃない、早く聖王様に伝えに行かなければ!!」

そう言うと男は駆け出して行った・・それと同時に景色が歪み・・王宮の中へ変わる・・

「あの化け物が・・封印されていた・・偽りの神だと言うのか?」

王座に座る聖王に言われた男は俯きながら

「はい・・その通りです・・」

そう言う男に回りに男達から

「「何て事を」」

「「貴様・・どう責任を取るつもりだ!!」」

等の罵声が跳ぶが・・

「黙れ！！私達に彼を責める資格は無い！！」

その怒声に男達は黙り込む・・それを見てから聖王は科学者の前に立ち

「あれを倒す方法は？」

科学者は顔を青褪めさせながら、首を振り

「残念ですが・・私はその方法を知りません・・私は偽りの神・・いやヴェルガディオスを蘇らせ・・強化しただけなんです・・倒す方法も弱点も判らないのです」

聖王は難しい顔で背後の男達を見て

「状況は判ったな・・今は私達がいがみ合っている場合じゃない、協力してヴェルガディオスに立ち向かう時だ」

背後の男達はゆっくりと頷き椅子から立ち上がる

「行くぞ・・事態は深刻だ・・このままではこの国・・いやこの世界の騎士や民は全滅する・・その前にヴェルガディオスを倒すぞ」

そう言うと聖王達は王宮から出て行った・・だが1人だけ残り科学者の前に立つ・・それは黒い騎士甲冑の男だった

「・・本当に倒す方法が無いのか・・？」

科学者は一瞬肩を震わせる・・その素振りを見て黒い騎士甲冑の男は

「あるんだな・・倒す方法が・・教えろ・・これは命令だ」

そう言われた科学者は首を振り

「申し訳ありません・・幾ら貴方様の命令でも従う事は出来ません・・この方法だけはどうしても教える訳には・・」

そう言われた騎士は科学者の服の襟を掴み、無理やり立ち上がらせ

「教えろ・・俺に・・聖王の血統の人間の命令が聞けないのか！」

聖王の血統！・・この男も王位を継承する権利を持っているのか・・私はその男の言葉に驚きながら、２人の会話を聞き逃さぬように意識を集中した・・科学者は・・声を搾り出すように

「倒す方法は無いです・・ですが・・封じる方法はあります・・」

科学者は騎士に耳打ちし離れる・・騎士は

「それしかないんだな・・？」

確認を取るように尋ねる・・科学者はそれに頷いた

「そうか・・判った・・礼を言う」

騎士はそう言うと王宮の外へ出て行った・・それと同時に再び景色が歪み場所が変わる

「くそっ・・どうなってるんだ・・こいつの身体は！！」

男がそう言いながら剣を振るうが

「くく・・貴様達如きが１０００人集まろうが・・我には勝てんぞ」

ヴェルガディオスは左腕を槍に変え、その男を刺し貫く

「が・・がはぁっ・・」

ドクン・・ドクンッ!!

その男から強烈な勢いで魔力が吸い取られる・・見る見るうちにその男がミイラになり、灰となり消える

「くく・・こんな奴ら如きの魔力でも・・充分だな・・」

ヴェルガディオスの身体は更に変化する・・一回り巨大化し・・胴体に髑髏の文様が現れる

「漸く・・漸くだ・・やっと・・我は完全体になったんだ!!ククク・・ハハハハッ!!」

高笑いをするヴェルガディオスの背後に3人程の男の姿が見える・・1人は聖王で、後の2人は科学者を怒鳴りつけていた男達だった・・3人とも身体から血を流し・・瀕死に近い有様だった・・そんな中・・空から黒い騎士甲冑の男が現れる

「俺が相手だ・・化け物」

剣を抜き放ちながら言う騎士にヴェルガディオスは

「クク・・化け物か・・まぁ・・良い・・今の我は気分が良い・・
完全体になった手始めに貴様から殺してくれる!!」

左腕の槍を振りかざし突撃してくる、ヴェルガディオスに騎士は無
言で剣を正眼に構え走り出した・・

「酷い・・勝ち目などまるで無いではないか・・」

私はそう言って目を背けた・・ヴェルガディオスと騎士の戦いは・・
戦いとは言えない・・これは嬲り殺しと言っても良い・・騎士甲冑
は既にボロボロで体も血で濡れてない場所が無いほどだ・・ヴェル
ガディオスは騎士の首を掴みギリギリと締め上げながら

「くく・・人間如きが良く頑張ったな・・だが遊びは終わりだ・・」

そう言うヴェルガディオスに

「遊びは終わりか・・だが・・それはこっちの台詞だ!!」

そう言うと騎士は剣を地面に突き立てる、それと同時に血で出来た
魔法陣が浮かび上がる

「こ・・これは・・馬鹿な・・何故貴様がこれを・・」

驚き辺りを見回すヴェルガディオスに

「貴様を封じ込める為の結界だ・・これの為に・・態々・・避けれ
る攻撃も受けていたんだ・・」

そう言う騎士にヴェルガディオスは

「馬鹿がっ！！幾ら結界があろうが封印する器が無いぞ！！」

騎士はくぐもった笑い声を上げながら

「器・・？くく・・器なら貴様の目の前にあるだろうがっ！！！」

そう言うと騎士の身体に上空に浮かんでいる物と同じ魔法陣が浮かび上がる

「馬鹿な・・止めろ・・止めろっ！！」

慌てて逃げようとするヴェルガディオスの身体に血で出来たバインドが絡みつく

「逃がさんぞ・・貴様の身体・・俺の身体の中に永久に封印してくれるっ！！！」

「や・・止めろォォォッ！！！！」

その叫びと共にヴェルガディオスの姿が吸い込まれるように騎士の身体の中に吸い込まれて行った・・ここで再び景色が歪み・・場所が変わる・・

「本当に行くのか？」

王宮から去ろうとする黒い服の男は振り返り

「俺はもうここにいることは出来ん・・俺は・・いや・・俺の血統

は未来永劫・・ヴェルガディオスを封じる宿命だからな」

そういって歩き去ろうとする黒い服の男に自分のブレスレットを渡しながら

「そうか・・すまない・・私の力が足りなかったばかりに・・お前に過酷な運命を背負わしてしまう・・私が出来る最後の事だ・・汝に我が称号・・聖王の聖の字を与える・・お前は今日から聖魔王だ・・己の体を捨ててまで世界を救った英雄だ・・私達はお前の事を未来永劫語り続けるだろう」

そう言われた黒い服の男は最後に一度だけ微笑み

「ふっ・・俺には過ぎた称号だ・・だが感謝する・・兄よ・・もう2度と会う事は無いだろう・・さらばだ・・」

そう言うと今度こそ振り返らず男は王宮から去って行った・・私はその光景を見ながら

「あの男が初代聖魔王・・ジオガディスの祖先・・そしてその血統に封じられた偽りの神・・まさか・・ジオガディスの狂気は・・ヴェルガディオスの物・・奴は既に復活しているのか・・くそ・・判らない・・」

見ている過去の出来事は余りに深刻で深い問題だった・・ヴェルガディオスを封印した・・騎士が初代聖魔王・・そしてその子孫になるジオガディス・・その関連性・・私がその事を考えていると、再び景色が歪み場所が変わっていった・・

第１０４話に続く

1985

## 第１０３話（後書き）

次回はセレス、神王、ハーティーンの３名が登場する、過去の最終決戦の話になります、ここからどうなっていくのか楽しみにしてくれると嬉しいです、それと今回と前の話はやった事が無いタイプの話なので不安しかないので感想を貰えると嬉しいです、それでは次の話の前書きでまたお会い致しましょう

# 第１０４話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！３話連続投稿の最後は神王達の話になります、今後の展開に大きく関係のある話なのでどうか楽しんで読んで貰えると嬉しいです、それでは本編始まります

# 第１０４話

第１０４話

「今度は・・・何処だ・・？」

私が辺りを見回していると

「神王・・ジオガディスの件・・どうするつもりだ？」

目の前の扉の中から聞こえてきたキーワードに

「神王！？・・まさか・・神王の戦いの記録か・・」

私は扉をすり抜け、その部屋に入った・・そこには

「セレスにハーティーン・・それと・・馬鹿な・・」

セレスとハーティーンを見てから、部屋の奥に座る男に目を見開いた・・何故なら

「龍也に似ている・・」

髪の色と目の色こそ違えどそこに居たのは龍也に良く似た男だった・・神王は何かを考え込む素振りを見せてから

「・・倒すしかあるまい・・もはや話し合いですむ問題ではないのだ」

その言葉にハーティーンは

「そうか・・俺としては奴との決着つけれれば良い・・だがそう簡単には行かないぞ・・大将格は2人・・ジオガディスとヘルズだけだが・・奴らにはネクロ達が居る・・それはどうするつもりだ？」

そう尋ねて来るハーティーンに神王は

「アイギナ、クレア、シャルナ、リューナ達に騎士団の指揮を執って貰って対処する・・私とお前はジオガディス達を叩く・・決戦は明日だ・・英気を養っておいてくれ、ハーティーン」

頷き出て行くハーティーンと

「・・私も・・失礼します・・」

機械の様に無表情のセレスは溶ける様に消えた・・1人残された神王は無言で隣の部屋の扉を開ける・・そこには

「だぁ、だぁ」

にこにこと笑う男の乳児の姿があった・・神王はその子供の頭を撫でてからその部屋を後にした・・そしてその直後再び景色が歪み場所が変わる・・そこは荒れ果てた荒野だった・・

「剣帝・・ようこそ・・我が領域へ」

頭を下げるヘルズにハーティーンは

「御託は良い・・とっとと構えろ・・貴様如きに手間取ってる暇は

無い」

そう言うとハーティーンは右手を掲げ

「王龍よ！！」

その叫びに呼応するかのように天空から

「ギャオオオオッ！！！！！」

咆哮を上げながら龍が舞い降りてくる・・私はそれを見て

「あれがハーティーンの最強の剣・・」

伝説にあった・・最強の剣・・私の見ている前で龍はハーティーンと融合していく

「ブラストユニゾンッ！！・・究極戦刃・・王竜剣ッ！！！」

ハーティーンの背に黄金の翼と自分の背と同じくらい大剣を片手で握り締め

「今日こそ決着をつけてくれる・・地獄の道化師」

「やってみなさい・・剣帝！！」

そう言うとヘルズとハーティーンの姿が交差する

キンッ！！キンッ！！

何度も何度も剣が交差し火花を散らす・・ヘルズが短剣を投げつける、ハーティーンは背中の翼でその短剣を弾き飛ばす、その隙にヘルズが飛び上がり両手を掲げ

「重力の闇に呑まれて果てろッ!!・・マジリス・・オブ・・ルインッ!!」

展開された無数の重力球がハーティーンに迫る

「なっ!!ぐあああっ!!」

背中の翼で防ぐが弾き飛ばされ背中から瓦礫の山に突っ込むハーティーン・・立ち上がったハーティーンの右側の翼が完全に消失していた・・

「くっ・・まさか・・こんな攻撃があるとは・・ん?」

ハーティーンが一瞬首を傾げた直後無数の短剣が降り注ぐ、それと同時に上空から

「今のを避けるとは・・流石は剣帝と言った所ですか・・ですが・・次は無いです・・今度こそ消えなさいッ!!・・マジリス・・オブ・・ルインッ!!」

無数の重力球が降り注ぐ・・今度喰らえばアウトだろう・・・なのに映像のハーティーンは頭から突っ込んで行く・・そして当たる直前で

「ジャケットアーマーパージッ!!」

背中の翼と装甲の一部が爆ぜて飛んで行く・・それは重力球に当たり一瞬ハーティーンの姿を隠す・・

「はっ・・何処です！何処に逃げたのですか！！「こっちだぁっ！！ドラゴン・・デス・・バイトォッ！！」・・し・・しまっ！」

ハーティーンとヘルズの姿が闇色の光に飲まれて消えた・・そして再び景色が変わる・・こんどは聖王のゆりかごに似た兵器・・恐らくパンデモニウムの前だろう・・そこに白銀の騎士甲冑の神王と赤黒い騎士甲冑のジオガディスが居た・・どうやら決着が付いたらしく、ジオガディスの身体は徐々に消え始めていた・・神王はもう戦う気が無いのか剣を鞘に戻した・・その直後

「くたばれッ！！！」

ジオガディスが最後の力を振り絞り魔力刃を飛ばす、無防備の神王に当たると思った直後

「王様ッ！！」

神王の身体を青色の騎士甲冑を纏った少女が突き飛ばす・・その背後にはアイギナ達が居る・・恐らく彼女が消えてしまった最後の騎士なのだろう・・少女はその魔力刃に切り裂かれ血を撒き散らしながら落下していく・・それをシャルナ達が受け止めて治療を始めるが・・もう間に合わないのは目に見えていた・・私は神王とジオガディスの方を向いた・・ここからどうなるのか確りと見て置きたかったからだ・・

「リューッ・・くっ・・」

一瞬飛び出しかけた身体を押し止めジオガディスを見据える神王・・
神王にジオガディスは

「今一度は俺達の負けだ・・だが!!覚えていろ!!俺は必ず蘇る!!!俺から・・エリナを・・全てを奪った貴様らを決して許しはしない!!」

そう叫ぶジオガディスの背後に

グオオオッ・・

半透明のヴェルガディオスの姿が見えた・・それは神王も同じだったのだろう・・消えていくジオガディスを見ながら神王は何かを呟いていた・・ただその声が小さすぎて私にはその呟きは聞こえなかった・・

「終わったのか?」

着地した神王の前にハーティーンが現れる・・甲冑は所々陥没しているが命に別状は無さそうだった・・神王は首を振りながら

「すまない・・ルシルファー・・私ではジオガディスを倒しきる事が出来なかった・・恐らく・・遠い未来・・再び奴は蘇るだろう・・」

そう言われたハーティーンは

「では当初の予定通りだな?」

そう言われた神王は俯き涙を流しながら

「私はお前に過酷な運命を与えてしまう・・誰よりも私を理解してくれたお前に・・」

神王の手から魔力が放たれハーティーンに当たる・・それはクリスタルになりハーティーンの身体を覆い隠していく

「気にするな・・俺はこうなる事を判っていた・・だからお前が気に病む事はない・・」

穏やかに微笑むハーティーンに神王は

「すまない・・本当にすまない・・ルシルファー・・我が生涯の親友よ・・」

そう呟くと同時にハーティーンはクリスタルに封じられた・・ここで再び景色が変わる

「本当に良いのですか?」

王宮でセレスが神王に尋ねる・・神王は苦しそうに頷き、その手に抱き抱えた赤子を魔法陣の上に寝かせる

「う?」

無邪気な顔で笑う赤子を見ながらセレスが

「お言葉ですが・・ここまでする事は無いと思います・・未来で蘇るジオガディスのカウンターとしてハーティーンを封じたのですから何もここまでする必要は無いと思うのですが?」

そう言われた神王は苦しそうに

「・・確かに・・ジオガディスのカウンターとしてハーティーンをクリスタルに封じた・・だがそれでは駄目なのだ・・ハーティーンでは奴を苦しめている・・鎖を切る事は出来ないんだ・・だから・・私はこの子を未来へ送る・・」

未来へ!?・・どういう事だ?・・私がその言葉の意味を考えていると神王は赤子の産着に何かを入れる・・私にはそれがはっきりと見えた・・龍を模したそのペンダントは・・

「ガーディアンズ・・ハート」

それは龍也のデバイスであった・・ガーディアンズハートだった・・馬鹿な・・龍也は・・龍也は・・神王の血統・・私は目の前で起きる出来事を信じる事は出来なかった・・

「息子よ・・すまない・・私はお前に父親らしい事を何一つする事は出来ない・・本当にすまない・・」

何度も謝る神王の顔を赤子は

「だぁ・・だぁ」

にこにこと微笑みながら叩く・・神王は振り返り

「後は・・頼む・・」

そう言うとセレスは地面を叩き魔法陣を発動させる・・そこから強

烈な光が放たれ光が晴れた頃・・赤子の姿は無かった・・神王はセレスに

「1つだけ・・たった1つだけ・・私の頼みを聞いてくれないか?」

そう言われたセレスは

「命令ならば・・」

やはりこの時のセレスは感情が乏しく機械の様な印象を受けた・・神王はセレスに

「もし・・もしもお前が我が息子に会ったのであれば・・護ってやってくれ・・私の代わりに息子を護ってやってくれ」

神王がセレスにそう頼んだ所で再び景色が変わる

「おぎゃあっ!!おぎゃあっ!!」

大声で泣き叫ぶ赤子の下に1組の男女が現れる・・男の方が赤子を抱き上げ

「こんな所に捨て子が・・可哀想に・・」

とんとんを背中を撫でながら言う男に隣に居た女性が

「どうするんです?・・この子を」

判っていますよ?と言いたげに微笑む女性に男は

「判ってるんだろう？・・私達がこの子の親になろう・・この子を捨てた親の変わりに愛情を注いで育てよう」

そう言う男が赤子を抱き上げるとちゃらり・・音を立ててペンダントが落ちる・・男がそのペンダントを拾い上げ

「見るからに高価な物だな・・きっとこの子の両親の物だろう・・この子と自分達の繋がりに・・決めた・・この子の名前は龍也だ・・私達の息子・・八神龍也だ」

そう笑う男に私は唖然とするしかなかった・・この子は過去から送られた神王の息子・・そしてこの子を拾った夫妻が名付けた名は龍也・・私が見ている物・・それは

「八神龍也が・・生まれた瞬間・・」

私がそう呟くと同時に夫妻は歩き始めた・・私はその夫妻の後を追おうとしたが再び景色が歪み始める、私は慌てて

「待ってくれ!!後少し・・あと少しで良いんだッ!!この続きを見せてくれっ!!」

そう叫ぶがその願いは届かず私は現実に引き戻された・・

「はっ!はっ!・・ここは・・」

私はクリスタルに手を伸ばした姿勢のまま停止していた・・私はよろよろとその場にしゃがみ込み・・時計を見た・・5分・・現実の時間ではたった5分の出来事だったが・・私にはとんでもなく長い時間に感じた・・

「龍也は・・神王の息子・・」

その事実は私を動揺させた・・これを龍也に伝えるべきか否か・・

私は迷った・・だが・・

「この事は私の胸の中だけに仕舞っておこう・・・」

私はこの事を伝えるべきではないと判断し立ち上がった・・

「・・・」

眩いばかりの輝きを放っていたクリスタルはその光を失い、沈黙していた・・私はそのクリスタルを睨みながら

「ヴェルガディオスが生まれた理由とその戦いの顛末を教えてくれたのは感謝する・・だが最後の最後のだけは余計だったな・・」

私はクリスタルから目を背けその部屋を後にした・・私はもうこの部屋に戻るつもりは無かった・・知る事は全部知った・・ここにはもう何の用も無いからだ・・ジェイルがこの部屋を去ってから数分後

ビシリ・・ビシリ・・

クリスタルに輝が走り割れる・・その下から古代文字が現れた・・

それには

『滅び行く魔城・・最強の守護者は炎に呑まれ、次元の海へ消える・・だがつねにその傍に在りし天空の風の祈りが・・守護者を救う・・

４つの季節を越え・・再び守護者は現れる・・大切な者を護る為・・

２度と全てを失わない為に・・再び世界に君臨する・・その時こそ・・永い時を越え守護者は神となる・・』

その石碑をジェイルが見るのは全てが終わってからの事である・・

第１０５話に続く

# 第１０４話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！これで遺跡編は全て終わりです、この後はギンガ達との合同演習＋日常編を7話くらいやりたいですね～特に今までスポットの当たらなかった、セッテとかチンクとかをメインにした話をしたいですね～その後から最終決戦編でしょうかね？・・でも合同演習の後の日常編を大分やりたいと思ってるんですよね・・９０話くらいからはバトルばかりでしたし・・でも問題は閃くかどうか何ですよね～・・最終決戦の構想ばかり考えちゃって・・日常が思いつかないんですよ・・なのでもし本編でこんな話が見たいな～などの意見がありましたらメッセージか感想にお願いします、その話を書くので（本当他力本願ですいません）それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう、それでは感想と本編のリクエストが来る事を楽しみに待っています

# 第１０５話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回からは合同演習編とでも言えば良いのでしょうか？・・まぁ演習だけではないのですけども・・とりあえず合同演習編という事で、それと前回の後書きに書いた日常編のリクエストの方はまだ待っていますので、演習編が終るまでにくれると嬉しいです・・まぁ・・私のボキャブラリーが少ないばかりに読者の方に迷惑を掛けると思いますが・・どうか宜しくお願いします

# 第１０５話

第１０５話

「ギンガさん・・本当に俺達で良いんですか・・」

ロビーで隊員の1人が不安げに尋ねて来る・・今日から暫くは六課との合同演習で、ここに居るのは演習のメンバーに選ばれた隊員達なのだが・・皆その表情は硬い・・かという私も緊張しているのだが・・

「大丈夫よ、選ばれたという事は貴方達の能力が認められたって事・・そんなに緊張しないで胸を張りなさい」

そう言うと1番若い隊員が

「で・・でも・・機動六課には蒼天の守護者・・八神中将が居るんですよね・・？」

確認を取って来る隊員に私は何故ここまで皆が緊張しているか理解した・・管理局最強にして、伝説とも言える最強の魔導師、八神中将・・大概の隊員は龍也さんに憧れて管理局に入隊した・・その人が居る所へ行く・・それで必要以上に緊張しているのだと・・

「そうよ・・さっ行くわよ・・合流時間に遅れると不味いからね」

私はそう言うと隊員達を連れて機動六課に向かった・・

「１０８部隊の合流組みですね・・お待ちしてました」

ロビーで合流手続きをしていると

「ギン姉～待ってたよ～」

スバルが手を振りながら出迎えてくれる

「スバル、元気そうね」

私が言うとスバルは

「ん～見た目ほど元気じゃないよ～最近龍也さんの訓練厳しくてさ～あっちこっちガタガタだよ～」

笑いながら言うスバルに１０８部隊の面々は目を丸くしていた・・

雲の上の人物である龍也さんの事を軽く言うスバルに驚いているのだと容易に判った

「ところでスバル・・八神中将達は？」

隊長陣の姿が見えない事を尋ねると

「ん～食堂だよ、今から昼食、私はギン姉達が来るって聞いてたからここで待ってたの・・ギン姉達も一緒にご飯食べる？」

私達はここで昼食を食べるつもりだったので頷き、スバルに案内されながら食堂に向かった・・そして私はそこで目を見開いた・・何故ならそこには

「うん?ギンガ?・・ああ・・今日から合同演習だったか・・」

当然の様にエプロンを身に着けた龍也さんの姿があったからだ・・
良く見るとパタパタと厨房の中を歩いている少女が2人見える・・
確かリィンとアギト・・だったと思うけど・・私がそんな事を考えてると

「ギン姉、なのはさん達はこっちだよ」

食堂の奥に歩いて行くスバルの後を追って、私達も食堂の奥に向かった

「うん・・おおギンガ達か、そうかそうか今日から合同演習やったな~何してるん?立ってないで座れば良いやん」

にこにこと笑うはやてさんに促され私達が椅子に座ろうとした時・・

「ギン姉、首傾けてっ!!!」

スバルの言葉に反応して首を右に傾けると

ビィーンッ!!!

「はっ!?」

私の頬を掠めてダガーが後ろの壁に突き刺さる・・そのダガーを投げたのは

「そこ・・兄ちゃんの席やねん・・座らんでくれる?」

さっきまでと違い黒い笑みのはやてさんだった・・クスクスと笑うはやてさんの後ろから

「ギン姉！座るならこっちにして」

必死な表情で私を呼ぶスバルの方に行き椅子に腰掛ける・・そのタイミングではやてさんが左手を動かすと

ヒュン・・パシッ・・

壁に刺さっていたダガーが抜け、はやてさんの手に収まる・・はやてさんは慣れた素振りでそれを服の内側にしまった・・私がそれに驚いていると、スバルが

「あれね・・魔力の糸で繋いであってね・・自由に動かせるんだって」

その説明に頷いていると

「・・何かあったのか？」

トレーを持った龍也さんが尋ねて来る、私が口を開こうとすると

（余計なこと言うなよ・・言うたら判ってるよな？）

はやてさんから強烈な殺気と共に念話が来る・・私の返答には興味が無い様で直ぐに私から目を背けた・・その私の前にトレーが置かれる

「昼食だ・・まぁ・・男料理だから大した物ではないがな」

そう言って置かれたトレーの中身はベーコンとハッシュドポテトにスクランブルエッグとシーザーサラダ・・ガラスの皿に盛り付けられたビシソワーズだった・・私はこれを見て

（大した物じゃない？・・どう見ても一級品じゃない・・）

私も料理はするが、その自信を根こそぎ薙ぎ倒されてしまう・・龍也さんは１０８部隊の面々の前にもトレーを置く・・すると

「あああ・・ありがとうございますっ！！」

緊張して噛みながら言う隊員に首を傾げながら龍也さんは料理を配って行った・・たぶん何をそんなに緊張しているのか判っていないだろうと私は思った・・昼食後に

「第１０８部隊から出向、ご苦労様・・知ってると思うが・・八神龍也だ」

と穏やかに言う龍也さんの膝の上では・・

「う？」

にこにこと昼食を食べる少女の姿があった・・時折その口を拭く龍也さんは子煩悩な父親に見える・・私がそんな事を考えていると龍也さんは

「とりあえず今日は出向の手続きと明日からの訓練の準備をしておいてくれ・・」

そう言う龍也さんに頷き、私達は宛がわれたフロアに向かった・・

「ふーむ・・これが来たメンバーのプロフィールか・・」

ゲンヤさんから送られてきたプロフィールを見る・・誰もが皆期待の新人ばかりだそうだ・・

「それでギンガか・・」

送られてきたプロフィールに一通り目を通していると

コンコン

「龍也入るよ？」

フェイトが書類を持って入ってくる、フェイトは書類を置きながら

「えっと・・これなのはから、明日の合同演習の予定だって・・とりあえず普段より軽いのにしといたけど・・これでもついて来れるか不安なんだけど」

そう言うフェイトに

「ああ、それは大丈夫だろう・・仮にもホープと呼ばれる新人達だ・・基礎体力はちゃんとしてるだろ」

そう言うとフェイトは

「そうだよね・・最初の方のスバル達がやってた訓練にならついて来れるよね」

うんうんと頷くフェイトに

「まぁそれより不安なのはスバル達だな・・」

そう言うとフェイトは私が何を言いたいのか理解したようで

「極光とインペリアルの事だね・・やっぱり何か問題があるの?」

不安げなフェイトに

「問題は何もないさ・・ただ私が予想してたのより早くエリオとスバルが完成した、もう実戦で使っても問題ないさ・・少々くたびれたがな」

そう笑うとフェイトは

「龍也は少し頑張りすぎだよ、少し休んだら?」

フェイトの言葉に私は

「頑張りすぎか・・良くはやてにも言われたな・・私は自分の事を考えないと」

そう苦笑しているとフェイトは

「私も言ったよ・・あんまり無茶して心配掛けないでって・・覚え

てないの？」

確認するかの口調のフェイトに

「ちゃんと覚えてるさ・・だから偶には息抜きもしよう・・紅茶を入れるが・・フェイトはどうする？飲むか？」

フェイトが頷いたのを確認してから、私はキッチンに言って2人分の紅茶と茶菓子を持って、リビングに戻った・・2人で紅茶を飲みながら昔話をしていた・・それはとても穏やか時間でとても安心したが

「兄ちゃんクッキー作った・・何で・・フェイトちゃんが・・兄ちゃんと一緒に居るんや・・」

プルプルと肩を震わせるはやてと

「別に私が龍也と一緒に居ても何の問題もないでしょ」

挑発するような口調のフェイトにはやてがキれ、激しい口論となった・・私は怒鳴りあう2人を見ながら

「やれやれだ・・」

そう呟きながら紅茶を1口含んでから、2人を止める為にソファーから立ち上がった・・

「何だ?騒がしいな・・この声は・・はやてとフェイトだな・・」

私は騒がしい声にまたはやてとフェイトが喧嘩してるなと思いながら演習場に足を進めた・・

「来たか・・ノーヴェ」

演習場にはセレスが腕を組んで待っていた・・セレスは私を見ながら

「今日で私が教える事は全て無くなるが・・どうだ?極光はマスター出来そうか?」

そう尋ねて来るセレスに

「まぁ・・見てろよ・・はぁぁっ・・」

意識を集中して魔力を練り上げる・・すると赤色の輝きが私を包み込みバリアジャケットが展開される・・色こそ違えどそれはスバルの物に良く似ていた・・セレスはそれを見て

「なるほど・・そこまで仕上げたか・・もう私が言う事は何も無いな」

そう言うセレスに私は

「セレス、本当にありがとう!お前のおかげで私も極光が出来るようになった、これで龍也の傍を歩いて行ける・・護られるだけじゃないんだ」

そう・・私は護られるだけなんて真っ平だ・・私は龍也が私を護っ

てくれたように龍也を護れるようになりたかった・・その為の力をくれたセレスに礼を言うとセレスは

「気にするな・・全て王の為・・お前を強くする事は間接的に王の身を護る事に繋がる・・唯それだけだ」

口を開けば王としか言わないセレスに前から気になっていた事を聞いて見る

「なぁ・・セレスは何で龍也を護りたいんだ?」

私が龍也を護りたいのは好きだからだ・・あの暖かい場所を失いたくないから私は龍也を護ろうと思った・・ではセレスは?と思い尋ねると

「私は王によって救われた・・その方の為に何かしたいと思うのは間違っているか?」

そう言われると何も言えない・・私だって最初はそう思った・・それが次第に恋心に代わって行ったのだ・・私が黙り込んでいるとセレスは

「ではな・・ノーヴェ・・それと今日聞いたことは王には言わないでくれ・・」

珍しく赤面しながら言うセレスに

「もしかして恥かしいのか?」

茶化すように言うとセレスは何も言わず消えてしまった

「あちゃー地雷だったかな・・悪い事しちまったかもな・・」

私は今度あったらセレスに謝ろうと思いながら、自室に戻った・・
それから数分後・・セレスが再び演習場に姿を現す

「そうだ・・私が王を護る理由など・・それで良い・・私は所詮道具・・それ以上でもそれ以下でもないのだから・・」

セレスは悲しそうに呟き消えて行った・・セレスが立っていた場所には数滴の涙の跡があった・・

第１０６話に続く

# 第１０５話（後書き）

今回は少し短めのインターバル的な話でした、次回は六課の魔道師達の訓練を見て驚く、１０８部隊というのを考えています・・それでは次の前書きの時にまたお会い致しましょう

# 第１０６話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回も引き続き１０８部隊との合同演習の話なんですけど・・自分はあんまり１０８部隊というか・・ギンガ達にはあんまり詳しくないので口調とかがおかしいと思いますが・・どうか宜しくお願いします

# 第１０６話

第１０６話

「「「・・死ぬ・・死にます・・」」」

私は目の前で討ち死にしている１０８部隊の面々と

「はぁ・・はぁ・・きついですね・・流石に・・」

肩で息をしている物の立っているギンガを見ながら

「厳しかったか？」

隣のなのはに尋ねると

「そうかもしれないですね・・私達はもう慣れてますけど・・やっぱり龍也さんの訓練は厳しいですからね・・」

基礎だけだったんだがな・・私の感覚がおかしいのだろうか？と首を傾げているとなのはが私の肩に手を置き

「大丈夫ですよ、龍也さんの感覚がおかしいわけじゃないですから」

そう笑うなのはと話をしていると、スバル達が戻ってくる・・スバルとエリオは魔力を分散する、リストバンドを着けていて身体が重く感じるはずだが・・そんな様子はまるで無い・・相当仕上がって来ていると一目で判る・・スバル達はそのまま私となのはの前に来て

「ふー基礎訓練完了しましたっ！」

敬礼しながら言うティアナに

「ご苦労様、休憩が必要なら休憩してくれても構わんが・・どうする？」

そう尋ねるとエリオが

「僕は全然平気ですよ！このまま行けます！！」

元気よく言うエリオにスバルも

「私もです！続けて行けます！」

と答える2人に

「判った・・ではこのまま次の訓練に行こう・・ティアナとキャロは少し休憩しててくれ」

そう言って私はスバルとエリオを連れて演習場に向かった・・

「嘘・・休憩も無しでそのまま実戦訓練・・」

私が驚きながら言うとなのはさんが

「ギンガ、そんなに気にしないほうが良いよ、あの2人は特に厳し

い訓練してるから、体力とか魔力とかが物凄く上昇してるの、あそこにリストバンドが見えるでしょ？」

なのはさんに言われてスバルの両手首を見るとそこには青色のリストバンドがあった・・それが何か判らず首をかしげると

「これ着けて見たら判るよ」

渡されたリストバンドを右手首に着けてみると

「うっ・・」

体が急に重くなり、魔力が減っていく・・私はそれを外しながら

「これ・・何ですか？一体・・」

体が重くなり尚且つ魔力が減るこれに何の意味があるのかと思い尋ねると

「これはね、体力と魔力を同時に増やす物だよ・・慣れるまでは大変だけど・・慣れると何とも無いよ」

そういうなのはさんの両手首には少しお洒落な印象を受ける、桜色のブレスレットが見えた・・多分これもリストバンドと同じ効果があると思った・・その時演習場から

ドゴーンッ！！！

凄まじい轟音が響き、それに驚きながら演習場を見ると、そこには美しいばかりに輝く水色の魔力を身に纏ったスバルの姿があった・・

あんな姿は見た事無く驚いているとスバルが

「でやあああっ！！」

凄まじい速さで龍也さんに接近し連続で拳を振るうが・・

「脇が甘い・・一撃一撃事に間がありすぎる」

片手で軽々と受け流す龍也さんに私は驚いた・・あのスバルの攻撃はとても鋭く重そうなのに・・それを片手でいなし続ける龍也さんの技量にも驚かされた・・

「もう少し連携を考えろ」

繰り出された拳を抱き込むように掴み真上に投げ飛ばし、落ちて来たところで回し蹴りを喰らい吹っ飛ぶスバルだが

「まだまだぁっ！！」

ズシャアアッ！！

体勢を立て直しながら言うスバルが即座に

「機神拳ッ！！！」

凄まじい速さの拳の連打を放つが

「機神拳・・」

ズガガガガッ！！！

スバルと龍也さんの拳が何度もぶつかり轟音を上げる・・かと言っても私には辛うじて見える態度だが・・最初は互角だと思ったが徐々にスバルが押され始め・・徐々に龍也さんの拳がスバルの肩や足を捉え始める

「これが最強の魔道師の実力・・」

私がそう呟くとなのはさんが笑いながら

「あれが龍也さんの本気に見える?・・あんなのはまだまだ小手調べだよ」

あれでまだ本気じゃない・・ではあの人が本気を出せばどうなるのだろう・・私はそんな事を考えながら演習を見続けていた・・スバルはどこまで強くなるつもりなのだと思いながら・・

「はぁ・・はぁ・・もう無理です・・」

暫く模擬戦を続けていたが突然その場でへたり込み、もう無理だと言うスバルに

「7分か・・大分増えたな・・このレベルなら実戦でも行けるな」

そう言うとスバルは疲れたように笑いながら

「そ・・そうですか・・頑張った甲斐がありましたよ・・」

ふらふらと立ち上がり戻って行くスバルと入れ違いでエリオが来る

「僕の番ですね・・行きますよ～」

そう言うとエリオはインペリアルを起動させる

「最初からそれか・・ならばこっちも・・アギト！」

訓練を見ていたアギトを呼び寄せユニゾンを行う

「それがアギトさんとのユニゾンですか・・」

見た目は龍人と言った所だろう・・紅蓮色の騎士甲冑に身の丈程の剣を片手で握り締めながら

「さっ・・掛かって来い・・」

手招きするとエリオは一気に肉薄して来て槍を振り下ろしてくるが

「甘い・・」

受け止めそのまま刃を逸らし受け流し、胴を切り払おうとすると

「はっ！」

左腕の篭手で受け止め後ろに跳ぶエリオを見ながら

（反射速度が大幅に上昇してる・・前のエリオならあれを避ける事は出来なかった・・やはり相当影で努力してるな）

一目で判る・・エリオをも相当努力していると・・その努力に報いる為に・・

「少しは本気で相手をしてやる・・気を抜くなよ・・」

そう言うと私は模擬戦では初めて、自ら攻撃を仕掛けた・・

「４聖剣・・一の型・・玄武・・断絶剣ッ！！」

魔力を込めた剣を振り下ろす、エリオはバックステップで回避するが

「それでは駄目だな・・」

大地に叩き付けられた魔力がそのまま刃となりエリオに襲い掛かる

「！！」

流石これは回避できなかったようで吹っ飛ばされるエリオに接近し

「４聖剣・・二の型・・白虎・・烈破斬ッ！！」

剣を振るい虎型の魔力波を打ち出す

「ポジトロンレーザーッ！！」

迎撃に魔力弾を放ち私の魔力波を弾き飛ばすが

「計算通りだ・・４聖剣・・三の型・・朱雀・・火炎陣ッ！！」

剣を地面に突き立てる、それと同時に炎で出来た朱雀が無数に飛び

立ちエリオに襲い掛かる

「くっ・・こんな技が・・」

槍で迎撃しながら態勢を立て直すエリオの上空から

「４聖剣・・四の型・・青龍・・蒼雷斬ッ！！」

蒼い魔力を纏いながら剣を振り下ろす

「くっ・・」

槍で受け止めると同時に稲妻に飲まれ姿の見えなくなるエリオ・・

決まったか？・・と思い警戒していると

「でやあああっ！！」

デュナスで超低空を飛行しながら拳を振るってくるエリオ・・その

拳を受け止めながら

「良いだろう・・持てる全ての力を使って私を打倒してみろ！」

そのままエリオを振り回し投げ飛ばす・・それから数分後・・

「はぁ・・はぁ・・やっぱり・・お父さんは強いです・・」

大の字で寝転がりながら言うエリオに

「そう言って貰えると嬉しいよ・・でもエリオだって強くなったよ」

そう言って頭を撫でながらエリオを抱え上げ、私はなのは達と合流した・・その訓練を見ていた１０８部隊の面々は

「あんな子供でも・・八神中将とまともに戦ってる・・俺達だってやれば・・出来る筈だ」

どうやら龍也とエリオ達の訓練を見て良い刺激になったようで、闘志を燃やしていた・・合同演習に参加した１０８部隊の面々は後のストライカー、エースと呼ばれる程強くなったそうだ・・合同演習の最終日

「合同演習は今日で終わりだ、だが君達は本当に強くなったと私は思う」

こういう風に偉そうに言うのはしょうではないのだが・・なのはに言われたので六課を代表して言う事になった・・内心溜め息を吐きながら

「これから先、君達が活躍する事を切に願う・・それでは解散・・ああ、ギンガは残ってくれ」

帰ろうとするギンガを呼び止める、何事か？と首を傾げるギンガに

「前にあったレリックの強奪事件の事は知ってるな？私は近い内にネクロ達との決戦があると考えている・・だから優秀な魔道師が欲しいと思っている・・そこでだ、ネクロ達との戦いが終るまで六課に残ってくれないか？・・嫌なら嫌で構わない・・本人の意思を尊重したい」

ゲンヤさんに聞いた所、本人に聞いてくれと言われたのでこうして

聞いて見たのだが・・ギンガは残ってくれるだろうか?と思っているとギンガは

「・・すいません・・私ではあまり力になれそうになりません・・だから辞退させてもらいます」

ギンガが首を横に振る・・私は

「判った・・では１０８部隊での活躍を願っている」

そう言葉を締めくくり、合同演習は終わりを告げた・・

第１０７に続く

# 第１０６話（後書き）

え～と・・ストライカーズで演習の話が合ったので、流れで合同演習の話を出しましたが・・私としては書くつもりの無かった話なのでかなり短めです・・そもそも私はスバルは好きですが・・ギンガは微妙なんです・・それが短い理由ですね・・第１０４話で書いたとおり、暫く日常編をやりたいなと思っています、それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

2025

# 混沌の魔法使いからの緊急告知！！

どうも混沌の魔法使いです！！

今回はタイトルとおり緊急告知です！！なんと・・もうすぐ・・夜天の守護者が一周年を迎えます！！その記念で番外編をやろうと思います！！それでそのリクエストを募集したいと思います！！リクエストでもＩＦエンド、Ｒ－系、残酷描写、ボーイズ、ガールズラブ系は嫌なのでそれ以外でお願いします！！リクエストくれた作品はすべて小説にするのでご気軽に参加ください！！それと第二部の先行版が見たいな、というのもＯＫです・・また居るかは判りませんが贈り物の番外編なども貰えると嬉しかったりします「多すぎると一周年の日に投稿出来ないかもしれないですけど・・」がんばるのでたくさんのリクエストが来ることを願っています！！

それと第１０４話の後書きでもあった本編のリクエストも同時に待っています、いま3話分まで来てるので後7話分のリクエストを待っています、これは一度参加してくれた方でも構わないのでこちらにも参加してくれるとうれしいです！！

応募の仕方はコメントかメッセージでお願いします！！それではたくさんのリクエストがくることを願いながら失礼いたします

2026

# 第１０７話（前書き）

どうも～混沌の魔法使いです～今回からは暫くはリクエストの日常編です、まずはハナト様からリクエストの「龍也以外の視点から進む話です」それと本編のリクエストはまだ待っていますので気軽に参加してくれると嬉しかったりします、予定では１０話くらいは～と思っているので・・それでは本編始まります

# 第１０７話

第１０７話

今回は機動六課の日常を龍也以外の観点で見て貰いましょう・・

ケース１　元シスコン兄貴の場合

「旦那おはようさんっす！！」

後ろから旦那を肩を叩きながら言うと

「ヴァイスか・・おはよう・・元気そうだな」

穏やかに微笑みながら返事を返す旦那に

「そりゃ何時でも俺は元気っすよ？・・最近はラグナも近くに居るし・・安心してるっすから」

ネクロに襲われるんじゃないか？とヒヤヒヤしている中、ラグナが六課で暮らし始めたのは俺としては嬉しい・・１つ嫌な事もあるが

「ハーティーンの事か？」

俺の表情で何を考えているのかを感じ取った、旦那が尋ねて来る・・

俺は眉を顰めながら

「そうっすよ・・ラグナがハーティーンを好きなのはしょうがない

っすよ・・でも俺としては納得いかないっすよ・・昔はさ・・お兄ちゃん・・お兄ちゃんでそりゃ可愛いかったんすよ・・でも今は邪魔者扱いで・・」

俺がそう言うと旦那は俺の肩に手を置きながら

「別に良いじゃないか、妹が兄離れしてくれるのは良い事じゃないか・・私の場合・・はやて達が何時まで経っても兄離れしてくれる気配が無いんだぞ?」

・・そうか・・この人にこんな事を相談するのは酷だったか・・部隊長に病的に愛されてるからな・・最近・・

「どこでどう間違ってしまったんだ・・」

落ち込み始めた旦那に

「あ・・その内兄離れしてくれますって、だからそんなに気にしないで下さいよ、大丈夫ですって・・そんじゃ俺仕事あるんで!!」

俺は逃げるように旦那から離れて行った・・妹の話題は地雷だな・・今度から気をつけよう・・そう考えながら

ケース2　エースと執行官の場合

「だからやっぱり龍也さんを落とすには色仕掛けより、正攻法が良いと思うんだよ」

フェイトちゃんと如何に龍也さんを物にするか話していると

「あ、龍也だ・・なんか落ち込んでる・・」

フェイトちゃんに言われ前方を見ると

「どうして?・・私の育て方が間違ってたのか・・?」

その呟きからはやてちゃんの事を言っているようだった・・やはり
はやてちゃんが中々兄離れしてくれない事を悩んでいるようだった・
・

「龍也、おはようっ!」

「龍也さん、おはようございますっ!!」

落ち込んでいる様子の龍也さんを元気付け様と大きな声で挨拶すると

「ん?・・なのはとフェイトか、おはよう」

穏やかに微笑みながら返事を返してくれる龍也さんに

「何をそんなに悩んでたんですか?」

判っているが一応尋ねてみると

「はやてがどうやったら兄離れしてくれるか考えてた」

予想通りの返答の龍也さんにフェイトちゃんが

「はやてを言葉だけで引き離すのは難しいよ・・だから例えば彼女を作るとか・・そういう方法じゃないと」

にや～と笑いながら言うフェイトちゃん・・私は何を考えているのか判った・・ここで振りでも良いから私かフェイトちゃんを彼女にして貰い・・そのまま龍也さんに自分達を彼女だと認識して貰おうと言う、長期戦の作戦のつもりだ・・だが龍也さんは俯きながら

「私に彼女になってくれそうな知り合いは居ない・・」

・・・まさかこう来るとは・・どうして龍也さんはここまで鈍感なのだろう?・・私達が告白したのは何時の間にか無かった事になってしまったのだろうか?・・その事で大分気落ちするがそれを表情に出さず

「それじゃあ・・振りでも良いから私かなのはを・・か・・」

フェイトちゃんがそこまで言い掛けた所で

シュッ!!ビーンッ!!!

後ろから投げられた何かが壁に突き刺さる・・はやてちゃんか!?驚きながら振り返るとそこには

「何を言い掛けた・・この女狐・・」

腕を組んだセッテが黒い眼差しで私達を睨んでいた・・

ケース３　超ヤンデレ娘の場合

まったく・・油断も隙も無い・・私は投げナイフを懐から取り出しながら、そんな事を考えていた・・龍也様に自分達を彼女だと誤認させる作戦を取ろうとしていた、女狐と魔王を睨みながら龍也様の隣に歩み寄り

「龍也様、おはようございます、どうでしたか?良く眠れましたか?」

微笑みながら龍也様の手を取る・・この時女狐と魔王が「「あっ！」」と声を上げるがまったく気にならない・・龍也様と手を繋ぐ・・その事の方がよっぽど重要だ・・胸が爆発的に高鳴っていく・・それこそ心臓が爆発しそうになるほどだ・・それと同時に狂おしいほどに龍也様が欲しくなる・・だが今はその時ではない・・はやる気持ちを押さえながら

「朝食・・まだですよね?宜しければ私と一緒にどうですか?」

そう尋ねると龍也様は微笑みながら

「良いぞ・・では行こう・・なのはとフェイトはどうする?」

龍也様が女狐と魔王に言う・・私は自分の中にどす黒い炎が上がるのを感じながら

「先程あの2人は食べていましたから、気にする必要はありませんよ」

うっ・・2人の動きが止まる・・私は先程2人が食堂で朝食を食べ

ていたのを確認している・・だからそう言うと龍也様は

「そうか・・それじゃあ行くか・・」

そう言う龍也様に頷き私達は食堂に向かった・・

「「いただきます」」

2人で手を合わせてから食事を始める・・正直に言えばここの食事など美味しくは無い・・龍也様の手料理の方がよほど美味しい・・お腹だけではなく心まで満たされるからだ・・だがこうやって向かい合いながら食べる事が出来るのも食堂での強みだ・・私が龍也様との食事を楽しんでいると

「龍也さん・・とセッテ・・おはようございます」

オレンジ頭が図々しくも龍也様の隣に腰掛ける・・私が睨みつけると

「何?睨まないでくれる?病み娘」

平然と挑発してくるオレンジ頭に

「睨んでなど無いですよ・・貴女の顔を見るだけで不快になるというのに何故睨む必要が?」

オレンジ頭の眉が動く・・だがキレる事は無く冷静に

「そう、奇遇ね・・私も貴女と話すと気分が悪くなるのよ・・私の気のせいだったみたいね・・なら良いわ」

挑発し返してくる・・そうですか・・そこまで挑発するんですね・・
ならば・・懐から投げナイフを1本取り出し投げつけると

パシッ！

「！！」

オレンジ頭が指の間でナイフを受け止め・・ニヤッ！と笑いながら

「困ったら直ぐ暴力？・・そんなんじゃ・・龍也さんの隣に居れないわね」

その言葉に完全にキレた・・

「黙れぇっ！！このオレンジ頭がぁっ！！私が折角龍也様との食事を楽しんでいたのに・・図々しくも割り込んできた女が何を言う！！」

私が怒鳴りつけるとオレンジ頭が

「龍也さん～セッテが苛めるんですよ～」

甘えた口調でそう言いながら龍也様に抱きつくオレンジ頭の服の襟を掴んで引き離し

「そこまで私の邪魔をするんですね・・良いでしょう・・どちらが上か今日こそはっきりさせましょう」

「良いわよ・・貴女なんかに負ける訳無いもの」

お互いに挑発しながら食堂を後にした・・残された龍也様の困ったような表情がとても可愛らしかった事をここに記す

ケース４　鉄槌と剣の場合

「今のセッテとティアナだよな・・ったく兄貴挟んで喧嘩すんなよ」

私がそう呟くとシグナムは

「いやそっちの方が好都合、兄上は争い事を好まん・・あの２人が喧嘩すればするほど兄上から離れていく・・その方が私達にとっては都合が良いだろう？」

冷静に言うシグナムに

「お前・・何か段々シャマルに似てきたな・・」

何か最近如何に兄貴を自分達の物にするか？で色々考えているシグナムがシャマルに似てきたと言うと、シグナムは

「力で兄上を物にする事は出来ん・・ここは知力で行くべきだろう？」

・・正論だな・・私はシグナムの言葉に頷き、兄貴の座る席に向かった・・兄貴は食事を終えたようで紅茶を飲んでいた・・私とシグナムに気付いた兄貴は微笑みながら

「ヴィータ、シグナムおはよう！」

声を掛けて来てくれる・・その兄貴の笑顔が綺麗で私達は少し赤面しながら椅子に腰掛けながら

「おう、おはよう、兄貴」

「おはようございます、兄上」

挨拶すると兄貴は頷きながら紅茶を再び口に含む・・私も持って来たコーヒーを飲みながら暫く兄貴と話をしていたが、ふと気になる事を思い出した

「なぁ・・最近・・私達の仕事の量が増えてると思うんだけど・・兄貴の指示か？」

なのはやフェイトと比べると明らかに書類の量が多い、私がそう尋ねると兄貴は

「ヴィータもそう思うか？・・私もなんか量が多いと思ってたんだ」

どうやら兄貴の書類も増えてるようだ、２人でうーんと唸っているとシグナムが

「兄上・・きっと主はやての指示だと思いますよ」

はやてか・・何か考えのあっての事だろうな・・と私が納得して頷いていると

「そうか・・はやてか・・所でシグナム・・なんで近寄ってくる？」

良く見るとシグナムが兄貴の椅子にピッタリと自分の椅子を着けている・・その所為でシグナムと兄貴の距離は殆どゼロだ

「近寄るというのは適切な表現じゃないですね・・私は・・そう意思表示をしているのです」

シグナムの視線の先には

「「ピシッ・・」」

なのはとフェイトが居た、２人とも柱の影から私とシグナムを睨んでいる・・兄貴は気付いてないようだが・・

「意思表示・・？何のだ」

首を傾げる兄貴の腕を抱きしめながら

「気にしねぇ、気にしねぇ・・それよりさ、ちょっとＦＷ陣の訓練で困ってるところがあるんだよ、手伝ってくれねぇか？」

嘘だ・・困ってる事など無い・・でもこう言えば・・兄貴は

「そうなのか？では行こうか・・」

微笑みながら立ち上がる兄貴に

「ありがと・・じゃあ行こうぜ」

私は兄貴の手を握って執務室へと歩き出した・・シグナムも直ぐ後ろを歩いて来て

「私も協力しよう・・」

笑いながら言うシグナムの口元は「判っているぞ?」と言っていた・・私は苦笑しながら兄貴とシグナムと一緒に廊下を歩いて行った

最終ケース　夜天の場合

「はふぅ・・うぅーきつい・・」

私は山盛りの書類を見ながら呟いた・・私達・・兄ちゃんとヴィータとシグナムとシャマルとリィン・・ザフィーラは誘ったが良いと言ったので保留・・が全員纏めて休みを取れるように書類を増やしたが・・私自身が一番多い

「ううー兄ちゃんが居てくれたらな～楽に出来るのに・・」

そう嘆くが兄ちゃんを呼ぶ訳にはいかないのでぬいぐるみで我慢する

「兄ちゃん・・兄ちゃん・・」

ぬいぐるみの形が変わるほど抱きしめる・・こうでもしないと精神の安定が図れないのだ・・

「フォールダウン出来る様になってからかなぁ～兄ちゃんに対する

執着心が増した気がする・・」

シャマル曰くヤンデレ化が進んでるそうだ・・だがまぁ

「兄ちゃんがますます好きになったって事で良いやろ」

そう呟き書類を処理し始める・・日が暮れた頃・・

「終り～はー疲れた・・」

肩を自分で叩きながら呟く、だがこれで明日一日ゆっくり家で休める・・だがそれよりも

「邪魔者が誰も居ない・・それが何より良いねぇ～」

私から兄ちゃんを取ろうとする邪魔者がおらず・・全力で兄ちゃんに甘える事が出来る・・それが楽しみで楽しみでしょうがない

「うふふ・・兄ちゃん達にメールを送ってっと・・良しＯＫや・・後は明日に備えて寝るだけやね」

私は直ぐパジャマに着替え眠りに落ちた・・

これが機動六課の日常であり・・騒がしくても明るく楽しい六課の日常である・・

第１０８話に続く

# 第１０７話（後書き）

次回からは一周年の番外編をやるので暫くは本編はお休みします
それでは一周年の記念の番外編の前書きでまたお会い致しましょう

# 第１０８話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回のリクエストはジークフリート様からで内容は「ほのぼの八神一家」です！のんびりとした仕事で疲れた龍也達が久しぶりに家に帰ると言う話です！！ほのぼのメインなので私の得意ジャンルです！では今回もどうか宜しくお願いします
！

# 第１０８話

第１０８話

「久しぶりの我が家か・・」

私は玄関の前でそう呟いた・・どうやら最近仕事が忙しかったのは家でゆっくりと休む日を作ろうというはやての考えだったらしい・・今日の朝その事をはやてが発表した時、なのは達が不満そうな顔をしたがはやてが

「最近・・仕事の量少なかったやろ?・・当然やよね・・私達と兄ちゃんに回ってたんやから・・そんでなのはちゃん達より多く仕事してた私達が休むのに文句言える?」

そう言われたなのは達は何も言えず、しぶしぶという様子で私達を送り出した・・私がそんな事を考えていると

「お兄様、早く入るですよ」

笑顔で私の手を引くリィンに頷き、私は家の中に入っていった・・

「何か・・綺麗だな・・」

私が家の中に入った時に感じた感想はそれだった・・もう3ヶ月近く帰ってないのに・・埃とかがなくとても綺麗な状態の我が家に私が首を傾げていると、ヴィータが

「はやてがヴェロッサを脅して毎日掃除させてんだよ・・しかも監視カメラついてるから・・私達の部屋で変な事したら・・処刑が待ってんだよ・・」

私はその説明を聞き、今度ヴェロッサに何か持っていこうと心に決めた・・その頃ヴェロッサは

「・・毎日毎日・・はやての家を綺麗に掃除して・・貰えるのがこれだけ・・」

ヴェロッサの手元の封筒には3万円入っていた・・彼はそれを見ながら

「文句言えば・・闇が待ってる・・手を抜けば・・極寒地獄・・僕は・・はやての言う事を聞くしかないのか・・」

るる～と目の幅の涙を流しながら酒を買うヴェロッサ・・きっと彼も相当苦労しているのだろう・・グリフィスと同じくらい・・そんな事になっていると知らない龍也は

「ふむ・・服のセールか・・」

チラシを見ながら何か計画を立てていた・・せっかくの休日・・皆で何処かへ出掛けるのも良い・・だがあんまり遠くには行けないとくれば・・取る手は外食か買い物だ・・外食はシグナムが反対したので却下・・理由は

「兄上の料理の方が美味しいのに態々外で食べる必要はないと思います」

うん・・ここまで言われるのは嬉しいので今日は少し気合を入れて作ろう・・私がそんな事を考えているとはやてが私の手の中のチラシを覗き込みながら

「デパートのセールのチラシ？・・良いね～今日は皆で買い物に行こか？」

笑いながら言うはやてに皆頷き、私達はデパートへ出掛けて行った・・その頃・・機動六課では

「龍也いないと暇だね・・」

フェイトちゃんが詰まらなそうに言う・・私も暇だなと思いながら紅茶を飲みながら食堂の片隅を見る

「エリオ・・クッキー作った・・キャロと一緒に食べよう」

無表情というか感情の起伏の少ないルーテシアちゃんだが、エリオと話す時はにこにこと笑っている事が多い・・その後ろからキャロが来て

「私はね・・紅茶を入れたの、お茶しながらルーちゃんの作ったクッキー食べよう」

2人に笑顔で言われたエリオは軽く頬を赤らめながら

「うん、ありがとうキャロ、ルーちゃん」

そう言ってクッキーに手を伸ばすエリオだが

スッ・・

ルーテシアちゃんがクッキーの皿をずらす・・エリオが首を傾げると、ルーテシアちゃんは

「ルーちゃんじゃない・・ルーテシア・・ちゃんと名前で呼んで・・」

頬を膨らましながら言うルーテシアちゃんにエリオは

「ごめん・・つい癖で・・ルーテシア・・これで良い？」

そう言われたルーテシアちゃんは微笑みながら

「うん、それで良い・・はい」

クッキーの皿を戻して3人で食べ始めたその姿を見ながらフェイトちゃんは

「良いな～キャロとルーテシアは・・エリオは鈍感じゃないもんね・・」

ぶつぶつと呟くフェイトちゃんに

「良いの？」

そう尋ねるとフェイトちゃんは

「私達がやろうとしてる事の成功例があれだよ？・・良いも何もないよ・・」

そうか・・よく考えればあの３人の関係が私達が目指す所で・・良いも何も無いのだ・・私が納得して頷き辺りを見ると

「そうか・・２人でばらばらに料理を作って持って行けばいいのか・・」

私と同じようにエリオ達を見ていたスバルが納得という表情で言うと、隣のティアナが

「スバル・・あんた・・料理出来るの？」

そう言われたスバルは目の幅の涙を流しながら

「出来ない・・ティア～簡単なので良いから教えて・・」

そう言われたティアナは

「しょうがないわね・・ほら今から教えてあげるから来なさい・・まったく・・料理の１つ位は覚えなさいよ？」

そう言うティアナの目はスバルではなく私を見ていた・・うっ・・私も料理はまったく駄目な方だ・・唯一できるのはゼリーくらい・・私はフェイトちゃんに

「フェイトちゃん・・私にも料理教えて・・」

そう言うとフェイトちゃんは

「良いよ、それじゃあ今から教えてあげるよ」

笑顔で言うフェイトちゃんに頷き、私達は食堂を後にした・・・私だって女の子ですからね・・好きな人に料理を作って美味しいって言われたいんですよ、今はまだ殆ど料理なんか出来ないけど・・絶対料理を作れるようになって龍也さんに美味しいよって言って貰えるようになるんだから!私はそう決心しフェイトちゃんに料理を教わり始めたが・・

「・・なのは・・もう少し頑張ろう・・」

焦げ焦げの目玉焼きを見ながら言うフェイトちゃんに

「うん・・頑張る・・」

私が龍也さんに料理を作れるようになるにはかなりの時間が掛かりそうです・・

「んー何買おうかな～」

私はヴィータとシグナムを連れて、デパートの中を歩いていた・・兄ちゃんとシャマルにリィンは新しい包丁やエプロンを探しに行ったので、その隙に兄ちゃんを追い詰める小道具を買いに来たのだ

「酒やね・・」

私が酒コーナーに歩いて行こうとするとシグナムが
「主はやて・・兄上は酒を好みませんが・・それでも買うのですか？」
そう尋ねて来るシグナムに
「うん、買う・・この酒を呑むのは兄ちゃんや無い、私達や」
そう微笑むと訳が判らないと言う表情のシグナムとヴィータに
「うふふ・・こういう計画や」
私が考えた作戦を2人に耳打ちすると、2人は耳まで真っ赤になりながら
「えええっ!?・・そ・・そ・・そんな事すんの・・わ・・私・・恥かしい・・」
スカートの端を持ちながらもじもじするヴィータに
「わ・・私は・・そ・・そんな事は出来ません・・」
首をプルプルと振るシグナムに
「あんな・・そりゃ・・私だって恥かしいで?・・でもなぁ・・私は知りたいんよ・・兄ちゃんが・・私達をどう思ってるのか・・」
自分で考えた作戦だが、これをやるのは相当勇気が要る・・でも実

行するだけの価値があるのだ

「・・度数の低いので良いから何本か・・買ってと・・」

赤ワインや普通の酒を数本選び籠に入れていく・・必要な量を買った所で

「さてと・・こんなもんで良いやろ・・んじゃあ兄ちゃんと合流するで」

そう2人に言うと2人はまだ赤面しながら

「ううう・・恥かしい・・でも兄貴が喜ぶなら・・でも気絶するかも・・」

もじもじと呟くヴィータに

「わ・・私も・・どうしてもやらないといけませんか?」

赤面しながら言うシグナムに

「ええか?・・女には時に自分から攻めなかん時がある・・それが今や、恥かしいとかの気持ちは捨ててまえ」

私だって恥かしいのにこうももじもじもじされていると決意が揺らぐ・・今回の休暇はこれをやる為に取った物なのだ・・私がそう言うと

「ううー判ったよ・・やるよ・・やってみるよ・・」

赤面しながら頷くヴィータと

「判りました・・これで兄上の気持ちが判るなら・・」

決心した表情で言うシグナムに頷き

「うんうん・・頑張ろう、皆でやれば怖くないやから」

私はそう言いながら移動を開始した・・私は手に持った酒瓶を見ながら

（待つのも良いけど・・良い加減・・兄ちゃんの気持ちが知りたいかんな・・）

この計画で兄ちゃんの気持ちを少しでも知れると思い、私は微笑みながらそのフロアを後にし洋服売り場に向かった・・

はやてが怪しい計画を立てる頃龍也は・・

「リィンは何を食べたい？」

夕食の材料を探していたりする、隣をチョコチョコと歩きながらリィンは

「う～んとですね・・そうだ！中華です！中華が食べたいです！！」

中華か・・それなら・・

「それじゃあ、海老とか野菜を買い足しに行こうか？」
材料はある程度家にある、だが足りない食材もある、だからそれを探しに行こうと言うとリィンは
「リィンが取ってくるです！何がいるんですか！」
笑顔で飛び跳ねながら言う、リィンの頭を撫でながら
「それじゃあ、海老とピーマンとニラに湯葉を取って来てくれるかな？私とシャマルは他の材料を探すから」
比較的覚えやすいもの物だけを取って来てくれと言うと、リィンは笑顔で走り出した・・私はその後姿を見ながら
「それじゃあ、シャマル他の材料を探しに行こう」
「はい、行きましょうお兄さん」
そう笑うシャマルと他の材料を探す・・
「まずは牛肉と・・次に鶏肉・・と」
牛肉は塊りの奴を選び、鶏肉は腿肉の柔らかく尚且つジューシーな物を選ぶ・・
「それと小エビっと・・これで終わりだな・・」
材料を集め終えた所で

「お兄様～集めてきましたよ～」

リィンがとことこと歩いてくる、手に持った籠の中身を見る・・ちゃんと言った材料が揃っている・・その籠を受け取り

「良し良し、ちゃんと1人で出来たな偉いな」

頭を撫でながら言うと

「んふふ～リィンは頑張ったのです！」

目を細めながら笑うリィンに私とシャマルが笑みを零していると

「兄ちゃん～私の買い物は終ったで～」

洋服の入った袋を抱き抱えたはやて達が歩いてくる・・

「良し・・買い物も終ったし帰ろうか？」

支払いを終え私達は家に向かって歩き出した・・

「お～これは何ですか？」

昼食を終え休憩した後、夕食の準備の為に調理器具を用意してるとリィンが目を輝かせながら尋ねて来る

「これは蒸籠と言うんだ、これで色んな飲茶（ヤムチャ）を作るんだ、さっ・・頑張って手伝ってくれよ」

エプロンを身に着けたリィンの頭を撫でながら言うと

「頑張るです！！」

胸を張りながら言うリィンの後ろから

「私も頑張ります！」

シャマルが握り拳を作りながら言うが、私はジト目で

「手伝うのは良いが・・言う通りにしろよ？」

シャマルは料理は出来るがオリジナルで作ると大変危険な猛毒になる・・だからそう言うと

「だ・・大丈夫です！ちゃんとお兄さんの言う通りにしますから！」

慌てながら言うシャマルに小エビとニラと白菜を渡して

「それじゃあ、小エビをフードプロフェッサーでミンチにした後、白菜とニラを刻んでそれに混ぜ合わせてくれ・・つなぎに卵を使えよ」

シャマルに指示を出すと笑顔で頷き調理を開始したシャマルを見ながら

「リィンは豚肉にたこ糸を巻いて置いてくれ」

リィンに豚肉とたこ糸を渡しながら言うと

「頑張るですよ～」

にこにこと笑いながら言うリィンを見ながら、調理を始める・・

「まずは・・牛肉を一口大に切って・・」

塊りの牛肉を食べ易いように一口大に切り・・筋切りをする・・そして

「これに醤油とラー油で味付けして・・湯葉で包んで・・蒸籠に入れると」

湯葉で牛肉を春巻きの様に包み込み、蒸籠に放り込む・・かなり長時間蒸す必要があるので1番最初に蒸籠に放り込んだ、私が蒸籠に入れ終えると同時にリィンが

「出来たですよ～」

ぐるぐる巻きにした豚肉を差し出してくるリィンからそれを受け取り、同じ様に蒸籠に放り込む

「これは何になるんですか?」

興味津々と言う表情のリィンに

「これはチャーシューにするんだ、その後に肉まんの具の中に刻んだチャーシューを入れて、チャーシュー入り饅頭にするんだ」

何を作っているのか説明しているとシャマルが

「こっちも出来ましたよ～」

シャマルが海老のすり身の入ったボウルを手渡してくる、それを受け取りながら

「良し・・上手く出来てるな・・これに塩・コショウを入れて・・醤油で味付けをしてと・・」

味付けはシャマルに任せられないので味付けをし、シャマルとリィンに餃子の皮を渡して

「良いか・・こうやるんだ・・」

海老のすり身を皮の中心に置き、その上に

「殻を剥いた海老を乗っけて・・皮が破けないように丁寧に包むと・・」

見本を2人の前に置いて

「こういう風にやってくれ・・初めてだから難しいと思うが・・最初はそんな物だ焦らず頑張れよ」

2人にそう言うと

「頑張るです！！」

「頑張ります！」

頑張ると言う2人を見ながら、買って来た野菜を刻み・・中華鍋に油を引いて

「よっと・・」

刻んだ野菜と挽肉を炒める・・

「味付けは・・甘めにと・・」

お子様のリィンとヴィータが居るので辛味を抑えた・・食べ易い回鍋肉を作りながら、横目で

「あれ・・上手く行かないです・・」

「で・・出来ました・・私でも出来たんです・・」

海老餃子を作っているリィンとシャマルを見ながら

（妹に料理を教える・・懐かしいな・・）

随分昔はやてに料理を教えていた頃の事を思い出し、笑みを零しながら、調理を進めた・・

龍也がシャマルとリィンに料理を教えている頃はやては・・

「今回は・・どんだけ兄ちゃんを騙せるかがポイントやね・・」

今回の作戦では酔ったふりをする必要がある・・幸いな事に私達はお酒に強い方だ・・そう簡単には酔わない・・それに酔ったと思わ

せた方が行動し易いのだ

「兄ちゃんの目を上手く騙せたら・・後は上手くそれを維持しながら計画実行するだけや・・」

私はそう呟きながらベッドに横になり

「本当はこんな事したないんや・・兄ちゃんを騙すみたいで・・」

そう本当ならこんな事はしたくない・・最愛の兄を騙すのは本当は嫌で嫌でしょうがない・・だが

「でもな・・知りたいんや・・兄ちゃんが私達の事を本当に妹としか見てないのかどうか・・」

私は唯真っ直ぐにずっとずっと・・兄ちゃんを見てきた・・勿論兄としてではない・・男としてだ・・だが兄ちゃんはどうだろう?・・私達の事を妹としか見てないのかどうなのか・・良い加減に知りたいのだ

「ごめんな・・兄ちゃん・・本当はこんな事したくないんやけど・・今回だけ・・今回だけ・・勘弁してや・・」

私は部屋に飾ってある兄ちゃんの写真を見ながら、そう呟いた・・もうすぐ計画が実行出来る・・シャマルには既に作戦を説明してある・・私達が動く頃にはリィンを連れて部屋に戻る手筈になっている・・丁度今頃ヴィータとシグナムも準備をしているだろう・・

「上手く行ったら良いな・・」

私は計画が上手く行く事を願いながら少しだけ眠る事にした・・兄ちゃん達より多く書類があったので疲れが溜まっていたのだ・・私は沈み行く意識の中・・

「兄ちゃん・・大好きやで・・」

写真の中で微笑んでいる兄ちゃんに向かってそう呟き・・眠りに落ちた・・

第１０９話に続く

# 第１０８話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！久しぶりの本編更新でしたが・・どうでしたか？はやてが何を企んでいるか？気になって頂けたら嬉しいのですが・・それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第１０９話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は前回のはやてが考えた悪巧みの実行編となります・・どのような話になるかは言えませんが、面白い話ではあると思うので、どうか宜しくお願いします

# 第１０９話

第１０９話

「で・・出来ました・・か・・感激です・・」

「出来たです～」

楽しげに言うリィンとシャマルの前に置かれたトレーを見る・・そこには大量の海老を丸々使った海老ギョーザが並んでいた・・私はそれを見ながら

「こっちも出来たぞ」

チャーシュー入りの饅頭、シューマイや海鮮饅頭に・・牛肉の湯葉包み・・春巻きに・・唐揚げ・・それと回鍋肉・・少々作りすぎた感があるがまぁ良いだろう・・その料理を見て目をキラキラと輝かせてるリィンに

「リィン・・1個味見するか？・・シャマルもどうだ？」

蒸籠から饅頭を2個取り出し尋ねると

「食べるです！！」

「はい・・味見します」

笑顔で言う2人に饅頭を渡し、代わりに海老ギョーザを蒸籠に入れ

てから

「所で・・はやては？」

姿の見えないはやての事を尋ねると、

「んーはやてか？・・なんか疲れたから少し寝るって言ってたぞ」

お風呂上りなのか髪を拭きながら言うヴィータに

「そうか・・判った・・もう直ぐ夕食だから・・起こして来よう・・シグナムは？」

同じく姿の見えないシグナムの事を尋ねると

「シグナムは今風呂だぜ・・兄貴・・シグナムは風呂好きだから長風呂になると思うから・・そんなに慌ててはやてを起こさなくても良いぞ」

そう言うヴィータに頷き、私ははやての部屋に向かって歩き出した・・

コンコン

一応ノックしてから

「入るぞ？」

そう声を掛けて部屋の中に入る・・はやては腕で目を隠して眠っていた・・私は苦笑しながら

「やれやれ・・布団くらい着ないと風邪を引くぞ・・」

そう呟きながらはやての枕元に腰掛け、部屋の中を見渡す

「変わってないな・・」

はやての部屋は殆ど変わっていなかった・・昔のままの姿をしていた・・机や布団カバーだけは変わっていたが・・

「これは・・まだあったのか・・」

昔・・シグナム達が現れる前・・2人だけで撮った写真、私はその写真を見ながら

「この時はまだ良かったな・・今みたいじゃなくて・・唯のお兄ちゃんっ娘って感じだったからな・・」

そう呟きながら寝ているはやての前髪を撫でる・・すると

「ん・・ん・・兄ちゃん・・」

寝言で私を呼ぶはやてに

「私と一緒に居る夢を見てるのか・・」

そう呟きながら寝ているはやての頭を撫でていると・・はやてが薄っすらと目を開く

「ん?・・兄ちゃん・・?・・もう朝・・?私1日寝てもうたん?」

寝ぼけながら尋ねて来るはやての頭を撫でながら

「違うよ・・もう直ぐ夕食だから起こしに来たんだよ」

そう言うとはやてはゆっくりと上半身を起こして

「んんーよう寝たわ～気分すっきり・・んでもってお腹空いたわ」

伸びをしながら言うはやてを見ながら立ち上がると、背中にずっしりとした重みを感じ、振り返ると

「えへへ・・兄ちゃん・・おんぶして」

にぱ～と笑うはやてに

「やれやれ・・仕方ないな・・」

私はそう呟き、はやてをおんぶしたまま歩き出した・・

「んー次、私がお風呂か・・なんなら一緒に入る?」

んふふ～と笑いながら尋ねて来るはやてに

「入らん・・1人で入って来い・・」

背中の上のはやてに言うと、はやては頬を膨らませながら

「ええ～詰まんないやん・・偶には一緒にお風呂入ろうよ～」

私のコートを引っ張りながら言うはやてに

「駄目だ・・ほら・・早く入って来い」

風呂場の前ではやてを降ろし、私は居間へ戻っていた・・その後姿を見てたはやては

「・・やっぱ実行するしかないな・・兄ちゃんが悪いんやからな・・」

そう呟き風呂場へと入って行った・・

「んじゃあ・・頂きまーす!!」

はやてが風呂を出てから、夕食となった・・はやてはにこにこと笑いながら海鮮饅頭を頬張り

「はふ・・熱ちち・・んーでもおいひい・・」

熱い具に苦戦しながら食事を進めるはやてに

「あっ・・これ美味い」

牛肉の湯葉包みを齧りぽそりと呟くヴィータに

「やはり・・兄上の手料理が1番です」

にっこりと微笑みながら言うシグナムの姿を見ながら、リィンが作った海老ギョーザを口に運び

（うん・・美味しいじゃないか・・）

最近、リィンとアギトが料理に目覚めたらしく、よく教えてくれと言って来る・・良い傾向だから教えているが・・その度に昔を思い出し・・懐かしいと私は思う・・そんな事を考えてると、リィンが膝の上に座り

「あーん」

口を開くリィンに

「はいはい・・リィンは甘えん坊だな」

唐揚げを取り口に入れてやると

「んふふ～美味しいです～」

本当に嬉しそうに笑うリィンを見ながら、私は食事を続けた・・

（そろそろ・・やね・・）

蒸篭の中の料理が減って・・リィンがお腹一杯になったせいか、目を擦り始めた頃・・私が考えていた計画を実行するチャンスが来た・・私の考えてる事に気付いたのかシャマルが

「リィンはもう眠いんですね・・私も眠いですから・・もう寝ましょうか？」

そう言われたリィンは目を擦りながら

「はいです・・リィンはもう寝るです・・お兄様・・はやてちゃん・・お休みなさいです・・」

シャマルに連れられ部屋に戻って行くリィンを見ながら

「兄ちゃん・・今日くらいは・・飲んでも良いやろ?」

買っておいた酒瓶を持ちながら兄ちゃんに言うと

「・・何時買ったんだ?・・まぁ・・良いか・・あんまり羽目を外すなよ」

そう言いながらシューマイを口に運ぶ兄ちゃんの前のグラスに酒を入れると

「おい・・私は飲まんぞ・・弱いからな」

そう言う兄ちゃんを見ながら自分のグラスに酒を注いで

「んーでも私達だけで飲むのも詰まらないやろ?・・一杯だけで良いで付き合ってや」

そう言うと兄ちゃんは溜め息を吐きながら、グラスを取り

「私は一杯だけだからな?」

そう言う兄ちゃんに頷きながら

「うん・・それで良いで・・んじゃあ・・乾杯！！」

私は笑いながらグラスの中身を飲んだ・・久しぶりの一杯に加え、兄ちゃんと一緒というのが嬉しくて・・安い酒だが・・それはとても美味しく感じた・・ヴィータとシグナムも同じ様で本当に美味しそうに飲んでいた・・一方兄ちゃんは

「むう・・強い酒だな・・」

私達からすればかなり度数の低い酒だが・・兄ちゃんには強かったようでたった一杯でその顔は若干赤らんでいた・・私はその様子を見て

（上手く行きそうやね・・もう5～6杯飲んだら・・実行しよ・・）

そんな事を考えながら空になったグラスに再び酒を注いだ・・

「んん・・はふう～えへへ～兄ちゃん～」

ある程度飲んだ所で酔ったふりをしながら兄ちゃんに抱きつく・・すると兄ちゃんは

「だから・・飲みすぎるなと言ったんだ・・」

兄ちゃんも多少酔ってるのか、私が酔ったふりをしてるとは気付いてないようだった・・私は好都合と内心微笑みながら、上着のボタンを外す・・もちろん完全に外しはしない・・別に完全に脱いでも良いのだがそうなると兄ちゃんが気絶する可能性が出てくるからだ・・下着が僅かに顔を見せる程度の所で止め、兄ちゃんに下着を見せ

つけるように

「なぁ・・兄ちゃんは～私の事どう思ってるんよ～私は・・好きや・・ううん大好きや・・誰よりも何よりも・・ひっく・・兄ちゃんが大好きや」

胸の間に兄ちゃんの腕を挟みこみながら上目目線で言うと

「うっ・・うわ・・」

耳まで真っ赤にし・・私から視線を逸らそうとする兄ちゃんの顔を両手で挟みこんで

「なんでそっぽ向くんよ・・やっぱ・・兄ちゃんは私が・・ひっく・・嫌いなんか？」

業と泣き出しそうな声で言うと、兄ちゃんはうろたえながら

「い・・いや・・嫌いじゃない・・嫌いじゃないんだ・・」

動揺しながら言う兄ちゃんに罪悪感を少し感じたが・・

（兄ちゃんが悪いんや・・何時までも何時までも・・私を待たすから・・好い加減・・本当の気持ちを知りたいんや・・）

そう呟きながら一瞬、ヴィータの顔を見る・・私が何を言いたいのか理解したヴィータは顔を真っ赤にしながら・・私と同じ様に服を脱ぎながら、兄ちゃんに抱きつき

「兄貴・・わ・・私は・・どうなんだよ～・・ひっく・・嫌いなの

か～最近は昔みたいに一緒に寝てくれないし・・私・・ぐす・・兄貴に嫌われるようなことしたか・・？」

ヴィータは割とこういうのが得意なのかもしれない・・泣きながら言われた兄ちゃんは・・完全に平常心を失ったようで・・

「いや・・いや・・ち・・違う違うぞ！！ヴィータ・・私はお前の事を嫌ってなんか無いぞ！！だから泣くなよ・・なっ！」

完全にてんぱってる兄ちゃんにヴィータは目を真っ赤にしながら

「んじゃ・・なんで前みたいに一緒に寝てくれないんだ？・・わ・・私は・・兄貴と一緒に寝ると・・安心出来るのに・・何で何時も駄目って言うんだよ・・」

上目目線で兄ちゃんの胸元に抱きつきながら言う、ヴィータに兄ちゃんは

「いや・・その・・ヴィータが・・その・・綺麗に成り過ぎて・・緊張すると・・いうか・・何と言うか・・」

しどろもどろに言う兄ちゃんの言葉を聞きながら、シグナムの方を見る・・今兄ちゃんは・・大分精神的にダメージを受けてる・・このシグナムも加われば・・好い加減本心を聞けるかもしれない・・私の言いたい事を理解したシグナムは後ろから兄ちゃんに、その大きな胸を押し付けながら

「兄上・・前に言いましたよね・・私が兄上の事を好きだって・・ひっく・好い加減に返事をお聞かせください・・」

兄ちゃんは耳所か首筋まで真っ赤になり

「あ・・ああ・・そ・・その・・いや・・まだ・・時間を・・」

そう言って私達を引き離そうとする兄ちゃんに・・そうはさせないと全力で兄ちゃんに抱きつく

「うあ・・ああ・・その・・わ・・私は・・はやて達の事は好きだが・・」

この言葉を聞きたかった・・私達は兄ちゃんの方を向いて・・目を閉じ・・こういう時に涙は自然と流せ事を初めて知った・・私は流しながら

「好きって言うなら・・証拠が欲しいわ・・それとも妹にはキス出来ん？」

この体勢を見れば・・どれだけ鈍感でも判るだろう・・目を閉じてるので兄ちゃんの表情は判らないが・・声だけはちゃんと聞こえていた

「・・あ・・うう・・証拠・・？それは・・その・・酔ってる・・よな・・それじゃあこの事は覚えてないよな・・ええいっ！！1回・・1回だけだからな！！」

兄ちゃんは私達が酔ってると思い込んでるようでそう呟いてから、私の頬に軽く触れるだけのキスをしてくれた・・頬なのが少し癪だったが兄ちゃんからの初めてのキスだった・・兄ちゃんは

「はやて達は・・その・・私にとって・・家族で・・でも1番近く

に居る・・異性で・・その・・意識しない筈が無い・・はぁ・・酔ってて良かった・・こんなのはやて達に知られたら・・私は終わりだ・・」

ぶつぶつと呟く兄ちゃんの言葉を聞いて、私は思いっきり兄ちゃんに抱きついた・・それは私だけでは無くシグナムとヴィータも同じ様だった・・だが・・それは間違っていた・・良く考えるべきだった・・私達は兄ちゃんを動揺させる為・・下着が見えるようにしていた・・つまり・・

「えっ・・えううう・・きゅう・・」

刺激がどうやら強すぎて兄ちゃんは目を回して気絶してしまった

「あちゃー・・もうちょい考えて行動すべきやったなぁ・・」

上着のボタンをしながら私はそう呟いた・・兄ちゃんは女の子に対する免疫が低い・・それを計算すべきだった・・

「んーえへへ・・兄貴～」

気絶してる兄ちゃんを抱き抱えて楽しそうに笑っているヴィータに

「・・多分兄ちゃん、明日になったら今日のこと忘れてるで」

そう言うとヴィータは

「ええ～ッ！！何で！？」

訳が判らないと言う表情で尋ねて来るヴィータに

「兄ちゃんはな・・昔からショックな事があると・・それに関する記憶を自分で消去する癖があるんよ」

昔・・なのはちゃん達と出会った頃だろうか・・兄ちゃんとお風呂に入ってる時にタオルが取れて兄ちゃんに全裸を見せてしまった事があった・・次の日妙に気恥ずかしくてもじもじしてると、兄ちゃんはその時の事を丸々忘れていた・・だから今回の事も忘れてるだろうと言うとシグナムは

「それでは・・恥かしい思いをして・・こんな事をした意味が無いではないですか・・」

がっかりした声で言うシグナムに

「意味はあるで?・・少なくとも兄ちゃんは私達の事を異性として見てくれてるって事が判ったやろ?・・そんで充分収穫があったわ」

兄ちゃんは私達が酔ってると思って自分の本心を話してくれた・・それで充分だ・・

「妹としか見られてないなら・・私達は終わりやろ?・・でも兄ちゃんは私達の事を異性をして意識してくれてる・・そんで充分や」

兄ちゃんは自制心が凄く強いから、そんな事は表面に決して出さないが・・やはり内面では私達の事を意識してくれていた・・それで充分・・後は時間を掛けて兄ちゃんの意識を変えれば良い・・私はそんな事を考えながらヴィータに

「なぁ・・ヴィータ・・兄ちゃん部屋に連れて行こう・・このまま

や風邪引いてまうで」

そう言うとヴィータは頷き私と同じ様に兄ちゃんを抱き上げ・・私に

「部屋に連れてくだけか・・一緒に寝ちゃ駄目なのか?」

一緒に寝たいと言うヴィータに

「良いに決まってるやん、久しぶりに兄ちゃんに抱きついて寝よ・・シグナムはどうする?」

振り返り尋ねるとシグナムは顔を真っ赤にさせながら

「・・その・・大変魅力的な提案なのですが・・恥ずかしいので辞退します・・」

そう言って自分の部屋に歩いて行くシグナムを見ながら、兄ちゃんの部屋に向かった

「「よいしょっと・・」」

兄ちゃんをベッドに横にし・・その両隣に寝転び

「ん・・へへ・・暖かい・・」

兄ちゃんの腕を抱き抱えるように抱きつく・・反対側を見ると

「ん・・兄貴の匂い・・それに暖かい・・凄く安心する・・」

目を細め兄ちゃんの腕を抱きしめてるヴィータを見ながら

（兄ちゃんは・・やっぱり・・私達の事を意識してくれてた・・えへへ・・嬉しいわ）

兄ちゃんの腕を確りと抱きしめ・・良く考えれば兄ちゃんが最近一緒に寝てくれないのは・・妹としてではなく確かに異性として認識してくれてる証拠でもあったのだ・・これが判れば充分なのだ・・少なくとも私達はなのはちゃん達より兄ちゃんの心の深い場所に居る・・それが判って安心した・・私は兄ちゃんの体温を感じながら

（今日は・・良い夢が見れそうや・・）

私は眠りに落ちて行った・・

第１１０話に続く

# 第１０９話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回は龍也さんの気持ちが少しだけ判りましたね・・龍也さんは他人に優しく、自分に厳しいため・・そういう気持ちを心の底に封じてるのですが・・今回ははやて達が酔ってると思い込み、自分の気持ちを少しだけ吐き出したと言う所ですね・・自分では割と自信のある話だったのですが・・・やはり少々不安なので感想を貰えると嬉しいです！次回は最近影の薄かった「ティアナ」がメインの話になると思うので、どうか宜しくお願いします！それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう

# 第１１０話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は前回の予告通り、「ティアナ」がメインですね・・私はティアナは大分好きなので楽しく執筆できたと思います！それでは今回もどうか宜しくお願いします

# 第１１０話

第１１０話

「はぁ・・はぁ・・ふう・・今日はこれくらいで終わりにしようかしら・・」

私は汗を拭いながらその場に座り込んだ・・演習場には誰も居ない・・それは当然だ・・もう深夜２時半・・こんな時間まで訓練してる馬鹿は居ないだろう・

「って・・それじゃあ私は馬鹿みたいね・・」

自嘲気味に呟き座り込んで持って来ていたスポーツドリンクを飲みながら

「・・スバルは強くなった・・私よりも・・・ううん・・スバルだけじゃない・・エリオもチンクさん達も・・私より高みに居る・・」

極光を物にし始めたスバル、条件付だが龍也さんと同レベルで戦えるようになったエリオ・・そして・・龍也さんに戦い方を叩き込まれたチンクさん達・・

「やっぱり・・凡人じゃ天才には勝てないのかしら・・」

私はスバルほど才気も無ければ、チンクさん達ほどの身体能力も無い・・

「私・・足手纏いなのかな?・・こんなんじゃ・・龍也さんの隣になんか立てないよ・・」

私が泣きそうな声で呟くと、待機状態のクロスミラージュが

『マスターそんなにお気になさらずに・・龍也様が仰っていたのでしょう?・・素晴らしい魔道師になれると・・今は焦らず地力を付けましょう』

心配するような口調のクロスミラージュに

「そうね・・その通りよ・・焦らず地力を付けて・・龍也さんの隣に立てるようにならないと・・」

龍也さんの隣を歩くにはもっと力が必要だ・・なのはさん達くらいとは言わないが・・もっと・・もっと力がいる・・今の私では足手纏いにしかならない・・それでは駄目なのだ

「自主練はまた明日・・新しい魔法のパターンでも考えましょうか・・」

私はそう呟くと演習場を後にした・・ふらつきながら歩いて行くティアナを見る1人の男・・龍也だ・・龍也は頭を抱えながら

「やれやれ・・ティアナも無茶をする・・」

そう呟く私の背後に人の気配を感じる・・その気配の主は・・ハーティーンだ・・ハーティーンは歩いて行くティアナを見ながら

「守護者・・あのままではあの小娘・・潰れるぞ、体力的にも魔力的にも精神的にも追い詰められてる・・まぁ・・強くなりたいという気持ちは判らんでもないがな」

私を見ながら言うハーティーンに

「私にどうしろと？」

その目に映ったお前の所為だと言いたげなハーティーンにそう尋ねると

「知らん・・自分で考えろ・・このまま潰れていくのを唯見てるのか・・上官として・・相談に乗るかは自分で考えろ・・そもそも・・お前は上官としての心構えが足りない・・上官とは常に部下の体調などを把握しておく物だ」

そう言って歩いて行くハーティーンに

「すまん・・余計な手間を掛けさせた」

ハーティーンは口は悪いが、人の事もちゃんと考えてるし、面倒見も良い・・過去の騎士団長という役職に就いていたのは飾りではないのだ・・私が礼を言うと・・ハーティーンは振り返らず

「まったくだ・・俺に迷惑を掛けるな・・俺は忙しいんだからな」

憎まれ口を叩いて歩く、ハーティーンの後姿を見ながら

「忙しいか・・毎日毎日木の上で昼寝してる奴がよく言う・・」

ラグナと居ない時は、基本的に木の枝の上で眠りこけているハーティーンだが、あれはあれで周りの事も見てるし・・面倒見が良い・・

「さてと・・行くとするか・・」

私はティアナをどうしようかと考えながら自室に戻った・・次の日

「くっ・・」

ティアナとウェンディに模擬戦を見るが・・明らかにティアナの動きが鈍い・・無理も無い連日のオーバーワーク・・禄に身体が動く訳が無いのだ・・それに気付いたウェンディが

「ティアナ・・どっか調子悪いっすか?・・そんなら今日はこれ位で止めにするっすか?」

心配そうに言うウェンディに

「平気よ・・続けて・・」

そう言ってガンモードのクロスミラージュを両手で構えるティアナに、ウェンディは溜め息を吐きながら

「どうなっても知らないっすよ・・ファング・・スラッシャーッ!!」

左手から十字型のブーメランを投擲する・・ティアナはそれを見ずに回避するが

「甘甘っす・・今日は私の勝ちっすね・・ブーステッドライフル・・シュートッ！！」

ファングスラッシャーを投げると同時に、構えていたライフルから魔力弾を放った・・

「えっ・・ッつぅ・・」

がら空きの胸元に魔力弾の直撃を喰らい吹っ飛ぶティアナを見て

（やはりか・・そろそろ・・ケアに動くか・・）

今日の訓練はティアナの身体の調子を見る為の物だ・・やはり予想通り、身体の調子を崩してる上に精神的に来てるのは目に見えて判る・・私は肩で息をしながら立ち上がるティアナに

「ティアナ！シャワーを浴びたら私の部屋に来い、話す事がある・・なのは・・悪いがセッテ達の訓練を見てやってくれ」

ティアナにそう言ってから、なのはにそう頼むと

「良いですよ・・でもティアナに変な事しちゃ駄目ですよ？」

疑うような目線のなのはに

「・・変な事とは何だ？・・唯ティアナに話があるだけなのだか？」

そう言うとなのはは頭を抱えながら

「そうでしたね・・龍也さんはそういう人でしたね・・余計な心配

でしたね・・」

ぶつぶつというなのはを見ながら、私は部屋に戻った・・

ど・・どうしよう・・きっと幻滅された・・もう駄目だ・・私じゃやっぱり・・龍也さんの役に立てないんだ・・きっと必要無いって言われるんだ・・私はそんな事を考えながら龍也さんの部屋に向かった

「・・怖いなぁ・・」

普段なら緊張こそしても怖いとは感じない・・だが今回はこの部屋の戸を叩くのが酷く怖かった・・

「でも・・行かない訳には行かないもんね・・はぁ・・行こう・・」

私はそう呟いてから龍也さんの部屋の扉を叩いた・・すると

「鍵は開いてる・・入って来い」

私はその声を聞いてから龍也さんの部屋に足を踏み入れた・・

「来たか・・待ってたぞ・・とりあえず座って待ってろ」

そう言って部屋の置くに歩いてく龍也さんを見ながら、私はソファーに腰掛けた

（やっぱり・・もう失望されちゃったのかな・・少し怒ってる様な気もするし・・）

そんな事を考えてると龍也さんがティーポットを持って戻ってくる

「・・とりあえず飲みなさい」

そう言われ差し出されたカップを受けとると、龍也さんが向かい側に腰掛けた

「頂きます・・」

私はそう言ってから紅茶を飲んだ・・それはとても良い香りがして・・安心できた・・

「ティアナ・・最近無茶をして無いか？」

龍也さんが心配そうに話し掛けてくる・・私は夜遅くまで訓練してるとは言えず

「えっと・・その・・無茶はしてないと思いますけど・・？」

しどろもどろで答えると龍也さんは

「昨日もその前も・・深夜まで訓練するのが無茶でなく・・なんと言うんだ？・・私に教えてくれ」

・・うっ・・バレテル・・私が内心動揺してると、龍也さんは

「良いか？ティアナ・・昔私が言った事を覚えてるか？」

そういわれ私は

「はい、覚えてます・・無茶せず地力をつけろでしたよね？」

昔龍也さんに言われた事だ・・ちゃんと覚えてる・・この言葉があったから兵学校でも頑張れたのだ

「そうだ・・だが今のお前はどうだ？・・焦って無茶をしてないか？・・寝る時間も休む時間も惜しんで・・訓練して・・そんな事をしていては体を壊すぞ？」

その言葉で気付いた・・龍也さんが私の事を心配してくれてるのだと・・

「・・ティアナが自分が凡人じゃないのか？と悩んでいるのは知ってる・・だがな言わせて貰うが、私はお前の才能を認めてるんだ・・いや・・私だけじゃないな・・なのはもヴィータも口では何だかんだ言ってお前の事を認めてるんだ」

私は何と言えば良いのか判らず黙り込んでいると、龍也さんは

「良いか？ティアナ・・お前には指揮官の才能がある・・柔軟な思考に優れた戦況把握能力・・それがあるから、私はお前をスバル達のリーダーにしてるんだ・・判るか？お前の武器はスバルの様な攻撃力じゃない・・エリオの様な速さでもない・・お前の武器は目に見える物じゃない・・お前の武器はここだ・・」

龍也さんが私の頭に手を置き、穏やかに微笑む、龍也さんはそのままわしゃわしゃと私の頭を撫でて

「良いか?もう1度言おう、ティアナには才能がある、焦らずじっくり地力を付ければきっと素晴らしい魔導師になれる」

穏やかに微笑みながら言う龍也さんの顔が見えず・・私は俯きながら

(そうだ・・何を私は焦ってたんだ・・龍也さんの言葉を支えに私はここまで来れたのに・・なんでこんなに焦ってたんだ・・)

置いて行かれてると思い込み・・無茶をして体を壊して・・龍也さんに心配させて・・私は何をしてたんだ・・私は謝ろうと思い龍也さんの顔を見ながら

「ご・・ごめんなさい・・た・・龍也さん・・ごめんなさい・・心配させて・・ごめんなさい・・」

私が何度も謝ると龍也さんは何も言わず私の頭を撫で続けてくれた・・龍也さんの手は大きくて・・暖かくて・・とても安心できた・・どれくらいそうしていただろうか・・

「ふあああ・・」

昨日も遅くまで自主錬をして・・魔法の構築も考えていて・・寝たのは2時間くらいだった・・だから眠くなって欠伸をしてしまうと

「眠いのか?・・寝ても良いぞ」

寝ても良いと言う龍也さんの方を見て・・私は赤面しながら

「あの・・龍也さんその・・前にヴィータさんに膝枕してましたよ

ね？・・私は駄目ですか？」

そう尋ねると龍也さんは

「膝枕・・？・・ああ・・そう言えば前にヴィータにしてやったな・・別に構わんが・・男の膝枕など固いだけだと思うぞ？」

そういう龍也さんに

「良いんです・・ちょっと昔・・兄さんにして貰ったのを思い出して・・やって欲しいなと思っただけですから・・」

私はそう言うと龍也さんの座ってるソファーに腰掛け

「それじゃあ・・その・・失礼しますね・・」

龍也さんの膝に頭を置く・・確かにちょっと固かったけど・・凄く安心できた・・

スッ・・

龍也さんが優しく頭を撫でながら

「今はゆっくり休むと良い・・」

私はその声を聞きながら、眠りに落ちた・・

「男の膝枕など固いだけだと思うんだがな？」

膝の上で穏やかな寝息を立てて眠る、ティアナの頭を撫でながら呟く・・ヴィータとか・・リィンが好きなのだが・・どうしてティアナまで膝枕を希望したのか判らなかった

「昔を思い出したって・・言ってたな・・まぁ・・それなら仕方ないか・・」

私はティアナが起きるまでそのまま頭を撫で続けていた・・

「う・・うん・・あっ・・おはようございます」

日が暮れ始めた頃にティアナが目を覚まし、私の顔を覗き込みながら挨拶をしてくる

「おはよう、ティアナ・・良く寝れたかね？」

そう尋ねるとティアナは身体を起こしながら

「・・んん・・良く寝れたと思います・・こんなに安心して寝れたのは何時振りでしょうか？」

猫の様に伸びをしながら言うティアナに

「それなら良いが・・ヴィータとかに言うなよ？怒るから」

前に休暇で家に帰ってから、はやてとかヴィータが私がスバルとかと話をしてると凄く不機嫌になるのだ・・だからそう言うとティアナは

「そうですね・・判りました・・この事は言わないで置きますね・・」

そう微笑むティアナに

「それと・・ティアナ、クロスミラージュを貸してくれ」

ティアナにクロスミラージュを貸してくれと頼むと、ティアナは首を傾げながらもクロスミラージュを手渡してきた・・私はそれを受け取り

「クロスミラージュ・・今からデータを送るからな」

そう声を掛けてからクロスミラージュに私が使う魔法を2種類の情報を送り、ティアナに

「私の魔法の構築を2つほど転送しておいた・・ティアナなら使いこなせると思う・・頑張れよ」

そう声を掛けながらクロスミラージュを手渡すと

「どんな・・魔法なんですか？」

どんな魔法か気になるのか尋ねて来るティアナに

「前に見ただろう？・・ガンファミリヤ・・あれと・・私が使う砲撃のデータを送った・・ガンファミリヤの方はそのまま使えると思うが・・砲撃の方は大分調整しないと駄目だからな」

そう注意をするとティアナは待機状態のクロスミラージュを握り締めながら

「判りました・・それと・・これを使いこなす為の訓練に付き合ってくれますか？」

そう尋ねて来るティアナに

「勿論だ・・私で良ければ、全力で協力させて貰うよ」

そう返事を返すとティアナは嬉しそうに微笑み

「ありがとうございます！龍也さん」

元気良く部屋から出て行こうとしたティアナは、部屋の入り口の近くで立ち止まり、何かを思い出したように私の方に歩いて来て

「龍也さん！私は諦めませんからね！・・絶対に振り向いて貰いますからね！」

ティアナはそう言って部屋の入り口に歩いて行き、部屋から出掛けた所で振り返り

「龍也さん・・私は貴方が大好きです！・・返事は後で良いです・・でも忘れないで下さいね・・私が貴方を好きだって事を・・それじゃあ、また明日」

そう言って今度こそ部屋を出て行ったティアナの後姿を見ながら

「・・思い出した・・前に・・抱きつかれて告白された事があった

な・・本気・・だったのか・・」

前にティアナに告白された事を思い出し・・赤面しながら

「はやても・・なのは達にしてもだが・・私なんかの何処が良いんだ？・・もっと良い男がいるだろうに・・」

私はそう呟き、窓の外を見た・・夕暮れ時特有の赤とも緋色ともとれない、特徴的な色の空を見ながら

「本当に・・私なんかの何処が良いんだろうな・・」

この呟きは誰に聞かれるもなく・・天井へと吸い込まれて行った・・

第１１１話に続く

# 第１１０話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回のティアナの話はラブコメではなく、原作の力を求めるティアナ・・の部分を出す話にしてみましたが・・どうでしょうか？・・自分では結構良いかなと思うのですが・・不安なので感想を貰えると嬉しいです！次回は「チンク」「ウェンディ」がメインですね・・ジェイルが２人に渡していた何かが・・騒動の切っ掛けになります・・まぁ・・ギャグ系の話にしようかなと思っています、それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします

# 第１１１話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回は影の薄いと言うかあんまり出番の無い「チンク」「ウェンディ」がメインの話になります・・ジェイルが２人に渡してた薬と・・それが切っ掛けで起きる騒動というよりかは純情系でしょうか・・チンクメインだとギャグは少し難しいですよね・・元々ナンバーズの中では大分好きなキャラですし・・でも中々面白いと思うのでどうか宜しくお願いします

# 第１１１話

１１１話

「・・最近八神の奴・・私を蔑ろにしてないか？」

私は八神とスバル達の訓練を見ながらそう呟いた・・私達は確かに八神に昔から訓練を受けていたから、スバル達よりかは能力は高いだろう・・だが

「構って貰えないのは・・寂しいな・・」

自分でも上手く説明できないが・・酷く寂しい・・子供じみた感情だが・・自分でもどうしようもない・・いやこれは八神の所為だけではなく

「ノーヴェとか・・セッテみたいに・・普通に話を出来れば良いんだがなぁ・・」

私は上がり性で八神と2人きりで恥かしいのと緊張して禄に話せない・・それもきっと原因の1つだ・・だが・・

「私も悪いと思うが・・八神の方が悪い・・そうに決まっている・・」

自分の部隊に呼んでおいて構ってくれない八神が悪い・・そう考えてると

「チンク・・？頭を抱えてどうした？気分でも悪いのか？」

訓練が終ったのだろう・・私を見つけてそう尋ねてくる八神に

「ああ・・気分など悪くない！！・・」

私はそう言うと八神に背を向けて走り出し・・自分の部屋に戻ったが・・私は直ぐに自己嫌悪に陥ってしまった

「うう・・どうして・・私はこうなんだ・・自分が嫌になる・・」

戦闘中とかなら平気なのだが・・日常生活ではまるで駄目で・・八神の目を見て話すことも出来ないし・・さっきのような行動に出てしまう私が嫌だ・・私が自分のベッドの上で膝を抱えていると

「うー痛たた・・ティアナはもう少し手加減と言うのを覚えて欲しいっす・・」

リビングの方から、ウェンディのぼやく声が聞こえる・・

「また・・ティアナとの模擬戦で怪我をしたのか・・見てやるか・・」

私はそう呟き自分の部屋を後にした・・リビングでは案の定ウェンディが救急箱から、傷テープや消毒液を出して、自分の怪我の応急処置をしていた・・私が近付くとウェンディは

「あれ？チンク姉っすか？・・どうしたんすか？」

首を傾げながら尋ねて来るウェンディに

「何・・お前が怪我をしているようだから、姉が見てやろうと思ったのだ」

・・身長や胸では圧倒的に負けているが・・一応姉としてのプライドもある・・だからそう言うと

「いやー嬉しいっす・・クア姉は見てくれないっすからね～チンク姉が居て良かったすよ～」

嬉しそうに笑うウェンディの右腕を見る・・深い傷とかは無いが・・擦り傷が大分ある・・私が傷に消毒液を掛けてから傷テープを張ってやると

「えへへ・・ありがとうっす・・」

にこにこと嬉しそうに笑うウェンディだったが・・私の目を見て

「チンク姉・・龍也兄の事で悩んでたっすか？」

そう言うウェンディに

「・・うむ・・まぁ・・そうだな・・」

赤面しながら頷くとウェンディは

「また目を見て話せなかった・・とか・心配してくれてるのに逃げちゃった・・「うっ・・」・・図星っすか・・」

私の行動を言い当てるウェンディに私が言葉に詰まってると、ウェンディは大きく伸びをしながら

「チンク姉は上がり性っすからね～それを言えば・・私も子供っぽいっすけど・・」

そう苦笑するウェンディ・・私はウェンディの悩みを知っている・・ウェンディは1番早く八神の本質に気付き・・黒騎士の時から・・良く懐いていた・・八神に直ぐに抱きついたりするのは、好きであるのと同時に本当の兄の様にウェンディが八神を慕っているからだ・・しかし甘えん坊と言う性格の所為で、子ども扱いされている・・その事が悩みなのだ

「うむ・・そうだな・・姉とお前には決定的な欠点がある・・だがお前の悩みは考えようによってはプラスじゃないか」

八神は子供好きだし・・考えようによってはプラスだろう?と訪ねると、ウェンディは頬を膨らませ

「うー確かにプラスっすけど・・子ども扱いはいやっす・・」

そう言うウェンディは思い出したように

「そうっす!お父さんが困った時に飲みなさいって言って渡してくれた、薬があるッす!!」

そう言うと部屋に戻って行ったウェンディは、直ぐに水色の瓶に入った液体を持って来た

「これを飲めば・・悩みが何とかなるって・・お父さんが言ってたっす・・チンク姉・・飲んでみるっすか?・・」

そう言うウェンディに

「父さんの事だから・・何か裏があるかもしれない・・でも・・飲んでみるか・・」

何か裏があるかもしれないが・・悩みが解決すると言うなら・・飲んでみようと思い・・ウェンディが持って来た薬を半分に別け飲んだ・・

「「特に変化は無いが・・・！！うぐっ・・・・」」

特に変化が無いと呟いた瞬間・・強烈な胸の痛みを感じ蹲り・・私達は意識を失った・・

「ううん・・あれ・・私は・・・・！！」

私が目を覚ますと同時に驚いた・・それと同時に立ち上がり鏡を見る

「・・これが・・私か・・」

私が気にしていた、背や胸が大きくなっていた・・フェイトほどではないが・・なのはよりかは良いプロモーションだ・・私が鏡を見ながら自身の変化に驚いてると

「チンク姉・・私はどこか変わりましたか？」

そう尋ねて来る、ウェンディに違和感を感じた、容姿は特に変化してないが・・何か違和感が・・私が首を傾げてると

「ううう・・私はどこも変化してないんですね・・お父さんの薬は私

には効果が無かったんですね・・」

違和感の正体が判った・・私はウェンディに

「ウェンディ・・喋り方が変わってるぞ・・何か・・ディード見たいな感じだ」

そう言うとウェンディは驚いた表情で

「変化ってこれだけですか・・？・・これで龍也兄に子ども扱いされなくなりますか？」

そう尋ねて来るウェンディに違和感を感じながら

「知らん・・確かめに行って見るか？」

どれくらい変化してるのかも判らないし・・八神の所に行くか？と尋ねると

「えっ！？・・・うー・・うん・・行ってみます・・」

・・・これは本当にウェンディか？・・まるで私の様ではないか・・私はそんな事を考えながら八神の部屋に向かった

「ふむ・・やはり皆上達してるな・・」

私は皆の能力を纏めたグラフを見ながらそう呟いた・・スバルとかエリオ・・それにティアナは私がここに入った頃と比べると大幅に

能力が上昇しているし・・なのはやフェイト、シグナムにヴィータも凄まじく強くなっている・・今試験を受ければＳＳ＋に楽に合格できるだろう・・だが私はある一点で頭を抱えた

「はやてがオーバーＳ・・しかも私と同じＳＳＳ＋・・何があったんだ・・一体・・」

はやての能力が大幅に上昇しすぎている・・やはりフォールダウンモードの影響なのだろうか・・そもそも堕天を意味するフォールダウンの名を冠するはやての新形態は、精神的にも肉体的にも何か影響があるのかもしれない・・

「まぁ・・大丈夫だろう・・凶暴化するとかじゃないし・・」

龍也は知らない・・フォールダウンの影響ではやてのヤンデレ度が凄まじく上昇している事に・・私が書類を片付けると同時に

コンコン・・

ノックの音がする・・私は首を傾げながら

「はて・・？誰だろうか・・訓練が終ったばかりだから・・なのはとかじゃないよな・・？」

訓練が終ったばかりだから、皆書類整理をしているはず・・では誰だろう？・・私はそんな事を考えながら扉を開き停止した

「八神・・今良いか？」

「・・少し・・話を・・したいのですが・・駄目でしょうか・・」

目の前に居る美女は・・私の事を八神と呼ぶ点からチンクだろう・・
だがその容姿は先程あった姿と全く違っていた・・背が大分伸び・・
それに合わせて胸や腰回りがより女性らしくなっていた・・更にそ
の後ろに居るのはウェンディだろうが・・何か何時もと違う・・赤
面し自分のスカートを握り締めながらもじもじしている姿はディー
ドの物に良く似ていた・・私が２人の変化に驚き停止していると・・
チンクが

「今・・忙しいのか？・・それとも私達と話すのに割く時間が惜し
いか？・・それならそうと言ってくれ」

何時もと違い私の目を見て言うチンクに正気に戻り

「ああ・・すまない・・いや別に暇だから・・話しくらい聞くさ・・
入ってくれ」

私は２人を部屋に招きいれた・・私は２人に紅茶を入れたカップを
渡しながら

「あーまず聞きたいんだが・・チンクは何故大きくなってる？・・
成長期か？・・それとウェンディは・・何故性格が１８０度変わっ
てる？・・教えてくれないか？」

そう尋ねるとチンクは紅茶を飲みながら

「父さんが作っておいてくれた薬を飲んだ、そしたら身体が大きく
なった・・ウェンディは性格が変わった」

そう言うチンクを見ながら、その隣の腰掛けているウェンディを見

ると

「／／／そんなにじっと見ないで下さい・・恥かしいです／／／」

赤面しながら言うウェンディに

「そ・・そうか・・すまない・・」

何か調子が狂う・・ウェンディは元気で甘えん坊という印象なのだが・・今目の前に居るウェンディは小動物の様でとても可愛らしかった・・私がそんな事を考えているとチンクが

「ウェンディとばかり話をしてないで、私の話も聞いてくれ」

少し不機嫌そうなチンクに

「判った」

そう言ってチンクの方を見ると、チンクは真剣な表情で

「八神・・私は教導官になれると思うか？」

そう尋ねて来るチンクに

「教導官？・・急にどうしたんだ」

教導官の事など一言も言ってなかったチンクが急にそう尋ねてきたので尋ね返すと

「前に言っていただろう？・・八神は教導官としても活動するのだ

ろう？」

そう前にレジアスから教導官として働いてくれないか？と頼まれたのだ・・何でも私の訓練を希望する新人の魔道師が多いそうなのだ・・だから教導官として働いてくれと言われ・・了承したが・・どうしてチンクが知ってるんだろうか・・私がそんな事を考えてると

「なのはが嬉しそうに言っていた、八神が私と同じ教導官になると・・それでどうなんだ・・私は教導官になれるのか？・・・」

そう尋ねて来るチンクに

「私は大丈夫だと思うぞ？・・チンクは市街戦とか得意だし・・隠密行動も得意だろ・・それに指揮官としての能力も高いし・・教導官になるなら試験にさえ合格すれば良いと思うぞ？」

そう言うとチンクは嬉しそうに微笑み

「そうか・・では明日にでも本局に行って資料を取ってこよう」

そう笑うチンクを見てるとウェンディが

「龍也兄・・龍也兄は・・私達の事が嫌いなの？」

若干涙目で尋ねて来るウェンディに

「いや・・嫌いではないが・・どうして急にそんな事を言うんだ？」

そう尋ねるとウェンディは下を向きながら

「龍也兄は・・スバルとかティアナばっかり・・訓練を見て・・なのは達ばっかりと遊びに行く・・私達とはあんまり訓練してくれないし・・遊びにも行ってくれない・・だからそう思ったんです・・」

そう言われて私は言葉に詰まった・・確かにウェンディの言うとおりだと思った・・私は知らず知らずの内にウェンディ達を傷つけていたのかもしれない・・私が言葉に詰まってるとチンクが

「そうだ・・それは私も感じていた・・どうなんだ・・やはり八神は私達の事は嫌いなのか・・だから訓練も見てくれないし遊びにも連れてってくれないのか？」

詰め寄りながら言うチンクとウェンディに

「すまない・・私は知らない内にチンク達を傷つけてたんだな・・本当にすまない・・言い訳かもしれんが・・私はお前達が嫌いじゃない・・それだけは判って欲しい」

私がそう言うとウェンディは

「じゃあ・・龍也兄は私達が嫌いじゃないんですね？」

そう尋ねて来るウェンディに頷くとチンクは

「・・判った・・だが言葉だけでは信用出来ない・・行動で見せて欲しいのだが？」

真剣な表情で言うチンクに

「明日・・休暇だろう・・その時・・チンク達と遊びに行く・・そ

れだけでは駄目か？」

明日は休暇になっている、だから明日遊びに行こうというとチンクは

「・・そうだな・・ふむ・・妥当な所か・・良いだろうでは約束だ、明日本当に私達を遊び連れてってくれるんだな？」

確認と言いたげに再度尋ねて来るチンクに

「約束する・・絶対だ」

チンクの目を見て言うと、チンクはゆっくりと頷き

「良いだろう・・八神は嘘は言わないからな」

そう言って座り込むチンクに一安心してると、ウェンディが

「龍也兄が私達を嫌いじゃないと判って安心しました」

にっこりと微笑むウェンディを見て居るとチンクが眠そうに欠伸をする

「眠いのか？」

そう尋ねるとチンクは目を擦りながら

「判らん・・急に・・眠く・・なっ・・」

最後まで言い終える事無くチンクはソファーに倒れこみ、眠りに落ちた・・その隣では同じ様にウェンディも眠っていた・・私は２人

の髪を撫でながら

「すまないな・・本当に・・」

今思えば、私はチンク達を呼んでおいて・・訓練も見てやらなかったし・・遊びに行く事もなかった・・それがどれほどチンク達を傷つけていたのだろう・・今日2人に言われなかったら私は何時まで経っても気付かなかっただろう・・

「悪かったな・・チンク、ウェンディ・・」

寝ている2人が風邪をひいてはいけないと思い、自分が使っている毛布を持って来て2人に掛けてから

「良い夢を・・」

寝ている2人の額に軽く触れるだけのキスをして、私は椅子に座り込み本を開いたのだが・・

「昨日のティアナにしても、チンクとウェンディにしても・・もう少し危機感を持って欲しいな・・男の部屋で無防備に寝るか・・普通・・」

ソファーの上で寝ているチンク達を見て、私は大きく溜め息を吐いた・・結局寝ている2人が気になり本の内容は殆ど頭には入ってこなかった事をここに記す

「う・・うん・・？ここは・・」

私が目覚めると八神の姿は居間には無かった・・どこに居るのだろう？と考えていると気付く

「元に戻ってる・・」

元の姿に戻ってる事に落胆してると、ウェンディが起き出し

「あ・・チンク姉・・おはようっす」

にこ～と笑いながら言うウェンディに

「どうやらあの薬の効果はあんまり長くないようだな・・」

そう言うとウェンディは

「何でも試作品の薬だそうっすから・・あんまり持続力がなかったみたいっすね・・」

2人でそんな事を話してると

「起きたのか・・丁度良かった」

八神がお盆に料理を載せてやって来る、八神はそれを机の上に並べながら

「夕食を作ったんだ良かったら一緒に食べないか？」

そう笑いながら言う八神にウェンディが

「食べるッす！！龍也兄のご飯美味しいっすから！」

笑顔でソファーから起き上がり言うウェンディを見ながら八神は

「今日は和風でな・・ぶりの煮付けにしじみの味噌汁に茶碗蒸しを作ったんだ・・ウェンディは茶碗蒸しが好きだったろ？」

そう笑う八神を見ながら椅子に座り

「ぶりの煮付け・・私の好きな料理だ・・」

八神はちゃんと自分達の好きな料理を覚えていてくれた・・それに少し感動していると八神とウェンディが椅子に座った

「「「頂きます」」」

手を合わせてから食事を始めた・・煮付けはちゃんと中まで味が染みてて美味しかったし・・茶碗蒸しも中に具が沢山入っていて美味しかった・・ウェンディは嬉しそうに食事を進め

「お代わりっす！」

茶碗を八神に向けて笑いながら言うと

「はいはい・・今よそって来るよ」

そう言って立ち上がる八神を見ていると、昔を思い出した・・姉妹全員と父さんと一緒に隠れて暮らしていた頃の事を・・あんまり出

掛けたり出来なかったが、家族全員でいる時間はとても楽しかった・・そんな事を考えながら私は食事を進めた・・

「「「ご馳走様でした・・」」」

夕食を食べ終え、休憩していると八神が

「ノーヴェ達にはチンクとウェンディがここで夕食を食べる事を伝えておいたが・・あんまり遅いと心配すると思うから・・もう戻ると良い」

そう言う八神に頷き部屋から出て行こうとすると、八神が

「明日、遊びに行く事をノーヴェ達に伝えておけよ・・それじゃあお休み」

八神にお休みと言い返し私達は自分の部屋に戻った・・ベッドに横になりながら

「明日が楽しみだな・・ふわ・・あんなに寝たのにもう眠い・・」

明日天気だと良いなと考えながら、私は眠りに落ちた・・

第１１２話に続く

## 第１１１話（後書き）

今回はチンクとウェンディがメインでしたね・・次回は六課に来ているナンバーズ「ノーヴェ」「セッテ」「チンク」「ウェンディ」がメインの話にするつもりです、ただ「クアットロ」をどうするか迷っています、もしクアットロもという人が居ましたら、感想に一言お願いします、それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします！それでは失礼致します

# 第１１２話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回は六課に来ているナンバーズとのデート?の様な話です・・ただクアットロは居ませんが・・なんか苦手なんですよね・・クアットロ・・嫌いじゃないんですけどね・・それなりに面白い話だと思うので今回も宜しくお願いします

# 第１１２話

第１１２話

「ノーヴェ・・おかしくないか？」

私は隣のノーヴェに服がおかしくないかと尋ねると、ノーヴェは溜め息を吐きながら

「チンク姉・・それ１０回目・・何回も言うけど・・どこもおかしくないから安心しろよ」

そう言うノーヴェに頷きながら鏡を見る・・いつも違い白のふわりとした印象の服を着てみた・・いつもと違う所為か・・どうも不安なのだ・・私は基本的に黒とか紺色の暗めの服を着ているからだ・・私がそんな事を考えてるとセッテが

「龍也様からデートのお誘い・・ああ・・なんて嬉しいのでしょうか・・」

八神に作って貰った服を着ながらうっとりしているセッテを見ながら

（もう手遅れか・・）

もう私も理解してしまった・・あれがセッテの通常なのだと・・なら何を言っても無駄だろうと考えてると

「いやー龍也兄と遊びに行くなんて随分久しぶりっすね～楽しみで楽しみでしょうがないっすよ～」

にこにこと笑うウェンディが部屋から出てくる、これで八神と遊びに行く面子は揃った・・私は椅子に腰掛け本を読んでるクアットロに

「本当にお前は良いのか？」

行かないと言っているクアットロに尋ねると、クアットロはいつもと同じ微笑を浮かべ

「はい、私は留守番してますから～八神兄様と楽しんできて下さいね～」

にこにこと笑うクアットロに頷き、私達は自分達の部屋を後にした・・

「・・うん？・・来たか」

私は歩いてくるチンク達を見ながら微笑んだ・・するとセッテが

「龍也様・・どうでしょうか？龍也様に作って貰った服を着たのですが・・似合っていますか？」

もじもじと言うセッテの頭を撫でながら

「良く似合ってるよ、セッテ」

そう言うとセッテは満面の笑みを浮かべながら

「ありがとうございます！！龍也様」

私がセッテと話してるとウェンディが私の手を引きながら

「龍也兄～早く行くっすよ～時間が惜しいっすから」

そう笑うウェンディに頷き、私達は六課を後にした・・街中を歩きながら

「・・チンク・・睨まれてる気がするのだが？」

何か鋭い視線を感じて隣を歩くチンクに尋ねると

「気にするな・・直ぐにそれも無くなる」

そう言うチンクに頷くと、徐々にだが睨まれてる様な気配が減っていった・・私はそれに安心しゆっくりと歩き出した・・さて龍也が感じた睨まれてる様な気配は当然街中に居る男からの嫉妬の眼差しであった、それは当然であろう美女、美少女を４人も引き連れて歩いている龍也に嫉妬をするのは当然である、では何故嫉妬の眼差しが消えたかというと

「ギロッ・・」

龍也を睨んでいる者を殺すぞと言いたげな目で睨むセッテの所為であったりする・・

「今日はどうするんだ？」

特に予定も考えて無かったのでウェンディに尋ねると

「買い物っす～所で龍也兄・・服とか・・買ってくれたりするっすか？「ウェンディ！！」・・無理なら良いっすよ？」

服を買ってくれと言ったと同時にチンクに怒鳴られ萎縮する、ウェンディに苦笑しながら

「別に良いぞ？・・好きな奴を買ってやろう」

そう言うとウェンディは嬉しいそうに

「それなら早く行くっすよ！」

私の手を握り歩き出すウェンディに苦笑してると

「ウェンディだけではなく・・私も見てください・・」

そう呟き左手を握り締めるセッテを見ていると

（こうして見ると普通の女の子だな・・）

チンク達は戦闘機人であり、純粋な人間ではない・・でもこうして笑っているチンク達を見ていると本当に普通の女の子に見えてくる・・私はそんな事を考えながら、セッテとウェンディの2人に手を引かれデパートの中に入って行った・・

「うーん・・私がこんなん着ても似合わないよな・・」

私は目の前のスカートとそれとセットのブラウスを見ながら呟いた・・これがディードとかセッテとかなら似合うのだろうが・・私が着ても似合わないだろう・・私の様な性格では・・そう思い溜め息を吐きながらその服の前から離れようとすると

「ノーヴェ、服は決まったのか？」

龍也が後ろから声を掛けてくる、私は

「いや・・まだだ・・ちょっと良いかな？と思った服はあるけど・・似合わないと思うから止めた」

そう言うと龍也は私が見ていた服を見ながら

「これか？・・似合うんじゃないか？・・試着してみたらどうだ？」

そう言ってその服を私に差し出してくる龍也に

「いいよ・・こんな男みたいな性格の奴が着ても似合わねぇよ・・」

そう言うと龍也は私の頭を撫でながら

「そんな事無いと思うぞ？・・ノーヴェは可愛いからきっと似合うさ」

！？可愛い？・・私が・・不意打ちの様に可愛いと言われ私が赤面してると、セッテが

「龍也様・・服・・ありがとうございました・・その服は・・ノー

ヴェにですか・・流石龍也様・・良い趣味をしてますね」

そう笑うセッテは私の背を押して

「ノーヴェ・・龍也様が選んでくださったのです・・これにすると良いですよ」

そう言って試着室に押し込む私が慌てて

「待てって!こんなの私が着ても似合わない!!」

そう言うとセッテは私の目を見て

「ノーヴェ・・少しは自分の容姿に自信を持つと良いですよ・・そんな男の物の服ではなく可愛いこういう服を着るんです」

そう言って試着室のカーテンを閉めるセッテ・・私は服を試着室の壁に掛け

「似合うのかな・・私なんかが着ても・・」

私が着てるのはジーンズとシャツだ・・色気も何も無い・・私は控えめな胸を見ながら

「スバルと私は似てんのにな・・胸はスバルの方が大きいんだよな〜」

溜め息を吐きながら鏡を見る、髪の色と目付きは違うが私とスバルは良く似てる・・双子とまでは言わないが私とスバルは良く似てる・・

私はスバルと比べて小さい胸を見ながら

「まぁ良いか・・胸が全部じゃないんだから・・」

龍也はそういうピンポイントで人を好きになる様な男ではない・・
もしそうならシグナムとかフェイトと既に付き合ってるはずだ・・
だがそうではないという事は、龍也はそう言う点を彼女にする点と
して重要視してないと判る

「やっぱあれだよ・・性格とかそう言うのが大事なんだよ・・うん」

自分に言い聞かせるように呟き服を着替え、姿見を見る

「・・似合ってるのかな・・」

膝より少し長いスカートに白のふわりとしたブラウスを着た自分を
見ながら、首を傾げ

「龍也とセッテに聞けば良いか・・」

試着室の外で待ってる龍也とセッテに聞けば良いと思い試着室のカ
ーテンを開けた

「龍也、セッテどうだ?」

2人に尋ねると龍也は

「良いじゃないか・・良く似合ってるぞ」

「・・良いですね・・並の男ならメロメロでしょう・・並の男なら・

・ね」

素直に褒めてくれる龍也と、似合ってると言ってから隣の龍也を横目で見るセッテ・・セッテ・・そう言う風に行っても龍也は気付かないと思うぞ・・私達が落とそうとしてる男は難攻不落所の話ではないのだから・・私はそんな事を考えながら

「龍也・・私これにするよ・・着て帰れるよなここ」

確かここは買った服をそのまま着て帰れる筈だったと思い尋ねると

「ああ、帰れる筈だ・・そんなに気に入ったのか？」

笑いながら尋ねて来る龍也に頷いてると

「八神・・ノーヴェの服は決まったのか・・良いじゃないか・・ノーヴェ良く似合ってるぞ」

「良いっすね～普段からもっとお洒落すると良いっすよ」

笑いながら褒めてくれるチンク姉とウェンディに

「そうかな？・・うん・・判った・・今度からもうちょっとお洒落な服を探すようにするよ」

私が2人と話してるとセッテが

「龍也様、下の階でスイーツフェアをやってるそうです・・行きましょう」

そう言って龍也の手を引き歩いて行くセッテの後を追って私達も下の階に向かった・・

「美味しいっすね～」

私はイチゴのタルトを頬張りながら呟いた、甘さとサクサク感が実に良くマッチしていて美味しい・・ただ我侭を言えば龍也兄の作るタルトの方が美味しいが・・向かい側を見ると

「ふむ・・良い葉を使っている・・」

甘い物が苦手な龍也兄は紅茶とサンドイッチを摘んでいた、龍也兄の隣では

「うむ・・悪くないな」

イチゴのケーキを食べて微笑んでるチンク姉がいる、ジャンケンで席順を決めた為、龍也兄の隣はチンク姉とセッテ、向かい側は私とノーヴェになっている、一応皆軽く昼食を食べてからスイーツを食べている・・後で体重計が怖いが折角龍也兄と来ているんだ、そんな事を考えるのは無粋という物だろう・・私がそんな事を考えてるとノーヴェが

「えっと・・イチゴのロールケーキとイチゴのムースにイチゴタルト・・後は・・」

ウェイターに次々注文してるノーヴェに

「そんなに食べると太るっすよ？」

そう言うとノーヴェは私を見て

「大丈夫だ、これくらい太らねぇよ」

自信満々に言うノーヴェ、ノーヴェは元々太りにくい・・羨ましい限りだ・・私はそんな事を考えならタルトを口に運ぼうとして、それを止めた、私はフォークに刺さったタルトを龍也兄に向けて

「龍也兄・・あーんっす」

そう言うと龍也兄は少し困ったような表情をして

「ウェンディ・・私は甘い物が苦手なのだが？」

そう言う龍也兄に

「あーんっす・・」

無視してフォークを突きつけると龍也兄は観念したようで、私のフォークの先に刺さってるタルトを食べた

「えへへ～美味しいっすか？」

そう尋ねると龍也兄は

「甘い・・」

そう呟き紅茶を飲んでる龍也兄を見ながらタルトを自分の口に運ぶ

（えへへ～間接キスの成立っす～）

私がそう考え笑ってるとセッテが

「龍也様・・私のもどうぞ」

ロールケーキを差し出すセッテに

「嫌もういい・・「くすん・・私のは駄目なんですね・・」判った！食べる！食べるから！！」

涙目で言うセッテに負けてセッテのフォークからロールケーキを食べる、龍也兄を見ながら

（甘いっすね～セッテもやったらチンク姉とノーヴェもやるって言うに決まってるっす）

私がそんな事を考えてると案の定チンク姉とノーヴェが、自分の選んだデザートをフォークに刺してスタンバイしていた・・私はその光景を見ながら、デザートを再び口に運んだ・・間接キスをしたフォークを見ながら赤面した物の

（えへへ・・嬉しいから良いっすね～）

間接キスでもキスには間違いないと思い微笑みながらタルトを食べていた

今日はなんと素晴らしい一日だったのでしょう・・龍也様の腕を抱き抱えながら私はそんな事を考えていた・・服を買って貰い、尚且つ間接キスも出来た・・それが嬉しいと思っていると、道端の露天商が

「よう！兄ちゃん！！またまた別嬪さん引き連れて・・羨ましいね・・この」

笑いながら露天商が声を掛ける、龍也様はその露天商に

「貴方ですか・・それよりそう言う言い方は止めてくれません？」

そう言う龍也様に露天商はガハハと笑いながら

「気にすんなよ！！兄ちゃんみたいな良い男はそう言うもんさ！・・所で・・どうだい？・・何か買っていかないか？」

シルバーアクセサリーを指差しながら言う露天商に龍也様は

「そうですね・・折角だから買って行きますよ、ほら・・好きなのを選ぶといい・・どれでも買って上げるよ」

そう言う龍也様に頷き、私はシルバーアクセサリーを見る為にしゃがみ込んだ・・どれも感じが良く、あれもこれもと目移りしてしまう・・私は楽しく悩みながら１つのアクセサリーを手に取った

「龍也様・・私はこれが良いです」

太陽を模した様な形のペンダントを龍也様に手渡した、チンク姉様とウェンディとノーヴェもそれぞれブレスレットやペンダントを選

び、龍也様に手渡す、龍也様はそれを受け取り露天商に

「それじゃあこれを貰います」

そう言うと露天商は

「はいはい■■■■■円ね」

高い・・私がその金額に驚いてると龍也様は財布からお札を2枚手渡し

「お釣りは良いですから・・それじゃあ行こうか?」

お釣りは良いと行って歩き出す龍也様の隣を歩るいてるとチンク姉様が

「八神・・良かったのか・・かなり値が張ったが?」

そう言われた龍也様はチンク姉様の頭を撫でながら

「気にしてるのか?・・ははは そんな事気にしなくて良いさ」

そう笑う龍也様にノーヴェが

「でもよ・・服も買って貰ったし・・なんか悪いぜ・・」

龍也様はノーヴェの頭をわしゃわしゃと撫でながら

「気にするなと言っただろう?・・こういう時は男が払う物なんだからな」

そう笑う龍也様と六課の隊舎の前で別れ、自分達の部屋に戻った

「宝物が増えました・・」

私は自分の部屋・・龍也様の写真で元の壁が見えない壁を見ながら

「うふふ・・」

龍也様に作って貰った服にソルエッジとペンダントを枕元に置きながら、寝転び笑っていた・・

「今日は間接キスですが・・キスも出来ましたし・・最高の一日でした・・」

本当ならフォークごしで無く口移しでも良かったのだが・・そんな事をしたら嫌われるので止めて置いた・・私だけだったら多分そうしていたかもしれない・・そんな事を考えながら

「龍也様・・私は心から貴方を愛しています・・」

そう呟きながら眠りに落ちた・・夢でも龍也様に出会えると良いなと思いながら・・

第１１３に続く

# 第１１２話（後書き）

・・・やっぱあれなんですよ・・セッテ出すとその地点でヤンデレが出る話になっちゃうんですよ・・はやても一緒なんですけどね・・もう判ったんですよ・・私はヤンデレ化するのが得意な作者なんですよ・・うん・・判っちゃえば迷う事無いですよね・・これからもヤンデレキャラを出して行きたいと思います・・多分今出てるキャラ以上にヤンデレは出しませんけど・・これ以上ヤンデレを増やすと龍也さんが刺されそうなので・・それではこれからも夜天の守護者をどうか宜しくお願い致します

# 第１１３話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回で日常編は最後です、色々ネタがあったんですが・・何時までも話数を稼ぐ為に日常編をやるのもなんだな・・と思ったので・・最終決戦に向け動き始める前の最後の日常編は「シャマル＆キャロ、ルーテシア」のお料理教室と「動き始める闇の使徒達」です！！これが終れば最終決戦編の始まりですね・・理想とすれば１２０話を越えたいなと思っております、と関係ない話はこれ位にして本編始まります！！

# 第１１３話

第１１３話

「えっと・・卵を割って・・ルーちゃん玉葱刻んで」

卵を割りながら言うキャロにルーテシアは

「判った・・」

そう返事を返し淡々と玉葱を刻むルーテシアに

「ぐす・・玉葱刻むと涙が出ます・・」

涙を流しながら玉葱を刻むシャマルを見ながら

（本当にこうやって料理を教えるというのは良い物だ・・）

そんな事を考えながら、どうしてこうなったのかを思い出していた

「ハンバーグを作りたい？急にどうしたんだ？」

私がそう尋ねるとルーテシアとキャロは、頬を赤らめながら

「エリオ君に・・作ってあげようと思って・・」

「エリオはお肉が好き・・」

そう言う2人の頭を撫でながら

「そう言うことか・・良いよ・・暇だから教えてあげるよ」

もうすぐ公開意見陳述会でその前の最後の休暇だから、2人に付き合うと言うとその話を聞いていたシャマルが

「お兄さん・・私にも教えてください」

そう言うシャマルとキャロとルーテシアにハンバーグの作り方を教え始めた

「挽肉に刻んだ玉葱と卵を入れてかき混ぜるんだ・・」

2人にそう言うと2人でかき混ぜ始める・・笑顔で作る二人を見ながら

（エリオは・・2人に好かれて幸せだな・・はてはて・・結婚するとなるとどちらだろうか？）

一応ミッドは一夫多妻の制度がある・・使ってる者は殆ど居ないが・・エリオの場合どちらか何か選べないだろうから、その制度を使うだろうなと考えてると、ルーテシアが

「龍也・・かき混ぜ終わった・・次は？」

微笑を浮かべながら尋ねて来るルーテシアに

「形を決めて焼くんだ・・おいおい・・そんなに大きくするのか？」

ハンバーグの種を半分くらい使ってでかいハンバーグを作る2人に呆れながら尋ねると、2人は

「「私達はこれくらいエリオ（君）が好きって事で・・」」

ハート型のハンバーグを見せる2人・・2人の気持ちを表現しているという事か・・なんだか微笑ましい気分になって2人を見ていると

「私も出来ました」

平均的な大きさのハンバーグを作ったシャマルに

「シャマルも大分料理が上手くなったな」

前みたいな猛毒を作る率が少なくなったのでそう言うと

「お兄さんに教えて貰ってますから！」

笑顔で言うシャマルに笑みを零しながら、フライパンを用意して

「これに油を引いて・・焼くんだが・・2人のはフライパンじゃ駄目だな・・確か・・お好み焼き用の鉄板が・・ああ・・あった・・あった・・」

フライパンに入るサイズではない超巨大ハンバーグを焼く為に、お好み焼き用の鉄板を使うことにした

ジューッ！！ジューッ！！！！

凄まじい音を立てながら焼きあがっていくハンバーグを見ながら、
キャロとルーテシアは

「これならエリオ君お腹一杯になるかな？」

凄くいい笑顔で言うキャロにルーテシアは

「これなら・・大丈夫、エリオでもお腹一杯になるはず」

そう言う2人を見ながら私は

（どう見ても・・お腹一杯所の騒ぎではないな・・）

どこかのチャレンジメニューの様な超巨大ハンバーグを引っ繰り返
すために両手に箸手を握り

「・・はっ！」

一気に引っ繰り返す、上手く引っ繰り返す事が出来、形が崩れなか
った事に一安心し、蓋をしてから、隣を見ると

「よいしょっと・・うんうん・・上手く焼けてます」

にっこりと微笑むシャマルを見ながら

「それじゃあ、今度はソースだな・・ハンバーグを焼いた肉汁をフ
ライパンに入れて・・」

ハンバーグを焼いて出た肉汁をフライパンに入れ

「次にバターと赤ワインにケチャップとデミグラスソースを入れて・・煮詰める」

赤ワインのアルコールを飛ばす為に煮詰めながらかき混ぜる

「ふむ・・これくらいか・・」

味見をして丁度いい味なのを確認してから火を止め

「ハンバーグの方も焼き上がったようだな」

ハンバーグが焼きあがったのを確認してから大皿にキャロ、ルーテシア特製の超巨大ハンバーグを乗せ

「これでソースを掛けると・・これで完成だ」

そのハンバーグにさっきのソースを掛け完成だと言うと

「これで完成ですか・・これならエリオ君も喜びますね、お父さん！」

笑顔で言うキャロに

（喜ぶ事は喜ぶだろうが・・全部食えるのか・・これ・・）

エリオはかなり量を食べるが・・その限界を軽く超えてそうなハンバーグを見ながら、私は

「そうだな・・きっと喜ぶさ・・」

私は2人の嬉しそうな顔を見て、そんな事は言えずただ2人の頭を撫でた・・

「それじゃあ、早速持って行きましょう！ルーちゃんそっち持って」

「うん」

2人で協力してハンバーグの皿を持っていく、私はその後姿を見ながら

「シャマル・・私達も行こうか？」

2人が行った後に言うとシャマルは

「エリオ・・全部食べれますかね？」

不安げに言うシャマルに

「多分・・無茶してでも食べるんじゃないか？」

そう言うとシャマルは

「胃薬・・用意しておきますね」

胃薬を用意するというシャマルに頷き、私はエリオの居る所に向かった

「・・す・・凄いね・・これ・・」

超巨大なハート型のハンバーグを見て言うエリオに、キャロとルー

テシアは

「お父さんに教えて貰いながら頑張って作ったんだよ!!美味しいから食べてみて!!」

「・・絶対美味しいし・・お腹一杯になるよ」

笑顔で言うキャロとルーテシアの前には普通サイズのハンバーグが2つ・・私は冷や汗を流しながら食堂の席に腰掛けた、私が座ると同時にそのハンバーグを見て絶句していたフェイトが

「た・・龍也・・幾らエリオでもあれは食べれないよ・・」

そう言うフェイトに

「フェイト・・目を輝かせてる・・2人にそんな事を言えるか?・・私には言えなかったよ・・」

紅茶を飲みながら言うとフェイトは

「言えないね・・うん・・龍也は悪くないよ」

そう言うフェイトを見ながらエリオを見る

「・・い・・頂きます!」

ナイフとフォークで1口分切って口に運ぶ・・それと同時にエリオの顔が笑顔になり

「美味しい・・これ凄く美味しいよ!!」

笑顔でバクバクと食べるエリオを見ながら

「大丈夫そうか？」

隣のなのはに尋ねると

「大丈夫じゃないですか？・・ほら・・エリオ君は2人泣かせる様な事しないですし・・きっと全部食べますよ・・そうだ・・所で公開意見陳述会って何するんですか？」

詳しい話をまだ聞いてないなのはに

「とりあえず、私にレジアスと三提督での話し合いの様な物だな・・ネクロとの戦いがどうなるかの話だ・・それの護衛で隊長陣に来てもらう・・スバル達とチンク達は六課で待機・・もしかすると襲撃があるかもしれないからな」

そう言うとなのはは神妙な表情で

「龍也さん・・もう直ぐ決戦なんでしょうか？」

そう尋ねて来るなのはに

「間違いないだろうな・・前の管理局襲撃で奪われたレリック・・姿を見せないネクロ達・・間違いなく決戦は近い」

私がそう言うとなのはは私の左手を握り締め

「大丈夫です・・私は・・私達はもう足手纏いじゃないです・・龍

也さんだけに負担を掛けさせませんから」

そう笑うなのはに

「そうだな・・皆強くなった・・なのはも・・フェイトも・・皆だ・・悪いが頼りにさせてもらうぞ」

私が笑いながら言うとフェイトが

「うん！頼りにしてよ！！私達も頑張るから！！」

そう笑いながら言うフェイトとなのはを頼もしいと思いながら、私は窓を外を見上げた・・それは何処までも澄んだ青空だった・・私は空を見ながら

（嵐の前の静けさか・・）

心の中でそう呟いた・・ちょうどそれと同時に

「ご・・ご馳走様でした・・パタッ・・」

食べ終わると同時に倒れたエリオ・・お腹がとんでもなく膨れていた・・

「え・・エリオ君！！」

「エリオ！！」

キャロとルーテシアが慌ててエリオを介抱する姿が見え、私は笑いながらその光景を見ながら

（ジオガディス・・私は負けん・・この平和な時を壊そうとするお前達には決して負けん・・）

私は決戦にむけ闘志を燃やしていた・・

丁度その頃パンデモニウム内では

「揃ったか・・我が配下達よ」

王座に腰掛けながら言うジオガディス様は、私達を見てそう声を掛ける・・王座の間には全てのダークマスターズが揃っていた・・ジオガディス様は1人ずつ

「ダークマスターズが将・・ヘルズ！」

「はっ！私はここに」

片膝を付くヘルズの次に

「ヴェノム！」

「私もここに」

マントを身体に巻き付けながら言うと・・次に

「ランレ・デルーパ！」

「おう！俺はここだ！！待ってたぜ！！この時を！！」

稲妻を纏いながら、ランレ・デルーパが姿を見せ、次に

「ルキルメス！そして3将軍よ！！」

「闇の闘士・・ルキルメス・・参上いたしました」

「ライガ」

「ヒューガ」

「スーガ・・」

「「「参上致しました！！」」」

ルキルメスと3将軍が膝を付く

「バラガルト！！」

その呼びかけと同時に

「私はここに」

紅いローブのネクロ・・バラガルトが姿を見せ

「キメイラ・・そしてホーネット！！」

「グルル・・グオオオッ！！！」

「ギギ・・オレハ・・ココに・・」

完成したキメイラと蜂の様なデクスが姿を現すそして

「グリム！タナトス！ディアボリック！！」

私の隣に機械の身体を持つ「グリム」が

「グオオオッ！！！」

機械の腕を振り上げながら雄叫びを上げ

「私は此処に・・我が王ジオガディス様に勝利を！！」

獣の下半身を持つ「タナトス」が剣を振り上げながらそう言い

「ギギ・・遊び・・遊び・・皆殺しゲームが始まるよ！！」

長い手足を持つ悪魔のような「ディアボリック」君の悪い声を上げる

「ヴォルガンド！！そしてリベンジャーッ！」

黒い光が走りその中から、灰色の甲冑に紺のマントを羽織ったヴォルガンドが膝を付きながら姿を見せ

「ヴォルガンド・・参上致しました・・」

更に黒い体に赤い羽根を持ったリベンジャーが翼を羽ばたかせながら私の隣に着地し

「リベンジャーはここに居ります」

深々と頭を下げるリベンジャーを見てから

「期は此処に熟した!!パンデモニウムの修復も終り・・俺達の魔力も最大限まで高めた!!・・俺達に負けは無い!!今度こそ魔道師どもを全て殺し・・我等の理想郷を築くのだ!!」

そう言って剣を引き抜くジオガディス様に合わせて、皆がそれぞれ自分の獲物を掲げる

「魔道師達の希望・・時空管理局機動六課の魔道師・・そして守護者・・八神龍也を打ち倒すのだ!!彼の者達を倒せば我らの邪魔をする物は居ない!!」

ジオガディス様は腰の鞘に剣を戻し

「戦いの時は、公開意見陳述会・・その場所に守護者達を足止めし、その間に本局と六課を落とす!!そしてクラナガンの魔道師を殺すための魔法陣を描く!!その時こそ・・我らの理想郷が出来る時だ!!決戦の時まで無駄な事に魔力を使わず蓄えておけ!!良いな!!」

そう言うと姿を消すジオガディス様・・話す事は全て終ったからだろう・・集合していたダークマスターズも解散していく・・私はそれを見ながらマントを身体に巻きつけ自分の宮へと戻った・・

「決戦の日は近いですね・・」

シュル・・

私は顔を隠すマスクを脱ぎながらそう呟いた

「私の相手は誰になるんでしょうね？・・叶う事なら科学者が良いですけどね・・」

ジェイルスカリエッティが良いと呟いていると

「ヴェノム様・・バラガルト様がお呼び・・そ・・その顔は！！」

驚くＬＶ３の前に一瞬で移動し

「お前・・私の顔を・・見ましたね？」

首を絞めながら言うとＬＶ３は

「だ・・誰にも・・言いません！！ですから・・ですから・・御許しを！！」

懇願するＬＶ３に

「いいえ・・許せませんね・・私の顔を見た者は・・この世から消えてもらいます！ダークレイド！！」

ゼロ距離でダークレイドを放ちそのＬＶ３を消滅させ

「全く・・ノックくらい出来ないのですかね・・」

そう言ってマスクのある方に歩いて行き鏡の前で立ち止まる

「そう・・この顔を見た者は許す事など出来る訳が無いのですよ・・」

鏡には流れるような金髪が見えていた・・私はマスクを装着しながら

「そう・・許す訳には行かない・・この忌むべき顔を見た者は皆死んで貰う・・あの者を除いてね・・」

そうその者を除いて私の顔見た者は許すことなど出来る訳が無い・・

「はは・・その時あいつがどんな顔をするのか楽しみですよ・・・・貴方は自分の罪に耐える事が出来るでしょうかね・・くくく・・はは・・はーはっはっ！！！」

私は狂った様な笑い声を上げながら自分の宮を後にした・・龍也たちが決戦の準備を始めた頃・・ネクロ達も静かに闘いの準備を進めていた・・決戦の日は・・近い・・

第１１４話に続く

## 第１１３話（後書き）

今回は短めでしたね・・ダークマスターズの全貌と、顔を見られて激昂するヴェノム・・それが何を意味するのか楽しみにしてくれると嬉しいです！！それでは次回から決戦編が始まり始めます・・かなり長い話になると思いますが・・どうか宜しくお願い致します！！それでは次回の更新の時にまたお会い致しましょう！！

# 第１１４話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！公開意見陳述会の話なのですが・・
原作とは全く違うオリジナルの流れなので、原作の事は完全に忘れ
てください、それでは本編始まります

# 第１１４話

第１１４話

「やれやれ・・面倒な事だ」

私は中将としての制服に身を包みながら呟いた、私が愚痴ってると

「良いやん、兄ちゃん格好良いで」

そう笑うはやての頭を撫でながら

「格好良いとは思うのだがな・・どうも気に食わんのだ」

私が首に手を置きながら言うと

「しょうがないですよ・・それじゃあ・・そろそろ行きましょうか？」

なのはにそう言われ、私は頷き

「この時に合わせて、ネクロ達が動くかもしれん・・チンク達は街の警戒、スバル達は六課で待機、後は頼んだぞ」

私はそう指示を出し私は六課を後にした・・ちょうどそれと同時に

「さあッ！！始めるぞ！！パンデモニウム・・浮上せよ！！」

クラナガンから遠く離れた大地から暗黒の城が世界を滅ぼす為に動

き始めた・・

「チンク姉・・なにかあると思うっすか?」

ウェンディが不安そうに尋ねて来る、私は

「動くのは今だと思う、だから気を抜くなよ?」

私がそう言うとセッテが

「気を抜きなどしませんよ・・ネクロが出ようが・・デクスが出ようが・・龍也様の敵は私の敵・・敵は全て屠るだけです」

黒い目で言うセッテを見ているとノーヴェが

「そろそろ・・公開意見陳述会も半分終った頃か・・やれやれ・・このまま何にも無いと良いけどな・・」

ノーヴェがそう呟いた直後

「イヒヒ・・見つけた・・見つけた!!・・機械の魔道師・・みーつけた!!」

地面に黒い染みが広がりそこから悪魔のようなネクロが姿を見せ、ケタケタと笑う

「なっ・・反応なんて何処にも無かったですわよ!?」

動揺するクアットロに

「クアットロ、さがれ・・こいつ・・ＬＶ４だ！！」

デバイスを展開しながら言うとネクロが

「正解！！正解！！大正解！！・・キヒヒ・・僕はＬＶ４ディアボリック～皆殺しゲームの主催者・・さぁ・・始まるよ・・始まるよ！！！皆殺しゲームが！！イヒヒヒ！！」

そう笑うディアボリックの背後から無数のサナギの様なネクロと蟻の様なネクロが姿を見せる、私達が臨戦態勢をとると

「イヒヒ～外れ！！外れ！！今の僕の獲物はお前達じゃない～お前達を殺すのはもっと後～今は街を壊すだけ～馬鹿！！馬鹿！大馬鹿！！」

ケタケタと笑うディアボリックの背後に黒い身体に赤い羽根を持つネクロが姿をみせ

「ふはは！！！やはりお前と来たのは正解だったな！ディボリック！！」

そう言ってビルを破壊するネクロに

「イヒヒ！！リベンジャー！！リベンジャー！！僕と一緒なら好きなだけ暴れれるよ！！うるさいルキルメスも！ヴォルガンドも居ない！！イヒヒ！！！カタストロフィー・・カノン！！」

胸から砲撃を放つディアボリックは楽しそうに笑い、リベンジャーも同様に街を破壊し始める、最初の言葉の通りネクロ達は今は私達に興味が無いようだ・・私は破壊されていく街を見ながら

「なっ・・く・・ノーヴェ!!セッテ!!ネクロを迎撃しろ!!ウェンディは民間人の避難誘導!!」

私はそう指示を出しルナエッジを構えながら

（八神やスバル達は大丈夫なのか・・）

八神やスバル達の心配しながら私達はネクロとの戦闘を始めた・・チンク達が戦闘を始めた頃

「管理局の魔道師どもよ!!命の惜しい者は逃げろ!!!俺達は逃げる者は斬りはせん!!!」

ルキルメス、ヒューガ、ライガ、スーガは管理局の本局に向けそう叫ぶ、それと同時に

「女は俺達の前から失せろ!!俺達の剣は強者と戦う為だけにある!!」

ヴォルガンドがそう言うと悲鳴を挙げながら女性局員が逃げ出す、それを確認してから

「デモンズ・・ディザスター!!」

本局を破壊し始めるヴォルガンドに

「ルキルメス、ヴォルガンド・・お前達は甘い・・歯向かう者は全て我らの敵・・滅するだけだ!!」

タナトスが蔑むように良い両手に魔法陣を展開し本局に向け砲撃を放つ

「グルル・・その通り!!ジオガディス様は邪魔をする物は・・全て・・この俺が破壊する!!!」

グリムが全身を使って体当りで本局の壁を破壊する・・ダークマスターズが本局を破壊し始めた同時刻・・

「なっ・・何・・!?・・ネクロ達!?」

私は六課の外に飛び出して目を見開いた

「砕けろ!!砕けろ・・テラサンダーッ!!!」

紫色のカブトムシの様なネクロが六課の敷地に出鱈目に稲妻を落とす、それを見てエリオが

「あ・・あいつは・・ランレ・デルーパ!!」

交戦した事のあるエリオがそう叫ぶとランレ・デルーパはエリオを見て

「小僧!!貴様を殺すのは後だ!!!今はジオガディス様の命に従

い・・貴様らの帰る場所を破壊させてもらう！！」

その叫びと同時に稲妻が降り注ぎ、演習場を消し飛ばす、私達がデバイスを展開しようとすると

「動くな・・動けば殺す・・」

紅いローブのネクロが私達の目の前に現れ言う、それと同時に私達の足元に魔法陣が展開される

「デスプリズン・・魔力の動きを探知して爆発する・・デバイスを起動させれば、その直後お前達の身体は跡形も無く消し飛ぶぞ」

私達がその結界の中で動けずにいると

「∞キャノン！！」

ズドンッ！！ズドンッ！！！

前と姿の変わったキメイラが背中の砲塔から漆黒の砲撃を乱射して六課を破壊していく・・私達は自分達の家が壊されていく光景を唯見ていることしか出来なかった・・私が唇を噛み締めていると

「お父さん・・そうだ・・部隊長達とお父さんが！！」

そう絶叫するキャロに紅いローブのネクロが

「守護者達か・・あいつらの元にはヘルズ、ヴェノムが行ってるだろうな・・くっくっ・・だが安心するが良い・・今は殺しはしない・・今はな・・「バラガルト様・・セイオウノウツワをハッケンシマ

シタ・・」・・そうか」

蜂の様な異形が気絶したヴィヴィオを連れて来る、その背後から

「ぐう・・待て・・ヴィヴィオを返せ・・！」

ボロボロのザフィーラが姿を見せる、それを見た異形は

「クタバリゾコナイガ・・メザワリダ・・キエロ！！！ヘルマスカレードッ！！」

異形の姿が掻き消えそれと同時に

ザシュッ！！

「ぐあッ！！」

ザフィーラの肩から血が吹き出る、肩だけではない全身が、カマイタチに切り裂かれたように引き裂かれ

「む・・無念・・龍也どの・・すい・・ません・・ヴィヴィオを・・護れませんでした・・」

ドシャッ・・・

そう言うとザフィーラは地面に倒れた

「ザフィーラさん！！」

エリオが名前を呼ぶが反応がまるで無い・・まさか・・死んだ・・

!?・・私が動揺していると

「聖王の器・・もう必要の無い物だな・・くっく・・魔力だけ貰っていくか・・」

そう言うとバラガルトと呼ばれたネクロがヴィヴィオの頭に手を置く、それと同時に

「ああ・・あああああッ!!!!!パパアアアッ!!!!!!!」

ヴィヴィオが苦悶の悲鳴を上げながら龍也さんに助けを求める、出来る事なら助けに行きたいが私達は動く事は出来ず、掌に爪が食い込む程拳を握り、その光景を見ていた

「くっく・・流石、聖王・・上等な魔力だった・・もうこれに用はない受け取れ!!」

そう言うとバラガルトは私目掛けてヴィヴィオを投げつけてくる

「ヴィヴィオ!!!」

私は慌ててヴィヴィオを抱き止めその場に座り込んだ

「ううう・・」

ぐったりとしたヴィヴィオを抱きしめながらバラガルトを睨むと

「くっく・・良い目だ・・殺意と憎悪の篭った良い眼だ・・もう少しその目を見ていたいが時間なのでな・・キメイラ!ランレ・デルーパ!ホーネット!ヘルズ達と合流するぞ!!」

そう言うとバラルガルト達が上空に浮かび上がる、それと同時に魔法陣が消える

「この！！」

私がデバイスを展開し砲撃を打ち込むと

「無駄だ・・」

バラガルトは片手でそれを弾き飛ばし、私達を見ながら

「くっく・・ではな・・次に会う時が貴様らの命日だ」

そう言うとバラガルト達は飛び去った・・私は拳を握り締めながら

「・・何も出来なかった・・」

何も出来なかった事を後悔しながら、私達はあちこちで倒れている隊員の保護を始めようとしたが

「ティアナ！！ここは私が見るわ！！貴女達はチンク達と合流して！！凄い数のネクロがチンク達の所にいるの！！」

私はシャマル先生の指示に頷き

「キャロ、ルーテシアはシャマル先生の手伝いを！スバル！エリオ！行くわよ！！」

「「はいっ！！」」

私はスバルとエリオを連れてチンクさん達の援護の為に六課を後にした・・私は空を飛びながら

（龍也さん・・龍也さん・・）

龍也さんの事が心配で心配でしょうがなかったが

（今は・・私の出来る事をするんだ・・龍也さんは私達なんかよりずっと強い・・心配する必要なんて無い！！）

私は自分に言い聞かせるようにそう心の中で呟き、チンクさん達の所に向かった・・

「レジアス！！大丈夫か！！」

私は向かって来るネクロを両断しながらそう言うと

「だ・・大丈夫だ！！」

レジアスが必死な声で言う、レジアス達の前には

「兄貴の方こそ大丈夫か！」

「龍也さん！私も出ましょうか！？」

なのはとヴィータがそう言う、あの２人のプロテクションが１番硬

い・・だからレジアスと三提督達を護って貰っているのだ、私は剣を握り直しながら

「大丈夫だ！シグナムとフェイト、はやてがいれば大丈夫だ！！だからなのはとヴィータはレジアス達を頼む！！「キキッ！！」はあッ！！」

飛び掛ってきたネクロを両断するとフェイトが

「はやて、早く砲撃を！！このままじゃまた囲まれる！！」

フェイトが上空のはやてに怒鳴ると

「判ってる！！オメガ・・バースト！！」

はやてが灼熱の砲撃を打ち込む

「ッギャアアアッ！！！」

纏めて消し飛ぶネクロの一団を見ていると

「ナイト・・レイドッ！！」

「トランプ・・ソードッ！！」

上空から漆黒の砲撃と無数の短剣が降り注ぐ

「プロテクション！！」

なのは達も纏めて覆うほどのプロテクションでそれを防ぐ、それと

同時にヘルズが私達の前に着地して

「流石、守護者という所ですね・・1番ネクロ達を配置したのですがね・・」

その口調に私は

「まさか・・他にも・・「ええ・・そうですよ?六課、市街、本局同時に襲撃させて貰いましたよ」・・ヘルズゥッ!!!」

私が睨みつけながら言うと

「おお・・怖い怖い・・「ヘルズーッ!!!」・・剣帝!!」

おどけた素振りのヘルズ目掛けて上空からハーティーンが剣を振り下ろす、それを鮮やかなバックステップで回避したヘルズは

「剣帝・・決着を付けたいのは山々なんですけどね・・私達はいま全力で戦う事を禁じられてるんですよ」

にやにやと笑うヘルズにハーティーンは

「貴様の都合など知った事か!!ここで決着を付けてくれる「そうはさせませんよ・・ナイトレイドッ!!」ぐ・・ぐう・・」

突撃しようとしたハーティーンの横手からヴェノムの漆黒の砲撃が放たれハーティーンの姿が一瞬見えなくなるが

「この程度で!!」

直ぐに姿を見せるがそれより早く、ヘルズは宙に浮かび

「どうやら時間のようですね・・守護者・・剣帝・・次に会う時こそが決着の時ですよ・・ヴェノム！行きますよ」

ヘルズが背中の鞘に剣を戻しヴェノムに言うと

「はいはい・・判りました・・それではまたお会いしましょう」

ヴェノムがマントで身体を隠しながらそう言い、ヘルズと同じ様に空を飛んだ・・それと同時に雲の間から

ズズズッ・・・

凄まじい音を立てながら要塞の様な物が姿を見せた・・私はそれを見ながら

「あれが・・パンデモニウム・・！！」

私がそう言うと同時にパンデモニウムの回りに仮想モニターが展開されジオガディスが姿を見せる

『聞け！愚かな魔道師どもよ！！我が名はジオガディス！！ネクロ達を統べる者だ！！』

モニターの周りにネクロ達が姿を見せる、全員凄まじい魔力と威圧感を放っていた・・それで判った今空中にいるのは全てＬＶ４だと・・

『戦いの手始めとして、本局、六課、市街を破壊させて貰った！！』

モニターが切り替わり廃墟の様になった、クラナガンの市街、本局、六課がモニターに映し出された、それを見てフェイトが

「エリオ達はどうなったの・・」

顔を青褪めさせながら言うフェイトに

「大丈夫だ・・エリオ達は無事に決まってる」

震えてるフェイトを安心させる為に抱き寄せながら言うと

「そ・・そうだよね・・無事に決まってるよね・・」

そう言うフェイトの頭を撫でていると、ヴィータがむすっとした顔でフェイトと私を引き離した

『俺達はクラナガン全域を覆うように魔法陣を展開させて貰った、この魔法陣が発動すれば魔法陣内の魔道師は全て死ぬ・・その魔法陣を消す為にはこの街の7ッ箇所に設置した結界の維持装置を破壊するしかない、当然そこにはダークマスターズが居る、そこに居る者とクリスタルを破壊すれば維持装置は活動を停止する・・勿論そこに居ない者は・・生き残ってる魔道師どもを殺しに行く・・判るか?これは全面戦争だ・・俺達が勝つか貴様達が勝つか・・その2つに1つしか無い・・だが俺達に負けは無い・・貧弱な人間ども如きに負ける訳が無い!!残された時間を精々楽しむが良い!!いずれ死に行く定めだ!!』

そう言うとジオガディスが映っていたモニターは全て消え、パンデモニウムも上空へと消えて行った・・

「守護者・・それでは決戦の時にまたお会い致しましょう」

ヘルズが頭を下げると同時に全てのダークマスターズは空に溶ける様に消えて行った・・

「兄ちゃん・・なんでジオガディスはそんな事を教えて来たん・・言わない方が有利なのに」

訳が判らないと言う表情のはやてに

「絶対の自信があるのだろう・・自分達は負けないという自信がな」

私がそう言うと同時に私の前に仮想モニターが展開されシャマルからの

「お兄さん!!ザ・・ザ・・チンクさん・・達が居る所に・・ネクロの反応がまだ消えて・・です!!スバル達も行っ・・・すけど・・数が全然減ら・・・な・・・す!!このままじゃ危・・プツ・・」

ノイズが走っていたモニターが軽い音を立て消える、私は即座に飛行魔法を発動させ

「はやて達は被害状況の確認を頼む!なのは、フェイトは六課の確認!!私はチンク達を助けに行く!後は任せるぞ!!」

私が矢継ぎ早に指示を出すとはやてが

「了解や!兄ちゃんも気をつけてな!!」

そう言うはやてに続き

「判りました！六課の方は私達に任せてください！」

言うが早く六課に向かって飛んで行くなのはとフェイトを見ながら

「今・・行くぞ・・」

私は気配を頼りにチンク達の所へ向かった・・

第１１５話に続く

## 第１１４話（後書き）

・・上手く表現できたか全く自信がありません・・こういう感じの話は苦手ですね・・もっと精進しなければと思う混沌の魔法使いです！！次回はジェイル合流編の話でその後は作戦会議、その後は各ダークマスターズとの戦闘の話になります、誰が誰と戦うのか楽しみにしてくれると嬉しいです！！それでは次回もどうか宜しくお願いします！！

# 第１１５話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！前回から始まった最終決戦編ですが・・予定通り大分長くなりそうです、各ダーマスターズ戦にジオガディス戦１、守護者喪失、守護者復活、ジオガディス戦２、ヴェルガディオス戦１、２、エピローグと続くので真面目に１３０話を超えそうですが、どうか最後までお付き合いください！それでは本編始まります！！

# 第１１５話

第１１５話

「イヒヒ！！中々やるね！！魔道師！！もうこんなに数が減ったよ！！イヒヒ」

ディアボリックの周りに居たネクロは大分数を減らしていた・・最初こそ囲まれるくらい居たが・・今では数える程しか居ない・・このままここでＬＶ４を１人倒せると思った・・少しはこれからの戦いが楽になると私は思いながら

「もう貴方を守るのは居ないわ・・ここで死んで貰うわよ」

私がクロスミラージュを向けるとディアボリックは楽しそうに飛び跳ねながら

「守るのが居ない？イヒヒ！！お前ら馬鹿～こんなにまだ居るよ～」

そう言ってディアボリックが跳ねる度の倒したはずのサナギとアリのネクロがどんどん姿を見せる・・それを見たエリオが

「まだ・・あんなに・・」

驚愕の声を出す・・私達が倒したのは丁度１５０・・だが今現れてるのはその倍近い・・しかも私達の中でウェンディとエリオは魔力限界寸前だし・・私とノーヴェは残り４分の１くらい・・魔力がま

だ半分以上残ってるのスバルとチンクさん・・それにセッテだけ・・
私は視界を覆い隠す程のネクロの群れを見て

（これは・・本気で不味い・・どうしよう・・）

作戦がまるで思いつかない・・今残っている魔力ではアリ型を7体
倒すのが限界・・それ以上はダメージを与えれない・・私がどうし
ようかと考えてるとノーヴェが

「あーあ・・折角もっと取って置こうと思ってたのによぉ・・仕方
ねぇ・・本気でいくぜ」

そう言うとノーヴェの両腕のプロテクターが消え変わりに足に装着
される、それを見たスバルが

「何か新しい切り札でもあるの？」

極光の光を身に纏いながら首を傾げるスバルにノーヴェは

「へっ・・当たり前だ・・行くぜ！！」

ノーヴェがそう言うと同時にノーヴェの身体を赤色の輝きが包み込
む・・それは間違いなく極光の光だった・・ノーヴェは右足でリズ
ムを取りながら

「お前だけが極光を使えると思ったか？・・私の方が龍也に先に教
わってんだ・・お前より使いこなす自信があるぜ」

自信満々の様子のノーヴェにスバルは

「へへ・・やっぱり・・ノーヴェも使えると思ってたよ・・「ギギッ！！」機神拳ッ！！」

飛び出して来たサナギ型に連続で拳を叩き込み消滅させるスバルの横にノーヴェが立って

「そうかい・・だがな・・私とスバルじゃ使い方が違うぜ！！！魔槍連脚ッ！！」

鋭い蹴りを放つ同時に赤い光が魔力刃となり5体のサナギ型を消滅させる・・見ただけで判った・・スバルは手数・・ノーヴェは一点特化の破壊に重点を置いていると・・私は頭の中で凄い速さで組みあがっていく作戦を念話で全員に伝える

（スバルとノーヴェ・・それとセッテは1番前で敵にダメージを！・・ダメージを与えたの私とチンクさん・・それにエリオで仕留める！！龍也さんがもう直ぐ来ると思うから・・それまで持ちこたえるわよ！！）

私が指示を出すと同時にネクロ達が向かって来る・・幸いなのは1回で襲ってくる数が少ない事だ・・ディアボリックは皆殺しゲームだと言っていた・・こいつはゲーム感覚で戦闘をしてる・・それゆえに持ち応える作戦が正解だと判断したのだ・・私はクロスミラージュをライフルから元の二丁拳銃に戻し

（早く・・来てください・・龍也さん・・あんまり長くは持ちません・・）

この持久戦でも長くて３０分が限界・・だから早く助けに来てくださいと思いながら私はノーヴェの蹴りで身体に輝が入ったサナギ型

を撃ち貫いた・・

「キキッ！！」

「ええい・・邪魔だッ！！」

向かって来るネクロを両断する・・スバル達の居る場所は判るのだが・・思う様に進めない・・ＬＶ１、２が邪魔をして思うように進めないことに苛付いていると・・

「ガイスト・・アーベント！！」

私の背後から闇色の魔力弾が飛んできてネクロ達を焼き払う・・私は振り返りながら

「私の邪魔をしに来たか・・ルキルメスッ！！」

私の背後にはルキルメスの姿があった・・私が睨みながら言うとルキルメスは

「命令に背き、戦い続ける馬鹿を回収しに来ただけだ・・俺はまだ貴様と戦うつもりは無い・・俺には決着を付けたい相手も居る・・だからお前と戦うのはその後だ・・」

そう言い放つルキルメスは左腕の剣に魔力を収束し無造作に振るう・・それは私の邪魔をしていたＬＶ１、２を全て切り裂き消滅させていた、ルキルメスは消えて行くＬＶ１、２を見ながら

「屑どもが・・ジオガディス様の命令を無視してまで魔力が欲しいか・・」

そう一瞥するとルキルメスは骨の翼を羽ばたかせ飛んで行った・・ルキルメスが向かう方向はスバル達が居る所だ・・

「助けてくれたのか？」

あのままではスバル達の魔力が尽きる前に合流するのは不可能だった・・だからＬＶ１、２を消滅させたルキルメスが助けてくれたのか？と思いながらスバル達の元に向かった・・私が到着した時ルキルメスの姿は既に無く、残っていたのはサナギとアリの様なネクロが４００程だった・・私が来た事に気付いたティアナ達が心底ほっとした表情になる・・ティアナ達から感じる魔力は殆ど無く、もう限界だったのは容易に判った・・私は着地と同時にティアナ達を囲うように大型のプロテクションを張る・・私は腰の鞘から剣を抜き放ちながら

「ＬＶ２、３が２００ずつか・・直ぐに終る・・その中で待っていろ」

プロテクションの中のスバル達に言う・・スバル達の騎士甲冑はボロボロで激戦だったのが一目で判る・・私はそこまで頑張ったスバル達を誇りに思っていると、アリ型がその口を開き

「「ヘルズグレネードッ！！」」

暗黒の魔力弾を打ち出してくる・・それが戦いの合図となりサナギ型のネクロが突っ込んできた・・私はそのネクロを両断しながら・・

（これはきつい戦いになるかもな・・）

心の中でそう呟いた・・敵は私だけではなくプロテクションの中のスバル達も狙っている・・そう簡単には破壊されないが・・長期戦は不利だと思う・・

（やれやれ・・誰か連れて来るべきだったよ）

そう愚痴を言いながらＬＶ２、３達に向かって行った・・・

「数が多いな・・「データクラッシャーッ！！」はあッ！！」

サナギ型の背中から飛び出してくる槍を切り払いながらそう呟いた・・サナギ型はもう５０匹しか残ってないが・・アリ型はその３倍の１５０匹・・少し苦戦し始めた時、後ろから

「ダークロアッ！！！」

闇色だがネクロ達とは少し色の違う砲撃が放たれ、サナギ型を纏めて２０匹消し飛ばす・・それと同時に

ギャリギャリ！！

白のキャンピングカーが飛び出してくる・・それの上で槍を構えている人物を見て眼を見開いた

「ジェイル！」

天雷の遺跡に居るはずのジェイルは車の上から

「龍也！！助けに・・キキーッ！！・・うおおッ！？！？」

勇ましく助けに来たと言おうとした直後、車が急ブレーキを掛ける、
それと同時にジェイルは車の上から投げ出され

「ッ！ぎゃあああ！！禿げる！！禿げる！！あぷろぷっ！！！「
きゃあああッ！！」」

頭から滑って行き私が張ったプロテクションに顔面からぶつかり停
止する・・プロテクションの中でスバル達が悲鳴を挙げた・・私は
良い具合に痙攣してるジェイルに

「だ・・大丈夫か？」

ネクロ達も驚いた様で停止していたので、近付きそう尋ねるとガバ
ッ！！と立ち上がり

「ふはははははッ！！！龍也！！助けに来たぞ！！！！」

頭からドクドクと血を流しながら言うジェイルに

「いや・・お前の方が助けが必要に見えるのだが？」

このままでは出血多量で死ぬ様に見えるジェイルに言うと

「私が助け？・・ああ・・血の事か・・それなら・・」

ジェイルが自分の顔を拭くと

「ほら、もう治ってる」

サムズアップするジェイルの額の怪我は完全に治っていた・・私が驚いてると、車の中からウーノが

「龍也様！！スバル達はこっちで回収しました！！ですから全力を出しても大丈夫です！！」

車の中から出てきたトーレとゼストがスバル達を回収する、私が頷くとウーノは

「メガーヌさん！出してください！！龍也様とドクターの邪魔になるので！！」

そう言うとキャンピングカーは凄まじい速度で走り出した・・車の中から

「「「ああああ！！！」」」

ティアナ達の悲鳴が聞こえた気がした・・私は猛スピードで走り去るキャンピングカーを見ながら

「ここからが本番だな・・」

私がそう呟くとジェイルは

「龍也・・私も戦うぞ」

隣に立って楽しそうに言うジェイルに

「大丈夫なのか？」

ジェイルはあくまで科学者であり、戦う者ではない・・だからそう言うとジェイルは

「お前にだけ負担は掛けんよ・・私にだって・・新しい力がある！！ギガスティックランス、ライオンハート・・ジョグレス！」

ジェイルの前で2つのデバイスが融合し、再展開された騎士甲冑を見て

「・・それが・・お前の新しいデバイスか・・」

そう呟いた・・白と黒の混合の騎士甲冑に、龍の頭とライオンを模した篭手からはそれぞれ、剣と大砲が姿を見せ、その背には翡翠色マント・・何処となくだがオメガに似ていると私は思った・・ジェイルは

「これがお前を助ける為に作り上げた・・新しい私のデバイス・・カオスだ！！」

自信満々に言うジェイルと私を囲う様にネクロ達が動き始める、私は両手で剣を握り締めながら

「お前は戦闘に慣れてないだろ？・・下がっててても良いぞ？」

そう言うとジェイルはライオンを模した篭手から剣を出しながら

「問題ない・・ゼストと戦闘訓練はしていた・・足手纏いにはならんよ」

笑いながら言うジェイルに

「そうか・・では頼りにさせてもらうぞ？」

「任せたまえ・・ネクロの１００や２００・・楽勝だ」

そう笑うジェイルと同時に地面を蹴り近くに居たアリ型を両断する、
反対側を見ると

「邪魔だよ・・消えたまえ」

龍の篭手をネクロに突きつけそれと同時に凄まじい砲撃を放つ、フォトンを得る前のなのはのスターライトと同クラスであろうその砲撃はサナギ型全てとアリ型を１０体飲み込み消滅させる・・私はその凄まじい威力の砲撃を見て、負けてられないと思い

「カートリッジロード・・奥義・・光刃閃・・」

目の前に居たアリ型を纏めて３０体両断する・・私は剣を構え直して戦況を見る、ジェイルが凄まじい勢いでネクロを両断し、そして砲撃を放つ・・私も迫ってくるネクロを大分倒した・・ネクロ達が全滅するのは時間の問題だと思った

「さっさと全滅させて・・はやて達と合流するか・・」

私はそう呟くと剣の切っ先を下に向け走り出した

「はあッ！！」

ネクロの胴体を穿ちそのまま蹴り上げる

「ギ・・ギ・・」

ダメージは与えたがまだ消滅しないネクロに

「全ての咎人に聖なる星の断罪を！スターライト・・ブレイカーッ！！！！」

追撃にスターライトを打ち込む、私が放った砲撃は、傷付いたネクロを消滅させ・・その背後に居た無傷のネクロも纏めて消滅させる、それを見たジェイルは

「流石は龍也だ・・負けてはられんな！！ダーク・・プロミネンス！！！！」

龍の篭手を地面叩き付けるそれと同時に黒い炎が噴出しネクロを飲み込み消滅させる・・ジェイルの攻撃はそれだけでは終らず、ジェイルの両肩の鎧がスライドする、そこから

「インフィニットランチャーッ！！」

巨大な火の玉を2発放つ・・それはネクロ達の手前で爆発し無数の魔力で出来た矢となり降り注ぐ

「ギギッ！！！」

身体に矢が突き刺さり動きの鈍ったネクロに剣を向け

「はあああッ！！」

凄まじい勢いで走り出す、ジェイルの突撃は動きの鈍っていたネクロを3体を貫く・・剣に串刺しにされたネクロが苦しそうに暴れるがジェイルはそれを無視して、ネクロを突き刺したままの剣を上空に向け

「ダイレクトエクスプローションッ！！」

砲撃を打ち込んだ・・ゼロ距離＋身体に貫通していた所為か、その砲撃のエネルギーを全て受け止めたネクロは悲鳴を挙げる間もなく消滅した・・

「驚いた・・まさかお前がここまで強いなんて」

ジェイルがネクロを消滅させた所でそう言うとジェイルは額の汗を拭いながら

「娘達だけに戦わせる訳にはいかんだろう？・・ちっぽけだが父親としてのプライドもある」

そう言うジェイルの肩に手を置いて

「お前のような父親を持った、チンク達は幸せだろうよ・・さてとそろそろ戻るか・・？」

私がそう言うとジェイルは騎士甲冑を解除して

「ああ、戻ろう・・チンク達も心配だしな・・」

頷くジェイルと一緒に六課に向かって歩き出した・・ちなみに六課に戻る途中ジェイルが

「所で龍也・・チンク達というか・・はやて君達と何か進展・・ドスッ!!げふっ・・」

馬鹿な事を言い掛けたジェイルの腹に拳を叩き込む・・ジェイルは脂汗を流しながら

「ふっ・・ふふ・・その反応を見ると特に進展は無かったようだな・・安心したよ・・まだディードとオットーにも目があるようだな・・」

ぶつぶつと呟くジェイルをもう一発殴ろうかと思ってると

「龍也!ジェイル!」

目の前に車が止まる・・運転席から声を掛けてくるゲンヤさんに

「ゲンヤさん・・どうしたんですか?」

どうしてここに居るのかと思い尋ねるとゲンヤさんは

「どうしたって・・決まってるだろうよ・・迎えに来たんだよ・・ほれ・・さっさと乗れよ」

車に乗れと言うゲンヤさんに頷き、私とジェイルはゲンヤさんの車に乗り込み六課へと向かった・・六課に向かう途中でゲンヤさんが

「それと被害状況なんだがよ・・負傷者は居る者の死傷者は居ない・・まだ今回の襲撃は挨拶レベルだったって事だな・・「ギンガ達は?」・・ギンガ達か?・・全然平気だよ・・それより早く行こうぜ・

・嬢ちゃん達だけじゃない・・レジアスに三提督も待ってるからよ」

ゲンヤさんの言葉に頷き、私達は六課へと向かった・・

第１１６話に続く

# 第１１５話（後書き）

ジェイルさん合流の話でした！彼とギャグは切っても切れない訳ですよ・・真面目にやってても必ず何かの落とし穴があるんですよ・・それがジェイルさんクオリティなんですよ、まぁこの後はシリアスばっかりなんでその前の最後のギャグでした！それでは次回はこれからの話になります、やっと最終決戦編に入り始めた、夜天の守護者をどうか宜しくお願いします

# 第１１６話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回は最終決戦の前の作戦会議？になるんでしょうかね？なんと言えば良いのか良く判らないですがとりあえずそんな感じです、それでは今回もどうか宜しくお願いします

# 第１１６話

第１１６話

「酷い有様だな・・」

私は六課に着くなりそう呟いた・・もう既にこれは廃墟と言っても良いだろう、無事な建物が何一つない事に私がショックを受けてると

「旦那・・待ってたっすよ・・」

瓦礫の影からヴァイスが姿を見せる、ヴァイスは

「旦那、部隊長達はもう此処には居ないっす・・幸いなことにＦＷ陣や隊長陣で出た怪我人は居ないっす・・隊員や一般職員は怪我人だらけっすけど・・」

苦笑するヴァイスは私の横に歩いて来て

「旦那・・部隊長達はアースラに向かいました・・俺も後で行くんで先に行ってて下さい・・」

そう言うヴァイスにジェイルが

「ヴァイス君・・君も一緒に来れば良いだろう?」

そう言われたヴァイスは

「俺も一緒に行きたいっすけど・・まだ後1人伝言を伝えないといけないんで此処で待ってるすよ・・ラグナと一緒に」

ヴァイスが指差した方には瓦礫に腰掛けるラグナの姿があった・・

私はラグナを見ながら

「判った・・ではアースラで待ってる・・ハーティーンが来たら一緒に来てくれ」

そう言ってゲンヤさんの運転する車に再度乗り込み、移動を再開した・・走り始めて30分後、私達はアースラの前に来ていた、私が車から降りると

「兄ちゃん!!大丈夫やったか?怪我とかしてへんか?」

駆け寄ってくるはやてに

「私は大丈夫だ、勿論ジェイルも無事だ」

車から降りたジェイルは

「はやて君・・チンク達は?」

真っ先に自分の娘の事を尋ねるジェイルにはやては

「はい、チンクさん達は無事です・・ただちょっと・・魔力を使い切ってへばってますけど・・怪我とかはしてへんですよ」

ジェイルはやっと安心したと言う表情になった所でゲンヤさんが

「じゃあ俺は戻る・・ギンガ達が心配だからよ・・」

そう言って車に乗り込み走り去ったゲンヤさんを見てるとはやてが

「兄ちゃん・・皆待ってるで行こ」

私はその言葉に頷きはやて達と一緒にアースラに乗り込んだ・・

（懐かしいな、ここに来るのは何年ぶりだ？）

私はアースラの中を見ながらそう呟いた・・ここには様々な思いでがあった・・護れた者・・護れなかった者・・出会いと別れ・・色んな事があった・・私がそんな事を考えてるとはやてが

「アースラに乗るのも久しぶりやね」

「そうだな」

2人でそんな事を話しながらブリッジに向かう・・そこにはなのは達が待っていた・・皆無事の様で私が一安心してるとはやてが

「兄ちゃんが艦長席に座ると良いで」

そう笑うはやてに首を振りながら

「いや・・私では役不足だ・・ここに座るのはお前だ・・はやて」

私がそう言うとはやては

「でも・・兄ちゃんの方が適任やと思うんやけど・・？」

渋るはやて・・私はなのはとフェイトを見る・・2人は私が何を言いたいのか理解したようで歩いて来て

「でも、はやてちゃんにはそこに座る義務があるんだよ？」

「今そこに座れるのははやてだけなんだから」

「ちょっ、なのはちゃんフェイトちゃん待ってって！！」

なのはとフェイトに背中を押され艦長席に座ったはやては

「しゃあないなぁ・・んじゃあ・・私がここに座らせて貰うわ」

そう言って艦長席に腰掛けたはやては

「じゃあ疲れてる所悪いけど・・これ見て」

アースラのモニターにクラナガンの市街の拡大図が映る・・そこには7箇所の建物が魔法陣を描くように並んでいた・・それを見たジェイルは

「これは・・龍也・・遺跡にもこれと同じ魔法陣が書かれていた・・これは・・魔法陣の中に魔道師のリンカーコアを奪い取る物だ・・」

そう教えてくれるジェイルになのはが

「リンカーコアを奪う？・・そんな事になったら大変じゃないですか！！」

慌てるなのはにジェイルは

「大丈夫だ・・これは発動までとにかく時間が掛かる・・今日発動したという事は後1週間の猶予がある・・だが言い換えれば・・1週間経てば全てが終ると言うことだ」

その言葉にスバルが

「それじゃあ!直ぐに行ってダークマスターズを倒さないと!!・・つぅ・・」

苦しそうに蹲るスバルに

「出来る事ならそうしたい・・だが今は私達自身の傷と魔力を回復させなければならない・・今は休む時だ・・判ったな・・スバル・・いや・・スバルだけじゃない・・皆もだ」

私がそう言うとゆっくりと頷くなのは達・・今戦いに行っても負けるだけ・・だから今は休む時なのだ・・私はそんな事を考えながらはやてに

「はやて・・六課の中で重傷者は?」

私がそう尋ねるとはやては表情を曇らせ

「ザフィーラと・・ヴィヴィオが重体や・・ザフィーラは全身を切り裂かれて・・ヴィヴィオは限界まで魔力を吸い取られて意識不明や・・兄ちゃん!駄目や!!」

ガシッ!!

私が自分の拳を壁に叩き付けようとする前に、慌ててはやてが艦長席から立ち上がり私の腕を掴む・・だがそれでも完全に止める訳が無く私がもう1度拳を振りかぶろうとすると

「兄貴!そんなことしても何にもなんねぇよ!!・・だから・・止めてくれよ!!!」

ヴィータが私の前に立つ・・私は涙目の2人に

「・・すまない・・」

そう言って拳を降ろすとティアナが

「すいません!!私が・・何にも出来なかったから!!ヴィヴィオが・・私の・・私が・・「いや・・良いんだ・・ティアナの所為じゃない・・」

泣きそうなティアナの頭に手を置きながらはやてに

「面会も出来ないのか?」

面会が出来ないのか?と尋ねるとはやては首を振りながら

「うん・・残念やけどできへんみたいや・・」

そう言うはやてに頷き、私は

「そうか・・判った・・これで話は終わりだ・・皆疲れただろう・・休んでくれ・・ではな・・」

私はそう言ってブリッジから出て行った・・ブリッジから出て行く
龍也を見ていたフェイトは

「・・龍也は怒ってる・・何にも出来なかった自分に・・」

そう呟く・・その声を聞いたシグナムは

「そうだな・・だが・・それは私達も一緒だ・・何も出来なかった・
・だが失敗は自分の行動で取り戻せば良い・・兄上の言うとおり・・
今は休む時だ・・判ったな・・」

シグナムの言葉に頷きスバル達もブリッジから出て行った・・その
頃ハーティーンは六課の跡地に居た・・

「ハーティーン!!」

俺は駆け寄ってくるラグナに

「怪我は無いか?」

そう尋ねるとラグナは笑いながら

「私は大丈夫だよ!!それよりハーティーンは?」

俺はラグナの頭を撫でながら

「問題ない・・それより守護者達は?」

ラグナが答えようとする前にヴァイスが

「旦那達はアースラって言う艦の所に居るぜ・・俺達ももっと早く行く予定だったんだけどな・・お前を待ってたんだよ」

心なしか不機嫌そうなヴァイスに

「そうか・・すまない・・俺の所為で」

俺が謝るとヴァイスは信じられない物を見たという表情になる、俺は

「何だその顔は？」

ヴァイスは頭を掻きながら

「いやよ・・お前が素直に謝るなんて思ってなかったからよ・・まぁこれはどうでも良いか・・所でお前何処に行ってたんだ？」

俺は溜め息を吐きながら

「王龍の所に行っていた・・もしかしたら使えるかも知れないと思っていたんだが・・やはり駄目だった・・」

俺がそう言うとラグナが

「王龍？・・確かハーティーンのデバイスだよね？・・まだ駄目だったの？」

ラグナには全てを話していた・・自分が王龍に拒絶されてる事など・

・全てをだ俺はラグナの頭を撫でながら

「俺はもう過去の俺とは違う・・だから王龍は俺を認めてくれないんだ・・」

俺は1度デクスになった、それが原因だと俺は思っている・・王龍はネクロを倒す為に作られたデバイス・・だから俺を主だと認めてくれないのだろう・・俺がそんな事を考えてるとラグナが

「大丈夫だよ!きっと・・また使えるようになるよ」

笑いながら言うラグナに

「そうだな・・いずれまた使えるようになるだろうな・・ありがとうラグナ・・少し元気が出た・・」

俺がヴァイスにそう言うと

「ヴァイス、俺をアースラに連れてってくれ」

「判ってる・・んじゃあ着いて来いよ」

そう言ってバイクに跨るヴァイスの後を追って俺はバイクを走らせた・・ちなみラグナは俺のバイクの後ろに乗っていた・・ヴァイスは自分のバイクにラグナが乗ってくれない事にショックを受けていたようだった・・

「みんなおそろいやな」

「失礼します」

ネクロ達の襲撃から3日後、私達はジュエルシード事件に協力した時に紹介されたブリーフィングルームで今後の方針が決まるまで待機していた、3日の間に傷も癒え魔力も回復した・・そしてはやてとグリフィスが来たという事は

「これからの方針がやっと決まったんよ」

「地上本部の今回の事件への対応ですが、人員が不足し大きく後手に回っています・・」

ネクロ達の行動は素早かった・・上位の者が目的地を破壊し、下位の者が邪魔者を排除する・・的確で素早かった・・私がそんな事を考えてるとはやてが

「せやから私達がやるのは、7箇所の魔法陣維持装置の破壊と、ジオガディス・・そして街に陣取ってるディアボリックとホーネット達の殲滅や・・」

やはりか・・正直な所ＬＶ3、4に対抗できるのは私達しかいない・・予想通りの展開だな・・

「こういう感じで行こうと思うんやけど・・なのはちゃん、フェイトちゃん・・それに兄ちゃん・・なにか意見ある？」

そう尋ねてくるはやてにまずなのはが

「私はこれで良いと思う・・武装隊の人じゃ、勝てないから民間人

の護衛に回ってもらった方が良いと思う」

「私もそう思う」

計画に賛同する2人を見ながら私は

「私もそれで良いと思う・・だが・・7箇所に居るダークマスターズ・・そしてディアボリックとホーネットの件はどうするんだ?」

ジオガディスは私とセレスで良いだろう・・では他は?・・私がそう思い尋ねるとはやてはモニターを出し

「今の所に何処に誰が居るかは判ってへん・・その場所に発生してる魔力から大体の予測をつけたんや・・7箇所に居るのは、ルキルメスとその一派、ランレ・デルーパ、ヴェノム、ヘルズ、それと名前が判らない3体・・計7体や・・これはFW陣と隊長陣にやって貰おうと思ってる・・」

私はその話を聞いて

「無茶だ!LV4にスバルやチンク達が勝てる訳が「八神!」・・チンク?」

私が勝てる訳無いと言い掛けた時、チンクが私を見て怒鳴る・・チンクは私の目を見て

「八神、お前は私達を信用してないのか?」

「そんな事は無い」

私が直ぐに返事を返すとチンクは

「いいや、お前は私達の事を信用してない！私達はお前の足手纏いにならないように頑張ってきた！！それなのに・・何故そんな事を言う！！お前の心配してることは判る、私達が死ぬんじゃないか？そう思っているのだろう・・大丈夫だ私達は死なない！絶対にだ！」

チンク・・いやチンクだけじゃない・・ここに居る全員が頷く・・
私はチンク達を見て

「・・すまない・・そうだな・・判った・・お前の言うとおりだ・・チンク・・」

私は要らない心配をしていたようだ・・そうだチンク達が負ける訳が無いんだ・・

「ん、話は決まったな・・んで今考えてる7箇所に向かうのは、スバル、ティアナ、ノーヴェ、ゼストさん、ヴィータ、シグナム、なのはちゃんとフェイトちゃん、スカリエッティさん、エリオ、キャロ、ルーテシア、それとハーティーンや・・今はまだ判ってへんけど・・出来るだけ何処に誰が居るか調べるで・・何処に誰が行くか決めるのはまだ後や・・んで街に向かうのは、私とチンクさん、セッテ、ディード、オットー、ウェンディ、ディエチ、トーレさんやね・・クアットロとウーノさんはここに残って貰って戦況を見て貰うつもりや」

はやての作戦を聞いた私は

「そうだな・・それが1番ベストか・・それで作戦実行はいつだ？」

私がそう尋ねるとはやては

「2日後や・・それまでは皆ゆっくり休んでな・・私達の全てが掛かってるんや！・・負けは許されへんで？・・それじゃあ・・解散！！2日後まで確り身体を休めておくこと！これは部隊長命令やからな！！」

そう笑いながら言うはやてに頷きその場は解散となった・・そして決戦前夜・・私は自分の部屋で瞑想をしながら呼んでいた人物達が来るのを待っていた・・予定の時間から5分ほど過ぎた頃私の部屋の扉を叩く音がする・・私は閉じていた目を開きながら

「鍵は開いている・・入って来てくれ」

扉が開き4人の男女が姿を見せる・・レジアスとジェイルにクロノとリンディさんだ・・決戦の前にどうしても頼みたい事があると言って無理に来てもらったのだ・・私は立ち上がりながら

「忙しい所すいません・・ですがどうしても話しておきたい事があったので」

私がそう言って頭を下げるとレジアスが

「ワシ達だけで良いのか？・・はやてとか・・なのは達は良いのか？」

そう尋ねてくるレジアスに

「この話はなのは達には教えないで欲しいのです・・これから聞く話はどうか貴方達の胸の中にしまっておいてください」

そう言ってから私は自分の胸中を語った・・私が話し終えるとクロノが

「ふざけるな!!幾らお前の頼みでもそんな事を聞けるか!!」

そう怒鳴るクロノの隣でジェイルが

「・・判った・・引き受ける・・「スカリエッティ!!貴様何を言ってるのか判ってるのか!!」

頷きながらそう言う、その言葉を聞いたクロノはジェイルに詰め寄りながら怒鳴り声を上げるが

「君こそ何を言ってるのかわかってるのか?・・君は龍也を信じないと言っているんだ・・だが私は違う、龍也なら絶対そんな事にならないと信じている!」

その言葉にクロノは苦しそうに顔を歪め

「・・くっ・・判った!・・判ったよ!!僕も引き受ける!だがな!!絶対に死ぬなよ!!」

そう言って部屋を出て行くクロノの後姿を見てるとリンディさんが

「1つだけ聞かせて・・・どうして私達にそんな事を頼んだの?」

そう尋ねてくるリンディさんに

「こんな事を頼めるのは貴方達にしか居ないと思ったんです・・」

私がそう言うとリンディさん達は

「仕方ないわね・・そこまで言われたら引き受けるしかないわね・・でも・・出来ればやりたくないわね・・フェイト達に恨まれそう・・」

「そうだな・・はやて達に恨まれそうで怖いな・・だがワシも引き受けよう」

そう言って出て行くリンディさん達・・私は1人になったブリーフィングルームで

「絶対に死ぬな・・か・・クロノにそんな事を言われるとはな・・」

私はそう呟き座子に腰掛けながら

「悪いが・・クロノ達には貧乏くじを引かせてしまうな・・だが・・こうするしかないんだ・・」

私はそう呟きブリーフィングルームを後にした・・私が力を得る為に払った対価・・それを払う時が来た・・私はこの運命から逃れる事は出来ないのだから・・

第１１７話に続く

## 第１１６話（後書き）

どうも今回は少し短めでしたね・・ダークマスターズと戦うＦＷと隊長陣・・誰と誰が戦うのか楽しみにしてくれると嬉しいですね・・それと最後の方で龍也がクロノ達に頼んだ事とは？・・そこを楽しみにしていて下さい！！それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします！！

# 第１１７話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回からは各ダークマスターズとの戦闘の話になります！！ダークマスターズはどれも強大な力を持ったネクロ、デクス達です・・どんな戦いになるのか・・楽しみにしてくれると嬉しいです！！それでは本編始まります！

# 第117話

第117話

私は目の前で整列するなのは達と、少し離れた所で腕を組んで目を閉じている、ハーティーンを見ながら

（こういうのは私の性じゃない・・）

心の中でそう呟いた・・決戦当日・・誰かに言葉を掛けて貰おうと思っていたのだが・・レジアスもリンディさんも拒否・・他に適任者は居なくなり・・強制的に私が言う事になった・・

「今日はネクロ達との決戦の日だ・・ネクロ達は強い・・だが・・私はお前達なら絶対に勝てると信じている・・」

私はなのは達を見ながら激励と言えるか判らないが・・そう声を掛けた・・ネクロ達は確かに強い・・ＬＶ４となれば・・なのは達か同クラスか・・それ以上の可能性もある・・だが・・なのは達なら勝てる私はそう信じていた・・私の仲間なら絶対に負けないと・・私はそんな事を考えながら

「そして・・私からたった１つ・・・１つだけ・・命令を出す・・全員絶対に死ぬな！・・ここに皆揃って帰って来い！！」

私がそう言うとなのは達は勢い良く敬礼しながら

「「「「了解！！」」」」

敬礼してから飛び出していくなのは達・・私は天雷の書をコートの中にしまい

「セレス・・私達も行くぞ・・」

そう呟くと背後から滲み出るようにセレスが姿を見せ

「はっ・・私は必ず貴方に勝利を・・」

そう頭を下げながら言うセレスを見ながら

（やはり・・セレスは知らないのだな・・私が力を得る為に払った対価を・・）

私は長い間セレスと居て気付いた・・天雷の書の統制人格として作られたセレスだが・・彼女と天雷の書はリンクしていない・・別の個として活動しているのだ・・だからセレスは知らない・・私が力を得る為に天雷の書に払った対価を・・

（いや・・いい・・そんな事は最早どうでもいい事だ・・私は・・パンデモニウムに行く・・■■為に・・それが・・私の運命・・ならば・・私はそれを受け入れよう・・私はその為に生きてきたのだから・・）

私は心の中でそう呟きセレスと共にアースラの外に出て空を見上げた・・上空にはパンデモニウムが浮かんでいた・・

（行くか・・全てを・・今度こそ護る為に・・）

私はそんな事を考えながら隣のセレスを見て

「行くぞ・・セレス」

「はいっ！・・我が王よ・・」

頷くセレスと同時に

「「ユニゾン・・インッ！！」」

ユニゾンを行うそれを同時に展開された騎士甲冑の背に生えた翼を羽ばたかせ・・私はパンデモニウムに向かって行った・・

「ジオガディス様・・予想通り守護者がこちらに向かってます・・」

俺はヘルズの言葉を聞きながら・・王座に腰掛けながらモニターに展開された・・街の地図を見ているとヘルズが

「ご心配なく・・仮に我らが敗れてもジオガディス様が生きておられれば・・結界は消えません」

そう・・その通りだ・・俺が敗れなければ・・街に展開している結界は消えない・・そして俺は決して負けない・・今度こそ俺は・・全てを取り戻す・・エリナを・・俺の国を・・

「ジオガディス様・・貴方の願いは私の願い・・今度こそ私は貴方の願いを叶えましょう・・貴方が再び笑えるようになれるように・・その為ならば・・私怨は捨てましょう・・それではジオガディス様・・全てが終った後に・・再会致しましょう・・」

頭を下げ地面に吸い込まれるように消えて行くヘルズを見ながら

「俺はお前を取り戻したいだけだ・・お前と共に再び・・笑いたい・・その為に俺はこの手を幾らでも血で塗らそう・・エリナ・・」

あれから永い時がたった・・だが今でも鮮明に思い出せる・・エリナの笑顔が・・俺は首から下げた血がこびり付いたペンダントを握り締めた・・これは婚約の証に俺がエリナに送ったペンダントだった・・そして婚約が決まったその日・・俺は全てを失った・・

「俺は許さない・・俺から全てを奪った者を・・ベルカを・・！・・神王を・・！」

俺から全てを奪ったベルカ・・そして俺の邪魔をした神王・・どうして許す事が出来ようか・・俺はペンダントをしまいながら

「来るがいい・・守護者・・貴様に俺と同じ絶望を味わわせてやる・・そして絶望の中で殺してやる・・」

俺は城に向かって来る守護者を見ながらそう呟いた・・その直後脳裏に何者かの声が響く

（そうだ・・殺せ・・殺して殺して殺し尽くせ・・さすればお前の願いは叶う・・お前の愛した者も・・全て再びお前の手の中に戻る・・）

「！・・何だ？・・今の声は？」

突然脳裏に響いた声を聞き辺りを見回すが俺以外の姿は見えなかっ

た・・

「気のせいか・・ふん・・だがその通りだな・・殺せばいい・・全て・・そしてその手始めはお前だ・・八神龍也・・早くここへ来い・・俺の剣で貴様を殺して・・まだ逆らうか・・ふんっ！！！」

バチバチバチッ！！！

手の中のダインスレイフに魔力を流す・・強引に流し込まれた魔力にダインスレイフが悲鳴を上げる・・

「お前は俺の道具なんだよ・・道具が主に逆らう事が出来ると思うか？・・無理だ・・お前はこれからも魔道師を殺す為だけに使う」

抵抗していたダインスレイフの動きが止まる・・俺は鞘の中のダインスレイフに

「ふん・・ユニゾン型アームドデバイスだがなんだか知らんが・・自意識を持つデバイスなど邪魔以外の何物でもないな・・」

試作型なんだか忘れたが・・こいつはユニゾンデバイスとしての特徴を兼ね備えている・・だが・・俺にはユニゾンなど必要ないし・・こいつの指示もいらない・・

「さあ・・早く来い・・夜天の守護者・・圧倒的な力の差を教えてやる」

俺はそう呟き再び王座に腰掛けた・・守護者が消えれば抵抗しようという人間も居なくなる・・そうすれば事は容易く進む・・エリナ達を生き返らせる事も出来る・・俺はその時こそ・・心から再び笑

えるようになるだろう・・エリナ・・早くお前に逢いたい・・この手でお前に触れたい・・お前の声を聞きたい・・だが・・まだそれは出来ない・・待っていろ・・必ず俺がお前を生き返らせてやるからな・・俺は心の中でそう呟き再びモニターを見た・・そこにはルキルメスの所に向かう４人の魔道師の姿が写っていた・・

「敵が居ないね・・どうしてかな？」

走りながら尋ねてくるスバルに私が答える前にゼストさんが

「作戦実行中に無駄口を叩くな・・それが死を招くぞ」

静かだが威厳のある声で言うゼストさんにノーヴェが

「ゼスト・・もうちょい言い方ってもんがあるだろ？・・龍也はそんな風に押さえつけたりしないぜ？」

ノーヴェがそう言うとゼストさんは

「すまん・・少々気が立っていた・・許せ・・」

そう言うと無言で私達の前を走りだすゼストさんを見ながら私は

（私がチームリーダーって絶対おかしい・・普通ゼストさんじゃないの？）

心の中でそう呟いた・・私達は３人編成だったのだが・・私達が向かう場所はルキルメスの領域である事が判り、急遽ゼストさんが組

み込まれたのだが・・正直私がリーダーというのはおかしいと思った・・年長者のゼストさんの方がよっぽど適任ではないだろうか・・私がそんな事を考えてると隣のノーヴェが

「自信を持てよ・・龍也がお前にリーダーを任せたんだ・・それはそれだけ期待されてるって事だぜ？・・もしお前で不安ならゼストがリーダーになってたさ・・だから自信を持てよ・・なっ！」

そう言って力強く背中を叩くノーヴェ・・正直かなり痛かったが気合が入った・・

（そうだ・・龍也さんに任されたんだ・・自信を持てば良い・・ルキルメスを倒して・・ここのクリスタルを破壊する・・それが私の・・ううん・・私達の役目・・）

私は自分に任された事をすればいい・・龍也さんは勝つ・・絶対に・・私が心配する必要は無い・・今は自分の出来る事をするだけだ・・私はそう考え・・ネクロが姿を見せない理由をスバルに話した

「スバル・・ネクロが姿を見せないのはここがルキルメスの領域だからよ・・あんたは直接戦った事があるでしょ？・・ルキルメスは卑怯な事をするようなネクロだった？」

これがヴェノムや・・あの赤いローブのネクロなら違う・・自分が有利になるために二重三重の罠を張るだろう・・だがルキルメスはそんな性格のネクロか？と尋ねるとスバルは

「違う・・ルキルメスはそんな事しない・・ルキルメスは正々堂々戦う事を望んでた・・だから・・卑怯な事はしないと思う」

真剣な表情で言うスバルに頷き瓦礫の中を走ってると

「止まれ・・」

ゼストさんが急に立ち止まる・・何事かと思ってると

「来たか・・待っていたぞ・・魔道師」

緑色の体に両腕が魔力刃で出来たネクロが瓦礫の山の上に立っていた・・私達が戦闘態勢に入ろうとするとネクロは

「待て・・俺は今は・・戦いに来たのではない・・俺はルキルメス様の命でお前らを迎えに来ただけだ・・俺達と戦う前に消耗されるのは面白くないからな・・」

そう言うとネクロは瓦礫の山から飛び降り、私達の前に着地し

「俺は疾風将ヒューガ・・ルキルメス様の宮までは俺が案内する・・着いて来い」

ゆっくりと歩き始めるヒューガの背を見ながらノーヴェが

「どうするよ?・・着いてくのか?」

その言葉に少し考える・・ルキルメス配下のネクロはどれも戦士であり・・卑怯な事はしなかった・・本局襲撃の時の報告もある・・私がどうしようか悩んでいるとスバルが

「私は行くよ・・ルキルメス達は卑怯な事をしないって判ってるから・・」

そう言ってヒューガの後を追って歩き始めたスバルに

「・・はぁ・・でもまぁ・・スバルの言う通りかな？・・行こう・・ノーヴェ・・ゼストさん」

私達もヒューガの後を追って歩き出した・・ヒューガの後ろを歩いていると

「「「キキーッ！！！」」」

無数のＬＶ１が飛び出して来た・・私がやっぱり罠だったのか！？と思い、慌ててクロスミラージュを構えようとした瞬間

「失せろ・・屑どもが・・コバルトサイクロン！！」

ヒューガが素早く左腕を振るう、すると魔力で出来た竜巻が発生し飛び出して来たＬＶ１を粉微塵に切り刻む・・私とヒューガの目が合う・・ヒューガは

「罠かと思ったか？・・言っておくが俺はそんな事をしていない・・どうせリベンジャーかバラガルト配下のネクロだろうよ・・あいつらは卑怯で姑息な奴らだからな」

そう吐き捨てるヒューガの言葉に嘘は無いと思った・・ヒューガの目は澄んでいた・・卑怯な事を考えているようには見えなかったのだ・・私は取り出しかけたクロスミラージュをしまい・・再びヒューガの後を追って歩き出した・・瓦礫の山を歩く事数分・・私達の前に黒い壁の宮殿の様の物が姿を見せた・・ここにクリスタルが・・私が宮殿を見上げてると

「こっちだ・・来い」

宮殿の中を進んで行くヒューガの後を追っていく・・宮殿の中は長い一本道だった・・歩く事数分・・私達は広いフロアに出た・・フロアの真ん中にはルキルメス、その背後には黒いクリスタルが光り輝いていた・・私達がクリスタルを見ていると

「案内はここまでだ・・ここから先は敵同士・・覚悟しろ・・」

そう言うと地を蹴り一瞬でルキルメスの背後に移動したヒューガ・・私がその速さに驚いていると、稲妻と水の柱が上がり、さらに2体のネクロが姿を見せる、キメイラと似た体を持ったネクロと灰色で頑強そうな身体を持ったネクロだ・・私達が戦闘態勢に入ると私の足元に魔法陣が展開される・・いや私だけではない・・ノーヴェとゼストさんも同様だ・・やっぱり罠だったのか!?私はそんな事を考えながら何処かへと飛ばされていった

皆が!・・急に姿の消えたティア達・・まさか・・罠だったのか?・・私がそう考えルキルメスを睨むとルキルメスは

「別に死んだ訳じゃない・・よく見ろ・・ヒューガ達も居なくなってるだろう?1対1で戦える場所に移動して貰っただけだ・・邪魔者も居ない・・スバル!!俺は貴様を倒す!!我が王の願いを叶える為に!!」

そう言うとルキルメスの身体を漆黒の魔力が包み込む・・これは前にも見た・・進化する時の現象だ・・私がそれを見ながら

「私はお前に負けない！！絶対に！！」

青く光り輝く魔力が私を包み込む・・それと同時に騎士甲冑が姿を変えていく・・動きやすい白を基調とした服にナックルガードと足のすね辺りまでの甲冑・・私は全身に極光の光を身に纏い構えを取る・・ルキルメスも同様拳を構える

「行くぞ！！スバル！！あのときの決着を付けてくれる！！」

そう言って凄まじい勢いで突っ込んで来た・・私も地面を蹴り走り出した・・スバルとルキルメスが戦闘を開始した頃・・宮殿の内部の3箇所では

「私の相手はお前か・・」

「そうだ・・俺の名はライガ！！正々堂々貴様に勝負を申し込む！！」

ライガとノーヴェが荒れ果てた荒野のような場所で戦い始め・・

「ヒューガ・・俺の相手はお前か・・」

「そうだ・・正々堂々一騎打ちの勝負だ・・だが・・勝つのは俺だがな！！」

森林の中でお互いの獲物を構えるゼストとヒューガ・・そして

「ここは海・・？」

「そうダ・・ここガ・・俺の領域・・勝負ダ・・魔道師・・」

海の上でスーガとティアナが・・戦闘を始めていた・・闇の闘士と３将軍対スバル達の戦いの幕が上がった・・

第１１８話に続く

## 第１１７話（後書き）

どうも今回は面白かったでしょうか？・・戦闘開始の話でしたね・・次の話で本格的に戦い始めますが・・誰から始まるのか楽しみにしていてくれると嬉しいです！！それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします！！

# 第１１８話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は完全バトルの話です、唯私は余り戦闘描写が得意ではないので・・上手く表現出来ているのか自信は無いですが・・どうか宜しくお願いします！！それでは本編始まります！！

# 第118話

第118話

「はあああッ！！！」

真っ直ぐに突っ込んできたライガの拳を肘で受け止める・・だが

（つぅ・・なんつー馬鹿力だよ・・ガードした腕が痺れるぜ・・）

完璧にガードした筈なのだが、ライガの拳の威力は凄まじく、私は自分の右腕が暫く使い物にならないと瞬間的に理解した・・私は即座に蹴りを放ちライガの右脇腹を抉りそのまま後ろに向かって跳んだ・・直ぐに追撃が来ると思ったが予想に反してライガはその場に立ったままだった・

「中々の威力だ・・これでこそ戦う意味があるという物だ・・」

戦闘凶・・私は心の中でそう呟き・・痺れている右腕を振るってみるが

（駄目か・・全然力が入らない・・やれやれ・・温存しようなんて考えるからバチが当たったんだな・・）

私は今極光を使っていない・・早くライガを倒してスバルと合流しようと考えていたからだ・・ルキルメスは強い1人では不利だろうと考え・・魔力を温存しようと考えていたが・・

（余計なお世話か・・それに一騎打ちを望んでるスバルに協力する

って言っても断られるだけだな・・なら私は私の出来る事をするだけだ・・）

私は痺れる右腕をだらりと降ろしそれと同時に

「ライガ・・こっからが本番だぜ・・はあああああッ！！！」

私の身体を赤い光が包み込む・・それを見たライガは

「スバルと守護者が使う技法か・・貴様も使えたのだな・・良いだろう！！待ってやろう！！貴様の全力を俺に見せてみろ！！」

好戦的な声で言うライガ・・正直少しありがたかった・・私は発動させれば長い時間維持出来るが、発動させるまでに時間が掛かってしまうのだ・・だから待つと言うライガの言葉はありがたかった・・そんな事を考えてる内に私の身体を赤い魔力光が包み込み甲冑も姿を変える、スバルの物と良く似ているが色が違う・・赤い服に重厚なデザインの脚の甲冑・・それと肘辺りまでの篭手・・私は左足を胸の高さまで引き上げ

「行くぜ・・ライガッ！！」

私は全力で地面を蹴った、一瞬でライガの懐を取る、その速さに驚いたライガの腹に全力で膝蹴りを叩き込む

「なっ・・がふっ！！」

身体がくの字に曲がるライガ目掛けて拳を振るう・・これは直撃だと思ったが

「舐めるな!!・・喰らえ!!エレクーゲル!!」

私の拳を受け止めそのまま肩の甲冑から電撃を放ってくるライガ・・
私は直撃を喰らってしまった・・

「うっ・・くそっ・・」

電撃に弾き飛ばされながらも何とか体勢を立て直しライガを見ると、
ライガはゆっくりと構えを取りながら

「立て・・あの程度でどうこうなるほどお前は弱くないだろう・・
？」

私が立つと判ってるのだろう・・油断無く拳を構えるライガ・・私
はゆっくりと立ち上がり

「・・私は龍也以外に負けるつもりは無いんだよ・・だから私はお
前を倒すぜ」

そう・・私は龍也以外に負けるつもりは無い・・そうは言っても本
気で龍也に勝ちたい訳じゃない・・私は龍也に認めて欲しい・・そ
れだけだ・・私が再び構えを取るとライガは

「俺だって負けるつもりは無い!!正々堂々貴様を打ち倒し・・貴
様のリンカーコアを我が偉大なる王に捧げてくれる!!」

そう言って走り出すライガに合わせて走り出す・・ライガの拳と私
の蹴りがぶつかり凄まじい轟音が響き渡る・・私とライガの戦いは
まだ始まったばかりだ・・

キンッ！！キンッ！！

森林の中を金属同士がぶつかる響き渡る・・戦っているのはゼストとヒューガだ・・凄まじい速さでお互いに突きを繰り出し、薙ぎ払う・・俺は渾身の力でヒューガの魔力刃を弾き距離を取り俺は舌打ちした

（アンブロジウスが使えれば楽なんだがな・・）

森林という場所に加え、ヒューガのあのスピード・・大型の槍であるアンブロジウスでは不利だと言うのは容易に判る・・だから俺は両腰のアウスターベンを使って戦っているのだが・・長期戦は不利だろう・・俺は剣はあんまり得意ではない・・それが理由だ・・俺が距離を取り左手の剣を逆手に構えるとヒューガは

「意図した訳ではないが・・貴様の力は制限されてるようだな？」

両腕の魔力刃をクロスさせながら言うヒューガに

「ふん・・丁度良いハンデだ・・俺と貴様では俺のほうが強いからな」

俺がそう挑発するとヒューガは

「ふふふ・・良いぞ・・この不利な状況でそこまで強がりを言えると言う事は・・勝つ目が見えてるのだろう？・・どのような作戦か楽しみだよ！！」

そう言って凄まじい速さで突撃してくるヒューガ・・そして直感的に右手を後ろに振るうと

ガキーン!!

凄まじい音が響き渡る・・前から突撃して来たと思えば次の瞬間には背後を取られている・・ヒューガのその速さに驚いていると

「考えてる暇は無いぞ!!」

ドスッ!!

「がっは・・」

ヒューガの蹴りが腹に食い込む・・それと同時に振るわれた魔力刃を反射的にしゃがんで回避し再び距離を取る

「どうした?・・逃げてばかりでは俺には勝てんぞ?」

左腕の魔力刃を振るいながら言うヒューガに

「逃げてばかり?・・自分の体の事さえ判らんのか?」

俺が立ち上がりながら言うとヒューガは自分の左腕を見て驚愕に目を見開き

「ば・・馬鹿な・・一体何時貴様の攻撃が俺に当たっていた!」

そう怒鳴るヒューガに

「さっき魔力刃をしゃがんで避けた時にな・・貴様の腕を斬らせてもらった」

あの一瞬・・俺はヒューガの隙を付いて奴の左腕を切り裂いたのだ、俺がそう言うとヒューガは

「成る程・・どうやら俺は貴様を見縊っていた様だ・・貴様は間違いなく強者だ・・そんな相手に慢心していた自分が哀れだよ」

そう言うとヒューガの気配がより鋭く研ぎ澄まされていく・・まるで抜き身の刀のようだ・・ヒューガはゆっくりと体制を低くしながら

「ここからは慢心などしない・・俺と同クラス・・いや・・それ以上の相手として認めよう・・行くぞ・・魔道師」

低い独特な構えで言うヒューガに

「掛かって来い・・俺の武器が槍だけではないと言うのを教えてやろう」

逆手のアウスターベンをヒューガに向けると同時にヒューガが突撃してくる

キンキンッ!!!

森林の中を再び金属音が響き渡る・・俺はヒューガの魔力刃を受け流しながら

(早い段階でアンブロジウスを使う方法を考えなければ・・勝機は

ない・・）

正直剣同士の戦いでは俺に勝ち目はない・・早い段階で自分の本来の獲物を使えるようにしなければ・・一応この狭い森林の中でもアンブロジウスを使う方法はある・・だがそれを使うのはまだ早い・・あれは正真正銘奥の手なのだ・・俺は隙を見てヒューガの身体を斬り付けながら

（もう少し・・もう少しで良い・・こいつの動きを鈍らせれば・・その時が・・いや・・その時だけが俺の唯1つの勝機！・・それまでは何としても時間を稼ぐ！！）

待っている愛しい妻と娘の為に・・そしてこの世界で生きる魔道師の為に・・そして龍也との誓いの為に・・俺は負ける訳には行かない！！俺は凄まじい速さで移動し続けるヒューガの動きを見逃さないように・・集中力を高めて行った・・

「はぁ・・はぁ・・魔槍連脚ッ！！」

凄まじい速さで3度回し蹴りを振るう・・それと同時に魔力光が刃となりライガに迫るが

「・・ふん！！」

片手で弾きそのまま向かって来るライガ、

「爆斧無双断ッ！！」

向かって来るライガ目掛けて突撃しそのままの勢いで膝蹴りを叩き込む

ズドンッ！！

「かっは・・」

だが・・私の攻撃は弾かれ逆にライガの丸太のような腕が鳩尾にめり込む・・私が膝を付くとライガは

「貴様の技はどれも守護者の物だな・・形だけ真似しても中身が無い・・そんな物で俺を倒せると思うなよ」

私を見下ろしながら言うライガに

（くそ・・判ってんだよ・・そんな事自分が嫌って程・・）

私が使うのは全て龍也の技であり・・真似しているのは形だけで中身が無い・・魔槍連脚にしても爆斧無双断にしても・・本来の威力の半分も引き出せていない・・そんな事は態々言われなくても判ってる・・それでも私は負ける訳にはいかない・・私は震える足に無理やり力を込め立ち上がると・・

「まだ立つか・・いい加減諦めたらどうだ？・・俺は何も貴様の命を奪いたい訳じゃない・・完膚なきまで叩き潰すような事は・・「閃剣斬ッ！！！」・・無駄だと言うのがわからない様だな・・貴様が何度立とうが・・俺には勝てんぞ！！ガイアブレイカーッ！！」

ドスンッ！！！

鈍い音を立ててライガの拳が顔にめり込む・・そのまま腕を振り切られ私は岩山に叩き付けられた

「ごほっ！！げほげほっ！！」

その凄まじい衝撃に思わず咳き込む・・自分の手の甲で口を拭い・・私は

「血か・・まぁ・・あんだけ殴られれば当然か・・」

そう呟いた・・勝負になったのは最初の方だけだ・・もうその後は良い様にやられている・・悔しいが実力差がありすぎる・・

（くそ・・勝てない・・私じゃ・・あいつに勝てないよ・・龍也ぁ・・）

涙が出た・・自分達に任せろと言って置きながら・・この様・・いや・・ティアナやスバルはもう勝っているかもしれない・・私が弱いだけなのかもしれない・・自分が情けなくて涙を流してると・・私の視界に蒼いリボンが飛び込んでくる・・それは

（龍也が・・私にくれた・・リボン・・）

ずっと昔・・龍也がまだ私達の仲間になったばかりの頃・・私の誕生日に龍也が自分の魔力光と同じ色で作ってくれたリボンだった・・恥かしくて今まで一度も身に付けたことはなかった・・でもお守りとして持ち続けていた・・ずっと龍也が・・私を見守ってくれるような気がして・・私はこれを手放した事はなかった・・私はそれを握り締め・・

（何情けない事考えてんだよ・・龍也が言ってたじゃないか・・私達が勝つのを信じてるって・・それに・・私はこんな所で・・立ち止まってなんか居れないんだよ！！！！）

消えかけていた闘志に再び火がつく・・私は立ち上がりながら

（本当はこんな風に使うんじゃないけどよ・・勘弁してくれよ・・龍也・・）

龍也がくれたリボンを自分の右手首に巻く・・私は魔力を集中させながら

（勝ちたいんじゃない・・私は・・龍也の信頼に応える為に戦うんだ！！）

限界まで収束した極光を全身に纏うとライガは

「完膚なきまでに叩き潰すような事はしたくなかったが・・仕方ない・・覚悟しろ・・」

凄まじい威圧感を放つライガに

「はっ！何言ってやがる！！勝つのは私だ！！」

全身に魔力纏ったままライガに向かって走り出した・・

「砕け散れ！！勇敢な魔道師よ！！」

ライガが豪腕を振るうのが見えた、それは凄まじい速さの筈なのに私にはまるでスローモーションの様に見えた・・私はライガの豪腕

を避けそのまま懐に飛び込んだ

「懐を取れば何とかなると思ったか！！」

迎撃にライガが肘打ちを叩き込んでくる・・だが

スウッ・・

ライガの肘打ちは私に当たる事無く通り過ぎた・・当然だ・・何故なら

「こ・・これは・・ま・・幻！？・・何処だッ！！・・何処に行った！！「こっちだぁッ！！！」・・う・・上か・・がああああッ！！」

私は上空から全力で踵落としをライガの頭に叩き込んだ・・私はライガの懐を取ると同時に極光の光で自分の幻を作り、そのまま飛び上がったのだ・・これは龍也の技じゃない・・ベースは龍也の物だが・・これは私のオリジナル・・その名も・・

「羅刹・・幻影蹴・・」

私はライガから距離を取りながらそう呟き・・振り返った・・頭部の甲冑に皹が入った物のまだ消える気配の無いライガに

「これで・・終わりだと思うな！！喰らえええええッ！！！」

残りの全魔力・・この一撃に込める！！私は自分の右腕に残りの全魔力を収束し・・ライガ目掛けて走り出した

「ぬううううッ！！舐めるな！！エレクーゲル！！！」

頭部を押さえながら電撃を放ってくるライガ・・だが私に避けるという選択肢は無かった・・何故なら

「無駄だあッ!!貫けッ!!!」

右腕に収束した極光を打ち出す・・ライガの放った電撃は極光が形を変えた龍に飲み込まれ消える

「ば・・馬鹿な・・「私の・・勝ちだアアアッ!!!」・・ぐっ・・グアアアアッ!!!」

龍がライガを飲み込むと同時に全力でライガの胴体目掛けアッパーを叩き込んだ・・極光に加え私の最大スピードによる一撃はライガの胴の甲冑を完全に砕き・・凄まじい勢いでライガを吹っ飛ばした・・ライガは背中から岩山に突っ込み姿を消した

「はぁ・・はぁ・・もう無理だぞ・・もう魔力なんか残って無いぞ・・」

正真正銘今の一撃は私の全てを込めた一撃だった・・これでも勝てなかったら・・私の負けだ・・私が岩山を見ていると

ガシャッ!!ガシャッ!!!

岩山の方から歩く音が聞こえた・・まさか・・だ・・駄目だったのか?私がそんな事を考えてるとライガが岩山から姿を見せ・・私を見て

「・・お前の勝・・ち・・だ・・」

ドシャアアッ！！！

倒れこむライガ・・ライガの身体は足の方からゆっくりと粒子化し始めていた・・私はそれを見ながら

「勝った！！やった！！・・私の勝・・あ・・れ・・？」

私は勝ち名乗りをし終える前に・・ゆっくりと後ろに向かって倒れこんだ・・私は

「そうか・・もう限界か・・へへ・・スバル・・お前が勝つのを信じてるぜ・・」

自分の体力の限界点までの極光の維持・・さらに喰らったダメージで私の身体は限界だった・・私は油の切れたロボットのような緩慢な動きで右手首に巻いたリボンを解き、それを胸に抱え込みながら

「へへ・・龍也・・私・・勝った・・ぜ・・」

そう呟き・・私は意識を失った・・・・

キンキン！！！

俺はヒューガの刃を弾きながら

（大分・・動きが鈍ってきたか・・そろそろ勝負に出るか・・）

そんな事を考えていた・・ヒューガの攻撃は確かに素早い・・だが・・奴の攻撃では俺の甲冑を貫通する事は無かった・・俺はヒューガの一撃を受け流し

「ジャケットアーマー・・パージ!!」

強固な甲冑を自ら分離させ、それと同時にアンブロジウスを起動させる・・

「鎧を捨てたか・・スピードで俺に勝つつもりか?・・「ふんっ!!」!!」

俺の一撃はヒューガの肩を貫いた・・驚き目を見開くヒューガに

「自分が最速だと思っていたか?・・悪いな・・上には上が居るんだよ」

俺がアンブロジウスを振りながら言うと

「成る程・・ここからが本気の勝負だな!!俺の全身全霊でお前を倒す!!!」

両腕の刃を振るうヒューガに

「良いだろう・・全力勝負だ!!」

俺はアンブロジウスを掲げヒューガに向かって突撃した・・先程までと違いヒューガと全く同じスピードで何度も自分の獲物をぶつけ合う・・だが徐々にだが俺の攻撃が当たる回数が多くなる・・当然だ・・ヒューガはさっきまでの鈍重な動きに慣れきってしまってい

た・・急に速くなった俺に反応し切れてないのだ・・

（こんな状況でなければ・・もっと・・戦いたかったのだが・・すまない・・）

こういう性格のヒューガともっと戦って居たかったが・・そうも言ってはられない・・俺はヒューガの隙を付いて

「・・喰らえ・・アヴァロンズゲートッ！！」

ズガンズガンッ！！

ヒューガの身体にアンブロジウスを突き刺し、２発のカートリッジの打ち込む

「うぐっ・・ぐあああああああッ！！！」

身体に猛毒の魔力が流れ込み苦悶の声を上げ倒れるヒューガは俺を見て

「き・・貴様・・最初からこれをね・・狙っていたのか・・ひ・・卑怯な・・」

苦しそうに言うヒューガの前にしゃがみ込み

「すまない・・俺も出来る事なら正々堂々貴様と戦いたかった・・だがそうも言ってられないんだ・・恨むなら・・恨んでくれても構わない・・だが俺には恨まれようが・・なさねばならぬ事がある」

俺にはどうしても帰らないとならない場所がある・・だからその為

には・・卑怯だと罵られようが・・勝たねばならないのだ・・俺がそう言うとヒューガは

「そうか・・俺はやはりお前を見誤やっていたようだ・・だが・・恨むつもりは無い・・俺は本気で戦い・・貴様に敗れた・・それだけだ・・」

そう言うとヒューガの目から光が消える・・それと同時にゆっくりと消滅し始めるヒューガを見ながら

「さらばだ・・誇り高い騎士よ・・」

俺はそう言うと騎士甲冑を解除し・・少し離れた所に腰掛け空を見上げた・・

第１１９話に続く

## 第１１８話（後書き）

今回はノーヴェがメインの話でしたので、ゼストさんはあんまり活躍がありませんでしたが・・ゼストさんは後編の戦いでまた出てきますのでそこで挽回できると思いますので、ゼストさんファンの方はその話を楽しみにしていて下さい、次回はティアナとスバルの話です・・中々盛り上がる話になると思うので、次回もどうか宜しくお願いします！！

# 第１１９話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回はスバルとティアナとルキルメスとスーガの戦いになります、どういう展開になるのか楽しみにしてくれると嬉しいです！！それでは今回もどうか宜しくお願いします

# 第１１９話

第１１９話

「タイダル・・ウェーブッ！！」

スーガが拳を海面に叩き付ける、それと同時に轟音を立てながら津波が発生する

「くっ・・」

私は何とか最大スピードでその津波を回避したが

「∞キャノンッ！！！」

即座に砲撃を放ってくる

「プロテクションッ！！」

全力のプロテクションで防ぐ・・さっきからこのやり取りの繰り返しだ・・スーガと海・・この組み合わせは私にとって最悪の組み合わせだった・・スーガの嵐の様な攻撃を防ぎながら

「ハウリングランチャーッ！！！」

次の攻撃までの僅かな隙を突いて砲撃を放つが

「無駄ダ・・」

スーガの前に水の壁が発生してそれを防ぐ、そして

「喰らエッ！！！」

スーガが海面から突き出していた岩を砕き私目掛けて投げつけてくる、スーガの豪腕で投げられた岩はまるで砲弾の様に迫ってくる・・私はこんな攻撃をしてくるとは思っておらず

「っきゃああッ！！」

プロテクション越しにその岩の直撃を喰らい、頭から海に落ちていった・・私は海のそこに向かって沈んでいきながら

（不味い・・このままじゃ何にも出来ないで負ける・・）

スーガの防御を抜く手段を考える・・幸いな事にスーガは追撃に海の中に潜ってこない・・多分海の中では背中の∞キャノンは使えないのだろう・・かと言う私も生身である以上長時間海の中に潜ってなどいれない・・頭をフルに動かし・・どうすれば良いのかを考える・・そして

（初めて使うのが実践か・・失敗出来ないわね・・でも・・龍也さんが教えてくれた魔法・・使いこなしてみせる！！）

私は海の中で魔法の構築を始めた・・それから直ぐ私の周りに蝙蝠のようなビットが４つ浮かぶ・・本来なら１２機出るのだが・・今の私では４機が限界だった・・

（行くわよ・・ここからが・・本当の勝負！！）

私は最大スピードで海の中から脱出して目の前のスーガにクロスミラージュを向ける・・それと同時に４機のビットがスーガを囲うように移動する

「何ダ？・・これハ？・・」

首を傾げるスーガにビットからの魔力弾が命中する・・私はスーガを見ながら

「行くわよ・・スーガ！！ここからが本当の勝負よ！！！」

私はそう言うとスーガに向かって行った・・

「「おおおおッ！！！」」

お互いに雄叫びを上げながら拳を繰り出す、お互いの拳がぶつかり、その度に凄まじい轟音が辺りに響き渡る・・

「やるな・・スバル・・正直ここまでやるとは思ってなかったぞ」

好戦的な笑みを浮かべながら言うルキルメスに

「敵に褒められても・・あんまり嬉しくないよっ！！」

一瞬でルキルメスの懐を取りそのまま拳を繰り出すが・・

「ふん・・そう言うな・・俺は素直にお前の力を認めてるんだからな！」

ルキルメスは私の拳を軽く受け止めながらそう言うと、直ぐに拳を繰り出してくる

「くっ・・」

ガードした物の弾き飛ばされ嫌々距離を取らされてしまう・・私は直ぐにもう1度接近しようとするが

「喰らえッ！！プルートΣレーゲンッ！！」

ドリル回転を繰り返す漆黒の魔力弾を打ち込んでくる

「くっ！！」

極光を完全に足だけに集め駆け出す、移動先移動先に回り込むように降り注ぐ魔力弾

ズドンッ！！

宮殿の壁に螺旋状の穴が開く・・それと同時に・・私の影からルキルメスが飛び出し蹴りを放ってくる

「くっ！！」

腕で防御し反撃に拳を繰り出す・・

「ぬっ・・」

お互い超接近戦で拳を繰り出し合う・・

（前は押し負けてたのに・・今は・・私が押してる？・・・）

前は押し負けていたのに・・今は私の方が深くルキルメスの懐を取っている・・その事が私に教えてくれる・・自分が強くなったという事を

「はあああっ！！」

ルキルメスが左腕の剣を振るってくる・・

（見えるっ！！）

かなりの速さのはずだったのに、ルキルメスの攻撃を私の目は確りと捉えていた・・私はルキルメスの攻撃をしゃがんで避け即座に

「極神撃・・・絶ッ！！！」

左腕に溜め込んでいた極光をゼロ距離で炸裂させる

ドォンッ！！！

砲撃を放ったような轟音が響き渡りそれと同時に

「がはぁっ・・」

ヒュンッ！！！

凄まじい勢いでルキルメスが吹っ飛んでいく・・追撃に走り出すが・
・それより早くルキルメスが体制を立て直して私の後ろに着地する・
・ルキルメスは私を見ながら

「良いぞ・・これでこそ・・戦う意味がある!!・・もっとだ!!
見せてみろ!!お前の全力を!!」

そう言うと凄まじい速度で踏み込んでくるルキルメスの拳を捌きな
がら、時折隙を見て拳を繰り出す・・ルキルメスとスバルの戦いは
まだ始まったばかりだ・・

「行けッ!!!ガンファミリヤ!!」

４機のビットを高速で動かしスーガの死角から魔力弾を打ち込むが

「メイル・・シュトルムッ!!!」

４本の竜巻でその魔力弾を掻き消し直ぐに

「∞キャノン!!」

背中の砲塔から砲撃を放ってくる・・即座に上空に逃げてその砲撃
をかわす・・私はスーガから距離を取りながら

（下位といっても流石はＬＶ４・・隙も何も無いわね・・）

事前のミーティングで知ったが、ライガ、ヒューガ、スーガの３将
軍はＬＶ４だが下位らしく、ダークマスターズに名を連ねていない

が本来ならばルキルメスの配下ではなく自分がトップになれる存在らしい・・私がそんな事を考えながらどうするか考えているとスーガが

「戦闘中に考え事カ？・・随分と甘く見られた物ダナ！！」

スーガは背中の砲塔から出鱈目に砲撃を乱射してくる・・私は凄まじい速度で乱射される砲撃を回避しながら

（どうする？・・ハウリングランチャーじゃ・・あの防御は抜けない・・ガンファミリヤも通用しない・・どうすれば・・スーガを倒せる・・？）

必死で作戦を考える・・自分の持てる最大攻撃はハウリングランチャーかファントムブレイザーだがこの２つの威力は同じくらい・・唯違うのは、広域か一点集中化の違いだけだ・・それにファントムブレイザーの一点集中でもスーガの水のバリヤは抜けない・・それこそなのはさんか龍也さんクラスの砲撃で無ければあのバリヤは抜けない・・ではどうする？・・自分の攻撃ではあの水のバリヤは抜けない・・だがあのバリヤを抜かなければ自分に勝機は無い・・魔力も大分消費しているし・・持久戦になれば自分が負けるのは目に見えていた・・頭をフル回転させて作戦を考えている私の視界にキラリと光が差す・・それは

（龍也さんがくれたペンダント・・）

紫水晶のペンダントだった・・龍也さんにとっては唯のプレゼントだったかもしれない・・だが私にとっては長い間想い続けていた人物からのプレゼントであり・・それは特別な物だった・・私はそれを見た直後思い出した

（そうだ！・・私が龍也さんに教えて貰ったのはガンファミリヤだけじゃない・・まだ1つ残ってた・・でも・・私じゃ扱いきれないかもしれない・・）

龍也さんに教えて貰ったのはガンファミリヤともう1つ・・だがもう1つの方は制御が難しい上に・・訓練でも使った事が無かった・・ガンファミリヤと違い・・一発勝負で使えるような魔法ではない・・だが・・スーガのバリヤを抜けるのはそれしかない・・私はスーガの砲撃を回避しながら

（本当ならこんな博打みたいな事したくないけど・・やるしかないわね・・）

賭けるのは自分の命・・しかも失敗する率の方が高い・・でも私は出来ると思っていた・・龍也さんが信じてくれた・・それで良い・・失敗するわけが無い・・自分になら・・ううん・・自分とクロスミラージュなら出来ると・・

（クロスミラージュ・・最後の攻撃・・行くわよ・・）

手の中のクロスミラージュにそう言うとクロスミラージュは

『マスターになら出来ると信じています・・』

私はその返答に笑みを零しながら一気に上空に向かって飛んだ・・

「コンバットパターン・・α・・行けッ！！ガンファミリヤ！！！」

自分の周りを飛び交うガンファミリヤに指示を出す・・その直後ガ

ンファミリヤの目が赤くり凄まじい速度でスーガに向かっていきながら魔力弾を乱射する・・私はクロスミラージュの手元のレバーを引いてモードの大出力砲モードに切り替え

「ハウリングランチャー・・シュートッ！！！」

全力で砲撃を放つ・・ガンファミリヤから打ち出される１００発近い魔力弾とハウリングランチャー・・スーガはバリヤでは防ぎきれないと判断したのか

「メイル・・シュトルムッ！！！」

さっきは４本だった竜巻を２本にし自分の前に出現させ防ごうとする・・それを見た私は即座にガンファミリヤに新しい指示を出す

「コンバットパターン・・β！！」

今度はガンファミリヤの目が青く光り私の周りと言うかクロスミラージュの砲塔の上下左右に集まり、私の目の前にベルカでもミッドでもない複雑な魔法陣が展開される・・それは紛れも無く龍也さんの物・・私はそれを見て密かに笑みを零しながら詠唱に入る

「次元を破壊せし・・無限力よ・・我が手に集いて全てを撃ちぬけ・・・」

目の前の魔法陣に凄まじい魔力が収束していく・・それと同時に凄まじい脱力感が私を襲う・・

（こ・・こんなに魔力を持っていかれるなんて・・）

残っていた魔力をほぼ全て持って行かれ・・一瞬集中が途切れそうになるが・・必死で意識を集中させ

「アキシオン・・スマッシャー・・」

魔法陣全体が光り輝くと同時に私はクロスミラージュのトリガーを引きながら

「デッドエンドシュートッ!!!」

私の全ての魔力をつぎ込んだ砲撃を放った・・クロスミラージュと４機のガンファミリヤから放たれた砲撃は螺旋を描きながらスーガに迫る・・

「ナッ・・くっ・・∞キャノンッ!!!」

ハウリングランチャーと魔力弾を防ぐ為に発生させていたスーガが驚愕の声を上げる、私の攻撃を防ぐ為に竜巻を発生させた事がスーガにとっては一であり、私にとっては＋になっていた・・慌てて背中の砲塔から砲撃を放つスーガだが直ぐに苦悶の声を上げる

「ウ・・ウグ・・押し負けル・・ッギャアアアアッ!!!!」

アキシオンスマッシャーはスーガの∞キャノンを貫きそのままスーガの身体おも貫いた・・身体に風穴を開けられ断末魔の雄叫びを上げながら海に沈んでいくスーガを見ながら僅かに見える岩山に着地する・・それと同時に倒れこむ・・もう限界だった・・体力も魔力も・・私は空を見上げながら

「スバル・・私は勝ったわよ・・あんたも負けるんじゃ無いわよ・・

」

もう後は私に出来る事は唯1つ・・自分の相棒であるスバルの勝利を信じるだけだった・・

「「おおおおおッ!!!」」

ズドドドドッ!!!

私とルキルメスの拳が何度も何度もぶつかり凄まじい音を立てる・・何度目かの力比べの後・・お互いに地面を蹴り距離を取る・・私は額の汗を拭いながらルキルメスを見る・・右腕の甲冑は罅割れ、左の甲冑はまだ原型を留めているがもうじき砕けるだろう・・だがそれは私も同じで、私の右腕の甲冑は細かい皹だらけでもう2、3撃も放てば使い物にならなくなるだろう・・左腕はもう使い物にならないだろう・・プロテクターは既に拳に残った僅かな物だけでほぼ生身に近い・・生身でルキルメスの強固な甲冑に打撃をするのは正気の沙汰ではない・・私がそんな事を考えているとルキルメスが

「はぁ・・はぁ・・お互い・・そう何度も拳を交える事は出来ないだろう・・この一撃で・・決めてくれる!!」

そう言うと凄まじい魔力を身に纏うルキルメス・・あの技は見覚えがあった・・それを見て私が構えを取るとルキルメスは獰猛な笑みを浮かべ

「行くぞ!!スバル!!ブルート・・ストライクッ!!!」

ルキルメスが漆黒の魔力を纏い突撃してくる

「ふっ！！！」

ルキルメスの拳を辛うじて受け流す・・それと同時に左腕の甲冑は粉々に砕けた・・砕け散る甲冑を見ながら

「おりゃあああッ！！」

がら空きのルキルメスの腹に膝蹴りを叩き込む

「があッ！！」

身体がくの字に曲がったルキルメスから僅かに距離を取り

「これで・・決める！！」

極光を完全に足だけに集め、高速で移動してルキルメスの視界を撹乱しながら

「はああッ！！」

ヒットアンドアウェイで的確にルキルメスに蹴りを当て、ルキルメスの体力を削る・・だが

「こんな・・物で！！」

反撃に拳を繰り出してくる、それを紙一重で避け、一瞬の隙を突いてルキルメスの正面に立った、

「ぬっ・・がぁッ！！！」

驚いたルキルメスの顎を蹴りあげ、宙に浮かせる

「これで止めだッ！！！極神撃・・凶ッ！！」

残りの魔力全てを込めた絶を打ち込もうとした時

「そんな物が通用するかぁッ！！」

ルキルメスが雄叫びと共に体勢を立て直し、私の拳を素手で弾くとそのままの勢いで、ルキルメスの蹴りが腹にめり込む、それと同時に強制的に私の肺から酸素が吐き出される

「が・・かはッ・・」

私は凄まじい勢いで壁に向かって蹴り飛ばされ、そのままの勢いで背中から壁にぶつかった・・そのまま蹲り

「げほっ！！げほっ！！！」

咳き込むと同時に血が飛び出す・・内臓が幾つかやられたかもしれない・・私がそんな事を考えているとルキルメスが大分離れた所に着地し・・そのまま膝を付き

「はぁ・・はぁッ！！・・代償なき勝利は無いというが・・ここまで痛めつけられると思ってなかったぞ・・」

荒い呼吸を整えながら立ち上がったルキルメスの身体は輝だらけで今に消滅しそうだった・・それを見た私は

（こ・・こんな所で・・死ぬ訳には・・）

震える足に力を込め右腕を深く落し構えを取ると

「・・まだ戦うというのか・・その闘志・・見事・・せめてもの情けだ・・戦士として屠ってやろう」

同じ様に構えを取る、ルキルメス・・私はそれを見ながら

（どうする?・・魔力は殆ど限界・・多分もう真覇猛撃烈破は使えない・・どうする・・どうすれば勝てる）

自分の手持ちの技で最強なのは真覇猛撃烈破・・これは間違いが無い・・だが今の自分の魔力では使えない・・ではどうする?・・このままでは負ける・・そうれなれば・・仲間の・・いや・・龍也さんの所に帰れなくなる・・そんなのは嫌だ・・

（・・龍也さんに怒られるかもしれないけど・・これしかない・・）

身体を覆っていた魔力を完全に右腕だけに集める・・この状態でルキルメスの攻撃を受ければその時点でアウト・・私の負けだ

（捨て身・・じゃないけど・・もうこれしかない・・私には・・）

私はそんな事を考えながらルキルメスを見据えた、それを合図だと感じたのか

「行くぞ・・これで・・この戦いに決着をつける!!ブルートストライク!!」

全身に魔力を身に纏い突撃してくる・・私も自身に残る力をすべて振り絞り走り出した

「「おおおおっ！！！」」

ルキルメスの方がまだ体力余裕があったのか、私より早くルキルメスの神速の拳が私の顔目掛けて振るわれる

「くっ！！」

ブシュッ！！！

首を傾けその拳を避けるが・・ルキルメスの拳の風圧で頬が裂け、血が飛び散る・・だが

「ゼロ距離・・取った！！！」

ルキルメスと私の距離は限りなくゼロだ・・私はそのまま右拳を突き出し

「極神撃・・極ッ！！」

自分に残された魔力を全て衝撃に変え打ち込んだ・・

「が・・がああああああッ！！！」

ルキルメスの甲冑を完全に砕き私の拳をルキルメスの身体を貫いた・

・

「はぁ・・はぁ・・勝った・・」

荒い呼吸を整えながら、ルキルメスの胴体から拳を引き抜くと同時に

ピキ・・ピキ・・ガッシャアアアンンン！！！

クリスタルが砕け散る・・それと同時に3色の魔法陣が展開され、
ティア達とルキルメス同様身体が消え始めている3将軍が姿を見せ
る、私が慌ててノーヴェ達に駆け寄ると、ノーヴェは胡坐をかきな
がら

「遅せえよ・・スバル・・何分またせんだよ」

憎まれ口を叩くノーヴェが私同様ボロボロで激戦だったのが一目で
判った・・

「勝ったのね・・信じてたわよ・・スバル・・」

にっこりと微笑むティアを見ながら

「皆も勝ったんだ・・良かった・・」

私がそう呟くと同時に

「「「「キキ・・コロス・・コロス・・」」」」

無数のネクロ達が姿を見せる・・不味い・・今の状況ではあれだけ
の数のネクロを倒すのは無理だ・・自分が負けた時の為にルキルメ
スが用意していたのだろうか・・だが・・私の考えは間違っていた

「エレクーゲル！！」

「∞キャノン！！」

「コバルトサイクロン！！」

「ガイストアーベントッ！！」

ルキルメスと3将軍がボロボロの状態で立ち上がり、ネクロ達を吹き飛ばす

「はぁ・・はぁ・・何をしている！！早くここから逃げろ！！まだ来るぞ！！！」

そう怒鳴るルキルメス、ルキルメスの言葉は本当で次々とＬＶ２、３が姿を見せる

「行くぞ・・ヒューガ・・」

「む・・無論だ・・」

ライガとヒューガが駆け出しネクロ達を押させる・・それを見たティアが

「どうして・・私達を助けるの？・・あれは貴方達を助けに来たんじゃ？」

ルキルメスは鼻を鳴らし

「助け？・・違う・・あれは俺達共々貴様らを殺す為にリベンジャ

ーが送って来た奴らだろうよ・・だが・・あ・・安心しろ・・俺達が貴様をここから逃がして・・や・・る・・スーガッ！！」

「グオオ・・む・・∞キャノン！！」

スーガが壁を打ち抜き外まで続く道を作る

「行ケ・・もう・・長くは持たン・・急ゲ！！！」

そう言うとスーガはヒューガとライガの元に向かった・・ルキルメスは私を見て

「お前との勝負・・楽しかったぞ・・スバル・・出来れば・・こんな形で戦いたくは・・無かった・・行けッ！！！俺達がここを押さえてる間に！！！」

そう怒鳴るルキルメスに私は

「ど・・どうして・・助けてくれるの？」

スーガが空けた穴に向かいながら尋ねるとルキルメスは

「敗者が・・勝者に道を作るのは当然の事だ・・それに・・リベンジャー達のような者に・・お前達を殺させる訳にはいかん・・それだけだ・・」

そう言うとルキルメスは私達に背を向けて走り出した・・私がそれを見てるとゼストさんが

「行くぞ・・スバル・・」

行くぞと声を掛けて来る・・私はそれに頷き・・スーガの空けた穴から外に向かって走り出した・・スバル達が消えた後残されたルキルメス達は

「すまない・・俺は・・あいつに・・スバルに勝てなかった・・」

近付いてくるネクロを見ながら言うと、ライガ達は

「気にするな・・俺達も勝てなかった・・いや・・そもそも・・俺達が勝てる訳が無かった・・死者である俺達と・・今を生きる者・・戦う前から勝敗は決していたのかもしれない・・」

そう言うライガ達を見ながら

「そう・・かもな・・なら・・俺達がする事は・・俺達に勝ったスバル達を護る事だ！」

残り少ない魔力を全身に纏う・・ライガ達も同様だ・・俺達はネクロ達に向かって走り出し

「「「「ウォオオオオッ！！！」」」」

全ての魔力を暴発させた・・それは３００程いたＬＶ３を全て消滅させた・・俺は薄れていく意識の中・・ある光景を見ていた・・それは・・俺だろうか・・人間の姿をした俺とライガ達が、青い鎧の騎士・・何処と無くヘルズに似ている者の下で戦っている光景だった・・俺はそれを見て即座に理解した

「俺の生きていた頃の記憶か・・死の狭間で見るとは・・くく・・面白い・・」

俺とライガ達はずっと・・一緒だった・・戦ってる時も・・生きてる時も・・そして・・死んだ後も・・俺は笑いながら

「俺達は・・これからも・・ずっと・・一緒だな？・・」

「ああ・・永遠にな・・」

「そうですね・・私達は・・魂で結ばれた・・兄弟・・ですから・・」

「俺も・・だ・・ずっと・・お前達と共に・・」

鎧が消え・・完全な人の姿で言うライガ達を見ながら

「そう・・だな・・ずっと・・共に・・い・・よ・・う・・な・・」

俺はそう言うと同時にこの世界から完全に消え去った・・

私達が外に出た直後・・

ズドーンッ！！

宮殿の奥から何かが爆発する音が響き

カラン・・カラン・・

宮殿の奥からルキルメスの肩の甲冑の破片が飛んでくる・・それは私達の前で音も無く消え去った・・それを見たゼストさんは

「自爆する・・つもりだったのか・・」

そう呟くゼストさんを見ながら私とノーヴェとティアは仰向けで倒れこんだ・・限界だった・・魔力も体力も・・私は上空のパンデモニウムを見上げながら

（龍也さん・・私達は勝ちました・・龍也さんも負けないで下さい・・）

声にしたかったが・・もう声も出すことさえ辛く・・心の中で呟くのが限界だった・・私達が空を見上げてるとゼストさんが

「今、ゲンヤに連絡を取った・・もうじき迎えが来るだろう・・俺は行くウェンディ達が心配だからな・・」

そう言って走っていくゼストさんを見ながら私は隣のティアを見て

「ねぇ・・ティア・・龍也さんは勝てるよね？」

そう尋ねるとティアは笑いながら

「勝つに決まってるわよ・・あの人は・・最強の魔道師なんだから」

私はその言葉を聞きながらもう1度パンデモニウムを見上げ・・

（龍也さん・・勝ってくださいね・・信じてますから・・）

心の中でそう呟いた・・

第１２０話に続く

ルキルメス＆３将軍の生前情報

ルキルメス

正体はカイエルの元で戦っていた騎士の１人、騎士でありながら剣ではなく拳で戦う点から「拳聖」と呼ばれる程の武人、高潔で正々堂々とした戦いを好んだ、襲撃事件の時に不意打ちで命を落し、魔王となったジオガディス、ヘルズによってネクロ化したが、生前の記憶が濃く残っており、直ぐに活動することが出来ず、パンデモニウム内で眠りについていた、ライガ、ヒューガ、スーガの３将軍は義兄弟の契りを交わした古くからの仲間であり、それはネクロ化した後も変わる事無く共にあり続けた・・そして最後に生前の記憶を思い出し安らかな表情で死に絶えた・・

ライガ、ヒューガ、スーガ

生前はルキルメスの義兄弟として共に生き、死後もそれは決して変わらず共にあり続けた・・生前の名は不明だが、現在同様、迅雷将などの呼び名で通っていた事から生前は名のある戦士だったのかもしれないが詳しいことは不明

# 第１１９話（後書き）

今回は大分長めでしたね・・ルキルメスの最後はスバル達を庇っての死でした・・ルキルメスを敵のまま退場させるのは嫌で・・こういう形にしましたが・・どうでしたかね？・・賛否両論はあると思いますが・・自分では良い出来だと思ってます、それと生前情報を載せてみましたが・・どうでしょうか？もし必要ないと言う意見があるなら次回からはやめようと思うので、感想で一言欲しいです、それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします！！

# 第１２０話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、最終決戦編の第二の戦いは・・「ヴィータ」さんです！！ヴィータと戦うダークマスターズが誰か楽しみにしてくれると嬉しいです！！それでは本編始まります

# 第１２０話

第１２０話

「グリム様・・魔道師が向かって来てますが・・どう致しましょう？」

頭を下げ尋ねてくるＬＶ３に

「ほおっておけ・・何もしなくてもあっちから来る・・態々動く事も無い・・それよりこっちに来い」

跪いているＬＶ３を呼び寄せる

「何の・・「俺の為死ね」・・何をなさるのですか・・は・・放し・・ッギャアアアッ！！！」

近づいて来たネクロを掴み上げそのまま・・

ゴリ、メキョ・・グシャグシャ・・

宮殿の中に嫌な音が響き渡る・・

「ＬＶ３と言ってもこの程度か・・役にすらたたんな・・」

俺は口の周りの黒い液体を拭いながらそう呟いた・・

「所詮は雑魚か・・ふん・・早く来い魔道師・・カーズを倒したそ

の実力・・確かめさせて貰おうか・・」

俺の宮殿に真っ直ぐに向かってくる魔道師を見ながら、俺はそう呟いた・・

「敵が居ない・・どういう事だ？」

宮殿の前で私は首を傾げた・・ここまで唯の１つの戦闘も無く、魔力を温存出来たのは良いが・・その事が何か罠でも待ってるのだろうか？と私を焦らせる・・私が突入するかどうか迷ってると

「インフィニティボーリングッ！！」

ズドドドッ！！！

凄まじい轟音が宮殿の奥から響いてくる、その事の私は身の危険を感じその場を飛びのいた・・その直後

ズドーンッ！！！

宮殿の壁が崩壊しそこから、全身が機械で出来た竜の様なネクロが姿を見せる・・そのネクロは私を睨みながら

「俺の攻撃を交わすとは中々やるな・・魔道師・・俺の名は破壊竜・・グリム・・我が偉大なる王のために・・貴様に死んで貰おうか」

そう言うとドリルになっている尻尾を私目掛けて振るってくる

「プロテクション！」

反射的に防ぐが・・

ピキピキ・・私のプロテクションに皹が入る・・嘘だろ・・私のプロテクションが・・私がその事に驚いた瞬間

「ぬうううううッ！！！」

グリムが私のプロテクションを粉々に砕き、そのまま尻尾で薙ぎ払いを仕掛けてくる

「う・・うぐっ！！」

腹に直撃で喰らい思いっきり後方に向かって弾き飛ばされる・・このままではビルに頭から突っ込む事になる・・何とかその前に体制を立て直し着地するが

「くっ・・なんて馬鹿力だよ・・」

騎士甲冑越しでも大ダメージを受け、その場に膝を着くと

「所詮はプログラムか・・このまま一気に屠ってやろう・・」

右腕を振りかぶるグリム・・これが決まれば・・私はもう戦えないだろうが・・

「誰がこの程度でくたばるかよッ！！！」

一気にバーストモードに変化させ、その一撃をアイゼンの柄で受け

止めそのまま

「今度はてめえが吹っ飛びな！！」

渾身の力でグリムの胴にアイゼンを叩きつける

「うっ・・うぐっ！！」

機械で出来ている体の重さは伊達ではないのか、３メートル程後退したただけだった・・その間に体勢を立て直し自分の状態を見る

（腹の甲冑に輝・・ダメージはあんまり残ってない・・魔力も大丈夫・・まだまだ行けるぜ）

そう判断しアイゼンを構えると同時に

「デストロイド・・クラッシュッ！！！」

左腕のショベルカーの腕を盾のようにして突っ込んでくるグリム

「おらあああッ！！！」

全力でアイゼンを叩きつけその突撃を防ぐ、だが

「ぬうう！！」

尻尾を振り回し的確に追撃を狙ってくるグリム、私はその一撃を跳躍して回避し

「喰らえ！！」

そのままの勢いでグリムの顔目掛けアイゼンを振るう・・だが

ガーン・・

鈍い音が響き渡る・・私の一撃よりグリムの防御の方が強かったのだ

「うっ・・」

手が痺れ一瞬動きが止まる・・グリムはその隙を見逃さず

「ウオオオッ!!」

その場で一回転して、尻尾をぶつけてくる・・私はその一撃をもろに喰らい・・

「げ・・げほっ!!」

咳き込みながら宮殿の中に向かって弾き飛ばされた・・

「うっ・・げほげほ・・力じゃあっちが上かよ・・」

私は宮殿の中で咳き込みながらそう呟いた・・攻撃力では悔しいが完全にこちらの負け・・スピードは私で・・防御は一部的にグリムが上だが・・全体的に見れば私の方が上だ・・そんな事を考えていると

ドシャッ!ドシャッ!!

音を立ててグリムが宮殿内に姿を見せる・・グリムは私を見下ろして

「まだ生きていたか・・しつこいな・・」

蔑む様に言うグリムに

「けっ・・この程度で鉄槌の騎士様が死ぬかよ!・・勝負は・・こっからだ!!!」

そう言うと私はグリム目掛けてアイゼンを叩きつけた・・

しつこい魔道師だ・・勝ち目は無いと言うのに・・俺はそんな事を考えながら振り下ろされた槌を弾き飛ばし

「ぬんっ!!」

鋭い爪の生えた右手で魔道師を引き裂こうとしたが

「甘いんだよ!!」

体を捻り俺の爪を避けた魔道師は着地同時に

「雷帝降臨ッ!!」

全身と体に稲妻を纏い

「喰らえッ!!!トール・・ハンマーッ!!!」

雷と共に槌を振り下ろした

「ぬううう・・・ぐあああああッ！！！」

電撃が俺の体を駆け巡り思わず後退する・・俺の体は殆どが機械で出来ている・・だから電撃とは相性が悪い・・俺が電撃に弱いと気づいた魔道師は

「成る程・・機械の体は防御力は高いが・・電気には弱いんだな・・そうと判りゃあ・・」

魔道師が頭上で槌を回転させる・・それと同時に槌に魔力が集まり巨大化する・・いやそれだけではなく・・よく見ると電気を纏っているのかバチバチと音を立ててスパークしている・・

「喰らえッ！！ラケーテン・・ブレイカー！！！」

巨大化した槌が凄まじい勢いで俺に迫る

「ぬうう・・ショベルアーム！！」

防御の為に左腕を振るうが

バチバチ！！！

「っギャアアアアアッ！！！」

電撃が体を駆け巡り凄まじい激痛が俺を襲う・・その痛みで俺の動きが一瞬鈍る・・その瞬間

「ぶっとべッ！！！」

がら空きの胴目掛け巨大化したままの槌が振るわれた・・

バキャン・・

「ご・・ごほっ・・」

胴の鎧を完全に砕かれその痛みに俺が蹲ると

「悪いけどな・・てめえの所の王とやらの願いを叶えさせる訳には行かないんだよ・・このまま・・てめえをぶっ潰すぜ・・」

そう言って大きく槌を振りかぶる魔道師に

「・・そうはいかん・・俺は・・あの方の・・願いを叶える為にここに居るんだっ！！！」

力の入らない足に魔力を通し無理やり動いてそのままの勢いで体当たりを仕掛ける

「なっ！ぐあああああっ！！」

がら空きの胴体に全力でぶつかる、ボールの様に吹っ飛んでいく魔道師に

「これで終わりだと思うな！！デストロイド・・クラッシュッ！！！」

左腕を魔道師目掛けて振り下ろす

「プロテクション・・っきゃあああっ！！」

プロテクションごと宮殿の床に叩きつけ

「貴様の負けだ・・消えろ！！グラビティブレスッ！！」

全魔力を床に向けて放出した

「う・・うわあああああっ！！」

プロテクションごと姿の見えなくなった魔道師・・俺はそれを見て勝利を確信していた・・

うっ・・わ・・私は・・体を動かそうとするがまったく動く気配が無い・・それに周りも見えない・・それでも動こうとして

「うっ・・うぐっ！！」

左わき腹に激痛が走る・・私はわき腹を押さえながら

「肋骨が何本か持ってかれたか・・くそ・・あの馬鹿力やろうが」

悪態をつきながら、瓦礫の中から体を動かし脱出する・・辺りを見回す・・

「ここは宮殿の地下・・と言うより・・市街の地下か・・宮殿をぶ

ち抜いてここまで来ちまったか・・」

痛むわき腹を押さえながら足元に落ちていたアイゼンを拾い上げ

「肋骨に皹くらいで泣き言は言ってられねぇな・・」

飛行魔法を発動させ地下から脱出して、宮殿に戻ると

「ほう・・まだ生きていたか・・本当にしつこいな」

蔑むように言うグリムに

「鉄槌の騎士様がこの程度死ぬかよ、来いよ・・決着をつけてやるぜ」

手招きするとグリムはにやりと笑い、一気に間合いを詰めて左腕を振り下ろしてくる、アイゼンでその一撃を受け止めるが

「う・・うぐっ・・」

踏ん張りが利かず後退すると、グリムは

「貴様・・怪我をしてるな!!」

私のわき腹目掛けて尻尾を振るう

「くっ・・」

全力でその一撃を防ごうとするが、防ぐ事が出来ずわき腹に丸太の様なグリムの尻尾がめり込む

メキョメキョ

わき腹が悲鳴を上げる、それと同時に蹲り

「うっ・・げほっ！！げほげほっ！！」

激しく咳き込む・・その痛みに私は

（か・・完全に折れたか・・）

自分のわき腹が完全に折れた事を感じてると

「くっく・・その体では俺の攻撃を防ぐ事も出来んだろう！！」

残虐な笑みを浮かべ尻尾で私を打ち据えようとするグリム、その攻撃を転がって回避しながら

（情けない！情けない！！情けない！！兄貴に会わす顔がねぇ！！）

自分に対する情けない思いで一杯になっていると、グリムの攻撃が一時止む・・何事かと思いそちらを見ると

「ぬうう・・」

自分が砕いた瓦礫のせいで思うように動けなくなっていた・・私はその隙を突いて立ち上がろうとして

「う・・うぐっ・・」

折れた肋骨が痛み片膝立ちになる、それを見たグリムは

「喰らえっ！！！デストロイド・・ブレイク！！」

尻尾に魔力を集めた強力な一撃を放ってくる

「う・・うあああああっ！！！」

私は避ける事も防ぐ事も出来ずに横殴りの一撃を受け、私は宮殿の壁に背中から突っ込み・・意識を失った・・

「ここは・・？」

私は気がついたら何も無い青い空間に立っていた・・この感覚はクレアの世界に良く似ていた・・私がどうしてここに居るのか判らず首を傾げると

「ようやく会えましたね・・鉄槌の騎士さん」

穏やかな声が聞こえ振り返るとそこには、青い甲冑に双剣を持った女が立っていた

「お前は・・風の騎士か？」

そう尋ねると女はゆっくりと頷き

「私は風の騎士、リューナ・・消えた騎士・・ですが・・貴女の中で再び王に会えた者です・・そしてもう逝かねばならぬ者」

そう呟くリューナは私に自分の持っていた剣を差し出しながら

「どうぞ・・持って行って下さい・・これにはクレアにも渡してない私の本当の力が封印されています・・貴女なら使えるでしょう」

私はそれを受け取った・・すると剣は溶ける様に消え魔力の粒子になると私の体に吸い込まれた・・それを見たリューナは

「消え行く守護者・・しかし決して悲しむ事なかれ・・彼の者は守護者にして神なる者、決して滅びる事無かれ・・この事を忘れないでくださいね・・それじゃあ・・さようなら・・もう2度と会う事は無いでしょう・・」

歌う様にそういったリューナは最後にもう一度微笑むとその姿を消した・・いや・・私がその世界から姿を消した・・

「死んだか・・」

壁にめり込み姿の見えない魔道師・・どうやら死んだらしい・・俺は興味を失い

「さてと・・後は魔力を頂くか・・」

死体から魔力を奪い取ろうと思い壁に近づいた直後

バキャンッ!!!

壁からあの魔道師が持っていた槌が飛んできて俺の体にめり込む

「ば・・馬鹿な・・死んだ筈だ！！」

信じられなくてそう叫ぶと

「誰が・・この程度で死ぬかよ・・」

壁から、蒼い甲冑からは柔らかな光が放たれ、背中の翼は一回り巨大化し、白銀の髪に変化した魔道師が姿を見せる・・魔道師は俺を見て

「てめえは悲しい奴だ・・壊す事しか出来ない・・だから・・私がてめえを本来居る所に送ってやるよ！！アイゼン！！カートリッジロード！！！」

魔道師の手にした槌からカートリッジが飛び出し、その姿を変えていく・・

「迅雷・・覚醒・・」

魔道師がそう言うと槌に紅と青の魔力が集まりその姿をさらに巨大な物にする・・それにより宮殿の天井は完全に砕け、俺の視界にパンデモニウムが写る・・魔道師はそれを大きく振りかぶり

「行くぜ・・グリム・・フルムーンメテオ・・・インパクトッ！！！」

俺目掛けて振り下ろした

「・・ま・・負けて・・・堪るかあああああっ！！！グラビティブレスッ！！」

最後の魔力を振り絞り砲撃を放つが

「う・・うぐ・・お・・押し負ける・・」

魔力の密度が違いすぎる・・俺の砲撃が槌に呑まれ消えていく

「あばよ・・私の勝ちだあああっ!!!」

俺が最後に見たのは俺を押し潰し消し飛ばそうとする、丸で月のような魔力の塊だった・・

『あれ?・・お前どうしたんだ?』

俺の視界に小さな子供が姿を見せる

『可哀想に・・1人なんだな・・僕の所へおいで』

『くう・・くう・・』

「あれは・・俺だ・・」

本能的に判った・・その小さな青い狼が自分だと・・俺はその子供の傍に行った・・

『おいで、ルゥ!!』

『バウッ!!』

場所が変わる・・何処かの城の中庭のような場所で俺と子供が駆け

回る・・そこに

『ジオガディス様、ルゥと遊ぶのは良いですが・・今は勉強の時間です、早く行きましょう』

金髪の男が来て子供を・・ジオガディス様を連れて行ってしまう・・そこでまた場所が変わる・・

『どけ!!この畜生が!!!』

『グルルルルッ!!!』

俺の前に血塗れの斧を持った騎士が立つ、俺は何度も切り裂かれながらその騎士の咽を引き裂き絶命させたが・・

『クウウウ・・・』

そこで力尽き、倒れかける・・そこに

『ルゥ!!ルゥ!!死ぬな!!死んじゃ駄目だ!!』

黒い甲冑のジオガディス様が来て、俺の傷を治そうとするが・・もう間に合わない・・俺は最後の力で

『くう・・』

ジオガディス様の頬を舐め・・そのまま息絶えた・・死んだ俺はその後もずっとジオガディス様の傍に居続けた・・そして・・国が滅んだ時・・狂気の書の力でネクロになったんだ・・でも動物である俺は不完全で・・すぐに消えてしまうような弱いネクロだった・・

それでもジオガディス様のために戦いたくて・・進化を繰り返し・・
グリムとなった・・俺は消えていく意識の中

（で・・出来る事なら・・もう一度・・ジオガディス様の・・え・・
が・・お・・が・・見た・・かった・・）

そう呟き、俺は魔力の塊に消し飛ばされ・・二度目の死を迎えた・・

「やった・・勝った・・う・・うぐっ・・」

姿の見えなくなったグリム、そして砕け散ったクリスタルの破片・・
そを見て勝ちを確信して喜んだ直後、わき腹に激痛が走り蹲る

「へへ・・魔力が増えても・・体の痛みは治らないか・・」

リューナがくれた物・・それはリューナの魔力だった・・その魔力
は凄まじく一時的に私の能力を爆発的に跳ね上げたが、その効果が
切れた今・・私は禄に動けない状態だった・・私は自分が砕いた天
井から見えるパンデモニウムを見ながら

「兄貴・・私は勝ったぜ・・だから・・兄貴も負けんなよ・・んで・
・絶対に帰ってきてくれよ・・私達の所に・・」

そう呟きながら通信魔法で

「・・ヴぁ・・ヴァイスか・・悪いけど・・迎えに・・来てくれ・・
もう・・動けねぇんだよ・・」

回復魔法を使う魔力も残ってないのでヴァイスにそう言うと

「すぐ行きます！！動かないで下さいね！！」

慌てて言うヴァイスに

「馬鹿やろ・・・動けねぇ・・つってんだろ・・とにかく・・早く来てくれよ・・」

そう言って通信を切った、私は手の中で輝だらけのアイゼンに

「よく頑張ったな・・アイゼン・・」

リューナの魔力は膨大すぎてアイゼンが耐える事が出来なかったのだ・・それでも最後まで持ってくれたアイゼンにそう言うと

チカッ・・チカッ・・

弱弱しくコアを光らせるアイゼン・・アイゼンが何を言いたいか理解した私は

「そうだな・・鉄槌の騎士と・・鉄の伯爵・・グラーフアイゼンに・・砕けない・・物はねぇよな・・」

そう呟くとアイゼンのコアから光が消えた・・私は待機状態に戻ったアイゼンを握り締めながら

「おつかれ・・アイゼン・・私も・・少し・・休むよ・・」

私はそう呟くと意識を失った・・消えていく意識の中私はリューナ

が言っていた

『消え行く守護者・・しかし決して悲しむ事なかれ・・彼の者は守護者にして神なる者、決して滅びる事無かれ・・』

その予言めいた言葉を思い出していた・・私がその言葉の意味を知るのは・・この戦いが終わってから・・1年後の事だった・・

第121話に続く

生前情報

グリム

正体は幼い時のジオガディスに飼われていた狼の一種、名はルゥ、極めて珍しい種族で動物でありながらリンカーコアを持つ種族、幼い頃はペットとして飼われ、大人になった後はジオガディスと共に戦場を駆けた、最後はジオガディスを狙ってきた騎士と相打ちになり死亡・・死後もジオガディスの傍に居た、だがジオガディスが人外になった時それに引き摺られる形でネクロ化した、動物であったせいか極めて不安定だったが、生前のジオガディスに対する忠誠心のおかげかLV4まで進化しダークマスターズに名を連ねるほど強く強大な存在になった・・ヴィータのフルムーンインパクトで消滅していく中・・過去の事を思い出し・・最後にもう一度笑顔を見たかった・・と呟き消滅した・・

# 第１２０話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！如何でしたでしょうか？・・一話完結ようにしたので少し短かったかもしれないですね・・しかし何時もの様に2話構成できるほどイベントが無いのでこういう形にしました、基本的にはどの話もこういう感じで進んでいく予定です・・あくまで予定なので何とも言えないですけどね・・それでは次回の更新もどうかよろしくお願いします！！次回は「エース」「戦乙女」の2人がメインです！！それでは次回もどうかお楽しみに！！・・・・楽しみにしてくれてる人・・居ますよね？

# 第１２１話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は前回の予告通り「なのは」「フェイト」さんのコンビの話です、この最強クラスの２人と戦う敵は？誰でしょう・・かなり凶悪な奴なのでどんな戦いになるのか楽しみにしてくれると嬉しいです、それでは本編始まります！！

# 第１２１話

第１２１話

くく・・予定通りだ・・俺はモニターを見ながらそう呟いた・・俺の所に向かって来ている魔道師・・エースと死神・・俺の魔力反応で２人掛りで来たのだろうが・・好都合だ・・俺の能力を十分に扱う事が出来る・・だが

「敵を弱らせるのは戦いの基本・・ここまで来るまで魔力が持つかな？」

モニターにはデクス、ＬＶ３と戦う２人の姿がある・・２人とも既に報告にあった姿に変化している、俺はそれを見ながら

「凄まじいな・・だが・・魔力の減った状態で俺に勝てるかな？くく・・はははははっ！！！」

俺はモニターを見ながら魔道師が来るのを待っていた・・

「も・・もう居ない？」

隣で尋ねてくるなのはに

「うん・・大丈夫みたい・・もうネクロもデクスも居ないよ・・」

私はそう返事を返した、このエリアに足を踏み入れてからずっと私達を追い回して来ていたネクロ、デクスの集団はさっきのなのはのスターライトで完全に消滅したようで姿は無い・・私は瓦礫に背中を預けながら

「だいぶ・・消耗した？」

隣のなのはにそう尋ねると、なのはは笑いながら

「全然・・そりゃ少しは疲れたけど・・これくらいなら問題無いよ、エクストリームジハードだって1発しか撃ってないしね」

なのはの最強の切り札エクストリームジハードはなのはの魔力でも3発が限界という正真正銘の切り札・・私達の作戦では私がある程度ダークマスターズを弱らせ、なのはが倒すという感じだ、上手くいけば魔力を大分温存できる・・いざって言う時皆の援護に回れる・・私となのはで話し合って決めた事だ、敵はダークマスターズだけではないのだから・・

「なのは・・もう行ける？」

座り込んでいるなのはに尋ねると、なのはは直ぐに立ち上がり

「大丈夫、行けるよ」

私はその言葉に頷き、宮殿の中に足を踏み入れた・・長い通路の先には大きなフロアがあり、その中心に赤黒いクリスタルがある・・あれを壊せれば私達の勝ちなのだが・・そんな簡単な話ではない・・何故なら

「待っていたぞ・・魔道師・・俺はここの宮の支配者・・憤怒のバラガルト・・貴様らに死を与える者だ」

赤いローブに身を隠したネクロ、バラガルトが私達の前に立ち塞がった・・こいつは確か六課を襲ったネクロの1人で、ヴィヴィオを傷つけた奴だ、私となのはが睨みつけると、バラガルトは

「ふはははは!!良いぞ!!!その憎悪、その殺気・・良い!!実に良い!!!なんと心地良い事か!!!・・だが足りん・・もっとだ!!もっと憎しみの炎を燃やせ!!俺を殺して見せろ!!」

狂ったように笑うバラガルトは右腕を私となのはに向け

「燃え尽きろ!!ケイオスフレアッ!!!」

赤黒い炎を打ち出してきた、それは凄まじい勢いで私達に迫るが

「ウィンド・・ガーディアン!!」

マントを振るい風の防壁でその炎を弾き飛ばす、それと同時になのはが

「アクセル・・シューターッ!!!」

バラガルトの腕と目を狙ってアクセルシューターを放つ

「ふん・・こんな物・・」

サイドステップで回避したバラガルトの一瞬の隙を突いて

「はああッ！！」

フラッシュムーブで懐を取り切り掛る

ズバッ！！

私の魔力刃はバラガルトの体に深く傷をつける

「う・・うぐっ・・」

一瞬動きの鈍るバラガルトになのはが

「ディバイン・・・バスターッ！！！！」

砲撃を放ちバラガルトを吹っ飛ばす・・これが私となのはの新しい戦闘スタイル・・私がスピードで敵を翻弄してその隙になのはが砲撃の準備をする・・最も基本だが・・最も強力なスタイルだ・・私は目の前で動きの鈍るバラガルト目掛けて魔力刃を再び振り下ろした・・

強い・・本当に強いな・・俺は魔力弾を喰らいながらそんな事を考えていた・・死神とエースのコンビは本当に強い・・だが・・予想以上ではない・・俺の予測の範囲内だ

「エルン・・ストンウェルッ！！！」

凄まじい速さで迫ってくる魔力刃を左腕で受け止めるが

「う・・うぐっ・・」

完全に威力を殺しきれず後方に向かって弾き飛ばされる・・それと同時に

「アクセル・・シューターッ！！！」

クリスタルからマシンガンのような魔力弾が放たれ、俺を宙に打ち上げる

「こ・・この！！」

体勢を立て直そうとした直後背中に何かが当たる感触がする・・振り返るとそこには左腕に電気の球を持った死神の姿が、死神はそのまま左腕を俺に押し当て

「ライトニング・・フォース！！！」

魔法を発動させた

「う・・ウグオオオッ！！！」

俺は悲鳴と共に宮殿の床に叩きつけられた・・まだか・・まだ・・あの攻撃をしてこないのか・・？俺が床から体を起こした直後、眩いまでの魔力光が俺の視界に飛び込んでくる

「これでとどめ・・エクストリーム・・ジハードッ！！！」

凄まじい砲撃を俺に迫る・・俺はそれを見て笑いながら

「それを・・待っていたぞッ！！！・・っギャアアッ！！！」

直撃を喰らい吹っ飛ばされるが完全にその砲撃に呑まれる前に宙に逃れ、回避する・・俺はエースと死神を見ながら

「くっくっくっ・・漸くだ・・ようやく下準備が整った・・」

俺が笑いながら言うと死神が

「負け惜しみ？・・そんな体で何が出来ると言うの？」

そう言う死神に俺は

「こんな体じゃないと使えないんでね・・喰らえ・・おれが俺が受けた痛みだ！！！インフェルノ・ペイン・フレイムッ！！！！」

俺は両腕を掲げ黒炎の球体を作り出し、死神とエース目掛けて投げつけた

「「プロテクション！！！」」

2人が同時にプロテクションを発動させ防ごうとするが

「そんな物で・・俺の憎悪が止められるかああッ！！！」

インフェルノ・ペイン・フレイムは敵への憎悪・・そして自分が受けたダメージは全て凝縮した、言わば怨みの炎・・防ぎきれる物ではない・・

「「ッ・・・きゃあああッ！！」」

インフェルノ・ペイン・フレイムを喰らい吹っ飛んでいく2人を見ながら、来ていたローブを脱ぐ・・ローブの下から異形の左腕が姿を見せる・・それだけではない・・獣そのものの醜い姿・・自分の本来の姿に戻り

「このまま・・捻りつぶしてくれる！！」

地面を蹴り吹っ飛んでいる2人に追いつき

「スラッシュネイルッ！！！」

異形の左腕で死神を切り裂き、そのままの勢いでエースの腹に

「ハンマーナックル！！」

右腕を叩きつける

「「ごほっ！！」」

地面に叩きつけられ体が跳ね上がるエースと死神に

「ふんっ！！！」

回し蹴りを叩き込み壁目掛けて蹴り飛ばす

「「か・・かはっ・・」」

背中から壁に突っ込み苦しむエースと死神に左腕を向け

「骨も残さず燃え尽きるが良い・・フレイムインフェルノッ！！！」

鉄さえも燃やし尽くす俺の最強の炎を打ち込んだ・・

「「ッ！！！」」

回避も防御も間に合わず炎に呑まれるエースと死神・・炎から出てこないエースと死神・・どうやら死んだようだ・・俺はその炎を見ながら

「これで終わりだ・・人間如きが俺に勝てるなどと思い上がるからだ・・」

そう言い放ち王座に再び腰掛けようとした時

「スターライト・・ブレイカーッ！！！」

凄まじい桜色の砲撃が俺の背中を抉った・・俺は振り返り目を見開いた

「馬鹿な・・俺の炎に耐えれる訳が・・」

無傷とは言わないがまだちゃんと立っている2人にそう言うと死神は焼け焦げた自分のマントを見ながら

「忘れたの？・・風は私の味方なんだよ」

そうか・・風で俺の炎の威力を弱めたようだ・・だが・・

「風が味方だろうと・・誰が味方だろうと！貴様らは俺には勝てない！！絶望の中で死んでゆけ！！！」

俺は左腕を振りかざし、エースと死神に向かって行った・・

不味いね・・私はレイジングハートを杖代わりにして立ちながら向かってくるバラガルトを睨んだ・・さっきの炎・・あれは本当に危なかった・・ぎりぎりでプロテクションで私とフェイトちゃんを包み込んで、プロテクションの中にウィンドガーディアンを発生させて炎を防いだが・・実際の所ダメージは凄い・・立ってるのがやっとだ・・

「私の方がダメージが低いから・・私が行くよ」

ふらつきながら向かっていくフェイトちゃんだが

「遅いわ！！！」

バラガルトの豪腕がフェイトちゃんを捕らえる

「げ・・げほっ！！」

咳き込みながら吹っ飛んでいくフェイトちゃんを見たバラガルトが残虐そうな笑みを浮かべ

「なるほど・・立ってるがやっとだった訳か・・ふん・・面白い事

を思いついたぞ」

両腕を掲げ頭上に炎の球体を作り出したバラガルトは

「スピットフレイム！！」

球体から小さな炎を打ち出し、私とフェイトちゃんを追い回す・・
このまま行けばいずれ力尽き、最後にあの頭上の炎を投げつけられ
私とフェイトちゃんは死んでしまうだろう・・私がどうすればこの
状況を打破できるか考えていると、フェイトちゃんが念話で

（なのは！エクストリームジハードまだ撃てる？）

そう尋ねてくるフェイトちゃんに

（後一発なら・・ぎりぎり・・でも本来の威力は出ないよ？）

受けたダメージのせいで本来の威力は出ないと言うとフェイトちゃ
んは

（それで良いよ・・エクストリームジハードを私に撃ってくれる？）

その信じられない言葉に私が絶句してると

（エクストリームジハードの魔力を自分に上乗せして体当たりする・
・それならバラガルトを倒せる）

その説明を聞いた私は慌てて

（無茶だよ！！そんなことしたら死んじゃうよ！！）

私が無茶だと言うとフェイトちゃんは

（死ぬ？・・私が・・？はは・・大丈夫だよ・・私は死なない・・
龍也に無事に帰って来いって言われてるんだもん・・だから・・私
は死なない！！！）

その言葉に私は

（判ったよ・・でも・・私も無茶するからね・・フェイトちゃんだ
けに負担は掛けさせないんだから）

そう言って笑うとフェイトちゃんは

（私は止めないよ・・言っても無駄だからね・・それじゃあ・・行
くよ！！）

フェイトちゃんが地面を蹴ってバラガルトの上空に浮かぶ、私はフ
ェイトちゃんの背中目掛け

「エクストリーム・・ジハードッ！！！」

残り少ない魔力をかき集めて砲撃を放った・・私の放った砲撃はフ
ェイトちゃんの背中に当たる、それを見たバラガルトは

「ふはは！！仲間割れか・・愚かだな！！」

狂ったように笑うバラガルトだったが・・フェイトちゃんを見て

「ば・・馬鹿な・・何が起きてると言うのだ！！」

悲鳴にも似た声を出す、私の放った砲撃はフェイトちゃんの全身を包み込んでいた・・それはまるで龍の様な形になっていた・・私も驚いているとフェイトちゃんが

「アルフォースモードの最後の力・・他人の魔力を自分に上乗せして発動する・・オーバーライト・・これが・・私となのはの力だ！！」

魔力で出来た龍が羽ばたくそれと同時にフェイトちゃんは魔力刃をバラガルトに向け

「ドラゴン・・インパルスッ！！！」

凄まじい勢いでバラガルトに体当たりを仕掛けた

「ぬうう・・そんな物・・俺には無力だ！！インフェルノ・・「スターライトブレイカーッ！！！」・・ぬうう・・エース！！！」

バラガルトが炎を打ち出そうとした直後私が最後の力を振り絞ってはなった砲撃が、バラガルトの姿勢を崩す・・私はその場に倒れこみながら

「さ・・最後のスターライト・・フェイトちゃん後は任せたよ！！」

フォトンモードが解除され普通のバリアジャケットになる・・その直後

「ウグオオオッ！！！！」

バラガルトの断末魔の声が宮殿の中に響き渡る・・それと同時にクリスタルに輝が走り砕け散る・・

「はぁ・・はぁ・・も・・もう限界・・」

私の前に倒れこむ、フェイトちゃん・・アルフォースモードは解除され私と同じようにバリアジャケット姿になっている・・私はフェイトちゃんに

「終わったね・・はぁ・・疲れたね・・」

そう言うとフェイトちゃんは

「そうだね・・魔力が残ってたら助けに行こうと思ったんだけど・・無理だね・・」

くすくすと笑うフェイトちゃんに

「フェイちゃん・・髪・・焦げちゃってるね・・」

フェイトちゃんの長い金髪が焦げてしまっていてそう言うと

「うーん・・また伸ばすよ・・龍也が可愛いって言ってくれた髪形だし・・」

フェイトちゃんが髪を伸ばしてる理由・・それは昔龍也さんに褒められたからで絶対に髪を短くしないとフェイトちゃんは決めているのだ・・私がそんな事を考えてるとフェイトちゃんが

「でも・・なのはの髪も焦げてるよ?・・それに髪留めが・・」

自分の髪を見る・・確かに焦げてしまっている・・まてよ・・こっちの髪は・・私は自分の髪を持ち上げ

「にゃあああ！！龍也さんに貰った髪留めがあああ！！！燃えてなくなってる！！！！」

昔龍也さんに貰った髪留めが燃えてなくなっている・・よく見るとほんの僅かだけ残っている髪留めになりの果てを見て絶叫すると、フェイトちゃんが

「また・・龍也に作って貰えば？」

「ううう・・そうする・・」

ううう・・もっと早く気がつけば・・もう2、3発無理してでもスターライト打ち込んどけば良かった・・私がそんな事を考えてるとフェイトちゃんが

「ボロボロだけど・・死んでない・・龍也との約束は護れたね」

にっこりと微笑みながら言うフェイトちゃんに

「そうだね・・約束破ると龍也さんきっと怒るからね、良かったよ約束を護れて」

笑いながら返事を返し、そのまま昔話をしてると急におかしくなってきて、我慢できなくって2人で大声で笑いながら

「あはは・・よく考えれば・・私達って龍也の事ばかり考えてるよ

ね」

「うん・・そうだね・・どうすれば好きになって貰えるとかね？」

あははと笑いながら空の上に見える、パンデモニウムを見ながら2人同時に

「「龍也さん（龍也）絶対に勝って帰ってきてくださいね！！！」」

ここからでは届かないだろうが、大声でそう言うと私とフェイトちゃんはパンデモニウムを見上げながら、救援要請を出し・・意識を失った・・

「何だここは？」

俺は何も無いくらい空間に立っていた・・昔の事を思い出そうとするが思い出せずそこに立っていると

ドスッ！！！

「が・・がはっ！！」

突然背後から剣が飛んできて俺を貫く・・俺が驚きながら振り返るとそこには黒い門のような物があり、そこから剣が伸びていた、門についた顔が淡々と

「汝・・大罪を犯した者・・汝に魂の休息など無い・・永遠に苦しみ・・懺悔せよ・・」

ずるずると門の中に引きずり込まれながら

「嫌だ！放せ！！俺は・・俺はアアアアアッ！！！」

ゴーン・・

バラガルトを飲み込んだ門はゆっくりと閉じ・・音も無く消滅した・・

第１２２話に続く

生前情報

バラガルト

ジオガディスの居た時代の人間ではなく、クロノの父・・クライドが生きていた時代の人間で、広域次元犯罪者として管理局に追われていた魔道師、極めてレアな自分の受けた痛みを敵に反射するというネクロの時と同じ能力を持っており、それを利用して殺人を繰り返していたが、不意打ちで捕まり収監される前に、舌を噛み切り自殺した・・こういった犯罪者は強力なネクロになる事が多く、ヘルズによってネクロ化、生前の能力を持ったネクロへと変化し、その能力で魔道師を殺し続けてＬＶ４まで進化した、フェイトに倒された後は生前に罪を犯していたネクロが落ちる世界に落ち、永遠の苦しみを受け続けている・・

# 第１２１話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです、えーと・・デジモン知ってる人なら判りますよね?オーバーライト・・まぁ・・全然違うんですけどね・・なんとなくオーバーライトかな?と思ったので名前はオーバーライトにしました、なので違うだろ!!という突っ込みは無視します、さて次回は「2人の姫を持つ騎士」です・・ばればれですね～対戦者も判ると思います、そして次回は少しアニメネタを使いますので、ご理解ください、それでは次回もどうかよろしくお願いします

# 第１２２話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回の主役は「エリオ、キャロ、ルーテシア」です対戦者は「ランレ・デルーパ」です!!雷使い同士の戦いがどうなるか楽しみにしてくれると嬉しいです、それとアニメネタは判る人なら判ると思う、あの名作アニメです・・判る人が居るといいのですが・・それでは本編始まります

# 第１２２話

第１２２話

「ふう・・キャロ、ルーちゃ・・ごほん！ルーテシア大丈夫？」

最後のＬＶ２を消滅させ、額の汗を拭いながら、後ろの２人に尋ねる、ルーちゃんはルーテシアと呼ばないと怒るので途中で言い直したが・・キャロは頭の上にフリードを乗せたまま

「私は大丈夫だよ、エリオ君が護ってくれてるから」

にっこりと微笑むキャロと

「・・いい加減・・名前で呼んで・・」

笑いながらも目が笑ってない、ルーちゃん・・早くルーテシアと自然に呼べるようにならないと・・僕はそんな事を考えながら宮殿を見上げた・・予想ではここにはランレ・デルーパが居る筈、ここまではエグザとデュナスで来たが、ここから先はグランドで無ければ駄目だろう・・ランレ・デルーパの攻撃に耐えれるのはグランドかインペリアルしかない・・インペリアルは時間制限はあるので必然的にグランドを使う事になる、ちらりとルーちゃんを見ると

「判ってる・・」

直ぐに僕に魔力を送ってくれる・・白銀の鎧から漆黒の騎士甲冑に変化していく・・両手に具現化したディメンジョンブレードを握り

締めながら

「行こう・・準備は良い？」

2人にそう尋ねると同時に頷く、僕はそれを確認してから宮殿に足を踏み入れた・・

まだか・・まだ来ないのか、俺は王座に腰掛けながら小僧が来るのを待っていた・・俺の甲冑を傷つけたあいつだけはこの手で殺すと決めていた・・俺が全身に稲妻を纏いながら王座に腰掛けていると

「ここは・・」

小僧と2人組みの小娘が見える・・小娘たちは正直どうでも良い・・邪魔はさせない為にちゃんと敵も用意してある・・俺の存在に気づいて女の前に立つ小僧に

「勘違いするなよ小僧!!俺の敵はお前だけだ!!他の奴には興味など無い!!」

鉤爪を振るいながら王座から立ち上がり

「俺は紫電の王、ランレ・デルーパ!!貴様を殺す者だ!!!」

身に纏っていた稲妻で宮殿の天井を破壊しながら言うと、小僧の後ろに居た女が俺を睨む、俺は地面に尻尾を叩きつけ

「貴様らの相手はこいつだ!!来いヘラクリオス!!」

「グオオッ！！！」

床を砕き、黄金色のカブト虫のようなデクスが姿を見せる、召喚師であるあの2人の相手用にヴェノムに作らせたデクスだ、俺はヘラクリオスを指差しながら

「貴様らにはヴォルテール、とか言う召喚獣が居たな？・・そいつを呼ぶが良い・・そこの紫色の髪の小娘はここに居ろ・・貴様が居ないと・・小僧は力を発揮出来ないんだろう？」

俺がそう言うと小僧は

「誰がお前の言う事・・「エリオ君・・大丈夫・・あのデクスは私とヴォルテールで何とかするよ」キャロ？」

小僧の言葉を遮って言うキャロとか言う魔道師は

「ヴォルテールにはここは狭すぎる・・外で戦うよ？」

はっきりと敵意を秘めた瞳でヘラクリオスを見る小娘に

「良いだろう・・ヘラクリオス・・行け」

俺の指示で外に向かって飛んでいくヘラクリオス、それを確認してから外に向かおうとする小娘に

「キャロ！無茶だよ・・1人じゃ危険だ」

考え直すように言う小僧に小娘は

「エリオ君とキャロちゃんは、あいつの相手をしないと・・だからヘラクリオスは私に任せて、大丈夫直ぐに倒して帰ってくるから」

笑いながら言う小娘に根負けしたのか、小僧は

「判ったよ・・でも・・怪我とかしないでね？」

心配そうに言う小僧に小娘は

「それはこっちの台詞・・ルーちゃん・・エリオ君をお願いね」

「大丈夫・・キャロも・・気をつけて」

紫色の髪の小娘に頷き、もう1人の小娘は宮殿の外の向かって行った・・

「さて・・そろそろ・・始めようか・・小僧」

鉤爪に魔力を集めながら言うと

「勝つのは僕です・・お前を倒して・・この街を覆ってる決壊を破壊します」

剣を向けながら言う小僧に

「面白い！！やってみろ！！！」

俺は背中の翼を羽ばたかせ一気に肉薄し、そのままの勢いで

「シザーアームズ！！！」

魔力が篭った鉤爪を振り下ろしたが

「ふっ！」

左腕の剣で爪を弾き飛ばし、そのままの勢いで

「はあッ！！」

右腕の剣で俺の胴を穿とうとする小僧に

「甘いわ！！」

尻尾でその一撃を弾き飛ばし、右腕で殴りかかる

ズン！

「うぐっ」

確かに手応えと共に拳が小僧の腹にめり込むが

（硬いな・・）

小僧の体を覆っている騎士甲冑の強度は凄まじいらしく、そこまで

ダメージは与えられなかったようで

「ディメンジョンシザーッ！！」

圧縮した魔力刃を飛ばしてくる

「ちっ・・」

避けようよとしたが反応が少しだけ遅れ、肩の甲冑が切り飛ばされる・・俺はそれを見ながら

「良いぞ！！前より強くなっている！！それでこそ戦う意味がある！！喰らえギガブラスターッ！！！」

角から電撃を打ち出す

「！！」

反射的にディメンジョンブレードをクロスさせ受け止める小僧・・当然だ後ろに小娘が居るのだからこの防御しか出来ないのは判りきっていた、俺は即座に

「シザーアームズ・・トライデントッ！！」

両手の鉤爪と頭の角から、魔力刃を打ち込む

「ぐうっ！」

がら空きの腹に魔力刃が命中し、後ろに吹っ飛ぶ小僧に

「もう一発喰らえ！シザーアームズ！！」

全力で爪を振り下ろした

「うわあああッ！！！」

悲鳴と共に壁に向かって吹っ飛んでいく小僧・・このまま行けば壁に当たって大ダメージを負う事になるだろう・・だが

「キュクウウウッ!!!!」

「エリオ君!!」

飛龍と先程の小娘が飛び込んで来て小僧を抱きとめる・・馬鹿な・・ヘラクリオスがこんなに早く・・いや・・まだヘラクリオスの気配を感じる・・どういう事だ?・・俺が訳がわからず混乱してると

「グッギャアアアッ!!!」

宮殿の壁をぶち抜いてヘラクリオスが飛んでくる・・壁を突き破ったのは

「グルルル・・」

言うのならば龍人・・あれがヴォルテール・・何という魔力だ・・まさかあれ程とは・・強いとは聞いていたがヘラクリオスの2倍近い魔力を持っているとは・・俺がヴォルテールに驚いていると

「良いんですか?・・ぼーっとしていて?」

挑発するような口調の小僧の身体を覆う甲冑はまた姿を変えていた・・漆黒の騎士甲冑に両腕には銃の様な物が装備され、左腕には今までの槍とは違い斬る事に特化していると思われる槍に・・その背には力強い真紅の翼が現れていた・・あれは確か・・

「ヴィルヘリアを屠った・・形態か・・良いぞ・・素晴らしい魔力だ！！」

俺と同等かそれ以上の魔力を感じ笑いながら言う・・あれほどの魔力なら王もきっと喜ぶ・・

「これで良い・・俺か貴様・・どちらがより上なのかこれで判る！！！」

俺はそう言うと小僧に向かって行った・・そうだ・・俺は何よりも強くならねばならない・・強く・・誰よりも強く・・そして全てを壊す・・俺から■を奪った者達を殺すために・・

「シザーアームズ！！」

振り下ろされた爪を片手で受け止める

「な・・なにっ！？」

止められると思っていなかったのか動揺するランレ・デルーパの胴にストラーダで切りつける

「はああッ！！！」

ザシュッ！！

鈍い音共に切り裂かれるランレ・デルーパ・・グランドでもデュナスでもこんな芸当は出来ない・・キャロとルーテシアが居て始めて出来るのだ・・僕は吹っ飛んでいくランレ・デルーパを見ながら、キャロに感謝していた・・キャロの方も大変だったのは一目でわかる・・ヴォルテールを制御するのは凄まじく大変だと聞いていた・・でもヴォルテールを制御したまま・インペリアルの発動に力を貸してくれているキャロ・・それにグランド・・インペリアルと続いて魔力を消費し続けているルーテシアに

（僕は・・2人が居てくれて良かった・・僕は・・2人が居るから・・頑張れる・・）

心の中でそう呟き、吹っ飛んで行ったランレ・デルーパの方を見ていると

「喰らえ!!シャイン・オブ・ビーッ!!!」

灼熱の魔力波が煙の中から飛んでくる・・キャロとルーテシアでは無く僕だけを狙っている・・ランレ・デルーパの2人に興味が無いと言うのは本当の事の様だ・・僕はその魔力波を回避しながら、徐々に間合いをつめ

「でえええいッ!!!」

全力で拳を叩き込もうとしたが

「そんな物・・誰が喰らうか!!!」

羽で自分の身体を浮かし距離をとったランレ・デルーパは

「こい、我が配下どもよ!!」

両手を掲げそう叫ぶと

「「「「グアアアッ!!」」」」

無数の昆虫型ネクロが姿を見せる、1体1体は小さいが数が多い・・

僕がその数に驚いてると

「くっくっく・・どうやって避ける?・・行け!!ビーサイクロンッ!!!」

ランレ・デルーパが僕に爪を向けると同時に、その虫達は僕に向かって飛んできた・・大技のポジトロンレーザーでは全てを撃退する事は不可能だと判断し、僕は

(こんなの使ったらお父さんが怒ると思うけど・・仕方ない・・)

後でお父さんに怒られるのを覚悟して、翼で自分の身体を覆い、そのまま虫の大軍に向かって走り出した

「「「「ギイイッ」」」」

気味の悪い声で鳴く昆虫達、目掛けて

「・・行けッ!!!スパイラル・・レーザーッ!!!」

身体を覆っていた翼を一気に広げる、それと同時に無数の魔力波が放たれ、向かって来ていた昆虫達を焼き払う・・僕はそのままランレ・デルーパに向かっていきながら

（き・・きつい・・やっぱり・・無茶があったかな～）

スパイラルレーザー・・と言えば聞こえは良いが実際は唯の魔力波なのだ、では何故唯の魔力波であんな事を出来るかと言うと、それはインペリアルの装甲と翼のおかげだ、翼で身体を覆い隠すと同時に魔力波を翼の中で放つ、放たれた魔力波は甲冑に当たり跳ね返る、それが翼に当たり更に乱反射する・・それを繰り返し翼を広げると同時に敵目掛けて放つのだ、威力はあるし射程も広い・・極めて優秀な技だ・・自分に掛かる負担を無視出来ればの話だが・・僕はそのまま走っていきながら

「ダブルドラモンクローッ！！」

両腕のポジトロンレーザーが反転して鋭い爪が現れる、ストラーダは背中に背負い、ランレ・デルーパ目掛けて

「でえええいッ！！！」

魔力を込めたドラモンクローを振り下ろす

「ぬううッ！！舐めるな！！」

ドラモンクローを自分の爪で迎撃する、やはりミドルレンジではランレ・デルーパの方が上だ・・だがそれは判りきっている事だ・・では何故不利なミドルレンジでの攻撃に出たか？・・・それは

「掛かりましたね・・爪を出せば・・ミドルレンジにお前を釘付けに出来ると思ってましたよ・・」

ドラモンクローが引っ込み、そのまま砲塔が姿を見せる、僕は両腕をランレ・デルーパの腹に押し当てる

「ば・・こんな距離で・・」

何をするのか判ったランレ・デルーパが慌て始める、僕はにやりと笑いながら

「僕にはキャロとルーテシアの加護がある・・でも・・お前はどうかな?ランレデルーパ?・・吹っ飛べ!!メガデスッ!!!」

ポジトロンレーザーの強化版・・威力的にはなのはさんのスターライトと同威力の僕に使える最高の砲撃を全力で打ち込んだ・・

「ッ・・ギャアアッ!!!!」

ズドン・・

メガデスがランレ・デルーパの身体を完全に穿ち吹き飛ばす・・僕は勝利を確信して、キャロとルーテシアの元に戻ったが・・

「舐めるなと・・言ったはずだああッ!!!!」

「ギャオオッ!!!」

ランレ・デルーパとヘラクリオスが雄叫びを上げながら姿を見せる・・身体から黒い体液を流したランレ・デルーパはヘラクリオスの頭部に乗り

「これが俺の最大攻撃・・貴様らに耐えれるかあああッ!?」

バチバチと帯電し始めるランレ・デルーパ・・今からでは間に合わない・・どうすれば？・・どうすれば良いのか判らず僕が混乱していると

「エリオ君こっち！！」

「エリオッ！」

キャロとルーテシアに手を引かれ、僕はヴォルテールの方に向かった

「ご・・ゴハアア・・」

ヴォルテールは大分消耗してるのか疲れてるように見えた・・キャロとルーテシアは僕の手を引いたまま、ヴォルテールの頭に乗って

「エリオ君・・あいつの真似できる？」

そう尋ねてくるキャロに

「そ・・そうか・・その手が・・」

自分の力で無理なら誰かの力を借りれば良い・・そしてここにはヴォルテールが居る・・ヴォルテールの力を借りれば良い・・僕はキャロとルーテシアの前に立って

「上手く良くか判らない・・もしかすると圧し負けるかも・・危ないから・・「「私達はここに居る」」・・キャロ・・ルーテシア・・うん！！判った！！！」

危ないから離れるように言おうとしたが、ここに居るという2人に頷き僕はヴォルテールと魔力を同調させ始めた・・

（凄い・・魔力だ・・僕1人なら・・呑み込まれてる・・）

流石と言うべきか凄まじい魔力を持つヴォルテール・・自分では制御出来ないが、キャロとルーテシアの力を借りれば!!

「行くぞ・・ランレ・デルーパ!!!」

ヴォルテールの前に超巨大な魔方陣が展開される、それと同時にランレ・デルーパの方にも魔方陣が展開される

「最大攻撃で勝負だ!!小僧!!」

「ギガホーン・・バスタアアッ!!!」

「ギガ・・デスゥゥッ!!!!」

僕とランレ・デルーパの最大砲撃が同時に放たれた・・

「「グオオオオオッ!!」」

ヘラクリオスの角からは電撃を纏った砲撃が・・ヴォルテールの口からは僕とキャロとルーテシアの魔力が螺旋状に纏められた砲撃が放たれていた・・

「ッ・・く・・くそが・・」

完全に互角の威力だったが、ランレ・デルーパが忌々しげにそう呟

くと、均衡が破れギガデスが徐々にヘラクリオスの方に向かっていき・・

「「ッ・・ギャアアアアアッ！！！！」」

螺旋状の砲撃に呑まれ、ランレ・デルーパとヘラクリオスは宮殿ごと完全に消し飛んだ・・

（何だ・・これは？）

俺は消えていく意識の中、俺ではない誰かの記憶を見ていた

「ごほ・・ごほ・・お兄ちゃん・・」

ベッドで咳き込む少女・・その横でりんごの皮をむく青年・・判る・・あれは俺だと・・俺は

「ほら・・皮がむけた・・食べな」

一口大に切ったりんごを皿に乗せて、少女に手渡した俺は壁に掛けてあったマントと剣を身に付け

「俺はこれから戦にいかんといかん・・良いか・・ここで大人しくしてるんだぞ？」

「うん・・判ってるよ・・お兄ちゃん・・気をつけてね」

笑いながら言う少女に見送られ、俺は家を後にした・・そこで景色が変わる・・

「はぁ・・はぁ・・」

俺は自分の家に向かって走っていた・・戦は勝った・・だが・・負けた国が退却していく方向は自分の家の方だった・・俺が慌てて戻ると・・そこには・・

「・・ちッ!!追っ手か!!!」

ボロボロの甲冑を身に纏った男・・確か・・将軍だった筈だが・・俺の目はそいつではなく・・その下のモノを見ていた

「・・・・・」

血を流し絶命してる、妹だったモノ・・それを見た俺は完全に切れた・・

「貴様アアアッ!!!!」

俺は怒りに身を任せその男に斬りかかった・・そこで再び景色が変わる・・

「ううううう・・・■■■・・」

雨の降る中俺は妹だったモノを抱きしめたまま涙を流していた・・

その時

「憎いですか？」

誰かの声を聞いて顔を上げると、そこには青い甲冑を身に纏った騎士が浮いていた・・騎士は俺に

「憎いでしょう？・・貴方の大切な物を奪った者が・・」

その言葉に頷くと騎士は手を差し出しながら

「まずはその子を埋葬しましょう・・話はそれからです」

騎士の手を借り、俺は妹の墓を作った・・

「貴方は世界が憎い・・争いだけの世界が・・私達が作ろうとしてるのは争いの無い世界・・その為には一度世界を破壊しなければいけません・・その為に貴方の力を貸してくれませんか？」

手を差し伸べてくる騎士の腕を掴み

「良いぞ・・俺の力など幾らでも貸してやる！！！だから・・俺に力を寄越せ！！世界を壊せるだけの力を！！！」

「良いでしょう・・貴方に力を・・」

俺はその時から人である事を止めた・・俺がネクロと化した後、俺に残ったのは憎悪だけ・・世界が憎い・・全てが憎い・・世界を壊したかった・・その為に力を欲した・・

「俺は・・争いの無い世界が欲しかった・・それだけだったのに・・」

人の姿になった俺がそう呟くと、後ろから誰かが俺の手を引く・・
振り返るとそこには

「待ってたよ・・お兄ちゃん・・一緒に逝こう?」

笑いながら言う妹に

「あ・・あああ・・逝こう・・これからは・・ずっと・・一緒だな・・」

俺はそう言うと同時に完全に意識を失った・・

「お・・終わった・・」

完全に消し飛んだ宮殿を見ながら僕はへたり込んだ・・ヴォルテールはもう姿を維持出来なかったのか・・ギガデスの放射が終わると同時に消えた・・落ちていく中僕は慌ててキャロとルーテシアを抱きかかえて着地したのだ・・僕が空を見上げながら言うと

「終わったね・・エリオ君」

「お疲れ様、エリオ」

笑いながら僕の両隣に腰掛ける2人に

「うん・・終わったね・・2人もお疲れ様」

笑いながら言うと2人はそのまま、僕の肩に頭を預ける・・僕が慌ててると

「少しだけ・・このままで」

「私も・・」

少しだけこのままで居たいと言うキャロとルーテシアに

「うん・・判ったよ・・僕の・・僕だけの・・大切な・・お姫様・・」

聞かれたくなかったのでぼそりと呟いた・・これからも僕はキャロとルーテシアを護って行こう・・僕を支えてくれた大切な人達だから・・絶対に失いたく無いから・・

第１２３話に続く

生前情報

ランレ・デルーパ

正体は神王の時代の騒乱の時代を駆けた騎士、病気で苦しんでいる妹を助ける為に騎士となり、裕福ではないが幸せに暮らしていた、ある日自分の妹を敗戦国の将軍に殺され、世界を憎み、力を欲した・・その時にヘルズによってネクロ化した、ネクロ化した後は力を貪欲に欲し、世界を憎んだ・・その憎悪と力を求める心のせいか、人型では無く異形型のＬＶ４へと進化した、エリオ、ヴォルテールの合体攻撃で消滅していく中、妹の魂と再会し、そのまま妹と共に姿

を消した・・バラガルトとは違い、悲劇がきっかけだったせいか、
地獄に落ちる事は無かった・・

# 第１２２話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです・・どうでしたでしょうか？エリオは好きですがあんまり詳しくないのでこういう風になってしまいました・・少し所かかなり自信が無いです・・ですので感想を貰えるととても安心します、今回のアニメネタは判りましたでしょうか？・・自分はかなり好きなアニメなんですけど・・古いので判ってくれる人が居ると嬉しいです、それでは次回の更新もどうかよろしくお願いします

# 第１２３話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回のネクロは・・猛毒こと「ヴェノム」です！！対戦者は「元狂気の天才科学者」です！！どんな戦いになるのか楽しみにしてくれると嬉しいです！！

それでは本編始まります！！

# 第１２３話

第１２３話

「くっく・・良いです・・予定通りですよ」

私はモニターを見ながら呟いた、モニターには

「獣王拳ッ！！」

科学者がこちらに向かって来ている・・私は笑みを浮かべながら

「ああ・・良いですね・・私の願いが叶いますね・・くっく・・早くここに来なさい・・ジェイル・スカリエッティ！！」

私はそう言うと外していたマスクを身に付けた・・くっく・・貴方は果たして自分の罪に耐えられますか・・？

「全く・・こいつらはいったい何なんだ？」

私は向かって来ていたネクロでもデクスでも無い、異形を切り裂きながら呟いた・・このエリアに着てから断続的に襲ってくるこの異形・・ネクロでもデクスでも無いこいつは一体？・・暫くその場で考え込むが

「・・考えるのは後だ・・今は私の成すべき事をするか・・」

私はそう呟き目の前の悪趣味な宮殿の中に足を踏み入れた・・

「ようこそ、ジェイル・スカリエッティ・・待っていましたよ」

赤いマントにマスク・・ヴェノムが大袈裟に頭を下げながら言う、
私は腰の鞘に締まっていた男魂を抜き放ちながら

「話は良い、早く貴様を倒して娘を助けに行きたいのだよ」

私がそう言うとヴェノムは笑いながら

「くく・・ですが話は聞くべきですよ？・・ねぇ？・・魔道師さん」

ヴェノムが指を鳴らすと、1人の魔道師が姿を見せる・・怯える魔道師の首をヴェノムが掴み

「貴方に素晴らしい力を・・」

「やめ・・あああああッ！！！」

ヴェノムが魔道師の首筋に噛み付き、血を吸う

「なっ！」

私が驚いているとヴェノムは無造作に魔道師を投げ捨てる・・

「貴様・・何がしたい？」

血を吸って殺したヴェノムを睨むと、ヴェノムは

「直ぐにわかりますよ・・直ぐにね・・」

そう笑うヴェノムに

「悪いが・・そんな時間は無い！！」

踏み込んでヴェノムを切り裂こうとした時

「ガアアアッ！！」

倒れていた魔道師が立ち上がり私の拳を掴む

「な・・何？・・・」

死んだ筈の魔道師が動いた事に驚いていると・・魔道師は血の涙を流しながら

「こ・・殺して・・ガアア・・やだ・・やだ・・化け物・・に・・グウゥゥゥ・・成りたくない・・！！・・早くッ！！」

魔道師の腕が異形の物に変わっていた・・それは先程まで私を襲ってきていた異形の腕と同じ物だった・・

「早くゥ！！ワタシが・・ワタシじゃ・・ナクナル前にいいいいいッ！！！」

血の涙を流す魔道師に

「すまない・・」

謝ってからその心臓に男魂を突き刺す・・それと同時に魔道師に起きていた変化は収まった・・魔道師はゆっくりと倒れこみながら消滅した・・私が俯いてるとパチパチと手の叩く音がする・・

「良い茶番でした、中々楽しめましたよ」

にやにやと笑うヴェノムに

「お前達は・・一体何処まで!!命を弄べば気が済むんだ!!!」

私が怒鳴るとヴェノムは

「弄ぶ？・・違いますよ・・これは神に近づくための実験・・「黙れぇッ!!獅子羅王漸ッ!!」・・ぐっ・・!!」

これ以上こいつの声を聞きたくなかった・・だから一気に踏み込んでヴェノムを両断する・・

「はぁ・・はぁっ!!・・こんなに気分が悪いのは久しぶりだ・・」

私がそう言って振り返ると後ろから

「突然とは酷いですねぇ・・」

その声に驚き振り返る、馬鹿な・・ヴェノムは私が両断した筈・・

私は振り返り目を見開いた・・

「くっく・・この程度で私は死にませんよ・・兄弟・・」

ゆっくりと再生していくヴェノムの顔のマスクは無く素顔が曝け出

されていた・・私はよろよろと後退しながら

「ば・・馬鹿な・・」

私が震える声で呟くとヴェノムは

「良いですね・・良い反応ですね・・そんなに信じられませんか？・・私の顔が？」

馬鹿にするようなヴェノムの顔は私と同じ顔だった・・

ヴェノム・・それは極めて特殊な生まれをしたネクロ・・ネクロと最高評議会によって造られた、最初の改造ネクロだった・・勿論最初からではない・・後天的に改造された・・失敗作のジェイルのクローン・・それがヴェノムだった・・

「くく・・私は貴方・・貴方は私・・貴方だってプロジェクトFを作ったではないですか？・・貴方も同じですよ・・命を弄んだ者としてね」

自身の身体を再生しながら言うと

「違う！私とお前は違う！！私は好きでやったんじゃない！！」

否定するスカリエッティに

「否定しますか・・良いですよ別に・・貴方が認めようが否定しよ

うが・・変わりませんから・・私が貴方を殺すという事に!!」

そう・・これで良い・・私はスカリエッティを殺す・・自信の真の姿で!!

「う・・ウオオオッ!!!」

身体が作り変えられていく・・自身の本来の姿へと・・

「な・・くっ・・・カオス!」

私が進化している間にスカリエッティの身体を覆う騎士甲冑が変化していく・・白と黒の混合の騎士甲冑へと私はそれを見ながら

(例え・・お前がどれほどの力を得ようが・・私には勝てないですよ・・スカリエッティ・・)

私は心の中で蔑むように呟いた・・それと同時に進化が終わった・・醜い獣の下半身と硬い外殻の上半身を持つ・・異形の姿へと・・

「くふふふ・・醜いでしょう?・・これが貴方の正体ですよ・・醜く・・そして心の奥底では破壊を望んでいる貴方の心の現われですよ」

ネクロの姿は心が影響する・・つまりこの醜い姿こそがスカリエッティの真の姿なのだ・・私がそう言うと

「何度も言うようだが・・私とお前は違う・・その事を証明してやろう・・」

剣を構えるスカリエッティに

「違う？・・私とお前が・・？・・良い加減しろよ・・認めろ！！
この姿こそガアア・・キサマのココロだと！！」

私が消えていく・・破壊の衝動に飲まれていく・・

（それでも良いですね・・いっそ・・理性も知性も失って・・ただ
の化け物になってもね・・）

それが私が呟いた、最後の理性のある言葉だった・・

「ガアアッ！！！」

出鱈目に拳を叩きつける、目の前でちょこちょこと動くこの物体を
叩き潰したい・・これを叩き潰せばさぞ気分がいいだろう・・

「タイラントサベージッ！！！」

右腕を振り回す

「うぐっ！！」

私の右腕はスカリエッティを捕らえ吹っ飛ばす・・追撃に

「ハウリング・・ブラッドオオオッ！！！」

腹部の顔が開き赤い衝撃波を打ち出す

「くっ・・喰らえダークロアッ！！！」

その攻撃を避けたスカリエッティはそのまま黒い砲撃を打ち込んでくる

「ムダダアッ！！！」

その砲撃を左腕で弾き飛ばし、そのまま殴りつける

「グオッ！！」

人間がアリを踏み潰すように・・私の拳はスカリエッティを捕らえ宮殿の床にめり込ませる、それでも

「まだだッ！！まだ・・終わらんぞ！！」

血を流しながら立ち上がるスカリエッティに

「イイカゲンニクタバレッ！！！」

無性に腹が立ち出鱈目に拳を叩きつけようとするが・・私の拳は届かない・・考えれば判る事だが、鈍重な攻撃では素早いスカリエッティを捉える事は出来ない・・だが今のヴェノムはそんな簡単な事でさえ判らなくなっていた・・

「ガアアッ！！シネ！！シネ！！！シネエエエッ！！！！ワタシノマエカラキエロ！！キエロ！！キエロオオッ！！！！」

もう何が何だか判らない・・私は出鱈目に攻撃を繰り出しながら、考える事をやめた・・

悲しい力だ・・私はヴェノムの攻撃を捌きながらそう感じていた・・
醜い異形の姿のヴェノムはこう言った

「醜く・・そして心の奥底では破壊を望んでいる貴方の心の現われ」

だと・・私はバンチョーブレイドでヴェノムの腕を切り飛ばしながら

（そうかもしれない・・もし・・ウーノや・・龍也と出会わなければ・・私はこいつのようになっていたかもしれない・・）

私を変えてくれたウーノ、私を理解して共感してくれた龍也・・彼らが居なければ私はきっとジオガディスに協力していたかもしれない・・だが

「私とお前は違う!!私には私を支えてくれた者がいる!私は過去を完全に乗り越えるッ!!」

消せない罪・・逃げるつもりは無い・・いずれ私にも裁きが来るだろう・・それでいいと私は思っているのだから、私がそう言うとヴェノムは

「ダマレ!ダマレ!!ダマレエエエッ!!!!ウルサイ!!ウルサイ!!!シネ!!シネ!!!シネエエエッ!!!!!」

出鱈目に拳を振り回すヴェノム、私はその攻撃を避けながら徐々にヴェノムの懐に近づいていく・・

「クオオオッ!!ブラッドレインッ!!!!」

下半身の毛が鋭い針の様になり降り注ぐ

「ウオオオッ！！！」

致命傷になる物だけ弾き進んでいく・・近づかなければ何も出来ないのだから・・

「クルナ！クルナ！！クルナアアアッ！！！カオスフレイムッ！！！」

獣の口から吐き出された炎に

「はあああああッ！！！」

バンチョーブレイドで両断し進む・・あと少し・・あと少しで私の間合いだ・・そう思った直後

「ガアアッ！！ヴェノムインフューズッ！！！」

獣の口から紫色の煙が吐き出された・・それは宮殿の床を溶かしながら迫ってくる・・

「腐食ガスか！！」

腐食ガスだと判断し・・一瞬避けるかと考えたが・・私は一歩踏み出し自ら腐食ガスの中に飛び込んだ・・

「クハハハ！！シンダ！！シンダ！！シンダアアッ！！！コレデ！！ワタシハワタシニイイィッ！！！」

狂ったように笑うヴェノム・・いや・・もう狂っているのかもしれない・・私はそんな事を考えながら煙の中から飛び出した・・

「ば・・バカナアアッ!!!」

驚くヴェノム・・私は横目でカオスを見る・・所々溶けているが・・それでもまだデバイスとして動いてくれていた・・私は

（ありがとう・・カオス・・もう少しだけ・・頑張ってくれ・・）

機能停止までもう時間の問題だろう・・融合型デバイスには致命的な欠点がある・・2つのデバイスコアを1つにしている為、極端にエネルギーを消耗してしまうのだ・・だが・・

「後一太刀で良い!!私に力を貸してくれ!!カートリッジロード!!!」

両方の篭手から空の薬莢が飛び出し私の魔力を強化する、それと同時に跳躍し

「覇王両断剣ッ!!!」

私の全魔力をつぎ込んだ魔力刃を振り下ろした・・

「ガアア・・ガアアアアッ!!!!」

ズル・・ズルルルッ・・・

ヴェノムの身体がずれる・・覇王両断剣はヴェノムを両断していた・

・

「グオオ・・スカリエッティィッ！！」

ヴェノムの身体が爆発するように消える・・これで終わりかと思ったが・・まだ魔力反応を感じる・・私がヴェノムが倒れた所に向かうとそこには

「ヒュゥ・・ヒュゥ・・」

掠れた呼吸を繰り返すヴェノムが倒れていた・・辛うじて生きているが・・下半身が無く・・今にも消滅しそうなヴェノムに近づくと

「泣いて・・いるのか？」

黒い涙がヴェノムの瞳から溢れていた・・ヴェノムは泣きながら

「どうして・・お前だけが全てを手に入れたんだ・・友も・・家族も・・安らぎも・・同じ・・私なのに・・どうして・・？お前だけが・・」

泣きながらヴェノムは虚空へと手を伸ばし

「私も欲しかった・・理解してくれる・・守護者の様な友が・・だから・・ハーティーンを作った・・」

独白を続けるヴェノムの横に方膝をついて座る・・もうヴェノムは何も出来ない・・なら最期くらい看取ってやるのが当然だろう・・

「私も家族が欲しかった・・だから・・魔道師を襲った・・でも・・

あれは・・違った・・」

ヴェノムはゆっくりと消えていきながら呟く・・

「あそこは暗かった・・あそこは寂しかった・・永遠の闇・・日毎に・・消えていく・・私と同じ顔の者が・・それでも・・いつかは助けが来ると思っていた・・」

ヴェノムは実験施設の事を言っているのだと思った・・そう思った直後ヴェノムが私の腕を掴んで身体を起こす

「どうして!?・・どうしてお前だけが全てを手にしたんだ!!友も家族も!!同じ私なのに!!どうして!!どうしてだ!!答えろスカリエッティ!!!」

泣きながら叫ぶヴェノムに

「ついてなかったんだ・・お前は・・」

私がそう言うとヴェノムは狂ったように笑いながら

「ついてなかった?・・たったそれだけ・・?・・くく・・ははは!!そうか・・そうか・・私は・・結局・・安らぎも・・家族も得れないのだな・・ううう・・」

声を押し殺して泣くヴェノムに

「そう決め付けるのは早い・・私と一緒に来い・・」

自分の胸を指差しながら言うと、何が言いたいのか理解したヴェノ

ムは

「くく・・ははははッ！！馬鹿ですか！！！私がお前を乗っ取るとは考えないのですか！！」

そう言うヴェノムに

「そうなったらそうなった時だ・・だが・・お前には屈しない自信がある・・そして・・私の中で見ろ・・安らぎと家族の温もりを」

ヴェノムの目を見て言うとヴェノムは呆れたように溜息を吐き

「全く・・同じ私なのに・・こうも違うとは・・ですが・・その提案・・受けさせて貰いますよ・・」

そう言って目を閉じるヴェノムは弾ける様に粒子になる・・それをダークドラアームで吸収する

「くっ・・くううう・・」

胸を押さえて蹲る・・自分が消えてしまいそうな感覚に囚われるが・・それは直ぐに消える・・

「魔力が・・体の痛みも無くなってる・・」

全快とは言わないが尽きていた魔力も身体の痛みもある程度回復している・・どうやらヴェノムを吸収した時に回復したようだ・・わたしはゆっくりと立ち上がりながら

「ヴェノム・・お前が得たかった安らぎと家族の温もりをお前にも

与えてやる・・だから・・少しだけ私に力を貸してくれ・・」

そう呟くと脳裏に

（やれやれ・・人使いが荒い私ですね・・まぁ・・良いですがね・・）

一瞬馬鹿にしたような、ヴェノムに声を聞いた気がした・・それと同時に背中から黒い魔力で出来た翼が現れる・・

「ありがとう・・もう1人の私・・行くか・・大切な家族を助けに・・」

市街で戦っているチンク達を助ける為に私は空を舞う・・私に道を教えてくれた者を決して失わないために・・

第１２４話に続く

生前情報

ヴェノム

スカリエッティのクローンの1人、ネクロの実験により生きたままネクロへと変化した、深い知性と理性はスカリエッティと同じだがネクロ化した事で歪み歪な方向へと進んだ。

研究所の中で見た、スカリエッティの家族や龍也の存在を知り、自分も家族と親友を欲した・・それ故にデクスや魔道師の強制ネクロ化実験をしたが、それはヴェノムの望んだ形ではなかった・・それ故により狂気への道を進んだ、スカリエッティを倒し自分だけがスカリエッティに成ろうとしたが、スカリエッティに敗北、消えてい

く中スカリエッティの提案でスカリエッティと融合した・・自意識を失っているが、家族の温もりそして親友を得れたヴェノムの魂は長い間求め続けた安らぎを得る事が出来た、また全く関係ないが、スカリエッティはヴェノムとの融合で魔力と打たれ強さが桁違いに上昇した・・

# 第１２３話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです、ヴェノム＝スカリエッティに気付いた人は居たでしょうか？・・最初からこういう予定だったので気付いてくれ人がいると嬉しいのですが・・次回は「異端の騎士」ＶＳ「混沌の融合獣」です、どんな戦いになるのか楽しみにしてくれると嬉しいです！！それと活動報告でアンケートをしているので参加して貰えると嬉しいです！！それでは次回の更新もどうかよろしくお願いします！！

# 第１２４話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回の話は異端の騎士「ハーティーン」と合成魔獣「キメイラ」そして地獄の道化師「ヘルズ」です！１２４は短めで１２５話との２話構成です！１２４話はヘルズとハーティーンの因縁とキメイラ戦１です！それでは本編始まります

# 第１２４話

第１２４話

「ここか・・」

俺は宮殿を見上げ呟いた・・市街の一番外れ・・ここに居る・・俺の敵が・・

「行くか・・」

グレイダルファーを握り締め宮殿の中に足を踏み入れる・・それと同時にどす黒い魔力を感じる

「やはり・・あいつか・・決着をつける時が来たな・・」

俺はそんな事を考えながら宮殿の奥へと向かった・・

「ふふ・・待ってましたよ・・剣帝」

腕を組み笑っているヘルズに

「今日こそ貴様を冥府に送ってやる」

グレイダルファーを向けながら言うとヘルズは

「まぁ待ってください、剣帝・・どうです？もう一度我等の仲間に

なりませんか？・・あの少女・・ラグナも一緒で「断る！」・・・どうしてですか？・・良い話だと思ったんですけどね？」

仲間になれと言うヘルズに断ると言うとヘルズに

「俺はお前を殺すと決めた・・絶対に・・俺のこの手で・・誰でもないこの俺の手で！」

そうヘルズだけは俺が殺すと決めていた・・絶対に誰にも殺させないと・・俺がそう言うとヘルズは

「ああ・・そんなに憎いですか？私が・・地獄の道化師・・ヘルズが・・いや」

ヘルズが仮面を外しながら俺に

「貴方と血を分けた私が・・カイエルが憎いですか？・・弟よ」

ヘルズ・・いやカイエルとルシルファーは共にジオガディスの父が治める国で生まれた兄弟だった・・だがカイエルと比べルシルファーは出来が悪かった・・魔法も得意ではないし・・知性もお世辞にも高いとは言えなかった・・ルシルファーが８歳、カイエルが１０歳の時、兄弟は引き裂かれた・・カイエルは聖魔王の下、ジオガディスの世話係として何不自由ない生活を・・それに比べルシルファーは神王が王座に付くまでの１３年間孤独で、辛い時間を過ごしていた・・だがそれでも偶に２人だけ出会い話をし食事をする程、仲の良い兄弟だった・・あの時・・カイエル達の国が滅ぶその時までは・・

「ああ・・そうだ!俺はお前が憎い!!兄を殺した貴様が!!」

そう怒鳴るハーティーンに

「殺した?・・何を言ってるのです?私はこうして生きていますよ?」

胸に手を置いて言うと

「違う!!誇り高く気高かった兄は死んだ!!貴様は兄の姿を持つだけの亡者だ、俺は・・俺が貴様を殺し兄の誇りを取り戻す!」

駆け出してくるハーティーンの攻撃を弾きながら

「何度言えば判るんですかね?・・握りが甘いし隙だらけですよ?」

私がそう言うとハーティーンは

「黙れ!黙れ!!黙れ!!!」

激昂するハーティーンの背後を取り

「やれやれ・・何度言わせるんですか?・・すぐ熱くなるなと・・」

ブンッ!!!

返答の代わりに力任せに振られた剣を回避して離れた所に着地して

「やれやれ・・何時まで経っても出来の悪い弟ですね・・まぁ・・

それで良いんですけどね・・こうしてここに貴方を誘き出せたんですから」

私の役目はここにハーティーンを呼び寄せる事・・ここまですれば良いだろう・・

「それでは剣帝・・いや・・弟よ・・また合間見える時を楽しみにしてますよ・・その時は・・私を殺せると良いですねぇ？」

にやにやと笑いながら言うと

「待て！！逃げる気か！！」

そう怒鳴るハーティーンに

「逃げるとは人聞きの悪い・・役目が終わったから帰るんですよ・・まだ仕事が残ってますしね・・ああ・・大丈夫ですよ・・ちゃんと敵は残しておきますから」

パチンッ！

指を鳴らすと宮殿の壁が砕けそこから

「グオオッ！！！」

完全体となったキメイラが姿を見せる、私は大袈裟に頭を下げながら

「それでは私はここで・・」

馬鹿にするようにそう言い、その場から転移した・・

「ふー・・嫌なものです・・」

上空で私は溜息を吐いた・・

「出来れば戦いたくないんですよね・・弟は・・」

私は完全に生前の記憶を持っている・・つまりハーティーン・・いや・・ルシルファーと共に過ごした記憶も残っている・・

「出来ればここで死んでください・・それが兄としての慈悲です」

私は血を分けた弟を殺したくはない・・勿論戦いとなれば本気だが・・

「でも・・貴方が・・生き残ってしまったら・・」

仮面をもう一度身に付け

「この手で殺してあげますよ・・ルシルファー」

兄としてではなく・・ジオガディス様の部下として・・貴方と戦う事を約束しますよ・・私は心の中でそう呟きその場を後にした・・やるべき事は山ほどある・・この場所で立ち止まってる時間は無いのだから・・

「ヒートバイパーッ!!!」

キメイラの腕から放たれる熱戦を横っ飛びで回避しながら

（くそ・・集中しろ・・意識を乱すな！）

自分に怒鳴りつける・・ヘルズの素顔を・・兄の・・カイエルの顔を見てしまった・・それで心が乱される・・もしかしたら・・もしかしたら・・救えるかもしれないと思う自分が居るが

（揺るぐな！あいつはもう敵だ・・兄じゃ・・カイエル兄さんじゃないんだ・・この程度で心を乱すな！！しっかりしろ！！ハーティーン！！）

そう思った直後、揺らいで居た心が引き締まる・・そう・・自分はこの程度で心を乱される程やわな鍛え方はしていない・・グレイダルファーを握りなおし

「貴様ごときに負ける・・俺ではない！！」

４本のキメイラの腕を体裁きだけ回避する・・こんな知性のない攻撃など・・

「当たるかッ！！！」

踏み込んで胴を穿つ

「ッギャアアアッ！！！」

悲鳴を上げるキメイラに

「耳障りな声を出すな！！」

渾身の拳を繰り出しキメイラの顎を砕く

「ギハ・・ゴハッ・・」

口からダバダバとどす黒い血を流しながらも拳を繰り出してくるキメイラ・・だが

「遅いんだよ・・欠伸が出る」

肩から一気に切り落とす・・切り裂いたキメイラの腕はすぐに粒子となり消える

「ゴアアアッ!!∞キャノン!!!」

背中の砲塔から砲撃を打ってくるが

「遅いというのが・・判らんか!!!」

砲撃を回避してグレイダルファーで砲塔を切り裂く、もうこれで砲撃は使えない・・

「とっとと倒させてもらうぞ・・時間の無駄だ!!」

踏み込んでキメイラの頭蓋にグレイダルファーを叩き込む、何かが砕ける鈍い音がすると同時にキメイラが白目を剥いて倒れる

「ふん・・雑魚が・・貴様如きに俺が止めれると思うなよ・・俺の敵は・・貴様なんかじゃないんだよ」

そう言ってその場を離れようとすると

「誰が雑魚だって？」

知性のある声がして驚き振り返ると

「くく・・例を言うぞ・・貴様がこの殻を破ってくれたおかげで漸く具現化できた・・」

キメイラの身体を裂く様に中から別の異形がでてくる・・

「出来損ないの癖に、俺が出てくるのを邪魔してくれてからな・・」

２つの頭部に鋭い鉤爪の生えた両腕・・

「まぁ良い・・結局こうして出て来れたんだからな」

足はなく身体に回りに螺旋を描くように見た事の無い文字が浮かぶ

「俺の敵は貴様か・・すぐに殺してやるぞ」

憎悪と殺意だけの血の色の様な瞳・・俺は思わず後退しながら

「き・・貴様は・・何者だ！」

信じられない事だが自分の声は震えていた・・俺がそう怒鳴ると異形は楽しげに喉を鳴らしながら

「怯えているな・・くく・・良いぞ・・その恐怖こそ・・我が糧・・俺の名はズィード・・時の破壊者にして殺戮の魔龍・・ズィードだ」

両手を俺の向けたズィードは

「とっとと死ね・・目障りだ」

ノーモーションで放たれた砲撃に

「なっ・・うおおおおおッ！！！！」

全く反応できず俺は闇色の砲撃に呑まれた・・

「くく・・死んだか・・」

姿の見えない騎士の死を確信して自分の身体を見る

「この姿か・・ふん・・まぁ良い・・」

数多の姿のうちこれが選ばれたのは偶然ではない・・横目で俺を抑えていた殻を見る・・どうやらあいつの影響らしい

「無様な死骸など見ていて気分が悪い・・消えろ」

死骸の下に漆黒のゲートを呼び出し呑み込ませる・・これで良い・・後はこの世界の俺に接触すれば良い・・俺がそう思った直後

「はあああッ！！！」

爆炎の中から騎士が飛び出してきて斬りつけて来る・・それは浅く

だが俺の身体を傷つけていた・・

「まだだ！！そう簡単に負けんぞ」

強い意志の光を瞳に映す騎士に

「良いだろう・・真の絶望を教えてやろう」

俺は騎士に向かって爪を振り下ろした・・ここに負の神の化身の１つが現れた瞬間だった・・

第１２５話に続く

# 第１２４話（後書き）

えーかなり短いです・・スランプではないのですが・・自分は原作を知りません・・そのことについて厳しい指摘を受け執筆する気が出ません（その指摘は感想に残してあります・・気になった方は見てくれると嬉しいです）・・自分は・・知ったかぶりだそうです・・ショックでした・・自分は間違っていたのでしょうか？「秋風様」「回覧板様」の小説が面白くて初めたリリカルなのはの二次「夜天の守護者」・・ですが・・道が判らなくなりました・・読者の方はどう思いますか？自分は原作を知らないので自由な発想が出来ると思い始めたのですが・・原作を知らないでやる作者はふざけるな！と思いますか？・・よろしければどう思うか教えていただけると嬉しいです・・ガラスハートですいません・・ですが一度聞いてみたかったので一言でも良いのでどう思うのか教えていただけると嬉しいです・・それでは失礼いたします・・はぁ・・テンション低い・・ＩＳでも読もう・・

# 第１２５話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！暖かい励ましの言葉で気力限界突破＋ＳＰ全回復見たいなテンションです、今回はハーティーン戦後半です、偽りの神の化身　ズィード・・かなりの難敵ですが、どんな戦いになるのか？ハーティーンの勝機とは？そこを気にしてくれると嬉しいです、それでは本編始まります

# 第125話

第125話

「ハーティーン・・大丈夫かな?」

聖王教会で怪我人の手当てをしながら、ハーティーンの事を心配してると

ピシッ・・

「!!・・ハーティーン!?」

首から提げていたペンダントに皹が入る・・それを見た私は嫌な予感を感じ

「カリムさん・・私行ってきます!!」

返事を聞かず走り出す

「ラグナさん!?危ないです戻ってください」

静止するように言うカリムさんの声を無視して、私は聖王教会を飛び出した

「成龍刃ッ!!!」

グレイダルファーに魔力を纏わせ投げつけるが

「鈍い、鈍い、ハエが止まるぞッ！！」

音もなく回避して、そのまま左腕を伸ばして引っ掻いて来る

「くっ・・」

反射的に半歩回避するが肩の甲冑が完全に破壊される

「くっく・・威勢が良いのは最初だけか？」

馬鹿にするズィードに

「ふん、まだ戦いは始まったばかりだぞ？」

ゆっくり立ち上がると

「減らず口を・・」

ズィードが一瞬で移動してきて殴り付けてくる、

「くっ」

剣で何とか防ぐがそのまま殴り飛ばされる、少し距離をとって体勢を立て直しズィードに斬りかかるが

「無駄無駄無駄」

当たる直後で剣を掴まれ殴り飛ばされる

「ぐわっ・・」

凄まじい勢いで壁まで吹っ飛ばされる・・さっきから何度も同じ事の繰り返しだ・・俺の攻撃は届かずやつの攻撃だけが俺に当たる・・この状況を打破するために

「あまり好きではないが・・仕方ない・・リミット解除」

グレイダルファーの封印を解除してそのまま

「喰らえ・・アクレビオス・・」

グレイダルファーから放たれた魔力が、上空に集まり漆黒の球体を作り出す

「ギガンデスッ!!!」

腕を振り下ろすその球体をぶつけようとするが

「クロノ・・パラドックスッ!!」

アクレビオスギガンデスが止まり消滅する

「ば・・馬鹿なッ」

俺の最強の砲撃が消えた事に驚いていると

「そろそろ飽きたな・・タイムデストロイヤーッ!!」

俺の前の空間が歪み炸裂する

「グオオオッ！！！」

全身の甲冑に一瞬で皹が入り吹っ飛ばされる

「げほ・・ごはっ・・」

咳き込む度に血が飛び出る・・内臓が幾つかやられたかもしれない・・それでも立ち上がる

「まだ立つか・・いい加減に死ね」

そう言い放つズィード・・どうするか考える・・直接攻撃も駄目、砲撃も駄目となると

「これしかないか・・」

思いついた作戦を実行する

「はあああッ！！」

全身に魔力を纏ったまま、ズィードの懐に飛び込む

「何をするつもりだ・・？」

首を傾げるズィードに

「直接攻撃も魔法も駄目・・なら・・魔力を暴発させるのはどうだ

？」

自分も唯ではすまない・・いや・・死ぬかもしれない・・だがこれしかない・・俺は心の中で

（すまん・・ラグナ・・約束は護れん・・）

帰ると約束した・・1人にしないと約束したが・・その約束は護れそうにない・・

（すまん・・本当にすまない）

「一緒に死んでもらおうか・・ズィードッ！！！！」

今まさに自爆しようとした直後

「駄目えええええッ！！！！」

ラグナの声が宮殿の中に響き渡った・・

「な・・ラグナ・・」

動きを封じていた力が一瞬緩む、その直後

「ふんっ！！」

力任せに振り解かれラグナの近くまで吹き飛ばされる

「ハーティーン！！」

駆け寄ってくるラグナに

「来るな、逃げろ！！」

逃げるように言うが

「嫌だ！！私が居なくなったらまたさっきみたいな事するでしょう！！そんなの絶対嫌だ！！」

そう言って近づいてくるラグナは

「嫌だよ・・死なないでよ・・帰ってくるって言ったじゃない・・もう1人にしないで・・」

ぽろぽろと涙を流すラグナ・・俺が手を伸ばそうとする前に

「くだらん茶番だな・・まぁ良い・・2人揃って殺してやる、タイムデストロイヤーッ！！！」

不可視の砲撃の筈だが、業と見えるようにしゆっくりとした速度で砲撃が放たれる

「！！」

反射的にラグナの前に立とうとするが・・ダメージのせいで動けずに居ると・・

「ハーティーンは殺させないっ！！！」

両手を広げ俺の前に立つラグナに

「馬鹿何してる！！逃げろ！！早く！！！」

逃げるように言うが

「嫌だ！！！私が・・今度はハーティーンを助けるんだ！！！」

退こうとしないラグナに必死に手を伸ばすが・・俺の身体は動かない

（動けッ！！動けよ！！！失いたくない・・ラグナだけは・・）

声にならない叫びを上げながら立とうとするが、俺の身体はピクリとも動かない

（頼む！！動け・・動いてくれ！！死なせたくない・・失いたくないんだ・・！！）

俺に名をくれた・・俺にもう一度生きる意味をくれた・・その少女を目の前で

「死なせて・・堪るかアアアッ！！！！」

雄叫びと共に立ち上がりラグナを抱きかかえ

（王龍！！今一時だけで良い！！俺に力を・・ラグナを・・俺の大切なものを護る力を・・貸してくれえええええッ！！！！）

カッ！！！

「グオオオオオオオッ！！！！！」

聖王教会の地下に安置されていた、王龍の目が光るそれと同時に石が砕け中から黄金色の身体を持った龍が姿を見せる

「オオオオオオッ！！！！）

王龍が一声そう叫び声を上げ、一瞬で教会の中から姿を消した・・・それと同時にラグナとハーティーンは砲撃に呑まれた・・

「・・！王龍！」

痛みがない事に疑問を感じながら、目を開くとそこには俺とラグナを護るように宙に浮かぶ1体の龍・・それは間違いなく俺の最強の相棒・・王龍だった・・

「グオオオ・・」

優しい光を瞳に映し俺を見ている・・俺はゆっくりと抱き抱えていたラグナを降ろし

「ラグナ・・俺を信じてくれるか？」

ぼろぼろの姿で何を信じろと言えば良いのか判らなかったが、そう尋ねるとラグナは

「信じるよ・・ハーティーンは勝って帰ってくる・・そうだよね」

そう笑うラグナに

「ああ・・そこで見ていろ・・お前の騎士の真の姿をな」

ラグナから離れて王龍に手を伸ばし

（王龍・・もう一度・・俺と共に戦ってくれ）

「ブラストユニゾンッ！！・・究極戦刃・・王竜剣ッ！！！」

「グオオオオオッ！！！」

王龍が咆哮を挙げると同時に光となり俺の身体に吸収される・・背中に黄金の翼と砕けてしまった甲冑がより強固に、それでいて美しい物に変化する・・そして自分の身の丈と同じほどの王竜剣を片手で握り締め

「行くぞ・・ズィード！！」

地面を蹴り一気に肉薄し王龍剣を振り下ろす

「ふん・・無駄・・「どうかな？」ッギャアアッ！！！馬鹿な・・俺の無敵のバリアが・・貴様・・何をしたアア！！」

自身の身体を傷つけられた事に激昂するズィード・・ズィードの言葉で確信したがやはりズィードはバリアを身に纏っていたようだ・・だが

「誰が敵に物を教えるか間抜け、成龍刃ッ！！」

踏み込んで魔力刃を飛ばす

「くうッ・・今度・・ッアアアアッ！！！」

バリアの強度を上げた様で自信を持っていたようだが、王竜剣の能力の前にどんなバリアを持っていようが意味がない・・王竜剣の能力はありとあらゆるプロテクションを無効化する事とインパクトの瞬間に魔力を大幅に上昇させ威力を桁違いに跳ね上げる事が出来る、故に最強の名を冠した剣なのだ、身体から黒い体液を零しながら俺を睨む、ズィードに

「決着をつけてやる・・俺の勝利という形でな!!!」

俺は両手で王竜剣を握り締めズィードへと向かった・・

馬鹿な・・神である・・俺が人間如きに・・

「オオオオッ!!!」

突っ込んでくる人間に向かって魔力波を撃つが

「無駄だ!!」

背中の翼で魔力波が弾き飛ばされる、そしてそのまま

「ふんっ!!」

巨大な黄金の剣が真下から切り上げられる

「グアアッ!!!」

左腕が根元から斬り飛ばされ消滅していく

「グウゥゥ・・人間如きガアアッ！！！」

一瞬で腕を再構築して爪を振り下ろすが

「遅い！！」

サイドステップで俺の一撃を回避した人間はそのままの勢いで胴に向かって剣を振るってくる

「ッギャアアアッ！！！！！」

バリアが無効化されそのまま剣が俺の腹にめり込む、そしてそのまま剣を振るわれ、俺は壁に叩きつけられた

「ぬううう・・下等な人間如きガアアッ！！！」

腹の傷を一瞬で回復させ魔力を収束して

「タイムデストロイヤーッ！！！」

不可視の砲撃を放つ、これなら当たる筈・・そう思ったが

「ふんっ！！」

振り下ろされた剣で俺の放った砲撃は、剣によって両断され消滅した・・

「ば・・馬鹿な・・」

直接攻撃も駄目間接攻撃も駄目・・俺は神の化身・・ヴェルガディオスの化身・・最強の神である・・俺が・・

「俺が負ける物かアアアッ！！！ディメジョンパラドックスゥゥッ！！！！」

両腕で空間を引き裂く、それと同時に黒い空間が宮殿だけではない、ミッドチルダ全体に時空の裂け目が現れる

「クハハッ！！！この世界を滅ぼしてやる！！人間どもを皆殺しにしてくれる！！！来い！！我が同胞達よオオオオッ！！！！！」

俺がそう叫び勝利を確信していると人間は

「そうか・・その程度が貴様の奥の手か・・ならば・・見せてやろう・・俺の最強の一撃を！！」

シュウウ・・・

辺りの魔力が奴の剣に収束していき・・巨大な光の剣となる

「貴様ごと滅すれば良い・・俺の剣はありとあらゆるものを斬る！！！」

剣を振りかぶる人間に

「抜かせエエエッ！！！人間如きガアア！！！タイムデストロイヤーアアッ！！！」

全魔力をつぎ込んだ砲撃を打ち込んだ・・それと同時に人間も

「ドラゴン・・デス・・バイトオオオオッ!!!!」

グオオオオオッ!!!!

剣が振り下ろされると同時に雄叫びを上げ黒い龍が突っ込んでくる、
俺の砲撃と龍が追突する・・だが・・それは一瞬の事だった・・

「ば・・馬鹿なああ・・俺が・・神である・・この・・俺がアアアアッ!!!!!」

俺の砲撃は漆黒の龍によって弾かれ、俺は魔力で出来た龍の顎によって噛み砕かれた・・

「はぁ・・はあ・・・お・・終わった・・」

ズシャッ!!

膝から崩れ落ちる・・それと同時に騎士甲冑が解除される・・魔力も体力も限界だ・・もう指一本・・動かせん・・俺がゆっくりと倒れかけると・・

「ハーティーンッ!!!」

ラグナが後ろから俺を支えて、ゆっくりと俺を横にして

「見てたよ・・最高に格好良かったよ・・ハーティーン」

ぽろぽろと涙を流しながら笑うラグナに

「そうか・・そう言ってもらえて・・嬉しい・・惚れた・・女の前で・・良い格好したいから・・な」

気が緩んでいたのか自然とそう言うとラグナは

「ほ・・惚れた・・女？・・わ・・私の事？」

トマトの様に真っ赤になったラグナ・・いや・・多分・・俺も同じくらい真っ赤になっていただろう・・俺はラグナから目を逸らし

「むっ・・そりゃな・・俺はお前に・・数え切れない救われた・・お前が居たから俺は本当の自分を取り戻せた・・ほ・・惚れるのも・・む・・無理は無いだろう・・」

俺がそう言うとラグナは俺の頬に両手を当てて自分の方に向け

「そう言うことは目を見て言って欲しいけど・・許してあげる・・んっ・・」

目を閉じて何かを期待するような声を出すラグナに

「むっ・・今度はちゃんと・・目を見て言う・・」

そう言って痛む身体を起こして俺はラグナに近づいた・・

チュッ・・

軽い音がすると同時にラグナは目を開き

「でこじゃなくて・・こっちが良かったんだけど?」

唇に手を当てて微笑を浮かべるラグナに

「そっちは全てが終わった後だ・・おっと・・」

そう言った直後、よろけて倒れかけると

「危ないよ・・今は休んで・・後は皆が頑張ってくれるから・・ねっ?」

穏やかに微笑むラグナは自分の膝の上に俺の頭を動かす

「ら・・ラグナ?」

突然の膝枕に驚きながらラグナの顔を見ると

「私は・・魔法も得意じゃないし・・出来る事も少ない・・だから・・これくらいさせて・・私の・・私だけの騎士様に・・ご褒美を・・ねっ」

耳まで真っ赤になりながら笑うラグナ・・どの道・・俺には戦う魔力も体力も残っていない・・俺はラグナの膝の上に頭を預け

「そうか・・では・・折角の褒美だ・・ありがたく受け取らせて貰うとしよう・・我が姫・・」

俺はそう呟いて目を閉じた・・

「すっげえ・・出にくい雰囲気・・」

宮殿の壁に背中を預け言う1人の男・・ヴァイスだ・・ヴァイスはラグナが聖王教会から出て行ってしまったと聞いて、ここだと思って来たのだが・・あの場所に出て行く勇気は無かったようで・・ゆっくりと座りながらタバコに火をつけ

「ちくしょう・・今だけだかんな・・てめぇにラグナはやらねぇからな・・」

ハーティーンを睨みながら隠れ・・

「まぁ・・あいつが頑張ってたのは見てたし・・今回だけ・・今回だけからなっ!!」

そう呟いて居た事を知る者は誰も居なかった・・ちなみに彼がその場から出る事が出来たのは1時間後の事だった・・

第126話に続く

## 第１２５話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！気力＋やる気全回復なのですが・・戦闘はイマイチだったかもしれないですね・・この話のメインはラグナとハーティーンだったので戦闘にはあんまり力を入れてなかったんですね・・ですので何時も以上に不安な出来です・・ですので感想をもらえるととても嬉しいです！！それでは次回の更新もよろしくお願いします

# 第１２６話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は久しぶりに本編の更新です！！敵は「ディアボリック＆コピー軍団ＶＳチンク、セッテ、ディード、オットーさん達です！！圧倒的な物量で押してくるディアボリックに勝てるのかどうか？そこを楽しみにしてくれると嬉しいです！！それでは本編始まります！！

# 第１２６話

第１２６話

管理局本局の近くの市街は、酷い有様だった、何一つ無事なビルが無い、倒れたビルの瓦礫の上から

「イヒヒッ！！ナニナニ？もう終わり！！詰まらないなぁ～抵抗して見せてよ！！！」

イヒヒと笑いながら馬鹿にするように跳躍するディアボリック、そしてその回りに居る、蟻や蛹型のネクロの群れ・・倒しても倒してもきりが無い

「このっ！！」

セッテが手に持ったソルエッジをディアボリックに投げつけるが

「無駄無駄！！そんなの僕には届かないよ～」

蟻型が２体盾になり、自信らが消滅しつつもディアボリックを守る、そして

「お返しだよ～やっちゃえっ！」

周りの蟻型が口を開き

「「「「ヘルズグレネードッ！！！」

触れたら爆発する魔力弾を放ってくる

「ヘブンズサンクチュアリッ！！！」

直撃の前にオットーが強力なプロテクションで防いでくれるが

「うっ・・うう・・」

魔力がもう限界に近いのか苦しそうなオットーにディードが近寄って

「だ・・大丈夫オットー？」

オットーは汗を流しながら

「ま・・まだ平気・・だよ・・僕は・・」

平気と言っているが限界は近そうだ、私はそう判断して念話で

（ディード、蟻型を抜いてディアボリックを狙う・・お前はまだ大丈夫か？）

そう尋ねるとディードは笑いながら

（はい、平気です）

妹の笑みに頼もしいと思いながら、更にセッテに

（ソルエッジを自分とオットーの周りに展開しろ、オットーの魔力はもう限界だ、お前が守れ・・セッテ）

頷くセッテを見てから、左手に挟んでいたルナエッジをディアボリックを囲っている蟻型目掛け投げつける

「・・・」

無反応ながら素早い動きで回避する、私は

「甘いッ！！」

左手を動かす、それと同時に飛んでいたルナエッジが反転して蟻型の身体に絡みつく

「！！！」

驚く蟻型、ルナエッジは魔力の糸で繋いである、つまりある程度は誘導出来るのだ・・と言っても今の自分では投げた内４本操作出来れば良い方だ、魔力糸を操るのは凄く難しいのだ・・

「終わりだッ！！」

指を鳴らすと同時に蟻型の身体に刺さっていたルナエッジが爆発する、それはビルの壁や弾かれ落ちていたルナエッジを巻き込み大爆発を起こす

「！！壁が・・」

ディアボリックの驚いた声が聞こえた、無理も無い自分を守るらせる為に居た蟻型が全て居なくなり、自分を守るものが無くなったのだから当然だ、それと同時に

「はあああッ！」

ディードのベルゼルガが風を纏う

「奥義！風刃閃！」

ベルゼルガを振るう、それと同時にベルゼルガが纏っていた風がディアボリックを拘束する

「くっ・・」

もがいてその拘束から脱出しようとしているが。そう簡単に抜け出れる訳は無い、この技は八神が生み出した技・・そう簡単に破られる技ではないのだから

「音速を超えて切り込みます！ベルゼルガ！カートリッジロード！！」

ベルゼルガから計４発の薬莢が飛び出す、それと同時にディードの姿が掻き消える

「はあああああっ！」

ザンッ！ザンッ！

ディードの声と振るわれるベルゼルガの音、それに

「く、ぐうっ！！」

姿の見えない程のスピードのディードの攻撃で傷つけられるディアボリックの声だけが響く

「これで・・決まりです!!」

ディアボリックの前に現れたディードがベルゼルガを袈裟切りに振り下ろす

「が・・がああああああッ!!!」

絶叫と共に吹っ飛んでいくディアボリックは背中からビルに突っ込み姿が見えなくなる

「・・はぁ・・はぁ・・き・・決まりましたか?」

ディードがそう呟くと同時にディアボリックが姿を見せる・・ゆっくりと歩くディアボリックは数歩歩いた所で

ズシャッ!!

音を立てて倒れこみ消滅し始める

「お・・終わった・・勝ったぞ」

これでここは大丈夫・・本局地下に逃げている民間人も無事だ・・作戦成功だ・・私がそう思った直後

「終わった?・・勝った?・・イヒヒッ!!何言ってるの?僕はまだピンピンしてるよ!!!」

嘲笑う様なディアボリックの声が頭上から聞こえる、慌ててそちらを見ると言葉通り無傷のディアボリックの姿が、それを見たディードは

「そ・・そんな・・て・・手応えはあったのに・・」

信じられないという表情のディードにディアボリックは

「イヒヒ!!僕は自分の進化前の姿のコピーを生み出せる・・でもそれはＬＶ２、ＬＶ３だけじゃないよ～」

そう笑うディアボリックの背後から、全く同じ姿のディアボリックが３０体姿を見せる

「「「「「お前達が壊したのは僕の複製～オリジナルは元気だよ～」」」」」

コピー体がディアボリックと同じ声で笑う、コピー体とディアボリックはイヒヒと笑いながら

「さてさて・・ゲームの始まりだよ!!僕を倒させないと・・アルカンシェルだっけ?・・それがここを撃ちます～」

!!!馬鹿な・・そんな事出来る訳が・・管理局のプロテクトは完璧の筈・・私がそう思っているとディアボリックは

「イヒヒッ!!僕はハッキングとか得意なの!!大好きなゲームの１つ・・ほら!」

私達の頭上にタイマーが現れる６０、５９・５８・・と時間が過ぎ

ていく

「これは僕がプロテクトを抜くまでの時間～制限時間は1時間・・僕を殺さないと全てが終わるよ～・・それじゃあ・・ゲームスタートッ！！」

30体のディアボリック達が私達の前に着地して

「「「「本物は僕だよ！！イヒヒッ！！！」」」」

自分を指差して本物は自分だと言う、私はそれを見ながら

「・・不味い・・状況だな・・」

1時間でアルカンシェルが発射される、本物は1体だけで偽者が30体・・本物の目星なんて付かないが・・全て倒すしかないと判断し、私は地面を蹴ってディアボリックに向かっていった・・

イヒヒ・・馬鹿な人間だよ・・僕は声を押し殺して笑いながらそう呟いた、あの魔道師が戦ってるところに僕は居ない、ビルの影に姿を隠して管理局へのハッキングを仕掛けていた

「逃げた人間がいるから出来るんだよね～」

魔王様が宣戦布告した時に真っ先に逃げ出した者達が居た、それが居るからアルカンシェルが使える

「皆殺しも楽しかったしね～」

宇宙に逃げた魔道師達は僕が自ら乗り込んで皆殺しにした、コピーを作るには膨大な魔力が居るから、魔道師を殺す必要があったのだ

「ふっふーん～うーんと・・７８９６５７１６９８０・・っと・・はい、最終防衛ライン突破～楽勝～楽勝」

イヒヒと笑いながらアルカンシェルの発射システムへのハッキングを始める

「うーん・・流石に難しいね～でも楽しいよ～」

１０層のプロテクトを解除しながら、横目で戦況を見て驚いた

「へぇ、やるもんだね。僕のコピーを半分も倒してるよ」

ハッキングを始めて３０分、本当はもっと早く出来るんだけどゲームだから楽しまないと・・それにしても強いね、コピーだから僕より弱いけど・・そこそこ強いはずなんだけどな～

「まぁ良いけど～３０分で半分って事はどうせ間に合わないんだし～・・うーんと・・ほいほいほいっ！と・・イヒヒ～残り５個～」

１０層の内半分を抜いた、人間の作ったプログラムなんて楽勝～僕は優秀なんだから～鼻歌交じりにコンソールを叩く、時折背後から

「このっ！！鬱陶しい！！」

「二連地斬疾空刀ッ！！」

「ランブルデトネイターッ！！」

魔道師達の声と

「「「「カタストロフィーカノンッ！！！」」」」

砲撃が放たれる音が聞こえる

「ふふーん・・中々やるね～本当・・残り7体か～時間は・・２０分・・うーん・・仕方ない・・出るか」

コピーの数が激減している気配を感じ僕は嫌だけどビルの影から姿を見せ

「イヒヒッ！！！ゲームも終盤そろそろ、僕も参戦するよ！！行けッ！！！」

両腕を伸ばし、１番近くに居たピンク色のバリアジャケットの女の子を捕まえ

「えーいッ！！！」

そのまま上空に腕を振り上げ叩き付けようとすると

「させない！！烈火刃ッ！！」

僕のコピーを最初に倒した女の子が僕の腕に炎を纏った一撃を放つ

「あちち！！酷いな～それじゃあ・・最初は君だ！！」

捕まえていた女の子を放してしまったので、代わりにその女の子の腹に拳を叩き込む

「げ・・ごほっ！！！」

咳き込んで吹っ飛んでいく女の子から

「このおっ！！！」

ブーメランを投げつけてくる女の子に視線を移す

「イヒヒ・・当たらないッ！！当たらない～」

跳躍してブーメランを回避して、腕を伸ばしてその女の子を絡めとり

「ばいばい～」

身体を反転させその女の子を壁に叩きつける

「がっ！！！げほっ！げほっ！！」

蹲り咳き込む女の子の声を聞いて

「良い声だね～もっと聞きたいな～」

追撃の為に腕を伸ばそうとする

「させんっ！！」

爆発するダガーを投げる女の子が突っ込んでくる

「次は君？良いよ～じゃあ君を痛めつけようか？」

ダガーを弾きそのまま膝蹴りを叩き込み、身体を反転させビルに向かって蹴りつけ

「ばいばい～カタスロフィーカノンッ！！！」

胸部から紅い砲撃を撃つが

「くっ！！うわあああッ！！！」

直撃は回避したようだが余波で吹っ飛ばされ転がっていく女の子を見ながら

「「「最後のプロテクト解除～ふっふーん、アルカンシェル準備オッケー」」」

残っていたコピーを呼び寄せその中に紛れ込む

「「「さーラストゲームッ！！！本物はどれでしょう～」」」

イヒヒと笑いながら両手を広げ

「「「ほらほら～逃げも隠れもしないよ～攻撃しておいでよ・・防御しないからさ～一撃で消滅させれるよ～」」」

イヒヒ・・引っ掛かれ、僕は影の中・・それは全部偽者・・偽者を攻撃したらそこで終わりだよ・・ゲームは終わり僕の勝ちでね・・ぎりぎりまで追い込まれた精神状況では僕が隠れてる可能性なんて

考えられない筈～精久悩みなよ・・愚かな魔道師さん～

ど・・どうする・・1体だけ・・本物・・倒せばそれで良いが・・倒せなかったら・・アルカンシェルでクラナガンは壊滅する・・そう思うと手が震える・・まともにダガーなんて投げれない・・

（こ・・怖い・・わ・・私に・・全部が掛かってる・・）

ディード達はもう攻撃する余力なんて残ってない・・自分しかないのだ・・私は覚悟を決めダガーを真ん中のディアボリックに投げつけるが当たる瞬間にその姿は消える・・コピーだ・・

「はずれッ!!はずれ!!ゲームオーバー～イヒヒヒヒッ!!!!!」

言われなくても判る・・私のせいだ・・私のせいで・・クラナガンは・・私が膝から崩れ落ちると同時に

「発射5秒前!4・・3・・2・・「させるかあああああッ!!!!」・・な・・この・・僕の方が早い!!!」

上空から父さんの声がする、慌てて上を見ると漆黒の翼を背中に生やして凄まじい勢いで突っ込んでくる姿が見える、ディアボリックが指でコンソールを叩こうとする

「させるかあああッ!!」

最後のダガーを投げつけ腕を弾く

「なっ！！！「覇王両断剣ッ！！！」

ドンッ！！！

漆黒の魔力刃がディアボリックの間の影を貫く、それと同時に

「ぎゃあああああッ！！！何で！！何でッ！！！判ったんだアアアアッ！！！！」

絶叫と共にディアボリックが姿を見せる、父さんは何も応えず

「消えろッ！！！」

更に魔力を送り込む

「ッギャアアッ！！！！！」

凄まじい断末魔の悲鳴をあげディアボリックの姿は消えていった、

父さんはそのままディアボリックが展開していたコンソールを叩き始め

「プロテクト再構築完了っと・・もう大丈夫だ」

そう笑う父さんは

「もう・・限界か・・ありがとう・・カオス・・」

父さんの身体を覆っていた騎士甲冑が消滅する、融合デバイスの限界が来たのだろう・・私がそんな事を考えながら父さんに

「どうして影に隠れてるって判ったんですか？」

「それは僕も聞きたいな～」

「私もです」

「私も凄く興味がありますね」

私達がそう尋ねると父さんは頭を掻きながら

「いや・・その・・手元が滑ったんだな・・これが・・あははは！！つまり唯の偶然だ！！」

あははと笑う父さんに力が抜けその場にしゃがみ込むと、父さんは私達の頭を撫でながら

「それにしても良く頑張った・・ごめんな・・助けに来るのが遅れて・・空になＬＶ３が山ほど居たんだ」

そう言う父さんの身体は良く見るとボロボロで肌が見えてる部分もある、かなり痛い筈なのにそんな素振りを微塵も見せない父さんに

「ううん・・助けに来てくれて嬉しかったよ」

「僕も！お父さんの格好良い所見れて嬉しかったよ！」

「はい！私もそう思います！！」

「龍也様の次に格好良かったです！！！」

皆がそう言うと父さんは恥ずかしいのか少し顔を背けながら

「ん・・まぁ・・その・・あれだ・・自分の娘の前で・・情けない真似は出来だろ・・うん・・」

そういった父さんはビルの上から飛び降りて

「車を取ってくる。怪我だらけで動けないだろ?回復魔道師とかも連れて来るよ」

そう言って走っていく父さんを見ながら空に浮かぶ城を見る

（八神・・私達は勝った・・お前も負けるなよ・・）

心の中でそう呟いて私は仰向けに寝転がった・・

「何だよここは?」

僕は何も無いくらい空間に立っていた・・昔の事を思い出そうとするが思い出せずそこに立っていると

ドスッ!!!

「が・・がはっ!!」

突然背後から剣が飛んできて俺を貫く・・俺が驚きながら振り返るとそこには黒い門のような物があり、そこから剣が伸びていた、門

についた顔が淡々と

「汝・・2度同じ過ちを犯した者・・汝に魂の休息など無い・・永遠に苦しみ・・懺悔せよ・・」

ずるずると門の中に引きずり込まれながら

「嫌だ!放せ!!僕は・・僕はアアアアアッ!!!」

ゴーン・・

ディアボリックを飲み込んだ門はゆっくりと閉じ・・音も無く消滅した・・

第127話に続く

生前情報

ディアボリック

クライドの世代の広域次元犯罪者、レアスキル「移し身の君」と呼ばれる能力を持ち、大量殺人を行い、自分のコピーを生み出し20年に渡り管理局から逃げ続けた悪人。最後は管理局にハッキングを仕掛けアルカンシェルのコントロールを奪い、クラナガンを壊滅させようとしたが、発射直前でクライドに捕まり逮捕された、管理局に連行されてる途中に舌を噛み切り自殺した、精神異常者であり殺しをゲームと称しており、捕まった以上自分の負けであるからという理由で自殺する道を選んだ。その後復活したばかりのジオガディスによってネクロかした。ネクロ化した後も殺人はゲームであり大量殺人を行い続けた、生前の記憶があったかどうかは不明だがアル

カンシェルを乗っ取ろうとし、最後はスカリエッティによって倒された

## 第１２６話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです、次回は２つのサイドを同時にやろうかな？と思っています、あまり長く出来そうにない話なので・・でもそれでも書いてみて長く出来そうだったらばらばらでやります。まぁ・・予定は判らないという事です。それでは次回の更新もどうかよろしくお願いします！！

# 第１２７話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は前回の予告通り、同時進行で行きます、理由？簡単ですよ・・１つの話にするには内容が薄いですし・・文も足りないと来たのですよ・・まぁ・・少し長めになりましたけどね・・それでは今回もどうかよろしくお願いします！！

# 第１２７話

第１２７話

激しい戦闘があったのだろうか、瓦礫の山と化した街の中で、１体の異形「ホーネット」が蹲っていた、それを見下ろす男・・ゼストだ・・ホーネットはその瞳に憎悪の色を浮かべながら

「ギッギギ・・オノレ・・人間如きガ・・」

目の前でボロボロの昆虫の様なネクロを見下ろしながら

「言いたい事はそれだけか？・・ではとどめだ」

俺がアンブロジウスを振り下ろそうとした瞬間

「「キキーッ！！！」」

瓦礫の影からＬＶ１が飛び出してくる

「！！」

完全な不意打ちに一瞬反応が遅れる、だがネクロの攻撃は俺には届いていなかった・・

「ストライクザンバーッ！！」

「ふんっ！！」

ウェンディとトーレが割り込んで来て、それぞれネクロを消滅させる、それと同時に

カッ！

一瞬光ったと思うと同時に

「ッギャアアアッ！！！！」

ビルの影に隠れていたＬＶ２が纏めて消滅する、恐らくディエチだろう、俺がそんな事を考えてるとトーレが

「油断しすぎじゃないのか？」

俺は苦笑しながら

「そうかもな・・少し油断していたかもな・・だがもう終わりだ・・」

ホーネットに改めてとどめを刺そうとし振り返った瞬間、俺は目を見開いた先ほどまでホーネットが居た場所にはまるで繭の様な物が居た・・それを見たウェンディは慌てながら

「そうはさせないっすよ！！」

踏み込んで蹴りを繰り出したがそれより早く繭から腕が飛び出し、ウェンディの足を掴んで投げ飛ばす

「くっ！！」

瓦礫の山に突っ込む前にトーレが抱き止める、それに安心しながら
繭を見ていると

「くっくっくっ・・漸くだ・・漸くここまで来た」

繭が爆発しそれを同時に漆黒の鎧が視界に飛び込んでくる

「俺をデクスだと思っていただろう？・・残念だったな」

漆黒の竜の翼を持ち・・

「俺は力を制限されていた・・バラガルトによって」

禍々しいまでの色の剣を振り回しながらホーネットだった者が俺を
見て

「俺の名はＬＶ４デュラン！漆黒の龍帝！デュランだッ！！・・さ
ぁ・・始めようか・・一方的な殺戮を！！」

そう言うと同時にデュランは腕を無事なビルの方に向ける・・その
方向はディエチが居る方向だった、トーレが通信を開く前に

「邪魔な小娘から消えて貰おうか・・Ｂ・ポジトロンレーザーッ！
！」

螺旋状の砲撃を打ち込む、ビルが粉々になって散っていく・・顔を
青ざめさせるトーレとウェンディに

「こいつは俺が抑える!ディエチの所に向かえ!!」

そう言うとトーレとウェンディは崩れたビルの方に駆け出していく、
俺はデュランの前に立ち塞がり

「貴様の相手は俺だ」

睨みながら言うとデュランは

「ふんっ・・では貴様から血祭りに上げてやろう!!!」

そう言うと同時にアンブロジウスとデュランの剣が交差して火花を
散らした・・・

クラナガンの外れ、最後の宮殿の中で烈火の将「シグナム」と４本
の足に胴体に口を持った異形「タナトス」が戦闘を繰り広げていた

「どうしたのです?まさかこの程度とは言わないですよね?」

くっくと笑いながら言うネクロに返答代わりに

「昇竜斬破ッ!!!」

龍型の魔力波を飛ばすが・・

「まだ元気ですね・・そうこなくては面白くありません」

手に持った杖でそれを弾き飛ばし、４本足で殴りつけてくるタナトスの攻撃をレヴァンティンで弾くが

（長くは持たん・・速攻で片付けなければ勝機はない）

私はそんな事を考えていた、獣の様な姿をしているがこいつは恐ろしく知性が高い、更には遠距離、近距離も強い・・普通に戦っていては埒が明かない・・私はそう判断して、斬り合っていた足を弾き飛ばし、跳躍しタナトスの頭目掛けて

「はあああああッ！！天竜斬破ッ！！！」

気合と共に身体を回転させながら打ち込むが

「甘いですよ、デッドスクリームッ！！！」

ミッギャアアアアアアッ！！！！

「う・・うわあああああッ！！！」

タナトスの胴体の口からこの世の物とは思えない悲鳴がして、私は大きく弾き飛ばされた

「くっ・・まだ・・！・・馬鹿な・・」

ダメージはそんなに大きくないのですぐに反撃しようとしたが、手に持ったレヴァンティンを見て、目を見開いた・・私の手の中でレヴァンティンは腐食し始めていたのだ・・良く見るとレヴァンティンだけではない騎士甲冑も腐食し始めていたのだ・・私が驚いているとタナトスが

「死者の叫び、デッドスクリームはありとあらゆる物を破壊し侵食する・・判るか?その侵食が貴様の身体に達した時・・貴様はネクロと化す」

!!私がネクロに・・騎士甲冑を見る・・まだ表面が溶け始めてるだけだが・・徐々に溶ける範囲が増え始めている

「くっ!!!このおっ!!」

踏み込んで斬撃を繰り出す

ガキーンッ!!!

杖で受け止めたタナトスはにやりと笑いながら

「焦るか?自分が自分で無くなるのが?」

くっくっと笑うタナトスは足で私を蹴り飛ばし

「このまま貴様がネクロと化すのを待つとしよう・・貴様と仲間同士の殺し合い・・実に楽しみだ」

にやにやと笑うタナトスを見ながら拘束から逃れようともがくが

(なんと言う強度だ・・びくともしないぞ)

それでもその拘束から逃れようともがいていると背後から

(そんなに暴れんな、今助けてやるから)

その声に驚き目だけで後ろを見るとそこにはアギトが居た、良く考えればここは市民の避難所の近く、アギトが六課に誰かに着いて来ていてもおかしくないのだ・・私が驚いているとアギトは

（くそ・・硬いぜ・・私の力じゃ無理か・・こうなったら・・シグナム！ユニゾンするぞッ！！）

その言葉に私は

（何を言っている！！あいつの話を聞いてなかったのか！！私は今あいつの攻撃で侵食されてるんだぞ！！そんな状態でユニゾンしたら・・判らない訳が無いだろう！！）

融合騎である、アギトと今ユニゾンすればアギトにも侵食の影響が出てしまう・・だからそう怒鳴るとアギトは

（判ってる！！シグナムは兄の家族だ！！だから・・私にとっても大切な家族だ・・私は家族を守るために・・命を懸ける！！昔・・兄がしてくれたみたいに！！）

アギトの目には揺るがない強い光が宿っていた・・それはどことなく兄上の目の色に似ていた・・私は何を言っても無駄だと判断し

（判った・・なら侵食される前にあいつを倒す・・良いな）

（おう・・行くぞ・・）

「「ユニゾンインッ！！！」」

ユニゾンを行い自分を押さえていた拘束を弾き飛ばす、自分の身体を見下ろす、真紅の鎧は青紫色に染まり、燃え盛る炎の色は赤ではなくオレンジ色・・レヴァンティンが纏っている炎の量も大幅に増えている・・私がレヴァンティンを正眼に構えると

「な・・くっ・・融合騎か・・だがもうじき侵食が終わる・・そうなれば貴様の負けだ!!」

勝ち誇った笑みのタナトスに

「そうなる前に貴様を倒す!!」

地面を蹴り一気にタナトスへと向かって行った・・

「ディエチ～どこっすか～」

あちこちの瓦礫の陰を覗きながら声を掛けて回るが、ディエチの姿は見当たらない、最悪の予想が頭を過ぎった時、背後から

「ウェンディ!!居たぞこっちだ!!!」

トーレ姉の呼ぶ声が聞こえ、私はその方向に向かって走り出した

「ウ・・ウェンディ・・わ・・私は大丈夫だから・・心配しなくても良いよ?・・」

ディエチは頭から血を流しながらもそう微笑んだ、良く見ると腕が青紫色になっている・・間違いなく骨折してるだろう

「全然大丈夫じゃっないっす!!後は私達に任せるっす」

慌てて言うとディエチは

「そ・・そんな事言ってられない・・もうじき・・来る」

そう言うディエチ・・何が来るのか尋ねようとした時

「グオオオッ!!!」

ズドンッ!!

凄まじい叫び声と同時に轟音が辺りに響く、それと同時にドシャッ!!という生々しい音が聞こえそっちの方を見ると

「くっ・・な・・なんと言う・・力だ」

傷だらけのゼストが居た、私が慌てて近寄ろうとすると

「来るな!!お前達ではあいつに勝てん!!」

そう言って槍を構えるゼストの前にデュランが着地し

「まだ戦う気力があるか・・良いぞ・・このまま嬲り殺しにしてやる」

デュランが凄まじい勢いで剣を振り下ろす、ゼストも何とか防いで

いるが長くは持ちそうはない

「援護しないと・・でも何をつかうっすか・・」

バニシングバードに搭載されている、射撃弾は3種類・・バースト弾、スパイラルバレット、拘束弾・・だがどれも効果は無さそうだ・・ではどうする・・？・・私が慌ててバニシングバードの弾を確認していると

「これは・・」

一発だけ色が違う弾が目に留まる・・それは

（ブラックホール弾っす・・これなら・・あいつを・・でも・・）

龍也兄のブラックホールクラスターを解析し、お父さんが作った最強の弾丸・・だが

（私の魔力じゃ起動出来ない・・無理に使えば・・暴発して・・辺りを全部吸い込む・・）

怖い・・自分に全てが掛かってしまう・・近くに居る人の命も・・大切な姉妹の命も・・手が震える・・だが・・もうこれしか手が無いのも事実・・私がブラックホール弾を見ていると

「ウェンディなら・・出来るよ・・」

「信じるぞ・・お前なら出来る」

「ディエチ・・トーレ姉・・」

私の腕を掴んで言う2人・・信じてくれているなら・・その信頼に応えなければならない・・そう思うと私の手の震えは止まっていた・・

（何考えがあるんだな・・時間稼ぎは任せてもらおう）

念話で言うゼスト・・私は自分の頬を叩き

（うっしゃ!!気合入れて行くっす!!）

バニシングバードを特殊砲撃モードに切り替え

（座標・・X・・199・・Y・・360・・空間圧縮範囲・・1m・・）

打ち込む場所圧縮範囲を設定し、スコープを覗き込む・・

（幸いこっちには気付いてないっす・・一撃で決める・・）

狙撃はそこそこ出来る・・なら一撃で決めるまで・・ゆっくりと息を吐き・・呼吸を整える・・

（信じろ・・自分なら出来る・・出来るに決まってる）

自己暗示ににも似た呟きを何度も繰り返し、閉じていた目を見開くと同時に

（ゼスト!!一気に離脱!!こっちまで来るッス!!）

そう念話を飛ばす、ゼストは斬り合っていた槍を手放し、フラッシュムーブでトーレ姉の隣に移動する、それと同時に

「行けぇッ！！！！」

トリガーを引いた

ドウッ！！

凄まじい反動と同時にブラックホール弾が射出される、それはゼストの姿を見失っていたデュランの脇腹を捉える・・だが

「ふん・・こんな物で・・」

鼻で笑うデュランに

「残念ッスけど・・ゲームオーバーっすよ・・空間圧縮開始！！！」

ブラックホール弾が光り輝き漆黒の穴となる・・どうやら・・成功のようだ

「ぐっ・・な・・吸い込まれる・・くっ・・この・・」

翼を羽ばたかせ逃げようとするが不可能だ、ブラックホールはデュランの身体に発生しているし、光さえ吸い込むブラックホールからどうやってやって逃れるというのだ・・デュランの身体は見る見る間に吸い込まれて行き

「くっ・・オノレエエエエエッ！！！！」

そう叫ぶと同時にデュランの姿は完全に消えた・・

「お・・終わったっす・・」

私がへたり込んで言うとトーレ姉は

「何を言って居る・・まだ終わってないぞ・・」

トーレ姉が空を見上げる・・そこにはパンデモニウムが浮かんでいた・・そこではまだ龍也兄が戦っている筈だ・・私はディエチの横に寝転びながら

「へへ・・心配する事はないっす・・龍也・・兄が・・負ける筈・・ないっすか・・ら・・」

魔力の消費のし過ぎで急速に薄れていく意識の中、私はそう呟いた・・

「ビフロストッ！！！」

強化された炎の矢がタナトスの身体に突き刺さり爆発する

「グオオオッ！！己ぇッ！！プログラム如きが！！！」

激昂し殴りかかってくるタナトスの腕を弾き

「プログラムなどと・・呼ばないで貰おうか！！！咬竜斬刃ッ！！

！」

シュランゲフォルムに変化させたレヴァンティンをタナトスに巻きつけ、一気に引く

「ッギャアアアアッ！！！！」

身体が抉り取られ絶叫するタナトスの胴体にムスペルヘイムを押し付け

「ビフロストッ！！」

全力でビフロストを打ち込み吹っ飛ばす、私はタナトスが体勢を立て直す間に

（アギト！大丈夫か？）

アギトに尋ねる・・侵食されている私とユニゾンしてるアギトに影響が出てないかと思い慌てながら尋ねると

（まだ、大丈夫だぜ・・でも・・長くは持たないな・・そろそろ決めてくれよ）

少し苦しそうに言うアギトに

（ああ・・すぐに決める）

これ以上アギトに負担をかけるわけには行かない・・私はそう判断し

「カートリッジロード・・」

ズガンッ！！

薬莢が飛び出し魔力が増大する、それと同時にレヴァンティンを覆っていた炎が蒼色に染まる・・それは兄上と同じ色の炎だった・・

私は少しだけ微笑む

「行くぞ・・アギト」

（おう！）

そう言うと同時にタナトス目掛けて走り出した・・

「ぬううう！！図に乗るなあああッ！！！！」

杖に黒い魔力を集め殴りかかってくる、だが私はそれを再度ステップで回避し、そのまま身体を捻りながら跳躍し

「天竜斬破ぁッ！！！！！」

回転する事によって加速したレヴァンティンを全力で振り下ろした

「くっ・・がっ・・」

杖で受け止めようとしたが、その杖は一瞬で切り裂かれそのままタナトスを唐竹切りに切り裂いた・・

「ば・・馬鹿な・・申し・・訳・・あり・・ません・・」

タナトスはそう呟くと同時に倒れこみ消滅した・・それと同時に私

の身体についていた黒い物体は消えていた・・

「勝った・・な・・」

グラリ・・ドサッ！！

剣を振り下ろした体勢のままゆっくりと倒れこむ、それと同時に騎士甲冑とユニゾンが解除される

「はぁ・・はぁ・・つ・・疲れた・・」

そう呟くアギトに

「ああ・・私もだ・・」

横目でクリスタルが砕けているのを確認し

「任務完了・・後は迎えが来るのを待つだけだな・・」

救助を頼む連絡はした・・後はそれを待つだけだ・・私がそう呟くとアギトが

「なぁ・・迎えが来るまで、兄の昔話を聞かせてくれよ」

そう呟くアギトに

「ああ・・良いぞ・・その代わり・・お前がどうやって兄上と出会ったのかを教えてくれ」

アギトは少し頬を赤らめながら

「う・・うん・・良いよ・・でも・・兄の話が先だかんな！」

そう言うアギトに

「ああ・・では・・話し始めようか・・まずはな・・」

私とアギトは迎えが来るまでの時間、お互いの昔話をしていた・・
自分が知らない兄上の話に、アギトと兄上の出会い・・それをゆっくりと語り続けていた・・ちなみにその光景を見た迎えの局員達は口を揃えてこう言った

「「「まるで本当の姉妹のようだったと・・」」」

第１２８話に続く

生前情報

ホーネット↓デュラン

ジオガディスと敵対していた国の将軍で、血塗りの魔神と呼ばれる騎士だったが、ジオガディスに殺された後、利用できると判断しヘルズによってネクロ化し、バラガルトの配下になった・・だがその凄まじい闘争本能は凄まじい力を持つデュランへの進化を可能にしたが、自分の地位が危ないと判断したバルガルトによって力を制限され、長い間ホーネットの姿で居た、だがバラガルトの死で元の姿に戻る事が出来、圧倒的な戦力でゼスト達を圧倒したが、ブラックホール弾に飲み込まれ消滅した・・

タナトス

ジオガディスの幼年期に魔法を教えていた老人、高い呪術の才能と戦略に長け、ジオガディスの戦の師匠でもあった、ネクロ化後も高い呪術は健在で敵を侵食し、自分の手駒とする魔法や戦法を得意とした、ユニゾンしたシグナムによって撃破された・・

# 第１２７話（後書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回はかなり自信の無い話でした・・ですので感想を貰えるととても嬉しいです・・次回は遂に龍也さんの出番です！！龍也さんの払った代償・・そしてジオガディスとの決着・・どうなるのか楽しみにしていてくれると嬉しいです！！それでは失礼いたします！！

# 第１２８話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！今回は「龍也ＶＳジオガディス」編です、どんな戦いになるのか楽しみにしてくれると嬉しいです！！それでは今回もよろしくお願いします

# 第１２８話

第１２８話

「はやて、どうやら・・結界は破壊できたようですわ～」

クアットロさんがモニターを見ながら言う、私は

「流石、なのはちゃん達やね・・後は・・兄ちゃんだけか・・」

上空に浮かぶパンデモニウムを見上げるとクアットロさんが

「大丈夫ですわ、八神兄様が負けるわけ無いですもの・・私達は私達の出来る事をしましょう」

そう笑うクアットロさん・・今私達がすることは怪我をしてるなのはちゃん達の手当てをすることだ・・

「そうやね、ありがと・・クアットロさん・・ほんじゃあ・・気合入れていこか！」

私はそう言うと司令室を後にした・・戻って来始めている自分の仲間の手当てをする為に・・

（大丈夫・・兄ちゃんは勝つ・・何も心配ない・・）

自分に言い聞かせるように心の中で呟き私は、六課を後にした・・

だがその願いは叶わず、私は最も見たくない光景を見ることになる・
・

「邪魔だっ！！」

高速でパンデモニウムの中を移動しながら時折襲ってくるネクロを
両断し進んでいく・・体力と魔力の消耗は出来るだけ低くしたい・・
そんな事を繰り返していると広いフロアに出る、そしてフロアの上
段から

「良く来たな守護者！！」

王座に腰掛けていたジオガディスが立ち上がりながら言う

「ジオガディス・・」

私が睨むとジオガディスは

「俺に目と腕を奪われ、良くそこまで強くなった・・正直驚きだよ・
・その強さに敬意を占めそう・・だが・・貴様の命はここで終わり
だ・・」

剣を抜き放ちながら降りてくるジオガディスに

「残念だが、ここで死ぬわけには行かんな・・」

剣を正眼に構えながら言うとジオガディスは

「ふん・・貴様と俺では天と地ほどの差がある・・それを貴様に教えてやろう」

右手をこちらに向けながら

「掛かって来い夜天の守護者、貴様の命・・この俺が貰い受ける！」

「その台詞・・そのままそっくりお返ししよう」

私は地面を蹴ると同時に背中の翼を羽ばたかせ、ジオガディスに斬りかかって行った・・

「はあああッ！！」

ジオガディスの一撃を受けぬために先手先手を取り続ける

キィン！！キィン！！

私の剣とジオガディスの剣がぶつかり火花を散らす

「良い太刀筋だが・・甘い！！！」

放たれた突きを紙一重で交わしそのまま蹴りを放つ

ガインッ・・

鈍い音を立てて胴に命中するが・・あまりダメージがあるように見えない・・私が様子を探っているとセレスが

（王、落ち着いてください・・ジオガディス相手に速攻の選択は正

解ですが・・あいつは何をしてくるか判りません・・落ち着いて機を窺うのです）

落ち着くようにいうセレスに

（判っている、十分私は落ち着いている）

ジオガディスのデバイス、ダインスレイフの一撃を受ければその瞬間私の不利は決定する・・ジオガディス相手に魔力減退などを受けたら勝ち目は１００％無い・・無論・・策はあるが・・

「行けッ！！ガンファミリヤ！！！」

１２機のビットを打ち出す、魔力弾が雨霰の様に降り注ぐが・・

「甘いわ！」

背中の７枚の翼で魔力弾を掻き消し、ダインスレイフと蹴りで次々ビットを迎撃していく・・その間に魔力を収束させ

「スターライト・・ブレイカーッ！！！」

渾身の魔力を込めた砲撃を打ち出すが

「無駄だっ！！！ファントム・・ブレイド！！」

ダインスレイフの刀身に魔力刃が発生し巨大な刃となるとスターライトを切り裂いて、私に向かってくる・・

「くっ！！」

サイドステップで回避するが、魔力刃が床に叩きつけられた衝撃で一瞬体勢を崩す、その瞬間

「打ち砕け！！グランドクロスッ！！！」

赤黒い魔力で出来た7つの結晶が降り注ぐ

「くっ！」

それを剣で弾き、あるいは避け直撃だけは避ける・・ふと上を見上げるとジオガディスの姿が無い

「どこだ！？・・！！・・「流石だな・・」

背後から強烈な殺気を感じ反射的に剣を背中に回すそれと同時に金属音が響き渡る・・私は振り返りながら

「そう甘く見ないで貰おうか、ジオガディス」

ダインスレイフを弾き飛ばしながら言うと

「ふん、ダインスレイフを恐れ遠距離攻撃しかしてこない、貴様を甘く見るのは当然だ・・そんな消極的な策で俺に勝てるとでも思っているのか？」

その言葉に私は

「誰がそんな消極的な策を取るか・・さっきまで・・砲撃しかしなかったのは・・貴様をこの距離におびき寄せるためだッ！！」

渾身の一撃を上段から叩き込む、私が最も恐れていること・・それは膨大な魔力による弾幕戦だ・・私はあまり射撃は得意ではないし、セレスの力を借りても対処しきれないと判断していた・・私は確りと剣を握りなおした・・するとセレスが

（王よ！無謀です！！ジオガディスに接近戦を挑むなど・・考え直してください！）

考え直せと言うセレスに

（逃げる事出来ない・・遠距離もその内捕まる・・なら・・自分の得意の場所で戦うまでだ！！）

私はセレスにそう言うと

「行くぞ！！ここからが本当の勝負だ！！」

背中の翼を羽ばたかせ私はジオガディスに斬りかかって行った・・

キィン！キィンッ！！！

何度も俺と守護者の剣がぶつかり火花を散らす・・俺は剣を交えながら

（すえ恐ろしい成長速度だ・・たがだが数年で俺と剣を交えるほどに成長するとはな・・）

素直に俺は守護者を賞賛していた・・数千年に及ぶ経験を持つ俺とたかだが数年でここまで打ち合えるようになるとは・・全く・・

「驚きだよ！！！」

踏み込んで横薙ぎの一撃を叩き込むが

「ふっ！！」

身体をねじり回避しそのまま踵落としを叩き込んでくる

「くっ！！！」

左腕の篭手で受け止めるが衝撃で左腕が痺れる

「はぁっ！！」

着地と同時に叩き込まれた横薙ぎの一撃が俺の腹を捉える

「ぐはっ・・」

強制的に肺から酸素が吐き出される、更に体がくの字に折れた俺の顎を蹴り上げる

「がはっ！！」

後方に向かって弾き飛ばされる、それと同時に

「はあああああッ！！！おりゃあああああッ！！！」

追撃に魔力刃が飛ばされるが

「舐めるな！！」

着地し腕を振るい魔力刃と弾くと同時に背中の翼で浮上する

「はっ！！」

守護者も同様に俺を追ってくる

「今度は・・こちらから行くぞッ！！！」

一気に肉薄し上段からダインスレイフを振り下ろす

「！！！」

ガキーンッ！！！

甲高い金属音がする・・左腕で受け止めている守護者に

「良く止めたと言ってやりたいが・・甘いッ！！！ブラッククランスッ！！！」

守護者の背後に黒い魔力で出来た槍が１００本生成され、即座に襲い掛かる

「くっ！！！」

即座に振り返り剣で迎撃に出る守護者・・その間に上昇し

「七つの大罪よ・・今ここに姿を現せ・・傲慢・憤怒・嫉妬・怠惰・強欲・暴食・色欲」

俺の周りに7の魔方陣が展開される

「目の前に居るのは貴様らの餌だ・・食い殺せ!!セブンデッドリーシンスッ!!!」

7つの魔法人がそれぞれ姿を変える、龍や獣に変化する、それと同時に剣を振り下ろす

「「「「「「「がああああああッ!!!」」」」」」」

7匹の獣が同時に守護者に襲い掛かる

「なっ!・・ぐあああああああッ!!」

7匹の獣が守護者に次々襲い掛かり動きを拘束する

「くたばれっ!!!」

魔力刃を纏ったダインスレイフを上段から振り下ろす

バキャンッ!!!

守護者の胴体の騎士甲冑を完全に砕きダインスレイフの刃が守護者を切り裂く

「ぐっ・・がはっ・・」

頭から落下していく守護者・・ふん・・終わったか・・ダインスレイフを鞘に仕舞おうとした瞬間

バシュウウ・・

音を立てて守護者の体が消える・・これは・・まさか・・

トンッ・・

背中に軽い感触を感じ振り返るとそこには

「甘いのはどちらかな・・吹き飛べ・・ラグナロク・・ブレイカーッ!!!」

ゴウッ!!!

大出力の砲撃がゼロ距離で放たれた・・

「ぐっ・・があああああっ!!!!・・・おおおおっ!!!!はぁ・・はぁ・・くそ!!守護者ぁぁッ!!!!」

壁に叩きつけられる前に脱出し、体勢を立て直し上空を睨むとそこには無傷では無いが軽症しか受けていない守護者が居た・・馬鹿な・・俺が幻影に引っ掛かるなどと・・屈辱で顔を歪めると守護者は

「貴様の弱点はその慢心だ・・格下相手だからと最初から気を抜いていた・・その隙を着かせて貰った・・このまま決着をつけさせてもらうぞ!!!」

上空から突撃してくる守護者に

「舐めるなぁッ！！！」

踏み込んでその攻撃を弾き飛ばし、そのまま守護者の身体に掌を押し付け

「カオス・・ブレイカーッ！」

ほぼゼロ距離で砲撃を暴発させる・・俺も唯ではすまないが・・

「なっ・・ぐうううッ！！！」

暴発した魔力に吹っ飛ばされる守護者に追いつき

「くらえっ！！」

確実にダインスレイフの刃で守護者を引き裂く・・肉を裂く確かな手ごたえを感じた・・これは幻などではない・・

「くっ・・」

離れた所で膝をつく守護者に

「それは慢心もするだろう・・俺と貴様では体の作りが根本的に違うのだからな」

徐々に体の傷が修復されていく・・圧倒的な魔力による自己治癒能力・・これがあれば慢心するのも仕方ない事だろう・・俺はダインスレイフに付着した血を見ながら

「貴様の身体に呪印を刻んだ・・良く覚えているだろう?・・魔力を奪う術式だ・・これで・・貴様の不利は確定だな」

俺には自己治癒と魔力回復がある、決定的な一撃で無ければ俺は死なない・・しかし守護者にそんな能力は無い・・どれ程俺に近い魔力を持っていようが、魔力が減り続ける守護者に勝ち目は無い

「くっく・・貴様に勝ち目は無いな・・諦めたらどうだ?楽に殺してやるぞ?」

ダインスレイフを向けながら言うと守護者は

「勝ち目が無いから挑まない・・それは確かに正しい選択肢なのかもしれない・・だが!!!私は私の護りたい者を護る為にここに居る!!」

守護者の身体を覆う魔力が増大する・・守護者の叫びに呼応するように・・

「私は私の誇りと信念に賭けて・・貴様を倒す!!」

守護者の瞳に強い光が宿る・・その時俺には守護者にダブって神王の目を見た気がした・・忌まわしいあの瞳を・・

「おおおおっ!」

「!!ちぃっ!!」

突っ込んできた守護者の攻撃を飛んで交わす、俺は上空から守護者

を見ながら、守護者の状態を見る

「はぁ・・はぁ・・」

剣に寄りかかってやっと立ってる状態だ・・態々俺の剣で止めを刺す必要は無い・・ダインスレイフを鞘に戻し両手を広げる、それと同時に

キンッ!!

音を立てて守護者の身体を覆うように結界が発生する

「これは・・？」

驚く守護者に手を向け

「これで貴様の負けだ・・生と死・・その狭間で苦しむが良い・・デッド・オア・アライブッ!!」

「なっ・・ぐあああああああッ!!!!」

手を閉じると同時に結界が光り輝き大爆発を起こす・・これで終わりだ・・俺が勝利を確信していると

「はぁ・・はぁ・・ま・・まだだ・・まだ・・私は・・死んでいない・・」

！煙が晴れ守護者が姿を見せる・・全身から血を流しつつも・・守護者はまだその場に立っていた・・

（馬鹿な・・あれを喰らって生きている筈が・・）

自身の最大攻撃であるデッド・オア・アライブを受けて立っている、守護者に驚いたがそれは一瞬の事だった・・

（良く見ろ・・もうあいつは死に掛けだ・・これで終わる・・）

忌まわしい守護者との戦いもこれで終わりだ、俺はそう考えとどめの魔法の構築を始める・・もう細かい術式の必要な魔法なんて必要ない・・あいつの四肢を砕き命を刈り取ればいい・・誘導操作も・・シールドブレイクも必要ない・・ただ・・

「圧倒的な物量で押し潰せば良い・・」

終えの背後の無数の魔方陣が展開され、それから無数の漆黒の棘が発生する・・

「これで今度こそ・・とどめだ・・消えうせろ!!夜天の守護者よ!!ブラックレインッ!!!」

その言葉と同時に無数の黒い棘が守護者に向かって降り注いだ・・

私は降り注いでくる槍を見ながら、自分の状態を判断していた・・

（魔力はもう殆ど残ってない・・さっきの攻撃を防御するのに回してしまったから・・）

次に自分の体力を調べる

（剣は・・握れる・・脚も動く・・これだけの弾幕は回避出来んがな・・）

これだけボロボロでも・・私はまだ剣を握れる・・動く事が出来る・・

（ならば・・私のとるべき道は・・）

どうすれば良いかは判っていた・・防御も出来ない・・避ける事も出来ない・・私に残された道は・・１つしかない・・

（王何を考えているのですか!?早く防御を!!）

防御しろというセレスに

（そんな事をしたらもう私は動けない・・だから防御はしない!!）

私はそう返事を返すと同時に降り注ぐ黒い槍の中へと飛び込んでいった・・

「馬鹿が!!自ら死に急いだな!!」

ジオガディスの嘲笑を聞きながらただ足を動かす・・

ズガガガッ!!!

嵐の様な漆黒の棘が騎士甲冑を破壊していく・・

（何も考えるな・・駆けろ・・駆け続けろ・・あの場所に向かって・・）

行くべき場所は判っている・・考える必要など無い・・

ザシュ！！！

肉を裂く鈍い音と燃える様な痛みを感じるが・・それでも私の脚は止まらない・・止まれない・・

（止まってしまったら・・もう動けないから・・）

それが判っているから・・どれほど痛みを受けようが・・私は前に進み続ける・・

「いい加減にくたばれ！！夜天の守護者ッ！！」

苛々としたジオガディスの怒声と同時に降り注ぐ漆黒の雨の勢いが増す・・手にした剣で弾いているがその処理も間に合わなくなる・・ジオガディスまであと少しという所で

ズガン・・バチバチ・・

義手が弾き飛ばされ一瞬意識が飛びかける・・

ギリッ！！！

歯が砕けるほど噛み締め、飛び掛ける意識を無理やり繋ぐ

（届いた・・やっと・・届いた・・！）

ジオガディスまで後僅かに数メートル・・これで決める・・残された魔力を全て剣に込め

「ウ・・ウオオオオオオオオオッ！！！！！」

裂帛の気合を込めジオガディス目掛けて跳んだ・・

「この・・くたばり損ないがアアアアッ！！！」

「ジオガディスゥゥゥッ！！！」

お互いの剣が交差するその瞬間、ジオガディスの動きが鈍る・・

「ば・・馬鹿な・・何故・・貴様が・・その魔力を・・」

信じられない物を見たという感じで呟くジオガディス目掛けて

「私の勝ちだアアアアアッ！！！！」

オメガブレードを振り下ろした・・振り下ろした剣が命中した瞬間・・確かに私は見た・・ジオガディスの身体を覆うように存在する胴体に髑髏の文様を持つ異形の姿を・・

「ぐっがあああああああああああッ！！！！」

ジオガディスの悲鳴と同時にパンデモニウムの中を虹色の閃光が駆け抜けた・・

第１２９話に続く

# 第１２８話（後書き）

龍也さんＶＳジオガディス編・・決着・・・って・・まだですよ？
まだこの時は決着じゃないです・・もう少し後で真の決着がありますよ、次回は守護者の狂気と守護者の払った代償の話です・・そして闇・龍也さんの話です・・少しだけ流血・残酷描写・・があるかもしれません・・本当はこういう描写苦手なんですけどね・・そしてこの後のかなり暗めの話になる・・守護者消失編です・・はやて様やセッテと言った面々がどんな反応をするのか？・・楽しみにしていてください・・まぁ暗い話は好きじゃないので１話で終わらせるつもりですけどね・・それではあと少しで完結の「夜天の守護者」と私「混沌の魔法使い」にぜひ最後までお付き合いください、それでは失礼いたします

# 第１２９話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回は闇龍也と守護者の最後の話です、それと大分長くなりそうだったので前後編に分けました、連続投稿するのでご安心ください・・それでは今回もどうかよろしくお願いします

# 第１２９話

第１２９話

「はやてちゃん！！皆！！お兄さんからの連絡です！！」

一通り手当てを終えた所でシャマルからそう声を掛けられる、私達は慌てて通信機の傍に向かった・・

「ざ・・ザザ・・こちら・・龍也・・き・・聞こえるか？」

ノイズ交じりのこえに・・私は通信機を手に取り

「ちゃんと聞こえてるで！！兄ちゃんは大丈夫なんか！？」

兄ちゃんの様子を尋ねると兄ちゃんは

「問題ない・・私は無事だ・・ジオガディスも倒した」

わあああああっ・・

管理局員の歓声が聞こえる・・なのはちゃん達も喜んでいた・・

「後は動力室を破壊して脱出する・・心配する必要は無い・・」

セッテが私の手から通信機を引っ手繰り

「龍也様！！私は・・貴方が帰ってくるのを待っています！！無事

で帰って来て下さい！！！」

必死な声で言うセッテに兄ちゃんは

「大丈夫、ちゃんと帰る・・だから心配するな・・セッテ・・はやてに替わってくれ」

そう言われたセッテはしぶしぶという様子で通信機を私に手渡す

「それで・・皆無事なのか？」

兄ちゃんのその質問に私は

「皆無事やよ、ヴィータもなのはちゃんもスバル達も、怪我はしとるけど・・命に別状は無いで」

皆の様子を伝えると兄ちゃんは

「そ・・そうか・・よ・・良かった・・私はこれから動力室を破壊しに行く・・大丈夫だから何も心配するな」

繰り返し心配するなと言う兄ちゃんに少し違和感を覚えた・・そして次の瞬間・・とても小さな声で

「はやて・・お前はもう1人じゃない・・私が居なくなっても・・皆が居る・・だから泣くなよ・・」

僅かしか聞き取れなかった・・何か嫌な予感がして

「兄ちゃん？・・どうした・・「それでは通信を切る・・必ず帰る・

・だから心配するな」

それだけ言うと通信機から兄ちゃんの声は聞こえなくなった・・だが私は物凄く嫌な予感を感じ、上空に浮かんでいるパンデモニウムを見上げ・・

（神様・・私は何もいらん・・兄ちゃんが居ればそれで良い・・だから・・私から兄ちゃんを取らないで・・）

信じても居ない神様に私はそう願いを託した・・だが・・その願いは叶う事はなかった・・

「無事で帰るか・・くくっ・・最初で最後の嘘だな・・げほっ！！げほっ！！！」

通路に背中を預け私は自嘲気味にそう呟いた・・咳き込んだ口からは大量の血液が吐き出される・・私はそれを見て

「内臓が幾つか逝ったか・・まぁ・・良い・・あと少しだ・・」

ひび割れた剣を杖代わりにして立ち上がると、脳裏にセレスの声が響く

（王よ！！早くユニゾンを解除してください！！傷の治療をしなくては！！！）

必死な様子のセレスに

「大丈夫さ・・あと少し・・あと少しなんだ・・もって見せる・・治療はその後で良い」

後など無いと判っている・・それでもそういった私はゆっくりと歩き出しながら

「行くとするか・・全てを終わらせる為に・・おっと・・」

バランスを崩し壁に手を置く・・私は歯を食いしばり

（情けないぞ！八神龍也！！あと少し・・あと少しで全てが終わるんだ！！こんな所で倒れるな！！）

自分に言い聞かせるようにそう言うと私はゆっくりと動力室に向かって歩き出した・・長い間この時の為だけに生きていたんだ・・こんな所で力尽きる訳にはいかない・・まだ・・私のやるべきことは残っているのだから・・この時私は気付かなかった・・倒れ掛けた時手を置いた場所が光り始めている事に・・

運命とは時に残酷である・・それはこの世界でも例外ではなかった・・

「はやてちゃん！！空中に画面が！！」

シャマルに呼ばれて外に出る、外には仮想モニターが展開され始めていた・・

「何が映るんでしょう？・・・」

スバル達とモニターを見ていると・・音声が入り始める

『ポタ・・ポタ・・ズル・・ズル・・ビチャ・・』

何かが垂れる音・・そして引き摺られる音が聞こえる

「何だ？・・何の音だ？」

ヴィータが首を傾げる中映像が映し出される・・

「「「「「！！！！！」」」」」

私達はその映像を見て声にならない悲鳴を上げた・・

『はぁ・・はぁ・・あ・・あと少し・・あと少しだ・・』

ズル・・ズル・・

足を引き摺りながら進む兄ちゃんの姿・・だが義手は無く・・騎士甲冑ももう殆ど残っていない・・しかしそれよりも目に留まったのは、兄ちゃんの身体を貫通している、３本の漆黒の槍だった・・カタカタ・・歯がぶつかり嫌な音を立てる・・

「そ・・そんな・・ぜんぜん・・大丈夫やなんか無いやないか！！」

私は思わずそう叫び声を上げた・・兄ちゃんの身体からは血が流れ続けている・・出血多量で死に至るまではそう時間は掛からないだろう・・なのはちゃん達も顔が真っ青だ・・判ってしまったから・・このまま行けば兄ちゃんが死ぬと・・さっきの通信で言っていたの

は私達を安心させるための嘘だと・・

『ここから先は通さんぞ・・守護者』

!!ネクロの声、慌ててモニターを見るとそこには無数のＬＶ１、２にデクスに、数対のＬＶ３の姿があった・・

『やれ・・やれ・・まだ・・こんなに居たか・・しつこいな・・』

剣を構える兄ちゃんにネクロが

『くく・・死に掛けてるな?・・楽に始末できるよ・・何安心しろ、貴様の仲間もすぐに殺してやるよ』

ネクロがそう言うと同時になのはちゃんとフェイトちゃんが飛行魔法を展開しようとするが、それは止められた・・聞いたことの無い兄ちゃんの声によって

『殺す・・?・・くくっ・・ははははっ!!』

兄ちゃんが急に笑い出す、その様子にスバルが

「た・・龍也さん?・・・」

自分達の知る兄ちゃんとの差に声をなくす・・無論それは私達も同じだ・・動こうとしていたなのはちゃん達もモニターを見ていた

『ったく・・どいつもこいつも・・俺を苛立たせてくれるな!!俺の仲間を殺すだと!!・・やってみろ!!その前に俺が・・』

兄ちゃんの1人称が俺になった・・それに聞いたことの無い乱暴な口調に私達が驚いていると、オットーが

「こ・・怖い・・兄様だ・・嫌・・嫌だ・・あの兄様は見たくないよぉ・・」

ポロポロと涙を流すオットーに

「ぎり・・くそ・・八神の歪みは何も治ってなんかいないじゃないか・・私の馬鹿者が・・」

血が出るほど拳を握り締めるチンクさん・・それにノーヴェやディエチ達も

「「嫌だ・・あの龍也は・・見たくねぇよ・・」」

ポロポロと涙を流すノーヴェに

「何や!?何が起きるってい言うんや!!」

肩を掴んで揺さぶるがまるで反応が無い・・なのはちゃん達も同じ様に揺さぶっているが皆反応が無い・・これかた何が起きると言うんや・・私がモニターを見上げると同時に

『俺が・・貴様らを・・殺し尽くしてやる・・はやて達が居なくて良かった・・こんな姿・・見せる訳にはいかんからなっ!!!』

兄ちゃんが右手で顔を覆う・・それと同時に蒼い魔力が徐々に漆黒に染まっていく・・まるでネクロの様に・・

『見せてやるよ・・俺の狂気の形を！！！ディランス・・ディアボロ・ダス・エクストレーム・トラウリヒ・ドラッヘッ（世界の中心で泣き続ける大悪魔龍）！！』

ズドンッ！！

まるで爆発したような音が響き、一瞬モニターが消える・・そして再び映し出されたモニターには・・兄ちゃんだった者が立っていた・・禍々しいまでの黒い甲冑に蝙蝠の翼・・そして顔の右上を隠すような仮面・・その眼から覗く兄ちゃんの眼は真紅に染まっていた・・その姿はまるでネクロの様だった・・

『ウウウウ・・ガアアアアアアッ！！！』

咆哮と共にデクスが襲い掛かるが、兄ちゃんは素手でデクスを掴み

『やかましいんだよ！！！とっととくたばれっ！！！』

ズドンッ！！！

乱暴にデクスを地面に叩きつけ、そのままデクスの頭を踏み潰す

グチャッ！！！

「「「ひっ・・」」」

肉が潰れる生々しい音にスバル達が引き攣った声を上げる

『さぁ・・始めようか・・一方的な殺戮をな！！！』

兄ちゃんはそう言うとネクロ達の群れに飛び込んだ・・私達はその日兄ちゃんの歪みと狂気を見た・・それは見たくなかった姿でもあった・・

第１３０話に続く

## 第１２９話（後書き）

少し長くなりそうだったので前後編に分けました、次の話で龍也の暴走バージョンが登場します、守護者の狂気・・龍也の歪み・・かなり怖い感じの話のつもりです、それでは次の更新もどうかよろしくお願いします

# 第１３０話（前書き）

今回は少しだけ残酷描写と流血描写があります、ですのでご了承ください・・しかし本音を言えば、残酷と流血描写は使いたくなかったんですけどね・・仕方なく・・本当に仕方なく使いました・・出来ればもう2度と使いたくないです、それでは今回もどうかよろしくお願いします

# 第１３０話

第１３０話

「嘘だ・・こ・・こ・・こんなの・・龍也じゃない・・」

フェイトちゃんが震えた声で言う、私もそう思った・・モニターの兄ちゃんは

『くく・・ははははっ!!どうした!!!たかが死に掛けが１人だぞ!!!掛かって来ないのかっ!!!』

ゴキンッ!!!

掴んでいたＬＶ２の首をへし折りそのまま投げ捨てると同時に砲撃を放ち跡形も無く消し飛ばす

「何なんだよ・・何なんだよ!!!あれは!!!」

ヴィータが悲鳴にも似た声を上げる・・モニターに居たネクロは既に殆ど全滅している・・兄ちゃんの爪に脚に・・翼に・・尻尾に引き裂かれ・・あるいは叩き潰され・・息絶えていた・・それまで無言だった・・ハーティーンが

「ディランス・・か・・」

そう呟くハーティーンにシグナムが

「お前！あれが何か知ってるな！！答えろ！！あ・・あれは・・兄上はどうなったんだ！？」

シグナムがそう怒鳴ると、ハーティーンは

「あれはディランスという・・一時的にネクロの領域に足を踏み込み・・身体能力を大幅に高める禁呪・・まさか守護者が使えるとは思ってなかった・・」

ハーティーンの話を聞いてると

『ひ・・ヒイイイイッ！！！』

ネクロが逃げ出すが次の瞬間

ダンッ！！！

兄ちゃんに頭を踏まれ床に叩きつけられる・・

『がっ・・がっ！！』

腕を出鱈目に動かし兄ちゃんの足の下から逃れようとするが、兄ちゃんの脚は全く動かず次の瞬間

『死ね・・』

グシャッ！！

鈍い音を立ててネクロの頭蓋は踏み砕かれた・・

『終わりか・・うっ・・げほっ!!げほっ!!!』

パキャンと音を立てて仮面が砕けると兄ちゃんは蹲り咳き込む、咳き込む度に血が吐き出される・・それを見たなのはちゃんは

「し・・死んじゃう・・龍也さんが・・死んじゃうよ・・」

震える声で言うなのはちゃん・・にフェイトちゃんが肩に手を置く・・その間に兄ちゃんは立ち上がり・・剣を杖代わりに進んでいく

『はぁ・・はぁ・・これで終わりだ・・あと少し・・あと少しで良いんだ・・動いてくれ・・』

兄ちゃんは足を引きずりながらパンデモニウムの奥に向かっていた・・

『ここだ・ここが・・ぐっ・・動力室だ・・』

動力室に辿り着いた兄ちゃんは

『はぁ・・はぁ・・残りの全魔力・・持っていけ!!!!』

ズドン!!

兄ちゃんの一撃は動力室を粉々に破壊し、パンデモニウムが徐々に落下を始めると同時に兄ちゃんは倒れ込み

『はは・・やったぞ・・・これで終わりだ・・ごほ!ごほ!!・・はぁ・・はぁ・・私も限界か・・』

騎士甲冑とユニゾンが解除され、倒れこむ兄ちゃんの隣にセレスさんが姿を見せ

『王よ、まだ間に合います、速く脱出を!!!』

脱出を進めるセレスさんに

『この死に掛けの体で脱出しろ?断る・・どうせ死ぬんだ、はやて達を悲しませる必要は無い・・私はここで大人しく逝くとするよ』

兄ちゃんはパンデモニウムの窓から空を見上げるとセレスさんは

『何を言ってるのです!!早く脱出を!!手遅れになる前に!!』

必死な形相で逃げるように言うセレスさんに兄ちゃんは

『私は・・ここに戦いに来たんじゃないんだ・・私は・・ここに死にに来たんだ・・』

私は目の前が真っ暗になるのを感じた・・死にに?・・何を言ってるの?・・私が混乱してると、セレスさんが

『何を言っているのですか?』

その言葉に兄ちゃんはうっすらと微笑みながら

『お前は知らないんだな・・なら教えよう・・天雷の書は契約の時に私に問いかけた・・『護りたい者を護り1人で死ぬか?』それとも『護りたい者を護れず、一緒に死ぬか?』と・・私は迷わず答え

た・・『護りたい者を護り1人で死ぬと』・・すると天雷の書は見せてくれた・・私がこの場所で1人で死ぬ未来を・・私はそれからこの場所で死ぬために生きて来た・・』

死ぬ為に生きていた?・・兄ちゃんの独白がどこか遠くに聞こえた・・

『まるでアーサー王の神話じゃないか・・死ぬと判っていても戦う事を選んだ・・げほっ・・げほっ・・私はアーサー王じゃないでも・・自分の進むべき道は判っていたつもりだ』

咳き込む兄ちゃんの顔色は急速に青白くなっていく、死人のように・・

『だから・・私は姿を隠した・・どうせ死に行く男だ・・いまさら・・はやて達の前に姿を見せてどうすると思っていたから・・でも・・私は会いたかった・・もう一度話をしたかった・・もう一度はやての頭を撫でてやりたかった・・だから・・はやて達の前に行った・・悲しませると・・泣かせてしまうと判っていたのに・・私は会いたかった・・もう一度抱きしめてやりたかった・・』

兄ちゃんはそこまで行ったところで言葉を切り、空を見上げ

『だが・・私の役目は終った・・はやて達は強くなった・・もう私が居なくても大丈夫だ・・守護者の盾はもう必要じゃないんだ・・』

違う・・私達にはまだ兄ちゃんが・・夜天の守護者が必要や・・ポタポタと私の目から涙が零れ落ちる・・くぐもった笑い声を上げながら兄ちゃんはセレスさんに

『なぁ・・セレスは神を信じるか？』

神を信じるかと尋ねる兄ちゃんにセレスさんは

『私は・・』

言葉を詰まらせるセレスさんに兄ちゃんは

『私は信じてない・・だが今だけは信じても良い・・神は・・信じる者の願いを叶えてくれるんだろう？・・神よ・・もし居るなら私の願いを叶えて欲しい・・はやて達は充分苦しい思いをした・・もう良いだろう？・・これから先はやて達にこれ以上苦しい思いをさせないで欲しい・・もしまだ過酷な運命が待っていると言うのなら・・私を地獄に落とすが良い・・はやて達も分も私が背負おう』

あれほどボロボロなのに・・私達を心配している兄ちゃんの姿に私達は涙を流す事しか出来なかった・・

『はは・・だが今まで神を信じなかった私の願いなど叶えてくれる訳も無いか・・・ごほっ！！・・はぁ・・はぁ・・もう限界か・・さ・・最後に・・』

兄ちゃんが服に手を突っ込み中からロケットを取り出す、それは兄ちゃんと私の写真が収められている物だ・・それを開いた兄ちゃんは

『くく・・ははは・・神様とやらは私が嫌いなようだ・・さっきまで・・さっきまで見えてたのになぁ・・』

乾いた笑い声を上げる兄ちゃんの目は白く濁っている・・もう何も写してはいないだろう・・兄ちゃんはセレスさんの方を見て

『セレス・・お前は脱出しろ・・そしてはやてと契約しろ・・もう私に付き合わなくていい・・今までありがとう、さぁ・・行くんだ』

兄ちゃんにそう言われたセレスさんは

『お断りします、天空の青き風は何時如何なる時も貴方と共に・・』

そう言ったセレスさんは兄ちゃんの隣に座り腕を掴む・・兄ちゃんは驚いた表情を見せてから

『・・馬鹿だな・・お前は・・でもありがとう・・セレス・・1人は嫌だから・・嬉しいよ・・寂しいのは・・嫌だからなぁ・・もうあんな寂しい思いをしたくないからな・・』

兄ちゃんはそう言って笑うと震える手で十字を切りながら

『これから・・先・・はやて達の進む道に・・幸福・・があらん事を・・』

パチャッ・・

兄ちゃんの手が血の海に沈む・・開かれた手には私と兄ちゃんが笑っている写真が写されたロケットが合った・・そしてそれを見た私は理解してしまった・・兄ちゃんが■■■と・・私は大粒の涙を流しながら・・いや・・私だけではない・・皆涙を流していた・・あ・・ああ・・居なくなってまう・・私の・・大切な人が・・

『王よ・・貴方を独りだけで逝かせはしません・・私も・・貴方と共に・・』

セレスさんがしゃがみ込み兄ちゃんを抱き抱える・・それと同時に炎が上がり兄ちゃんとセレスさんの姿を隠す、私が慌てて騎士甲冑を展開しようとしたが・・

「！何でや！？・・何で起動出来ないんや・・」「すまない・・」スカリエッティ？・・あんた何したんやッ！！！」

騎士甲冑が展開できず私が慌ててるとスカリエッティが謝る、私が・・私だけじゃない・・皆が詰め寄るとスカリエッティが

「龍也に頼まれていたんだ・・時間と同時に君達のデバイスが起動出来ないようになるようにしてくれと・・」

そんな・・本当に兄ちゃんは死ぬつもり・・私が慌てて

「今すぐ解除せえ！！まだ間に合う・・「不可能だ・・今日一日はもう起動出来ない・・私のデバイスも・・他の局員の物も・・」・・そ・・そんな・・」

助けに行ったら助かるかもしれない・・それなのに・・私達は動く事が出来ない・・絶望感でその場にしゃがみ込むと

ズドンッ！！ズドンッ！！！

パンデモニウムが小爆発を繰り返しベルカの自治区に向かって落ちていく

「いや・・嫌や・・こ・・こんなの・・嘘や・・」

私の目の前でパンデモニウムが炎に包まれていく・・私は首を振りその光景を否定する・・こ・・こんなのって・・無い・・だが・・現実は変わらない・・パンデモニウムは爆発し、その中で兄ちゃんは死んでいくと言う現実は・・

「こ・・こんな・・事になるなんて・・私は・・自らの手で・・親友を・・」

膝から崩れ落ちるスカリエッティ・・それと同時に

ドンッ!!ドンッ!!

パンデモニウムが爆炎に呑まれ始める・・

「嫌や・・いやあ・・こんなの・・こんなのって・・」

私達が見ている中、パンデモニウムは爆発し四散する・・それと同時に

「「「「「「「い・・いやあああああああっ!!!!!!!」」」」」」」

大勢の悲鳴が響き渡った・・その中に私の悲鳴も含まれていただろう・・この日・・私達は大切な人を失った・・

パンデモニウムが落ちた日の夜・・

ガチャ・・ガチャ・・

パンデモニウムの残骸が動きその中から

「己・・夜天の守護者・・よくも俺の城を・・」

ボロボロのジオガディスが姿を見せる・・その目の前に

「ジオガディス様、ご無事でしたか」

姿の無かったヘルズが姿を見せる、ジオガディスは

「くそ、忌々しい・・だが・・守護者はいない・・俺達の勝ちは決まった・・行くぞヘルズ」

「畏まりました・・」

マントを翻し歩き去るジオガディスの背を追って歩き出すヘルズ・・

2人の姿は闇の中に消えていった・・闇の中を歩いているとジオガディスが

「う・・うぐっ・・」

胸を押さえ蹲る・・ヘルズが慌てて駆け寄ると

「だ・・大丈夫だ・・休めば治る・・」

手で制し立ち上がったジオガディスは

「あの最後の一瞬の魔力光・・あれは・・確かに・・」

何かを考え込む素振りを見せるジオガディスにヘルズが

「何か気になる点でも？」

そう尋ねられたジオガディスは

「いや、取るに足らぬ事だ・・守護者は死んだ・・もう考える必要も無い・・後は六課の魔道師達を殺し、術式を完成させればいい・・そうすれば・・俺達は帰れる・・あの場所に・・」

遠い目をするジオガディスにヘルズは

「そうですね・・長い時間が経ちましたが・・漸く私達の願いが叶う・・その為にも・・今は休みましょう・・」

「そうだな・・傷を癒さねば・・油断していると足元を掬われるからな・・」

ゆっくりと闇の中に歩いていく、ジオガディスとヘルズ・・ジオガディスに対抗できる者はもう居ない・・夜天の守護者は死んだのだから・・・

パアアアッ・・・

柔らかな虹色の光が龍也を包み込む・・それを見たセレスは

「これは・・まさか・・この方は・・いや・・そうに違いない・・あの時の」

セレスは何かを思い出したような表情をすると、龍也の亡骸を胸に抱き

「死なせません・・貴方は・・貴方だけは死なせる物か・・命令だからじゃない・・私の心が・・それを願っている・・」

セレスがそう呟くと同時に虹色の光が龍也とセレスを包み込んだ・・

「融合騎として生まれ・・兵器として扱われ、磨耗した私に、名と感情を教えてくれた・・貴方の為なら・・この命・・惜しくは無い・・」

そこまで言った所でセレスは穏やかに微笑み、龍也の顔を見て

「私はやっとこの気持ちの正体が判りました・・王よ・・私の愛しい人・・私の存在意義に賭けて・・貴方を死なせはしません・・その為に私の命が尽きたとしても・・それは本望です・・」

次の瞬間・・セレスと龍也の姿はパンデモニウムの中から消えていた・・そしてこの日から1年後・・この世界は大きく動き始める・・

第131話に続く

## 第１３０話（後書き）

どうでしたか？初めての試みのせいで自信がかなりありません、ですので感想を貰えると嬉しいです！！次回は１年後、はやて、チンク、カリムサイドで進んで行きます！

さぁ～ラストスパートですねぇ～最終話まであと少し・・最後まで駆け抜けます！！！（番外編とかＩＳもやりますけどね！）それでは次回の更新もどうかよろしくお願いします！！

# 第１３１話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです！！今回は「守護者喪失」の話です、時間軸は１年後で、暗い目の話なので１話だけで終わらせるつもりです、サイドは、はやて、チンク、ティアナ、カリムの４つのサイドです、それぞれが思うこと・・それが重要な点ですね・・それでは本編始まります

# 第１３１話

第１３１話

もう・・いない・・あの人が居た場所には誰もいない・・私はもう住む者のいない壁に手を置きながらそんな事を考える・・１年・・１年待った・・もう・・限界だった・・ちらりと鏡を見て苦笑を浮かべる

「はは・・変わって・・もうたね・・」

髪は腰元まで伸び、前髪で目が見えない・・１年で私は大分変わってしまった・・いや・・私だけでは無く皆だ・・ヴィータは兄ちゃんが死ぬ訳無い！！と言い、スバルやティアナたちと共にパンデモニウムの瓦礫を捜索している・・１年で遺品も何も見つからない・・だから生きていると信じ探し続けている・・シグナムは前まで以上に新人の指導を厳しくした・・リィン達もヴィータ達同様、兄ちゃんの生存を信じ続けている・・私もそうだったが・・近くの埃の溜まったソファーに腰掛ける

「疲れてもうたんよ・・心では信じてる・・でも・・」

兄ちゃんと皆で撮った写真に手を伸ばす・・

「１年や・・１年は長すぎた・・」

写真立てにポタポタと涙が落ちる・・

「もう限界なんよ・・待つのは・・」

帰ってくるといった兄ちゃんの言葉を信じるのも疲れた・・懐をまさぐり1枚の封筒を取り出す・・そこには退職届と書かれていた・・

「兄ちゃん・・私・・管理局辞める・・海鳴に戻ろうって思うんよ・・海鳴で兄ちゃんのとの思い出を思い出しながら・・死ぬまで独身でいようかな?ってさ・・」

私には兄ちゃん以外の男なんて考えられないし・・誰とも結婚せずに独身でいようと決めた・・私は長い髪を肩の後ろに回しながら立ち上がり

「海鳴に戻る前に髪・・切ろうかな?」

今の私は1年前の自分と違いすぎる・・やはり海鳴に戻る前に元の髪型に戻すべきだろう・・

「髪切りに行ってから、レジアス中将に辞表渡そ・・」

そう呟きながら兄ちゃんの部屋を出て、私は街へと歩き出した・・

「やはり・・はやての出した結論は管理局を去る事か・・」

私は歩き去るはやての後背を見ながら呟いた、八神が消えてからここはまるで火が消えたようだった・・私はゆっくりと歩きながらこの1年の事を思い出していた・・八神がいる間は良く笑っていたリ

ィン達からは笑顔が消え、スバル達は殆ど六課には戻らない・・父さんは、地下の研究室に篭りきり、大切な姉妹にも色々と問題が起きている・・寮に足を踏み入れると

「セッテちゃん?・・お昼置いておきますからね、ちゃんと食べてくださいね?・・はぁ・・こっちが参ってしまいますわ・・あら、チンクちゃんどうしたんです?」

セッテの部屋の扉の前に食事を置いていた、クアットロに話しかけられ、私は

「セッテが心配でな・・どうだ?まだ部屋からは出てこないか?」

ここ1年セッテは部屋に篭りきりだ、食事は運べば食べるし、着替えも皆が寝静待った頃に、洗濯機の前に置いてある・・でも私はここ1年セッテの顔を一度も見ていない・・いや私だけではなく姉妹全員だ・・一縷の希望を持って尋ねるとクアットロは

「出て来てないですね・・声は少し聞こえましたけど・・あまり健全と言える内容ではないですね・・」

溜息を吐きながら言うクアットロに

「なんと言っていたんだ?」

セッテが何と言っていたのか尋ねるとクアットロは少し俯きながら

「死ぬ訳無い・・死ぬ訳無い・・あの方は帰ってくる・・絶対・・私のところに・・ですわ・・」

私達の中で最も八神の生存を信じているのは、セッテだ・・無論私も信じているが・・私はそんな事を考えながら椅子から立ち上がった、すると

「どうしたんですか？」

首を傾げながら尋ねてくる、クアットロに

「少しな考えたい事がある・・セッテのことは頼む」

セッテのことはクアットロに任せた方がいい、セッテと最も仲が良いのはクアットロだからだ・・私はそう言うと自分達の部屋を後にした・・

「ここが落ち着くな・・」

八神が良く背中を預け、本を読んでいた木に背中を預け空を見上げながら

「八神・・生きてるなら早く出て来い・・皆心配してるんだぞ」

誰に聞かせるでなく呟く

「お前が居ないと私達は駄目なんだ・・だから・・生きてるなら・・早く出て来てくれ・・頼む・・私だって・・限界が近いんだ・・」

あの太陽な暖かさ・・包み込むような慈愛・・1年経った今でも鮮明に思い出せる・・

「八神・・私はお前に・・会いたい・・」

この1年ずっと思い続けていた事を呟き、私はその場を後にした・・

チンクが六課に戻った頃、ベルカ自治区の外れでは・・

「スバル、次はここよ、この奥に空洞があるわ、慎重にやって」

手元の機械を見ながらスバルに言うと

「了解・・これくらいかな？・・神破光拳ッ！！」

左手に極光を集め軽く瓦礫を殴りつけるスバル、するとぴしぴしと音を立てて瓦礫は崩れ去った・・私はそれを見ながら

「凄いわね・・大分使いこなせてるんじゃないの？極光」

私がそう尋ねるとスバルは苦笑いを浮かべながら

「全然だよ、ＩＳと併用して出来るだけ・・本当ならもっとスムーズに出来るよ」

確かに・・映像で見た龍也さんのやり方とは全然違うか・・私はそんな事を考えながら

「行きましょう、どこに続いてるか判らないけど・・龍也さんが生きてるって証拠を見つけるわよ」

「うん！」

ＢＪを解除したスバルと共に私は、瓦礫で塞がれていた通路を歩き始めた・・

「ヴィータさんに報告しなくて良いの？」

通路を懐中電灯で照らしながら尋ねてくるスバルに

「一応報告はしてあるわ、でも部隊長の事で気になる事があるから私達だけで捜索してくれってさ」

先ほど来たメールの内容を話しながら通路を進んでいると

「「ここは・・」」

私とスバルは思わずその場で立ち止まった・・通路に壁にべったりと張り付いた血の跡・・何かを引き摺ったような痕・・間違いないここは・・

「動力室に続く道・・」

１年前に映像で見た場所に間違いが無かった・・ゆっくりと奥に向かって歩きながら

「この奥だよね・・龍也さんが炎の包まれたのは・・」

爪の痕、壁に空いた大穴を見ているとスバルがそう呟く、私は

「そうね・・もし・・龍也さんが死んでるなら・・遺体があるかも

しれない場所ね」

冷静に言ったつもりだが、私の声は震えていた・・スバルは自分の身体を抱くように

「引き返さない？・・皆で来た方が・・「私は信じてるもの・・龍也さんが死んでないって・・だから・・この目で確かめる、嫌ならスバルだけ引き返せば？」・・行くよ！！私だって信じてるもん・・龍也さんが死ぬ訳無いって・・」

そう言うスバルに頷き、私達は動力室の跡地に足を踏み入れた・・

「何も無いね・・」

スバルが呟く・・確かにそこには何も無かった・・あるのは血痕位で、最悪の結果の１つである龍也さんの遺体や、壊れた騎士甲冑の破片なども何も無かった・・私が辺りを見回していると足に何かが当たる

「何かしら？」

しゃがみ込んで足に当たったものを拾い上げる・・それは

「セレスさんの杖？」

龍也さんの融合騎であるセレスさんの杖だった・・私がそれを両手で持つと同時にその杖は待機状態である、ペンダントに戻った・・

（どうして？・・デバイスだけなんてあるなんておかしいわね・・とりあえず・・部隊長に渡しましょう・・）

そのペンダントをポケットにしまっていると、スバルが

「早く六課に帰ろう！！皆に教えてあげないと！！」

戻ろうと私を呼ぶスバルに

「判ったわ・・一度戻りましょう」

私はスバルと合流して動力室に続く道を引き返し始めた・・私は暗い通路を歩きながら

（生きてる・・龍也さんは生きてる・・これじゃあ少し弱いかもしれないけど・・確かな証拠・・早く皆に教えてあげよう）

これで少しは六課も明るくなるかもしれない・・私とスバルはそんな事を考え大急ぎでベルカの自治区を後にした・・

「何か見つかったのかしら・・？」

走り去るバイクを教会の窓から見ながら私は呟いた・・八神中将が居なくなって１年・・公式では死亡扱いだが、一部の魔道師達（六課や１０８部隊）は八神中将の生存を信じ探し続けている・・私がそんな事を考えてると

「義姉さん、僕に何の様？」

ヴェロッサが扉に背中を預けながら尋ねてくる、私は

「とりあえず座ってください、話はそれからです」

座るように促すとヴェロッサは

「怒こられるような事はした記憶が無いけど・・どうしてそんなに怖い顔をしてるの？」

からからと笑うヴェロッサに

「パンデモニウムの中から運び出した物を出しなさい」

若干睨みながら言うとヴェロッサは

「何のこと？・・僕は何もしてないよ？・・「正直に言いなさい、八神中将の遺品を運び出したんでしょう？」・・ふう・・まぁ・・それは考えたんだけどね？・・はやてが悲しまないようにって・・「なら・・」話は最後まで聞いて義姉さん・・でもね何も無かったんだ」

その言葉に私が停止してるとヴェロッサは

「パンデモニウムが落ちてすぐ、無限の猟犬で遺品を回収しようと思った、でもね何度調べても何も出て来ないんだ・・考えられるのは1つ・・龍也は死んでいない・・炎は上がっていたけど人の身体を焼き尽くすほど強力な火じゃない・・つまり龍也はどこかで生きてるんだ、どうして出て来ないのか判らないけどね・・これで話は終わり？・・それじゃあ僕は帰るよ」

ウィンクしてから出て行くヴェロッサを見ながら、私は

「遺品が無い・・死んではいない？・・どういう事・・！！予言が！」

机の上に置いてあった予言が光り輝き、次の瞬間には書かれていた文字が全く別の物に変わっていた、しかも・・

「これは読める？・・どうして？」

翻訳しなくてはいけない文字が何故だか今回はスムーズに読むことが出来た・・予言が光っている事と関係しているのかもしれない、長い間この能力を使っているがこんな事は始めてだ・・私はゆっくりと予言を読み始めた・・

『消え去りし守護者は大いなる守護の力を手に再び世界に君臨する、その時守護者は王と共に神の座を手にする、だが滅びはそれで止める事叶わず、大いなる不の化身もまた3柱の魔王と共に蘇る。その時こそ神なる守護者の本当の力が目覚める時、守護者は終焉と創世の力を手にするだろう・・』

「これは・・ドーンッ！！！・・何事ですか！？」

予言を読み終えると同時に外から爆音が響き渡る、慌てて窓の外を見ると

「クラナガンの方向・・まさか・・ネクロ！？」

クラナガンの方向から黒煙と無数の黒い影が見える・・恐らく黒い影はネクロだろう・・私は慌てて自分の部屋を後にした・・この爆

音こそが停まっていた時が再び動き出した証拠であった・・

第１３２話に続く

# 第１３１話（後書き）

・・微妙な出来でした・・こういう感じの話はとても苦手ですね・・出来ればもうこういう話はしたくないです・・自分の小説のレベルが上がるまでは・・さて次回でかなり話が動き始めます、守護者の復活の話です・・龍也の登場は少しですけどね・・その後は龍也サイドの話になります、その後でジオガディス戦２↓不の神ヴェルガディオス１↓覚醒↓龍也無双↓決着↓龍也帰還後の六課↓ＥＤ↓プロローグ↓第２部へ・・の予定ですね・・こうして見ると少し長いかも・・ＰＣ禁止なので中々思うとおりに執筆できませんが、最後まで頑張るのでどうか最後までお付き合いください、それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします！！

# 第１３２話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回は少し戦闘描写ありと今まで登場が延期延期になっていた３騎士も登場します、あんまり長くない話（予定）です、それでは本編始まります！！

# 第１３２話

第１３２話

時間は少し遡る、髪を切り終え本局に向かって歩いていると隣のヴィータが

「なぁはやて、本当に辞めちまうのか？管理局」

私は少し考えてから頷き

「うん、辞める・・兄ちゃんも居らんし・・なんかクラナガンに居るのも辛い・・海鳴でのんびり暮らそうかなって思ってる」

自分の考えを話すとヴィータは

「そっか・・それなら仕方無いな・・でも兄貴を見つけたらすぐに連れてくからな！」

笑いながら言うヴィータと話をしながら歩いていると

「くっく・・見つけたぞ・・夜天、鉄槌！」

どんよりとした闇が広がりそこから漆黒の甲冑と翼を持った男が姿を見せる・・その男は間違いなく

「「ジオガディス・・」」

１年前に兄ちゃんと相打ちになり死んだ筈のネクロの王だった・・

ジオガディスは楽しくてしょうがないと言う表情を浮かべながら

「くく、俺が死んだと思ったか?残念だったな・・忌々しい守護者の一撃で傷は負った物のあの程度で俺は死なん、まぁ・・人間である守護者はくたばったようだがな」

嘲笑うような口調のジオガディスを睨むと、ジオガディスは

「俺が憎いか?・・ならどうする?俺を殺すか?2人掛でも構わんぞ?所詮人間俺には勝てん」

漆黒の魔力がジオガディスを包み込む、凄まじいまでの威圧感だ兄ちゃんと同等かそれ以上・・私は冷や汗を流しながら

「行くでヴィータ?」

「おう」

2人同時に騎士甲冑を展開しジオガディスへと向かっていった・・はやて、ヴィータがジオガディスとの戦闘を始めた頃クラナガンの市街では

「くっ!!どうなっているんだ!このネクロの数は!!」

「「「キキーッ!!!」」」

無数のネクロに囲まれ動きを封じられたシグナムが怒鳴ると

「落ち着け、ここは各個撃破だ!」

チンクが蹴りを放ちネクロを吹き飛ばすと同時に

シャッ！！シャッ！！

３本のブーメランが飛んできてネクロをばらばらに切り刻むと同時に

「殺す・・殺す！！」

セッテが凄まじい殺気を身に纏い、シグナムとチンクを飛び越えネクロへと襲い掛かった・・それを見たシグナムは

「チンク、セッテの援護に回るぞ！このままでは危険だ」

「判っている！！」

我武者羅に暴れまわるセッテの援護に回った・・その頃六課に居たなのは達も

「行くよ皆！」

「「「「了解！！」」」」

スバル達を連れてシグナム達の所に向かっていた・・そしてクラナガンの外れでは

「・・始まっている・・急がねば・・」

赤いフード付きの外套を身に纏った男がそう呟くと同時に、炎、氷、風が巻き起こり、肩膝立ちの３人の女性が現れる、男は３人に

「お前達はシグナム達を頼む、俺は・・俺の成すべき事をする」

「「「了解いたしました！！」」」

現れたときと同じ様に消える3人の女性を見ながら男は黒煙を見ながら

「今助けに行くからな・・」

首から提げた剣十字を握り締め風と共にその場から消えさった・・

「クリスタルビローッ！！！」

「ラケーテンブレイカーッ！！」

はやてと同時に魔法を発動させるが

「くっく・・無駄無駄！！」

ジオガディスの纏う魔力に阻まれ、届く事が無い・・

「弱い弱すぎる！！所詮は人間暇つぶしにもならんな！！」

ジオガディスが剣を振るうとそこから漆黒の魔力刃が放たれ、私とはやてに迫る

「「プロテクションッ！！！」」

2人でプロテクションを発動させるが一瞬で砕け弾き飛ばされる

「くっ・・無茶苦茶だ・・どんだけ強いんだよあいつ」

悪態をつきながら身体を起こすとジオガディスが

「ほう、まだ立つか・・中々に頑丈だな・・まぁ良い、貴様らを殺してリンカーコアを頂こうか」

正眼に剣を構えるジオガディスからは凄まじい殺気が放たれ始めていた・・どうやら本気らしい・・私は背中に冷たい物が流れるのを感じながらグラーフアイゼンを握り締め

「うっせぇッ!!私達がお前をぼこぼこにしてやんよ!!行くぞはやて!!」

「うん!!」

2人で同時に攻撃を仕掛けるが

ピタッ!!

「「なっ!?」」

アイゼンとゼロアームズを片手で止めたジオガディスはにやりと笑い

「遊びは終わりだ、そうそうに片付けさせて貰うぞ!!」

そこから剣から漆黒の砲撃を放つ、ゼロ距離で砲撃を食らった私とはやては

「「きゃあああああッ！！！」」

悲鳴と共に凄まじい勢いで弾き飛ばされた・・

「げほっ・・げほっ・・なんて威力や・・騎士甲冑がボロボロや」

ひび割れ崩壊している騎士甲冑を見ながら言うはやての上空にジオガディスが立ち

「まずは夜天と鉄槌のリンカーコアか・・悪くない・・守護者の次に上質なリンカーコアだからな・・喜べ貴様らの愛しい愛しい守護者の元に送ってやるぞ・・カオス・・ライトブレイカーッ！！！」

巨大なベルカ式の魔方陣から凄まじい砲撃が放たれた・・私はそれを見ながらどこか冷静に

（避けるのは無理か・・ここで終わりか・・）

ダメージのせいで避けるのは無理、かといって防ぐのも無理・・私は自分でも驚くくらいあっさりと諦めた・・

（これで良いのかも・・死んだら・・兄貴に会えるかも・・それなら悪くないかな・・）

兄貴はもう死んでいるのかもしれない・・そう言う考えが私の中にはあった・・だからこれで良いのかも知れないと目を閉じた直後、背後から

「クォ・ヴァディス！！！」

どこかで聞いた様な男の声と轟音が響く、驚きながら振り返るとそこには

「・・・」

赤い外套を身に纏った男が立っていた・・私は思わず

「あ・・兄貴?・・」

全く違う雰囲気なのに兄貴の姿にダブって見えた・・男は虹色の魔力を剣の形に変化させ、ジオガディスへと向かって駆け出した・・その時私は確かに感じた・・柔らかい包み込むような風を・・

「くそっ!!きりが無い!!!」

高町達と合流し、ネクロと戦闘をしているが数が減る気配はまるで無い、倒しても倒しても影から出てくるのだ

「早く、はやてちゃんに合流しないといけないのに・・あっちにはジオガディスが居るんでしょう?」

そう尋ねてくる高町に頷きながら

「ああ、この魔力反応は間違いなくジオガディスだ、主はやてとヴィータだけでは勝てん!!早く加勢しなければ!!」

近寄ってきたネクロを両断しながら言うと上空から

「そうは行かん、ここから先は通行止めだ」

恐らくＬＶ４であろう、ネクロが姿を見せ、背中に背負った斧を抜き放ちながら

「守護者と共に居ただけの事はある・・だが所詮雑魚は雑魚、俺たちの敵ではないな」

ＬＶ４が指を鳴らすと無数の闇が広がりそこからＬＶ２、３が続々と姿を見せる

「俺達の数は１０００体、幾ら貴様らの魔力が多くても１０００体は無理だろうな・・じっくりとなぶり殺しにしてやる」

私はネクロを睨みながら

（流石にこれは無理かもしれん・・２手に別れるか？・・いや駄目だ・・全員でなければ・・）

私がどうしようか考え始めた直後、私達の後方から女の怒声が響く

「しゃがめ！！シグナムッ！！」

私がその怒声に反応し、しゃがむと同時に

「炎の断罪！！」

「クレセントハーケンッ！！」

「アブソリュートストームッ！！」

炎を纏った剣の大群、三日月形の魔力刃、吹雪がネクロ達を呑み込み消滅させる、それと同時に私の前に3人の女が着地する、各々がデバイスを油断無く構えている・・私はその1人に見覚えがあった・・

「アイギナ・・？」

天雷の騎士の1人のアイギナだった・・では後の2人は私の知らない騎士になるのだろう・・アイギナは街の中心に向かって剣を向け

「行け、お前達は見届け無くてはならない、我らの偉大なる王の目覚めを・・ここは私達が引き受ける、だから行け」

そう言うと駆け出しネクロを切り裂き始めるアイギナに困惑していると

「私達には私達のすべき事があります、貴女達は貴方達のやるべき事をしてください」

影から飛び出したネクロを両刃の斧で切り裂く少女に高町が

「そんな、3人じゃ無理ですよ、私も・・「力無い者は目障り、協力するのも面倒・・私達は3人で十分・・ここに他の人間が入ればコンビネーションが崩れる・・だから行けば良い邪魔だから」

シャマルに似ているが雰囲気の全然違う女にそう言われ肩を落としながら走り出す高町を見ながら

「すまない、ここは頼む」

「ふん、たかが１０００くらいどうという事は無い、それよりちゃんとその目で見届けるんだな・・王の目覚めをな・・」

私はその言葉の意味を尋ねようと思ったが、もう話す気が無い言う表情のアイギナを見て高町達の後を追って走り出した・・

男とジオガディスの戦闘力はほぼ互角だったが徐々に押され始める・・当然だ魔力で作った剣とデバイスでは差がありすぎる、何合目かの打ち合いで音を立てて男の剣がくだけ散る

「くっ・・」

赤い外套の男が手に持っていた剣が砕け散る・・それを見ながらジオガディスが

「幾ら神王とはいえ・・デバイスも無しで俺に勝てると思ったかっ！！」

男はゆっくりと顔を上げる・・フード越しでも判るその男の闘士が全く揺らいでいない事が・・そしてその瞳が私にある男の事を思い出させる

（兄ちゃんの目にそっくりや・・）

私がそんな事を考えていると

「はやてちゃん！！」

「部隊長！！」

「主はやて！！」

なのはちゃんやシグナム達が合流してくる、それと同時に膝を付いていた男が起き上がりながら

「俺の・・いや・・私の武器はここにあるっ！！」

白銀の閃光が走り、ジオガディスの鎧を深く傷つける、それと同時に私は目を見開いたその男が持っていたデバイス・・それは・・

「オメガ・・ブレード・・」

もうこの世に存在しないはずのデバイス・・1年前に死んだ兄ちゃんのデバイスだったからだ・・私が目を見開いていると

「馬鹿なっ！！！貴様は死んだはずだ！！何故貴様が生きている！！夜天の守護者っ！！！」

その怒声と共に男の顔を隠していたフードが弾け、燃えるような赤髪と美しい銀眼が姿を見せる・・それを見た私の瞳から涙が零れ始める・・私は無意識に

「あ・・ああ・・」

もう会えないと思っていた・・だが目の前にいる確かに存在してい

るのだ・・それが嬉しくて・・夢のようで・・私がそんな事を考えていると兄ちゃんは

「・・何故？・・簡単だ・・私は護るべき物がある限り！！消して死ぬ事は無い！！」

その力強い言葉と共に騎士甲冑が展開されるが・・それは黄金色に染まり・・その背には炎の翼が現れていた・・兄ちゃんはその炎の翼を羽ばたかせ宙に浮かびながら

「ジオガディス！！貴様の穢れた魂・・八神龍也が浄化するっ！！！

剣を構える兄ちゃんにジオガディスは

「抜かせッ！！今度こそ確実に貴様を殺してやる！！」

黄金色の閃光とそれを飲み込まんとする漆黒の閃光が交差した・・ここからが本当の戦いの始まりの合図であった・・

第１３３話に続く

# 第１３２話（後書き）

・・どうでしたかね？久しぶりの執筆なので少し感覚が違って自分では良く判らない出来になってしまいました、ですので感想を貰えるととても嬉しいです！！次回は龍也がここに至るまでの話、自分の生まれ、本当の両親、セレスさんのやった事・・それが判る話に成ります、もしかすると２部構成になるかもしれませんがどうか宜しくお願いします、それでは次回の更新もどうか宜しくお願いします！！

# 第１３３話（前書き）

どうも混沌の魔法使いです、今回は龍也さんサイドの話です・・何故自分は生きているのか?自分は何者なのか?自分が倒すべき敵は本当にジオガディスなのか?・・全てを悟るまでと聖王の力に目覚めるまでのお話です、上手く表現できるか自信が無いのですが、どうか今回も宜しくお願い致します、それでは本編始まります

# 第１３３話

第１３３話

不思議な感覚だ・・流れる水の上を漂っているような不思議な感じだ・・私にはそれしか判らなかった・・目を閉じているのか、開けているのか・・上を向いているのか下を向いているのか・・それさえも判らなかった・・暫くそのままの状態で居ると目の前が光り輝き、強烈な勢いで情報が頭の中に流れ込んできた・・負の神・・それを封じた初代聖魔王・・ジオガディスと神王の戦い・・そして・・未来に送られた幼子とそれを拾った一組の夫婦・・そこまで見たところで私は思わずこう呟いた・・

「私は・・神王の息子で過去の人間・・なのか・・」

自分の事の筈なのにどこか他人事の様に感じた・・それと同時に

「そうなるな・・」

背後から聞き覚えの無い男の声が聞こえ驚き振り返るとそこには

「私・・！？」

神と目の色だけが違う私と瓜二つの男が立っていた・・私が驚きそう呟くと男は

「いや違う、私はお前ではない・・お前は判っているはずだ・・私

が何者なのかを」

そう言われ私はゆっくりと頷き

「神・・王・・？」

私の父である筈の男の正体をいうと男は穏やかに微笑み

「正解だ・・今更父親ぶるつもりは無いんでな、そう言われて貰って安心している」

少し寂しげな表情の神王に私が声を掛けようとすると神王はそれを手で制し

「悪いが時間が無い、恨み言も何も聞いてやれん、今は私の話だけを聞いてくれ」

そう言って話し始める神王の言葉に静かに耳を傾ける

「まずだが、お前の敵はジオガディスではない・・あれもまた操られ人形と化した憐れな男だ・・出来る事なら私が解放したかったのだが・・そうも行かなかった・・私では浄化するだけの力が無かった・・だからお前を未来に送った・・お前ならあいつを解放できると思ったからな」

そう言う神王に私は

「待ってくれ、ジオガディスは私が倒した・・もう居ない」

最後の時捨て身で倒した筈だと言うと、神王は首を振り

「残念だが倒せていない、あいつは生きていた今も自分の目的の為に動いている」

！！・・では・・まだはやて達に危険が迫ってると・・ここまで思い出したところで私は全てを思い出した

「・・そうだ・・私は死んだはず・・「いや、まだ生きている・・いや・・生かされてると言うべきか」・・誰に？」

生かされている？・・誰に？・・疑問を感じそう尋ねると神王は

「それは私の口からは言えない、お前を生かしている者にお前はもうじき会う、その時に聞け・・っと・・話は脱線したがジオガディスはまだ生きていて、負の神も健在だ・・つまりお前が命を掛けて護ろうと者達は今でも危険に晒されている訳だ」

他人事の様に楽しそうにそう言う神王を睨むと

「そんなに怖い顔で見ないでくれ、お前がここに来たのは戦う為の力を得るためだ・・まぁ・・私としてはそんな力を授けたくないのだがな・・」

溜め息を吐いてから私の額に手を触れる神王、それと同時に柔らかな虹色の光が私を包み込んだ・・

「これは・・？」

私の身体を包むように発生している虹色の魔力を見ながらそう尋ねると、神王は

「聖王の魔力・・ベルカの王族の者だけが扱える魔力・・お前もまたベルカの王の血筋・・聖王の魔力が扱えるのは当然の理だ・・今まで扱えなかったのは自分の血筋を知らなかったからだな」

そう説明してくる神王の言葉を聞いていると、神王は目を細め

「お前には沢山の仲間がいるんだな・・良い事だ・・」

にっこりと微笑む神王・・見るだけで判るのだろうか？・・私がそんな事を考えていると神王は

「お前はこれから自分が何故生きているのかを知り、居るべき空間に戻るだろう・・私の尻拭いで戦いの運命を与えてしまって本当にすまないと思っている・・だから恨んでくれて構わない・・そして頼む・・ジオガディスを・・何時までも世界を恨んでいるあの男を救ってやってくれ」

そう言うと神王の後ろに門が現れる、神王は門の横に立ち

「行け、もう私が話す事は無い」

そう言って黙り込む神王の方に歩いて行き、門の前で立ち止まると

「どうした？」

不審そうに尋ねてくる神王に私は

「いや・・何でもない・・それと・・言わないといけない事があるんだ」

立ち止まり神王の・・いや・・自分の本当の父親の顔を確りと見据え

「貴方は恨んでくれて良いといった・・でもその必要は無いんです・
・私は貴方のお陰で素晴らしい家族と仲間を手にすることが出来た・
・だから恨むつもりなんて無いんです」

自分の気持ちを正直に言うと神王は驚いた表情を浮かべた後、柔和
な笑みを浮かべ

「強く育ったんだな・・もし出来たのならばお前の近くで育ってい
く姿を見たかったよ・・お前・・いや・・八神龍也・・神王からの
言葉だ・・負の神はお前の心を破壊しようとするだろう・・だが強
く心を持て、揺らぐな迷うな、お前の信じた1つの事がお前の世界
の真実であり真理だ、決して揺らぐな、最後まで自分の信じた道を
行け」

私の胸に手を置いて言う神王に

「ああ、行ってくるよ・・父さん」

「!!」

神王が驚いたのを感じながら、私は門の中へと飛び込んだ・・残さ
れた神王は

「父さん・・か・・ふふ・・嬉しいような悲しいような複雑な気分
だな・・セレス・・お前が主と認めた私の息子は・・強く優しい男
だったんだな・・」

穏やかにそう微笑んだ神王は空を見上げ

「今度、龍也に出会えたのならば・・もっと・・話を・・した・・い・・もの・・だ・・」

神王の身体は喋りながら粒子化していき、姿が完全に消えると同時にその世界も最初から存在しなかったように、全て消滅していた・・ッ残されていたのは開かれた状態の一冊の本・・古めかしい蒼い表紙に金の装飾が施されたその本は音も無く閉じ、神王と同じ様に粒子となり消えていった・・

何処まで道は続いているのだろう・・・？
私は何処までも続く黒い道を駆けていた・・景色が無いので判らないが、自分では走っているつもりだ・・暫く走っていると目の前に人影が現れる・・一瞬驚いたがその人影の正体は直ぐに判った・・

「セレス・・」

自身の半身であり相棒のセレスだった、セレスは少しだけ寂しそうな表情を浮かべながら

「行くのですね、我が王よ」

そう尋ねてくるセレスに頷き

「ああ、行くぞセレス」

セレスに行くぞと声を掛けるとセレスは悲しそうに首を振り

「いいえ、私は行けません・・私はもう・・貴方の傍には・・居られないのです」

悲しそうに言うセレスは私を見ながら

「オリジンの融合騎には1つだけ特殊な力があります・・それは・・己の命と魔力をマスターに渡すこと・・」

!!まさか・・私が生きているのは・・私が驚いているとセレスが近付いてきて私の頬に手を触れて

「そんな顔をなさらないでください・・私が望んだ事です」

にっこりと微笑むセレスは私から離れながら

「私は王に出会えて良かった・・磨耗した私にとって貴方と過ごした時間が何よりも素晴らしく大切な時間でした・・だから・・私は貴方の為に命を捨てることが出来た・・貴方に生きていて欲しかったから・・貴方に笑っていて欲しかったから・・」

その言葉に私が何も言えずに居るとセレスは

「私は幸せでした・・貴方の傍に居れて、もう充分です・・私は幸せに生きる事が出来ました・・思い残す事はありません・・」

ゆっくりと消えて行くセレスに慌てて手を伸ばそうとするが、セレスは手でそれを制し

「王よ・・我が愛しい人よ・・貴方が掴む腕は私の腕ではありませ

ん・・貴方が掴むべき腕は他にあります」

にっこりと微笑みながら消えて行くセレスに何と言えば良いのか判らずその場で立ち尽くしていると

「王よ、生きてください・・貴方には幸せに活きる権利がある・・生きて生きて・・そして再びこうして話すことが出来る時には・・また色んな話を聞かせてください」

そう微笑むとセレスの姿は最初から存在しないように消え失せ、それと同時に私が居た黒い通路も消滅した・・

「ここは・・」

気付くと私はセレスと初めてであった遺跡の中に居た・・正面に置かれた鏡を見て私は眼を見開いた・・何故なら閉ざされた右目が開いていたからだ・・

「セレスが治してくれたのか・・？」

髪と目はユニゾン中である、銀髪と蒼銀の瞳・・だが私の中にセレスの存在を感じない・・いや僅かに・・僅かにだけセレスの存在を感じるが、それは弱く今にも消えてしまいそうなものだった・・私は思わず天井を見上げ

「幸せに生きろか・・難しい事を押し付ける・・だが・・お前の頼みだ・・考えてみるよ・・私の・・幸せを・・」

私はそう呟きながら遺跡を後にしクラナガンにまで転移する・・街を一望できる丘の上からクラナガンを見て、私は目を見開いた・・

平和な街の姿はそこには無く、住民の悲鳴と黒い煙があちこちで挙っていたからだ・・

「・・始まっている・・急がねば・・」

私がそう呟くと同時に、炎、氷、風が巻き起こり、肩膝立ちのアイギナ達が現れる私は3人に

「お前達はシグナム達を頼む、俺は・・俺の成すべき事をする」

「「「了解いたしました！！」」」

現れたときと同じ様に消えるアイギナ達を見ながら私は

「今助けに行くからな・・」

首から提げた剣十字を握り締め風と共にその場から走り去った・・魔力反応で判る・・ジオガディスト交戦してるのがはやてとヴィータだと、2人は強い、だがジオガディス相手では分が悪い・・私は全身を強化して走り直ぐにはやて達の所へと到着した・・今正に漆黒の砲撃に飲まれる着後のはやてとヴィータ・・私は慌てて魔力で来た槍を作り出し砲撃を弾き飛ばすために即座に投擲する

「クォ・ヴァディス！！！」

虹色の魔力で出来た槍は砲撃を弾き飛ばす、驚いた表情を浮かべるはやてとヴィータを見ながら魔力を剣型に変化させ私はジオガディスへと斬りかかった・・デバイスを使おうと思ったが、それではセレスが消えてしまう・・そう思うと私はデバイスを具現化させることが出来なかった・・そのまま何合か打ち合いをしたが・・魔力で

出来た剣を砕かれ体制を崩し膝を付く、それと同時にジオガディスが私の首にダインスレイフを当てながら

「幾ら神王とはいえ・・デバイスも無しで俺に勝てると思ったかっ！！」

その通りだ幾ら魔力が増大していても、デバイス無しでは勝てない・・だがデバイスを使えば・・私がデバイスを使うかどうか迷っていると脳裏にセレスの声が聞こえた・・いや・・聞こえたと言うよりかは感じたのだセレスの意思を・・戦えと・・失うなと・・

（そうだな・・そうだよな・・護ると誓ったんだ・・失う訳には行かないよな）

大切な家族を仲間を失う訳には行かない・・その為に私はここにいるのだから・・

（何時までも迷惑を掛けるな・・セレス・・だが判ってる・・判ってるさ・・私のするべき事が何なのかを・・）

私がそんな事を考えていると背後から

「はやてちゃん！！」

「部隊長！！」

「主はやて！！」

なのはやシグナム達が合流してくる、ちらりと確認しただけだが皆無事のようだ・・私はゆっくりと立ち上がりながら

「俺の・・いや・・私の武器はここにあるっ!!」

勢い良く腕を振りぬく、それと同時に白銀の閃光が走り、ジオガディスの鎧を深く傷つける・・それと同時に背後のはやて達が驚いた様子で呟いているのが聞こえる、それと同時に目の前のジオガディスは動揺した素振りを見せながら

「馬鹿なっ!!!貴様は死んだはずだ!!!何故貴様が生きている!!夜天の守護者っ!!!」

その怒声と共に私の顔を隠していたフードが弾け、素顔が晒される・・私は握り締めていたオメガブレードを頭上に掲げながら

「・・何故?・・簡単だ・・私は護るべき物がある限り!!消して死ぬ事は無い!!」

そう・・護る者がいる限り私は死ねない・・命続く限り護り続けると誓ったのだから・・背中に現れた炎の翼を羽ばたかせ上空へと浮かびながら

「ジオガディス!!貴様の穢れた魂・・八神龍也が浄化するっ!!!

神王の話によれば、操られているジオガディスの魂を解放してやれるのは私だけらしい・・ならば解放してやろうその鎖から・・

「抜かせッ!!今度こそ確実に貴様を殺してやる!!」

どす黒い殺気を放つジオガディスに重なる様に異形が見えた・・きっとあれが負の神なのだろう・・倒すべき真の敵・・私はそんな事

を考えながらオメガブレードと腰駄目に構えジオガディスに向かって行った・・この戦いの後こそが・・本当の戦いの始まりだ・・

第１３４話に続く

## 第１３３話（後書き）

どうでしたか?神王とセレスさんの話でしたが・・自信はイマイチです・・活動報告で書いたとおり、完成したいた話なのですが・・前と少し違うような気がするのですが、何処が違うのか良く判らないと言う感じです・・やはり消えたのがショックだったのでしょうか?・・良く判りませんが、そんな感じです、次回はジオガディスと龍也さんの決着編ですのでどうか宜しくお願いします、それとアイデアはまだ募集中なのでご気軽にご参加ください、それでは失礼致します

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9403k/

夜天の守護者

2011年11月6日10時53分発行